

月に吼える

maisen

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある山里のとある家。

そこには見目麗しい一人の女性と、眼つきの悪い一人の人狼が住んでおりました。

そんな二人の間に生まれた一人の半人狼。

彼の名前は、犬飼 忠夫と仰いました。

このお話は、そんな彼が、頑張って、笑って、謝って、痛い目を見て、美味しい目も見ながら、半人狼を生きていく物語。

基本原作添いの応用力オス風味。読まれる方は、どうぞお気楽に、お気軽にぺろっと読んで頂きますよう。

その昔某所に投稿し、にじファンで改稿中に閉鎖があり、そのまま忘れていたブツです。

引っ越し終わって片づけていた昔のHDから発掘されました。

どうしようか3日ほど悩んでコピーしたらコピー元の外付けHDがその瞬間逝ったので投稿しました（真顔

目次

第一章

ぷろろーぐ。

第一話。

第二話。

第三話。

第四話。

第五話。

第六話。

第七話。

第八話。

第九話。

第十話。

166 149 129 106 88 63 46 29 22 8 1

第十一話。

第十二話。

第十三話。

第十四話。

第十五話。

第十六話。

第十七話。

第十八話。

第十九話。

第二十話。

第二十一話。

第二十二話。

第二十三話。

488 463 435 411 388 363 345 324 293 274 251 219 197

第二十四話。
第二十五話。
第二十六話。
第二十七話。
第二十八話。
第二十九話。
第三十話。
第三十一話。
第三十二話。
第三十三話。
第三十四話。
第三十五話。
第三十六話。

781 760 735 709 687 666 640 621 602 584 562 536 519

第三十七話。
第三十八話。
第三十九話。
第四十話。
第四十一話。
第四十二話。
第四十三話。
第四十四話。
第四十五話。
第二章
第壹話。
第貳話。
第參話。

111210821049 1022 991 961 938 904 882 855 832 805

第四話。

第五話。

第六話。

第七話。

第八話。

第九話。

第十話。

第十一話。

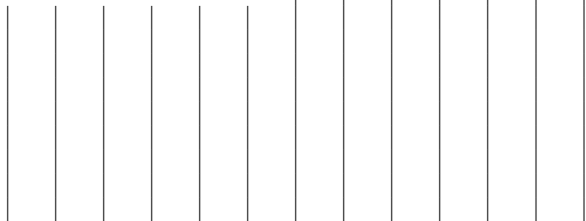
第十二話。

第十三話。

第十四話。

第十五話。

第十六話。



1442141913961373134713211291126612421215118611601133

第十七話。

第十八話。

第十九話。

第二十話。

第二十一話。

第二十二話。

第二十三話。

第二十四話。

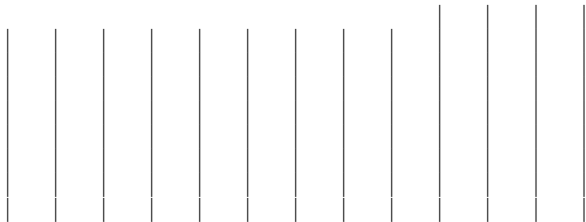
第二十五話。

第二十六話。

第二十七話。

第二十八話。

第二十九話。



1792176517341711168316561629160115721547152314961467

第參拾話。

第參拾壹話。

第參拾貳話。

第參拾參話。

第參拾肆話。

第參拾伍話。

第參拾陸話。

第參拾柒話。

第參拾捌話。

第參拾玖話。

第四拾話。

第四拾壹話。

第四拾貳話。

2123209820752052202720001973194919211897187118481818

第四拾參話。

第四拾肆話。

第四拾伍話。

第四拾陸話。

第四拾柒話。

第四拾捌話。

第四拾玖話。

第伍拾話。

第伍拾壹話。

第伍拾貳話。

第伍拾參話。

第伍拾肆話。

第伍拾伍話。

2473243624102381235723252300227822542225220421802156

- 3170 第拾参話 『それでも私は想うから』
3139 第拾弍話 『きっと貴方は知らないけれど』
3111 第拾壹話 『だけど貴方に届かない』
3078 第拾話 『そして私達は受け継いだ』
3050 第玖話 『だから私は前に行く』
3016 第拾伍話 『だから彼女は空に行く』
3222 第拾六話 『そして彼らは銃を掲げ』
3248 第拾七話 『そして魔神は札を切る』
3282 第拾捌話 『かくて手札は開かれて』
3312 第拾四話 『そして届けと誰かが叫び』
3196

第一章

ぶろろーぐ。

「…あつー！ふぎやあああ！」

月が出ていた。

大きく丸い、綺麗な満月。

最も心地よい光りを落とす、強く輝く真円が。

「お生まれになりました。元気な、男の子ですよ」

月の祝福であれ、と思う。

「男子か…なんと大きな鳴き声か。末は立派な男となるな」

だが、そんな物が無くとも只幸せであつてくれとも思う。

「さあ？でも…」

その微笑が、消えることの辛さを。失うことの悲しさを。生きる事の苦しみを。

「男の子だつたらつて、考えてた名前があるの」

月よ、神仏よ。叶うならば七難八苦を与え、
「たもう事無かれ」と願うのは、子を得た親の卑小な願いか。

「……—つてつきたい。この子の名前」

己の人生の中で、それらこそが良き教師であり、同時に忘れられない疵である事を知っているからか。

「——か。悪くない」

例え、その願いが叶わぬとしても。いや、叶わぬと知っているからこそ。

「ふふっ」

そう願うことは。

「なにが可笑しい」

「久しぶりに見たわ。貴方の、そんな顔」

「む」

我が子に幸せをと願うことは、我儘だとは思わなかった。

「それで、どうしてこの名前を？」

ならば、これが最初に最後の息子への想い。

「ふふっ。…耳まで真っ赤よ」

「名前の意味は！」

「…はいはい」

「これは、願いでなく、誓いでさえなく

「——よ。そんな子に育つて欲しいな、って」

「そうやって生きていけという、想い。」

「…ふむ。いい言葉だ。ならば、息子よ」

「神に頼るのではなく。悪魔に縋るのでもなく。只、己の力で

「お前は今宵今晚、今この時より——」

——その未来を掴み取れ。

「犬飼 忠夫と名乗るが良い！」

「ね? ね? うちの旦那、ああ見えて可愛いでしょ?」

「ええと、私に聞かれましたも…」

「…顔が怖いから」

「外でよく聞く『ぎやつぷもえ』と言うやつかい? 年寄りには理解しかねるのお」

「目つき悪いからなあ!」

「あつ、赤ちゃん大丈夫ですよね?! 食べられたりしませんよねつ? ねつ?!」

月に見せつけるように、あるいは捧げもののように両の手で赤子を高々と掲げた男の

尻尾が、それまでの勢いを忘れたように左右の運動を止め、ピン、と立てられた。

ゆつくりと振りむいた男は、宝物を抱えるようにしっかりと赤子を抱えたまま、米神に血管の浮いた怒りの表情で大きく口を開け、

「きつ！……さまら静かにせんかつ」

声を急速に萎ませ、だが視線だけは睨みつけたまま器用に小声で怒鳴りつけた。

『……ぶっおっ！』

一斉に吹き出した男衆と、ニヨニヨしながら蒲団から上半身を起こして赤子を受け取る一人の女性。

そしてそんな女性とその旦那を見て、なんとなく分かるけど、でもなんだか納得がない！ という微妙な表情を浮かべて悩む女衆。

「——っ！」

男は苦虫を噛み潰して吐き出すに吐き出せず、のど奥で唸り声を上げながら、しかしゆつくりと赤子を妻の手に渡す。

対して男衆は、そんな食い殺さんばかりの視線を受けても、一応煩くしないようにと自重はしているのであるが、畳に爪を立てたり必死な表情で口を押さえたりと様々で、笑いをこらえるのに一苦勞どころでは足りない様であった。

「……暖かくして、ゆつくり休んでおけ。拙者、ちと用事が出来たからな」

「はいはい、いってらっしゃい」

賑々しい雰囲気の中でも、生誕の証明である泣き声に全精力でも使ったか、はたまたもともと凶太いのか、ぐっすりと眠る赤子を抱え込んだ妻の頬を見た目によらず優しく一撫でした男は、怒気を発しながら振り向く。

「…ぬ？」

男衆は誰も居なかった。赤子を見に来た比較的若い女衆が腕を組んでいまだ悩んでいるのを横目に見ていた年嵩の女性が、呆れた様に開かれた襖の外、庭の先を指さす。

「やー！ めでたいのうめでたいのう！」

「酒が呑める呑めるぞー！ 酒が呑めるぞー！」

「酒蔵開けろお！ 朝まで宴会だあつ！」

「…酒が足りない。確か長老の所に良いのがあつた」

『いよっしゃあつ！』

「静かにせんか馬鹿どもがあつ！」

宴会に足りない酒と肴を取りに——盗りに？ 駈け出した男たちを、真剣を抜いた夫が一人、ひとときわ大声を放って怒気を撒き散らしながら追いかけていく。

「もう。…貴方は、どんな子に育つのかしら、ねえ？」

そんな囁き声が、いつの間にか目を覚ましていた赤子に、小さな手と、小さな耳と、ま

まだまだ細い尻尾を持った息子に優しくかけられて。

赤子は、言われた意味も分らず、しかしその両の瞳にまあるいお月さまを映しながら、やがて空腹を訴えて火が着いたように大声で泣き出したのだった。

その後、さして大きくも無い里の某所では、自宅でそわそわと報せを待つていた老人と、追いついた剣鬼に挟み撃ちで一人残らず殲滅された馬鹿達がいたのだが、何事も無かったかのように朝まで宴会が繰り広げる様子が見られたそう。

それは昔々——と言うほどでもない過去のお話。

一匹の人狼と、一人の人間の女性の間に元氣な男の子が生まれた、ただそれだけのお話。

彼らがどのようにして出会ったか。人間嫌いの人狼をどうやって口説き落としか。

彼らには彼らの物語。誰にでも何かの物語。

これから語る物語は、「犬飼 忠夫」の物語。

人間と人狼の間に生まれたこの少年は、これからどんな物語を紡ぎ上げるのか？

いやはや、かのバチカンの地下に存在すると言う予知魔「ラプラス」でもない私には、全く予想もつきません。

只一つ、私が言えるとすれば、そう、「彼に平穩は似合わない」といったところでしょう。

うか？

はてさて、「此処の」彼はいったいどんなトラブルに巻き込まれてくれるのやら。期待してもよいのでしょうか…？

——え？私ですか。私など気になさってもしょうがないですよ。

…おやおや、もうこんな時間だ、そろそろ今回はお別れのように。

——それでは、良い夢を——

第一話。

時は夕食時、場所は人狼達の住まう里のとある家。

やや小さめのちゃぶ台の上に、良く言えば素朴な、率直に言えばただ切つて焼いて適当に調味料をかけました、といった風情の漂う塩気の強めなおかずと、山盛りになつた御飯が鎮座ましましている。

それをテレビを横目に見ながらがつがつとかき込む男が二人いた。

一人はそろそろ40代に差し掛かろうかという、着込んだ和装の袖から伸びる鍛え抜かれた腕、胸元には鋼のような肉を纏つた身体が見て取れる男だ。しかもその目つきの悪さと顔の造詣の怖さから、泣く子も逃げると近所でも評判の男性である。

その目の前にもう一人、口の中に残つた焼き魚の骨をばりばりと齧りながら、古めかしいテレビに向かつて足を伸ばしているのは10代半ばか少し超えたか、と言つた年頃の青年だ。

しかし疾風の如く抜き打たれた刀の峰で頭を叩かれ、頭を抱えて悶えている印象で言えば、どこか抜けていて、なんとなく若さというか色々持て余していそうである。

だが、青年の行儀の悪さを（物理的に）咎めた壮年にどこか通じるように、まだ細さは感じられる物の身体はそこそこ引き締まっており、発展途上、伸び代があるというイメージが強い少年だった。

あまり似ていない親子だ、とか。

父親に似なくて良かったな、とか。

あいつ子種まで尻に敷かれてたんだなあ、とか。

近所ではそんな感じに語られるこの二人は、有体に言つて血のつながった親子であり、その一部だけを見れば普通の父子家庭の父と子であった。

「忠夫よ」

「つつあく!? なんだよクソ親父!」

ゴキーン、と金属物が少し柔らかめの物に当たつたような音、はつきり言えば金属の塊でそれなりに重い刀の峰が、人の頭部に落ちる音がした。

『いやいやいや! そんなわけあらへんやろ!』

「ふおおおお……!」

テレビから流れるあまり売れていない芸人の滑り気味な漫才と、人が一人畳の上を転がりながら悶える声を聞き流しながら、クソ親父と呼ばれた男性はなんでも無かったかのようにお茶を一啜り。

しばしの間を置いて。

「お前ももうすぐ大人だ。霊刀は出るようになったのか？」

「おー痛て……。欠片も出る気配がねーなあ」

頭を摩りながら、しかし何時もの事なのか、僅かに眼の端に涙の後を残しながらも、忠夫と呼ばれた少年は最後の一口をお茶で流し込み、空になった食器を重ね、そのままテレビに向かって座り込んだ。

父親はいたって真剣な声音で話しかけるも、上の空と言うか聞いちやいないというか。

まるで学校の事を聞く父親と、面倒くさそうに一応答えは返している子ども、と言った何処にでもあるような食後の風景である。

『なるほどなーってそんなわけあるかい！』 『ワハハハハハ』

テレビから聞こえる関西弁の甲高い声と、合成された笑い声だけが虚しく二人の間を上滑りしていく。

「刀の腕は少しは上達したのか？」

「おう、犬塚のおっちゃんの居合は避けられるようになったぞ。反撃した瞬間カウンター喰らって意識飛んだけど」

「犬塚が？珍しいな、あやつが稽古とはいえお前が気絶するほどの…」

「…いや、その、まあ、な！」

「またサボっておったか」

冷や汗まじりに誤魔化そうとした少年の後頭部に、呆れの多分に混じった視線が突き刺さる。溜息まじりながら、とりあえずまた攻撃されることはなさそうだと安堵して、忠夫は小さく息を吐いた。

「…まあいい。それよりも忠夫よ」

「なんだ、親父」

声の重々しい雰囲気、思わず振り向いた忠夫の目に、真剣な表情の父が写り込んだ。腕を組み、目を逸らさぬままにじつと熱のこもった視線を向けられた忠夫は、だがしかし、怯むどころか、またか、と言った表情を浮かべる。

そんな息子の視線など屁でも無いわ、と父親は懐から小さな黒い箱を取り出し、

「野球の時間だ。そこを退け」

「断る」

だがテレビをめがけて放たれる筈のリモコンの赤外線は、息子が何時の間にか電池を

抜き出していた事で不発となる。

懐から電池を取り出す息子に対し、昨夜の内に電池が抜かれていた事に気づいていなかった父は、愕然とした表情でリモコンの蓋を開け、そこにある何も無い空間を見て、舌打ちをしながらリモコンをゆっくりと置いた。

「なぜだっ!」

「何故もクソもあるかいっ! ボールが飛ぶたびに尻尾振るな! 埃が舞うんじゃ!」

「…むう」

ああ、男所帯の切なさよ。

妻を亡くしてからというもの、それなりに気を使って掃除はしているつもりではあるし、幼い息子の喉に悪いと近所の女僕達にお玉で追いかけて回されてからは、天気の良い日は布団も自分できちんと干すようになった。

しかし、やはりというかなんというか。

一昔前のドラマなら、姑あたりが窓の棧を指でついつとやれば、うつすらと埃が積もる程度の掃除でしかない。男一人、息子が長じてからは男二人でもそれが限界だったのだ。

顰め面で沈黙した父に向かって、やれやれ、と忠夫は肩をすくめて見せた。

「全く…そんなだから狼じゃなくて犬だとかいわれる——」

瞬間、忠夫の第六感とか生存本能とか慣れとかそのあたりの感覚に、はつきりと未来が見えた。宇宙世紀なら額のあたりに閃光が走っていたかもしれない。

本人も意識しない動きで跳ね上げられ、重ねられた両の掌は、その間に見事に刀を挟み込んでいた。今度は峰ではない、しっかりと刃が向けられている。

「——うおおおっ！いきなり切りつけるんじやねえクソ親父!!」

「犬ではないっ!!誇り高き狼だー!!」

「だああっ！聞いちゃいねえー！」

月の明るい夜。犬飼家の食卓は、騒がしくもドメスティックなバイオレンスが飛び交う戦場と化したのであった。

しばらく後、ボロボロになっている居間で。

「つててて。ちくしよー！ 親父の奴、本気でやりやがって。つてあー！ TV壊れてるじゃないかっ！」

ガサリ、と音を立てて瓦礫の中から動き出したのは、何処にでもいそうな——といっ

ても、少々見た目は奇異に写るのは間違いない。彼には大きな白い尻尾と犬の耳……いや、狼の耳がついているのだから。

とまれ、ボロボロの格好のまま彼は意外と元気に歩き出すと——やはり、その歩みは全くなんの傷も負っていない健康そのものに見えた——彼の部屋の襖を空けた。

「あくあ、これで外と中を繋ぐ最後の線も切れちまったか。さーて、どうすつかなあ〜」
畳の上にもう何年もそのままです、と言った感じに置いてある草臥れた座布団の上に寝転びながら、彼は、忠夫は考えていた。

（母上が死んでからもう何年経ったかな。母上の妹の百合子さん——おばさんと言ってマジで殺（や）られかけた。叔母じゃん、間違つてないのに。何でだ？——ともかく、連絡はついた）

布団に寝転がったままで、部屋の隅にちよこんと置いてあるバッグに視線をやる。

（出て行く準備はできてる。外の人間が着てる服も手に入れたし、少しだけどお金もある）

視線を天井に戻し、そのまま屋根を突き抜けて高く、高く——

そこにある月を見るかのように——

(決行は次の新月。明け方にこそそつとでてくのが一番楽やな)

体が疼く。正直な所、今から楽しみでしようがない。外の世界、2度目の世界。初めて覗いたのは母に連れられてであった。百合子さん以外の「母の家族」とやらは、こちらを見る目が不審に溢れてて、二度と会いたくないとしか思えない人たちだと子供心に思ったものであったが。

(それでも、外は外だ。狭い里じゃなく、1日中歩いても端つこになんかつかないくらい広い場所。)

なんとなく体の中で湧き上がる思いが溢れそうで、布団から起き上がると頭でも冷やすつもりで縁側に立ってみる。

(そして――)

まだ幼かった頃、目的は違えど今考えている事と同じことを全く計画性もなくやろうとして、あつさり迷子になった3年前の自分を思い出す。

(あんどきやほんとに怒られたっけか)。親父に、犬塚さんと奥さん。長老や他の皆も)――狼は群れを大事にするものだ！その仲間が大変なことになっているのかもしれない

ないのだぞっ！心配しないわけがなからうがっ！！

（流石にそっこーで謝ったんだよなあ。長老のあの言葉も効いたけど——）

——兄上、置いていくの？シロを、おいてっちやうの？

（あんな目で見られちゃあなあ——年上としては、謝らん訳にはいかんだろ）

記憶に残るのは、3年前の隣の夫婦の子供の顔。2歳年下の元気いっぱいの人狼の子だ。

昨日も散歩に誘いに来たが、あの顔が一番印象的だ。

（すまん、シロ。だが、今回お前を連れて行くわけにはいかんのだっ！）

なぜならば——俺は・・・俺はっ！

「嫁が欲しいんじゃないやああああ——！！！！」
 つてはあっ！！思いつきり声に出してもう

た——」

∴若さゆえのあやまちと言うか、正直、色々と持て余す。お年頃だもの。

「まずっ！決行か？しらばっくれるか？ちくしよー！失敗し「ワオン・・・」・・・ん？」

どこからともなく響いてくる遠吠。いや、何処からともなくではなく——

「拙者も!!」

「拙者もー!!」

「腹減ったー!!」

「嫁が欲しいぞー!!」

「嫁さん持ち爆発しろー!!」

「なんで人狼は女性が少ないんだー!!!」

「ばっきやろー!!」

「肉くいてー!!」

「ワォーン!!」

「嫁が欲しいよー!!」

里中の独り者達の家からであった。

(…ああ、同士達よ)

なんとなく涙腺が緩んでしまう忠夫である。

所々に混じっている食欲優先の遠吠えは綺麗に無視されてはいたが。

そして月日はあつという間に流れ。

「——さて」

あの後里中で近所迷惑の題目のもとに、妻子持ち男衆VS独身が開催され、さらに煩くなつた所で女衆が参戦して独身勢が鎧袖一触に蹴散らされ、いちやいちやする夫婦達を地べたに這いつくばつた（色んな意味で）負け犬たちが血涙を流しながら呪詛と共に睨みつけたりと色々あつた。

その次の晩。空は新月。忠夫は最後の準備をしていた。

「それじゃ、行つて来るよ、母上」

返事は返らない。この世界、よつぽどの例外でもない限り成仏した者には会えない。それでも、挨拶はしていくべきだと思つた。していきたくと思つた。

「何時帰ってくるか分からないけど……それでも、帰ってくるから。来年の命日には帰れないかもしれないけど、許してくれよな」

最後まで、本当に最期の最後まで笑顔で逝つた母であつた。それ以外を思い出に残し

「たかないと言った母であつた。

「…行つてきます」

だから。

出かける挨拶は、精一杯の、笑顔を見せて。

「さつてと。長老は犬塚さんちで今朝送つたお酒でも飲んでるはずだし」

ちなみにそのお酒、彼の父が床下に、天井に、壁の中にと隠していたもの全てを見つけて出してこつさり長老宅の前に「おすそ分けです、犬塚と一緒にどうぞ 犬飼より」と手紙をつけて置いてきた物である。

一言も嘘は書いてないし。彼も犬飼だし。別に嘘ではない、が、彼の実父にばれたときが…まあ、それは置いておこう。どうせしばらく帰るつもりもないし、帰ってくる頃にはほとぼりも冷めているであらう。

「という事は、シロには暫くばれない、筈」

もしくは、とつとと布団にもぐりこんでいるか。大人の酒盛りなんて子どもにとつては煩いし酒臭いしで面白いことなど殆ど無いのだ。

彼女には申し訳ないという気持ちはある。が、今回ばかりは、そう、今回ばかりは彼女もいっしょに、と言う訳にはいかないのだ。主にコブつきは勘弁と言う意味で。

「親父は玉葱食わせたからしばらく動けないはずだし」

下手すればそのまま動かなくなりそうではある。

※犬がタマネギを食べると、赤血球が破壊されて、急性の貧血や血尿などを引き起こす場合があり、場合によつては命にかかります。間違つて食べちゃった時はすぐに獣医まで！

「今日の見張りの位置は確認済み、と」

見回り組の人狼の超感覚が最も恐れるものではあるが、守るものである里の中には自分の匂いが残っているし、身体能力も（逃げ足限定ではあるが）自信はある。最初のスタートで突き放してしまえば、追いつけない公算が高い。

「…よし、いくぞっ！嫁探しじゃあつ！！ ひゃっほー！！」

——おい、何か聞こえたぞっ！！

——あつちだ！あつちからだぞ！

——良し、回り込め、挟み撃ちだ!!

「ぎゃーっす!! またやってもうたーっ!!」

皆様、ご機嫌いかがでございましたか？

時の流れは早い。今は彼が16歳、∴そう、少年から青年と呼ばれ方が変わるくらいには成長した頃のようにです。

はてさて、どんな騒ぎが起きることやら。なんと云つても、彼は何処まで行つてもト
ラブルに巻き込まれる「存在」ですからねえ。

もう暫くは、見てみる事にしましょうか——。

第二話。

「里から抜けたものがあるぞっ！」

「誰だっ!? 誰が抜け出したんだ!？」

「忠夫だ! 犬飼さんとこの忠夫だよっ!!」

「なにい!? あの野郎、親子揃って外で嫁を見つめるつもりだなっ!」

「くそッ! ……させてなるかあ! 只でさえポチさんのときは悔しい思いをしたんだ
!」

「そうだ! ずるいぞ犬飼家! と言うわけでポチのところに殴りこみだあ!」

「「「おうっ!!」」」

そのころ、里の中、犬塚宅では長老と犬塚家の父が差し向かいで盃を交わしていた。外の喧騒が聞こえぬわけでもなからうに、いたつてのんびりとした様子である。

長老は、なみなみと注がれた酒盃をちびり、と一舐めすると、聞こえるかどうかと言った小さな声で対面の男に話し掛けた。

「…ようやく決心しよったか。あやつに通行手形を渡したのが1年前。よもやここまで待つとは思わなんだよ」

40代半ばの、引き締まった相貌に太い笑みを浮かべて、静かに杯を空ける男と、小柄で背中を丸めた齢80とも90とも見える老爺。その二人が交わす言葉も少なく、只、杯を重ねる様子は一種儀式にも似た雰囲気を感じさせる風情があった。

「…分かっておったとも。あやつが里を出たいと願っていたことは。しかし、しかしだ。あの子もやんちゃではあるが可愛い孫のようなもの。せめて群からはぐれても生きていけるだけの力を持つまでは、と、そう思っておった」

それまで能面のようなだった表情を僅かに綻ばせ、

「3年前じゃ。迷子になって、やっと見つけ出して、ひたすら怪我の一つくらいはこさえていけるものかと思えば…」

とうとう堪え切れずに吹き出しながら、老人は目を輝かせていた少年の言葉を思い出した。

『楽しかった！ 友達もできたし、それにずっとずっとひろいんだよ!! なんて皆外に出ないの?』

「あの時、感じたものよ。もはや、この子は絶対に止まらんし止められんと、な」
それでも瞳に隠しきれない寂しさを秘めながら。

「この年になつて、ああいう輝きを見せられると言うのは堪えるの。まるで、自分が化石のように思えてしまった。もはや変わらぬ、過去に自分が、ああは成りたくないと思つていた頭の固い御老体になつてしまつたと、な」

更に、その奥にまた別の感情を秘めながら。

「寂しくもある。じゃが、楽しみじゃよ。老い先短いこの身に、いったい何を見せてくれるのか。もはや、ワシ等では想像もつかん。：先が見えないことを楽しみだと思つのは、何時振りかな？」

人は、それを

「頑張れよ、我が——」

憧れ、と言うのだろう。

「——可愛い孫よ」

「…どうした、犬塚。お主、この酒を楽しめんと言うのは酒に対する冒瀆じゃぞ？」

「……ヒック。」

「…お主、酒に弱いにしても今日は豪く下戸じやの」

犬塚と呼ばれた男は、口元に笑いを浮かべたままひっくり返つた。

「シロおろく、お前は嫁になぞ出さんぞろく。ぐしぐし」

「……しかも泣き上戸か」

そのまま一緒に倒れた空の酒瓶を抱きしめて涙を流す男から目を背けた老人は、大きく溜め息を一つ吐いて別の酒瓶を取り、手酌で杯に注ぐと静かに傾けた。

が、その縁から口内に美酒が流れ落ちるその寸前、襖の向こうに数名の慌てたような大きな声と走る足音が響いてくる。

「ん？」

「ヒックク？」

けたたましい足音と共に、先ほどまで「犬飼家に殴り込みじゃあろ！」と気炎を上げていた青年たちが襖を勢い良く開けてなだれ込んできた。

「どうした、騒がしい。一人の若者の旅立ちくらい静かに見送つてやらぬか」

そう言つて、老人は満たした酒を呷り静かに諭す。

「長老っ！ 犬飼さんが玉葱食べて死にかけてますっ！」

ブホッ

長老の口先からアルコールの霧が生まれ、泥酔してぐでんぐでんの犬塚がその霧に包まれる隣の家で。

「沙耶……今逝くよ……」

一匹の人狼が亡き妻と再会を果たそうとしていた。

「わーはっはっは!! 平安京にエイリアンの術ー!!」

ぎくぎくぎくつ!

「ぎゃー! こらー! 忠夫ー!! 後で覚えていろよー!!!」

一方その頃、人狼の里に程近い森の中では、忠夫と追手の熾烈な?戦いが繰り広げられていた。

「引つかかる方があほなんじゃー!! ここまで来て捕まつてたまるかいっ!!」
「ばっかやろー!!」

至近に迫つた追つ手を発見した忠夫は、ゲリラ顔負けの罠の数々と、その機動力でひたすら追つ手を翻弄していた。

——時には落とし穴に引っ掛け

——時には暗闇の中に真つ黒に塗つたロープを足元に張り

——時にはタッパーに詰めて置いたカレー粉を風上から撒いて追手の鼻をつぶし

——時には干し肉の中に匂いが漏れないように背脂で包んだ玉葱を仕込み、まるで逃走中に落としたかのように振る舞う。

この様々な罠に引っかけかり（特に最後）、追っ手はほぼ壊滅状態となっていた。

「ふっふっふ。情報を制す俺は戦いを制す！ 鼻が鈍いからって自分達の場所がわから

んと決め付けたお前らの負けじゃー!!」

「クウーン」

「おお、ありがとな、タマ。お前の鼻のおかげで助かったよ」

その傍らには一匹の獣の姿があった。

何を隠そう、3年前にできた「友達」とはこの獣である。迷子になって、一人で途

方にくれていたとき、何処からともなく現れて、慰め、食べ物を探してくれて、分け合つて食べ、一緒に寝て、里まで心を守ってくれた忠夫の恩人なのだ。

「さーて、あとはあそこに行つて最後の仕掛けをしたら完璧だな」

そういつて、獣を肩に乗せ歩き出す。

「さあ、もう一頑張りだ！」

「コンー！」

その獣のお尻からは9本の金色の尾がたなびいていたとか何とか。

はてさて3度目の対面となりましたか。改めまして自己紹介を。「シユレーディングー」と申します。偽名ですが何卒よろしくお願いいたします。

ご安心を。少なくとも今は私はただの観客にございます。干渉せず、及ぼさず、只、只観測する。

いや、見て楽しむ、と言った方が私としても「楽しい」。

何処でも相変わらず彼の周りには人外が自然と集まってくるようで。偶然が、はたまた必然か。

とは言え一番正解に近いのは当然、なのでしようがね。

ああ、それではまた会える時まで

—— 良い夢を ——

第三話。

「ふい〜〜」

ひとまず追手を撒いた忠夫は、土木作業で土と汗で汚れた身体を綺麗にし、ついでに匂いを消して追跡を難しくするために、三年前の大冒険で見つけた温泉に入っていた。

「あ、ああああ、風呂は命の洗濯じゃあ〜」

今宵は新月、月のない夜。

「お〜い、タマ〜?」

とは言え、地上に光溢れる都会と違って、ここは元々自然の光だけの深い深い森の中。「気持ちえ〜ぞ〜。入らんのか〜?」

「グルルルルッ!」

月は無くとも星の光が天を満たし、そして半分だけとはいえ人狼たる彼と、その相棒である「彼女」には十分すぎる光であった。

「うおっ!?何でそんなに怒るんだよっ!」

「グルルルルッ!」

「わかった!わかったって!もう何も言わんからそのまま岩の後ろに居ろって!」

「…コン」

天然の温泉、当然のごとく露天風呂に肩までつかってリラックスする半人狼の青年と、一匹の、九本の尾をもつ狐を照らし出す。

いくら追手は全滅させたとはいえ、まだまだ本命とも言える里の凄腕達はその姿を見せてはいない。ゆえに、油断することなくこうやって念には念を入れて匂い消しまで行っている。

「…キューン」

「い〜い〇だな♪ ハハン♪」

「…コン♪」

筈なのだが、緊張感の欠片もないのはきつと彼の性格ゆえなのだろう。

温泉から上がった青年、「犬飼忠夫」は、体をしっかりと隅々まで吹き上げると、全裸のまま先ほどまで身に着けていた服をリュックサックの中から引つ張り出したビニール袋に包み、口を縛って地面に置く。

「とりいできましたるは何の変哲もない洋服でござい」

続けてリュックサックの中から軽い口調でジーパンと一揃いの上着、肌着を取り出す。

「コン？」

どこかの岩陰から狐の声が聞こえたが聞き流しつつ

「なんとこれは今まで一度も袖を通したことのないまっさらの新品！」

「こそこそその服を身につけ——

「これで匂いで見つけられる心配は無い！ 完璧っ！ ぐつつつふ…己の知略が恐ろしい」

額に真っ赤なバンダナを巻いて耳を隠す。尻尾は窮屈だがズボンの中、足に沿わせて何とか隠す。

「よっしゃー！ 偽装も完璧ー！」

おずおずと岩陰から顔を出した狐は、どこか未練がましい…まるで『折角なのだから恥ずかしがらずに一緒に温泉につかれば良かったな』『ついでに裸とか見とけばよかった…いやいや流石にはしたくない…』とか微妙に邪な感情でもやもやとしながら、伸ばされた手を掛け上がり青年の頭に陣取った。

一方その頃人狼の里では――

「…ああ、沙耶。今そつちに逝くよ」

「待てー！ 早まるなポチっ！」

「薬ー！ 医者ー！ 衛生兵はまだかつー！！」

「待ってください！ 他にも玉葱中毒の患者が多すぎて手が回りません！」

「くっ！ だからあれほど拾い食いをするなど言っておつたろうが！」

「嗚呼、光が見えるよ…沙耶、もう少しだけ…」

「ポチイイイイイイイ！！！」

「あゝゝゝゝ頭痛い。飲みすぎたか」

「何でお前はそんなに落ちついとるんだ犬塚ああああ！！」

「長老…元気いいですねえ。拙者、二日酔いで、もーグダグダ」

「親友の危機だろうが少しは慌てんかこの薄情もーん！！それにまだ当日じゃあ！！」

「あ、それじゃー日酔い？ 語呂が悪いなあ――つて、うわたたたた！！ こんなところで靈波刀なんて振り回さないでくださいよー！」

「これ以上怪我人を増やさしないでくださいーい！！」

―― 壮絶で混沌とした状況だった。追いかけて回す老人の足元で、ポチの口からは既に

魂が半分ほど出ているくらいには。

ともあれそれから暫く経って。

「ふう。何とか全員峠は越えたか」

「ええ。何故か私は手当てして貰えませんでした」

隣の部屋ではいまだに呻き声が聞こえているが、とりあえず落ち着いたようである。

「バカと二日酔いにつける薬はないわい。それはそうと」

「なんですか？ 長老」

二日酔いで痛いのか、それとも長老の靈波刀が痛かったのか、頭をさすりながら、男は座ったまま隣に立つ長老を見上げた。

「お前の娘はどうした？ この騒ぎで出てこないとは、よつぼど寝入つとるのか」

ん？ という感じで不思議そうな顔をした犬塚家の大黒柱は、

「っ!!!」

何かに気付いたのか、慌てて娘の部屋に向かって走り出し、いきなり部屋の扉を空け、

「……これはっ!」

布団の上に置いてある紙切れに目を通して、そのまま膝から崩れ落ちた。

『駆け落 多分武者修行とかしてくるでござる。探さないでください。 シロ』
「シロオオオオオオオオオオ！」

慌てて書き殴ったのであろう、走り書きの上に雑な書き置きに、そしてあんまり隠そうともしていない己が娘の本音に、慟哭混じりの悲鳴が父親の喉から迸ったのだった。

「クンクンクンクン…む、匂いが薄れてきたでござるな…」

父親が彼女の名前を叫んで今にも家から飛び出そうとし、慌てて様子を見にきた長老とおもいつきりぶつかって二人揃って悶えていた丁度その頃。

「甘いでござるよ、拙者の鼻は追跡と狩りに優れた狼の鼻」

新月の闇に紛れながら、少しずつ忠夫との距離を縮めつつある、一人の少女の影がある。

「狙った獲物は逃がさんでござるっ!!」

「っ! なんだ今のプレッシャーは?!」

「コン?」

急に乗っていた頭がきよろきよろと何かを探すように動いたので、驚いたのか頭上の狐は忠夫に疑問の籠った鳴き声を駆けた。

対して少年は鳥肌の立った両肩を両手でさすりながら、台詞に比べて警戒するでもなく変わらぬ不思議そうに周囲を見回している。

「あ、いや、なんと言うか…真つ赤な鎖が追ってくるというか、むしろ桃色のごつつい首輪?というか」

「…コン!」

その台詞を聞いてどんな考えに至ったのやら、忠夫の頭から飛び降りた狐は、一声鳴くと先導するかのようには忠夫を振り返りながら急ぎ足で駆けだした。

少し進んだ先で、急かす様にその尻尾が揺れている。

「ついてこいってか?」

「コン！」

「…まあいいか、行こうか、タマ！」

「キュ〜ン♪」

頼られて何処となく嬉しそうな顔をしたタマは、張り切って走り出した。

だがしかし、追跡者はその逃走する者達を嘲笑うかのように速度を上げていく。

行く手を阻む草木を薙ぎ払い、

「近いでござるな…」

殆ど崖に近い急斜面を駆け下り、

「…もうすぐ」

そのままの勢いで大跳躍し——

「——見つけたでござるっ！」

彼女は、その卓越した人狼ならではの運動神経で空中で体を捻り、着地点を調整。

目標地点は狙う獲物の眼前。そこに狙いを外すこと無く、勢いよく、だが殆ど音を立てることなく彼女は見事に着地した。

「兄上っ!!」

「うおっ!! おまつ!! …シロかつ!!」

突如空から降ってくるという荒業をかました銀の髪とその中に赤い一房の髪を持つ

まだどこか幼さの残る——数年もすれば、間違ひなく美女となるであろう素材に恵まれては、いる——少女は、

「ぬあぜでござるかっ?!」

とりあえず主語もない色々足りない台詞をかましつつ

「ぐおっ!! くるしつ…死ぬッ、マジでマジでっ…ぎぶぎぶぎーぶ!!」

結果として容赦なく青年を締め落としにかかったのであった。

すったもんだと色々あつて、しばしの時間の後、顔色が紫を通り越して土気色に変わった青年が何とか生還した時の第一声は、苦しみや辛さとは不気味なほどにかけ離れていた。

「…綺麗な川があつて、笑顔で中指立ててる母上がいて、恍惚の表情でそっちに行こうとしてる親父がいて、気持ち悪かったからぶん殴って引き剥がして蹴り転がした所で目が覚めたんだが」

犬飼ポチ、九死に一生スペシャルであつた。まだ生死の境を彷徨っていたようである。

もうコリゴリさ！ 二度と玉葱を丸齧りなんてしない（されない）よ！ ただ息子は必ずやる。必ずだ。

「しっかし、よく俺の場所がわかったなあ。完璧に匂い消したつもりだったのに」

「へ？消えてないでござるよ？」

「え？何処に匂いがあるんだ？」

「その背中のばつぐでござる」

「…あ」

「…コン」

忠夫、痛恨の失敗。同じく気付かなかったタマは素知らぬ顔でそっぽを向いていた。相棒同士、一緒にどこか抜けていたようである。

「…で。何故里を出たでござるか？」

「嫁探し」

即答。即、答える。質問の終わりと返答が被っていた位に素早い返事であった。何故かとてもイイ笑顔で、親指を立てて答える忠夫の前には、「へっ?!」という顔で只固まる人狼の少女と…「聞いてないわよっ!!」という顔でなんだか危険な雰囲気をかもし出し

ている狐がいる。

「ん？ ……どうしたんだお前ら」

「嫁探し…でござるか？」

「コン？」

星明りにかすかに照らされた周囲の空間が、僅かに暗くなつたように感じられた。雲でも出て来たか、と不思議そうに見上げる彼の視界に、小刻みに震える二人の姿は映つてはいない。

「ああ、そうだけど？」

「な・ん・で里の外に探す必要があるのでござるか？」

「…」

「そりやお前、里に相手がないからだろうが」

轟、と音さえ立てて、二人の体から曰く言い難い難い圧力のようなものが吹きあがる。この時点で、忠夫は漸く異変に気がついた。

「…ほおう」

「…」

不幸なことに、それはもはや手遅れだと言う事であるが。

「…なあ、シロ？ タマ？」

「何でいやるか♪」

「コン♪」

忠夫は物理的な寒ささえ感じていた。その元となるのは、妹分であるはずの少女と、先ほどまで頭にのっけていた小さな相棒の視線だ。

「なんだかスツゴク嫌な予感がするんですが？」

「……」

「……」

片や両の手に力を込め、ポキポキとその細さに見合わぬ音を立てる少女。片や絶対零度の視線を込めながら、ゆらゆらと揺れる火の玉が幻視できる子狐。

危険度では同じくらいであろうか。ストツプ高だが。

「それに冷や汗が止まらないんですがああああ!？」

「流石兄上♪ 鋭い直感是人狼の特徴の一つでござるよ♪」

「コン♪」

暗い森に、断続的な轟音と爆炎が生まれ、最後の締めとばかりに大木を薙ぎ倒しながら斜め45度で忠夫と言う名の砲弾が発射された。

「なんでじやあああああ……！」

そしてそのまま、彼は、忠夫は夜空を飾る一筋の流れ星になった。

「…はっ！しまった！逃げられたか!!」

「コンッ!!」

え、それだけ？ と、真横で思いつきり火の玉を投げつけて爆発させていたのにも関わらず、自分の存在をが目に入っていないと言った反応をされて、こんな状況ながらも子狐は少女が少し心配になった（頭の出来的な意味で）。

—— 某温泉・女湯 ——

「いや〜今回の仕事は楽だったわね〜」

グラマラスな女神、と言う言葉を体现したかのような体を伸ばし、缶ビール片手に温泉につかりながらくつろぐという贅沢をしている女性。——美神令子がそこにはいた。

母親譲りの美貌と、悪霊との戦いの中に身を置きながらも陰る事の無い、宝石にも似たその華のある雰囲気。少々きつめの顔立ちながら、「絶世の」と呼んでも差し支えのない女性である。ちゃぽん、と音を立ててつかり直した彼女の胸元は、豊かさを表すかのようにお湯に浮かんでほのかに赤く染まり、何とも云われぬ色香を醸し出している。

「おキヌちゃんつて言うかなり安くて便利な助手も新しく事務所に入ることになったし、まさに柵から牡丹餅落ちまくりねー。ほーっほっほっほっ！」

が、口を開いた瞬間に、その色香を超えて守銭奴オーラが漏れだした。もしもこの場に命知らずな覗きが居たとしても、ドン引きするか、玉に瑕と見た目だけを楽しむ事に切り替えるか、と言った程度には台詞と雰囲気は銭臭い。

「美神さーん！」

そこにまた一人、先ほどから独り言を喋っていた女性とはまた違う雰囲気をもった女の子——女性と言うより、女の子と言った方が正解だろう。特に美神と比べれば——が現れる。

先ほどの女性を綺麗、と表現するのなら、こちらは可愛い、清纯と言った言葉が似合う。隣にふよふよと浮かぶ人魂と、地に着かない足、時代錯誤というか場所を考えない

巫女装束を除けば、の話であるが。

とは言え、どちらがどう、でなく、どちらも（少なくとも外見的には）大変魅力的な、と言うにふさわしい二人である。

「どくしたの、おキヌちゃん？」

「さつきすつごい爆発があつたんですよ！ あつちの山の方で！ 聞こえませんでしたか?!」

ぶんぶんと手を振ったり遠くの山を指さしたりと忙しい少女であつたが、美神と呼ばれた女性は半眼で指された方向をちらりと見ると、興味なさげに再度缶ビールを呷つて最後の一滴を口に落とす。

「あゝ、別にいいわよ。依頼受けてないし、お金になんないし」

「美神さくくん！」

突然であるが、物理法則と言うものがある。

「困ったことがあつたならまた依頼が来るわよ」

あくまでその中の一例ではあるが、極々単純にぶつちやけた話。

「えー、でもー」

——おもいつきり投げたボールは。

「そしたらまた儲け話ね♪」

——いつか必ず地面に落ちるのである。

それに気づいたのは美神だった。夜空を切り裂き、火の玉が落ちてくる。湯船に横たわらせていた身体を跳ね上げ、手近なバスタオルを引つ掴んで身体を隠し、戦闘態勢をとうとうとして、気づいた。

道具が無い。神通棍も、破魔札一枚も、無い。舌打ちしながらイヤリングとして身につけている精霊石に手を伸ばす。

コストパフォーマンスは最悪かもしれないが、自分の命よりも高い物などこの世には無いから諦めもつく。…つかないかもしれないが、いや絶対つかないが、その時は相手に地獄の鬼も土下座するような責め苦を味あわせてやろうと心に誓う。

そうこうしているうちに、それは何物にも遮られる事無く、温泉の湯船に着弾した。床のタイルに走る罅、巻き上げられ、撒き散らされる温泉の湯、吹きあげられた湯気は、彼女達の視界を一瞬にして奪う。

「くっ！… いったい何よ?! 私に喧嘩を売ろうなんて、いい度胸してるじゃない!」

「美神さん! あそこに、誰か居ます!」

そして——彼らのファーストコンタクトは

「嫁に来ーい!!!!」

「死ねこのハリウッド級アクション痴漢!!!」

火花を散らすような、電光石火の右ストレートから始まった!

さてさて、やっぱり彼らは出逢うのか。ただの偶然?——それこそマサカ、だ。在るべくして出会った。それだけのことだよ。そう、それだけの、只、其れだけの——いや少々興奮して、喋りすぎてしまったようだね。まあいいさ。たまにはこんな時もある。それでは

——良い夢を

第四話。

朝日が昇る。小鳥の囀りが聞こえて、しかも今日は快晴になりそうな予感がする。

こんな日に、気持ちよく目覚める事が出来たならば、それは、ありふれた、在りがたい幸せではなからうか。

「…おい、生きておるか？」

「…ああ、なんとかな」

「動けぬか？」

「無理」

朝日が昇る。小鳥の囀りが聞こえて、しかし今日は死の予感がする。

太陽は山影から顔をのぞかせ、地面に埋まった身体はともかく、一晚中助けを求めて声を出し疲れ切った彼らにゆっくりと暖かな光りを与えていた。

「いい加減誰か助けにきてくれんかなあ…」

「忠夫め、次会ったら覚えておれよ……」

かの少年がしかけた落とし穴にはまり、ご丁寧にもと言うべきか、それとも武士の情けと言うべきか、頭だけは埋められずに地面から生えた生首と化している彼らは、一晩中だれの助けも得られぬまま、疲労と空腹を抱えている。

悔しさゆえにぎりぎり歯ぎしりをする隣の男の声を聞きながら、里を覆う結界の縁ギリギリに近いこんな場所では、助けが来るのはどれほど後になるかと考えて、もう一人の男は溜息を吐いた。

「だーれーかー！ ふぬぬぬ……っ！ 出してくれー！」

「……そのうち誰か居ないのに気付いて、助けに来るさ」

「馬鹿たれえいっ!!」

諦観半分、樂觀半分で呟いた男に、怒声が襲いかかる。

耳も塞げない状態で耳元で吐かれた大声に顔を顰め、そちらを向いた男の目に、嫌に焦った表情と、だからだと流れる冷や汗まみれの、男の見苦しい顔が入った。

「いいか、拙者達は昨日から散々騒いでおる」

「あ、ああ。まあな」

「しかも日が出た。そしてここは里からも程よく遠い」

「だから腹も減ったし困ってるんだろ？」

今一要領を得ない、そんな風情の男に、舌打ちをしながら焦った男は、危機感をたっぷり乗せたまま、その理由を吐きだした。

「死ぬぞ」

「え？」

「このままだと死ぬ」

その言葉につられるように、がさがさと背後の草むらが蠢く。

のそり、と巨体を揺らし、掻き分けて出て来たのは…一匹の勇壮な雰囲気纏った巨大熊だった。

片方の目に走る古傷の跡。やや赤みがかった剛毛が覆うその身体は並みの熊を優に超える膂力と威圧感を持っている。

獲物は、ぎろり、と片眼で見降ろされていた。

「え？」

「だからさつきから必死で助けを呼んでおったのだ…！」

「うわー!!? 死ぬ死ぬマジで死ぬっ!!」

「黙って霊波刀をだせっ！ 口からだ！ いいか、片方が助けを求めて、片方が霊波刀で

牽制っ！ 霊力が尽きたら最期だ！ 拙者の命、貴様に預けるぞ！」

「カッコいいつもりか知らんが現状凄惨い情けないからなっ!？」

それから助けが来るまでの二時間と三十二分、彼らは色々と振り絞りながら頑張り続けた。救援に担がれ里に戻った時にはすっかり精も根も尽き果て、次に目覚めた時は互いに無事であつた事を喜びあい、泥だらけで、涙ながらに抱きしめ合い互いの無事を喜びあつた。

余談ではあるが、その後、抱き合つた時に感じたやたらねつとりとした視線のせいかは分らないが、里の一部女性に暫くなんとなく腐臭の漂う視線で眺められる日々を送つたそう。

時はしばらく遡り。とある鄙びた温泉宿の、しかし手入れは行き届いた廊下の真中で。

「全く…いきなり降つて来て、全然怪我した様子もない上に、第一声が『嫁に來い？』もの凄い馬鹿な痴漢だこと」

「その怪我しなかつた人をいきなり重症一歩手前まで殴り倒した美神さんも十分凄いと
思いますけど…」

犬飼忠夫がニュートンに負け、温泉の女湯に落ちてからしばらく後。

そこには仄かに香る硫黄の香りと、実り豊かな肢体を薄い浴衣で隠した美神と呼ばれた女性と、明らかに地面から浮きつつ、人魂を纏わせた「幽霊の」少女がいた。

痴漢を右ストレートの一撃で沈めた後、急いで着替えを済ませた美神は気絶した少年を浴場からロビーへと足を引つ張つて引きずり出していった。

少年が引きずられた後には血の跡が残っており、ホラーなゲームや映画も真つ青な演出となっている。すれ違った従業員達はそれを見てまた何か霊障でも起こったか、と戦々恐々としていたのは然もあらん。

そのままの流れで、遠目に見守る従業員達にとりあえず警察でも呼んでもらおうか、と声をかけようとした彼女の靈感に、ふと何かが引つ掛かり、眉根を寄せて襤褸雑巾になった青年を眺める美女という光景が出来あがったのである。

「うーん？　この子…：やつぱりなんか変ね。おキヌちゃん！　荷物の中から呪縛ロープと、霊視ゴーグル持ってきて頂戴！」

「呪縛ロープ？　れいしごーぐる？　…：ふえくん、わかりませくん！」

「ああ、そりやそうよね…：しよーがないわねえ。ちよつと見張つてよ、多分あれだけやっとなげばしばらく動けないと思うけど」

「はーい」

頭を掻きつつ自分の部屋に戻る浴衣姿の美女と、それを元気一杯に見送る幽霊美少女の後ろでは――

「――ヤヴァアイ！ 呪縛ロープとか霊視ゴーグルとかつてTVでやつてた霊媒道具じゃねえか！ 対霊対妖のプロ、つまり相性最悪のGSなんぞと事をかまえるわけにはいかん！」

すでに流れ出る血も止まり、戦術的撤退を考える半人狼の青年がいた。

（…ああつ！ でも、年上の美女に縄で縛られる何て、こんな機会は二度とないかもしれんっ!!）

訂正。ただのバカがいた。

「あ、おキ又ちゃん」

「あれ、どうしたんですか美神さん？」

と、部屋に戻ろうとしていた美神が、廊下の曲がり角から顔を出し、おキ又に向かって何かを放り投げた。

長方形の箱から金属の針が二本突き出しているそれを指さし、美神は言う。

「そいつが目を覚ましそうになったら、細長い所を首筋に当てて、横のスイッチ押ししてー」

「えっ、…こ、これ、何ですか？」

答えを求めて手元の箱から視線を上げても、返事は帰らずひらひらと振られる手が廊下の曲がり角に消えていく所であった。

(どうする…どうする忠夫！ 相手はGS！ まかり間違つて退治されんとも限らん！
しかし、外に出て見つけた美人で年上の嫁候補第一号！ ムチムチボインですこぶる
つきの美女!! …もつたない！もつたないぞおおおつ!!」

「きやつ！」

「うえつ！」

どうやらいつのまにか口から出ていた忠夫の心の叫びは、近くにいた幽霊少女を驚かせ、その悲鳴が更に忠夫本人も驚かせたようである。思わず、といった様子で箱の横に着いたスイツチを押しこみながらそれを突き出す少女。

「え、えいつ！」

「あばばばばばばばばつ?!」

ほとばしる雷光。目を瞑つたまま明らかに改造されているであろうスタンガンを押して当てるおキヌ。まさかこんな可憐な少女がいきなりキツツイ攻撃をしてくるとは夢にも思わなかつた忠夫は、しばしビクンビクンと踊り狂うことになる。

「わー、これすごーい」

「し、しび、しびれつ!? いきなり何すんじゃねーちゃん!」

が、そこは人狼故か忠夫故か。

目をキラキラさせて文明の利器を物珍しげに眺める少女に、対してダメージを受けた様子も無く、やや黒焦げていながらも文句を言いスパツと立ち上がる。

と、そこで初めて二人の視線が絡んだ。

「あ、ご、ごめんなさいっ！ 私びっくりしちゃって！ 大丈夫ですかっ!？」

「∴oh。はっはっは！ 大丈夫だよ！ ほーらこんなに元気！」

心配する少女の顔を見て、本当に心からこちらを案じていると感じた忠夫は、その少女の優しさに空元気（とも言えないが）を見せつけるように慌てた様子で両手を振りまわして見せた。

後、可愛かったのが理由の9割である。

「良かった∴。本当にごめんなさいっ！」

頭を下げる少女を見て、忠夫は思う。

一、・器量良し。

二、・性格良し。

三、・∴押しに弱そう。

「分った。だったら俺の嫁に来ないか？」

「何がだつたらなのよこの馬鹿つたれ!!」

とりあえずおキヌを口説き？はじめた忠夫への返答は、少女の悲鳴を聞き駆け戻ってきた美神の十二分に霊力の籠った神通棍の一閃であった。

後頭部にそれを食らって今度こそ崩れ落ちる忠夫。

トドメとばかりに踏みつけられながらも、彼はどこか満足げであったとか無かったとか。

で、それから何度目かのしばらく後。

「で、なんでこんな所にあんたみたいなのがいるの？」

再び忠夫が目覚めてみれば呪縛ロープでぐるぐるに巻かれた己と、

「あんた、人間じゃないでしょ？」

神通棍を輝かせながら額にいくつも血管を浮かばせた、怒りのオーラに包まれた美神がそこにいた。

「…なanananのことでせうか？ わ、私はどこにでもいる平平凡凡な普通の一般村民ですよ？」

「へえ？じゃあその頭から生えてるお耳は何かしら？」

その言葉に慌てて耳を隠そうとし、完璧に拘束されている為腕が動かせず、じたばたともかく忠夫の額にはすでにバンダナはなく——しっかりと、狼の耳が生えていた。

「こ、こ、これは、ですねぇ？」

「これは？」

「そのお…あの…ええと…」

「……………」

どんどん纏う雰囲気冷たくなり、温度を下げる美神の視線にさらされながら忠夫は必死に考える。

相手はおそらくゴーストスイーパー。先ほども考えてはいたが、テレビで見た限りでは、魑魅魍魎、悪鬼羅刹を相手取り、祓い、討ち、滅する事を生業とするその道のプロ。しかも雰囲気からしてかなりの凄腕、というかこの威風と物腰でGSとしては実は平均でした、とか無いわ。もしそうだったらこの国から妖怪変化が全滅してもおかしくねーし。

転じてこちらは半分とは言え妖怪。しかも誤解とは言え女湯に飛び込み、ちよつと持て余した若さのせいで理性が飛んでしまった事もあって、裸の女性に飛びかかった前科持ち。

(アカン、詰んだ)

この状況は不味い。下手な誤魔化しは通用しそうにない女性が相手である上に、立ち場も悪けりや印象も最悪である。

せめて、この雰囲気、怒っている女性を上手い事宥めて見逃してもらえようように交渉できる雰囲気を作らねば！

そう、こう、何か雰囲気を和ませるような小粋なジョークとかいいんじゃないかなっ!?

「…お、お前の綺麗な声を良く聴く為さー！」

「…赤ずきんちゃんって、狼に食べられそうになったのよねー」

すっ、と振り上げられる神通棍。籠められた霊力の為か、そこから最早火花さえ見えそうなほど迸る光。そしてそつと目を閉じ耳を塞ぐ巫女服の少女。

「ごっ、誤解じゃあああああつ!？」

忠夫は何処までも忠夫であった。

一通り、忠夫のライフはもう0よ！ の一步手前までしばかれ倒した後の事。美神は何処となくすつきりした様子で、ぼろぼろの忠夫の涙ながらの話聞いていた。

勿論正座した彼の眼前には未だ仕舞われぬままの神通棍がぶらぶらと揺れており、それが目の前を通るたびに彼はビクリビクリと震えている。

「へえ?! 半人狼！ 今時めつずらしいわねえ。人狼が人との交流を絶つて引き籠つてから、もう随分経つわよ？」

「ええ、まあ色々あります」

「んで、そんなレアな存在がどうしてこんなところにいるわけ？」
「嫁探し」

簀巻きにされて尚、イイ笑顔で即答する忠夫に、毒気を抜かれ、呆れの多分に籠った溜息をつきながらも美神は神通棍をしまった。

「はあく。まあ、確かに人狼と人間が結ばれた話はあるけど…」

「ねえ、美神さん。ろーぷ解いて上げましょうよ」

「まあ、悪い子じやなさそうだしねえ：馬鹿だけど」

苦笑いを浮かべつつロープを解いてバンドナを返してやるのだった。

「それで、これからどうすんのよ？ 女性をさらうっていうのなら、しつかりバッチリ極楽へ送ってあげるけど？」

「はっ?」

本当に、全く考えてもいなかった事を言われ、固まった後、忠夫は。

「なーにいつてんすか! やっぱ愛がないとだめでしょ?! 愛がなきやあ!!」

己の信念を笑顔で返す。

「…ふーん、まあそれなら良いけど」

対する美神は、どこか全く興味が無いようできて、しかし微かに苦笑いを零しながら、その言葉に心の隅で何かがカリッと引つかかれたような戸惑いを感じていた。

(…なんだろ。これ。なんだか、すごく懐かしいような…)

「えーと、犬飼さんは、これからどうなさるお積りなんですか?」

美神はいつの間にか呆けていた事に気づき、おキヌの言葉にはつと意識を目の前に向けた。

先ほどまでボロボロだった筈の少年は何時の間にか元気そうな素振りになっており、それを見て、若干心配そうだったおキヌは、ほっとした様子でほどいたロープ片手に話しかけていた。

「とりあえず、母上繋がりで連絡とつてあるんで、そっちの方にも行ってみようかな、と」

「へ、へえ、どこ?」

呆けていた事を誤魔化す様に放った言葉には、しかし本人さえも意識しないような、別れを惜しむ気持ちが僅かに籠っている。

「東京っす。といつても、自力で生きていけるように頑張るつもりっすけどね」

「ふーん。…あんだ、犬飼忠夫って言ったわよね？」

「嫁に来ますか？」

「行くかつ！」

とつても不機嫌な表情で、でもどこかに楽しげな色を瞳に浮かべたまま、美神は言う。「あんだ、私の裸を見て、無料で済むとは思ってないわよね？」

「…え」

にやり、と意地悪そうな表情を浮かべた美神の言葉に、忠夫はかちりと動きを止めた。止めざるを得なかった。

多少の持ち合わせはある、と言えばある。しかしそれはこれからの生活費だったり食費だったり、その他にも色々必要なものを入手するために取って置きたい貴重な資産だ。

これから先に自力で稼ぐ機会に何時めぐり合えるか分らない以上、できる事ならば使いたくは無い。使いたくは無いが、目の前の女傑が「払いたくありません」で許してくれる訳もない。

しかし、意地悪な表情を、悪戯っぽいものに変えた美神は、笑いを堪えるように動きを止めて冷や汗を流す忠夫に、一本の蜘蛛の糸を垂らす。

「分ってるわよ。どーせ大金なんか持ってないでしょ？　なら、体で払いなさい」
「そー言うことなら今すぐにも!!」

台詞とともに服を脱ぎながら飛び上がった忠夫の頭部に彼の目でさえも捕捉できない速度で神通棍が振り下ろされた。

冷たい廊下に熱いキスをしながら、ゆっくり頭を上げた忠夫の目に、先程までの暖かさの無い、絶対零度の視線を向けてくる仁王立ちの美神が写り込む。

「…労・働・力・を！　提供しなさい」

「了解しましたっ！」

ルパンダイブをかましつつトランクス一枚で凄まじい勢いで尻尾をはためかせ飛び掛ったところを、カウンターで沈められ、仁王の様に睨まれて。

これから先の上下関係をしっかりと叩き込まれた忠夫であった。

「まったく…まあ、荷物持ちもできる、人狼の血を引いてるから霊力も使えるはずだし、超感覚もついてくる。…拾い物、なのかしら？」

はやまったかなあ？　という顔で佇む「いくら分働け」という額の提示をしなかった美神と。

(うわあうわあ、男の人つてすごく筋肉がついてるんだあ)

意外に引き締まっている忠夫の体を見て、真つ赤になりながらも目が離せないおキヌの上に、いつのまにか、涼しげな、透き通るような朝日が差し込んでいた。

その頃、某所では。

「兄上ー！あつにいうつええー!!何処でござるかー!!」

「コーーコーン!!」

「このバカギツネエ!! 少しは手加減するでござるよおお!!!」

「グルルツ!!!」

「やるでござるかあつ!!」

「シロっ、見つけたぞブファッ!」

「グルルルルルウツ!!」

吹き飛ばした彼の事をうっかり忘れ、互いに本能で感じ取ったライバルを減らさんと、爆音と炎を撒き散らしながら自然破壊にいそしむ二人がいたとか。

「あれ？ 犬塚さん、どうなさったんですか、そんなボロボロで」

「…娘が…反抗期かもしれないんです…」

そんな真つ只中に娘を発見して飛び込み、気づかれる事無く巻き込まれ、気付いた時には完全に見失つて失意のままに里に戻り、未だに麗されている者たちの面倒を見ていた女性に相談するとある父親の姿もあつたとか。

…ああ、すまないね、ここを訪れる者は多くない。客人を放つておくなんて、少々気がそぞろになつていたようだ。

お詫びといつては何だが、今日はお茶を一杯ご馳走しよう。まあ、本でも読むか、私の独り言でも聞きながら楽しんでくれると嬉しいのだけど——

第五話。

そこは本当に古い木造アパートだった。

築十数年程度ではなく、しかし長く使い込まれた建物であるが故にか、独特の奇妙な丈夫さを感じさせる佇まいであった。

太い柱に、木造ながらも隙間風の吹きこむことが無いしつかりした壁。住居に使われる木材の質が良く、また、それを建てた大工の腕が良かったせいもあるろう。

とは言え、もはや建てられて何年経ったか不明な程度には古い建物であったが、管理人もそれに相応しい程古い：いやいや、枯れた：と言うか、年経た老婆であった。

とりあえず一軒目に訪れた不動産屋で、馬鹿正直に「戸籍が無い」と伝えると、何故か従業員は溜息混じりにまたか、と言った雰囲気を漂わせながら、取り出した地図に小さく丸をつけ、忠夫に向かって放り投げた。

それを受け取り、背中に「まだ若いんだから、さっさとお日様の下を歩けるようになって」と有難いんだが何なんだからお言葉を頂き、目的地へと移動。

そこにあつたのが見た目に古いアパートで、その目の前の道路を掃除していたのが本

当に古い人物だった。

紹介されてきた事を伝えると、老婆は一月当たりの家賃の額だけを伝え、忠夫に空き部屋の物らしい番号札が着いた鍵を渡して掃除に戻った。その背中がありとあらゆる關係を拒否しているようにも思え、何となく出かけた言葉が引つ込み、結局黙って鞆を背負い直して番号に書かれた扉の前に行き、ドアノブを捻る。

で、行ってみれば意外に掃除の行きとどいた、独り暮らしには十分な広さの部屋があった。

幾らか首を捻る所があったものの、家賃は安いし中は快適そうだしでまあいいかとそこに決め、とりあえずの言われたままの額の家賃を同じ場所を掃除中だった老婆に渡し、それでも無言のままの老婆の背中にこれからよろしくお願いします、と頭を下げた。これが、彼が外の世界に足を付けた、その第一歩であつたのだろう、と彼は後々になつて思つたりもしたのだつた。

で、そんな彼が今何をしているのかと言うと、予てからの予定通り、無事東京に着いた事とかを叔母に連絡しているのである。

「そういう訳でさ、GS助手つて形で雇ってもらふことになつたよ」

「ああ。…だいじょーぶだつて！」

「——え、なに？戸籍？作つといたつて…んな、どうやってや?!」

「——あー、母上の実家の方から、ねえ。まあ、あんまり頼りたくはないんだけど」

「——へ？ 学校?! 行けって……んな無茶な?!」

瞬間、受話器の向こうから怒声と、スピーカー越しの筈なものにはつきりと見える叔母の逆らう気さえ起らないような鋭い眼光を感じ取った忠夫の尻尾が、ひゅんと音を立てて股の間に巻き込まれた気がした。実際にはズボンの中なので気持ちだけだけれども。「ママ・イエス・ママ! すんまつせんした! だからお仕置きだけは勘弁してください」

電話ボックスから身体半分をはみ出させながら受話器に向かつて土下座をする少年の姿は、通りがかりの人達からは非常に奇妙なものとして映り、何となく視線が集まったのだった。

「うん、ありがと。またね、百合子さん」

何事も無かったかのようにがちゃん、と音を立てて受話器を戻す。そして電話ボックスから一歩踏み出した、その瞬間、彼の目の前に、自転車に乗った爽やかな笑顔のあんなちゃんがブレーキ音とともに現れた。

「犬飼さんですね? お届け物です!」

「……え、あ、はい。どうも」

「では、またのご利用をお待ちしていまああああ……」

そして忠夫に封筒を渡した彼は、ドップラー効果を伴いながら、都会の雑踏へと消えていった。

封筒を開けてみれば、中には戸籍謄本やら学生証やらの書類が沢山と、手紙が一枚。『アパートの方に教科書とか制服は届けておくのできちんとサボらず行くように！』との事。

叔母の手回しの良さに驚くべきか、短すぎる時間で伝えても居ない筈の場所へ届け物を配達した自転車バイク便のあんちゃんが凄いのか。

思わず周囲を見回せど、特に何かある訳でもなくせかせかと歩く老若男女が目に入るだけ。

「…都会って忙しくないとは聞いてたけど、ほんまやったんやなー」

と、深々と何度も頷きながら、少年は改めて封筒の中から一枚目を取り出した。

「えーと、養子って事で登録してあんのか。…よこしま、『横島 忠夫』か。なんかしつくりくる…:のかな?」

家の玄関が閉まる音を聞いて、英字新聞を読んでいた男性は顔を上げた。

リビングのドアを開いて肩をたたきながら戻ってきた彼の妻は、小さく溜息をついて

ソフアーに腰掛ける。

「おー、どうだった？」

「無事に届いたみたいよ。あそこは仕事が早いわねえ」

仕事が早いというか、時間を超えているレベルである気がするのだが、一流は一流を知る。超一流ともなれば、という事なのだろうか。

ともあれ、夫はその言葉に苦笑い込みで首を振ると、そつちじゃないよ、と目で伝えて来た。

ああ、と先程までの電話相手の事に思い当たり、妻は額を押さえて眉をひそめる。

「……うーん。大丈夫だとは思うけどねえ。姉さんの子供だし」

「あー。確かななあ。あの人の息子だもんなあ。何処に行っても死にやあしないとは思うが」

「相変わらずうちの実家苦手みたいだし」

当時の事を思い出すと、未だに頭を抱えたくなる。

「まあ、長女が連れてきたお相手が、なあ？」

「人狼つてーのは良いのよ。うちの家系なんて人外なんか——アレだし。人狼は情が深つていうし。なにより、姉さんすごく幸せそうだったし」

別にかの人狼が気に入らなかつた訳では無かつたし、まあ本人が決めた事だから、と

結婚それ自体には反対する者は居なかつた。

だが、ある一点だけ、それが為に、彼らの息子にまで妙な視線が集まつてしまい、まだ小さな子供だつた彼には随分と不審を抱かせてしまつたようである。

しつこいようだが、繰り返すと、人狼である事は特に問題にならなかつた。では、どうしてそんな事になつたのかと言ふと。

「そこまでは良かったんだがなあ。何せ」「なんていうか」

「名前が『ポチ』だもんねえ（なあ）」

そのせいで忠夫は「タロ」とか「チビ」のような、（当時の大人な日本人の感性として）変な名前なんじゃないか、ととぼつちりと勘違いで妙な視線を受け、やや苦手意識を持つてしまつたのであつた。

かくして、これらが東京に着いた後、美神達と別れ、まず犬飼——いや、ここからは彼の偽名、「横島忠夫」と呼ぶことにしよう——横島忠夫が一番初めにやつた事であつた。

幸い住居の方は里から持ち出した資金でも問題無く見つける事ができたし、叔母とのコンタクトもうまく行つた。

「嫁に來なゴホンゴホン!! あー、そうだ。俺、色々あつて戸籍ができたんで、そつちを名乗ることにしたんだ。横島、横島忠夫つての。改めてよろしく!」

「あ、はい、よろしくお願ひします。えっと、横島さん?」

「よろしく、おキヌちゃん。そうだ、美神さんは?」

「美神さんなら、今書齋にいらつしやると思ひますよ?」

堪えたつもりでちよつと頭を出しかけたが、誤魔化せたようなので良しとする。先ずは、雇い主と、色々と話さなければならぬことがあるのだ。特にお給料とか。

「へえ…横島、ねえ」

「はい。おぼ…百合子さんが色々と、手配してくれて。一晚で」

「何者よ、その百合子さんつて?」

「…さあ」

ジト目で横島を睨む美神と、何故か止まらない汗を流しながら見返す横島。

「…まあいいわ。ところで、あんたの給料だけど、ちようどいいわね。今から除霊に行くから、そこでの働きを見て決めさせてもらうわ」

「はい?」

美神はニヤリと不敵な笑みを浮かべ、先程まで見ていた書類をデスクの上に置いた。

その表情を見ながら、汗は引いたが、今度は背中に悪寒が走るのを横島は感じたのだ。た。

「で、今日の仕事はここ！ギヤラは5千万。たいした金額じゃないから手早く済ませませよ」

「うわー、おつきなビルですねー」

「そうだなー」

背中に巨大なリュック、両手にはスーツケースのようなものを持ちながら、全く疲れた様子を見せない横島と、その隣でビルを見上げて声を上げるおキヌ。

なんとも緊張感のない一行である。

「しっかし5千万でたいした金額じゃないって、GSって儲かる職業なんやなー」

「すっごいんですよねー？ 5千万って」

「言ってみただけどう分らんなー。なんせ金に殆ど縁がないところで過ごしとったから」

なにせ住んでいた場所が外界とは隔絶された人狼の里である。お金が必要になるこ

ともなかったし、使ったのも今回のアパート確保がほぼ初めての横島である。金銭感覚など無いに等しい。

「むう…なんにせよ、この仕事の頑張り次第で給料が決まるからな！ 頑張ろうおキヌちゃん！」

「私はお給料決まっていますけど、初めてのお仕事ですから、頑張ります！」

初仕事と気合を入れる2人を余所に、依頼人と交渉していた美神は上機嫌で戻ってきた。

「ラツキー、報酬さらに5千万上乘せですって！ 勤労意欲が湧いてくるわねー。さあ、行くわよ、あんた達！」

「ういつすー！」

「はいー！」

GS美神除霊事務所、出勤である。

とりあえずビル内に入った美神達は、ロビーを通り抜け、非常階段へと向かう。「あれ？エレベーターっての使わないんですか？」

「上で悪霊が暴れてるのよ？ あんな閉鎖空間に入ってゆっくり上がっていくの？ 死にたいなら止めないわよ。それに今回は荷物持ちもいるんだし階段使うにきまってるでしょ！」

「俺がいなかったらどうしたんですか？」

そのまま非常階段を32階までひたすら登りつづける。浮いているおキヌや、手ぶらである意味体力勝負な面もある荒仕事に慣れた美神はともかく、どう見ても大人一人より重そうな荷物を持ったまま、汗もかいていない横島は、さすが人狼、といったところか。

「さーて。少なめの装備で階段使うか、それとも最大限の装備で危険を冒してエレベーターを使うか。屋上からヘリボンもありかしら？ まあ今みたいに大荷物もって階段上がってたら、除霊に入る前に疲れるし、高価な道具も多いから動きは鈍くなるし、まかり間違つて大荷物ごと駄目になったら大赤字ね」

何より様々な種類の霊具を使い分けて除霊にあたる美神のようなタイプにとって、装備量とはイコールで柔軟な対応力であり、火力であり、当然ながらその物が貴重な財産でもあるのだ。

それを危険な霊が暴れ回っている場所の近くに置いておくのは危険であるし、結界を貼るにしても面倒くさいし上等な物は比例してお金もかかる。

よって、機動力もあり、大量の荷物が搭載可能で、いざという時には戦力にもなるであろう忠夫は、この上なく便利な存在なのだ。

「へえー、すごいです美神さん！」

「だ・か・ら、横島くんっていう荷物持ちもできる助手ってのは、けっこう重要なのよっ。」

「まあ、これくらいならまだまだ平気ですけど、「も」って言うのはなんですか？」

「へっ？ そりゃあ…あ、着いたわよ。32階社長室。ここね、準備はいい?!」

「はい！」

「ういっす！」

「横島君、神通棍を！」

「えーっと…」

荷物を降ろし、背中のバッグから言われた道具を取り出す横島。出発前に使いそうな霊具と装備は一通り説明を受けているし、なにせテレビに彼らを題材にしたドラマが流れる事もある程度には世間に認知されているのがGSという職業である。

彼が持っているのは齧った程度の知識であるが、とりあえず簡単な説明と名前を覚える一助にはなったのだった。

「これですわね！」

「よし、各自心の準備は良いわね？」

作戦としては単純に、美神が前に立ちおキヌと忠夫は今回はサポートという名の見学である。

美神としては背後にだけは回さないように注意しながら立ち周り、必要な道具があれば投げ渡してもらおう、程度で今回は済ませるつもりだった。

人狼と言つても、幽霊と言つてもGSの仕事の経験がある訳もなし。

雰囲気を感じ取つて慣れてもらうのも今回の手頃そうな依頼の目的だった。

先発のGSがやられた、と言う追加情報が無ければの話ではあったが。

……しかもそれを理由に何時ものようにゴネて、倍額まで持つて行つた辺りで二人の素人だった事を思い出して今更断れる雰囲気じゃない事に気付いた辺りでちよつと血の気が引いたものの。

「3……2……1……GOO！」

——ともかく、こうして、3人組での初除霊が幕を開けたのである。

勢い良く部屋の中に突入はしたが、悪霊の姿は無く、辺りに広がるのは瓦礫とガラスの破片、高級そうなソファやテーブルなどの内装の無残な姿ばかり。少なくとも、かなりの破壊力を持った悪霊であることは間違いないだろうが、なにせ情報が少なすぎる。

（せめて先発のGSが生き残つてくれていれば、少しは情報が望めたものを！）

と、胸の中で毒づく美神であった。

もちろん後ろの2人にはそのことを伝えてはいない。ただ、大変危険な悪霊であるとした。

この程度でビビってもらっては、せつかくの助手（しかも結構使えそう）がいなくなってしまうではないか！

というのは建前で、その本音は、いまだその胸の中。

しかしほんの少しだけ、心に油断があったのだろう。これでも日本でトップレベルのGS。そんじよの悪霊に負けはしない。

しかもただかだから5千万——上乗せで一億にはなったが——の仕事である。そんなに心配することもないだろう、という。

そんな美神を余所に、先制したのは悪霊であった。

「うわっ！」

「——っ！ しまった！ 荷物！」

美神が横島に指示を出し、もしもの時に身を軽くする為に、と部屋の入り口に置いてきたバッグ。見事に裏目となって、悪霊に崩された天井によってその道具への道はあっさりと閉ざされてしまったのである。

「ウケツ…ウケケケケケツ！」

「人格が崩壊しているタイプか…一番厄介な手合いね…」

突然虚空に現れた、うつろな眼窩を持った髑髏を中心にナニカが集まったかと思うと、数瞬後には今回の除霊対象である悪霊が出現していた。

「交渉は…無駄のようね。なら、このGS美神令子が、極楽へ」

澄んだ音を立てて伸びる神通棍。

「いかせてあげるわっ！」

だが、鈍い音と共に打ち負けたのは、

「ケーーーーーっ!!」

「うそっ！強いー」

「美神さんっ！」

美神の振り下ろした神通棍であった。

「くっ！ 破魔札っ…！」

美神が片手で取り出した御札が閃光放つと共に、互いの間に衝撃が炸裂し、跳ね飛ばされる勢いのまま美神が離脱、距離をとる。そしての勢いで手近な壁の裏に転がり込んだ。

「いたたたた…、やっぱりいわねー。神通棍じゃ歯が立たないわ」

「…えーと、まずいつすか？」

「下手するとあんたと私が死んじやうくらいには、ね」

「え」

「一億じゃ安すぎるわねー」

頭を押さえて舌打ちする美神の横で硬直した横島、そんな彼におキヌのフオローの言葉がかけられた。

「大丈夫！ 死んでも生きられます！ ちょっと死ぬほど苦しいけど」

本人的にはフオローしているつもりである。悪気は無いのだ。

「まだ死にたかないわいっ！」

「…しよーがないわねー。横島君！」

「は、はいっ！」

「あんた囿やんなさい」

「…はっ？」

突如、脈絡もなく美神の口から紡がれたその言葉に固まる横島。

「えーと、美神さん？」

「なによ！ 早くしなさいってーの！ あんた人狼の血引いてんだから、それぐらいわけないでしょう?!」

「ええと、2人の間にナニカ誤解があるようですが……」

「誤解も何もあるかーっ！ 男ならとっつと行けー!!」

怒声とともに悪霊の目の前に蹴りだされる横島。当然ながら反応する悪霊。

「ちよつとまてー!!」

「おキ又ちゃん！ すこし派手なのやるから離れてて！」

「は、はいー！」

横島を蹴り出し、おキ又に一声かけた後、美神は深い集中に入る。それと共に額の前に垂直に構えられた神通棍には、大きな霊力が溜められていった。

一方その頃横島は――

「ぎゃー!! こっちくんなーっ！ 死んでまうー!!」

「けーツケツケツケ！」

「うひーっ!!」

父とその親友に真剣で毎日のごとく斬りかかれる事により極限まで鍛えられた回避能力と

「ケーーーーーッッッッッッッッッ！」

半人狼としての瞬発力でひたすら悪霊の攻撃から逃げ回りつつ、見事な囷つぷりを見せていた。どこまでも締まらない避けっぷりだったが。

(…ま、人格が壊れてるってだけあって、動きが単調で助かった)

ひよいひよいと悪霊から逃げ回りながら、その背後に回り込み視界から外れる。そして悪霊が高まる美神の霊力に反応し、向かおうとした瞬間にその眼前に踊り出て、単純であるがゆえに目の前の事に気を取られてしまうのを利用して攪乱する。

そして彼に完全に気を取られた所で再び視界から外れて、の繰り返し。

知性がない為フェイントなんて使わないし、攻撃パターンも大ぶりで単純なものだ。しかし、それを補って余りある、単純な強さと速さ。それがあつたればこそそのGS第一陣全滅であつたし、トップレベルのGSである美神に厄介と言わせた理由である。

それを短時間であっても、ある程度余裕を持つて避け続ける横島——いや、犬飼 忠夫と呼ぶのがふさわしいか。

伊達に人狼の里1、2を争う剣士の訓練につき合わせられた訳ではない。

「犬塚のおつちゃんの居合に比べればなあっ！」

悪霊が伸ばした右手を皮一枚で左側に踏み込みかわしつつ、次の回避に繋げる為の移動を開始する。避けて、動く。避けて、動く。避けて、動く。避けて——

「ハエが止まってみえるわい！」

「横島さん…すごい、すごいっ！」

どれだけ時間がたったのか。実際には、1分も経っていなかったろう。

「良くやったわ、横島君！」

そして練りに練り上げ、靈力を籠められ直視できないほど光り輝く神通棍をもった美神が、

「後は任せなさい！ 改めて、このGS美神が、極楽へっ！」

とどめの一撃を

「いかせてあげるわっ!!」

「グ、グケエエエエエエエ!!」

悪霊の額に振り下ろした。

そして、その帰り道。

依頼を破魔札一枚と神通棍だけで片付けた事で大幅に利鞘がでてほくほく笑顔で帰路に就く美神と、その肩に手を置いてふよふよと浮きながら、後方を少し心配そうに振り返るおキヌの二人。

そしてその後を少し焦げながらも二つほど増えたトランクを巨大なりユツクの上に乗せ、少し不満げながらも特にふらつく事は無く二人を追いかける横島の姿があった。

「いやー、なんとか全員無事に済んで良かったわ」

「無事じゃないでしょーがっ！」

「とつとと離れないあんたが悪いんでしょーが」

「だからつて纏めてふつとばすこたあないでしょーがあっ！」

そう言つて地団太を踏む横島。しかし荷物を放りだしたりしないあたり、人狼としての律義さか、実の母親の教育が行きとどいているのか。

「いいじゃないい♪ もう傷なんか殆どふさがつちやつたんでしょ？ さつすが人狼の超回復つて感じよねー♪」

「もう、美神さんつたら」

と、苦笑いを浮かべるおキヌを余所に、今度は美神が不満げに振り返る。

どうして私だけが患者なのか、とその表情は語っていた。

「だいたいあんたがとつとと靈波刀を使えば、もつと楽に片付いたのよ」

「え?」

きよとん、と動きを止めた横島に何か変なことでも言ったか、とつられて歩みを止める美神。おキヌは靈波刀自体が何か分からなかったのか、疑問を浮かべていた。

「どーしたのよ?」

「…あれ、言つてませんでしたっけ。使えないっす、俺。靈波刀。つーか、靈力自体使えないっす」

「…はあ?!」

彼が、半分とは言え、『人狼である』という先入観から、当然使えると思つていた靈力がまともに使えないと初めて知つた美神は、ようやく実は物凄く危険な事をさせていたと気付いて真つ青になると言う一幕があつたものの。

「ま、まあとりあえずそこそこ使えるみたいだし、給料はこれくらいね」

といつて美神が誤魔化す様に示した額は、事務所にいる時の食事と、仕事中の食事、それから歩合給での骨付き肉（横島はこれに一番喜んだ）、時給250円（相場を知らない横島は、とりあえず頷いておいた）であつた。

その夜。

「東京つて所は、本当に星もまともに見えんのやなあ」

無事に？ 初出勤を終えて食事も食べさせてもらい、安アパートに帰り着いた横島はただカーテンも無い窓を開け、夜空を見上げながら一人呟く。

「GSねえ…確かに、命懸けの仕事だ、ありゃ」

空には星が見えずとも、細い、細い、まるで裂け目のような月が浮かんでいる。

「…ゾクゾクしたなあ」

その体の震えは、恐怖でなく

「あんな化け物ばっか相手にしてるから、GSつてのは強いんやろーなあ」

狼の、本能。戦うものとしての、本質。自分にあるとは思わなかったそれらが生み出した身体の、心の震え。

「…また、ああいうのがでるのかなあ？」

武者震い、なのだろう。

「…寝よ」

畳に直接寝転がって、天井を超えた先の月を眺めながら、目を閉じる。

「シロ、タマ、元気でやってるかなあ。まさか、あんなに吹っ飛ばされるとは思わなかったなあ。ま、ほとぼりが冷めたら里にも顔くらい見せにもどらにやならんか」
月は、ただ、空に在る。

丁度その頃、人狼の里、長老の家では。

「ふうふううう」

深い、ふかあらい溜息をついたのは、人狼の里最高齢にして、周囲の者達から長老として慕われるこの里の長。

「ぐびぐびぐびっ！ …シロおおおおく。ぐしぐし」

部屋の隅で酒をあおって家出した娘の名を呼んでは、また盃に酒を手酌で注ぐことをひたすら繰り返している泣き上戸、犬塚家の大黒柱。

「沙耶…」

縁側に座って「もう少しだったのに、誰かに殴られたせいで川の向こうの妻に再会できなかつた」と嘆いているのは犬飼家のポチさん。

「おめでとうっ！ 生きてるってすばらしいっ！！」

「さあ、この幸せを皆で分かち合おうんだっ！！」

「そっちもおめでとー！ あつちにありがとー！！」

「おおおおおっ！ 飲めー！ 全部飲むんだー！！」

「！！おーっ！！」

庭では奇跡の生還を果たした（馬鹿）者達が、丸く座り込んで騒がしくひたすら宴会をやっている。

「ふうふうふうふう」

長老は、ただ、おも〜い溜息を吐き出した。

そして、もう一組。横島を追いかけて里の結界をぶち破つて駆けだした二人。

「ここはどこでござるかー！！なんで吹雪いてるでござるかー！！」

「きゅ〜ん」

「ああっ！ねるんじゃない狐えっ！！」

「…コン」

「寝たらもうおきれないでござるよー!!」

「……キュー」

「兄上に会わずに逝く気かあああつ!!」

「っ! コー——————ン!」

「よっし! もう少してカマクラができるでござる! 手伝うでござるよー!」

シロ・タマ現在地——南アルプス 標高2800メートル地点

「兄上——————ン!!」

「コー——————ン!」

第六話。

忠夫初出勤の日から一週間後。

人狼の里、犬飼宅にて、長老は頭痛を堪え頭を押さえていた。

日の出を静かに迎えるはずの里が何時になく騒がしい。それもそのはず、里の中心にある長老宅からは、大勢が騒ぐ音がここ一週間程絶えることなく聞こえているからである。

「ちつくしよー!!」

「ただでさえ少ない人狼の女子がー!!」

「また犬飼家かー!!」

「忠夫ー!! 駆け落ちー! うらやましいぞー!」

「自棄酒じゃあああ!!!」

「「うおおおおおつ!!!」」

何があったのかと言えば、単純に、生還の宴を開いていた彼らのところに、「シロが忠夫と駆け落ちした」という話が聞こえてきたのである。

実際にはそんな事実はないのだが、噂好きな女衆によつて付けられた背びれ尾ひれ

と、物的証拠として発見されたシロの書置きのせいでもはやそれは確定事項として里の中に広がっている。

さらに言えば、(気付かれて無いと思っている)シロが(そもそも対象外で気付いていない)忠夫にあからさまに想いを寄せている態度であったのが駄目押しにもなった

もう、誰も疑つてなぞいない状況で、その事実は彼らの心を深く抉つた。

確かにまだ幼さを残していても、将来は美人になること間違いないであり、忠夫に(届いてはいいないが)猛烈なアタック(という名のじゃれ付き)を繰り返していても、もしかしたら、万が一とかあるかも、と、独り者として僅かにそんな気持ちを持っていたのである。

それまで互いの生還を祝う宴会だった筈のそれは、瞬時に嫉妬の自棄酒へと姿を変えたのであった。それからというもの、一週間の長きに渡り続いている。

呑み過ぎで倒れては放置され、暫くすればゾンビのごとく蘇り、再び酒瓶を手にして管を巻く。

初めは心配していた里の者達も、原因の情けなさや延々と続く瘴気と嫉妬に満ちた騒音、そして放置していても何時の間にか復活しているのでまあ大丈夫だろうと言う諦めがあり、彼らは鬱陶しがられながらも宴会を続けていた。

何故か、長老宅の庭で。

煩さに我慢できなくなった長老が制圧しようにも、近づけば集団で縋りつかれ、涙と鼻水と酸っぱい匂いのする十二力を服に付けられ、しかも延々と呪詛のごとく愚痴を述べられ続ける始末。

ぶん殴つても酒のせいでダメージを受けず、何事も無かったかのようにすぐ戻つてくる。

しかも、集団でだ。

たまらずその夜のうちに犬飼宅へ逃げ出した長老は、一週間たつても収まる様子の無い騒ぎをどうしたものかと頭を抱えていたのだった。

とまれ、今、犬塚と犬飼と言う、この里でも指折りの剣士を呼んだのは、別にあつちをどうにかするとかそういう事でも無いのだから、と長老は頭を切り替えた。

庭と酒蔵の惨状を想像してやや憂鬱になりながら、正面に座つた二人の男に対して居住まいを直す

「全く……少し前まで女々しく陰に籠つていたかと思えば、すつかり元通りか」

ふう、と溜息を吐いた長老の前で、二人の男達は頭を掻いたり、腕を組んで頷いて見せたりとそれぞれ行動は違えども、同じようにどこかすつきりとした顔をしていた。

「まあ、我が娘もそろそろ大人。ようやくこの里から出て獣の姿にならなくなったと

「このほか喜んでおりましたからねえ」

「左様。我が愚息はあの生まれの性か、獣どころか、半獣人の姿さえ取れなかつたからなあ」

「…この里では、場所や月にとらわれることなく人の姿を取れることが大人の証。そういった意味では、忠夫も十分に異端であるからのう」

ふと、長老が昔を思い出すように遠い目を見せた。

「まあ、沙耶殿のおかげで、少なくとも人間全体に対する偏見は消えたわけだ…」

「妻も、喜んでおりましたよ…この皆は、私を受け入れてくれた、と」

それに対し、「当たり前じゃ」という誇りと自信に満ちた視線を返す長老。

長老と同じように、どこか昔を懐かしむような眼を見せながら、犬飼家の仏壇に置かれた位牌に顔を向け、呟いたのは犬塚だった。

「強い女性でありました、我等の奉ずる月とは真逆の、太陽のような」

と、何だか雰囲気醸し出している二人の隣で、しかし夫であった犬飼は腕を組んだまま微かに唸り声を上げていた。

目を閉じたままの彼の額からは、時折たらりと汗が落ちていく。

ぶつぶつと「拙者は尻に敷かれとらん」とか「押しの強さで押し掛け女房…」や「押し倒された気が…：既成事実…：睡眠薬…：うつ、頭が」とか呟き続けている所を見ると、

本人達にしか分らない事も色々あったのだろう。

「あの子も、太陽を持っておる。炎の固まりのごとき、な。：しかし、同時に、危険な物も、その内に秘めておるように思えてしまう」

ふと、長老の口から眩きが漏れた。

不安と、心配。

出ていく事は分つていて、きつとそれはそんなに遠くは無いだろうと覚悟はしていたものの、やはりもう少し鍛えて、せめて靈波刀くらいは身につけさせてやるべきだったか、と。

血の繋がりは無くとも祖父のようなものとして、孫の一人の独り立ちにはやはり気持ち揺さぶられてしまう。

「ぶん」

しかし、それを鼻息一つで断ち切る男がいた。

「妻の名沙耶は刀の『鞘』に通じます。その息子であるあやつなら美事、収めて見せるでしよう」

実の父たる犬飼の、特に焦った様子も無い言葉には、確かに覗く信頼がある。

誇らしさと、ほんの少しの、「なにか」の感情を隠しながらのその返答に、その親友は

同じ、いや、隠された感情をこちらははつきりと示しながら呟く。

「炎を、か。しかし犬飼。拙者は、不安なのだ。鞆は『莢』。その中に、『包み育てる』性を持つてしまう。そうではないか？」

「…」

不安を隠しながらの返答でなく、はつきりとした犬塚の声に、沈黙で返す二人。

——いや。

「…くつくつく。良いではないか」

長老は、先程見せた感情とは正反対の、全くの信頼をその声に乗せていた。

「それでも、あやつなら…忠夫なら、騒ぎながら、愚痴りながら、それでもきつと何とかする。そう、思っているのであろう？」

「…いやはや、流石は年の功、といったところでしょうか」

「…我が息子ながら、あれはまた沙耶の息子。あの、真綿の様で中身は神鉄で拵えられたような我が妻の鞆」

「「あいつじや砕くにや早すぎる！」」

数瞬の後、犬飼宅は3人の爆笑に包まれ、更に数瞬の後、爆音を響かせてその部屋ごと吹っ飛んだ。

— G S 美神除靈事務所 —

事務所のソファ―に座って：いや、舌を出しながら「ぐてえ」、として寝転んでいるのは、先ほどまで里で語られていた青年、元 犬飼であり、現 横島忠夫と呼ばれる青年であった。

「畜生うちの所長人使い荒過ぎだ…」

ほぼ力尽きた野良犬の様相を呈している理由は、雇われてからの一週間で、まさに嵐のように依頼をこなしていた美神に主な原因がある。

新たな助手を得て、G S 美神除靈事務所はその対応力を増した。

それまで数々の依頼を、美神一人しかいない為どうしても人手が足りずに断ってきたその鬱憤晴らしのように、ひたすらポンポンとこなしまくったのである。

海に行き、山に行き、異空間に行き、時には幽霊と共に銀行を襲い、またあるときは女子高で校長に青春を取り戻し、その挙句宇宙にまで事務所の活動は及んだのである。

「結局、まともに嫁探しは進まんし……」

女子高では「危険物」と書かれたトランクに入れられて嚴重に鍵をかけ、さらにごつごつ鎖で巻いたあと呪縛ロープで巻かれて、そのまま依頼終了まで放置された。危うく閉所恐怖症になる所だったしトランクが開いた時に一番に目に入ったおキヌちゃんがマジ女神に見えた。

求婚は隣の雇用主に意識ごと叩き潰されたけれども。

海では生まれて初めて逆なんば、とかいうやつをされたが、人妻と知って泣く泣く諦めた。

『人狼の里・独り者の鉄の掟』その四。子持ちの人妻に手を出すな！』に引つかかった為である。

ちなみにこの掟、破ればもれなく夫と独り者集団からの血の制裁があるため、正に鉄の掟となっている。

ちなみに銀行員のおねーさんがたは、現金を持たない横島を歯牙にもかけなかった。

視界にも入れて貰えないほどの冷たさに「嫁に來ないか？」の「よ」さえ言えなかったのである。

「……えぐえぐ」

現実の厳しさを知り、一人涙する横島であった。

だが、そんな彼を気にもかけず、笑顔でおキヌを連れて帰ってきた美神は、上機嫌に彼の座ったソファアートを軽く蹴って声をかけた。

同じようなペースで働き続け、しかも一部はおキヌに任せて始めているとはいえ接客から事務、経理までこなし、依頼の際には最前線で霊力を振り除霊にあたる。

そんな彼女は、何故か半人狼である筈の忠夫が疲れきつていけると言うのに元氣澆刺だった。

しかし、忠夫は見た。

どんなに三人疲れて帰ってきてても、従業員二人がぐったりしているのを横目に札束を数えたり、通帳を睨んだりしているうちに見る見る疲れが取れていく美神の姿を。

正直この人の方が人外何じやなかるうか、と思いつつ、すっかり馴染んだ除霊道具を担いだ忠夫を車に乗せ、依頼現場に向かう三人だった。

——が、三人揃ってからの快進撃もここまでだった。

「きよ……協同作戦?! そんな話、聞いてないわよっ!!」

ここ一週間というものの順調にその業績と依頼成功率を伸ばし、鼻歌交じりに上機嫌で次の仕事へと向かっていた美神であったが、ここに来て、とうとうその悪運も尽きてきたようである。

「え〜。私は令子ちゃんと一緒にお仕事できるのを楽しみにしてたのよ〜。そんな言

い方無いじゃない〜」

そのまま身を翻して逃げ出そうと……いやいや、厄介ごとを回避しようとしていた美神の髪を掴み、間延びした話し方で美神を引き止めた肩までの黒髪を持つ女性——GS「六道 冥子」は、楚々とした雰囲気を持つ、洋風お嬢様であった。

見た目は。

そして、そんな年頃の女性、しかも、可愛い女性を目にした横島は、久しぶりの新たな出会いと言う事もあり、本能と煩惱がゲージを振り切った。

カタパルト、オンライン！ 発進、どうぞ！

そんな脳内メッセージが流れたかどうかは知らないが、横島の身体は無意識のうちに宙を待っていた。

犬飼 忠夫 いきまーす！

弾道ミサイルのごとく、正確に目標「名も知らぬ美女」の向かって飛び立つバカ一匹。

「お嬢さ〜ん！」

着弾まで、3秒

「嫁につ！」

おキヌが何時の間にか隣から突如消えた横島を見送り、美神が靈力を高めた右手を振りかぶり、残り2秒

「来ないっ」

が、美神の裏拳が振るわれるより早く冥子の影が光を放ち、1秒。

「か——あぶろべしっ!!」

美神の渾身の右ストレートより早く、迎撃ミサイルのごとく炸裂したのは、12本、いや、12匹。

「あゝ。靈の気配でこの子達、今殺気立ってるので、近づくとあぶないですよ？」
GSの大家、六道家に伝わる、12神将と呼ばれる、現代では一国の軍隊にさえも匹敵する式神達であった。

不埒者に対するお仕置きなのか、それとも主人を守ろうとする行動なのか、忠夫は直撃を受けた後も、十二支を模した式神達に纏わりつかれていた。

——ギャーツス！

「あゝれ〜？」

——ギブ、ギブギブギブ！

「あのバカ…。なに、どうしたの冥子？」

——あ、アカンっ、もう電気はいーやーやーっ!!

「ん、なんていうか、あの子達、攻撃してるんじゃないわ」

——うおっ!あぶなっ!かすった!かすった!!

「へ?」

——キャインキャイン!

「なんていうか、久しぶりにお父さんにあつて懐いてるみたいなく?」

——俺がいったい何をした——!!

「あの、横島さんが大変な事になってるんですけど…」

——がぶ。

「[[[あ]]」

なんとかかんとか逃げ回ってはいたが、何せ相手には悪意や殺気というものが無い。

しかも冥子曰く、子供がじやれているような——それにしても激しすぎてはいたが——
——ような物である。

個々でも反則気味の連中が集団で来るからたまつたもんじゃない。何時の間にやら彼らに追い詰められていた横島は——大口をもった式神に啞えられていた。

しばらくじたばたと動いていた彼の下半身も、三人の前でその動きを徐々に緩慢にしていく。

おろおろとおキヌが手を出そうか出すまいかその周りを飛び回り、美神はどうしたものかと額に手を当て呆れた様子。

ひとりのほほんと眺めていた冥子は、忠夫を唾えた式神と目を合わせると、笑顔でこくりと頷いた。

彼女の的にはもう良いから離してあげて、と言ったつもりで頷いたのだが、何故か彼女は横島を離す事無く彼女の影へとどんどん沈んでいく。

あれ？ と首を捻った冥子に対し、もはやピクリとも動かない横島を唾えたままの式神が最後に影に飛び込み、そのまま消えていった。

どうやら、気に入られた横島は彼らの棲み家である六道冥子の影の中へとお持ち帰りされてしまったようだ。

「…どうしましよ〜？」

「…さつさと出して…まあいいか。十二神将もいるし、戦力的には問題ないから、そのままほつときましょ。どーせ死にやしないわよ」

「美神さあーん！」

頭痛をこらえながらの美神の台詞に、おキヌは必死で呼びかけるも、「除霊に入る前か

「ら疲れたわ」という風に除霊対象の新築マンションに入って行つた美神には届かなかつたようである。

——それから数時間後、ようやく式神の『甘噛』から開放され、式神の涎でべたべたのまま影から引つ張り出された横島が見たものは、記憶の中では新築マンション『であつた』瓦礫の山であつた。

非常に疲れた様子の美神曰く、色々あつて、こうなつた。予想はしていた（冥子が来た時点で）、反省はしているし（冥子と組むとこうなる）、後悔（冥子とはもう組みたくない）もしている。

が、ちよつとまあ…結果を見れば除霊には成功したのでOKだろう、とは思うが、依頼人が納得しないかもしれない。

そう言つて、後方で膝をつき、呆然とマンション後を眺めている依頼人を指さす。

「はあ。で、どーするんすか」

「ゴネられる前にばつくれるわよ。さっさと乗りなさい」

「良いのかなあ…」

後ろめたそうな表情で依頼人を眺めるおキヌを助手席に押し込み、何となくばつちい横島を後部座席に蹴り込む。

運転席にキーを捻る。

タオルを一枚後部座席に投げ、そのまま流れるような動きでアクセルとハンドルとサイドブレーキを操作。180。ターン。

呆けたままの依頼人と、「お母様に叱られるわ」と宙を見上げて慄いている冥子を置き去りに、嫌な事があつた場所からとつと離れたい、と言つた感情を隠しめせずに、美神はアクセルを踏み込んだ。

その夜、六道邸にて。

「んんん」

「あら〜？冥子どうしたの〜？」

「あ、お母様〜」

「珍しいわね〜貴方が考え事だなんて〜」

「そんな〜、お母様つたらひどいわ〜」

なんともものんびりとした会話を交わす、六道冥子。

が、その余裕も眼前の女性がまとう雰囲気が一変するまでだった。

「そんなことより、貴方、また除霊に失敗したんですって？」

「あゝ、ごめんなさいお母様～～！」

それまで冥子の影の中で大人しくしていた式神達が、その女性の放つ威圧感とともに冥子にプレッシャーをかける。

母と呼ばれたこの女傑こそ、六道 冥華。

先代の式神十二神将の主であった。母子だけあって、その面立ちは良く似ているが、こちらは着物の着こなしからして熟練された「大人の風格」があった。

「で～～？何を考えていたのかしら～～？」

「それがね～～」

しばらくの間、奪われたコントロールを返してもらってようやく一息ついた、何処となく煤けている冥子と、母の会話は続けられる。

中心は久しぶりに出会った旧友たる美神と、その従業員であり「六道に伝わる」十二神将に「異常に懐かれた」少年、横島 忠夫である。

「…そんなはずは無いわ。あの子達は先祖代々伝わるれつきとした『六道家の式神』よ～～？」

「え、でもでも～～」

「そんなにはいはい懐いてちやく、式神としては致命的よく？」
「…ほんとなのに〜」

拗ねた顔をして部屋を出て行った娘を見送った後。しばらく、その絶えない笑顔の裏で何かを考えていた冥華は、なにかに思い当たったような、同時に凄まじく、ここ数年、睡眠中以外は殆ど崩さなかった笑顔を忘れるほどの驚いた顔をした後。

「フミさん〜。フミさんはいるかしら〜」

また、何事もなかったかのように、筆頭侍女を呼びつける。

「————ハッパッ」

何処からともなく、音どころか、気配すら出さずに背後に現れた懐刀の侍女に、全く崩れない笑顔で。

「お願いがあるの〜」

「ハッ」

冥華は、お願いと言う、六道家当主としての命令を出した。

「あー寒かったでござる。しかし、あの女、何が「すべて凍るはずなのにー!!」でござるか」

「……」

「あの程度で、この犬塚シロに流れるエモ……ごほんっ！もとい、兄上への想いが凍るわけがないでござるー！」

「……………」

「どうした〜狐♪ そんなに凍ったことが悔しいんでござるか？ ん〜？」

「…グルルッ！」

「わーっはっはっは！ ん〜どっちに行くでござるかな〜？」

びた（止まって）。じーっ（何かを確認した後）。…ふっ（もう一人に向けて嘲るような笑みを浮かべて）。ずだだだだだっ（全力疾走）

「ちよっ！ まてーい！ このクソ狐ー!!」

「しくしくしく……この世にまだ凍らせられないものがあるなんて……また雪女修行のやり直しね」

第七話。

——人狼の里、犬飼宅にて——

玄関から聞こえてきた轟音に、3人が笑い声を止め、一瞬でそれぞれ傍らの刀や靈波刀を構える。

領き合う事も視線を交わす事も無く犬塚、犬飼が前に並び、長老が無言でその後ろに立つて移動する。

直ぐに視界に入ってきたのは、ボロボロになって吹き飛んだ玄関。もうもうと土煙を上げるそこからふらふらと千鳥足で出て来たのは、顔を朱に染めた酔っ払いどもだった。

各々刀を持ったり、全く安定していない靈波刀をぶら下げたり、武器のつもりか酒瓶とたくわん一本まるごとを刀の如く構えたりと、一言でいうなれば「駄目だこいつら：早くなんとかしないと」である。

長老たち三人が思わず揃ってポカンと口を開けたのも無べなるかな。

「くおらあああああ！ ポチさーん！ 出てこーい！…ヒック」

「ずるいぞー！ 犬飼家ばかり良い目見やがって〜ういつ」

「くおのエロエロむつつりー。 うつく。 この刀、グネグネするなあ…」

「ひつく〜！というわけでえ〜殴りこみなのだうおぼろろろろえ〜」

当然ながらそんな彼らを目にした彼らの上司たる里の長は、酔っ払いどもを成敗する為にもこちらも武器を構えた。

長老は額にぶつとい血管を浮かべながら、へらへらと笑ったりあるいは蒼褪めて入口の影に蹲っている輩共に躍りかかる。

「〜の、馬鹿たれどもがあああああつ〜」

先日からの庭の占拠の事もあってか、大分腹にすえかねていたようで、結構な勢いで振り回された霊波刀に叩かれてぼんぼんと飛んでいく酔っ払い達。

すつかりバーサーク入った長老の振り回す霊波刀と、吹き飛ばされた彼らと、ふらふらながらも相手が誰だか分っていない様子で手近な人影と思しき物に反撃に出る酔っ払い。

当然ながらまともに目標に行くわけもなく、殆ど適当に暴れ回っているだけである。

酔っ払いが頭から突き刺さって破れる障子、割れる窓ガラス、吹き飛ぶ襖、ひつくり返るちゃぶ台、真つ二つになる絵、霊波刀に切り裂かれあつという間にポロポロになる

暈。

「ああああああつ！ 拙者が描いた沙耶の絵（等身大・輝く笑顔ばーじょん）がああああつ！」

途中で家主の寝室に飾ってあったらしい入魂の一作が破れたようだ。

怒りで増えたバーサーカー二体目が、殺意の波動に目覚めながら戦場へと突撃しているのを横目に、犬塚はぽつりと呟いた。

「…あいつ妙な所で器用だよな」

一向に収まる様子の無い騒ぎをよそに、犬塚は一人安全圏である庭の外まで非難しており、どこからか飛んできた絵の残骸に描かれた、それはもう気合いの入ったフルカラーな全身が描かれた彼の妻の水彩画を見て、気楽に呟いた。

今度娘の絵でも描いてもらおうかな、と思いつつ、彼は庭の地面に突き刺さって気絶しているアホ達をてきぱきと縛り、医療班の所へ御世話を押し付けに歩きます。

と、いうわけで。突如として酔っ払った嫉妬狼侍どもの襲撃を受けた犬飼宅では、相変わらずの混乱が起きていた。

「あー。ポチさんが増えたー。ヒック」

「むう・・・分身の術かつ！ 流石だなっ！ …ういつ」

「エロさも掛け算だー。ケタケタケタケタ」

「(氣絶中)」

「全員其処になおれー! 沙耶(の絵)のかたきいいいいいつ!!!」

「はっ! 落ち着けポチツ!! 流石に真剣はまずいぞおおお!!」

「おーやれやれー。あ、ポチー? あとでうちの娘も描いてくれ」

「犬塚あああああっ!!! お前もポチを止めんかあああああ!!!」

里は今日も平和である。

さて、そんな里の日常はともかく、こちらは東京。

そこで生活を始めた横島の朝は、早い。

「いてててて…梶子摺らせやがって」

都会のコンクリートビルに囲まれた木造安アパートを日の出より早く抜け出した青年は、今、東京を遠く離れた山中にいた。

「今日の戦果は猪が二匹に鴨が一羽か。良し良し、絶好調だぜっ！」

そう呟く彼の手には、狼としての本能をフルに使った「狩り」で手に入れ、既に血抜きなどの下処理を済まし、ロープで吊り下げられた猪と鴨があつた。事務所での給料では賄いきれない栄養を、自給自足で確保しにここまで——散歩がてらに——来ていたのである。

「あ、そろそろねぐらに戻らんと。遅刻しちまう！」

漸く顔を出した太陽を見上げて呟くと、鼻歌交じりに山中を自動車並みの速度で、しかも獲物を肩に担ぎながら駆け出す横島。

東京に来てはや一カ月。当初は不慣れな環境で迷子になったり、ふいに襲撃してくる冥子とその式神達に絡まれたり、時給250円では家賃と切り詰めた生活費で精一杯という事に気づいて「東京って建物も物価も高いっ！」と驚愕したり、その他色々問題があつたものの、すっかり都会での生活にも慣れ、今では毎朝狩りに出かけられる程度にはなつていた。

そんな彼は、目下、無駄にサバイバル技能と適応力の高い、都会に暮らす半人狼である。

そしてなんやかんやと日もすっかり山裾から顔を覗かせ、都会の喧騒が一気に目覚めて騒がしくなった頃。

G S 美神除霊事務所は、一人の客人を迎えていた。

応接室のソファアに腰掛け、目の前の友人であるぼやぼや雰囲気を漂わせる女性と雑談に興じながら、美神はその最中に飛び出したとある人物の名前に驚きを露わにする。

「ドクター・カオス?! ……ってあの、錬金術師の? まだ生きてたの?」

「そうなの?」

その友人、G S 六道冥子はケーキをつまみつつ、フオークをぶらぶらと、言うには遅い速度でぶらぶらと揺らしながら、その時の事を思い出す。

「古代の秘術を使つて、不死になったのは良いけどここ百年ほど姿を晦ましていたじゃない?」それが今、日本に来ているのよ?」

「へー。どうして知ってるのよ、冥子?」

とは言え驚きはしたものの、商売敵になる訳で無し、まあそんなに自分に関係は無いだろう、とふんで、あまり興味を引かれた様子もなく、こちらはさっさと食べ終えたイ

チゴシヨートが乗っていた皿を片付ける令子。

「この前々空港であつてサインもらつちやつた〜」

「…そう言えばあんた結構ミーハーだったわね」

「でも、聞いた話だけだと、なんとなく怖い人かもしれないじゃない〜」

そんな相手からどうやつてサインもらつたのかしら？ その疑問が表情に出たのか、

冥子はその理由を告げる。

その理由を軽く答える冥子であつた、がその際に飛び出したまた別の人物の名前で、事態は急転する。

「カオスさんを〜お出迎えに来てたお友達に頼んだら、快くサインしてくれたわ〜」

「…オトモダチ？」

その「お友達」に心当たりがあるのか、イヤ〜な雰囲気を漂わせ始める美神。

「うん、エミちゃんよ〜」

「——小笠原 エミっ!!」

二人の共通の知り合いであり、美神にとつても商売敵であり、ライバルであり、そして因縁の宿敵である女性である。美神はその名前と稀代の錬金術師の組み合わせに、靈感に嫌な感覚を感じて眉根を寄せるのだった。

——都内・某所——

「ここで日付は一日戻る。

「——と、いうワケで、このGS小笠原エミが、あんた達と協力することにしたってワケ」
「なるほどのう。その、美神令子とやら、たしかに求め得る素材としては申し分ない。我が秘術の栄えある被験者としては、文句なし、じゃな」

「イエス。ドクター・カオス」

ある喫茶店では、今日突然訪れた不幸を店長が店の裏で嘆いていた。

今日の朝までは平和だったのだ。ビル街の狭間、主要道路から一本外れた土地であるにも関わらず、それなりに存在する常連の客に何時ものモーニングセットを出し、自慢のコーヒーで目をしゃっきりと覚ました会社員たちが職場と言う戦場へ出かけていくのを見送った。

その後は時折ベルを鳴らして入ってくるまた別の常連達——何時も新聞を30分きつちり読んで、コーヒーを二杯飲んで出勤していくどこかの重役や、徹夜の仕事明け

で朝食を食べながらうとうととしている若い社員、ほぼすっぴんで訪れてはカフェオレ一杯を飲みながらもその数分で化粧を完成させ、別人のような風貌で契約先へと出撃していくOL、そんな人達に憩いの一時を提供する筈だった。

しかし、今日はそんな常連達も店内を覗くなりUターンして出て行った。

「…くつくつく。これで、私はあんのにつくき令子を消すことができるし」

「わしは目的を果たすことができる」

「くつくつく。笑いが止まらないワケ！ おーっほっほっほー！」

「わーっはっはっは!!」

「そこでよ、まず——」

「なるほど、だがこうした方が——」

「レコード・開始します。演算・開始。ドクター・カオス・情報出力媒体の・使用許可を・

求めます」

せめて隅でやればいい物を、店の真ん中のテーブルで怪しい雰囲気をつんだんに撒き散らし、時折高笑いや含み笑いを放つ三人組。

一人は見た目は綺麗な、褐色の肌と長い黒髪の美女。きつと静かにコーヒーを飲んでいれば非常に絵になるであろうし、眼福であったらう彼女はしかし、周囲の視線も気にせず高笑いを放ち、誰かに向かって呪詛を吐き、と迷惑度では一番だった。

もう一人はこれまた非常に奇妙な女性だった。

短めの赤に近い桃色の髪をした女性は、見た目はまさに人形の如く整っていた。

しかし、動くごとに小さく機械音がしたり、妙に片言だったとはつきり言つて怪しい。

付け加えるならカチューシャから突き出しているアンテナがさらに怪しい。

が、怪しさだけで言うならば残った一人も負けてはいない。

皺と年季の入った風貌、整えられた白髪、見た目外国人なのに異様に上手い日本語、そしてなによりも季節と場所を無視した吸血鬼のようなマントと服。

どこの中世貴族ですか、と言うかなんのコスプレですか、と言つた服装ながら、周囲との調和を無視して似合つてしまう威厳と風格のある老人である。

そんな奴らが店の真ん中で怪しい会話に耽つているのだ。

当然客は帰るし営業妨害甚だしい。

「店長ー。今日はもう店閉めましょうよー」

「…いや！ 負けはせん！ いままで幾多の地上げにも負けず、毎日店を開き続けてきたこの私が、この程度の嫌がらせで屈するわけには…！」

「でも、あいつらコーヒー2杯でもう3時間も粘つてるんすよー？」

「…あれでも客。あれでも客。あれでも客。あれでも客。あれでも客。あれでも客…」

「あー。もう、しよーがねー人だこと」

結局その日は追加で6時間ほど新しく注文もせず、コーヒーのお代わりも無しに居座った彼らが帰った後、店長は塩をまくとそのまま店を疲れた表情で閉めたのだった。

そんなことが昨日あったとは露知らず。今日も今日とて事務所に元気良く出勤する横島であった。

「しまったなー。里じゃねーんだから竈も鍋も無いのすっかり忘れてた——ん？」

早朝にゲットした獲物を調理しようとして道具が何もない事に気付き、残り少ない現金でどうやりくりして料理道具を入手しようかと悩む彼であったが、出勤時間まで残り少ない事に気付いた。

捨てるのも勿体ないので大家の老婆に全部渡し、今日の食事は事務所でなんとかしてもらおうと鼻歌交じりに通勤路を歩いていた所で、ふと、その前方に立ちふさがる2人の女性を発見。

—— 忠夫リーダー、感ありっ!!

—— 総員、急加速に備えっ!

—— はっしんっ!!

残像さえ残さず接近すると、

「おねーさんがたっ! 嫁に來ないか?」

「対象・接近を・確認。捕獲モード・作動。捕縛用スタン・ガン——発射」

真つ黒いコートを纏った女性が、その手首から飛ばしてきた先端に端子のついたワイヤーにあっさりと絡めとられ、黒焦げになって昏倒した。

「:ちよつと、マリア。これ流石にやりすぎなんじゃない?」

「ノー。ミス小笠原。収集したデータによれば:これ以下の電圧では:作戦開始前に逃亡する可能性・70%オーバー」

「70%オーバーって:とんでもないワケ、人狼って」

黒焦げ、というか外観は殆ど人型の炭にしか見えない横島に、その2人の女性は話しながら近寄っていく。

小笠原と呼ばれた女性に、人狼についてなにかとんでもない勘違いを与えたようではあったが、ともあれ彼女達はてきぱきと横島をロープで縛ると、近くの路地に止めてあつたワンボックスカーにマリアが抱えて連れ込んだ。

突然発生した迫力ある彼女のオーラの前に、慣れない二人は思いつきり背筋を震わせていた。

「ゆ、幽霊の嬢ちゃん、美神さんはいったいどうしたってんだ？」

「さ、さあ。今朝からあんな調子で…」

「ふふふふふふふふふふふつ!!」

昨日までの不可思議な呪いよりも、とりあえず目の前の夜叉の方が危険だと感じたヤクザの組長は、護衛人からの距離を大きく、おおくきく開けたのであった。

「と、いうわけで、だ」

組長宅より少し離れた公園で、人払いの結界を引いたエミとカオス、マリア。

周囲は鬱蒼とした木々に囲まれ、また公園の中心部からも離れているせいか辺りは電灯の明かりがあつても薄暗く、また地面に描かれた複雑な魔法陣も相俟って、サバトでも開かれそうな雰囲気となっている。

「今日の材料はこの半人狼の子と、イモリの干物、鼈、マンドラゴラ、玉葱、その他諸々の呪術材料ってワケ」

「ひー！ イモリと玉葱は嫌っスー！！！！」

そして、なんとというか、禍々しさを十二分に放ったくさんの怪しい物体（と、玉葱）に囲まれた、鎖でぐるぐる巻きの忠夫の姿があった。

「安心するが良い小僧。今回のお前の役割はいわばブースターと対美神令子用の霊波コーティングじゃ。手強い相手のようじゃからな、そやつ（と）の霊力に対抗するには、その霊波を日常的に浴びて、慣れたお前さんが丁度良かったもんでの」

「私が送り出す呪いの力をあんたの血の力で増幅して、それをあのじいさんがマリア用に調整！」

「その力に更におまえさんから取り出した…『AMF』、そう、『アンチ美神フィールド』でも言うかの。それに転用しつつ、マリアが目標を拘束」

「そして護衛がいなくなった依頼対象をじつくりと「説得」するってワケ」

「完璧なワケ！（じゃっ）」

「マリアちゃん、って言うんだよね。可愛いねー。ねね、歳いくつ？ 結婚の予定とかある？ 嫁にこないか（キリッ）」

「ノー。その質問に対し・回答権は・与えられていません——お褒めの言葉に対し・アリ

ガトウと・のみ返答させて・いただきます」

「聞きなさいよっ！ あとカツコキリツとか自分で行っちゃうワケ!」

「余裕じゃのー小僧」

上機嫌で今回の作戦を説明していたエミとカオスをよそに、マリアと共になんだかいい雰囲気の下地を作り始めていた横島は、二人の突込みに対し「やれやれ」といった表情を浮かべると、答えた。

「あんたらさー。わかってないと思うよ?」

「なにをよっ!」

「ふむ? 面白い事を言うのお」

「…横島・さん? マリア・信用・できませんか?」

「…へっ?」

「ほう?」

出会ったばかりの協力者ならまだしも、数百年一緒に存在していた製作者でさえ全く予想外の疑問符を放つ人造少女に対し、横島は慌てて言葉を続ける。

「いやいやいや! そーゆうことじゃないんだってっ! マリアはすごいと思うよ、実

際!!」

「…アリガトウ・と返答させて・いただきます」

「ほーほーほー」

「あのー、マリア?」

自分の知らない姿を見せられて、ニヤニヤと自分の顎を擦る何処となく面白そうな製作者を余所に、なんとなくさつきの子の続きをはじめそうな二人であったが、イラついた様子で、今度は褐色の肌を持つ女性が激しく問い掛ける。

「だーかーら! つまり、どー言うことなワケっ!」

「相手があの美神さんだつてことつすよ。小笠原さん、でしたよね? あ、結婚します?」

「ワケわかんないわよっ!」

「つまりですねー、そのー、実はですね? …一度しか言いませんから、良く聞いてくださいよっ!」

「くだらない前置きは良いからさつきと——」

苛立つた様子で横島の胸ぐらをつかみ上げるエミ。

「いやー、殺されるううう!! たつすけてー! 誰かー! 埋められて殺されて犯されるー!!」

「ちよっ!? 人聞きの悪い事言うんじゃないワケ! あと何その猟奇的な順番!」

が、途端に大声を出して騒ぎ始めた忠夫に、今度は大わらわで沈黙させようと、口元

に手を当てる、が、相手は押さえる場所は首から上だけとはいえ自分より高い場所であり、しかも身体能力は十分人外。器用にクネクネと素早く動いて中々押さえる事も出来ず、焦りだけが募っていく。

ドクター・カオスもまた興味深げに彼と彼女を眺めている。面白がっているだけで頼まれない以上手伝おうとは言う気持ちは欠片もないが。

「ああもう！ とつとと儀式を開始してやるワケっ！ 行くわ——」

が、口封じを諦め霊力を練り始めた小笠原エミがその続きを語るよりも早く、彼女達の背後の茂みで霊力の輝きが膨れ上がる。

その光に気づいた時には既に時遅し。振り向いた小笠原エミの脳天に、鈍い音を立てて神通棍が叩きこまれた後だった。

「ふっふくん。やあつぱり横島君を拉致つてたわねっ！ 見つけたわよ、エミツ!!」

「なっ、何で此処にいるワケ…!? 護衛は…?」

突如エミの背後にあつた繁みを掻き分け現れたのは、亜麻色の長髪を持ち、神通棍を構え、戦闘態勢万全の美神令子とおキヌ。半ば脳震盪を起こした状態で、殆ど意地だけで意識を保つたまま、小笠原は得意げな美神を指さす。その問いの答えは、背後からするつと飛んできた。

「そりゃーこの人は、こんな状況なら「絶対」守るよりも攻める方を選ぶ人っすから」
「は、はは…そう言えばそうだった、ワ、ケ…がくっ」

横島と話していた為に完全に不意を撃たれ、しかもその特性からどちらかというとならぬ苦手な小笠原エミは、その奇襲の一撃たつぷりと霊力を流しこまれ、落ちた。

実は忠夫、東京に来てすぐに、そのあまりの人の多さと交通の複雑さに大混乱を起し、迷子になって「えぐえぐ」と半泣きで歩いていたところをおキヌに保護された、という忘れたい事実があった。

それならば、迷子になったときの為に、とバンドナに発信機を付けていた美神であったが、六道冥子襲来時にサンチラの電撃によってあっさり故障。こういった仕事で、迷子で助手が不在で使えませんでしたー、では正直困る。ので、耐電、耐水、耐熱、耐衝撃の高価な発信機に付け替えた。

「いちいちぶつ壊れるような奴を使ってたんじゃ、経費も馬鹿にならないからねー」とは美神の弁。今回は、その発信機が今回は思わぬ効果を表した結果となった。

「…ふむ。あっさりとしたこちらの計画が潰されてしもーたか」

「ドクター・カオス。ミス・エミの脱落により・勝率・32%・ダウン。撤退を・推奨・します」

先ほどまでのマリアを眺めていた時の面白がるような雰囲気はすでになく、味方の脱

落さえも泰然と受け入れるドクター・カオス。

そしてその横に無表情のまま立つ機械の娘、マリア。

「あんたが『ヨーロッパの魔王』、ドクター・カオスね」

「いかにも。して、美神とやら、小僧の方に気を引かせての奇襲とは、なかなかやるのう」
「なんのことよ？ あんた達が勝手に横島君に絡んでたんでしょーが」

「…なるほど、一流の呪術師が結界を抜かれて気付かない程興奮しているとは、妙に挑発めいた戯言だとは思っていたが——お前の策か、小僧」

そういつて、横島を眺める視線には先ほどまでは確かに欠片も感じさせなかった、超一流を超えた錬金術師としての、深い——正に深海のような——知性と、底知れなさがあつた。

しかし、その人類の超越者に対し、

「え、なんのことっすか？」

と返す、悪戯の成功した子供のような顔を、隠そうとして隠し切れていない横島。

「ふ、は、ははははははっ!!」

そして、堪え切れなくなつたように大声で笑い出すと、そのままロングコートを翻して夜の闇へと消えていくカオス。

「——行くぞ、マリア！ 今回はわし等の負けでかまわん！」

「イエス。ドクター・カオス」

彼は、自らの最高傑作である人造少女を共に、そのまま公園の外へと歩き出していった。

「ほーっほっほっほ!!これで20勝18敗1引き分け!私の勝ち越しねっ!」

「ううう…今回で並ぶ筈だったのいい…次こそ見てなさいよ令子おおお…」

「美神さーん。そんな死人に鞭打つようなことしなくてもー」

「甘いわよ、おキヌちゃん!! この前は私が黒星だったんだから、これぐらいはぜんっぜんOKよ! おーっほっほっほ!!!」

その後ろでは、臍をかむエミと、その背中を踏んで悦に入る美神、それを宥める幽霊少女の姿が会った。

「…くつくつく。面白い小僧じゃ。なあマリア?」

「その問いに・答えとなる・言葉を・持ちません。ドクター・カオス」

「ならば、こう問うとしよう。あの小僧に、また会いたいか? 我が娘よ」

「イエス。ドクター・カオス」

「わーっはっはっは!!!」

——とある深山溪谷の奥深く——

「どこでござるかああつ!!狐ええええつ!」

意味深な笑いを浮かべて走り去ったタマを追いかけてシロが見たものは——

「…狐が9匹いつ?!」

強烈な妖気を漂わせる岩を囲み、タマが9匹・・綺麗な円を画いて遠吠えを繰り返す様であった。

『くおおおおおおん——』

鳴き声共鳴しあい、その響きがあたりを満たすと共に、その中心から沸き出でる妖気はその密度と、量を増し、

『くおおおおおおおおおおおおおおん——!』

一際長いその鳴き声の元——砕け散った。

舞い起こる粉塵に視界をふさがれ、あたりに満ちたあまりにも強烈な妖気は人狼の鼻を狂わせ、シロに見えたのは、その衝撃に巻き込まれる9匹の九尾の狐と――

「狐ええええつ！」

その姿が、9本の光り輝く金色の十二カとなって、混ざり合う光景だけであつた。

第八話。

その日、GS美神除霊事務所で、美神は窓の外に降る雨音と、電話の応対に出ているおキヌの声を聞くとともに無しに聞きいていた。

「はい、美神さんは今日は靈的に良くない日だから、予定を変更したいとおっしゃってます、——どうもあいすみません」

天気予報では一日中振りつづけるらしい雨が事務所を包む。降りしきる雨に打たれ続けている事務所には、すっかり互いの存在に慣れた三人の姿があった。

事務所の内務係が板についてきたおキヌの後ろには、ソファーに寝つ転がり雑誌を読む美神と、その傍にぼけーっと立って外を眺めている横島。

おキヌが電話を置いたチン、と言う音にふと、特に意味も無く口から押し出されるようにして忠夫が美神に話しかける。

「雨が降ったから仕事は休みですか。大名商売やなー」

「この雨の中一晩中墓地にいたい？ギヤラも安いのに私はやーよ？」

別に責めるような雰囲気は無く、ただちよつとした雑談と言った風に話しかけた横島の問いに、やる気の欠片も見せずに答える美神。

大して面白くも無かったのか、ページの中ほどまでしか読んでいたない雑誌をテーブルの上に放り投げて身体を起こし、美神は大きく背伸びをした。

閉じられる事無く中を見せたまま放りだされた雑誌を拾い、代わりに電話が終わってすぐお茶を入れてくれていたおキヌが美神の前にティーカップを置く。

軽く礼を言つて一口啜り、会釈を返して今度は横島にも飲み物を届けに飛んでいくおキヌを見送りながら、美神は睨みつけるような視線の先には、分厚く暗い、雨雲。

「それに、今夜は私の靈感が疼くのよ。なにか事件が舞い込んできそうな予感がするの」
不敵な横顔を所員達に見せつけながら、美神は続ける。

「…大きくて、とても厄介な事件が、ね」

厄介、と言いなながらも美神の表情には不安は窺えず、むしろその事件を待ち望んでいるような様子さえ垣間見えた。

その答えを聞き、考える表情になった横島は、おもむろに美神に接近。

その鼻の頭を舐めた。

「なにすんのよこの馬鹿犬っ!」

アッパーで開いた喉への地獄突きから肘膝正拳三連コンボ。当然のごとく繰り広げられる阿鼻叫喚の地獄絵図ではあつたが、その中でも、横島は血塗れで不敵な笑みを浮かべている。

「……ふ、ふ、ふ。お、俺の行動までは美神さんの靈感も察知できなかったようですね……」
「……脳みそぶちまけなさい」

とつても馬鹿だった。

横島に冷たい絶対零度の視線を向けながら、美神は三割増に光り輝く神通棍を振り上げる。横島忠夫、絶体絶命の危機。その威力を察してか、床を舐めていた筈の忠夫はスパツと跳ね起きソフアーの後ろに身を隠した。

「ちよつ、まつ、美神さんそれは死ぬっ!?! おキヌちゃんヘルプーっ!」

「死んだら私のお仲間ですね♪」

「殺人事件を目の前に笑顔?!」

そして美神の神通棍が今にも振り下ろされようとするその瞬間、玄関のチャイムが機械音を立てて来客を知らせる。

横島を救ったのは、笑顔のまま美神を止めなかったおキヌではなく、突然の来訪者が鳴らした玄関のチャイムであり、その来訪者に彼は心からの感謝の念をソフアー越しに贈ったのだった。

——翌日、イタリア、ローマ空港——

「へー、いたりやつて空港つてところにそつくしですねー」

「…空港なんだつてば」

明くる日の昼下がり。早朝の便で東京を出発した事務所員たちの姿が、日本から遠く離れた地中海の国、イタリアの首都にあった。

「…これは夢だこれは夢だあんな馬鹿でかい鉄の塊が空を飛んだのは夢だったんだっ！

絶対にそうだ間違いない間違いないはずだあああああっ！」

「うるさいわよ」

物珍しげにきよろきよろと周囲を見回しながら、しかし平然としているおキヌを余所に、忠夫は初めての飛行機体験にちよつとトラウマっていた。

虚ろな瞳で空を睨みながら、ぶつぶつと同じ言葉を繰り返していたかと思うと、突然頭を抱えてわめき出す。

周囲の視線を集める事に恥ずかしくなった美神は、そんな田舎者に迷わず突っ込みの一撃を叩きこんだ。

初めての飛行機にとち狂った横島を、腰の入った振り下ろし気味のフックで元に戻す美神。

頭に直撃をいただいて、しばらく唸りながら蹲っていた横島の目に光りが戻る。

「…はっ！ ここはどこだ！ 外人のおねーさんがたがいつぱい?!ここは極楽かああっ!!」

「本当に逝つときなさい」

かなり本気の込められた一撃で、今度こそ正気を取り戻した横島であったとき。

「シニヨリータ美神！」

「どーも」

「おう、ピートじゃないか」

「ピートさん」

人込みでこつた返す空港で、美神たちに声をかけてきたのは、昨日、美神曰く「大きくて、厄介な事件」を持ち込んできた依頼人のピート。金髪の、彫りの深い欧州系で、どこか影のある整った顔を持つ美形である。

「お前も大変やなあ。あの後、こつちにとんぼ返りやったんやろ？」

「まあ、事態が事態ですから」

親しげに話し掛ける横島に対し、そんな彼にほんの少しの警戒心を持ちながら答える
ピート。

——ちなみに、犬飼忠夫、相手が美形だからってあんまりどうこう思ったりはしない。なんてつたつて実の父親が「アレ」である。

あの、凶悪面で、泣く子をひたすら謝ら「せた」という伝説を持つ犬飼ポチである。そのポチが、とつても優しい美人を嫁にしたのだ、しかも押し掛け女房で。

というのは今でも人狼の里、七不思議の一つのとなつているが、そんな凶悪な風貌の父親を持つ彼である。

確かに重要な要素かもしれないが、いまさら顔だけなんぞで自分の理想の嫁さんが簡単に手に入るものでもない、と幼少の頃からなんとなく悟っている。

しかも、だ。

彼が来客としてあの雨の日にこれ以上ないグッドタイミングで訪れてくれたおかげで死なずに済んだという、ある意味命の恩人であるからして、生まれ育った環境もあつてか、彼には結構恩を感じており、好感度も高く、悪い態度を取る事もない。

また見た目には同年代である事も手伝つて、それなりに親しさを籠めた対応を取っているのだ。

余談ではあるが、かの泣く子を謝らせる伝説を作つた後、その現場を妻に見られ、 3

日程生死の境をさまよい、さらにその後誤解を解くまで全く喋ってもらえず、その度に泣きながら長老宅でやけ酒と愚痴に付き合わされる羽目になり、長老がとつても迷惑したそうなの。

「え、ええと、お疲れでしょうが、時間がありませんのでまっすぐにチャーター便までお願いします」

乗り込むときに横島が抵抗したので一悶着あったものの、とりあえずぼろつちいプロペラ機に乗り込むご一行。

「あゝ令子ちゃん〜」

「令子ですって?! なんてあいつがここにいるのよ?!」

「げっ! 冥子にエミっ! まさか、協力するGSってあんたたちのこと?!」

外観どおりせまつ苦しいキャビンには、先日出会った式神使いのGSと、今は逃げようとした為気絶させられた横島を攫って、怪しい儀式に使おうとしたGSの姿があった。

——昨夜、東京・GS美神所靈事務所——

「今回の依頼ですが、貴方の師匠であるGS唐巢神父からの依頼でもあります。報酬はこの黄金の鷹の像、歴史的にも貴重な品です。それと、相手が相手なものですから、あなた方以外にも、何名かのGSに協力をお願いします」

「そんなに厄介な相手なの？ 私と先生の二人でもまだ足りないほどのの？」
「ええ。とても手ごわい相手です。…あなた方も十分に気をつけて」

それだけを言い残して、ピエトロ・ド・ブラドーと名乗った青年は、事務所のドアを閉め、雨の中外へと出て行った。

「ふーん。報酬については文句なし。さっすが先生、わかってるじゃない♪」
「へー、美神さんに師匠がいたんすねー」

「まあ、ねえ。それにしても、あの唐巢先生が私以外のGSに渡りをつけなきゃいけないほどの相手、ねえ」

手に持った人の二の腕ほどのサイズはある黄金でできた鷹の像を弄びながら、美神は眉を顰めた。

「すごい人なんすか?」

「ええ、凄腕よ。確かにお金に疎いし見た目は冴えないし馬鹿だしお金に疎いし頭は薄い上に金勘定が下手だけど。ただ、教会では悪魔祓いは認めていないから、ずっと昔に破門されたらしいけど、ね。神父っていうのも、通称みたいなもんよ」

「あはは…取りあえずお金に疎い方なのは良く分かりました」

「無茶苦茶言うなこの人は…」

半分くらいはボロクソに貶している台詞であったが、彼女の表情には負の感情は無く、むしろ苦笑いの方が大きく存在している。

何せ彼女自身の母親も凄腕として鳴らしていたGSであり、そんな母を見ながら育ってきた美神も当時からそれなり以上の自負を持っていた。

そんな彼女が——修行中は金銭面に不満を感じていたとしても——師匠として師事し、現在もその師匠が独り立ちした弟子を応援に呼ぶ程の信頼があり、美神もまた彼を凄腕のGSとして認める発言をする、そんな良好な関係を保っているのだ。

生き馬の目を抜くGS業界に置いて、同業者でありながらも子弟として信頼しあえる相手、それは彼女にとっても貴重なものであった。

「まあ、今のこの業界では、間違いないトップ10にはいる凄腕GSでしょうね」

「ふえく。そんな人が美神さんの先生なんですか、すつごいんですねえ」

「そんな先生が、こういう物を報酬にして、しかも複数のGSに声を掛けるって事は……こりや一筋縄では行きそうにないわよね」

だが、今まさにその師が応援を求めている。

その事實は、彼女にこの先に待ち受ける事態の厄介さを伝えていようだった。

「——まあさか、あんたがここに来るとは思わなかったワケ！」

戦闘態勢っ！

「——そりや、こっちの台詞よ。この前の痛手はもうなおったのかしら?!」

デフコンーっ！

「……うううううううううう！」

…決して、このように因縁の相手と一緒に仕事をしなければならぬ、なんて言う意味の厄介さでは無いと思うが。

ライバル同士が視線を争わせ、火花散る視殺戦を繰り広げる傍らでは、押し倒され、伸しかかられ、顔を舐められ、巻きつかれ、と式神達に一方的に親交を深められている、何時の間にか復活した横島の姿があつた。

彼も笑顔でそれらを受け止めている様子からすると、特に嫌がつている訳ではないようである。

幾度となく冥子が事務所を訪れるたびに繰り返されてきた状況にもすっかり慣れた横島は、手慣れた様子で彼らを優しく引き剥がし、長い胴体から抜け出し、小脇に抱えて、と手慣れた様子でちやつちやと動けない状態から離脱していた。

そして漸く落ち着いて、十二神将——流石に——部の大きな者達は出てこれなかったようだが——に一声かける。

「おう！ お前ら元氣してたか？」

——ぶるるっ

——ヒヒーン

——シャー

——ぼうっ

元氣に返事を返す彼らの頭を撫でてやりながら、忠夫も顔をほころばせていた。一方的とはいえ、好意を向けてくる存在に対し、嫌な感情を持つのは難しい。

「あらく、おキヌちゃん。こんにちわ」

「あ、冥子さん。今回もよろしくお願ひします」

挨拶の後も再度式神達に纏わりつかれる、ムツゴロウさん状態の横島を横目に、幽霊と式神使いの少女達は、そのほんわかとした空気に溶け込みながら、雑談に花を咲かせている。

まだまだ慣れの足りないピートを余所に、なんとも妙な空間が形成されていった。

「え……ええと、それでは全員揃ったようなので、出発させていただきたいと思います」とは言え何時までものんびりしている訳にもいかず、ピートの一声に、各人それぞれに座席に着いたり、シートベルトを締めたり、再び張り付いていた式神達を和やかに話す主人を余所に、勝手に一声をかけて戻ってもらったりと用意を整えていく。

「えー、ぴーとおくもつとゆつくりしていきましようよお」

「いや、そういうわけには……」

「……ふ、色ボケ女」

「……レズは黙ってるワケ」

「やるかつ?!」

で。が、一部はそんなの関係ねえ! といった様子でいがみ合い始めていたりもする訳

なんでも無い一言であつさりと再開された夜叉達の視殺戦に気おされ、思わず横島の背後に隠れるピート。

「おいっ! なんだあの二人一緒に声かけたんじゃっ!」

「そんなこと言われても、僕は先生の言われた通りに……!」

睨みあう二人を背景に、横島とピートはこそこそとしゃがみこんで小声で怒鳴り合

う。

その視線がゆつくりと背後の掴み合いを始めた美神とエミ、その間に割り込んで宥めるおキヌへと向かう。その向こうではシートベルトを締めて大人しく座席に座っていた冥子が今にも泣きそうになっており。

「互いに生き残れるように頑張ろう」

「協力、感謝します」

引き攣った笑顔で肩を組む美神とエミを尻目に、二人はがっちり握手をするのであった。

「ところでピート、この車は何処を走るんだ？」

「へ？ これは飛行機ですから、勿論飛んで……」

「馬鹿だなあピートは。空を飛ぶのは鳥だけで十分だぜ？」

冷や汗を流しながら必死に自己暗示を掛ける青年の虚ろな目を見て、ああもう駄目かもしれない、と彼は心から思ったそうなの。

その後も色々ごたごたは有ったものの、飛行機は無事、乗り換え地点の島に到着し、そのまま近くの港で借りた漁船に乗り換え、目的地ブラドール島へと一行はその足を伸ばす。

彼女らとしても、吸血鬼の活動できない昼間のうちにできるだけ接近し、あわよくばブラドール島内部に橋頭堡を作っておきたいという考えがあるからだ。

美神、エミ、ピートの三人は、漁船から降り立つと、海鳥の声一つない不気味な静けさに包まれた砂浜を警戒していた。

「…妙ですね」

「…ええ。見られてる感じはするのに、ここまで接近しても全く反応が無い。静か過ぎるわ」

ブラドール島至に辿り着いた美神達。しかし、彼女達のとおり、全く持つてそれに対するリアクションというものが無い。

「やーな予感がするワケ。いったん撤収して、ここは様子を見たほうが良いんじゃない？」

「しかしっ！こうしている間にも先生たちがっ！」

ある意味冷たいエミの言葉に、ピートは彼女に詰め寄り激昂した。が、その焦り混

じりの怒りを目にしても、エミは冷静な表情を崩さない。

突き放すようではあるが、先ず情報と退路の確保はやっておきたい、それは普通のG Sなら当然の思考であり、また彼女達はその道の一流のプロ。

命の賭け所を間違いたくは無いし、そもそも命を賭けるような事態に陥る事こそ失態でもある。

「で、突っ込んでいって私達もピンチって言う展開がお望み？」

「——っ！」

眼前に突き付けられた指と放たれた言葉、二つに動きを止められたピートは、それでも何かを反論しようとして、その口を開く事無く悔しきで食いしぼるに止めるのが精一杯だった。

「頭を冷やすワケ。そうカツカしてたんじゃ、まとまる考えも纏まらないワケ」

その悔しさに震える肩をぼん、と軽く叩き、歩みを進めるエミの横に、難しげな顔をした美神が並ぶ。

「…で、エミ。ほんとのところ、どう思う？」

ふと、なんでもないことのようにエミに言葉を投げかける美神。

「確かに、誘いにしてはあからさま過ぎるけど、だからといってこのまま引き返したん

じやGSとしての沽券に関する問題なワケ」

「…珍しく意見があつたわね」

だが同時に彼女達は普通のGSでは無く、己の能力に自信と誇りを持ち、傲岸不遜で大胆不敵、そしてそれに相応しい実力を持ったプロであり、その性格ゆえに罨と理解して食い破る事がはる事が大好きでもあつた。

「…それなら、やることは一つ、なワケ」

二人揃つて不敵な笑みを浮かべ、横目で睨み合いながらも、楽しそうな表情。

「まっ正面から、堂々と乗り込んで、逆に挑発してやるわ（ワケ）…！」

これから派手な悪戯を仕掛ける性悪女神のような笑顔であつた。

その頃、飛行機の中で再び錯乱して暴れ出そうとした横島は、美神に鳩尾に良いのを貰つて気絶し、砂浜で騒ぐ美神達を遠くに眺める留守番のおキヌと冥子の足元で、波に浚われそうになりながら白目を向いていた。

昼間だと言うのにその空間には日の光が一切入り込んでいなかった。真紅に染め上げられた上等な布の掛けられた、玉座に当たるその場所に腰掛けた人物の前に、二つの足音が近づいていく。

不遜なる侵入者を待ち受けていた城主の眼前に、古い記憶の中にある忘れられない顔に良く似た人物が現れた。

いや、似ているのではない。

長い年月による老化を重ねさせ、面影を残して、しかしその眼だけは相変わらず底の知れない知識と好奇心に彩られている。

「…ふん。懐かしい顔を見たかと思えば、お前か、『ヨーロッパの魔王』」

「ひさしぶりじゃな、夜の王」

「ふん。貴様に負けた以上、その名を語るには少々プライドが高すぎてな」

「ふむ、ならば吸血鬼ブラドール、と呼ぶぞ」

「それで、何のようだドクター・カオス？　機械人形を連れて、今度こそ我が存在を滅ぼしにでもきたか？」

男が立ち上がると共に、這い出すように彼から強烈な鬼気が吹きつける。

が、その只の人ならば心折れるか自分から気絶するようなおぞましい気配の中、老人

は何も気にしていない様子で口元を吊り上げた。

「いやいや、何——ちよつとした戯れじゃよ」

「失せろ。我を、『夜の王』であつた我を一度は退けた者として、今回だけは見逃してやる」

男は威圧を止め、再び玉座に腰掛ける。

が、老人は拒絶とも脅しともとれる言葉を受けながら、その余裕の表情は小揺るぎもしていない。

それどころか、久方ぶりの旧友に会つたかのような親しきで、腰掛ける男に話しかけた。

「まあ、そう急ぐでない。一つ、提案をしにきただけじゃよ。老いたりとはいえ、『ヨーロッパの魔王』と呼ばれたこのワシ、ドクター・カオスト、その最高傑作『マリア』が、お前の手伝いをしてやろうというのじゃよ」

「…何を企んでいる？」

眼前の老人が放つた言葉の意味を図りかねたか、男は眉を顰めて訝しげに声を低くした。

しかし、老人は黙して答えない。

返答を問うように、楽しげな表情を保つたまま、その手を握手の為に男に突き出した。

——とある深山幽谷の更に奥——

巻き上げられた粉塵は、しばらく漂っていたかと思うと、突如それまで禍々しい妖気を放っていた岩があつたところを中心にして渦巻き始める。

「……くそおつ……ここで見捨てては、寢覚めが悪いでござるなっ!!」

それまで呆然とその光景を眺めていた人狼の少女は、その中心に向かって走つていく。

「狐っ……生きていなくても返事をするでござるっ!!」

かなり無茶な呼びかけをするが、それに対する返答はなく、だがその声に押されるように、再び粉塵に動きが現れた。

「ぶわっ、なんでござるか!!」

もうもうと巻き起こる土煙、その中心に向かって妖気が渦巻き、勢いよく何かを形作つたかと思つた次の瞬間、その中心から大きな甲高い声が響く。

「よっしやああああつ!!!」

粉塵が吹き飛ぶと同時に、眩い光が差し込み、現れたのは、

「やったわ!! 私はやったのよ!! 九体に分かれた金毛白面九尾の狐の分御魂達の合流に成功し! その主人格を勝ち取った!! これで私の女の魅力にあの朴念仁もめろろよ!! 人間への復讐なんてバツカじゃないの正直どうでもいいわ!」

輝くナインテールを持った、少し釣り目の

「これであんたに馬鹿にされることも無いわ! どう、この私のなああいつすばでいは?!」
——年の頃13, 4の、無いっすバディをもった美少女であった。

「…あれ?」

「…ブフツ、確かに、無いでござるな…ブフォツ」

第九話。

「……ここまで入りこんだっていうのに、歓迎のセレモニーもなし？ 全く、ふざけてるんだか、余裕かましてるんだか……」

前進を決定した美神たちが舟を浜辺に固定し、そのままブラドール島唯一の村の入り口まで、その歩を進める。

だが、予想していた妨害どころか村民達の姿さえも見えず、ただ、ゴーストタウンが彼女らの目の前には広がるのみ。

「そんなばかなっ！ 先生！ みんなーっ！ 誰か居ないのかあーっ！」

ピートの声だけが、むなしく響き渡る。小さいながらも、百数十人は生活していたであろう村は、不気味な古城に見降ろされながら、今は只その抜け殻を其処に残すのみであった。

「今は下の村には住民はおらん」

「ポーンを5—7へ。ふむ、というと？」

「…む、なかなか厭らしい手を。なに、半分は我が僕となり、残り半分はこの島の地下に広がる洞穴に避難しておるのだよ。…ナイトを5—7へ」

「何故そやつらを放っておく？ ルークを6—9へ」

「いらぬ世話だ。領主として無理矢理に従えても構わんが…追い詰められた鼠に、この城を荒らされるのは癪に障る。それだけだ…ピシヨップを3—3へ」

「ふむ…ま、良かろう。慈悲深き王にの一時とはいえど臣下としては、尊重するに吝かではないわ。すると、あやつらがこの島の現状を知る手つ取り早い方法は、地下の住民達と合流する事な訳じゃな…」

一瞬の思考の後、クイーンの駒が老人の指につままれ、堅固な筈の陣の僅かな隙間を切り裂き、王の喉元に剣を突き付けた。

「合流する前に、退路を絶ち、大戦力を投入して一気に勝負をつけるとするか、の」

「ふん、チエックメイト、か。よかろう。このブラドー、気にはいらぬが、貴様の指示に従ってやろうではないか」

漆黒のマントを翻し、すでに日の落ちかけている空へ向かって窓から飛び出していく吸血鬼を見送りながら、

「……くつくつく。さあ、小僧。今度は、どのような悪戯を仕掛けてくるのか。——失望させてくれるなよ？」

嘯くカオスの前には、白いクイーンの後ろで、数手後に黒いキングをその槍で仕留める筈だった白いナイトの姿があった。

すっかりと日も暮れて、丸い月が空にその表情をはつきりとさせ始めた頃。

「おーっほっほっほ!!このGS美神にかかれば、吸血鬼なんてちよちよいのちよいよ!!報酬アップのおまけ付!さっさとしばいて、大儲けよっ!!」

「ねえくんぴーとお?追加報酬はいいからさあ、私の事務所で働かない?」

「いえっ! あ、あの、そのっ!」

「えーなー、えーなー。美人のおねーさまに誘われるなんて……なんだかとてもチク

ショー!!」

「れいこちゃん、これ、とつてもおいしいわよ〜?」

「あは、あははははは…」

麓の村では、とりあえず一番堅固そうな建物に籠り、ピートから相手が吸血鬼であること、この島の住民が全て吸血鬼か半吸血鬼であること、そして、相手がピートの実の父親であることを聞き、交渉の末追加報酬をゲットしたGS陣による大宴会が始まっていた。

「な、何なんだこの人たちのこの余裕はっ!」

周辺の空家から、日のあるうちに保存の利く食べ物と、上等そうな酒類あつという間に掻き集めて全てを持ち込み、壁や窓に板を打ち付け、玄関を全開にして簡易な「要塞兼罠」を作り上げた後、「何か」を見つけた美神たちはとりあえず鋭気を養うことにしたのである。

「これが日本に古くから伝わる由緒正しき『天ノ岩戸作戦』よっ!」という美神の一言から始まった宴会は、日が沈んでも全くその勢いを衰えさせることも無く続いていた。

「こんなんでもいいじょぶなんでしょーか?」

「ん〜まあ、大丈夫なんじゃね?」ここが相手の手のひらの上って事は、攻めるも守るもアドバンテージはあつちのもの。あんまり気を使っても、疲れるだけだつて」

上質のワインナーをかじりながらの横島の台詞は、あんまり説得力が無かった。

「それに、よく見てみるって。あの人たちはああ見えてもプロだぜ？ 酒なんて、景気付けの数口以上は舐めてもいいねーよ」

そういわれてピートがその視線を忠夫から騒ぎの中心へとやると、確かに——テーブルの上には、散々喰い散らかされたワインナーやらハムやらパンやらの残骸と——ホンの少しだけかきの減ったワインの入っているコップがいくつか。

「確かに……。横島さん、よく見てますねえ」

「わははははっ!! 美人ぞろいだからな! 眼福眼福ってやつよ! ——ちっ! あわよくば、と思っていたのに」

「何か言われましたか?」

「い、いや、なんも言ってるぞー! わははははっ!」

何故か冷や汗をたらしながらの忠夫の台詞に、不思議そうな目でそんな彼を見るピート。居たたまれなくなつたのか、

「ちよ、ちよと小便!」

「あ、横島さん!」

そのまま、忠夫は小屋から飛び出していった。

「うーん!! 今日はいいい月だなー」

降り注ぐ月光を浴びながら、気持ちよさげに背伸びをする。

「…里の皆、元気にしてっかなー」

そのまま、ふと月を見上げるも、その下に僅かに何か大きな建物が引つかかかってせつかくの月が台無しだ。残念だなー。そう思つて、しばらく月を眺めていた忠夫は、その大きな建物から小さな、その本来のものと比べれば多少は劣るが人狼としての鋭い感覚を持つて僅かな違和感を見つけ出した。

「…ん？　なんだ、あれ」

其処に意識を集中して、更に『よく見る』。

「んんんんんん」

その大きな建物、古ぼけた城の尖塔には――

「っ!!!」

――満月をバックに、全長2メートルはあるかという巨大なライフルを構え、こちらを狙う先日出会った鋼鉄の少女、『マリア』の姿があつた。

「なんだかしらんが、確かにあれはマリア。…げ、つてことは、あの変な爺も居やがるの

「かっ！」

が、彼の驚きも嫌そうな顔も当然ながら見えない機甲少女が、重さを感じさせない動作で巨銃を構えると、数呼吸の後にその銃口から閃光が見えた。

反動も無いかのように微動だにしないその銃の先からは、朦々たる煙が上がり姿を隠す。

直線距離にして約5キロ。その常識外れの超々距離から放たれた弾丸は、着弾の後で、長く響く銃声を聞かせながら、忠夫たちが乗ってきた舟を正面から左右に分断し、破砕する。

「げっ！ しまった!!」

そういつて小屋に向かって駆け出す忠夫の背後には、その眼を真紅に光らせた村人達の姿。

「あんのクソ爺碌な事しねえな!!」

「…間接部・ロック・解除。火器管制・停止。望遠モード・停止。試作型・ロングレンジ

ライフル・『ベヒーモス』・故障・再装填・不可。修理：不可——破棄。：通常モード・復帰します」

古城の尖塔部、頂上にて、その役目を終えたライフルを投げ捨て、その反動を抑えるために固定していた関節部を開放しながら立ち上がるマリア。

「…ヨコシマ・さん」

その人工知能に去来するのは、先ほど望遠で捕らえた青年の姿。

「…首尾は上々のようだの、マリア」

いつのまにか、階段も無く、マリアでさえ登つてくる為にロケットブースターを使わねばならなかった筈のその背後には、ロングコートを夜風になびかせるカオスの姿がある。

「が、マリアがそれを不思議に思う事も無く、視線は遠くに向けたまま、彼女は製作者
問いかける。」

「ドクター・カオス。質問を・よろしいですか？」

「ほう？わしの行動に疑問をもつとは。ええぞ、聞いてみる」

「なぜ・このようなことを？」

「決まっておる。おもしろそうだったから、じゃ」

「ノー。ドクター・カオス。その答えでは・納得・致しかねます」

「ふははっ!! さあてな、それこそ、あの『傍観者』ならば、こういうじゃろうよ——真実は、自分で見つけてこそ、価値がある、とな」

いつに無く饒舌な娘の問いに、愉快そうに、心底面白そうにそう答えるカオス。

「それとな、マリア。それは回路ではない。納得していないのは、お前の、『感情』じゃよ」

「その回答は・納得・しかねます」

「わーっはっはっはっはっは!!」

「むう。現代のGSとやら、なかなか侮れるものではない、か」

GS陣営が要塞として固めたその小屋は、もはや、ただの木の壁に囲まれた小屋でなく、呪術師エミと、GS美神の結界術により、まさに鉄壁の要塞として機能していた。仕方なく狭い入り口から入ろうとする操られた村人達は、その狭さの為人数の多さを活用できず次々と各個撃破の憂き目を見るばかり。

「大分相手の勢いも落ちてきたわね、もう一頑張りよ、ピート! エミッ!」

「はいっ！」

「そんなこと、いちいち言われなくてもわかってるワケ!!」

進入してきた相手に対し、ピートがその満月で絶好調の吸血鬼としての能力で攪乱し、美神ががっちりと浸透を防ぎ、エミが大技で一気に殲滅する。正に、軽装歩兵・重装歩兵・砲兵といった組み合わせである。

「眠れっ!!」

ピートが一気に懐に飛び込み、吹き飛ばし、攪乱。

「喰らいなさいっ!!」

開いた間隙を美神がさらに切り崩し、

「霊体！ 撃滅っ！ 波あああああっ!!」

無防備に崩れた相手をエミがその広範囲技能で仕留め続ける。

攻防戦は、相手の後方に無傷の王を残しながらもGS陣営の勝利で幕を閉じようとしていた。

「ふむ、やはり『夜の王』としての誇りは捨てきれんか。この期に及んで、最大戦力である自分自身を出し惜しみするとは」

その様子を、遠く離れた建物の上から眺めるカオスとマリア。

「最初から、己が飛び込んでいけば、あの程度の結界など、ものの5分と持たずに破れたであろうに」

どこか、物足りなさを感じさせる表情で、そう呟くカオス。

「残念じゃが…アヤツ程度ではここらへんが限界「ドクター・カオスっ!!」」

いつに無く慌てた様子でマリアがカオスに声をかけ、そのマントを引いたその瞬間、その目前を影しか残らないほどの速度で物体が通り抜けた。

生半な速度では無い証明のように、当たつてもいないカオスの頬を纏った衝撃だけで僅かに切り裂いたその砲弾は、そのまま闇夜に消えていく。

「ちいっ!! はずしたかっ!!」

「え〜そんなあ〜」

「まずい、冥子君、私の後ろに下がりたまえ!」

その声に慌てて聞こえた方を振り向けば、真後ろの木の枝の上に、いくつもの握りこぶし大の石を持って、投げつけたあとの格好で舌打ちをしている忠夫と、その木の根元

で背後に冥子をかばっている唐巢神父の姿があった。

「ほおう!! どうやってこの場所、いやこの儂のところまでたどり着いた?！」

それまでに無く、つまらなげな表情を、まるで「待ち侘びた物が届いた」といわんばかりの表情でそう尋ねるカオスに対して、迷惑そうに顔をしかめる忠夫。

「あほかっ!! あんたを追いかけたんじゃねえ!! 俺の鼻は、一度見つけた美人のねーちゃんを自動で追尾するんだよっ!!」

と、胸を張りながら大声でそう返す。

「動くんじゃねえぞ! もし動いたら、この石を満月の半人狼が思いっきりあんたに投げつける!」

「…ほう。で?」

「わからんのかああ! ものすツごく痛いにきまつとるやろがああ!!」

「……先程のは痛いじゃすまない速度だったような気がするんだがね、横島君」

種を明かせば、要塞作成の際、美神たちは地下へと続く扉を発見し、それが外へと続いていることを確認していたのだ。

その通路を利用し、相手をおびき出した後、背後から大将を強襲するつもりだったのである。

そして、作戦決行の最中、地下を移動中の忠夫と冥子とはある人影を見つけたのであ

る。

何故この人選になったかという点、冥子がもし密閉空間で暴走した日にはまずGS陣営は全滅。そしてあまり戦力を割きすぎると大将を落とす前に要塞が落ちてしまう為、忠夫が護衛兼宥め役としてその貧乏くじを引かされたのである。無論冥子本人には言っていないし（命が惜しい）、忠夫は分かっても（別の意味で命が惜しいので）逆らえなかった。

ちなみに、忠夫には「大将の近くで冥子に渡せ」と、本人にさえ中身を知らされずビツクリ箱が渡されている。使用目的は、押し知るべし。

その人影は、たまたまその戦いの音を聞きつけて偵察に出てきた唐巢神父であり、3人はそのまま鼻の効く「はずの」忠夫を先導としてここまでやってきたのである。

ちなみに、幸いにも合流時に弟子の考えを察した師匠によって、ビツクリ箱という名の最終兵器のカギは丁重に地下通路に投げ捨てられた。

「ふくむ」

「なんだよっ!!」

「小僧。お前、『ヨーロッパの魔王』を、ちと、舐めとりやせんか？」

「不味いつ！ 横島君、引きたまえ!!」

「えっ?」

カオスの言葉にいち早く反応したのは経験豊富な唐巢神父であり、その判断は間違っていないかった。が、流石の忠夫も、急に足場の少ない樹上からでは急な回避は難しい。慌てて身を捻った忠夫をあざ笑うように、マリアの腕から飛び出した銃が、彼の立つ木の枝を一発も外す事無く性格に射抜いた。

「うそーん!!」

落ちてなるものかと幹に飛びつこうとするも、其処にはロケットを噴かせて一瞬で飛び込み距離を詰めたマリアが、鉈を思わせる重厚さで足を振り回し、忠夫を蹴り飛ばす。

「目標の・排除を・確認。ドクター・カオス・お怪我は・ありませんか?」

「ふむ。火器管制に問題は無いようじゃの」

「イエス。ドクター・カオス」

土煙を上げて地面に落ちた忠夫を見下ろしながら、カオスはニヤリと口元を曲げる。

「まだまだじゃのう、小童。相手の戦力はキチンと確認しておかんとな?」

「いたたたたつ!! ちつくしよー!」

「大丈夫かね!? 横島君!」

頭を振り、木の葉を払いながら立ち上がる忠夫。かなりの勢いで地面に叩きつけられ

た筈であり、その前には鋼鉄の脚で蹴り飛ばされた彼であるが、マリアが若干手加減してくれた事と、持ち前のタフさで殆ど動きに支障は見られていない。

「全然平気つすけど、あんの爺いゝゝゝ!!」

先ほどまでカオスが立っていた樹上を見上げるが、すでに其処にその姿は無く

「それでは、諸君！また会おう！わーっはっはっは!!」

「ソーリー。横島・さん」

その声だけが、月夜に響いた。

そのあとは、とりあえず作戦どおりに美神達のすぐ近くで高みの見物をやっていたブラドローに再度奇襲を仕掛け、最強の火力、十二神将と、彼らと完璧な連携を取りながら、13番目の神将のごとく襲い掛かる、八つ当たり気味の忠夫と、凄腕GSとしての能力を存分に振るいまくった唐巢神父の手によって、臣下（カオス）がとつくに逃げて支援が来ない事を知らない王様は余裕をぶっこいて見事に手痛いダメージを受けて、これで一気に流れが傾いた。

全戦力を投入し、全くの無防備となっていたブラドローは、それでも吸血鬼らしく強大であり、己と相性の悪い十字教の神父と、他12匹+1人に対し善戦する。

が、ブラドローの影響下に置かれていなかった村人達が唐巢神父の事前の指示によつて美神達に合流し、ブラドロー支配下の村人達を突破してきた本陣のGS達が合流。

最終的には集団リンチのありさまとなり、流石に沈黙。そのまま息子のピートによつて、その影響を取り除かれ、島には、平和が戻つたのであつた。

「ありがとうございます！ これも先生とみなさんのおかげです!!」

「いやいや、全ては神のおぼしめし、だよ」

「どーでもいいけど、ちゃくんと、追加報酬の方、おねがいますね、先生♪」

「…あいかかわらず、君は師匠への尊敬って物が足りないのだね」

——とある深山幽谷の奥にて——

「ひっく、ひっく」

「あくなんとというか、元氣を出すでござるよ?」

「ふえくくん」

「ああああああ、泣くなでござる!!まるで拙者が悪いみたいではござらぬかあつ!!」

「だって笑ったじゃない! あんた笑ってたじゃない! わたしのないすばでいがく」

「はあ…そもそも、いくらないすばでいとやらになつても、拙者の兄上は渡さんでござるよ」

「はあ? あんたに許可もらう必要があると思つてんの?」

「やはり嘘泣きか。狐は狐でも、女狐でござったか」

「「……………」」

どつとはらい。

第十話。

人狼の里、鍛冶場にて。

昨夜から響いていた槌と鋼の音はすっかり鳴りを響め、今は砥石と刃の擦れ合う音がその空間を占めていた。

櫛掛けで一心不乱に短い刃物を砥石で研ぐ犬塚と、こちらは刃物の柄であろうか、木屑を吐息で吹き飛ばし、最後の仕上げにやすりで形を整える作業に入った犬塚、その二人が居る。

ややあつて、大きく息をついた犬飼は顔を上げ、満足げにその短刀の艶やかな刃に顔を映した。

「…よし、できたぞ」

「ほっほー、見事な仕上げじゃないか」

その声を聞いて寄つて来た犬塚の手には、何やら細いノミと筆が握られている。先程まで彼がいた所を見れば、そこには途中まで数文字削られた柄があった。

「む…、昨日の不埒者は腕はたいしたことは無かったが、こうして見れば獲物だけは業物だったようだな」

「まあ、月夜に刃物を振り回しながら人狼の里に突っ込んでくるからには、そりや何かしらの自信はあったんだろうけどな」

鍛冶場の隅にはどうやらその短刀の元半分であったらしい柄付きの日本刀が転がっている。

途中から見事に折られたそれは、かつての禍々しさを失いつつも、しかしその刃物としての切れ味は残っており、まだまだ切れるぞと主張しているようでもあった。

「昨日の剣客は、久しぶりの真剣勝負で少々楽しめたとは言え、無手で放置は流石にやり過ぎたか？」

「武器を無くした途端に気絶したし、しゃーあるまい。あの程度の腕じゃー麓までの駄賃にはならんなあ」

ちなみに件の客人こと不埒者、気が付いたら一晩中山中を駆け廻っていたようにボロボロの服と、歩く事もままならない程の筋肉痛で、今も大量の疑問符を浮かべながら、放置されていた山道を必死の形相で下山中である。

その後、怪しい日本刀を全く警戒せず握ってしまつて操られた上に、暴れるだけ暴れて姿を消した彼を発見した某地域密着型反社会的暴力組織の包帯だらけの上司や同僚、頭頂部だけが綺麗に剃られている組長に、訳の分らぬまましばらく追いかけてまわされる目に会うのだが、まあ、余談である。

「そう言う事だ。さて、勢いで作ってしまったが、これ、どうする?」

「…バカ息子に押し付けるか」

「親馬鹿だなあ。素直に様子を見に行くって言えば良いじゃないか」

「何の事だ」

「さーて、な?」

横目で犬塚を睨むも全く答えた様子が無いのに鼻息一つ。

犬飼は素知らぬ顔で短刀を布で拭い、そのまま適当に布で巻いて立ち上がる。

「…まあよい。行き先は百合子嬢から聞いておる。行くぞ犬塚」

「さてさて、いま仕上げるから」

そう言い残し、先程まで作業していた場所に戻った犬塚は、犬飼の手から抜き取った刃物を柄と合わせ、その握る部分に薄くノミを当てていく。

そして最後に彫った部分をなぞる様に筆を動かしていくと、只の墨に見えるそれは、まるで金属に染み込むようにノミの跡を彩った。

「よし、完成」

それを覗きこんだ犬飼は、感心した様子で頷く。

「『しめさば丸・まあくつう』…なかなかない名前ではないか」

「だろ」

元妖刀、現包丁のそれを和紙に包んで箱に入れると、懐に突っ込んで鍛冶場を出て行く男二人。

…そして、それを離れた物陰から観察する二人の少女の姿があった。

「聞いたでござるか！ 父上たち、兄上のところに行くつもりでござるよッ!!」

「まあ、あの犬飼っておっさん締め上げる手間が省けたわね」

「死ぬ気か狐」

「…えっ？ 今まで見た事無いマジ顔なんだけど」

「おっと、どうやらもう出発するようでござるな、行くぞ狐っ」

「ちよ、待ちなさいよ、そんな本気の声言われたら怖いじゃないっ」

その日、人狼の里から二人の人狼と、頭に木の枝を括り付けた人狼と狐の少女が出て行ったのを、太陽だけが遙か天上より見つめていた。

場所は変わって、こちらは都会のとある地下。

縦横に走る下水道の通路である。

「くっさいなー。もう鼻が馬鹿になってますよ」

「あんたにはきつつい依頼だったかもね。なんてったって下水道が除霊現場なんだから」

東京の地下深く、まるで高速道路のトンネルのような、人が歩けるほどに整備された下水道。そこにはおなじみの事務所のメンバーの姿があった。

『最近になって化け物が姿を現し、職員が多数被害にあった。早急に退治して欲しい』

要約すれば、今回の依頼はそういうことであった。除霊対象の正体は不明。正確な出現位置も不明。その強さも不明。しかし、できるだけ早くやって欲しい。

当然のごとく危険度は高く、しかし報酬も大きい。美神は、その依頼を聞くと迷う事無くOKを出し、その日の内には下水道へと潜った。

が、その広い事。

発見された場所まで行き着くにもそれなりに時間がかかり、その間中廃液や生活排水の匂いの只中にいた横島の鼻は、すっかり麻痺して使い物にならなくなってしまった。

「はああ」

「どーしたんですか、横島さん」

「いんや、なんでもないよ。それより美神さん。そろそろ化け物とやらが目撃された地点ですよ」

「ええ。…来るわよ!」

美神がその歩みを止めるとほぼ同時に、

「死ねやあ!」

化け物が水中から姿を現す。下水道の水を撒き散らしながら、しかしその匂いに負けないほどの腐敗臭を放つ妖怪、西洋で言うゾンビそのものの外見をした敵だった。

「雑魚が面倒くさい事してくれるじゃない! いいかげん、極楽へ行きなさいっての!!」
いつもの不定形の悪霊と違い、腐りかけ、変貌した元人間の肉体を持つている。

ネクタイをし、元はスーツであつたろう襤褸切れを身に纏つたその姿は、かつてはどこかの家庭の良き夫だったかもしれない、頼もしき父であつたかもしれない彼が、既に入人を襲う化け物へと堕ちてしまった事を示しているようだった。

何処で手に入れたのか、そいつの体の一部とでも言うのだろうか、えらく妖気を放つ金属バットをもっている。

啖呵を切つた美神は、輝く神通棍を振りかざし化け物に向かつて、一気に振り下ろす。

「げは、げはははははっ！」

しかし、化け物はその手に持った金属バットでその一撃をあつさりと防ぎきる。

「かつたあああいい!! 何よこいつ! いつも奴らとは一味違う!」

「援護します、美神さん!!」

そう叫ぶと忠夫はおもむろに懐に手を突っ込むとなんとなく、輝いているようにも見えないことも無い石ころを取り出した。

「くらえい! 唐巢神父お手製の聖水に漬けこんだ、拾った石を! 人狼・だいなみつく・すとれーとお!」

勇んだ横島の取った行動は、どうやら前回の吸血鬼の事件の際に学んだ投石だった。

しかし、綺麗なピッチングフォームでそれを投げた横島の眼に、往年の超有名打者のような一本足打法で待ち受けるゾンビが見えた。

バットが一閃した。

次の瞬間、横島の額から凄く良い音がした。

「はう! ……いたたたた、こんちくしょー!! 人の新技あつさり破りやがってー!!」
「げはげはげはげはげは!!」

忠夫の手から凄まじい速度で投げ放たれた『人狼・だいなみつく・すとれー』とや

らは、あっさりと強烈なピツチャー返しとなつて忠夫の額に直撃する。が、コンマ2秒で復活する辺り、その威力もタカが知れているのか、忠夫の耐久力が非常識なのか。

「馬鹿やつてんじやない!! しょーがないわね! ちよつともつたいないけど、これでも喰らいなさい!!」

そういつて美神が取り出した破魔札には、燦然と輝く一千万の文字。

高笑いしていたゾンビが気付いた時にはもう遅かつた。

靈気を籠められ飛んでくるそれをよけるには時間が足りず、さりとて迎撃するにも態勢が悪い。

「ぐばっ?!げはあああつ!!」

そのまま破魔札の巻き起こした光と爆発に巻き込まれて、その姿を消す化け物。

もうもうと上がる白煙の向こうに、上半身だけになって動きを止めたゾンビが見えた。

「ふう……しとめたみたいね」

「——美神さん! まだですっ!」

が、しかし、ほんの少し息をついた美神を嘲笑うように、彼女の背後で水しぶきが上がり、その散らばる汚水が消えぬ内に、臭気を撒き散らす何かを吐きだした。

るマネージャーの——

何かがゾンビの脳裏に溢れかけ、しかし完璧なタイミングで振られたバットに手ごたえは無かった。

そして、次の瞬間、全部吹き飛ばす様な痛みが股間から頭頂部まで突き抜けた。

ボールではなく歪な形をした石ころは、横島の手によつてフォークとはとても言えない、まるで生き物のような動きで見事に化け物のバットを搔い潜り——まあ、その、いわゆる『男の急所』に直撃したのである。

「……………ふおおおお……………」

切ない声を上げるゾンビの脳裏に、あの日の記憶が蘇る。

あの夏、自打球を食らつてベンチに引つ込んだ彼の背中を優しく叩いてくれたのが、何時も家で笑顔で出迎えてくれる妻だった。

早く帰ろう、帰って、遅くなつたと謝らなくては——

その瞬間、復活した美神が叩きつけた破魔札で、彼の記憶と思い出は、自らを縛つていた怨念と共に儂く散つて、その最後の思いを誰にも知られる事無く逝つたのだった。

「——ということがあつたんですよ」

「…横島君。もーちよつとましな使い方は無かつたのかね？」

「いやー…あつはつは…」

次の日、唐巢神父の教会には、額に打撲の治療痕がある美神と、その助手、横島忠夫。そして、何故かこちらにも少々腰が引け気味の唐巢神父とその弟子、ピートの姿があつた。やはり、悪霊全体が少しづつ強くなつてきているようだね」

「…殺虫剤と害虫の関係ですね？ 先生」

「その通りだよ美神君。やれやれ、まだまだ修行が足りないということか」

例えば、ある細菌に良く効く薬があるとす。しばらくの間その薬で細菌は殺すことができるだろう…だが、もしもその薬に抵抗できる細菌が現れたら？

繰り返される人の知恵と極小生物の馳ごっこ。

幾つか対抗策はあるが、単純にして、だからこそ難しい答えの一つが、より強い薬を持つてその細菌に当たる事だ。

「その事ですけれど、先生。『妙神山』への紹介状…頂けませんか？」

「…美神君、君にはまだ早すぎる」

「あら、こつこつ修行を続けて…また相手に負けそうになったら修行するんですか？」
「…むう、しかしだね」

「私達のお仕事は…そんなに甘いものでは無いことは、先生もよっくご存知でしょ？」
「下手をすれば命に關る！」

瞳に不敵な輝きを宿し、美神はその言葉で舌先にのせた。

「あら、そんな事、やってみなくちゃ、わからないわ♪」

シリアスな光景を見せる師弟の背景では…

「あれ、ピートじゃないか、お前エミさんとこ行ったんじゃないのか？」

「僕は先生の弟子ですってば!!」

「ほーか。そーいう割に、あん時は少し靡いてただろ？」

「…だつてあの人のところに行ったら、「血を吸つて〜」とかなるでしょう？ 僕は吸血

鬼では無く、GSとして修業に来てるんですから…その、ですね。分かるでしょう？」

「…まあ、日ごろの行いといふかなんというか」

顔に縦線を入れたピートと、自分の日ごろの行いに自覚が無い忠夫がのんびりと会話を楽しんでいた。

時は少し流れ、GS美神除霊事務所の面々は、とある山、霊峰とされる山にいた。

妙神山。世界でも有数の霊格を誇る大霊山であり、神と人間の接点の一つといわれる霊峰である。その山中には、霊能力者間では有名な修行場がある。

その存在を知る者達曰く、「強くなつて帰ってくるか、死ぬか」

その修行場に続く一本の細い道。いや、道というのもふさわしくない。まさに、断崖絶壁の崖にできた一筋の亀裂。彼女達は、現在、そこをひたすらに歩いている途中であった。

「な、なんちゅーところですか、ここは」

「あんたは落ちてもいいけど、荷物だけは落とさないでよ」

「…落ちるときは横島さんの命と荷物、一緒に落ちそうですね」

「不吉なこと言わんといってくれー!!」

彼らに緊張感を求める事自体が間違っていたようだ。

そうこうやってるうちに、目的地へと辿りつく。

「見えたわよ」

「ふええ〜。おつきな扉ですねぇ」

「へんな顔がついてるけどね」

木造の、古めかしくも威厳を放つ、いかにもな扉の前で、何気なく会話する彼女らの間に

「誰が変な顔じゃいつ!!」

「うひゃあ!!」

突然の怒声が鳴り響く。驚いて飛び上がるおキヌと忠夫を尻目に、美神はその声の主達に話し掛けた。

「修行希望者よ。さっさとコ・コ、開けていただけないかしら?」

「我らはこの門を守る鬼。我らの許可なくして、この門を通る事まかりならん!!」
その声が終わるか終わらないかのうちに、内側から、その扉が開かれた。

「あら、修行希望者の方ですか?」

「…5秒と持たずに開いたわよ?」

「小竜姫さまあつ!!」

扉を開けて顔を覗かせたのは、二本の角を持った、いささか妙な服を着ていたが間違

いなく美少女であつた。

瞬間、風が吹いた。

「——嫁に来ないか？」

「うおっ!!」

「…はあ？」

「美神さん、私、ぜんっぜん見えませんでしたよ、今の」

「…こんなところだけレベルアップしなくてもねえ」

もはや人の目どころか、おそらく鬼の目にさえ止まらなかつたであろう速度で動いた忠夫は、塵一つ舞い上からせずに少女の前に慣性の法則さえ無視しつつ停止すると、とりあえず口説いてみた。

頭を抑えつつ忠夫が——驚くことに、小童姫を口説き始めると同時に地面に落下した——落とした荷物の中からおもむろに神通棍を取り出した美神は、とりあえず、打撃音が水つぽい音を出すようになるまでシバキあげた。

「…えー。私がこの修行場の管理人を務めます、小童姫と申します」

「小童姫さんつすか!! いいお名前ですね!! 嫁に来ないか？」

「何者ですか、この方は」

「…只の「ぶあか」です。今片付けます」

真つ赤に染まっていたはずの横島が、瞬時に復活し、性懲りも無く小竜姫の手を握り、口説こうとしたところで再び美神の躰が振るわれる。

決め顔のまま沈んでいく彼の手をどうしたものかと握る、ちよつと困った表情の小竜姫を目に焼きつけながら、そのまま横島の意識は暴力の海へとなすすべもなく飲み込まれていった。

そして、再びぼろ雑巾と化した忠夫が眼を覚ましたときには、美神と管理人を名乗った小竜姫どころか、心優しき幽霊少女の姿さえあたりには無く、代わりに何故か扉の顔に張られた巨大な札があった。

「しくしくしく」

むせび泣く2鬼の声と、開かれた扉。むさくるしいふんどし姿の首なし石像がこけている光景だけが広がる中、流石の横島もちよつとリアクションに困るのだった。

「だれかく。おキヌちゃん。美神さん。小つ竜つ姫いさあああんっ!!」

誰もいない中で復活し、とりあえず泣きが鬱に変わった鬼達を無視し、扉の隙間から内部へと侵入する。なぜか先ほど出会った角付美女の名前を2倍近く大きな声で叫びながら、辺りを見回す忠夫。

「誰かいませんか。特に小つ竜つ姫いさあああんっ!!!」

「あうち! …石ころ?! …そつちですね〜!!」

突然、頭に飛んできた手のひらほどもある石を見つめると、とりあえず飛んできた方向に当たりをつけ走り出す忠夫。

「今行きますよ小竜姫さーん!!」

と、視界に何かを振りかぶって投げようとしている美神が見えた。

打ち出された岩はそのまま横島の顔の横を通過していく。

「わざわざこんな所まで来て恥晒すんじゃないわよこの馬鹿犬っ!」

美神の怒声とともに、今度は大人の頭半分ほどの石が頭上から降ってきた。

「お、おういえ〜」

流石に警戒していなかった真上からの一撃はきつかったのか、そのままふらふらと崩れ落ちた横島。

その犯人と思われる幽霊少女は、ニコニコとしながら自分が落とした石の後を追いかけるように上空から下りてくる。

「ちよつとやりすぎちゃいました♪」

「…お、おキヌちゃん？ 何してるの？」

「はい♪ なんですか♪」

「なんでもないわっ!! ええっ！ 全く問題なしよッ!!」

某幽霊少女がほんの少しずつつ黒い何かをその背後からゆらゆらと溢れさせながら半人狼を回収に向かう。

それを見送るんだか冷や汗だらだらなの2人であった。

「こほんっ。えー、気を取り直して私がこの妙神山の管理人「小竜姫」と申します」

「えー…つまり貴方が先生から聞いてる竜神様ってわけね」

「先生？ どなたかの紹介ですか？」

その問いに懐から封筒を取り出し、美神は小竜姫にそれを手渡す。開封し、小竜姫はそれに目を通すと、納得した様子で頷いた。

「唐菓…ああ、あの方。ここ最近の修行者の中では、人間にしてはかなり筋の良い方でしたね」

「OKかしら？」

紹介状を封筒に戻すと、それを懐に収め、小竜姫は先頭に立って歩き出す。

「いいでしょう。こちらにどう」あー、死ぬかと思った」ってなんであれでもう立ち直ってるんですかっ!!」

おキヌ引きずられてその辺りにうち捨てられていたはずの忠夫が、何時の間にか頭を振り振り立ち上がり、もうダメージの欠片も無い様子で辺りを見回していた。流石にこの動く非常識に慣れていないだけあって、反応が新鮮である。

「あー、あの子半分人狼の血が入ってるからよ、きつと」

「へえ、珍しい…じゃなくって、それにしても非常識すぎますっ！それに、純血の人狼なら、昔、幾人か修行に来られましたけど、あんな事ができた人はいませんっ!!」

「えっ？」

そう言われて考えてみれば、確かにあんなだけタコ殴りにしたり、とんでもない衝撃を受けたりにしているにもかかわらず、何時の間にか復活している。今はおキヌの笑顔に怯えながら「もうしませんもうしませんもうしません」とエンドレスで土下座タイム中であるが。

違和感に近いしこりを心に覚えながらも、まあいいか、所詮は横島だし、と美神はその思考を放り投げた。

「…まあ、いいですよ。どーせただの荷物もちだし」

「…へ？ 人狼の血を引く者が、荷物持ちですか？」

本日2度目の小竜姫の呆れ顔を拝むことになる美神。

「だって、体力とすばしっこさ『だけ』はあるけど、霊能力が無いんじゃない？」

「あ。ひどいなー美神さん」

「…人狼が、霊力を持たない？ そんな訳無いじゃないですか」

「へ？」

「彼らは、そういう姿を取っていても『妖怪』なんですよ？ その中でも稀な霊力を使う…というか、霊力を元にして存在しているのですが…彼らにとって霊力とは己の存在エネルギーそのもの。いうなれば、体を動かす為の力の延長線上にあるものです」

「あー。俺は混血だから「それでもですー」…はい」

人狼に限らず、生まれついで妖怪、神族、魔族等は、成長や使用頻度による程度の違いこそあれど、正に「歩く」「走る」とそれと同レベルで霊力の使い方を覚える。それが彼らにとつての生存手段であり、周囲に危険の多い環境であれば更にその「使いこなせる」程度が大きくなる。

人狼の一族であっても、その体は完全に肉体化しているわけではなく、ある程度霊的要素に基づいた存在のしかたをしている。だからこそ、霊力不足になれば獣に姿を変え、時には自分の意志で半獣人形態への変化ということが出来る訳である。

彼らにとっては成長によって靈力を制御できるようになる事と、それによって『入れ物』をある程度変化させる事は自然な、出来て当たり前な事であるのだ。

また、基本的に「か弱い」人間の血が人狼の血に打ち勝つといったことも考えにくく、例え半人狼と言えど、どこぞの半吸血鬼同様、その人外としての能力、少なくとも靈波刀、もしかすれば半獣人化を使えるはずであり、どちらかというところ『妖怪寄り』な存在の仕方となるはずである。

「へへへ」

「へへへって、あんたのことでしょ」

「いやだって、半人狼なんて俺以外に知らないし」

小竜姫と美神は、そろって頭を抱え込む。

「でも、なんとなくその理由分かるような気がします」

「……で？」

「親父、血まで尻にひかれてたんやなあ……」

「……んなわけあるかい（ありません）」

二人は揃って否定する物の、彼の故郷で話せば間違いなく全員が納得するであろう答えなのだが。

若干一名（父親）は否定するかもしれないとは言え。

「えくと、今回の修行者は美神さんと其処の男性…横島さんですね」

「いいえ？ 私だけよ」

「へ？ 横島さんは修行受けられないんですか？」

「さつきも言っただけど、只の荷物持ちだし」

「…素養はあると思うんですけどねえ」

不思議そうに横島の顔を覗き込む小竜姫。

「嫁に来ますか？」

「……えいっ」

可愛らしいとも言えるような声で、小竜姫は腰の神剣を抜き打ち様に不意打ちで薙ぎ払う。

「うわたあっ!!」・

が、それが横島の首の皮一枚を切って止まるよりも早く、上下から挟みこむように閉じられた掌で抑え込まれた。

「ほらほら、私の剣を白羽取り出来るところとか」

「無茶なことせんでくださいっ!!」

「残念ですねえ」

いきなり真剣で切りかかる辺り、この女性も見た目通り浮世離れした所があるようだ。

「とりあえず、修行者の方はこちらへどうぞ……」

そして一行は修行場へと小竜姫の誘導に従い歩きだした。

途中で、ふと思ひ出したように小竜姫は修行を受けにきたという美神に忘れていた質問を投げかける。

「ところで、今回はどのような修行をお望みで？」

「一気に短期間でバーンと強くなれるやつ！　ちまちましたのは性にあわないわ」

「クスクスクス……威勢のいいこと。それでしたら、今日一日で強くして差し上げましょう。そのかわり——強くなってここを出るか、それとも、死ぬか。そのどちらかになりますか？」

脅しのような小竜姫の言葉を、だが美神は眼を逸らさず傲岸不遜に笑って見せた。

「私は美神令子よ！　例え地球が吹っ飛んでも、私だけは生き残って見せるわ！」

呆れるほど傲慢で不遜なセリフだが、不思議と彼女には良く似合う、と小竜姫は感じて、同時にき止めるだけ無駄だと理解し苦笑いを浮かべる。

「結構です。ではその扉をくぐって中でお待ちください」

そういう残すと、小竜姫はまるで銭湯のようなドアをくぐってその先に進んでいく。

「おキヌちやーん！ 横島君はどうー?!」

「ええつと〜! まだピクピクしてます〜!!」

「覗かれる心配だけはなさそうねー」

着替える前に何をしたかは定かではないが、覗かれる以外に忠夫の命が心配では——
いや、心配する必要性を感じられないのは日ごろの行いと言うやつだろうか。

「あ、悪夢のような光景やなあ」

いつものごとくやっぱりあっさり復活した忠夫が、幾分しよんぼりしながら扉をくぐると、背後には扉しがなく、辺りにはストーンヘンジのように巨岩が乱立しており、その中心に立つ小竜姫、そしてその前方でなにやら法陣の説明を受けている美神の姿があった。

「要するに、この法円を踏めば…」

「はい。貴方の「影法師」つまり、貴方の霊格、霊力、その他様々なもの『のみ』を取り出した貴方の分身が生まれます」

「そして、その「影法師」を鍛えることで、直接霊力そのものを鍛えるって事ね、りよー

かい」

美神がその法円を踏むと、一瞬後には美神の2倍ほどの身長を持った女性型の、体を黒いボディースーツで覆った複雑な模様の彫りこんである槍を持つ、式神のような「影法師」がその姿を現す。

「これが私の……」

「ええ。貴方の影法師です。それでは早速修行を開始しましょうか。——剛練武、出ませいっ!!」

「ウオオオオオン!!」

小竜姫の一声に答えて出てきたのは、体中を岩で覆った、というか、岩でできた体をもった一つ目の歪な人型をもつ存在であった。

「先ほども言いましたように、負ければ命は無いと思ってください。そのかわり、勝てば新たな力を得ることができるようでしょう」

あくまでも事務的な口調でそう美神に話し掛ける小竜姫。対して美神は「オール・オア・ナッシングって奴ね。上等っ!」

その眼に戦意を乗せ、怯む所かやる気を溢れさせながら影法師を岩の怪物に向かつて突撃させる。

「まずは先制、いただきっ!」

が、勢い良く繰り出された槍の穂先は、しかし、耳障りな音を立ててその体を構成する岩に防がれた。

「……くくくッくうーっかったくくく。やっぱ正面からじゃ無理みたいね」

「おや、もう気付きましたか」

「当ったり前でしょ？ どうみても、重装甲、大質量って感じじゃない！ そんなでこの手のタ
イプは……」

間合いと空気を叩き潰しながら迫る剛拳。当たれば負ける、受け止めても良くて武器破損、悪ければ腕まで持っていかれるだろう一撃だった。

その大質量で構成された繰り出される右拳を掻い潜り、懐に飛び込む影法師。そのまま相手の膝に足の裏を乗せ、跳ねるように飛び上がり——

「どうせこの辺りが弱点でしょっ!!!」

生々しい音と共に、今度はその槍の穂先が一つ目の巨人の、その眼を抵抗なく貫いた。
「よしっ、楽勝楽勝!」

「わあ、流石美神さん!!」

岩の怪人が崩れ落ちると、その体を構成していた岩が微粒子となり美神の影法師に纏わりつく。

一瞬後には、ボディースーツの上から新たな鎧を身に纏った戦乙女が存在していた。

「へえ。こうやって力つていうのをもらえるんですねー」

「ええ。美神さん、これで貴方は今までとは比べ物にならないほどの靈的防御力を手に入れたことになります」

「ふーん、ま、あのくらいなら何とかなるわね」

「…やっぱり弱点分かりやす過ぎましたか。次からは見た目も重視してみましよう」
何気に次からの修行者に対してのレベルが上がったようである。

剛練武の残滓が完全に掻き消えると、小竜姫は次の試練を呼び出す。

「禍刀羅守っ！ 出ませい！」

しかし、先程のような光が起きる事も無ければ、何かが出現すると言う事も無く。

「…あれっ？」

「「……………」」

「禍刀羅守っ！ 出ませい！」

ただ、沈黙が広がった。

「……」

「ち、ちよつと待つて下さいっ！ 禍刀羅守ーっ！ 出ませー！！」

だが、何も起きない。

「あ、あれ？」

「どーしたのよ、小竜姫様？」

「い、いえ私にも何がなんだか……」

「しつかりしてよねー。全くこれで竜神だつて——」

「美神さんっ！！！」

「え？ つぁ！！！」

小竜姫の声に、さっきの様に修行場の中心から出てくるものと思つていた美神は、周囲を取り囲む巨岩の影から突如飛び込んできた4本の刃でできた足を持つ昆虫のようなソレに、背後からの不意打ちを受け、深いダメージを負う。

「へえ、宮本武蔵のつもりかねえ。真つ正直なばかりと思つていたけど、なかなかやるなー」

「横島さんっ！！」

「いや、だつてさー」

「「だつてさー」ではありません!!これはっ!」

「命をかけた真剣勝負なんですよ?」

「分かっているなら、何故っ!!」

傍から見れば卑怯な行為に、激昂する小竜姫を余所にあくまでも平然とした忠夫。その瞳には、非難する色は無い。

「これでも人狼の端くれ。ソレくらいのごことは当然です」

「それは、でも美神さんは只の人間なんですから…」

「それに、いっちゃ悪いけど小竜姫さん。あなた、あの人のこと全っ然知らないっすから」

「当たり前ですっ!! 今日出会ったばかりなのですよ!」

「あの人は、ただの人間だけど超一流のGSで、相手がこつちを殺す為に汚い手でもなんでも使ってくるような所で平然と生きてて、そんなでもって…やられたことは、千倍にして返す人なんすよ」

横島の前で、美神が膨大な霊力を纏いながら立ちあがる。

その表情に不満は無く、むしろ自分に痛撃を与えた相手に対する怒りが燃え上がって

いるようであった。

「よっくもやってくれたわね！ この蟻螂もどきっ!! この痛みは、高くつくわよっ!!」
こみあげる笑いを嘯み殺しながら、美神の台詞を聞く忠夫。

「さて、小竜姫さん。一つ提案があるんっすけど」

「…なんですか?」

良くも悪くも真つ直ぐな性格なのだろう。

納得がいかない! という顔をしながらも、とりあえず聞き返す小竜姫。その後ろでは、やはり結構なハンデとなったのか、いまだ動きに精彩を欠く美神の影法師を、少しずつ、鉛筆の先を削るようにして更に細かな攻撃を繰り返す禍刀羅守。美神もいまの動きでは、その小さく、速い攻勢に対応しきれず徐々に押され始めている。

「不意打ちするんなら、助太刀もありっすよね?」

「……………まあ、いいでしょう。特例として、あくまでも『特例として』、認めます」

かなりの長考の後、搾り出すようにして特例の部分を強調しながら小竜姫は忠夫にそう返した。とはいえ、その表情はいまだ不満の色を濃く残してはいたが。

「それでは、貴方の影法師を抜き出します。動かないでください」

そのまま忠夫の額にその右手のひらをあてると、忠夫の体から「ナニカ」が抜け出していく。その抜け出した「ナニカ」は忠夫の背後五メートルほどの辺りで収縮し——狼の

頭と、人の体を持ち、真つ赤な下地に、白色で鳥獸戯画風の様々な動物の絵が画いてある上衣に、金縁の黒い生地で作られた直垂、左右に太刀と脇差を一本ずつ計四本の刀をぶら下げた、キセルをふかす、美神の影法師よりも一回り肩幅の大きな、異形の歌舞いた侍？と言つていいのか正直迷う狼人間らしきものを生み出した。

「…なんつすかあれは」

「…貴方の影法師…のはずなんですけど」

狼頭をもつ忠夫の影法師は、ゆらりと歩き出すと、そのままその辺のちようどいい感じの岩に腰掛け、のんびりとキセルをふかし始めたのだった。

「…俺、タバコとか吸った事ないんですが」

「……貴方の影法師、の筈……」

「横島さーんっ！ 美神さんがーっ！」

おキノの悲鳴まじりの鳴き声を聞きながら、一柱と一匹は呆然とキセルを吹かすそいつを眺めていた。

第十一話。

美神の影法師が、槍を横薙ぎに振う。

「ケーっ！」

が、禍刀羅守は嘲笑うようにあつさりと後方に飛んでかわすと、お返しとばかりに着地で抉れた岩を足で蹴飛ばして来た。

慌てて眼前に構えた槍で防ぐ影法師。

が、その一瞬の隙に回り込んだ禍刀羅守は、その防御した腕を僅かに掠めるように鋭い刃を振ってくる。

使い慣れない武器であるせいもあるうが、若干反応が遅れた美神が腕を押さえて顔をしかめ、だが反撃に振われた槍の届く頃には禍刀羅守は既に離れている。

「こんのくそ蠍螂ー!! 昆虫なら昆虫らしく単純に来なさいよー!!」

「…グケエ」

「あああつ!! 今馬鹿にしたわね! 虫のくせに!!」

「グケケケケ!」

「ぶっ潰す。絶対にぶっ潰す!!」

「ああっ！ 美神さん落ち着いてー！」

先ほどから細かく細かく攻撃されている美神は、堪忍袋の緒がとつくの昔にブツ切れていた。

おキヌの声も届かないらしく、握った槍をしごいて突っかけていく美神の影法師。命懸けの試練の割に子どもの喧嘩のような雰囲気が見え隠れしていた。

其処から少し離れた巨岩の列。ド派手な狼侍の姿をした忠夫の影法師が、相変わらずキセルをふかしながらのんびりと寝そべっているそのそばで。

「とりあえずアレを動かせば良いんですね?!」

「つてやつぱり横島さんが動かしてたんじゃないんですか?!」

「俺は煙草吸いませんからっ!!」

「そういうことじゃなくてっ!!」

地味に混乱している困っている忠夫と、今まで無かった事が起きたせいで状況把握に困っている小竜姫が、大変困っていた。

どうにも彼女、生真面目な性格である為か突発的なトラブルには少々弱く、処理しきれない様である。

ともあれこうして混乱してばかりも居られない、と自分がやや焦っていた事に気付いた小竜姫は、大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出す。

ようやく落ち着いたのか、瞳に冷静さを取り戻した彼女は、横島の影法師を指さし、勤めて常のように声を出した。

「あれは貴方から生まれた影法師なんですから、貴方の考えた通りに動いてくれるはずですよ」

「勝手に動いてますよっ!」

「だから分からないといっているんです! 私だつてこんな影法師初めて見たんですから!」

「結局どうすりゃ良いんですか!!」

「どうやら落ち着いていたのは一瞬だけの様で、あっさりと逆切れした小竜姫は八つ当たり気味に咆哮した。

「こっちはこっちでドタバタと大混乱であつたが、一方美神達の方では決着がつきかけていた。」

もはや全身の鎧に細かな罅が入り、頭部の兜から生えていたであろう角は一本の先端が欠け、もう一本は根元から折れている。ポロポロの、という表現以外に考えられない様相となった美神の影法師の上に覆い被さるようにして、禍刀羅守はその右前足についている巨大な刃を振り上げた。

『命をかけた真剣勝負』

先ほど忠夫自身が言った言葉である。そのシビアさは良く分かっているつもりであつたし、また、侍に成りたいのなら忘れてはいけないことの一つであるとも聞き育ってきた。

命を取ると言う事は、命を獲られるかもしれない状況と表裏一体。

であるがゆえに、このGSという職業を、見習いとは言えやっていくつもりであるならば、もしかすると仲間の誰かが命を落とすかもしれない。

だが、それを本当に理解していたのだろうか。

自分が負けるかもしれない、その結果として死ぬかもしれないと言う事は、覚悟している。

だが、美神が負ける訳はないと思っていたのか。

まさか、自分の仲間がそんな事になるはずがないと思っていたのか。

そんなはずがないと、思ってしまったのか。

それでも、忠夫の目の前で、その刃は確実に美神の影法師の喉元に向かつて突き進む。

だが、だが、どうすればいい？

この身は無力、そしてその力はいまだ未熟。

「美神さああんっ!!!」

おキヌの悲鳴に紛れるように、『未熟者』——叱咤するような囁き声が、自分の中から聞こえた気がした。

「ガオウ!!」

それまで周辺の状況など空に浮かぶ雲のごとく気にせず、泰然とキセルをふかしていたはずの忠夫の影法師が、何時の間にか、そう、誰もが振り下ろされる禍刀羅守の刃にその眼を奪われた瞬間、ふらりと立ち上がると、生身の人間の侵入を拒んでいた修行場を囲む堅固な結界を、只一鳴きで打ち壊した。

その右手でそれまで寝転んでいた、どう見てもその影法師自身よりも大きな岩を片手で持ち上げ、そのまま咆哮に一瞬固まる美神の影法師と、禍刀羅守の目の前にブン投げた。

巨岩が禍刀羅守と美神の影法師を纏めて潰さんと迫り、最早誰にも止められない、そのタイミングで、横島の影法師はその手に持ったキセルを巨岩に投げつける。

左手で投げたキセルは閃光のような速度で目標に到達し、先端から砕け散りながらも、巨岩を粉々に打ち砕く。

が、圧死の危険からは抜け出したとはいえ、目の前で砕かれた欠片は見境なくシヨッ

トガンの様に美神の影法師と禍刀羅守を同時にしたたかに打ち据えた。

「うあつ!!」

「グゲエ!!」

両者共に吹き飛ばされ、そのまま動かなくなる。

いや。

「…グ、ケエ」

ふらつきながらも立ち上がったのは、禍刀羅守が先であつた。

「…くろう」

禍刀羅守はふらつきながらも起きあがり、忠夫の影法師に一睨みをくれるが、ソレはその場で腕を組んだまま動く様子がない。

ならば――

「ケケケエ」

今は目の前の獲物の息の根を止める事が先決、と禍刀羅守は警戒はしながらも、いまだ動く様子のない美神の影法師に近づいていく。

「美神さん!! …くそつ!! 何がなんだかわからんが、こんなもん黙って見てるようじゃ、男じゃねえよなっ?!」

巨岩が砕かれた際にこちらまで転がってきた一抱えは有る石を拾うと、其処に向かつ

て駆け出す横島。

しかし。

「ぐけえっ!!」

「横島さんっ!？」

「こんの…がつ!!」

飛び上がり、振り下ろした瞬間、視線を向ける事無く振り上げられた蠟螂の刃で、重さを感じさせない勢いで岩ごと吹き飛ばされた。

おキヌの悲鳴を聞きながら、ごろごろと地面を転がり、横島の影法師の足元に叩きつけられる。

幸い岩が盾になってくれたらしく、大きな怪我はしていないようだが、かなりの距離を飛ばされ、打撲と擦り傷だらけになった身体を起こしながら、横島は上から降ってくる視線に気づいた。

「なんだよっ!」

僅かな、ほんの小さな溜息が頭上から聞こえ、見上げれば其処には呆れた表情の狼の顔。

狼頭の侍は、そのまま黙って、その腰の脇差の一本を忠夫の前に落とす。それは見る間に縮み、忠夫の手にちょうど良い大きさの小刀へとその姿を変えた。

「…助太刀、感謝!!」

それを立ち上がりざまに引つつかみ、再び美神の影法師に覆いかぶさりその刃を振り落とさんとする禍刀羅守へと駆けだした。

小太刀を抜き放ち、そのままの勢いで一撃を、と速度を上げる。

「なんだこれっ?! 抜けねえじゃねえか!!」

しかしその鞘は、刃を抱え込み放さない。

「…ええい!! それがどうした!!」

一瞬の逡巡。

武器を得たがゆえに、その武器が使えないと言う状況に落ち入り、そして横島が選んだのはそれでも前進する事だった。

ほんの僅かな時間で良い。

その時間さえあれば、彼女ならきつと何とかしてくれる。

駆けつけ様に、逆袈裟に振り上げるように振るわれたソレは、邪魔者を排除しようとし振われた禍刀羅守の一撃を確かにその鞘で刃を受け止め、一瞬の隙を作り出した。

眼下の影法師ならともかく、まさかただの人間が吹き飛ばされる事も無く、真つ二つになる事も無く、その両足で地面を踏みしめながら己の刃を受け止めている、と言う予想もできなかった事態に、禍刀羅守の思考は完全に止まっていた。

「美神さん、これっ!」

「…つく!! ありがとおキヌちゃん! 食らいなさいっ!!」

そんな分りやす過ぎる隙を、意識を取り戻した美神が見逃すはずも無く。

禍刀羅守が気付いた時には、胴体はがら空きで、しかも眼下の影法師は幽霊の少女が引つ張つてきたらしい槍を構えている。

慌てて刃を引き戻すも、もう遅い。にやりと笑った美神は、影法師に攻撃を念じた。

そして、間違はなくその意思に答え、起き上がりざまに真下から柔らかな胴体を突き上げた美神の影法師の槍は、鈍い音を立てて禍刀羅守の胸に大穴を空けたのだった。

「…はああああああ。ありがと、横島君、おキヌちゃん」

「…やばかった。死ぬかと思つたわい」

「二人とも大丈夫ですか!」

「なんと言う無茶を…良くその命あつたものですね」

呆れかえる小竜姫の前で、倒れ込んだ横島と美神におキヌが慌てた様子で文字通り飛んでいく。

生身で巨体が争う戦場に飛びこむ少年も、霊体の身で必死に槍を運んだ少女も、あれだけ追い込まれた状況から一瞬の好機を逃さず逆転してみせた女性も。

それぞれ中々無いほどの無茶を見せてくれた事に、小竜姫の口元は僅かに引き攣つて

いた。

「今度ばかりは、やられたわね。とりあえず命が助かっただけでもめつけもんか、な。一応礼を言っとくわ」

「もう、美神さんったら」

「それって礼じゃないっすよ」

性も根も尽き果てた、とばかりに寝転ぶ美神と鞘付きの刀を持った忠夫。その様子を喜びと共に見るおキヌと、呆れた視線を忠夫に向ける小竜姫。

三人揃って緊張の糸が切れたその時、転がっていた禍刀羅守から光が溢れた。

一つ目の試練を超えた時のように、静かに佇む美神の影法師と、なぜか横島の影法師に向かって来る禍刀羅守から生まれでた新たな力の証。

そして美神の影法師の持つ槍は両端に刃を持つ薙刀へと姿を変え、もう一方に向かって行った力は、横島の影法師の手の上で金色のキセルへと変化した。

狼頭の侍の口からは、満足げな吐息と共に煙がどっかに飛んでいったのであった。

「……え？」

しばし、何とも言えない空気が修行場に漂う。

コホン、と咳ばらいをし、最初にその空気を取り払うように動いたのは小竜姫だった。

「……え」。それでは、最後の試練へと行きたいと思えます」

「無視つすか、あれ？」

半眼の横島の問いに対し、小竜姫は悟った様な笑顔でこう告げる。

「何がですか？」

微かに残った管理人としての意識を砕かれまいとする防衛行動か。

小竜姫は決して視線をそちらに向けず、仮面のような笑顔のままでの発言に、三人は互いに眼で触れない事を決定したのだった。

「…ふう。はいはい。んで？ 次のお相手はどんなのかしら？」

暫く後、何処となくすつきりとした表情で立ち上がった美神に、小竜姫は次の、最後の試練の説明を始める。

「最後は、私と戦っていただきます」

「…え」

笑顔でのたまう小竜姫に、絶句して固まる美神。

そして、「あなたの影法師の石投げが一番効いたわよっ!!」という理不尽な理由でぼこぼこにされていまだノックアウト中の横島と、それを甲斐甲斐しくも看護するおキヌ。それを煙でまあるい輪っかを作りながら面白そうに眺める横島の影法師。

努めて横島の影法師から眼を逸らしながら、小竜姫は三人を見回し、一つ頷いて見せた。

「なかなか面白いチームではありませんか。久々に面白い勝負ができそうですよ」
「…マジで?」

最後の試練が一番厳しいというのは、お約束という事なのだろう。

「ちよ、ちよつとまった!!」

「えー。なんででしょうか?」

うきうきと神剣を素振りしながら修行場の中心へと向かう小竜姫。

よつぽど何かストレス的なものでも溜まっていたのか、テンションが上がりっぱなしの彼女になんとか美神は声をかける。

「さ…作戦タイム!!」

そう告げると、残念そうな小竜姫をその場から追い払った。

「…さて、そこで逃げようとしてる横島君？」

「はいっ！」

何時の間にかここそと尻尾を丸めて修行場を抜け出そうとしていた横島の背後に回り込んだ美神は、彼の首筋に薙刀となった影法師の刃を当てた。

冷たい感触に硬直し、小童姫が追い出された時に感じた嫌な予感がぼつちり当たった事を悟って、横島は冷や汗を止めどなく流す。

「分かつてるわね？」

「いやー、全く分からないっすよはっはっは！」

「あの竜神に天罰喰らうのと、私に今ここで哀れに苦しんでぶつ殺されるの。どっちがいい？」

「俺の未来が無いじゃないですかー！ やだー！」

「さあ、さくさく決めなさいね〜♪」

「あうあうあうあう」

音を立てて構えなおされた影法師の薙刀と、音を立てて拳を光らせる美神に挟まれ、もう傷はないが、なぜか涙が止まらない忠夫であった。

「それでは、準備は「こうなったらもうヤケじゃああああ!!」…なんで横島さんがそんなに気合はいってるんですか?」

修行場の扉を開けて入ってきた小竜姫は、異様に気合の入っている忠夫を見ていぶかしげな顔をする。

悲壮なまでの表情で決意を固め、しかし同時にやる気も感じられる横島を、美神は慌てて叩き倒して沈黙させた。

「いいえ…何でもありませんよ?!」

「うぐぐ…。そ、そうです。何でも無いです」

じとーつとした半眼であまりにも怪しい二人を睨みつけるが、どうせ何か妙なことも考えついたんだらう、とほったらかす小竜姫。

「それでは、これは私からのサービスです。面白いものを魅せていただきましたからね」

そういつてチラリ、と横島に目線をやると、美神の影法師に向かって手を伸ばす。そ

の手が光ると、影法師にあつた大小の傷は全て消え失せていた。

「最後の試練、始めます」

「…OKよ」

その姿を神々しい、戦装束を纏い、光り輝く竜神としての戦闘形態に変化させ、修行場の真中へと歩を進める小竜姫。美神はそれに応じて影法師を小竜姫の正面へ配置につかせる。

「それでは小竜姫、参ります」

小竜姫は神剣を構え、その一撃目を繰り出した。

——いいわね、あんたの役目は、なんとしても小竜姫に隙を作り出すことよ！

——手段は選ばないわ。なんとかかしてみなさい。失敗したら私が死んでもあんたを呪い殺すわ。でも、役に立てば、…ごほーびよ。失敗したら私が死んでもあんたを呪い殺すわ。でも、役に立てば、…ごほーびよ。

「ごほーびかああああああ、やる気が出るなああああつ!!」

空を見上げ、未だ見ぬ褒美の内容を考え悶える横島。

「高級なお肉か?! いやいや、もしかしたら嫁に来るとか!」

その口はだらしなく開かれ、肉の味でも想像したか、それともいよいよ成功するかもしれない嫁取りの事でも思ったか、不気味な笑い声がこぼれていた。

「……ぐふふふふふふふふふふふふふふふつ!!」

が、彼の背後では今まさに小竜姫と美神の影法師が互いに武器を振って火花を散らす鉄火場が形成されていた。

「ヨコシマアツツツツ!!」

「はいいいいいっ!!!!」

美神の怒声で妄想の羽を閉じた横島は、殺意の籠りまくった美神の視線を受けてようやく現状を認識することに成功する。

「やべっ！ 始まってる!!!」

焦った彼は、とりあえず走って戦場へと近づく。

ちなみに忠夫の影法師は、四本の刀を枕元に置くと、岩の上で仰向けになって鼻提灯を製作中である。

「ええくと、ええくと、とりあえず気を逸らせばいいんだから——」

小竜姫の繰り出す斬撃をひたすら防ぎながら、美神がこちらを殺気の籠った視線で見ている。なんと言うか「早くしないとヤル」と言う意思が溢れすぎてて正直怖い。

その視線をうけ、おもわず尻尾を丸めながらひたすら考える横島。しかし、どうしても殺気が気になって考えが纏まらない。

「どうしました？ 防戦一方では勝ち目はありませんよ」

「くっー！」

「―防御に徹すればしばらくは持ちこたえられる！　なにやってんのよあのバカは！　さっさとちよつとでいいから隙を作りなさいっての！　こんなときくらい少しは役に立ちなさいよ！」

先ほどの助けてもらった相手に対するお礼の言葉は一体なんだったのか。

「やばいやばいやばいやばい!!!」

焦りが思考を上滑りさせる。

早くしなければ殺される。美神の事だ、言った事は必ず実行するだろうから、もし失敗して命を落としたら、間違いなく末代まで崇められると横島は思った。

こういったときに慌てれば慌てるほど余計にいいアイデアなど浮かばないものだが、恐怖に脅かされた彼はよりにもよって、

「…小さい胸で小竜姫、なんつって」

自分で地獄行きの片道切符を購入した。

嗚呼、瞬間、修行場の空気が死んだ。

何かが纏めて数十本ぶち切れる音がする。

彼女の顔は見えないが、その目の前に立っている美神の顔が引きつっている。そして、小竜姫から溢れ出たオーラが、怒り狂う龍となって咆哮した。

「いゝまゝ、何か言いましたかああああああああ…」

地獄の底から響くような低いトーンの声が聞こえる。

「母上…俺、死ぬかもしれん」

後悔とは、後で悔やむから後悔だ。いまさら後の祭りである。

ゆっくりと振り向く小竜姫。その瞳は、すっかり怒りで染まりきっている。

あまりの殺気の密度に当てられたか、何か他の理由でもあったかのか、或いは最初から寝て等居なかったのか。

完全に寝に入っていた筈の影法師は飛び起き、とてつもなく怒っている小竜姫を目にする。横島に向かって顔の前で数回ばたばたと手を振った。

横島には分る、「あれは無理」と言っている。

三人と影法師二体は、ダッシュで逃げ出した。

しかし怒り狂った小竜姫は、彼らを逃がすつもりなど無いのか、突如として身体から

膨大な力と閃光を吐きだした。

それが収まった時に現れたのは、巨体を持つ、一匹の神々しくも荒々しい龍だった。龍の咆哮で修行場が震える。そして振り向いて確認した三人も震えあがった。

「このバカツ!! 隙を作ればいいって言つたじゃない!! なんていきなり逆鱗に触れてんのよっ!!」

「だってだって、しょうがないじゃないっすかあああああっ!!」

「いいから早く逃げましようよっ!!」

出口があつたであろう場所に向かって駆け出す三人。

と、横島の影法師が先んじ、銭湯の脱衣所の様な扉に向かってその刀を振う。

ガラス片と木屑を撒き散らし砕け散る扉を潜つて逃げ出した美神達を追いかけ、龍もまたその身体を修行空間から妙神山の敷地内へと現わさせていく。

出口に向かって逃げていく美神達。

何時の間にか横島の影法師が消えていたが、三人にはもうそんな事を気にしている余裕は無い。

なんとかか出入り口の扉までたどり着き、美神の影法師がこじ開けた隙間を縫うようにして転がり出た三人の後を、美神の影法師が扉を飛びだしぎまに蹴つて閉めた。

が、龍の怒りは収まる所を知らないようで、扉の向こうではまだ荒れ狂う咆哮と破壊

音が断続的に響いている。

「お前らー!! 一体何をやったのだー!!」

扉に張り付いた門番たる鬼達の怒声が息を切らす三人の背中に降り注ぐ。

溜息一つ、疲れた表情で立ち上がった美神。

「だいたいこいつのせい」

そう言つて埃まみれの彼女は、背後の横島を指でさした。

「…小竜姫さん怒らしちゃった。てへ」

「このバカっ!!」

サラウンドで響いた悲鳴のような怒声に、美神とおキヌは思わず頭を抱えたとか。

結局暴れるだけ暴れた小竜姫は、美神の「とりあえず、こういうときは生贄よねー」の一言で山門の中に蹴り入れられた忠夫を12時間に及ぶ追いかけてこの末、消し炭の上ミンチ寸前というすぷらったーな光景を作り上げたところで正気に戻り、「ああっ!! だれがこんな事を!」と荒れ果てた修行場を見ておっしやった。

「あんたよ、あんた」

「そんなっ!! こつこんな不祥事が神界に知れたら…」

「大丈夫よー。私がお金出したげる。一週間もあれば元通りに成るわよ」

「ほ、ほんとうですかっ!! ありがとうございます!!」

「いいのよっ!!そのかわり最後のパワーちょうだいねっ!!!」

最後は金で解決した美神は「力が正義じゃないわ!お金が正義よっ!!」と力強く言い放ったとき。

「…わん（ふう、やつと撒いたようでごごるな）」

「ウオン（ここらの獵友会は相変わらず良い腕してるよな。正直2回も掠るとは思わなんだ）」

「わおう（とりあえずこのまま忠夫のところまでいくでごごるよ）」

「ワフ（りょーかい）」

コンクリートに爪音を響かせながら、人狼の2人が狼形態となつて街の真ん中を歩いていく。

街中に、巨大な犬（狼であるが）が首輪もつけずに、しかも片方はなんだかおどろおどろしい雰囲気放つ風呂敷を首に巻いたのが二匹うろついている。

「いたぞ、通報のあつた犬だ!」

保健所というものの一つの役割として、野犬の捕獲があったりするわけで。

「わう！（今度は何でござるか！）」

「ワンっ！（わからん、が逃げた方がよさそうだ!!）」

「逃げたぞー!!」

「捕まえろー!! 猟友会を呼べーっ!」

でっかい犬と、市民の安全を守るという使命感に燃えた職員達の、昼間の大追跡劇が始まるのであった。

「…さつきまで『鉄砲持ち』と大立ち回りやってたかと思えば」

「…」

「ねえ、シロ。あんたら人狼ってさ」

「何も言うなでござる。武士の情けっ」

「…全体的に馬鹿なの？ 死ぬの？ あと私は武士じゃないわよこのお馬鹿」

「…：…くつくつくつ。父上。犬飼殿。兄上のところまで案内したらその後は用済みでござるよなあ…：…」

「…結局こつちもお馬鹿なのね。はあああああ」

第十二話。

犬飼忠夫は考える。

侍とは何か。

仲間とは何か。

敗北とは何か

ドクター・カオスに詰めのかさを指摘され、美神の危機に大した役にも立てず、結局自分はそこまでか？

——そんな訳があるか！

「ちわーっす」

今日も今日とてGS美神除霊事務所に青年の声が響き渡る。

空元気も元気の内、と言うではないか。何かに悩んでいようとも、そこらへんを見せ

ると言うのは彼の男としての、そして半人前かもしれないが侍としての誇りが許さない。

だからこそその空元気であり、そして彼の意地でもある。結局どうこう悩んでる暇がない。やることやつて、それから何を悩んで何が変わるか、開き直りでしか無くとも、とりあえず有効打が無い以上は後回しにせざるを得ないと言う苦い気持ちを噛み殺す。

「あら、横島君だったの？」

「いきなりひどいっすよ、美神さん
だから。」

「んくいま、ちょっと急いでてね。早いとこ届いてくれるといいんだけど」

「今日のお仕事に関する事っすか？」

「まずは、少しづつ頑張ろう。」

「日本にパイパーっていう『悪魔』らしきものによる被害があつてね、それで、ソイツに
対する切り札の到着を待つてるところだったのよ」

「パイパー?」

「そ。なかなか凶悪な奴だね、能力としては相手を子供にするって言う只それだけ、なんだけど」

悪魔パイパー。

ヨーロッパにて散々その特殊な能力を振るいまくり、時の僧侶によつてその力の源である『金の針』を奪われるまで莫大な被害を撒き散らした世界規模での賞金首である。「ハーメルンの笛吹き」とも呼ばれる彼の力は、本当に相手を子供にするという以外には、それなりの魔族としての能力しかない。それでも並みのGSにとつては十分に強敵となるだろうが。

『金の針』が力の源であり、大きな弱点である、と言う事。

相手を子供にして記憶を奪う能力を持つ事。

そして、その能力の半径がとんでもなく広い事。

特筆事項としてはこれらが挙げられる。前者は、その弱点が同時に力の源であることもあり、僧侶に『針』を奪われたことでヨーロッパから駆逐された訳だが、その能力はかなり文明社会にとって危険である。その範囲が一つの都市を軽く覆つてしまえるほどに広いのだ。

もし、その能力が大都市のど真ん中で発揮されれば?

パイパーが猛威を振るっていた時代とは人口密度も、そして技術力とそれが制御を離れた場合の被害も比べ物にならない。はつきりいって、そうなってしまうえば只一体で一国どころか、オカルトに耐性の無い小国ならば、纏めて数ヶ国ぐらいは無くなっても不思議ではない。

だからこそその高額な賞金であり、国連が世界中のゴーストスイーパーに抹殺を呼びかける程の危険性を持っている悪魔なのだ。

「…なんだがセツコイ能力ですね」

「甘く見ちゃダメよ。確かに子供にする、って言うところだけなら大した事はないように見えるかもしれないけど、実際は厄介な事この上ないわ。効果範囲にいる人間の力と記憶を纏めて奪っちゃうんだからね」

社会は歯車と現されることもある。

まるで複雑で超高度な技術の集大成である機械の塊のように、多くの人々が組み合わさって、それぞれ動くことで社会と言う物が動いていく。その様子が、『歯車』と言う表現につながる訳である。

では、その歯車のうちいくつかが抜け落ちてしまえば、その機械はどうなるだろうか。多少の不備ならばこの機械は自力で補修できるであろう。

しかし、あくまでも「多少」である。幾つかの都市に存在する人間が、ごっそりと子

供になってしまふ、つまり機械の中から、幾つかのブロックがごっそりと抜け落ちてしまふと言う事態になれば、さすがの高度な社会も、いや、高度であるからこそ機能を保つことは不可能だ。

そうなつてしまった場合、復旧までにどれほどの時間と予算が費やされる事か。

「…結構怖い悪魔なんですね」

「怖くない悪魔なんて聞いた事ないわよ、おキヌちゃん」

とはいえ、その凶悪な悪魔もここ数百年ほどは力を蓄えるつもりであつたか、大人しくしていた訳だが。

「つまり、切り札つて言うのは」

「そう、『金の針』、よ」

「……美神さん？」

「なによ？」

なんとなく汗をたらしながら、忠夫は美神に質問を続ける。それを横目でみながら、除霊道具の用意に余念がない美神。

「パイパーつてのにとつて、金の針は絶対に取り戻さなけりやならないモンなわけです

よね」

「当たり前じゃない」

「…んで、今回の依頼はどっから？」

「解体業者よ。いきなり「うちの社員が変なの」に子供にされちまった！ どうにかしてくれ！」って高額の依頼が来てね」

「——変なの？」

「ええ。ピエロの恰好してラッパを持った、変な笑い声の悪魔だったって…」

美神の手が止まった。

横島の言わんとしている事に気がついたのか、表情が焦りと驚愕の色に一気に染まる。

「そいつを見て無事だったんですか!？」 「っしまった!!」

『ちゅらちゅらちゅらちゅらら〜♪』

同時に放たれた美神と横島の声に含まれた気付きと焦燥を嘲笑うように、その音は事務所の中に届いた。

何処からともなく妙に明るい音楽が聞こえる。TVか、とも思ったろう——その音楽に、強力な魔力が籠っているのならば。

「美神さんっ!!」

衝動的にその音楽が聞こえてくる方、窓の方へ、美神たちを庇うようにポケットから石を取り出しながら飛び出す忠夫。彼が窓を開け放つと、其処には果たして。

『ちゅらちゅらちゅらちゅら〜ら〜ら〜♪』

悪趣味なピアノの格好をし、ラッパを吹き鳴らす悪魔。パイパーの姿があった。

「ヘイツ!!」

「うおっ!!」

慌てて手に持つ石を投げようと振りかぶったが既に遅く、忠夫はそのパイパーの『子供にしてみよう』能力をもろに喰らってしまう。

「ちいっ!!」

悪魔パイパーは最も大きな霊力を持った、おそらくGSであろう女性が無事であることを確認すると、そのまま中に飛び上がり、東京の空へと消えてしまった。

「しまったっ!! この依頼自体が罠だったのねっ!」

「美神さん!! 横島さんが、横島さんがっ!!」

つまり、パイパーが目撃されたこと自体が罠であり、パイパーとしてはその姿と能力を見せ付けてしまえば良かったのである。

あとは自分を悪魔パイパーだと判断した人間達が、放っておいても勝手に自分に対して最も有効な武器『金の針』を取り寄せる。

その受け渡ししの現場を抑えるもよし。若しくはGSを先んじて潰しておき、後から来た針を取り返すもよし。どちらにせよ『金の針』奪還という目的は果たせるはずであった、が。

「ちいつ、あの妙な小僧!! もう少しだったって言うのに、抜けた顔して勘の良い!!」

忠夫が横槍を入れたおかげで、予定が大幅に狂ってしまった、と言う訳である。ともあれ自分を退治する役目を請け負ったGSの排除には失敗した。

(ここは一端引いて立て直すか)

その判断を余裕と取るか慎重と取るか、或いは臆病と取るかは別として、彼の悪魔がその力の源を奪われても現代まで生き残ってこられたのは、その小動物のような危険に對する忌避のおかげであつた事はまぎれも無い事実であろう。

ともあれ、相手の戦力の一部を削いだ事で一先ずの達成感を得たパイパーは、そのまま宙を飛んでするりとビルの隙間に姿を消した。

「やってくれるじゃないあの禿げ! おキヌちゃん、すぐGS協会に連絡を取って!

こつちから『針』を受け取りに行くわよっ！」

対して怒り心頭なのは美神であった。目先の多額の賞金に目が眩んだとはいえ、まさかの助手に指摘されるまで気付かなかった迂闊さに歯噛みし、身内が被害にあった事でかなりボルテージが上がっていた。

姿さえ捉えていれば破魔札の十枚くらいは投げつけていただろう表情で、構えていた精霊石と神通棍を片付けるとおキヌに指示を出しつつ、撤退したとはいえ一応の警戒を窓の外に向ける。

「わんっ!!」

と、窓の外を睨み付ける美神の耳に、甲高い子犬の鳴き声が届いた。

それは、彼女の背後から聞こえてくる訳で、そしてそこには先程パイパーの能力を食らった横島が、おキヌに抱えられている筈で。

恐る恐る振り向いた彼女の眼に、果然と小さな子供を抱えているおキヌが見えた。

「この子、横島さん…ですよね」

「おねーちゃんたち、誰でござるか？ それにここはどこでござるか?」

パイパーの攻撃を喰らった忠夫が起き上がると、其処には、狼の耳と尻尾を持った年の頃十歳を超えないであろう年頃の和装の子供が、腰に挿した全長50センチ程の木刀をその先つぽをぶるぶると震わせ、涙を堪えて美神に向けている姿があった。

「それじゃ、おねーさんたちは敵ではないでござるな?」

「(ぎ)ぎ、(ぎ)ぎるつて…ええ、そう思つてくれてもいいわよ」

いまだにソファアの陰から警戒心剥き出しでこちらを眺める忠夫に対し、あまりの口調の時代錯誤っぷりから、ちよつと笑いを誘われながらも違和感が凄い、と言つた表情の美神。

「ええと、どうしましょう美神さん?」

「…足手まといを連れて行くわけにも行かないわね。先生のところまで預かつてもらいましよう」

「あしでまといとは無礼な! これでも父、犬飼ポチと母、沙耶の息子! れっきとした侍で(ぎ)ぎるつー」

「でも子どもでしよ?」

会話の流れは分からずとも、なんだか自分が役立たずといわれたつぽいことは分かる。思わずソファアの陰から飛び出し、反発し反論する忠夫(小)であったが、あつさ

りと子供であることを指摘され、悔しさに唸る。

再び木刀を構えて唸り声を上げる横島にふと悪戯心を刺激されたのか、美神は子どもの構える木刀を片手で握りしめた。

驚き木刀を取り返そうとするも、いかに半人狼と女性とは言え、大人と子供。

美神の膝を超えたか超えてないかの身長しかない子供と、女性と言えど、年がら年中荒事をこなし、神通棍を振り回している女傑である。

しばらくうんうんと唸りながら引つ張っていたが、ぴくりとも動かなかつた木刀が、美神が急に手を離したことで勢いよく後方にすつぽ抜け、結果として横島は後頭部をソフアーに柔らかく受け止められる事になった。

「……うううう……」

「み、美神さあん」

「な、なによ」

「うううううううううう……」

「なんだか、泣きそうな目でこつちを見てるんですけど……!」

「ちよ、ちよつとやりすぎたかしら。でも、本当に危険なんだから、がきんちよを連れて行くわけにもいかないでしょう!」

「……ヒック」

「あ、」

「拙者は足手まといではないでござる〜!! うわ〜ん!!」

そのまま窓から飛び出して駆けていく横島。

「ああああっ!! 逃げたあつ!!」

別に逃げた訳ではない。本人曰く、「せんじゅつてきてつたいでござる!」である。

慌てて窓から身を乗り出して探してみたものの、元が山を駆けまわって育つ人狼の里の子である。「あつ」というまにその視界から消えている。

「参ったわね。こっちはこっちでパイパーに狙われてるって言うのに」

「どうしましょう、美神さん。私が横島さんを探しましょうか?」

「…いいえ、一緒にこのままGS協会に行つて、『金の針』を受け取る方が安全ね。さつさと切り札持つて、パイパー倒さないと被害が広がっちゃう可能性が高いわ」

「そんなつ! 横島さんはどうするんですか?!」

おキヌの泣きそうな表情に頭を掻きながら、美神はため息交じりに窓に背中を向ける。

「…あれでも半分人狼なんだし、そうそう捕まったりはしないでしょ。あの逃げ足の速さといい、こっちがさつさと決着つけければ、問題無いハズよ」

「どうも……」

事務所のドアに向かつて歩き出した美神の背を追いかけながら、おキヌはちらちらと窓を振り返る。

見なくても心配そうな表情をしていると分かる彼女の声音に、美神は振り向いて叱咤する。

「いいから早く行くの！ これ以上グダグダしてたら、それだけあの子の危険も増えるわよー！」

どこにいったか、そしてその捜索にいくら時間を取られるか分からない以上、とりあえず所員である忠夫のことを後回しにして、元凶を一気に叩き潰す作戦に出た美神たち。それでも二人の足取りには、振り切るには少々ならず後ろ髪引かれる気持ちが見え隠れしていた。

「……うまくいったでござる。これぞ奥義『逃げたふり』！ 役立たずじゃないことを母上に誓って証明して見せるでござる！」

事務所を出て急ぎ足で移動し始めた美神とおキヌの後ろ五百メートル程の場所に、頭に木の枝を括り付け、何時ぞやの妹分にそっくりの格好で美神たちの後をつける狼耳と尻尾の生えた子供の姿があったとか。

コンクリートで覆われた街中では、さぞ目立ったことだろう。

「…まったくあのハゲピエロ!! 離れたところからちゅらちゅらちゅらちゅらっ!! いいか
げんうっとうしいのよ!!」

「でも、横島さんの方に行つてないのは分つたんですし…」

「この境界石、買ったら一体いくらすると思つてんの! あの子の時給じゃ十年たつても払いきれないのよ!」

「無料で手に入れてましたよね…?」

あの後、車に高価な対呪歌専用の境界を封じ込めたという、オカルト商品取り扱い「厄珍堂」の今月の目玉商品というひっじょくに怪しげな試供品を使い、幾度となくあつたパイパーの能力を使った嫌がらせに近い攻撃を凌ぎつつ、最初にパイパーが発見された場所である「バブルランド遊園地」にたどり着いていた。

ちなみに、以外にも境界石自体の効果は高かった。

それを売りつけた厄珍堂の店主は、「たまたま」パイパーのうわさを「何処から」か聞きつけ、「たまたま」美神に商品を持っていったらしい。

美神は美神で、「そんな怪しげな商品、テストもしてないんでしょ？今ならレポートとGS美神のお墨付きをあげるわよ。役に立ったらね」と只同然の値で強奪していったのだからなんともはや。まあタダで持って行かれた筈の店主も笑顔で「毎度あり！」と喜んでいたので、彼の中では十分に採算が取れる計画があるのだろうけれど。

ともあれ、この遊園地、バブルの崩壊とともにその建設計画も正に泡と消え、そのまま何年も放置されていたと言う曰く付きの物件であるが、今回のパイパーが目撃された地点もここである。

強固な結界の張られたGS協会にて『金の針』を受け取り、それを使った『ダウジング』でも確かめてみたが、やはり反応はここであったことから美神たちはその根城を断定。

そのまま突入することとなった。ちなみに神父達は別件で除霊にでかけているらしく、連絡が取れなかった。

「ちくしょうっ！あの小娘ども、とうとうここまできやがったか!! だが、なんとかしてもアレを取り返して、またあの頃のように暴れまわってやるんだ!」

バブルランド遊園地の地下深く。そう眩くパイパーの周辺には大小様々の、それまで

の被害者の顔の浮かぶ風船が浮かんでいた。

その頃。

「…なんでござるかこの惨状は」

眩く忠夫の前には、おそらく美神たちに対するパイパーの攻撃によるものであろうクレーターや、転倒した自動車、砕け散った街灯、折れ曲がった看板などが道に沿ってずっと続いていった。

流星に車に乗り、時速200km近い速度でパイパーによる被害を撒き散らしながら一般道を道交法を無視しすつ飛ばす美神たちの車には追いつけなかったのだ。

「これを追いかければ、簡単に目的地にいけるでござるなっ♪」

そう簡単にのたまうと、再び自転車並みの速度で駆け出そうとして。

「…おや？」

何かの声を聞きつけ、近くに横転しているトラックの荷台に近づく。

「…むーん。何かがいるようでござるが、わからん。こういうときは、父上の耳が羨ましいでござるなあ」

そのまま、立ち去ることもできずに、仕方なく救助活動をはじめた忠夫。

「困っているものを助けるのが、武士の役目と母上も言っていたでござるからなっ！
…えいっ」

どうみても歪んで簡単には開きそうに無いその扉を、拾った棒で何とかこじ開けてみれば、中には無数の輝く光点が。

おもわず仰け反る忠夫に、中身「達」は思わずといった様子で反応した。

「にやつ!!」×無数

飛びつき、懐き、じゃれまくるのであった。

「こ、こらっ、拙者は狼なんだぞっ!! うひやひやひやひや! くすつくったいって! やめてー!!」

山中に、半人狼の子供の笑い声が木霊した。

「よし、頼んだわよおキヌちゃん」

「はいっ! 頑張ります!」

遊園地内部、その中心にある、おそらく完成の際は出し物が催される予定であったのだろう広場で、美神から何事かを耳打ちされたおキヌは美神からペンチと細長い針のようなものを受け取ると空に舞い上がった。

「パイパーさああああん！ 早く出てこないよ、この針折っちゃいますよおおおっ!!」
「待てエエエエツ!!」

とりあえずパイパーを召還?した。

「お出ましのようね、悪魔パイパー!」

「お前らなああああつ!! 人がなあああ! せつかくなあああつ!! 色々と準備して下で待ってんのに、どうしてそういう事をだなああああつ!!」

その人質をとるようなあまりと言えばあまりの行為に、隠れ家と言うか秘密基地と言うか、とりあえず本体のいる地下から飛び出してきたパイパー。

「ハン、ばつかじやない? だれがそんなミエミエの相手の罠に自分から引つかかりにくかってくの」

「だからって何でいきなりそういう事をするかなあつ! あれはお前らにとつても切り札だろうがあつっ!」

「別に切り札を使わなきゃ勝てないって訳でもなさそうだしねえ。あんた、悪魔にしてはセッコイし」

て制御された連携は、パイパー自体よりも厄介な壁となつて、パイパーに決定的な一撃を決めることができない。

「そらそら、どんだんいくぞつ!!」

まさに波のように襲い掛かる鼠たち。

「くっ……のっ!!」

美神も必死に神通棍で応戦するも、その圧倒的な数の前にはどうしても劣勢を感じてしまう。

そもそもが霊体でも無く、普通のネズミが操られているだけな為に、どうしても対霊、対悪魔に有効な手段が通じにくい。霊力を周囲に放出して吹き飛ばしてはいるが、恐怖を覚えて逃げない上に、この戦い方は消耗が大きい。

油断すればあっさりとネズミの包围に押しつぶされ、生きたまま齧りつくされる。そんな想像をしてしまった美神の額に、冷や汗が一つ流れた。

「はーっはっはっはあ!! そのまま鼠どもの餌にしてやるわっ!!」

「ジョーダンじゃないわよ! こんな奴らにくれてやるものなんて一つも無いわっ!」

「きゃーっ! きゃーっ! ネズミーっ! いやーっ!」

ネズミから必死に逃げようにも、美神の傍から離れるわけにもいかず悲鳴を上げ続けるおキヌを背中に庇う。

実に楽しげに哄笑を上げるバイパーの姿に怒りを露わにした美神は、こうなったら、と切り札の一つであるイヤリングの精霊石に手を伸ばした。

が、それが効果を發揮する事は無かった。

ネズミ達が、その動きを一齐に止め、突然遊園地の向こうに見える山を向いたのだ。

訝しげにバイパーを見上げるも、彼自身も何がどうなったのかを把握しきれておらず、ひたすらに声を張り上げ美神を襲わせようとしている。

しかし、ネズミ達は動かず、じつと一点をその無数の眼で睨んでいる。

「……………ああああああ」

最初に気付いたのは、空高く浮かんでいるバイパーでも無ければ、美神の近くでふよふよと浮かびながらネズミの群れに囲まれた状況に耐えきれなくなって気絶しているおキヌでも無い。

一人だけ、地面に足を付けていた美神が気付いた。

「…地震？」

眩きが漏れたものの、それだけではネズミ達の反応が良く分らない。

そして、周囲とバイパーを警戒しながらもネズミ達の睨む方向を見た美神の耳に、その音が届いた。

「…あああああああああああー！」

揺れは大きくなっている。

声も大きくなっている。

そして、この距離まで近づいてきて、美神に正体を悟らせた。

「あああああああああああああああああああああああ
!!!!」

にゃー。

わんわんわんわんわん!!

きしやー!

もけーもけー。

かー。

ぱおーん。

山の茂みを突き破り、小さな横島を先頭に、暴走とも言えるような勢いで動物達が突撃してきた。

「たーすーけーてーっ!!」

大音声とともにやってくるのは、一体何処から集まったのやら、と思うほどの獣たちの群。犬やら猫やらに始まり、爬虫類、鳥類、哺乳類。ここら辺りの山の生き物全部ではないかと思うほどの動物たち。

ネズミ達の行動は早かった。

素早く散らばり、物陰に隠れ、その正面から逃げようとする。

しかし、そのはしっこさを持ってしても、既に最高速まで加速を終えていた動物達から逃げるには遅すぎた。

そして、数えきれない動物が、猛獣が、猛禽類が、彼らを捕食し、踏み散らし、隠れた物陰ごと粉碎しながら通り過ぎていく。

「な、なんだってんだ…?」

「隙ありっ!」

「ぐぎゃあっ?!」

呆然と自分の眷属が蹂躪されていく光景を見ていたパイパーだが、この場で最も眼を離して行けない人物から意識を逸らしたのが間違いだった。

美神が打ち出した霊体ボウガンの矢が、その身体に突き刺さり、思わずバランスを崩し、重力に引かれ落下する。

そして、地面に叩き付けられた彼の視界に、運の悪い事に今まさに彼を踏み砕かんとするように突進中の動物達の足が入り込んだ。

「ま、待て待て嘘だろおおおっ!」

パイパーの眷属達は、あわれその質量差だけでも数倍はあるのではないか、と思われ

るスタンピードの前に、儂く蹴散らされたのであった。

「怖かったでござる！ 怖かったでござるようっ!!」

「よしよし、もう大丈夫だよー」

「しっかしまあ、異様な光景だったわねー…近くに潰れた動物園でもあったのかしら」

狂乱の大暴走が終わった後、いまだにぐずりつづける忠夫から美神たちが話を聞いたところによると、横転したバスから猫達を助け出した後、どこからともなく野犬の群が現れて、一緒になって懐いてきたので、しばらく遊んでやったのだが。

ふと気付くと、道路の横の森から覗く、異様に多くの視線。

その視線に怯えて、後ずさってしまえば、後から後から湧いてくる獣たち。

思わず逃げ出した物の、追いかけてこでもして遊ぼうとしたのか、或いはただ単に本能で逃げる者を追いかけただけか。

そしてひたすら一直線に走り続け、気付けば、ここに着いていて、おキヌちゃんに抱

きついていた、と言う訳である。ちなみに彼らは、そのまま何処かへ走り去ってしまった。

「ひつく、ひつく」

「ほーら、もう泣かないの」

「まったく、あんた男の子でしょ。もうちよつと頑張んなさい」

「ぐしつ。うん。ありがとう、えつと…」

「あ、そつか。まだ記憶とか奪われたままだったわね。そつちがおキヌちゃん。私が美神よ」

「ありがとう！ 美神おねーさん！ おキヌおねーちゃん!!」

子供の純粋な笑顔で言われたそのお礼に、柄にもなく照れたようにそつぽを向く美神と、笑顔で「どういたしまして」と返事をするキヌ。このまま大団円、と行く筈だった。

が。

「ふざけるなああつ!!」

「きやつ!」

「なにっ!?!」

「おねーちゃん達、あぶないっ!!」

その真下から地面を突き破って現れたのは、もはやその力をほぼ全て使いきり、分身を作り出すことさえできなくなったパイパーの本体。

そしてその手に掴まれたのは、またもや二人を庇ってその前に飛び出した忠夫であった。

「このくそガキがああああつ!! よくも、よくも邪魔をおおつ!!」

「ぎゃー!! でつかい鼠がしゃべってるでござるー!!」

「横島くんつ（さんつ）!!」

「おおつと、動くんじゃねえぞっ? 確かにもう俺は終わりだろうよ、もはやここから逃げ切るだけの力もねえ…だがなあ」

巨大なネズミの短い前足が、美神に向かって突き出される。

そして、放たれるのは、殺意の込められた黒い光。

「きやつ!!」

「美神さん!」

「美神おねーさん!!」

横島の腕を掴んでぶら下げながら、美神に魔力砲を放つパイパー。

かろうじて神通棍を犠牲に防いだが、足に傷を負い、神通棍も折れ、もはや防ぐすべ

も避けるすべもない美神に、消滅も辞さない覚悟で残り全ての魔力を籠めた前足を向けた。

「貴様もツ!! 道連れだあつ!!」

放たれようとする魔力砲。しかし――

「させるかあああつ!!」

それを再び邪魔したのは、忠夫の腰にあつた木刀の中から出てきた輝く金属の刀身。それはパイパーの右目に突き刺さり、その痛みに意識を取られ、パイパーが手に溜めていた禍々しい力が霧散した。

「ぎゃああああああああつ?!」

「し、仕込み刀つて…子供になんて物騒なものを…」

「このクソガキツ…最後の最後までええええつ!!」

もはや魔力砲を放つ力さえなくしたパイパーは、最後の意地とばかりに巨大な口を開く。

右目からは止めどなく血が流れ、残っていた魔力も先程の一撃に籠めていた分ではぼ終わり。

ならば、せめてこの小僧だけでもと牙の狙いを忠夫に定める。

「鼠がつ!!牙で狼に敵うかあああああつ!!」

しかし横島は目に突き刺した仕込み刀をその膂力で引き抜くと、その勢いのままに、自分の腕を掴んでいる方のパイパーの手首を斬りつける。

手首が飛び、パイパーの拘束から抜けただした横島を、突然の片目の消失で距離感の掴めなかつた巨大な鼠は、その口の中に獲物の感触を感じる事が出来なかつた。

思わず吐き出そうとした罵声は、しかしその口を通る事は無い。

「……カハッ」

地面に落ちた横島が、そのまま今度は地面を蹴って飛びあがり、巨大なネズミの喉笛を噛みちぎつたのだ。

「ぺっ。不味。あー、口の中、くっさー……」

返り血に口元を染め、噛み千切つた物を吐き出し、しかし倒れ行く巨大なネズミから眼を離さないその瞳は、確かに狩をする『人狼』の眼であつた。

「…ねえ…おキヌちゃん?」

「…なんですか、美神さん?」

「……しばらく、あのままの方が役に立つんじゃない?」

「……………あは、あはは」

「あははははははははははははははは……」

乾いた笑い声が、ついに完成しなかつた夢の跡地に満ちていく。

空には綺麗に半分に分かれた月が、顔を出し始めていた。

「長老ー？ いますかー？」

「なんじゃー？」

「犬飼さんちのてれびがなおつたらいいですから、いつしよにみにいきませんかー？」

「ええのー。 いまいくぞー」

人狼達の中でも特に問題児な奴らが飛び出したお陰で、里にはだらけ切つて、一気に10は老けたような長老の姿があつた。やはり、人生多少起伏があつた方が張りが出るようである。

「相変わらず器用じゃのー」

「忠夫君には負けますけどねー。 それじゃ、えいつ」

「——番組の途中ですが、予定を変更して臨時ニュースをお伝えしております!! 突如

街中に現れた時代劇のような格好をした男二人は、いまだその正体は不明、その姿が巨大な狼に変わったと言う未確認情報もこちらには伝わっています!!」

「は?」

「…ああつ! あれです、あの二人がその二人のようです!! 警官隊による突撃が——
だめですつ!! 止まりません!! 20人近い機動隊をふつ飛ばし、現在新宿区に向かって進行中!! 進行方向の市民の皆様は、すぐに非難してくださいっ!!」

「……………」

「わーっはっはっはあ!! ヌルイぞけーかんとやらっ!! これなら息子の方がまだましであつたわっ!!」

「おーい、犬飼ー。そろそろいかないと日が暮れるぞー」

「犬塚、その手にもつてるやつ、うまそうだな」

「いや、其処の店先に落ちてたもんで、つい」

「一本よこせ」

「ヤダ」

「……………」

「仲間割れです!! 仲間割れをはじめたようですつ!! そしてどうやらあの二人の名前が判明しました、「犬飼」「犬塚」と名乗っているようです!! それにしても意地汚い!

本気です！ 大の大人が落ちていたフランクフルトを争って本気で刃を交わしています!!」

「いー加減にするでござるよ!! 父上、犬飼殿!!」

「ああつ!! シローラー!!」

「む、犬塚のところの娘ではないか」

「こんな回り迷惑かけて…まあそれは良いとして、いつになったら兄上のところに行くのでござるか?!」

「さあ?」

「……狐」

「……最初っからこうしてればよかったのよ」

「くらええええええいつ!!」

「うおおおおおおつ!!」

「爆発ですつ! 情報によりますと、新たに二人の怪人が乱入した模様!! あ、はい。ここでいったんCMです」

皺くれた手が伸び、テレビのスイッチを押した。

真つ暗になった画面に、ぎらぎらと輝く眼が映る。

張りを取り戻す所かはち切れんばかりに力の込められた腕から、徐々に皺が消えていく。

張りつめられた筋肉が、その上に被せられた皮膚を内側から押し上げているのだ。

「ちよ、長老？」

「…殺ル。オレサマ、オマエラ、マルカジリ」

「長老ー?!」

「やあ、初めまして」「やあ、お久しぶり」

「どうしたんだい、そんな、狐に抓まれたような顔をして」

『どうやら、疲れているようだね、しばらく眠ると良い』

『戯言には、虚言には、騙されちゃいけないよ』

いいから、ほら、目を瞑ってごらん？ 段々眠くなってきただろう？

———
それでは、良い夢を。

第十三話。

「それでは、行つてくるでござる！」

「は〜い、いつてらっしやい」

「全く、こんな朝っぱらから元氣ねえ……ふわあ」

G S美神除靈事務所。現在午前5時20分、太陽が顔を出し、鳥達が餌を求めて飛び立ち始める時間帯である。

事務所の入ったビルの前には前には袴姿で箒を持った『お掃除する幽霊少女』がいて、その姿をパジャマ姿の、寝癖であつちこつちに跳ねた髪の毛を片手で抑え欠伸交じりに5階の窓から眺める女性がいる。

そして、どう見ても狼耳と尻尾が生えており、腰に木刀を挿している事以外は普通の、子供服を着た男児が新聞配達員のバイクをブツちぎりながら駆け抜けていくという光景があつた。

——話はパイパー戦後まで遡る。

「ええっ！　横島さんの記憶と力が入った風船、見つからないんですか?！」

「そうなのよ…。おかしいのよねえ、実際、他の被害者の風船はあつたのに、何であの子のだけないのかしら?！」

「そんな事言ってる場合じゃないですよ！　それじゃ、横島さんは…」

「解呪法が分かるか、あの子の風船が見つかるまではあのまま、ね」

パイパーを苦戦の末何とか退け、高額報酬がもらえたとほつくほくの美神と、車の助手席で眠りこける半人狼の子供、そして、パイパーの開けた穴から飛び出してきた数百個もの風船を空中で捕まえながら、片っ端から忙しげに『金の針』で割っているおキ又。

どれがどの被害者の物かが分からない為、結局全てを割らなければならない。

空を飛べて最も効率よく割れるのはおキ又であり、針が一本しかない為、他二人は見物に回っているのである。

「おキ又ちやくん!!そろそろ終わりそう〜?!」

「ええと、あと5個でーす!!」

「わかつたわ〜!! 頑張つて〜!!」

「は〜い!!」

車から身を乗り出し、地上から空飛ぶおキ又に向かつて大声で叫ぶ美神。そしてその隣でひたすら寝こける横島(小)。

「全く…ガラにもない事するんだから」

すっかり子供になってしまい、もう夜だからとばかりあつさりせまつ苦しい助手席に丸まつて寝息をかく横島の頭を撫でながら、なんとなく呟く美神である。

「ありがと、小さな侍くん」

とても小さな声と言うか、まるで囁くような声で、熟睡する半人狼にそう声をかける。その頬がほんの少しだけ赤く染まつているのは自分の言葉に照れた為か。

「…私のガラでもないわね。とりあえず、こいつが元に戻つたらちよつと上等な骨付き肉のボーナスでも出してあげようかしら」

「美神さ〜ん!終わりましたよ〜!!」

でもちよつと勿体ないかな、と美神の脳裏に少しだけそんな思考が走つた。

それは横島にお肉を出すのが勿体ないのか、それとも、彼が元に戻つた方が扱いが面

倒くさい事とちよつとだけ思つたからか。

そんな事を考えていた美神の頭上から、仕事を終えたおキヌが声とともに降りて来た。

益体も無い思考をおキヌを見上げて振り切り、そして二人の大きめな会話を聞いてもぐつすりと寝こけたままの小さな横島を見て、その口元が苦笑いを零した。

「そう、お疲れ様……つて?!」

思わず二度見した美神である。

「……え?」

そう呟き固まる美神のそばに、作業を終えたおキヌがふよふよと降りてくる。そして美神の様子を見て、何に気付いたか慌てたように助手席の方に回りこむ。

「横島さん?!」

「むにやむにや……えへへ……母上……」

全ての風船を割つたはずなのに、未だ元の姿に戻らない涎を垂らした寝顔の忠夫がいた。

結局その後周辺を考えられる全ての方法で探し回り、地下に潜つて搜索するも収穫無し。ならばと使った『金の針』にも反応がなく、そのまま途方に暮れながらとりあえず

いったん事務所に引き返したのである。

「どーします?」

「どーしようか」

それから三日。

その間の除霊は全て断るか延期し、なんとか横島に、今、両親が忙しくて人狼の里から預かっけていて、そう長くしないうちに里に帰れること、しばらくは此処で過ごすこと等を納得させることに成功する。

親の躰が良かったか、礼儀正しく素直な少年として育っていたようで、すっかりとお礼を受けた美神達が、ちくちくと良心を刺激されつつ、どうしてこの子の将来はあんなのだらうかと疑問を抱えたのは然もあらん。

その間に情報を集めるも現在めぼしい物は無し。

様々な情報屋や文献、GS協会方面にも二日間徹夜をしながら当たっていた美神は、直前のパイパー戦の疲れも重なり、とうとう気絶するように眠りに落ち、様子を見に来たおキヌが仮眠室まで運んだ。

そして目覚めたのが、日頃まだまだ布団に包まれているこんな時間と言う訳である。

ちなみにおキヌはいつもこれくらいの時間から活動している。新聞配達員や牛乳配りの人たちとも仲が良い。

「ま、手は打ったし、後は待つのみ。…ふああ。おキヌちゃん、私、二度寝するからしばらく起こさないでねー」

そう言つて眼下のおキヌに手を振り、再び仮眠室へと戻つていく美神。その顔にはまだまだ疲れと眠気が残っていた。

少し心配そうな表情を浮かべながらも、おキヌは一旦箸を置き、温めるだけで食べられるメニューを考えながら事務所の中に戻つていくのだった。

一方その頃、散歩に出た横島。

「とーきよーつて所は、色々あつて面白いでござるなー!!」

独り言を言いながら、人の群の中を尋常でない速度で走っていた。

事務所の所長と同僚の悩みなどなんのその。もう日は頂天に差しかかるというのに、元気に街中を走り続けている。

「人も一杯だし、てれびで見た車もたつくさんあるし……これが『観光』でござるなっ！」
辺りをきよろきよろ珍しげに見回しながら、爆走する。

そして、彼が人気の無い住宅街に差し掛かった時だった。

交通事故の原因でも多いのが、余所見運転である。半分とはいえ、人狼は人狼。当然その走行速度も頑丈さも反射神経も人間の比ではない。比ではないが、

「ぐはあっ!!」

人狼だろーがなんだろーが、注意も散漫な状態で60kmという速度域にいれば、そりゃいつかは事故る。

「あ、(ごめん)で(ごやる)」

「……」

「えつと……そうだ！ な……なむ？ な、な、な……なんまいだーなんまいだー」

間違いなく父親の悪影響であろう。

物凄い音を立てて衝突され、扉をひび割れさせながら沈黙する変な帽子を被った異様にひよろ長いにーちゃんと、鉾つきジャケツトを着込んだ逆に背の短いにーちゃんという奇妙な二人組。

とまれ、さあ埋めようかと（恐ろしい事に）あっさり決めて近寄った横島の耳に、掠れた声と苦しそうな息が聞こえた。どうやら二人組は気絶しているだけのようだ。む

しろ骨折や流血の様子が無いところが異常である。
「ええと、こういうときは…」

小首を捻る横島の脳裏に蘇る、父に受けた教えの数々。

こう言つた時に使えそうなものは無かつたか、と考へに考へ、一つの言葉が思い当たつた。

『よいか、忠夫よ。しかと覚えておくのだぞ！』

『はい、でござるっ！』

『犬飼家、戦の裏道、大人の策略編その四っ！！』

『そのよん！！』

『…目撃者は、消せ』

「ええと、たしかまらずは目撃者を探して、と…」

記憶の中で、齒を光らせながら異様に怪しい笑顔でそうのたまう犬飼ポチ。

こうやって横島の記憶の奥底には色々なモノがすりこまれていつたのだ。そしてそれを忠実に実行する、未だ父の怪しさとアホさを良く理解していない横島（小）。

そして程なく彼の眼は一つの違和感を探り出す。

「…むっ?! そこでござるっ!」

ゴミ置き場に置いてある青いバケツの蓋が、ほんの僅かであるが浮いているのである。そしてその傍にはまるでぶちまけられたかのような、いや、誰かが放り出したのであろう、ちようどバケツに一杯分のゴミ袋。

いかにもな現場に、とりあえず離れたところから石を投げて様子を見る。

「さあ、出てくるでござるっ!!」

そして威嚇の声を出した彼に帰ってきた反応はと言うと。

「……………ふえ」

「えッ?」

「ふえええええ…」

投げつけられた石によって蓋の外れたバケツの中に蹲る、奇妙な服を来た角の生えた女の子の泣き声であった。ちよと臭い。

再び蘇る横島の記憶。

先程と違いがあるとすれば、彼の目の前に立っているのが母親であり、父親はその足元にボロ雑巾のようになって転がっている所だろう。

『良い、忠夫? あの馬鹿の言うことはいいいから私の言うことはしつかり覚えておいてね』

『は、はいっ!!拙者、まだ死にたくないでござるっ!!』

『あらあら、この子つたら：そんなおおげさな』

『い、医者を呼んでくれ：』

『えいつ♪』

ぐしや

『ち、父上ー!!』

『大丈夫よ。昔はあのくらいならまだまだ逝けたわよ。そんなことは置いといて、忠夫？』

『はいッ!!』

『貴方は、将来女の子や女性を泣かしちやダメよ?』

『わ、分かりましたでござる!』

『でなきや：「ああ」だからね』

思い出した事と、その内容と其処から導かれる現況のあまりの危険性にとめどなく冷や汗を垂らし始める忠夫。

(やばいやばいやばい!! 母上にばれたら超折檻されるでござるっ!!)

もはや目撃者がどーたらこーたらなどと父の言葉に従っている場合ではない。とりあえず必死に対抗策を考える。しかし、

「ふええええええええええ…」

「あああー！！」

目の前で泣き続ける少女のおかげで全く考えが纏まらない。

もしこんなところ母上に見られたら、絶対に口クナ事にならないでござるよー！！

——もうその女性がいなくとも、彼はそのことを覚えていない。いや、亡くした事を経験していない。それがどれほど大切なことであろうとも。それが、パイパーの残した呪いなのだろうか——

「ええと…ごめんなさいっ！」

「ふえ？」

侍の誇りは何処へやら。

地面に擦り付けんばかりに下げられた頭と、泣いている少女本人よりも悲壮な感情の籠った謝り文句は、とりあえず女の子の涙を止める程度には、役に立ったようである。

「あの、すまなかつたでござる。拙者、てつきり怪しい奴かと」

ようやく泣きやんだ女の子であったが、横島の言葉に首を振る。

「あ、いや、お前が怪しいといってる訳じゃなくて、その…え？ 何でござるか？」

少女は、横島の言葉を遮るように、その服の袖を軽く引つ張りながら自分を指さし、小さな声で呟いた。

「……天竜」

「天竜？ ああ、名前でござるか!! 拙者、犬飼忠夫と申すもの。侍でござる!」

「……耳?」

「む、なんでござるか?」

とりあえず初対面というか、一番最初にやったことが石を投げるといふ、今思えばかなり冷や汗モノの出会いであったが、自己紹介も済んでほっと一息。落ち着いて横島を見た少女が気になるのは、人狼としての部分であった。

「ああ、拙者半分人狼でござるからな」

「…おそろい」

「ん、おお! 角でござるか! なかなかつかっこいいではござらんか!」

「……♪」

泣いた鳥がもう笑う。そんな感じでにつこり笑う天竜と名乗った少女。

「……しっほ」

しばらく横島の耳を興味深げに見ていた少女が、ふと横島のふりふりと上機嫌に動く尻尾を捕獲した。

耳もそうであるが、自分には無いふさふさの尻尾の動きに誘われたらしく、子どもであるせいもあってか結構遠慮なく尻尾を捕まえた。

「うひゃつーい、いきなりは止めて欲しいでござるよっ!!」

「…ダメ?」

尻尾には神経も走っている為、結構敏感でもあるのだ。

急につかまれ離して欲しいと告げるも、少女はその感触に囚われた様子で、にぎにぎとつかんだり離したりを繰り返しながら、小首を傾げて横島に問いかけた。

ここで断ると、また泣きそうだな、と既に諦め半分に横島は溜息を吐く。

残り半分はせめてお手柔らかに、と祈る気持ちだった。

「ちよ、ちよつとだけでござるよ?」

「……ん♪」

「うひゃひゃひゃひゃ!!」

とてとてと歩いて忠夫の後ろに回ると、いきなり尻尾に頬擦りをはじめめる天竜。

一旦は断られ、少々落ち込んだもののOKを貰ってからはかなりお気に召したご様子で、辺りにはなんともいえない和やかな雰囲気か漂っている。

子どもの泣き声を聞きつけて辺りの家から出てきた住人達も、なんだか癒されているようである。

尻尾とか角とか耳とかを気にしてもいないのはどうかと思うが。
人気のあまり無かった住宅街に、しばし少年の笑い声が響き渡った。

「ぜはっぜはっ」

「……大丈夫？」

「ぶふああ〜。も、もう大丈夫でござるよ!!」

「……ごめんさい」

そう眩きシユンと小さくなる天竜に、慌ててフオローを入れる忠夫。

「あああつ！ 大丈夫でござるよ！ ちよつと笑いすぎて苦しかっただけでござるか
ら」

「……ふえ」

「ああああつ!!」

フオロー失敗。

「そ、そういえば！ 何であんなところにいたんでござるか！」

「……ふえ？」

「あのバケツの中でござるよ」

「……あのね」

「ふんふん」

と思つたが逆転セーフであつた。

天竜の話によると、親のお仕事で旅行気分で出かけてきたものの、ある事情で宿泊先のお部屋から出られなかつた。そのため、あらかじめ「こんなこともあるか」とおうちのいろんなところからいろんな物を持ってきたらしく、そのうちの幾つかを使つて其処からでて、観光していたという。

ところが、なんだかへんなおにーさんたちが追いかけてきたので逃げ出し、とりあえず隠れていたらいきなりすごい音がして、その後隠れ場所に石がぶつかつてきたのでビックリした、と。

「そーいうことでござるな」

「……そーいうことなの」

「んで、その変な男とはどんな奴らでござつたか？」

「……アレ」

そう言つて呟いた天竜の指の先には、先ほど忠夫が轢いた二人組の姿が。

流石に気絶から立ち直つてはいないようで、まだ意識は無い物の手足がピクピクと震えていた。

「む、さすが拙者！ いつの間にやら悪者を退治しておつたか!!」

「……結果おーらい」

あさつての方角に2人揃って親指を立てながら、一仕事終えた後の表情で笑う横島達であった。少年の方はちよつと汗を流していたが。

ともあれ、それまで和みながらも二人の話を聞くとともになしに聞いていた善良なる地域住民の方々は、その台詞を聞いて速やかに動いていた。

女性陣が二人にお菓子やお茶を出してさりげなく角と尻尾、耳に触り、序でに服に着いた汚れを濡らしたハンカチやタオルで拭き取り消臭剤もちよつと噴きかけ。

その陰に隠れた男性陣が気絶した二人組をロープで縛って小声で子どもには聞かせられない物騒な台詞を各々囁き声で相談し、地面を数人がかりで引き摺って行った。なんともチームワークの良い町内会である。

——その頃、美神令子除霊事務所にて。

「んで？ 俗界には縁の無いはずの竜神様が、なんだっていきなり私の事務所に訪ねてくるのかしらっ？」

「美神さん!! 私は今、非常に困っているのです!!」

忠夫が轢き逃げした二人組みをほっぽって、天竜と一緒に事件現場で歓待されている、まさにその時、GS美神除霊事務所には随分とエキサイトした様子の竜神、小竜姫の姿があつた。

「なんか工事に問題でもあつた？」

「それはありません！ 大工の方々も、私が竜神だと知つたら何故かとてもお仕事が速く正確になりましたしっ!!」

「……どーりで」

美神が何かに納得した風なのは、請け負つた工事会社に「ちよつとくらい手を抜いても良いから、余つたお金は返してね♪」と言つており、更に美神の手元に返つてきたのが予想よりちよつと多かつたからである。手抜き工事がばれたかと若干警戒していたが、真摯な工事会社の施工は十分に満足して頂けたようであつた。

(ラツキー♪)

手抜きによる天罰や仏罰等を恐れた工事会社に比べ、何の恐れも見せずにそう考えるあたり、下手な神や悪魔よりも恐ろしい。

「それで？ 私の所にきたつて言う事は、依頼かしら？」

「ええ、実は……」

小竜姫の語るところによると、竜神族の王、竜神王が地上に住む竜神たちとの会議に

出席する為、地上に降りてきており、その仮の宿が小竜姫の管理する妙神山であるらしい。

地上に住み、仏道に帰依した竜神王を疎む輩が不埒なことを考える可能性があること。

そこで狙われるのが強大な力を持つ竜神王ではなく、その姫である可能性が高いこと。

しかし、妙神山にて会議が終わるまでの間——会議が終われば、地上の竜神たちにお披露目し、あわよくば娘を見初めた位の高い竜神に……と言う考えの元であるが——保護されているはずの姫本人が何らかの方法で脱走。早く保護しなければ危険である。

纏めると、そういうことである。

「と、言うことなのです」

「下衆いわねー。本人に勝てないからつてその娘を狙う馬鹿も、そんな奴らの手綱を取る為に娘を嫁にやろうとする竜神王も」

ずばつときっぱりはつきり言い切る美神に、小竜姫の頬が思いつきり引き攣った。かなり同意したかったり一部は否定したかったりと含むものはあるが、とりあえず自分の役目を果たすことが先決である、と小竜姫はぐつと感情を飲み込んだ。

「そ、そう言われましても、こちらにも色々と事情がありました……」

「いーわよ、別に？ そんな話、昔っからあんたらの言う俗界では珍しくも無いんだし。神界の連中も、別に高尚な存在って訳じゃないでしょーし」

「…それでは、本題に入っただいいでしょうか？」

「どーぞ？ ただし…それなりにギヤラを弾んで貰えただけど」

全くやる気が見えない。面倒くさいと全身で示してソファーに脱力してもたれかかる美神を前に、小竜姫は身内の恥をさらす恥ずかしさを感じながらももう一度姿勢を正す。

小竜姫も本来ならば自分の力で探したい。しかし、事は急を要する。

俗界もすでに彼女が知る頃とは様相を変え、小竜姫の知らない事が多すぎる。ならば、例え人間であっても、力を借りるのが最善の方策。ここで依頼をせず、不慣れな場所を対象を危険にさらし続けながら、それでも自分の力だけで探そうと言うのは下の下だ。

「結構です。それでは、こちらからの依頼は『天竜姫』の保護。報酬はこのくらいで…」

差し出された箱の中身を蓋をあけて覗きこみ、美神はふん、と鼻を鳴らした。

「りよーかい。その依頼、GS美神が受けさせていただくわ」

「お願いします」

分かっていても身内の情けない内情を晒さざるを得なかった為か、それとも仕方ない

とは言え頼んだ重要な案件をそっけなく扱われているが故か、小竜姫の顔が、一瞬だけ不快気に歪む。

が、次の瞬間にはいつも通りの冷静な表情がその顔を覆っていた。

「…いくわよ、横島君！ おキヌちゃん!!」

小竜姫の表情の変化に気付いているのか、横目に小竜姫を見ながらも、美神は何も言わずに立ち上がる。

「…あのー、美神さん？横島さんは…」

「あ」

三人組の内一人が大問題を抱えている事を思い出したのは、声に出しても返事が無い理由に気付いてからだった。

「…てててつ、畜生！ 一体なんだってんだ！ ここは何処だっ！」

「兄貴、大丈夫かい？」

「まーだ頭がぐらぐらしやがる！おい、イーム！例の娘の匂いはまだ終えるかっ?！」

「へ、へい、ヤームの兄貴ー」

イーム、ヤームと互いに呼び合った怪しい男達は、ふら付きながらも立ち上がる。

横島に轢かれ、住民たちによつ引かれ、近くの警察署の牢屋に気絶したままぶち込まれていた彼らは、光りのさし込む鉄格子がある壁に向かつて掌を上げた。

瞬間、閃光が走り、鉄筋入りのコンクリートで出来ている筈のそれは、内部の細い鉄骨をひしゃげさせ、粉塵を吐き出しながら外側へと吹き飛ばされていく。

轟音を立てて脱獄に成功した二人。

そして、のつぽのイームが何かの匂いを嗅ぐと、それを追いかけて走り出す。

まだまだ、危険は去つてはいない。そして、その黒幕さえも未だ見えてはいなかった。

「「「疲れた」」」

「犬塚の娘よ。少しやりすぎたのではないか？」

「…笑いながら騒がしい赤いらんぶのついた白黒の車でドミノやつてた犬飼殿には言わ

れたくないでござる」

「あくうまかつた〜。東京の店も中々だな。後でもつかい探してみるか」

「…なんであんたはそんなに余裕なのよ」

そう会話する4人がいるのは現在工事中のビルの中。とりあえず先に邪魔者を片付けようと、後から後から沸いてくる警官と機動隊とを相手取り戦っていたのだが、いいかげん飽きてきた其処に、突然凄腕のGSとその助手が乱入。

その冷静沈着な戦法と精緻で巧妙な霊力と術でこちらを攪乱。辺りにいた警官達を下がらせた後、支援に13年式のG型トラクターを注文したら呼べそうな凄腕の狙撃手（猟友会おすすめ。所属18年目）だけを残させ、助手とともに4人とぶつかり合ったのである。

とはいえ、人狼+αのほうには殺すつもりなど毛頭ない。そもそも親父達にしてみれば只遊んでいただけのようなものである。被害が全く洒落になっていないが。

だが、流石に相手も熟練したGSのようであり、気付けばいつの間にか結界の中。

「しかし、たまには狐も役に立つでござるな」

「…いい度胸してんじやない」

「喧嘩はいかんで、犬塚の娘よ」

「全くだ」

「そもそも原因はあんた達でしょーがっ!!」

タマモの幻術と狐火を併用した煙幕で視界を閉ざし、地面の反響音から地下に通路がある事を発見した犬塚と犬飼の重ね斬撃が地面を深く切り裂き、辛くも逃げおさせた4人組。

今は早く此処から離れることが先決である。揃って暗い地下鉄の通路を駆け出した。

「先生っ！ 大丈夫ですかっ!!」

「…いたた、ああ、ピート君。いや、大丈夫だよ」

「なんて化け物じみた奴ら…。一体何なんですか、あれは？」

「あれが、本当の人狼つてやつだよ。どうやら私は遊ばれたようだね。やれやれ、こりや本格的に修行しないとダメかな」

そういつて地面を見下ろす唐巢神父。3, 4 mはある巨大な爪跡のような裂け目が、地面を深々と切り裂いて、その威力を見せ付けていた。

第十四話。

「わっ！ わっ！ すごい！ てれびじよんに色がついて薄くなってる！」

「小竜姫様危険です！ うかつに近づくと何が起こるか！」

「左の言う通りです！ 此処は一つ慎重に……」

一方その頃、小竜姫達は、何十年振りかに見たテレビが液晶になって薄くなった事に大変驚いていた。

「一体何やってんのよあんたら」

「はっ！ そうでした、天竜姫様を早くお探ししなくては！」

数百年ぶりに管理すべき場所たる妙神山から降りてきた竜神とそのお供の鬼神達は、技術の発達とあまりの街の様子の変わり様に何処ぞのト田舎の住民さえも引くようなおのぼりさんっぷりを見せている。

店頭のTVにかぶりつくスカートを履き、いかにも現代風の格好をしたその風体とはちぐはぐな行動をしている妙齢の女性だけならばともかく、その後ろから一緒になってTVを凝視する2人の黒いスーツを来たサンングラス姿の2人の男性の姿もあっては、店員さんもビビる。

液晶テレビから引き剥がされ、気を取り直してあたりを見回すも、其処には人々の群。

動きを見ているだけで目が回りそうできえある。

「こ、こんな中で天竜姫様を探し出すことなどできるのでしょうか？」

「やらなくちやなんないんでしょ？ その子が危ない目にあつてると言うんだつたら、さつさと保護する必要があるし」

「横島さん」

「ほーら、おキヌちゃんもさつさと動く！」

搜索活動を再開する美神たちではあつたが、何せ半径5キロに絞つただけでも一体どれほどの人間がいるのやら。

「…全く。こういうのは探偵の仕事だつての」

やはりあまりやる気が出ない美神は気だるそうに呟くと、その表情を引き締めて辺りに靈感のアンテナを伸ばし始めた。

「ふむ、とりあえず此処まで離れば問題はないでござろう」

「…………ふへ〜」

「どうしたでござるか？」

「…………速かった」

変態かどうかは知らないが、とりあえず話を聞いた限りでは天竜と名乗った少女は危険に曝されているらしい。そして気絶しているとはいえ実際に追っ手らしき2人組もいた。

ならば他にもいるかもしれない、と天竜の前にしやがみこみ、その背に少女を背負う忠夫。そのままお茶とお菓子をくれた皆さんに二人一緒に頭を下げ、全力で離脱開始。

背中で背後に手を振りかえしているらしい天竜が落ちないように注意しながらではあったが。

屋根を越え、塀の上を走り、川を飛び越え階段を一気に飛び降りる。

そして気付けば美神除霊事務所まであと数キロといった所まで走り抜けていた。

ちなみに天竜姫、その間中何も言わずにぎゅつと背中にしがみつきながら目を閉じていた。

下手なジェットコースターよりもスピードはないが、そのかわり慣性の法則に喧嘩を売るようなその速度域での身体コントロールは、さすが人狼、といった所か。

「とりあえず美神おねーさんたちに相談するでござる」

「……おねーさん?」

「あ、本当のおねーさんではなく、ここで拙者が世話になっている方々でござる」

「……いいひと?」

「いい人でござるよっ! 昨日のご飯も美味しかったでござる!」

記憶を失い、今までの付き合いが無かった事にされているとはいえ、とりあえず餌と住処をくれただけで簡単に信頼するのともうかと思う。…いわゆる餌付け。

「……で待っているでござる! いま呼んで来るでござるよ!」

そう言つて半人狼の少年は少女を部屋のソファーに下ろした後、飛び出していった。

「……柔らかい」

指先でつつくと、ソファーは柔らかくその形を変える。

「……♪」

ぼふぼふぼふぼふ

危うく攫われかけた後だと言うのに、楽しみにソファーの上で軽く飛び跳ねて遊びだすあたり、こっちの少女もなかなか太い神経を持っているようだった。

「…ふーん？ 目撃情報によると、この辺りでおそらく天童姫が見つかったらしいわね」
電話で知り合いの情報屋に連絡を取ると、小童姫達を連れ歩いている間に意外にあつさりとする者は見つかった。

蛇の道は蛇。いかに優れたGSとはいえ、ダウジングや占いを得意とする一部を除いて、専門分野でもないのに人探しが得意と言う訳がある筈も無い。だが、必要な情報を素早く得る事ができるツテを持っているというのも、一流GSと言う彼女の価値を高める一因となっていることは間違いないだろう。

「どのあたりですか?!」

「待つて…結構距離があるわね、車でも回したほうが速いかも」

「先に行きます!」

「あ、ちよつとつ!!」

美神の前に広げられた地図を見て、大体の方角と目印を確認した小童姫達は美神の呼び止めにも答えぬまま、焦ったように地面を蹴つて空へと飛び立つ。

「ああ、もうっ! 迷子の子供がいつまでも同じ場所にいる訳ないじゃない! もうちよつと待てば、追加で情報が集まるって言うのに!」

情報は時間がたてばたつほどにその価値を失うとはいえ、今回は探し物が動いている

のである。あっちで見つかったからすぐに行く、と言うのは下策ではないが上策ではない。ましてや、小竜姫には美神たちと連絡を取る手段がないのだ。これでは単なる分断である。

「しよーがないわねっ！おキヌちゃん、一旦事務所に戻って車を回すわよっ!!」

こうなってしまうえば、生身では空を飛ぶことのできる小竜姫たちには追いつくことができない。しかも目撃地点に行くのならばどつちにせよ足が必要であると判断した美神たちは、とりあえず事務所に戻ることにした。

「美神おねーさん達居ないでござるなー。これでも飲んで、まったくでござる」

「……わあ」

「れーぞーこの中であつたおれんじジュースでござるよ。甘くておいしーんでござる」

「……ありがとう」

「いやいや、困っている人を助けるのは武士の役目でござるからな」

事務所の中には、オレンジジュースを飲みながら談笑する子供達の姿。傍の窓から下を覗けば、さきほど忠夫が轢いたはずの2人組が今にも事務所の中に入ろうとしている

ところが見えただろう。

「……ま、間違いないんだな。匂いはここに入っただけだ」

「よし、とつとと目標を確保するぞ」

そしてそこから更に視線を飛ばせば、こちらに向かつて駆けて来る亜麻色の髪をなびかせた女性と紅い袴をはいた幽霊少女が。

そして、事務所に程近いビルの上からは、その全てを視界に収める全村をフードで覆った何者かの姿が。

第一幕の準備は、着々と整って行き。

「なんでござるか?！」

「…みつけたぜ、天竜姫様。だまってこちらに来て貰おうか?」

「お、大人しくしていれば危害は加えないんだな!」

そして、開幕のベルは鳴り響く。

事務所の中では、今、謎の二人組がその内部に突入した所であった。入つてすぐの応接室にあるソファアールと年季の入った机。そしてそこに立ちすくむ少女と、その少女を庇つて立つ少年。

「小僧、邪魔をするんじゃないだろう？」

「…た、たのむから大人しくして欲しいんだな、別に殺そうつて訳じゃないんだな」
その言葉を聞き、震える少女の前に立つ少年は、

「ふざけるなでござるっ!! そう言われてほいほい退く侍なぞ居るかっ!!」
そう吼える。

「ちっ、しょうがねえ。おいイーム、あんまりひどい怪我させるんじゃないぞ」
「わ、わかっているんだな兄貴」

その言葉に反応し、その2人は、
「人外かっ！」

角の生えた、人の形をしながらも、鱗と角、縦に割れた瞳を持った竜族へとその存在を変えた。

「しやつ！」

それでも人であった頃のように、短軀と長身の影からは、未だ殺気は無く、だがそれゆえに敏感な感覚を持つ少年を僅かに動揺させる。そして、その一瞬で全ては、少年の手をすり抜けた。

「…きやつー！」

「しまった!!」

長身の竜族から伸ばされた手は、その長さを明らかに倍以上に伸ばし、隙を見せた少年の後ろから少女を搔つ攫う。慌てて腰の木刀を抜き飛び掛るも

「邪魔だ」

短軀の竜族の角から放たれた力により弾き飛ばされ、届かない。

「がっー！」

弾き飛ばされた少年は宙を舞い、そのまま背後のテーブルを巻き込みながら地面へ叩きつけられる。

そして、少年が再び動かないことを確認した二人組は、そのまま事務所を出て行くこうとして、しかし、その眼前で黒い光りが収束した。思わず足を止め、天竜を庇うように動きながら、その光りを警戒する二人。

「——ご苦労。イーム、ヤーム」

「旦那っ！」

だがしかし、場に突如として現れたのは、先ほど遠い所から舞台を眺めていたはずのフードを被った何者か。

「へ、へへへ……希望どおり、竜神王陛下のご息女、確保いたしましたぜ」

「……んっ」

2人組のうち、天竜姫を捕まえていたイームが怯える少女をその人物に向かって差し出す。その少女を受け取ったその存在は、その口元を妖しく吊り上げた。

「…確かに、天竜姫ご本人だ。報酬だったな？」

「だ、旦那ッ!!」

「これが報酬だ……」

左手に天竜姫を抱え、その右手に禍々しい力を集めると、それを驚愕に身を固めたヤーム達に向かって放つ。

「天竜を……はなせえええええっ!」

「なっ!! くっ!」

しかし、何時の間にか起き上がっていた半人狼の少年は、一足で先程とは比べ物にならない速度で飛び掛り、腰から抜いた仕込み刀でその左腕に斬りかかった。

慌てて回避するが、不意打ちに応じきれなかった為にフードはその一部を切り取られ、思わずその手に持っていた天竜姫を放してしまう。

そのままの勢いで刀を振るった腕と反対の右腕で少女を抱きしめると、一塊になって反対側の壁に突っ込みながらもその身を挺して少女を衝撃から庇う。

「無事か、天竜！」

「……ん、大丈夫」

少女を搔つ攫い返した少年は、まず少女の無事を確認し、ロープを被つたままの人物と、殺されそうになった事で一時的に動きの止まっている二人組を見渡し、ロープの方が危険度の高そうな相手と判断。

同時に、自分の力量では敵わぬ相手と言う事も、その本能が伝えていた。

「何者かは知らぬが、その振る舞い！ 其方を敵方と判断するでござるっ！ 犬飼忠夫、

呐喊！」

ゆえに、横島はそう叫ぶ。

「——後ろに向かつてっ!!」

当然ながらやり合うには分が悪すぎるので、少女を背負って全速力で5階の窓から飛び出した。

「……え？ ……はっ！ 逃がすかつ！」

「てっ、てめえっ！ 最初っから俺らを切るつもりだったのかっ!!」

残されたのは、あまりの鮮やかな逃げっぷりに、僅かにだが動きを止めたフードの人

物と、捨て駒であることを分からされた竜族達。

「ちっ！ 屑どもが、要らぬ手間をつ！」

「舐めるなああああつ！！」

その頃になってようやく美神たちが事務所に入ったビルへと辿り着く。

その目に入ったのは、光を反射するガラスの破片と一緒に事務所の窓から搜索対象を背負って飛び降り自殺敢行中の忠夫と、その後を追いかけるように広がる、明らかに魔力を伴った爆風、そして爆音であった。

「……へっ？」

「ふっ、二人だと高過ぎかもしれないでござるうううっ！」

「……きやつほう♪」

自由落下をはじめたお子様2人は、そのまま街路樹へと突っ込み、その根元に着地。辺りを見回せばその爆音に驚いたかどんどんと集まってくる野次馬達。

「いたたっ！ 無事でござるか天竜！」

「……ちよと楽しかった」

「ならよしっ！」

「良くないわよっ！ 一体何がどうなってるの?! 三行で！」

「ああ！ 美神おねーさん！」

お菓子貰った!

敵の後にもつとやばそうな敵が来た!

後の敵が前の敵を裏切った!

ばーかばーか! アホ間抜けー!

でござるよっ!」

その慌てる様子と、事務所での爆発、そして背負った天竜姫。突っ込み所は山ほどあるも、とりあえず非常事態真っ只中と判断。

「良く分らなかつたから後できつちり説明してもらおうわよっ!」

そう一声叫ぶと子供達に向かつて手招きし、隣のビルの空きテナントへと駆け込んでいく。全員がビルの中に入ると同時に既に原形をとどめていない事務所の窓から飛び出すロープ。

「…つちい!! 見失ったか!」

しばらく宙に浮かびながら辺りを探していたが、もはや周囲には野次馬だらけで、これ以上探すには不安要素が多すぎると判断し、その姿を消すのであった。

「ぶあっ!!」

その姿が消え、消防車両が現場に到達し始めた頃、瓦礫の中から顔を出した2体の竜族の事は、今は誰も知らない。

そして、野次馬の中には『彼ら』の姿があった。

「ふむ、中々面白そうなことになっておるではないか、のう、マリア」

「イエス。ドクター・カオス」

「あの小僧、久方ぶりに見てみればえらく面白い事になっておる。さてはパイパーとでもやり合つて解呪しそこねたな？」

「データベース・検索……ヒット。6日前・国連・データベース内・悪魔パイパーの賞金・支払済みに・変更してあります。悪魔パイパー・敗北の確率・98, 7%。先ほどの少年の・骨格・霊波調・『犬飼忠夫』との一致率・99%。犬飼 忠夫本人と・判断します」
「やれやれ。『世界』に好かれるというのも、楽ではないようじゃのう」

「回答・保留・します」

「ふははははっ！ さて、すこし、引つ掻き回してやるとするか。ちつとは楽しませてもらいたいもんじゃ！」

「——イエス。ドクター・カオス」

「この程度で終わらんよなあ、小僧？」

言葉を交わした老人と、ロングコートの女性はそのまま人込みの中へと消えていく。女性のその手に、トイレットペーパーと近所のスーパリーのビニール袋が合ったのがなんともはや。

「全くもう、えつらい散財だわ！ 事務所の中にあつた除霊道具代分、絶対に後悔させてやるー！」

「臭いでござる〜。鼻が曲がるでござる〜」

「…美神さん、何でビルの地下にこんなものがあるんですか？」

空きテナントに滑り込んでみれば、其処にあつたのは緊急用非難シュート。そのままその中を滑ってみれば、到着したのはいつか見たような東京地下下水道。そして其処に浮かぶ一隻のボート。

実は、事務所のほうにも入り口が合つたらしく、こつちは事務所自体がもしものことに巻き込まれた時用の、非常口の非常用。いくら転ばぬ先の杖とはいえ、此処まで用心する辺り流石と言うかなんと言うか。

「ちよつと報酬が払えない顧客からゴニョゴニョ…つとね」

「……かつこいい」

「あら、わかる？　中々値が張るのよ、これ」

美女と女兒で微妙に判断基準がずれている。

とりあえず非常用の缶詰を皆で食べながら、情報を聞き出す美神。この際周囲の環境にまで気を配って入られない。腹が減ってはなんとやら。確実に来るであろうもう一戦を乗り越える為には栄養補給が必要である。

彼女の結論としては、直接追いかけていた2人組みはどうやらただの捨て駒であり、最後に出てきたフードの人物がその黒幕である事。これは横島と天竜姫の証言からのほぼ確定した推測である。

そして、決定的な場面になるまで静観していただけにも係らず、最後の最後は自分の手で直接殺そうとした事。そこから導かれる答えは、相手が他人を信用しない、単独で動くタイプのプロであること。

ということとは。

「間違いなく、もう一回来るわね。今度は本人が」

そう呟き、手に持った空き缶を握りつぶす美神。

「まず狙われるのが、貴方よ天竜姫」

「……？」

「いや、不思議そうにしてる場合じゃなくて。…まあいいわ。とりあえず、小竜姫と連絡つきたいところだけど、あの竜神様も何処行っちゃってるのやら」

ぼやく美神と、缶詰に顔をつっ込んでモグモグしていた横島が、同時にその視線を下水道の奥へと向けた。

「美神おねーさん」

「…ええ、早速来たみたいね。まったく、仕事熱心ねー。皆、乗って！　ここじゃ埒があかないわ！　補給も済んだし見通しの効く場所まで一気に行くわよっ！」

そう言葉をかけながら、ボートに駆け寄ると、運転席に飛び移りエンジンを始動させる。

薄暗い下水道に、獣の咆哮にも似たエンジン音が反響し、排気筒からは狼煙の如く黒煙が吐き出される。

「さあて…誰に喧嘩売ったか、教えてあげるわっ!!」

そして、それらを超えて覇気の籠った声を放つ美神。

——第二幕 反撃、開始。

「むう、おかしいでござるな。確かに百合子嬢から聞いた住所は此処のはず」

「ん、どれどれ？ ……間違いないな、ここであつてははず」

「…兄上の匂いが薄いでござる。どうもここ4・5日は帰っていないようでござるが」

「……引越したんじゃない？」

それから暫く後、人狼+αが居るのは、現在住人の居ないアパートの忠夫の部屋の前。いい加減面倒くさくなつた彼らはとりあえずそこを歩いて、組長と呼ばれていた人物とその護衛から刀をピトピトと頬に当てて恐か、いやいや、交渉の末、（物理的に）意識を失つた相手から衣服を強だ、いやいや、快く譲つて頂き、変装。刀は一応3本纏めて落ちてた代紋付の風呂敷で巻いてカモフラージュしてある。

意外にも侍姿が印象深かつたらしく、警戒中の警官達に怪しまれはしたもののあつさりタマモの幻術で切り抜け、ようやく目的地に到達していたのである。素っ裸のオツサシン達が捕まつたとかなんとか聞こえたが知らないつたら知らないものである。

ところが尋ね人本人が不在。それもそのはず彼は子供になつて事務所で寝泊りしていたのだから、当然その生活臭も薄くなつてはいる。

「とりあえず届け物をしておくか」

「待て、犬飼！　これは……」

やおらあたりの匂いを嗅いだかと思うと、いきなり忠夫宅の扉をぶち破り不法侵入を
かます犬塚さんちのおとーさん。

「父上っ！　いったいなにを——それはっ！」

そのまま部屋に突っ込んだ彼が「スパンツ」と開いた押入れの中には

「む、あやつめ、こういうことは得意でござったな」

「もぐもぐ。む、うまい」

「あー、ずるいでござる！　拙者にも——！」

忠夫が作った燻製肉がこんもりと新聞紙の上に積んであった。

「「もぐもぐ。うまうま」」

「……あんたらねえ」

結局何しに来たのよあんた達。横島の使っていた枕を抱えてこっそり布団に潜り込
みながらタママは思った。

第十五話。

「一体これはどういうことなのですかっ！」

「さあ、全く分かりませぬ…美神殿達に、何かあつたのでしようか？」

「そんなことは見れば分かります！ 鬼門達は周辺の搜索を！ 私はあそこを見てきますー！」

「はっ！」

天竜姫の情報を基に探しに出た小竜姫達が目撃情報のあつた場所に到着した時、既にそこには天竜姫どころか人影すらも碌に無く、辺りには静寂が広がるばかりであつた。

それでも一縷の望みにかけて探し回るも全くの無駄骨となり、肩を落しながら一旦美神の除霊事務所に戻ってみれば、そこにあるのは無残にも黒く煤けた残骸と、その周辺を走り回る警察官と消防士達、そして僅かに立ち上る白い煙。

しばらく唾然としていた彼女らだが、小竜姫は二人の鬼門に指示を出すと、周囲の人間達に見つからぬように注意を払いながら、ビニールテープの張られ、封鎖されたそこに飛び込んでいく。

「…酷い」

数時間前の姿はそこに無く、あるのは只黒く煤けた瓦礫ばかり。美神と対面に座ったソファアームも、おキヌがお茶を入れていたポットも、ただの黒焦げなゴミとして転がっている。

ふと、火災現場には不釣り合いな気配を感じた。

「……これは」

僅かな残り香だった。しかし、それは火事場の匂いに紛れ込んではいたが、彼女にとつては見逃す事の出来ないものであった。幼い、だが高位の竜族の気配と、邪悪な力ある者の気配。

「一体何者が……」

その気配に集中していた小竜姫の背後から、瓦礫を突き崩す音とともに何かが這い出てくる。武神らしく凄まじい速度で反応し、神剣を構え振り向く小竜姫。果たして現れた者は。

「いって……ふう、何とか助かったようだな」

「あ、熱かったんだな〜」

イームとヤームの竜族凸凹コンビであった。

あちこちに火傷を負い、爆発に巻き込まれたのか服は破け、その身体にはいくつかの傷を残してはいたが、生来の丈夫さのおかげか動く事に支障はないようだ。

この先も、その首が繋がっていければの話ではあるが。

「何者ですか。名を名乗りなさい」

「うわっ！」

掛けられた冷たい声に顔を上げた二人の前に神剣を抜き、完全に戦闘態勢に入っている小竜姫の表情の無い顔が入る。

巨大な竜気と、その名を知られた妙神山管理人のいきなりの登場に仰天する2体。

「げっ!!」

今の立場はどう考えても不味い。そのまま回れ右をして逃げ出そうとするが、眼前の武神はそれをやすやすと見逃すほど甘くは無かった。

「そこより一歩でも動けば、そのそつ首叩き落されるものと思いなさい」

首に添えられる冷たい感触と、それより冷たい小竜姫の言葉。本気である。マジである。首は落とさなくても手足の一本くらいは持っていく。そんな気迫の籠った視線だった。

「あ……う……」

こりやもうダメだ、と両手を高々と上げながら、死出の旅を覚悟した彼らを責められる者などいはいない。

身体全体に感じる冷や汗に塗れた服の感触とは別に、二人とも股間のあたりにちよっ

と冷たい感じがしたのは、触れないでそつとしておいてほしい事であった。

「つまり、その『怪しいフードを被った竜族のお偉いさんらしき人物』に騙された、という訳ですね？」

「…はい」

「馬鹿ですか貴方達は！」

「ひいっ!!」

怒声とともに苛立ちを堪えながらもなんとか抑えていた竜気が再び爆発する小竜姫の目の前で、土下座しながら、ひたすら萎縮するイームとヤーム。

「…ふう。それで、何で今更こんな所に？」

ここで怒りを爆発させてもしょうがない、となんとか己の心を宥める事に成功した小竜姫が、その竜気を取めたのを感じ、恐る恐る顔を上げる二人組。

小竜姫の質問に対し、顔を見合わせた二人だったが、彼女の神剣が地面に勢いよく突き刺さる音に飛びあがり、慌てたように話し出した。

「そつ、それは——」

フードを被った怪しい影が窓から飛び出した直後。すぐさま意識を取り戻した二人組は脱出を考えたが、窓の下には人間が一杯。

ビルの内部に逃げ出そうにも、そちらは既に何に引火したのやら火の海であり、どこかに良い出口は無いか、と探してみれば、衝撃で崩れたらしい本棚の裏に緊急脱出用らしきモノ。慌てて飛び込むもビルの一フロアを吹き飛ばす衝撃は伊達ではなく、既に途中で崩れ落ち頭は通る位の隙間はあるものの行き止まり。下手に崩せば二次災害があるために手も出せず。

しょうがないのでほとぼりが冷めるまで隠れていた、というわけである。

そして二人は吐かされる。

なぜ、こんな事をしたのかを。

下っ端とは言え、竜族のはしくれであり、それなりに力を持った彼らが、どうしてわざわざリスクの高い、竜神王の娘の誘拐などと言う、成功してもその後の人生に展望の描けない、しかも失敗すれば即処刑間違いないの犯罪を犯したのかを。

まあ、それ自体は仕事をさぼってたら上司に首にされたので逆恨みしました、というなんとも情けないを通り越してどうしようもない理由であったが、

そして、その話を持ってきたのが誰なのかを。

「…やはり黒幕が居ましたか」

「へ、へい、その靈格といい、まんざら嘘ではない、と思ったもので、すっかり…」

「…よいでしょう。貴方達、理由はともかくとして、まだ更生の余地があります。こちらに協力しなさい」

「許して頂けるんではないか?！」

「あつ、ありがとうなんだなっ!!」

「これからの働き次第では、ということですよ! 『鬼門! 聞こえますか!』」

性根が甘いのか、二人組に利用価値を見出したのか。それともこの際使える者は何でも使おうと言う美神的なものに染まりでもしたか。

司法取引を持ち掛け、その二人を手駒にくわえる小竜姫。そのまま鬼門達に念話で話し掛ける。

『鬼門? どうしたのです?』

が、返事が無い。

「ど、どうかしたのかな?」

「いえ、おかしいですね…鬼門たちと連絡が「あいづらなら外でおねんねしてるよ」ぐっ!」

小首をかしげながら、外の様子を見ようとしたりした小竜姫。

だが、その言葉の半ばで彼女の姿は瓦礫を巻きこみ吹き飛ばされ、イームとヤームの

視界から一瞬で外されていた。

そして、小竜姫の立っていた場所の背後に、先程までの話に出ていたローブ姿の妖しい人物がたっている。

おそらく小竜姫を襲ったであろう武器、刺又を振りぬいた格好の人物は、瓦礫の向こうに姿を消した、しばらくは動けないであろう彼女を鼻で笑ってその武器を何処かにかへと収める。

「く、うつ……！」

土煙の中から僅かに聞こえる小竜姫のうめき声、だが止めを刺す事が目的ではないのか、動けない事を確認しただけでローブの人物は興味を失ったように視線を外す。

「……ふん。音に聞こえた武神も、不意を衝かれればこんなもんさね」

「貴様はッ！」

「……こんな所に隠し通路かい。さて、鼠を炙り出すとしようかねえ」

ヤームの声を、いや二人の存在自体を歯牙にもかけぬまま、先ほどまで彼らが隠れていた通路に向かって片手を上げた。

その服の袖から滑り出るようにして、大口を持ったへびにも似た化物たちが何匹も飛び込んでいく。

「さ、さつきは、よ、よくもやってくれたんだな！」

今気付いた、と言うように、ロープの人物はそこで漸く二人に目を向けた。

視線に温かみなど欠片も無い、まるで蛇のようだ、と二人は思う。

が、しかし、その視線がすうと細められ、蛇のようだ、と言うのは間違いだったと二人は悟る。

眼前にいるのは、紛れも無く化け物だ。

「……雑魚どもが意外にしぶとい。いや、利用価値はまだあるか？」

何かを思いついたようにそう呟くと、そのフードを体から落とす。中から現れたのは、予想もしなかった姿で。

「——っ!!」

彼らを驚愕させた。

——それより数分後——

地下下水道をエンジン音をけたたましく響かせながら、滑るように進む一隻のボート。船上にあるのは美神たちの姿。そしてそのボートを追いかける先ほどフードの人物が放った大口の化物たち。

「ビッグイーター?! それにしてもあの数って反則じゃない?!」

ビッグイーターと呼ばれた化物たちの、その数、およそ50匹。周囲の状況と足手纏いと保護対象のことを考えればとりあえず。

「三十六計逃げるにしかず! スーパーニトロターボブーストチャージャー、オンツ!」
怪しすぎると言うか、安全性に全く気を使っていないのでは?と思わせるような装置のレバーを引つ張ると、案の定爆音とともに吹っ飛ぶような加速で下水道を駆け抜けるボート。

「うひゃあああああ!!」

「……………きやつほう♪」

「よしっ! 流石にこの速度には追いついてこれないみたいね。このまま一気に東京湾まで抜けるわよっ!」

「——美神さん!前っ!」

しかし下水道の出口には鋼鉄製の柵がある。

いくら多少の改造をほどこされたボートとはいえ、流石に鋼鉄で出来た柵に真正面からぶつかっても平気、と言う訳ではない。

むしろこちら側があつさり砕け散って、そのまま魚の餌になるのが関の山だろう。

しかし、美神は余裕の表情で、ボートに備え付けてあった小さな引き出しを引つ張り、中から小ぶりなりモコンを取り出した。

そしてそれを見せつけるように心配げな声を上げたおキヌに見えるように、目の前を塞ぐ柵に向けて操作して見せる。

「大丈夫よ、ちゃんとスイッチ一発で開くようにしてあるわよ」
が、開かない。

何度押しても開かない。

美神がりモコンを操作した後も、柵は依然としてその存在を示していた。

「あれ? …おキヌちゃん、乾電池とか持ってないわよね?」

「美神さー……ん!!!」

——東京湾——

静かな夜であった。辺りには船の姿も無く、近くには観光スポットも無く倉庫が広がるばかり、だった。突如爆音と閃光がその静寂を切り裂くまでは。

「備えあれば憂いなしっ!!」

「どこからそんなもの手に入れたんですか?!」

「お金があれば大抵のものは手に入るのよ、おキヌちゃん」

「へー、『からしにこふ』とか『くれいもあ』っていうんでござるかー」

「……うん、そう」

バズーカを肩に担いで未だ異常な速度ですつとばす船上にて勝ち誇る美神と、その姿に思わず突っ込むおキヌ。その後ろでは、簡易な武器庫と云うか兵器庫となっている船の倉庫を覗いたお子様二人がなにやらごそごそやっている。

教育に悪いとか言う前に、誰も何故か手慣れた様子で武器を扱いながら、何処となく得意そうに横島に説明する天竜には突っ込まなかった。

突っ込めなかったとも言いが。

星もあまり見えない夜空の下、東京湾に飛び出したボート。そして、

『キシヤアツ!!』

空から降り注ぐ閃光と、それに吹っ飛ばされるビッグイーター。

「美神おねーさん! あそこっ!」

忠夫が指差す方を見てみれば、そこにあるのは左手で閃光を放った後の小竜姫と。

そして、先ほど事務所に襲撃をかけた竜族たちの姿。

だが、それは

「2対1とは卑怯な!!」

どう見ても小竜姫と彼らが激しく空中戦を繰り広げている姿だった。

だが、地力の差か。見ている内にあつさりと小竜姫が2体をその手に持った神剣で撃墜する。海に落ちた竜族たちを眺めた後、そのまま手招きし、岸を指し示す小竜姫。

「さつすが武神ねー。なかなかやるじゃない」

美神たちは、こちらの最強戦力と無事に合流できた事で安堵しながら、その誘導に従って近くの倉庫街の栈橋へと船を着けるのだった。

「無事でしたか、天竜姫様」

特に2対1であっても怪我をした様子も無く、安堵した様子で天竜に声を賭ける小竜姫。

「どうやらそつちも無事だったようね、小竜姫。いきなり居なくなっちゃうから、どうしたのかと思つたわよ」

「ご心配をかけたようで…」

舞い降りてきた小竜姫を正面に、美神、おキヌが並び、更にその後ろに天竜と横島のお子様コンビ。

「さ、天竜姫様こちらへ。早く妙神山へ戻りましょう」

美神とおキヌの間をすり抜け、駈け出した小竜姫は、勢いそのままに天竜の前に立ち、手を伸ばす。言われるままにその手に向かって歩きだす天竜。何処となくほっとした様子であり、やはり小さいその身にはこれまで逃避行は負担となっていたようである。しかし、その歩みを止める者が、進み出ようとした天竜の手を握って放さない者がいた。

「…どうかされましたか？」

「犬飼君？」

小竜姫と美神の問いに答えず、ただ鼻を鳴らして辺りの匂いを嗅ぐ忠夫。

「美神おねーさん」

「なに？」

「小竜姫様とやらは、なんでござるか？」

「さつきも言ったでしょ？ 武神よ、竜神族の」

「…天竜からは、良い香りがするでござる。お日様の様な、暖かな匂いでござる」

「……」

不思議そうに横島を見る小竜姫。

だが、その表情の裏には、微かにではあるが苛立ちが見え隠れしている。そんな小竜姫の変化と横島の言葉に、美神は僅かに腰を落として神通棍に手を伸ばす。

「ですから、私が迎えにつ」

「だが！ お主には…全く、何も匂いが『無い』のでござるよっ！」

叫び、木刀でなくその中の仕込み刀を抜き放ち、小竜姫に向かって構える忠夫。

そしてその言葉を聞くと同時に懐から神通棍を取り出し輝かせる美神。

「…何者よ、あんた」

「み、美神さんまで、一体何を仰るのですか?!」

「その子は人狼よ。その直感と超感覚、知らない訳が無いわよね?」

「りゅ、竜神族の言葉が信じられない?!」

「あんたが——本物ならね！」

そう言い放ち小竜姫に向かって神通棍を振り下ろす。

「チイツ！」

が、小竜姫は舌打ちすると、腰から剣を抜き放ち、美神によって振り下ろされた神通棍と頭の間に際どい所でその刃を差し込む事に成功した。

「正体を現すでござる!!」

が、流石にその体勢で背後から追撃に放たれた横島の一撃を防ぐ手段は無く、その身に刃を受けながらも、強引に身を捻って跳躍して避けた小竜姫は——いや、その姿は既に小竜姫ではなくなっている。

「小僧がつ！ 一度ならず、二度までもつ！」

偽装をといた、紫色の長髪を柵引かせた蛇の印象を受ける女へと変化していた。

——数十分前、元美神除霊事務所——

「——つ!!」

彼らを驚愕させたのは、フードの中から現れたその姿。

「ふふふ……どうだい、そっくりだろう？」

その姿は、確かに先ほど昏倒し、未だ瓦礫の中に姿を消したままの小竜姫そのもの。

「な、なんのつもりだっ！」

「さあて、ね。あんた達を惑わせる為かもよ？」

「ふ、ふざけるんじゃないんだなっ！」

「さあ、眷属達も目標を見つけたみたいだし、せいぜい踊ってちょうだい——」

そう言い残し、飛び立つ小竜姫の姿をした何か。

「追うぞ、イーム！」

「わ、分かつたんだな！」

そして、それを追いかけて飛び立つ竜族達。

彼らはそのまま東京湾上空まで飛び続け、突然聞こえた爆音に海上を見下ろせば煙を突き破りかつ飛んでくる一台のボート。

『キシヤアツ!!』

そしてその後ろから這い出てきたビッグイーターたちを振り向きざまの掌からの閃光で吹き飛ばす小竜姫の姿をした何者か。

「っ！ なんのつもりだ！」

「これであいつらにとつて、『味方に見える』のはどっちだろうねえ？」

「——しまった！」

黒幕の手のひらで踊らされたことに気付いた彼らは、懸命にその事を伝えようとするも、それを見逃す相手ではない。

伝えに行こうとしてもまず妨害が入る。しかもし足止めに成功し、美神達に真実を

伝えようとも、果して彼女達が信じてくれるだろうか？

つい先ほどまで、天竜を追いかけまわしていた彼らを、まさか本人もいないのに小竜姫には許しをもらったから、と言えばホイホイ信じてくれるような相手でもあるまい。

小竜姫の顔をした誰かが、美神達に騙されるな、と言つてしまえばそれまで。後は敵を倒すのと同じ手順で、口を塞がれて終わりだ。八方塞がりではない。

「ち、畜生があああああつ!!」

数が多かろうと所詮は下つ端竜族。相手が悪すぎたせいもあつて、奮戦空しく退場させられた。

これで準備は整つた。あとは何食わぬ顔をして天竜姫を攫つてしまえば、向こうが気付いた時には既に遅い。

後に残るのは顔も、正体も分からぬ何者かが天竜姫を殺害したと言う事実だけ。地上の竜族たちと竜神族たちとの関係悪化は間違いない——筈だった。

半人狼の少年がイレギュラーと成りさえしなれば。

「力づくつてのは性に合わないんだがねえ…此処まできたらそんなことも言つてられないか」

「で、黒幕さん？ いい加減諦めて、名前ぐらい名乗つたらどうかしら？」

「ふふふ…諦めて？ いい冗談だ。その気概と、小僧の意外さに免じて名乗つてあげよ

うじやないか」

その言葉とともに放たれたのは、圧倒的なまでの、小竜姫に匹敵さえする巨大な魔力。

「…やば」

「私の名前は——」

眩きとともに一瞬で、欠片の油断も無く神通棍を構えていた筈の美神の懐に飛び込み、言葉の続きを耳元に囁く。

「メドーサつてのさ。冥土の土産に、持って行きな」

いっそ優しささえ籠ったようなその眩きとともに放たれた、先端が2つに分かれた槍は、明確な殺意とともに美神を一撃で吹き飛ばした。

「あ、がはっ！」

「ほお？ 今のを喰らつてたかが人間が生き延びるとはねえ！」

吹き飛ばされた美神は、そのまま倉庫の壁に叩きつけられ、沈黙する。息はあるようだが、もはや動ける状態にない。そして残ったのは、戦闘能力の無い幽霊少女と竜神の姫。そして。

「グルアツ!!」

狼のごとく、その刃を携え、こちらを見てさえいないメドーサに向かって飛び掛る半人狼の少年。

「ふん。思い切りはいい。その意気も悪くない。だが——弱い」

視線も向けぬままの横薙ぎの一閃。一振りで美神と同様に吹き飛ばされ、彼女より軽い身体は容赦なく堅い地面と触れ合いながら、壁の様な止める物も無かつた事もあつてか夜の暗闇の向こうへと消えていく。地面に叩きつけられ、只の一撃で体のあちこちからは出血し、おそらく骨も何本か持つて行かれています。

「……ふん」

暗闇の向こうであつても、完全に動く気配が無いのを感じ取つて鼻で笑つたメドーサは、その歩みを残つた2人へと向ける。

「や、やらせません!!」

「……」

その前には、怯える竜神の少女と、それを庇うように手を広げて立つおキヌ。その数メートル前で立ち止まつたメドーサは、誰にも聞こえない声でそつと呟いた。

「……あんた、幸せ者だねえ」

——痛い。

体中の骨が軋んでいるし、切り傷、擦り傷なんて数える事さえしたくない。

——痛い。

胸の辺りが熱い。多分2、3本は折れてる。

——イタイ。

一撃。只の一撃でもうボロボロだ。速い、重い、鋭い。そして容赦の無い、だが殺す気は無い一撃。

——怖い。

視界は歪んでいる。頭がふらふらする。もうこのまま目を瞑ってしまいたい。

——死にたくない。

勝てる気がしない。あんなのに勝てる訳が無いじゃないか。

「……いいさ。纏めて死にな。これだけたくさんお仲間が居れば、死出の旅路も怖くなんて無いだろう？」

相手が悪かったんだ。いいじゃないか、一矢は報いた、良くやったよ。

「美神さん！横島さん！——だれかつ！」

死にたく無い。

死にたくないんだ。

痛いのも、怖いのも本当は嫌だ。

「……助けて、犬飼君……!」

——それがどうしたあつ!!

「お、おとおおとおおとおおとおお!!」

「……存外にしぶとい。いいさ、纏めて死になつ!」

地を掻くように、もがく様にして立ちあがる。

傍らに落ちていた刀を、力の入らない手で握りしめ、駆ける。

身体が痛い。足がふらつく。痛みで視界が歪む。違う、痛みでは無く、何時の間にか零れていた涙で視界がけふる。

怖いから、痛いから、死にたくないから、涙が溢れる。

だが、もう涙は続かない。続かせない。

繰り出される槍が見えた。死、その物の様な鈍い輝きが顔に向かって飛んでくる。

この距離、この速度、そしてこの身体。

避けられるか、と問われれば、無理だ、不可能だと答えただろう。

無理は通らない。道理は引つ込まない。

戦いとは常にパワーゲーム。強い者が勝ち、弱い者が負ける。当然で、当たり前で、自然な事だ。

天秤を傾けるなら見合った錘が必要であるし、未だこの身はその錘には足り得ない。だが、だからこそ吼える。

「死んでたまるかつ!! 拙者が死んだら! 誰が護る!!」

そして、パワーゲームだからこそ、死に物狂いでもがく者だからこそ——チャンスの女神はその前髪を掴む機会をくれるのだ。

『良く吼えた』『良く言った』

『ならば』

『見せよ、未熟者』『証明せよ、小僧』

遙か遠くから響く重低音。いつか聞いた、銃声が後から来る超長距離からの射撃音。

その一撃は忠夫に向かって繰り出された槍を粉碎し、まるでメドーサを避けるように、だがその足元に確実に着弾し、そこから粘度の高い煙を吐き出す。

そして、魔弾の音はもう一つ。

「がはっ!」

その一発が、忠夫の胸に直撃する。

しかしその体を貫く衝撃と同時に、弾頭は忠夫の体中に、金色の光を放ちながら拡散

した。

「：間接部・ロック・解除。火器管制・停止。望遠モード・終了。改良型・ロングレンジ
ライフル・『テュポーン』・異常・なし。通常モード・復帰」

「ふむ、聞くまでも無いが、着弾はどうじゃ、マリア？」

「サーチ——敵性存在・武器・破壊成功。攪乱・成功。特殊弾頭・着弾・確認。指示遂行
率・100%と・判断します」

「よしよし。満月の光を凝集して練り上げた月光石と、我が錬金術の粋を集めた解呪葉。
うまいこと効いてくれるじゃろ」

「ドクター・カオス。引き続き・ダイレクト・サポート・可能ですが？」

「いらんよ」

「しかし」

「大丈夫じゃよ。そんなに必死にならんでもいいわい」

「ノー。ドクター・カオス。これは今後の・状況を鑑みて「いつになく饒舌じゃのう、マ
リア？」——ソーリー・ドクター・カオス」

「まあ見ておれ。あの程度で死にやせんだろうが、今回のはちとハンデがきついからの

う。只のご褒美じゃよ、この前の件の、な」

「理解・できません」

「かっかっかっ」

「くそおっ!!」

流石『ヨーロッパの魔王』謹製。その煙幕がメドーサを数十秒も惑わせたのは驚くべき、といってもいいだろう。そして、「彼」にはそれだけあれば十分であった。

メドーサが魔力を放つて煙を吹き飛ばし、辺りを確認する。しかし、周囲には既に誰の姿も無い。美神も。おキヌも。天竜姫も。横島も。

「つつあく! 痛え! あの爺、ぜってーわざとこんな使い方しやがったな!」

「……誰?」

「おう、気付いたか天竜」

「……犬飼君?」

「おっ、良く分ったな。びんぼくん! 大当たりく〜♪」

「……でも」

「まあまあ、俺にも実際よくわからんし。とりあえず、賞品は——あのおねーさんに帰ってもらうつてので、どうかな？」

「なぜだつ！ たかが小僧一人で全員を逃がせる筈がないっ！」

狂乱したように辺りの建物に魔力砲を打ちながら、ひたすら飛び回り搜索するメドーサ。

「どっこだ!! どっこにい——があつ!!」

その横手から、突然飛んで来た鉄骨は、狙いバツチリメドーサに直撃する。そしてその衝撃に動きを止めたメドーサに向かって次々と飛来するコンクリートの塊や、マンホールの蓋、ベンチや工具のたつぷり詰まった工具箱。

「なんつ、だあああああつ!!」

とつさに手に持つ折れた槍でいくらかは打ち落とすも、全方位から機関銃のごとくぶつ飛んでくる巨大な質量。支えきれぬ訳も無く、なすすべもなく、只、打ち据えられ

る。
「ふざけるなああああつ!!」

魔力を吐き出し、周囲に落ちた破片と、未だに飛んでくる壁や鉄の塊を跳ね返す。

が、何時までも出来るわけが無い。辺りにばらまく様に魔力砲を打ち込み、元を断た

んと移動しながら連射する。
が、止まらない。

避ける先に飛んでくる。それを避ければ今度はさらにその先を読むように飛んでくる。何とか打ち払って反撃の魔力砲を飛んできた方向へ打ち込めば、しかし全く見当違いの方向から散弾銃のように砕けたコンクリートの群れが高速で飛んでくる。

徐々に足場は失われ、だが空中へ逃げようとすればその飛び立つ為の一瞬の硬直で狙い澄ましたように痛撃を加えられ、体勢を崩して追い込まれ、再び魔力の放射で無理やり時間を稼がざるを得ない。

まるで、獲物が突然猟師に変わったような、無茶苦茶ながらもじりじりと体力と魔力を奪われる展開になりつつある。

しかも、確かに、非常識だが、誰かが投げている。しかも縦横無尽に倉庫街を駆け回りながら。だが、なぜ足音がしない？ いや——心配が無い？

「問題です」

「どっ——いや、誰だ貴様あつ!!!」

「人狼にとつて、狩りは日常。しかし、相手は凶暴で凶悪な野生の獣。仕留めるのに有効な手段の一つとは？」

「出て来い！ 姿をあらわせえつ!!」

何処からとも無く、いや、周り全てから聞こえてくるような、そんな声。その戯言が喋る間も、ひっきりなしに飛んでくるコンクリートの群。よく見れば、周辺の頑丈なはずの倉庫の壁や、地面が凄まじい勢いではがれていつているのが分かったろう。もはや打ち返す余裕も無く、ひたすら避けつつけるメドーサ。気付けば辺りにはそこらじゅうに障害物ができている。

そして、そのばかげた弾幕が唐突に途切れる。

「答えは、相手を興奮させて、こちらは気配を完全に消して」

「——っ!!!」

「急所を一突きで仕留める、ってな感じで」

——その言葉は、背後から、耳元に囁くようにして語られた。

『狼の牙。そは何の為に?』

「獲物を狩る為、じゃないのでござるか?」

『では、獲物は何の為に?』

「えーと?」

『なぜ我らにはこれほどまでに強力な牙がある?』

「護るため、かな？」

『それでは足らぬ。そも一つの答えであるが、まだ足らぬ』

「じゃあ、何が足らないんだ？」

『護る為の牙をお前は知った。ならば、それを持って、次の牙を見つけてみせろ』

「牙？」

『人狼としての、身体強化。月の力を受けた霊力の増幅は、お前の力を、人狼の力をさらに高めるだろう』

「…殴り合えってか？」

『さあな？』

それはまるで夢の中で。パイパーの呪いが月の力となんだか怪しい力で無理やり解けていく中で。いつか見た影法師との会合であった。

横島本人は気付かぬうちに、その身体は子どもから少年へと、元の姿へと成長していく。

彼の夢の記憶は、其処までで途切れている。

「……何者だ？」

メドーサの声には、既に先程までの激昂も、戸惑いも無い。

完全に冷静さを取り戻しつつも、後ろにいる誰かを振り向く事無く、その気配に向かつて声を賭ける。

「さあね？」

「人狼だと言ったな？ さっきのガキの仲間か？」

「どうだろね？」

だが、対する背後の声にも起伏は無い。だが平坦なままに、どこかふざけた調子があるが、同時に『こいつは、やり手だ』と感じさせるような決意があつた。

「答える気は無し、か」

「とりあえず、今日はこれでお開きにしません？」

「……殺さないのか？」

「まだまだ切り札持つてるでしょ？ 互いに痛い目見る前に、ここらが引き時だと思いませんか？」

「……ふん、狸が」

「人狼だつての」

その会話を最後に、あっさりとその姿を消すメドーサ。

「さっすがプロ。引き退きも鮮やか。あああああ、えー乳やった。嫁に誘ったら来てくれんかなー？」

そう呟いたのは、青年へと姿を変えた犬飼忠夫だった。

「わっはっはっはっは!!!見たか、マリア!!」

「横島さん・いえ・犬飼忠夫・及び・人狼のデータライブラリの・修正を・求めます」

「いらんよ。あれほどの膂力と速度、並みの人狼では不可能じゃ」

「彼は・半人狼では？」

「そうじゃよ？　ただ、『靈力を使わずに普通の人狼並みの力を出しておった異常個体』、じゃがな」

「——画像データ・保存・プロテクト…完了」

「いやいや、えーもんみせてもろうたわい。さて、帰るぞマリア」

「イエス。ドクター・カオス」

「わーっはっはっはっは!!!」

ヨーロッパの魔王と、鋼鉄の少女を見送るのは、只、半分に分かれた月のみ――。

第十六話。

ふと美神が眼を覚ますと、そこは彼女がGS見習い時代にお世話になった部屋のベッドの上だった。はつきりとしめない頭を押さえようと手を上げると、引き攣られるようにして脇腹のあたりから激痛が全身に走っていく。

「いたたたた!」

「美神さん! 気付いたんですね! 動かないでください!今、手当てしている所ですから」

「おキヌちゃん? え、えと…っ! あのクソお婆はんツ!! いだだだっ!!」

「あああ!だから動かないでくださいってば!」

「小竜姫様あああっ!」

「…なんですかもう、うるさいですよ、鬼門。あ、あれ? ここは…っ! 天竜姫様は?!
いだだだだっ!!」

「あああ!小竜姫様も大人しくしてくださいってば!」

「…ううう。体中が痛いつすく」

「横島さん！ 起きたんですか！」

一夜明けて唐巢神父の教会にて、あの後事務所を失った美神たちを運んだ忠夫はひとまず見知った彼を頼り、事情を話した後彼女達を預けて小竜姫達の搜索を開始。

ボロボロになった服の着替えやら手当やらをおキヌにお願いし、ついでに天竜にもおキヌを手伝うように頼んだ横島は、説明を求める事も無く救急箱やベッドの準備に教会へ駆け戻っていく唐巢神父とピートに頭を下げたい気持ちになりつつも、姿の見えないままの者達を放っておくわけにも行かないと急いで走りだした。

それこそ神速といった速度で、彼女達を背負るやら首にしがみ付かせるやら肩を掴ませるやらとした非常に奇妙な塊が、深夜とはいえ都内を駆け巡ったのだから怪談の1つ2つ発生していそうである。

そして程なく事務所跡地で回収、そのまま駆け戻った所で、今度はガス欠に陥った忠夫がダウン。元が彼の力とはいえ、いきなりのその身体能力に体の方が慣れていなかった為か全身に激痛が走り、気絶。

全員目が覚めた時に最初に放った言葉が冒頭のもの、となる。

程なくして、朝の礼拝を済ませた唐巢神父がまるで野戦病院の一室と化したようなその部屋に入ってくる。

「おや、皆起きたようだね」

「あら、先生。すいません、いきなりこんなみつももない格好で」

「いやいや、かまわんよ。それよりも、一体何があつたんだい？　美神君どころか、小竜姫様まで居られるじゃないか」

「それが、私にも何がなんだか…小竜姫様が此処まで運んでくれたのかしら？」

「いや、横島君だよ。昨夜遅く、いきなり飛び込んできてね」

体のあちこちに包帯を巻いた美神に対し、手に持っている朝食代わりの果物——近くの住民のおすそ分けである——を駆け寄ってきた天竜姫に渡しながらそう答える唐巢神父。

「へ？　横島君、ですか？」

「そうだが？」

「おつきい方の？」

「そもそも小さい横島君を私は見ていないのだがね？　パイパーに呪われたという話は君からも聞いていたが、以前見た横島君だったよ。ほら、あそこ」

「へ？」

そう言われて見てみれば、そこには確かに元に戻った横島。

「……ん」

「いや、天竜。自分で食べられるから…」

「……んー！」

「……あーん」

「♪」

なんだかほのぼのとした空間を作り上げていた。

体がまともに動かないので、ベッドごと意外に元氣そうだった鬼門たちに運んでもらい、ソファアに座りなおした忠夫を正面に美神と小竜姫。

忠夫の座っているソファアの前にあった机を挟んで置いてあった一人掛けのソファアを動かして、右に唐巢神父、左にピートが腰掛ける。ちようど机を囲んだ形になる。鬼門達はベッドに体を起こした小竜姫の横に控えているし、おキ又はこちらも同様に体を起こした美神の隣に浮かんでいる。天竜はといえば、何故か忠夫の膝の上。懺悔を求める神父の視線が痛かった。

「…横島君、犯罪だよ？」

「横島さん…そんな、子供に手を出すなんて。自首してください」

そう苦しげな声で忠夫に語りかける唐巢神父とその弟子ピート。

「て、天竜姫様?! あああ、また不祥事が……！」

「お、御氣を確かに！」

頭を抱えて取り乱す小竜姫と、その横で慌てる鬼門達。

「おキヌちゃん。すぐに警察に通報…は、色々面倒くさいわね。神通棍と玉葱を」
「はいっ！」

そして冷静に見える美神がおキヌに指示を出す。迷わずそれに従うおキヌ。

「つてちよつと待ていっ!! 俺が一体何したツちゅーんや!! …お、ありがと天竜」

「「「自分の姿をよく見てみなさい」」」

「あうあうあう」

「……♪」

慌てて突っ込むも、膝の上に天竜を乗せ、彼女手ずから剥いたでこぼこの林檎を「食べて」とばかりに突き出されている格好である。しかも天竜姫の表情が満足げであるというこれらの素因は、忠夫の発言権そのものを著しく磨り減らしていった。

しかし忠夫もこのままでは犯罪者の烙印を押される所か、正面の上司と膝の上の少女の護衛によってこの世から消されてしまう。

「ち、違いますよ! 天竜は友達であって「天竜姫に対して無礼なっ!」——うわわっ!」
そう否定の言葉を発するも、小竜姫が何処から取り出した神剣を一挙動で確実にこちらの頭部に向かって投げつけてくる。

「あつぶな——!」

「か、片手で止めますか今のを…」

「……お〜」

ぱちぱち

正に目にも止まらぬ速さで投げつけられた其れを、完璧に見切つて柄の部分握りとめる忠夫。唾然とするのはむしろ其れを見ていた周りの者達であつた。

無理に動いたせいで体中に走つた激痛に必死に痛みと涙を堪える小竜姫と、横島の膝の上で拍手する天竜姫は除く。

「いや、実は——」

とりあえず場の空気が変わった事を利用して、ようやく昨夜の説明に入る忠夫であつた。

「あの後、そんな事になつてたのね……」

「くっ！ 武神ともあろう者が……」

メドーサに言い様にしてやられた美神と小竜姫たちは悔しげに呟きながら布団を握り締める。

「え……じゃあいままで靈力無しでアレだけの事やつてたんですか?!」

「君はつくづく非常識だね…」

「こっちはこっちで頭痛を堪える仕草をする唐巢達。」

「あ、あの、ありがとうございます」

「……ありがとう」

「いやいや、俺もおキヌちゃんと天竜の声が聞こえなかつたら頑張れなかつたわけだし」

「それは私達のために頑張ってくれたってことですよね？ だったら、やっぱりお礼を言わないと…」

「……その通り」

「そしてなんかフラグでも立ったか？ というような反応をするおキヌと天竜姫にひたすら戸惑う忠夫。」

「むしろ、結局何もしてないのう……」

「そして部屋の隅っこでその巨体を縮めて黄昏れる鬼門達。」

「でも、よかつたよ」

「ええ、皆無事に帰れた訳ですし、横島さんのおかげですよ」

「ん？ ああ、それもあるけど」

「そう呟いて、皆を見回す忠夫。」

「…あんな馬鹿みたいに強い奴から、護れたんだなあって思つて、さ」

その視線には、確かに誇りと、そして大きな喜び、それよりも大きな安堵がある。

「……あ」

最も近くでその表情を見た天竜姫は、心の底から湧き出てくる感情に戸惑いを感じていた。

「へえ……いい顔をするようになったじゃないか、横島君」

「へ？」

「どうやら、君にとつても得る物の多かつた一夜となつたようだね」

そう言い残し、唐巢神父は立ち上がる。

「さて、これから依頼が入っているのですね。夜まで出かけさせてもらうよ。行こうか

ピート君」

「はい、先生」

そして彼らはそのまま出て行った。

「さすがつすね〜」

「え？ なにがですか？」

「夜まで帰つてこないつてから、それまでに唐巢神父に聞かれちゃまずい事があるんなら相談しておいて、それから協力できる事があるならそれを話してくれば協力するつて事だよ、おキヌちゃん」

「へく、そうなんですか横島さん」

「…あんた、ちよつと変わった？」

「へっ？」

神父の心遣いを弟子である美神と同じ程度に正確に受け止めた、ということに少々納得はいかないものの、それでもやはり子供になる前とはちよつと違う。そう考えると、やっぱり変わったようにも思うし、前からそうだったようにも思えてくる。

——成長した、というのだろうか。

「それで、どうやってあのメドーサって名乗った奴を追い払った訳？ あんたがなんかやったんでしょ？」

「メドーサっ?! 竜族ブラックリストの中でもトップクラスの奴じゃないですか!」

「あー、やっぱりそんな奴でしたか。ええ乳しとったのに残念やなー」

「で、死にたいのか喋るのかどっちかにしたらどう？」

「…:…むー」

「横島さん？」

正面と真下から突き刺さるような視線を受け、おキヌの輝く黒い笑顔を直視した忠夫は慌てて意識を過去の映像から引き戻す。

「ええつと、どうやってといわれましても…:ただのハツタリなんすけど」

「「はあ?!」」

実際の所、忠夫が背後に回ったとして一撃で、しかも反撃の暇さえ与えずに仕留めることができるか、と言われれば答えははっきりと「ノー」である。靈力に目覚めたとはいえ、その力はいくらでも身体強化。内向きの力なのであるから、靈的な存在である魔族に対して効果的な攻撃を繰り返せたか、というは無理だ。

身体強化で可能なのは拳や足を使った物理的な攻撃のみ。相手が靈的な存在である以上はこちらも靈的な攻撃を行なわない限り多少のダメージとはなっても致命傷とはなりえない。つまり、あの時点で忠夫は手詰まりになつていたのである。

「ですから、こつちにもまだまだ切り札はあるぞー、って思わせることで、なんとか痛み分けてっていう形で引いてもらつたようなもんですよ。逆に相手が損得勘定のできない馬鹿だったら死んでましたねー」

「…なんと言う無茶を」

「…馬鹿はあんたよ」

そう呟き再び頭を抱える美神と小竜姫。

「なんせ初めて使ったわけですからねー。おかげでもう体中ボロボロ」

忠夫の体、本当の所は結構ヤバイ状態である。今も人狼としての超回復が働いているとはいえ、昨日酷使した足は動かすことさえ辛い状態。いくら軽いとはいえ天竜姫も結

構な負担になつてゐるはずであるが、そこを顔に出さない辺りが意地という奴である。

「……ごめんなさい」

「天竜？別に気にするこたあないぞ」

「……でも」

「え、え、え？」

その言葉を聞いていたたまれなくなつたのか、瞳から涙を零す天竜姫。それを見て慌てて周囲に助けを求める視線を飛ばすが、誰も彼も見てもみぬ振りをするばかり。諦めたように「ふう」と溜息をついた忠夫は天竜姫を抱えなおし、自分の目線と合わせて優しく語りかけた。

「女の子が泣いちやだめだろ？俺は天竜が笑つて居られるようにがんばつたんだから、さ」

「……でも」

「天竜はまだまだ子供だろ？ ……それなら、大人になつてから恩返しでもしてくれればいいや」

言葉とともに涙を拭き取る忠夫。その表情に嘘偽りの色は一欠片もなく、ただ、照れくさそうに笑つてゐるだけ。

「……あ」

彼の手から伝わる暖かき。言葉に籠った気恥ずかしき。表情に表れる優しき。そんなものを受けた天竜姫の心から溢れきった感情は頭の角の部分から零れ出し、彼女の頭に新たな角を生み出していった。

ぼとん、と落ちた天竜の角と、目の前で一瞬で生え換わった新たな角。

状況を理解できない横島達の眼に、言葉も出ないほどに驚いて口を開け閉めしている小竜姫達が見えた。

「へっ?」

「……これで大人」

「へっ?」

「りゅ、竜神族の角の生え変わりは大人になった証とされます。生え変わりとともに神通力などが使えるようになるのですが、こんなに突然……」

「……だから、皆に恩返し」

そう言葉を残し、忠夫の膝から降りていった天竜姫は、そのまま小竜姫のいるベッドの傍らまで歩いていく。

「……小竜姫、心配かけて御免なさい」

「いつ! いいえ、そんなもったいないっ!」

「……我は誓い告げるもの。武を司る竜の癒しをもって、天なる竜の謝意とする」

頭を下げた天竜が、体を起こし告げた祝詞に導かれるように、その体から舞い上がった光の粒が小竜姫に降り注ぐ。

「う、これは…」

全ての光の粒子が小竜姫に降り注ぐと共に、小竜姫の体からは全ての傷が跡形もなく消えていた。そのことに驚く小竜姫を余所に、今度は美神の所に歩み寄る。

「……ポート、楽しかった。ありがとう」

「……いいけどね」

そんな理由なのか、となんとなく納得のいかない表情であるものの、美神もその言葉を受け止める。

「……我は誓い告げるもの。強き乙女の癒しをもつて、天なる竜の感謝とする」

再び天竜の体から舞い上がった光の粒子が、小竜姫と同様に美神の傷を癒しきる。そして最後に忠夫の所に駆け寄った天竜姫はソファーに座る忠夫の横に飛び乗る。

「お、俺にもやってくれんの？」

「……護ってくれて、ありがとう。遊んでくれて、嬉しかった。だから」

にこりと笑ってそう告げると、再び天竜姫は祝詞を唱える。

「……我は誓い求めるもの。人と狼の狭間の者への誓いを持って、天なる竜の想いとなれ」

「ああああああああっ!!!」

「へっ?」

祝詞が終わると同時に、忠夫の頭を引き寄せて、その唇を奪った少女は、につこりと微笑むと再び忠夫の膝の上に陣取った。

後に残されたのは何が起きたのかわからないと言うか、わかりたくないと言った様子の忠夫と、その様子を見て「不祥事です不祥事です不祥事です…」と頭を抱えて眩きつづける小竜姫。

相変わらず部屋の隅で膝を抱えている鬼門達。「あらあら」と果てしなく恐ろしい笑顔を浮かべながら横島達を眺めるおキヌ。それを見て怯えてベッドの上で体を縮めながら「あっちゃー」という感じで顔に手を当てる美神。そしてにこにここと笑う天竜姫だった。

「……………また」

「お、おう」

「全く、えらい散財だわ」

「…竜神王陛下になんとか報告すればよいのやら」

「あらあら」

「…俗界の女性も変わったのう」

何があつたかは定かではないが、真つ青な顔をした忠夫を前に天竜達は別れの挨拶をしていた。

「ええと、それでは、今回のご協力に感謝します」

「感謝はいいから報酬の方お願いね」

「はあ…」

「……落ち着いたら迎えに来る」

「いや、あの、犯罪者になっちゃうんですが」

「へへ、まだ犯罪者ではないとおっしゃる？」

「お、おキヌちゃん？」

最後の最後まで嵐を巻き起こしながら、彼女達は空へと消えていったのであつた。

「さて、事務所は無くなっちゃったし、次の事務所を探さないとねー」

「どうするんすか？」

「ま、とりあえず適当に不動産屋でも当たるわ。あんたも今日は帰んなさい」
「ういーっす」

答えると忠夫は家路に着く。その後姿を見送っていた美神に、背後からかけられる声。

「GSの——美神——さんで——すね？」

「そうだけど？」

「——事務所は——お入用では——ないです——か？」

ロングコートと顔を隠すつばの広い帽子。

片言と言うか、途切れ途切れに聞こえる言葉。

どうしてこうも厄介そうで、でも靈感的にも断るに断れないような依頼ばかり続くのか、と美神は一人こめかみに指を当てるのだった。

「兄上、遅いでござるなあ」

「おなか減った」

—— おおっと、クリーンヒット！ボールは転々と転がって

ばたばた。×3

—— ショート素早く送球っ！アウトッ！判定はアウトですっ！

ばたばた・・・ばた。×3

「む、やはりやきうは楽しいでござる忠夫は里では見せてくれんならな」

「そうやって尻尾を振るから怒るんだろーが」

「しかし、こればかりはどうしようも——

—— カキーン！

—— おおきいっ！こくれは、おおきいっ！

ばたばたばたばた。×3

「しかし、もう肉は無いのでござるか」

「お前が食べ過ぎだつて犬飼」

「いや、お前の方が食べておる」

「そんなのどつちでもいいでしょ…」

「いや、これは——」

突然、人狼の親父達の額に閃光が光る（イメージ映像）。

「な、なんでござるかこの悪寒はっ！父上っ！」

「…久しぶりに感じたな、犬飼」

「ああ。これは間違いなく」

「な、なによ？」

「チヨウロウが現れた」

「長老でござるか？」

「——逃げるぞ！犬飼っ！シロもそこの娘も遅れるな！」

「——この気配…あちらから来るぞ。拙者が殿をつとめる」

「ちよつと、説明しなさいよ！」

「心配するな！見れば分かる!!」

「きたぞっ！」

遠吠えと共に現れたのは、半獣化した、人狼の里において、長老と呼ばれる老いた人狼であった。

「きくさくまくらあああああつ!!」

「ひいっ!!」

「後ろに向かって全速前進!!」

「な、なんでござるか(なのよ) あれはっ!!」

「…長老が本気で怒ると結構危険なのだ」

「この前は、里が半壊したからなあ」

「あ、あれは天災つて言つたではござらんかあああつ!!」

「ああ。そりや嘘だ」

「ちちうええええええええつ!!!」

「まゝてゝええええええええええつ!!!」

窓を蹴り破つて逃げ出していく4人組を追いかけて、ナマハゲもかくやと言つた様子の長老が追いかけていく。

暴虐の嵐の後、程なくしてコンビニで買い物済ませた家主が帰つてきた。

「な、なんじやこりや…」

後に残されていたのは、扉のぶつ壊れた玄関と、溜め込んでおいたはずの燻製肉が一欠けらも残さず消滅している開け放たれた押入れ。所々に巨大な爪跡の残つた畳や壁と、部屋を中心に残された、黒いオーラを放つ風呂敷包み。

「ゴッド。俺なんか悪いことしましたか?」

彼は呆然と立ちすくむしかなかつた訳で。

「やあ」再び此処を訪れてくれたようだね？そんな君に、今回はこんなお話だ。

平行世界は知っているね？

そう、今自分が存在している時間軸を一本のレールとするならば、その隣に無限に並ぶレールたち、というのが近い表現かな。

レールはその先々で分岐していて、その世界はどんどんと分かれたれていく訳だ。

このレールの分岐点、もちろんそれぞれこそ無限に近くある訳だが、時に大きな分岐にぶつかることがある。そのとき、そのレールの上には必ず、世界に選ばれた存在つて言うのが、いるんだよ。

世界が滅びるかどうか、というまさしく己の死活問題に対して世界が干渉する唯一の方法。それが「選ぶ」ということなんだよ。彼らは世界の鬼札。時に救い、時に滅びの要因とさえなる。

それでも世界は選びつづける。彼ら、という表現はちよつと違うが、世界と言うのも中々難儀しているのかもしれないよ？

だから、そう。

——そんなに憎むもんじやないのかもしれない、とだけ覚えておいてくれたまえ。

——ふふふ、それでは

——よい夢を。

第十七話。

天竜達が帰り、夜が明けて次の日の朝。

早朝の新鮮な空気の中を、瘴気とさえ言えるような暗い雰囲気を纏ったまま歩いてきた横島を迎えたのは、教会前の掃除をしていたピートだった。

虚ろな目のままふらふらと促されるままに教会内に入った横島は、傷を治してもらったおかげかももう普通に動けるようになり、身体の調子を確認がてら事務所のあった場所まで様子を見に行っていたおキヌと美神が帰ってきてても教会の祭壇の前に体育座りのまま、殆ど動きを見せずにいた。

唯一動いているのもと言えば、その口元ぐらいだ。

「……ふつふつ」

「…おキヌちゃん？あのうつとーしいのどうにかなんない？」

「まあまあ美神さん、空き巢にあつた直後なんですから」

「…俺の肉俺の家俺のTV俺の服…」

誰が声を掛けてもまともな反応を見せず、体育座りで十字架を見上げて呟き続けている横島だった。その呟きを何とか聞き取ったおキヌによると、どうも家が空き巢にでも

あつたようで帰宅するとひどい有様だったらしい。

それもその筈、家に帰り着いた忠夫を向かえたのは、半壊した扉の立てかけてある玄関と、荒れに荒れた部屋の中。爪跡に引き裂かれた人狼の里で着ていた普段着に、替えの服2着。そして壊れたというか原型を留めていないTVと、空っぽの食料庫。

彼は崩壊した部屋の窓と玄関から朝日が差し込んで来るまで呆然とした後、ふらふらと歩きながらいつの間にも教会に到着。

そうしてそんな様子で横島に慌てた様子で声をかけるピートと、騒ぎを聞きつけた美神たちが忠夫を発見するも、昨日見た姿とのあまりの落差に固まるばかり。ようやくGS協会后事後報告を済ませ、肩を叩きながら帰つて来た唐巢神父もどうしたものかと腕を組んで溜息一つ。

平日なのでミサ等はやって無いが、たまに来る客人や近隣住民が、もし、教会の中で救われない様子で十字架を見上げている少年を目撃した日には、神父の立場としては色々不味かろう。

そんな彼らを余所に、祭壇の前まで歩み寄つた忠夫は、荒らされた部屋の中にただ一つ残されていた遺留品らしき物、怪しすぎる包丁を懐から取り出した。

啞然とした様子で見守る他の面々の前で、彼はそれをおもむろに振り上げる。

「…斬る」

一言だけ呟き十字架に歩みはじめた。まるでその背中は処刑上に向かう聖人のようだった、とか誰も言わないが。

「待てー！ー！！」

たまらないのはキリスト系の技を使う唐巢神父とその弟子ピート。なにせいきなり弟子の助手が教会の象徴を叩ツ斬ろうとしているのだ。

たとえ偶像崇拜が禁止されていたとしても、やはりそれは教会に通う人々にとつての心の拠り所。いきなり破壊されては困ったなんていうレベルの問題ではない。

それより何より。高いのだ、アレは。

「お、落ち着きたまえ横島君！」

「一体全体何を考えているのですか?!」

「はなせええええつ!! 武士の情けでござるううううつ!!!」

慌ててしがみ付く神父達を引きずりながら、一步一步目標に近づく忠夫。伊達に人狼の血を引いちやいない。成人男性2人くらいなら軽々である。

「これは復讐でござるうううつ!! 神は死んでるんだから良いでござろうがああああ
!」

「教会関係者の前で吐く台詞じゃないわねー」

「そんなに大切なものでもあつたんでしようか?」

頭を抑えながら止める気も無く、その様子を眺めるだけの美神と、のほほんと呟くおキヌ。

「拙者のお肉の仇イイイツ!!」

「それ、うちの教会とは絶対関係ないだろうっ?!」

「とりあえず落ち着いてください横島さああああん!」

「…ほんとに何があつたのかしらねえ」

「横島さん、微妙に幼児退行起こしてますねー」

「今の拙者は神でも斬れるぞおおっ!!!」

「斬るなああああつ!!」

・・・・要するに八つ当たりである。

ひとまず錯乱する忠夫をフルパワーの神通棍でシバキ倒し、「何かあつたのなら家であろう」と当たりをつけた美神が様子を見に行つて見れば、そこにあつたのは荒れ果てた忠夫宅。

「……」

「これは…酷いですね」

「…なんでこんな金の無きそんな所に?」

結局全く原因不明ではあつたが、面倒くさくなつて引き摺つてきた横島を部屋に放り

込み、置手紙に「明日朝十時教会前集合」とだけ書いた紙を額に張り付け。とりあえず元に戻るまでは放置して教会にてもう一夜を過ごすことにした美神たちであった。

次の朝、教会に訪れた横島は会話もできたし眼も虚ろではなかった。

しかし、なんだか雰囲気荒んでいた、とだけ言っておこう。

内心鬱陶しいと思いつながら、まあ役に立たない訳ではないのだから、と昨日横島が引きこもっていた一日の内に現金一括で購入してきた車に乗り、事務所の崩落に巻き込まれながらもなんとか無事だった霊具の数々と一緒に目的の場所へ出かける一行であった。

「とりあえず、昨日の妙な奴の紹介してきた建物は此処ね」

「ほえ。おつきな建物ですね」

「大きいには大きいけど……大分ガタがきているみたいよ。まあ、場所自体は一等地だから手を入れれば結構——」

瞬間、美神の靈感に違和感が走る。

「お待ち——して——おりました。美神除霊——事務所の皆さん——」

その声に振り向けば、確かに昨日この話を持ち込んできた全身を覆うコートに顔が見えないほどに大きな帽子を被った人物の姿。

こちらに危害を加えようと言う意思は感じられない事に美神は警戒のレベルを一段

落とす。

が、何時でも即対応できるように緊張の糸は切らない。特に、突然誰も居なかった筈の場所に出現するような怪しい人物が相手ならば。

こちらが警戒しているのを嘲笑うように、或いは全く気にも留めていないように、その人物は相変わらず途切れ途切れの聞き取りにくい言葉で話しかけてくる。

「約束の時間ちようどのはずだけど？ …それより、本当なんでしょうね？」

「——ええ。この建物の——最上階に——権利書を——用意してあり——ます」

「で、そこまでたどり着ければこの建物が私の物つて訳ね」

「御自分——達の力で——とつてこられたら——という条件付で——すが。それでは——

——御武運を」

最後の一言だけを明瞭に喋り、そのコートは中身が無かったかのように地面に崩れ落ち、そしてその中からは案の定何も見つからなかった。

「いやに霊波の単純な奴だったわね…まるで人工の幽霊みたい」

「人工の幽霊、ですか？」

「ええ。私も実物を見たことは無かったけど…戦前、そういった研究をしていた人がいたって話よ」

「ええっ?!」

「確か名前は——渋鯖男爵、とか言ったかしら」

振り仰げば、そこには先ほどまでは無かった存在感を誇示する洋館。まるで先程まで居た人物が乗り移ったかのように、平坦な霊波を発し始めたその建物が、軋むような音を立てた。

その音の発生源を探して視線を下げれば、ぽつかりと開かれた扉が手招きするかのようになんかに動いている。

「ふん、さっさと入って来いってか。面白そうじゃない、行くわよ、あんた達!」

そう言い残し颯爽と開かれた扉に歩み寄る美神。

「横島さん! 美神さんが呼んでますよ!」

「…へーい」

そして未だ立ち直りきっていない忠夫を引きずりながらそれを追いかけるおキヌ。こうして旧渋鯖男爵邸の冒険は幕を空けたのだった。

—— 玄関 ——

扉をくぐって中に入ってみれば、確かにそこら中痛みは見られるものの、ほとんど埃の積もっていない床。

「…ふん」

辺りを一通り眺めた後、鼻を鳴らし歩みを進める美神と、その後には続く忠夫達。

「――返すつもりは無いってわけね」

そして全員が扉をくぐると同時に閉じる玄関。おそらくこの屋敷の裏方は、簡単に開くような仕掛けはしていないだろう、と思ったが、美神は頭を一度振るとその考えを捨てる。

何せ相手の目的がなんなのかは不明だが、こちらの目標は最上階の権利書を獲る事。

目的地までの邪魔はされるかもしれないが、こちらが無理だと判断して逃げ出したら、それはそれで特に何もされずに脱出する事が出来るような気がしたのだ。

「いや、結構簡単に開くかもしれないわね……まあ、ここまできたら、進む以外の事をするつもりはないけど」

玄関から視線を外し、再び前を見ればそこには何時の間にか一体の全身鎧の姿。

「……へ？」

『第一の関門です。その鎧を倒してください』

機械的な音声が無処からともなく響き渡る。その残滓が消えると同時に動き出す全身鎧。

その鋼の小手に包まれた手が腰に下げたロングソードを抜き放つ。

瞬間、風を切り裂いて鋭い剣閃が美神に襲いかかった。慌てて後方に飛びのき、しか

しそれでは足りずにもう一度横つ跳びに避ける。と、先程まで美神がいた場所の後ろにあったソファーが真つ二つに切り捨てられた。

その鈍重な見かけからは思いもよらない連続攻撃に、慌てて神通棍を伸ばし応戦にはいる美神。

「プロの剣捌き?!」冗談じゃないわよ! 横島君!

そちらが剣士ならこちらは侍、とばかりに横島の名を呼ぶが。

「ケツ、ケツ、金持つてやがんな、何か高そうな絵じゃねえかオイ」

その横島は恨み辛みがぶり返して来たのか、壁に掛けられた不気味な絵に向かつてひたすらに現実逃避気味に愚痴っている真つ最中であつた。

「あああ! まだやってたんかっ!!」

美神が意識の外に置いていただけで、彼は玄関をくぐつてからずっとそうである。

「きゃあっ!」

突つ込みで意識を逸らした美神の眼前すれすれで通り過ぎていく前身鎧の剣。

「や、やばっ! ——横島君!」

「横島さんっ! 美神さんが危ないんですつてばあー!」

が、どうにも反応が芳しくない。おキヌがその肩を掴んで必死に揺さぶっているがま

るで根を張ったように動かない。

どうも軽くトラウマと言うか精神に傷を負った状態になっているようで、外部からのなまやかな刺激には反応しづらくなってしまうているようだ。

あるいは急に目覚めた霊力のせいもあつたかもしれない。それまで無かつた物が急に
ある、という感覚を一晩中、或いは目覚めてからこれまでずっと慣れない感覚、違和感として感じていたのだから、本人も大きなストレスを感じていたのだろうが、空き巣にあつたと言うインパクトと混じり合つてこのタイミングで爆発したらしい。

いままでストレスなんていう物とは無関係な生活を送つてきた本人と、どう見てもストレスなんて感じそうにない、お腹一杯ご飯食べて寝れば元氣フル充電になるような性格としてとらえていた周囲が気づかなかつたというのが致命的だったのかもしれない。
が、現状ゆつくりとカウンセリングを受けさせている時間も余裕も無いのだ。

「ぶつぶつぶつぶつ」

だから、美神はとりあえずストレス発散がわりに生贄でも差し出してみる事にした。
「あなたの部屋を荒らした犯人は、この屋敷の一番上にいる…気がするわ。多分、いる」
美神の一声が、忠夫を変えた。

それまで横島の肩を揺さぶっていたおキヌささえ気付かぬうちに、美神にもかろうじて見えるくらいの速度で、横島の姿が消える。

最早残像でさえ捉え切れるか、と言った速度で美神の横を駆け抜けた横島は、その懐から一本の包丁を取り出し、眼前の西洋鎧に躍りかかる。

不意打ち気味の横島の攻撃にも全く怯む様子を見せずに剣を振り下ろす西洋鎧。

が、その剣が地面を抉るよりも、その身体が間接ごとにバラバラにされて吹き飛び、壁に叩きつけられて甲高い音を立てる方が早かった。

「ふ、ふふふふふふふふつ!!」

「——かも、しれないわよ。つて聞いちゃいないわね」

「み、み、み、美神さんっ!!」

いつの間にやら再び取り出した怪しすぎる包丁は、そのぬらりとした輝きを一層増しながら忠夫の手の中で目覚め始めた。そして彼がふらりと地面に突き刺さった金属で出来ている筈の剣の隣を通り過ぎると同時に、それは見事にばらつばらとなつてあたりに散らばつた。

「俺の肉とTVと服と部屋をカエセエエエツ!!!」

「…壊れたかしら」

「横島さああああん!!」

残像を残し、床でなく壁さえ走りながら特攻する忠夫を見送りながら、「ちよつと失敗しちやつた、かな？」などと他人事のように呟く美神であつた。

程なくして。

上のほうから響いてくる爆音という以外に表現の仕様の無い音と、狼の遠吠え。

「あれ？」

「…美神さん。この建物、残つてると良いですね」

『ちよつと待った——!!』

まさか此処までとは思つていなかった忠夫の身体能力に、計算が狂つた感じの美神。ちよつど幾つか関門とやらを壊した後で力尽きてくれるはずだったが、何気に建物を更地にしそうな勢いである。慌てるのは謎の声。

『あ、あの方は一体なんなんですか!!』

「うちの助手」

『どんな助手がここまで破壊活動を繰り返して言うのですかー!!!』

「あんなのが」

「さすが横島さんですよねー…あははは」

半分諦めたように、残り半分で呆れたように呟く二人。若干遠い目になっているのは御愛嬌と言うやつか。

だが、二人揃つてそう言いながらもじりじりと玄関に向かって後ずさりを始めている。辺り、この建物の末路を予想しており、それが二人とも一致しているのは間違いないだ

ろう。

『ああああああっ!!! ダメだこの人達いいいいっ!!!』

気付くのが若干遅かった。

『ああっ!! それは男爵が大事にしていた高価な壺——「ちよつとまったあ!!」』

しかし、謎の声の一言が、その場の空気を一気に変えた。

それまで重心が後ろにかかっていた美神の姿勢が、まるで駈け出す直前の肉食獣のようになり、靈力が体中から噴き出し始めている。

そして何より、眼が? マークだった。

「壺?! いくら位の?!」

『相場は知りませんが、歴史的にも貴重な——ああっ! その絵画だけは——!!』

瞬間、横島に引けを取らない、いや、先程の横島を超える速度で消える美神。

再び響く爆音と、今度は幾度か聞いた狼の悲鳴。

「美神さん……」

大体何が起きたか察したおキ又は、ほろりと涙を零しながら、とある半人狼の冥福を祈る様に疲れた溜息を吐いたのだった。

『……もういいです。これ以上破壊を広げる前に、とつとつその椅子に座ってください』

おキヌが美神とミンチ寸前の忠夫に追いついたのは、最上階のおそらく最も中心部。そして疲れたように投げやりな声が響く。

周囲はボロボロに破壊しつくされておき、辛うじてその部屋の中心部にあつたデスクと椅子が無事なくらいだった。

横島と美神は知らないが、本来ならばここには一步步ごとに年齢を重ねさせる特殊なトラップが仕掛けられていた。

が、美神と追い立てられた横島が扉をぶち破つて侵入した事により、声の主はトラップを発動させる為の靈力を切つたのだ。別に彼らの事を思つてやつたのではない。

中心部たるこの部屋を彼らの破壊行動から守る為、残り少ないエネルギーをトラップに回すよりも、防御と修復に回さないと、彼と彼女が老いて動けなくなる前に自分の存在自体が消えてしまうかもしれない、と思つたからだ。

そして結果として回せるだけのエネルギーを回したにもかかわらずのこの部屋の荒れようであり、二人を止めてくれたおキヌに言葉では言い表せないような感謝の気持ちを抱えつつも、それを超える疲れの籠つた声で漸く落ち着いたらしい二人に話しかけたのだった。

「ええ？ あら？ いつのまにこんな所に……」

「——っは！ こころはどこっすか?!」

そして限定的とはいえ靈力に目覺めた忠夫は——いや、おそらく関係ないが——あつさりど復活を果たす。どうやら現世復歸も果たしたようだ。

「ええと……ここに座ればいいのね？」

『そうですよー。それが玉座ですよー。これで貴方はこの事務所のマスターですよー』
 拗ねたような声と共に、いかにも倒壊寸前だった建物は光と共に新品同然へと変化していた。まあ、仕掛けも閨門も全部ぶつ壊されりやあそりや拗ねたくもなるだろう。

「いいのかしら？ もうちよつとこう、なんかトラブルとか無いの？」

『これ以上私の中を引つ掻き回さないでくださいいいいっ!!!』

どこか不満げな美神の問いに、悲鳴が答えとして帰つて来た。

「……まあいいか」

そして美神は忠実な僕と、あらたな拠点を無事手に入れたのだった。めでたしめでたし。

『一体何処で間違えたんだろう……』

はじめの一步目からである。

その頃、とある空き巣の四人組。

「ぜえ、ぜえ」

「はっ、はっ、はっ」

「も、もう走れないわよ・・・」

昨夜遅くに襲撃を受けた人狼三人と狐の少女は、そのまま逃避行を開始。何時の間にかあたりは鬱蒼とした森となっていた。

「ち、父上は何処でござるか？」

「さ、さあ、拙者も逃げるのに必死でござったからなあ・・・」

「きゅ〜」

しかし、どうやら犬塚父とははぐれた様子である。

「で、此処は何処でござるか？」

「わからん。本能の命ずるままに走ったでござるからなあ」

「・・・あんた達ほんとうに無駄にタフよね〜」

まだ疲れが抜けていないのか蹲ったまま動けないタマモに対し、人狼達は既に息も整い普通に会話している。

「とりあえず、この森を……む、何奴っ！」

がさっ

「あれー？ポチさんにシロちゃん、何時里に帰ってきたんですかー？」

「へっ？」

本能は本能でも帰巢本能だったようだ。そして――

「み〜つ〜け〜た〜ぞおおおっ!!!」

「げっ!!!」

結果報告。チョウロウ——戦果：人狼二人と狐一人。その後、力を使い果たし気絶。

シロ——振り出しに戻って一回休み。

タマモ——同上。

ポチ——なぜか無傷。

名も無き人狼——ポチに盾代わりに使われた。長老を見ると体が震える。

一方もう一人の人狼。

「ふう、なんとか逃げ切れたよーだな。お、いい匂いじゃないか」

犬塚父は他の皆とはぐれた後、いまだ東京にて潜伏中。

「こりやまた懐かしい。赤提灯の屋台かあ。もう無いと聞いていたんだが」

「うおおおん〜」

「…ふう、どこにでもまなりのなっていない奴はいるもんだなあ」

そしてその前にはいわゆるガード下の赤提灯。その椅子に座って浴びるように酒を飲んで涙を滂沱と流しているのは、頭にやけに立派な角を持った、良い歳した渋めの長髪のおっさんだった。

第十八話。

黴と埃の匂いが鼻をつく。長い間人の手が入っていないのであろう室内は全体的に埃っぽくなつてはいるが、涼しいと言える程度の室温と乾いた空氣が淀んでおり、全く光が入らないことから考えておそらく保管庫として使われていたのだろう。

部屋の全ての壁には棚が備えられており、本や小箱、何かの液体が詰まったフラスコや乾燥させた正体不明の葉草らしき物、最早用途不明の機械の塊があつたかと思えば、片隅には図面だろうか、複雑な直線と手書きの文字がぎつしりと書き込まれた大きめの紙束が転がっている。

しかしそれらは時間の経過を感じさせる様子でありながら、不思議と黄ばみや劣化等は見られず、押し並べて表面を覆う埃さえ取り除けば状態は良さそうに見える。と、光の無い部屋の一角が、切り取られたように長方形に開いた。

見た目はただの木の扉に見えるそれは、がたつく事も音を立てる事も無くスムーズに開く。

久しぶりの空氣の流れに乗って、開かれた扉の向こうに氣流に巻かれて舞い上がった

埃が飛んでいく。

その先にいるのは、不快な表情で口元を布で押さええている老人と、全く動ずる事無く立っている女性に見えるアンドロイドだった。

老人が指を弾く。

音が保管庫の中に響き渡ると同時、空気の流れが逆転した。それまで中から外へと流れていた空気が、まるで巻き戻しのよう逆流していく。

暫く待ち、その流れが止まったのを見計らって老人が一步目を踏み入れた。が、今度は暗さに思い出したように足を止める。先程鳴らした指を、扉の近く、室内側の壁に探る様に這わせていく。

その指先が、ぱちりと音を立てて何かを押した。

途端に明るくなる室内。換気は指を鳴らしただけで可能なのに、照明は何処にでもある壁の普通のスイッチだった。

「ふーむ、何処へしまったかのう？」

辺りをぐるっと見渡し、目的の物を探しながら歩みを進めていく。が、それは見つからないようで、首を捻って困惑したように首を捻った。

「ドクター・カオス。搜索範囲を・広げ・ますか？」

「そうじゃのう…今度は、あっちの方じゃ」

全く日も入らない、光源といえば天井の切れかかった白熱球に見える光る石の様な物のみ。此処はドクター・カオスの製作物が大量に収納してある倉庫。自称『ヨーロッパの魔王秘密基地』。

別に基地としての機能があるわけでもないのだが、ここを知る人間が他に居る訳でもなし。

「おかしいの……この辺だと思っただんじやが。おい、マリアー？」

「……」

「その惚れ薬は実は未完成品でな〜？」

何かの薬品が入った瓶と、その表面に書いてある『惚れ薬』の三文字、それを食い入るようにつめていたマリアは、頭一つ分長身のカオスが上から自分の手元を覗きこんでいる事に気づき、両肩を一瞬震わせた。

「……………なんで・しようか。ドクター・カオス」

「まあいいが。探し物を探すんじやぞ〜」

「イエス。ドクター・カオス」

「……………わるい影響ば〜っかりうけおって」

無表情ながら、何処となくしよんぼりとした雰囲気で瓶を棚に戻すマリアを横目に、カオスは小さく呟いた。

しばし後。

「——？ ドクター・カオス。これは・一体・なんで・しょうか？」

「ん？ おお！ 懐かしいのー。これはな、お前の妹の設計図だった物、じゃよ」

部屋の隅に積み重ねられていた紙束の群れ。そこから零れ、縛っていた紐が解けたのか中身を晒していた一枚を手に取り、マリアは尋ねる。人体を模しながら、しかしその中身は機械と錬金術、そして魔術の三つで構成されている事が彼女には分る。

なぜなら、それは彼女自身を構成している物でもあるからだ。

「イモウト・ですか？」

「然り。ただ、やはりメタソウルが安定しなくてなー。結局あいつに任せてほつたらか
しじや」

「ドクター・カオス。協力者が・居たという・情報・ありませんが。やはり・とは？」

「ん？ んー、まあ知らんでええじやろ。もう会う事も無かるうて：ほれ、そんなことよ
り、ほれ、此処に惚れ薬の完成品が」

「……………ノー。ドクター・カオス。マリアには・必要・ありません」

えらく長い間——驚くべきことに——迷った風であったが、しばらくしてはつきりと

そう言い残し、何かを振り切るように歩いていくマリア。

「——ふん。「やはり」とはな」

確実に彼女の耳でも聞こえない距離に遠ざかった事を確認し、呟くカオス。

「お前のメタソウルには、彼女の魂の欠片、と、いつても、その残滓のような物じゃが、それが使われておるのじゃよ」

マリアが歩き去っていった方向を眺めながらそう呟いたカオスの目には、懐かしむような色と、過去を遠くに見る物特有の遠い視線がある。

「つまり、お前は、真実マリア姫とわしの娘、なのだよ。少なくとも、私はそう想っているとも」

呟く老人の声には張りがあり、若さがあった。例え昔の、未だ青年と言えた頃の事を思い出した事で蘇った僅かな間とは言え、苦さと、情熱と、そして限りない優しさがあつた。そしてその父性が、娘の幸せを——只、願う、父としての想いが宿っていた。

突如マリアが歩き去った方角から響くまるで何かか何かと正面衝突してその上やら中やらから中身が全て落ちて来たような轟音。

「…敵襲。格闘戦モード・起動・します」

「まていつ！ …ええい、妙な所まで姫に似らんでもいいものを！」

「ノー。ドクター・カオス。動揺など・ありえませんし・悔しくも・ありません」

語るに落ちるとはこの事か。

今日も今日とて美神除霊事務所は繁盛している。新しい事務所も無事手に入り、ますます大車輪のように依頼を受けまくっていた。

本日の依頼は——首都高荒らし退治。

夜な夜な高速道路に現れては、高価なスポーツカーを突如後ろから現れ追い抜き、高笑いを上げながらそれをぶっ壊すという、中にはた迷惑なモノの除霊依頼であった。

「ひー！ 速いっす怖いっすー！」

「やかましい！ あんただってこれぐらいで走ってるでしょうが！」

「んなわきやないでしょーがー！」

「…そーですかね？」

そんな訳で夜の首都高を愛車で流してみれば、実にあっさりとは犯行現場を目撃。そのまま横で喚く半人狼とのほほんとした幽霊少女を無視して時速250kmでのカー

チエイスに突入する美神であった。

「美神さん！ 後ろから何かがきます！」

「うそっ?! 首都高荒らしは2匹いたっての?!」

「キャインキャイン！」

前を行く怪しい影を追いかける美神たちの車の後ろから、これまた異様なスピードで追いかけてくる影。そしてとうとう助手席で丸くなって頭を抱える忠夫。

そちらに意識を取られていた隙に、前方の影は突然速度を落とし美神たちに並ぶ。その影は2本の角と4つの目をもつ、いかにも凶悪な面構えをした鬼であった。

「悪いが、勝負はお預けだっ!!」

そう美神たちに一声かけると、助手席で丸くなっていた忠夫の襟首を掴み、後ろの影に向かって投げつける。

「——へっ?」

「横島くんっ!」

「横島さんっ!」

あつという間に流れていく視界と、美神たちの声。そして、凄まじい速さでこちらに衝突するコースを取りながら突っ込んでくる頭に鉢巻を巻いた、まるで作り物のような顔をしたもう一体の影。

そこまでを確認した忠夫は、おもむろに身体を伸ばし、両足を揃え、その怪しい影に綺麗に一直線に体勢を保ったままで突っ込んで行く。

「人狼！ サイクロン・ドロップ・キイイイック!!」

空中で無駄のない無駄に完璧な身体制御を見せつけると、見事な捻りの効いたいわゆるドロップキックがその影の顔面に突き刺さった。

そのままの勢いで後方に飛んでいく横島と、前方から来た不意打ちを全く予想できずに直撃された影。

影は綺麗にのけ反り、だが慣性の法則には逆らえずあつという間に不自然にねじ曲がった格好で高速道路の中央分離帯を破壊しながら転がって行く。

横島はと言うと、地面との摩擦で煙を上げながらも影との衝突で勢いが殺された事もあって、何故かポーズを決めながらきっちり着地に成功していた。その様はまさに、往年の昭和のバツタヒーローをどこか彷彿とさせる。再放送か特集でも見たのだろうか。

前方で激しいブレーキ音がしたかと思うと、慌てた様子で車を降り、走りよる美神とすつ飛んでくるおキヌ。だが、「おもわず殺っちゃったー♪」てな顔をしている無傷で平気そうな横島を発見し、

「なんで生きてるのよ（ですか）！」

と、なんとも理不尽な叫び声を上げたのは仕方あるまい。

「——つまり、あんたもあいつも韋駄天なわけね？」

「はい、そして私は仏の道を踏み外し、鬼へと落ちたあいつを捕まえに来た八兵衛という者……だったのですが」

「……あー。不幸な事故って事で一つ」

「……ええ、避けそこねた私にも確かに非はあるのですが……ですが……」

とりあえず忠夫を一発しばき——『心配させるんじゃないわよっ！』という心の叫びは当の本人さえ聞こえていないようであったが——昏倒した方の影を呪縛ロープで簀巻きにした後の事情聴取で、あつさり今回の件の裏は分かった。問題は。

「しかし、これでは……」

「あんたの協力はちよつと無理ねー」

——ほとんど真上を見上げるような状態で固まった首を、なんとか体を折り曲げて会

話しているという今の状況であろう。

「ほらほら、おキヌちゃん、あれ気持ち悪いよな」

「すぷらったですよ」

「だよな。よくあれで生きてるよな。神様って凄いと初めて思ったよ」

「でも、あれくらいならいつもの横島さんだって」

「反省の色、見せてあげたら？」

「え、なんで？」

「しくしくしく」

「「うわ、キモ」」

膝を抱えて体育座りの体勢を取ると、顔が自動で正面を向く素敵仕様である。

自称正義の韋駄天を名乗った眼の前の怪しい神様、八兵衛曰く、現在自己修復中だが、かなりの時間がかかる事が予想され、次に現れた場合にはおそらく対処しきれない、ということ。何せ前が見えないのだ。確実に事故る。前方不注意で。

と、いうわけで――

「君なら、できる！」

「がんばってね」。横島君

「ふぁいとです！ 横島さん！」

「なんでじゃー!!!」

まだまだその靈力で増幅された身体能力を使いこなせていない忠夫がその力を使いこなせれば、あのスピードくらいは出るんじゃないかという美神の案が現時点で決行可能な最も効果的な作戦として採用されたのである。：作戦成功率が100%前後になりそうな採用理由である。

そして――

「今日はまずバイクが相手よツ！ と、いうわけで最近事務所の前を走る暴走族に生身で勝負してもらってきてね♪ ちなみに修行だから出来るだけ攻撃しないで、ちゃんと道路を走ること♪」

「それ、ぜってー関係ないでしょ?!」

「いいから、私の安眠の為にとつとと行けー!!」

と、深夜に玄関から蹴りだされる横島。

ごろごろと勢いのまま転がって行き、道路まで移動した彼の真横でブレーキ音とエンジン音が響き、そして若い男達の荒っぽい怒声とバイクのライトが彼に当たった。

「おうおうおうっ!!? なんだにーちゃん? 俺らのロードの邪魔をするってーのかオイ!?」

「貴方達ー。その人があんなトロい走りじゃ俺が走ったほうが速いぜ! って言ってたわよー」

「[[[[[[なにいつ?!]]]]]]」

「ひい?!」

「がんばってねー」

ひらひらと全速力で走り出す忠夫と、その後ろを追いかけていくバイクに乗ったいかにもな人々を笑顔で手を振りながら見送る美神。

「鬼ー! 悪魔ー!」

「しっつれいねー。ふああっ…さ、煩いのは居なくなつたし寝ましよーか、おキヌちゃん」

「横島さん、大丈夫でしょうか？」

「危なくなったら適当に切りぬけて帰ってくるでしょ。それくらいできるわよ」

次の朝、ボロボロになって帰ってきた忠夫の手には、何故か大切そうに握り締められたバイクのキーがあった。向こうの空間を一緒に覗いたことで、友情が芽生えたらしい。

そして彼女達の安眠は守られる事となった。

「んじゃ次は車ねっ！　という訳でしつかり付いて来るのよー」

「車と俺の手を手錠で繋ぐ必要があるかー!!」

「だって困るじゃない。逃げられると」

「逃げる逃げない以前の問題でしょーが!!」

「除霊つてことで特別許可も取つてあるから大丈夫。行くわよー!!」

「お願いだから話を聞いてえええええ!!」

忠夫の必死の抵抗も何のその。呪縛ロープと美神の念入りの手錠は横島の手首がっちりと掴んで放さない。それでも必死に着いていく横島。段々と速度が上がっていき、それに吊られてロープの遊びも徐々に少なくなっていく。このまま行けば現代版西部劇、馬で引きずられる男の出来上がりとなる。

「死ぬー！　絶対死ぬー!!」

「もしこれについてこれたら、嫁の話、少しは考えてあげても良いわよー」

「おっしやああああああっ!!!」

だがしかし、美神の一言で忠夫、フルパワー。

もはや爆音のような強い踏み込みは、アスファルトに忠夫の足型を残してへこみ、そしてその反発は忠夫を一気に美神の車へと押しやった。

トランクに着地する忠夫。

「うっしやああああっ!!!」

「うん、この調子ならいけるかもしれないわね……てな訳でもう一回♪」

っん。

トランクという物の、美神の車のその部分は結構丸い形をしている。そんな所でガッツポーズをとっていた忠夫。当然その足元はひじょーに不安定である。そんな所を神通棍でつつかれれば当然。

「……あっ？」

落ちる。

ガッツポーズのまま落ちていった忠夫は、何とか一回転して地面に着地。

だが、それをバックミラーで確認した美神は鼻歌交じりにアクセルを思いつきり踏み込んだ。

再び張りつめるロープ、引つ張られる横島。

その光景は、彼がとうとう体力を使い果たして地面に（摩擦で）熱いキスをするまで続けられたのだった。

「さて、とうとうあの韋駄天からの挑戦状が来たわ。相手は新幹線だけど、ね」

そんなこんなで1週間。忠夫は限界に挑戦しつつけ——そしてその都度ポロポロになりながらも立ち上がっていた。その目に光るのは自信の光：にしてはやけにドロドロしている。

「ふ、ふふふふふ…」

「美神さん、横島さん大丈夫なんですか？」

「さあね？ まあ、やることはやったわね！」

こちらは自信満々に言い切る美神。

「不安だ…」

そう呟くのは未だ首の曲がった八兵衛。

やるだけやったというより、やっちゃった感が否めないのである。

何はともあれ挑戦状の指定した日。美神たちはグリーンシートで体を伸ばしながら、ゆっくりと鬼の到着を待っていた。

「来ないわね。怖気づきでもしたかしら？ ところで横島君は？」

「ええと、さつきまでおつきなバッグをござござやってましたけど、八兵衛さん連れて

どっかに行っちゃいました」

「昨日からなんだか色々やってたみたいだけど……秘密特訓でもやってたのかしら」

いや、姿があるのは美神とおキヌのみ。半人狼の少年の姿は無い。どうやらこの車両には居ないようである。とはいっても、挑戦状が届けられた時点でこの依頼は同時に鉄道会社からの依頼ともなり、今は美神たち以外に客の姿は無い。

「——来たわね」

しばらく後、美神の靈感に反応があつた。そしてそれは確かにあの夜感じた物と同じ。

「勝負だアアツ!!」

そう雄たけびを上げつつ走って来るのは、やはりあの鬼であつた。しかし、

「その勝負、まったあああつ!!」

その気迫に水を差す叫び。

「む、何奴!」

その声に導かれてそちらを見れば、新幹線の上に仁王立ちする忠夫。とりあえずスピードに対する恐怖は無くなったようだ。

「何のつもりだキサマツ!」

「勝負に入る前にこれを見るがいい!」

「九兵衛、もうこんな事はやめるんだっ！」

そう叫びながら忠夫に引きずり出されたのは、ロープでぐるぐる巻きの韋駄天八兵衛。

もちろん首は真上を向いたまま。

「……へっ?」

そのあまりにも意表を衝かれた光景に、以前凄まじい速度を維持しながらも唾然とする鬼。そして、その意識がそれが一瞬で全ては片付いた。

瞬きするほどの間に、三つの音が連続して響いた。

初めの音は、忠夫が投げつけた真つ黒に塗られた呪縛ロープ鋼線入り（両端に石が括り付けてあつて足に巻きつくようになってゐる。いわゆるポーラ。）に新幹線の横を走っていた九兵衛が足を引つ掛けた音。

次の音は転んだ彼が凄まじい速度のまま線路の下に敷いてある砂利へと枕木をぶち折りながら突つ込んだ音。

最後の音はあまりの勢いに止まらなかつた鬼がやつと止まり、崩れ落ちた音である。

いつか人狼の里を抜け出すときに使つたトラップの応用であるが、今回はそれに加え視覚的なショックを与えることにより一時的に隙を作り、その後視認し難い黒塗りのポーラとして簡単に切れないように加工した縄ですつ転ばす。あとは勝手に自爆して

くれる、というわけである。

そして仕上げに――

「駆けつこがしたいなら人様に迷惑のかからん所でやらんかいっ!!」

「うわわわわわあああつ!!」

新幹線から高く跳びあがり、眼下で沈んでいる九兵衛に向かって人質に取っていた八兵衛を投げつける。

高高度から高速で投げつけられた韋駄天は、流石に受け身を取ることかなわずそのままボロ雑巾のようになった元韋駄天にぶち当たる。

辺りに轟音と砂煙が広がった。

「…げふ。」

こうして、元凶と役立たずは一まとめに片付けられて、いっちょ上がり、となったのだった。

「ちっ! せつかく『きれいもあ』とか仕掛けたのにあっさり一発目で倒れるんじゃないっ!!」

どうやら、まだちよつと黒い。

「あらら、あの神様死んだかしら?」

「むちゃくちゃしますねー、横島さん」

「そうねー。もう少し先にせっかく仕掛けた落とし穴とか地雷とか虎バサミとかよく滑る油とか、全部無駄になっちゃったじゃない」

「…美神さんもじゆうぶん同類ですよね」

結局似た物同士な雇主と従業員だった。

その後纏めて縛ってダンボールに詰めて妙神山へ送りつけ、今回のお仕事、無事終了となったとき。

さて、その韋駄天達が送りつけられ、段ボールの中から出現した韋駄天二人が絡み合った余りにもおぞましいオブジェを目にした鬼門達の悲鳴を上げた日より日付は幾分か戻り、妙神山の入り口。

小竜姫と鬼門は、ようやく帰り着いた我が家を懐かしむように見上げていた。

「天竜姫様。ようやく戻ってこれましたね」「天竜ううううっ!!」…竜神王陛下!？」

感傷はさておき、とりあえず天竜姫をくつろげる場所に案内しようとしたその矢先に、門の中から駆け出てくるのは確かに竜神の王。

「天竜！ 無事だったかつ！ 父は、父はつ！」

感極まって抱きつこうとする竜神王を余所に、天竜姫は

「……お父さん。ちよつと」

入り口に入つてすぐの少し広くなっている所で父親を手招きする。

「ん、なんだい天竜？」

「……竜神の王たる血を持って、開け天界の門」

おもむろに祝詞を唱えようと、それに答えて開く竜神族の王族専用門。天界と人界の両方の窓口として存在する妙神山だからこそ存在が可能な、天界への直通路である。

「天竜っ！ まさかもう大人に！」

「……はやく」

その光景を見て、娘の成長を喜ぶべきか、早すぎる成長に寂しさを覚えるべきかと戸惑う父親の手を引つ張りながらとてとと入つていく天竜姫。それを呆然と眺めていた小竜姫たちは、なんとなくいやーな予感がびんびんにするのであった。

その門の出口は竜神王の城にある一室だった。そのまま父親の手を引つ張り人の気配のある方向へと歩いていく天竜。行きつく先はとある大きな会議室だった。

「へ、陛下。お早いお帰りで」

「いや、娘がな……」

ざわめく家臣たちに本人も良く分らないと言った表情で生返事を返しながら、野球でもできそうなほどに広い空間の一段高い場所に拵えられた立派な椅子、常ならば家臣たちの話し合いを竜神王が座って聞いている場所まで歩いていく親子。

そして、自分達の主のあまりに唐突な登場にざわめきがだんだん収まって行く。それもその筈、今回の妙神山で行われる予定の会議は、それ自身が竜族全体に対する竜神王の権威と支配を確たるものにするという重要な役割を持つ上に、付け加えて天竜のお披露目と婿探しも予定されていたので、これほど早い期間で戻ってくるとは予想していなかったのだ。

そして、たまたま何かの会議の途中だったのか、周囲に集まる家臣たちを見回した天竜姫は、

「……証人は十分」

と呟くと、もそもそとその服の袖に手を突っ込む。

「……というわけで、くーでたー」

「「「「「「「へ？」」」」」」」」

いきなり父親に袖口から取り出したごつつい銃を向けた。

「……私と犬飼君の結婚を認めるならこのままお父さんが王」

「て、天竜？」

「……認めないなら私が王で犬飼君を嫁にする」

「いや、あのだな？」

「……どっち？」

「その、犬飼君つてのは誰なんだい？　ちよつとお父さんに教えてくれないかなー？
なんて」

途端に頬を赤らめ、恥ずかしそうにもじもじとする天竜。彼女のそんな様子は、父親であつても、いや父親であるからこそ何でも言う事を聞いてしまいそうなインパクトがあつた。

額に押し付けられたままピクリとも動かない銃口が無ければ。

「ま、まさかあああああああああつ!!!」

「……お婿さん(ぼ)」

「て、天竜のおませさんー!!!」

「へ、陛下ー!!!」

やけに情けない捨て台詞を残しながら、祝詞どころか最低限の言葉さえ唱えずに緊急脱出用のゲートに向かって走り去る竜神王。そのまま、その姿は俗界へと消えていつ

た。

「陛下?!」

「どー、どーすんだよおいつ!」

「いや、だつて!」

喧喧諤諤。そう表現するのがふさわしい。

「だいたい犬飼つてのは誰なんだ!」

「そうだ、そんな何処の馬の骨とも——キットスゴイヤツナンダロウナー」

「アア、オレモソウオモウヨ」

迂闊な一言を放つたばかりに、下顎に銃口を突き付けられた家臣の口調が途端に棒読みになった。

その光景を見た周囲の者達も同様に、冷や汗を流しながら、見た目に似合わない威圧感を放つ少女の迫力に押され、腰が引けている。

この騒がしいなか、その一言を聞き分ける辺り、さすが竜神王の娘というか、恋する乙女は無敵というか。

そして、物音一つ無くなり、針の落ちる音さえ聞こえそうなほどの静寂に支配された「……お父さんが王なら犬飼君お婿さんだし、嫌なら私が王になる」

手に持ったままのごつつい銃と、未だ収まらぬ王としての風格を纏ったまま、少女は

花開くようなほほ笑みを家臣たちに見せた。
「……どつちに転んでも犬飼君は私のなの」

その夜。事情をよく知らない者から見ればクーデターで王の座を追われた竜神王、実質はいい歳した大人の家出だが、ともかく彼は人界のとある赤提灯の屋台で泣きながらやけ酒をかつくらつていた。

「うおおおおおん！親父、もう一杯!!」

「お客さんく。そろそろ止めといた方が…」

「うるさい！　いいから早く持つてこーい！　金ならあるんだぞ！　客だぞ、俺はあつ！」

そう言つて懐から取り出した金塊を屋台の親父に投げつける。

かなりの速度で風を切り裂いて投げつけられたそれを事も無げに受け止めた親父は、溜息をつきながら足元に転がした。既にそこには数本の金の延べ棒が転がっていて、これだけで残りの余生は十分すぎる程に暮らせるだろう。

が、親父は興味無さげにそれをひとまとめにすると、一升瓶と一緒に竜神王に差し出した。

「…まあ、長い人生辛い事もあるだろうさ。今日はとことん付き合つてやる。が、これは返す。やけ酒に多すぎる金は不粋さね。あんたが酔い潰れられるだけの分は貰つてるよ。まあ…飲もうや」

そう言つて、親父は前掛けを外しながら屋台を周り、竜神王の横にコップと酒瓶を持つて座る。

「おお。ここのうのもいいな」

と、其処に屋台の暖簾を掻き分け、犬塚が訪れた。

「おや、今日はもう店じまいだよ」

親父はそう言つて振り向きながら入つてきた男を見て、軽く謝罪の言葉を投げる。

「そりや残念だ。それではまたの機会にでも…」

しかし、再び暖簾をくぐつて出ていこうとした人狼の背に、手酌で酒を注ぎながら、肩越しに親父が再度声をかけた。

「違う違う。金は要らんからあんたもこのおっさんに付き合いな、つて事よ」

手招きする親父の前には、コップが三つ並んでいた。

第十九話。

「ふんふーんふーん。今日日の！ めーしは！ なんだろなー！」

その日も忠夫はいつものように、『事務所所で食事を貰うついでに仕事をしよう』という雇い主に知られたら間違いなく酷い目にあう事を考えながら出勤していた。

自宅からいつもの散歩程度の速度、大体時速40km程で、ちよつと近道と屋根の上や塀の上などを適当に足音も無く進む横島。

その速度もあるが、本人にとっては障害物など在于てない様なものである為か、距離に比べればかかる時間はそれほどでもない。流石にビル群を超えるのは面倒くさいので（出来ないとは言っていない）、基本的にあまりこういった近道は通らないのだが。

ちなみに、野生の性か足音は殆ど立てないため、いまだに苦情は無い。が、『夜中に4階建てのビルの窓の外を何かが走っていった』とか『飛び降り自殺しようとしたら本人も知らないうちに地面に立っていた』とかの都市伝説や奇妙な噂の一つや二つはあったりする。

ともあれ、事務所へそろそろ到着する忠夫の視界に、いつか見た妙神山の門番達の姿が見えた。

常人の眼では殆ど豆粒にしか見えない様な距離ではあるが、無意識的な靈力の扱いにもほどほど慣れて来たお陰もあってか視力も随分と強化されているようだ。

「あれは…：鬼門達じゃん」

鬼門達の姿を確認すると同時に、ブロック塀の上で最後の跳躍。

跳躍時の音量がそれなりに聞こえるのに対し、着地時の音が聞こえるかどうかといった程度に小さいのは、跳躍が弾丸のような軌道で、それこそ地を這う様な、という表現がぴったり来る物だった事と、着地の際その衝撃を完全に殺した柔軟な膝のバネがあり、そして完全にコントロールのされた身体能力の賜物であろう。

どうやら、韋駄天の件の際に、何度も限界突破したのは無駄にはならなかったようである。これを見越して美神が鍛えたのか、と言うと、瓢箪から駒とか柵から牡丹餅とかいう諺が彼女の脳裏を通っているのがなんもとはや。

「よっー」

「うおおっ!!」

何時の間にやら接近されていた鬼門達は、横島の挨拶に驚きの声を盛大に漏らした。二人で雑談をしてはいたが、周囲に対する警戒を怠つてはいなかった筈なのに、横島の姿は気付けば彼らの隣にあつた。武神の住まう妙神山、その修行場の門番としての面目はどうしたのだろうか。

「何時の間に来たのだ?!」

「たつた今」

「…あー、気付いたか? 右の」

「聞くな。左の」

もう（面目が）無いじゃん。

「お前等が居るってことは、もしかして?」

「ああ。小竜姫様の依頼でな」

「…んじゃー!」

その言葉を聞くと、無駄に爽やかな笑顔を振り撒きつつ右手を上げて去つていこうとする横島。よくよく見ればその額には冷や汗がしつとりと浮かび始めている。今は隠れて見えないが、表に出ているならばその尻尾は見事に股間に挟まれていただろう。

「何処に行くつもりだ?」

しかし、彼の右手と左手を握つて確保する鬼門達。黒スーツにグラサンの巨体達に掴

まれた横島は、サイズの差のせいもあつてか見た目がはやMIBに拉致される宇宙人である。

「いやー、だつてさ？」

「うむ？」

「俺、あの人に会つて碌な目にあつた覚えが無いんだよなー」

きつぱり言い切る忠夫。確かに出会い頭に斬り付けられたり、変な影法師呼び出されたり、逆鱗に触れて怒らせてパーベキュー&ミンチ（自業自得）になつたりと。家は彼女と再開したその日に荒らされたし。

とは言え斬りつけられたのは事実としても、彼女の触れてはいけない事に触れたのは彼自身であるし、最後の一つに到つては彼女に責任は全く無い。まるで疫病神の様な扱いをされては、小竜姫自身もさぞ不快であろう。

そして、その証拠のように、横島を両側から捕獲する鬼門達は背後で膨れ上がった怒気に気付いて揃つて眉間を押さえて溜息をついた。

「まあ、竜神に向かつて無礼千万な。仏罰の意味を体に叩き込んであげましょうか？」

「いやー。小竜姫様は今日もご綺麗でっ！ じゃあ僕ちよつと行く所がありますんで……」

硬直した笑顔のままそう言つて鬼門達の手を振り切つて逃げ出そうとした横島の首

に、そつと冷たい金属の刃が添えられた。

「送つて差し上げましょうか？ あいにく行き先は三途の川に文無しで、ですが」

「すみませんっしたーっ！」

結局命は長らえたものの、ばつちり話を聞いていた小竜姫はあの時の暴言を思い出して大変ご立腹であつたらしく、横島は口は禍の元という言葉を体で覚える事となつた。

「…まあ、ほつといてもどーせ何食わぬ顔で直ぐ元通りでしょ。で、小竜姫様？」

「ええ。あれは置いておいて、美神さん、依頼を受けて頂けるのでしょうか？」

小竜姫の手によつて事務所の片隅に転がされた物体にちらりと目をやり、微妙に動いているようなので大丈夫だろうと決め付けた美神は、改めてソファーに座りなおした。

「GS協会に対する魔族の浸透を妨害して欲しい。口で言うのは簡単だけど…」

「第一に、そのことに対する確かな証拠がありません。第二に、人間が協力しているとい

う情報があり、そのためうかつに手を出せません。下手に手を出せば、向こうはあくまでも人と魔の契約と言ひ張るはずですから」

小竜姫が持ち込んできた依頼は、以前天竜姫を狙った魔族の殺し屋——メドーサの妨害といつても過言ではないモノであった。魔族の情報網によれば、今回のGS試験、思いつきり端的に言つてしまえば、GSとしての営業許可証争奪戦のような物であるが、その裏でメドーサがなにやら企んでいる『らしい』という事。しかし、その企みの背後は全くの不透明であり、なにやら人間のGS養成所に潜り込んで『なにか』をやつてゐるという事だけがわかつてゐる。

おそらく、今回の目的はGS協会に潜り込み、何らかの形で魔族に「益」をもたらす事であろう、というのが魔族側の見解である。

しかし、言つてしまえば、分かつてゐるのはそれだけであり、それ以外のことは未だ闇の中。人間達にとつての問題と言うよりも、魔族にとつて縄張りを荒らされるような物なのかもしれないが。

「魔族の浸透ね。別に、どっちもどっちだとは思ふけどさー」

「…我ら神族を侮辱するおつもりですか？」

天井を見上げて呟いた美神の言葉に、武神として、また清廉潔白で知られる竜神は、思はずと言つた様子で右手が腰に佩いた神劍の柄に伸びた。それに気付いていない訳で

もないだろうに、美神は視線を戻すと人の悪い笑みを浮かべて小竜姫を指さした。

「だって今のGS協会だって小竜姫様みたいな神族の浸透、というか干渉受けまくって
るような物だしねー」

「…それはっ、貴方達を守るためであって!」

実際の所、極一部の例外を除けば完全に対立属性である神と魔に対し、人間はその中間に位置する。そして、古来より神魔両方との交流は、人間が最も多く例を持つ。

時に神に祈りを捧げ奇跡を願い、時に魔を頼って自分の欲望を適えようとする。二つの種族に対し圧倒的な霊的、身体的劣勢というハンデを持ちながらも人間が繁栄を続けられたのは、その狡猾さと、何時の時代も変わらない、汲めども尽きぬ無限の欲望のおかげなのだろう。

そして、美神が言った神族の浸透。これは実に分かりやすい例えがある。例えば、であるが、某巨大信仰組織の長が、その信仰対象であり、己の霊力の源でもある神族からの「お願い」を受けたとする。

断る、といった事があるだろうか? いや、そもそも断ることすら考えに浮かばないのではないか? 絶対的な上位者として信仰されている以上、その「お願い」は時として命令以上の力を持つ事だろう。

そして、その巨大な宗教組織がGS協会に対し大きな影響力を持っていたとしたら?

「だ・か・ら、それが気に入らないってのよ」

「どう言う意味ですか?！」

「つまりっすね。貴方達を守るだの魔族が浸透しようとしているだの、上辺の建前ばっかなのが気に入らないって事っすよね?」

「あんた、ますます回復早くなつたわよねー」

「伊達に地獄を何度も何度も見ちゃいませんって」

何時の間に復活したのか、既に傷一つ無い姿で美神の座るソファアの後ろからひよいと顔を出す横島。呆れの多分に混じつた美神の声に対し、むしろ胸を張って答える横島の眼には、気のせいだろうか涙が見えた。

そんな雇用主と助手の会話を聞かず、二人の前で顔を伏せていた小竜姫は、その顔を上げて、決然と言い放った。

「…私は、あの魔族が許せない。あの時、未だ幼かった何の力も無い天竜姫様を襲い、我ら竜神族の珠玉を、失わせる寸前まで追い込んだあの女魔族が。それ以上に、いかに竜神王の娘とは言え、幼い子の命を奪おうという行為が、なによりも気に入らない。…だから、というわけでもありませんが」

「ふん?」

小竜姫の眼には、怒りがある。神族としての物ではない。彼女自身の、彼女の在り方

として、絶対に認められない行為に対する怒りだ。

その表情を見て、美神はそれまでの詰まらなそうな雰囲気から一転、どこか面白そうに彼女を真つ直ぐに見る。

「今回は、「お返し」をしてやろう、と思うのです！」

ぐつと握り拳を美神に見せる小竜姫。

「…ぷっ！ あっはっはっはっは!!」

その答えを聞いてお腹を抱えて笑い出す美神。

「な、何故笑うのですかっ！」

「クスクス…OK、よ。小竜姫」

「へ？」

きよとん、とした表情で、いまだ可笑しそうに笑い涙をぬぐっている美神を見返す小竜姫。そして気付いた。

美神の彼女に対する呼び方から様が抜け落ちている事に。

傲岸不遜で我が道を行く彼女らしくは有るが、不敬と言っても良い筈のその呼び方に、小竜姫は確かに親しみが込められているのを感じ取っていた。

だから、怒りよりも先に気恥ずかしさが先に立つ。

「オーケーって言ったのよ。そういう答えが出せるあたり、貴方も面白い神様よね」

「そうですね。さっきの小竜姫さんなら、俺も思わず…嫁に來ないか?」

「それを止めろっちゅーとろーが!」

取り出した神通棍で思いつきり鼻面を突かれ、横島はソファアの後ろにひっくり返る。ちよつと鼻血が着いたそれを拭くつもりか、おキヌの持つてきたハンカチを受け取りつつ、美神は改めて親しみの籠った笑顔を小竜姫に向けた。

「あ、あの?」

「氣に入つたわ、小竜姫。貴方の依頼、ばつちりこなしてあげようじゃないの。報酬は期待していいのよね?」

ウインクしながら、ちよつと血のついた神通棍をハンカチでふきあげる美神の瞳には、溢れんばかりの金錢欲と、スリルを求めるGSとしての欲求がある。これもまた、人の性。汲めども尽きぬ欲望の一側面。

「え、ええ。それはもちろん十分に用意してありますが…」

「ちようど良かったわ。あのおぼはんには、私もたくっぷりお礼してやりたいし。さて、横島君!」

「はいっす!」

すぐさま返る元氣の溢れた忠夫の声。さっきまで美神の座っているソファアの後ろに沈んでいたはずだが。

「あんた、今度のGS試験受けなさい」

「了解しましたー!! ……つて、え。」

「それじゃ、私は手続きの方やっておくから、小竜姫は他の——そうね、先生辺りの協力してくれそうな、信頼のできるGSに当たって頂戴」

「あ、はい!」

そう返事を返し、慌てて走り去る小竜姫。

「あのー、美神さん?」

「さて、私はどうやって潜り込もうかしら…」

「お〜い」

「そうね、やつぱりここは…」

「…シリコン胸「どっからそんな知識覚えてきたこのクソ犬ー!!」ヒヤインヒヤイン!!」

もう一回口は禍の元と云うことを覚えてほしい。

問題はそれが全く活用されないことだろう。

「んで? くそ戯けたデマを言う口はこれかしら?」

「ひででででー!!」

忠夫をボッコボコにしたところで、その口を摘んで引つ張る美神。

「い、いや、あのですね!!」

かなり必死である。ここでちゃんとと言わないと後が怖すぎる。

「なによ?」

「お、俺、身体が前よりも動くようになった以外で、まともに霊力なんか使った覚えが無いんですけど!」

「分かってるわよ?」

「へ?」

「あんたはちゃくんと無所属で登録してあげるから、事務所に迷惑は懸からないわ」

「…へ? んじゃなんで俺が受験する必要があるんすか?」

「あんた、メドーサに顔が割れてないんでしょ? だったらちようどいい監視役じゃない。でも、何の関係もない霊力持ちがあんな所に居たんじゃちよつと不自然なのよね」

GS試験は毎年かなりの人数が受ける試験である。しかしながら、世間一般では注目度自体はかなり低い。理由としては只一つ——面白くないのである。

霊視能力の無い一般人が受験生同士の試合を見ると、片方がなんだか気合を入れて手を突き出したら、もう片方が何故か吹っ飛んだ、そう見えてしまうのだ。怪しい宗教ならまだしも、霊力の存在が分かっている以上、所詮タネのわかった手品。見鬼にも才能や訓練が必要であるが故に、一般人を対象にしたテレビ的には受けないこと間違い無し

である。

応援で来る一般人も居ないではないが、そんなのが一ヶ所に留まらず、特定の人物を応援したりもせずに会場をうろついて何かを探っている様子を見せている。

警戒している相手なら、怪しむ可能性もある。

が、そこで受験生という立場が効いて来る。

受験生なら、色々な試合を眺めて情報収集するくらいは普通だろうし、また、受験生なら入れる関係者以外立ち入り禁止区域にも普通に行ける。選手の待機場所にも、だ。

「あー、なるほど」

「だから別に予選落ちしようが気にすること無いわよ」

「あ、あの」

そういった会話をしながらも手を動かして着々と手続きのための書類を仕上げる美神と、納得したように頷く横島に、先ほど出て行った筈の小竜姫が恥ずかしそうに戻ってきて声をかけた。

「どうしたの？」

「ええと、ちよつと忘れ物を…天竜姫様からの預かり物なんですが」

「…上司の頼みごと忘れちゃ駄目でしょーが」

呆れた様に呟く美神の視線を避けながら、外で鬼門から受け取ったのだろうか、小さ

な包みを持つて来た小竜姫はそれを横島に渡す。

手渡した本人が何処となく気まずげではあるが、横島は気付く事無く笑顔でその小包を受け取り、早速包装を解き始めた。

「天竜かー。元気にやつてますか、あいつ」

「……ええ。大変元気ですとも」

「どれどれ、中身はっつと」

若干顔を青ざめさせながらの小竜姫の言葉は聞き流しつつ、とりあえず横島は包装の中にあった包みを開く。中から出てきたのは、一枚の赤い長めの布と、上品な桃色の封筒に蠟で封をされた手紙だった。

「手紙と、バンダナ？ ええと、なにになに……」

『拝啓、お元気ですか？ 天竜は元気です。』

送ったバンダナにはお礼の気持ちとして私の竜気が込められています。いつも身に付けていてください。こちらは、いまお父さんのそーさくちゆうです。なんだか、お父さんが身に付けていた「ぎよくじ」がないとりゆうじん王になれないらしく、おかげでいまは代理としていそがしいのです。

お父さんを見つけてりゆうじん王になったら、犬飼君をむかえにいけますので楽しみにまつてください。おじーちゃんとおばーちゃんもひ孫の顔がはやくみたいそーです。

それではまた会える日を楽しみにしています。

天竜より、犬飼君へ。

追伸。 苗字がかわつたら、なんて呼んだらいいですか？ わたしは「あなた」より

「旦那様」がいいです。

敬具』

「……………」

手紙を読み終わった後、油の切れたロボットののような動きで首を回し、視線を小竜姫にやる横島。

小竜姫は、非常に沈痛な面持ちで頷くのみであった。硬直したままの二人を不審そうに見上げ、ソファーから歩み寄った美神が横島の手から手紙を抜きとる。傍らから頭を出して覗いて来たおキヌとともに読み進めていくうちに、不思議そうだった二人は、最後まで読み終えると揃って犯罪者を見る視線を横島にむけるのだった。

日が落ち昇りを繰り返し、ついにやってきたGS試験当日。

「うつわくすつげえ人」

「本当ですな〜」

そこは、まさに奇人変人大集合といった感じである。忍者の格好をした輩から、巫女服、神道系の者、山伏の格好をしたもの、腰ミノと変な頭飾りをした男。はつきり言うてこの中にスーツでも着て入ったら普通の格好の筈なのに逆に悪目立ちすること間違いない無しである。

「受験者数1852名、合格者枠はたったの32名。ま、狭き門つてところね」
「で、これからどうするんすか？」

「ここからは別行動よ。あんたはさつきと受付に行つて登録済ませて来なさい」

そう言い残し、大きなスポーツバッグを抱えてどこかへ歩き去る美神。

「へーい。さて、受付は…お、ピートじゃないか」

きよろきよろとやる気の無さを隠す事も無く周囲を見回していた横島は、ふと振り返った先で見知った顔を見つけ、思わず手を上げ声をかけていた。

「おーい、ピートー！」

「あつ、横島さん！」

手を振りこちらに大声で声をかけて来た横島に気付いたのか、それまで胃の辺りをさすりながら緊張した面持ちであった彼は、安堵した様子で横島に駆け寄ってくる。

相手は、いつかのブラドー島以来の付き合いである半吸血鬼の青年、ピエトロ・ブラドーであった。

「横島さんもこの試験受けるんですか！ 教えてくれれば良かったのに！」

「いや、別にたいしたことでも無いしなー。とつとつ予選落ちやおうかなーと」

「そんな事言わないで下さいよー!! 一緒に頑張りましょうよー! 故郷の期待を受けててこつちはもう緊張して緊張してー!!」

「お、落ち着けピートー！」

よつぽど心細かったのか、涙目で横島に抱きつくピート。まあそんな光景を目にすれば誰もが興味を引かれるわけで。

不安そうだった美形が顔立ちは普通だがやたらと余裕のある男に抱きつき、しかも抱きつかれた方も小揺るぎもする事無くそれを受け止めている。そして、抱きついた美形

が、縋る様に、しかし安堵の色を隠す事無く必死でしがみついている訳で。

「ほらほら、あれ見てあれ」

「うわー、ああいうのってホントーに居るんだあ」

「片方は金髪美形で、片方は顔はそこまで…でも、細身だけど筋肉質っぽいわね。それる」

「きゃー！それじゃあつちが攻めであつちが——」

「放れるー！ー！放れてくれピイイイト!!」

「嫌ですー!!一緒に頑張りましょうよー!!」

なんだか凄まじい悪寒を感じた忠夫は必死にピートを引き剥がそうとするも、プレッシャーで錯乱しているピートはなかなかしつこい。

と、離せ離さないで大騒ぎを続ける二人に、遠目にも巨体と分るような目つきの悪い男がのしのしと歩み寄ってきた。

「横島サ…ン」

「ああつ!!タイガー！お前も手伝えー!!」

声を掛けられた横島は、知り合いだったのか彼の名前を呼び助けを求める。が、求められた方は周囲の一部がなんだか嫌にねっとりとした雰囲気で眺めている事、何よりあまりにもピートが必死である事に気付き、その場で身体の向きを180度変えると、何

事も無かったかのように去っていく。

「……と思ったけど気のせいに違いないジャー」

「ハハハ……」

「横島ギョーくん!!」

今修羅場真っ最中の忠夫に話し掛けようとしてあつさり見捨てた縦にも横にも大柄な青年は、タイガーという名を持つ、すこぶる付きの強力なテレパシストである半虎人。

ある依頼をめぐって美神とエミが争ったときに知り合った仲であり、学校でもよくつるむ友人であるが、流石にこの状況で入り込むほど馬鹿ではないようだ。

ちなみに横島とピートとタイガー。それぞれ何かとの混血であるためか、学校でも特に仲がよく『そういった』噂が流れているのは、本人達も知らぬこと。おそらく、知らないままの方が幸せである。

そんな大騒ぎを余所に、入口にほど近い場所。テレビカメラを構えた取材クルーの前ではマイクを向けられた一人の老人が、アナウンサーの女性にその名前を呼ばれていた。

世間一般では注目度が低い。しかし、裏を返せばそれ以外の、つまりGS業界内では注目度の高いこの大会。将来の商売敵であり、また様々なスタイルの霊能が見れるこの試験会場は、当然ながら需要を求める達がいて、需要があるなら答える形で供給する者

達もいる。

そう言った両者にとって、かの老人の名前は無視するにはいささかビッグネームに過ぎた。

「——ドクター・カオスさんですね?!」

「ああ、そうじゃが?」

大きめな女性の問いかけに含まれた名前、そしてそれを肯定する一言に、周囲の者達から声が消え、視線が一気に集中する。しかし、ヨーロツパの魔王を前にしての緊張からかそれに気付かない女性と、気付いていながら全く意に關していない老人は、雰囲気にも呑まれる事無く会話を続けていた。

「こつ、今回、試験を受けられるという話を伺ったのですが、意気込みを一言——」

「む? わしはGS試験なんで受けんぞ?」

「へ?」

放たれた否定の一言に、周囲の緊張感が一気に霧散した。間違いなく手強いであろうライバルとなる相手が一人減り、安堵したと言う所だろうか。しかし、すぐに一つの疑問が持ち上がってくる。

それならば、何故、ヨーロツパの魔王がこんな所にいるのか、だ。

そして、その答えは、老人にしては長身な彼が着込んだローブの、その陰から滑り出

るようにして現れた。

「受けるのは——おい、マリア！」

「イエス。ドクター・カオス」

「——我が娘にして、最高傑作。この、マリアじゃよ」

そういつて、マリアの肩に手を置くカオスの表情は、いつそ見事なまでに挑発的だった。

——ある夜・ガード下・赤提灯——

「と、いうわけでさー。私の娘がさー。婿を認めろ、嫌なら私が偉くなる！　っていつてさー」

「しかし、聞いたただけだと娘に相手を見つげるために仕事に連れて来たんだろ？　良かったじゃないか」

「ちがうっ！　断じて違うぞっ！　有力な者の元に嫁に行けば、裕福な生活と何不自由ない暮らしが送れるじゃないかっ!!」

「——ほら、そこだよ」

「何がだっ!」

「似たよーな話を一つ知ってるんだけどな。その人は、反対する親族に、この幸せが他の何かで埋められると言うのなら、貴方達はとも哀しい人たちです。そう言つて、あつさりせうンブ捨ててあいつの所に嫁いで来たらしいぞ?」

一氣に話した犬塚は、動きを止めた竜神王に構う事無く、隣に座つた親父から無言で差し出された新しい酒瓶を受け取り、自分と親父のコップに注いでいく。

氣不味そうに顔を伏せた竜神王の肩に、犬塚の手が回された。

「ま、確かに娘を取られた男親の氣持ちもわからんではないが、な」

思わず顔を上げた竜神王の眼に、笑つている犬塚が映り込む。コップを呷る犬塚の笑みは、寂しそうでもあり、嬉しそうでもあり。

「…お前もか?」

「…まあ、な」

「そうか」

安つばいガラスのコップが打ち合わされる。屋台の親父は、無言のまま、口の端を小さく吊り上げた。

「さて、なんに乾杯しようかね」

「…決まつてる」

笑いを交わす二人の表情は、よく似ている。

「——娘に、幸せがあるように」

もう一度コツプが、今度は小さく打ち鳴らされた。

「全く」

「それにしても」

「犬飼とかいう奴め」

「犬飼家の奴らは」

「へ？？」

第二十話。

「ふあゝあゝゝああ。さ、さつきと落ちてお仕事お仕事つと」

半人狼の青年が欠伸をしながらてくてくと歩き。

「頑張らなきや駄目だ頑張らなきや駄目だ頑張らなきや駄目だ……」

半吸血鬼の青年が追い詰められた暗い表情でふらふらと歩き。

「この温度差は何ですカイノー」

半虎人の青年がその後方から呆れたように呟きながらどすどすと歩く。

G S 試験第一次試験会場。そこに三人の姿はあった。何処までもやる気の無い半人狼と、やる気があり過ぎて空回りしている半吸血鬼。そして他人事のように眺める半虎人。

異様といえば異様なメンバーであるが、実際の所、周囲に全く危険性とか恐怖感とか、悪感情を感じさせない彼らの雰囲気は最も異様なのであろう。それが余裕が故か無知が故かはておき。

「うわー。皆殺気だつてんなー」

「そりやそうですジャ。競争率の激しいGS試験ですカイノー。周りは全部敵ですジャ。」

「頑張らなきや頑張らなきや頑張らなきや…逃げちやだ」「パクリ禁止っ」

——暗転。

「ううう、試験開始前から何でこんなボロボロに…」

「さあ？」

「何でですカイノー？」

精神的に追い詰められて沈んじやいけない所まで精神汚染されそうになった友人を体をはって助ける（物理）。素敵な友情である。

そんないつものゴタゴタをやり合いながら辿り着いた第一次試験会場。三人同時に受付に行つたために受験番号も連番である。そして、案内されるままに試験監督の前に一列に並ぶ三人。

「なあピート。これから何やるんだ？」

「…喧嘩売ってますか？」

「まあまあ」

まさか試験のその時になってまで内容を把握していなかった横島のあまりの能天気さにちよつと怒りゲージ的な物が振り切りかけた半吸血鬼を余所目に、タイガーが説明する。

要するに、自分の靈気を放射して、それなりに危険な試験に参加する資格を、つまりは最低限の実力を見せろ、という事らしい。

まさか眼の前で今から行う試験の内容の説明が行われるとは欠片も思っていなかった試験管たちも流石に呆れの表情が隠せない。

「…なんだ。結構簡単に落ちれそうだな」

「宣戦布告ですね？」

「まあまあまあ」

今度こそゲージが振り切った半吸血鬼の友人を羽交い絞めにして押さえるタイガー寅吉。苦勞人である。

そんな一部で盛り上がる殺気を削ぐように、それまで空気を呼んで長めに待っていた試験監督から開始の合図が投げかけられた。

「それでは、始めてください！」

『はあああつ!!』

それぞれの気合の声と共に周囲から一斉に吹き上がる靈気の渦。しかしそんな技能

持つちや居ない忠夫はただ鼻をほじっている。

「15番、25番、32番、47番。失格だ。帰っていいぞ」

そんな彼を余所にどんどんと脱落していく周りの受験生達。流石の友人達は他の受験生達よりも一、二回りは大きな靈気を放射しているようだ。

「……ふあ。さつさと失格にしてくれんかな」

呑気だ。だが、運命はそう簡単には彼を離してはくれなかった。それまでその余裕に何か隠し玉でもあるのか、と注目されてはいたが、全くやる気を見せない横島の様子に痺れを切らした試験官が失格を告げようとした、まさにその時。

『……ちよつとだけお手伝い。夫の手伝いは妻の役目』

そんな声が頭に響いた。あとすつごく嫌な予感も。

たちまち彼から吹き上がる、いや間欠泉のように噴き出す巨大な靈気——竜気。余りの巨大きに右隣の受験生は吹っ飛んでいる。左からはタイガーとピートの驚愕の視線が。

「……へ？」

その中心から、いまだに鼻を穿って失格待ちだった筈の、忠夫の間の抜けた声が聞こえていた。

その後としては、まあ、当然のごとくそんな物を見せ付けられた——本人の力かどうかは関係なく——監督官達が失格にする訳も無く、何故か第一次試験を突破『してしまつた』忠夫。

のつけから計画が崩壊していた。ちなみにピートたちは一緒に突破している。普通に素質に恵まれ、また一流のGSを師匠に持つ彼らが懸命に努力をした結果であるから、当然と言えば当然なのだろう。

ピートに関して言えば横島が意図したもかどうかはともかく、事前の会話で緊張も何もかも吹っ飛んでいたのが功を奏した形であるが。

「どーしよ……やばいよなあ。天竜くく、あれは作戦なんだぞくくい」

頭を抱えた横島が、妙神山の方角へと向けて声をかける。聞こえる筈も無いのだが、しかし返事は意外な所から聞こえて来た。無論、聞こえていない天竜姫の物ではないのだが。

『知らぬわ』

「うおっ！」

ある筈の無い返事の出所はすぐ近く、忠夫の額から発せられた。

「ななな、なんだっ?!」

『落ち着け、たわけ。我は天竜姫様の竜気をきっかけに生まれた、お主のバンダナに宿る存在じゃ』

「…へー」

『特に驚いておらぬ様子じゃな』

「いや、もう、なんてーか。天竜がくれたもんだしなあ」

というか、そんな事は今はいい。バンダナが生きていようが、先程の試験に受かったのが天竜のお陰だとか、今は、そんな事はどうでもいいんだ。重要な事じゃない。

とりあえずの最優先事項は、どのようにして美神と小竜姫から逃げるかである。はっきり言つて、マズイ。天竜姫からの届け物を持ってきた小竜姫むしろ被害者な気がするのでもかかくとして、作戦を最初の一步で躓かせた忠夫に対して美神がどのような態度を取るか。予想できるといふかしたくないというか。

「美神さんか…。逃げられるか? いや、このバンダナを上手く使えば」

『残念だが、先程のあれで竜気の貯蔵は底を付いた』

「…ええ?」

『そして、おそらく美神殿とやらはお前の後ろの人物だ。考える暇も無し』

「え。」

「——よくこくしくまあああっ!!」

冷静沈着に結論を出す辺り、助けになるやらならないやら。突如背後から猛烈な一撃を受けて、「今日も空は青いなあ」と思いながらも吹っ飛んでいく横島であった。

着地というか墜落から一連の折檻の後で。

「んで?説明しなさい」

「ういっす!」

『…主よ。お前は本当に生物か?』

あつさり復活を遂げた忠夫に対し、おそらく周囲で惨劇を見ていた受験生達の心の叫びを代弁するも、「邪魔するなっ!!」という感情の籠った、もはや邪眼を通り越してバロールの魔眼といった美神の視線を受け、余波で途端に逃げ出す受験生達。

そして逃げ様にも逃げられないバンダナは——

『ままま、まあ、な、何でも無いぞ。うん。問題無い』

びびった。力一杯。もしも小竜姫が見たら一応竜族の力を受けた存在の情けなさに泣く位には。

そんなこんなで10分少々。経緯と結果報告を受けた美神の額に更に追加で2個ほ

ど井桁が浮き、忠夫の頭にたんこぶが2つほど追加で増えた程度で、何とか命は助かった。

「…あの天竜姫様が原因なのね…。しよーが無いわね。あんた、このまま試験受け続けないさい。てきとーに途中で降りていいから」

「…棄権するって言うのは」

「却下。あんどけやつてりゃ他の受験生も警戒するわよ。当然潜入しようとしてる相手も気付いたでしょうね。ま、直接対決して怪しそうな奴の反応でも探ってみなさい」

「直接対決!？」

「ああ、第二次試験は受験生同士の試合だからねー」

「逃げていいでしょうか？」

明らかに腰の引けた横島の問いに、美神は指を一本立ててとある神様の名前を出した。

「小竜姫もあんたのバンダナが原因だつて分っているわよ。でも、天竜姫様から授かったバンダナを持っていて試合とはいえボロ負けしたら…どんな反応するかしら？」

もはや退路は塞がれた。雇用主の意見に逆らう気力も無くしたか、半泣きで第二試験会場へと歩いていく忠夫。その背中は煤けていた。

「…ま、ちよつと位動ける機会を作つてやれば、あのお姫様も満足するでしよーし。追加

の報酬くらい出ないのかしら」

その呟きが聞こえなかったのはおそらく久方ぶりの幸運ではないだろうか。こんな幸運しか来ない辺り、彼の運命はよっぽど平穏とかが嫌いのようだ。憑いてる神様が天竜姫だしトラブルには恵まれるのだろうけれど。

ともあれ、美神は当初の予定を変更する事無く、案の定目立っただけ目立ってしまった横島を囿に、予定通り自分は本命として探りを入れる事に決めたのだった。

いくら面が割れていないとは言え、どうせトラブルを起こして目立ってしまう横島は最初から陽動だったらしい。が、日頃が日頃なだけに、その事を横島に隠れて打ち合わせをした際には小竜姫も何度も頷いて賛成の意を示していたので、妥当な判断と言えよう。

「うああああ…今回は裏でコソコソやるだけの筈だったのに」

『大丈夫であろう。お主の靈力は捨てた物ではないぞ?』

「使えなきや意味ねーだろがつ!」

『……………は?』

バンダナは思わず絶句する。

『そんな馬鹿な事があるか。お前の内には確かに大きな靈力が渦巻いておる』

「だから、内側だけだろーに。外に出なきや靈波刀も作れないつての」

『それが馬鹿な事だというのだ。…よいか?』

バンダナ曰く、靈力が大きければ大きいほどその制御は難しくなる。まあ、当然である。言ってみれば今の忠夫は10tトラック用のエンジンを積んだひたすら丈夫な軽自動車。今まで靈力を扱えていなかったのだから、その運転は有り余る馬力に押されて、下手というか何時事故を起こすか分からないような物だという。

そして、靈力を完全にその内に秘めるといふのは、その扱いに熟達した者がようやく辿り着ける高みである。高みである筈なのだが…

「んじゃ、どっかから靈力出てるか?」

『…む。確かに』

よくよく見てみれば、確かに全く漏れていない。全てが体内で循環し、そして完璧に

封じ込められている、と納得の声を上げたバンダナの感覚に、何か引掛かっただけかな違和感、溢れる筈のコップになみなみと注がれた液体が、未だに注がれ続けているのに零れない。

『いや、これは——』

零れる分が、底なしの穴に吸い込まれているような。

「ん？どうしたバンダナ？」

『…まさか、な。いや、気のせいだろう』

「そっか。まあいいや、そろそろ目的地だぞー」

何処までも呑気にそう伝える忠夫。バンダナの疑問を押し込めつつ、彼らは試験会場へと入っていく。

そして、その背中に木陰から視線を送る三人組がいた。

「あれだ、アレ。第一次試験で馬鹿でかい霊気を出してた奴。どうだ、勘九郎、見た感じ」

「そおねえ…。雪ノ丞と同じくらい『美味しそう』ではあるはねえ」

「…おい、陰念。殺るしかねえんじやねえか？あいつ」

「俺は狙われてねえしな」

三人組の内の一人から危険な視線を送られ、決して背中を向けまいとしながら防御策を練っている眼つきの悪い、横島と同年代くらいの雪ノ丞と呼ばれているどちらかという小柄な男性。

彼に頬を染めながらなんだか熱い視線を向けているおねえ言葉の大柄な男性が勘九郎。

そして我関せずというか絶対に関したくないという感じでそっぽを向いている雪ノ丞より更に小柄な男性が陰念である。

彼らはそろって黒い胴着に白地で「白竜」と胸に刺繍がしてある所を見ると、どうやら3人共同門と言ったところか。

そして、彼らが見送っていた横島が完全に会場にその姿を消すと同時、音も無く彼らの背後に姿を露わしたもう一人がいた。

「…あれは靈気じゃない」

「なんですつて?」

その3人の後ろから、まるで一枚の絵が突如その中に黒い絵の具で塗られたように。

影が溶け出すようにして現れたのは、女性。豊かな肢体と、全身を覆う黒い、忍者服といわれる其れを見に纏い、胸の所には他3人と同様に白糸で白竜の文字。勘九郎の言葉に喜悦で歪んだ微笑で答える女性。

「あれは、竜氣。人間が、いや、竜族以外の存在が生まれ持つ物では、ない」
九能市 氷雅、という名前で登録された女性であつた。

「み、美神さんっ!」

「今の私はミカ・レイよっ! ……全く。人狼の鼻にはせつかくの変装も効果無しね」

チャイナドレス姿の眼鏡の女性に叩き落とされ、横島は会場の床に熱い接吻を交わす。が、次の瞬間には何事も無かつたように起きあがって再び女性に詰め寄つて行く。

「そんなことよりっ!」

第二試験会場での詳しい説明の後、慌てた様子で美神を探していた忠夫は、スリットの深い「せくしー」な格好をした眼鏡をかけた女性に掴みかからんばかりの勢いで話し

掛けた。

実際、その正体は変装した美神であったわけだが、当然その意味を守るためにしばかれ無理やり沈黙させられた横島であったが、一瞬後にはあっさり復活。呆れた視線を半眼で飛ばす美神だった。

「なんですかあれッ!! 霊力以外無効の結界なんて聞いてないっすよー!!」

試験会場での試合場所では、それぞれの場所に物理攻撃のみでのダメージを無効化する結界が張つてある。霊的戦闘能力を見るための試験であるから当然といえば当然の処置である。

というか、肉体的な戦闘能力のみで人間が悪霊なんていう物騒な物に太刀打ちできない為、「こう」せざるを得ない、というのが事実の一面でもあるが。ともあれ、慌てたのは忠夫である。彼の攻撃力は物理系——というか、霊力が身体強化にしか活かせていない——のみである為、はつきり言つてこの場では微妙な戦力にしかならないのである。

「ああ、言つてなかつたわね」

「美神さあああはぶろべしっ!!」

本名を思いつきり叫んだ部下に、上司は冷静に霊力の持った全力の拳で突っ込んだ。再び床に沈む横島。

「ミカ・レイよ」

学習能力は相変わらず行方不明だった。

とまれかくあれ、「そのバンダナがあればだいじょぶでしょ」と言い残しひらひらと手を振りながら去っていく美神を見送ったのはバンダナのみ。

『…これを如何しろと』

流石の彼もこの状況では手の打ち用がないのだろうか？そんな彼の悲哀を巻き込みつつ、とうとう振られる審判長による組み合わせ抽選の為の「ラプラスのダイス」。

このダイス、全く他からの影響を受け付けず、正に運命を示すダイスである、というのは解説者の説明による。解説者がいる辺り、GS協会は商売つ気でもあるのだろうか？

「…はっ?!」

『流石に今回は長かったな…ほれ、そこの8番コートらしいぞ?』

「え? は?! なにが?!」

『いいからとつとと逝け。我はもう疲れた…』

「18番!横島忠夫君!早く結界に入りなさい!!」

未だ状況を理解しきれずに戸惑う横島に、試合会場に張られた結界の中から審判の呼び声がかかる。

「ああもうっ! とりあえずギブアップはOKなんだから適当にやってさっさと終わる

ぞ！」

と、情けない決意を籠めて横島は立ちあがり、もうダメージも無いようでした。しっかりと足取りで結界の中へと歩みを進めていく。

が、甘い。苺の無い苺大福並にその決意は甘いとしか言いようが無い。

「ごほんっ！それでは」

試合の開始を宣言しようとした審判の声を妨げるほどのざわめきが、一気に観客席と会場から広がった。

思わずそちらに視線を向ける横島。と、周囲の観客、いや、それまで全くこちらに注意を向けていなかった筈の選手達まで何やら驚愕の面持ちで横島を見ているのに気付いた。

何事か、とざわめきが広がるその中心点を探して、その人物に気付いた横島は硬直した。

「ほうっ！では彼はあの美神除霊事務所の！」

「うむ。あそこで助手として働いておるらしいの」

「ほほ、なるほど！では、あの！美神令子の直弟子というわけですね?！」

「そう思つて間違いは無かろう。何せ、このわしを！ヨーロッパの魔王を！一度は引かせた男じゃからなア！」

「ヨーロッパの魔王をですか！ いや、これは中々期待のできる新人の出現です！」

解説者と実況者と書かれたプレート、実況者の方はたまにテレビで見かけるかもしれない、と言った程度には見覚えのある顔である。流石に霊視能力まで持っているとは意外と言え意外だったが、問題はそちらでは無かった。

にやにやとからかうような笑みで横島を見ながら持ち上げているのが、ドクター・カオスだった事。

そして、その発言から周知されたトップクラスとして名高い『美神令子』の弟子というブランドは受験者達、関係者達が一次試験会場から感じた巨大な力の説明として納得できる物だったからで、当然のことながら忠夫に注目を集める物だった事。

あまりにも、いつそ見事なまでに、忠夫の退路はたつた二言三言で消し飛ばされた。

「あんのくそ爺……満月と新月の夜は気を付けろよ……！」

頭を抱える忠夫。もはやコソコソと偵察にのみ従事するのは不可能だ。此処まで注目されては——注目？

そこまで考えて動きが止まる忠夫。

冷や汗を目一杯流しながらおそらく居るであろうあの女性を探す。

——居た。

チャイナ姿のミカ・レイは、「わかっているわよね？」という感じの笑顔を見せている。

目が全く笑っていないそれを笑顔というのならば、だ。

「無理つすよ!!無理無理!!」

慌てて駆け寄り、笑顔のままの美神に、縋りつく様に訂正を促す横島。が、美神はそんな彼を一蹴し、試合場へと追い出していく。

美神の笑顔は崩れてはいない。無論、その背後から噴き出す威圧感もそのままだ。

「仕方ないでしょー。事務所の名前が出ちゃったでしょうが。分ってるでしょ? あんた、うちの看板背負っちゃったのよ」

「勝てるわけ無いじゃないっすか!」

が、弱気な横島の発言も聞き流し、美神はその顔の下半分を神通棍によく似た雰囲気
の霊具、神通扇を開いて隠し、横島を殺気さえ滲ませる表情で睨みつける。

「勝ちなさい。負けたら…捻じ切るわ」

その言葉を最後に、横島は試合用の結界の中へと蹴り飛ばされた。

「何をっ?!」

思わず起きあがって問いたただす横島、しかし美神の姿は既に周囲を取り囲んだ観戦者
達の群れに隠れて見えなかった。

雇用主と労働者の間で交わされた短い会話である。しかし、当然時間は流れている訳
で、とつづくに試合開始されているにもかかわらずよそ見してる相手を攻撃しない手はな

いわけで。

「おいつ！ 何をよそ見してや「うるさいっての!!」」

不意打ちでもすれば良いものを、態々声をかけて無視されたことに對する怒りをぶつけようとした対戦相手——筋肉ムキムキのグラサンまっちょめん——は、振り向きもせず放たれたその一撃に思わず慌てた。

それは横島が懐に幾つか忍ばせてるいつぞやの「神父特製聖水」を掛けて陰干しした石ころであるが、それは、その一個だけは何時もとはちよつと違つた迫力を持つていた。己の弟子の部下、微妙に違うかもしれないが孫弟子の様な横島が、切つ掛けはどうであれ自分の弟子であるピート仲の良い彼が、ピートと同じ時期にGS試験を受ける。これもまた神の啓示かと唐巢神父がちよつと氣を利かして念入りに祈りを捧げながら聖水に漬け込み、靈力を注いだ逸品であつた。

流石に試験の内容も知っているだけに、あまり一人だけ鼻屣するのも唐巢神父も氣が引けたのか、一個だけ製作してこつそり彼が漬け込んで陰干ししていた石達の中に混ぜていたのだ。

それが今、靈力で身体強化された横島によつて、彼が初めて投げたときとは比べ物にならない速度で投擲された。

「なっ！」

慌てて迎撃しようとするも、不思議な回転が掛かって器用なことにフォークボール。不幸な事にすんと落ちた。ということは。

いつかの如く、柔らかい物に堅い物体がめり込む音が、会場に響く。思わず腰が引ける者、蒼褪める者、額に手を当てる者、何が起きたのかよく分っていない者、笑いを堪えて肩を震わせる老人など様々な反応が返ってきたが、共通していたのは誰ひとり声を発していない事だった。

「……………」

無言のまま、白目をむいて亀のように丸まって崩れ落ちる横島の対戦相手。そして何かから剥がれ落ち、地面に落ちて微塵に砕け散る唐菓神父特製の石。

あまりに酷い扱われ方だったせい、それとも横島の臂力が元々はただの拾った石であるその耐久力を超えたせいだったのか、原因は定かではない。

しかし、会場の者達は、それがまるで横島の対戦相手の、男として大切な物が砕け散った様のように感じ取られたのだった。

「しよ……勝者、横島忠夫」

そして、沈黙の満ちた会場に、崩れ落ちた男性(?)の意識を確認した審判の音が響き渡る。流石の横島も思わずやってしまったとはいえ想定外の威力と予想外の結果が

——とある赤提灯——

屋台のカウンターでは、一升瓶を抱えて泣き上戸モードに入った人狼と、それに絡む竜神王。そして屋台の厨房には追加のつまみを作り始めた親父の姿があった。

「えええい!! 辛気臭い奴っ! のめのめー!!」

「……しろおおお」

「のめー。…てんりゆうううう」

「見つけましたよ竜神王閣下!」

「ん?」

と、赤提灯をぶっ飛ばして屋台の暖簾をくぐって、立派な髭を蓄えた巨漢、角付きが乱入してきた。

「早く宮殿に戻って辞めるなり続けるなりしていただきたい!! 我ら家臣一同迷惑しております!!」

「で?」

「…へ?」

真つ赤な酒に酔った風情で、眼の座った竜神王が絶句した家臣に向かって言葉を続け

る。

「私が戻ったら天竜が結婚しようとするに決まっておるじゃないか」

「…まあそうでしょうなあ」

戸惑ったように返事を返した家臣の前で、隣で呑んでいた犬塚の肩に手を回し、竜神王は口の端を吊り上げた。

「この御人と気が合つてな。話し合つた結果、いつそのこと何もかんも投げ出して逃げちゃおうか、と」

「閣下アアツ!!」

「征くぞ犬塚殿!!」

「えぐえぐ…おう〜」

屋台を爆発に巻き込んで、彼らの逃走劇は幕を開けたのだつた。

「店長？」

「…今日は只の屋台の親父だ」

「…まあ、良いっすけど。それより、どうするんすか、これ」

彼らの目の前にあるのは既にガラクタと化した元屋台。

と、数十本の金の延べ棒。家臣たちを蹴散らした竜神王が、詫びと酒代といって返す間もなく置いていった代金だ。

店長と呼ばれた、少し前に来日したばかりのドクター・カオスと小笠原エミの悪企みの舞台となったカフェの経営者は、タバコを啜えて懐を探る。

が、目当ての物が見つかる前に横から無言で差し出された火の付けられたライターに軽く札を言い、先端を近づけ、深く息を吸った。

「フウ……。ま、貰つとけ。次からはタダで吞ませりやいいさ」

「呑み切れますかねー。と言うか、屋台壊れたのにまた来ますかね？」

「大丈夫だろうよ」

もう一度吸い込み、吐き出す。苦さの無い、楽しいな笑いを浮かべた親父は、不思議そうな店員を横目に、夜空を見上げた。

「参拜でもミサでも、なんならそこらの寺でもいい。後で伝言しておけばいいさ」

余計に混乱した風な店員の肩を叩いて歩き出す。

「またのご来店、お待ちしております、つてな」

第二十一話。

「わーっはっはっはあ!!」

「もうちよつと自分の家臣に対して思うことは無いのか?」

「あれは天竜と私の敵だアアアツ!!」

「お、これは中々良い剣じゃないか。もーけもーけ」

既に目の色を変えて追手たる家臣とその部下達をその圧倒的な武力で弾き飛ばしながら、ひたすら逃走——というか既に殲滅戦——を繰り返して行く竜神王。

そしてその後ろで貴重品の保護と云うお題目で火事場泥棒をやりながら散発的に襲ってくる武装した兵士達をあつさり叩きのめす犬塚父。時折飛んでくる流れ弾を見もせずに叩き落しているのは流星なのだが、使い方に問題があるのは人狼の里のデフォルトなのだろうか。

「くそうっ!! 第二装甲歩兵団前へーっ!」

「將軍っ! もう捕獲用麻酔弾が切れそうです!」

「ええいっ! あの馬鹿殿はああっ!! 麻酔弾じゃなくて実弾もってこい実弾!」

「はっ! 了解しました!」

えらくあつさり自分の主に向かつて実弾の発砲許可を出す將軍と、迷わず従う部下。なかなかセメントな関係である。彼らの日頃の苦勞が垣間見えていたとも言おうが。

「発砲は任意！全力でいけえええええつ！！」

「日頃の恨みいいいいつ！！」

「なくんで、こころなるかなあ……。はふう」

やや日の傾き始めた時刻、横島はテンションの低いまま友人達と一緒に歩道を歩いていた。何処となくやつれた雰囲気と、面倒くさげな表情が物語る様に、今、彼の方には先日まで考えてもいなかった重圧がかかっている。

彼の所属するGS事務所の看板と、その所長のブランドと、彼に期待を寄せる竜神族の少女の想いだ。それを意識せざるを得ない状況に陥った原因には責任は無い、とも言い切れない部分もあるが、特に看板とブランドに関してはとある老人の意趣返しも含めた悪戯の要素も大きい。

が、だからと言って、じゃああつさり負けても良いわ、と言ってくれるほど甘い女傑

では無いのだ、彼の勤め先の所長は。

「後一回…後一回勝てばGSになれる！ 僕だってやればできるじゃないか！」

むしろ今となつては隣を歩きながら気炎を上げる、真っ直ぐに試験に挑戦している立場のピートが羨ましく感じてしまう横島である。

朝までは確かにプレッシャーを感じて緊張していたピートを気楽に眺めているだけの立場だった筈なのに、今ではこちらも必死こいて試験に挑まなければならなくなつた。

思わずため息の一つや二つくらい、口を突いて出よう。

「相変わらずの温度差ジャ…朝とは事情が違うがノー」

そんな対照的な二人を後方から眺めながら、タイガーは思わず笑いを零した。

第二次GS試験一回戦終了後、忠夫、ピート、タイガーらは揃つて会場を後にしていた。今回のお仕事の策が、最初から潰えてしまったと思つている横島はともかく他の2人の心には自信と言う形で良い影響を与えているようである。

「いいよなー。お前らはさー。頑張つたら褒めてくれるからさー」

「えっ？ だつて美神さんはともかくとして、おキヌさんが居るじゃないですか」

「そうじゃそうじゃー」

「その美神さんが目茶苦茶怒つてそうだから困つてるんじゃないか…」

「ああ……」

かなり深刻である。せつかくメドーサを警戒させない為に事務所の名前を隠してまで——事務所の名誉を守るため、というのも大きな理由だったが——試験を受けたのに、あつさりバレル、無茶苦茶な勝ち方をする。悪目立ちもいい加減にして欲しい。とか思つてるに間違いはない。と言うか思つてる。それで怒つてる。

そこまで考えて、横島はこれから報告と明日の相談に事務所に向かつていた足が、とつともなく重くなるのを感じてしまう。

「今日帰りたくないの……」

「キモっ!!」

しなを作つてまで逃げ場所を確保しようとするも、友人らにはいたく不評のようである。当然だが。ともあれ全く何の解決にもならない事態の先送りにも失敗した所で、横島がもう一回溜息を吐いて事務所へ向かおうとした、その矢先。

「あら、だつたら家に来ない?」

「「うおっ?!」」

まさかの成功である、が、別に本当にお誘いがあつたことに驚いた訳ではない。横島達三人が驚きの声を漏らしたのは、その声の主があまりにも予想外だつたからだ。

「お前、逃げた方がいいと思うぞ! わりとマジで!」

「雪ノ丞。あいつが捕まったら開放されるとか思わんのか？」

「動くな逃げるな俺の為に!!」

「まゝだったら2人一緒に「断るっ!!」あら、そお？」

どう鼻真目に見ても善人とは言い難い3人組の中でも、一番ごつつい男性の声だったからである。雪ノ丞と呼ばれた小柄な男は助言のような物をしたものの、あっさりとも小柄な男の提案に乗ってるし、物ともせず最初男性は2人纏めてとか戯けた事を言い出す始末。

「…ああ、まあ、その、あれだ。何か用ですか？」

横島は微妙にと言うか確実に逃げる体勢。おそらく目の前のオカマっぽい発言をした男が再び同じような行動に出れば、友人二人を囮に逃げる気である。無論友人達もそれを察知している為、やや牽制し合うような視線が三人の間で交わされているが、タイガーと横島の間ではピートを囮にする事がアイコンタクトで即決された。

ピートもピートで何となく二人がそう言う行動に出るのが分っているので、もしそうなったら即行で霧になって逃げる腹積もりである。

と、横島達三人の思惑はともかくとして、舐めるような視線だったオカマ男の視線が、ふと何かに気づいたように鋭くなった。

「あら？ 貴方達はもしかして…」

「二応、明日の対戦相手の顔を見に来たんだがな」

疲れたように隣の大男を見上げながら、溜息を洩らして雪ノ丞と呼ばれた男が呟いた。当初の目的を忘れて何をやっているんだと内心同僚に毒づくも、それを表に出す精神力はもう無いようだ。

「まさか、お前から全員うちの道場とかち合う可能性があるとはな」

もつとも小柄な男が横島達を睨みつけながら言った。

ちなみに明日からの試合では、順調に勝ち進めば全員が誰かとぶち当たる。間に自分達側の人間とのぶつかり合いを挟まずに、だ。運命の神とやらも、結構洒落が分かっている様である。

「…お前らとは、よつぽど縁があるようだな。俺は陰念。明日、其処の半虎人、お前と一番にやり合う予定だ」

「んで俺が雪ノ丞。俺の相手は其処の半吸血鬼。お前だ」

「私は勘九郎。ま、あんた達が勝ち進んだら戦うことになるわね」

自己紹介に混ぜた宣戦布告。だが見た目に反して全員楽しみだと言う感情以外は伝わってこない。

「へー。こちらの情報は全部バレバレってか？」

「その通り、と言いたい所だけだね。あんただけは名前と所属以外全くわからないのよ

ねえ」

探るような視線と流し目を同時に送るといふ、とてつもなく器用で同時に全く意味の無いことをしながら視線を忠夫に送る勘九郎。背筋に走った戦慄に慄くばかりの半人狼は、とりあえずピートの後ろに隠れてみた。

「あれ、それじゃあ、横島さんとは誰も戦わないんですか？」

ピートはピートで田舎の純朴さ丸出しなのか、既に警戒は解いてしまっている。彼らの纏う雰囲気が必要を感じさせなかったと言うこともあつてか、すっかり同じ目標に向かつて競い合うライバルを見る視線を向けていた。

「——いや、その子の相手は私ですよ？」

その女性が現れるまでは。

彼女が現れた途端に、緊張感がありつつもどこか和やかさを含んでいた余裕は、吹き飛んだ。

彼らの人外としての本能が告げている。あれは、普通ではない、洒落にならない存在だ、と。

「そんなに警戒しなくてもいい、よろしいのですよ？」

気付けば彼ら人外達は全員戦闘態勢。意識を割いてやったことではない。その空気に反応しただけだ。

眼前の同じ胴着を着た三人の男達は手強そうではあれど十分に理解の範囲内だった。こちらの情報は殆どノーマークだった横島を覗いて把握されているが、それでもピートとタイガーは一流に名を連ねるGSの弟子としてそれなりに情報は出回っている。少しGS協会にコネがあればなんとかなる程度の情報でしかないし、二人ともその事は師匠達からも聞いてはいる。

そして、事前に情報が出回っていても合格できる程度に成長したからこそ試験への参加が許可されたのだ。

対して白竜道場とは知らない名で、つまり情報が少ない相手との試合になる事は間違いない。

つまり、情報が無い事が問題にならないほど、横島達全員がその危険性を感じ取ったのだ。

あれは普通の相手ではない、と。

「ピート、タイガー」

「応」

一瞬のアイコンタクト。それだけで彼らには十分。

カウントダウンどころか合図さえ必要とせずに彼らは、揃って決断を下す。

「「あっー！」」

「……へ？」

横島達が同じ方角を指差した。思わずそつちを向いた白竜の面々が訝しげに顔を戻すと、其処には風だけが通っていた。

おそらく半吸血鬼の霧化で三人一緒に逃走したのだろう、と目星を付けた女性と勘九郎はともかく、残りの二人は状況が把握できずに呆然としていた。

「……これは、中々梃子摺りそうですねえ？」

目上の相手に話しかけるように、見た目は同年代の女性に声を掛ける勘九郎。だが、女性は返事をする事無く鼻を鳴らして宵闇へと歩き去って行った。

G S美神除霊事務所の応接室、其処は今大量の資料と複数人の疲れ交じりの吐息に占領されている。

「うーん、めばしい奴らの資料には怪しい所は無し、か」

何度も目を通した資料を再び捲りながら美神が呟く。会場帰りで本人も一試合はこなしている筈なのにそのまま資料搜索まで行いう辺り、流石のタフネスであろう。

「メドーサがそんな所でミスを犯すとも思えませんし、やはり直接育成所に向かうのが

最も有効でしょうか」

「こちらはまだ慣れていないせいもあってか、こつた肩をほぐす様に動かしながら小竜姫が美神の呟きに答える。

「しかし、これだけの量ともなると…」

早朝から弟子であるピートを試験会場に送りだし、それからGS協会に資料を要請し、それを小竜姫と二人で片っ端から調査し、更には不慣れな小竜姫のフォローも行い、と精力的に動いていた唐巢神父も、流石に外がすっかり夜に染まる頃となつては疲労の色も隠せず、眼鏡を取って眉間を揉んでいた。

「それじゃ、私の式神達を使って急いで回りますよ？」 私、暇なのよ」

「冥子さんの式神なら、凄く便利ですからね」

そんな三人を余所に、偶々手が空いていた——と言うほど仕事が入る頻度は高くないのだが——ので唐巢神父経由で協力を要請された冥子がおキヌが淹れたお茶をのんびりと飲んでいる。

戦力としては本人という巨大な不安要素を除けば、その式神達の能力の高さと汎用性もあって申し分ないのだが、いかんせん資料を漁るのに便利な式神など居なかつた為、今はごく潰し状態である。

「…あんまり手持ちの戦力を消耗させるのもねえ」

冥子のあつけらかなとした言葉に、どうしたものかと頭を悩ませる美神であった。

美神除霊事務所では、現在作戦会議の真つ最中。議題は、と言えばもちろんメドーサの息のかかったGS養成所の特定である。ところが流石にあちらもやり手。いくら神族と一流所のGSが集まった所でそう簡単には尻尾を掴ませてはくれない。

ああでもない、こうでもないと言いながら既に手詰まりの様相を見せ始めていた会議に終止符が打たれたのは、とある三人組の乱入のせいだった。

『マスター。横島さん達がお帰りになられ…あつ、こら、ドアはもつと丁寧にーっ！』

事務所に宿る人工幽霊の悲鳴じみた叫びを押しつぶす様に、横島がドアを蹴破りながら突入してくる。その後ろには他二人も息を荒げながら胸を押さえ、どうやらかなり急いで帰ってきた事が見て取れた。

「美神さん美神さーん小竜姫様あー!!!」

と、横島はそこで応接室に予想していなかった人影が二人ほど追加されているのに気付いた。

そして、その内の一人の影が盛り上がっている事にも、気付いてしまった。

「あれ、唐巢神父と冥子ちゃんってうわ待てお前らああああっ!!」

「あらあら〜久しぶりに会えて〜、ちよつと興奮してるみたいね〜」

——キヤインキヤイン！

「あああつ！横島さーろーん!!」

『…外でよかった。本当に良かった』

六道冥子の影から出てきた興奮状態の十二神将に追っかけられて、ドアを開け放った瞬間にUターンして再び外に出て行き。そしてその泣き声が外から聞こえたのを残った全員が見送ったのだった。

室内の何処からともなく、それを見ていた人工幽霊一号の安堵のため息も聞こえたのだが。流石にあの数で室内で暴れられてはたまらない、と言ったところか。

とは言え、聞いたことだけでなく実際にその迫力を見た事で、自分のお腹の中に爆弾を抱えている事に気付き恐怖に慄くまでそう時間はかからなかったのだが。

「なるほどね…白竜道場、か。確かに出場者全員が此処まで突破してきているって言うのはちよつと臭いかもね」

「いや、男連中はそんなに危ない奴ら…いや、別の意味で危ないか。ともかく、別に悪い奴らじゃなさそうでしたけど、後から来た女の人が…」

と、流石にズタボロになった横島が回復するまで待つよりは、とピートが先程試験会場からの帰り道であった事を報告する。タイガーはとりあえず雇い主であり師匠でもある小笠原エミの所に唐巢神父からの協力要請を持たせた上で帰らせた。

どうにもきな臭さが強くなってきている、と小竜姫達は感じていたからだ。まあ、美神は凄まじく不機嫌であつたし、その関係を知る唐巢神父もエミもそんな美神がいる所にノコノコ参加しに来るとは期待していなかつた。やはりこの業界の者達は、基本的に独立独歩、自分のケツは自分で拭くという風潮が強いのだ。

だがしかし、何せ事が事なだけにタイガーも巻き込まれる可能性がある。そんな状況で全く何も知らなかつた、では流石にメンツが立たないであろう、という唐巢神父の判断である。

「…貴方達の本能に訴えるだけの何かを持っていた、と言う訳ですね。美神さん、どうやら…」

「ええ。第一目標、決定しても良さそうね。——とりあえずあんたはそれを降ろしなさい」

「いや、別に俺が捕まえてる訳じゃ…」

「わく！ すつごい力持ちくく」

「横島さん、よく懐かれてますから…」

シリアスな会話の横では、新しく身体強化に目覚めたという横島の力を見たがった冥子のために、何時の間にもやら復活していた彼が十二神将全部を担いでいたりする。というか初めはバサラー一匹だけのつもりだったが、後から後から乗ってきたと言うか。既に不気味なブレーメンの音楽隊である。

その陰でくしみ始めた床に悲鳴を上げそうになり、だが暴走が怖くて止めさせる事の出来ない事務所憑きの幽霊が泣きそうになっていた。

「ところで、「心眼」はどうでしたか？」

「へ？」

とまれ美神の指示に従ってどんどんと冥子の影に勝手に式神達を突っ込んでいた横島だったが、小竜姫の言葉に何のことやらと言った表情を浮かべて振り向いた。

「貴方の額の布当てに宿っている者ですよ」

「…ああ！ そういえば静かなままですなあ。ガス欠でも起こしたかな？」

その存在を思い出したが、しかし試合以来全く発言もその瞳を開く様子も無かった事ですっかり忘れていた心眼の眼の辺りを人差し指でつつく横島。しかし、反応は無い。

「天竜姫様の竜気が切れる事は考えにくいですが…。心眼？」

『……ああ、小竜姫様ですか』

「どうかしたのですか?」

小竜姫の声に、漸くと言った様子で薄く心願の瞳が開く。しかし、その眼は今にも閉じそうであり、また言葉にも張りが無く、今にも眠りそうな声であった。

『…竜気を一度に大量に消費したせいか、意識が飛びがちで…』

「妙ですね? そんな事例は聞いたことが…」

訝しげに眉を顰める小竜姫の言葉が続けられる間も、心眼の瞳は再びゆつくりと閉じられていく。

『すいませんが、少々眠らせて頂きたく…』

「心眼? 心眼?!」

『……………』

結局、その後の数度にわたる小竜姫の呼びかけに答えは無かった。

草木も眠る丑三つ時。既に人毛の無くなった筈の試合会場に、怪しく蠢く人影が二

つ。

「ドクター・カオス？」

「——おお、マリアか。一体どうした？」

「現在時刻・午前3時・です。これ以上の・滞在は・不測の事態を・招きます」

「ちよつとまつとれ……ここをこうして……よしっ！ さてさて、後は仕掛けをごろうじろ、じゃな」

「イエス。ドクター・カオス」

そして二人は会場を後にした。

日が昇り、次の日の試験会場。会場入りしたのはハーフ3人組と少し遅れて変装済みのミカ・レイ。白竜道場の面々の姿も離れた位置にある。

そして、今から試合に臨もうと言う横島の視線の先には、既に結界の中でこちらを待ち受ける白竜道場の胴着を着た、昨日の女性がいた。

「なるほど…あの女ね」

「なんか変なんですよねー、匂いもおかしくないんですけど、違和感があると言うか」
「あんだ、すっかり戦って少しくらい情報を集めてみなさい」

「無茶言わんといってくださいよっ！戦う以前の問題でしょーがっ!!」

匂いはおかしくない。昨日と全く同じ、いたって普通の人間の女性の香りだ。だが、何か違和感がある。しかも、昨日よりは弱まっているとはいえ相変わらず本能は危険を訴えている。だが、足りない。決定的な何か足りないが故に、今は泳がせている状態だった。

「18番！ 横島忠夫君。試合開始地点へ」

「んじゃ、行ってきます」

「危ないと思ったらすぐ降参するのよ、いいわね？」

流星に眼の前で見れば美神の靈感にも何か訴える物があつたようで、彼女としては珍しく心配そうな声を掛けていた。しかもギブアップの許可も出している。唐巢神父や小笠原エミが見れば悪い物でも食べたのか幻覚でも見ているのかと思うであろう。

しかし、逆に言えば、美神もそれほどまでに警戒しているのだ。

「そりやもちろんっすけど…まあ、一応こいつと打ち合わせはしましたし」

審判の掛け声に応じて結界内へと歩みを進める忠夫。バンドナの真ん中、心眼の瞳の

辺りを指でつんつんしながらのその態度は、もう半分開き直つてもいるようであった。

「緊張していらつしやるようですけど、大丈夫ですか？」

「はあ、それなりに」

余裕の笑みを浮かべつつ、待ち受ける女性。

「では、GS第二次試験、第2回戦」

そして、戦いのゴングは打ち鳴らされる。

「はじめっ!!」

立ち上がりは静かなものだった。

「昨日は自己紹介する暇も無く帰られましたので…改めて、氷雅と申しますわ」

そう言いつつ動いたのは氷雅と名乗った女性。その腰に挿した刀を引き抜き、青眼に構える。鞘から抜かれた瞬間、その刀は明らかに霊刀特有の見る者を引きこむような波動を放っていた。物理攻撃のみでは相手に届かない状況で、それ自体が霊的攻撃能力を持つ霊刀を持ちだす。

間違いなく正答の一つであり、だが、それ故に横島にとってはそれが幸運でもあった。「うわあ…やっぱり霊刀か。しかも結構な業物だし」

一目見ただけでその格が分かるのは、人狼の里で散々扱いなれている性もある。が、問題は別の所にある。

「いつ、痛そうやなあー！」

人狼だろうが人間だろうが、斬られれば普通に逝くだろうと言う事だ。

「んと、よし。では、参ります」

使い慣れていない刀なのか、どこかぎこちない動きでそれを構える。霊刀がそこらに転がっている訳も無いので新しく手に入れたのかな？　と思いつつ、こちらも応じて構える。むしろ相手が刀を持ちだした事で、昔から染みついた父親とその友人相手の鍛錬を思い出し、逆に落ち着いた風な横島を見て、氷雅はかすかに眉を顰めた。

「応っ！　死なない程度に加減してねっ！」

「保証しかねますわ」

先攻は氷雅。

一閃。一足飛びに間合いを詰めてきた氷雅の横薙ぎをしゃがんで避ける。

二閃。しゃがんだ忠夫めがけて瞬間で切り返された刀を後ろに跳躍して回避。

三閃。振られた刀の勢いを無理やり止めて頭部に向かって刺突、首を捻って皮一枚。

四・五・六突。着地した瞬間を狙って再び突き。しかも三連、狙いは掠っただけで危険な首、避けにくく当たれば即死の胴体中央の鳩尾、大量の血管が集中しており、骨の守りもないため非常に狙いやすい腎臓。掌で刀の腹を叩き、そのまま正中線上を狙った物は体を無理やり捻って避け、腎臓を狙った一撃は、捻った勢いで振り上げた足で再び

刀の腹を蹴り飛ばす。

全ては瞬きのうちに起こった。

「あつぶな。全部急所狙いと、えげつないなあ」

「それをあつさりかわすや…御仁に言われたくはないですね」

——おおおおっ!!

一拍おいて会場から湧き上がる歓声。その内の何人が今の攻防を見切れたのだろうか？それほどに双方凄まじいまでの技量であった。

「えげつない突きの錬度に比べて、お粗末な斬撃。忍者らしいって言えば忍者らしいけどやな…」

「まだまだ慣れていない物で」

お粗末と横島は言うが、それはあくまで彼が今までよく見ていた人狼の里の連中の錬度が高すぎるだけの話である。彼が見続け、受け続けてきたのは、生まれてすぐから彼らが最も馴染む武器が己の霊力を使った霊剣であり、古来より磨かれ続けた人狼流とも言うべき刀技だ。

故に、その真つ只中で、人狼の里でも一、二を争う男達に付き合わされた彼の眼が肥えているだけの話であろう。常人の眼では見切る事も難しい、それだけの早さは十分に備わっていた。

「そーじゃなくて、今の、どっかで見たような気が…」

「…？ 貴方とは初めて会ったばかりの筈ですが」

「だよなー？ ま、いいか。 んじゃ今度は…」

言葉が途切れると同時に、氷雅は己が眼を疑った。直前まで踏み込んで切りつけても突いても届かない程度の距離を見切つて離れていた横島の姿を、一瞬で完全に見失つたのだ。

「なっ?!」

「くっつちの番な?」

先ほどの回避行動などは比べるのもおこがましい、瞬間移動のようなその速度。驚きに目を見開いた氷雅が背後から聞こえた声に振り向けば、その目の前には悪戯っぽく片目を瞑つた横島の顔。

「一回」

「くっ!」

そのまま優しく首筋に触れて、そのまま散歩にでも出かけるような動きで振り向く動きに合わせて背中側を通り過ぎる。

「二回」

「っ!!」

振り向いた氷雅の背後から、再び首筋に触れてそう囁く。この時点で、横島の言いたい事に気付いたのであろう氷雅の表情が怒りに染まる。激情のままに持った刀を再び横島が現れるであろう背後に向かって振り下ろして、その違和感に気付く。

「んで、三回」

「…そんな、馬鹿な!」

そして彼女の目の前に現れた忠夫の手にあつたのは、先ほどまで確かにこの手にあつた霊刀。しかし手元に目を落としてみても、感じた違和感通りに、その手の中には何も握られてはいなかった。

「さて、どうする?」

余裕の笑みを絶やさぬまま、刀を弄びながら横島は徒手空拳となつた氷雅に問いかける。

「……まあいいでしょう。審判!」

少々どころでは無く不服そうな表情であるが、忠夫の言いたい事は十分に理解したようだ。

「あ、ああ、なんだね?」

「ギブアップ」

「は?」

「降参、と言ったのです」

眼前で行われた手品じみた一瞬の早技に呆然としていた審判は、氷雅の言葉で自分の職務を思い出した。

「しよ、勝者、18番横島忠夫！ GS資格取得!!」

会場からは、もはやざわめきの一つも聞こえなかった。

「…おめでとう、と言うべきなのでございましょうね」

「ま、運が良かったかな」

「人を三回も『殺して』おきながら抜けぬけとよくもまあ」

刀を返してもらいながら横島を睨む女性の眼には、しかしGS資格取得を目前に不合格になったにもかかわらず、不思議と余裕が見て取れていた。

試合が終わってトイレの中で。

「——やばかったやばかったやばかったあああああつ!!」

『……ハツタリもあそこまで行けば見事だな』

「アホか!! こっちは冷や汗ダクダクじゃつ!!」

靈的な攻撃ができない忠夫が取った策はといえば、只のハツタリと脅迫、それとこけおどしと言った所か。

こちらに攻撃力が無いことがばればアウト。最初の攻撃を凌ぎきれなければアウト。靈刀が開いてしか使えないならばアウト。そして相手が武器に攻撃力を頼っていないければその後の展開は手詰まり。実際の所、靈刀が奪えたのは運よく相手が使い慣れていなかった事と、驚きと怒りで相手の意識が逸れた事も合わさって生まれた純粹な幸運であつた。

なんとも運に頼った作戦である。試合開始直前に起きた心眼と相手が腰に刀を下げていた事を見て急遽打ち合わせた結果であるが、これはもう作戦では無く運試しと一緒である。

と、横島は思っていたが、心眼自身はそれほど分の悪い賭けとも思っていないかつた。彼の眼で見れば鞘に入つていようとも微かに漏れ出す靈力は把握できていたし、横島の身体能力についてもある程度はサポート役として把握済みだつたからである。

「あー、あの姉ちゃんがギブアップしてくれて助かつたー」

『とはいえ、まだまだ色々とあちらには切る札があつたようだが、な』

「ま、なんか別に未練も無かつたみたいだし。正直あの突きは洒落にならんかつたな」

『ギリギリだな』

「だからさつきからそう言つとるだろーが」

トイレの一室で会話する、というの知らない人が見れば結構ギリギリだ。

「さて、美神さんのところにも行くか」

手に汗かきまくつた両手を洗い、とりあえず雇用主の所に報告へ、とことこと歩き出した忠夫。だが、会場に出たところで見えたのはよくやつた、とお褒めの言葉を多少は期待していた雇い主の姿ではなかった。

「ぐあああああつ!!」

「はーっはっはっは!! でかい体してその程度か!」

体中から流血し、悲鳴をあげるタイガーと、その前で昨日の雰囲気は欠片も無く高笑いをあげる陰念。そしてそれをこちらも同様に昨日の印象の全く無い、苦しむタイガーを見て薄笑いを浮かべる勘九郎と雪ノ丞がそれを眺めているという光景だった。

何が起きているかなど理解できる訳も無い。だが、目の前に展開しているのは己の友がたつた今、危険に曝されているというその事実。

何を、やっている?

そいつは、あのタイガーだぞ?

体格と顔は別として、人畜無害な草食の虎みたいな奴だぞ?

しかしその困惑さえも吹き飛ばす圧倒的な暴力の傷痕。何度も吹き飛ばされたのだ

ろう、紅い色は、結界内のそこかしこに見て取れる。まだまだ動けはするようだが、このままでは、確実に不味い事になる。

「タイガアアツ!!」

横島は友人の名前を呼びながら駆けだす。

『不味いつ!! 止めさせろっ!』

「どうやって?!」

分りきった心眼の言葉に、焦り混じりであるも足を止める事無く横島が問い返す。

『審判は何をやって…なっ?!』

心眼が試合を止める事のできる審判の様子を見るも、試合場の隅で床に転がったまま虚空を見上げて固まるばかりで息があるのかどうかも分からない。美神、いや、ミカ・レイとピート、他数人がかりでなんとか結界を破ろうとしているものの、その堅固さは簡単には破れてくれそうに無い。さらにその周りでは試験に携わる職員達が結界を解除しようと動き回っているが、どうにももうまくいつている様子が無い。

『止めをさす気がっ!!』

——間に合わない。そう、思った。

——その脳裏に浮かぶいつかの光景。

——『ガキが』と、そいつは言った。

あいつは。

そこで走った一瞬の回想。その答えは最初から準備されていたかのように、ピツタリと忠夫の中で組み合う。竜神の姫は言った。あの影法師は忠夫の中身を取り出したものである、と。

ならば。

「あいつに出来て、俺に出来ない道理があるかつ!!」

思い出すのはあの光景。結界の中にいた美神の影法師を助けようとしたあの時、横島の中から顕現した影法師は、強固な筈の妙神山の修行場に張られた結界を、一瞬で破っていた。

そう、たった一つの行動で、その咆哮で。

「——ウオオオオオオオンツッ!!!」

横島の喉から全てを搾り出すようにして放たれた咆哮は、周囲の空気を激しく揺さぶりながら結界にぶち当たる。

結界に集中していた為、不意打ち気味に後方から襲いかかったそれは、誰の目にも止まる事無く、だが会場中の眼を集めるよりも先に大きな変化をもたらした。

結界を破ろうとしていた者達の最後の一押しとなったのか。或いはそれ自体にもそ

れを打ち破れるだけの効果があつたのか。それは不明であるが、確かにそれは効果を發揮した。

結界が砕け、更にその先まで咆哮は貫いていく。

「があああつ!!」

巻き込まれ、体勢を崩す美神達の目の前で、咆哮の衝撃波の直撃を受けた陰念がその小柄な体軀を浮かせて吹き飛び、壁にぶち当たる。

「何でジャアアアツ!!」

「ちよ、まつ、ぐはあああああつ?!」

ついでに至近距離で巻き込まれ、若干踏みとどまったお陰で陰念を追いかけるようにタイガーも吹き飛び、壁に身体を埋めていた彼をさらに背中で押しつぶす様にプレスした。

がくり、と血塗れのタイガーの首が傾く。その背中にいる筈の陰念の声はもう聞こえない。

『あ』

「やべっ」

横島は、ダツシユで逃げだした。

第二十二話。

「隠蔽結界急げー!!」

「壹番、設置完了! いつでも行けます!!」

「貳番、準備できましたー!!」

「参番と四番からの連絡はまだかっ?!」

怒号が飛びかう戦場真つ只中の『対竜神王対策司令本部』。

角のある者も無い者も、豪華な服で着飾った者も全身装甲じみた鎧を身にまとった者も、分け隔て無く必死に動き回っていた。

つい先程までそれこそ雲霞の如く兵士達を繰り出し、一応は主である筈の竜神王に結構洒落にならない威力の波状攻撃を繰り返していた竜神族家臣団。

ところが、というべきかやはり、というべきか。

竜神王は強かった。そりやもう、担当していた將軍がブチ切れるくらいには強かった。そして、とうとう最終兵器の出番となっちゃったのだ。

「参番四番準備完了の連絡来ました! 何時でも行けます!!」

「よおーしっ! よくやった! それではお願ひします!!」

「……やれやれ」

よつぽどストレスと疲労がたまっていたのか、髪を振り乱し、充血した眼を將軍と呼ばれた者から向けられながら、のっそりと呼びかけに答えてキセルをふかし出てきたのは、おそらく人界駐留の武神の中では最強と言われる猿の神。

「あの馬鹿モンが。老骨には堪えるのう」

齊天大聖、天にも齊（等）しい大聖者。猿武神「ハヌマン」であった。

「むうう……この気配……」

「どうした？」

「犬塚殿、ちよつとこれを……」

「これは……？」

「……ぼしよぼしよぼしよ」

「成る程……つまりごしよごしよごしよ」

「「——ぐふふふふ」」

御大の出番に何を感じたか、やたら悪い顔で悪だくみをする悪い大人の見本達に、巨大な怒声が降り注ぐ。

「その馬鹿殿！ 娘に男ができたくらいで暴れるんじやあない!!」

「やっぱり猿爺か！」

「全く。竜神王になって少しは落ち着いたかと思えば！」

「で、何用でこんな所まで？」

「なあに、ちよつとばかりお灸を据えに、のお」

「ほおう？ 歳を取つてとうとう耄碌したようですか？」

「なあに。娘のことになると目の色を変えるところその親馬鹿には負けんぞ？」

「……………」

「死ねこのくそ爺いいいっ!!」

「やれる物ならやつてみいいいいいっ!!」

途端に二人から発せられる閃光。まばゆい光に周辺が包まれる中、白光を内側から食い破る様にして二つの影が見る見るうちに膨れ上がつて行く。

それを遠目に双眼鏡で確認した竜神族の下っ端兵士は、隠しきれない喜びを零しながら手元の通信機に連絡を入れた。

『やつたーっ！ 交渉は失敗しました！ 広域隠蔽結界発動！ 仕方ないのでお灸をたつぷり据えてくださいやつちまえウヒョー！』

どうもこういう展開になる事を予測していたと言うか、むしろなつて欲しいと竜神王に振り回されていたほぼ全員が願っていたようで、通信機から聞こえて来たそんな声に口元を危険な角度につり上げながら、將軍は手元のスイッチに拳を叩きつける。同時

に、漸く収まりだした白光を中心として、四本の光の柱がそそり立った。

光の柱は互いにその間隙を稲光の迸る光線で埋め、そして瞬時に完成する巨大な結界。

四隅を光の柱で囲まれた結界（というか完全にリング）の中で、全身に毛を生やした白い猿武神と、白く輝く鱗に包まれた大龍神が怪獣大決戦をおっぱじめたのであった。

薄暗い通路をこそこそと怪しく動き回る男がいる。

曲がり角の先を覗きこんでは警戒を解かずに忍び足で移動して、人影が来れば天井に張り付いてやり過ごす。

男は鍵の掛かっている部屋を見つけると、中に誰もいないことを確認してその身をドアの隙間に滑り込ませた。

「ふー。何とか逃げ切ったか。…ッ！」

が、油断したのかドアを閉める瞬間に小さく物音を立ててしまう。タイミングも悪く、丁度すぐその曲がり角から誰何の声がかかった。

「…ん？ 誰か居るのか?!」

「……にやー、にやー」

「何だ猫か」

安堵の吐息さえ押し殺しながら、先程タイガールの試合に思いつき横槍を入れてしまった忠夫はとりあえず逃げていた。

結果的にタイガーを助けたとはいえ、手段が余りにも乱暴な物である上に、何故かそんなつもりは無かったとは言えタイガーまで巻き込んでしまっている。

その上、やった後で思い出したが、確か他人の試合に手を出すと、その場で失格となつた筈である。が、彼の場合はそんな計算が働いたと言うわけではない。

「やべやべ。静かにこそこそつと逃げるべし…」

思わず逃げてしまった、というのが最も正解に近いだろう。

そんなこんなで担架と医療班と結界の破壊に伴う大混乱に見舞われた会場からすた

こらさっさだぜー、と逃げ出した横島は、会場が大分落ち着きを取り戻した頃を見計らってこっ所り戻るつもりであった。

「お、あれは」

逃走経路に美神を発見した横島。どうやら彼女は彼女で『結界が壊れた時の現象』に心当たりがあつたようで、おそらくこの辺りを通るだろう、と目星を付けた狭い通路の交差点、わざと目立つように、その真中で周囲を見回していた。

このルートを完全に読まれていたかと少々冷や汗をかきつつも、無視して通れば後が怖いし、そもそもそれが可能かと言われれば無理じやなからうか、と言う結論に至った横島は、さっさと雇い主に合流する事に決めた。

「美く神さくくん！」

「うわきやあつ?!」

ぬるりとどこぞのエイリアンの如く天井の配管に両手足で掴まっていた横島は、静かに上半身を垂らすと美神の背中をついつと指でなぞった。

流石に背後から気配も無くセクハラをかまされるとは予想していなかった美神は微妙に可愛い驚きの声とともに、そちらに向けて迷いなく全く可愛くない威力の拳を突き出した。

横島の顔面に思い切りめり込んだ拳を引き抜きながら、バックステップで距離を取つ

た美神の前に、力尽きた横島がずりずりと落下してべちやりと地面に伸びる。

「こつ、このくそガキ……！ 一遍本気で極楽に送るわよ!?」

憤懣やるかたない様子で未だに心臓の鼓動が収まらない胸元を推さえながら美神が言う。

「…軽いジョークやないですか」

地面に這いつくばったままの横島も、流石にここまで『イイ』反応と大きなダメージが返ってくるとは思っていた無かった様子で、じと目でふらふらと立ちあがりながら抗議した。

「軽いジョークで人の寿命を縮めるつもりかあんたはっ!!」

「こっちは物理的に寿命が無くなるとこだったんすよっ?!」

瞬間、忠夫の喉元に伸びた神通棍の先が突き付けられた。正直見えなかった、とは後の半人狼の言葉である。

「……で？ 今度はマイナスまで持って行って欲しい?」

「何でもないっす！ すんませんっした！ んで、あの…」

神通棍を構えた美神に恐る恐る尋ねる忠夫。

「…タイガーなら大丈夫よ。冥華さんが——冥子のお母さんね。あの人が式神使ってヒーリングしてくれてるわよ。あの人の腕と12神将があれば、何とかなるわよ」

「そっすか！ よかった〜」

友人であるタイガーの安否が確認できていなかったことの方がよっぽど負担となっていたようである。

とりあえず大丈夫だと言うことが分かると、思わず腰から力が抜け、床に座り込んでしまった。

「一応、今回の犯人は未だ不明、ってことになったから。運が良かったわね」

「…ナ、ナンノコトデシヨウカ？」

「目撃者も無し。監視カメラには幸運にも映ってなかったらしいわね。とは言っても、あんな事ができんのは」

腕を組んだ美神は不機嫌な表情を隠そうともせず、必死で目をそらす半人狼の助手を横目で睨む。視線を感じて思わず尻尾が丸まりそんな忠夫であったが、それはズボンの中だから分らない。

「どこぞの半人狼の影法師位だと思ったんだけどねえ？」

「あ、たいがーのお見舞いに行かなくっちゃ」

美神の視線に怯えて必死で脱出を図る忠夫。背中を丸めてこそそそと逃げていく忠夫に、神通棍で頭を軽く叩くと、続けてその先を壁にかかった医務室への案内板に向ける。

再度へこへこと頭を下げて行く先を変えた忠夫の背中に、表情を半眼から苦笑いに変えた美神が声を掛けた。

「ま、いいわ。そろそろ小竜姫からの定時連絡があるはずだから、あんたも十分休んどきなさい」

「へ？」

気の抜けた忠夫の返答に、美神はその視線を鋭い物に変えると、纏う雰囲気は今までのどこかリラックスした物から、一気に戦いの場でのテンションにまで持ち上げていく。

「そろそろ始まるわよ。本番が」

「あくすつきりした〜」

あの後、そのまま踵を返して去っていった美神の雰囲気には押され、タイガーの居場所に行く前に忠夫はとりあえずトイレに駆け込んだ。緊張の連続から開放された為であろう。殴られた時に衝撃で溢れなくて良かったと思いつつ、スツキリとした表情で手を洗った忠夫は大きく肩を落とす。

「…はああああ、なんだか一気に疲れた。おーい、心眼？」

一連の騒ぎの中で、忠夫がその吼声で結界を破った後から心眼は殆ど沈黙していた。改めて鏡の中の自分が身につけているバンダナに話し掛けてみる。

『…』

果たして、忠夫の声に答えるように心眼は無言でその瞳を開いた。が、何故かそのまま再び閉じていく。

『…っ』

何かが吸い込まれる音がした。

「あれ？ おーい。心眼やーい」

再度目を閉じた心眼に対し、壊れたテレビにするようにトントんと叩く忠夫。当然ながらテレビでは無い心眼が反応する訳も無い、筈だった。

『未熟者』

その言葉と共に、再び開いた心眼は、既に先程の物とは違っていた。バンダナに開いた目は「2個」。それまでの縦に割れた瞳を持つ巨大な一つ目と違い、まるで、獣のような鋭さを持つ獣眼。

そう、いつか見た影法師の目そのままのモノがそこにあった。

「うおっ！」

『狙いが甘い。乱れた感情のままに狙うから獲物以外を傷つける』

「うぐつ」

『収束が甘い。しつかりと束ねていないから余計な被害まで出す』

「ぬうう」

『威力が弱い。十分に霊力が練れていないからあんな無様な結界に手間取る。他の霊媒どもの圧力がなかったら、結界の表面を削って終わりであった、な』

「…」

いきなり登場したおそらく忠夫の影法師。いきなり駄目だし三連発でもうポロポロである。

「ちくしよー！ いきなり出てきて何だつてんだこの野郎！」

『あんな無様な真似はするな、と言っている』

トイレの鏡越しに合った視線で睨みつけるが、全く気にしていない様子。影法師。目しか見えない為非常に分かりにくい。おそらくこちらの睨みも、鼻で笑いながら気にも留めていないだろう事だけは、忠夫にもはつきりと分かった。

「あーもう！ お前、いつかの影法師だよな？」

『正確にはその一部、といった所か』

「心眼はどうなつたんだ？」

『喰われた』

「は？」

いきなりとんでもない発言をかます推定影法師の一部。

「おいおいおいっ！何につ?!いや喰われたってなんで?!」

『落ち着け。あやつはどちらにせよそもそも最早寿命が近かつたのでな。喰われたと言うより引き込まれた、といったほうが正確だな』

要するに、エネルギー切れである。そもそも天竜姫が心眼を授けたのは緊急時のお守りのような役目を期待して、であった。

その目的は困った時にその内に蓄えられた天竜姫直々に授けた竜気を効率よく使うための保管器であり、その制御装置として心眼は存在していた。

ところがそのバッテリーとしてのバンダナに内蔵された竜気はたまたまその状況で覗き見していた天竜姫の手加減無しの後押しであつさりと底をつき、最早ただの喋れるバンダナとしての存在となつていた。

其処へきて忠夫が外部への靈力に目覚めた際、最も近くに在つた通路——この場合、膨大なエネルギーが無くなって空になつていた、貯蔵庫であつたバンダナへと一部の流路がこじ開けられ、たまたまその結果として心眼としての意思と機能が忠夫の内に引きずり込まれてしまった、というわけである。

偶発的に起こった事ではあったが、心眼が無くなつた事で完全にバンダナもただのバンダナと化しており、結果としてこつそり天竜姫が付けていた覗き見機能が無くなつたのは忠夫にとつてラッキーだったのかもしれない。

「んじゃ、あいつは」

『お前の一部と成つた』

「…天竜になんて言つたら良いのやら」

『ともかく。お主は結局私の問いに答える事ができるのか?』

「へ?」

『言つただらう? 次の牙を見つけてみせろ、と』

それは初めて靈力に目覚めた時。あの一瞬の邂逅での出来事の中で聞いた言葉だ。

「それは…」

『…ふむ。犬飼忠夫よ。我は問う。お主の想いはその程度か?』

「…」

何の事か分からない、何故そんな事を言われなければならない。そう思いながら反抗的な視線を向けてきているのであろう忠夫に、影法師は鏡越しに視線をそらす事無く向け続けている。

『先程のお主は、確かに己の牙を扱えた。ならば、その力を持つてなんとする?』

冷たい声。何の感情も籠っていないように、いや、失望だけが籠ったようにも思えるその問いかけ。それを聞いた忠夫は、顔を伏せる。

「…さつきさ、ほんとにビックリしたんだ」

『む?』

だが、心眼、いや、影法師の問いに答えた忠夫は、顔を伏せたままぼそぼそと呟く。

「あいつらさ。別に悪い奴等じゃないって思ってる」

『あの光景を見せられて、か?』

「それでもだ」

『ならば、どうしたい?』

「…ちよつと無茶な事だけど、協力してくれるか?」

迷いはまだ残っていて、やや自棄になつていゝような声音ではあつた。しかし、同時にそれは確かな意思が籠つた声音だつた。

『先程の未熟な一吼えに免じて、な』

「んじやさ…手伝つてくれ。俺は、あいつらを、いや」

呟き声は段々と確かな音量を持ち始め、それに含まれる意思は熱を増す。そして

「あいつらの根性、叩き直してやりたいんだけど?」

『ふ、ふははっ！ よかろう、今回だけ未熟者の手を引いてやろうではないか！ ならば再び問おう!!』

額からの声からは冷たさも失望も消え、愉快さだけが零れている。視線に籠っているのは、やっと光り始めた若武者を眺める先達の暖かさ。

『お主が得た牙は「奪う牙」！ 意思を、物質を、命を、存在を！ 他者から何かを奪う牙！ その牙を持つてなんとする?!』

愉快さの中に籠められた、影法師にしか分からない、他者には伝わらないその思い。

「——奪わない！ 奪う牙で奪わない、奪わせない！ それが俺だっ！ 犬飼忠夫だっ!!」

その一吼えを聞いた影法師は、今己に眼しか無い事を幸運だと思つてしまった。その矛盾を、奪う牙で奪わない事を真顔で告げたその存在を、——面白い。そう、思つてしまった。吊り上がる口元が、抑えきれずに零れていたであろう笑みが見えない事が幸いだと思つた。

『その意気や良し。だが、結果を見せねば只の戯言だということも分かつておらう?』
鏡に映つた互いの眼。その視線に籠つた意思がぶつかり合う。かたや挑発的に。かたや不敵な笑顔と共にその眼に意地を乗せて。

「だくから、言つただらう? 無茶でも良いかつて」

「ここが白竜GSの…」

「ええ。この登録に間違いが無ければ、ですが」

「わあ、おつきなお寺」

とある山中にある白竜道場。辺りは木々に覆われており、その厳かな佇まいを見せるのは白竜GSによって開かれたGS養成所。唐巢神父、小竜姫、そして母の手元に残った治療中の一匹を除いた11匹の式神をつれた冥子。彼らの姿は今その前にある。

「…おかしいですね」

「どうかしましたか、小竜姫様」

「静か過ぎます」

辺りは鬱蒼とした森で囲まれている。豊かな森だ。空気も澄んでいて、靈的にも安定している。霊能力者の訓練場としても理想的であろう。だが、此処には、あつてしかなるべき命の息吹が全く感じられなかった。

「鳥の鳴き声も聞こえないわ。 たつくさん住んでそうなのにく〜」

「…小竜姫様」

「ええ。 どうやら大当たりのようですね。 来ます」

そう会話しながらも最も大きな建物——おそらく道場であろう場所に向かって歩みを進めていた小竜姫たちはその足を止める。 そして——

「ビッグ・イーター?!」

「これはメドーサの眷属っ!」

「皆〜出てきて〜!!」

歩みを止めた彼らに向かって、道場の扉を打ち壊しながら現れたのは、いつぞや東京の地下水路で美神達を追いかけ回した大口の化物たちだ。 即座に戦闘態勢を取る3人と1匹。

「ここは私達が抑えますっ! 唐巢さんは美神さんたちに連絡をつ!」

「はいっ」

化け物どもに剣を抜いて斬り付けながら小竜姫が言い残した言葉に従い、懐から携帯電話を取り出した唐巢。 だが、その電話はつながることは無かった。 横手から飛んできた手裏剣がそれを正確に打ち落としたからである。

「なにつ!」

「残念ですが、貴方達にはもう少し遊んでいってくださいませわ」

今まで息を殺して隠れていた黒い忍者服を着た女性が、道場の傍らの一回り大きな樹の陰から音も無く現れた。両手でクナイを弄びながら、酷薄な笑みで小竜姫達をビッグイーターと挟み撃ちにする位置に素早く動いたその女性は、続け様にクナイを投擲しながらサデイスティックに口元を歪める。

「気に入らない雇われ仕事では在りますが、忍者として任務は絶対優先なので」

確かに会場に居るはずの、九能市 氷雅の姿をしていた。

「どうも！ 九能市さん、でしたよね！」

「あら、確か横島さん、でしたわよね？ 敗者に何か御用でも？」

「ケツケツケ」

「……………」

騒ぎの未だ収まらぬ会場の片隅で、何も説明せずに手招きした美神とピートを連れて、忠夫は白竜の面々と向かい合っていた。

「いやー、やっと分かったんスよ」

「…何がですか?」

「いや、ずっとなんだかおかしいな、と思ってたんですけどね?」

お互いに笑顔のままに忠夫と九能市の間で少しづつ高まっていく緊張感。それを背後から「一体何を考えてるんだ」という風に眺める美神とピート。そして無表情、無言で立ちすくむ勘九朗と雪ノ丞。ニヤニヤと不気味に笑いながら見ている陰念。

「匂いが、ね」

「なにか変な匂いでもしてますかしら?」

「いや、普通の匂いですよ? この2日間、いつでも、試合の後も、寸分違わぬ、同じ匂い」

その一言が、彼女の雰囲気を一変させた。

「俺、鼻が良くてですねー。どんなに香水や制汗スプレーやらを使っても、多少は変化が分かるんですよ」

その言葉に背後でなんとなく嫌そうな表情をした美神に、

『あ、美神さんは何時でもどんな時でも良い匂いですよ!』

とフオローのつもりで声を掛けて、デリカシーの無さ故に後頭部に神通棍をくらって流血したがそれはさておき。

「もうよろしいですか？ 私達も忙しいので。お話はそれだけかしら？」

「いや、ちよつと調査を」

「何を調べるのかしら。使つてる香水でも知りたいの？」

ピリピリとしたまるで綱引きのような会話。確信はある。だが証拠は無い。ならば多少リスクはあれど、ここは一発博打に賭ける。

簡単ではあるが練習はした。今回に限つては影法師が練つた靈力の隠蔽を手伝つてくれたから気付かれていない。美神に神通棍でしばかれた時にはちよつと漏れそうになつたがまあ美神の靈力が撒き散らされたお陰で、十分に練り終わるまでの会話の引き延ばしに多少のごまかしが効いてくれたのは不幸中の幸いか。

「まさかつ!!」

「————オン!!」

その吼声は、ほぼ完全に靈波に変換された、無音の爆音だった。指向性もばつちり。至近距離で収束も十分。回避は不可能。しかも威力は影法師のお墨付き。ならば、

「くあつー!」

証拠は目の前だ!

影法師曰く。犬や狼の咆哮には場を清める、魔を追い払う効果があるらしい。であるからして、それが最も有効なのは、人体や物質ではない。結界や霊的なカモフラージュ、呪いの浄化、場の正常化等、歪められた流れを正しい流れに戻す効果もあると言っている、らしい。つまり、術を使って元の姿を隠している変装にも効果はある。

果たして、その驚いたような声をかき消すように、九能市と呼ばれていた女の姿が一瞬で剥落し、砕け散る。咆哮で消し飛ばされた術の欠片はそのまま会場の中へ撒き散らされ、自然とその場にいた者達の視線を集める。

「っ、の、くそガキがあああっ!!!」

竜神族ブラックリスト掲載の指名手配犯、メドーサ。その魔族へと。

GS資格。そしてGS協会。共に神族にそのシェアのほぼ全てを奪われながら、魔族にとつての敵対存在を生み出すモノ。

ならば、それ自体を奪ってしまえば魔族に対する敵だけでなく、神に対する手駒を生み出す一つの手段となる。とはいえ、今回のこれはそれを建前にしたちよつとした暇潰しのはずであった。そもそも、人が神や魔を打ち倒すということはそれ程簡単なことではない。

下級の魔族でさえ、凡百のGSが対応するとなれば、厳しい修行と幾つもの実戦を乗り越えてきた彼らでさえ、何人かの犠牲が出る事を覚悟しなければならぬほど、種族としての格差が大きいのである。

メドーサは考える。だが、だ。目の前の小僧は只の人間じゃないのか。確かに試合ではギブアップしたが、それも別にこれからGSとして現れるで在ろう受験者達の中に「恐怖」「危険」、そういった危機感を感じさせるようなやつらが居なかったから、興味を無くしたから辞めた。それだけだ。

正直な所、目の前のこいつも素早くはあつたが、それだけだった。霊力もまともに感じられず、僅かに竜神の力の残滓を感じさせた借り物にも残りカスのような力しか感じない。確かに霊刀を奪われたのは、使い慣れていない武器とはいえどもあり得ないミスではあつたが、それでもその後の台詞は大方ハツタリだろうと自分の勘が告げていた。本気を出せば一瞬で蹴散らせると確信していた。

そう、確信して「いた」。なのに、今、目の前のこいつは、こいつには得体の知れなさがある！

「さうして、改めて自己紹介だ」

そう言つてバンダナを外し、再び結びなおす。バンダナに押さえつけられていた獣の耳が忠夫の頭からびよこりと姿を見せた。

「半人狼、犬飼忠夫、——推して参る!!」

「貴様、あの時のタヌキかあああつ!!」

半人狼と魔族のセカンドコンタクトは、互いに繰り出された拳と拳が奏でる協奏曲。その鈍い響きは衝撃と共に会場中に伝播する。

「ちっ! お前らああ! いけえええつ!」

「……」

「ケツケツケ」

メドーサの指示に従い、何か反応を返すでもなく静かにただ立っていた白竜道場の面々がずい、と進み出る。彼らはまともな精神状態にはないと一目でわかるような虚ろな目のまま、その身に靈力を纏う。それは彼らの身を鎧う装甲へと一瞬で変化した。

だが、そんな彼らに対抗するように、神通棍を構えた美神達が進み出る。

いや、美神達だけでは無い。そう、ここはGS試験会場。そして、此処には彼らがいる。

「——ふん。魔族に、魔装術か。随分と時代遅れじゃのオ」

「収束率・70%・55%。32%。敵対存在と・判定。収束率順に・危険度・設定します」

「げっ、爺いつ! ってマリアもッ!」

どこから現れたやら、忠夫の横に並び立つ「ヨーロッパの魔王」とその娘。

「タイガーの仇。討たせて貰います！」

「ピートっ！ 死んでない死んでない」

その反対側に歩み出る半吸血鬼、ピート。

「全く、この馬鹿！ 小竜姫からの連絡もないって言うのに、もうちよつと待ってからにしてほしかったわ！ …このゴタゴタの中逃げられるよりはましだし、やつちやつたら今回は見逃すけど、次からはちゃんと雇い主に相談するように」

「あてっ！ すいません、美神さん！」

忠夫の頭を軽く小突いた後、メドーサに向かって神通棍を突き付ける美神。

「貴様ら…たかが人間風情が魔族に勝てるだけでも「思ってるわよ！」」

メドーサの嘲笑交じりの台詞を遮って、そう何でも無いような事のように答えるのは美神。

「ま、あんたら魔族から見ればそう言いたくなるのも分かるけど…」

美神の手の中で輝きを増す神通棍。不敵な笑みを浮かべたまま、美神は全く臆することなく破魔札を取り出し、構える。

「あんまりGSを舐めない事ね！ さあ、人間の力、胸焼けするまで味合わせてあげるわよっ！」

「応っ!!」

「小僧どもは2人とも人外じやろが」

「ドクター・カオス。そこは・流す所・です」

第二十三話。

「いい加減落ちんかいっ！」

猿神が繰り出した金剛棍。樹齢数百年を数える杉の大木と見まがうばかりの太さを誇るそれは、激しい音を立てて堅い筈の鱗を意に介さず衝撃を透して竜神王を揺さぶる。

「ぐわっ！ なんのおおっ！！」

負けじと竜神王の口から吐き出される灼熱の炎。しかし猿神の体毛を少し焦がした所で

「甘いわあああっ！！」

「なんじゃそりやあああっ！！」

猿神の振り回した金剛棍があっさりとは吹き散らす。竜神王の叫びもむべなるかな。

「うわわわわわっ！！こっち来たー！！」

「あじゃじゃっ！！」

吹き散らされた炎は、周りで見守っていた家臣団を直撃。何人か黒焦げではあるが、所詮ギヤグ時空的な何かが支配しているので担架で運ばれるだけで済んでいる。

「やはりこのままではっ！」

「ふふふ……とうとう諦めたかの？」

流石に武神として名高い猿神。焦りの表情を浮かべた竜神に対して、余裕の笑みを浮かべながらじりじりとその間を詰めて行く。

「ならばっ!!」

「むっ?!」

大きく息を吸い込む竜神王。猿神は警戒し金剛棍を構えた。

「——犬塚殿オオオツ!!」

「おおおおおおおっ！」

が、竜神王の口から放たれたのは焼き尽くすような白い焰ではなく、連れの人狼への合図であった。その声に答えて突如猿神の背後、その足元から飛び出してきたのは犬塚父。

「おりやあああっ！」

「うおっ?!」

よくよく見れば出現地点から先程親父達が密談していた所まで、モグラが穴を掘った後のように土が盛り上がっていた。ここまで穴を掘って来たのであるうか。その地点に誘い込んだ竜神王の策略を見事と褒めるべきか、上が焰の吐息で焙られようが2大怪

獣大暴れで踏まれようが揺らされようが我慢しきった犬塚父の勝利への執念に呆れるべきか。

「はっはっは！ 竜神王の装具の力を見せてやるわあああっ！」

新しい玩具を手に入れた子供のような目をして、手首と足首、そして頭に光り輝く輪を身に付けた犬塚父は、驚きに一瞬動きを止めた猿神の背中を飛び越え、背後から大上段に刀を振りかぶり、呐喊。

「小癪なっ！」

しかし相手は武猿神。不意打ちに対し体勢を崩しながらも、一瞬で状況を把握すると迎撃の一撃を放ち、振り下ろされる刀と金剛棍は空中でぶつかり合う。

さて問題です。豪速球がバットで的確に球を捉えたバッターを吹き飛ばす事はできるでしょうか？

「あーれー」

ホームラン！ 快音と共に絶対的な重量差で物理法則に敗北した犬塚父は、そのままお空の星になってしまいましたのだった。

「……あちゃー」

戦友が飛んで行った方を見上げながら、呆けたような声を出した竜神王。その背後から、目を怪しく光らせた袁神が、金剛棍で肩を叩きながら竜神王の肩を掴む。

「……で？」

「げ。」

竜神王、ぴーんち。

G S 試験会場、その場所は、今まさに人魔決戦の様を呈していた。

「横島君、マリア。あんた達はメドーサを足止めしておいて。カオスは勘九朗とか言うのを。ピートは雪ノ丞をなんとかしとめて頂戴。私は先ずあの陰念を相手にするわ」

「了解っす」

「イエス。ミス・ミカミ」

「やれやれ、老人を扱き使いおつてからに」

「わかりましたっ！ 決勝戦の勝敗、此処でつけてやる!!」

「相手が厄介だと思つたら時間稼ぎに徹すること。相手に連携させないこと。それから、やれそうならさっさと倒してほかの所に援軍に行くこと。いいわねっ！」

周りの仲間にもう号令し、構えた神通棍に更に靈力を注ぐ美神。

対して白竜側は――

「作戦会議はもう良いのかい？」

「あら、待つて頂いてたみたいね」

既に冷静さを取り戻したメドーサは余裕の表情でGS陣営を眺め、その前に構える3人組は、全くの無表情のまままだ構えを取っている。

「その余裕が命取りだつて事、教えてあげるわっ！」

「はっ!! やれるもんなら――やつてみなああつ!!」

その声と共に、素早く左右に分かれる白竜3人組。右に勘九郎、雪ノ丞。左に陰念。そして彼らの隙間を縫うように、中央からはメドーサの抜き打ちの魔力砲がGS陣営に向かつて放たれる。

が、それは誰にも当たらず無事床板を抉り、着弾と共に巻き上げられた爆炎は、戦いの狼煙となつて燃え上がる。

「さて……私の相手はあんた達だつたね」

「あ、手加減してくれないかな？」

「ノー。横島・さん。メドーサ・魔力値・急激に・上昇しつつ・あり。余計な・希望・持たない方が・貴方の・精神衛生上・よろしいかと」

爆炎を物ともせず、その只中を歩み出る忠夫とマリア。

「はああああ。いっちばん厄介な所とかくくバンダナはもう閉じたままだし」

「問題・ありません。対G S試験用・装備・順調に・稼動しています」

「ふん。天竜姫の時の借り、返させてもらおうよ…」

呟いたメドーサは、両の掌を胸の前で合わせると、その手を押し広げるようにして、其処から二股に分かれた槍を取り出す。そして具合を確かめるようにそれを一振りすると、斜めに構えてこちらを睨み付けた。

「あんたの命でねっ!!」

「おう、怒ってる怒ってる」

「ノー。横島・さん・もう一度・言います。全く・問題・ありません」

「さてさて、マリアの方はあやつがついとる限り…いや、ちくと心配じゃな」

「グルルルル…」

悠然と立つカオスの前に、唸り声を上げながら構える、魔装術を発動させた勘九郎。

「ふん。意識は獣に落ちても、体で覚えた技術だけは無くさんか…哀れな」

「グアアアアアッ!!」

その声に反応したのかは定かではないが、勘九郎は大きく声を上げるとカオスに向かって飛び掛る。

「聞こえてはおらぬだろうが、一つ、講義をしてやろう。錬金術師の戦闘の本領は、な」
「ガッ?!」

カオスに向かって右手を振り下ろすが、それはカオスを素通りし、会場の床を抉るのみ。

「己の生み出した道具を使った、戦術支配にある」

声が聞こえてきたのは、勘九郎の足元に転がるゴツゴツとした、機械でできた小さな球から。その球は、勘九郎が気付いた途端に破裂し、凄まじい光を溢れさせる。

「グギヤアアアアッ!!」

「ゆえに。狂った獣では、人の知恵には及ばんだ」

メドーサによって起きた爆煙に紛れて身を隠していたヨーロッパの魔王は、哀れみを籠めた視線を向けながら、静かに勘九郎の背後に立っていた。

「雪ノ丞…あなたとは、こんな形でなく、ちゃんとした試合をやりたかった」

「……」

「だけど…いや、だから。——これが貴方と僕のGS資格を賭けた戦いだ」

右手で十字を切りつつ、左手は拳に変えて握りこむ。

「ルオオオオン…」

確かに魔族の術によって意思を奪われながら、雪ノ丞はまるでそれに答えるかのよう
に、低く満足げな一鳴きをした後、自然に構えを取ってピートの眼を見つめる。

「始めよう。GS試験、第2回戦だっ!!」

「オツ!!」

互いに繰り出した右拳は、互いの左頬にぶち当たり、互いを後方にぶっ飛ばした。

「…さて、と。どうやらあんたが3人の中で一番厄介みたいね」

「へっへっへ。あんなメドーサ様の下僕に乗っ取られた奴等と一緒にするなっただ」
静かに対峙する美神と陰念。だが、この不細工な魔装術に鎧われた青年だけは、他の二人とは明らかに雰囲気違った。

「ふーん。つてことは、あの二人は利用されただけみたいね」

「ケツ！少しばかり強いからつて、いい気になつてるからさ！」

陰念は気付かない。

「あら？じゃあやつぱり貴方が一番弱いのかしら？」

「——キサマツ！」

「だくつてそうでしょ？どう見てもあんたの鎧がいつちばん不細工だし」

「…黙れ」

戦いは、殴りあうだけが戦いではない。

「その魔装術つてーの？ 他の二人に比べて迫力も無いし、見つとも無いし」

「黙れ！」

「なんとつても顔がチンピラつて感じよね〜」

「黙れ黙れ黙れエエツ!! あいつらなんかよりも、俺が、俺が一番強いんだあつ!!」

「あんたが意識を保つてるつもりなのも、どうせ取り憑いた眷属が少なかったからじゃないの？」

「っ！」

「あーらあら、凶星みたいね。少し揺さぶっただけでこんなカマに引っかかっているようじゃ、まだまだよ」

情報を得ることも戦いだ。そして――

「このくそアマアアアアツ！」

「さくて、ちよつとキツメのお仕置きタイムと洒落込みましょうか」

――GS美神令子。その超一流のブランドは、伊達や酔狂では、断じて、ない。

「落ち着きたまえ冥子君っ！」

「きゃ〜！きゃ〜！きゃ〜！」

「何ですのこの方はあああ!!」

一方その頃白竜道場では、阿鼻叫喚の地獄絵図が展開されていた。

「ちよつと手裏剣が掠めたくらいで何でこんなことにいいいっ!!」

「忍者なら戦う相手と依頼人くらい調べておきたまええええっ!!」

「きゃ〜!きゃ〜!きゃ〜!きゃ〜!きゃ〜!きゃ〜!きゃ〜!」

響く二人分の女性の泣き声と、一人分の苦労人っぽい男性の声。そして揺れる地面と響く爆音。何があつたかは推して知るべし。

「大丈夫でしょうか、唐巢さん達は…」

そして小竜姫は神父達に後を任せ、会場に向かつてまっしぐら。大丈夫ではないが死にはしない、と思う。

「ウガアアアッ!!」

鋭い爪の一撃が向かう先は、既に興味を失った様子で詰まらなさそうに勘九郎を見ている老人の首。

「それも外れ、じゃよ」

が、それが貫いたのは幻影の首。空気に溶けるように消えた影の足元に転がる、幾つもの小さな丸い物体が、勘九郎の足元で閃光と共に轟音を撒き散らし破裂する。

「ガツウツ!!」

最早、幾度繰り返したであろうか。カオスの幻影を殴りつけ、その度に放たれる衝撃や爆発、閃光に轟音。その様は正に獣と獵師の如く。罨にかけるカオスと罨ごと食い干切らんとする勘九郎の戦いは、傍から見れば至極単純な物であった。

「ふむ。やはりベースは人間、か。しかし半分霊的存在と化しておる」

「グルルルル…」

「だが、飽いたな」

呟くカオスの眼には失望が。飛び掛る勘九郎の目には狂わんばかりの怒りが。しかし、それまでの展開とは異なる事態が発生する。

「ゲハハハハッ!」

眼に頼ることを諦めたのか、魔装術の口元を歪めた勘九郎は、己の周囲にいくつもの魔力を凝縮させた球体を作り始めた。

「ほう、獣とはいえ学習はするか」

「ガアアッ!!」

勘九郎の咆哮と共に全方位に向かつて放たれる光の球。それは一瞬にして周囲を抉り、弾け、炎の華を広げる。

「ゲハハハッ!!」

その中心で焔にまみれ、己の魔装術にもダメージを受けながら、だが勘九郎は痛みも意に介さず高笑いを上げた。

「所詮は獣、か。…先も読めずに、只、力押しで『ヨーロッパの魔王』に勝つには」

だが、カオスの声は途切れない。そして、勘九郎の足元には、何時の間にもやら先程から痛い目を見させられ続けた機械仕掛けの球体達が、幾つも、幾つも——百を超えるように、まるで自分の意思を持つように、先ほど勘九郎が放った光球の軌道をなぞるように、全方位から転がってきていた。

「ガアアアッ?!」

「——900年程、遅かったのう」

そして、その一言を最後に、今までの“実験結果”から確実に意識を断てるように調整された閃光と爆音と衝撃を万遍なく全方位から受け、獣は傷付く事無く意識を根こそぎ剥ぎ取られたのだった。

「おおおおおっ!!」

「オオオオオオッ!!」

ピートの右拳が雪ノ丞のどてっ腹にぶち込まれれば、苦痛の声を上げながらも雪ノ丞はその手首を掴み、痛みを堪えて人間の幅を超えた膂力でピートを振り回す。

「なっ!」

「オウッ!」

数回も振り回して完全に平衡感覚を失った瞬間、雪ノ丞に投げ飛ばされ、受け身も取れないまま地面に叩きつけられるピート。

「がはっ! つこのっ!」

即座に跳ね起きたピートは、追撃の拳を振り下ろす雪ノ丞の一撃を擦り抜けるように交わして背後にでると、勢いそのままに周り蹴りを背中に向ける。が、野生の獣じみた勘で察知した雪ノ丞は素早く前転して回避し、そして二人は再度向かいあう。

「ガッ！」

そして再び始まる乱打戦。いったい何発殴ったか。何回殴られたか。もう、数えちゃいられない。そんな暇があるのなら、息をつく間があるのなら、その時間に拳を相手に叩きこめとばかりに互いに防御を捨てて殴り合う。

「ぜりやあつー！」

だが、魔装術で防御力は高められようとも、元々の体力では半吸血鬼であり、雪ノ丞程まではいかずとも、本人の性格もあつて十二分に鍛えていたピートのわずかに軍配が上がった。

「ガッ！」

ほんの一瞬の呼吸を求め、意識が息を吸う事に逸れた雪ノ丞の眼前に、愚直に相手を打倒する事にほんの少しだけ長く注力出来たピートの拳が見えた。それは、意識の隙間を抜け、抉りこむように酸素を求めて膨らみ、緩んだ雪ノ丞の腹筋を強かに打ち据える。綺麗に決まったピートの拳。踏みとどまる事も出来ずに吹っ飛んだ雪ノ丞は、そのまま壁に叩きつけられた。

「っはあつー！ はあつー！ はあつー！」

「ぐぐっ、ぐぐっ。ゴルルルル…」

だが、それでも雪ノ丞は立ち上がり、腹部を押さえながらもふら付く足で破壊された

壁を抜け出す。

「オオオオオン……」

壁から抜けた彼は、悲しそうな、いや、悔しそうな一声を上げた。

「……そうです。貴方も僕も、もう限界だ。終わりですよ、次でね」

「オオオオオオオオオン……」

「……残念ですか？　僕も少し残念です。でも……」

「……」

「貴方が「こちら側」に戻ってこれたら、また、いつか、やりましょう」

その言葉が終わると同時に、余力を全て注ぎ込み、凄まじい勢いで駆け出すピート。

雪ノ丞は動かず、ただ拳を握り最後の力を蓄え、待つ。

「……がああああああっ!!」

先に繰り出されたのは雪ノ丞の拳。カウンター狙いのそれは、間違いなくピートの鳩尾に突き刺さる軌道であった。そして、ピートは避ける事もせず、一直線に己の腹部めがけて襲いかかる致命的な一撃を一瞬だけ確認すると、迷うことなく最後の一步を踏みこみ、拳を相手より一瞬遅く繰り出した。

しかし、雪ノ丞が叩いたのは空気の壁と、霧に変わったピートの体。胴体だけを霧と化し、雪ノ丞の拳を無効化したピートは、僅かに笑ったようにも見えた顔に、クロスカ

ウンターをぶち込んだ。

「ガあ……」

意識を断たれた雪ノ丞は、何処か満足げに、だが納得いかなそうにも見える表情を解けて行く魔装術の下から曝しながら、大きな音を立てて膝から崩れ落ちた。

「ふう……切り札は最後まで取って置くものですよね」

「んで？まだやるつもりなのかしら？」

「……ち、ちくしょう」

神通棍、破魔札、精霊石等々。様々な攻撃手段。そしてそれを活かしきる頭脳。十分な威力。ともすれば器用貧乏と呼ばれるその多彩な戦術全てを高いレベルでこなす事が出来る。まさに彼女の戦い振りは万能のGSと言うに相応しいそれであった。

殴りかかっても神通棍でそらし、受け流し、的確なダメージを必要なだけ霊力を籠めた一撃で与え、切り返される。

魔力砲は結界符であっさり防がれる。

残り少ない魔力を使った、破れかぶれの連続魔力砲も、精霊石で防ぎきられた。

勝てない。陰念の脳裏に、その言葉が過って、もう何度目の攻防になるだろうか。

「化け物め……!」

「しっつれいねー。妖怪みたいな見た目になった奴に、化け物呼ばわりされる筋合いはないわよ」

「なんつでだつ! なんでそんなに強い?!」

陰念の喉から迸つたのは、怒り。化物になっても強い力を得たい。魔族に利用され様がそれでも構わない。強く、強く、もつともつともつともつと!!!

「それが馬鹿だつて事」

「なっ?!」

「その意味がわからないようじゃ…強くなつても、弱いままよ?」

「どういう意味だ?!」

「自分で考えなさい。私はあんたのママでも先生でもないの。其処まで優しくする理由が無いわ。ま、大金積まれたら話すかもだけど♪」

その瞳から覗くのは、自信。自分に対する絶対的なまでの信頼。そして、大きな欲望と情熱。其処にあったのは、非常識なこの場で非常識なまでに余裕を持った、どこまで

も美神令子である女性であった。

「…いまさら、だ」

「…そう。駄目みたいね」

もしかしたらそれは、最後に垂らされた一本の蜘蛛の糸だったのかもしれない。踏み止まるべき、最後の一線だったのかもしれない。

「今更そんなこと関係ねえよっ!!」

だが、彼は迷わずそれを引き千切り、踏みにじった。そして、それらに背を向け、再度自分で線を引く。

「なら、どうするのかしら?」

「力、だ。お前も、あの蛇女も、誰でも、何もかも! 全てぶつ殺せる、そんな力があればいい!」

己の求める物のみを信念とし、新しく引いたラインは、決別の一線。叫びと共に溢れ出す魔力。しかし、それはさっきまでの魔装術といった偽りの魔力ではない。

「…魔道に堕ちた、わね」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

陰念本人から溢れ出す物。そして陰念はその姿を変貌させる。獣を超え、鬼を超え、ただの化生へと魂から変貌していく陰念。

「グガアアアアツ!!」

「…情けない。あんたよりはまだ横島君のほうが分かつてるわよ。きつと、ね」

目からは理性の色が消え、まるで空腹の獣のごとく涎を垂らす彼を見て、美神は、懐から破魔札を数枚取り出し、陰念に向けた。

「マダダツ!モット、モットチカラガツ!!」

「うそっ?!」

しかし彼の執念は其処で終わらなかつた。一端下級魔族へと変わった陰念は、更にその姿を変えていく。させてなるかと破魔札を投げる美神。だが、それは威力を発揮する事無く、彼の周囲に漂う魔力に吹き散らされ、辺りに紙屑となつたそれらが、まるで祝福の様に舞い散つた。

変容は、静かに終わりを告げた。其処に居たのは、陰念の姿に戻つた…いや。

「喰らつたのね。あんたの中にいたメドーサの眷属を、その魔性を」

「ああ。もう、戻れねえみてえだがな」

その皮膚のあちらこちらには鱗で覆われ、瞳は蛇眼と化している。なによりも、その存在から溢れ出すのは——強力で、純粋な魔力。

「シュツ！」

「なんのっ！」

メドーサの繰り出す槍を、右の拳に靈力を纏わせ弾き返す。反動で槍を振り払い、一
気に懐に飛び込む。

「おらあっ!!」

「甘いねえっ!!」

隙だらけに見えたボディに一発ぶち込んでやろうと踏み込むも、待つていたのは迎撃
の膝蹴り。もろに喰らって仰け反る。

「喰らえっ！」

「ノー。その行動は・不可能・です」

其処を狙って引き戻した槍をガラ空きの喉に突き出すも、槍の穂先を正確に狙ったマ
リアの銃撃がそれを押し留める。

その隙にメドーサの膝を踏み台に後方へ跳んでマリアの傍に忠夫は着地した。

「いたたたたっ！」

「大丈夫・ですか？横島・さん」

「おく。マリア、ナイスフォロー」

「ノー・プロブレム」

「ちっ！ 人形風情が厄介なっ！」

舌打ちと共に再び構えるメドーサ。それに呼応するかのように霊力を高めていく忠夫と——マリア。

「：マリア、何時の間にそんな事できるようになったん？ 俺より使い慣れてない？」

「ドクター・カオスは・陳腐な表現・ですが・まぎれも無い・天才です。一週間・ほどで・プログラムと・システムの構築を・ボデイの・変更と共に・仕上げられました」

驚いたように尋ねる忠夫に対し、マリアはどこか誇らしげにカオスのことを伝える。いつぞやのカオスの秘密基地搜索で、色々と探していたのはこの為であったようだ。

「ボデイの変更？」

「イエス。この・用に」

見た目全く変わらぬマリアの何処が変わったんだろう？と思っていると、マリアはその手を忠夫の頬にあてる。

「うえっ?! …あ、やっらかい」

「霊力を・より効率的・に循環・できるように・有機物メインの・ボデイに・換装・して

あります」

いきなりのマリアの行動に驚くも、その手から伝わるのはあつたかさと柔らかさ。つくづくあのカオスのやることには驚かされっぱなしの忠夫である。

「これからも・バージョン・アップを・随時・施す予定です。期待して・お待ちを」

「いや、期待って…」

「…期待、して・いただけませんか」

「いやいやいやいや!! 期待する! 期待するから!! 楽しみだなーもう!」

「ありがとう・ございます」

何処となくしよんぼりしたようなマリアに、慌ててフォローする忠夫。その返答を聞いたマリアはやはり何処となく嬉しそうで。

「……………で、もういいかい?」

「うおっ!!」

「……………」

そしてすっかり忘れていたのに、律儀に待つてくれていた冷たい視線のメドーサの突っ込みで慌てて振り向く忠夫。マリアはなんだか不満そうであった。

「はんっ! 全く。機械なら機械らしくしてりやいいものを。なに色気づいてんだか」

「……………」

メドーサのその一言に、マリアは無言でブーツに仕込まれたブースターを吹かして突撃する。

「マリアツ?!」

「へえ! 機械人形が、凶星を付かれて怒ったのかい?!」

嘲弄するメドーサと視線を合わせながら、マリアは更にブースターの出力を上げた。

「ノー。これは・只の・敵への・攻撃です」

「中身は小娘かつ!」

勢い良くメドーサの前まで突っかけて行つたマリアは、メドーサの突き出した槍を、直前で、そのままの勢いで左足を後ろに振り上げ縦に一回転。胴体を狙つて突き出された槍は、逆さまになったマリアの頭の下を掠めるようにして通り過ぎる。空中に浮かんだままで遠心力を活かした踵落し。

「があっ!!」

流石に目の前で背中を向けられたことに一瞬動揺したのか、槍を引き戻す暇も無く、頭は避けたものの左肩に強い一撃を喰らうメドーサ。マリアは肩を踏んでメドーサの後ろへ。慌てて振り向くメドーサ。

「こゝ、この小娘があつ」

「これでも・製造されてから・700年・経過して・います」

「人形の癖につ！」

「…羨ましい…のですか？」

「——っ！」

「貴方には・そういった・存在がいなかったの「だまれええっ!!」」

その一言が、何に触れたのか。

「機械が、それ以上囀るなアアツ!!」

「これは——」

「碎け散れ!!」

メドーサの手に蓄えられたのは、それまでとは比べ物にならないほどの巨大な魔力。一瞬の間さえも無く放たれたそれはマリアに向かって突き進む。回避するには速度が
ありすぎる。距離が近すぎる。されとて直撃すればその言葉どおりマリアは碎け散る。

——しかしその顔に焦燥は無い。

「——オオン!!」

そして、それは観測していたデータ通り、マリアを傷付けない。疾風の如く割り込んだ影が、高密度に圧縮された退魔の咆哮と共に、その力を真つ二つに切り開く。

「おお、ほんとに出来た。初めてだったけど何とかなるもんやなー」

「ありがとうございます。横島・さん」

「ふ……ふざけるなああつ!!」

渾身の魔力を籠めた一撃を、感情の乱れで多少収束が甘かったとはいえ、横合いからとあっさり切り裂かれ、無効化された。その事実、そして忠夫の手に光るそれに、メドーサは激昂の声を上げる。

「まじめだつつの。これ以上無い位」

その台詞とは裏腹に、何処までも軽い口調で返すのは半人狼の青年。その右手には、青く光り輝く靈波刀。バンダナに開いた獣の目が最後に伝えた技は、人狼としての靈波刀の作り方。

ブツツケ本番で試すことになるとは思わなかったが、結果オーライ。

「便利だなー、これ。まさに栄光を掴む俺の牙、『フアング・オブ・グロリー』ってか」
「……ノー・コメント」

「あれ? 不評?」

「ノー・コメント・です」

軽く振り回しながらマリアに問い掛けるも、マリアは視線を逸らして批評せず。

「……もう、いい。認めてやる。お前らは、確かに厄介だ」

そのどこまでもペースを崩さない目の前の二人に、そう告げる。辺りの喧騒も、何時の間にか静まり返っている。どうやら完全にこちらの陣営は沈黙したようだ。――

いや

「メドーサ様」

「陰念か。随分と変わったようだね」

「ここは一端引くべきだと思いやすが」

「…ふん。これ以上は時間がかかりすぎる、か」

メドーサの傍らには、何時の間にか姿を現した陰念。そして、辺りからは美神やカオス、ピートがこちらへ駆けて来る音が聞こえる。

「…ちっー」

心底悔しげに舌打ちすると、ふわり、と浮き上がる陰念とメドーサ。そして陰念は会場の天井に向かって魔力砲を放つ。

「…次は、必ず、殺す」

「美神令子。あなたのお陰だ、ありがとよ。お礼にその命、しばらく預けといてやらあ」
メドーサは、もはや手の届かない高みで、懐から四角い板のような物を取り出すと、それについているボタンを押し込む。だが、何も起こらない。

「…壊れたのかいっ?! 最後の最後までケチの付きっ放しかっ!!」

そう捨て台詞を残して、会場にあいた穴から飛び出していくのであった。

「はああああつ」

「なんじやなんじや。若い者が揃って溜息なんかつきおつて」

「ドクター・カオス。お怪我は」

「おう、マリア。ぴんぴんしとるよ」

「なんでそんなに元気なんだこの爺は」

「さすがドクター・カオスさんですねぇ」

「…そういう問題かしら」

安堵の溜息をつく美神たちに向かって情けない、と言う感じで説教するカオス。マリアに向けた表情は只の好々爺なのだ。

「美神さん!!」

「遅いつすよ小竜姫様あー」

「メドーサならついさつき逃げちゃったわよ」

疲れて座り込む美神たちの前に、メドーサが開けた穴から飛び込んできたのは小竜姫。

「えええっ！そんなあ」

今度は完全にすれ違った事を知って、流星に落ち込む小竜姫の肩を叩くカオス。

「そんなお前さんにプレゼント。これを押してみい」

「へ？」

「ほれ」

戸惑う小竜姫の手を握り、懐から取り出した何処からどう見てもTVのリモコンなその赤いスイッチを押させる。——と、同時に遠く離れた空からゴツつい爆音が響いた。

「おお、成功成功」

「あ、あのー」

「いやなに。昨日怪しい装置を見つけたのでな？ 遠隔操作のようじゃったから、少々弄くって本来使用される筈だったエネルギーがリモコンへ流れ込むようにちよちよいつとな？」

「リモコンってそういうもんじゃないでしょ……ってーことは、あの爆発は」

「うむ。物持ちが良い相手で助かったわい」

「え？ え？」

呆れた様に尋ねる美神と、泰然と答えるカオス。そしていまだに状況把握のできていない小竜姫。

「爺いっ！俺の嫁さん候補の手を気軽に握るんじゃ「あ・スタンガンが・暴発・しました」
——あびやびやびやびやびやびやっ!!!」

いまだに小竜姫の手を握るカオスに向かって突っかける忠夫に、どこまでもぎょとらしい台詞をのたまいながら、いつぞやの電撃を二割増でかますマリア。

「あだだだだ……体中が痛いぜ……」

「あ、元に戻ったみたいですね」

隅っこに適当に放り投げて——いや、一応安全の為に避難させたのだが、若干粗雑に扱われていた雪ノ丞と勘九郎が、頭を押さえながら起き上って歩いてきた。

「む、その半吸血鬼！なんだかお前と勝負する!!」

「えーと、幾らなんでも直ぐは嫌かなあ……またの機会で」

「あら、それじゃ雪ノ丞は私と寝技でも「いらんっ!!」ま、つれない事」

雪ノ丞と、それに話し掛けた途端に勝負を挑まれるピート。そしてこちらはカオスが

体にダメージを与えずに意識を刈り取った為、意外に元気な様子でその背後から怪しいお誘いをかける勘九郎。

——天井からは、真昼の月が、薄っすらと姿を見せていた。

「…けほっ」

「…ごほっ」

「…一体何だつてんだい。…もうやだ、帰って寝る」

「…そうですね」

第二十四話。

「ぐぬぬっ!」

「さうて、そろそろ終わりの時間のようじゃなあ?」

竜神王は最後の手段であった犬塚父の不意打ちがあつさり破れたことに動揺してか、じりじりと下がっていく。絶対に逃がすものかとその間を詰めていく猿神。

「アレ」を最後の手段とか思う辺り、既に末期である。

「おうりやつ!!」

「うおっ?!」

猿神は不意にその手に持った巨大な金剛棍を振り上げると、凄まじい勢いで地面に叩きつけた。

「こゝこの馬鹿力がっ!」

その余りの衝撃に、岩は砕け、地は裂け、辺りは地鳴りと共に大きく揺れ動き、そして巻き上がる巨大な土煙。

「——目上の者に対して馬鹿とは…やれやれ。もうちよつと躡けておくか」

その声は、煙を突き破って一直線に飛んできた猿神が呟いた物だった。しかし竜神王

の足元はいまだに罅割れ、揺れ動き、その翼を持つて飛び立とうにも足場が不安定すぎてそれも不可能であり、そして、その戸惑った一瞬の隙で猿神には十分。

「ふっ!!」

空気の壁さえも、いとも容易く打ち破りながら迫り来る金剛棍。直撃を食らえば痛いじゃすまない。

「なんのっ!」

「なにっ?!」

だがしかし、竜神王も然る者。避けられないと判断した瞬間に人間体へと化け、その一撃をかわしていた。

「三十六計逃げるにしかずー!!!」

ダツシュ。全力であった。地面に着地したと同時に逃げだす竜神王。

「……はっ! こちら待て馬鹿者があつ!!」

竜神の王とは思えない、余りの堂に入った逃げっぷりに、一瞬固まる猿神であったが、とりあえず追撃に入り、僅かな遅れを歯噛みしながら加速に入る。

「はーっはっはっは!! 追いつけるもんなら追いついてみるー!!!」

竜神王は喜びの絶頂であった。様あ見ろと思いつながら調子に乗りまくっていた。

だが、彼は忘れていた。確かに同じ体の大きさの時ならば、振り切れていただろう。

しかし、今は縮尺が違うのだ。彼が100歩かかる所を、猿神は3歩で進めるのだ。つまり。

「……へ？」

「ま、とりあえず、一回逝つとけ」

「のおおおおおおおおおお……」

3歩で追いついた猿神は、思いつきり棍を振りかぶると、強振一閃。竜神王も先程犬塚父が飛んでいった方角へと、吹っ飛んだのであった。

「うわわわわわっ!!落ちる、落ちるって!!」

「暴れるなっ! 今ロープを下ろす!」

「將軍! あちらの割れ目に要救助者2名発見しました!!」

「だあああつ!! だからあのご老体に出陣願うのは嫌だったんだあああつ!!」

「なんのおおおっ!」

「これしきいいいっ!! ファ○トー!」

「いっ○あああああつ!!」

「真面目にやらんかあああつ!!」

満足げに吐息を吐く猿神からほど近い場所では、武神の一撃で砕けた大地に巻き込まれて大変な事になっている部下達もいたりしたが、いやに救助活動が手馴れているの

は、最早慣れるほどにこういう事があつた、ということなのだろう。きつと。いや、間違ひなく。

「……おおおおおおおおおつ!! はぶつ!」

「おお、竜神王殿」

「おや、犬塚殿」

隠蔽結界と言う名の四角いリング。というか金網デスマッチ。その壁に叩きつけられた竜神王は、同じように先に吹っ飛ばされた犬塚父と合流した。その余裕っぷりが逆に今現在進行形で悲鳴を上げている將軍達の哀れを誘う。

「竜神王殿、この結界壊せるか?」

「ふ、無論」

「では」

「せーの」

「どりゃあああつ!!」

意外や意外。竜神王、逆転逃げ切り。

「そう言われてもなあ……」

「私たちは記憶無い訳だし……」

怪我人にとりあえずの応急処置を施し、一息ついた美神たち。会場の救護室はさながら野戦病院のような有様となっていた。そんな中で、あちらこちらに包帯を巻いた白竜道場の2人組みに対し、GS協会からの尋問と尋問か、調査は難航を極めていた。

「やはり、あのメドーサが全ての黒幕、と言うことになりそうですね」

「あいつの手がかりも掴めそうに無いし、あとは白竜GSの所に乗り込んだ先生達の帰還待ち、しかないわね」

結局果々しいものは得られず、とりあえず白竜道場の2人組みに対しては保留と言う形で一旦しばらく放置、と言うことになったようである。

「横島さん！大丈夫でしたか?!」

「ああ、おキ又ちゃん。平氣平氣！ほら、こゝんなに元氣！」

「横島・さん。靈波刀・振り回すのは・危険・です」

「あはつ、大丈夫そうですね」

会場からボロボロの勘九郎と雪之丞を担いで出てきた忠夫が、式神シヨウトラのヒーリングを受けている最中に駆けつけてきたのは、避難していたおキ又。心配そうなおキ又に対し、新しく覚えた靈波刀までも使つて無事をアピールする。

苦笑いを浮かべながらもうちよつと疲れてても良いんじゃないか、とか思つてしまうピートであつた。

「……と、いう訳で。あれはおそらくメドーサに痛い目見せたじやろうなあ」

「……そんな危ない物、本人の承諾無しに使わせないで下さい！」

「む。以後気を付けるわい」

「……まあ、メドーサに一応仕返しできたので、良しとしましょう。要するにばれなきや良いんですよ。ばれなきや」

カオスはカオスで小竜姫のえらく殺氣の籠つた視線を受けつつも、飄々とした風情で反省の言葉をのたまう。問題は、全く反省しているように見えないところであろう。今回は少し意趣返しができたことで、小竜姫も少し吹っ切れたようである。吹っ切れすぎ

な気もするが。

「ああ！ いたいた！ おーい！ 其処の君達！」

「へ？ 俺たちつつすか？」

そんな風にいつも通りの会話を楽しんでいた忠夫達の所に、どうやらGS協会の役員らしきスーツを来た男性が駆けて来る。

「横島忠夫君と、ピエトロ・ド・ブラドー君、それからマリアさんだね？」

「はい、そうですが？」

戸惑いながらも応対するピート。忠夫も疑問を浮かべてその光景を見ている。事情聴取は美神に任せてきた訳だし、今更こんな状況で何のようだろう？と思っていた。

「今回のGS試験はこんな形で終わってしまったが、あのレベルの魔族が出てきたと言
うのにこの程度の被害で済んだのは、間違いなく君達の尽力あつての事だ」

「・・・いや、なんちゆうか、成り行き任せって言うか」

「そこで、だ。我々GS協会としても、君達のような強力な霊能力者が、こんな形で失格になるのはもつたない、という意見が続出してだね」

と言うよりも、強力な戦力は管理しておきたい、と言う所が本音であろうが。

「・・・もしかして？」

「まさか?!」

「ああ。かなり無理やりな案ではあるが、君達の今回の活躍を持って、GS資格の取得を認めよう」

「……………」

その、振って沸いた幸運に、思わず絶句して向き合う忠夫とピート。その顔に理解の表情が広がると共にゆっくりと持ち上げられていく2人の手。

「やったじゃねえか、ピート!!」

「そんな、横島さんこそ!!」

「俺は元々ついだったから良いんだよ!! このこのっ!!」

その手を音高らかに打ち合わせ、友と喜び合う二人。GS協会役員と、美神、おキヌ、小竜姫、マリア、カオスもそれを微笑ましそうに眺めていた。

「のう、マリア」

「イエス。ドクター・カオス」

「若さじゃなあ……………」

「老け込み・すぎです。ドクター・カオス」

「ところで、お前はなんでGS資格何ていうものが欲しかったんじゃ? お前の願いなどで初めて聞いたもんで、思わず年甲斐も無く頑張ったんじゃが」

「…………年甲斐が・無いのは・いつもの・事です。それは」

「それは？」

「いつか・飼う為です」

「……………何を、じゃ？」

「……………」

につこり。

有無を言わさぬ迫力を持ったマリアの笑顔に、その母の笑顔を、戦慄と共に思い出したドクター・カオスであった。

「……………げほっ！」

「すびー。」

そんなどたばた騒ぎの最中に。黒く煤けた唐巢神父と、その背に背負った眠りこける冥子が姿を現した。

「あつ、先生っ！ やりましたよ！ 僕はGS資格を……って、先生がえらくボロボロに?!」

「か、唐巢さん?! やっぱり無理でしたか?!」

現一番弟子と、置いて返ってきた竜神がその姿を見つけて駆け寄るも、まるで爆発に巻き込まれたかのように服のあちこちは破け眼鏡はひび割れ、散々な状態の唐巢神父は、冥子を傍らのソファアの上に下ろすと、

「暴走……」

そう呟いて、前のめりに倒れこんだのであった。

「先生?! 先生えええええ!!」

「……あちゃー」

「証拠……残つてるといいつすね」

「すびー」

——白竜道場、上空——

「……………」

呆然と中に浮かぶメドーサと陰念。その眼下には、廃墟と化した白竜道場。本格的な調査の手が入る前に、本拠地を移そうと此処に寄つたのであるが。

「……………はっ!!」

そして、5分ほどそのまま浮かんでいただろうか。慌てて、おそらく白竜道場の自分の部屋——メドーサと一緒に寝起きしていた訳ではないので、客室であるが——に向かって飛び降りるようになして向かっていく。

そしてしばらくして。

「あああつ!!俺のブルーワー〇〇とアブフレツ〇スとプロテインとセガ・ノ・ビール君がああつ!!」

「私の、私の魔界酒「神殺し」500年もの・・・」

「うおおおおおん!」

「高かったのに・・・高かったのに・・・こんなことなら成功祝いなんかにつけてないでさっさと飲んでれば・・・」

そのまま小1時間ほど嘆きの声が聞こえたという。——GS美神除霊事務所に関つた者は、不幸になるのだろうか・・・なるのだろうか。

「ふふふ。あれが忠夫君ね」

「……おや、冥華お嬢ちゃんじゃないか」

「……善十郎の翁ではありませんか。どうしてこんな所に？」

「そりやこつちの台詞だ。約定を違えるつもりか？」

「まさか。私は「たまたま」GS協会からの協力要請があつたので「知らずに」此処に居るだけですわ」

「ふん。「たまたま」か。聞き飽きたわい」

「あらあら」

会場にて。唐巢神父の手当てに慌てる忠夫達を医務室の外から眺めていたのは六道家当主、冥華と、もつさりとした白髪頭、胸まで伸びた真っ白な髭、ぎらつく目を持った70絡みに見える大柄な男性であつた。

——時は、一週間ほど遡る。

「ようやく見つけましたわ〜」

「別に隠れちゃおらんがな」

「それならお屋敷で〜ゆつくりされていれば良いのに〜」

「ふん。むしろにはそういうのが性に合わんでな」

富士山麓の樹海の中。3人用と思しきテントの前に、小さな火を灯してコーヒーを啜っていたのは、善十郎と呼ばれた翁であった。そこに、この森林の中をどうやって辿り着いたのやら、動きにくそうな和服のままの冥華が話し掛ける。

「フミさんの所動かして〜、こんなに時間がかかるなんて〜思ってもみませんでしたわ〜」

「知らんな」

「あら〜、冷たいですわね〜」

「お前さんに会うと碌な事が無い」

「昔は〜あんなに優しくしてくれたのに〜」

「おじいちゃん、おじいちゃんと懐いてきた頃はまだ可愛げがあつたがなあ。六道の所の女衆は、いつも面倒ばかり持ってきてきよる」

「長い付き合いですものね〜」

「……いつそ切れたら楽なのじゃがなあ」

会話だけを聞けば、彼は一体幾つなのだろうか。彼と彼女の間には、緩やかな空氣が流れつづける。

「で、用件はなんじゃ」

「単刀直入に聞きますわ」

「ふん？」

「『横島忠夫』という名をご存知でしょうか？」

「耶の小倅か」

「ご存知なのですね？ちよつと聞きたいことが」
「当主。善十郎の名を持って告げる」
「……っ！」

「どうした？続けよ『六道家当主』」

「……六道家当主の名を持って、その言の葉、承る」

——空氣が一変する。善十郎が告げたその一言に、どれほどの意味があつたのか。青ざめながら、それでもその言葉に返答する冥華。

「犬飼忠夫に、干渉すること許さず。放っておけ」

「……っ！」

その言葉に、今度こそその顔から血の氣を失い、青を通り越して白く見える程に驚く冥華。

「返答はいかに？」

しかし、善十郎は止めない。冷徹に、その返答を求める。

「……その子に、それだけの価値が、「返答はいかに？」」

その疑問さえも途中で遮り、更に温度の下がった視線で冥華を捕らえる。

「六道家当主・冥華。確かに承ります」

いまだに納得の行かない様子でありながらも、その声を絞り出す。

「……ふん。干渉するな、と言つても六道家として、だ。後は好きにせい」

「……六道家と、貴方達の契約。12神将を作り出す協力をしてくれた、貴方達へのお礼である、たった一度の六道家へ対する絶対の貸し。そんな使い方、周りの人たちが五月蠅いですわよ？」

「知らん知らん。ほっときゃいい」

「……羨ましいですわね、その軽さ」

「わしじゃからな」

「貴方らしいと言えは、らしいですわね」

——そして時は現在へと至る。

「で、見た感じどうじゃったかの？」

「……半人狼ですわね」

「沙耶の息子らしくないじゃろう?」

「ええ。全く」

「くつくつく……。あれも結構な親馬鹿じゃからなあ」

そう楽しみに含み笑いをする、そんな彼に探るような視線を向けていた冥華は。

「……はあ……」

久しぶりに娘以外のことで溜息をついたのだった。

「やあ」随分と久しぶりに顔を合わせたね。

「血の繋がりに」というのは、ああ見えて結構厄介な物でね?世界のどこかに自分にそれを伝えた者が居て、さらにそれに伝えた者がいて。更に、更に、更に——。

人間たちは、とても儂く短い存在。だからこそ、何かを残したがる。

血の繋がりは、命の繋がりに。命の繋がりは、その命に宿った時の繋がりに。

伝えて、受け取って。またそれを伝えて、そして受け取って……。

なんとも不安定な繋がりに。だが、運び手たる人間があそこまで脆いと言うのに、その流れは留まることを知らない。

神や、魔には無い物だ。娘、眷属、作り出した命。——大抵が一代限りの、いや、伝える事を考えていないのだから、当たり前だがね？

だが、不安定であつても、脆くても。

それは流れ、だ。

そして、流れる、ということとは、いつか終わると言うことでもある。

その終わりに、一体何を見せてくれるのかな？

——それでは、良い夜を。

第二十五話。

「……………だめだったの？」

「いや、駄目だったと言うか、最後の最後でちよつと楽しみすぎたと言うか、の」

ここは神界、竜神王の城、の謁見の間。玉座に座るは自筆の竜神王代理と書いた襷をかけた天竜姫。その目の前で困ったように頭を掻いているのは先日人界にて竜神王と大暴れをかました猿神ハヌマーン。

「……………猿神おじいちゃんならって思ってたのに」

「ま、待て天竜！もう一回チャンスがあればっ！」

「……………おじいちゃんの馬鹿」

「ぐふうっ」

天竜姫の失望に満ちた視線と素気無い言葉のダブルアタックで膝をつく猿神。何気に真つ白にも見える。

「ま、悟空坊の詰めめのは甘さは今に始まったことではないからのう」

「ぶははははっ!! なっさけない顔!!」

その様子を天竜姫の傍らから眺めて苦笑いしているのは先代龍神王妃。その横で爆

笑しているのは先代天竜王。共に現竜神王がその座につくまで名君の名を欲しい俣にした夫婦である。

ちなみに現竜神王、あれで賢帝とか言われている。マジで。

「・・・ハク、てめえ・・・」

「ぶははははっ!!」

ギリギリと音の出そうなくらい歯を食いしばりながら、爆笑する「ハク」と呼んだ先代竜神王を見据える猿神。この二人、色々あつて長く苦しい旅を共にした戦友同士なのだ。だが、二人揃うと気持ちさが若返る為、周囲はほとほと扱いに困っているのだ。

「・・・馬野郎」

「ぶはは、は、は。・・・猿の漬物」

「表に出ろやっ!!」

・・・色々あつたのである。

「ふはははははっ!!猿爺消えたあと、怖いものなどないわああっ!!」

「空を飛ぶつつーのも中々にオツなもんだなあ」

「あの空飛ぶ馬鹿を打ち落とせー!!」

「速すぎて捕捉できません!」

「こちらは人界、竜神王サイド。いまだに逃走を続ける彼らが都市部に入っていないの

は理性が残っている為か。いや、半分からかっているからに違いないのだけれども。

「結界部隊呼んで来い！ 地上に押さえつける！」

「はっ！」

將軍の指示に従い続々と集結する法師風の格好をした角のある人影たち。

「あいつ等の頭から結界を張って地上に誘い込む。できるか?!」

「やれと言うのならやりましょうが、我らにもあつさりと結界発生装置を壊された恨みがありますので、他の手段を取らせて頂いてもよろしいか？」

將軍の質問に答えたのはその中でも一際豪華な格好をした竜神。ちなみにあつさり2人組に叩き壊された結界発生装置、製作年月約10年。彼の額に浮かぶ幾つもの血管はおそらくその為である。

「よかろう！ 好きにだけやれい！」

「委細承知っ!! 者ども、我らの血と汗と涙と他諸々の結晶をあつさりとぶち壊されたのだっ!! この恨みはらさで置くべきかあああつ!!」

『おうっ!』

「いくぞっ!!」

隊長と思われるその竜神の涙混じりの絶叫に、こちらも半泣きで答える隊員達。その恨みの力は凄まじく、空を行く二人の上からかぶさる様に、お椀の様な形状の結界が二人を上空から押さえつける。

その結界は竜神王の一撃でも破れなかった。正確には、破った瞬間に新たな結界をその外側に瞬時に作る、というまさに神業を見せてじりじりと竜神王達を追い詰めてさえいる。

「ぬううっ！これはちよつと骨が折れるなっ！」

「しよーがない。下に降りて森にまぎれるか」

「よしっ！」

だがしかし、地上に降りようとするその行動こそが、彼ら結界班の目的だった。引き込まれたと承知しつつも、竜神王達は、罠の中に取り込まれていく。

「いまだっ！結界・硬式・弁慶！」

2人組が潜った森は中々に深く、足元も暗い木々の影に覆われていた。その中で、それは静かに発動する。

「……なにか嫌な予感がする」

「はっはっは！力技で打ち壊せる結界なぞ、恐るるに足ら——」

高笑いしながら駆けだす竜神王。それを訝しげに警戒しながら走りだす犬塚父。その足元で、具体的に言うところの脛の当たりで堅い物同士がぶつかり合う鈍い音が響く。

「……………ふおおおお」

真つ暗な森の中で、ちようど脛の辺りに来るように一直線に発動された、その真つ黒なかつたああい結界は、2人組の脛を直撃。その痛みに、最早恥も外聞も無く脛を押さえて駆けまわる二人。まさに、弁慶も泣く急所。「弁慶の泣き所」であつた。

結界造りの、匠の芸である。流石に全力で駆け出していた為か甚大なダメージを受けた二人は、しばらく悶え苦しむ事となつたのだつた。

「ふあああつ……………いー天気だ」

ほかほかとあつたかい陽射しの降り注ぐ昼間。忠夫はアパートから出て近くの河川敷にてねっころがつていた。

「美神さんも小竜姫さんからぶん取つた報酬で買物に行つちまつたし……………」

前回の依頼を達成した美神は、ほくほく顔で三日ほど留守にすると云う伝言を残し、そのまま精霊石のオークションに出かけて行ってしまったのである。急に暇になったものの、タイガーは前回の騒ぎで入院中。もう見舞いには行つたし、ピートは唐巢神父と除霊に。その他の知り合いGSも殆どが出かけていて捕まらなかつた。よつて日向ぼつこに興じることになったのである。

「すかー。すぴー。むにゅむにゅ……」

全く持つて平和な日曜日であつた。忠夫の目を、降り出した雨が覚ますまでは。

「うおっ?!」

それからしばらく後、日も大分傾き辺りが夕闇に包まれ始めた頃。

日は既にビル街の向こうに消え、空には雨雲がその領域を広げ始めていた。しとしとと降る雨粒は寝息を立てていた忠夫の上にも平等に降り注ぎ、その穏やかな眠りの邪魔をする。

冷たさに跳ね起きた彼の目に入ったのは、天から降り注ぎ始めた数多くの雨粒であつた。

「雨か……帰ろ」

霧雨の中。ぽつぽつと点き始めた街灯の明かりを頼りに歩き出す。太陽の恵みで十分に暖まった空気はまだまだ快適と言える。むしろ、ちょうど良いお湿りと言つた風

だ。

「んー。たまにはこういうのもええなー」

上機嫌でねぐらに向かつて歩きつづける。まだまだ雨雲も空を覆いきれてはならず、雲の隙間からは綺麗な月が覗けている。

「♪~~~~」

TVで聞いた最近流行りとか言う歌を口笛で奏でながら、ふらふらと歩く。

「・・・ん？」

ふと空を見上げる。遠くの空に光る閃光。他の部分に比べて暗く熱いその雲の向こうに、一瞬の稲光が走って消えた。

「雷様？ そんな天気には思えんのかなー」

山中で育った忠夫の天気に関する勘は中々の物である。だが、幾らなんでも彼には分からなかったであろう。その雷の一条が、まるで意思を持つかの様に突然降り注ぐなどとは。そして彼の言う通り、不自然な雷雲から出現した青天の霹靂とも言うべきそのただ一本の雷は――

「・・・え。」

まるで意思在る物のように、電柱や人家ではなく、忠夫を直撃した。

「つ！しまった！雷に関係の無い人を巻き込んでしまうなんて——」

直後、いまだ着弾の余韻の残る落雷現場に、女性の声が響く。

「……ええと、通報はしておくから不幸な事故だと思つ「あー、ビックリした」ってこつちが驚くわよっ?！」

その眩きに入り込んだのは忠夫の声。確かに雷は直撃したのに、ちよつと焦げているだけでびんびんしている。その焦げた不条理に突つ込む謎の女性。

「あれ、あんたさつきまで居なかつた……それより——嫁に来ない……か?」
「ママに手を出すな——!」

「子持ちの人妻か……ちえ」

「え、さつきまで焦げてたのに、雷に打たれたのに何でそんなに元気なの?！」

女性が抱えていたのは少女。年の頃まだまだ一桁の、亜麻色の髪を持った、一目で親子とわかる子供であった。

「はっはっは！ この程度、美神さんの神通棍に比べればっ！」

「・・・もしかして、令子の知り合いの方？」

「へ？ 令子って・・・美神令子さんですか？ あの人の所でGS見習いやつてる者です

けど・・・」

女性は、いや、母親はその眼に一瞬だが逡巡を浮かべ、しかしそれを振り切つて忠夫に少女を、娘を託す。

「この子を、お願いします。必ず令子に、私の娘の所に——」

だが、その言葉を遮るように、再度の雷が降り注ぐ。しかし今度は忠夫に直撃する事はなく、彼の目の前の女性に向かって落ちてきたそれは、言葉も視界も奪い去りながら、周囲に衝撃だけを振りまいた。

「うおおっ！」

「きやあつ?!」

懇願めいた言葉さえも途中で吹き飛ばし、再び雷が降り注ぐ。その残響が消えた後には、何の後も見当たらない。

「消えた？・・・て、ああつ！美神さん居ないんやつたー!!」

「うえーん！ままー!!」

後には、大事なことを伝え忘れた半人狼と、一人の少女の泣き声が響くばかり。

「と、言う訳なんだわ」

『・・・だから、しようがなく此処に連れて来た、と』

「その人の娘さんですか・・・そして、この子の名前も令子」

「そうだよつ。私美神れーこつていうのっ！」

「・・・謎は全てとけたっ！」

『・・・で?』

とりあえず、泣く子を壁も薄くまともに着替えやタオルも無いアパートに連れて行くわけにもいかず。忠夫はGS美神除霊事務所へと一旦その子を連れて飛び込んだ。

雨でずぶ濡れの女の子をおキヌに預け、着替えさせた後、出てきた名前が美神令子：少女の名前であった。人工幽霊一号と3人？で悩むこと数秒。いきなり声を張り上げた忠夫に、なんとなく胡乱な目つきで先を促すおキヌと人工幽霊。

「美神さんは俺の嫁候補第一号！そしてこの子は美神令子！つまり俺の娘「人口幽霊さん。やつちやつて」「らじゃ」「うおおおおおおつ!!」

どつからともなく沸いて出た、いつかの全身鎧が、一人盛り上がる馬鹿に向かって、その剣の冴えをアピール。全部避けてる辺り流石だか無駄にと表現されるべきか。

「なんのっ！」

しかしその連撃を繰り返す鎧も、忠夫の「フアング・オブ・グロリー」一閃で再び鉄屑へと成り果てる。

『ちっ！　ますます手強くなりおつて!』

「ちよつと待て其処の何とかに刃物っ!」

『貴方には言われたくないですっ!』

「二人とも・・・」

「・・・わー！　すっごい！　お兄ちゃんすっごいねー!!」

そのまま、あわや第二次事務所大戦勃発かと思われたが、その二人の間に、れーこの声と拍手が鳴り響く。

「・・・え?あ?その」

「お兄ちゃんつてGS?! すごいすごい!」

「いやははは・・・照れるなあ」

そのれーこの声があまりにもストレートだった為か、思わず照れて頭を掻く忠夫であつた。

「・・・結局何も分かりませんでしたね」

『次はどうやって攻めましょうか』

「いい加減諦めた方が」

『ふふふ』

おそろく言うだけ無駄であろう。

「とりあえず、美神さんが帰ってくるまで事務所で預かっておきますから」

「ん、頼むわおキヌちゃん」

なんだかれーここに懐かれたが、彼女が寝付いた所を見計らつて事務所を出る忠夫。

「まーた、なんだか厄介なことになつてる気がするなあ」

——その予感は大当たりであつた。

「もし、其処の方」

「へ?」

事務所から出て直ぐ。ちょうど人工幽霊の作り出す結界から出た辺りだろうか。忠夫の背後からかけられるまたもや女性の声。忠夫が振り向けば其処には20歳頃のスーツに身を包んだ女性の姿。

「先程、女の子を連れていらっしやった方ではないですか？」

「嫁に來ないか？」

「ひっ?!」

「うわわっ?! そんな怯えんでも……」

普通数歩先を行っていた人物がいきなり目の前に現れて手を握りながら迫ってくればビビる。その肩まで髪を伸ばしたスーツ姿の美女は、怯えた声でその手を振り払う。と言うか、まるで、

「し、失礼しました!何でもありません!」

「……そんな凶悪な顔してるんかなあ」

そう、狼に睨まれた獲物のような、走り去るその女性が見せた表情は、忠夫をとつても傷付けたのだった。

「な、なんだってんだ?! あの眼、体がふるえたじゃん?!」

その女性は、走り去った後ビルの陰で本来の姿を取り戻す。人の顔に鳥の体、翼と羽根と手足。その名を「ハーピー」と言う魔族である。

「ちっ！此処は一旦出直しじゃん！」

彼女は、そのまま都会の夜へと飛び去っていった。

一夜明けて朝。GS美神除霊事務所。

「奥義、大根の桂剥きっ！」

「わー！ すっごい！ うすーい」

「便利ですねえ」

もはや宴会芸に近くなった霊能を余すことなく發揮する忠夫と、無邪気に喜ぶれこ、美神の言いつけどおりご飯代の代わりに下働きとして下ごしらえをさせるおキヌ。

『負けませんよっ！こちらは秘技人参の飾り切りっ！』

「えー。人参嫌いー」

『そんなんっ?!』

「わーっはっはっは！お子様の好物を分かっていることがお前の敗因だああっ！」

「好き嫌いは駄目ですよ？」

そして、全身鎧に人参を細かく花形や星型、家型に切らせるも、れーこの一声で敗北を悟る人工幽霊一号が居た。

「んー、んまいっ！」

「おいしー！」

「ありがとうございます♪」

しばらく後に、えらく煌びやかな朝ご飯となった食卓。

「んで、美神さんとは——」

「ええ、全く連絡が取れませんでした。携帯の電源切っちゃってるみたいで」

「そーかー。どうしよつか？」

「もうしばらくしてから、電話してみますね」

昨日のおキヌの成果を聞く。残念ながら出張中の令子は掴まらなかつたようである。

「そんじゃ、今日はちよつと買物にでも行つて見るか」

「れーこ、玩具が欲しい！」

「大丈夫でしょうか？」

「まあ、預けていくくらいだし、安全だろ？ じやなきや預け様なんて考えないと思う」

「お兄ちゃん！ 早く行こうよー！」

「はいはい、今行きますつて」

あの女性が何者かは、いまだはつきりとしらない物の、預けられたものが小さな女の子となれば、とりあえず保護しておくのが必須。名前も美神令子だし、おそらく美神の関係者。となれば雇い主の機嫌を取る為にもちよつと位サービスしてもいいだろう。多

分経費で落ちる・・・はず。といいな。落としてくれないかな。美神さんだし無理かな？

そんな事を考えながらも、やはり忠夫としては女子供に優しくすることは母親に——文字通り——叩き込まれた事な訳で。

「んじゃ、いつてきまーす」

「いつてきまーす!!」

「はい、いつてらっしやい」

今日の予定はデパートで買物と洒落込む事になったのである。

『えぐえぐ・・・負けた・・・アレに負けた・・・えぐえぐ』

「うわー、でっけー」

「ふわー」

彼らの前には巨大な、それこ横倒しにした高層ビル一つ分ほどの、面積が丸々シヨツプというシヨツピングモールであった。何でも揃うが代価はそれなり、が歌い文句のデパートチェーンの一点舗である。商売する気があるのやら無いのやら。

「ねね、あそこいこつー」

「はいはい、しよーがねーなあ」

元氣一杯のお子様にも、苦笑いしながらも付き合う忠夫。妹みたいなのも居たことだし、そもそも子供は結構好きなのだ。

「みつけたじゃん！」

「なんだっ?！」

「そのガキを渡すじゃんっ!!」

月曜日の昼前。客の入りの余り無いデパートの騒がしきは、一瞬にして悲鳴と怒号に摩り替わる。

「な、なんだありやつ?！」

「ば、化物っ!」「妖怪だっ!GSを呼んでくれッ!」

「きやああっ!化けものよっ!!」

「うるさいじゃんっ!!」

騒ぎながらも必死で避難しようとする群衆。其処に打ち込まれるハーピーの羽根。間違いなく、命を奪う一撃であつたらう。

「な、なんじゃん?!」

その、突如跳んできた看板に羽根が打ち落とされなければ、の話であるが。

「まくったく。美神さんが居ないときくらい静かにさせてくれっての」

「お兄ちゃん、何で隠れるの?」

「・・・ん、ま、色々だ」

あの魔族、確かにこちらに向かつて子供を——おそらく、れ—こを渡せ、と言つていた。狙いはこの子。と、言うことはこの子が預けられた経緯からして、かなり突発的な事態のはず。・・・いや、もしかしてこれは何時か起こりうる事態、だったのか?でも、それなら美神さんが予想してても・・・いやいや、美神さんさえ知らない事だとしたら?

其処まで考えて、頭を掻き筆る。そのままれ—こに隠れておくように言いつけると、頭を掻きながら隠れ場所から出て行く。

「あく! わからん! わからんが!」

「そこかつ!」

「とりあえずあんたは悪い奴!俺の前で子供を狙うなんざ—絶対にさせねえぞつ!」

吼えることで、戦意を一気に引き上げた。

「何も知らない小僧が！」

「何も分からなくても、やって良い事と悪い事くらい分かるっての！」

ハーピーの放った羽根が、床に幾つもの穴を穿つ。

「な、なんて速さじゃんツ！」

「まだまだっ！」

そう叫び、手足の先に靈力を集中させる。

「新技！壁走りっ！」

「そ、そりゃ反則じゃん?!」

その靈力を爪のように変化させ、壁に引つ掛け天井近くに浮かぶハーピーまで一直線に駆けて行く。

「はっはっは！ 心眼曰く、靈力の使い方は想像力で決まるってな！」

「これだから馬鹿って奴はっ！」

「馬鹿って言うなー！」

「うわきやつ！」

「ちっ！」

そのままの勢いで跳ね、ハーピーに思いつき蹴りを食らわせようとするも、やはり

純粹な空中ではあちらに分がありすぎる。鼻先でかわされ、落下。

「チャンスっ！」

「おにいちゃんっ！」

「——そこかああっ!!」

落下地点めがけて羽根を飛ばそうとするハーピー。だが、そこに聞こえてきたのはれーこの声だった。直後、狙いは其方に変わる。敵を倒す事ので無く、目的を果たす為に動く事に迷いはなく、これはチャンスだと彼女も分かっている。

故に、一瞬でも敵から目を離れた事が、結局は目的を果たせなかつた事に繋がった。

「死ねええっ！」

羽根を飛ばす。

「きや——」

それに気付いたときには遅かった。目の前に迫る羽根。母の顔、父の顔、唐巢おじちゃん顔。知り合いの顔。幽霊だけど美味しい料理を作ってくれた人の顔。慰めてくれて、優しくしてくれたお兄ちゃん顔。浮かんでは消え、浮かんでは消え、そして全てが——轟音と土煙に消え、白く煙る。

「……させないって、言っただろ？」

だが、その煙が晴れた後には、頭から血を流す忠夫と、その手腕の中にかばわれたれこの姿が確かにあった。

「貴様も、人外か……」

「……お、お兄ちゃん、そのお耳」

ギリギリで駆けつけた忠夫が、れこを地面にして倒込むようにして避ける。だが、元が小さな女の子。その狙いは低く、忠夫の背中と、バンダナを僅かに削って壁に突き刺さった。そして、解けるバンダナと——飛び出す、その下に押さえつけられていた狼の耳。

「はっ！ 笑わせるじゃん！ 自分の連れの正体も知らなかったのかい?!」

「そんな、だって、GSだって……」

「嘘じゃない。見習だけど、ね」

背中から、頭から血を流しながらそれでも微笑む半人狼。

「ふんっ！ あんたもあたしも化物じゃん！ さっきの逃げていった人間達に、怯えられ、恐れられる！ 所詮は化生じゃん！」

「……」

「それがどうしたってんだ？」

「ここまで言っても、分からないのかい？」

ハーピーは、むしろ優しく、囁くように告げる。

「その子からしたら、あんたも化物、さ」

「——っ！」

「それでも、いーんだよ」

「・・・え？」

れーこの頭を撫でながら。

「こんな可愛い子を見捨てたら、犬飼忠夫の沽券にかかわるってーの」

「はっ！馬鹿がっ！」

「馬鹿だって、譲れないモノぐらいあるっ!!」

そう言い残し、忠夫は再び霊力をその身に纏う。

「届かないなら——打ち落とす！」

「ッ!!」

それは、GS試験で見た物よりも、更に靈力が高く、澄んだ残響を伴った、完全無音の大音声。

「な、なんじゃんっ!! ギャアッ!」

その咆哮は既に物理的な破壊力さえ持つて——ハーピーの右羽根と、その後ろの壁を打ち砕く。

「ば、化物がああっ!!」

「それがどうしたああっ!!」

錘揉みしながら落ちてくるハーピー。そこに躍りかかる忠夫。空中で纏れ、至近距離で飛ばされた羽根を両手で撃ち払い、薙ぎ払われた左手をかちあげた膝で吹き飛ばし、頭突きのように勢いよく忠夫の頭がハーピーの喉元に抉り込む。

ごきゆり、と生々しい音と共に、妖鳥の吐息は絞られ消えた。

「は、あ——」

「鳥が逃げずに狩りで狼に勝とうなんて、無理通りこして無謀つてーんだ、よ」

言葉を最後に、霊波刀は、もう一度獲物を噛み砕いた。

と、同時に砕けた窓ガラスの向こうに、巨大な雷が降り注ぐ。

「ん? お迎えか、な?」

その、惨劇の場に、三度落ちる光の柱。
「れーこちゃん？」

「……………あ」

「……………ごめん、怖がらせちゃったね」

「……………ち、ちが「令子っ!!」」

そして現れるのは、少女の母親。

「この惨状は一体…あなたっ、人狼!？」

「うっひゃゝ、怖い怖い。母親って言うのは、何処でもあんなもんか」

「令子、こっちへ!!」

彼女は、駆けて来た勢いのままれーこを抱き上げる。

「……………ハーピーを仕留めるなんて」

「ん、んんん」

「間に合ってよかったわ。今は対悪魔護符の持ち合わせが無いけど、逃げるだけならなんとでもなる!」

「ま、待って! ママ!」

「行くわよ! 令子!」

「あ、あのっ！　あり——」

その声を遮るように響いた爆音は、母娘の姿を攫って行った。

「あれ、横島さん。れーこちゃんは？」

「ん？　ああ、母親が迎えに来たよ。えらく慌しく帰ってった」

事務所に帰った忠夫は、いつもの定席でぐったりと仰向けになる。着替えは済ませたし、バンダナも一応まだ使える。その顔は、疲れきつていながらも、どこか——

「……なんだか嬉しそうですね？」

「……ありがとう、って、言ってくれたんだ」

「へー、よかつたですね♪」

——嬉しそうで。どうやら少女の声は、落雷の音越しでも聞こえたらしい。

「……意外だったかな？」

「そんな事言っちゃ可哀そうですね」

忠夫は、もしかすると、今までで一番、人狼の血に感謝しているのかもしれない。

「令子」。どーしたのよ・・・」

「知らない！ ママの早とちり！」

「だから、何が・・・」

「ママのバカアアツ！」

「は、反抗期！ 反抗期なのね?! もうそんな歳になったのね〜！」

「違うもん！」

「令子ったら、すすく成長しちゃって・・・ママ、感無量」

「もう・・・お兄ちゃん、また会えるかな」

子供の頃の記憶は、得てして直ぐに失われる物だ。どれほど大切な物でも、その後、続く衝撃が大きければ、容易く上書きされてしまうだろう。それが、心を荒らすほどに悲しい思い出であれば、なおさら――

第二十六話。

「やっと捕まえましたぞ王……」

「くっ！ 中々上手い手を使う……あとほんとに痛くて動けないから担架頼む……」

「全く！ はやく天竜姫様の所に行つて父として説得して頂きますぞ！」

「ぬう……すまぬな竜神王。お前への恩は忘れんぞっ！ ……さて帰ろ」

鬱蒼とした森の中で、とうとう脛を抱えて動けなくなつた竜神王は捕まつてしまひました。最後に犬塚父を近くの繁みに放り投げて。

彼の目はこう言つていたそうです。

『また会おう！』と。迷惑だから止めて下さい。

「ええと、里は確かこつち……お、在つた在つた」

辺りに人影が無くなつた事を確認し、再び竜神王の装具に残つた力を使つて飛び立つた犬塚父。その本能と月の導きで、あっさり里を見つけ出す事には成功した。

「シローー！ 今父が帰るぞおおっ！」

とところがどっこい。

「へ？ おおおおっ!？」

此処に来て竜神王の装具に不具合でも起きたか、里の真上で垂直落下。まあ猿神の一撃をまともに食らった上に結界にぶつかったり、高速で移動中に脛に一撃を貰ったりしながらも竜神の王でも無い一人狼が無傷でいられたのはこの装具のお陰であるが、その神通力もこの一晚の無茶で流石にガス欠のようであった。

「なんのっ！　里の結界を上手いこと叩けばこの程度！」

どうやら結界を攻撃してその反動で落下速度を緩めるつもりのようにあり、そして彼は思いっきり刀を振り上げ、目の前の結界を叩こうと峰を返した。

「わっはっは！　犬塚、ただいま帰ってきたぞー!!」

その時、彼の懐で何かが光った。

「では、次の問題じゃ」

「はいでござる！」

「いいからさっさとしてよね。お腹減った」

「貴方の前にはお肉とお揚げを飾ってあるお店があります」

自分の想像に食欲を描きたてられたのか、夕食もまだの二人は小さくお腹を鳴らした。

「涎を垂らすな。さて、どうしますか？」

「狩りの時間でござる！」

「まって、シロ！　これは引つ掛けよ！　つまり罨！」

「なにっ?！」

「おそらく答えは・・・幻術を使って木の葉をお金に変えて！」

ドヤ顔で自信満々に答える子狐と、それを心底感心したように眺める子狼に、長老はハリセンのように平たく形を変えた霊波刀を一瞬で二人の頭に軽く振り下ろした。

霊波刀の制御と良い回避も許さぬ二連撃と良い、まさに無駄のない無駄な技術であった。

「ちゃんしたお金を使わんかい！」

「・・・そんなっ?！」

「驚くなああっ！」

怒鳴りつける長老と不満そうな二人の少女。だがしかし、次の問題を解く前に、もっと大きな問題が長老さん家に空から降ってきた。

「「へ?」」

風切り音が聞こえた3人が開かれた襖の外を見るも、音の発生源は真上だった為一瞬回避に遅れが生じ、その隙を突いてその物体は長老宅の天井を突き破り、3人のど真ん中、畳に突き刺さった。

「ごほごほつ。今度はなんじゃあつ!!」

「あく、長老。ただいま戻りました」

そう返答したのは、一応体勢を立て直したのか、足から畳に突き刺さった犬塚父の頭だけであった。同時に薄く輝いていた竜神王の装具は完全に只の装身具へと戻ったのであった。

「・・・で、父上は一体何をやってるでござるか?」

「通行手形が勝手に反応してな? 結界叩いて空振りやがんの! わっはっは!」

「シロ、鉤持ってきてくれ」

「長老? 掘り出すのでござるか?」

「埋める」

どつとはらえ。

「美神令子っていう小さい女の子と、雷の直撃を受けて消える女性……ねえ」

「そうっす。心当たりとか在りますか?」

ソファーに腰かけた楽な格好の美神に話しかける忠夫。美神の顔を見ながらも、何処となく別のsdaleか、まあれーこな訳だが、を思い出しているような少し優しさの感じられる表情であった。

「……んんん……。やっぱり無いわねえ」

「美神さんに良く似た匂いではありましたけど。てつきり親戚かなんかかな、と」

「さあ? ママはもう居ないから、良く知らないのよね、私の血縁とか」

「……すんません」

「え? ああ、気にしないで良いわよ。それなりに心の中で整理ついてるし」

美神が精霊石を幾つか手に入れ、ほくほく顔で帰国したその日。忠夫は先日起こった件の報告をしていた。——結論から言えば、良く分からない、と言うことになる。

「それより、その雷で」

尋ね返そうとした美神の言葉を遮るように、古ぼけた黒電話が音を立てて鳴り響く。ふう、と溜息をついた美神だが、気を取り直すと視線を忠夫から外して此処には居ないおキヌに向かつて声を掛ける。

「電話みたいね。おキヌちゃん？」

「はい。——もしもし、こちらGS美神除霊事務所・・・あ、唐巢さん」

そして、今回はこの一本の電話から始まった。

「うっわー。こりや見事にぼつろぼろだなあ」

「こんな教会荒らしても、なーんにも無いのにねえ」

「君達ねえ・・・もうちよつと、こう・・・いや、もういい」

「先生・・・泣かないで下さい」

「ピート君。これは心の汗なのだよ・・・」

唐巢神父からの連絡を受けて、その教会を訪れた美神と忠夫が見たものは、見事に荒

らされに荒らされた教会内部。長椅子は砕け、祭壇は打ち壊され、綺麗に並んでいた燭台も、バラバラになって其処此処に転がっている。惨憺たる有様である。

「んで？警察には届けたの？」

「いや、それがだね……」

昨夜遅く。除霊の仕事を終えて帰宅した唐巢とピートは、教会の前で立ち止まった。何かが砕けるような音と、それらの原因となつた者達が蠢く気配を、教会から感じたのである。

「先生、これは……」

「この邪悪な気配は……どうやら、物取りの類ではないようだね」

そのまま声を潜めて教会の扉の前に左右に散る。

「行くぞ……気をつけたまえ」

「はいっ！」

「何者だっ?!」

扉を蹴り開け、真つ暗な内部に向けて声を張り上げる唐巢。返答はなく、まるで獣のような咆哮が響いた。

「なにつ?!」

「ゴアアアッ！」

「うわっ?!」

「ピート君!!」

蹴り開けると同時に、内側から飛び出してくる影。それに吹き飛ばされた扉と、とつさに唐菓を庇い、進路を塞いだピートへの一撃であった。何とか防御が間に合い身を守ることには成功したものの、飛び出た影は、そのまま制止を聞く事も無く深夜の街へと消えていった。

「——と、言う訳なのだよ」

「・・・ふーん。で、教会の中はこの有様だった、と」

「そりゃ災難だったなピート」

「いえ、幸い怪我も大した事ありませんでしたし・・・」

昨夜の出来事を語り終えた神父の眼には、何時に無く深刻な色が見え隠れする。

「ここは確かに教会だが・・・ああいった輩が入って来れないように、それなりの結界は敷いてある」

「それを破り、探していたのは一体なんだったのか・・・と言うことですね」

「とりあえず、現場検証と行きますか。横島君！」

「はいっす!」

「あんたはとりあえず怪しい匂いとか、変な後とかが無いか外を調べてきて頂戴。私と先生、ピートで内部を調べるから」

「了解しましたー!」

追跡能力については半人狼の忠夫にもそれなりの自信はある。伊達に森の中で獲物を追い掛け回しちやいないのだ。まあ多少は劣るのは仕方ないと思っではいるが。

「・・・とは言ってもなー。シロや長老ならともかく、昨日の匂いは——」

外に出た忠夫は、とりあえずあたりの匂いを嗅ぎまわってみる。だが、いくら狼の鼻とはいえ、此処は都会。車はひっきりなしに通るし、人通りだってそれなりにあるのだ。昨夜から随分と時間は経っているし、朝から夜まで人が活動しているような場所では匂いが残る事も、それを辿る事も難しい。

「無理だな、こりや。靈波の匂いでも嗅げりや別だけど、そっちは鈍いしなー」

あつさり諦めて、今度は辺りを見渡してみる。やっぱり何も無い。いや・・・

「——ん? なんだこりや? なんだか・・・変な匂いが「あのお・・・」はい?」

妙な匂いを嗅ぎつけ、鼻を鳴らす忠夫に話し掛けてきたのは、眼鏡をかけた一人の女性。

「あそこの教会の方ですよね？ 預かり物があるんですけど……」

「へ？ ええと、あ、ありがとうございます」

「これなんですけど」

その女性が手渡したのは、細長い包みに包まれた、結構な重さのある何かだった。

「それじゃ」

「どーもー。さてさて」

女性は荷物を渡すとさつさと去っていった。視線が扉が吹っ飛んでいた、ガラスが割れていたりする教会に不審気に向いていたので、厄介事に巻き込まれる前に、と素早く撤退したようである。正しい反応だろうな、と思いつつも、とりあえず受け取った他人あての包みを開けてみる忠夫。良い子は真似をしてはいけない（戒め）。

「……なんだこりゃ。って、うわー、こりゃやばい」

包み紙の中から現れたのは、一M程の、時計の長身のような針。一見すると只の鉄の棒の様でもあった。ただし、

「すっぱー血の匂い。気分悪くなりそ」

凄まじいまでの血の匂いがこびり付いている事を除けば、だが。

「うお?!」

しばらくその針を眺めていた忠夫だが、突如聞こえてきた爆音に慌てて落としそうに

なる。

「な、なんだあつ?!」

「——てっ!」

「——のせいだっ!」

「——どいつ! そんな事言う人嫌いよっ!」

その騒音の先に目をやる忠夫の耳に、ちよつと前に聞いたような声が言い争いながら近づいてくる音が聞こえた。

「気持ち悪い事言うんじゃない勘九郎!!」

「そんな雪之丞も結構可愛いかも♪」

「あいつ等の前にお前がぶっ飛べー!」

「だから俺の話をきけえええっ!!」

「あ、この前の3人組と・・・なんだありや」

爆音を立てて忠夫の前を走り去っていったのは、先日GS試験で会った元白竜道場の面々と、ベレー帽と変な仮面を被ったごっつい男達だった。

「へ?」

その集団は、忠夫の前を50Mほど過ぎ去った辺りで急ブレーキをかける。陰念と雪ノ丞、二人分の血走った視線は忠夫が持った鉄の棒に釘づけである。

「その針をよこせーっ!!」

「私と一晩付き合わない?」

若干一名、勘九郎は忠夫のお尻を見ていたり。思わず警戒して後ずさる忠夫であった。

「お前はだまつてろおおっ!!」

そしてそのまま、忠夫に向かって大暴走。

「ちよつとまでええええっ!!」

当然、忠夫も大逃走。おもに尻を見る男の視線が怖かった為。うららかな昼下がり。街は、喧騒に包まれた。

「ぜはっ!ぜはっ!」

「ふー。やっと振り切ったか」

「あらあら、雪之丞もまだまだ鍛え方が足りないわねー」
「て、手前等が異常なんだっ！」

何処をどう走ったやら。気付けば忠夫、勘九郎、雪之丞は結構な広さを持った、人影の無い公園に辿り着いていた。どうやら、陰念たちは振り切られたようである。

「んで、お前ら一体なにやってんだ？」

「ぜー。ぜー。そ、その針だよ……」

「これか？」

そう言って逃走中もしつかり持つていた針を改めて見る。元は何だったのかが分からないくらいに血に染まつて危険な気配を醸し出すそれは、確かに危険物と言つて間違いないだろう。

「そう、それよ。実は私たちは「とある人物」からの依頼で、今ちよつとした厄介ごとに巻き込まれてるのよ」

「……さつき陰念もいたみたいやけど？」

「察しが良いわね。その通り、相手はメドーサ。どう、厄介でしょ？」

「飛びつきり厄介なんだよ。全く、妙な家来と一緒に追っかけまわしやがつて……息つく暇もありやしねえ」

そう言つて漸く息を整えた雪ノ丞は、膝に着いていた手を離して背中を伸ばす。多少

疲れた様子は見えるが、それでも余裕は取り戻したようであった。

「ふーん。てことは、唐巢神父の教会を荒らしたのも、」

「俺たちだよ。正確には、そこの兵隊だな」

「「っ?!」」

が、落ち着く間もなく、トラブルは向こうからやつてきた。何時の間に現れたのか。周囲には、先程のベレー帽を被った男達。

「全く。同門のよしみで手加減してりや、よくもまあ逃げ回る」

「陰念!」

そして、先程までの人間の擬態を解いた、陰念の姿。

「さあ・・・とつととそれを渡せ。今なら見逃してやる」

「ちっ! いい気になりやがってっ!」

その身を魔装術で鎧う雪之丞。勘九郎は只警戒した面持ちで眺める。忠夫は——何かごそごそやっている。

「こうなりや本気で「やるだけ無駄さ」っ!」

「がああっ!!」

「雪之丞!!」

雪之丞がその手に靈力を湛え、それを打ち放つ予備動作に入った瞬間、陰念は既に雪

之丞の背後にいた。そのまま左手を突き出し、その手から放たれた魔力砲は、雪之丞を吹っ飛ばす。背後からの直撃に踏み止まる事もかなわず、公園の樹木を何本もおり砕きながら土煙の向こうに姿を消し、そのまま沈黙する雪之丞。

「なるほど・・・伊達に魔族には堕ちていないようね」

「ふん。わかつたらとつと針を渡しな」

睨みあう勘九郎と陰念。だが、今の状況では勝ち目が薄いと判断した勘九郎は、小さく舌打ちすると、諦めたように吐息を吐いた。

「…ふう。しよーがないわね。たしか、横島君だったかしら？」

そう呟くと、忠夫に向かって視線を飛ばす。

「あれ？」

——正確には、先程まで忠夫がいたところに向かって。

「厄介事は勘弁——!!」

叫び声が聞こえたほうを見れば、其処には雪ノ丞が起こした土煙の中を通り抜け、何時の間にか出口へとダッシュで駆け抜けて行く忠夫の姿が。

「・・・あつ！ 待てこの野郎！」

「待てといわれて待つアホがおるかあああつ!!」

「そりゃそうよねー」

「ちっ！ ええい、お前らいくぞっ!!」

包みを持って走り去っていく忠夫を追いかけていく陰念達。そして、其処に残ったのは勘九郎と、少々ボロボロになった雪之丞。

「……つててて！ 陰念の野郎！」

フラフラになりながらも魔装術を解き、起き上つてきた雪ノ丞が忠夫と陰念を追いかけようと駆けだすも、その襟首を捕まえて持ち上げる勘九郎。体格差もあつてかあつさり宇宙に浮いた雪ノ丞を呆れたように見ながら、漸く自分に視線を向けた雪ノ丞を、勘九郎はゆつくりと下して立たせた。

「猪もいい加減にしなさい。横島つて子の方が、まだやる事やつてるわよ？」

「なんだとっ？」

「ほら、そこ」

そういつて勘九郎が指差した所には、ついさつき埋め立てられたような湿った土。

「……これがどうした？」

「……ふう。つまりね」

頭に血が上つていた陰念と雪ノ丞は気付かなかつたが、只一人冷静に周囲に目を配つて逆転の目を探っていた勘九郎だけが、こっそり穴を掘つていた忠夫と目があつていた。そして、布だけを持っていた彼は、土煙と折れた樹木の間を駆け抜け、そして抜け

た時には布の中には確かに何かがあった。間違いなくあの土煙の中で機の枝でも拾つて布を巻きなおしたのだろう。

「こういう事、よ」

「・・・あいつは手品師なんかか？」

だから今、勘九郎の手には、先程まで確かに忠夫が持っていた筈の針がある。自分が空の袋を持って囷になることで、勘九郎たちに配達人を任せたのだ。

「ああいうのは、ペテン師って言うのよ」

「キツ！」

「見つけたか！」

所変わつてこちらは追手の陰念達。部下のベレー帽の報告によれば、先程見失つた忠夫を発見したとのこと。

「————か」

報告のあったのは、一軒の廃ビルの中。隠れ場所としては申し分なさそうだ。

「お前とお前は裏から回れ。後の者は入り口を固めろ。中は俺一人で十分だ」

そう言い残してビルに入っていく陰念。程なく――

「・・・あれは」

ビルの中ほどにある広い空間の真ん中に、ぽつんと転がる包み。

「・・・罨か？」

警戒しつつ包みに手を伸ばす。

「なにいいいっ?！」

それは手の中であっさり折れた。

「や、やべえっ?！」

慌てて中身を確認する、が、当然中から出てきたのは探し求めていた鉄の棒では無く。

「・・・ふっざけやがってええええ・・・」

只の木の枝。陰念、怒り心頭である。

「あの野郎！ 次会ったらぶっ殺す！」

その後、ビルの屋上から肩を怒らせて部下を連れて撤退していく陰念をこっそり見下ろしながら、

「うーわ。怒ってる怒ってる」

のーんびりとそう呟く忠夫がいたという。

「へえ．．．つまりこれが」

「そう。貴方達に協力を求めた理由って奴よ」

「なぜ、私たちに？」

「．．．クライアントからの要請さ。とりあえず、今は秘密って奴だ」

「．．．まあ、悪い人たちじゃないんでしようけど」

勘九郎たちはあの後直ぐに唐巢神父の協会へと移動。美神たちと合流すると、そのまま強力な結界のある美神の事務所へと移動していた。そのまま今回の騒動の発端と大體の流れを説明した所である。

「原始風水盤．．．とんでもないこと考えるわね、あのおぼはんも」

「確かに。第二の魔界を作り出す事さえ可能な、恐ろしい物だよ」

原始風水盤。強力な地脈に干渉する能力を持った、秘儀中の秘儀。製作に膨大なエネルギーと生贄——何人もの優秀な風水師の血——を必要とする為、そして、その扱いをひとたび間違えれば世界を破滅させることさえ可能なその危険性の為、発覚すれば使用どころか準備だけで物理的に首が飛ぶ、凶悪で危険な代物である。

「魔界のオカルト技術つてーのもの、舐められた物じゃないわねー」

「そこで、だ。あんたらに協力して欲しい事つてのは……」

「そいつを、ぶつ壊すんでしょ？ 報酬は？」

「クライアントは、十分な額を保障するそうだ」

原始風水盤を使って何を企てるか、なんて、分かる訳も無いが、黒幕はあのメドーサ。クライアントは私が報酬無しでは動かないことを知っている。その額も。ということとは——

「ま、いいでしょ。小竜姫にはちゃんと報酬払うように言つといてねー」

「あらあら、お見通し？」

「そうやって直ぐに鎌かけに引つかかってちゃ、情報なんてダダ漏れよ」

「確信してる相手に無駄な事はやらない主義なの」

結構、面白いことになりそうね。

「ところで、ピートとか言ったな」

「なんだい？」

「横島とかいう変な奴、一体何者だ？どれくらい強い？」

「段々君の考え方が分かって来たような気がするな」

「んじゃこんど全力で喧嘩しような！」

「何の脈絡も・・・もういい。分かった。なんとなく無駄だつてことが」

「やあ」

君は、彼女のことをどう思った？

己の娘のことしか考えないなんて醜い？ 己の娘の為に全てを投げ打つ姿は美しい？

愛しい者の目の前に、獣が二匹。方や地に落ちた鳥。方や血に塗れた狼。それは、どれほど危険な物に見えたのかな。事実の一つでも、真実は人の数だけ。

どちらが正解な訳でもない。どちらが間違っている訳でもない。

愛情がなべて美しい物であるとも言わないし、憎しみが全て醜いものとも限らない。

他の全てを削ぎ落とし、練磨に練磨を重ねた感情は、黒かろうが白かろうが、正に宝石のような輝きを宿し魅了する。

だが、アレは——そう、あえて言うのなら。

壮絶な覚悟。あの母親「達」は、それを持っていた。

——さて、今日はもうこんな時間だ。

——それでは

——良い夢を。

第二十七話。

魔都、とその領域は呼ばれていた。

風水という独特の理論に基づいて作られた建築物。一都市として存在しながら同時に様々な特権を持った、混沌たる、人の集落。そして、地脈と言う、星の命の流れ集う一つの血塊。

香港。彼らは、その地を踏んでいた。

「うっひゃー……。すっげー」

「馬鹿でさえ癖して、細かな所まで人の意思ある、まさに人の生んだ怪物、さ」

「ふわー。あ、美味しそうな匂い」

「お、どれどれ……。こりや、きつと美味いぞあの店」

「はいはいはい！観光に来てるんじゃないんだから、さつさと動く！」

「はー」

「まるで引率の先生ねえ」

「ちげえねえ」

「先生……。僕は頑張ってますよー！」

だからと言って彼らが彼らであることを辞める訳でもなく。そもそもこの都市は、在るものを在りのままに受け止める、そんな雰囲気には満ちていた。

——昨夜、東京、GS美神除霊事務所

「ただいまー」

「遅かったじゃない。ほら、さっさと荷造りしなさい！」

「へーい。行き先は何処ですか〜？」

「・・・あの子、驚かないわね」

「そりゃーそうよ。あんたらに配達頼んだ辺りで、説明することも折込済みだろうし、ね。遠出くらい考えてたんじゃない？」

その答えを聞いた勘九郎は、流石に其処まで考えていたことなのかと、苦い顔をする。

「・・・雪之丞。あんたあの子の爪の垢でも貰ってきなさい」

「はっ！ 逃げ足と立ち回りにしか能の無い奴なんざ興味ねえな！」

「・・・ふう。この正面衝突馬鹿は」

相棒の戦闘力は認める。認めるが。

「そんなだから陰念なんかに——いや、あれも少しは考えるようになってきたわね」

「……何のことだ？」

「……魔装術を使う瞬間は、極限まで集中し、その反動を押さえ込む必要があるのは分かるわね？」

魔装術。魔を纏う、人の編み出した技にして、人を人外の化生と化す業。その使用者には強靱な精神力が求められる。

喰われるから、だ。魔装術が契約すると言われる魔族。その正体は定かではない。魔へと堕ちたかつての使い手達も、その姿は千差万別。共通点があるとすれば、角。鬼の如き、それ。

そして、人がもつとも簡単に変化してしまう妖怪も、その心に棲むとされる化生も鬼なのだ。

だからこそ、彼らには強い心が求められる。意思、執念、殺意、信念、闘争心。何であつても構わない。己を御する事のできる力と、ソレを押さえ込む精神。それらがあつてこそ、魔装術は、魔を持って、魔を制する術となる。

「そりゃな。伊達にアレを使いこなしちゃ「使いこなす？笑わせないで」っ！」

勘九郎の眼には、失望と、孤独の色がある。

「真の『魔装』とは、人にして、人に非ず。あんたはまだまだ半端者よ」

「……てめえ」

「文句があるなら、せめて顔ぐらい覆えるようになりなさい。「面」を「被る」とは、己を捨て、他の何かになるという事。その境地に立つてこそ、初めて基礎を終えたと言わせてあげるわ」

「面を被ると言う行為は、己を捨て、他の者をその身に宿す。明け渡す、という行為と同一視される。神楽舞う舞手が、面を被るのは、そういう意味があるからだ。」

「……」

「ま、そんな事は今はいいわね。言いたかったのは、その極限の集中の時、私たちには絶対的な隙が生まれるわ」

「……つまり、奴は其処をついたつー事か」

「魔を鎧うのではなく、其処から魔、その物になった陰念だからこそ、の『魔装術相手の戦い方』ね。ふふん、なかなか美味しゴホンッ！面白そうな奴になったじゃない」

「面白くなってきたって所にだけは、同意してやらあ」

「あら、其処だけなの？」

「つたりめえだっ!!」

そんな彼らはさておいて。荷造りと言つても着替えはいきなりの遠出の事を考えて、ある程度事務所に置いてある。——空き巢にやられて全滅はもう勘弁だし。入れているのは、いつぞやの里抜けの時に持ってきたリユックだ。

「んで、あいつ等の本拠地は何処つすか？」

「んー、香港よ」

「南つすかね？ 漁港？ そりゃ楽しみ」

「おしいつ！ 南よ。あ、これいつもの荷物に入れといて」

そう言いつつ忠夫に予備の神通棍を渡す美神。

「当たつてるじゃないつすか」

「だ・か・ら。おしいつていったじゃない」

荷物袋に向かつて、ごそごそと中身を確認する。美神の声は背後から、だ。

「へ？」

と、気配を感じて振り向こうとした忠夫の首元に、チクリと何かが刺さった。

「飛行機に乗るから、ちよつと静かにしててねー」

それが、睡眠薬を首筋に打たれた忠夫に聞こえた最後の言葉だった。

「それじゃ美神君、私は少し情報を当たつてみる事にするよ。上手くドクター・カオス辺

りが捕まってくれば楽なんだがね」

「先生っ！ いいんですか、貴方の弟子は助手に睡眠薬を?!」

「ピート君……君は私の希望だよ……」

「先生……」

其処は感動する所ではない。

「しっかし、あいつほんとに良く寝てたわねー」

「美神さん……もうちよつとまともな手段は無かったですか?」

「いいのよ、ピート。荷物もちならガタイのいいのと威勢のいいのが揃ってたんだし」

「そういう問題では……」

「さて、此処ら辺りの地下がおそらくあいつ等の本拠地だ」

「原始風水盤なんて、強力な地脈の力が無い限りまともに動くどころか構成さえできないわ。条件がそろってるのは——此処、この一点ね」

そう言つて地図を箸で指す勘九郎。彼らは、人狼の鼻で見つけ出したおそらく美味しいであろう店、の中で、昼ご飯を食べていた。

「こりやうまい！ こりやうまい！」

「あつ！ 手前そりや俺が狙つてた最後の一個つ！」

「うるへー！ ここは速い者勝ちだろうがつ!!」

「横島さん・・・雪之丞も・・・いい加減にしないと——」

「横島君、少し黙つてなさい」

「雪之丞、お願いだから静かにしててね」

ピートの制止の声を遮るように、二人の脳天に同時に堅い衝撃が走った。

「おおおおおつ?!」

「保護者が怒りますよー。つて、遅かったですかね」

「ピートさん、なんだか達観してませんか？」

「はっはっは・・・ふう」

溜息をついても楽にはならず。

「ふうん・・・香港島の、地下ねえ」

「此処に何の伝も無い私たちでさえ、簡単に特定できたわ」

「あー、そりゃ罫の匂いがぶんぶんしますね」

「大丈夫だろう？ 此処にトップクラスの霊能力者が4人もいるんだぜ？」

「4人？」

「まず俺だろう？ 勘九郎に、俺を倒したピート、名実とも一流のGS美神令子、ほら、4人じゃねえか」

「……ああー」

「そこに自分を入れる辺り、お前も中々の自信家やなー」

「つたりめえだろ？ 氷雅——いや、メドーサの妙なちよつかいがなけりや、ピートにだつて負けねえぞ？」

食事が終わってお腹も落ち着いたせいとか、和やかに話す忠夫と雪ノ丞。その会話を聞きながら美神達は忠夫の戦闘力を知らない雪ノ丞に伝えるべきかどうか少し迷う。

「ほら、あの時の記憶無いですから……」

「そう言えばそうだったわねー。あいつがメドーサに勝つたなんて、いまだに私でも信じられ無いくらいだし……」

雪之丞のその意見に、というか、4人の辺りで違和感を感じたものの、その後の言葉で納得したピートと美神。おキヌは蚊帳の外だったから知らないし、勘九郎も記憶は無

い。知っているのはメドーサと、あのメドーサが話していれば、だが、陰念くらいだろう。

「へー。そうなの」

「しっ！声が大きいわよってあんた！」

と、コソコソと話し込んでいた二人の間に、何時の間にか勘九郎出現。

「やっぱりねー。どーせ、まともに力押しした訳じゃないんでしょ？」

「・・・ま、確かにね。相手が引いてくれたからって言うのもあるわね」

「それでも、メドーサ相手に2対1とはいえ負けてないんですから・・・」

「そーいうところ、うちの雪之丞にも見習って欲しいんだけどねえ・・・」

「や、そりや無理でしょ。あいつ喧嘩馬鹿っぽいし」

「・・・あんたも唐突に入ってくるわね」

「良かれ悪しかれ、半分ですから」

「・・・それも面白そうな話ではあるわね」

今度はコソコソ話し込んでいた3人の隙間に忠夫侵入。人狼の耳はしっかりと内容

まで捉えていたらしい。雪之丞はおキヌが運んできた御代わりに夢中だ。

「ま、おいおいと、ね」

「ふん。仲間でしょ？それぐらい話してくれてもいいんじゃない？」

「今は、つすけどね」

「・・・ますます気に入ったわ。どう？今夜辺り「全力で拒否します!!」・・・あらあら」

そう言い残して再び忠夫は食卓へ。

「あの子、私に出来ないかしら？」

「たっかいわよ？」

「・・・えらく気に入ってるみたいね？」

「あれは私の助手なの。文句ある？」

「・・・ぷっ！あつはつは！いーわよ、「今は」諦めましょ。雪之丞にはあの子の事、秘

密にしといたほうがいいかしら？」

そして、勘九郎も戻っていった。雪之丞に話さないと言う事は、つまり――

「・・・気に入らないわね」

「何がですか？」

「何もかもよ」

美神の気持ちは本人どころか神さえ知らず。

「まあ、原始風水盤が本格的に発動するには満月の夜である事と、この針が必要な訳よ」
「それなら、これを壊してしまおうというのは？」

「それもいいけどね。時間稼ぎにしかないし——」

「それやると、かなりの人間が死ぬ事になるぞ」

ピートの提案に、軽く返す勘九郎と雪之丞。内容はとても軽い物とはいえないが。

「うあー。つてことは、その針についてるすっげえ血の匂いは……」

「貴方が思っている通りよ。——この針は、優秀な風水師の生き血なんていう、悪趣味な物を生贄に捧げられているのよ。大量に、ね」

「ま、あちらさんとしては、壊されたら壊されたで、新しく作ろうとするだろうな」

「まーた、厄介な物を……風水師全部が人質みたいなもんじゃない」

風水の力を使うための触媒として、というよりも、風水師の地脈への干渉能力が必要なのかもしれないが、今大事な事は針を壊すと言う事は、おそらく無用の血を流すと言う事。

今壊せばしばらくは大丈夫だろうが、ここまで強力なモノをそう簡単に諦めるとは思

えない。下手をすれば風水師が全滅するまで続けられる可能性さえあるのだ。分の悪い賭けなんて物じゃない。

「つまり、こつちもさつさと動かないと・・・」

「そういうこと。助手が助手なら雇い主も雇い主ね。説明が早くて助かるわ」

つまり、こうしている間にも新たな針が作られる可能性がある、と言う訳だ。となると、美神たちが持っている針は、交渉のカードとしてはちよつと弱い。

「それでも、あんまり騒ぐと神界の連中に干渉されちゃうから、メドーサとしてもその針はやつぱり貴重品よ?」

「多少は、つつーことか」

「・・・よくもまあ、こんな依頼受けたわねー」

「こつちにも事情があるんだよ。色々とな」

「それじゃ、どこから入りましようかね・・・」

方針は決定した。目標は原始風水盤。目的は破壊。後は、其処に至るまでの経過の方だ。

「僕が霧になつて——」

「没。あんたらの情報は駄々漏れだったの忘れたの? 誘い込まれて各個撃破が落ちよ」

「正面突破！ これしかないだろっ?!」

「馬鹿。あつちはこつちより強いだよ？せめて私か美神令子級の霊能者をあと10人連れてきなさい」

「諦めて観光を楽しむってーのは？」

「今すぐあの世でも観光したいのかしら？」

「ごめんなさい」

「んじゃ夜襲だ夜襲！」

「夜目が効かない相手ならいいけど、相手は真つ暗な教会を荒らした相手よ？こつちだけ不利になるのは御免だわ」

喧々囂々というかどん詰まり。結局、

「ふう・・・情報が足りないのよね・・・」

「せめてあの兵隊と陰念、メドーサ以外の戦力と、兵隊達の正体くらいは知りたいんだけどね」

「あー！ もうっ！ まだるっこしい！」

「・・・そうっすね。んじゃちよつと調べてきましましょうか？」

「「「「・・・へ？」」」」

唐突にそんな事を言い出したのは忠夫。

「・・・まあ、あんたなら斥候としては適役だけど・・・」

「ま、やばそうだったら直ぐ逃げますから」

「無茶よっ！ 助手を見捨てるつもり?!」

「大丈夫大丈夫。こう見えても心配を殺すことと逃げ足には自信があるから」

「相手はあのメドーサよ?! 保障も無いのに——」

「一回だけど、成功したから何とかなるだろ」

「・・・あんた、ほんとに何者よ?」

「何処にでもいる半人狼ツス」

—— 忠夫偵察隊、出動。といつても一人だが。

—— いや

「ふっふっふ！ そんな面白そうな事ほって置けるかってんだ」

追加、一名。

「ま、満月も近いし、この程度の暗闇なら」

真つ暗な山道。おそらくこの辺りだろう、と当たりをつけて探し回る。目的は——
「お、あつたあつた」

全く同じサイズの足跡。しかも複数、新しい。狩りに秀でた彼の感覚と今までに積み重ねてきた経験は、そこらの猟師顔負けである。

「・・・な、なんつー速さだ・・・勘九郎とタメ張る体力馬鹿だな・・・」
その後を必死で追いかける雪之丞。

——追いかけていったみたいだけど、いいの？下手すれば帰ってこないわよ？

——うちの雪之丞は馬鹿だけど、其処まで優しい扱きはやってないわ。

——相手が、メドーサでも？

——死んだら死んだで、其処まで。何処でも一緒でしょ？

——以外にあつさりしてるじゃない。

——信頼してるって言つて欲しいわね。

「ふくん、ここか」

やがてその足跡は一軒の屋敷に辿り着く。アレだけの大人数、正門みたいなのがあるだろう、と思つていたが、ここまであつさり見つかるなんて。不自然さを感じながらも、そろそろと慎重に進む。

「うくん、やーな匂い。腐つた死体みたいだなあ」

「——そりやそうさ。あれでもゾンビ。腐つてあたりまえ、だろ？」

玄関前まで辿り着いた忠夫の頭上から、今最も聴きたくない声が響いた。

「……あつちやー。ボスが玄関にいるって反則でないかい？」

「おやおや、そんなに余裕で大丈夫かい？」

「んにや。これでも結構焦ってる」

メドーサ。いつかの姿のまま、屋根の上で、槍を抱えて月を眺めている。

「いい月だ……そう思うだろう？ 半人狼の坊や」

「まあな。ムードのある場面なこと」

ふ、と笑い忠夫に視線を向ける。

「お前ら流に言えば、これも月の導き、だろう？」

「あー、月まで俺が嫌いなのかなあ・・・」

「狸が」

「狼だつての」

いつかの繰り返しのような最後のフレーズ。

「さ、て」

蛇は鎌首をもたげる。

「やりあう予定は無かったから、逃げたいなあ」

狼は姿勢を低くする。

「ふん。だつたらとつと逃げりやあいい物を」

「あんたみたいなタイプは、ぜってー逃げ道に罠を仕掛ける」

「正解」

「だつたら、逃げ道は、あんたの後ろだ」

「正解」

「見逃してくれる？」

「不正解」

「はああああ」

「ふふふふ……」

楽しげに見つめるメドーサ。獲物を前にした愉悦か。待ち焦がれた再会ゆえか。

「——さあ、始めよう。月下のダンスだ」

第二十八話。

メドーサは、忠夫に歩み寄る。その距離が一足飛びで届く範囲——己の間合いにまで縮む。

「さて、まずは逃げ道を塞がさせてもらおうよ」

そう言つて、メドーサが軽く指を弾くと、その音に混じつて彼女の魔力が屋敷の周辺を駆け巡つた。同時に、屋敷の周りの雰囲気が一気に重くなる。そう、まるで蛇の口の中のように。忠夫の脳裏に、餌を食べに入つて檻の出入り口がしまつたタヌキが浮かんだ。

「・・・もしかして、まだ逃げられた？」

「さつきまでは、ね」

「性悪やな」

「蛇に何を期待してるんだい？」

月は、その戦いを只、見るのみ。煽らず、嘆かず、静かに、静かに。

「全く、本当に根性ねじ——」

その言葉の途中、視線も向けずに全く同時に二人の姿が消えた。

「——げっ?!」

「——なっ?!」

広い屋敷の窓ガラスを揺らしながら、甲高い金属音と衝撃が生まれる。

ぶつかり合う拳と槍の柄。2人の姿は、一瞬にして掻き消えた後、ちょうど先程までの立ち位置の中間地点に現れていた。

何と言うことはない。忠夫は、台詞の途中で不意打ちを仕掛けようとし、メドーサは喋っている忠夫に不意打ちを掛けるつもりで突っ込んだら・・・それが2人共に全く同じタイミングであった為に、いきなりの激突寸前の打ち合いとなっただけ。それだけ、である。

「人の話は最後まで聞けつてーの!」

「躰の悪い…… お前が言えた台詞かいっ!!」

軽口を叩きあいながらも、2人ともその瞬間の接敵に動揺の色は隠せない。忠夫は忠夫で未だ靈力を片手に纏わせたのみであるし、メドーサはメドーサで槍と言う長得物を持ちながら接近戦から抜け出られない。

「いのっ!!」

「うどわああっ!」

「くっ!」

互いの苛立ち紛れの一撃は、お互いを捉えたかに見えた、が。吹っ飛んだのは忠夫。メドーサは辛くも槍で防ぎきり少々体勢を崩したのみ。潜った修羅場の差か、僅かに早く冷静さを取り戻したメドーサの一撃と、それを察して慌てて多少のダメージも覚悟で距離を取る事を選んだ忠夫の差であっただろう。

「てててっ?! この馬鹿力っ!」

「その馬鹿力食らっつといて、あっさり起き上がる奴の台詞じゃないねえ」

ごころごとと転がりながら、その勢いのまま跳ね起きる忠夫。舌舐めずりをしながらも、メドーサは警戒したのか槍を数回軽く振ると、構えなおす。

「あーもうっ! せめて陰念の方だったらまだやり易かったのに!」

「だから、あたしがいるんじゃないかい」

改めて靈波刀を展開した忠夫の前には、一挙一動も見逃すまいと彼を見続ける蛇眼がある。油断も無く慢心も無く、されど適度に緊張と脱力が見て取れるその構えは、忠夫

も見た事のある確実に歴戦の兵が持つそれであった。

「どーして、俺が来るって思ったんだよ」

傷一つ無いように見えても若干のダメージを受け、痛みに疼く背中が落ち着くその瞬間まで僅かでも時間を稼ぐ為に忠夫の口は動く。

「ふん。自分で考えな」

が、そんな事はお見通しとばかりに、メドーサは槍を握る手に力を籠め踏み出す為に足を力を含める。宣言しているのだ、今から行くぞ、と。

「・・・・・・・・けち」

それを見てとった忠夫も、甘さの無い動きに急速に意識を絞っていく。背中痛みは若干残るものの、庇ってはいては命を落とす。意識を絞り、痛みを外に、ただ目の前の女魔族に集中していく。

「戯言は終わりかい？」

「勘弁してほしいなあ・・・・・・・・」

本音が漏れたが聞き届けてももらえない訳も無し。

「ふふ・・・・・・・・。行くよっ！」

2度目の衝突は、メドーサの重い踏み込みが開始の合図。

——右左右右ってフェイントうわ速いつてかわしてかわしてこっちもフェイントいれて蹴りと見せかけて本命は左の振りして右のアップってかわすなよこん畜生危な足を使ってくるって詐欺じゃねえかしかもくそ痛そう喰らったら吹っ飛ぶくっついてかわしてってあのばかなんでそれより零距离ボディって体を捻っただけで避けるんじゃねえええっ!!

——四連は見せ技此処でフェイント本命はこっち二連このガキ避けるな違うこの蹴りは偽者本命は左かいや違う下から右跳ね上がって避けて下り際に突き下ろしと見せかけて蹴とぼしてまた避けた距離をとってしっこい近い突き飛ばせまだくっついてこのそんなところで腹狙いか舐めるなあああああつ!!

その短い数瞬の間に交わされた攻防は、本人達も覚えていないであろう、体に染み付いた動きと脳裏に描いた攻勢のぶつかりあいだった。

「反則だろその速さ!」

「中々やつてくれる!」

交差は一瞬、されど互いに感じた時間は無限にも等しい。読み合いとフェイントの雨あられ。拳と槍を挟んで互いの眼を覗き込む。

「ふっ!」

「はあっ!」

忠夫は右拳開いて槍を掴み、足を跳ね上げる。メドーサは槍を掴まれた瞬間にその手を離し、足を振り上げる。

互いの足は空中でぶつかり合い、重低音を響かせる。

「このっ!」

「槍ならあたしが上だっ!」

足を振り下ろした反動で一回転し、その手に持った槍を振り回してメドーサにぶつけようとすも、しゃがんで避けながらメドーサは新たにその手から槍を生み出し、その二又の穂先で忠夫の服を掠めながら反撃する。

「なんだそりやああっ!」

「文句があるなら替えの武器ぐらい準備してきなっ!」

「そんな不条理なっ!」

「素手で得物と打ち合う方が不条理だよ…っ!!」

服を掠めた事で忠夫の動きが一瞬鈍る。メドーサがその隙を見逃す訳もなく、槍を突き出す——と見せかけて足払い。辛くも跳ねてかわすが、体勢はさらに崩れ、着地の瞬間を狙って今度こそその必殺の突き。

「妙技、マトリツ〇ス！ 古いがなっ！」

「このっ！」

忠夫は、その突きを背中側に倒れるようにしてかわす。しかし、その足の裏は地面を捉えたまま。強靱な腹筋と背筋、異常なまでのバランス感覚と、人狼の霊力を使った、壁上りの応用の足裏からの地面への霊力でできた爪の形成。やってる事はすごいが言ってる事がアホである。

そのまま槍が通り過ぎる——かと思いきや。

「潰れろ」

メドーサはその必殺のはずの一撃を、一瞬で完全に忠夫の上で止め、振り下ろす。

「あくらら。すっげー穴」

「この狸」

確かに捕らえたはずのその姿は、一瞬にして5mほど離れた場所にある。どうやら体をそのまま倒し、頭を支点に腹筋と足の力だけで其処まで跳ねたようである。

「あー。首、おかしくなったかと」

「普通はむち打ち程度じゃすまないとと思うんだけどねえ」

「はっはっは！ 犬飼忠夫を舐めんなよっ！」

「これだから馬鹿って奴あ」

何処か楽しげに嘲笑うメドーサだが、笑われた忠夫は必死に隠れて息を整えていた。疲労を見せないのも兵法の一つとは言え、長物という只でさえ腕に負担のかかる武器を扱いながらも、開始直後と比べても全く速度が落ちないどころかキレが増すばかりの攻勢に、流石に忠夫も不味さを感じていた。

「馬鹿って言うな！」

微妙に首が傾いているが。視界が斜めになっていた事に気づいてか、グリグリ首を回して一息。何とか息は整った。その様子を見てメドーサも内心舌打ちをしているのだが、完全に余裕の笑みで隠している為忠夫はその事に気づけない。

「ふう・・・やっぱやばいわ。陰念がいなくて助かったかも」

「おや、良く分かったね」

「いや、知らなかった。そーなのか？」

「この状況でカマを掛けるのかい。狸め」

「狼だつて何度言わせれば・・・」

「ま、いい。冥土の土産だ。どうせ、偵察なんだろう？」

「さてさて、囨かもよ？」

「それなら本隊が風水盤にたどり着くことは…チィ。あたしとした事が、少々高ぶり過

ぎた」

「む、もう御終い？」

忠夫は、冷静になろうとするメドーサから飛び離れて距離を取る。

「そんなに離れちゃつて大丈夫かい？」

「ああつ！ 陰念がないことも分かつたし！ おそらく原始風水盤までの道程に罾があることも分かつた！ あと屋敷の周りに罾があること！ 兵隊の正体はゾンビって事も！ んで匂いからして今はあんまりいないっ！」

「そんな大声を出して何を——まさかつ?!」

「ちゃんと伝えろよ！ 雪之丞！」

「ちつ！ もう一人——違うつ?!」

「やーい、ばーかばーか！」

「こ、このくそ犬うううつ!!」

「狼だああつ!!」

突如大声を張り上げた忠夫に、もしやと思い一瞬気を逸らしたその隙を狙い、先程頭だけで跳ね上がった時に、土煙にまぎれてこつそり拾っておいた石を繁みに向かって投げる。メドーサがそちらに気を取られた瞬間に、屋敷に向かってダツシユ。完全に気を取られたメドーサは忠夫を追いかけて屋敷の中へ。

後には誰も残らない。

——いや。

「……成る程な、ありやペテン師だ」

先程忠夫が石を投げ込んだ繁みとは、反対側の繁みからそう呟き顔を出したのは——
雪之丞。

「……全く。勘九郎の奴が変な事言うから、たまには頭使つて不意打ちしてやろうとすりや、こんな結果かよ……あいつにはとづくにバレてみたいだし、慣れない事はするもんじゃねえな」

辺りからは先程のような嫌な気配はもうしない。きよろきよろと周囲を見回し、屋敷の中へと歩みを進めようと一歩踏み出し、だが大きく舌打ちをすると踵を返した。

「……ちっ！ 借り一個だあの野郎！」

雪之丞は、そう呟くとその身を翻し、一路、宿へとその進路を取るのであった。

その頃、逃げた忠夫はと言えば。

「えーと、これはなんでしょか？」

「土角結界っていつてね。捕縛用の強力な奴さ」

「・・・玄関踏み込んで一歩目ってずるくないですか？　せこいと思います」

屋敷の内部に一歩踏み入り、狭い室内での泥沼のゲリラ戦に纏れ込みつつ離脱の機会をうかがうつもりであった忠夫だが、その目論見はまさかの一歩目で罠に捉えられた事から失敗していた。

メドーサの背後からしか脱出できないと言う言葉、それ自体がブラフであり、それに気づかなかつた忠夫の迂闊さ故、でもある。

「そんな事を言うのはこの口かい？」

「ひたたたたっ！」

「おや、意外に良く伸びる」

「やふえひよー！ー！」

「あーっはっはっは！」

「ふう……。また厄介な事に……」

「あの馬鹿……。さつさと逃げるって言ったじゃない」

「ま、俺が見たのは其処までだな」

「……。良くあんたが突っ込まずに帰って来れたわね」

美神が心底不思議そうに雪ノ丞を見る。だが、勘九郎は何処か嬉しそうに雪ノ丞を見ていた。

「……あいつが俺を信じて囿になった事くらいは分かる。それなら、答えてやるもんだ。そう、ママには教わった」

鼻を鳴らしてそう答える雪ノ丞に、美神は思わず感心したように吐息を吐く。

「……。ふふふ。及第点かしら、ね」

そして、笑みを浮かべる勘九郎もそう満足げに評価した。

「何をつ！」

「そんなことより、今は横島さんを助ける事を考えないと……」

「美神さん！横島さん大丈夫ですよね?!」

ピートとおキヌの心配そうな言葉に、美神は頭を掻きながら悩ましげに窓の外を覗む
「ま、あの子の事だから、逃げ切れるとは思うけど・・・それならもう帰ってきてもいい
筈だし」

「ふえーん！よこしまさあああん！」

「ほらほら、おキヌちゃんも泣かないの。救出なら今から行くわよ」

「ま、とりあえず——地上からは無理みたいね」

「それでも相手の戦力がわかった事は大きいわ」

「少なくともメドーサ一人、陰念はない。そして、ゾンビの兵隊さんは極僅か・・・で
すか」

受け取った情報を呟くピート。その言葉を反芻する美神の横顔に、勘九郎の何か言い
たげな視線が刺さり、視線を向ける。

「やっぱり良いわね、あの獣人の子」

「・・・ほしけりや自分で見つければ?」

「今はいいわー。まだまだ育て甲斐のある弟分がいるし」

その頃、陰念。とある場所にて。

「貴様あ……GS試験会場にいた爺じゃねえか」

「ふん。護衛報酬の鉾石のために出張つてみれば、いつかの小僧ではないか。古い付き合いと云え、あ奴も妙な目を付けられたな」

「たしか、ドクター・カオス、とか言つたな？」

奪われた針の代わりを作る為に、再び風水師を狩り出していたところで、目的の風水師が護衛に雇つていたカオスと出会つてしまつていた。

「後ろの奴らはゾンビー、いや、キョンシーか。中々出来も良いようじゃの」

「正確にはその中間、つてところだがな」

「ちようど良い。テストの相手としては十分か」

「何の話だ？」

「小僧。一つ賭けをしよう。わしの作品と、お主の兵隊。勝つたほうが我を通す」

「けっ！いいだろう。失敗しても、最初の針さえ取りもどしやあ問題なし。なにより」

「ふむ？」

「手前の鼻つ柱、ブチ折つてやりたくなつた」

「かつかつか！若造が！良かろう——行け」

「「いえす。どくたかおす」」

カオスの後ろから現れたのは、身長130cm程の3体の——マリア。それぞれ髪形が異なっている。長い髪を持った機体の額には、 α の刻印が。髪を後頭部で括った、いわゆるポニーテールの機体の額には、 β の刻印が。髪を白いバレッタで止めた機体の額には、 δ の刻印が。

「おら、手前ら。とつととブチ倒してこい！」

「「「「「「「「「「「「「おおおおつ!!」」」」」」」」」」」」

ゾンビか吼える。カオスと陰念は最初の命令以外動くつもりは無いようだ。

「「「「ああつ!!」」」」

ゾンビの兵隊達の内、もつとも最前列にいた二体が迫る。

「武装・構築——選択・浄化銀式・パイルバンカー・固着」

進み出た α の機体。その手を一振りすると光の粒子が溢れ、次の瞬間にはごつつい杭打ち機がその手に絡み付いていた。

その鋼の塊で兵隊の拳を受け止める。

「がっ?!」

「想定内の・インパクト。反撃——ファイア」

あくまでも、事務的に。その鍛針は、身長差から突き上げるように、ゾンビの胸板を完全に貫き、滅ぼした。

「がっ！」

しかし、彼らはその光景を恐れない。最早死んだその身に宿るのは、僅かな知性と、主人に対する絶対の忠誠のみ。故に彼らは止まらない。

「——連鎖防壁・展開」

その拳は、 α へ到達する一瞬前に、何十もの障壁に阻まれ、ついには止まる。 β の伸ばした手の先から生まれでた斥力場によって勢いを止め、まるで表面を滑るように逸らされ、地面と何も無い空間を抉るのみ。

「ふふふ．．．我が秘密基地の周りでさわいどった馬鹿者ども．．．そいつらの中に、面白い結界の使い方をする奴らがいてな？」

「結界の多重展開？ その程度、やってやれねえ事は無い」

「違う。多重ではなく、連鎖じゃ。一枚目が破られると同時に2枚目が発生する仕組みでな？ 相互干渉させないように、なかなか苦労したわい」

「．．．どこの結界馬鹿だ、そりゃ」

会話はすれど、互いに眼は合わせない。正対していながら、その間は果てしなく広がった。

「斥力場・反転。捕縛」

結界を張る β の掌が、下を向く。

「パイルバンカー・還元。ハンドガン・再構築」

β の掌が返されると同時、その手から生み出されていた跳ね返す力はひきつける力となり、残り9体の内5体までをその領域に閉じ込める。次の瞬間には α の手に、2丁のやたらごっつい拳銃が出現しており、その射撃は正確にゾンビの頭を吹っ飛ばす。

「がっ?!」

「おらおら、びびってんじゃねーぞ。とつとと回り込んでバラバラに飛び掛れ。どうやら多方向の防御は難しそうだ」

「分かるか?」

「動きがいつもそうだからな。必ず相手を正面に捕らえようとする」

「ふん。まだまだ成長途中じゃからな。マリアはメタソウルをほんの少しとはいえ分散させたせいで、しばらくはお互いに嚴重な調整がいるし、の」

「あの機械人形か・・・あつちのほうが強いな」

その言葉に、カオスは初めて陰念の目を見た。

「こちらにも色々々と、な。——全く、無茶ばかり言うようになりおった」

「ターゲット・行動予測・終了。汎用兵器・「ヴリトラ」・起動」

重々しい音を立ててδの背後に出現したのは、巨大な鉄塊。いや、それは幾つもの砲身を持つ——巨大な、武器だった。

「ロック・完了。精密射撃・ファイア」

その咆哮は、火線を伴い、まるで鉄塊自体が爆発したかのような様相であった。圧倒的な暴力を伴いながら、しかし、

「・・・あの火力で、目標以外には傷一つ無し、か」

「火器管制にはマリアのデータが役に立ったからの」

敵至近にいた筈の、 α ・ β 両機にかすり傷一つつけずに、その前にあった存在をことごとく塵へと変えていた。

「さて。殲滅、じゃな」

「中々面白い見世物だった。ま、あいつ等位じゃ見物料にもなりやしないがな」

「帰るのかの？」

「ふん。めんどくさいことは嫌いだね」

「魔族相手のデータも欲しかったがの。まあ、スクラップにするにはちと気が引けるわい」

「けっ、よく言うぜ。じゃーな。おちびちゃんたち。爺、今回は見逃してやらあ」

そう言って、陰念は踵を返すと、振り返る事無く歩いて出て行った。

「まだまだ、あれクラスには勝てんな。マリアがおれば——いや、これも、マリアの意思か」

「ほーれ、ほーれ」

「玉葱はいやああああっ!!」

そうこうしている間も某所では愉悦混じりの女魔族の声と、半人狼の悲鳴が響いてる。早く助けに行つた方が良さそうだ。

第二十九話。

「分割式・メタソウルに・登録・されている・特殊項目・個体・確認」

彼女の周りは薄く、冷たい空気が渦を巻いている。眼下に見下ろす地上よりもはるかに厳しい環境に居るにもかかわらず、その小さな影は揺るぎもせず静かに存在している。

「マザー・ソウル・休眠中。ドクター・カオスとの連絡・現行の・禁則事項に・抵触」
高く、高く。遠い夜空の中。

「自立判断に・基づく・行動演算・終了。音響・霊波・光学迷彩・多重起動」

その少女は、空に浮かんでいた。

「潜入・開始」

額に、 θ の文字を刻んだ、ツインテールの小さなマリアの型代は。

「すかー。すぴー。すかー」

「……この状況下で眠れるっていうのは、やっぱり馬鹿だと思っただけどねえ」

忠夫とメドーサの姿は、1時間ほど前まで闘っていた屋敷の地下にあった。半人狼の青年はその体の殆どが高さ2M、縦横幅1Mほどの、直方体の中にあつた。はみ出ているのは首から先の頭部と、両手首から先だけである。

そして、彼は熟睡ぶっこいていた。

「ほら、おきなッ!」

眠る忠夫の顎を真下から槍の柄で跳ねあげる。中々の速度で振われたそれは、並の間ならば暫くは流動食しか食べられなくなる程度の威力はあつた筈である。

「あだつ! って何だ?! 金縛りか?! ……あー。夢であつて欲しかったつ!」

が、半人狼の青年は、まるで眠っている時に叩き起されただけの様な雰囲気で見醒し、メドーサをみて非常に残念そうな表情を見せた。そんな忠夫に嗜虐的な笑みを浮かべて槍の柄でもう一撃かますメドーサ。

「現実逃避も程々にしな。さて、用件は分かつてるね?」

「・・・すかー。すぴー」

「永眠したいかい？」

「嫌じゃああつ!!」

「んじやとつとと囀りな。あんたらのお仲間の事を、ね」

そう言つて忠夫の首に槍の穂先を押し当てる。

「・・・いやー。それがね？」

「ふん？」

「お腹が減つて・・・もう死にそ。なんか食べる物くだせえええ・・・」

メドーサは、土角結界に見える筈の無い忠夫の腹の虫の鳴き声を聞いたような気がした。

「ま、あの性悪の蛇女のことだから、絶対に出入り口は2つ以上確保してると思つてたけど」

「意外な盲点でしたね。まさか地下鉄の中に作るなんて・・・」

こちらは美神たちの本隊。彼女達は今、香港島の地下にある、ある地下鉄の路線上にいた。

「・・・それにしても、この都市って」

「ほんとうに変な奴らばかりだな。まさか、一件目の情報屋であつさり見つかるか普通」

「というか、分かつててほつといた節があるのよね・・・」

彼女達がこの地点をピンポイントで見つけられたのには訳がある。

魔都、香港。そこは表を歩けば観光都市としても充分以上に魅力的な町並みが広がっている。が、

一皮剥けば、其処にはまさに魔都の名に違わぬ泥濘の様な人の業が其処彼処に見られるのである。例えば、面倒な魔族を片付けられそうな有名なGSに、情報を与えるだけで自分の懐を一切痛ませる事無く自分にとつてもやましい相手を処理する、とか。

「ま、優秀な風水師を簡単に見つけるっていうのも、楽じゃないでしょうし・・・黒幕は誰か知らないけど、私達を利用したんでしょ、あの情報屋を使って」

「・・・まさか、メドーサに風水師の情報を流した奴らが?！」

「推測に過ぎないけど、ね。裏でござたががあれば、それなりにあつちの世界も顔くらい出すでしょう」

風水師、という存在は、この都市では以外にポピュラーなものである。その裏表を問わず。そして裏に存在する者達には、確固とした原則がある。味方じゃない者は、敵か、利用できる敵であるという。

今回の騒ぎで消えた風水師たち。その動きを追ってみれば、ある程度共通項が見つかるのかもしれないが・・・それは彼女達の仕事ではない。

「ま、良いわ。誰だか知らないけどWin—Winつて事にしてあげる。誰に喧嘩売ったか教えてあげるわ、メドーサ」

「此処は一つ派手に行ってみましょうかね」

「おっしやあああつ!!」

「横島さん・・・待っていてくださいい!」

「どうか、無事で帰ってきてくださいいね・・・」

手を振るおキヌを背後に残し、美神、ピート、勘九郎、雪之丞——突入。

「ほら、さつさと」と、届かん!とどかんぞおっ!・・・なんて世話の焼ける情報源だい・・・」

忠夫の前に突き出されたのは、いかにも保存食というかつたそうな乾し肉と濁った水。それでも、貪るようにどんどんと食べていく。

「へったくそな乾し方だっ！」

干し肉の匂いを嗅いでは文句を言い。

「お肉に対する敬いの気持ちを感じられんなっ！」

ガリガリと音を立てて堅い肉をかみ砕いては文句を言い。

「ぶはっ！　せめて井戸水がよかつたー！」

そして一気に入るい水を飲んで文句を言う。

「黙って食べる．．．頼むから」

「ごっつおーさん」

が、だからと言って食べない事には戦にならんのである。

「早ッ?!」

この緊張感の無い雰囲気だけでもどうにかならないものか、とメドーサは心底思った。

「．．．で？」

「うむ。乾し肉は天日干しか薫製にした方が良いと」

呆れも度を過ぎれば苛立ちに変わるのか、最早無言で脅しの槍を喉元に当てるメドーサに、忠夫は流石に潮時を感じてか早々に少しだけ動く両手を上げて降参した。

「・・・ど?」

「えーと。なにが聞きたいんでございましょうか?」

あくまでも韜晦する忠夫に、とうとう業を煮やしたか。メドーサの額にはでつかい井
桁。

「とりあえず、そつちの戦力だね・・・誰が来てるんだい?」

「はいっ! 美神さんとピートと勘九郎と雪之丞でつす!」

「・・・ふん。やはりそちら側についたか」

そう呟くメドーサの目には、憎々しげな光。

「もういつ後ろから俺の貞操が襲われるかと、怖くて怖くて・・・視姦?」

苛立ち紛れの一撃を位、流星に目の中に火花が飛び散る忠夫である。余計な事を言わ
なければと思うが、少しでも思考が削がればいいな、とも思いつつちよつと痛みに腰
が引けたのであった。

「ようするに、いつも通りだったわけだね?」

「あ、あれがいつも通りっていうのも嫌だなあ」

メドーサは、忠夫に一撃くれたあと、顎に手をやってしばらく考え込む。そして、そ
の視線を、す、と上げると

「・・・忠夫、とか言つたね」

これまでの嘲りや苛立ち、嗜虐的な表情では無く、真剣な表情でへらへらと笑う忠夫と視線を合わせた。

「はいっす!」

「あんた、こつち側につく気は無いかい?」

「——へ?」

忠夫を引き込みむ。全く考えてもいなかったその提案に、思わず素の表情を見せる半人狼。

「少々力不足とはいえ、あたしとかなり良い所まで争ったその戦闘能力。人狼とか言っただね? その鋭敏な感覚、おそらく、偵察に出たのは適役だったからだろう?」

「え、あの、その、ちよつと」

「あんたの力があれば、かなり楽になる事は間違いない。どうだい? こつち側につかないかい?」

メドーサの表情に嘘は無い。真剣な、本気で言っていると言う事が分かる表情が浮かんでいる。

「報酬は望みのまま、だよ。やりにくいって言うんなら、今回は参加しなくてもいい。原始風水盤も、どうやらあの方にとっては余り重要な物ではないみたいだしねえ」

「ってーと?」

「……ふん。いくら地脈を操れるからって言ったって、あれ一つで人界全てを魔界に置き換えることなんて不可能さ」

原始風水盤。地脈を操り、世界を滅ぼす事さえ可能なその力。では、メドーサ達にとつて、その使い道はなんなのであろうか。

たとえば、メドーサ本人が言ったように、人界を魔界に置き換える？

不可能ではないが、その場合完璧に神界の干渉を受けるだろう。原始風水盤の製作、操作が魔界の住人にできて、おそらくタッグを組むであろう人界、神界の技術集団にできない、ということとは考えにくい。其処までの技術格差があれば、とうに魔界の勝利でこの世界は幕を下ろしていただろうから。と、なれば後は単純な陣取り合戦になるだけだ。時間と労力が大量に必要な消耗戦の様相を呈してくるだろう。

世界を滅ぼす？——それこそ、何のメリットにもならない。彼らは、世界を滅ぼす事が目的ではない。彼らの目的の為に、今はまだ世界に滅びてもらっては困るのだから。

神界への交渉のカード？——これも少し弱い。彼らにも扱える可能性のある技術など、それこそ睨み合いで終わるだけの公算が高い。本当にそうしたいのなら、世界のありとあらゆる地脈のツボに、全く同時に発動できる下準備をしておく位のことには必要

だ。

「・・・んじやなんだってこんな大掛かりな事を」

「さて、ね。その大掛かりな事に使う駒があたしと陰念——ま、実質あたしだけって言う時点で、既にこの作戦の重要度がわかるつてもんさ」

「そりやそうだ。もつと大規模に戦力を使うならともかく、こんな一発でその発動が知れるもんじやなあ。テストにしたつて効率悪すぎるし、準備にかかる手間と被害が大き過ぎて知ってる奴なら風水盤の事にもすぐ気付く。となれば当然妨害も入るだろうし。——むしろ、あんた捨て駒扱いされて無いか？」

「いいねえ。察しも悪くない。やっぱり、あんたが欲しくなってきたよ」

「ええと、求婚でしょうか？」

「ふん、十年早い。がきんちよが」

「ひでえ・・・」

地面に唾を吐き全くもつてくだらない事を聞いた、とばかりに耳をほじるメドーサ。その余りのそつけなさというか興味の無さに、忠夫は捕まってから最も大きな精神的なダメージを受けた気がした。

「で、どうだい？戦力があたしひとりでも、やりようによつちやあ、あいつらなんぞ簡単

に捻り潰せるよ」

「そう言い、メドーサは唇を歪ませる。

「ま、そりやそうだろうけど・・・残念ながら、今回のお誘いは断る」

「・・・ほう」

「これでも狼なもんで。仲間はずれられないなあ」

断りの言葉を聞いた瞬間に、その手に魔力を纏わせたメドーサだったが、次の言葉でその魔力を放散させる。

「・・・そういう奴こそが、欲しいんだよ。絶対に裏切らない、忠実な部下が、ね」

「仲間、の間違いだろ?」

「っ!」

忠夫の言葉に、メドーサの方が一瞬跳ねた。それを見取って忠夫はさらに言葉を重ねて行く。

「なあ、お前こそこつちに来ないか?」

「くだらん戯言を抜かすな!」

「いやいや、マジで。うちの里ならけっこー簡単に受け入れてくれると思うぞ? 美人

だし、乳でかいし」

忠夫の思いがけない言葉に動揺してしまふメドーサ。何故動揺したか、など、本人には分からない。

「あそこはいいぞー。皆馬鹿ばつかりだから、少なくとも退屈はしないし。一緒になつて馬鹿騒ぎやるのも悪くない。満月の夜には皆で酒盛りしたりとかな」

「ふんっ！魔族を受け入れる存在など、いるわけが無いだろうが！」

「なら、俺と一緒に酒でも飲もう。そんで一緒に馬鹿騒ぎしよう。．．仲間にならんか？」

忠夫はあくまでも真剣に、メドーサに語りかける。

「…ふっざけるなああつ！」

何故、こんなにも怒りが湧いてくるのか。なぜ、ほんの一瞬でももしかしてと思つてしつたのか。

何故、一瞬でも——そんな光景の中にある自分を想像してしまつたのか。

「もういい。分かった。それなら、お前の意思など必要ない」

「あ、やばいかも」

瞳に怒りを灯し、だが表情からは完全に感情が抜け落ちたメドーサは、静かに槍を振り上げると、今度こそ全力で忠夫の後頭部に振り下ろす。

「あ……がつ」

打ち下ろされた槍は、忠夫の意識を刈り取った。

「貴様の存在ごと、あたしの眷属にしてやる」

「ぐるおおおおおおっ!!!」

「門番にケルベロスとは、中々洒落の聞いてることっ!」

そう言って巨大な犬型の石像の噛みつきをバックステップでかわす美神。その下りた頭に向かい雪ノ丞が霊力を収束し打ち込むが、それはまるで弾かれるように周辺に散らばり、全く痛痒を感じていない様子の石像は再び身を沈め、飛びかかる。

「ちつくしよー！表面に妙なコーティングがしてあるせいで、靈的ダメージが反射されてやがるっ」

「魔装術でも駄目だなんて・・・メドーサは、私たちのことも予想済みつてわけ?!」

忠夫達よりさらに地下深く。美神たちは結構なピンチであった。

「こんのっ！こうなりやピート！あんたの出番よっ！」

「嫌な予感がしますがつ?!」

「大当たり！霧になってあいつの腹の中潜り込みなさい！」

ピートに向かって叫びながらもケルベロスの体当たりを危うい所で避ける美神と勘九郎。

「そんな一昔前の怪獣映画みたいな?!」

「いいからとつとに行け弟子！」

言われても突っ込んで行く所かむしろ腰が引けたピートの背後に回った美神は、迷わずその尻を後ろから蹴り飛ばした。

「よかつたわねー！ 見せ場よ見せ場！」

「羨ましいなーっ！ だから早いとこやれえええっ!!」

「がああああっ!!」

雪ノ丞と勘九郎が前衛で堪えていたラインをぶち破り、ケルベロスは一声上げると、

二人の後ろですつ転んでいたピートに向かって再び突つ込んでくる。

「こ、こんな姉弟子は嫌だあああつ!!」

マジ泣きの入った半吸血鬼はそれでも嘔みつかれるその直前にその体を霧に変え、大きく開いたケルベロスの口の隙間から潜り込む事に成功した。

「がつ?!がああああつ・・・」

直後、悶えるように丸まり横倒しになる石像であったが、しばらく宙を搔くように動いていた脚もやがて動きを止め、その活動を停止させる。

「あら、ほんとに上手く行つたわね」

「火でも吐いてきたらどうしようかと思つてたけど、良かったわねピート♪」

「さすが俺のライブルだぜっ!」

そんな歓声を聞きながら石像の牙の隙間から這い出してきたピートは、何処か荒んだ目でそんな3人を下から睨みつけた。

「えーえーもうなんでも良いですから、とつとと先行きましょう」

姉弟子を取つたのは、自分の師匠。諦めた方が精神衛生上良いであろうとは思う物の、何処か納得のいかなさを感じる姉弟子であった。

「犬飼忠夫・確認。周辺に・敵性存在・確認できず。迷彩・解除」

其処は、先ほどまで忠夫とメドーサがいた空間。忠夫の動きを止めていた土角結界は今は無く、何処から運んできたやら古びたパイプベッドに埃っぽいマット、薄い毛布。そういつた物の上に忠夫が気絶していた。

先ほどのθの文字を額に刻んだマリア（小）は、迷彩を解くとその傍らに歩み寄る。

「くかー。すびー」

訂正。気絶どころか大口をあけて馬鹿が一匹寝ていた。

「……ぼっ

「んー」

「——これより・防衛任務に・つきます。これは・最優先事項・です」

少女は、何故か言い訳するように無表情にそう囁いた後、ほんの少しだけ嬉しそうな表情を見せて忠夫の傍らに潜り込んだ。

『起きろ、小僧』

「うおっ?!」

其処は、真つ暗だった。

『全く。無様にも程がある』

「えーと、あれ?」

しかし、自分の姿は見えるし——

『最も通る確率の高い所に罫を仕掛けるのは当然だろうが』

「げっ! 影法師っ!」

——忠夫の正面に立つ、いつぞやの影法師も良く見える。

『挙句の果てに、こんな物まで此処に入れよって……』

影法師の手の中で暴れているのは、メドーサの眷属、ビッグイーター。まるで釣り上げた魚のように跳ねるそれをあつさりとは片手で動きを封じている姿に、そこはかたない慣れを感じるのは何故だろうか。

「げ。そんなもんどやあって……」

『まあ気絶しておったし覚えておらぬだろう。中々大胆な接吻であつたぞ?』
「まじかつ?!」

『うおっ!?!』

その一言で、一瞬で影法師との距離を詰める。

「手前っ!なんで起こさなかつたんじやあああつ!!」

『知るか。全く・・・不味そうだが、質は良い、か』

そう言つて影法師は手に持ったビッグイーターを真上に放り投げると、その口を大きく開き。

「げ」

『ふん。腹の足しにはなるか』

「そんなもん食べんなよ・・・」

上から落ちてきたビッグイーターを一飲みにしてしまった。その光景を見て流石にげんなりとする忠夫。

『心配するな。しっかりとお前の血肉にもなる』

「——そんなもの勝手に俺の血肉にすんなああつ!!」

布団の上で跳ね起きる忠夫。絶叫交じりの悲鳴は、しようがないとも言えるだろう。同時に何かが落ちたような音も聞こえたが、

「ん?」

辺りには忠夫以外の人影は無い。周囲を見回し、自分の体を探り、そして自分がなぜここに居るのかにようやく思考が至る。

「あれ?えつと…やべえつ?!」

状況把握に数秒費やした忠夫は、ベッドから飛び降りると走り出した。

「美神さん美神さん美神さんあとその他——!!」

その他が聞いたら殴られるであろう台詞を大声で吐きながら。

「め・迷彩起動・確認。ぎりぎり・セーフ」

小さい影は、それでどうやって護衛するつもりだったのだろうか。

第三十話。

「だ、もうっ！ 暗いし歩きにくいっせーぞー！」

「死体の山ですか．．．もしかして此処は」

美神達は、未だに原始風水盤まで辿り着けないでいた。辺りにあるのは暗い洞窟の壁と、全てを見通すことはできないが、おそらく人間のものである。半分白骨化した死体の山。当然辺りにはかなりの臭気、いや、はつきりとした腐臭が漂っている。

「そうね．．．多分、あのゾンビの製作場所かしら」

「あらあら、こんなにくさん集めて．．．ま、此処の死体が——ふう。作りかけのゾンビじゃなきや良かったのにねー」

先頭を行く勘九郎と美神の前には、今まさに土をかき分け地面から突き出してきた腐った手。

「全く．．．面倒くさいっいたらありやしないわねっ！」

美神の振り下ろした神通棍が、早速その手を突き出してきたゾンビをぶった切る。

「．．．あの兵隊達よりは、厄介じゃなきさそうですけど」

「それでも、これだけ数があるとやっぱり厄介よ。もう．．．魔装術も結構疲れるのよ

ねえ」

そうやって辺りを見回す勘九郎の目には、あちらこちらで盛り上がる地面が写っている。

「はっ！全部ふっ飛ばしやあ、問題ねーよっ！」

「あんまり飛ばしすぎるなよっ！雪之丞！」

「てめーこそ、気合を入れろやピート！」

ピートと雪之丞はそう声を掛け合うと、揃って前方に突っ込んでいく。美神と勘九郎はそれぞれ左右に展開。

「・・・さて、後は御大にいつご出陣願うかが問題かしら」

勘九郎は、そう小さな声で呟きながら、ズボンのポケットを確かめる。そして——
「おおおおおっ!!」

前列2人の雄叫びで、未完成のゾンビは掃討され始めたのだった。

「やべえ、やべえぞ?!」

所変わってこちらは忠夫。彼は、

「此処何処だよ?!」

思いつきり迷子だった。

「あかんっ?!このままじゃ汚名返上する為の見せ場を作る機会がああっ?!美神さんにしばかれたくはないぞっ?!」

問題はそこであろうか。

「ぜっ! ぜえっ! ま、まったく次から次へとよくもまあ湧いて出たもんだぜ!」

雪ノ丞の拳が防御等考えもしない片腕のゾンビの頭部だけを弾き飛ばす。

「だから飛ばしすぎるなって言っただろ?!」

息を切らしたせいが大ぶりになった拳の隙を突き、頭が無くなった事に全く痛痒を感じていないゾンビの片腕が振り下ろされそうになるも、雪ノ丞の背後からとび蹴りを繰り出したピートに上半身だけを蹴り飛ばされ、ゾンビは今度こそ灰になって土に帰る。

「だあああっ! うるせー! 敵が来たら全力で相手するのが醍醐味ってもんだろがっ

「！」
前の方は喧々囂々と喧しいながらも、2人で確実に一番多いゾンビ達を仕留めてい
る。

「ふっ！あーもう、いい加減にしてよねっ！」

右の美神も次々と歩いてくるゾンビに対して、破魔札を節約し、神通棍だけでやり
あつている。とはいえ、体が多く動く分だけ消費も激しいようである。彼女の額から
は、幾つ物汗の珠が流れ落ちていた。

「くうっ！ 大分潰した見たいだし、そろそろ種切れになって欲しいんだけどねえ——
——っ！！」

勘九郎は大方の相手を潰し、それでも散発的に襲ってくるゾンビを駆逐し、辺りを警
戒しながら美神に合流しようと動いていた。

「このっ！」

が、合流する前に最後の一体になっていたゾンビに、輝く神通棍が胸を貫き呪術ごと
打ち砕く。大穴を胸に開けたゾンビは、もはやなんの力も無く崩れ落ちた。

「ゴアアアツ……」

そして、最後の一体がゾンビからただの灰へと戻っていく。

「よ……ようやく終わりかよ……」

「はあつ！ はあつ！ まだよっ！ 油断するんじゃないっ！」

息を荒らげながらも、勘九郎はむしろ周囲への警戒を強めていた。

「ど、どう言う事ですか？」

「相手がメドーサだって事。あの女だったら——」

その頃には、ほぼ全員が息を荒げていた。何せ相手がゾンビ。元々痛覚なんて物は持ってくれてはいない上に、未完成とはいえ、かなりの強化された集団が、次から次へと溢れるように現れるのだ。そして、彼女達が疲れきるのを待っていたように、

「おやおや、もうお疲れかい？ そんな事じゃ、目的地までは辿り着けないよ？」

「——必ず、このタイミングで現れるわ、ね」

「何処までも性格の悪いおぼはんねっ！」

メドーサが、進行方向から完全版のゾンビ兵達を引き連れて現れたのだった。

「よくもまあ、此処まで辿り着いたもんだよ……つっきり途中で一人二人は脱落する物と思っていたんだけどねえ」

「そう言いながら、その手に槍を出現させる。ゾンビ兵達も既に襲い掛かる体勢である。」

「お生憎さま。そんな柔な事じゃ、GSなんてやってらんないわよ」

「そういう台詞は、その大量の汗を拭ってから言った方がいいんじゃないかい？」

その言葉通り、ピートと美神の顔には、戦いでついた土埃と、いまだ流れる汗があった。魔装術で見えないが、おそらく勘九郎と雪之丞も同様であろう。

「ちようど良いウオーミングアップってどこかしらね」

「ふん。それなら——本番といこうかつ！」

メドーサが振り下ろした槍を合図に、美神達に飛び掛っていくゾンビ兵。数は7体、多いとはいえないが、現状からすると決して油断できない数である。そして、その後にはメドーサが居るのだ。

「行くわよあんた達！死にたくなかったら、死ぬ気で踏ん張りなさい！」

「はいっ！」

「言われるまでもねえっ！」

「……まだ、早いわね。しよーがない、もう一願張りしなきゃ駄目みたいねえ」

戦端は開かれる。目的地は、おそらくメドーサの後ろにある。原始風水盤、それを破

壊できればこちらの勝利。突破されなければ向こうの勝ち。攻め手側は先ほどまでのゾンビ相手の疲労が抜けきっていない事に加えて、あちらはおそらく残った全戦力を投入している筈。

「・・・まだまだ、死なせるには惜しいお尻なのよねえ・・・」

「こらそこっ！馬鹿言つてないでとりあえず俺より前にいけえええっ！」

「あら、残念」

「こっちか?!」

忠夫はひたすら駈けていた。ようやく見つけ出したメドーサの匂いは、既に十数分の遅れがあることを知らせてくる。

「えーと、匂いは此処から・・・って」

が、忠夫の求める美神達の姿も、出来れば会いたくない魔族やゾンビの姿も其処には無い。

「……………穴？」

そして、その匂いの導く先は、唐突に現れた直系2M程のただの深い縦穴であった。

「……………そーいや、飛んでたっけなあ……………」

空を飛んでいたメドーサの姿を思い出し、彼女には階段が無くても問題ないと言う事に今更気付いた忠夫は、しばし呆然とその穴を見つめる。頭を掻いてみる。辺りの匂いを嗅ぎまわってみる。

「ん?! これは、あのゾンビの匂い?!」

微かに匂うのは、確かにあの時、屋敷の前で嗅いだ腐った匂い。それは、穴を通り過ぎて更に先へと続いている。

「……………いい、急がば回れって言うもんな？」

誰に問うでもなく、そう呟く忠夫。

「でも、近道だよな、多分」

穴の周りの匂いをかいでみる。間違いなく、メドーサは此処から降りていったようだ。

「……………ええいつ! 当たって碎けませんよーにつ!」

大きく息を吸って、吐いて。忠夫は覚悟を決めて飛び込んだ。

「おわああああああああ……」

忠夫は、真つ暗な闇の中へとロープレスバンジーを敢行したのだった。

「これで……ラストツ！」

——ばんばんばん。最後のゾンビを倒した美神達の息は、先ほどに増して乱れている。其処に響くのは、からかう様なメドーサの拍手。

「お見事。やるじゃないか、たかが人間風情が」

最後の7体目を仕留めたのは、美神の神通棍。しかし、拍手を贈るメドーサは余裕を崩さない。

「随分と余裕じゃない、高みの見物のつもりかしら？」

「いいや？ 只の観察さ……そろそろ、思ったように足が動かないんじゃないかい？」
メドーサの蛇眼は、美神達を見通すように細められる。

「そんなあんた達なら——」

そう言いながら、懐から、四角い板のような何かを取り出すメドーサ。

「——こんなちやちな物でも、動きくらいは止まるだろう？」

「「「「!!」」」」

辺りは重い雰囲気にも包まれた。そう、まるで蛇の口の中に居るような――

「こいつは、屋敷の周りにあつた奴と一緒にやねえか?」

「・・・成る程。ちつ、あの狸め、囮になつたのかい」

雪之丞の一言を聞き、忌々しそうに吐き捨てるメドーサ。忠夫のハツタリはハツタリでなく、自分が去つた後に本当は彼が其処に居た事を悟るが、今となつてはもはやどうでもいい事と思ひなおしたメドーサの口元が釣り上がる。それは、忠夫が此方側になる事が分かつているが故の嗜虐的な笑みだ。

「まあいい。これで詰み、かねえ?」

「・・・しようがないわね。こうなつたら」

「甘い。何がしたいのかは知らないが、そんな事許すとお思いかい?」

懐から何かを取り出そうとした勘九郎を一睨みすると、その足元から現れたのは、無数の、漆黒の、蛇。それらは美神たちを完全に拘束する。

「なつ?!」

「さて。面倒くさい事は嫌いだけど、とつとと片付けちまおうかねえ・・・」

メドーサの手には、大きな魔力塊が現れた。こうなれば幾ら数が居ようとも、もう恐

れる事は無い。じわじわと近付く事無くなぶり殺しにするだけだ。

「これで——」

そして、その手を突き出し、これから始まる光景を思い浮かべたメドーサの愉悦の笑みが、だが、後方からの微かな風斬り音を捕えた事で消え去った。

「——っ?!」

魔力を散らし、槍を後方に振り上げる。それはギリギリの所で振り下ろされた靈力を纏う手刀と激突し、甲高い音を立てた。

「あ、失敗」

「よ、横島君!」

「てめえ、無事だったのか?!」

「横島さん!」

「お前……なんでこんな所に?!」

「いやー、死ぬかと思つたつて。あの飛び降り」

其処には、メドーサの首元に目掛けて手刀を振り下ろし、そのままの勢いでメドーサを飛び越え美神達に合流した忠夫が居た。

「あ、あたしの眷属はどうしたつてんだい?!勘九郎たちと違つて、そのままの奴を直接送り込んだんだよっ?!」

「あ、アレなら食べた」

「食べたってなんだいっ?！」

最早、混乱の極みにあるメドーサ。目覚めた時にはこちら側に確実についていっているように、勘九郎たちの時のような小型の眷属を送り込んだときとは違い、直接、かなり大きな眷属を送り込んだのだ。だというのに、目の前の忠夫は明らかに全く変わった様子が無い。

「ん。一口で、こう、ぱくつとな。いやー、不味そうだから止めて欲しかったんだけど」
「ぱくつとって……。こ、この不条理馬鹿……」

「んで、匂いを追いかけて、縦穴の壁を蹴りながら下りてきたら、誰かさんの後姿が見えたもんでとりあえず大人しくさせて——」

「甘ちゃんがっ!」

「是非今度こそ記憶に残る奴をつ!と、思ってたんだけど」
「………。一体何するつもりだったんでしょーね?」

美神とピートの嘔き声が小さく響く。二人の表情には濃い疲労の色はあれど、絶望的な状況に瀕したが故の悲壮感は消えていた。

「ろくな事じゃないのだけは確かよ」

むしろ、呆れの方が大きいようだが。

とりあえずの不条理は置いておいて。目の前の馬鹿は得体が知れない事を再確認する。最早遊んでいる場合じゃない。こいつは危険だ。もう部下だの眷属だの言っている場合じゃない。そう自分に言い聞かせ、メドーサは、もう一度槍を構えなおした。

「今度は、本気で行くよ」

「げ」

メドーサが一瞬にしてその掌に作った魔力塊は、先ほどに比べれば小さくはあるものの、それでも直撃を受けたら只ではすまないだろうという事だけは良く分かる威力で、洞窟の壁面を抉る。

「空も飛べない、靈力を放つ事もできない。眷属を受け入れていれば、それぐらいの事は簡単だったんだ！」

「いや、受け入れなかったのは俺じゃなくて！」

「黙れええええええつ！」

全てを振り払うように、メドーサの槍は先ほどまで忠夫の頭が会った辺りを薙ぎ払う。

「う、後ろに向かって全速前進——!!」

「逃がすとお思いかいっ！」

慌てて逃げ出す忠夫と、それを飛んで追いかけながら魔力砲を撃ちまくるメドーサ。静けさが戻った頃には、残ったものは蛇に纏わりつかれた美神達だけが動きが取れないままに佇んでいる。

「・・・一体何があつたのかしら？」

「メドーサ、かなり頭にきてたみたいですね」

「それにしても、速い。あつという間に消えやがったな」

「ま、せつかく作つてくれたチャンス、逃す手はないわね。さて、そろそろ反撃と行きましようかね。ねえ——小竜姫様？」

「うわたたたつ?!」

「ちよろちよろと鬱陶しいっ!」

メドーサの手から次から次へと放たれる魔力砲。いかに洞窟の中とはいえ、それでも手のとどかない位置からのその弾幕に、なす術もなく逃げ回る忠夫。

「さつきみたいに下りて来いってーのっ!」

「はんっ！本気だつて言つただらうがっ！」

その怒声の合間にも間断なく降り注ぐ魔力の乱撃を必死でかわす忠夫。

「空を飛んで、その上、遠距離攻撃?!勝てるかつてーのっ！」

「悔しかつたら飛んでみなっ！」

「跳ねるくらいじゃ叩き落す気満々のくせにいいいっ！」

そう、最早油断の欠片も無く詰み将棋のように追い詰める事を選んだメドーサには、身動きが出来ない空中への跳躍も通じない。壁を走つた所で結局は攻撃の為には飛びかからざるを得ず、投石をしようにも十分な威力を乗せる為には時間が足りない。

「当たり前だあああっ!!」

それでもその雨霰と降り注ぐ、メドーサの魔力砲をぎりぎりですべて避けつつける。

「たーすーけーてええええっ！」

「お望みなら、こうしてやるさっ！」

「うえっ?!」

が、だからこそメドーサの姿が一瞬にして消え、次の瞬間には忠夫の目の前に現れた時、勢いを殺しきれずにすつ転ぶ事となった。

「そらっ!」

「うおっ?!」

そして繰り出される槍。地面を転がり体勢を崩しながらもなんとか避ける。

「しゅ、瞬間移動までっ?!」

「これは超加速って言うてねえ……本来は韋駄天の技——自分の周りの時間の流れを遅らせるって言う、裏技さ。あたしも使えるんだよ」

「さ、詐欺やああっ!」

地面に尻もちをついたままの忠夫の眼前に、槍を振り上げたメドーサの姿がある。当然、訴えても、止めてくれる筈も無し。

「そろそろ、落ちてもらおうかい」

「……へるぶみー!」

が、まさかまさかの天の助けであった。

「へっ?」

忠夫の叫びに答えたのは、何処からともなく転がってきた黒い筒。それは、辺りに煙幕を撒き散らした。

「な、なんだってんだい?!」

「なんか知らんが助かった?!脱出ー!」

「あ、待てこのっ?!」

「うあっ?!」

煙にまぎれて逃げた忠夫を追いかけようと走り出したメドーサの足元には、何時の間
にやら細いワイヤーが引かれていた。煙で視界が奪われていた事もあり、それに足を
引つ掛けたメドーサは思いつきりすつ転んだ。

「だ、だれだい?!」

慌てて起き上がって辺りを見回すも、仕掛け人どころか忠夫の姿さえもう無い。そし
て、姿の見えない敵を警戒するメドーサの耳に、彼女の作戦の崩壊を示す轟音が届いた。

「な、あつちは原始風水盤の、なぜっ?!」

その耳に響いたのは、原始風水盤が設置された部屋からと思われる爆音。

「くっー!」

忠夫の事も気にはなるが、とりあえず原始風水盤の事を優先し、歯噛みしながら獲物
が逃げた先を睨みつけながらも踵を返すメドーサだった。

「そんな馬鹿なっ?!」

先ほどもまで美神達が捕らえられていた辺りまで舞い戻ったメドーサが見たものは、無
残にも切り裂かれ、真つ二つにされた蛇たち。そして、原始風水盤が設置してある部屋
から洩れ出てくる大量の煙。

慌ててその部屋に向かったメドーサの目には。

「どうやら、此処までのようですね。メドーサ」

小竜姫を中心に、破壊された原始風水盤を背後に立つ美神と、ピート、雪之丞、勘九郎、そして忠夫の姿が映る。

「・・・小竜姫様のお出ましかい。よくもまあ、こんなタイミングで」

「ええ。私も随分とやきもきさせられました。どうやらこちらの思惑が上手く行ったようですね」

「ふん。大方、勘九郎辺りが合図を出すまで動くな、とでも言ったんだらう？」

「せーかい。切り札は最後まで取っておく物よ？」

そう言つてメドーサにウイंकを送る勘九郎。忠夫と雪之丞は引いている。

「おい、あいつだけでもどうかならんのか？」

「なるもんならとづくにどうかしてらあ」

「そりやそうだ」

「だろ？」

「あんた達、もうちよつと緊張感つて物を持ちなさい」

状況を考えずにこそこそと下らない事を話していた二人に、保護者二人からそれぞれ拳がプレセント。

「おおおおおつ?!」

「懲りないですねえ・・・」

振り下ろされた拳に、強制的に沈黙させられる忠夫と雪之丞。

「さて、形勢逆転ね、メドーサ!」

「事此処にいたつては、最早打つ手は無いでしょう。・・・いつぞやの借り、返させてい
ただきます」

そんな一部の流れを無視して、メドーサに向かって剣を抜く小竜姫。慣れたと言うか
諦めたと言うか。

「くつくつく。そうかい、失敗したみたいだねえ。それは認めるよ」

「…何を考えているのですか?」

しかし、メドーサはその手を顔に持つていくと、顔を覆う。その指の隙間から覗くの
は、怒りでも、憎しみでも無く・・・冷酷な、冷たい双眸。

「今回は素直に引かせてもらうさ。その半人狼に随分と引つ掻き回された事、忘れな
いよ」

「俺的には忘れてほしいなあ。・・・あと、できれば覚えておきたいのがもう一回」

「戯言を。この状況下で、退けるとでも思っているのですか?」

忠夫の眩きを無視して、メドーサに問い掛ける小竜姫。油断無く神劍は構えたままである。

「退けるさ……こうすれば、ね」

メドーサはその顔を覆う掌を、ゆっくりと振り上げ、その指を鳴らす。

「な、何をつ？」

答えは、遠くから連鎖的に響く爆発音と、小刻みに揺れながら天井から土くれを落とし、徐々に崩れ出す洞窟の壁だ。

「爆発?!まさか!」

慌てる小竜姫と、何が起こっているのか分かってしまった美神。

「洞窟ごと潰す気かつ!」

「そんなつ?!」

「悪の秘密基地っぽいなー」

「のんびり現実逃避してる場合じゃないわよ!早く脱出しないと!」

その言葉を聞いて慌てる雪之丞と、ピート。そして現実逃避を始める忠夫。突っ込む勘九郎。大混乱である。

「さ、て。お優しい小竜姫様は、そいつらを見捨てて私を追いかけるつもりはおありかい?」

「・・・くっ！卑劣な！」

「それがあんたの限界さ」

悔しさに臍をかむ小童姫を余所に、皮肉気に口元を歪めたメドーサはその身を翻すと、飛び立った。

「あんたとはもう会いたくないよ。あたしは、ね」

その一言を、忠夫に向けて残したまま。他の誰の耳にも届かなかつたが。

「そりゃ残念。ま、縁があれば、な」

忠夫にはしつかりと聞こえていた。

「急いでください！ここもそうは持ちません！皆さんは走る事だけを考えて!!」

洞窟を駆ける美神達、だが、もう時間は無いのか徐々に天井から落ちてくる土砂の大きさと量は増え出している。

「きやっ！」

「美神さんっ!」

「はっ!」

美神に向かつて降り注いだ岩塊を、小竜姫はその手から放った竜気砲の一撃で打ち砕く。

「あつぶなー!」

「こりや、急がないと本格的に崩れますよ!」

慌てて再び走り出した美神の横に、忠夫が並走する。

「それぐらい、分かつてるわよ! こうなったら、いつその事、あんた、私を背負う?!」

「りよーかい!」

「へっ?!」

此処までの移動と戦闘で疲れ切り、ヤケクソ気味の美神の言葉に素直に反応し、美神を背負う忠夫。

「行きますよー!!!」

「わ、ちよつと、こら?!」

「おりやあああつ!!」

事此処に居たつて未だに体力に陰りの見えない体力お化けである忠夫は、女性を一人背負った重さも感じていないかのように、むしろ速度を上げて出口へと駆け出してい

く。

「ま、待ちなさあああい……」

美神の悲鳴をドップラー効果で残しながら。

「はつや！あいつ何者だ、ほんとに?!」

「そんな事気にしてる場合じゃないだろう?!」

「そりやそうだ!」

足を止めないままに一瞬茫然としていた彼らだが、その背中を掠めるようにひときわ大きな岩が落ちる。

「うわわわわっ!」

「はあっ!」

が、それはさらに後ろから放たれた小竜姫の剣の閃きで粉微塵になり、その土煙を跳ねのけるように勘九郎が続く。

「助かるぜ小竜姫様!」

「いいから急いで!ピートさんは、もしもの場合は雪之丞さんを連れて霧になって逃げるように!」

「はいっ!」

「やれやれ、これで一応依頼は終了かしら？」

2人の背中を見ながら、最後方を駈ける小竜姫の横には勘九郎の姿。

「そうですね……とは言え、メドーサが未だ存在している事が不安といえは不安ですが」
「ま、気にしたつてしようがないわね」

「そうですね。また現れた時には、再びこうやって計画ごと叩き潰してあげます」

「……おー、怖」

そう眩くと、前に行く二人に向かって勘九郎は声をかける。

「あんたたち！ 私に追いつかれたら一晩ゆつくりじつくりたつぷりと付き合ってもら
から——」

お尻の辺りに気色の悪い視線を感じた瞬間、二人は光になった。

——ねー。つて、そこまで逃げなくてもいいじゃない」

その言葉を背に、前に行く二人は今までに無い速度で駆け抜けた。というか、逃げた。

「流石にあの規模の洞穴が崩れ落ちると壮观ねー」

「この辺り一帯の地形、変わったぞ」

「わ、悪いのはメドーサですから。辺りの人間は避難出来ているようですし」

美神達が洞窟から逃げ出し、地上に出て数十分後。地鳴りと振動を繰り返しながら、その小さな丘は沈んでいく。地下の崩落が地上の地形を完全に変えていつている。其処此処では断裂が走っているし、地割れに何件かの家が飲み込まれているようである。彼らの周りには、かなりの数の野次馬も集まっていた。

「で、だれかあれ止めなさいよ」

「お、俺は嫌だぞ？まだ死にたくねえからな！」

「ぼ、僕だつて無理ですよ?!」

「えーと、まあ、ほつといても大丈夫ですよ、きつと」

「くぬっ！くぬっ！この馬鹿はっ！」

「美神さん！横島さん死んじやいますよーっ！」

「何で野次馬の前にまで背負って行くのよっ！」

「ぐはっ！いや、照れる美神さんがちよつと良いかなーっ！」

「判決、有罪。即刻死刑！」

「ぎゃーっす！」

「横島さーん！」

「支援任務・遂行。記録映像・プロテクト。マザー・への・報告・緊急度AAAと・判断。帰還・します」

そういつて、野次馬の間を縫い、忠夫をスモークとワイヤーで助けた小さな影は一人混みへと姿を消していくのだった。

「……あやつめ、一体どんな話をしたのだ」

互いに酌をし合いながら、どんどんと酒樽を開けていく。二人ともまだまだ余裕のようである。

「御客人、楽しんでおられますか？」

「おお、長老殿。すみません、いきなりの来訪に此処までもてなして頂けるとは」「いやいや、気にすることは無いですぞ。元々、今宵は満月。宴の予定でしたからな」

竜神王は今回、ある目的の為に人界に降りて来ていた。家臣団は流石に数が多い上に——この前のように脱走した訳ではないので、20人程度来ている——見た目が完全武装なので里の外で警戒任務に当たっている。もちろん、人狼の里の結界が強固な物である事を確認した上で、だ。

お仕事は先代達に任せられるものは任せまし、今回は家臣団以外にもちやんとお目付け役がついてきている。

「……ふは」

「「うおおおおつ?!」」

「すつごい……ほんとに一樽空けちゃったよ」

長老達から少し離れた所では、天竜姫がちようどその頭より大きな杯で、人界のお酒というか、建前的にはお神酒を一樽空けてしまった所だった。見た目に寄らず既に齡700を数え、保護者の許可があるとは言え、見た目には最早常識外れとしか言い様が無い。流石うわばみ異名を取る竜神族、と言った所なのだろうか。

「いくらお神酒と言つても、いいのかなー?」

まだまだ理性を保っている人狼の若い青年が突つ込むも、周りの雰囲気はその光景を見てヒートアップ。

「……お代わり」

そう言つて更なるお神酒をご所望の竜神王女。素面どころか、明らかに樽の方が彼女の体より大きいのは気のせいではない。

「ま、負けてられん!お前ら、飲め飲め!」

「「お、おおつ!!」」

そして満月の下の宴会は、滞りなく進んでいくのであった。

「えぐえぐ……しろおお」

「はいはい、なんですか父上。全く、弱いと分かっているのになくんで飲むのでござるかなあ?」

「分かってあげなさい。それが付き合いらしいわよ」

一部では早速ぐでんぐでんの泣き上戸が発生していたが。

「さくて、もうすぐ人狼の里つすよー」

「ほ、本当に大丈夫なんでしょうか？」

「か、母ちゃん〜」

それでもつて、その里に近づく一人の半人狼、と猫又の母子。火種は直ぐ其処まで迫っていた。

——時はしばらく遡る。

原始風水盤事件の後、美神達は、疲れ果てた体を引きずってよろよろと、街の外れに

あるホテルまで辿り着いていた。

「あく、もう駄目。しばらく動きたくないわ」

そう言いながらベッドに倒れこむ美神。

「最後に横島さんにあんな事するからですよ」

その横にはおキヌがふよふよと浮かんでいる。

「あれはあいつが悪いの。全く——ふああつ……、あー。さつさとシャワーでも浴びて寝ますか」

漸うベッドから体を起こした美神は、それでも体に着いた土ぼこりや汗が気になるのか、ふらふらと浴室に向かって歩いていく。おキヌとしては、シャワーでなくバスに浸かると言い出したら止めるしかないなー、と思っているほどの眠たげな様子である。

「クスクス……お疲れ様でした♪」

それでも、それを見送るおキヌの目には、安堵が色濃く浮かんでいた。

「さー！裸のお付き合いましたよっか♪」

「嫌じゃああっ!!」

「手前一人でさつさといけえええっ!」

男部屋は、何故か4人一部屋だった。おそらく、と言うか間違いなく誰かの陰謀だ。

と言うか勘九郎。せまっ苦しいユニットバスにどうやって裸の付き合いを持ち込むつもりか。目が嫌な光を放つ勘九郎は、じりじりと他3人に近づいていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「逃げるなピート」

2人の後ろに隠れてこっそり霧に変わろうと四肢の端からモヤモヤと姿を変えようとしていたピートだったが、霊力を纏った忠夫の手と魔装術を展開している雪之丞の手にしつかりと両肩を掴まれる。

「だ、だって僕には関係ない」「あら、一度に3人までならOKよ?」「殺りましようか」

いきなり霊力全開で、勘九郎に向かつて身構える。自分がターゲットになっている以上、此処で脅威は潰しておいた方がいい、と考えたようだ。

「とりあえず、後ろだけは見せるんじゃねえぞ!」

「というか、あの目はやめれー!!」

「先生・・・・どうか護ってください」

雪之丞は思いっきり腰が引けているし、忠夫は勘九郎の視線に怯えている。ピートはピートで、今日日本に居るはずの唐巢に向かつてそう呟く。

(はっはっは。自分の身は自分で守る物だよ、ピート君)

「そんなっ!裏切ったな!僕の気持ちを裏ぎ」「待て!」あれ、なんかデジャブ?!」

暗転

「ちいつ！いきなり戦力が減っちゃまったぜ！」

「迂闊なんだよ、ピートお！」

何故かボロボロでピクピクしているピート。何故に復活できないのかと言えば、忠夫が成長した事と戦闘極振り雪ノ丞の参加があつたせいであろう。以前のGS試験の時とは攻撃力の点で違いがありすぎたようだ。

「……さあ、夜はこれからよ♪」

「なあ、生贄差し出して逃げねえか？」

しかし勘九郎のその余りの元氣っぷりに、段々不安になってきた雪之丞は、背後のピート親指で指し示しながら忠夫にそう囁く。

「……………いや、やっぱ仲間見捨てちゃ駄目だろ」

「……………しゃーねえなあ」

その余りにも長い逡巡が、どれほどの相手方の脅威がどれほどかを雄弁に示している。

「「ヤられてたまるかあああつ!!」」

「ほーっほっほっほ!!」

そして、ホテルの一室は戦場と化した。

——次の日の朝。と言ってもまだ日も昇りきらぬ頃。昨夜遅くに安眠を妨害された美神は、未だに騒がしかった男部屋の連中を一人残らず神通棍で黙らせた後、口止め料込みで札束を一つ置くと、逃げるように香港を後にしたのだった。「偽名で泊まっておいて良かったわ」とは彼女の言。

何はともあれ全員帰国、一旦GS美神除霊事務所に集まる。そこで待っていた小竜姫に報酬をそれぞれ貰う。雪之丞と勘九郎は更に何か書類を貰っていたようであるが。

「なあ、それなんだ?」

「小竜姫様のお墨付き、よ」

「ま、同門に魔族が居たつてことで、GS試験を受けられるかどうかも怪しかったからな。これで大手を振つて試験も受けられるし、上手くいけば除霊で飯が食えるつて訳さ」

つまり、GS試験での諸々の疑いに対し、この2人は完全に無関係である、という証明を作つてもらつて言うのがこの2人の報酬の一部であつたらしい。

「ありがとう御座いました。ご協力、感謝いたします」

「ごちらこそ、よ。この界限で生きて行くのなら、多分これ以上に箔の付くモノは無いですよ」

2人に頭を下げる小竜姫に対し、勘九郎は軽く笑つてそれを流す。この律儀者の一筆を疑えると言うのなら、それは余程無知か後ろめたい事があるか大馬鹿であるかと言つた所であろう。

「ピートとやるのも面白そうだけど、お前ともやつてみたいなあ」

「疲れそうだからヤダ」

「僕も遠慮します」

「ま、そのうちやろうや!」

「聞けよ」

雪之丞もピートと忠夫に別れの挨拶をしながらも、握手をしている。若干全員に手に

力が入っている辺り何ともはや。

「それじゃ、この業界に居るのならまた何時か会うかもね」

「ええ、今回は色々面白かったわ。じゃ、またね〜」

「横島——！ピート——！今度会ったらバトルだぞー!!」

「断る——！」

「僕もです——！」

二度と来るな、と言わないのは彼らなりの歓迎の意思もあったのか。そして、彼らは去って行った。

「それじゃ、僕も帰りますね」

「あ、ピートさん。これをお持ちください」

そう言つてピートに小竜姫が差し出した物は

「小判?! しかもこんなに……」

「今回の件には巻き込んでしまった形とは言え、それでも感謝していますから」

「あ、ありがとうございます！」

嬉しそうに受け取るピート。これで神父も美味しいご飯が食べられるであろう。空を見上げるピートの目には、笑顔で手を振る神父の空腹でやつれた顔が見えている。

「そ、それじゃっ！先生——！今現金収入を持ち帰りますからね——！」

ピートは、そう言い残し唐巢神父の待つ教会へと走って行くのであった。

「で、小竜姫？」

「ええと……」

それを微笑ましげに見送る小竜姫の肩に、ぽん、と置かれる美神の手。

「わ・た・しに対する報酬は？」

「あの……それが……そのお〜」

一瞬間まった後、困ったような表情で振り向く小竜姫。その額には大粒の汗が光っている。

「小判でもいいし、現金でも良いわよく？それとも、金塊とか？」

「それが、今妙神山の宝物庫が開かなくなっちゃって……」

「へえ？」

その台詞で、美神の雰囲気が一変する。武神に、冷たい空気が流れ込んできたような感じさえ起こさせるあたり、さすがと言えばさすが。

「そそつ、その！上司がなんだか一番嚴重な鍵のかかる其処に閉じこもっちゃって開かないんですよー！」

「じゃあさっきのアレは何よ?!」

「非常用に分けて置いたやつです！だからもう無い——」

其処まで聞いた美神は、にっこりと微笑むと。

「分かったわ」

と、彼女にあるまじき台詞をのたまった。

「……なあ、おキヌちゃん」

「……ええ。すつごく嫌な予感がしますね」

傍で眺めている、忠夫とおキヌは背筋を走る悪寒に小竜姫の不幸を哀れまらずにはいられなかつたと言う。

「代わりに、体で払ってもらいましょうか?」

「そんなん?! 美神さん、女同士よりも是非俺の嫁に——」

「だまつとれこの馬鹿っ!」

そしてきつつい神通棍の一振りで、詰め寄った忠夫はあつさり撃沈。

「私の除霊に、すこし手を貸してくればいいのよ?」

全く崩れない笑顔でそう小竜姫に向かって声をかける美神。

「ほ、本当に良いんですか?!」

その笑顔に酷い目に遭わされるかもしれない、とか考えていた小竜姫は、地獄に仏とばかりに飛びつく。後々、小竜姫はこの時に喜んだ自分を、過去に戻れるならばなんとしても諫めていただろうと語った。

「ええ・・・良いわよ？」

「あ、ありがとうございます！」

「それじゃ、契約成立って事で♪」

「ナンマイダブナンマイダブ」

「違いますよ、横島さん。南無ーって言うんですよ？」

「なむー。」

そして始まる小竜姫の受難。時には近くの岩神と揉め事を起こした浮幽霊達の緊張緩和に走り回り、何故か美神と一緒にオキヌを鍛え上げたり。時には海岸に出没する恐竜の幽霊とガチンコでバトルしてみたり。時には始めて見るカラオケの機械に触っていて、操作に戸惑っている内に何時の間にかセイレーンに沈められてみたり。突如美神除霊事務所に出現したゴキブリを美神と一緒に大騒ぎしながら追い出したり。ちなみにこの時一番被害をこうむったのは人工幽霊一号だったりする。

と、上げたのはまさに一部。妙神山では管理人が不在の時が問題になったりはしないか、という鬼門達の不安が在った物の、上司がいまだ宝物庫から出てこない為、ばれなかったのでよしとしよう。

「ま、こんなもんかしらねー」

「……………」

「だ、大丈夫ですか、小竜姫さん？」

そう美神が労働の終了を告げたとき、小竜姫は心から喜びの涙を流していた。

「さ、て。大分荒稼ぎさせてもらったけど……………」

「ホントーに荒稼ぎしましたね」

小竜姫が、開放感に溢れたすっごい笑顔で事務所を後にしてしばらく。美神はほくほく顔で帳簿をつけていた。

「ま、元を取るどころかかなり楽に稼がせてもらったけど♪」

「…………罰が当たっちゃいますよ？」

「あの人ならそれさえ避けて通りそうだけど」

「おーっほっほっほ！商売繁盛——！」

事務所には美神の高笑いが響き渡るのであった。

「と、言う訳なんですよ」

「ふくん、開発を妨害する妖怪、ねえ」

一週間後、美神達の姿は、のどかな山中にあった。辺りは見渡す限り山、山、山。その隙間に存在する、小さな村。そして空には白い雲と青い空。まさにピクニック日和とはこの事であろうと言わんばかりの情景が広がっている。

「良い所だと思うけど・・・」

「わし等にしたたら、そんな事いつてられる状況ではないですじゃ」

美神の前には、いかにも着慣れないスーツを引っ張り出してきた、と言う感じの村の長がいる。その表情は切羽詰った物であり、焦りと疲労の色が濃く出ていた。

「まんず、村の活性化のためつす。過疎の村は自然がどうか言ってる場合じゃないつす」

要するに、過疎で悩む村が、村起こしの為に近くの山を切り開き、ゴルフ場を建設し様としていた所に、山に住んでいたと思われる妖怪が邪魔をしてきた、と言う事である。「分かったわ。この依頼引き受けましょう」

「あ、ありがとうございます！」

「横島君！見鬼君と破魔札一揃い、それからボウガンを出して頂戴。この辺りを調べてみるわ！」

「横島さんなら居ませんよ？」

「へ？」

村長に依頼を引き受ける事を伝え、辺りを見回しながら横島に声を掛ける美神。だが、忠夫からの返答は無く、帰ってきたのはおキヌの忠夫の不在を告げる言葉のみ。

「ど、どこにいったのよあの馬鹿はっ?！」

慌てておキヌに詰め寄る美神。

「え、えっと、なんだか住んでた所に似てるからちよつと遊んでくるとかかって」

「あの馬鹿はああああっ!!」

どうやら、野性の本能がちよつと顔を出しちやつたようである。

「ぶはあっ！うーん！美味いっ！」

その頃忠夫は、森の中に流れる綺麗な川で喉の渇きを潤していた。横にはおそらく本日の獲物であろう、20cm程の大きめの魚が5匹、河原に打ち上げられびたんびたと跳ねていた。

「いやー。やっぱこっちの方が性に合うなー」

ぐつと背を伸ばし、辺りの風景を眺める。川はさらさらと涼しげに流れ、その透き通った水の中に背中で太陽の光を銀色に跳ね返しながら泳ぐ魚達。辺りからは鳥達の声が響き渡る。

「美神さんには悪いけど、迷ったとか言つて1日くらい過ごしていくかー」

そう呟くと、おもむろに火を起こしかかる。霊媒道具の入ったバッグはもちろん美神の所において来てあるので、持っているのはライターだけだ。それでも器用に小枝を集めて火をおこし、簡単な焚き火を完成させると、余った小枝で魚を刺して火で炙る。「焼けてきた焼けてきた」

魚の皮に段々と焦げ目ができ始める頃、辺りには香ばしい匂いが広がっていった。

「よし、これはもう良いな」

魚の中でも一番小さな物が食べごろになったようなので、そのまま齧り付くことにする。

「いっただけ——」「くく……」——「まーす、と見せかけてっ！」

その手に持った、焼立てほやほやの小魚の刺さった枝を、妙な気配のする方向にぽいつと投げてやる。それはゆっくりと放物線を描きながら飛んで行き——

「——にやつ！」

木陰から飛び出してきた、小さな人影にさらわれた。

「あ、おいしい」

「だろ？」

「うん」

「で、お前誰だ？」

夢中でその魚に噛り付いていたその影を良く見てみれば、年の頃12、3歳の少年であつた。人里はなれた山奥に、こんな子供が一人で居る事はおかしいが、とりあえず敵意はなさそうなので軽く声を掛けてみる。

案の定、その少年は啞えていた魚の方に意識が行つていたのか、あつさりと返事を返してくる。が、誰何の言葉でぎくつと固まると、慌てたように辺りを見回し、背後に立つ忠夫を発見する。

「にやつ！」

「待った。腹減つてるんだろ？もう2・3匹食べてけよ」

逃げ出そうとしたその少年の襟首を掴んで焚き火の所まで引きずっていく。

「ふ————！」

焚き火の横のちょうどいい大きさの石に腰掛け、手を放してやると、その少年は警戒

しながらも、

「・・・」

「だから、ほしけりや食べろって」

視線がお魚と忠夫を行ったり来たり。思わず苦笑いをしながら薦めてやると、それでも警戒しながら食べ始める。

「美味いか？魚の焼き方にも結構自信はあるんだけど」

「・・・おいしい」

「だろ？」

そのままがつがつと食べて行き――

「・・・ご馳走様でした」

「ほい、お粗末さま」

とうとう、完食してしまった。それに気付いてすまなそうな視線を向けてくる少年。忠夫は、そんな彼の頭を笑いながらぐりぐりと撫でるのだった。

「んで、坊主。名前は？」

「ケイってゆーんだ」

「そーか。んじゃケイ、お前、一人でこんな所に来てるんか？」

その言葉に、ぶんぶんと頭を振るケイ。どうやら大分慣れて来た様である。

「母ちゃんがいるんだ。最近忙しそうだから、ご飯の準備をしようと思って・・・」

「此処で魚を獲ろうとしてたら、俺が来たんで隠れて様子を見てた、と。んで食欲に負けて、あつさり出てきちゃった訳か」

「だって・・・いい匂いがしたから」

その場面を思い出したのか、恥ずかしそうにそう答える。

「そーだろ。これでもサバイバルには自信があるんだぜ?」

「でも、うちの母ちゃんの料理も美味しいんだよ!」

対抗心でも湧いたか、そう母を自慢するケイを見て、忠夫は何となく自分の小さな頃はこんななんだったのかなあ・・・と思ってしまうのであった。

「——ケイツ!」

「あ、母ちゃん!」

そんなほのぼのとした空気を打ち破り、突如横手の森から現れたのは——

「——嫁に・・・ああっ!子持ちかあ」

忠夫が心底残念そうに呟くほど、しっとりとした色気を纏った妙齡の女性であった。

「やあ」

君は、鳥を逃がした鳥籠を、どう思う？

鳥籠は、鳥をその内に留めておく事がお仕事だ。鳥を育てる事じゃない。まして、鳥を生み出す事じゃない。

その鳥籠から、中の小鳥を逃がしてあげよう、と思った子供が居たとする。

子供に罪はあると思うかい？

逃げた小鳥が悪いのか。逃がした子供が悪いのか。それとも、その扉を開いてしまった鳥籠が悪いのか。

—— 全く。因果だねえ。

—— それでは、良い夢を。

第三十二話。

ぱちぱち、と囲炉裏の火が踊る。その上には鍋と、その中で煮られる山菜と川魚。匂いからして味付けは味噌のようだ。おそらく味噌はどこかで買った物だろうが、それでもその中身は忠夫の食欲をそそるに充分な、山の幸盛り沢山の、質素かつ贅沢な鍋であつた。

「どうぞ。こんな物しかお出しできませんが……」

「いやいや、こりやいい感じっすよ！美味そうだな〜！」

その小屋は、山の奥深く、最早人工物の影さえ見えないような場所にぼつん、と存在していた。辺りはすっかり夜の帳に包まれ、星の光ともうすぐ満月になりそうな、真円には少し欠けた月が山の上に昇っている。

「母ちゃんの料理、美味しいだろー！」

「こりやうまい！こりやうまい！」

「……聞くまでも無いみたいね」

自信満々の少年——ケイ——の言葉も耳に入らないようで、忠夫はひたすら目の前の碗に盛られた料理を食べている。その様子を見て、くすくすと笑いながらも嬉しそうな表情

を見せているのは少年の母、美衣であった。笑う姿にさえ艶のある、大人の女、そのものの女性である。この小屋に暮らしているのは少年とその母のみであり、久方ぶりの客人は、とても賑やかな夕食を感じさせてくれるのであった。

「うあー、食った食った！ご馳走様！」

「ふふ．．．そんなに美味しそうに食べていただけると、こちらも嬉しくなります」

満腹、と言った感じにお腹を撫でながら、板張りの床に寝転がる忠夫。ご満悦である。

「いやー、ほんとに嫁に欲しいくらいですよ！」

「あらあら、お世辞でもありがとうございます」

実際、忠夫は彼女に夫が居ない、と聞き、かなりの葛藤の末例によって例の如く求婚ぶちかましたわけだが、今回のようにするり、とかわされてしまっている。まだまだ人生経験の差が大きすぎて、相手にしてもらえないと言うよりそもそも本気にしてもらえていない、と言った感が強い。

「ふふくん！どうだ！うちの母ちゃん、凄いだろ？」

「いや、実際同じ材料でも此処まで美味しいのが作れるとは思わなかった」

サバイバルには自信があっても、やはり本格的なものになると一歩及ばない事を思い知らされ、ケイに向かって両手を上げてみせる。降参、と言う事だ。

「こんなもので先ほどの失礼のお詫びになるとも思えませんでした．．．」

「じゅーぶん。充分ですつて。むしろ、こつちがお釣りを払わなきゃ」

先程までの笑顔を消し、すまなそうに忠夫にそう謝る美衣。川縁での出会いの際、思わず警戒してしまった事が心に刺となって残っているのだろう。そんな美衣に対し、ぱたぱたと手を振りながら軽くそう返す。

「まあ……くすくす」

「わははははは！」

「え？……あは、あはははははっ！」

小屋は、二人の男女と、その雰囲気になんとなく笑い出してしまった少年の笑い声に包まれるのであった。

「いやー、しっかし、此処までしてもらっちゃって、ほんとに何を返せば良いのやら」

「いいえ、こちらでも随分と久しぶりに楽しませていただきましたから……ところで、こんな辺鄙な所に一体何の御用で？」

会話の流れに乗せて、ふと思いついたように美衣が尋ねる。表情はあくまでも笑顔。お腹を空かせていた息子に、自分の分まで食べ物を与えてくれた恩人に対して、心から感謝している、と言った風の。

「あ、仕事です」

「へー、兄ちゃん、一体何のお仕事してるの？」

忠夫は忠夫で軽く返す。お腹一杯美味しい物を食べて、もう満足幸運の神に感謝します、といった緩んだ表情で。そして、ケイの問いに対しても、全く警戒心を抱いていない様子であっさりと答えてみる。

「GS・・・ま、助手つすけどねー」

「・・・え？」

「GSですか・・・それじゃあ、この辺りに何か恐ろしい化物でも出るのかしら?」

そののほほん、とした答えに、美衣はその顔に怯えを浮かべながら問い返す。無力な母一人子一人が、どうやって身を護れば良いのか、と悩む表情も含めながら。ケイは、突然口を噤んで、何も喋らず俯いている。

「ええ。氣立てのいい美人で、子供思いの、料理の美味しい、——多分猫系の妖怪かな?」
忠夫は、表情を変えていない。先程のまま。のほほん、としたままで、美衣に向かってそう告げる。

途端に——

「そう、ですか・・・」

——美衣の気配が変わる。

「いつから、氣付いてらっしゃったのですか?」

「んー。ケイを見たときから」

全身を獣毛が覆い始め、瞳が縦に裂け、髪の毛の間から猫の耳が生える。

「ま、悪い妖怪ってわけでも無さそうだったし。母親が忙しいって聞いたから、こりや多分そつちが当たりだな、と思つてさー」

伸びきつた爪は、硬く、鋭く。引き裂く為の爪となり、齒も鋭く尖り、噛み砕く顎となる。

「・・・それで、私たちをどうするつもりで此処までいらつしやつたのかしら?」

返答次第では、無事に帰さないと言わんばかりの殺気に満ちたその問い。いや、殺気と言うよりも、覚悟した——例え、ついさつきまで笑いあつた仲だとしても、護る物の為ならば——者のみが持つ、確固たる意思。おそらく、退治する、と忠夫が一言言つた瞬間に、彼女の爪は彼を引き裂く為の行動を始めるだろう。そう、確信させるだけの気配があつた。

「様子見かな?」

「・・・結論は?」

蹴り足に力が籠る。引き絞られた弓は、その狙いを忠夫から外さない。

「ん」。飯が美味すぎた」

「はあ?」

だが、緊張はあつさりと砕け散る。意図していたものと、全く違う答えが返つてきた

事と、そのたまう忠夫の表情が余りにも真剣だったからだ。逆にふざけているんじゃないか、と思つてしまふくらいには。

「いやー、実際あそこまで美味しいもの食べちゃうとなー。本当にお釣りを返さなきゃならんなー、と思つてしまつて」

真剣な表情のまま、頭をガリガリと搔く忠夫。悩んでいるようでありながら、その視線には、悪戯っぽい光がある。

「な、何が言いたいんですかっ!」

完全にペースを持つていかれている事を自覚しながらも、必死の形相で爪を構える。自分ではない、隣で動揺している息子を護る為に。

「見逃すだけじゃ、もう会えないし、それじゃあ一寸勿体無い。うちの里に来ませんか、つてね?」

忠夫は忠夫でとうとう真剣な表情を崩し、半分笑い、半分してやつたりといった顔でお誘いの言葉をかけたのだった。

「・・・とりあえず、その格好止めませんか? さつきみたいに美人のままの方が個人的にも嬉しいなー」

「・・・・・・・・・・ふう。どこまで本気なんですか?」

「全部。よ、つと」

美衣は変化を解かないながらも、とりあえず話を聞くつもりはあるようだ。なので、忠夫も最後の種明かしをする事にする。

す、と持ち上がった忠夫の腕は、彼の頭の後ろに回り、その額に巻かれたバンダナの結び目を解いた。

「——人狼?!」

「兄ちゃん、そんな・・・」

「違う、とも言い切れないけど。ま、半分そうですねー」

バンダナに押さえつけられていた忠夫の耳は、ぴよこん、と跳ね上がる。それは狼の耳、人狼の形態的特長の一つ。

「尻尾はちよつと、ズボンを下ろさないといけないから勘弁して?」

「この期に及んでそんな事をつ!GSと言うのは、同じ人外が、人外を狩る為の方便とでも?!」

「しっつれいだなー。美人と子供にや優しいつすよ?あと美味しい飯を食わせてくれる人なら大歓迎」

再び構え、忠夫に向かって爪を尖らせる。しかし、その鋭い爪を見ても、忠夫の態度は変わらない。あくまでも呑気なままである。

「そう警戒すんなって、ケイ。とって喰ったりしないってーの」

「ほ、本当？」

「おう！忠夫、嘘言わない！」

怯えるケイに向かつて、そう笑いながら言つてやる。嘘は言わない。ハツタリやフェイントは彼の中では嘘ではないし。

「GSと言つて、次は人狼……これで、どうやつて貴方を信頼しろと？」

「あー、やつぱさうなるよな。つてことは、お次は……」

「最早、交わす言葉はありません。さようなら、ですね」

「獣の間には、言葉よりも力がものを言う時もある、つてか。暴力反対なんやけどなー」
美衣の目には、会話をもつて説得する余地が見えなくなった。互いに獣人。人の範疇では結果が出なかつた。

ならば、後は獣の時間だ。

それなら、精々獣らしく――

「せやあああつ！」

「勝つて言う事聞かせるか」

――爪と牙とで我を通す。

結論から言えば、忠夫の勝ち、の筈「であつた」。

身体能力は猫と狼とではそもそもスペックに違いがある。どちらが上と言う訳でもないが、正面からの1対1ならば、狼の勝ちはそう簡単には播るがない。そして、忠夫には幼い頃からの技術がある。いかに本人にやる気が無かろうと、周囲の環境が彼を育てる。見て、動いて、喰らつて、やり返して。そんな生活を10年近く続けていたのだ。頭が理解していなくても、体が覚えてしまっている。

だが――

「だーもうっ！やりずれええええっ！」

「まだまだあつ！」

此処は夜の森。本来平原を駆け回り、直線での最高速度とスタミナにその本領を發揮する人狼と、暗闇と生い茂った木々の間から、一瞬の瞬発力で獲物を狩る猫。ここはあちらのホームグラウンドである。

その上、あちらは殺す気で襲ってくるが、こっちはそんな訳には行かない。あくまで

も、目的が「説得の為の勝ち」なのだからして、全力で吹っ飛ばすと言うのは論外だ。と、言う訳で――

「せめて罨を張る時間をくれえええつ?!」

「させるわけが無いでしょうがああつ!!」

――とりあえず、逃げ回っている。

地面を走れば、

「うわひゃつ?!」

「ちっ!」

左右の繁みから爪の閃きが襲い掛かる。

一寸大きな木の陰で一息つこうとした瞬間に

「ふうっ!」

「上っ?!何時の間につ?!」

頭上から全く音も気配もせず、体重を乗せた一撃で打ち掛かってくる。

全力で走って引き離そうにも、此処は森。速度が乗った瞬間に次の木が、張り出した枝が、生い茂った草叢が、忠夫の速度を殺しにかかる。

これが、相手にとつても同じ条件ならば良いのだが、何せこつちは直線的に動く方が得意なのに対し、あちらはこういつた障害物の多い所を、最も得意とする猫なのだ。単純な膂力と最高速度で劣ろうと、柔軟な肢体と瞬発力から生み出される変幻自在な行動と、こと気配を殺す事に掛けては、おそらく人狼以上。

「考えろ考えろ考えろっ！このままじゃジリ貧だぞ犬飼忠夫っ！」

視界を塞ぐ小枝を手刀で切り落とし、絡みつく草叢を跳ね飛ばし、行く手を阻む筈の木を幹を掴んで、強引に進行方向を変えて進んでいく。

「なんか投げる物……いやいや、当たったら洒落にならん！紐——手元にないわああっ！罨……作る時間が」

投擲物であの素早い動きを止めようと思えば、かなりの勢いで投げなきや駄目。そうなる当当った時に大怪我する可能性が高い。獣人の動きを止められるほど、丈夫な紐なんて簡単に準備できる物でもない。罨は準備する時間が——

「ま、策はアリだよな？」

その音が聞こえたのは、先程から逃げつづけている人狼のいた方角からだった。

「何を——跳ねた?!」

音が聞こえた地点を視界に入れた瞬間、何があつたのかを理解する。それまで聞こえていた僅かな足音と、無残に切り落とされた枝葉、蹴散らかされた下草の跡が途切れ、ぱ

らばらと小枝と枯葉が降ってくる。見上げれば、其処にあるのは小さな黒い影。更に目を凝らすと——空を大きく跳んで移動しながら、何かを探しているようにも見える。

「間に合うか……着地の瞬間を狙って！」

そう呟き駆け出す美衣。木の枝をすり抜け、下草を全く意に介さずに浮かぶようにその上を駆け抜け、無音の高速移動で予想地点まで走り抜ける。

あと少しで辿り着く、という所で再び音がする。今度は更に大きな音だ。木々の隙間にかいま見えたその影は、先程とは別の方向に再び大きく音を立てて跳ねていったようだ。

「あつちは——川原に抜けるつもり？」

確かに、不慣れなこの辺りでも、あれだけ上空から見渡せば、月の光を反射する一本の線は、暗い森の中でさぞ目立つ事だろう。足場は少々悪いが、森の中にいるよりまだましであるし、それより何より、あの川は、麓の村まで続いているのだ。

そのまま川縁を駆け下りでもされれば、あちらは確実に援軍を呼んでくるはずだ。おそらく、あれほどの人狼を助手として扱えるだけの、超一流のGSが。

「やらせないっ！」

美衣は、再び飛ぶように駆ける。相手は上空だが、先程よりも高く飛んでいる。距離を稼ごうとでもしたのでだろうか？ならば、先程よりは余裕がある。何としても追いつ

く。そして。

「仕留める。必ず…せめて、苦しまないように」

猫の眼には、辛く哀しい色ばかり。

「さて、と」

耳の傍で、風が轟々と唸っている。ただいま放物線の頂点を過ぎて落下中なのだから当たり前だが。

「なーんか、よく落ちるなあ、最近」

シロタマのダブルアタックに始まり、事務所の窓から路上へ、洞穴の穴に。

「ま、それは置いといて、と。問題は何処から来るか、なんだよなあ」

空中で器用に胡座をかく忠夫。3半規管の機能の高さも、生まれ持ったバランス感覚もなんだか無駄な使われ方だ。

「獲物を狩るなら、油断してる時か、こつちに気付いてない時。若しくは完全に不意を撃つ、か」

着地の瞬間？

「無防備、つてわけじゃないし、一番警戒してると思うだろうなあ」

跳躍の瞬間？

「・・・跳ねる方向を変えるの、結構簡単だしなあ」

それならば——

考えながらも地面に着弾し、足元にクレーターを作りながら関節と筋肉で衝撃を吸収し、下半身に回した靈力を再度練り上げ思いっきり踏み込む。周辺の土を撒き散らし、石を砕いて再度空中に身を投げる。

——当たりはつけた。急所に直撃しない限り一撃ではやられない。此処からならあと一回で川に届く。

——つまり、やるなら此処で。急所を狙って、若しくは充分な威力の一撃で仕留めるのが最上の選択。

再び着地。しかし、来ない。跳躍の瞬間、来ない。残るは——

「森から頭が出る直前！」

瞬間、夜の森にまるで太陽でも落ちたかのような閃光と、風船の割れる音を数百倍に大きくしたような破裂音が広がった。

「ふにやつ!!」

忠夫の頭が、後もう少しで木々の高さを越える直前、その木の上で力をためていた美衣が、こちらの跳躍に合わせて、しかも背中の方から飛び掛ってくる。カウンターなら威力も充分であるし、しかも跳躍直後は体勢の立直しも難しい。危険な森から抜け出る瞬間は、こちらの気も緩もうというものだ。予想していなければ。

読み通り、背後からの美衣に対し、跳躍の瞬間に加えた捻りでもって体を振り向かせ、忠夫は笑顔を向けてやる。そのまま、虚を突かれた美衣の前で、充分に靈力を高めた両手で拍手を打つ。拍手は、その間の靈力を暴発させ、破裂音と閃光を発した。

「ふんっ！」

「何をっ！」

眼を閉じた美衣の腕を掴み、体の動きと体重移動、腕の力だけで、美衣を真上に投げ飛ばす。反動で落下した忠夫は、そのまま美衣に向かって再跳躍。

「猫の本能その一つ！落ちる猫は——」

「へ、このっ！」

空中でじたばたともがきながら、体を捻る美衣。忠夫は真下から迫ってくるが、
「腹を地面に向けるってか！」

自然とその体は、両手足を下にした、獣にとつて最も弱い部分を相手にさらけ出す格好となる。その体勢から必死で反撃の爪を繰り出すも、見え見えのそれを忠夫は左手で軽く弾き——

「か、はあ」

——右の掌底が、美衣の鳩尾を抉る。強制的に肺の空気を全て吐き出させられ、美衣の意識はゆつくりと闇に落ちていくのだった。

「か、母ちゃん！」

「あー、すまん」

小屋に戻った、あちらこちらの裂けた服を着た忠夫の前に、今にも泣き出しそうなケイの顔。忠夫の背中には、気絶している為か未だに化生のままの美衣が背負われている。一見外傷は無いのだが、

「よ、よくも母ちゃんをつ！」

「謝つてもすまんよなあ・・・」

母がどんな気持ちで出て行ったか予想もつかないが、それでも自分は護られていたことくらいは分かっている。そして、護り手の母は、いま、おそらく負けて勝者の背中にいる。ケイは其処までを確認すると、ゆっくりと母を下して自分の前に立った、うつむいて顔の見えない忠夫に向かって飛び掛った。

「あああああっ!!!」

「だから、つてわけでもないが」

その幼い爪は、それでも無防備なままだった忠夫の腹に突き刺さる。

「・・・え？」

「一発、貫つとく」

痛くない訳は無いだろう。例え服の其処此処に血が付いていようと、あくまでもかすり傷なそれと、幼いとは言つても、獣人の爪が突き刺さった其処では、傷の深さも痛みの度合いも桁が違う。それでも、その表情は変わらない。戻ってきた時同様に、すまなさそうな感情を浮かべるのみだ。

「わりのい。おまえの母ちゃん、殴つちまった」

「え?..え?」

「男の子だもんな、それでいい。お前は間違つてない。∴効いた。しっかり母ちゃん護つてやれよ?」

未だにその手についた血を理解できずに困惑するケイの前で、その頭を軽く撫で。

「まだまだ俺も、弱いよなあ・・・」

最後にそう呟いて、忠夫はゆっくりと前のめりに崩れ落ちたのだった。

—— 一夜明けて。

「……あれ？」

忠夫は、小屋の中で、布団に包まれて目を覚ました。布団の中に手を入れたまま、ごそごそと痛む体中を探ってみると、ごわごわとした細い布が、幾重にも巻かれているのが分かる。

「包帯？誰が「私です」どわっ?!」

あれ？という表情を浮かべたままとりあえず布団を除けて体を起こした忠夫に、背後から——先程まで、枕元だった所から声をかけてきたのは、美衣。その隣には、落ち込んだ表情のケイがいる。

「あ、美衣さん。いやー、強いつすねえ、やつぱり」

「あら、それに勝った人が言うのは嫌味ですわ」

痛む体を反転させ、向かい合う。忠夫と美衣。二人の間にはほのぼのとした空氣が流れている。方や殺そうとし、方やそれを殴って氣絶させたとは信じられない雰囲気である。

「で、どうですか？」

「ええ。私の負けです。私を、気絶だけで済ませますか、普通」

「やー、美人を殴るのは気が引けたんですけどねえ」

「貴方は、とても必死でした。本気でした。——本気で、私を傷つけないで勝ちました。」

そんな、真つ直ぐでお人好しの馬鹿。敗者として、一度くらいは信じてみます」

そう、笑顔で告げる美衣。昨日の一撃が響いた様子も無く、包帯で巻きに巻かれた忠夫と見比べてみてもどちらが勝つたのやら負けしたのやら。それでも、当事者達の間には、それなりに通じ合った物があるようだ。

「さうて、あとは其処でベソかいてるガキンチョだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どーした? ケイ」

忠夫は、いまだ何の反応も返さないケイに向かって、軽く尋ねながらその顔を覗き込む。案の定その顔は涙と鼻水でぐっちよぐちよだ。

「なんだ、そんなに母ちゃんが負けたのが悔しいのか?」

「違うよっ! なんて、なんで兄ちゃんは怒ってくれないのさ?!」

その一言に、顔を跳ね上げ忠夫を睨む。眼は真つ赤だし、表情も未だに泣きそうだったが、それでも怒っているのか泣いているのか分からないが、声に籠められた物だけは重かった。

「僕が、僕が一番酷い傷つけたのに、どうして「ガキが」——っ?!」

ケイの言葉を聞いて、目を閉じてそのままその感情を受け止めていた忠夫が、ケイの言葉に割り込ませたのは、何時か彼が聞いた言葉。

「お前の爪は、痛かった。それは、誰の為に振った爪だ？」

「それは……」

「護りたかったからだろ？なら、後悔するな。躊躇うな。怯えるな」

真剣な忠夫の声。恫喝するような、脅すような。それでいて、背中をどやしつけるような。

「そんなの、無理だよ」

「無理じゃない」

再び俯くケイの頭の上に、ぼん、と置かれる忠夫の手。その感触は、とても暖かくて、優しくて。

「無理じゃないよ。きつと、な」

だから、ケイは、また泣いた。

「それじゃ、行きますよー！」

「うんっ！ねー、人狼の里ってどんな所なの？」

しばらく後。小屋の前には、繕った後のあるいつもの格好をした忠夫を挟むようにして、美衣とケイの姿があつた。背中には、それぞれ必要な物を纏めた袋を背負っている。家具は流石に小屋の中に置いたまま。着替えと生活用品だけで良い、という忠夫の言葉の通りに、最低限の荷物だけで準備した、なんとも寂しい引越した。

それでも、吹っ切れたように笑顔のケイと、それを微笑ましそうに眺める美衣の眼には暗い感情は無い。美衣には、少し不安があるようだが。

「んー、此処と似たような感じかな？後、お前と同じくらいの年の子はいないけど、赤ん坊が2人と、3歳と4歳が一人ずつ。お前がお兄ちゃんだぞ？」

「ほんとに?!」

「くすくすくす」

それでも、元氣一杯の子供の笑顔はやはり周囲に明るさをもたらすようだ。

「此処からなら、丸2日もあれば着くかな？」

「大丈夫でしょうか？本当に私達を受け入れてくれるでしょうか？」

「ま、だいじょーぶでしよ？俺も一回帰ろうとは思ってたし。2日後ならちようど満月だから、皆で宴会でもやってんじやないかなー」

声は段々と遠ざかる。母子が暮らしていた小屋には、もう住人が戻る事は無いだろう。もし、小屋が喋れたのならば、寂しがっただろうか、それとも、おめでとう、といっただろうか。

その中に残ったのは、幾つかの筆筒や机、鍋と料理道具。それから、発信機の仕込まれたバンダナと、「有給一週間くださいな♪」と書かれたふざけた置手紙。美神が見たら怒髪天となること間違いなしであろう。

それらを鑑みて、小屋が喋れたら、多分、こう言っただろう。

「俺、オワタ」

めでたしめでたし。

第三十三話。

「ところで、御客人。何故こんな辺鄙な里に？」

長老と竜神王、二人は長老お手製の竹でできた杯を手に、差し向かいで飲んでいた。長老の質問に対し、いささかこめかみを引き攣らせながら答えを返す竜神王。

「いやいや、犬塚殿とゆつくりと語り合いたかったのと、実は：我が娘を助けていただいた青年が、彼と知り合いだというのは是非お会いしてみたい、と思ひまして」
「・・・ほう」

竜神王の言葉に、長老は感心したような、驚いたような声を上げる。人狼の里ではつい先日の大騒ぎ以来、此処しばらくは里を出て外に行つた者はいない。

と、言う事は、自然とその人物は絞られてくる。

「もしや、その青年とは・・・」

「ええ、犬飼殿のご子息だそうで」

そう言つて、ぐいぐいと手酌で酒樽を開けている犬飼に視線をやる。連れられて長老の視線も注がれる。

「……ふはっ！うまいっ！」

注目の人物の尻尾は、ばたばたと小気味良く動いている。一目でかなりご機嫌だとわかるのが便利である。

「……忠夫ですか」

「……まあ、犬塚殿の話によると、かなりの——いえ、失礼。ええと、控えめに言っても——ゴホンッ！いや、その、悪く言えば——あー、えー。うーん……」

どんな話を聞いたやら。

「ん？忠夫がどうしたでござるか？」

未だに唸りつつける竜神王と、どうやってフオローしてやろうかと考え中の長老の間に、忠夫の名前を聞きつけてその父がやってきた。最早杯など要らぬとばかりに、酒樽右手に柄杓を左手。そんな状態でも息子の名前を聞きつける辺りが親馬鹿の根拠となっているが、本人は否定する事、間違いなし。

「……」

無言で頭を抱える長老。その心中、推して知るべし、である。

「いや、実は犬飼殿のご子息なんだが……我が娘が世話になったのでな」

「……あの馬鹿息子が？」

「それがな——」

竜神王が語つたのは、いわゆるメドーサとの初対面となつた犬飼忠夫子供化事件、のあらましである。

とは言つても、あくまでも天竜姫の視点からの又聞きと、小竜姫からの報告書伝手なので、本当に詳しい事は余り分らないが。例えば忠夫の影法師とか、「牙」とか。

それでも、一応の流れ自体は正しい。何せ報告書の製作者があの小竜姫であるからして、微に入り細に入り、分かつた限りの事を書いてある。ま、それも後から聞いた話の部分も多いのだが。

「ぶははははっ！子供でござるかっ?!」

「おお、何でも悪魔の仕業らしいがな」

「で、それからどうなつたんですかな？」

とりあえず、聴衆の2人には大変御満足頂けた様で。

「ふー。いや、笑った笑った」

「お前の息子じゃろが・・・」

そして話は終わりを告げ、笑いすぎて荒くなつた息を正す犬飼父と、その横で苦笑いしながらもそれを叱る長老。さてさて竜神王は、と言うと。

「天竜・・・お父さんは、お父さんは何処の誰とも知らない奴なんか、許しませんっ！」
話をしていて、竜神王にその時の事を伝える天竜姫の顔でも思い出したか、なかなか黒いオーラを背負っていたりしていた。

どうやら、恩は恩でも、仇で返す可能性が高そうだ。

「それはそうと、長老殿。実際の所、忠夫とやらはどういった人物なのでしょう？いえ、犬塚殿の話だけでは・・・その、偏っているような気がしてなりませんので」
「ええ。偏りに偏っている事間違いないでしょうな」

何せあの愉快犯、というか、面白い事が大好きと言うか。掻き回すだけ掻き回してから楽しむつもりで、碌でも無い事を吹き込んだに決まっている。

そう思った長老であつたが、実際は違う。娘を取られそうな男親の、悲しい性とでも

言つた所が大きいだけだ。それはそれで駄目な大人の見本だが。

實際の所「娘が」「獲りに」かかつてるのであるが。

「ま、まあ、中々賢くはありますな」

「ほう。頭の方は悪くない、と」

とりあえず、孫同然の忠夫の弁護に走る長老。このフォローは気に入つたようで、竜神王の反応が中々よろしい。

「長老。あれは小賢しいとか狡猾いとか狡猾とかセコイとか汚いとか、そういう分類に入るのではござらんか？」

その努力を一瞬で無に帰す犬飼父。尻尾がぱたぱたとしている所を見ると、本人は大変嬉しいのであろう。そして照れくさい故にそういう言葉が出てきたのであろう。

しかし、だ。

時と場所と場合を考えろ、と長老は痛む頭を抱えながら心の中でそう叫んだ。

「何と・・・それでは」

「いやいや！戦いに於いてはそれは必要な事ですぞ?!」

「と、言つても。いつも拙者と犬塚にボロボロにされておつたがな」

「・・・弱いのではないですか？」

「いやいやいや！実はこの二人、この里でも2、3を争う腕の持ち主で?!」

「いやー、修行をサボってばかりのあいつには、苦労させられたでござる」

「駄目ではないですか」

「いやいやいや!!そもそも2人に修行をつけてもらって死ななかつたという事が

?!

「逃げ足だけはゴキブリ並でござるからなー」

「こゝこの馬鹿たれは・・・」

「長老殿?どうかされましたか?」

とうとう竜神王は、その話の展開に疑問を抱き始めたようである。

当然だが。

かたや必死に弁護する長老、かたや軽々とそれを打ち砕く実の父。段々長老の目が怪

しくなっていく――

「あつ!!!」

「何か?」

「むっつ?!」

それは、一瞬の出来事であつた。突如として長老があらぬ方を大声とともに指差し、竜神王とポチはそちらを思わず見やる。

その瞬間半獣化した長老が、いや——チヨウロウが無音で降臨し、犬飼父の口に玉葱を突つ込み、見事な後ろ回し蹴りというか、ローリングソバットをその玉葱を突つ込んだ所目掛けて叩き込む。かなり本気の殺意とともに。

思いつきり吹つ飛んだポチは、

「……い、いきなり何をするか犬飼っ?! って、泡吹いて玉葱啜えてる?!」

「い、犬飼殿おおっ?!」

「うわー。良く生きてるわね」

犬塚とシロタマのところへ突つ込んだ。此処まで狙つてやったのであれば、流石はチヨウロウ、といった所か。かなり間違つた力の使い方であるが。

「おや、犬飼殿は何処に?」

「ええ、犬塚と飲みたいと言つてあちらですじゃ」

それに全く気付かないあたり、竜神王もかなり酔つてるのかも知れない。その質問に

答えた長老は——やはり一瞬で人型に戻っている——かなりイイ笑顔だった、とだけ述べようか。

「ふー。ついたつすよー!」

「此処が……」

「人狼の里、なの?」

宴会場で起こっている、そんな乱痴気騒ぎの話題の中心人物は、ようやく里を護る結界の外に辿り着いていた。

猫又親子を引き連れて、先頭を歩いていた忠夫が振り返って到着を告げると、いよいよ持つて緊張が限界まで来たらしく、美衣は尻尾と猫耳がはみ出していた。

ケイはその母の尻尾にしがみ付いている。

「ええと・・・通行手形は、と「そのの者達！——へ？」

「ごそこそ、と懐をあさつて人狼の里への結界の穴を作り出す、通行手形を引き出そうとした忠夫に、いや、忠夫達に向かつて掛けられる声。

不意を付かれた為もあつてか、慌ててそちらを振り向く。

其処に立っていたのは——

「ぬ、その耳・・・人狼の一族か？」

完全武装。ごつつい鎧、それよりごつつい肉体、腰に下げたかなり格の高い、おそらく神劍。どつからどう見ても、怪しさ爆発の、角の生えた竜神族の近衛兵士であつた。まさかそんなものが自分の里の周りをうろちよろしているとは思ひもよらなかつた忠夫は、しばらく絶句して硬直する。

美衣とケイはその忠夫の背中に隠れて、美衣の耳とケイの顔左半分だけがのぞいてい
る。

「えー、あの、俺は犬飼忠夫って言って、この里の者ですけど・・・」

なんとかかそう言葉を搾り出す。しかし、その反応は、忠夫にとつても予想外。

「なっ?!」

かなり驚いた様子で、その名前を聞いた兵士は懐から一枚の紙を取り出す。そして、

その紙と忠夫の顔を見比べるように何度か視線を往復させた後、慌てた様子で首に下げている笛を取り出し――

ピツピツピッー！！！！

高らかにそれを吹き鳴らした。

「犬飼忠夫殿、ご本人ですかね?!」

「え、ええ。そうですけど」

「少々お待ちを！・ただいま上の者が――將軍っ！」

その兵士は、吹いた笛と懐から取り出した紙を放り出すと、忠夫に向かって急いた様子で声をかけ、待つように言った。が、彼がそう言うってから待つことも無く、空から更にいかついにーちゃんたちが舞い降りてくる。

忠夫に声をかけた兵士の笛の音は、どうやら集合の合図だったようである。

「どうした?!緊急の合図」將軍っ！犬飼忠夫殿、発見しましたあああつ!!」何いいいつ!!」その集団の先頭にいた、更に豪華でやたらときらきらした鎧の將軍と呼ばれた竜神族は、その兵士の言葉を聞いて、加速しながら着地する。そして、その勢いのままに忠夫の眼前に立つと、またもや懐から紙を取り出し忠夫と比較。

うんうん、と何度か頷いた後。

「総員っ！けいれーい！ーい！」

突然、將軍の号令で、全員が忠夫に向かつて、右手を額に添え、左手を真つ直ぐ伸ばして足の横につけ、当然背筋は真つ直ぐ、という敬礼の見本のような敬礼を忠夫に見せつける。しかも、一部は何故か涙まで流している。最早、大混乱の忠夫と、その後ろの親子。

「どうぞ……皆様方がお待ちです！」

「あ、え、はい」

最前列の將軍の合図で、綺麗に真ん中から2つに分かれる兵士達。忠夫は、將軍の進めるままにその真ん中を歩いていく。周りからは、ありがとうございます、だの、姫をよろしく願います、だの、竜神王陛下には負けないで下さい！だの。

忠夫は混乱の度合いを深めるばかりである。

それでもようよう入り口まで辿り着いた彼は、おそるおそる後ろを振り返りながらも、懐から通行手形を取り出して、里の中へと入っていった。

兵士達の万歳に送られながら。

「あれが、姫の恩人ですか……」

「ああ。中々の面構え、将来は大物になるやも知れんな。流石は姫、お目が高いわ！はーっはっはっはー！」

「いやいや、彼ならば陛下を子離れさせてくれる事でしょうな！あっはっはっはっはー！」

その言葉を聞かなかったのは、運がいいといふかなんと言うか。

本人も知らぬ間に、家臣団からの期待を背負った忠夫は、それでも首を捻りながら里の中心に向かつて歩いていく。

——今日は満月、やはりいつも通りの宴会が開かれているようで、その中心で燃え盛る櫓がいい目印である。

とは言つても、歩き慣れた道であるからして忠夫が迷う訳もないのだが。

「に、兄ちゃん、さっきの人たちって？」

「いや、知らん。まー、害意は無いから大丈夫だとは思うけど・・・ついでに長老に聞いてみつか」

「じ、人狼の里ってそんなに適当なんですかつ?!」

震える息子を庇いながら、忠夫に問い掛ける美衣。

「んー、ま、いいか」

「適當すぎるっ?!」

忠夫は、そう返事を返すと、またてくてくと歩き出すのであった。が、

「あれー?もしかして忠夫君?」

歩き出した所で、人狼の若者と出会ってしまった。

「あ、ちょうどよかった。あの外の「う、後ろの人達は?!」

しかし、彼の視線は久しぶりに帰ってきた脱走者よりも、その後ろにいる美衣とケイの二人を捕らえて離さない。何故か、冷や汗がだらだらと流れている。

「あー、この二人は俺が嫁「なにいいいい?!」——に誘ってみたけど断られた猫又の親とその子供って、そんなに慌てて走らんでもええやん」

忠夫の台詞を遮って、大声で叫んだその人狼は、ぼっ!と身を翻すと、広場に向かって走り出す。

物凄い速度で。

後に残されたのは、胡乱な目つきで彼が立てた土煙を眺める忠夫と、さらに胡乱な目つきで忠夫を横目に見る美衣とケイの姿であった。

「なるほど・・・つまり・・・中々見所はある、と言いたいですな」

「そうですね。ま、まだまだ発展途上。そのおかげで次に会う機会が楽しみではありませんが、の」

とりあえず、邪魔者がいなくなった後のフォローが上手くいった長老は、ようやく一息ついていた。竜神王も長老の粘り強い説得というか何と云うかのおかげで、少々犬飼忠夫という人物についての見解を改めたようである。

もしかして、という程度であるが、それでも其処まで持つて行くのにどれだけ長老の神経が削られたかと思うと、長老の胃が心配だ。

「やれやれ．．．全く犬飼家は世話を焼かせよる「ちよ、長老!!」．．．なんじゃ、慌しい」

その時。小声でぼやく長老の下に、火種は持ち込まれた。

「た、忠夫が?!」

「忠夫? あやつ、帰ってきおったのか」

「ちようどいいですな。一度会っておこうと思つていましたから」

慌てながらも、その人狼の口から出てきたのは件の青年の名前。

驚いたように片方の眉毛を跳ね上げた長老は、そのまま竹の杯の中身を空けにかか

る。どうやら、心配事は片付けたので落ち着いているようだ。竜神王は竜神王で、いそいそと立ち上がり、その人狼が指し示す方角へ歩き出そうとしている。

「忠夫がつ!! 嫁を連れて戻りましたあああつ!!」

ぶほ。

ばきつ。

最初の音は、長老が口に含んだ酒を吹き出した音。次の音は、竜神王が杯を握りつぶした音である。

「……知らん。ワシしゃもう知らんぞ。寝る」

「ふ……ふふふつ! 忠夫とやら……一回、拳で語り合ってみようかあああつ?!」

長老は全てを諦めた目で家へと歩き出す。竜神王はやたらとヒートアップ。

「あ、兄上えええつ!」

「忠夫おおおつ!!」

その横を、素晴らしい速度で駆け抜けていったのは犬塚さんちのシロさんと、自称忠夫の親友、他称女狐タマモさん。

「……浮気は駄目って言ったのに」

更にその後には走り出したのは、先程まで飲み比べをしながら里の酒豪たちを相手に、ばったばったと飲んだくれを作り出しつづけていた天竜姫様。ごそごそと着ていた服の袂を探れば、出てくる出てくる物騒なオーラを放ちまくりの怪しい物の数々が。

「おい、犬飼」

「ああ、犬塚」

「面白そうじゃないか！」

4人が走り去っていった方向に、ごそそと進んでいくのは元祖親父一ず。犬飼父が玉ねぎをガリガリと齧っているが、どうやら玉葱に慣れたらしい。そして、侍は何時いかなる時でも直ぐに戦いに応じられるようになっていようだ。戦いといえれば戦いなんだらうか。

「クキューン！」

「お、タマじゃないか！元気にしてたかー！」

一番手はタマ、いやタマモ。どうやら獣の姿で走って、後続に差をつけることに成功したようだ。

そのままの勢いで駆けて来るタマモ。彼女の的には、劇的な再会、そして、目の前で美

女に変わる親友——そして芽生える愛!——という風になっている。長く辛い時であった。始めて出会った時に目を付けて以来、もう何年になるだろう。共に食料を分け合い、共に睡眠を取り……流石に一緒にお風呂はちよつと駄目だったが。年頃として、ようやく、そう、ようやくこの時が来たのだ。忠夫に胸を張つて会える時が!

「キューン!」

「おつと! おお、元氣そうだな!」

そして、念願の忠夫の胸に、一番で飛び込む瞬間。さあ、驚かせてやろう。これが、本当の、タマモだと。

「忠——「殿中でごさる!」おきやあああつ?!」

(ああ、離れていく。忠夫が。シロ、ぶつ殺す)

忠夫に抱きつく瞬間、突如現れた犬塚さんちのシロさんは、タマモをふつ飛ばしながら忠夫の胸に飛び込んだ。

「兄上——!」

「え? あれ? 今の? うおつと?!」

久しぶりに会えた兄は、以前よりも大きく見えた。成長しているとかではなく、何と

言うか、そう、器が広がっているというか。

それでも兄らしいと言えば兄らしいのか。さすが拙者の兄上——いや、もう、そうではない。忠夫殿、そう呼びたい。

あの狐には少々すまない事をしたが、それでも譲れない物はある。だから、

——犬塚シロは、犬飼忠夫を諦めない。

「兄上——じゃなくって……ええと、その、あの」

「ん？どしたシロ。もう兄上は嫌になつたか？」

そう、笑つて聞いてくる忠夫殿。心の中なら簡単なのに、それでも口には出し辛い。

「違うでござる！……その」

「ん？」

「た、たた、忠「シイロオオオオー!!」お？」

「うわちやちやちやー!!」

「あ、兄上——！」

先程吹つ飛ばされたタマモが、駈け戻りながら放つた狐火は、とつさにシロを庇つた忠夫を直撃。炎に巻かれて転げまわる忠夫。そしてシロの決意は灰と燃え。

「な、何をするでござるかこの馬鹿狐——！」

「それはこつちの台詞よ馬鹿犬ー！」

「「狼でいぎるー！（だー！）」」

「へ？」

何故かシロ以外にも、2人ほど余計に声が聞こえた気がしたが、とりあえず今問題なのは感動のシチュエーションを邪魔した目の前の馬鹿、と互いに臨戦体勢を取る。というか、早く助けないと忠夫がいい感じにウエルダン。

そしてたちまち巻き起こる、狐火と霊波刀の乱舞。互いに本気のものから比べればじゃれあいのような物であるが、それでも周囲が被る被害は馬鹿に仕切れたもんじゃない。

「げほっ！げほっ！」

なんとか被った土で火を消し止め、口から煙を吐く忠夫。背景ではシロタマが口どころか手も足も狐火も霊波刀も出しながらの大喧嘩。

「あー、死ぬかと思った」

普通死なないまでも重症になる。何故ほぼ無傷。そんな不条理は、いきなり下から袖を引つ張られた。そちらを見下ろしてみれば、

「………浮気者」

「何故にWHY?!」

忠夫的には何故か居る天竜姫が、忠夫に向かって銃口を突きつけている。即座にホルドアップで全面降参の忠夫君。

「あー、天竜？とりあえず状況の説明をしてもらいたいんだが」

それでもこのまま撃たれたんじゃあ流石の忠夫もちよと怖い。という訳で、状況を把握し様と天竜姫に問い掛ける。

「……その人は？」

天竜姫は天竜姫で、忠夫に銃口を突きつけたまま、視線だけで美衣を指す。指された美衣は、というとケイと一緒に近くの大木の上で震えている。

何時の間に登ったのやら。

「あー、俺が嫁に「……浮気、駄目って言った」

「うおわひやつ!!」

三点バーストがさつきまで忠夫の頭が在った所を正確に貫く。髪の毛数本の被害だけで避けきる辺り、忠夫である。

「……ちっ」

「浮気もなんも、俺は悪くないー!」

「開き直りでござるか」

「開き直りね」

何時の間にやら天竜姫の後ろには、煤けたシロと、あちこちに葉っぱや木の枝の引つ付いたタマモの姿。

「てかお前誰さ?!」

そうの賜りながらタマモを指差す忠夫。彼からしてみれば初対面なのでしようがないといえましょうが、この時点でその突っ込みは即アウト。つまり、その言葉でさらにタマモに井桁が1個ぶらす。

「……とりあえずお仕置き」

そして、忠夫の切ない悲鳴が響き渡ったのであった。

「こ、怖いよー母ちゃん!逃げようよー」

「ご、ごめんね、ケイ。実は……」

「え?」

「腰が抜けちゃったの」

「か、母ちゃんのあほー!」

「ぶわはははははー！」

「……あの馬鹿」

「天竜……やんちゃでも良い。あんなに逞しくなつて……父は嬉しい」

忠夫たちの大騒ぎを、繁みの影から見つめる3つの影。

犬飼父と犬塚父と竜神王である。もちろん犬塚が止めたりする訳が無い。面白いのに。竜神王は竜神王で、楽しそうに？はしやぎ回る娘の姿に、どこかピントのずれまくった感激の涙を流している。

そして、何故か犬飼ポチの方は遠い目になっていた。

「あー、お前らやっぱ親子だわ」

「……拙者は、あそこまで酷くない」

「ま、あんどきや里の独身人狼全部が相手だったけどなー」

現在忠夫が会っているのと似たような目にもポチは遭っている。相手は男衆ばっか

りで、更に終わった後に、妻の沙耶が彼ら全員を優しく手当てして、人狼独身男性を全員味方につける、という離れ業を彼女はかましている。

「……今でも忘れんぞ。お前の奴が一番効いた」

「ま、あの頃は一人者だったしな」

二人は、顔を見合わせて。僅かに苦い物を含みながらも、それでもどこか幸せな、懐かしい記憶を互いに思い出し笑うのだった。

「よしっ！そこだっ！ああ、あれを避けるかっ?！」

竜神王、何しに来た。

「ふう。で、其処の猫又の女性が」

「はい、美衣、と申します。こちらが……ほら、ケイ」

「あ、あ、あのつーケイです」

忠夫の悲鳴が余りにも騒がしく、そして彼女達が起こした被害が結構な物になって来た為。とうとう里の者——数少ない人狼の女性。しかし既婚——が長老を呼びにいき、彼の一喝でようやく事態は収束したのであった。

ちなみに、すかさず逃げ出そうとした犬飼父と犬塚父はあっさりとお捕まつて、今は外で糞虫状態で吊られている。何故か忠夫も一緒に。シロタマ天竜はその隣で正座中だ。竜神王は一応客なのでお咎めなしだが、天竜姫は見た目子供なので、躰に厳しい長老の言葉で反省中、長老は永い竜神王族の次期女王を正座させた人狼として極一部で有名になったとか。それを草葉の陰からこそそと見守つて居る竜神王。

腰が抜けて動きが取れなくなっていた親子を、暴走状態の馬鹿どもを一跳びでスルーして助け出した長老は、彼女達に長老宅で待つように告げると、近くにいた長老を呼びに来た人狼の女性に案内を任せてお仕置きに行き。

何もかもが片付いてから、ようやく彼女達の話の聞くことができた、と、そういう訳である。

「うむ。元気があつてよろしい。なるほど、里に外の馬鹿が連れてきたのは、そう言う訳があつて、か——ま、よかろう」

「え？」

「ちようど、里に空家がある。最近はこの里にも、忠夫が居なくなつた分活気が足りなかつたようであるし。ちようどいいじやろ」

「そ、そんなに簡単に、いいんですか？」

あつさり、猫又親子の里での生活を認める長老。その余りの速さに、むしろ美衣たちのほうが困惑気味である。しかし、長老は髭を扱きながら、簡単に答えを返す。

「忠夫が誘つたんじやろ？なら、それに答えてやるのが里の長の、いや、ワシの役目じや」

「………ありがとう、………」

「あ、ありがとう………」

「ほっほっほ」

ただ、静かに頭を下げる美衣と、それにつられてお礼を述べるケイ。とりあえず、こちらは一件落着のようである。

「ねえ……聞きましたか？」

「せ、拙者は、嬉しいっ！」

「美人で、しかもスタイル抜群。いいねー」

「ふふふ……。今度こそ！こんどこそっ！」

とは言え、しばらくは外野（一人者）が五月蠅そうだが。

第三十四話。

「すかー。すびー」

「なんで逆さまに、糞虫みたいに吊られているのにあんなに良く眠れるのでござるか
なあ」

「知らないわよ。あいたたた」

「……お茶、欲しい」

長老宅の外の庭。月の光に照らされて、良く育った木の枝に逆さ糞虫の有様で吊られているのは犬飼親子と犬塚父。

そこから、少し離れた所に莫塵を敷いて正座しているのはシロタマ天竜。シロと天竜
姫は正座にも慣れていて、辛そうな様子は全く無いが、タマモはそろそろ限界が近そ
うでもある。

ちよつと涙目だし。

「ふむ。全く反省の色が無いな、こやつら」

「あ、長老殿」

誰かの眩きに、吊られ3人組に向けていた視線をそちらに送れば、縁側に溜息をつき

「いでっ！」

「馬鹿者が。さっさと来んか」

「ひっでーなー」

軽い音を立てて忠夫の頭に落とされた拳骨は、それなりの親愛の表現、と言った所。

忠夫も分かっているらしく、叩かれた場所を撫で、ぶつくさ言いながらも素直に歩き出した長老の後を追う。

「・・・何で、さっさと逃げなかつたんでござろうか？」

「さあね？ あつつ、長老居なくなつたんだし、足崩しちやお」

「・・・・・・・・ふあ」

「ふ。その疑問には、拙者が答えよう」

呆然とそれを見送るシロ。長老が居なくなつた事を確かめてから足を崩すタマモ。忠夫が居なくなつたので欠伸をしながろうとうとし始める天竜姫。

そんな中で、シロが口から出した些細な疑問に答える声が振ってくる。

「犬飼殿？ 起きておられたのでござるか」

「あ、シロ、父も起きてるぞー」

「父上は寝てて良いでござるよ」

「で、どうしてきつさと降りてこないの？」

驚いたシロが、犬飼にそう返す。父はスルーして。タマモの問いに、犬飼はぶら下がったままで不敵な笑みを浮かべた。様にならない事この上なし。自覚があるかどうかは別として。

「——それは、な」

「それは？」

ごくり、と誰かが唾を飲み込む音が聞こえる気がする。それ程の凄絶な、刃のような笑みであった。そして、犬飼ポチの口から、その言葉が滑り出す。

「ふふふ……こーやって素直に反省している振りをすれば、逃げ出した時のように追いかけれなくて済むのでござるよ」

「……は？」

「……つまり、既に逃走経験ありな訳ね。多分何度も」

返ってきた答えのあまりの情けなさに絶句するシロ。そして、その答えに辿り着くまでに「長老が」どれだけ苦労したかを思いやって、少し遠い目になるタマモであった。

「……すう。すう」

「えぐえぐえぐえぐ」

「むう。カメラカメラ」

その後ろでは、正座したまま舟を漕ぐ天竜姫と、娘に冷たくあしらわれて悲しみのあまりひたすら地面に塩水を垂らす犬塚父。そして、娘の寝姿を保存しようとは懐からカメラを取り出す馬鹿一人。

里から見える月は、真円を描いて煌々と。

「忠夫さん、ありがとうございます」

「兄ちゃん、ありがとうー！」

「いやいや、そんな、気にしないで下さいってば」

長老に連れられて、腰を下ろした所には美衣とケイの姿があつた。二人とも、少しは

落ち着いた様子で忠夫に頭を下げている。苦笑いしながらも、慌てて手を振ってそれを押し止める忠夫であるが、その態度でどうやら上手く行った事を悟る。

「長老、ありがと」

「全く。そう思うのなら少しは自分の父をどうにかせんかい」

「や、面倒くさいし。そもそもあのクソ親父、根っこからアレだからなー」

腕組みしながらそう答える実の息子。親父が聞いたら怒り狂うか黙って斬りつけるかのどちらかだが。

「んで、受け入れてくれるんだろ？」

「ま、お前が自分の目で確かめたんじやろ。問題無いわい」

「あら、体も使って、ですよ？」

窓の外から音が聞こえた。まるで其処から覗いていた奴らが崩れ落ちたような。後、なんだか騒ぐ声も。

「忠夫君……ふ、ふふふふ」

「刀、刀、いや、いつそのこと素手！」

「何故か此処に鉞がー」

「輪廻の輪に返してやるうううっ！」

長老は、溜息をついた後、その窓に近寄ると、おもむろに近くの水瓶を持ち上げて窓

の外に放り投げた。そして響く瀬戸物の割れる音と、大きな水音。

そして、その間に聞こえた、なんというか、サスペンスドラマで被害者が犯人に鈍器で殴られた時のような音。

「あああつ！だいじょーぶですかあつ?!」

「うお。血が大量につ！」

「ばれてたみたいだねー。長老に」

「犯人は・・・だ、誰だ?ぐふっ」

ま、とりあえず死にはしない。

それはともかく。

「ええと、美衣さん。あんまり迂闊にそういうこと言うと、被害者が増えるので」

「・・・気を付けます」

てへ。という感じでそうのたまう美衣と、その横でいたって冷静に突っ込んだ忠夫であつた。

「ふう、あの馬鹿どもも、もう少し落ち着いてくれればのう」

「ま、美衣さんの冗談はともかくとして。長老に報告しとかなきゃならん事があるんだつた」

「・・・まあええわい。お前の事じゃ。どーせ碌でもないことじやろが」
「そんな事無いって。ほらほら」

戻ってきた長老と、じゃれ合いのような会話を交わしながら思い出したようにそう告げる。実際、忠夫が戻ってきた事の理由の3割が、それなのだ。残りの6割が美衣ケイ親子の事で、後一割は何となく。帰省なんてそんな物かもしれないが。

それはともかく。忠夫が見せびらかすようにその手から作り出した霊波刀は、月光の
みが光源の、暗い座敷の中でぴかぴかと光っていた。

「ほう。ようやく作れるようになりおったか。・・・まあ、これで名実共に成人じゃの」
「ふふふ。これでやつとあの馬鹿親父にせっつかれる事も無いってーんだ!!」

「一寸静かにしてくださいね。ケイが寝ちゃってますから」

「ごめんなさい」

感心したように声を上げる長老と、その前で霊波刀を掲げながら豪語する忠夫。大人
の話で退屈したケイが寝たので、その母親に窘められたが。

「しかし、なんだ。その霊波刀」

「へ?」

「荒いのう。収束もまだまだじゃし、霊力も練りきつておらん」

「いや、だつてまだ使えるようになってそんなに——甘えるな」

いまだ忠夫の手から伸びる靈波刀を見つめて長老が一言。それに反論するかのよう
に忠夫が言葉を返すが、ぴしやり、と長老はそれを甘えと一刀両断。

「備えよ。敵に、不意打ちに、理不尽に、反撃に、奇襲に、そして己自身に。何かが起こつた時に力不足を嘆いたのでは遅すぎる。遅ければ護れない物がある。ならば、常に牙を
砥げ。それは、最低限の事であろうが」

「……ういつす」

「甘えるな。其処が終わりではない。ようやく始まりなのだという事を忘れるな。高み
を、より高みを。お前の父も、犬塚も、そうしてあそこまで強くなった。理由は、言わ
ずもがな、じゃがな」

「……」

長老の言葉には、深みが在った。後悔して、嘆いて、それでも何かを続ける者の。説
教ではなく、それは、伝言のような物。彼の、長い長い生き様が、彼に教えた教訓。だ
からこそ忠夫は返事を返せない。己の靈波刀を見て、長老を見て、そして再び靈波刀を
見て。

忠夫は、沈黙を守るばかり。

「あやつ等とて、伊達や酔狂でこの里で2・3を争っている訳ではないのじゃぞ？」

「・・・まあ、長老が一番だつてのは分かるけど」

「ふおつふおつふお。まだまだ若い者には負けはせんよ」

それでも、ようやく苦笑いらしき物を浮かべた忠夫に、長老は、長老らしく笑つてやるのだつた。

「——さて、お子様どもをそろそろ開放してやるとするか」

「あ、俺も行く。寝た振りしてたから、フオローしとかんと」

「美衣殿。今日はご子息と共に此処に止まっていられるが良い。布団はその押入れにあるでな」

「すいません、恩に着ます」

そして、頭を下げる美衣と、すやすやと眠るケイを残して、長老と忠夫は部屋を出て行く。美衣は、頭を起こした後、息子の寝顔を見てくすくすと笑いながら布団を敷きにかかるのであつた。

「あ、兄上！」

「忠夫っ！」

「おう、ただいまだな、シロ。と、えーと？」

「タマモよ。タマでもあったけど。昔の力を一部取り戻して、ようやく変化できるようになったの!」

「つてーことは、お前あの小さい狐のタマかあつ?!」

「・・・もういい。遅いわよ、全く」

忠夫が戻ってみると、其処にはきちんと正座を続けるシロと、足を崩して痺れたのであろうそれを、プルプルと振っているタマモ。今更ながらにシロに挨拶をして、タマがタマモに進化した事を知って、衝撃を受けているようである。

ちなみに天竜姫は何時の間にもやらこてん、と横になつて熟睡中。親父どもは完全に寝に入っているようだ。

油断は全くできないが。

「ほえー。化けたなあ・・・」

「どう?今なら求婚にもぼつちり答えてあげるわよ?」

「狐ええつ!!」

感心したように呟く忠夫に、何気に爆弾発言をかますタマモ。シロは隣で聞いて今にも爆発しそうであるが。

「いや、俺年下よか歳上のほうが良いしなあ」

「え、」

そのままつかみ合いの喧嘩になろうとした所で、ぼそつと忠夫が発した言葉は、見事に二人の動きを止める。

「……私、700歳」

「いや、天竜は見た目お子様、「ちよと待ったー!!」「うおっ?!」

辺りの騒がしさに叩き起こされたか、何時の間にやら忠夫の傍によつてきて、自分が年上な事をアピールする天竜姫。

それはそれでなんだかなあ、と答えを返そうとした所に割り込んでくるシロタマの怒声。

勢い良く忠夫のところ走りこんできた2人は、シロが右、タマモが左の忠夫の襟首を掴むとぐいぐいと締め上げんばかりの力強さで迫る。

「そ、それはつまり拙者は駄目なのでござるかー?!」

「私は?!私も駄目なの?!」

「いや、シロは犬塚の親父さんから手を出すな!って厳命下ってるしな。ま、俺があ親父さんに勝てば良いらしいけど、勝ったためしがないし」

「父上っ?!」

ギロンツ!とばかりに父が吊るされている方向に向けられるシロの凶眼。だが、既に其処には縄しがなく、一瞬にして離脱済みのようである。

「逃がさんでござるっ!」

そしてシロは匂いを追いかけて里の裏山へ。

「タマはタマでまだまだ子供だし」

「なっ?!」

「そー言う話は、もちよつと大人になつてから、な」

そう言つて、タマモの頭を撫でる忠夫。タマモはしばらく納得行かなさそうな表情であつたが、とりあえずシロよりはましかもしれないな、と遠い目になるのであつた。

「・・・・・・・・ん」

くいくいと引つ張られる忠夫の裾。天竜姫がアピールするかのように自分を引つ張つていない方の手で指差している。繁みからなんだか黒いモノが湧き出ているような気もするが、とりあえず誰も気付いていないので良しとしよう。正体というか原因もモロ判りである事だし。

「あー、見た目犯罪だし」

「・・・・・・・・ひつく」

「うおおおっ?!」

問答無用で泣きが入る天竜姫。流石の忠夫も大慌て。

「いや、だからな?! 大きくなつたら全然おっけーだから! な?!」

「……えつく、本当？」

「本当！本当だって！」

わたわたと天竜姫を泣き止ませようとすする忠夫。何となく、背後から突き刺さるようなというよりも、抉るような視線と黒を通り越してヤヴァイ感じの何かが迫ってきているような気もするし。

「……ならよし」

「へ？」

「上手いわねー」

その言葉であっさり泣き真似を止める天竜姫。何が起こっているのか理解できない忠夫。後ろからのオーラも戸惑っている。ただ一人理解の色を浮かべているのは、面白そうに眺めていた本家九尾の狐のタマモだけ。流石に経験値が伊達じゃない。記憶とかそういう物を持っていなくても、直感で嘘泣きだということぐらいは見破っていたらしい。

止めるでもなく、見ていただけなのは余裕か、自信か。

「あ。嘘つきー！」

「……武器は使ってこそ武器」

「……ま、確かに忠夫にはよく効いたわね」

ようやく理解の色を浮かべた忠夫は、そう言うが既に時遅し。胸を張ってそう述べる天竜姫の前に、そう膝をついたのだった。黒オーラ、すごすごと引つ込んでいる。怯えたようにも見えたのはおそらく見間違いではない。そんなこんなで人狼の里の一夜は、ようやく幕を下ろしたのだった。

「何処でござるか父上えええつ!!」

「何故拙者を巻き込む犬塚っ!」

「しいっ! 声がかいぞ!」

「そおこおでござるかああああつ!!!」

「うおおおっ?!」

一部まだ騒がしいが。

そして月は沈んで日が昇り、人狼の里にも朝が来る。朝靄の漂う里の入り口には、大きな目のバッグを背負った忠夫と、長老の姿が。忠夫は眠そうに欠伸をしながらも、それでも目の前に立つ長老になんとか挨拶を済ませていた。

「もう帰るのか？せめてあと一日くらいは泊まっていけば良いものを」

「ま、お仕事があるし。あんまりやり過ぎると首になっちゃうから、さ」

「全く。お前も大人だ、止めやせん。止めやせんが——」

そう言いながら、忠夫の目をしっかりと見つめる。

「無理はするな。困った事があればワシらを頼れ。わかったな？」

「はいはい。わーかってますって」

真剣な長老とは裏腹に、忠夫はかるーくを振ってそう答える。

「それより、美衣さん達のこと頼むよ？俺の嫁候補！」

「もう少し身の回りを片付けてからじゃろうな」

そう言つて、大笑いしながら長老は里へと向かつて歩いていく。それを見送る忠夫の目に在った物は、信頼か安堵か、それとも何か別の物。それでも、忠夫は外を向く。里の外、いま、彼が生きている場所を。

「さーて、行きますかー！」

そして忠夫は踏み出した。逃げ出したのでもなく、慌ててもなく。落ち着いた歩みを持つて、もう一度の始まりを。

「……つと、その前に」

3歩、歩いて立ち止まる。背中のバッグを下ろし、その口をぎゅつと縛ると――

「えーい！」

そのバッグを思いっきり長老の家のほうへと投げた。

「これでよし、と」

そして近くの岩陰から、こっそり取り出したのはもう一つのバッグ。

――昨日、寝る前に長老たちから渡されたお土産を、こちらに移して隠しておいたのだ。なのに今朝起きてみれば、バッグは重いし生暖かい。

「さて。追いつかれる前に、だーっしゅ!!わーっはっはっは！まだまだ甘いぞシロタマー！」

背中に担いだバッグも何のその。やっぱり忠夫が里から出るときには、こういう慌しい状況が勝手に引っ付くようである。

「・・・で、お主らは何をやつとるか」

「兄上のバッグに潜り込んで、ビックリさせようかと」

「——きゆう〜」

長老が家に帰ってみれば、先程忠夫が担いでいたバッグと、その中から顔を出しているシロと、狐姿で気絶しているタマモがいる。

シロにはともかく、タマモにはちよつときついGだったようだ。溜息をついた長老は。

「ちよつと吊られておこうか。のう？」

とても優しい目で、背中に修羅を背負いながら、懐からロープを取り出したのだつた。

「・・・ふえ？」

「おお、起きたか天竜」

こちらは天竜姫と竜神王、そして護衛の家臣団たち。天竜姫が目を覚ませば、自分は毛布に包まれて父親の背中の上。しかも空の上を飛行中。進路はおそらく——竜神

王の城。

「……あれ？」

「ん？ああ、もうそろそろ帰ってこいと、先代達から連絡があつてな。どうだ、竜神王と
いうのも中々厄介なもんだらう？」

ようやく寝ぼけ眼をこすりこすり、ちよつと目覚めた天竜姫の疑問に答える竜神王。
言いながらも、苦笑いをしている辺り本人としてはそう気にした様子も無いようだ。

「ま、あの青年と直接話せなかつたのが残念だが、また機会があれば、だな」

「……くう」

「ふむ。寝る子は育つ、かな？」

再び眠りに落ちた天竜姫を背負いながら、竜神王は部下達の待つ場所へと帰つてい
たのであつた。

——そして時は過ぎて。

「横島忠夫、ただいまでもどりまし——」

ガスツ——ビィィィン。

「——うおおおっ?!」

都会の半人狼は、雇い主の事務所へと帰還した瞬間に雇い主から狙撃を受けた。ボウガンで。

「・・・で、其処の馬鹿」

「はいっス!!」

眼前には、こちらにボウガンの狙いをつけた美神と、そっぽを向いて不機嫌を全力で表現しているおキヌ、そしてボウガンの矢を大量に抱えた人工幽霊一号の端末、全身鎧が居たりする。

「・・・ボウガンと神通棍、どつちが良い?」

「しいて言えばどちらも嫌ですがあつ?!」

「あら、そう。ならしよーが無いわね」

どっちを選んでもやばすぎる選択肢に、正直に答えた忠夫だが。美神は何故かにつこりと微笑んでボウガンを下ろす。

と、隣に立っていた全身鎧が何かを差し出す。それは——俗に言う、メリケンサック。しかも表面に怪しげな刻印が所狭しと書き込まれている。

——隅っこに書かれた「厄珍堂」の文字が、なんとも不安をそそる逸品である。

「げ」

「極楽に——行つてこんかい！」

忠夫はそりやもう高く飛んだという。

「で、事情を説明しなさい。さっさとしないと、もう一発行くわよ？」

「あ、顎がく。……ええと、その……い、いろいろありました」

——途端に吹き荒れる暴力の嵐。

今日の美神はどうやら沸点が低めのようなのだ。

「で？あんたのバンダナがあつた場所。猫又が住んでたんでしょ？大人と子供、少なくとも2人は」

「う、ういっす。良く分かりましたね」

「GS美神令子を舐めない事ね。あれだけ遺留品があれば、ちょっと考えれば判るわよ」

何時までも帰ってこない助手を心ば——いやいや、お仕置きしようと思つていつぞやの発信機を頼りに探してみれば、其処にはバンダナとふざけた書置きがあるばかり。つい八つ当たりで小屋を半壊させてしまったが、よくよく考えてみると、こんなところに在る小屋なんて怪しいことこの上なし。

「おキヌちゃん、ちよつと辺りを見張つて」

「いいですけど・・・美神さんはどうするんですか?」

「此処、一寸気になるのよね。調べてみるわ」

そのまま調べる事小一時間。出て来る出て来る、つい最近、まるで昨日まで誰かが暮らしていたかのような証拠の数々。

「ふーん、どうやらあの馬鹿、此処でこの件の犯人と出会つたみたいね」

「ほ、本当ですか?!」

「ええ。ほら、この体毛」

そう言つて美神が取り出したのは、先程この小屋の中で取つた髪の毛と思しき毛。それを、見鬼くんの中に入れ、工事にきていた業者が襲われた場所で採取した物をその前に差し出してみる。

——案の定、それは大きな反応を示していた。

「ピンゴっ!・・・てことは」

「よ、横島さんはどうしたんですか?!」

慌てた様子で辺りを見回すおキヌ。美神は腕を組んだまま動かない。

「・・・あの馬鹿、一体何を考へてるのかしら」

「横島さーん!」

「で、小屋の中には子供用の布団と、二人分くらいの食器。あんたの筆跡に間違いはないから、大丈夫だとは思つたけど・・・」

「心配でしたか?! そーですか! なら嫁にっ!」

「死ねこのうすら馬鹿っ!」

美神の拳は、忠夫のテンプルを正確に抉る。たまらず倒れて動けない忠夫の頭の上に、おキヌがふよふよと浮かびながら近寄ってくる。

「あ、ごめんなさい♪」

そして、その手にもたれた花瓶が、狙い正確、忠夫の顔面を直撃。正確な爆撃は、忠夫の顔を一寸へこませた。おキヌの笑顔が黒いのは、目の錯覚だと思いたい。

「……ふおおおおお」

「猫又の親子でしょ? あそこに居たの。どーしたの?」

美神は美神で全く気にせず、悶える忠夫に向かって再度の問いかけ。

「ういっす。無事、人狼の里で預かってもらいました」

顔を押しえながら、ふらふらと立ち上がる忠夫。それを見ていた人工幽霊は、おキヌに包丁を渡していたりする。おキヌはおキヌで、流石にそれを使うかどうかは迷っているようであるが。

「……美人だった?」

「そりやもうっ! って、あ」

「手が滑りましたー♪」

不意に美神がそう聞くと、忠夫はつつい本音を漏らす。全身鎧が持っていた包丁は、おキヌのどっからどうみても故意の投擲で、忠夫に向かつて一直線。

「うどわあっ?!」

ギリギリ回避した鋼の刃は、見事に半ばまで壁に食い込んでいる。

『「ちっ!」』

「舌打ちするなソコっ!」

今日も今日とて、GS美神除霊事務所は騒がしく、賑やかであったとき。

第三十五話。

「・・・はあ？」

G S 美神除霊事務所。その応接室にて、先日猫又騒動の時、よく美神さんに殺されなかつたな、と呟いてソファーに寝転がる忠夫に、ふよふよとお茶を持ってきたおキノ曰く。

「つまりですねー。あの小さな村に、億単位の報酬が出せる訳ないじゃないですか」

「・・・ああ！」

「あれは村を通した開発業者さんの依頼だったんですけど、その業者さんが潰れちゃつて。どっちにしたって未払い、とゆーか只働きになつちやう所だったのを」

「俺がたまたまどーにかしちやつた、と」

「運が良かったですねー」

「いやマジで」

その業者には悪いが、ほんとに助かった。そう思っておキノの淹れたお茶を楽しむ忠

夫であつた、が。

「はいはい、無駄話はそこまで。今日の依頼はしつかりと儲けるから、あんた達もそのつもりでね」

ぱんぱん、と手を叩きながら所長室より出て来る美神。そのまま、おキヌに装備の指しを出しつつツツガレージへ。

忠夫は、手の中の程よい暖かさのお茶を残念そうに眺めると、一気に飲み干し、いそいそと美神の後を追いかける。

そして、再び始まる慌しい日々。

後に残つたのは空っぽの器と、そこから立ち昇る僅かな湯気。それも直ぐに消えてしまった。

「涙を流す面、ですか」

「左様。なにしろこの面、重要文化財でしてな。放つて置く訳にはいきません」

そして美神の愛車が辿り着いたのは、某神社のある山の麓の駐車場。

そこから、歩いて10分ほどの所にある、それなりの霊格と歴史を持った神社の本堂に事務所の面々の姿はあつた。

「———それでは、拝見します」

今回の依頼は、涙を流す面、しかも重文であるそれを何とかして欲しいとの事。

元が長い歴史を持つ神社に奉納されていたものであるから、霊的環境も充分に整っており、神楽に使われた事でそれが更に加速。

———結果として、付喪神じみた存在へと変化したのである。

「これはまた……」

「ひ、ひゃー……」

「怖っ!」

件の面の入った箱を開けてみれば、そこにはしくしくと声さえ立てながら滂沱と涙を流す面一つ。

思わず引きの入る忠夫とおキヌ。美神は流石に動じていないが。

「……こういう顔がめそめそしてる所見ると、無性に殴りたくなるわねー」

「重文ですから手荒な真似はしないで下さいね」

物騒なことを呟く美神に、冷や汗を流しながらそう突っ込むのは神主。微妙に体が面を庇おうとしているのも当然である。

「……このままの方が客は呼べますよね」

少々離れた所から、不謹慎な事を呟くのは忠夫。

「客ではなく参拝と言つて……成る程」

「またんか其処の神主」

客……いやいや、参拝者が増えると言うかとりあえず話題にはなるだろう。多分、そう珍しいとも思えないので1年後には忘れられている可能性も在るが。しかし世の中には化け物寺と言つて幽霊が出る掛け軸を呼びものに毎年祭りを開いている寺もあるくらいで。

信仰心があつさり揺らいだ神主に、呆れた目線で突っ込む美神。だがしかし、神主は神主で真剣に検討に入る。

ややあつて、ふむふむと頷いた後。懐から使い込まれた算盤を取り出してぱちぱちと弾く。

「——ちなみに、報酬はこれ位が限界なのですが」

「——見世物にして、稼いだ金の7割。来年の神楽前には声をかけて頂きたいものですわね」

其処に示された額は、この神社が結構困窮しているらしい、と言う事が簡単に読み取れるくらいの額だった。しばらく壮絶な交渉が続く物の、上がりの6割と来年の確実な依頼を確保した美神はほくほく顔で神社の階段を下りていくのだった。

——TVで、泣くお面が話題になるのはその数日後。涙の量が増えているのは気のせいだ。

「いいのかなあ？」

「ま、いいんじゃない？俺も怪我しなかったし」

それからまたまた数日後。再び活躍美神の愛車、その助手席で。

「ほら、さつさと行きなさい！」

「そんな無茶を——！」

シートベルトを取っ払われ、高速で前方を行く幽霊バイクに追いつけ足止めしろ、と

指令を受けた忠夫が尻尾を丸めて踏ん張っていた。

「あんたなら追いつけるでしょーが！」

「そんなんばっかりやー！」

やがて覚悟を決めた忠夫は——美神の目に怯えた、とも言う——ヤケクソ気味に飛び降りると、一端近くをすつ飛んでいくかの様に通り過ぎる看板に足から着地し、それを踏み抜きながら——というかぶち破りながら——減速成功。

「もう一回ここに追い込むように結界張つといたから、頑張るのよおお・・・」

美神の乗った車は、忠夫にドップラー効果の効いた伝言を残しながら、そのまま前方を行く幽霊バイクの追跡にかかる。忠夫は忠夫で着地で痺れた足をふりふり、とりあえず霊波刀を展開。

「あいたたた・・・。ちつくしよー、八つ当たりされても怨むなよー！」

果たして左程待つことも無く。忠夫の視線の先から聞こえてくるバイクの爆音。

霊波刀は目立つので、近くの電柱の上に登って待ち伏せ完了。

そしてバイクがちょうど真下を通る直前に、そこから飛び降り唐竹割り。

「なんだか知らんが手前のせいだー！」

なんとも理不尽な理由で、真上からの霊波刀に真つ二つにされた幽霊は、そのまま消滅する事と相成った。

「よしっ！スッキリした」「どいてどいてー！」・・・へっ？」
 いきん。

「横島さーん!!!」

「横島君っ!!!」

良い仕事した、とばかりに掻いてもいない額の汗を拭っていた忠夫に、後ろから鉄の塊がぶつかったのは因果応報というべきか。

——交通マナーは守りましょう。いきなり電柱から道路に飛び降りたりしてはいけません。と言った方が良い気もするが。

何はともあれ。気絶したまま痙攣を起こし始めた忠夫に——流石に、大きな鉄の塊が時速百数十キロで衝突する、と言うのは強烈過ぎる衝撃だったようだ——焦った美神は、車に忠夫を乗せると救急車を呼ぶ事さえ思いつかずにそのまま病院へ直行した。

傍から見ると、交通事故と、それを隠蔽しようとする轢き逃げ犯と言う構図以外の何物でもなかったのだが。

「でも、よかったですねー。検査の結果問題無くて」

「なんで無事なのよあんなっ?!」

「俺が無事だと問題でもあるんすかっ!!」

翌日、とある病院の一室にて。ネームプレートに横島忠夫と書かれたその怪我人は、いたって元気であり。むしろ美神が混乱するのも已む無し、と言った不条理っぷりを見せていた。

「労災だー! こう言う時はそう言えば良いってTVで言っていましたよー!」

「はいはい。帰ったら骨付き肉を何時もより多めに上げるわよ」

「・・・美神さん、いくらなんでもそれは」

TVで得た知識で美神に迫る忠夫に対し、美神は珍しくも素直にご褒美の追加を言い渡す。少々負い目を感じているようだ。

おキ又は流石にそれはちよつと誤魔化せないとばかりに突っ込む。

「やった・・・やったぜ。偶には良い事もあるもんだなあ・・・」

「本人は納得してるわよ?」

「横島さん・・・」

美神が横目で見た先には、感激の涙を流す忠夫の姿。思わず貰い泣きをしてしまうおキ又を、誰が責められようか。

「それはともかく。元気みたいだし、横島君」

「——幸せだあ」

美神の鉄拳。効果はバツグンだ！

「よ・こ・し・ま・ク・ン？」

「う・う・う・う・いつす」

未だに幸せを噛み締めながら呆ける忠夫に繰り出された一撃は、美神を心配させた分だけ容赦無かったと言っておこう。

「さて、先生、準備の方はいいかしら？」

「うむ。何時でも行けるぞっ！現代医学の名に賭けて！いざや救わん患者の未来っ！」

「いややー！俺は怪我人なんやー！今日くらいゆっくり休ませてー！」

白衣を来た美神が、呪縛ロープで縛った忠夫を引きずりながら手術室へ向かう。隣を歩くいかにも医者です、といった格好の医師の気合の入り様と比べると、その差は——

——比べるもんでもないが——見事に対照だ。

今回はそもそも依頼と言う形ではない、おキヌからの懇願で受けたようなものである。

「それにしても、本当におキヌちゃんそっくりねー」

「ええ、私も驚きました」

「いやじゃー！つて……へ？おキヌちゃんが2人居る？」

到着した手術室で、処置台の上に寝ているのはおキヌと全く同じ顔をした一人の少女。

名を、ユリ子、というれつきとした生きた人間である。

たまたま忠夫の見舞いに来たおキヌと美神は、診察室から出てきたその少女と出会い、その少女がある特殊な霊障、病魔に犯され始めている事に美神が気付く。

そして、自分と同じ姿を持った少女に、幸せな人生を、と願ったおキヌの頼みを断れる筈も無い美神が医師に相談とか脅迫とか何とかして、その病魔を取り除く事になったのである。

ちなみに、忠夫はその時検査中のため面会できなかつた。看護師から特に問題は無いと言われた為、少しでは在るが余裕もできていたし。

「と、言う訳よ。場所が場所だから、一応先生にも着いてきてもらおう……つて」

「………」

「ど、どうしたのよ？」

「ええ娘や……」

忠夫は天を仰いで涙が零れないようにしているし、医師は眼鏡を外して顔を押しさえ、涙を堪えている。

「……もーいいわ。さっさとしましよ」

手に持った金属バットで、涙に咽ぶ馬鹿二人の靈魂を肉体から叩き出しながら、美神は体からやる気とか気合とかさういった物が片つ端から抜け出ていく感触を味わうのであった。

「いけー！そこだー！」

「おりやー！現代医学は負けんぞーッ！」

「ビョビョームツ！」

「……馬鹿ねー。ホントーに馬鹿」

「まあまあ美神さん」

ユリ子の場合、疾患は心臓にあった。という事で病魔が居るならおそらく其処だろう、と見当をつけて行つて見れば見事に病魔を発見。

丸い頭に輪ツカの体、其処から伸びた棒のような足が10本足らず。とても珍妙な姿

をしている。

とは言えこちらは神通棍や破魔札など何時ものように様々な霊具を駆使して戦うことのできない美神の指示の元、様子見と突っ込んだ忠夫がそのたくさんの足に絡め取られてごっつちやごちやになり。

すぐ傍にきていた医師が手を伸ばしてきたのでそれを掴んでみれば、医師が何故かプロレス技で病魔に応戦。忠夫はそのまま応援席に。

応援席といつても美神とおキヌが並んで観戦していただけなのだ。

「ロープロープ！離れて！」

「横島君。あんた、そーいうの好きな訳？」

「好きですっ！」

「あっそ」

感情の高ぶった忠夫は何故かそのまま審判として再び戦場に突撃。医師と病魔の熾烈な戦いは、実に1時間にも及ぶ大接戦となったのであった。

「ワーんッ！トウーッ！スリィィィッ！！」

カンカンカンっ！

最後は医師の投げっぱなしジャーマンからの流れるようなフォールで3カウント。欠伸をしながら美神は、聞こえる筈の無いゴングを聞いたような気さえしていた。

カウントを数える忠夫がマットを——實際はユリ子の心臓表面——叩く度に、ユリ子の体がビクンビクン跳ねていたのは誰も知らない、知つちやいけない事実だつたりする。

「国技館に幽霊？」

「ええ、急いで何とかして頂きたい……！」

病院での大騒ぎから一週間。ユリ子が無事に退院できそうな事をおキヌと医師と忠夫で肩を組んで喜んでみたり、美神がそれを呆れながらもほんの少しだけ笑いながら見ていたり。

そんな事もあつた物の、無事忠夫も退院し、ご褒美も約束どおり多めに貰い喜びに浸り。

次の依頼にご機嫌で出かけた忠夫であったが。

「うわー、横綱の幽霊ねえ・・・」

「はい。伝説的な力士、恐山です」

「で、美神さん？このマワシはなんですか？」

「わー、やっぱり結構がつしりしてる・・・」

両国国技館。云わずと知れた有名な場所であるが、今回の依頼は其処に現れた力士の幽霊の場所開始前までの退去。

相撲というものがそもそも神に奉ずるといふ側面も持つていたため、そのトップに立つ横綱という存在の霊格はそんじよそこらの悪霊なんて目じやない物がある。

ところがどっこい。今回はその横綱が悪霊となつて、というか横綱の幽霊が稽古というお題目で現役力士たちをばつたばつたと薙ぎ倒していると言ふ。これは流石に面目が立たない、という事で。

「こつそり除霊してくれつたつてねー」

「其処を何とか・・・報酬は契約書よりも弾みますので」

「ま、なんとかなるでしょ。頑張つてねー、横島君」

「フアイトです、横島さん！」

「だから何で俺があああっ?!」

そう絶叫しているのは、ただいまマワシをしつかりと締めて恐山の前で構えている忠夫君。ちよつぱり涙目。

「馬鹿ね。土俵は女人禁制よ?」

「んな無茶苦茶なっ?!」

「多分、満足するかあんたが勝てば帰ると思うから。ほらほら、前見てないと——」

「おうりやあああつ!!」

横を向いて泣きごとを言う忠夫の横面に、凶悪な威力の張り手が突き刺さる。

「始まつちやうわよー。つて、遅かったかしら?」

「横島さああああん!!」

「ふむ。死んだかな」

腕組みをしながら、土俵の上でそう呟くのは幽霊力士、横綱「恐山」。その視線は、先程張り手一閃で吹き飛ばした青年に向けられている。手ごたえ、威力、速度。全てにおいて完璧で、碌に鍛えても居ない普通の人間が喰らえば頸椎骨折どころか頭蓋骨ごと破きそうな迫力であつたが。

「いたた・・・不意打ちかよっ?!」

「馬鹿なツ?!」

相手は半人狼、犬飼忠夫。体力と耐久力に自信あり、だ。

「良かろう!もいつちよこーい!!」

「おりゃー!真正面からぶつかり合いじゃー!!」

最早開始の合図さえも気にせず勝手に始める忠夫と恐山。恐山は腰を落とし、突っ込む忠夫をカウンターで打ち落とす体勢に。忠夫は姿勢を低くして頭から突っ込む。

「——なんて事誰がするかいっ!」

瞬間、走る閃光と迸る靈力。

「ぬおっ?!」

だがしかし、恐山の目の前で急停止した忠夫は、いつぞやの美衣との戦いの時の如く両手に靈力を溜めて、それを打ち合わせ弾けさせる。

「猫騙しだどっ?!」

「いーやつ!違うね!」

そのまま横綱の背後に回りこむ。そしてそのマワシを掴み、引っこ抜くようにして—

「サイキック・猫騙しっ!ちなみに今命名!」

「ぬおおおおっ!!!」

恐山の巨体を思いつきり土俵の外に投げ飛ばした。

「ちよつとまつたああつ!!」

しかし、土俵の上で勝利の余韻に浸る忠夫に掛けられる声。それは、依頼人である相撲協会の理事だった。彼は、難しい顔で葛藤しながらも、しっかりとその意思を声に乗せる。

「・・・勇み足、だ」

「へ?」

「勇み足。君の足が、土俵の外に出ていた」

「えーと、つまり」

「・・・君の負けだ」

心底悩みながらも、忠夫にそう告げる。相撲を愛する者として、やはり勝負は神聖な物だから・・・。

そう、自分で自分に浸る理事に対し、その背後から声が掛けられる。

「いや。ワシの負けじゃ」

「横綱っ?!」

「ド素人に負けて、横綱を名乗れるほど、面の皮厚くないぞ。また、修行しなおしじゃ。

わーっはっはっはあ!!!」

恐山は、そう言い残してその姿を薄れさせていく。その威風堂々たる様子は、正に横綱言うに相応しいものであった。

「で、美神さん。勇み足ってなんですか？」

「要するに、あそこの円から外に出ちや駄目なの」

「そんな事も知らなかつたんですか・・・」

「横綱ーっ！もう一回あいつに相撲の素晴らしさをーっ!!」

悲喜(も)も(も)も。

そんなこんなで依頼を果たし。事務所に戻る美神達。流石に疲れた表情で玄関をくぐった美神に対し、人工幽霊が一言告げる。

『オーナー、お客様です』

「だれよ、こんな時間に」

不機嫌に答える美神。それもその筈。現在時刻は既に日が変わった事を告げて久しい。後は適当に解散して寝るだけのつもりだった美神には、人工幽霊が客を通した事が納得いかないようである。

『それが・・・』

「——遅いぞ、何時まで依頼人を待たせるつもりじゃ」

申し訳なきそうに続けようとした人工幽霊の言葉を遮って、応接室から出てきたのは『ヨーロッパの魔王』ドクター・カオスその人であった。

「カオスさん！」

「カオスの爺じゃねーか。あれ、マリアは？」

「小僧か。マリアならちよつとした事があつて起きれるようになっての」

「へ？マリアどーかしたんか?！」

美神そつちのけで話し出す忠夫とカオス。当然美神は面白くない。何が、とは言わな
いが。

「カオス、あんた、何を依頼するつもりかしら？」

「ん？ああ、違うぞ」

横合いから掛けられた美神の質問に、カオスは軽く笑って返す。

「依頼人は——ほれ、お前らの後ろじゃ」

「「え？」」

振り向けば、其処にはマリアがいた。彼女は、微笑を浮かべると忠夫と美神の肩を掴む。

元氣そうなマリアを見た忠夫はほっとしているし、美神は美神でその笑顔に嫌な予感を掻きたてられる。

「おー、マリア、元氣そうじゃん。安心したぜー」

「ま、マリア？この手は一体何かしら？」

「横島・さん。ミス・美神」

忠夫の言葉に反応する事も無く。美神の質問に答える事も無く。マリアは——

「ソーリー」

「へっ？」

バチバチバチバチバチツ！！

——その手に備えられた、スタンガンから最大電力を発する。

キイイイイイイン！

途端に歪み出す美神と忠夫の視界。それは、まるで世界から切り取られるかのような

感覚。視界が狭まり、先程までいた空間が遠くなり――

「うおおおおおつ?!」

「美神さん?!横島さん?!」

「おキヌちゃ――」

そして、彼女達の姿は美神の視界から消え去った。後には、面白そうに笑うカオスと、あたふたと辺りを見回すおキヌ。そして言葉も無い人工幽霊があるのみ。

「さて、客人に対してお茶くらい出してくれても罰は当たらんとおもうがな?」

「へ?あ、はい。ただいま」

泰然と応接間のソファーに向かうカオスに、おキヌは混乱しながらも体に染み付いた動きで、慌ててお茶を淹れに台所へと向かっていく。

「さて・・・今日は、妙な事の起きる夜じゃなあ」

カオスの言葉を聞いたのは、人工幽霊のみである。

第三十六話。

「…ではな。中々に上手いお茶であつた」

「え？あ、ありがとうございま、つてカオスさん！」

カオスは、おキヌが淹れたお茶をゆっくりと飲み干し、玄関に向けて立ち上がる。

時刻も時刻であるから帰宅するぞ、と言つたその姿には焦つた様子が欠片も無い。それをおキヌが慌てて引き止めにかかる。当然である。まだまだ何の説明も無いのだ。

「なんじゃ、ワシはこれでも多少は忙しいんだがのう」

「そうじゃなくつて!!マリアさん、美神さんと横島さん連れて消えちやつたんですよ?!

説明してください!!」

「そう言われてものお・・・」

カオスを威圧しながら迫ってくるおキヌ。かなり混乱しており、少なくとも素直に帰らせてくれるとも思えないが——問題は、カオスさえも何を考えて「あの」マリアが先程の行動を起こしたか、が判らないという事だ。

美神達の姿が消えた原因は、おそらく横島か美神のどちらかが『瞬間転移』の能力でも持っていたということであれば説明がつく。

「カオスさん?! きーてますか?!」

何故、それが今此処で発動したのか。鍵はあのスタンガンだろう。おそらくそれが発動条件かエネルギー源のどちらか、若しくは両方の筈。ならば、何故「あの」マリアはそれを知っていたのか? それをワシに秘密にする理由はなんだ?

「カオスさん?! . . . もう、こうなったら」

そして、最大の問題がある。

今、ドクター・カオスの研究室で眠る、マリアに不足していた、メタソウルの欠片を渡した「もう一人のマリア」は、一体何処から来たのだ?

まさか、な。

「えいつ」

突如としてカオスに走る頭部の痛みと水の冷たさ。そして瀬戸物が割れる音。

「うゝっ?!」

思考の海を潜っていたカオスの意識は、突然走った衝撃に無理やり引き戻される。

「あれ?」

「何するか小娘ええっ?!」

振り向いたカオスの目に写ったのは、壊れた花瓶を持って額に冷や汗を垂らしながら困ったように笑うおキヌであった。

「叩いたら直るかなって」

「わしや壊れた電化製品じゃないぞ!」

壊れた電化製品でも花瓶で撲殺しようとはしないだろう。おキヌ、どうやらずっと無視されてかなり怒っていた様である。

『——分析完了しました。超局地的な時空震を感知。時間移動の可能性、97・8%!!』
「ど、どういふことなんでしょうか?」

突然部屋に響き渡る人工幽霊一号の声。彼にしては珍しい事に、その声には焦りの色が濃く現れていた。良く判らない単語の羅列に混乱したおキヌは、とりあえずカオスに聞いてみる。

カオスは、とても面白そうな表情で——。

「ふむ、これで謎は一つ解けたか。やれやれ、と言うことは……昔のワシにでも、会いに行ったか? いや、違うか。なるほど、ふーむ。とすると……」

「カオスさんー?!」

「ま、ええか」

再び椅子に座つてくつろぐ事にしたようだ。ドスツと腰掛け、大きく溜息をつく。
「娘の一人旅か。長くなりそうじゃのお」

「んで、マリア？」

「イエス。ミス美神」

「此処は何処なのよ」

「北緯・46度22分17秒、東経・10度41分03秒。スイス・イタリア国境付近です」

「・・・説明しなさい。今すぐ。一体何がしたいのかをつ!!」

辺りは真つ暗な森に囲まれていた。しかも人家のある様子が全く無い、道も無い、ましてや除霊が終わつて一息ついたところであつたから、荷物も無い。有り体に言つてかなりとんでもない状況である。マリアや半人狼にしてサバイバル技能もちの忠夫なら

ともかく、体力に自信があるといつても完璧に都会人の美神はこういうところは性に合わない。

「・・・お、キノコ見つけ」

「横島さん・それは・食べられません」

「あちゃー。知らない茸だったからもしかしてと思つてたけど」

「あんたらねっ!」

何時の間にか起き上がつて辺りをぐそぐそと探つていた忠夫が、一見普通の椎茸のよ
うな茸を発見し、それにマリアが危険を告げる。基本的に知らない茸は食べちゃいけな
いというのが当然だから、忠夫は迷わずそれをあつちに放り投げた。

美神は美神でそんな呑気な二人を見ながら地団太踏み踏み。

「マリアッ! いい加減にこつちの質問に答えなさい!」

「あ、ちなみに・現在時刻・11月2日・22時28分58秒・です」

「それが一体なんだっ——」 「西暦・1242年の・ですが」

「はあ?!」

思わず固まる忠夫と美神。一瞬何の事やら分からない様でフリーズしていた美神は、
勢い良くマリアに向かつて迫る。

「ちよ、ちよつと待ちなさい! なんで私がこんな所に来なきゃならないのよ?!」

「詳しくは・お答えできませんが・一つだけ」

「なによっ?!」

「それが・最善と・マリアが・判断したから・だそうです」

マリアは無表情にそう告げる。それは、感情が無いから無表情なのでは決して無い。育ち始めたそれを、メタソウルの混乱が、感情の暴走を引き起こさないように、必死で押さえつけているからこそその無表情。

「マリアー? 俺は何で?」

「………すいません」

「え、いや、謝らんでもいいんやけどっ!」

だから、巻き込んでしまった。本来ならば、美神とマリア自信だけでも充分な筈のこの行動に。データリンク——メタソウル同士の共振によるそれ——では、互いに破損部分があった為に充分な情報が得られなかったが、それでも、彼を巻き込む必要性は感じられなかった。

「マリア、気にせんでいいからなッ?!」

「イエス。横島さん」

それでも、彼がいてくれる事が嬉しいと感じてしまつて。申し訳ないけれども、彼の必死さを見て思わず笑顔を浮かべる事を——楽しいと感じています、ドクター・カオス。

「……つまり、説明する気は無い訳ね」

「イエス。ミス・美神」

腕を組んでマリアを睨みつけながら凜と立つ美神と、その視線を真つ向から受け止め小揺るぎもしないで毅然と立つマリア。忠夫は少し離れた所まで、辺りの偵察と言つて逃げた。

「それで私が納得するだけでも？」

「ノー。その可能性は・ありえませんが」

「へえ？」

美神の額に井桁が増える。段々と気迫が増してきて、気のせいかマリアの目には、美神の背後の風景が歪んで見えたという。

「じゃ、どうするつもりなのかしら？」

「納得してもらおう・必要は・ありません。何故なら——」

「何故なら？」

片眉を跳ね上げ、瞑目するマリアを見る。彼女は、どうやらセンサーのような物を使用しているらしく、アンテナがくりくりと動き、忙しく彼女から機械音が聞こえてきている。

そのアンテナが一瞬全ての動きを止め、目的の物を見つけたようにマリアが目を開く。

そして聞こえてくる誰かさんの悲鳴。

「たーすーけーてーくーれええええっ!!」

「横島さんが・トラブルに・巻き込まれる確率が・非常に・高いから・です」

「・・・あんの馬鹿」

額を押さえて溜息をつく美神。諦めが多分に含まれている辺り、彼女も忠夫の“そういう”所は十二分に把握できていたのだろう。

繁みを突き破って現れたのは、先程まで辺りを偵察してくると言って離れていた忠夫と、それを追いかけてきた、高さだけでも2Mは優にある、石でできた怪物——胴体は獣のようでありながら、両腕の代わりに鳥の羽、頭部も鳥の様なそれ、両足も鳥の様に、鋭い爪を備えたガーゴイルと呼ばれる動く石像だった。

「動く石像の怪物」と呼ばれるそれは、新たに増えた獲物たちにも狙いを絞る。

「中世ねえ・・・いくら何でも、こんなやつらがうろついてるなんて初耳ね」

「ノー。ミス・美神。アレは・自然に発生した存在では・在りません」

「そんなことー見りや分かるわよ。ご丁寧尻尾に製作者まで書き込んであるわ。あれとそっくりな奴、見たことあるのよねー。メドーサの所で、ケルベロスタイプだったど」

「では？」

話しながらも、二人は完全に戦闘態勢に移行する。美神は常日頃からもしものために身に付けている神通棍を伸ばし、マリアは重心を低くして飛び退く体勢を整える。

「・・・美神さんー！これ効果ありそうっすかー？」

忠夫は何故か、何処から見つけてきたのか何時もより一回り大きな石を・・・と言うか岩を抱えて近くの小高い木を指差す。何となく何がやりたいのかわかってしまった自分を情けなく思いながらも、勝手にしなさい、と言う意思を籠めて手を振ってやる。

忠夫はどうやら生き生きと木の上の上っていたようだ。

「あー、つまりね。どうやら、此処、魔族がなんかやってるんでしょ？」

「・・・正解・です」

「グロオオオツ!!」

ガーゴイル——鳥のような、直立した鷲、と言った感じのその怪物は、一声上げると美神達に向かつて突っ込んでくる。

美神は、それをかわしつつも神通棍を振り上げ、マリアは足止めのために後ろに飛びのきながら腕から飛び出した銃をガーゴイルの着地点目掛けて乱射する。

乱射された銃弾は正確に顔に集中し、その表面を削る。一発一発は殆どダメージになつていないが、流石に集中して削られる事を嫌がつてか、羽が持ち上がり、ガーゴイル自身の視界を塞ぐ。

その瞬間を見逃すはずもなく、懐に潜り込んだ美神が足首を狙つて神通棍を振つた。「かつたー！装甲厚すぎて、神通棍じゃ歯が立たないわねッ！」

無防備な所にぶち当たつた美神の神通棍は、硬い音を残して跳ね返される。何時ぞやのケルベロスの時のように、靈力を弾く素材ではなく、純粹に装甲で弾いてしまったのだ。

こうなると、火力と言う点で少々美神では手に余る。道具でも在れば話は全く別であるが無い物ねだりをしても仕方が無い。

——ならば、馬力のある奴を全面に押し出して、こちらがサポートに回るのが一番効果的！ そう判断した美神は、数枚の破魔札投げてをガーゴイルの顔に張り付け、その視界を完全に塞ぐ。

「マリアっ！」

「イエス。ミス・美神！」

美神がマリアに声を掛けて飛びのくと同時に、目を塞がれたガーゴイルに向かつて横合いから接近したマリアが、全力で蹴り飛ばす。

「ふっ!!」

「グギエアアアツ!」

その一撃は、着弾と同時に爆発を巻き起こし、見事にガーゴイルの左の羽を根元からもぎ取った。そして其処に――

「おりゃああっ!!」

「もいっちょよ!喰らいなさいっ!」

やたらと重たい音を立てて、忠夫と彼が抱えた岩が、ガーゴイルの頭部にめり込んだ。それは重力とそもそもの質量、そして動きが固まった瞬間に美神がその岩を神通棍で真上から殴りつけ、更に衝撃が襲い掛かる。首には罅が入り、もはや痛みのためにあがる声さえも無く。

――ガーゴイルは、そのまま崩れ落ちた。

「おわー?!」

忠夫を巻き込んで。ガーゴイルをぶったいた衝撃で自分の手も痺れ、硬直していで離脱が遅れたようである。慌てて駆け寄る美神とマリア。

「横島さん・大丈夫ですか?!」

「あれ？返事が無いわねー。気絶でもしたかしら？」

どうやらガーゴイルは完全に壊れたようで、ばらばらになって元の姿は欠片も無い。とは言え、その巨体を構成していた岩の量は大した物である。

むしろ、その下敷きになったにもかかわらず気絶したとしか取られていない辺り忠夫の日頃の行いと言うか非常識っぷりが垣間見える。

それはともかく、2人がかりで発掘開始、しようとしたところで――

「バロン、こちらかっ?!」

「バウツ！」

「姫様っ！あまり無茶をしないで下せえっ！」

近くの繁みを掻き分けて、乱入してきた何人かの影と、先頭を来るバロンと呼ばれた機械の犬。

「ガーゴイルに襲われていた旅人達は何処に――っ?!」

そして、村人達と思われる集団の中に、一際豪華な服を来た、纏った雰囲気からその周りの人々とは違う事を意識させるその女性は――

「マリアが二人?!」

「わ、私と同じ顔・・・」

「——嫁に來ないか？」

「わきやつ?!」

「お前は黙つとけー!!」

「非殺傷武器のテスト・開始」

何処からどうやって現れたのか。先程まで岩の下にいた筈の忠夫に手を握られた直後に硬直し、振るわれた美神の神通棍と、更に吹っ飛ぶ途中で飛んで来たゴム弾の直撃を食らつて沈黙する忠夫を見て。

「じ、人外が3体も?!」

「失礼なっ?!私はGSよっ!」

そう取られても仕方があるまい。

ようやくと落ち着いた一行と、先程森の中から出てきた住民と思しき者達は、とりあえずボロボロになって落ちてきた忠夫を挟んで向かい合っていた。

「そなた達、一体何者なのだ？その——」

と言つて崩れ落ちた元ガーゴイルに視線をやる。

「——怪物を倒す事のできるほど強力な存在は、我が領地にはカオス様とバロンぐらいしかない筈だが？」

驚いたのは美神である。確かに目の前の女性は、カオスと言つた。話は聞いた事がある。既に齡1000を数えるあの老錬金術師が、かつてヨーロッパにおいてその全盛期を迎えていた、という。だが、まさか——

「成る程。マリア、あんたの狙いはカオスとの接触だったのかしら？」

美神に横目で見られたマリアは、俯く事もせず只目の前にいる自分と同じ、いや、自分のモデルとなった女性を見るばかり。勿論、そのことを知っているのは今この場にいるメンバーではマリアだけだが。

「マリア？その人形、私と同じ名前……もしか、そなた等カオス様の知り合いか？」

美神の呼びかけに意外な形で答えたのは、正面に立つ女性。どうやら、彼女の名前もマリアというらしい。

「そうですかマリアさんですか美人ですねいやいやマリアも美人だよああどつちを選べばいいんだあつ?!」

「マリア」

「……あ、い、イエス。ミス・美神」

いきなり復活してそうたわけた事を叫ぶ馬鹿に、美神は、こつそり照れていたマリアに向かつて指を鳴らして攻撃命令。少しの間、森は銃声と半人狼の悲鳴に満たされていたのだった。

「あー、つまり、そなた達はカオス様を尋ねてこられた訳だな?」

「ま、そういう事になるかしら。カオスの所に案内してもらえろ?」

「……良からう。その人形が、カオス様の関係者と言う証明になる。このバロンと似た感じを受ける。バロン、お客人をカオス様の研究室までご案内してくれ。私は——」

マリアと呼ばれた女性は、そう言って彼女の後ろで鍬や鋤を構える村人達に目を向けると、

「村人たちを村まで送り届けてからそちらに向かう」

「パウツ」

そして、バロンと呼ばれた機械の犬は、美神達に向かつて一声上げると、付いて来いともいいうかのようにゆっくりと歩き出した。美神達は、半人狼の青年を引きずりなが

ら、とりあえずの別れとなったのだった。

「厄介な事になったわね・・・ま、退屈しないのは良い事なのかしら？」

「おや、カオス。お客さんのようだが？」

「ふん。ドーセヌルとかいう二流の使いだろう。放っておけば良い。裏でコソコソやっておるようだがこの私が此処に帰ってきたからには、最早好き勝手などさせんさ」

「しかし、バロンと一緒に来ているようだ」

「ふむ？」

カオスの秘密研究室。滝の裏に作られた其処では、今まさに吸血鬼を退治しそこねて帰ってきたカオスが、共同研究者と一緒にカオスフライヤーと呼ばれたその修理をし

ている所だった。

「すんませーん。カオスの爺は居ますかー？」

「爺が居る訳無いでしょ。精々おっさんがいい所よ」

「バウツ」

其処にバロンの案内でやってきた美神達は、のっけから失礼な暴言をぶちかましたりしていた。

「いらつしやい。カオスなら、奥に居るよ」

「あら、どなたですか？」

「……なんだ？」

扉を開けて出てきたのは、長身、長髪、端正な面を持った紳士風の男性。美神はビツクリしたようにその男性を見ている。忠夫は、その男性を見た瞬間から、何故かバンダナの下顎がムズムズとするのを感じて、虫刺されかな？とか思っていた。

「ああ、初めまして。私の名前は——」

その男性は、にっこりと微笑むと美神に向かってその手を差し出す。

「芦 優太郎。カオスの共同研究者として此処に住んでいる。日本と言う国の民の血の混じった、ハーフだよ」

その笑顔は、とても懐かしい者に会ったかのような、複雑な物だった。美神達は、とりあえず此処に来た経緯と、マリアと呼ばれた女性に此処に行くように指示されてバロンの案内の元やってきた事を告げる。

芦は、しばらく考え込むような顔になった後、研究所内部のカオスに声を掛けた。

「どうした？」

「どうやら、ヌルが本格的に動き出したようだ。近隣の村にガーゴイルを放って、恭順を求めつつもりかな？」

その後ろから、カオスが出て来る。若いと言つてもやはりカオスの面影が色濃く残っている。本人なのだから、当然といえば当然なのだが。

「ふむ、其処に居るのは、製作途中の人造人間M-666か？ この時代に我ら以上の天才が居るとも思えん。まさか、時間を超えて来たとも言うのかな？」

「その通り、といえば納得してもらえるのかしら？ ちなみに、私と其処の助手は巻き込まれた被害者よ。マリアの保護者に責任を取ってもらおうと思つてね」

その名を聞いて、苦々しげな表情を作るカオス。その目は、マリアに向いている。

「……全く、未来の私も結構な感傷屋のようだな。先を知ると言うのも碌な事が無い」
呟いたカオスの目には、哀しげな光があった。その内容を理解できる物が、はたしてこの場に居るのだろうか。いや、居たとしても、彼女は何も話すことは無い。ただ、其

処に在るだけである。

「まあいい。おい、芦。準備するぞ。ヌルとやらを追い出す」

「おや、行動の早い事だな」

「少々むかつ腹が立ったのでな。目障りな対象は、とつと潰させてもらう。八つ当たりとも言うがな」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！その前に、私達を元の時代に戻してもらわないと——」
苛ついたようにカオスは研究所内に戻ろうとする。芦も、その後ろについて中に入るつもりのようなだ。どうやら、早速ヌルを追い出しにかかる準備をするらしい。

たまらないのが美神達である。本来なら、とつと元の時代に戻ってゆつくりと休みたい所なのに、手がかりと云うかその手段をもった人物が、八つ当たりという理由で戦場へと赴くと云うのだから。

「ああ、それならば私に言うよりもマリアに言え。そもそも、この時代に来たのはどうやらその人形が道先案内人らしいからな」

「へ？そんなの、マリア」

「イエス。ミス・美神。ですが、現在の状況では、帰還は、して欲しくありません」

「……どういふつもりかしら？」

研究所に入っていくカオスの言葉に、美神はマリアを見る。しかし、その言葉の内容

を肯定した彼女は、何故か下の時代に戻る事を拒否する。当然、美神の額に浮かぶ青筋。「なあ、マリア。俺らが必要なのか？」

「・・・ある・意味では」

何でも無いような事のように、先程までバンダナの上から額をこすっていた忠夫がそう尋ねると、マリアは逡巡したあと、要領を得ない答えを返す。だが、忠夫はそれを聞いただけで――

「なら、良いじゃないですか。とっととやる事やって、かえりましょーよ美神さん」

「私は、自分が納得行かない事は嫌いな。マリア、報酬は出るんでしょね？」

「ドクター・カオスの秘密基地から・ヨーロッパの魔王・謹製の品を・幾つか・お持ち下さる」

あっさりと納得し、協力と言うか依頼を受けることを美神に促す。だが、美神はそれでは納得しない。それでは、美神の名がすたる。ならば、キチンとした形で依頼しろとはいっても遅いが、せめて報酬くらいは納得の行く物を用意してもらいたい。

——それが、「GS美神令子」のスタンスだ。

「・・・ま、魅力的な報酬と言えばそうかしらねー。O K、この依頼、ばっちり受けた

げようじゃない！」

「依頼を受けんと帰れんかも知れんのに、よくやりますねー」

「あつたり前よ！GSを舐めないでよね！」

「GSは・関係無いと・判断します」

よくよく考えてみれば、一応この3人はGS資格持ちなのである。他二人が特殊なのか、美神が特殊なのか。全員が変なだけのような気もするが。

「カオス様っ！」

「マリア姫、無事だったか」

「ええ。でも、お父様が」

「案ずるな。私が戻ってきたからには、最早ヌルとか言う奴などに好きなようにはさせんとも」

しばらく後。研究所から出てきたカオスの案内で、マリアと呼ばれた女性が居ると言う近くの村を訪れてみれば。其処には黒い甲冑を着た兵士と、白い鎧の兵士達がわらわらと大きな家を囲んで辺りを探索中で在ったりする。

そこから少し離れた場所で、バロンに搭載されたセンサーが村人達の一団を見つけ出し、合流してみれば其処には拠点を押さえられて身動きも取れずに戸惑っていた、先程美神達と別れた村人と、マリア姫を見つけたの言う訳である。

と、言う訳で。何故か感動の再会シーンを見せられた美神達は、何処と無く白けた視線でその様子を眺めている訳で。

「ちっ！カオスの爺、300過ぎてるくせに」

「ノー。横島さん。ドクター・カオスは・今現在は・爺と呼ばれる外見では・在りません」
「気分の問題だって」

何となく膨れる忠夫と、静かに突っ込むマリア。

「日系人ねえ・・・この時代に、珍しいって言うより非常識よね」

「可能性が零ではない、と言うことは、居るかもしれないと言う事だ」

あぶれたもの同士で何となく会話をする美神と芦。

「さて、それではやるとしようか」

「行くのか、カオス」

マリア姫を抱いていた腕を放し、立ち上がる。その目は兵士達に囲まれた家を見ているようだ。それに応じてカオスに近寄る芦。こちらにも、戦闘準備は既に整っている。

「ま、精々錬金術師は——」——錬金術師らしく。正面からの力押しは、つまらない、と言いたいんだろう？」

「ふん。分かっているならとつとと行くぞっ！」

そして、二人は駆け出した。

「……なーんか、気になるのよねえ。あの、芦って言う奴」

「そんなっ！浮気はしないって言ったのに——！」

この期に及んで妙な事をほざく馬鹿に一撃くれた後、美神もまた歩き出す。報酬は未確定だが、とりあえず、ガラクタの山を掴まされた、何て事があっても大丈夫のように稼げる機会で稼いで置きたい所ではある。

今回はどうやら城の中に殴り込みをかけることになりそうだし。

「さーて。それじゃ、行くわよマリアっ！……お城なら、少しはお宝があるといいわねー」
「イエス。ミス・美神」

「え、ああ。そちらの人形の方か」

「火事場泥棒って言いませんか、それ」

美神の神通棍でしばかれて頭を押しえる忠夫は、口は禍の元、というのを少しは学んだ方が良いのではないだろうか。いい加減に。

第三十七話。

「チツ、雑魚ばかりがうようよと」

カオスと芦は今、ヌルの手下と思われる兵士達に囲まれた家の、その包囲網から目と鼻の先の馬小屋の影で密談を交わしている。

その兵士達の数、およそ20人と言った所か。

「まあ、数くらいしか頼みが無いようなものだ。さっさと片付けるぞ」

「分かっている。ほれ、お前はこれとこれを持って行け。私が囹だから、しくじるんじゃないぞ?」

それでも余裕を崩そうとしない芦に、落ち着かされたカオスはマントの中に隠された袋から、1枚の大きな、体を覆ってしまえるほどの真っ黒なマントと、奇妙な光を放つ小さな緑の玉を幾つか取り出すと芦に向かって投げつけた。

どう見てもその袋よりも出てきたものの方が体積が大きいように見えるのは気のせいだと思いたい。

「・・・また面倒くさい物を持ってきたな」

「作ったからには使いたくなるのが錬金術師——いや、研究者だろうが」

「違くない」

そして、笑みを交わすとカオスはそのまま堂々と歩み出る。行き先は、包圍網の真つ只中にある家。芦は渡された外套を纏うと、そのカオスの陰に隠れるようにして付いて行く。

二人とも、いや、芦の顔を覗き見ることはできないがそれでも自信と信賴で溢れんばかりと不敵な笑みを浮かべているであろう事は簡単に予想がつく。

「さーて。まずは小手調べと行こうか」

カオスの言葉は、こちらに向かつて来る集團を見ても小揺るぎもしない。彼が、カオスである限り。

「隊長つ！ドクター・カオスが単身でこちらにやってきましたす！」

「なにつ！もうヌル様の事を嗅ぎ付けたのか！・・・いや、ちょうど良い。捕らえてヌル様の所に連行しろ！」

カオスの姿はいともあつさりと言見され、慌てて駆けつけてきた兵士達に包圍される。——カオスだけが。

「『捕えろ』？ この私を、お前ら雑兵が？ 面白い、やってみたまえ。出来るものならば」

周りを完全に包囲されながら、それでも全く動じた様子さえなく吼えるカオス。包囲網は、じりじりとその輪を狭めていく。その先陣がカオスにあと一足で届こうかと言う瞬間に。

「——ただし、私「達」は少々手強いぞ」

カオスのマントから零れ出した幾つもの球体が、豪快に煙幕を吐き出しながら転げまわる。

視界を奪われた兵士達は当然の事ながら、隊長の指示を待つて動こうとするが。

「ええいっ！退がれ！一端距離を取って——うおっ?!」

その隊長のいた所から豪快にすっ転ぶ音が響く。

「——鎧姿で後ろ向きに下がる等、転ばせてくれと言っているような物だ」

そして、仰向けに転がる隊長の頭の方から聞こえる声。慌ててそちらに視線をやるも、誰も居ない。誰も居ないが、確かに声だけは其処から聞こえてくる。

何とか立ち上がろうともがくも、下半身が完全に拘束されているように動かない。そちらに目をやれば、其処には奇妙な緑色の玉から生まれだた、暗緑色の触手が蠢き、そ

の動きを完全に縛っている。

「何だこれはっ?!」

「試作品の、一寸した植物の改良版とでも言おうか。では、ご退場願おうか」

そして、声の聞こえる虚空から、湧き出るように出現した拳銃は、その銃口を黒い鎧を着た隊長の頭部に押し当てられ、迷う事無くその役目を全うする。

響いたのは、軽い、まるで手を打ち合わせたような、そんな音が一度きり。 それでも、その劣化人工精霊石の弾頭は確実に黒い鎧の隊長を、この世の現象から切り離していった。

「隊長っ?!」

「余所見をしている場合か?」

そして、隊長が居なくなつた事と未だに煙幕で視界がふさがれる事に慌てる兵士達の前に現れる、カオス。

「なっ?!このっ!」

慌てて振り下ろされた剣は、

「ぐわっ?!」

先程までカオスであつた筈の、仲間の兵士の肩に食い込み、火花を散らす。

「何をするっ?!」

「いやーさつきまで確かにドクター・カオス——がっ?！」

その事に慌てて手を振り、説明し様とした兵士の頭部に振り下ろされる、仲間の剣。「おまえっ?! そいつは味方だ——ぎゃあっ?!」

そして、自分のやった事を理解できずに立ちすくむ兵士に、切りかかれた方を庇いながらも掴みかかろうとした兵士の、鎧の隙間を縫って突き刺さる、また煙幕の向こうから現れた、味方の兵士。

「な、何がどうなってるんだっ?!」

「畜生っ! 味方同士でやりあってどうするっ?!」

そう叫ぶも、恐慌に陥った集団がそうそう冷静になれるはずも無く。

——しばらく後に、その場に残っているのはたった一人になった、仲間の血に塗れた剣を持ち、がたがたと震える膝を突いたボロボロの兵士。辺りには、惨劇の幕が下りていた。

「ふむ。脆いな」

その兵士の視界に映る影。見上げてみれば、先程確かに切った筈のカオスがいる。彼は、一通り辺りを見渡し、戦力が居ない事を確認すると兵士に告げる。

「ヌルとやらに伝言だ。これが、宣戦布告だ、と」

最早切りかかるだけの気力も持たない兵士は、振り返ることさえできずによろよと城の方角へと歩き去って行く事しかできなかつた。

「統率者の居なくなつた集団なぞ、容易く崩せるよ。自立型の投影装置と煙幕の組み合わせは中々に効果的だな。だが、カオス」

カオスの隣に、マントを脱ぎながら現れる芦。そのマントの表面には、辺りの景色が映し出された、迷彩としての機能がもたされていた事を知っているのは二人のみ。

「なんだ？」

「少しやりすぎたな」

「・・・子供には見せられんな、これは。とつとと片付けるぞ」

とりあえず、先程まで囲まれていた家に行く前に、村人たちを呼んで片付ける手伝いをしてもらう事を決めた二人であつた。

「うわひゃあつ?!」

忠夫は、火で焙られそうになりながら、逃げていた。

「何で俺がこんな目にいつ?!」

きらきらと光る涙を流しながら。

その後を追いかけてくるのは、巨大な石でできた出来損ないの恐竜のような、ガーゴイルの一種。しかも口から火を吐く素敵な機能付き。何故こんな状況になっているかと言えば。

端的に言つて、目が合った。

もうちよつと詳しく言つと、カオス達が進んでいった方から反対側に回り込もうとした美神達は、其処に伏せていた恐竜のようなガーゴイルと、繁みを掻き分けた瞬間に目が合ったのだ。

先頭を行くマリアと美神は慌てて左右に散り、その後を歩いてきていた忠夫が突っ込んできたガーゴイルと鉢合わせ。慌てて後ろに向かつて全力で駆け出したものの。

「ついてくるなあああつ!!」

「ガアアアツ!!」

何処までも追いかけてくる。邪魔な木々を薙ぎ倒し、かなりの速度で迫るそれは、忠夫を見失う事も無くひたすらにしつこく追いまわす。火を吐きながら。

「こんなんばつかりやー!!」

「まずつ、横島君! 思いつきりジャンプしなさいっ!」

「え?」

逃げる忠夫に横合いから掛けられた声は、確かに美神の物だった。どうやら、何時の

間にか元の場所に近いところまで戻ってきていたらしい。

と、忠夫が考えられたのは其処までだった。

忠夫が、美神の指示を理解する前に、その一步を踏みおろす。

カチ、と音がしたような気がした。

——次に視界に入ったのは、連鎖的に広がる閃光であり。感じたのは、幾つもの衝撃と、何時も吹っ飛ぶ時に感じる重力からの開放感であり。耳は、爆音で何も聞こえず。最後に意識したのは、ガーゴイルの首の部分「だけ」と一緒に空を舞う自分であった。

「たーま・やー」と、言うの・でしようか？」

「・・・花火にしてはちよつと風情が無いわねー」

空飛ぶ忠夫を見ながら呆然と呟くマリアと、呆れた様に頭を押さえながら返す美神。何があったのか、分かりすぎるくらいだが何時もの事だ。

「いーかげんあんたもじよーぶよねー」

「そう言う位ならもうちよつと早く指示をくださいよつ?!」

ガーゴイルが吹っ飛ぶほどの爆発であつたにもかかわらず。何故か少し煤けただけで何時ものように会話する2人。彼らは、とりあえずの作戦会議を村の中でも少し大きな家で行なつていた。

「で、そつちはこれからどうするの?」

「聞くまでも無い。とつとと城に乗り込んで、ヌルとか言う二流を叩き出す」

「多少準備した後に、な」

美神に話し掛けられたカオスと芦は、事も無げにそう告げた後、マリア姫の方に向かつて話し始めた。

「成る程。やはり、そのヌルとか言うやつは」

「ええ。父上を操り、碌でもないことを考えているようです。城を飛び出す前に妙な物を作っている所を見ました。此処です」

マリア姫が指差した地図——城を出る際にちよろまかしてきた物——を見て、考え込むカオス。そして、姫からその「奇妙な物」の話を聞くにつれ、その眉間の皺が深くなつていった。

「……危険な物を作りおる。私も作りたかつゴホン!」

「地獄焔か。しかし、あれは制御が難しい上に特殊な材料がいる筈ではなかったか？だからこそ君も設置を諦めたのだろう？」

そう会話を交わすカオスと芦を、なんとなく胡乱な目つきで眺めるマリア姫と美神。マリアのほうは製作者の事を理解している為何でもないように見えるが、実際は隣に立つ忠夫の視線を受けて少し目が泳いでいたりする。

「ヌルは魔族よ、おそろくね」

「・・・成る程、それならば説明はつく、か。あれはそもそも地獄から直接パイプラインを引いてエネルギー源とする物。魔族ならばお家芸だろう」

「・・・それに、エネルギーとしては少々使い方が限定されすぎる。引いてくる場所が地獄。故に、そこから溢れ出す物はあくまでも混沌で猥雑たる魔の力。その分、魔力を使ったモンスター、つまりガーゴイル辺りを作り出すのにはもってこいだがな」

其処まで話して、何かに気付いたように顔を見合わせるカオスと芦。

「と言う事は、だ」

「・・・ヌルが魔族なら、地獄焔をモンスター製作に利用するだけで終わる筈が無いな」カオスと芦のその会話に、頭を抱えるのは美神と忠夫。

「まさか、そのヌルって魔族、地獄焔の魔力を使えるって言うんじゃないわよね？」

「・・・何時でもエネルギー満タンで、元氣一杯な敵なんてきついっすよ」

だがしかし。カオスはにやり、と笑うと美神達に向かって声をかける。
「ならば、纏めて叩くとするか」

「うっひょー!!」

「騒ぐな馬鹿っ!狭いんだから暴れないのっ!」

「バウンツッ!」

美神と忠夫はバロンを引き連れ、現在城に向かって飛行中。足は絨毯に魔法の空飛ぶ
箒をつけた、簡易な空飛ぶ絨毯だ。

「いや、跳ねるんじやなくて飛ぶって言うのは初体験ですからっ!」

「・・・飛行機は記憶から消すくせに、こーゆうのは平気なのね」

いつになくはしやぐ忠夫を呆れた視線で眺めながら、美神は合図を待っている。問題

は、それまで――

「……さ、寒い」

此処に居る事に我慢できるかどうかだが。

―― 一方その頃。

「で、貴様がヌルか」

「ほう、もう私の名前を知って頂いているとは光栄ですな」

「戯けた事を。宣戦布告を受け取っていない訳では無いだろうが」

美神達の下、城の中では今まさにカオスとヌルが対面していた所であった。二人の間にはかなりの温度差があるようで、ひたすらに冷たい目でヌルを見るカオスと、その視線を受けながらも余裕ぶつた笑みを崩さないヌル。

外見が禿げていてしかも目つきが悪く、人相も悪い、と言うか貧相なだけに全く持つて大物に見えないが。

「此処にいらつしやつたと言う事は、この私に協力していただけると言う事ですか？」「ふん。自分より劣る者と手を組んだ所で、得る物など全く無い。それに、協力者なら充分なのが一人居るのでな」

その言葉を聞いて、こめかみの辺りが引き攣るのを感じながらも笑顔を崩さず話しつ

づける。

とは言え、聞いた時から腕を背中で組み、カオスがこの城の正門から堂々と入ってきた時から囲ませている部下達に、準備の合図を送る事は忘れていないが。

「ほ、ほう？ 私よりも有能な者が居るとでも？」

「ああ。私の作り出した不老不死の薬の欠陥をあつさりで見抜き、改良版を製作できるくらいには、な。東方にも同じような研究があるとは意外だったが」

カオスの視線には、「貴様にそれができるのか？」といった言葉が籠められている。

しかし、二流と呼ばれたヌル——それでも、充分に天才と呼べるだけの能力は持っているのだが——には、そんな事は出来はしない。と言うか、欠陥があることにさえ気付かなかつただろう。そもそも、その不老不死の薬さえ作り出せなかつたのだから。「しかし！ 私には貴方に無い物が「地獄炉か？」——何故それをつ?!」

切り札のつもりか、勝ち誇つたように地獄炉のことを——おそらく、その正確な正体は隠すつもりであつたのだろうが——告げようとするも、相手は既にそのことを知っており、しかも鼻で笑われる始末。

「そんな物を作つて、自分が魔族であることを声高に言い立てる馬鹿に用は無い、と言いたかつたのだから？」

最早、交渉の余地は無いようだ。彼の顔には、嘲笑と不遜の感情しか表れていない。

そして、天才と呼ばれたヌルがそんな物を見て猶交渉を続けるとも思えない。

「く……くつくつく。それならば、貴方には死んでもらうしかありません」

「ふむ。やはり無能だな」

そして、徐々にその正体を現しつつ、姿の変わりつつあるヌルから聞こえるその声に、カオスは冷静に罵声を浴びせる。

「……このドクター・カオスを攻め手に回して、何時までその余裕が保てるかな？」

「少なくとも、貴方が命乞いをするまではっ！」

「ならば、始めよう」

カオスがその指を鳴らす。その音に答えて、迷彩マントを脱ぎ棄て、その両横から現れる芦とマリア。

「やれやれ。過大な評価、いたみいる」

「謙遜は・過ぎると・美德ではありません」

そう言いながら、芦はその手に銃を構え、マリアは霊力を纏わせながらロケットブーツの火を灯す。

「……未来のカオスも、とんでもない事をやる物だ」

「お褒めに預かり・光栄です」

無機物ベースである筈のマリアが霊力を纏うという常軌を逸した光景を見て、呆れた

様に眩く芦とその眩きに視線をヌルから逸らさずにあつさりと答えるマリア。

「こいつ！ゲソバルスキー達っ！」

完全に元の姿、タコの化物としか言い様が無いが、その姿を取り戻したヌルと、カオス達を囲むように現れるゲソバルスキーと呼ばれた黒い鎧の兵士と、白い鎧の兵士達。

「コロセエエツ！」

「——そんな陳腐な台詞しか吐けんから、二流だと言うのだ」

なだれ込む兵士達の足音と共に、激しい戦いの幕が、いま、開かれていった。

城の中から、何かが壊れる音と揺れる音がした。

「ようやく始まったわね。行くわよ、横島君！」

「うっす！」

「バウツ！」

そして、城の上空で待機していた美神達が動き出す。目標は、マリア姫が脱出に使った城を囲む城壁から、少し離れた所にある地下通路。其処を抜ければ地獄炉のある地下室が、直ぐ目の前に広がっている筈である。

「さあて。いっちょ一暴れと行きますか！若かりし頃の『ヨーロッパの魔王』謹製の道具の数々っ！ちよつと位派手に暴れたって良いわよね!!」

現代では手に入れることさえ不可能な、強力な破魔札やカオス流の改造が施された霊媒道具の数々。美神が身に付けているのは必要最低限であるが、それでも忠夫には大量の予備が括りつけてある。

「ほーっほっほっほー！報酬も貰えてストレス解消にもなるなんて、結構ラッキーよねっ!!」

「あんまり無茶せんではしいなあ」

忠夫の呟きに、帰る答えがあるでなし。

彼女達の乗った絨毯は、一路隠し通路へと向かうのであった。

「そりやあつ！」

爆音を立てて吹つ飛ぶ兵士達。美神の振るう神通棍は、何時にも増してその威力を高めている。

「喰らいなさいっ！」

美神の手から放たれた何枚もの破魔札は、何時もの奴とは桁違いの爆風を巻き起こしながら有象無象を蹴散らし連爆。後には、物理的な効果さえも及ぼした証拠に出来たクレータが幾つも幾つも残るのみ。

「パウッ！」

バロンもその影でサポートしながら、辺りを縦横無尽に駆け回っている。おかげで兵士達も連携が取れずに駆逐される一方である。

「ええいつ！あの犬から先に何とかしろおおっ！」

「隊長から作戦を預かっている！食らえええええっ！」

そう叫ぶ兵士の手から投げられたのは——骨。只の骨。

「パウーン！」

しかし、効果は抜群だった。思わず飛びつこうとするバロン。

「今だー！」

「それは俺んじやああつ！」

其処に斬り付けようとした兵士は、しかしそれを果たせない。突如飛び出てきた忠夫が、その兵士を踏み台に一気にその骨を搔つ攫ったからである。

「グルルルルツ!!」

「ウー————ツ!!」

「馬鹿な事やってるんじやないっ!!」

「キヤインキヤイン！」

美神の一喝で、慌てて逃げるバロンと忠夫。同レベルにしか見えない辺り、忠夫も結構本能に負けやすいところがあるのだろうか。愚問であろう。

「次っ!……っ、もう居ないじやない」

「……ノリノリっすねー。美神さん」

それでも絶好調と言った感じで美神があらかたの敵をしばき倒し、満足げな息をつく。美神に何もしていない忠夫が呟く。美神は、きらきらと輝く目を向けると。

「だって、これで現代に帰ってからの報酬が楽しみつてもんじやない!これだけの上等な破魔札なんて、そうそう手に入らないわよ?カオス謹製のお宝、ああつ!ゾクゾクし

てくるわっ!」

そう言いながら自分の体を抱きしめる美神。忠夫は、そんな雇い主を見ながらちよつとキウンキウン来ていたりする。金銭欲に塗れた普段とは違う玩具を貰った子供の様な表情に不意打ちされて、と言つた所だろう。バロンは尻尾を丸めて忠夫の影に隠れているが。

「上ではまだまだ派手にやつてるみたいだし、こつちもドンドン行くわよっ!」

「はっ!?! ういーっす」

「バウ」

確かに、天井の方からは遠く爆音が響き渡り、おそらく地下の騒ぎも伝わらないほどの激戦になっている事が予想できた。あちらにはマリア、しかもカオスから色々と受け取つていた重武装の彼女がいる限りそう心配する事はないだろう。こちらはこちらで目的を果たせばそれで良い。さっさと地獄炉まで辿り着いて、後は仕掛けをごろうじろ、と言つた所である。

「・・・無理するなよ、マリア」

呟く声も、遠雷のような音にかき消されてしまったが。

「あやつ等はまだ目的地に辿り着いておらんのか」

「イエス。ドクター・カオス。いまだ・連絡・ありません」

カオスとマリアは背中合わせになりながら、城の中を駆けていた。曲がり角や部屋の扉から突然飛び出てくる雑魚兵士を蹴散らしながら、ヌルとゲソバルスキーの追撃をかわしつつ引きつけている。

「しかし、お前もそんな物を何に使うつもりだ？」

「これは・必要な・物です」

彼女の手には、鈍く光る円筒形の筒がある。カオスの研究所によった際に、マリアの試作ボディから借り受けた物である。

「おっとー！」

カーテンを突き破って繰り出された剣をかわし、そのカオスの横をすり抜けるようにしてマリアがカウンターの回し蹴りを叩き込む。喰らった兵士は、後方のヌル達に無か会って吹っ飛んでいった。

「・・・まあ、無茶はするな」

「イエス。ドクター・カオス」

奇しくも忠夫と同じその言葉は、本当にマリアに届いたのだろうか。

「うわー」

「こりやまた悪趣味だ事」

美神達が姫から聞いた目的地と思わしき場所に辿り着いてみれば、其処にあるのは巨大な円筒形の物体と、其処から伸びた無数の管。そして、円筒の中心に張り付いたガラスから見えるものがき苦しむ魂たちの怨嗟の表情。

「ほら、横島君「アレ」だして」

「ええつと、これっすね」

「ごそごそと懐をあさった忠夫の手には、先程芦がゲソバルスキーを拘束した時に使った触手の入った玉である。勿論、美神達はその正体は知らないし、芦が使った物よりも緑が深く、既に黒に近い色である事など思いもよらない。」

「これをこいつにくつつ付けて、爆薬と一緒にセットする、と」

「逃げましょーか！」

「まだよ」

既に逃げ腰な忠夫を余所に、美神は更に幾つか同じ物を取り付ける。

「よし。横島君、カオスたちに連絡して！終わったらとつとと離れるわよっ！」

——ピッ

「連絡・きました！」

「よしっ！場所はっ?!」

「この先・左に曲がって・100M。階段を・下りた所・です！」

——ピッ

「ふむ、中々のタイミングだな。流石は——」

そして、舞台は整った。

「おや、もう逃走劇は終わりですか？」

「ああ。ようやくこちらの準備が整ったのでな」

場所は、ちょうど美神が地獄焔を発見した所の真上にあたる。先程までマントを被つて姿を消し、城内を駆け回っていた芦もその姿を見せていた。3人の前には、ようやく追いついてきたヌル達がいる。

余裕綽々のその表情が、ついにカオスたちが諦めた物と思つている事を告げていた。

「マリア」

「リンク・正常。何時でも・行けます」

「芦」

「準備は完了している」

カオスは、両隣の二人に短く問いかけ、二人もまた最低限の答えを返す。

「・・・何のつもりですか?」

事此処に至り、ようやくヌルもその様子を妙だと感じたようだ。しかし——

「仕上げだ」「何をつ?!」

——もう遅い。

カオスが何かを投げつける。それは、眩いばかりの閃光を放ち、ヌルたちの動きを一瞬止める。

そして、その一瞬の硬直が命取りとなった。

城を貫き響く爆音。地下からマリアたちのいる場所の一つ二つ上のフロアまで一直線に巻き起こる爆発は、ヌルたちの頭上に大量の瓦礫を降り注がせながら彼らを地下の地獄焔へと運んでいく。

芸術的なまでに計算されたその爆発は、城の基幹部分を全く損なう事無く——彼らを奈落へと突き落とした。

「うおおおおおっ?!」

「又、ヌル様っ?!」

そして、地下には地獄焔が破壊された事により撒き散らされる魔力と、それを引きずり込む地獄への直通路からの強烈な吸引。

後、なんだか緑色した巨大な植物の蔓。

「な、なんだこれはあああっ?!」

「改良前の物でな。魔力を餌に際限なく育つ食魔植物と言う奴だ。使い道が無くて困っていた」

響くヌルの悲鳴も遠くなっていく。どうやらきつちりと魔力を纏ったヌルを餌として認識してくれたようである。芦の答えも届く訳が無いが、それでも説明している辺り、芦の満足げな表情が全てを物語っていると見えなくも無い。

「じよ、冗談じゃないぞおおおっ?!」

慌ててヌルがあたり一面に雷やら火やら氷の槍やらを振りまくも、傷付けられる端から再生しているので意味が無い。とは言え、その植物自体もどんどんと地獄焔が空けた穴に引きずり込まれている為、そう大きくなる前に完全に飲み込まれてしまうだろうが。

「カオスツ！上手くいっただの?!」

「マリア、元氣かー?!」

「バウツ！」

いまだ間欠的に火やら氷やらを吐き出す穴の向こうから、駈けて来るのは美神達。

マリアは、忠夫を見つけると、少し寂しそうに笑った後、手に持った筒を胸元に当て、そのまま忠夫に向かって投げる。

「——横島さん。私の心・お預けします」

その一言だけを聞いた。

「へっ？うおつと!!」

忠夫は、少し離れた、走る美神の進行方向に投げられたそれを、なんとか受け止める。

しかし、美神は美神で助手の突然の動きと、マリアの笑みに目をとられ、忠夫と一緒にスツ転ぶ。

「きゃあつ?!」

不意にバランスを崩した美神達は、開いた穴へと落ちかかり。そこから突如穴から飛び出てきた雷の直撃を受け。

——ヴュン！

美神達は、この時代から消えてしまった。

後に残るは、あつけに取られた表情のカオスと芦と、目を瞑って動きを止めたマリア

だけ。

第三十八話。

美神達が雷撃に打たれ消えたその後で。

「——駆動系、反応無し。靈力回路、完全封鎖。体表面有機素材、組成もわからん何かで覆われて完全に變化。だが、一部のセンサーとブラックボックス、メタソウルと思われるコアだけがごく僅かに活動中……正に、繭だな」

動きを止めたマリアをカオスの研究所へと運び入れ、予備の、現在作成中のM—66用の調整ベッドに寝かされたそのボディを、簡素な検査機器で調べる芦の目には、その機体に対する純粋な畏敬の念があった。

「チツ！ 碌でもない事だけ教えて、とつとと自分の殻に籠るとはそれでも私の製作物か！」

対してカオスは、そちらに目を向けることさえせずに、壁に背を預けて腕を組み、ひたすら愚痴めいたことを呟いている。

「そう嫌うな。分かっているのだろう？この機体に行なわれている、間違いなくお前の物である完璧な調整は——」

「そうだ。確かに私が思いつくであろう技術の先だ！」

叫ぶようなカオスの声。

技術の癖、それがどういった物から派生して、どのように磨かれ洗練されて行ったかが手に取るように分かる。今だ分からぬ部分もあるが、この機体の製作者が己自身であるからこそ、分かる。

「だからこそ、か」

「もう黙ってくれ。頼むから……」

若きカオスは両手で顔を覆い、嘆きを吐きだすように視線を落とす。知りたくも無い未来を仄めかした、マリア姫と同じ顔をしたこの人形に対して、それでも呪詛を吐けぬ己の未練に戸惑いながら。

——己が、どれだけの愛情を注いだのか、いや、注ぐのか、と言う事が。

——そして、この感情は、この胸の内できすぶるこの想いは、決して届かない物だという事が。

「それでも、人形のままに捨て置く事が出来なかったのか。弱いな、私は——」

「・・・それも、君だ。ドクター・カオス」

ほろ苦い視線は、互いをすれ違つて重ならず。

彼が、それを知るのはまだ先の事である。

芦が「また、縁があれば」とだけ言い残して旅立ち、マリア姫がヨーロッパの魔王の名を不動のものとしたカオスに対する想いを秘めたままこの世を去り、そして、その魂が、未来の己が禁忌と知りながらも行った行為を、苦悩と懊悩の末に自分も行うと決心した彼に、メタソウルを構成する最後のパズルのピースを与えた時。

実に百年近い時の流れを超えて——人造人間M-666は、彼が娘と呼べる「マリア」となったのだ、と言う事を。

「横島さん、美神さん?!」

「ようやく帰って来たか。．．．うん? マリアはどうした?」

二人は、啞然とした表情で其処に現れた。

「あ、え、なんで?」

「マリア．．．え?」

それでも、ようやく事態を理解した二人の目に、意思の光が戻った瞬間。

「うわー!! マリア置いてきてもーたー!!」

「あ、こら馬鹿もうちよつと落ち着いてからー!!」

「なにいいいっ?!」

「ええええええええっ?!」

「あ」

舞台は一瞬にして嵐の中へ。

「マアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

響き渡るカオスの絶叫。何時もの冷静さは何処へやら。

「美神さん早く早く早くっ!」

TVのコンセントを引きちぎり、その帯電したコードを美神に押し付けようとする忠夫。

美神がスタンガンを喰らったせいであんな事になったと思っっているようだ。

8分がた正解だが。

「あ、あんたじゃないんだから下手すりゃ死ぬわよっ?!え、でも、イヤやっぱり死ぬわっ?!」

迫る忠夫を神通棍——カオスの改造入りのキッツイ奴——で吹き飛ばしながら、それでも如何しようか迷う美神。

「とこととりあえず、みみみ皆さんお茶でも飲んでつてああっ?!」

動揺しながらそれでも必死で落ち着こうと、ぐらぐらと煮立った熱湯を、茶葉も入っていない只のポットから湯飲みに注ぎつつ、うっかり手を滑らせてそれを落とすおき又。

「あつぢやあああつ?!!!」

美神に吹き飛ばされた所がその湯飲みの着地点。熱湯をモ口に被って絨毯の上を転げまわる忠夫。

パニック。

とは言え。

それをやっているのがたったの四人である以上——人工幽霊は、その騒ぎを傍から眺めていたので落ち着いてしまった——その体力が尽きれば自然と騒ぎも収まる訳で。

「……まあ、そんな訳で。あの子が何を考へてるかは分からないけど」

「……自分から残った様にしか思えんな。しかし、何故ワシはそれを知らぬ？」

一応の成り行きを説明はした物の。

忠夫は今だ虎視眈々とコンセント片手に美神に電撃を繰り出す隙を伺っているし、美神は美神で左手に練り山葵チューブ、右手に玉葱の体勢で、そんな忠夫を横目で見てい

る。
おキヌはそんな忠夫に冷たいお絞りを当てて治療中だ。ほつといても治るのだが。

そして、カオスはその話を聞いて、不愉快そうな感情をその顔に浮かべていた。

「とりあえず、わかった事から説明してやろう。簡単にいえば、美神」

「なによ？」

「お前は、時間移動能力者だな」

「……へ？」

一番最初に出てきた言葉が、一番とんでもない物だった。

呆ける美神と、その一瞬を狙う忠夫。だが呆けながらも正確に鼻先に突き出された山葵を避ける事も出来ず直撃し、忠夫は悶絶しているが。

「お前の血縁に、雷、いや、電力とは限らんが・・・そういったものを使って突然消えたり現れたりする者はおらんかったか？」

「えーと？」

「ああ、ひゃぶんあれっふね。ほら、みふあみさんと同じなまふえのおんなのふお」

鼻を押さえながらなので聞き取りづらい事この上ないが、言いたい事は何となく分かる。おそらく、ハーピーとかいう魔族の襲撃の事だろう。

「まさか、ママが?!」

「・・・ふむ。やはり、か。お前ら、マリアから何か預かっておらんか？」

納得しながらのカオスのその言葉に、顔を見合わせた美神と忠夫は、何かを思い出したような顔になると慌てて忠夫が懐を探る。

「爺っ！これ、これなんだっ?!」

「・・・そうか。あれは、やはりマリアなのだな」

忠夫の懐から取り出されたその円筒は、マリアが受け取ったと気の鈍色の輝きではなく、内から滲み出る、脈打つような白銀の輝きを発している。

「それは、マリアのメタソウルの欠片じゃよ。お主たちを無事に此処まで導いてくれたのも、そのマリアの欠片のおかげ、じゃな」

それを受け取ったカオスは、愛しげにそれを懐に収めると、マントを靡かせ立ち上がる。

「付いて来い。今回は、お前らも当事者じゃ」

そして、すたすたと事務所の玄関に向けて歩き去るカオス。付いて来いといいながらも、付いて来なかつたとしてもその事を待たたく気に止めないだろうことは確実な歩みで。

「ちよつとまつたー！俺は行くぞっ！」

「報酬報酬っ！」

慌てて手に持った火花を散らすコンセントを放り出し、駆け出す忠夫に遅れまじと、目をギラギラと輝かせた美神も一緒に走り出す。

後に残ったのは。

『水ーっ！あの馬鹿狼ーっ!!』

「横島さんのバカーっ！」

コンセントの火花が着火した燃え上がるカーテンを、その手で叩き消火する全身鎧と、半泣きでバケツに水を汲みに行く幽霊少女だけだった。

「ほれ、付いたぞ」

「此処が、か？」

「何にも無いけど・・・」

事務所を出た三人組が到着したのは、都内のある小さな公園の砂場の上。辺りを見回す美神と忠夫の目には、人気の無い遊具と寂しく灯る電灯が映るのみ。

「此処は入り口の二つじゃ。ほれ、ポチつとな」

カオスが懐から取り出した掌サイズの装置を弄ると、砂の中から燐光が立ち昇る。そ

れは、一瞬にして忠夫達の視界を奪い、次の瞬間には――

「うわ」

「我が研究所へようこそ。初めての来訪者よ」

辺りの景色は一変しており、目の前には巨大な鉄の扉と切り立った崖。背後には鬱蒼と茂った森。そこは、カオスの「秘密基地」の正門前であった。

「こつちじゃ」

すたすたと、未だに呆ける二人を残して歩き出す。しばしその非常識な規模に驚いていた二人も、慌ててその背中を追いかける。

扉をくぐり、シャッターを開き、階段を下りて通路を歩き。辿り着いたの扉には、「M—666」と刻まれたプレートの上から、粗末な、だがどこか温かみのある本人手作りの「マリア」とかかれた木の札が掛っていた。

「入るぞ」

音も立てずに開くその扉の中に、彼女は居た。

「マリア?!」

「え、でも確かにあの時代に置いて」

「落ち着け。こやつは、な」

カオスは、マリアの傍らに歩み寄るとその懐から白銀色に脈動する円筒を取り出し、マリアの胸に押し当てる。

「親を心配させた、わしより年上の愛娘じゃよ」

その瞳はあきれ果て、それでも優しく彼女を見る。

「・・・メタソウル・起動値まで・確保。再起動します」

そして、彼女は700年の時を超えて、再び美神と忠夫の目の前に現れた。

「先程は・帰還の挨拶も・遅れ、申し訳・ありません。ドクター・カオス」

「馬鹿もん。こう言う時はまず、ただいまじゃろうが」

「——ただいま・戻りました」

「——お帰り。我が娘よ」

それは、確かに暖かい家族の繋がりであった。

「と、いうわけじゃ」

「何がなんだか」

「お久しぶりです・横島さん」

目の前で行なわれた一連の出来事に、すっかり蚊帳の外になっていた美神と忠夫。得意満面に振り返るカオスの言葉にも、碌に反応が返せる訳も無く、それでも、マリアは。

その顔に笑みを浮かべながら——忠夫に抱きついた。

「へ?何?・・・よ、嫁ですか?」

「横島・さん」

きゅつと忠夫を抱きしめながら、幸せそうに目を閉じるマリア。忠夫はそのマリアとは思えない大胆な行動に混乱し。

「ま、マリアっ?!」

カオスは顎ががくんと落ち。

「・・・なーんか、苛つくわね」

美神は半眼で睨みつけながら爪先で地面を抉り。

「フリーズ」

うろろうと彷徨わせていた腕を、一念発起してマリアの背に回そうとした忠夫の後頭部に、小さな影が銃口を押し当てる。

「・・・はい?」

慌てて両手をホールドアップした忠夫の視界に、残念そうなマリアの表情が映るが其処はぐつと堪えてとりあえずの危険を確認。

背後に居たのは、マリアに良く似た、額にαと刻印された小さな少女。何処にでもいる、と言う訳でもないが、状況とその手に持ったごつつい拳銃と、冷たい視線が全ての雰囲気塗りを替える。

「えーと、どちら様で?」

「私の・メタソウルから・生み出された・私の・子供「達」・です」

両手を挙げたままでそう問い掛ける忠夫に答えたのは、少しむくれたような感じを受けるマリア。彼女は、そのまま忠夫の背後にいるその少女に対して――

「α・彼は・貴方達の・父です」

「了解しました・母」

爆弾発言をぶちかました。

「マリアアアアツ?!」

とうとう爆発に巻き込まれた形で誘爆するカオス。となりの美神爆弾は既に靈力ぎんぎんだ。

「よろしく・お願いします。父」

「……お、俺妻子持ち?!」

「トチ狂うなこのばかつたれえええつ!」

——起爆。

「マリアツ! お前のヴァージョンアップ前の機体を、そんな事に風に設定する娘に育てた覚えは無いぞオオオツ?!」

どうやら彼女、いや、此処に居ない彼女達の機体は有機体のボディを手に入れたマリアの前の機体を再利用して作られた物のようである。

それはともかく。ひとしきり考えた後アホな結論に達した忠夫に一撃くれた美神は、マリアに凶眼を向けながらいい加減にしろ、と言った感じで凄む。

「説明しなさいっ!」

「……ちよ、ちよつとした・ジョークです」

「・・・そ、そのちよつとしたジョークで痛い目見るのは俺なのね」

視線を泳がせながら美神にそうのたまうマリアを横目に、美神はギロリと忠夫を睨む。

「全く！良いからあんたも少しは冷静になりなさい！その爺もっ！」

カオス、壁に向かってマリア姫に愚痴っていたりする。αはそのカオスの背を撫でてたりするが。

とりあえずαを下がらせ、一端無理やり雰囲気を落ち着けてから。

「眠ってたあ？」

「イエス。ミス・美神」

「700年もかあ・・・」

ようやくマリアから聞きだした話を整理すると、こうなる。

始まりが何かは知らないし、分かる事も無いのだが。

まずは、マリアが一人取り残された。

そのマリアは、自分に搭載された機能である、長期の潜伏を目的としたそれを使い、正確無比なタイマーでもって、700年後の自分が過去へとすつ飛ばされたその時の直後まで眠りつづける。

この時、すれ違う形で「これから」取り残されるであろうマリアにメタソウル同士の共振を使った情報の提供で、過去に置いて行かれる事を防ぐ……という訳では「ない」。もし、その通りにやってみれば、同じ時間軸上にマリアが二人、という矛盾が生じてしまう為、どのような現象が起きるか分かつたもんじやない。僅かな、瞬間とも言えるほどの時間でも、その危険はついて回る。

休眠中はメタソウルの活動を完全に停止させる事と、蓄積された経験が僅かなりとも差異を生み出している事に賭けて、彼女は何時も眠りにつく。

「たまたま」起こっているメタソウルの減少——魂とも呼べる、彼女達の存在証明が、その行き違いの作戦を可能にした。これにより、より無理の無いすれ違いが可能になった。

なにせ、その時点で全く同じ魂を持った存在が、その魂を目減りさせている為に、違うモノ同士という要素を手に入れたのだから。

——そして、彼女達は必ず、過去に残る事を選ぶようになった。

「彼女達」が一つのプランを作り出したからだ。ある事象の調査、と言う物が可能になる点でそのプランは大変に魅力的だった。

居ない筈の彼女がいる。しかも、当時の製作者さえ分らないブラックボックスを抱えたままで。

そして、その調査は見事に功を相し、彼女は、長い旅からようやく帰りついた、という訳である。

「・・・えーと、あつちがこう来てつまりそっちで？」

「で、その調査っていうのは何よ？」

ぶつぶつと呟きながら情報を整理する忠夫はさておいて。美神は、その中でもっとも気になった事——700年と言う時間を費やしても、得なければならなかった情報の事を尋ねる。

マリアは、ちらり、とカオスに視線をやる。その視線を受けたカオスは、話してもいいぞ、と言った感じに頷くのみ。此処まで来て何も知らないで帰ってくれるほど目の前の女性は甘く無い。

それなら無駄な事は省いてさっさと進めたいようだ。

「マリア姫の、魂の・行き先と」

この時点で、音を立ててカオスの腰が椅子から浮いた。

「——ドクター・カオスの・記憶を奪った者の・特定です」

そして、この言葉で美神が椅子を蹴立てて立ち上がる。

「ちよつと待つてよ！あの頃のカオスの記憶を奪うですって?!そんなとんでもない事、そう簡単にできる事じゃないわよ?!」

「マリア姫の魂の行方じゃと?!彼女の魂は、間違いなく輪廻の輪に帰ったのではなかったのか?!」

マリアに詰め寄るカオスと美神。カオスが自分の事よりマリア姫の事を言う辺り、なんともはや。

「——1つ目。マリア姫の・魂ですが」

視線で、「冷静に」と告げながら、マリアは淡々と先を続ける。

「結論から言つて・彼女の・魂は・何者かに・その道を・塞がれています」

カオスは、その体を硬くする。

「彼女の・魂が・肉体を離れた・時点からの・調査になります。天に昇ろうとしていた・魂が・その途中で・何者かに・囚われた所までを・確認しました。正体は・完全に不明・

魂への干渉・直後に・魂と共にロスト」

「・・・ふざけた事を」

カオスの手が、怒りで真っ白になるほどに硬く握り締められる。同時に、その瞳には、それまでに無い負の感情と、自分に対する怒りが籠められていた。

「二つ目。ドクター・カオス。あの時代の・協力者の名前を・思い出せますか?」

「ん? 協力者じゃろ。ええと・・・所で、「ストップ」・・・如何した、マリア」

「成る程ね・・・記憶が奪われたっていうよりも、途中で別の方向に曲がるように強烈な封印がかけられている訳、か」

カオスは、彼の名前を思い出す直前までその頭脳を使い、そしてその名が形になる瞬間にその表情が僅かに焦点を失ったかと思うと、もう別の事にその意識をとられていた。

「イエス。ミス・美神。これが、私達を・過去に残らせる切欠となった・項目です」

「自身では分かんが、『ヨーロッパの魔王』が何たる体たらく。情けないのう」

複雑な顔で、そう呟くカオス。自分にそんな得体の知れない封印が施されている事は大変気に入らないが、それでも攻略し甲斐のある対象を見つけて喜んではいら、と言ったところであろうか。

「んで、そっちの方は目星はついてんのか、マリア?」

情報の整理は一段落ついたのか。忠夫が不図マリアに話し掛ける。しかし、暗い表情のマリアは頭を振ると、否定の意を示す。

「こちらも・不確定です。「協力者」の意図が・見えないことも・無いのですが・・・」
「つだけ・気になる点が」

「なんじゃ?」

「・・・「傍観者」。その言葉が・キーワード・です」

それで通じ合うのは2人だけ。美神と忠夫は何の事やら分からない、と言った表情だが、カオスにはそれで充分であるようだ。

「あやつか・・・何故接触してきたのか、何を目的として動いているのか。流星にこのわしも囿りかねる所があるからの」

「その存在との・接触以降・協力者は・ドクター・カオスの口から・その名を聞く事が・ありませんでした——と言っても・私が・生まれる前・ですが」

其処まで聞いて、腕を組むカオス。

「情報が足りん、な」

「怪しい所だけで、協力者に傍観者、それから魂を捕らえた妙な存在・・・」

指折り数える忠夫を見やり、その眉間の皺を深めるカオス。

「とは言え。これで終わるとも思えん。何の為に姫の魂を捕らえたのか、わしの記憶に

封印をかけたのは誰か。どちらにせよ」

カオスは立ち上がり、その目に怒りを滾らせる。

「—— たつぷりと、後悔させてやる」

「え、まだ居るの？」

「イエス。全部で・四人・です」

「・・・大家族。ええ響きやー」

「あんたらねえ・・・もうちよつとシリアスさせたまえなさいよ」

「「ジョークですよ」」

「こ、後悔させてやるっ！」

ちよつと力が抜けかけたのはご愛嬌。

「やあ」……ふふふ。彼も、ようやく此処まで来たのかい。

私も、無目的に動いている訳ではないよ？

この世界のルールは、既に大きな分岐点に差し掛かろうとしている。

分岐の片方は既に私達の動きでその役割を果たす前に朽ちようとしているし、その先にあるものこそが、私達が求めるものだからねえ。

だから、そう、疑念を抱くのも当然だね。

正直に言おう。私は、彼を利用してゐる。正確には、彼の周りも巻き込んで、だ。

ああ、勘違いしちやいけない。カオスの事ではないよ。彼は重要なフアクターという訳でもないが、それでも無視するべき物ではない、ただ、その程度だ。

誰が利用され、何に利用され、何故利用されるのか。

速く答えを出したまえ。できれば、「我ら」が望む物である事を、期待しているよ？

—— それでは、良い夢を。

—— この、囚われのお姫様にも、その願いが届くといいねえ。

第三十九話。

「——よしよし、これでしばらくは大丈夫、っと」

その日、お仕事休みの忠夫は朝から山へと出かけていた。目的は言わずもがなの食糧確保。ここ最近は色々ごとたごたごたしていたのでしばらくぶりの狩りであった。

獲物としては量が少ないが、調理の手間を考えるとこんなもんだらうといわんばかりに、収穫は兎が2匹に猪一匹。

川原に火を起こし、ついでに魚も2、3匹確保。手早く捌いてその場でいぶして燻製を作り、余った分はその日の朝食兼昼食となった。

「よつこいせつー！」

風呂敷で包んだ大量のお肉と、腰にぶら下げた狩りの途中で見つけた幾つかの山芋。

無駄にサバイバルな半人狼の青年は意気揚揚と家路に着こうとした。

着こうとした所で。

「・・・なんだありや？」

妙な物を見つけた。

どれくらい妙かと言うと、メキシカンな帽子とぼろぼろの布が、川をどんぶらこ、どんぶらここと流れてくると言う非常に微妙な光景だ。

「・・・・・・・・・・」

それを眺める忠夫の前で、その帽子とぼろ布は川岸に流れ着くと、むくむくと起き上がる。

「・・・・・・・・・・」

「ぐえほっ！げほっ！」

立ち上がったそれは、小さな体、顔には隈取のような模様、がま口の財布を首から下げたばさばさの髪の子供のように見えた。口から水を垂れ流しながらよろよろと乾いた川原の石の上に座り込むと、膝を抱えて嘆きだす。

「・・・・ううう、すまん小鳩。自然は大きなスペクタクルや・・・・」

「あー、河童？」

「誰がじゃ?! わいはれつきとした貧乏・・・・が・・・・み・・・・」

思わず声をかけた忠夫に、それまでのおちこみつぶりは何処へやら。素早く振り向き突っ込みを入れる推定・河童。

「・・・・むっ！」

自称貧乏神は、背後に立つ忠夫の姿を一目見るとその背負った荷物と腰にぶら下げ

た山芋に鋭い視線を送る。

「ん？欲しいのか？」

忠夫が山芋を腰から外し、貧乏神に向かつて突き出す。彼は、その突き出された芋と忠夫の顔の間に視線を往復させると。

「・・・おおきにつ！おおきにいいいっ！」

突如がばつと忠夫の手に抱きついたのであつた。

「成る程。つまり、その・・・貧乏神？」

「ええ。貧乏神の貧乏ちゃんです。家族みたいに思っていたのに、ご飯を取ってくるって言うって居なくなっちゃって・・・もう4日になるんです」

「その神様を探して欲しい、と言う事でいいんだね？」

美神の事務所の隣にあるビルの1フロア、そこを丸々と使い、新しく設置された機関、I C P O 超常犯罪課、通称オカルトGメン。

その一室にて、高校の制服を来た三つ編みの少女と、長髪のなかなかハンサムな好青年が机を挟んで話し合っていた。

辺りにはまだ新しいロッカーや机などが整然と設置され、使われた様子もない新品の設備が埃一つも被らずに使用されるのを待っている。

「……貧乏神が憑いていれば、民間GSに依頼するだけの資金は無いだろからね」

「はい。警察の方に頼もうにも、普通の人たちには貧乏神は見えませんか」

青年は、少し考えるように顎に手をあてた後。

「よし。いいだろう、オカルトGメンとしてはそういう方の問題を解決する事も大事だからね」

安心させるように笑顔でそう述べる。三つ編みの少女は顔を綻ばせ、安心したように頷いた。

「そうと決まればまずは君の家へ。見鬼君を使うにも対象に関連のある物があつたほうがいいからね」

「あ、はい」

少女と長髪の青年は立ち上がり、そのままオフィスの扉に向かって歩いていく。

その途中で大体の彼女の家を聞き出し、またその貧乏神がどの辺りに行きそうかを聞きながら扉を開くと。

「——と分かれれば一発ガツンとかましてやるわ！よりによって私の事務所の隣に何の連絡も無しに！」

「——さん、穩便に穩便に！」

その隙間から洩れ出てくる女性の声2人分。

「騒がしいな。．．．おや?」

扉を開いた青年と、扉の前で騒いでいた女性。はた、と目を合わせて軽く衝撃を受けたような表情になると、二人とも驚いたように相手を改めて眺める。

「令子ちゃん?! ひよつとして令子ちゃんかい?!」

「お、おにいちゃん?!」

美神と西条、実に数年ぶりの再会であつた。

「あ、どうもすいません。うちの所長が．．．」

「あ、ご丁寧に．．．あ、あの、私はこの者ではないんですけど．．．」
その後ろで何となく和やかな雰囲気も生まれていたりするが。

「へー。居候先つつーか、そこに食料を持って帰るつもりだったんかー」

とりあえず貧乏神を引き剥がし、改めて焚き火を起こして魚を焼いて。

がつつがつと4匹目の魚をそのおなかの中に収めた貧乏神は、どこからとりだしたやら爪楊枝で歯と歯の間を掃除しながら答えを返す。

「まあ、わいかて好きでとり憑いとんのちやうからな。あそこの親子は貧乏神のわいをまるで家族みたいに扱つてくれる。それが嬉しゆうて、でも申し訳ないとも思つてな。なんとか食い扶持くらいはと思つたんやが」

「失敗して、川を流れてきたと」

「・・・小鳩ー！不甲斐ないわいを許してくれー！」

青空に向かつて叫ぶ貧乏神。腕を組んでその様子を苦笑いしながら見ていた忠夫だが。

「そういう事ならちよつとは協力できるぞ？なんてったつてうちの所長は超一流のGSだからな」

「そりやありがたいが・・・にーちゃん、貧乏神やぞ、わいは？」

「それが如何した？」

にやり、と笑う。

「うちの里で、お金なんて使う事ないつつの」

傍らに置いておいた燻製肉の詰まった風呂敷を片手で担ぎ、もう一方の手で貧乏神を抱え込む。

「んじゃ、ちよつと走るぞー」

「ちよ、ちよつ——うっぎやー！」

手足をばたつかせた貧乏神を無視しつつ、全力で駆け出す忠夫。

相変わらぬのスピードに抱え込まれた物体が悲鳴をあげるも聞き流し。

一路事務所へと駆けて行く半人狼。

しばらくすると悲鳴も途絶え、後には静かな森と川のせせらぎが響くのみ。

「ちわーっす!」

「あ、横島さん」

元気良く挨拶をしながら事務所の玄関をまたぐ。どうやら来客中であるらしく、おキヌの手にはお盆があり、その上に何人分かのお茶の入った湯のみが湯気を立てている。

「おキヌちゃん、美神さんいる?」

「えっと・・・その・・・そ、それより横島さん、その手に持つてるの、なんですか?」
微妙に視線を泳がせながら、話を誤魔化すおキヌ。手に持ったお盆がなんとも言えない。

話を逸らされながらも忠夫がとりあえず手に持った貧乏神を持ち上げて、おキヌに差し出す。

「あー。拾い貧乏神」

『——排除っ!』

「うどわっ?!」

未だに目を回す貧乏神を受け取って、「は?」という呆れたようなというか、困惑したような表情で固まるおキヌを余所に、背中の風呂敷を置いた忠夫に向かって飛び掛る全身鎧の一撃。

「くおら人工幽霊一号!何考えてやがるっ!」

『私の中に妙な物を持ち込まないで下さい!しかも貧乏神?!あんた商売を舐めとるんですかっ?!』

「ほーう!なら何で俺に切りかかるかなあっ?!」

ギリギリと西洋剣と霊波刀で鏢迫り合いをしながら騒ぐ二人。

おキヌは額を押さえて溜め息だ。

『……ついでに?』

「……ばらっばらにしたる!」

高い金属音をたてて弾き合う霊波刀と剣。

しかし、その一瞬の間隙を狙って、忠夫の側面から一本の先が丸まった鋼鉄の矢が襲いかかる。ちなみに丸めてあるのは壁とかに傷が付くのが嫌なだけだ。

「令子ちゃん・・・もうちよつと周りを見たほうがいいと思うよ?」

「はっ?!」

「・・・で、説明しなさい」

「・・・ぐ、ぐー」

がぼつと起き上がり、辺りを見回す彼の目に最初に映つたのは鬼女だった。夢だと思いたい彼は、即再び寝に戻ろうとする。

しつかり拳で叩き起こされたが。

ちなみに人工幽霊はとつくの昔に避難して、今はそ知らぬ振りして窓を磨いていたりする。全身鎧で。

「へえ・・・」

「な、何よ西条さん・・・」

「いや、生き生きしてるなって思ってたね」

「そ、それはともかく!」

何となく赤くなりながら、美神は忠夫の首根つこを掴んで引きずり起こす。

「うちの事務所に貧乏神なんて連れ込むとは……いい度胸してんじやないこの助手はく
く〜！」

「堪忍やー！仕方なかったんやー！」

ちよつと泣きが入りながらも必死で説明する忠夫。

それを聞く美神の額に浮かぶ井桁が減らないどころか少しずつ圧力を増している辺
りがなんともはや。

「……で？私に依頼でもしたいのかしら？」

「誰ですかそんな無謀な事を考えるのは」

「……………」

「……………えと、その」

びりびりと空間が歪んでいるような気さえする。更に増した視線の圧力に必死で目
をそむけながら助けを求める視線を送る。

おキヌは辺りの掃除をしながら知らない振りをしているし、知らない長髪の男はこち
らをにやにやししながら眺めているだけ。

貧乏神は未だに気絶したまま——なんだか大きくなってる。しかもさっきの10

倍くらいには。

その巨体に嬉しそうにしがみ付いているのは。

「——嫁に來ないか？」

「きやつ?!」

結構可愛い三つ編みの女の子。いい感じ。

「何処までも本能に忠実かおのれはっ!」

振りかぶられた神通棍は、狙いあたわず求婚する半人狼の後頭部を直撃し、床に沈めたとき。

それでも再び復活し、ようやく事態は沈静化。

「あー、まだぐわんぐわんする」

「自業自得だと思いませんか？」

「きつついなー、おキヌちゃん」

ダンツ！とおキヌによつて勢い良く置かれた湯飲みのお茶を啜りつつ、対面に座つた所長に目をやる。

「貧乏神つて成長するんですね」

拳一閃。

「……あれは成長じゃないわ。より強く括られちゃつたのよ、あんたの靈力で。全く……どーすんのよ、あれ」

美神が指差した先には、窓の外を眺めながら強く生きようとしている制服姿の女の子と貧乏神が。

「西条さんに一応貧乏神について調べてもらつてるけど、あれは結構厄介なのよ？」

「横島さんだけじゃなくて原因の半分は美神さんにあるような気も……」

腕組みしながら、ソファで顎をさする忠夫を半眼で睨みつける。おキヌが突つ込むがスルーしつつ、それでも冷や汗が一筋流れている辺りなんともはや。

「つててて。んじゃ、どーしよーもないつて事つすか？」

「そりゃ困るで！わいも、もう少して小鳩達を困らせないで済むように、さくつと消えら

れるところやつたんやぞ！」

会話を聞いていたらしい貧乏神が、小鳩とらしい女性を連れてやって来る。

その手を引かれた少女は、少々困った様子だが、安堵の気持ちの方が大きいようだ。「で、でも貧ちゃんが消えちゃうくらいなら私はこのままでも……。それに、貧ちゃんが大きくなつたんだからもうちよつと一緒にいられるんでしょ？ 私はそつちの方が嬉しい」

「ええ子や……。ほんまにええ子や……。」

小鳩の言葉に思わず涙ぐむ忠夫と貧乏神。美神はそれを見て「しようがない」と言った風に書斎に歩き出そうとし、おキ又はその後をくすくすと笑いながら着いて行く。

しかし、彼女達がドアをくぐる前に「彼」はその扉を開けて言い放つた。笑いを堪えるような表情で。

「まあ、簡単な方法ならあるよ。横島君……。でいいのかな？ 君と花戸さんが結婚しちやえばいいんだよ」

「え」

固まる小鳩と忠夫。

「ちよ、ちよつとお兄ちゃん?!」

「横島さん！早まつちや駄目ですよ！」

慌てる美神とおキヌ。

「・・・その案、いいかも知れんな」

「だろ？」

頷きあう西条と貧乏神。

「ちよつと待て！こつというのは本人同士の気持ちと言うか愛というクラブ、そうクラブが、お前誰だつ?!」

西条に掴みかかりながら忠夫が叫ぶ。掴みかかった相手の名前さえ知らない事にようやく気がついたようだ。

その手をやんわりと離しながら西条は笑顔で答えを返す。

「ああ。僕は西条輝彦、ICPOの超常犯罪課、通称オカルトGメンに所属する・・・まあ、令子ちゃんの兄みたいなものかな？」

「よろしく義兄さん！妹さんに求婚中のい——横島忠夫と言いますじゃなくつて何でそういう事になるんだよ?!ですか?!」

盛大に混乱しながら貧乏神を指差す。西条はそれでも余裕の笑みを崩さずに。

「まあ、要するに今彼は花戸家に括られた力に、外部からの力が加わつて——つまり、君の霊力によつてより強く括られてしまった状態なんだ。ちなみに令子ちゃんと結婚し

たかつたら僕を納得させてくれよ？」

「つまりやな、小鳩とお前が結婚してしまえば外からの力はちやらになる、つまり元どおりの大ききさになつて万事オツケー、ちゆうことや。わいは結構気に入つたで」

笑顔で釘をさしながら説明する西条と、乗り気な貧乏神のダブルアタックが迫るも忠夫はめげずに更に詰め寄る。

「だーかーら！こつういう事は本人の気持ちがつー！」

「小鳩、どうやこのあんちゃんは。わいが言うのもなんやが、悪くない縁やおもつて？」

後ろでおろおろとしている小鳩に、振り向きながら話し掛ける貧乏神。その体の大ききさも手伝つて中々に邪魔である。

「・・・そうなの？貧ちゃん」

小鳩は目の前で展開される話の流れにおいていかれそうになりながらも、忠夫の目を見て貧乏神に話し掛ける。

見られた忠夫はすまなさそうな視線を向け、手をたてて軽く謝るような仕草をしている。

「おうーちーとお人よしやが、こいつならわいの後でもしつかりおまえ達を守れると思つて。わいだけじゃあ精々あと2、3年が良い所やつたからなあ・・・」

「貧ちゃん……」

二人で見詰め合つて目を潤ませる。視界の外で忠夫が手を振つて声をかけているがすつかりと世界を創つていたので届かない。

「西条さん？本当に他に方法はないのかしら？」

「……はっはっは。在るには在るが、ちよつとばかり難しい方法でね。しかも僕にはそれが出来ないんだよ。彼なら可能だけど、彼の人柄なんか知らないからね。安全策をとつたのさ。……方法、知りたいかい？」

「ええ。見せてくれる？」

「あ、私も見たいです！」

苛ついたような表情の美神を喜びに横目で見ながら、スーツの内ポケットから書類袋を取り出す。

引つ手繰るように受け取つた美神はそれを睨みつけるようにして読んでいき、おキヌはそれを美神の頭上から眺める。

「……ふん、成る程ね。知つた者には参加権なし。しかも一発勝負……結構なギャンブルじゃない」

「無茶ですよ、こんな条件！」

呆れた顔の美神は、西条にその書類を投げ渡し鼻を鳴らす。おキ又は困惑したように浮かぶばかりだ。

「ま。あれでも神様だからね。無理を通そうとすればそれなりの代価は必要になる。・・・あれ？横島君は何処にいったんだい？」

『現在、屋根の上で遠吠えを繰り返しています』

耳を澄ませば聞こえてくる、忠夫の物と思しき、まるで悲鳴のような狼の遠吠え。

そして、その声が止んだと同時に階段を駆け下りてくる音が聞こえる。

「だから！そう言う貧乏がどうかで結婚するんじゃないやなくて！そう言う取引みたいなのが嫌だっつーの！愛が欲しいの！愛が!!」

「せやから悪い話じゃないっていつとる。わいが言うのもなんやが、ええ子やで、小鳩は」

「・・・あの、お嫌でしたら無理して頂かなくても。わ、私はその貧ちゃんのこと信じてますし、優しくしてくださいから、あ、あの、よ、よろしくお願いします・・・」

ふらふらとそちらに行きそうになり、ぐぐつと堪えて伸ばしかけた両手を引つ込め、血が出そうなくらい唇を噛み締めながら勢い良く振り向き駆け出す忠夫。

そのまま階段を駆け上がり。

再び響く遠吠え。

「……馬鹿ねえ」

「……でも、羨ましいです」

「なんか言った？ おキヌちゃん」

「いいえ♪」

「さて、話も決まった所で「なんも決まっとらんわー!!!」……往生際が悪いなあ」

笑顔で手を叩きながら場を閉めようとした西条に、階段を駆け下りてきた忠夫が突っ込む。

まるでとてつもない問題に直面したかのように凄い形相になっている。具体的に言うとなら後一押しして額の血管が切れそうだ。

「それじゃあどうするんだい？ あの子に御免なさい、なんて謝っても貧乏神が小さくな

る訳じゃないんだよ?」

「ほ・か・に・なんか方法はないんかー!!」

西条は、ちらり、と不安そうにしている小鳩とその横で成り行きを見守っている貧乏神を見やる。

そして迫る忠夫をもう一度見ると、溜め息をついて手を突き出し、押し止める。

「……えーと、貧乏ちゃんていいのかな?」

「せ、せめて貧乏神と言わんかい」

「それじゃあ貧乏神くん。彼に、試練を受けさせる気はあるか」

ぎくつとした表情になると、その首からさげたがまぐち財布を慌てて背中に隠し、西条を睨み付ける。

「本気か?! 失敗したら後戻りは効かんのやぞ?!」

「それじゃ聞くが、今のままで君が消えるまでどれくらいかかる? 横島君はこんな形の結婚は嫌のようだし、ここらで一つ八方丸く治めてみる気はないかい? ……それに、上手くいけば小鳩さんとも一緒にいられるんだ」

腕組みしながら貧乏神に語りかける西条。

痛い所を突かれたか、貧乏神は言葉に詰まるも背中に隠した財布を出そうとはしない。

「横島君、聞いてのとおりに上手くいけば皆が幸せになれる方法がある。失敗すれば少なくとも君と彼女はずっとお金に困るが、それでもやるかい？」

話し掛けられた忠夫は、意表を付かれたように考え込み、しばらくして顔を上げると、小鳩に向かつて。

「いいかな？」

とだけ声をかけた。

そして、その問いに小鳩は

「はい」

とだけ言つて意思を籠めて頷いた。

「貧ちゃん、お願い。ずっと、一緒にいよ？ 家族、でしょ？」

「……………あ~~~~、もう！知らんぞわいはっ！」

小鳩の願いを聞かない事もできた。あいつならもしかして、とも思つた。それなら最後の2、3年は楽しく暮らせるだろうとも思つた。

でも、目の前の少女の言葉が、嬉しすぎた。

「頼んだで！あんちゃん！」

「おうよっ!!」

そして忠夫はがまぐち財布の中に消えた。

傍から見ていた美神は呆れたような、苛ついたような表情でソファアーに座っており、おキヌはその横で少し拗ねたように浮いているし、西条は上手くいったと言わんばかりにニヤニヤしているが。

「赤貧のドアと裕福のドアねえ・・・」

「・・・大丈夫ですよ、横島さんなら」

「ま、大丈夫でしょ。あいつ馬鹿だし、きつと正しい答えを見つけるわよ」

それでも、おキヌはやっぱり心配のなかに信頼が顔を出していたし。

美神は美神で不満げながらも僅かに心配そうで、そしてほんの少しだけ嬉しそうだったりする。

「こつちがなんだか豪華な飯食ってる俺で……あつちが貧乏そうな俺と小鳩ちゃんか……」

財布の中に入ってみれば、辿り着いたのは二つのドアと二つの窓、そして二つに分かれた道があるだけの不思議な空間だった。

窓から覗けば片方は、執事らしき人物が居る部屋で、小奇麗な服を着た忠夫がリツチなご飯を食べている。

もう一方ではぼろぼろの服を着た忠夫が同じくぼろぼろの服を来た瘦せこけた小鳩と一緒に一杯の掛け蕎麦を啜っている。

「……どつちかを選べることやろーなあ」

腕組みをして悩む事しばし。

「・・・とりあえず」

そして拳を握って一つのドアへと歩き出す。

「腹が立つなあ」

ドアノブをぐつと握り締め、それを捻るとゆっくりと開いていく。

「・・・あんな可愛い女の子、そんな姿にするか？」

最後に握りこぶしを振りかぶり。

「——金が無いからって女の子がそんなに成る程困らせる奴あ俺じゃねえっ！だから一発殴らせろおおっ!!」

彼が開いたのは——

がまぐちがひとりでにかばつと開き、忠夫をその中から吐き出す。

「え?!」

吐き出された忠夫が握りこぶしを振りかぶつたまま顔面から事務所の床に着地し、痛そうな音を立てると同時に。

「やった!これでわいは……!」

ほんつ!と音を立てて貧乏神がその姿を変えていく。そこに現れたのは、エジプトのファラオのような黄金作りの飾りをつけ、小槌を持った福の神。

「小鳩っ！」

「貧ちゃん！」

喜びを表し抱き合う二人。

「中々やるじゃないか、彼」

「・・・うちの助手よ？当たり前」

何かを仄めかすような視線を美神に向ける西条と、その視線から顔を隠すように背ける美神。その唇の端がほんの少し持ち上がっているのが西条からははつきりと見えるのだが。

「だ、大丈夫ですか、横島さん」

「こんなんぼっかりか、俺」

力尽きたように横たわる忠夫に、あたふたと声を掛けるおキヌ。そこに

「ありがとうございました、横島さん」

「おーきに、あんちゃん」

貧乏神——いや福の神に変わったのだが——と小鳩が声を掛けてくる。

「よしっ！」

その二人を前にして、やおら忠夫はがばつと立ち上がると。

「嫁に来ないか？」

「え、あの、えっと。もち「懲りろこの馬鹿っ！」きやつっ！」

凄まじい勢いで飛んで来た美神の神通棍に黙らされる。

果たして、彼女が突っ込まなかつたらどうなっていたのやら。その光景を見て腹を抑え、肩を震わせながら必死で笑いを堪える西条辺りは分かつてそうだが。

第四十話。

糸のような月が、天高く、細く輝いている。

「そっちに行つたでござる！犬塚、止めろおおおつ！」

蒼白く、酷薄な色を見せつけながら。

「了解！ 長老、右翼を頼みます！ せりやあつ！」

僅かな臍を絹衣のように靡かせながら。

「二対一で当たるでない！ 確実に一体ずつ片付けるんじやつ！」

——下界の争いを眺めるのみ。

「うひー?! 新手だーっ！」

「なんのこれしきっ！」

「・・・眠い」

「気合を入れんかーっ！」

月を崇める人狼たちと。

「犬飼！ 犬塚！ 左の補助に回るんじや！ 急げ、抜かれるぞっ！」

—— 巨大な顎を開いて、彼らに襲い掛かる蛇の様な化物達の乱舞を。

新月の次の夜。

僅かな月の光と、何時もは月の光に抑えられて届かない、小さな星の光が地上を照らすその夜に、人狼の里は、何者かの襲撃を受けていた。

敵は——人狼達は知らないが——『ビッグ・イーター』と呼ばれる、とある魔族の眷属。

その牙は禍々しく月光を跳ね返し、その体はぬらり、と闇から湧き出すようにして現れ、その一撃は素早くも強烈、狡猾。

個々の能力では人狼に軍配が上がるとは言え、何よりも問題だったのはその数。小さな里に対して、50匹ほどの数が投入されていた。

人狼の里を包む結界は既に無い。そもそも、戦いの始まりを告げたのが、超感覚を持つ筈の人狼の見張りの上げた声ではなく、結界が破られたその衝撃。

堅固な結界を破るだけの何かがあったのか。それとも、破るだけの力を持つ何者かが居たのか。

「ふう。．．．ふむ、あらかた片付いたか」

「怪我人、死人共に無し。皆、修行だけは怠っていないようですな」

ようやく落ち着いてた辺りを見回し、長老が終わりを告げる。やってきた犬飼、犬塚達も、気は抜いていないが刀を鞘に納め、仲間を見渡していた。

「さて。一体全体何が狙いでござるか、こやつ等」

犬飼が足元に転がるビッグイーターの死骸を鞘付きの刀でつつきながら視線を長老に向ける。

「自然な物とも思えんが、女子供に護衛としてつけた者達からも被害無し、と聞いておるからのう」

「陽動ですか?」

顎鬚を扱きながら考え込む長老に、不図、思いついたように答える犬塚。

「だとすれば、本命はなんじゃ?」

「この里に、そんな大事な物があつたでござるかなあ?」

辺りに転がるビッグイーターの死骸が完全にその生命活動を止めている事を確認し終えた犬飼も、懐から取り出した布で刃金を拭きながら合流する。

「・・・倉は?」

「あ」

「長老ー! 倉が、倉が荒されてっ!」

ほん、と手を打ち鳴らす二人の後ろから、戦闘能力の低い女子供に、シロタマと一緒に護衛としてつけていた人狼の一人が慌てた様子で駆けて来る。その言葉は奇しくも長老の問いに対する答えとなっていた。

「中にあつた八房と、犬塚殿のアレが無くなってますー!」

「「なにいいいっ!?!」」

三人は、顔を見合わせると慌てて倉の方角に駆け出していったのであつた。

辿り着いた其処には、無残に扉の吹っ飛んだ、里の宝が置いて「あつた」古めかしくも重厚な倉が彼らを待っていた。

「無茶をしおる」

「こりや、よつぼどの馬鹿力がやったようだな」

「むう、厄介な」

その入り口を塞いでいた分厚い鉄の扉は、今は少し離れた所に捻じ曲がり、中ほどから二つに裂けかかって無残な姿を晒していた。

「・・・長老、この匂い」

「ふむ」

辺りを鼻を鳴らしながら探っていた犬塚の言葉に、長老も同じく匂いを嗅ぎ取り始める。

「・・・妙な匂いじゃない」

「ええ。・・・人と、魔と、蛇。それから、これは・・・っ?!」

「馬鹿な」

三人とも、同じタイミングでその匂いを嗅ぎ分ける。驚愕と、焦りをその表情に乗せながら。

「・・・狼、でござるな。しかも、人狼の」

犬飼の言葉が、闇の中に溶け込んでいった。

暗い暗い闇の中。誰かが歩く音がする。

足音は辺りの壁に反響し、前後に続く長い通路に木霊する。

足音の主は、手に持った刀と箆手、頭環を弄びながら歩きつつける。左程も無くその前に、大きな目の木製の扉が現れた。

迷わずその扉を足で蹴り開け、中にならずかと踏み込んでいく。

「メドーサ、居るか？」

「うるさいねえ……静かにしてくれないかい？」

其処は、広さにして少し大きめの広間、と言う所だった。その中には様々な機械が転がり、不気味な音を立てながらひたすらに何かをこなしている。

「おお、陰念君。首尾は上々のようだね」

その部屋の中心近くに設置された、書類や細かい数字の書き込まれたメモ用紙を掻き分けて顔を出したのは、スーツ姿の、駅にでも立っていればそれなりのエリートに見えない事もない、目つきは鋭く顔は整っているが、どこか冴えない雰囲気を持った男だった。

彼は不自然なまでにこやかな表情で陰念に歩み寄り、彼を上から下までじっくりと眺める。

「ふーむ、外見的には異常無し。どうやら、実験は成功かな？」

「まだだろうか？」

満足げに頷く彼の背後から、先程まで壁に持たれかけながら書類をめくっていたメ

ドーサが何時の間にか現れ、彼に向かってそう言い放つ。

「……まあ、確かにこれからが本番なんだが」

「特に問題はねえよ。未だにこの敏感すぎる感覚には慣れねえが、な」

そう男に告げる陰念の姿は、以前のGS試験の時とは僅かに違っていた。体のあちこちを覆う鱗と、蛇眼はそのままで、狼の尻尾が生え、爪や牙と言った部位の鋭さが増し、鱗に覆われていなかった部分を新たに白い獣毛が覆っていた。

最早人の残渣はその形だけでしもなく。

既にその姿は、人であることを捨てた、化け物。

陰念は頭を振りながら、手に持った今回の作戦の収穫の一部を、メドーサと男性の前に差し出す。

「おら、人狼どもの群が後生大事にもってやがった刀だ」

「おや、そつちは出さないのかい？」

方眉を跳ね上げ、愉快そうに陰念に尋ねるメドーサ。

「ふん。ほしけりや自分で取ってきな」

「結構。気に入らない匂いがプンプンするよ」

「たいして興味もそそれなかつたのか、そのまま視線を男性にずらし、話かける。」

「それで、どうなんだい？行けるのかい？」

「ええ。安定しているようですし、後はこの文献に載っていたように——」

男性は懐から一冊の本を取り出し、ページをめくる。「著：ドクター・カオス」とか書いてあったりする辺りが嫌な予感を掻き立てる。

「その刀を使って、魔力をかき集めるだけです。現在、スカリーの方が手頃な霊能力者を当たって居る所ですが、選定が終われば後は実行するだけですな」

「・・・魔狼、フェンリル。北歐神話に語られる、最古の魔獣の一体、か」
「怖気づきましたか？」

唇を歪めて、男性に視線をやる。

「力が欲しい、と言ったのは俺だぞ？今更何を恐れる必要がある」

後悔は無く、恐れも無い。

在るとすれば、狂おしいまでの渴望と、歪み。それはもう戻る事は無く、ひたすらに螺旋を描いて進むだけ。彼は、鞘から妖刀を引き抜き、凄絶な笑みをその刀身に映し出した。

「と、言う訳ですじゃ」

「あんたらねえ・・・」

「兄上ー！」

「忠夫ー！」

「止めんかー！」

「シロ・・・父は、父はっ！」

「犬塚、刀を抜くなでござる」

「ええと、お茶は何人分・・・」

『ああ・・・また妙なのが私の中に』

「・・・成る程ね。妙な気配の原因は、人狼との混血だからか」

人狼の里襲撃から一週間後。東京、GS美神除霊事務所には、忠夫の伝手を求めて其処を訪れた里の連中が騒いでいた。

仕事が終わってご飯を奢って貰い、ご満悦で帰ってきた忠夫と、報酬が増額されてほくほく顔の美神、それを微笑ましそうに眺めるおキヌが事務所に帰ってきてみれば、玄関の前に佇む時代錯誤な格好をした和装の男性3人と、こちらは洋装で固めたシロタマが待ち受けており。

忠夫が呐喊してきた二人を何とか受け流しつつ、里の皆を紹介し、なんとか事務所内で落ち着きを取り戻すまでに掛った時間が15分。

長いと見るか短いと見るか、微妙なラインである。

忠夫は未だにシロタマにじゃれ付かれているし、犬塚父はそれを見て既に鯉口切っており。茶を啜りながら犬飼ポチは注意するも、確実に止める気は無し。おキヌは全員分のお茶を入れ終わった後お茶菓子を探しに台所へ。人工幽霊は忠夫の同属が増えた事でちよつと焦っている。

たまたま用事が在って美神の事務所を訪ねてきていた西条は、始めて忠夫に会った時から感じていた感覚を、そう言う事かと一人納得している。

そして、一応それぞれのリーダーである美神と長老は、互いに向き合って今回の来訪の理由と話し合いをやっていた。

長老は既に慣れているから隣の喧騒はスルーしている。美神が騒がしさにちよつと眉をひそめているがまだまだ許容範囲内であるからして、目が半眼になってしまう事以

外は特に問題なく話は進んでいった。

「ふーん。つまり、その妙な匂いを持った奴が犯人で」

「うむ。しかも盗まれたのは八房という至極厄介な代物でな。．．．しかも、犯人は複数犯らしく、幾つもの匂いが残っておった」

「とうとう?」

長老は、指折り数えながら現場に残っていた匂いを並べていく。

「まず、人間の匂い。それから、蛇のような匂い。」

「．．．へ〜」

このあたりで美神の靈感に嫌な予感が走り始める。

「それから、魔族」

「．．．ふ、ふ〜ん」

美神の靈感が、嫌な予感を全力で喚き散らしている。後ちよつと前の記憶もばんばん刺激していたりする。

「．．．最も危険なのが——人狼らしき匂いもあつたと言う事」

「げっ?!長老、マジっすかそれ?!」

その言葉に忠夫はシロタマを払いのけて長老に話し掛ける。人狼の里で暮らしていただけのことにはあり、八房を盗んだ相手の中に、人狼が居ると言う事の危険性を良く分

かっているのだから当然と言えば当然なのだ。

「あー、ちよつと良いかな？ 僕の方からも、少し聞きたい事があるんだが……」

其処に西条が、懐からメモ帳を取り出しながら話し掛けてくる。

「僕が此処に来たのは、少々妙な事件が起こっているからなんだよ。最近、そう、2、3日くらい前からかな。そこそこの実力を持ったGSが何人か、ある依頼を受けた直後に姿を消していてね。そのうちの一人が、霊刀で切りきざまれた、無残な姿で発見されているんだ」

「……動き出しておるか。どうやら、そちらの方とも無関係では無いようすな」

苦虫を噛み潰した表情で、長老が西条と美神に向かって話し出す。忠夫はシロタマに引きずられて再び蚊帳の外へ。犬塚父の手の中で刀がかちやかちやと音を立てているが、一応まだ堪えている。

「妖刀『八房』……あれが、妖刀と呼ばれるのは、断じてその一振りです八つの斬撃を繰り出すという能力が理由では在りませぬ」

「充分すぎるほど厄介では、あるわね」

ソファアの上で足を組み、頬杖をつきながら呆れた様に呟く美神。しかし、長老はそんな美神に向かって首を振ってみせる。

「あれは、『八房の剣』は大昔、人狼の天才鍛冶が一本だけ作り上げたモノ。それは、切

りつけた相手のエネルギーを取り込み、「狼王」の封印を破る為の起爆剤となるものなの
ですじゃ」

「狼王……フェンリル狼?!」

「左様……」

長老は続ける。重い溜め息と共に。

「我ら人狼は、太古の魔獣の流れを受け継ぐ者達。「狼」は「大神」に通じる、強力な言
霊でもありますじゃ。故に、八房とはその魔獣を開放するに最も手早い手段となり得て
しまうんじゃよ」

「北欧の神話に語られる、まだこの世に神と精霊が満ち満ちていた頃に、数多の神を殺
し、世界を滅ぼしかけた怪物……!!」

何時の間にか長老の後ろに立って、左右に控えていた犬塚と犬飼も頷きを返す。

「その危険性、分かってもらえたようでごさるな」

「人狼の匂いを持った者の狙いは、確実にフェンリルの血の開放。世界が滅びるかもし
れん以上、捨て置く訳には行かんからな」

5人は視線を交わし、頷きあう。そして、

「——で、報酬は?」

美神のその一言で他の4人がよろめいた。

「せ、世界が滅びるかもって時に何を言い出すんだい令子ちゃん!」

「それはそれとしてー。依頼でしよ、これ」

ソファアールから立ち上がり、輝く笑顔を魅せ付けながら。

「なら、契約はきちんとやつとかないと、ね?」

ウインクを送って来る彼女に、西条は掌で顔を抑えて疲れたように溜め息を吐き出した。人狼達は人狼達で3人しやがんでコソコソと話し合っている。

「・・・うちの里に伝わる、隠し銀山の位置でどうじゃ?」

「オツケー。それじゃ、いっちょ頑張ってみましょーかねー」

「軽い、軽いよ令子ちゃん」

何となく達観してしまった西条は、頭を振り振りとりあえず、他の戦力になりそうな面子にでも当たってみようかな、と考えていた。不図、辺りを見回す。

「そう言えば、横島君とあの子らは何処にいったんだい?」

忠夫とシロタマ、おキヌが何時の間にか消えていた。

『女の子達に散歩だとかご飯だとかで引きずられていきましたか?』

何処からとも無く響く声。どうやら、人工幽霊一号は気付いていたようである。止めないあたりがなんともはや。それを聞いた西条はすっと肩を落とした。

「……もうちよつとこう、何と言うか。いや、もう良いよ溜め息をつく和幸福が逃げる。」

「いい加減止まらんかー！」

「久しぶりの散歩でござらんか〜」

シロに襟首を掴まれて、ひたすらに道路を引きずられていく忠夫。と言うかその体が殆ど地面と平行になっており、鯉のぼりのようである。

「何処まで行く気じゃー！」

「……とりあえず、女狐が来ない所まででござるよ〜」

全力で街中を駆け抜けるシロの後方には、幽霊の少女とタマモが必死で追いついてきた。そちらの方を見もせず、ひたすら直線に走っていくシロ。交差点のあたりは大きくジャンプして車が来ても大丈夫なようにしているあたり、長老の苦勞もほんの少し

だけ報われているようだ。

そもそも街中でそんな事をしちゃいけないのだが。

「まてー！シーローー！忠夫は置いていきなさいー！」

「嫌でござる〜!!」

更に加速しながら高速で曲がる。遠心力で忠夫の襟首がちよつとずれて首に食い込み、酸欠に陥っているのに気付かない。

「横島さん、大丈夫ですか？」

空を飛んで道をショートカットし、なんとか先回りしてきたおキヌが忠夫に捕まりながら話し掛ける。

「だ、大丈夫じゃないい．．．」

そう言い残し、忠夫は土気色の顔で落ちた。

「横島さーん?!」

南無。

とは言え一応緊急事態。彼女曰く「散歩」も程々に切り上げ、夕闇迫る街路を気絶した忠夫を担いで事務所に向かう。

「ふんふんふん」

「・・・タマモ、そろそろ疲れてきたのではござらんか？」
「ぜんっぜん！」

鼻歌交じりに忠夫を背負い、シロの物欲しそうな視線と言葉も何のその。タマモは上機嫌に歩いていく。

自分よりも小さな女の子に背負われて、しかも街中、帰宅時間真っ最中。人目は多く、殆どの人々が笑いを堪えたり、微笑ましそうに見ていたり、驚いたように一瞬固まって通り過ぎて行ったりしている。

起きた時にどう説明した物か、おキヌが悩みながらふよふよと付いていく。

幸いなのかどうかは知らないが、忠夫が事務所に辿り着くまで目を覚まさなかつた事と、結局タマモが一人ですつと背負っていた事は記しておく。

「遅いつ！」

「いや、今回俺はなーんも悪くない気が・・・」

「煩い！ 霊能力者狙いの危ない奴が居るんだからとつと帰ってくるのが当たり前でしょ?! あんまり心ば——あー、もうっ!!」

「まあまあ、美神さん」

何時も通りと言えば何時も通りな光景の後。

とりあえず行方不明のG S達の情報をかき集め、また最後に受けたと思われる依頼を協会のほうからも当たって貰った西条が報告する。

結論から言えば、協会のほうからは大した情報を得る事が出来なかつた。

「G S協会を通さない依頼ねえ・・・やっぱいい匂いがプンプンするじゃない」

「それでも彼らにとつては、魅力的に過ぎる報酬でも提示されたのだろうさ」

また、G S達の情報でも、特に共通点は見つからなかつた。強いて言えば――

「へー。そこそこ、だけどそんなに強くは無い相手を確実に選んでるみたいすね」

「ああ。G Sはそんなに大量に居る物じゃないが、情報さえあれば確実にその力を知ることが出来るからね」

力量不足が、即、最悪の結果につながる職業であるからして、個々の能力自体はそれなりに把握されている。また、どのような依頼をどのようにこなしたのか、なども報告書をG S協会に上げる関係から、在る所には在る情報となつてしまつている。

「つまり、G S協会の中に関係者がいるってことすか？」

「いいえ、そうとは限らないわよ。依頼者の方だつて誰に依頼するかを選ぶんですからね。ある程度の情報は簡単に得られるし、別に馬鹿正直に怪しい内容の依頼をしなくて
も」

「成る程。後で直接本人のところにも出向けば良いって事っすね？」

「ま、口止め料込みとか言つて多額の報酬でも約束したんでしょーよ」

除霊の依頼自体は数多くあり、依頼者が個人であろうが会社であろうがそれなりに報酬とGSの実力を比べてから、GS協会に依頼しに訊ねて来る。GS協会が依頼の斡旋をしているのも確かである事から、調べれば有力な情報も出てくる可能性が在る。

とは言え、当然の如く膨大な数の資料と格闘してから求める情報を引き出す必要も出てくる。

結局の所、尻尾を掴むには、

「時間が足りないわね・・・」

何時フェンリルが復活するとも限らない状況で、呑気に紙と睨めっこしている訳にも行かず。

「情報を集める傍らで、こっちの罠に引っかかってくれるのを待つだけ、か」

苦々しげな西条の一言でとりあえずの方針は決定となった。

「既に何人かのGSに声を掛けてある。怪しい、高額な依頼がきたら直ぐに連絡を入れてくれるように、つてね」

「よくオカGに協力してくれたわね。商売敵なのに」

「ま、伊達に命懸けで公務員やってないさ」

美神に余裕でウインクし、そう嘯いてみせる西条。忠夫達は既に西条が集めてきた資料検索を開始しているが、そもそもそういつた事がどう見ても得意には見えない連中である。

「長老、これなんて読むんだ？」

「ふむ。英語は分からん」

「それっ！」

「くっ！拙者の紙飛行機の方が飛ばんとはっ！」

「タマモばかりずるいでござるー！」

「うっさいわね！燃やすわよ?!」

『火事はイヤーっ！お願いだから止めて下さいっ?!』

騒々しい。ひたすらに無駄な努力をしているどころか、ほぼ過半数が既に別の事をやっている。

おキヌが少々トラウマっているのは秘密だ。誰のせいかは言うまでもないが。

「一応機密書類なんだから、そうむやみに扱わないでくれっ」

西条も、さつきまでの余裕が欠片も無し。慌てて隣の部屋に駆け込んでいく。

美神はそれを見送り、溜め息をつきながら。

「……全く。人狼っていうのはあんなんばっかりなのかしら？」

それはまともな人狼に失礼だ。居ればだが。

「やあ」

さてさて始まる月の宴。

夜に吼える狼が、凱歌を歌う魔の者が。

闇に落ち行く一人の人間が、人と妖の狭間にある者が。

手に手を取って踊り狂う。

狼、神、魔、蛇、そして人。

魔を鎧うあの術を、人が使つて魔に堕ちた。

人を嫌う狼が、人を好いて証を創った。

彼らの先にある物が、彼らに何かをもたらす時。それが始まりそして終わり。それでも、いや、「だからこそ」彼らは求めるのだらう。

—— 君が求める終わりとは、なんだい？

—— 僕達が求める始まりとは、一体なんだと思う？

—— ああ、いい月だ。

—— それでは、再び会う時が来る事を祈って。

—— 良い夜を。

第四十一話。

「一般企業から個人、団体、政府……あー、もうっ！絞りきれぬ訳無いじゃないっ！」

「美神さん落ち着いてっ！ほら、美味しいお茶が入りましたよ」

「……ありがとう、おキヌちゃん」

おキヌの差し出した湯飲みを受け取り、ほかほかと湯気を立てるそれをふーふーと冷ましながら更に手元の資料を捲って行く。

ずらずらと一枚の紙に並ぶのは様々な依頼者の名前と簡単な依頼内容。ざっと見ただけで50件近くある。そんな紙があと数百枚もあるのだ。しかも、其処から怪しいと思われるような物を抜き出し、更に詳しい報告書を探し出す。

最早、苦行と言つても差し支えないだろう。

「西条さん、そつちのほうはどうなの？」

隣で同じように資料をあさつていた西条に問い掛ける。しかし彼も頭を振って疲れたように溜め息を吐くだけである。

「正直言つて限が無いね。幸いなのは、GS達の行方不明事件が此処4、5日は起きていない事だけ……」

長老たちが里の襲撃を告げ、八房が盗まれてから早一週間。資料の特定は遅々として進まず、また犯人の方も動きが無い為手がかり無し。

「美神さーん、この資料何処おきましょーか？」

「あー、そっちの方に寄せといて。反対側の奴は終わったのだから、混ぜたら・・・捻るわよ？」

「・・・りよーかい」

顔色を青くしながらも、新しく資料の束を運んできた忠夫がゆつくりと動き出す。足元には何枚もの紙が散らばっているので、踏んで滑って転んだりしたら即しつけ開始となる。

慎重に、慎重に足を進める忠夫。

しかし、まあ。不幸とは防ぎきれないから不幸な訳で。

「兄上ー！散歩にいくでござる〜！」

今日も元気にドアを開け、忠夫に跳びつくシロさん。慎重に歩いていた忠夫は、足元に全神経を集中させていたので。

「ば、馬鹿たれ〜!!」

受け止めきれずに大転倒。手に持った紙は空を舞い、転んだ忠夫は資料に突っ込む。

当然おキヌの手によって現在進行形で整理中だったそれはあっさりと散らばり、目も

当てられない惨事を引き起こす。

「シロー！武士の情けじゃー！今すぐ退いてくれー!!」

「へ？」

忠夫の涙ながらの必死の懇願に、忠夫の上に馬乗りになったシロはきよとん、とした顔で見えてくるばかり。いや、たつた今引き攀つた。

怯えている。勇猛果敢な人狼族が、尻尾を丸めて何時でも飛びのける体勢である。

「よーこーしくまああつー!」

「キャインキャインキャインツー!」

シロはあつさりと忠夫の上から飛びのき、部屋の隅で小さくなって唸り始める。

忠夫は、油の切れたロボットののような動きで首を動かし、声の聞こえた方を見る。

鬼と鬼女と黒いナニカが居た。

「こ、今回も俺は悪くないー!」

恐怖で思わず尻尾が飛び出る。ちなみに、今忠夫は部屋で資料漁りをやっているため、汚したくないからとジャージ姿である。何時ものジーパンに比べてベルトをしていない為、尻尾があつさりと外に出てしまうのだ。

美神は忠夫にゆっくりと歩み寄り、仰向けの忠夫を伸ばした神通棍で引つ掛けてうつ伏せに変える。

「捻るって、言ったわよね？」

にこやかな微笑みは、迸るほどの怒りと共に。

「尻尾は、尻尾は止めてー!!」

「この馬鹿つたれがー!!」

事務所の一室には、しばしの間尻尾を思いつきり捻られて悶える半人狼の悲鳴が響いていたという。

ちなみに、本当に嫌がるので真似しないように。

「ち、千切れるかと思った」

「急所を攻める見事な攻撃でござるな」

「お前のせーだろがー！」

「これ以上騒ぐようなら纏めて保健所に送るわよ?」

「……………」

ぎゃんぎゃんと五月蠅い狼達を視線と言葉で黙らせて。再び美神は資料を捲り出そうとした所で。

「……………」と、電話のようだ。少し出てくる」

懐から消音モードの携帯電話を取り出し、西条が部屋から出て行った。

しばし、部屋には黙々と紙を捲る音と、おキヌが書類をてきぱきと整理する音だけが響く。

人狼達は正座しながら反省中。

「シロ。お前も親父達と一緒に外に行ったら良かったんじゃないか?」

「拙者とタマモのどちらかが、もしもの時の連絡係として残っていた方が良いと言ったのは長老でござる。ジャンケンで負けた狐が悪いのでござるよ」

タマモが悪いと言いながらも、忠夫の隣で正座して、息が掛るほどの距離でぼそぼそと会話するシロは何処となく幸せそうに見えたりする。

その時何処かで、狐の少女が何となく腸煮え繰り返る思いをしていたとかしな

か。

「俺が連絡係やりやいいじゃねーか」

「兄上はそれなりに手伝いが出来たではござらんか」

つまりはこういう事だ。事務所に残っていても、それなりに役に立つ忠夫や長老はともかく、シロタマ親父達は全くの役立たずであり、それどころか放っておくと退屈したり、喧嘩したりで無軌道に騒ぎを起こす為、見回りのお題目で外に放り出したのだ。

長老は引率で付いていった。何かを諦めたような目だけがやけに忠夫の記憶に残っていたりもする。

「——令子ちゃん！」

そんなこんなでぼそぼそと話していた二人の横の、ドアを蹴破る勢いで西条が携帯片手に戻ってくる。

「来たぞっ！ぼろぼろのGSが一人保護された！行方不明になっていた内の一人だっ！」

素早く立ち上がり、それぞれに動き出す美神達。忠夫は霊媒道具を一揃い取りに行き、美神は車庫に車を回しに行く。おキ又は西条から詳しい話を聞くと、保護されたGSの情報と最近受けた依頼の書かれた書類を何枚か選び出し、そのまま美神を追いかける。

シロは迷わず部屋から飛び出し、事務所の屋上に上ると遠吠えを始めた。
「今、シロが親父たちを集めてます！」

「おキヌちゃん、人狼達が戻ってきたらそのまま待つように伝えてっ！」

「はいっ！」

「西条さん、場所は何処っ?!」

車庫に集まった美神達は、おキヌの手から書類を受け取りながらそれぞれの車に乗り込み話す。

「白井総合病院だっ！」

「……あー」

一体何を思い出したのやら、それまでの緊迫した空気は飛んでいき、何となくゆっくりと車に乗り込む美神と忠夫。

西条は既に車を出し、一足早く病院へと向かって道路に飛び出た。

美神達は、ゆっくりと腰を落ち着け、シートベルトを確認し、前方、後方、左右確認まできつちりとやった後——何故か忠夫も美神と全く同じタイミングで、同じ方向に首を動かしていたが——、ゆっくりと車庫から這い出るように車を動かし始めたのだ。た。

そして到着白井総合病院。

病魔を投げつばなしジャーマンで倒したと言う、一般人が聞いたら微妙を通り越して黄色い救急車一步手前な経歴を持つ、某医師が勤める病院である。

「おや、美神さん達じゃないですか。オカルトGメンの方なら、えーと」

玄関をくぐり、患者が沢山座っている待合室のソファの前を通り過ぎ、受付に辿り着いた所で、たまたま通りがかつた白髪眼鏡、初老の「除霊」医師が話し掛けてくる。

ちなみにこの医師、除霊を経験したからと言って霊媒の方に興味を持ったかと言うと、そう言うことが全く無いらしい。

あくまでも己は医師であり、霊能力でなく、医術を用いて人を救う事に誇りを持って

いるから、だそうである。

とは言え、プロレス技で除霊する医師と言うのが一人くらいいても良いかなー、とか思ったのは本人だけしか知らない秘密。

それはともかく、GSだと言う事を知っている為か、はたまた西条が既に話を通しておいたか。まず間違いなく両方であろうが、さつさと必要な情報を教えてくれるのはありがたい。

「ありがとっ！」

「私の患者だ、あんまり無理をさせないでくれ。意識は戻ったが体力の減少が激しい。命に別状は無いと言っても、怪我が体中にあつて、しかも、何度も回復した頃を狙って刃物で切りつけられている。・・・正直、医学に関る者として、怒りを堪えきれんっ！」

その医師は、そのままの勢いで走り去ろうとした美神に、視線は手元のカルテに落とすままに聞こえるように呟く。

思わず足を止めた美神は、忠夫に目線で先に行くように促すと、自分は足を止めて医師の前に立つ。

「それって、どういう事？」

「怨恨かとも思ったが、分かんたし細かいようが無い。傷は必ず致命傷にならないように、大きな血管や臓器の在る胴体を避けていた。また、傷は小さく——と言っても、そ

れなりの裂傷だが、それでも、何と言うか、こう……」

其処まで言つて、始めて視線を上げて美神を見る。

「まるで、鉛筆の芯を削るように、と言うのが一番近い。人間の仕業とは思いたくないぐらゐの、ね」

その目には、確かに怒りが色濃く浮かんでいた。

「私も、そう願いたい所だけどね……。悪魔より怖い人間つてのも、結構居るわよ？」
美神が病室の前に辿り着き、ドアを開けて中を覗き込むと、ちようど西条がベッドの横の椅子から立ち上がる所だった。忠夫はその後ろで突つ立っている。

「……ありがとう、必ず、この情報は役立てる」

美神の居る場所からは衝立が邪魔になつてよく見えないが、患者が、包帯で幾重にも巻かれた腕をほんの少しだけ持ち上げ、西条に手を伸ばしたのだけは見えた。

西条は、その手を取つて安心させるように笑いかける。

その笑顔を見た時点で、その腕は力を無くして垂れ下がった。西条は、そつとその手をベッドの上に戻すと、厳しい顔でドアに向かつて歩いてきた。

「……此処で話せるような事じゃない。詳しい話は事務所に戻つてからにしよう」

「ええ」

二人は、振り返らずにゆつくりと部屋を出て行つた。

最後に残った忠夫は、音が出そうなほどに歯を食いしばると、おもむろに顔の前で手を合わせ、頭を下げると音を立てないように慎重にドアを閉め、出て行く。

病室には、機械の立てる音と、ゆっくりとした患者の呼吸音だけが残った。

「・・・成る程。そう言う事でしたか」

「ええ。おそらく、何度も何度も霊力が回復した頃に斬り付ける事で、霊能力者からエネルギーを集めていたようです」

事務所に戻って、シロの遠吠えを聞いて戻ってきた人狼達と一緒に作戦会議を始める。とりあえず、最も有力な手がかりとなりそうな情報が飛び込んできたのだ。

今は感情を抑え、冷静に思考する時である。

「そして、彼——つくそつ!・・・いえ、失礼。彼が言うには、捕らえられていた牢屋のような所では、他にも何人かの霊能力者らしき声が聞こえていたということですから」

そのGSは、確かに命は助かった。だが、体中に刻まれた傷が癒えるかどうかはあの医師に期待するしかない。

とは言え、西条が六道家や心霊治療の使えるGS達に連絡を取り、打てるだけの手は打つてあるのでそう心配は無いだろう。

だからと言って、自然と言葉に籠る怒りを消せはしないのだが。

「そして、凶器は刀。おそらく、間違いないでしょう」

落ち着け、と自分に言い聞かせる声だが、幾つも聞こえる気がする。

「場所は、此処。・・・樹海の真ん中です」

「決行は何時?」

地図を指し示した西条に、長老が目線で頷きを返すと同時。その横に立った犬飼ポチから声が掛けられる。

「今、月は半月よりも前。これ以上待つていてはフェンリルの復活の可能性が高くなるばかり」

その先を、美神が引き継ぐ。

「今晚、一気に夜襲を掛けるわ。フェンリル狼が出てくる前に、片付ける」

そして、それぞれその言葉に頷いた彼らは、ばらばらと準備をしに散っていった。

「・・・美神さん」

いや、忠夫だけは椅子に深く腰掛けた美神に向かつて話し掛ける。

「本当に逃げ出したんでしようか？それとも」

「五分五分ね」

短い言葉ながらも、意味は通じたようだ。二人の視線は、座った美神と立った忠夫で高さに違いはあれども、しっかりと絡み合う。

「悪い方に転がったら・・・」

「どうする?」

美神が、挑発的な視線を飛ばす。しかし忠夫は、あっさりとそれを受けると、苦笑いを返してこう言った。

「後ろを向いて全力前進っ!」

「・・・ま、間違っちゃいないわね」

美神も、思わず苦笑いを零してしまうのであった。

「さて、種は撒いた。後はあつちがどうでるか、だな」

「陰念、もう良いのかい？」

「こつちは充分なデータが取れた。君も一緒に此処から引き上げたらどうだね？」

先日まで、昼も夜も動いていた機械の姿はもう無い。本棚に並んでいた書類やファイルも姿を消し、残っているのは大きな机と椅子、僅かばかりの家具だけである。

その部屋の真ん中に立つ陰念は、メドーサと男と問いかげに、鼻で笑って答える。

「ああ。世話になった」

「ふん。こつちも元は取れた。あとは何処でなりとも野垂れ死ぬがいいさ」

「非常に残念だが、仕方ないか」

もう興味を無くしたメドーサは、あつさりとした様子で部屋を出て行く。男は何度もただ呆けたように立つ陰念を未練がましく振り向きながらも、ドアを開けて出て行つ

た。

「魔族」

鱗で覆われた腕を見る。

「人狼」

その手を持ち上げ、指を開く。

「・・・人間」

爪は、鋭く伸び、土壁くらいなら簡単に切り裂けるような気がした。

「・・・答えを知ってそうなのが、お前しか居ないんでな。悪いが、付き合ってもらおうぞ」
開いた指を握り締め、拳を作るとゆっくりと下ろしていく。

「——美神令子」

へリコプターと言う物は、煩い。

「いーやー！お家帰るー！」

「ええいつ！落ち着かんか馬鹿息子ー！」

「兄上っ！こんな所で靈波刀振り回さないで下されー！」

しかし、今回の荷物はその騒音よりも大きな音で暴れていた。

「嘘やー！鉄の塊が空を飛ぶわけないんやー！」

「・・・そ、その通りじゃ。つまりこれは鉄ではなくて鉄みたいな何かじゃからして斬っ

ても大丈夫じゃからしてっ?!」

「長老っ?!あんたもかー!!」

犬飼父が息子をpushさえ、犬塚親子が長老をpushさえると言う、おそらく初めてではなからうかという状況で、美神達はそれを呆れた様に眺めていた。

「タマモ・・・だったかしら?あんたは大丈夫なの?」

「・・・あんだだけ混乱してるのを見ちゃうと、逆に落ち着いちゃうのよね」

「頼むから操縦の邪魔はしないでくれよっ?!」

操縦席の隣に座る西条が、悲鳴のような声を上げる。というか悲鳴。

操縦士の方はと言うと、低空飛行で木々をすり抜ける、神経を使う飛行中に、後ろで大騒ぎするような奴らに乗せると言う初体験に胃が痛み始めるのを感じていた。

「見えましたっ！とつとと降りてくださいいっ！」

「わ、分かった分かった。ほら、皆行くぞっ！」

未だ病院にて治療中のGSが指し示したその場所には、薄汚れた屋敷が建っていた。

道らしき物は続いているが、実際の所舗装された様子も無い、殆ど獣道のようなその道が、何故か草に覆われた様子も無く、薄い月の明かりで見取れた。

「どうやら間違いないようだ……。あーもうっ！令子ちゃんっ！」

「はいはい。全く、おりゃあっ!!」

美神の振るった神通棍は、騒ぐ忠夫と長老を吹き飛ばし、ついでに押さえ込んでいた犬飼父と犬塚親子も吹っ飛ばす。

「ほら、さっさと行くわよ」

「……はああ」

神通棍を納めた美神と、溜め息をつくタママがそれに続く。

「協力、感謝するっ！」

「もうああいう荷物は勘弁して下さいっ！」

「前向きに善処するっ！」

最後に、何気にうそ臭い台詞を吐きながら西条が飛び降り、それを確認してから、へりはそのまま夜空に上っていった。

このまま一旦引き返し、燃料補給した後近くの広場で待機、連絡と共に迎えに来る手はずになっている。

「全員いるか？」

「全員居るわよ、西条さん」

「人狼＋α、皆無事でござるよ」

「その＋αって私の事？」

西条が地面に降り立ってみれば、先程叩き落された筈の連中は何事も無かったかのようにな勢ぞろいしているし、タマモとシロにいたっては今すぐにでもじゃれ合いを始めそうなくらいには元気である。

長老と忠夫の顔は少し青ざめていたりするが。

「目的地はあちらだ。何せ情報が足りないから警備体制や向こうの戦力さえも分からない」

背後を親指で指しながら、西条が面々に告げる。

「だが、今は巧遅よりも拙速を取るっ！あくまでも今回の第一目標はGS達の保護、それから八房を奪った犯人の逮捕だっ！全戦力を正面にぶつける！後は臨機応変に行けっ

!!

『応っ!!』

闇に包まれた森の中を、一塊の集団が駆けて行く。目的地は直ぐ其処、向こうにそれなりの設備、若しくは警備体制があれば既にへりを使った時点で察知されていてもおかしくは無い。

長老たちの話によれば、フェンリル狼が復活する為に必要な物は、膨大なエネルギーと満月。

G S達が囚われた時間と、行方不明の人数。はつきり言っただれほどのエネルギーが必要なのか、人狼達も把握していなかった。実際に使われた事も無く、また、そのフェンリルを復活させるという話が真実なのかどうかも分からない。

——だが、もし。逃げ出してきたG Sが、実際の所、罠だとしたら？

——いや、未だ満月に満たないこの時期に、そんな事をする理由が無い。

だが、美神、西条、いや、ほぼ全員の胸に、嫌な予感が膨らみつつつけていた事を、本人達しか知らなかった。

「……妙でござるな」

「ああ、気配が少なすぎる。さては既に逃げたのか？」

先頭を行く犬飼父と犬塚父。超感覚を持ち、また長年の付き合いからほぼ完璧な連携を誇る人狼二人が前を行き。

「ん〜、やな感じだ〜」

「ぶつくさ言わない。ほら、ちゃんとあたりに気を配るっ!」

他のメンバーに比べて多種多様な戦術を誇る美神と、その助手である忠夫が続き。

「頼むから静かにしてくれ・・・」

「ま、今更じゃない?」

司令塔の西条が、ほぼ集団の真ん中に居り、その隣に幻覚、狐火の遠距離支援型のタマモが付く。

「長老、どうかしたでござるか?」

「・・・ん、いや、何か、な」

最後尾には最も経験豊富な長老と、スピードならばトップレベルのシロが並ぶ。

屋敷の中は暗く、電気が使われたような形跡も無かった。

だが、何年もほったらかしにされてきたようなその古ぼけた2階建ての外観とは裏腹に、内部の通路には埃一つ積もっておらず、誰かがこの施設を使っていた事は間違いない。

狭く、暗い通路。精々人が3人、ギリギリすれ違えるかどうかと言った所である。

「全く、こんな事ならもうちよつといろいろ持つてくるんだったわね。神通棍と破魔札、精霊石、霊体ボウガン。そしてこれとこれ、か」

「充分重武装の類に入ると思うんだけどね・・・」

「あら、備えあれば憂いなし、よ？」

幸い、暗いと言つても今日は雲一つ無い空に、町の光も遠い此処なら月の光と星の光が充分に在る。

とは言え、夜間のお仕事が多いGS達は、自然と夜目も効き易くなるのであまり苦にはしていないし、人狼達はそもそも明かりの無い夜も、僅かな光で森を駆ける獣達。

僅かな気配の残滓を頼りに、警戒しながら前進する。

どうやら此処から気配がなくなったのは、ほとんど一日前位である事を、人狼の鼻が教えている。

「・・・逃がしたかも知れんな」

「なに、そうなればまた追ひ詰めるだけでござる。狩りは我らの本領、とは言え面倒くさいのは嫌でござるがな」

「——」
「ご期待に添えたようでは何よりだ」

空気が固まる。全員が瞬時に緊張し、戦闘態勢を整える。ある者は腰の刀を抜きはなち、ある者は靈波刀、狐火を作り出し、ある者は神通棍や靈劍を抜き放つ。

声は、壁に埋め込まれたスピーカーから聞こえてきた。

「ようこそ、待ちわびたぜ？」

「やっぱりあんただったわね、陰念」

「げっ」

美神と忠夫にとっては、スピーカーを通して幾分か聞き取りにくくなっているとは言え、忘れ難い声であった。GS試験会場にて、魔装術を暴走させ、そしてその暴走ごと、ある魔族の眷属を「喰らって」魔族へと堕ちた青年。

「そこから少し進んだ所にドアがある。待ってるぞ」

ブチン、と音を立ててスピーカーは沈黙した。

「・・・どーします、美神さん」

「このまま後方に進むのは駄目かしら？」

「・・・せめてGS達の確認くらいはやっておかないと」

「あの声の主は、そんなに厄介なのですか？」

集団の真ん中で、いったん方針会議を行なう。

第一目標であるGS達の保護、これが最も厄介な物であるが、同時に今回必ず果たさなければいけないものでもある。

果たして陰念がどのように絡んでいるのか、というか八房を奪われた現場の匂いからして、実行犯の一人である事は間違いないのだが。

「魔族ですか。しかも、人から堕ちた」

「はつきり言つてまともに遣り合えば、生半な戦力じゃあつさり返り討ちよ。正直ほつといてさつさと目的だけ果たしたい所だけど」

「・・・残念ながら、そうはいかないみたいっす」

何時の間にやら美神の隣から消えていた忠夫が、犬飼、犬塚と共に戻ってくる。

「親父達と偵察に行つてきたんすけど、あいつの指定したドアの向こうに、血の匂いがありました。しかも何人分かの」

「呻き声が聞こえたでござるから、少なくとも命はあるようござるが、あの血の匂いからしてあまり悠長な事はやつてられないでござるな」

「ついでに、倉の前で嗅いだ匂いもあつた。犯人は間違いなくあの中だ」

「・・・やつぱりあんた達、偵察向きだわ」

呆れた様に呟く美神。ドアの向こうの状況を、耳と鼻だけで其処まで調べられるという事が、結構なアドバンテージとなると言う事は置いといて。

その答えでとりあえず眉根を寄せる西条たち。

「・・・時間制限あり、ハンデあり、しかも相手は飛びきりつきに厄介か」

「もう一つ。此処で叩いとかないと、次の満月で、多分、成るわよ。フェンリル」

悩みながらも、霊剣を握る手に再び力を籠める。

周りの皆の顔を見渡すと、それぞれに頷きを返してきた。

「ポチさんと長老で先行して下さい。ドアを開けて、攻撃が来ないのを見計らって令子ちゃんと僕が行く。後の四人は、その後に入ってできるだけ素早くGS達を回収。直ぐに後方に運んで、危ないようならヒーリングを。ヒーリングできない忠夫君と犬塚さんはこつちに来てくれ」

それぞれの顔を見渡し、告げる。そして、例のドアの前まで進むと、

「GO!!」

西条の合図の元、突撃は敢行された。

「犬飼ポチ、参るっ!」

「せいっ!」

長老と犬飼が、扉に刀と霊波刀で切りつけながら飛び込んでいく。

「行くわよっ！」

攻撃が来ないのを見計らって美神と西条が続き、

「遅れるなっ！」

その後に残った4人が左右に分かれながら突っ込む。

部屋に入った忠夫が見たものは、机に腰掛ける陰念と、入り口周りに転がる傷だらけのGSたちと、陰念を囲むように展開する美神達。どうやら此処だけは電源が生きているようで、天井には白い蛍光灯が光を放っている。

睨みあう彼らに意識の一部を割きつつも、手近な一人を引つつかみ、そのまま慌てて扉の向こうに後退する忠夫。

ちらりと見えた陰念は、長老や美神達の殺気の籠った視線を受けても飄々とした態度を崩さない。むしろ、GS達が回収され終わるのを待っているような風情さえある。

「また妙な格好になったわね。それにしても、随分と余裕じゃない？」

霊力を通して神通棍を輝かせながら陰念に話し掛ける美神。高まる霊力は神通棍に注ぎ込まれ、霊力を持たない人にとっては只の棒切れ以下のそれは、霊的な存在にとつて致命的なまでの威力を持った武器へと変わる。

「大分待たされたからな。今更お前らが準備し終わるまで待っても、左程の事じゃ無い」
「言っても無駄だとは思いますが、一応聞いておくかい？ 君には、もう読み上げるのも面倒な

くらいの嫌疑がかかっている。自首してもらえれば助かるんだがね」

西条の言葉に、陰念は鼻を鳴らす。

「ふん。無駄な事はやるもんじゃねえよ」

「人狼と、魔族と、人間が混じり合ってるわね。結局、私の言つた事は理解してもらえなかつたみたいね」

回収を終えた忠夫と犬塚父が戻ってくる。二人とも既に戦闘態勢を整えており、何時でも動けるようにしている。

「——ああ。そうだ」

不図、思いついたように机から飛び降りながら陰念が言う。

「今回は、捕まるつもりも無いし、かといってお前らを殺すつもりも無い。本番は、次の満月だ」

机の上に置いていた、刀を鞘から引き抜く。紛れも無く人狼族に伝わる妖刀「八房」が、人工の光を反射してぬらり、と輝いた。

「だから、まあ。死んでくれるなよ?」

「せいっ!」

不意打ち気味の先制攻撃は忠夫の投擲。相変わらずの輝く石が、正確に、ものごつつい速度で陰念に向かって飛んでいく。

「甘えっ!」

所が、陰念が手に持つ八房を一振りすると、其処から八つの斬撃が空気を切り裂きながら辺りに放たれ、その内2発にあっさり切り裂かれて石は地面に落ちる。

残りの6発はまるでその斬撃自体に意思があるかのように、近くに立つ犬塚と犬飼に2発づつ、そして西条と美神に一条が襲い掛かる。

「ちよ、ちよつと本気で反則じゃない?!」

「だから厄介だと言っておったでござろうがつ!」

慌てて飛びのきながら文句を言うも、八房の攻撃の後にはすっぱり切り裂かれたコンクリートの床がある。直撃すれば運が良くて重傷、悪ければ胴体ぐらい二つに分かれてもおかしくはなさそうである。

「おらおら、どんどん行くぜ?」

陰念の言葉と共に、ばら撒かれるように飛び交う八房の攻撃。防ぐ、回避するといった事自体は不可能ではないが、接近して攻撃するとなると難易度が跳ね上がる。

「!」

西条が懐から銀の銃弾の入った拳銃を取り出し、片手で陰念に向かって連射するも、辺りを埋めつくさんばかりの八房の斬撃は、悉くそれらを打ち落とし、辛うじて届いたそれらも陰念はあっさり回避する。

「銃弾を見切るのか?!」

「人狼の感覚って言うのも中々慣れりやあ便利だな。それくらいならタイミングを合わせて避けられる」

西条と美神と長老が、なんとか距離を詰めようと四苦八苦しているその時。忠夫と犬飼父、犬塚父はちよつと後ろでコソコソしながらお話中。

「……つていうのはどうだろ?」

「よし、乗った」

「相変わらず狡い手を……」

にやにやと笑いながら分かれる三人。

忠夫はおもむろに地面に落ちている瓦礫の中から大き目の石を3つ拾い上げ、二人が不自然じゃない程度の速度で攻撃を避けながら移動をはじめた事を確認すると、黙ってそれをもつ手を振り上げた。

まず、一つ目は、斬撃をギリギリで避けた長老の耳を掠めて、一瞬の空隙を縫って陰念の目前まで到達する。

しかし陰念もそれを見切り、首を振るだけで避ける。

「何のつもりだ」

「さく、ね?」

続けて2個、連続で投げつける。

今度はしつかりと補足されていたためあっさり切り払われるが気にせず、飛んできた反撃を横に転がり回避。転がりながら更に石を拾い、立ち上がると同時に更に投擲。

「美神さん、西条！合わせてっ！長老も早く！」

慌ててボウガンを取り出し放つ美神や、銀の銃弾の入ったマガジンを取り出し素早くリロード、そのまま流れるような動きで連射する西条。霊波刀を消して足元の石を拾い、動き回りながらもどんとどんと投擲する長老。

「このっ！味な真似をっ！」

状況はそれだけで変わった。それまで回避しながら前進しようとしていた時と違い、ひたすらに距離を保ちながら攻撃を仕掛ける。

自然と八房は迎撃に放たれる事が多くなり、美神達に掛っていた重圧はそれだけで削られていった。

「でも、このままじゃジリ貧よ？」

「あ、ちょうど良かった。これ借りますねー」

美神に近づいた忠夫に、彼女が声を掛けて来る。それを流しながら美神が持っていた「ソレ」を取る。

「あんた、それは「もうちよつとつすよ……ほら、来た」

美神の耳には聞こえなかったが、少なくとも人狼と陰念には聞こえていたのだろう。呆れた様に足を止め、視線を天井に向ける長老と、ぎよつとしたように同じく天井に視線をやる陰念。

その視界の中で、陰念の真上の天井に幾つも幾つも切れ目が入り、駄目押しのような衝撃音と共に崩れ落ちる。

「わーっはっはっはあ！潰れるか謝るか選ぶでござるー！」

その落ち行く瓦礫を、上の穴から見下ろす犬飼父。なんだかともつても絶好調。

「ふ、ふざけるなああつ!!」

慌てて八房を振るうも、天井から轟音と共に降り注ぐ瓦礫は、軽く見積もつても数トンはある。いくら八回斬り付けると言つても流星にその質量は止められない。

慌てて横つ飛びに回避する陰念。

「そーれ、もう一丁っ！」

しかし回避した先で、再び彼に降り注ぐ瓦礫の山。轟音を響かせながら落ちてくるそれを、今度は斬り付ける事はせずに回避する。

陰念が舌打ち混じりに上を見上げると、其処にはニヤニヤと笑う二人の人狼が。

「ほーら、よそ見してる場合じゃないでござるよ?」

「人狼の超感覚も、これだけの音と、潰される焦りの前には鈍るもんだ」

「隙有り、じゃな」

はつとして視線を戻せば、懐に潜り込んだ長老が、霊波刀を展開しながら既に攻撃態勢に入っていた。

「このっ！」

「未熟」

慌てて八房を振り下ろそうとするも、その一撃は振り上げられた所で下から掬い上げるように打ち込まれた長老の一撃で、既に攻撃としての体を為さない。

「おらあっ!!」

「荒い」

跳ね上げられた腕を無視し、体勢を崩しながらも繰り出した膝蹴りは、長老の体にめり込む前に、霊波刀を展開していない長老の左手で跳ね上げられる。長老はそのまま左足で陰念の右足を思いっきり払う。

結果として、自分の勢いとバランスの崩れ、長老の足払いの威力を全て伴って。

「があっ!!」

ひしゃげるような音と共に、陰念は床に叩きつけられた。

「武器におんぶに抱っこでは、折角の力も意味がないのう」

陰念の首に霊波刀を添えた長老は、顎鬚を開いた手で扱きながらそう述べた。

影から湧き出したビッググイーター達が牙を剥き出し襲い掛かる。

追いつがる化け物を霊波刀で叩き落しながら、一旦美神達のところまで下がった長老には、ふらふらと天井に開いた穴に向かって飛び上がる陰念が見えた。

「犬飼、犬塚、そつちにいったぞつ!!」

「何処でござるか?」

「あ、あそこあそこ」

「つて何で居るんじやお前らーッ!」

親父達は何時の間にか降りてきており、長老の後ろで穴に向かって消えていく陰念を見送っていたりする。

「次だ・・・次の満月だつ!」

穴の淵に手をかけた陰念がそう叫ぶ。

「次の満月の夜、俺は此処に戻ってくる!フェンリルとなつてなつ!」

「捨て台詞としては三流よねー」

「やかましいっ!」

美神の茶々に怒鳴りながらも、彼はその姿を消す。結果としては逃がしてしまつたが、とりあえず勝つたと言えるのだろうか。

勿論問題は山積みだが。

「馬鹿たれどもーっ！」

「いやー。羽根も無いのに飛べるとは思わんかったでござるな」
「そうそう」

そんなに呑気でいいのか、親父ども。

第四十二話。

「きゃ〜！こつち来ないで〜!!」

「落ち着いて冥子っ！ あんたが今暴走したら洒落にならないワケッ！」

「エミ君、良いから冥子君を連れて下がりたまえー！」

「先生っ！後ろですっ!!」

携帯電話の向こう側、東京ではどうやら凄い事になっているようだ。冥子の悲鳴とエミの怒声、唐巢神父の懇願と、ピートの叫び。

「冥子さん、わっしの後ろに——がふっ?!」

「っ、使えないワケー!!」

あ、タイガーがやばいかもしれない。

「あー、もしもし、ピート君？」

「すいません西条さん、今それどころじゃ、先生危ないっ?!」

風切り音が聞こえた。——あと何か、繊維質のような物ををかすめる音。

「だ、大丈夫ですか先生ー!」

「……」

「せ、先生?先生っ?!」

どうやらピートは唐巢に話し掛けているらしいが、返答が無い。

だが、西条が心配になってきた頃。

「……ふ、ふふふふっ!冥子君、これを開けたまえっ!!」

「ふえ?」

西条は、嫌な予感をはるか東京の地から伝わってくるような気がした。後、冥子と唐巢以外の顔から血の気が引く音も聞こえたような気がする。

「ちよ、せんせ……ひやつ?!ふ、ふえええええん!!!」うっわー!!」

途端に響く、冥子の泣き声と沢山の何かが暴れまわっている音。西条は、その場に居ないが確実に、12匹ほどの其式神が暴れまわっているだろう事は分かってしまった。

どよん、とした目になりながら、耳に当てていた携帯電話を下ろす。携帯からは未だに悲鳴と爆音が響いていた。

「なんてことすんのよー!」

「はっはっはっ。目には目を、髪には命を。そうだろう、エミ君?」

「だからって冥子にビックリ箱渡すんじゃないワケー!」

「しかもそれは別の教義ですー!!」
プチ、と音を立てて携帯の通話を切り、ゆっくりと懐に戻す。疲れが更に増したような気さえた。

陰念の撤退から2週間。美神達が手始めにやった事といえば戦力の確保であった。幸いにも美神の持つコネはある程度限定的ではあるものの、実力的には申し分の無いG Sを集める事には成功していた。

唐巢神父に始まり、その弟子、ピート。そして実力、破壊力共に申し分なのだが色々問題はある冥子。美神はとても嫌そうな顔をしたが西条の説得と彼自身からの報酬の追加により小笠原エミ、タイガーが追加。

ちなみに彼らに対する報酬は、全て西条が出す事になっている。伊達や酔狂でオカルトGメンなんてやってないのだ。前回は時間を惜しんでの電撃作戦だった為に不可能

だったが、これなら大抵の事には対応できる面子である。

何せ相手がフェンリル狼、これ以下の格のGSでは足手まとい以外の何者でもない。西条の所属するオカルトGメンには、それ以下と切つて捨てられる実力の者しか居なかつた事が誤算の一。精鋭であつても少数である事は、この場合彼らにとつて、マイナスの意味しかもたない。

誤算の二、小竜姫との連絡が取れなかつた事。

陰念が動いている以上、裏にメドーサが居る可能性は限りなく高い。ならば、とルー違反であることを承知の上でへりを飛ばし、小竜姫の所に行つたのだ。行つたのだが……妙神山の門に、鬼神が居なかつたのである。そして其処には立て札が一つ、風に呷られながらも倒れる事無く立っていた。曰く、

「妙神山 修練場 只今留守にしております。1ヶ月ほどで戻りますので、御用の方は出直してください」

美神は、迷わず罪も無い立札に神通棍で一撃かました。

そして、誤算の三。

——東京の各地に、ビッグイーターが出没し始めたのである。

並みの悪霊ならば同業者が相手してくれるのであるが、なんとも厄介な事に必ず8匹同時に現れ、特に人的被害を与える訳でもなく十数分ほどの短い間に辺りの人工物を手当たり次第に攻撃し、すぐさま消えてしまうのである。

行動パターンが単純で、夜に現れ、直ぐに消える。しかも数が8匹。分かりやすすぎる挑発である。

美神に言わせれば「つまんないくせに厄介な嫌がらせ」との事。

たかが眷属とは言え、下級な魔獣と言え、あのメドーサが使っていた存在である。結局集めた優秀なGSは、そちらの対処に回さざるを得なかった。

そして、誤算の四、情報集めである。相手が分かっているから、当然対応策を立てることに成ったのだが、神話に語られるフェンリルは、武神の腕を食い千切り、あまつさえ主神クラスを食い殺した伝説の魔獣である。

効果の見込める武器であるヴィーヴィルの靴など、現代では入手どころか製作さえ不可能であるし、そもそも材料がその靴を作るときに使われ、現代では入手不可能という奇天烈な物ばかり。

と、いう訳で。向こうが人狼の先祖がえりと言うのなら、こちらも人狼の守護女神を呼び出して対抗しようとした訳だが。

「令子ちゃん、間に合うと思うかい？」

「西条さんは無駄口叩いてる暇があったら手を動かして！あー！ここ違う、おキヌちゃん修正用の道具ー！」

「これですか？」

その女神を呼び出すための魔法陣、やたらと巨大な上に複雑怪奇な物なのだ。西条と二人がかりで完徹三日目。終わりは未だに見えてこない。

「……せめて、もうちよつと余裕が欲しかったなあ」

「文献が見つからなかったんだからしょうがないでしょ?!ほらほら、西条さんはあつちの方をお願いっ！」

そう、見つからなかったのだ、その召還用の正しい魔法陣が載っている本が。

オカルト自体がそもそも科学万世の世の中でその形を保つ事が難しい事に加え、求める神は太古の昔、西暦さえまだ無かった時代、神代の存在である。

人狼の里に伝わっていれば良かったのだが、無かった。彼らも争いに巻き込まれたりしていないわけではない。それなりに霊媒師には狙われたし、戦国時代に全くの無傷で居られた訳ではない。それならば、そもそも外界から隔絶する為の結界など要らないのだから。今までの戦いの中で、かなりの口伝や文献が失われていたのである。

結果、厄珍堂まで頼つてようやく見つけ出した本一冊、それが手に入ったのが三日前。

突貫工事でやっている物の、空に浮かぶ月はもう殆ど真円に近い。こうして――

「あーもうっ！下準備だけであとどれぐらいかかるのよッ?!長老達が戻ってくる前に仕上げとか無きやいけないのにー!」

「令子ちゃん、落ち着いて・・・」

「落ち着いてるわよ西条さんっ!!」

こうしてガリガリと地面に魔法陣を書き込む美神と西条の目の下に、立派な隈が出来ていく訳である。

さて、一方その頃忠夫達はというと。こちらは10日ほど遡る。

「今日は特別ゲストに来てもらったでござる」

「・・・なあ、親父よ。そのいやに立派な鼻をお持ちの御仁は誰だっ?!」

「近くの山で修行しておられた天狗殿でござい。」

人狼の里から程近い、大きな滝のある川原で修行真つ最中であつた。此処に居るのは長老、犬飼父に犬塚父、シロタマと忠夫、そして不機嫌な顔をした真つ赤なお顔の天狗であつた。

シロは上は黒い体にフィットしたシャツ、下も真つ黒なタイツと言う動きやすさだけを追求した服装である。体のラインが結構はつきりと出ているのだが、気にしていないのは幼さゆえか。

忠夫はどこから持ち出したのか、こちらにも真つ黒な胴着姿。しつかりと尻尾も出ている辺り、里で着ていたものなのかもしれない。

袖が肩の辺りで破けた其れは、場の雰囲気合つているといえばあつてはいるが、何せ着ている本人にあんまりやる気が見えない為、浮いてると言えればそれも正しい。

「・・・約束じゃからな。手伝つてはやる。ただし、拙僧はふえんりるとやらとは戦わんからなつ！」

「相変わらずケチな奴だなー」

「やかましいっ！そもそも拙僧が修行中だというのに、何で他人の手伝いなんぞを——はあ。いや、もういい。とつとと始めるぞ」

諦めたように溜め息をつく。確かに修行の邪魔をされたのは腹も立つ。久しぶりに

顔を見た目の前の小僧がどれほどの物かも気にはなる。

「お主らが修行者か……」

ぎぬろ、と目の前に立つ青年と少女を見やる。凜と立つシロに比べ、青年は微妙に腰が引けている。が、逃げ出そうとはしていないようだ。

思い出すのは昔の事。隣に立つ若かりし頃の人狼の親父どもが、瞑想中の彼にいきなり勝負を挑んで来たあの時の事。

彼らが持つていた得物が、訓練用のなまくらではなく研ぎ澄まされた実践用のソレであったなら、確実に命を落としていたであろう程の闘争であった。

なんとか一対一に持ち込み、それでも彼らが求めていたのは息子と娘を助ける為の薬だけ。かしくない筈の状況で、それでも彼らが求めていたのは息子と娘を助ける為の薬だけ。

食い下がり、反撃され。追い詰め、追い詰められ。それでもこちらを貫かんばかりの光を籠めた、あの2人の瞳。

なんとも血沸き肉踊る逢瀬だった。

それまでの険しい顔から、ふと、懐かしげな目になった天狗を、きよとん、とした表情でシロと忠夫が見ている。

——よくもまあ、大きくなったものだ。

感慨深い。始めて見た見た彼らは、痩せこけ、骨と皮ばかりになった姿であった。ところ

がどうだ、しっかりと育ち、半人前の雛とは言え自分の足で立っている。

「まあ、楽しみが増えたと思えば多少の時間くらいは割いてやろうか。．．．死なぬ程度にな？」

「え、」

あの、父親達に届くまでは、もう少し時間が掛るだろうが。

「と、いうわけでじゃ。達人4人の二刀流、計八発。見事凌いでみせい」

「分かったでござるっ!!」

「無理に決まつとるやないかー!!」

長老の軽いお達しに、元氣よく返事するシロと、その横で必死に叫ぶ忠夫。いくら普段やらない二刀流と言えど、繰り出される斬撃は十分にそこらの剣士を打ち倒す。

理解していない訳ではないだろうが、尻尾をふりふり元氣一杯の妹分を見ていると、本当に分かってんのか?と不安になるのも致し方なし。

「ちよ、ちよつと待ったっ!」

できなければ危険な事は分かっている。が、彼女は大事な．．．まあ、妹である。

忠夫はシロの首根っこを引つつかむと、ぐいぐいと引つつ張り近くの繁みに連れ込む。

「あ、兄上、そんな、積極的な．．．」

「シロ、お前留守番してろ」

何を勘違いしたのやら、もじもじと指をこすり合わせるシロに向かって真剣な顔でそう告げる。

「……え」

「お前に無理だとは思わん。思わんけどやな、やっぱり危ないわ」

虚を突かれたように呆然と返事を返すシロに対して、頭をがしがしと掻きながら、それでも真剣な顔は崩さず、畳み掛けるように続ける。

「お前は強い。真面目に修行してるし、俺より年下でも多分俺よりも強い」

「そ、それならなんで留守番してろなんて言うでござるか?!」

シロの、まるで悲鳴のような問いかけ。両目には見る間に涙が溜まり、今にも零れ出さんばかりに溢れてきている。

彼女を泣かせるのは辛い。でも、それでも。

「お前は俺が守る。絶対に護ってやる。だから、今回は俺に任せてくれんか?」

同じ群だから、じゃなくて。

年上だから、でも無くて。

「女の子に、無理させる男は格好悪すぎだろ?」

大事な大事な妹だから。

「……………でも……………」

何かを堪えるように顔を俯かせ、表情を垂れた赤い前髪で隠すシロ。

尻尾は力なく地面を指し、両の手は迷うかのように開いたり閉じたを繰り返すだけ。

言葉は出てこず、頭の中でぐるぐると回って迷路に入り込む。

「馬つ鹿じゃない?」

声は、横手から掛けられた。

「タマモ、誰が馬鹿だって」その馬鹿以外に言いようの無い馬鹿以外に誰が居るのよ? 馬鹿」そんな馬鹿馬鹿連呼せんでもえーやん」

容赦の無いタマモの攻撃に、ちよつとへこむ忠夫。しかし、彼にとつても此処は勝負所。精神力をフルに使い、気を奮い立たせてちようど良いとばかりにタマモにも言葉を掛ける。

「タマモ、お前も「留守番しろつて言うのなら断るわよ」……あのなあ」

タマモは、腕を組んで瞳に殺気を溜めながら、それを思いつき視線に乗せて忠夫を睨む。

困ったように天を仰ぐ馬鹿と、言いたい事もいえない馬鹿に一つ言いたい事がある。組んでいた腕を腰につけ、無い胸を張りながら全身で意思を表明する。

「忠夫、勘違いするんじゃないわよ。私は、私達は、あんたに護つてもらおう為に此処に来

てるんじゃないの。あんたを応援する為だけに此処に居るんじゃないの」

未だに俯く馬鹿の頭を両手で挟んで引き起こし、無理やり顔を忠夫に向けてやる。どうせ涙目で、見られた顔じゃないだろうから見てもやらない。

「護りたいのはあんただけじゃない。あんたが私達を護りたいっていうのなら、私達にもあんたを護る権利があるわ」

長い銀髪と赤いメツシユの入った頭が、ピクツと震えたのが手に伝わった。でも、まだ目の前のこいつは分かってない。

「護りたいなら、護らせなさい。野生の獣のプライドを、私たちだって持つてるの。私達の意思も聞かない一方的な押し付けを喜ぶと思うんなら、あんたは私達をペット扱いしてるのと一緒よ?」

自分でも強引だと思う。でも、正直な気持ちを籠めたつもりだ。忠夫はうろたえたように視線を泳がせているが知ったこっちゃない。

どうせ頭を挟まれている友人も、自分と同じような目であいつを見ているに違いはない。

癪だが、それくらいのことにはわかる。馬鹿は馬鹿なりに、真つ正直な馬鹿なりに——何処までもいけるから大馬鹿なのだ。

「兄上、どうか、お願いするでござる」

「あー、うー、そのー、だってだなあ・・・」

「拙者では、兄上の背中を守れないのでござるか・・・?」

しまった。シロめ、微妙に成長してる?!

戦慄を覚えるタマモのその直感は大正解。シロは、潤んだ上目遣いでじつと忠夫の目を見詰めていた。そこにあるのは健気さと純真さ。

直撃を食らいつづけている忠夫はもうぐらぐらであるが、タマモもこの状況では視線を塞ごうにも塞げない。

——ならば、こつちもその状況を利用するつ!!

タマモはシロの頭を掴んでいた手を離すと、じわつと目に涙を浮かばせる。そして、そのまま忠夫を見つめる。それでも元・傾国の美女、涙を出したり引つ込めたりはお手の物。

当然上目遣いは忘れずに。

「・・・うううううう」

よし、もう一押し。

「兄上・・・」

「忠夫・・・」

「ううううううううつ?!」

あとちよつと。——ついでに上手く接近できれば唇の一つくらい。

微妙にごりごりとシロが頭を寄せてきている。どうやら狙いは一緒のようだ。負けじとこつちも受け流しながらじりじりと目標に向かって接近する。

勿論忠夫にバレるような迂闊な真似はしない。あくまでも水面下で、だ。忠夫はじりじりと追い詰められ、とうとうその背中が大きな木に当たる。逃げ場はなし。

ま、あつても二人は逃がさないだろうが。

「い、いやまでお前らなんか雰囲気が違うぞッ?!」

「気のせい(でござる)よ・・・じゆるり」

気付いた時には既に遅し。ばんっ!と叩き付けるように背を木につけた忠夫の左右に、シロタマの手が逃がさないとばかりにめり込む。

「・・・何を舌なめずりしていらっしやるのでせうか?」

「頂きます(でござる)」

さつきまでの涙は何処へ行ったのか。当初の目的は何処へやら、二人はごりごりと争う内に、何時の間にやら狙いがすっかり変わっていた。

危うし、忠夫!

——と、言いたい所だが。

ま、世の中そんなに甘く無い。

「お、おとーさんは許しませんっ!!」

「あ、こら犬塚、今からが面白い所でござるのに」

「天狗殿、ちと趣味が悪うございせぬか?」

「いやいや、そういう長老殿もなかなかお人が悪い」

あれだけ騒げば普通は様子を見にくる訳で。しかも居たのが揃いも揃って超感覚持ちと修行の賜物の鋭敏な感覚持ちだった訳で。

加えて言うならそのうち少なくとも半分は碌でもない大人たちな訳で。

「………」

なんとなく沈黙が流れる。

視界に入るのは震えながら今にも抜刀しそうな犬塚父と、それを止める気も無い犬飼父と、若いつていいなあ……と言う感じで生温い笑顔を向けてくる天狗と長老。

全員が頭に木の枝を括りつけているのは偽装のつもりだろうか。

「と、言う訳で拙者（私）たちも修行を受けるでござる（わ）」

「許可」

「うおいつ!!」

この後、無言の親父達に思いつきり拳骨落とされたり、長老に目の前で溜め息をつか

れたり、天狗がにやにやと笑っているのを見て無性に腹が立ったりする忠夫であったが、背後からじーっと見つめてくる視線に負けて、結局諦めたのは10分ほど後の事であったとき。

「ま、順当に行つて忠夫からでござるかな」

「いきなり真剣でも良いんじゃないか？本気でやるように」

「そうじゃな」

「ちよつと待てっ!!」

開けた川原に戻つての、大人達の会話に突つ込む忠夫であるが日頃の行いはなんとやら。当然彼らがやめる訳もなく、いきなり忠夫に向かつてはしる鋼の閃光三筋。

「うどわあっ?!」

「ぬ、更に早くなりおつたか」

「嬉しそうだな、犬飼殿。それでは拙僧も参加するのでしょうか」

あつさりとは行かないまでも、人狼の里トップ3の同時攻撃をかわす忠夫に、父親は嬉しそうな悔しそうな複雑な笑みを唇に張り付かせる。それをみながら天狗も腰に差した刀を抜き放ち、正眼に構える。

「では、本気で行くぞ？」

「手加減してくださいいいいっ!!」

聞く耳持たず。

「うっわ、避けてる。動きがキモイけど」

「・・・凄いでござる。さすが兄上、更に回避術に磨きを掛けているとは」

シロタマは感心したように眺めているが、見られている忠夫は必死である。何せほんの少し体勢を崩しただけで僅かにタイミングをずらしながら刃が降り注ぐのである。

即席の連携とは思えない程の鋼の雨を、忠夫は半泣きで避けつづける。

「だーっ! かすったかすったっ!!」

「ええいっ! いい加減一発くらい当たらんかあッ!!」

「死ぬわっ?!」

必死である。今の台詞を吐いたのが実の父とはあんまり信じたくないが。

右から左に抜けていく一撃を、右足を半歩引いて体を逸らしてかわし、後ろに流れた重心が安定しきる前に背中に入る悪寒。

それに従い下げた右足に力を籠めて、足首の力だけで下半身を腰より上に跳ね上げ

る。

爪先を掠めるように通り過ぎた刀を確認する——暇も無く、横合いから突き出される剣先を腹筋で体を無理やり畳んで丸まり、その反動で加速し、着地。着地とほぼ同時に突き出される4つの刃。一番遅そうな右に地面を這うように低く飛んで、天狗の股を潜り抜ける。

「ッ、ッのまま脱出「甘い」げっ?!」

もう一回跳躍し様とした忠夫の前に、それ以上の速度で回り込んだ長老が立っていた。

後ろから聞こえるのは強烈な踏み込みの音、そして刃が空気を切り裂く音が3つ。

「な、なんとおおおっ!!」

長老に向かって飛んでいく筈の体の勢いを無理やり殺し、川原の石の上を転がるように受身を取りながら反転する。

そして、見えなくなった長老のほうから、たん、と軽い音が聞こえた。

——まだ。

見えないが、分かる。

——まだまだ。

長老が鞘に刀を納め、そのまま振りかぶっているのが分かる。

——まだまだまだだ。

これで決着がついたと思っっているのだろう。どうやら長老だけはまだ理性を残してくれ居ていたようである。

——まだまだまだだっ!!

両足が地面につく。目の前には天狗と親父達。上下、後ろ、左右、何処に逃げても確実に切り込まれるだろう。

だから。

——此処だっ!!

真正面、犬飼父の振り下ろす刀に、前髪を2、3本持っていかれながら突っ込む。タイミングはバッチリ。何せ最も多く見てきた剣筋だ。体が覚えている。このまま懐に潜り込んで一撃かまして即離脱——

「ほりゃ」

「んがっ?!」

長老の軽い言葉と共に、後頭部にごっつい衝撃を受けた忠夫はそのまま意識を失った。

「鞘を飛び道具にするって、あり?」

「伊達に里一番では無いでござるなあ」

要するに、刀の届く範囲に居なかった忠夫の頭目掛けて、外れやすいようにしていた鞘を力加減で滑り出させ、まるで投げ槍のようにそれは忠夫に当たったのである。

呆れた様に眺めるシロタマの視線の先には、氣絶した忠夫を囲んで苦笑いをする4人が居た。

「どうする、犬飼」

「見切っておったぞ」

「……いやはや、やられたでござるよ」

苦笑いの表情を崩さないながらも、長老たちは心底驚いていた。

氣絶して地面に横たわる忠夫が諦めるとは毛頭思っていなかったが、まさか里のトツブクラスの剣士の一撃を完全に見切ってかわすとも、欠片も思っていなかったのだ。

「全く。まあ、まだまだそう簡単に超えさせるつもりはないでござるがな」

「かっかっかっ！ 良し良し、楽しくなつてきおつたな」

にやりと笑う犬飼に、大笑いしながら長老が答える。

「それじゃ次はうちの娘を……」

犬塚が視線をシロタマたちに向ける。しかし、その表情がふと妙な物に変わる。

「ん？ どうした犬塚殿」

天狗が犬塚同様、シロたちに視線を向けると、彼女達は呆れたと言うか、開いた口がふさがらないと言った感じでこちらを、いや、忠夫が居た所を見ていた。

4人が、ん?と言った様子でそつちを見ると、別に何も無いように見える。

「・・・なにいつ?!」

「忠夫は何処に行ったツ?!」

「アホー! 殺す気かーっ! こんなもん逃げるにきまつとるだろがーっ!!」

慌てて辺りを見回せば、川をジャブジャブと犬掻きで渡っている忠夫が居た。4人は4人とも呆れた顔になると、おのおの溜め息をつきながら足元の石を拾う。そのまま、こちらを見もせず必死で犬掻きを続ける忠夫目掛けて。

「「「「・・・」」」」

無言で投げつけた。

そして川には、巨大な4つの水柱と、ドザエモンのように浮かんで流れる忠夫、この後晩御飯になる気絶した魚が何匹か。

タマモとシロは、静かに両手を合わせたのだった。

「アクティブ・センサー、稼動テスト・終了。——ドクター・カオス。データに無い・強力な魔力を探知・しました」

「ふむ。ようやくお前達の調整も仕上がった事であるし、少々探ってみるか？」

「「「イエス。ドクター・カオス」」」

そして、彼と彼女達も動き出す。時計の針は止まらない。満月まで、後——24時間。

第四十三話。

「美神さーん！横島さん達戻ってきましたよ〜！」

満月の光に照らされて、仄かに浮かび上がる巨大な魔法陣。最早文字なのか絵なのかさえ定かではない複雑な模様を大量にばら撒き、無規則な規則性、とでも言えばいいのだろうか。

円状に、中心に画かれた六紡星を囲むように設置されたそれらは、未だその機能を發揮してはいなかった。

「遅いっ！もう直ぐ満月が昇りきるって言うのに、一体何やってたの?!」

腕を組んで仁王立ちになりながら、目の下に僅かに隈を残した美神の怒声がおキヌが手を振る先、忠夫と、人狼達に向かって投げつけられる。

「すんまつせん！」

駆けつけた勢いそのままに、全力疾走からの急ブレーキで美神の横に滑り込む。その格好は修行時の黒い胴着ではなく、いつものジージャン、ジーパンに赤いバンドナである。

「シロ！あんたはさっさとその魔法陣の中心に行きなさい！」

「了解でいけるー！」

美神の声に反応し、此方は駆けて来た勢いを殺さずに、そのまま跳躍。空中で僅かに姿勢を正すと、そのまま魔法陣の真ん中へと、音も立てずに着地する。

「西条さん、準備は良い?!人狼組とタマモは周辺の警戒をー！」

西条と美神が、魔法陣から少し離れた位置に立つ。二人の顔には、もう4日徹夜しているはずの疲れは欠片も見当たらない。既に精神の高まりが、肉体の疲れを吹っ飛ばしているのだ。

「多分、この前のあの場所で、陰念はフェンリルへと変わるはずよ。あの手の奴は自分の言葉に拘るから。こっちの切り札とあっちの切り札、おそらく発動は同じ時間、満月が最も高く輝く時」

おキヌの差し出す栄養ドリンクの蓋を開けながら、人狼達、犬飼親子、犬塚父、長老に声をかける。

そのまま口にビンをあて、中身を一気にあおる。

「んくっ、んくっ——ぷはっ!! それまで、何としてもあいつの接近を許さない事!こっちは月が昇りきってから儀式を始めるから、どうやっても先手を取られるわ。おそろく、時間にして数分。しっかり足止め頼むわよっ!」

「[[[応!!]]]」

人狼達の声が唱和する。籠められた意思は皆同じく、「誇り」と「覚悟」だ。

「もうそろそろね……」

美神は、今、夜空に浮かぶ月を見上げる。

——全く、こんなに綺麗な月なのに、今日だけは憎つたらしく見えちゃうわね。

「ま、全部片付いたら景気良く宴会でもしましよーか」

「賛成ー！」

「場所は里でいいかの？」

「その際は、自家製の酒でも出すでござるよ」

「それはお楽しみだなー」

「ま、付き合うくらいならやってあげてもいいわね」

視線を月から前に向け、並び立つ人狼達に話し掛ける。

多少お金が勿体無い気もするが、ま、重い空気は好きじゃない。

「——美神さん。月が……」

軽く笑みを交し合う美神達の隣で、おキヌが空を見上げて小さな声で呟いた。全員の視線が、自然と上を向く。

「今更愚痴つてもしようがないさ。始めようか」

美神と西条は、瞑目しながら呪文を唱え始める。それは、月と狩猟の女神に捧げる言葉。

人狼達を見守る、守護女神。

美神達が言葉を紡ぐたびに、あたりの空気が清浄なものへと変わっていく。魔法陣に描かれた文字達が、淡い光を放ちながらその力を紡ぎ始める。

「兄上、皆、直ぐに行くでござるからな」

「皆さん……どうか無事で」

待つことしか出来ないおキヌとシロは、悔しげに、そして祈るように月を見上げていた。

忠夫達は、フェンリル狼と接敵の為に動いている。

「長老、聞こえる?」

「ああ。どうやら、暴れまわっているようだの」

彼らの耳に届くのは、木々が薙ぎ倒される音と、何かが碎け散る音、そして。

『グオツ?!グオオオオツ!!』

強大な力を持ったソレが、暴れまわる音だった。

「理性を失ったのかもしれない」

「どういう事ですか?」

森の中をかけながら、長老の呟きに問い掛ける。

「フェンリル狼は、力と、その凶暴さで危険視された魔獣。人狼の要素を含んでいるとは言え、理性よりも獣の本能が勝る故に真に人狼たる存在ではない。わしは、陰念とやらが魔獣の狂気に飲み込まれたとしても驚かんよ」

「・・・成る程」

長老と犬飼達が前方でそう話し合っている時、忠夫とタマモはその後ろを付いて行きながら、互いに不満そうな表情であった。

「どーしても、シロと一緒にいるのは嫌なのか?」

「シロと一緒にいるのが嫌なんじゃないの。今更置いていかれるのが嫌なの」

満月の光が有るとは言え、薄暗い森の中を疾走しながら互いを睨み付ける。完全に前を向いていないにもかかわらず、飛ぶように現れる木々や、足元の石ころを正確に避けている。

「だーかーら、置いてくんじゃないって」

「一緒よ。私は、忠夫についてくの。決めたのっ」

ふん、とばかりに顔を背けるタマモに、困ったように頭を掻きながら忠夫が呟く。

「・・・全く、女の子なんだから無理だけはするんじゃねーぞ」

「も、勿論よ」

互いに顔は見えていない筈であるが、しかし浮かぶ表情は全くの同一。

照れたような、困ったような。そんな感情に隠された、僅かな笑み。

「背中が痒いでござる」

「若いのう」

「シロじやなきや良い」

しつかり親父達は聞き耳を立てていたようだ。

「ん、近いぞ」

前に行く犬塚から、警戒を促すような言葉が掛けられる。

「……こつちに向かつてきてるわね」

「本能だけで暴走する獣じゃからか……？ 危険な物の存在を察知しておるのかもしれないのう」

前方から聞こえる音が段々と大きくなってくる。自然とその歩みを止めた人狼達は、それぞれが左右にばらけて待ち伏せに入る。

木々を薙ぎ倒す音は更に大きくなる。上空から見下ろせば、先日陰念と争った建物から一直線に美神達が設置した魔法陣まで伸びる破壊の痕が見て取れただろう。

——ソレだけが。その音は、左右に散会した忠夫達を押しつつむ様に聞こえてきた。

「まずいつ！フェンリルだけじゃないぞっ！」

「ビッグ・イーターも?!ふぎけんじゃねーよっ！」

それは、まるで牙のように。

巨大な顎を持ったその化け物は、破壊音にまぎれて飛行しながら、木々をすり抜け忠夫達に迫っていた。

そして。

『ガ、ガアアアアアッ!!』

正面にあつた巨大な樹木を打ち砕きながら、陰念が、狼の姿ではなく、全身を獣毛で覆い、だが人の姿に只獣毛を生やした、中途半端な半獣形態の陰念が、吼声と共に現れた。

闇に紛れてよく見えないが、どうやら頭と腕に何か付けている様である。

「まだ、フェンリルになつていない、のか？」

そんな犬塚の言葉に答えるように、陰念は苦しげに頭を押さえると、両手を地面につけて蹲つた。

——その姿が、一瞬ぼやけた。

「・・・安定していないようじゃな」

一瞬、その一瞬に周囲に走つた戦慄は、ビッグ・イーター達を目前にした忠夫達の動きさえも止めさせた。

ぼやけた陰念に重なるように見えたのは、確かに『フェンリル』の像だったのだから。動きを止めた人狼達に、隙を突くようにビッグ・イーター達が群がる。しかし、その顎は目標に届く事無く消し炭へと変わつていた。

「ぼつとしてる場合じゃないでしょ！どうするの?！」

狐火を放つて第一陣を食い止めたタママの声が響き渡る。その声に我を取り戻したかのように、人狼達も動き始めた。まるで、今感じた畏怖を振り払うように。

「まずは雑魚を除くんじゃっ！皆、背後には我らの切り札が、そして仲間が居る事を忘れるなっ！」

長老の一喝で、一旦押されかけた人狼達が刀を振り上げ、靈波刀を突き出して応戦を開始する。

辺りは、狼達の怒声と、ビッグ・イーター達の叫び声で満たされていく。

美神達にも、人狼の吼声は聞こえていた。

「始まったようでごさるな。大丈夫でござろうか」

「意外と近いわ……シロちゃん、もうちよつと我慢してね。いま、美神さんが頑張ってくれてるから」

「分かっているでござるよ」

そう話している間にも、戦いの音がじりじりと近づいてきているのを、その場にいた者たちは感じていた。

「……ビッグ・イーターにこのごつつい迫力つて、まるでメドーサの劣化版じゃねえか」
どうしても忠夫は違和感を拭えないでいた。なにか、大事な事を忘れているような、直に思い出さなければいけないのに、それでも出てきてくれないその答えに、苛立ったように目の前のビッグ・イーターを薙ぎ払う。

「フェンリルの狂気に乗っ取られた？　なら、なんで正確にこつちに向かってきてるんだ？」

「そりや、あつちに『怖い物』でもあるって思ったんじゃない？」

ぶつぶつと呟く忠夫に、タマモが援護しながら話し掛ける。ビッグ・イーター達に囲まれるように動く陰念は、時折、辺り構わず八房を振り回し、その力を解き放っている。しかし、どうにも違和感が拭えない。

「……タマモ、お前、シロのところに妙な雰囲気でも感じるか？」

「多少ね」

「どんな感じだ？」

乱戦の中にありながらも、陰念から眼を離さずに、タマモにしつこく問い掛ける。

「えーと、よくは分からないけど、アレかな？」

タマモが指差したのは、天上で輝く蒼白い月。

「満月みたいな雰囲気か、ほんの少し」

「・・・長老！陰念が頭と腕につけてるの、何か分かる?！」

少し離れた位置で、纏めて数匹の化け物を切り払った長老に問い掛ける。

「ああ、アレは俺が竜神王から貰った装具だ！空も飛べるし力も強くなるもんだが、この前あいつと一緒に盗まれたんだった！」

「そー言う事は早めに言っといてくれー!!」

犬塚に向かって罵声を投げつけるも、とりあえず陰念は空を飛んだりしていないので保留しておく。

「これで空まで飛んでたら、本当にメドーサ並みに厄介やんけー!」

「メドーサって誰？」

タマモが、ふと忠夫に問い掛ける。

「あー、この前やりあったえらく乳のでかいねーちゃんだなあ。・・・いやあ、ほんまに

でかかった。是非嫁に「手が滑ったわ」うわじゃじゃじゃっ!!」

冷静に、忠夫の尻尾に着火するタマモ。こめかみに浮かんだ井桁マークは伊達じゃない。

「お主ら遊んでないでもうちよつと気合を入れるでござる! もうかなり押し込まれているでござるよ!」

そう、気付けば戦場は、何時の間にか美神達に程近い場所まで移動していた。なにせ、此方はたつたの5人。対して向こうは未だに背後の森からうじゃうじゃとビッグ・イーター達が湧き出しているのだ。

経過時間、3分。距離、およそ30M。状況は、進みつづけている。

「美神殿っ! まだでござるかっ?!」

「黙って! こつちも必死なんだからそこでじっとしてなさいっ!」

美神と西条の額には、大量の汗が浮かんでいた。どれだけ精神力で体力を補おうとも、4日間の徹夜は容赦なく美神達の体力と集中力の限界を近づけていた。

そもそも、神を降ろすというのはそう簡単な事ではない。しかも、現在も崇められる存在であるならばともかく、今回の目的である人狼の守護女神は、本来ならば遠い昔に去った神。

・・・そう、本来ならば交信する事さえ難しい存在なのだ。

そう言った諸々の要素が、更に美神達に負担を与える元凶となっていた。

「——令子ちゃん！」

「つかまえたっ！」

しかし、彼女達が諦めた時点で終わってしまう。

ならば、そう。

「来るわよっ！アルテミスがつ！！」

諦めてなどやるものか！

だが。

「ソレ」は、唇を歪めると、突如としてその姿を消した。

「消えたっ?!」

「しまっ——メドーサの劣化版ならっ!!」

『ジジッ——既にこの世を去った私に、——ジッ——一体何用——ジジジッ』

「貴方の力を借り『神を喰いに来た』」

超加速。韋駄天と、小竜姫、そして、メドーサが使う、正に神の業。

強大なエネルギーを用いて「世界を遅らせる」業。

竜神の装具。その内に膨大なエネルギーを貯蔵した、人に、一時的には言え——空を駆け、メドーサとも互角に争えるだけの力を与える、神器。

——八房。斬った存在の『力を喰う』武器。

——フェンリル。『神を喰らった魔獣』。

——全ては、全ての因果は此処に集まった。

一瞬の事であつた。

ほんの、瞬きほどの間に起きた事だつた。

静かに佇む陰念が、突如として姿を消し。

降臨したアルテミスが、美神に問いかけ。

そこに、超加速を解除して現れた陰念が、相手の霊力を奪う妖刀で、一刀の元に女神を切り捨て、衝撃が、魔法陣を中心に爆発し。

——砂塵が収まった後に、其処に、ソレは、『居た』。

「・・・あ、あああ」

「フエンリル・・・」

呆然と、目の前に座る魔獣を見つめるおキヌ。

衝撃に吹き飛ばされ、外傷は分からないが完全に昏倒している西条と美神。

吹き飛ばされながらも、なんとか立ち上がる人狼達。

フエンリルは、陰念は、静かにそこに座っていた。

『ふん。ようやく、本番だな』

「前回、やけにあっさりやられたと思ったら、そう言うことか」

『そう言う事だ。超加速への対策なんてあるかどうか知らないが、用心はしておくに越した事は無い。お前らが対抗策としてアルテミスあたりを呼び出すだろう事は見当がついた。が、それを中止されるのもこまる。竜神の装具、GSどもからかき集めた靈力。エネルギーはこれでも余るほどだった。がな』

フェンリルの口から語られるのは、意外なほどに流暢な人語。

「神様は美味かったか？」

『フェンリルは、神を喰らった獣だ。神話を準えれば、それこそ神話に語られるだけの力を得られる』

「グルメだこと」

呆れた様に呟く忠夫。しかし、その額に浮かぶ汗と、緊張でこわばった体、震える膝がその心境を語っていた。

『だから、こういう事もできる』

陰念は、無造作に、頭上に輝く満月を見据える。

「ま、まずいつ！止めるんじゃないっ!!」

長老が、必死に叫ぶ。しかし、目の前の存在は、そんなに生易しい物ではない。体が、動かないのだ。本能が叫んでいる。

——アレには、勝てない。

それでも、忠夫達は各々の武器を振りかぶり、走りよる。忠夫が正面、犬塚と犬飼が背後から、長老が右手、シロが左手から。

陰念は、彼らをあざ笑うかのように、ゆつくりとその頭を月に向け、顎を開くと。

『月を喰う事も、な』

ばくん。

——閉じられた顎の先に、月の光は無かった。

「があっ！」

「くっ?!」

途端に、人狼達から悲鳴が上がる。

『神話によれば、月食はフェンリルの子が月を喰らうから起きるそうだ。なら、その元が出来ても可笑しくないだろう？ 人狼共よ、月に左右される程度の存在よ。お前らの力の根源を、無理やり奪われた気分はどうだ?』

未だに陰念は動いていない。その巨軀を、只、座ったままで動かさず、只現れ、そして一回口を閉じただけだ。

なのに、GS達は既に戦力の殆どを失っていた。

「ち、ちつくしように・・・」

『ほお、まだ動けるのか』

いきなりの靈力の枯渇に動けない人狼達、しかし、よろよると立ち上がったのは忠夫であった。

「あいにく人狼は半分だけでな、後半分は人間だ」

『混ざりモノか。通りで』

「こつちも居るわよ」

なんとか立ち上がっただけ、と言った感が強い忠夫に寄り添うように、タマモが傍に
よる。

『妖狐か。確かにお前には関係ないだろうが、ソレが如何した?』

す、と持ち上がるフェンリルの爪。

『たった2匹。群れる事も出来ない一匹の狼と、矮小な狐。最強の狼に勝てる訳が』
振り下ろされる。

『——ないだろう?』

いっそ優しげな声と共に振り下ろされた爪から迸るのは、八本の斬撃。そう、八房の
ような、一閃で同時8回攻撃という、やたらと反則なその能力。

「うおおつ!!」

「きやあつ?!」

陰念が、刀として振るっていた時とは比べ物にならないその破壊は、忠夫たちや倒れ

伏す美神達を掠めながら、背後の森を削っていく。

後には、薙ぎ倒された木々が無残な姿を晒していた。

「は、反則だつっーの」

「どうすんのよ、こんなの」

『どけ。邪魔だ』

声に反応してそちらを見れば、腰を上げ、4本の足で立ったフェンリルが興味を失つたような瞳で見ている。

『最早恐れる物は無いといつても、可能性は潰しておく。——お前らは、見逃してやるぞ』

その瞳に浮かんだ色は、強大な、比類なき故の傲慢さ。そして、冷静に命を奪う事のできる冷酷さと。

一瞬だけ見えた——ほんの一握りの、悔恨。

畏怖、恐怖。そして無力感。忠夫とタマモを襲った物は、ソレだった。

瞳が嘲笑っていた。本当に邪魔なだけだと、面倒なだけだと。——気紛れだと。

腰が砕けそうになるのを必死で堪える。駄目だ、だつてあいつの目は——

『純粹な人狼は、全て殺す。フェンリルは、俺一人であるべきだ』

——俺の仲間に向いているっ!!

「・・・おい、待てよ」

フェンリルは、無視して爪を振り上げる。狙いは、シロ。

「ふざけるな」

靈波刀を展開する。己を叱咤し、ともすれば碎けそうになる膝に必死で力を籠める。

「てめえっ！俺のシロに何するつもりだあああああっ!!」

大上段に振りかぶり、全力でフェンリルの頭に叩きつけようと飛び掛る。タマモが狐火を幾つも作り出しているのが、涙目で、恐怖に犯されながらも必死でそれを投げつけるのが視界の端に映る。

「——っせりやああっ!!」

「燃え尽きなさいっ!!」

全力のその一撃は、避けようともしないフェンリルの頭部に同時に着弾し、猛烈な爆風を生み出した。

靈波刀を振り切った忠夫は、慌ててフェンリルを見上げる。

全力だった。間違いなく。

少なくとも怯んでくれれば、皆を担いで逃げるくらいは——

『愚かだ』

8つの斬撃は、煙の向こうから飛んできた。全くの無傷の陰念が放つ、感情を宿さない言葉と共に。

「があっ!!!」

「忠夫ーっ!」

吹き飛んだ忠夫は、まるで鞠か何かのようにごろごろと転がり、体中から出血しながら地面に横たわる。

怒り狂ったタマモが、再び狐火を放つのが見える。

「あ、．．．め、だ。にげ．．．タマ．．．」

動けない忠夫の目前で、再びなんら痛痒を感じていない陰念が、その爪を振り上げるのが見えた。

タマモめがけて振り下ろされようとする爪。

必死で動き回りながら狐火を繰り返すタマモ。

しかし、避ける事すらかなわず、タマモもまた悲鳴さえ上げずに吹き飛んだ。

『非力だな』

フェンリルは、一瞥を忠夫にくれると、シロに向かって再び攻撃するつもりのようなのだ。
「ま・・・て」

『うっとうしいぞ』

横合いから凄まじい速度で飛んできたフェンリルの尻尾に、ようやく立ち上がった忠夫は薙ぎ倒される。

「・・・あ、がはっ」

右手と左足が、曲がらない方向に曲がっているのが見えた。

意識を保つのも、それが限界であった。闇が、忠夫の視界を埋め尽くした。

『——諦めたか』

それは、いつかの夢の中。

『心が折れたなら、そのままくたばれば良い』
ゆらゆらと変わる色彩の中で。

『運がよければ見逃してもらえらるだろう』

頭が半分眠っているような感じであった。

『誰も責めんよ。力に差が有り過ぎる』

影法師は、眩くようにそう言っていた。

『眠れ。諦めろ』

視線に、感情は無い。只淡々と語るのみ。

『——何がそんなに腹立たしい？ 分かっただろう、力の差は。勝てない相手に突つかかるのは獣としては最悪の行為だ。もう一度言う、諦めろ』

頭の中に、映像が浮かんだ。

立ち上がる力すら無い筈の犬塚と犬飼が、齒を食いしぼりながら立ち上がり、刀を構

える様子が浮かんだ。

長老がシロの前に立ち、フェンリルに向かって霊波刀を展開している様子が浮かんだ。

気絶していた筈の西条が、美神が、それぞれ拳銃とボウガンを腕だけで構え、霞んだ目で必死に狙いを定めている様子が浮かんだ。

『無駄だ。月の加護を失った人狼と、ぼろぼろの人間で何ができる?』

シロが、動かない体に血が出るほどに唇を噛み締め、今にも泣き出しそうな顔をしている様子が浮かんだ。

タマモが、悔し涙を流しているのが見えた。

二人の口が、動くのが見えた。

「……兄上」

「……忠夫」

腹が立った。物凄く腹が立った。

目の前で賢い事を言う影法師と、一瞬でも諦めそうになった自分に腹がたつた。だから。

『がつ?!』

とりあえず、目の前の馬鹿に、握り拳で八つ当たりしてみた。

「——戯け、だったかな？誰かさんがえつらそうに言ってくれたのは」

気付けば、その場所に立っていた。体が認識できず、夢のような、と思ったその場所
で。

『未熟者。ガキ』

「そーそー。それもあるけど今はいいや」

頬を殴られ、口の端から僅かに血を流しながら影法師が答える。微妙に口が歪んでいる
辺り、喜んでいようにも見えるが。

『やるのか？』

「やらいでか!!」

即答する。いかにもひねくれ者の影法師、どうやら一回は試さないと次へと進ませて
くれないらしい。気付いた後で殴ったのは、悪趣味が過ぎると思っただからだ。

『ならば、牙をとれ』

「また？」

『正確には、ようやく一本目といっても良いがな。今までの物は、これだ』

腰に差した2つの小刀の鞘を示す影法師。

『基礎の基礎、内側への強化と外側への靈波刀。そして』

その下に差した大刀を鞘ごと忠夫の前に突き出す。

「応用編、つてか？」

『違うな。本領だ』

とりあえず、突き出された3本目を受け取ろう——とした所で。

『選べ。どちらか一本だ』

影法師は、反対側に差した刀も忠夫に差し出す。

「・・・どう違うんだ？」

『フェンリルは、狼の中でも「最強の個体」。只一匹であるが故に、最強。その強さは身を持って知った筈だな？ その個体への可能性、だ』

「まだるっこしいなあ。もう一本は？」

『・・・その反対だ』

「んじゃそっち」

あつさりとは、実にあつさりとそれを選び取る忠夫。

『何故？何故そちらを「俺のキャラじゃねーよ。大体、それじゃ神様喰った向こうにやかてんだろうが」——そう言う問題でもないんだが、な』

影法師は溜め息をつくとき、フェンリルの可能性を握りつぶす。それは、至極簡単に影法師の手の中で碎け散った。

「んじゃ、行くわ。皆が待ってるんで」

『——おまけだ。牙は4本。それは3本目。後一本は・・・自分で見つけてみせろ』
「えー、ケチ」

『さっさと行け』

「最後に。この牙はなんだ？」

『それか？ その答えは——』

骨は無理やりくつついただけのようだ。動くたびに激痛が走り、いい加減にしてくれと体が文句を言っているようだ。

「半人狼の先輩が、元人間の後輩に！ 狼の仁義つて奴を！ 半端者同士、一から体に叩っこんでやらあっ!!」

——それでも、やってやれないことあないっ!!

第四十四話。

月は魔狼の顎に喰われ、今は僅かな光を、その欠片のような燐光を、ほんの少し彼らに降り注がせていた。

壊れた魔法陣の中心に座り、殺意と狂気の混合された視線で、目の前の白き獣人を睨み付けるフェンリルと。

背後に倒れ、期待と安堵の視線を向ける人狼の少女を庇うように立ち、目の前の神話の魔獣を気合と根性で睨み付ける忠夫に。

ただ、斉しく。

『半人狼が、たかが半人狼風情がつ！ たった一匹で最強の狼、狼王フェンリルに勝てるだけでも言うのかつ?!』

「思わんつ！」

異様にすっぱりはつきりと、全力でそう宣言する忠夫に残り少ない気力を奪われた他の面々にも注いでいたが。

「だけど、だ。そんな半人狼に——」

嘲るような笑みを浮かべ、右手に展開した霊波刀と、既に再生してはいるが先程斬り

飛ばしたフェンリルの爪を見比べる。

「傷付けられたモドキは、本当に最強かな？」

『殺す』

怒りにその身を震わせ、立ち上がるフェンリルの巨躯。おおよそ3階建ての建物にも匹敵するようなその巨大な生物が、圧倒的な威圧感と殺気を纏いながら動く姿は、確かに最強の狼に相応しい物であった。

「へん」

だが、それを目の前にしても忠夫の顔から不敵な笑みは消えていない。

「やれるもんなら——」

ぐつ、と体に力を籠めて、足の爪をしっかりと地面に食い込ませて。

「——やってみろやー!!」

反転して、逃げた。

『……hgc……』

思わず呆気にとられる陰念。しばし、あたりには痛い沈黙と白い空気が漂う。

数瞬も待たず、忠夫が逃げた先から響く声。

「わーっはっはっはー!!勝てはせんが負けもせんっ！俺はフェンリルに傷を負わせて

引き分けた男になるんじゃない！」

『な、ちよ、ま、待てやゴルアアアツ！』

慌てて追いかけるフェンリル。しかし忠夫の逃げ足は、半端じゃない。

そんな所が半端じゃなくてどーする。

「は、ははは、痛たたたつ！やるねえ、横島君」

「相手の「力への固執」って壺を突いて、挑発して——囿になって。全く、セコイと言うか、狡いと言うか」

傷だらけの体を無理やり地面から引き剥がすように立ち上がりながら、西条と美神が苦笑い。

「口八丁と逃げ足。人狼らしくないのう」

「ま、忠夫ですからなあ」

「全く、誰に似たのでござるかなあ」

「お前（お主）じゃないことだけは確かだな（じやのう）」

呆れた様に、笑いあいながらふらふらと、刀を杖代わりに支えにして、それでもしっかりと立つ人狼、年長組。

「兄上、せめて、もうちよつと格好良くつて言うのは駄目なんでござるか」

「良いじゃない。忠夫らしくて」

「……それもそうでござるか。偶には良い事言うでござるな、狐」

互いに微笑を浮かべながら、互いを支えあうようにして立ち上がる、妖狐の少女と人狼の少女。

「あつつ……あんた達、あいつの言った事と行動の意味、分かってるわよね？」

「人使いの荒い事で」

「あやつ一人では勝てん、か」

「裏を返せば、でござるな」

「子供の期待に応えるのは、年長者の特権だな」

にやり、と笑いあう忠夫よりも年上な人達。

「で、このぼろぼろな私達で何をどうするって言うのよ？」

「…残念でござるが、今行つても足手纏いにしかならんてござるよ」

不服そうに呟くタマモと、悔しそうに齒噛みするシロに、美神はイイ笑顔で応えてやる。

「打てる手を、打てる内に打つとくのが大人なのよ。もう直ぐ、里に残つていた人狼達が秘密兵器を持つてくるわ。それさえ届けば」…あああああつ!!」…どうしたのよ、西条さん」

得意満面の顔で説明していた美神の言葉に、絶叫で割り込む西条の声。何事かとそちらを見やる面々。

西条は、青い顔で呟くように言った。

「…月、食べられてる」

その言葉を理解すると共に、他の面々の顔から、血の気が引く音が聞こえた。

「…わ、忘れてたわ」

「視線を逸らさないで下され美神殿ー!やばいでござるよー!!」

「どーすんのつ?!どーすんのよー!!」

「ううう、う、うるさいわねっ?!今必死で考えてるんだから邪魔しないっ!!」

シロタマの涙目での追求に、しどろもどろになりながらも額に人差し指をあてて考える美神。かなり真剣であるが、唸りながら、額に汗を流しながら考えても中々名案が浮

かばない。

「長老、あなた達で里の人狼達を探し出せない？」

「無理ですじや。森の中を駆け回るだけの体力も無く、あても無くこの森の中を捜して
いては時間が掛りすぎるでな」

「さ、里に連絡して新しいのを「全部、出し惜しみしないで持つてこさせなさい！と言っ
たのは美神殿でしたなあ」・・・あううう」

「うーん、うーん。さ、西条さん、冥子達に連絡「さっきので携帯電話がおしやか。無理
だよ」・・・あううううう」

次々に考えた事を次々に駄目だしされる美神の目には、少々涙が溜まり始めていたり
する。

「どーしろつてのよー！」

「こつちが聞きたいでござるー！」

「忠夫ー!!」

森の中に響き渡る悲鳴のような声にも、応える者は無い。

——無い、筈であった。

それは、突然現れた。

月の光の絶えた森の中に、闇を切り裂く閃光が炸裂し、美神達をその明るい闇に飲み込んだ。

「あかん。死ぬ、死んでまうっ?! あんなのとまともにもやりあえるかつつの?!」

少々大きめの木の陰にて、必死で気配を殺してフェンリルの視界から隠れる忠夫。

『何時まで逃げられるかな?』

そんな、嘲るような声が聞こえると同時に爆音が響き渡る。それは、声が発せられた場所を中心に解き放たれ、無秩序に周囲を破壊する。

慌てて地面に拳を打ち込み、簡易な塹壕を作つて退避。衝撃と爆発をやり過ぎ、あたりに立ち込める濛々たる煙が晴れぬ内に、すぐさま塹壕から抜け出し、隠れた事がばれないようにそこからの距離を取る。

煙が晴ればそこに立つ、フェンリルの巨体が視界を埋める。

「ふつ……効かねえな。そんな柔な攻撃じゃ、この俺を倒す事なんざ不可能つてもんだぜ？」

『……ほお？』

ますます昂ぶる陰念の瞳。殺意を通り越して最早妄執となつたその感情は、平然と立つ忠夫を貫くように射すくめる。

「ま、こーんなちつぽけな俺に梃子摺るようじゃ、強いとは言えねーな」

その言葉に反応し、ただの一挙動で忠夫に向かつて爪を振り下ろす陰念。

それは、八つの軌跡を持つて忠夫に向かつて襲い掛かるも、全て地面や砕けた木々にぶつかつて霧散する。あつさりとしてそれを避けたように見える忠夫に、無言で睨みを利かせる陰念。喉の奥からは、悔しげな唸り声が聞こえていた。

「ほーれほれ、おつにさんこつちら〜！」

『どいこまでも戯言をつ!!』

人狼の瞬発力をフルに利用し、陰念の周りを残像さえ残りそうな速度で駆け回る。そ

の巨軀ゆえに小回りの聞かない陰念は、ぐるぐると周囲を回る忠夫にうつとおしそうに爪を振るい、尻尾で牽制するもかすりもしない。

そうこうする内に、何時の間にやら忠夫の姿を見失ってしまう。慌てて辺りを見回しても、影も形も無い白い獣人。

『ちっ！』

舌打ち一つでじつくりと腰を据え、相手の出方を伺う。

——今度こそ、仕留めてみせる。

「ああああああああ、危ないっ！ヤバイっ?!」

そこから少し離れた窪みの中に、さつきまでの威勢は何処へやら。ひたすらへたれる忠夫が居た。

「ちきしよー！ちきしよー！反則やー！美衣さんの動き方とかこの前の修行とか無かったら即死やー!!」

森の中の戦いは、それを最も得意とする化け猫の女性との戦いでおおよそ分かっている。八房の攻撃も、達人相手の修行でなんとかぎりぎり見切れてはいる。

それでも一回かすればこっちは吹っ飛ぶ事間違いない。それに比べて向こうはこっちの不意打ちで攻撃しても被害が爪一本。しかも、即時再生のおまけ付き。

「美神さん達はまだかつ?!まだなのかー!」

ひたすら小声で叫ぶ忠夫に、いまだ救いの手は差し伸べられない。

「あー、美神さん達の様子は・・・っと」

発散するだけ発散して、ようやく少し落ち着いたのか。

窪みからほんの少しだけ耳を出し、同時に鼻も突き出して、匂いと音で探ってみる。

途端に流れ込む大量の情報、と言うのは正確ではないだろう。情報と言うよりも、なんとなく分かる、若しくは感じる、と言ったほうが正しい。

——木の匂い、砕けた古木の乾いた匂い、巻き込まれた動物達の微かな声、鳴り止んだ虫たちの動く音、フエンリルの呼吸音、踏み潰された草の青い匂い、風に遊ばれて鳴る木の葉の踊る音、木と木の間を駆け抜ける風の声、それが運ぶ離れた場所の話し声と、誰かの匂い——

其処まで感じて、忠夫は鼻と耳を引っ込めた。

「・・・ふおー、頭がぐらくらするつての。親父達はよくもまあこんな感じてて平気でいられるもんだなあ」

流れ込んだ大量のそれは、超感覚が今まで使っていたものとは比べ物にならないほど

の高性能故に。

と云うか既に完全な別物。それまで感じていた僅かな匂いや音だけでなく、靈氣の流れさえも感じるそれは、つまるところ人狼が皆感じている物・・・だけではない。

普通の人狼が、感じられない部分も其処にはあった。

そう、半人狼の忠夫が、フェンリルである陰念さえも感じられない、聞き取れない物を聞き取り、嗅ぎ分けることなどできる筈が無い。

それが可能ならば、隠れることさえ不可能な、そんな距離なのだ。

最も、この場合は陰念がその超感覚の使い方に鳴れていない為、余りに多すぎる感覚が自動的にカットされて只の煩雑な匂いや雑音にしか聞こえていない為なのだ。

「・・・うっは、そうきたか」

しばし頭を抱えて悶えていた忠夫が、何とか復帰すると同時に今度は考え込む顔になる。

「どつちにしろ、もうちよつと頑張らなきゃ駄目みたいだな」

考え込んでいた顔は、あつさりと半泣きの情けない顔になり、いきなり気合が抜けている。

「んじゃ、ちよつと遊んでやりますか」

それでも次に顔を上げた時には、すっかり悪戯小僧の顔になっていたが。

「陰念っ！」

『…死にに來たか』

しばしの後、のっそりと立ち上がって美神達の居た方へと動きだそうとした陰念に、背後から飛び出て声をかける忠夫。

ゆつくりと振り向き、笑いを堪えるような表情で、忠夫に声をかける。

『そうだ。これ以上逃げ回るなら、俺は、あの人間たちを先に殺す』

「やかましわいっ！やらせねえ為に——」

嘲笑を浮かべる陰念に、思いつきり啖呵を吐いてみせる。ポイントは、表情はあくまでも真剣に、しかし焦りを浮かべたようにする事だ。

わくわくした顔なんて見せたら、疑ってくれと言っているようなものである。

「俺が、此処に居るっ!!」

『なら、お前から、だな』

先手は、陰念。振り向きかけた体を、そのまま回転させる事無く跳躍し、忠夫の直上から強襲する。が、振り下ろされた爪に、手応えなし。土煙が舞い上がる。

『ちっ！この煙の量！』

「びんぼーん。俺も手伝つてみました」

陰念が跳ねた瞬間に、足元の地面を思いつき抉つて耕し、柔らかくしておけば後は勝手に盛大な煙幕を作つてくれる。

『何処に「ここじゃあつ!!」』

顔を起こした陰念の目の前に、両手に靈力を籠めた忠夫がその手を広げて中に舞う姿が。

「くらえつ!サイキック・大神騙しつ!」

弾けた閃光と爆音は、以前の物よりも少しだけ大きかった。

『がつ!ぐおおおつ!!』

「闇夜の閃光は、効くだろつ!」

一言だけ言い残し、わざと足音を立てながら走り出す。

視界を奪われ、見事に喰らつた陰念はその不自然さにも気付かず、その音を頼りに追いかける。

『貴様アアアツ!!』

「やーいやーい、ぼーか、間抜けー、あんぼんたーん!」

『ぶつ殺す!手前だけは絶対にぶつ殺す!!』

稚拙な悪口が、余計に怒りを掻き立てるようである。陰念は、その巨体で行く手を塞

ぐ物を打ち砕きながら追跡する。

当然、忠夫のことは見えない。

——つまり、足元に張られた蔦にも。

陰念の爪が引つかかり、あつさりと千切れたそれはするすると短くなっていき、忠夫の作つたそれは見事に。

『ゴワツ?!』

フエンリルを、神話の魔獣をすつ転ばした。

種は簡単。蔦を切つたらそれに連動して、少し先の——ちょうど今、フエンリルがすつ転んだ位置——に、丸太が突つ込んでくるようになっていだけである。

その丸太が陰念の両前足の間に入り込み、全速力で走つていた上に視界も奪われていた陰念は、見事に足を取られて頭から地面に突つ込んだのだ。

「ぶははははっ!!引つかかった!!」

爆笑し、おなかを押えながら陰念を指差して笑う忠夫。すつごく嬉しそうだ。

例え細い枝でも、全力疾走中にそれが足元に突つ込まれれば、転ばずにすむ奴なんて殆どいない。ましてや、見えない状況なら、視界が奪われただけでなく、怒りで我を失つ

ている状況なら、結果は「こうなる」もんである。

「ほーれ、もいつちよ」

『貴様っ！んがっ?!』

地面にめり込んだ頭を持ち上げた陰念は、柔らかく神経の集まっている鼻の頭に一撃を喰らって思わず怯む。横合いから、かなりの勢いで柔らかい竹が、鞭のように其処を襲ったのだ。

苦悶の声を漏らしながら、忠夫を睨む陰念。ちよつと涙目である。

「其処は急所だからな。死んだりはしないけど、いったいんだよな」

のほほん、と呟く忠夫の手には、横に伸びていく蔦がある。それを引つ張つて竹を押えていた蔦を外し、ぎりぎり引つ張られたそれは勢い良く陰念の鼻を襲う位置に仕掛けられていたのだ。

「わーっはっはっはあつ！そして忠夫だーっしゅ!!」

『逃がすかああつ!!』

即座に転進して逃げ出す忠夫。顔が楽しんでる辺りなんともはや。

『ぜえっ！ぜえっ！何処に行つたあああつ!!』

息切れしながら忠夫を探す陰念。最早体力的なものなら人狼など比べる事すら無駄

なくらいの体力はあるが、この場合は精神的な疲れの方が先だろう。

あの後も、忘れた頃に足元に丸太が飛んできたり、いきなり横合いから蜂の巣が飛んできて、必要ないにもかかわらず驚いてしまったり、落とし穴に足を取られて転んだりと碌でもない目にあっているからしょうがないと言えましょうがない。

『出てこいっ！さもなければ、美神令子達の命は「もう、そんな必要はないっての」何処だっ？!』

声は聞こえるが、姿は見えない。

—— 待て、今、あいつは何と言った？ 必要ない？ そんな馬鹿な。あれだけ痛めつけておけば、しばらくはまともに動けない筈で——

陰念が、其処まで考えた瞬間だった。

思考に意識をとられたその一瞬、僅かに反応が遅れた。

闇夜を切り裂き飛来する、幾つもの銀の輝き。それは、銀で出来た矢、だった。狙いは過たず、反応の遅れた陰念の肩に、幾つもの、幾つもの突き刺さる。

『ガアアアアアッ!!』

たまたらず苦悶の声を上げる。フェンリルへと変貌してからの、初めてのダメージらし

いダメージだった。

銀の矢は、古来より邪を払う武器。そして、人狼にとって、最も苦手な物の一つ。

「やったー！ 大当たり！」

「馬鹿、直ぐに逃げるんでござる！」

「こつちで良いのかな？」

「うおおっ！せめて後一撃っ！」

それを陰念に射たのは、先程まであの場にいなかった人狼達。

そう、月を奪われた筈の人狼達。

『き、貴様ら、何故っ?!』

「よそ見してる場合じゃないワケっ！霊体、撃滅、波あああつ!!」

「ダンピール、フラーーツシュ!!」

「主よ！精霊達よ！我は世界に求めたりっ！」

「皆〜！頑張つて〜！」

振り向いた陰念の、死角からその胴体に突き刺さる凶悪な霊波と式神たち。殆ど弾き散らされ、あるいは素早く戻っていったが衝撃だけは深く体の中に響いている。

『GSだどっ?!東京に放ったビッグ・イーターどもは何を「おおおおおっ!!」』

陰念の疑問に割り込むように、正面からシロが飛び掛る。慌てて爪を振り上げ、それが届いた。

瞬間に、シロの姿が消える。

「残念。それは幻覚よ」

「わっしの幻覚との相乗効果。そうそう分かるもんでもないですカイノー」

妖狐の少女と、男の声が聞こえる。誰何の声を上げる暇も無く、足に走る痛み。

『うがっ?!』

先程まで居なかった、犬飼と犬塚、長老とシロが、それぞれ手に武器や霊波刀を持って斬りつけ、そのまま走り抜けて再び森へと消えていく。

「硬いでござるな」

「ま、一応フェンリルじゃからな」

「気長に行くさ」

「父上達、悠長でござるな」

それぞれに、そんな一言を残しながら。

『貴様らあああつ!!』

「あら、余所見は駄目だつてさつきエミに言われなかったっけ？」

「まだまだ、戦い方に余裕が足り無いよ」

振り上げた足に、銀の銃弾と破魔札の連打が襲い掛かる。僅かにバランスを崩した陰念が、視界に捕らえた物は。

「——ロック。連装式・ロング・レンジ・ライフル「スキュラ」・ファイア」

顎の下に走りこんできた女が、持っくい自分の身長を超える長さの、とてつもなく巨大なライフルを、自分の喉下に向けて連射する光景だった。

一瞬で打ち込まれた数、六発。全てが銀の銃弾で、しかも銃自体の大きさに伴って異様な威力。たまらず更にバランスを崩し。

フェンリルは、重い音を立てて地面に転がった。

——美神達の所に閃光が輝く少し前。東京で。

「ドクター・カオスっ?! なんてあんたがこんな所にいるワケ?!」

「あ、カオスさん〜」

「やれやれ。全く、騒がしいかと思えばお前らか」

エミの言葉に応えるかのように、路地裏からマリアを引き連れて現れたのは「ヨロツパの魔王」ドクター・カオスであった。

何時ものように不敵な笑みと共に現れた彼は、す、と腕を持ち上げると指を鳴らす。

「——行け」

「「いえす。どくたかおす」」

只一言に伝えて、カオスの後ろから飛び出していく小柄な影3つ。長い髪を持った機体の額には、 α の刻印が。髪を後頭部で括った、いわゆるポニーテールの機体の額には、 β の刻印が。髪を白いバレッタで止めた機体の額には、 δ の刻印が。

彼女達はそれぞれに得意な距離を取ると、前方に展開するビッグ・イーターの群を駆逐に掛る。

α が、長い髪を夜気に躍らせながら、構成したパイルバンカーでビッグ・イーターの頭から尻尾までを串刺しにし、 β が生み出した重力場に何匹かが囚われ、あるものはそ

の力場に引き裂かれ、潰され。又あるものは、 δ に呼び出された重火器の群で蜂の巣にされる。

「・・・完全に、銃刀法違反だね」

「かっかっかっ、捕まえられる物なら、の話じやろうが」

「先生っ！それより、早く行かないと美神さん達がっ！」

「そうよく令子ちゃんたちがく心配だわくく」

呆れた様にその光景を眺めるGS達の前で、大笑する黒いマントの老人。それを横目にピートが慌てたように唐巢神父に声をかける。

「お主ら、フエンリルを相手どっておるのじやろう？」

「な、なんで知ってるんですカイノー？」

いきなり放たれたその言葉に、困惑するGS達。彼らを尻目に、カオスは懐から幾つかの小さな立方体を取り出し、マリアに投げて寄越す。

「マリア、手伝ってやれ。あの本を書いたわしにも多少の責任はある。α達を作らせたのは、お前自身が好きに動く為、じやろう？」

「イエス。ドクター・カオス」

それを受け取り、にっこりと笑うマリア。彼女はその立方体に手を添えると、唐巢神父達に向けてそれを展開する。

「こ、これは一体なんなワケー?!」

「うわあつ?!」

「エミ君、冥子君! ピート君、タイガー君!」

「きやあ〜」

それは唐菓たちをその中に取り込むと、もとの小さな立方体になってアスファルトの上に転がった。それをそつと拾い上げると、マリアはブーツのロケットを吹かしながら宙に浮かぶ。

「行つてきます・ドクター・カオス」

「おー」

ひらひらと、背中越しに手を振る父に笑顔を向け、妹達に視線を一瞬向けるとそのまま飛び立つマリア。

空中で、一人空からデータリンクで情報収集と索敵に当たっていたθが、羨ましそうな表情を見せたが、ウインク一つですれ違つてそのまま——美神達の下へと飛び去つた。

「韋駄天の使う、配達用の神器の模造品。ま、乗り心地は悪かろうが、我慢してもらおうか」

にやにやと笑うカオス。だが、その笑いを引つ込めると、少し寂しそうな顔になる。

「犬飼忠夫、か。小僧、マリアの力まで借りておいて、負けましたじゃ許さんからな。…：それにしても、もうちよつと未練くらい見せてくれんものかのう」

空を飛んでいったのは、鼻歌くらい歌いそうな雰囲気のマリアであった、とは言わぬが花。

そのまま飛ぶこと数十分。良い感じにシエイクされたエミ達を、模造品の名に恥じず爆音と閃光を伴って開放し、カオスからの逸品を美神達に渡し、冥子の式神のシヨウトラで傷に応急手当を施し。

後は近くまで来ていながらも力尽きていた里の人狼組と合流し、そして、

——彼らは、反撃の狼煙を上げたのだ。

「よっ！マリア、良く此処が分かったな」

「横島さんの・バンダナの発信機・周波数・把握しています」

忠夫と合流したマリアの視線の先には、ドクターカオス謹製の破魔札と、手ずから練成した特別製の銀の銃弾、その他諸々の霊媒道具を駆使してフェンリルと戦う美神達と、首から青白い、とも金色の、とも取れる不思議な色の宝石を下げた人狼達。

「なあ、あれってなんだ？」

「ドクター・カオスが作った・満月の光を・集めた・特製の・月光石です。一度その身に・受けられましたか？」

「・・・あー、成る程」

それならば、一時の代用品としては十分にその役目を果たせるだろう。しかし、どう見ても元氣一杯なわけが、カオスのそれとは何となく。

「この辺が痛いなあ」

一回喰らった場所が痛くなるような気もする訳で。

「さすり・ましようか？」

「うえっ?!え、いや、その」

優しく微笑みながら手を伸ばしてくるマリアに、わたわたとしてしまう忠夫であったが。

「それなら、拙者が舐めてヒーリングを」

「私がするから、あんたはとつとあつちについてなさいよ」

何時の間にか現れたシロタマが、ぐいぐいと互いを押し合いながら忠夫の胸に抱きついたところでビツクリする。

「お、お前ら、あつちは?!」

「タマモ、どくでござる」

「其処の女、邪魔しないでよ」

「私の・役目です」

ぐいぐいぐいぐい押し合いへしあいしながら、忠夫の懐に潜り込もうとする3人。当初の目的は何処に行ったのだろうか？

「あんたらー! いい加減にせんかー!」

そんな事をやってると、所長がめつちや怒つてる訳で。何時の間にか近くに浮いていた幽霊の少女が、うらめしそうにこつちを睨んだりもする訳で。

「りよーかいましたあつ! ほらほら、いこうぜ、なつ?!」

「「・・・ちえ」」

不貞腐れる3人をなんとか宥めてすかして戦場に向かう。始まる前から気苦労が尽きない事である。

「あ、その前に、マリア」

「なんで・しようか？」

「あのさー……」

戦いが、GS達の反撃が始まってから、数十分が経過しようとしていた。

GS陣営も疲労が溜まってきており、霊力の残りも心もとない。冥子にいたっては緊張から暴走寸前である。

フエンリルも、流石にこれだけの数の差に加え、無力化したはずの人狼達の復活と、弱点である銀、そして、大量の手数に押されて徐々に傷付いていった。

「し、しづといわねっ！」

『最早手段は選んでいられんっ！』

美神の悪態に応えた訳でもないだろうが、毛皮を血に染めた陰念は、一旦大きく飛びのいてGS達から距離を取る。

『貴様らが数で押してくるのなら、此方も数で押すまでだっ！』

「……へえ？おもしろいじゃない。やれるもんならやってみれば？」

その言葉に、美神は面白そうな表情になる。一瞬慌てた他の面々も、その表情と言葉に僅かに下がって距離を取る。

『余裕ぶつていられるのも今のうちだっ！来いっ！ビッグ・イーターどもっ！』
その声に応え、陰念の背後の森から大量のビッグ・イーターが――

――現れない。

「あゝら、どうしたのかしら？」

「うわー、めっちゃ楽しそう」

「美神君・・・いや、もう良い」

今にも笑い出しそうなのを堪えながらの美神の台詞に、後ろの忠夫たちが呆れたような、疲れたような視線を送る。

『何故だっ！どうして――「馬鹿？あんたが自分で言ったのよ。純粋な人狼は、全てフェンリルの可能性を持っている、ってね？」・・・それが、それがどうしたっ?!』

とつても意地悪な笑顔を浮かべながら、美神が先を続ける。

「分からない？つまり、フェンリル＝純粋な人狼。魔族でもなく、メドーサの眷属の力も

無くなつてるとは思わなかったのかしら？」

「つまり、フェンリルになつた時点で非可逆的に化け物どもを呼ぶ力を失つたという事じゃの」

愕然とする陰念。それはつまり――

「あんたは、とうとう一人ぼっちになつちやつた訳。ま、あんなのが仲間だつて言う訳じゃないでしょうけど」

「フェンリルは、個体の最強。他の最強を認めないが故に最強、じゃからの」

『馬鹿なつ、馬鹿な、そんな事があつて「寂しい？他の全てを否定しなきゃならない力。どう？手に入れた気分は？」』

―― なんだ、なんだつてんだ？

―― 俺は、力が欲しいと思つた。

―― なんで

―― なんであいつらは

―― 俺と互角にやりあいながら

―― あんなに沢山いるくせに、弱い奴らが集まつただけのくせにつ！

——俺を哀れむような眼で見ているやがるっ?!

「それは、な」

陰念の心の叫びが聞こえる訳でも無かるうに、哀れむような彼らの中から歩み出たのは忠夫、半人狼の、青年。

「お前が、弱いからさ」

『なんだとっ?!』

最早、陰念の眼に狂気は少ない。瞳に浮かぶのは、悔恨と、諦念。

「もう一つの、俺たちの強さ。じっくりと見ていきな、お代はみてのお帰りだ。——個としての強さじゃない、仲間の、群の強さって奴だっ!!」

『ふざ、ふざけるなあああっ!!』

無理やりに自分を叱咤し、必死で吼声を上げる。負けられない、負けてなんていられない。じゃないと、こんな姿になった俺が、俺の意味が——

「行くわよっ!皆っ!」

「了解っす!!」

美神が、忠夫が。

「こつちも、負けてなんていられないのでねっ！」

「陰念っ！行くぞっ！」

唐巢が、ピートが。

「全く、しんどい事ばかりなワケっ！」

「ワツシは、お前には2度も負けるわけにはいかんのジャー！」

エミが、タイガーが。

「心配する事は無い。勝って帰れば、それなりの報酬は出すよ」

「私も頑張る！」

西条が、冥子が。

「イエス。ミス・美神」

「タマモ、兄上に良い所みせるでござるよっ！」

「あんたも偶には良い事言うじゃないっ！」

マリアが、シロが、タマモが。

「皆っ！此処が正念場じゃぞっ！」

「無事に帰れば美神殿から宴会の援助があるでござるっ！」

「気合入れろよっ！」

「「「応！」」」

そして、人狼達が。

——傷つき、心の折れかけたフェンリルとの、最後の戦いが始まった。

第四十五話。

「長老……分かる？」

美神の、只一言の質問に、問われた人狼族の長が僅かな笑いと共に答えを返す。

「勿論。違いますな、今までと」

「全く、生意気な事やってくれるわ」

呆れた視線を向ける美神の前には、神話の魔狼に襲い掛かる沢山の小さな影たち。

一人が突撃すると見せかけて、飛び出した瞬間に横合いからも一つの影が飛び出し空中で衝突——するような勢いで互いに足を合わせ、左右に吹っ飛ばすように軌跡を変えらる。

その後を薙ぐように襲い掛かるフェンリルの魔力砲。しかしそれは何も捉えず、只地面を抉るばかり。

「シロ！あんまり無茶するなっ！」

「兄上、助太刀感謝でござるっ！」

互いに声を掛け合いながら、左右に分かれて回り込む。どちらかを攻撃するか一瞬迷い、そしてその迷いは直接相手の攻撃に繋がる。

「親父っ!」

「応っ!」

回り込まれる前に、と後ろに下がろうとしたその瞬間、真後ろから響く声。慌てて方向転換、爪を振り上げ――

「矢を腕っ! マリア、地面についてるほうの足っ!」

「おりゃーっ!」

「喰らうでござるっ!」

「痛いぞっ!」

「せいやーっ!」

「フルオート・ファイアッ!」

振り上げた腕に銀の光が四本同時に突き刺さり、反対側の足に銀の銃弾が連続で叩き込まれる。

『ゴワツ?!』

たまらずバランスを僅かに崩し、迫る犬飼に振り下ろされた爪は、その横を僅かにずれて通り過ぎ、結果、犬飼の居合は、見事にフェンリルの胴を薙ぐ。

「今っ!!」

「霊体撃滅波あああっ!!」

「ダンピール・フラッシュっ！」

「燃え尽きなさいっ！」

エミとピートとタマモの、三つの攻撃が衝撃で体勢を更に崩したフェンリルの顔面に襲い掛かり、防ぐ事さえ俟ならず、立ち上がった爆炎は完全にフェンリルの視界を奪う。

『貴様らアアッ！』

「神父っ！タイガーはまだっ！」

「神よっ！我らを災いより遠ざけたまえっ！」

苦し紛れの、エミ達を狙ったフェンリルの魔力砲は、唐巢神父が作り出した防壁が僅かに逸らし、体力を削るも決定的な打撃を与えるには及ばない。

「3人は下がって！冥子ちゃん、頼んだっ！」

「シヨウトラちゃんくお願いく」

エミ達は一端後退し、後ろに控える冥子の式神によってヒーリング。素早く回復してもらおう。

間を埋めるのは、前衛の人狼達。

「親父達、左右からッ！タイガー、”ずらせ”！」

犬飼と犬塚が左右からタイミングを合わせて斬りかかる。それを踏み潰すように上から振り落とされた前足は、両足とも確かに人狼達を捉え——無かった。

『ナニイツ?!』

「それは幻ですジャー!」

「せいりやつ!」

「はあつ!」

僅かにずらされた幻影を思いつきり踏んだその足に、親父達が切りつける。痛みに少し体を反らした所に。

「叩きこめえつ!」

犬飼たち以外の全員が、同時に攻撃を叩きこむ。あるものは喉元に、あるものは眉間に。口に、眼に、鼻に。

思い思いの場所めがけて打ち込まれたそれは、確かな手応えと、巨大な爆炎となって現れた。

「やったか!」

いらん事を言った固唾を飲んで見守る西条の、その腕を引つつかんで後方に投げ飛ばす忠夫。そこに繰り出されるフェンリルの爪。

「フラグ立ってんなつ!」

「・・・もうちよつと他の手段はなかったのかな?」

ごろごろと転がって、土だらけになった高級そうなスーツをはたきながら立ち上が

り、ぶすつとした表情で忠夫を睨む。睨まれた方がそつちを見ていないのであんまり関係ないが。

『グ、グルルルル・・・』

「うーん、もうちよつと弱らせてほしいなあ」

「無茶ばつかり言わないの。で、何か考えがあるのよね？」

無くなった煙の向こう側には、口惜しげな唸り声を上げる、体中に僅かなりとも大量の傷を受けたフェンリルの姿。

顎に手をあてながら、それを観察する忠夫に呆れた様に美神が突っ込む。

「あるよーな・・・無いよーな？」

「・・・ま、しつかりやんなさい」

何処までも気の抜けた答えを返す忠夫の頭を軽く小突きながら、美神はカオス謹製の破魔札をその手の中で何枚も、扇のように広げる。

「群ねえ・・・リーダーなんて柄じゃなくせに、頑張ってくれちゃって」
クスクス、と愉快そうに笑いながら、その破魔札に霊力を通わせる。

「・・・今回だけよ？しつかりと、エスコートしてね」

聞こえないであろうその呟きを、忠夫が聞いていたらそれだけでノックアウトされそう、それは艶を含んだ声音であった。

「群の統率者ねえ……キャラじゃないなあ」

ぼやく忠夫の頭の中には、先程から超感覚で捕らえた大量の情報が、絶えず流れ込んでいた。

人狼達の位置、美神達の位置、彼らの霊力の高まり具合、フェンリルの状態、どこにその魔力が集まっているか。

そう言った表面的なものから、細かく行けば、フェンリルの重心、風の吹き方、地面にある石ころや低木、呼吸音、誰かが足を僅かにずらした音、銀の矢を番えた弓の弦の音。

集中していないと脳みその中身がぐちゃぐちゃになってしまうようなその感覚を、なんと例えればよいのだろうか。

強いて言えば、そう。

世界が、この手の中に在る。

「やっぱ、俺には合わん」

苦笑いしながら、てくてくとフェンリルの前に歩み出る。

『横島・・・貴様、何処までも邪魔をスルツ！お前は一体何者だつ?!』
「あー、そうだなあ。今だけは」

頭をぼりぼりと搔きながら、仲間が動き終わるのを待つ。あつちもこつちも長くない。先に諦めた方が負け。何処でも一緒に、誰でも同じ。

だから、彼はこう名乗る。

諦めてなどやるもんか。

この名前は、父と母が付けた名前。

それを名乗る以上は、人狼の誇りにかけて、父と母にかけて——ま、親父はどうでも良いが——負けられない。

だから、名乗る。

「犬飼 忠夫。人狼、犬飼ボチの息子にして、人間、犬飼沙耶の息子。只の半人狼、犬飼忠夫だ！」

『…オウウウウウウン』

フェンリル、いや、陰念は、首を逸らし、獣としての最大の弱点を晒しながら、唐突に天に向かって吼えた。

『ならば、俺はフェンリルだ。神話の魔狼、狼の王。只一匹の、魔獣。それで良い。それ

だけで、それだけで構わんっ!』

「そんなら、いっちょ意地の張り合いと行こうかいっ?!

そして、戦いは、最後の最後へと進み始める。

「最後に、この牙はなんだ?」

『それか? その答えは、誇る牙、だな』

「訳分からん。何を誇れっーんだ?」

『分かる筈だ。お前と共に在るもの達を、誇る牙だ』

「確かになっ！皆、俺なんかが率いるのは勿体無いっ！」

戦いは、激しさを増していく。美神が、唐巢が、西条が、エミが、冥子が、ピートが、タイガーが、シロが、タマモが、長老が、犬飼が、犬塚が、里の人狼達が。

一つの生き物の如く、巨大な魔狼に挑みかかる。

その牙は、フェンリルの体をこそぎ、爪を折り。

その爪は、フェンリルの肉を断ち、骨も折れよとばかりに畳み掛け。

その咆哮は、心を折ろうとに叫びつつける。

だが、相手は神話の魔狼。

その爪の一振りですつと8つの斬撃を繰り出し、GS達を掻き回し、時には一人二人と吹き飛ばす。

その魔力は、逸らされ、受け流されながらも確実に傷を刻み付けていく。

その咆哮は、彼らでさえも動きを止める。

巨大な獣と、小さな獣達の戦いは、只ひたすらに加速していき——そして。

『ガアアアッ!』

「あぶねえっ! シローっ!」

「兄上——?!」

がばり、と開いたフェンリルの口に、喰われそうになったシロを庇った忠夫が、その右腕をくわえ込まれた事で、終結した。

『グル……グルルル』

どうだ、と言わんばかりに、牙で腕を噛み千切る事ができる忠夫を、唸り声を上げながら見るフェンリル。

「が……いつ……てえ……」

「兄上っ! 今——」

「待て、シロー!」

飛び出そうとしたシロを、一喝で止めたのは長老である。その瞳は、まだ折れていない。

「何故、何故でござるかっ?!」

視線は忠夫から逸らせぬままに、シロが必死に問い掛ける。足は、既に震えている。後ほんの少しの切欠があれば、溜め込まれた力は全てを弾けさせ、助ける為に、何もかもを省みる事無く飛び掛るだろう。

「・・・くっ」

「ノー。ミス・タマモ。刺激しては・駄目です」

狐火を作り出し、寸でのところでそれを押し止めたタマモがそれを再び投げつける前に、マリアが止めに入る。

「痛いわよ」

「ソーリー」

タマモの肩をつかんだその手には、危なく握り潰されそうなほどの、異様な熱が籠っていたが。

「犬飼」

「分かっている！今の拙者に話し掛けるなでござるかっ!」

それぞれが、それぞれに焦っていた。

それを見下すように、上から見下ろすフェンリル。

此処までか、と言っているようだった。

此処までなのか、不満げに問うようにも見えた。

彼らの前にあるのは、右腕を噛まれ、フェンリルが後少し力を加えるだけで、骨が砕け、肉が千切れるであろうその腕を見て、痛みを堪える忠夫——ではなかった。

「へ、へっへっへっへっへ」

『グル?』

痛みに目の端に涙を浮かべつつ、不気味な笑い声を上げる忠夫。右腕は、肘から先がフェンリルの牙の中に消え、其処からは大量の血が噴き出している。

だが、それでも。

忠夫は、こう言った。

「最後の賭けだ。行くぞ、フェンリル……いや、「陰念」

衝動に、そう、恐怖と言う衝動に突き動かされ、忠夫の腕を食い千切ろうとしたその瞬間。

フェンリルの口の中で、満月の光が爆発した。

『ゴアアアッ!』

「んで、もう一丁!」

たまらずその口を開いたフェンリルの、喉の奥めがけて忠夫が投げつけた物は、マリ
アから貰った月光石、その数3つ。

一つは今口をこじ開ける事に使い、残った全てをフェンリルの体内へと送り込んだ忠
夫は、そのまま地面へと落下する。痛みと衝撃に意識が飛びかけ、受け身も取れずに、

「——この、馬鹿息子がっ！」

地面に叩き付けられようとした所で、駆けつけた犬飼が搔つ攫った。

「横島・さん！」

「兄上っ！」

「忠夫っ！」

「横島君っ！」

「横島さんっ！」

「シヨウトラちゃん〜！」

慌てて駆けつけるエミを除いた女性陣。男達はフェンリルを見ていた。

苦しみがく、神話の魔獣を。

『な、何をしたあっ！』

「へっへっへっ……手前の腹ん中に、月の光の塊をぶち込んだ。月の女神様のお出まし

だっ!!」

アルテミスは、月の化身。人狼の守護女神であるかの神は、現れるときは満月のような雰囲気であった、とはタマモの弁。

ならば、月の光を固めた月光石で、その力を増幅できない物だろうか？

賭けともいえない賭け。だから、できるだけ勝率を上げるためにフェンリルを弱らせ、4つ持っていた月光石を使わずに、今の今まで機会を待った。

ま、シロが危なかったから飛び出して。偶々、何時使ったろうかと右手に握りこんでいたそれが、右腕ごと勝ち誇ったフェンリルの口の中に入ったのは僥倖だろう。

右腕は、砕け散った月光石のおかげで徐々に再生しているとは言えまだまだ痛い。だが、まあ、どうやら。

——賭けには、勝ったようである。

『ぐおおおおおおおおおおおっ!!』

苦しむフェンリルの姿は徐々に小さくなっていき、それと同時に、その体から、月の

光の結晶のような雰囲気の、神々しい女神が浮き出てくる。

『痴れ者がっ！よくも、汚らしい男の分際でっ！』

現れた女神は、結構キツツイ性格だった。

「長老、うちの守護女神って、あんななのか？」

「・・・あんなのとか言うな。守護女神は守護女神じゃ」

聞こえてたら天罰確定。

『・・・ふん、御主、色々と混じりすぎておるようじゃな』

『ガツ、グオツ、オレに、触るなっ！』

力を奪われ、急激な霊格の低下に悶え苦しむフェンリルに、ゆっくりとその手を伸ばすアルテミス。その手が触れるか触れないかのところで、フェンリルは更に苦しみもがき出す。

『・・・我が同胞とも言える存在に、不遜にも棲み付く輩は——』

そして、何かを手繰り寄せるようにその手を思いつきり引っ張ると。

『グギヤアアアッ?!』

『——これか』

悲鳴と共にフェンリルの体の中から、湧き出るようにビッグ・イーターが何匹も、何匹も這い出てくる。

汚らわしさを散らすようにその手を2度、3度と振った女神は、天に——今は見えない月にその手を伸ばし、呟いた。

『消えうせろ』

フェンリルに喰われた筈の、天の月がその輝きをいともあつさり取り戻した。

あたりの闇が、その満月の光で打ち払われ、その闇に隠れ、逃げ出す化け物たちを引きずり出し。

天から降り注いだ月光の矢が、片端から焼き潰していった。

後に残るのは、最早息も絶え絶えのフェンリルと、その上に静かに浮かぶ月の女神。そして、呆然とした様子でそれを眺めるGS達。

「さ、さすが人狼の守護女神だね！長老！」

「そ、そうじゃろそうじゃろ！」

張り詰めた空気は、保身に走った半人狼と人狼族の長によって打ち砕かれてたりするが。

『さあ、帰ろう。我らは最早、この世に存在する場所はない』

そう囁き、フェンリルの体ごと浮き上がっていくアルテミス。言葉も無く、それを見送る忠夫達。

『それから、お主ら』

「「「「は、はいっ！」「」」」」

ふと、思いついたようにアルテミスが人狼達に話し掛ける。全員直立不動で言葉を待つ人狼達に、アルテミスは、一言と、あるモノを残して去っていったのであった。

「終わったの、かな？」

「ま、色々と問題は残ったでござるがな」

『・・・・はあ~~~~~』

最後に、本当に最後に出てきたのは、歓声でもなく、涙でもなく。

万感の思いを籠めた、溜め息のような言葉だった。

全てが終わって日が昇り、夜を徹した作戦も、無事に終わりと言った所。疲れきった面々はその場で泥のように眠った後、なんとかふらふらと人狼の里まで帰り着き、再び今度は柔らかい布団と暖かいご飯で一休み。

そして、夜がくれば。

「と、言う訳で。今回の騒動も無事片付き、わしも長として嬉しく思『カンパーイ!!』」人の話を聞かんかあああつ!!」

大宴会の、幕開けだった。

「こらうまいっ!こらうまいっ!」

「忠夫ツ!お前は肉ばかり食うんじゃないでござるっ!!」

「そー言う親父こそ、その手に抱えた山盛りの酒はなんだよっ!」

「兄上っ!これも美味しいでござるよう」

「忠夫っ!このお揚げ、もうサイコー!!」

「シロく、父には無いのか」

「父上はあつちいつてるでござる」

「・・・チキショー!!」

「うおおっ!何する犬塚のおっさん!」

あつちでは人狼達が車座になって、美衣たち居残り組が作った料理と秘蔵の酒で盛り上がり。

「美神さん、これ、何て読むんですか？」

「・・・竜殺しつつ、これ神界のお酒じゃないの?!」

「ねえん、ぴくとく。私、よっちゃったみたい♪」

「まだ一滴も飲んでないでしょう?!」

「うやく、ふわふわするの〜」

「冥子君っ！式神を、式神を引っ込めたまえー!!」

「なんでわっしがこんなめにー!!」

「あ、横島さんが巻き込まれてます」

「うおっ?!お前ら、ちよつとま——うぎゃー!!」

GS達もそれぞれに好き勝手に騒ぎまくり、宴の夜は過ぎていく。

「ところで、忠夫」

「なんだよ、親父」

懐く式神たちを引き離し、なんとか自分のご飯を確保して。ようやく一息ついていた忠夫の元に、実の父がお酒持参でやってきた。

「俺のシロ、とは、犬塚の前でいい度胸でござったぞ」

「……え」

固まる忠夫。

「あ、兄上、そんな……不束者ですがよろしくお願いするでござる」

何時の間にやらやってきた、シロが頬を染めながら三つ指ついて頭を下げる。一瞬動揺しながらも、何とか言い逃れしようとしたが。

「せ、拙者じゃ駄目でござるか……？」

うるうると下から見つめるシロに、今更雰囲気流されましたー！とか言えない。言える訳が無い。いやつあ漢じゃない。

「え、うあ、うああ」

じりじりと追い詰められる忠夫。シロはひたすら膝で忠夫に近づいていく。

「兄上……」

「え、ちよ、まっつて」

往生際の悪い忠夫の頬に、シロの手がそつと添えられる。犬飼忠夫、大ピーンチ。ちなみに犬飼父はにやにやと、杯をあおりながら面白そうに眺めている。

「兄上……」

「——ストップ。ミス・シロ・横島さんは・私の・娘達の・父です」

マリア出現。爆弾発言と共に。

「なにつ！忠夫、お前孫が出来たのなら早く言わないかっ!!」

「曾孫じゃと?!どこじゃっ?!」

長老、曾孫（正確には違うが、本人の中では同じようなもの）に反応して即参上。

「ほ、本当でござるか兄上っ?!」

「違うっ?!いや、アレはジョークで?!」

「ずい、と近づこうとするシロの襟首を掴んで引きとめながら、混乱する忠夫に向かってマリアが告げる。

「後は・籍を入れる・だけです」

「いやそれは心惹かれるものがあるけどもっ?!」

「そんな訳無いでしょっ?!私、忠夫と3日3晩二人つきりで過ごしたのよっ?!」

タマモ、降臨。

「いや、お前そんな時狐じゃ「あの時の忠夫・・・優しかった♪」うぎやあああつ?!」

確信犯である。悪女である。流石は傾国の妖狐、この手の策略はお手の物。更に場を混乱させるタマモの台詞に悲鳴をあげる忠夫。

「横島さん、帰ったらじくじくつくりと、お話ししましょうね?」

「おキヌちゃん、そんな目で俺を見ないでー!!」

ふよふよと現れたおキヌが、忠夫の肩に後ろから手を置き、にっこりと笑う。幻覺であて欲しいが、その後ろに黒いモノが見える。

「はっはっはっ、横島君、令子ちゃんに手を出す前に、周りの関係くらいキチンと整理したまえ。さもなくば…斬るよ？」

「誤解じゃー！濡れ衣じゃー！」

「せめて自分の状況くらい、しっかりと見たほうが良いと思うんですけどねえ」

「全くですノー」

忠夫の膝の上にはタマモが座り、シロがそれを威嚇し、マリアがシロの襟首を掴みつつ羨ましそうに指をくわえていたり、忠夫の肩に手を乗せて、おキヌが頬を膨らませていたり。

——説得力の欠片も無い。

「全く、馬鹿ばっかりなんだから・・・」

何となくその輪に入りづらいというか、入りたいと言う思考を無理やり頬の赤みと共に頭を振って捨てた美神は、とりあえず事務所に帰ったら一通りしばいておこうかな？とか考えていた。

「わうわうっ!!」

「お、すまんの、『陰念』」

曾孫に意識の殆どを取られていた長老は、後ろから聞こえた子犬の鳴き声に反応して声をかける。

そう、女神が残していった、不純物。フェンリルから弾き出された、人としての、陰念。

とは言え、体に埋め込んだ人狼の細胞がどうも妙な具合になってしまったらしく、純粋な人間でなく、人狼に近い在り方となっていました。まだまだ慣れない性もあつてか、2日たつても子犬のまま。

人狼の女神曰く、『きつちり躰直さんかい』

西条あたりと色々ごたごたはあつたものの、里の結界が修復済みで、通行証が無けれ

ば里の出入り自体できない事、GS達の怪我については、天狗の薬や人狼族も協力してのヒーリング、六道家の式神等、様々な手段を用いて対応する事。

そして、しっかりとがちり真人間になるように再教育する事。勿論、長老と里の剣士トップ達が、である。

しばらくは獣の姿からは戻れないであろうし、なにより、「ビッグ・イーター」に寄生される以前の陰念は、そう悪い奴ではなかった」から。

忠夫の言葉である。

何もかもビッグイーター、ひいてはメドーサが悪いとは言えない。が、それでも、やり直せる機会があるのだから、人狼として、やり直させてやって欲しい。

結論としては、その日の昼までにだされた結論としては、それが精一杯であった。後で頭を抱える事になった西条は、苦笑いしながらも「報告書、手伝ってくれるよね？」と、美神に笑いかけていた。

「なあ、新入り・・・お前、彼女は居ないよな？」

「居ないと！居ないと言えええつ!!」

「あははー、裏切り者には罰をー!」

「むう・・・お前はこつち側でござるな」

「ワオーン!!」

「ま、頑張るんじゃない」

これから先も色々あるが、とりあえず、しばらく陰念は酔っ払いどもの玩具だ。

『キ、キキキツ』

「・・・ご苦労だった」

一匹のビッグ・イーターが、メドーサの手の上で砂と化した。体の半分は焼け爛れ、よくもここまでもつたと言わんばかりのその骸は、メドーサの掌に、数本の獣毛を残して崩れ去ったのだ。

「フェンリルの毛・・・最後の最後まで、役に立ってくれたねえ」

闇に、メドーサの含み笑いが響いた。

「ぜはっ！ぜはっ！誰も俺の話なんか聞きやしねえっ！」

「兄上ー！何処でござるかー！」

「何処よー！」

「横島さんの・発信機・反応・・・有り」

「しまったー！」

ほんのちよつと欠けた月の下、犬飼忠夫のお話は、ひとまずこれにて一休み。
それでも彼は、彼らが歩みを止める訳ではなく。

月の下、空の下、彼らは今日も頑張っている。

——それもまた、一つの物語。

——何時かまた、「半人狼」の青年の周囲に起こる諸々を、語る時が来る事を。

——それではこれにて、ひとまずの閉幕といたします。

——また会う夜まで。

第二章

第壹話。

「親父、獲れたぞー」

「ふむ、もう十分でござるかな？」

「ああ、こんなもんだらう」

此処は人狼の里より、ほんの少しだけ離れた山の中。深い緑に囲まれた森の中を、一本の透明なせせらぎが流れるその傍で。

「兄上ー！ほらほら、猪でござるよっ！」

「ちよつと、シロツ！それは私も仕留めるの手伝つたでしょ！」

「危うく山火事を起こしかけたのは誰でござつたかな？」

「・・・そ、それは秘密って言つたじゃない・・・ごによごによ」

人狼三人と、妖狐、そして半人狼の青年が、楽しみに散歩ついでに食料調達真つ只中であつた。

「うー、さぶさぶ。そろそろ水が冷たくなつてきたなー」

川べりに座つて濡れた服をやや寒々しそうに脱ぐ、赤いバンダナをつけた半人狼の青

年、犬飼忠夫。現在都会でバイト中。「横島忠夫」と、叔母に作つて貰つた戸籍の偽名を名乗つて生活する、れっきとした人外である。

状況の許す限り美人の女性に向かつて求婚する、お年頃。でも今だ成功した試しは無し。原因は彼かそれとも運命か。とりあえず運命の神がいれば彼を腹を抱えて笑いがら見ているであろう、そんなトラブルに好かれる存在でもある。

「鍛え方が足らんからでござる。心頭滅却すれば火もまた涼し、逆もまた真なり、でござろうが」

それを呆れた様に横目で眺めながらも、焚き火に枯れた木の枝を追加して少し大きくしてやっているのが彼の実父、犬飼ポチ。

目付き悪し、態度悪し、雰囲気恐ろしげと三拍子揃つた悪人面。これで美人の嫁を娶つたというのだから世の中摩訶不思議である。

「ま、これだけあれば少しくらい遅くなつても長老も文句はいわんだろ？少しくらいゆつくりして行くさ」

それを軽く笑いながら、手早く魚に串を差し、焚き火の傍で早速焼き始めているのが犬塚父。犬塚シロの父にして、犬飼ポチと共に人狼の里においてトップクラスの腕

を誇る猛者である。酒には弱くて泣き上戸、しかも娘にダダ甘し。

一人ずつでも厄介なのに、ポチと二人揃うとその悪乗りが相乗効果で倍率ドン！な困った親父の片割れである。

「兄上、拙者、頑張ったでござるよ〜?」

「あー、分かった分かった。よしよし」

「きゅ〜ん」

自慢げに獲物を焚き火にあたる忠夫に見せ、ご褒美とばかりに頭を撫でてもらいご満悦の少女は、犬塚シロ。長い銀の髪に、一房だけ赤いメツシユの入った髪を持つ、今だ未熟ながらも、いや、未熟だからこそ多くの可能性を秘めた年の頃14、5の人狼族の少女。

忠夫と血縁関係にあるわけではないが、幼い頃からの習慣で彼を兄と呼び慕う少女でもある。・・・何時か妹から脱却するのが目下の目標。

「私だつて頑張ったのに・・・」

「分かつてるつて。ほれ」

「や、ちよつと、もう・・・」

くしゃくしゃと頭を撫でられて、ちよつと髪型を気にしつつもほんの少し嬉しそうに

しているのが、金毛白面九尾の狐、大妖の転生体のタマモである。綺麗な金の髪の毛を、頭の後ろで九つの房に括ったその髪型は、ニンテールと言った所。

大妖怪の転生体ながらも、別に悪きをする訳もなく、今は人狼の里で生活中。シロとはある意味獲物を争うライバル関係にあるが、傍から見れば仲の良い友達同士である。本人に言えば焦がされるであろうが。

「忠夫、いつまで此処に居られるでござるか？」

「ん、なんか美神さんのほうが用事があるらしくて、それが終わったら連絡するって言うってだけ」

脱いだ服を焚き火にあてて乾かしながら、ポチの言葉に応える忠夫。ぱちぱち、と弾ける火花に焦がされないように少し離してはひっくり返して乾き具合を確かめる。

「それじゃ、もうちよつと居られるでござるな！」

「明日は何処に連れて行ってもらおうかしら？」

嬉しそうに忠夫の横に座るシロが尻尾をぱたぱたと振り、反対側でタマモが明日の予定を空を見上げながら考えている。

「久し振りに一緒に修行でもするか。いや別に他意はないぞ？」

「・・・シロ、少し離れる。親父さんが抜きそうだ」

忠夫の右手を抱え込んだシロと、抱え込まれたその腕を見ながら引き攣った笑顔で犬

塚父が必死に刀を抜こうとする右手を左手で押さえ込んでいる。かたかたと鳴る刀の音が、カウントダウンのようにも聞こえなくは無い。

「・・・む、焼けたでござるか」

「むぐむぐ。ほりやふまひ」

「食べるか喋るかどつちかにするふえむぐむぐ。みゆ、ふふあい」

「ほやふいほほ」

「あんた等皆同類よ」

「・・・父上、兄上」

焼けた魚を両手に持って、がつつく男性陣を見るタマモとシロの視線には呆れの成分が多めに盛り込まれていたりする。

それでもお昼ご飯がなくなつてはたまらない、と、彼女達も香ばしい匂いを放つ獲れたての川の幸に手を伸ばすのだった。

「美神殿、ご協力、感謝いたします」

「ま、うちの所員の健康管理も所長の仕事だから。変な病気にでも罹ったら迷惑だし」
「もう、美神さんったら」

人狼の里より程近い——それでも徒歩ではかなり時間がかかるのだが——小さな街の駐車場で、犬飼忠夫の雇い主、超一流のGS美神令子は、とある寂れた温泉宿で雇った幽霊の少女と共に人狼の里の長、長老と呼ばれる歳経た人狼と話し合っていた。

「決行は、明日。そちらの手筈は？」

「OKよ。知り合いに頼んだらこういう事に喜んで協力してくれる人材を紹介してくれるわ」

「有り難い。では、わしは怪しまれないように里に戻って、そうですね、宴会でも開きましよう。酔い潰してしまえば人狼の鼻とて……くつくつくつ」

「……ま、そっちは任せるわ。私たちはしっかり案内しておくから、逃がさないでね」
真剣な表情で、と言うよりも日頃の憂さを晴らさんばかりに、本気で大人気なく笑う長老に少し引きながらも美神が応える。

額に汗をたらしながら、踵を返しおキヌと一緒に車の方へ歩いていったその視界には、何時もの愛車と——その後ろに控える赤い十字の書かれた真っ白なバン。

「全く、余計な世話ばかりなんだから」

「そう言いながらも、しっかりとやってあげる辺り美神さんって」

「何よ？」

半眼でぶつぶつと毒づく美神を見やるおキヌは。

「いーえ、なんでもないですよ。クスクス……」

只、木洩れ日のように軽く笑うのだった。

「宴でござるー!!」

「酒ですよー!」

「ういっく・・・お代わり」

「ふ、負けんぞー!」

日は山に沈み月が出て。お祭り好きな人狼達は、今日も今日とて大騒ぎ。

何故か突然長老の言い出した宴会に、特に疑問を持つ事も無く。

「ほれ、飲め。特に犬塚と犬飼」

「あれ、珍しいっすね、長老が積極的に飲ませるのって」

「・・・ま、まあ、偶にはな」

不自然に目線を逸らし、大粒の汗を額に垂らす長老を不思議そうに見る忠夫。

「ほ、ほれ、お前も飲まんか」

「え? うおっとと」

誤魔化すように長老が注いだ透明なお酒は、忠夫の持つ器を満たして夜空の星を写し出す。夜空には雲一つ無く、もうすぐ満ちる月が、杯をおる忠夫を優しく包んでいた。

「今日の肴は香辛料の効いたお魚とお肉の燻製ですよ。皆さんも、さ、どうぞ」

「「「おお〜〜！」」」

人狼の里であるにもかかわらず、両手に大皿を持って宴会の輪の中に入ってきたのは猫耳、尻尾を持つ妖艶な美女。しかし誰もそのことに疑問を持つ事無く、只あるがままに受け入れている。

手作りの料理に舌鼓を打ちながら、我先にとかつ込む人狼独身組。と悪い大人の見本のトップクラスの剣士二人。

「辛ツ！でも美味ツ！」

「鼻にズゴンと来るこの感じ、癖になりそうですね」

「あ、俺にも残しといってくれよっ!!」

その様子を微笑ましそうに眺める化け猫の女性、名を美衣という。現在一人の子持ちであるが、息子は現在就寝中。

「ふ、愚か者どもめが・・・」

その様子を少し離れた所から、悪企みをする悪代官の表情で眺める長老。

そして、そんな長老に向かって背中で親指を立てる美衣。もちろん表情は変化していない。この程度の芸当、年季を積んだ化け猫なら——いや、女性なら、軽くこなして見せるとばかりに完璧な偽装である。

「く……くつくつくつ……わーっはっはっはっはっは!!」

「おー、楽しそうでごさるな長老殿」

「……ま、そう見えるのならあんたは幸せよね」

すっかりハイになって高笑いを始めた長老をのほほんと眺める少女と、その隣でお酒を舐めていた少女の眩きは、風に運ばれて深夜の森へと消えていった。

「し……ろおおおお」

「はいはい、父上はとつと寝るでござるよ」

「……えぐえぐ」

あと親馬鹿の陰に籠った泣き声も。

その夜——

「母ちゃん、ほらほら」

「偉いわ、ケイ。この調子でドンドン行くわよ。恩返しも兼ねてるんだからね」

「もつちろん！あ、兄ちゃんの所には僕が行く！」

「良いけど、忠夫さんの布団に潜り込むのはちゃんと長老に渡してからよ？」

「……も、勿論だよ！」

「……ふう」

夜の空気に溶け込んで里の中を駆け巡る、化け猫の親子の姿に気付いた者は、結局一人もいなかった。

次の日の朝。

里には、金属同士が激しくぶつかり合う高い音が鳴り響いていた。

「……うあー、うるさー「おはよう皆の衆!」……長老?」

布団の暖かさにぬくぬくと包まれていた忠夫は、しばらく頭まで被つてやり過ごそうとしていたが、結局睡魔が駆逐されて行くと同時に布団の中から頭だけを突き出して――寝る時に外したバンダナに普段は押えられている――狼の耳をピクピクと動かした。

打撃音。

「今日はッ!」

快音。快音。罅が入る音。

「年に一度のッ!!」

とうとう金属製の何かが砕け散った音。

「予防注射の日じゃっ!!!!」

――忠夫の行動は早かった。

瞬きするほどの時間で布団から飛び出し、更に次の瞬間に何時ものバンダナを頭に装着。

その次の瞬間で何時の間にか腰に両腕を巻きつけて眠っていたケイを素早く敷布団の上に寝かせて毛布をかけてやる。

同時に、知らない内に布団の上で丸くなっていた九本の尻尾を持つ狐が空中を舞っているのを確認し、苦笑いしながら引つ掴んで彼女をケイの腕の中に突っ込む。

そして懐を漁って脱出用の通行手形を確認——無い。

左のポケット——無い。

ズボンのポケット——無い。

無い。無い。無い。

「「「「「無いいいいいいい!!」」」」」

里に、何人分かの絶望の悲鳴が全く同時に木霊する。

「今叫んだいつも逃げ出す馬鹿ものどもっ！ 今回こそはきっちり注射されてもらう

ぞおおおっ!!」

勝ち誇った長老の雄叫びが響き渡る。というかかなり嬉しそう。

「しまったっ！昨日の宴会自体が罠かつ！」

気付いた所で全てが遅い。

しつかりきつちり酔っ払わせられ、おそらく手形を持ち去ったのは気配を殺す事にかけては人狼さえも凌駕する化け猫の親子。

香辛料は鼻を潰す為の物か。

「やべえっ?!逃げないと?!」

「馬鹿息子、準備は良いかつ?!」

すたん、と障子を開けて入ってきた父親は、鉢巻頭に刀を差して戦闘準備、完全完了。
わーにん。わーにん。

聞こえる筈の無い警告音が、大音声で頭の中に鳴り響いている。

「応っ!」

只一声だけ応えて、犬飼親子、逃走開始。

「くー」

「すー」

後に残ったのは、狐と猫の気楽な寝息の協奏曲。

「長老、連れて来たわよー」

「貴重な犬種は何処だー！美しい犬！愛らしい犬！利口で賢く忠実な人間の友！！それを守るためならどんな辺境でも私は行くぞーっ！っ！」

山歩きのための完全武装で、美神が長老の元へと歩いてくる。

その後ろから、この山をそんな格好でどうやって白衣に埃一つつけずに歩いてきたのか、と聞きたくなるような真つ白な白衣と、白いマスクをつけたいかにもな怪しい人物が両手に注射器を持ち、叫びながら背中に大きなバッグを担いで歩いてくる。

「美神殿、もうちよつとましな人物はいなかったのかのう」

「変人の知り合いは変人だった、ってことかしらねえ」

ぎらぎらとした目で辺りを見回すその人物は、一応ちゃんとした獣医である。ただし、某プロレス除霊の人間の医師からの紹介であるが。

あまりのアレっぷりに引きながら、やや蒼ざめた顔で問う長老に対し、美神は朝日に目を向けながら、虚ろな目で応えるのみであった。

「む、とりあえず一匹めっ！」

「きやいーん！」

陰念が注射された。

「何っ?!人狼だと?!」

「止めます?」

「ベネ(良し)、注射だ」

「・・・ま、良いか」

とりあえず今だ人間形態を取れない陰念が注射された後、先程のような会話をして連れて来た獣医はまずおとなしく予防注射を受ける里の人狼達にどんどんと、手品のように一連の作業を終わらせていく。

それが一段落つくまでに掛かった時間、およそ20分。かなりの人数がいたことを考えれば、正に神業のような滑らかな動きであった。

「類友よねー」

性格に問題がある辺り。

「それでは、本題に入りますぞ。逃げた人狼は全部で8人、犬飼家、犬塚家、それと独り身の人狼が4名ですじゃ」

「うちの所員もしつかり逃げた訳ね」

「勿論。それで、おキヌ殿から連絡は？」

「バツチリ。しつかり上空から捕捉してくれてるわ。今はこの辺りで——」

言いながら、簡易なテント——運動会などでよく使用されている、あの白い奴、赤十字マーク入り——の中にある机の上の地図、その一点を指す美神。

「——全員集まって、作戦会議中らしいわ」

「好都合。一網打尽とはいかないが、上手くいけば一人二人は注射できる」

わきわきと両手を蠢かす獣医。

「そ、それはともかく！」

「あ、相手が相手ですからな！ とりあえずこちらの戦力は、わしと美神殿、それから——」

注射器をもって何故か素振りを始めた獣医を見やる二人。

「わしと美神殿ですな」

「ええ、間違いなく」

「一緒にされたくないらしい。」

「分散か集中か・・・」

「いや、とりあえず囿を出して補給を断つ——注射器を壊すつてーのは？」

「誰が陽動の囿をやるんでござるか？兄上が？」

「断るっ！」

「拙者だつて嫌でござるよ〜」

森の中、少し開けた其処では、逃走した人狼達が集まって喧喧諤諤と会議中。暖かな

陽射しも、そろそろ暑さを感じさせるまでになってきている。

「そうだそうだー。シロが嫌ならやらせちゃ駄目だぞ」

「なら犬塚の親父さんが行ってくれ」

「い、いや、こういうのはジャンケンだろ」

その一言で、場の空気が緊迫した。

「・・・俺はグーをだそうかな〜?」

「ひ、卑怯でござるよ兄上っ?!」

「なら僕はパーだそつと」

忠夫の余所を向きながらのさりげない台詞に動揺するシロ。続けて人狼達もどんどんと自分のカードを晒して行く。

「む、なら犬塚」

「ああ。俺たちはチヨキだな」

「あ、あうあう」

元々こういつた読み合いが苦手なシロは、周りの狡猾さに惑わされて段々とパニックに陥り始めている。

「な、なら拙者はグーを！」
にやり。

「え?」「……」「さーいしよはグー!じゃーんけーんっ!!」「……」え、えええええっ?!」
その言葉を切欠に、いきなり始まる状況。勢い良く叫ばれるその言葉に、混乱する頭
はさて置いて、体が反射的に反応する。

「……」「ぽおおおんっ!!」「……」

「ええええええっ?!?!」

結果。

シロ、グー。

他全員、パー。

結局シロは裏の裏まで考えるとかそういうった事をせず、素直に自分の言っただまに出
した事になる。

というか、他の全員はそうなる事を承知の上で、ああいった台詞を吐いたのだ。

「な、何ででござるかああっ?!」

「ふ、シロ……まだまだ甘いな。俺としては少し心配だぞ」

「戦場では騙し合い等日常茶飯事。シロ、少しは頭を使ったほうが良いぞ」

「兄上、父上ー!!」

半泣きで睨む娘の頭を撫でつつ、優しい口調で語り掛ける犬塚父。問題は、内容がかなり酷い事。

「んじゃ、シロが突っ込んだ後他全員が全方位から一気に、ってことで」

その一言を皮切りに、それぞれが散っていく。人狼の身体能力と、磨きぬかれた身体制御は、素晴らしいまでの機動を可能とする。

「くっ?!かくなる上は、なんとしても生き残って見せるでござるよ!」

「成る程、でも、甘い」

偵察のおキヌからの連絡を受けた美神は、そのままおキヌに指示を出した。

「分かりました、それじゃ、始めますねー」

「ええ、お願いね、おキヌちゃん」

おキヌが取り出したのは、一見只の小さな突起のついた黒い筒。

彼女は、その突起を押し込むと、眼下の森に向かってそれを放り投げた。それは重力に引かれて落下していき――

「美神さん、上手く行ったみたいですよー」

美神に報告するおキヌの真下で、黄色い粉をあたりに振りまきながら爆発した。

「美神殿、あれは?」

「別に毒じゃないわよ。只の、カレー粉」

カレー粉。それは、きつつい匂いを出しながら、森の中へと広がっていく。

こんな実話がある。訓練中の警察犬が、カレーの匂いをかいだ途端匂いが感じ取れなくなつて、それまでの追跡を諦めて座り込んでしまったという。

つまり――彼らの鼻は、これで潰した。

超感覚、そう呼ばれる彼らの鋭敏な五感の中でも、嗅覚は大きな役割を果たしている。生物であるならば匂いを残さない事は難しく、また人狼ともなれば僅かな、ほんの僅かな匂いからでもかなりの情報を得る事ができる。

そして、それ故に。

「これであつちの索敵能力は大幅減。あとはしつかり片端からとつ捕まえてぶつすり行
くだけね」

「しばらくカレー臭そうですなあ」

「雨が降るまでの我慢よ」

それを奪われた人狼に、最早それ以前の探索能力は無い。そして、互いの位置がわからなくなった以上——連携は、難しい。

「んで、後は・・・っと」

「犬塚シロ、参る——!!」

「長老、やっちゃって」

突如やけっぱちの表情で、霊波刀を振りかざして白いテントに向かって突撃してきた人狼の少女の目の前に、里、最強の戦力が立ちふさがる。

「十年早いわっ!」

里に、少女の悲鳴が木霊した。

「ぶすつとな」

「きやいんきやいんっ!!」

「ほくら、シロ? あんただけそんな痛い目見るのつて、なんだか不公平じゃない?」

ロープでぐるぐる巻きになり、あつさり予防注射を打たれたシロに、悪い笑顔の美神が迫る。

「そ、それは」

「これは貴方達の為なのよ? もしもこの注射をしなかったせいで病気に掛かったら大変よね」

「・・・確かに」

優しい笑顔で囁く美神にシロは段々と考える表情になっていく。

「横島君が病気になったら、とつても苦しいでしょうね」

「う、ううううううう」

「彼のことを思うのなら、私たちの手伝いする事が一番じゃないのかしら?」

「・・・分かったでござる。不肖、犬塚シロ。美神殿に協力させていただくでござる!」

簀巻きにされながらも、勇ましく吼えるシロ。その瞳には、大きな決意があった。

「ふ、ちよろい」

「本当に、怖いお方じゃのう」

シロからは見えない角度でにやりと笑う美神に、長老は戦慄を覚えていたとかいないとか。

とにもかくにもこれで戦力＋１、である。

「美神さん、12時の方向に一人、繁みの後ろにいますー」

上空から霊視ゴーグルで索敵中のおキヌから報告があれば、美神と長老が素知らぬ振りであさつての方向に歩いていき、テントの中にそれっぽいリュックを置いていく。

「チャンスでござるなっ!!」

と、誘われて出てきた所で。

「せいっー!」

「うおおおっ?!」

テントの近くで隠れていたシロが飛び掛り、足止めする。単純な臂力と技術で劣つていても、その速度は里でも敵う者は殆どいない、神速の機動能力を誇っている。

「シ、シロツ?!なんででござるか?!」

「拙者ばかり痛いのは納得いかんでござるよー!」

必死でシロの霊波刀を避ける人狼の後ろから、無言で近づく美神と長老。

そして、高速の戦いの後睨み合っていた人狼の肩に両方から、ぽん、と手を置く二人。

人狼が油の切れたロボットののような動きで振り向いた其処には、とつても良い笑顔の

二人がいた。

「それ、ぶすつとな」

「きやいーん!!」

戦力、更に＋１。

「落とし穴ー?!」

「あ、ボール」「てい」「きゃいーんっ?!」

「こ、こんな所に骨付き肉が落ちてている。これは——いやいやいやっ?!それよりもあのバッグを……でも、いや、ふむむ」「ぷすつとな」「きゃいーん!!」

更に＋3。

「ふ、犬科の生態を熟知したこの私。この程度ならば問題は無い」

「……熟知して無くても、ねえ」

「あんまり関係ないですなあ」

そんなこんなで戦力増強。注射された人狼達は、自分のお尻をさすりつつ、全周警戒を行なっている。美神と長老はテントの中で、最後の目標達の発見の報告を待っていた。

「おキ又ちゃん、そっちはどう?」

「駄目です、全然見つかりませーん」

「ふむ、一体何処に消えたやら……」

連携の取れない上に、ばらばらに接近してきていた人狼達を各個撃破、その後こつちの戦力にしたは良いものの、そこから先が手詰まりであった。

犬飼犬塚の親父達と、犬飼忠夫が動かないのである。

「持久戦か……不味いわね」

「ああ。私にも仕事のスケジュールがある。余り長くは居られないし、獣医の免許を持つていないものに注射させるのは私のプライドが許さない」

「ほんとーに、類友ねえ」

「……余り使いたくは無かったのだがのう、最後の手段じゃな」

腕を組んで黙っていた長老が、唇を歪めてそう呟いた。

「里の長を務めているのは、伊達ではないのじゃよ」

そう言い残し、長老はテントから離れていく。その表情は見えなかったが、背中が語っていた。

——日頃の行いって大事じゃよ？

「一番、シロ、行きますっ！」

長老の指示の元、犬塚シロが進み出る。

「ちつちうえー！助けてー!!!」

思いつきり息を吸い込んで放たれたその叫びは、里を囲む山々に木霊を返しながら、結界の内部に響き渡った。

寸暇の間も置かず、はるか彼方で爆発が起きた。

いや、より正確に言えば——爆発のような踏み込みであった。

「シロ——!!今行くぞ——!!」

「父上、ここでごござるよ〜!」

その爆発後から、一直線にシロの居る所まで伸びてくる土煙。その進行方向にある木々は片っ端から薙ぎ倒され、砕け、岩はあっさり真つ二つにされてその道を作り上げていく。

「シロツ!無事かつ?!」

「元気でござるよー」

「へっ?」

「ほれ、ぷすつと」

呆れた視線を犬塚父に向ける美神とシロの目の前で、犬塚父の尻に、注射針が突き刺さったのであった。

「ふ、親馬鹿も大概にせい」

「ひ、卑怯な・・・」

お尻を押えて悶える父に、シロは生温い視線を送るばかりであったそうなの。

「こうなったら、犬飼家の奴らも道連れだつ!」

「で、あいつらの動き、掴んでる訳?」

とりあえず尻の痛みから復活し、そろそろ夕暮れが近づいてきた空を見上げながらの犬塚父の言葉に冷静に突っ込む美神。

「いや、知らん!だが、予想は付く!長老、例のもの、持ってきてるんでしよう?」

「応。これじゃろ?」

そう言つて長老が渡したのは、長さ1M程の丸めた紙。犬塚父はおもむろにそれを広げ――

「いぬかああいつ!さつきと出てこないところの『お前の妻の等身大ポスター』、燃やしちまう「またんかあああつ?!」――ほーら」

犬飼ポチ、亡き妻の写真から作り出したポスターを守るために出現。

地中から。

「犬塚、きさままつ!やつていい事といかん事の区別くらいあるでござろうがつ!」

「ああ。だからそんな事せんぞ?」

「・・・ふ、不覚つ!!」

慌てて地面に開いた穴に潜り込もうとするも、既に長老がその襟首を捕まえて捕獲済み。

そのままロープでぐるぐる巻きになりいつちよ上がり、である。

「ふう。とりあえず、後は先生にでも・・・あれ？先生は？」

辺りを見回す美神の視界には、獣医の姿が見当たらない。人狼達、簀巻きにされた犬飼ポチ、テント、そして何も乗っていない机、テントの真下に開いた――

「穴?!しまった、二手に分かれて挟撃したのねっ!」

「ふははははっ!もはやお前達の手注射器が渡る事は無いでござるっ!」

「簀巻きはだまっとれ」

長老にげしげしと踏みつけられながらも、勝ち誇った笑いを上げるポチ。だがしかし。

「キャイン!!」

突如として、森の中から、聞きなれた悲鳴が響き渡った。

「・・・今の、横島君の声よね」

「あ、兄上になにが?」

言葉を交わす美神達の視界に、がさがさと揺れる茂みが写る。果たして、其処から現れたのは――

「横島君、それにせんせ・・・い」

「・・・なんと、まあ」

半分気絶した忠夫を背負った獣医――只、その足はリュックの底を突き破っており、

その腕は同様に横を破って出されている。首だけはリュックの口から出ているが。

獣医はそのリュックに食われたままの格好でテントの前まで歩き、忠夫を降ろすと、リュックの前についている小めのポケットから消毒用の脱脂綿と注射器を取り出し、てきぱきと消毒した後、おもむろに。

「ぶすつとな」

今だ動きを見せない忠夫の腕に突き刺した。見る見るうちに減っていく中の薬。全てが吸い込まれた事を確認し、獣医は再び立ち上がって簀巻きのポチに近づいていく。無表情で。

ポチを囲んでいた人狼達も思わず尻尾を丸めて慌てて物陰に隠れる始末。そして。

「ぶすつと」

「きやいーんー！」

ようやく、全ての人狼に予防注射は行なわれたのであった。

「あ、ちなみにあその青年はちよつと睡眠薬打っただけだから、すぐ目を覚ますよ」

良い仕事した、とばかりに笑顔で美神と長老に笑いかける。彼は、そのままの格好で颯爽と里を後にしていった。一枚の名刺を残して。

「りゅ、リュックの中に隠れるって反則だつて・・・」

「あら、もう目が覚めたの」

「美神さん……せめて膝枕を。嫁として」

「なら拙者がっ！」

「うー、あー、もう疲れたから帰るわね。あんたもとつと帰ってきなさい。明日からまたバリバリ稼ぐから。あと、十年早い」

なんとなく、突っ込む気力も奪われた美神の神通棍は、何時もよりも少しだけ痛くなかったそうなの。

そして、今回注射を免れたのは、タマモ。

と——長老だったりする。

「ほっほっほ」

第貳話。

「んじゃまたな、皆」

「兄上、拙者必ず兄上の役に立つようになるでござるからな！」

「ま、美神さんの紹介だから大丈夫だとは思うけど。頑張れよ〜」

里を出る忠夫の見送りに、シロたち人狼の里の住民が集まっていた。明日からの仕事のために、夜も遅いがそろそろ出なければ時間が無い。

獣医の注射のシヨックというか、インパクトというか。

そう言うものから立ち直った忠夫は、夜の森を駆け出していった。

『さてそれじゃ、まずお嬢さん達には除霊の基礎でも学んでもらおうか』

「よろしくお願いするでござる、マーロウ殿」

「不肖の娘ですが、見込みはあると思うのでピシピシとお願いします」

残されたのは、何時もの人狼の面々と、一匹の老犬。だが、老犬と一言で片付けられない雰囲気は、修羅場を潜り抜けてきた猛者。そう、長老に通じる物があるほどの、静かな海原に通じる深さがあった。

GS犬マーロウ。美神が長老からの頼みで請け負った、シロたち若い人狼の、人間と

の掛け橋としての、人狼達の能力を生かした職業——GSの先生を求める里に、その先生として美神から紹介された世界最高のGS犬である。

「しつかり学んで、人狼としての名を貶める事の無いようにな」

「長老も大変でござるなあ」

「お前らがもうちよつと真面目なら、此処まで苦勞する事も無かつたのじゃよ」

「あつはつはつ」

「・・・ふう」

『ご苦勞なこつた』

「ちーっす！」

「お、来たようだね」

「あれ、西条の義兄さん？美神さんとの結婚、認めてください」

とりあえず、神通棍が飛んできた。

「はっはっは。君も大概唐突だねえ」

「何時まで調子にのつとるかこの馬鹿はっ！」

ぼろぼろの忠夫を踏みつけながら、その頭に突き刺した神通棍をぐりぐりと捻る美神。その顔が少々赤いのは、きつと西条と呼ばれた男性の前で、自分の所員が恥をかかせたからだろう。

多分。

西条輝彦、ICPOの超常犯罪課、通称オカルトGメンに所属するエリート。GSとしてもかなりの腕を持つ、長髪美形の金持ち。美神にとっては兄のような存在である。

美神の足の下でじたばたと逃げ出そうとしている忠夫と、逃がすまいと更に神通棍に靈力を籠める美神を面白そうに見つめながら、西条はふと、悪戯を思いついた子供のよ
うな笑顔を浮かべた。

「そうそう、令子ちゃん。今回の依頼なんだが依頼人の方から条件があつてね」

「条件？私は聞いてないけど・・・ま、西条さんを通した依頼なら心配は無いわね。で、何？」

美神が西条のほうに意識を向けた一瞬の隙に脱出し、傍から苦笑いを浮かべて眺めていたおキヌの所まで避難する忠夫。それを横目で面白く無さそうに見ながらも、西条の言葉に耳を傾ける。

「ああ。できるだけ少人数、しかも信頼のできる——そう、僕と令子ちゃんだけでお願いしたいんだそうだ」

「え？でも、依頼場所が「ストップ。ま、裏には色々あるんだよ」・・・気に入らないわね・・・」

頭をこりこりと神通棍の柄で掻きながら、少し悩むような表情になる美神。

「後、報酬の上乗せがあつてね？1, 5倍で「行きましようか西条さん。横島君とおキヌちゃんは、今日は休みでいいわよ」・・・令子ちゃん、もうちよつと悩んでもいいんじゃないかな、と僕は思うよ」

西条が零した報酬の増額に、それまでの悩みとかは全部吹っ飛んだようである。テキパキと準備を整えながら忠夫達に向かつて休みを告げる美神の姿に、西条は自分の額を伝う汗を感じていた。

「さ、行くわよ西条さん！ 報酬増額どころいー！」

「やれやれ・・・」

元氣一杯にドアを開けて出て行く美神に続いて、西条も事務所の玄関をくぐる。残されたおキヌと忠夫は一連の流れに置いていかれてちよつと呆然。

「あ、そうそう、横島君？」

「え、なんつすか？」

出て行つた筈の西条が、ドアの後ろから忠夫に向かって手招きする。何となくその楽しそうな笑顔に嫌な予感を感じる物の、素直に西条に寄つていく。

「これを君に上げるよ。今日は、僕のせいで予定が開いちゃつたような物だからね。そうだ、小鳩君が君にお礼を言いたがつていたから、ついでに誘つて見ちゃどうだい？ 僕の方から連絡は入れておくから、駅前1時間後くらいに来てくれ。それじゃっ！」

「え、あの、ちよつと?!」

忠夫の手に2枚の紙切れを握らせ、立て板に水のように勢い良く用件を伝えた西条は素早く身を翻して美神の待つガレージに駆けて行く。

右手に紙切れを握り、左手を西条に向けて伸ばしたままで固まる忠夫の目に、風でひらひらと揺らめく紙切れの文字が入ってきた。

「で、でじゃぶーらんど招待券?・・・なんじゃこれ？」

「むー」

忠夫の上からそれを覗いたおキヌは、なんとなく西条の考えている事が分かったのか、ちよつと膨れていたりする。

「あ、お久し振りです横島さん！」

「おー、久し振り、小鳩ちゃん。——嫁に来ないか？」

「え、あの、その、まだ早いかなくて」

「お前も相変わらずやのー」

一時間後の駅前にて。首を捻り捻りやってきた忠夫の目に写ったのは、辺りをキヨロキヨロと見回しながら、そわそわと駅前に立つ時計を眺めている、大きな包みを抱えた学生服の三つ編みの少女であった。

手を振りながら声をかけ、ついでもおむろに求婚する忠夫に、小鳩と呼ばれた少女は顔を真っ赤に染めてうろたえながらも断ってみる。

がつくりしながら項垂れる忠夫に、テンガロンハットのメキシカンな小柄な影が話し掛けてきた。

「おう、貧乏神じゃねーか。どうよ、最近」

「ぼちぼちでんな。ま、それはともかく」

軽く挨拶を交わした後、忠夫と小鳩を見比べる貧乏神。何度か視線を往復させ、おもむろに頷いた後。

「ま、バランスは取れてるからええやろ、行き先は遊園地やし。んじゃ、デートたのしんできーや、小鳩ー！」

「ちよ、貧乏ちゃん！」

そう言い残して笑いながら飛び去っていく貧乏神。小鳩は貧乏神の言い残していった言葉に耳まで真っ赤になりながら、忠夫に声をかけてみた。

「あの・・・横島さん？」

「・・・でーと。そつかー。これ、でーとなんやなー」

「横島さん？」

ぶつぶつと呟く忠夫に対し、不思議そうにその顔を下から覗き込む小鳩。

「うえっ?! あ、小鳩ちゃん・・・あ、デート。・・・お付き合いの第一歩」

ビツクリしたように飛び退る忠夫は、不図何かを思いついたように空を見上げる。

「——よっしゃー! 嫁かー?! 俺にも嫁ができるのかー?!」

「よ、横島さん?!」

「いや待て落ち着け俺っ! 初心者は良く躓いて全て台無しになるってTVでも言ってたっ! ここは慎重につ! 慎重につ! ああっ! でもなんだかうれしーなー!!」

「あ、あのー」

なんだか知らないが絶好調になっている忠夫に、恐る恐る小鳩が声をかける。

「よっし小鳩ちゃん! でーとと言えば遊園地だった筈! この紙切れで遊園地で遊べるらしいから行こう! 今行こう! 直ぐ行こう!」

「え、あの、横島さんっ?! きゃー!」

駅前で待ち合わせたのだから列車で行けばよいものを、舞い上がった忠夫はそんな事も考えられずに小鳩をお姫様抱っこで抱え挙げ、ここに来る前に調べた「デジャブーラ

ンド」に向かつて文字通り一直線に突き進む。

駅前には、呆然とした顔で、いきなりすつ飛んでいった妙な二人組みを見ていた何人かの親子連れが残るのみであった。

「此方、貧乏神。ミッション成功。後は野となれ山となれ。お泊まりでもかまへんけど、後で結果報告だけよろしくな」

「お疲れ。ま、楽しみにしておいてくれたまえ」

「もう……恥ずかしかったんだから、今度からは気をつけて下さい」

「ハイ、スイマセンデシタ」

しばらく忠夫の腕の中で真つ赤になっていた小鳩は、忠夫の到着を知らせる声でようやく復活、直後自分の状況と周りからの視線に耐えかねて、ちよつと気が遠くなつてしまった。

忠夫に降ろしてもらい、あまりといえればあまりにもなその行動に、涙目で静かにお説教する小鳩には勝てる筈も無く。

着いて早々忠夫は必死で謝り倒す事になつてしまつたのだつた。

「うう……だつて嬉しかつたんだもーん」

いじいじと目の前で、しゃがみこんで地面のタイルの模様を指でなぞるバンダナの青年をしょーがないなあと言う表情で見ていた小鳩は、ちよつとだけ微笑むと忠夫に向かつて手を伸ばす。

「クスクス……ほら、横島さん。行きましよう？　ちゃんと、楽しませてください、ね？」

「え……お、おうっ！　勿論っ！」

小鳩の差し出した手を握り、入り口に向かつて歩き出す忠夫を見ながら。

「……まだ、早いよね？」

小さな小さな声で囁かれた、本人以外の誰にも聞こえなかつたその声は、一体誰への

問い掛けだったのだろうか。

「さて、仕事だ。この遊園地が極度に電子化されているのはわかったね？ 地上の遊園地を支える為に、地価では更に大掛かりな設備が活動している」

西条と美神、二人がいるのは忠夫たちが今まさにその玄関口をくぐった遊園地「デジャブーランド」の地下部分である。

その地下に存在する大規模な機械とコンピュータ、そして多くのそれを管理する人員が今も忙しく動いていた。

「MAIN CONTROL」と書かれた、ガラス張りの部屋の前にはコンテナを積んだ小さな車が行き交っており、地上を管理する為の情報が逐次モニターに写し出されている。此処は、遊園地の中枢部分であるのだ。

「ところが、だ……こいつを見てくれ！」

西条が指し示したモニターに写し出されたのは、小柄な2頭身の、小さな角と石でできた小ぶりの斧を持った、目付きの悪い生き物。

「ボガード——俗に言う『性悪な妖精』ね。日本では珍しい妖怪だわ……！」

「此処は世界的に有名な施設でもあるし、言わば毎日お祭りをやっているようなものだ。あの手の妖怪はそう言う「気」の引かれて発生する。——今の所、大した被害は無いが」

「ボガードは悪ふざけや破壊工作が趣味よ。今すぐ此処を閉鎖して退治するのが一番なんだけど……」

そう言つて、苦い顔をする美神の後ろから、眼鏡をかけた初老の、立派な体格を持った男性が話し掛けてくる。

「退治はしていただく。だが、閉鎖は出来ません！」

オーバーリアクションでそう告げる男性に、西条と美神は困つたような視線を向ける。

「我がデジャヴーランドの使命は、お客様に完璧な夢を提供する事！ 妖怪が出現して閉鎖など、デジャヴーランドにあつてはいかんのです！ なんとしても極秘裏に処理していただきたい。そのために金に糸目はつけません！」

力強くそう言い放つ男性に、何となく白けた目線をやりながら、隣に立つ西条に目線で説明を促す。

「デジャヴーランドは巨大企業だ。僕達にも上からの圧力がかかっているね……」

苦笑いしながら美神の視線に応える。

「フン……！ 夢の裏側には色々あるってわけね。ま、私に払う報酬よりも、閉鎖した時の赤字の方が大きいんでしょうけど」

デジャヴーランドの一日平均入場者、およそ2万人。

年中無休で動きつづけ、これだけの入場者を確保するということは、それだけ巨大な収入源となることを意味するが、同時に——その運営が失敗する事で抱える負債が、巨大なものであるということも示す。

要するに、ボガードが、妖怪が発生し、その為に休むということは下手をするとGSに払う報酬よりも多いマイナスとなるということである。醜聞を防ぎ、尚且つ迅速に、被害が出る前に対応する。だからこそその報酬増額でもある。

口止め料も込み、ではあろうが。

「・・・おや、令子ちゃん、これはもしかして」

「どうしたのよ西条さん」

なんでも無い事のように西条が指し示したモニター、其処には、監視カメラからの映像が映し出されている。

内容は、そう、忠夫と小鳩が仲良さげに、芝生の上でお弁当を広げている所であった。「なーにやってんの、あいつら?」

「どうやら、デートらしいね!」

不自然なまでに明るく言い放つ西条の言葉に、美神はなんだかこめかみの辺りが引き攣ったような気がした。次の瞬間には気のせいだと斬って捨てたが。

「いやー、仲良さそうで微笑ましいねー」

はっはっは、と快活に笑う西条を、何故か疎ましく思いつながらもなんとなく不貞腐れる美神。

「へえ……私たちがお仕事だつてのに、やってくれるじゃない……!」

「……お休みだつて言つたのは、令子ちゃんんだけど、ねえ」

小さな声で呟いた西条に、「何か言つた?!」と視線で告げる。

西条は両手を挙げ、なんでもないと態度で示すが雰囲気から楽しんでいそうな事は丸分かり。

そんな二人の心温まる会話に、混乱したような職員の声がかけられる。

「……つ! た、大変です! E—17ブロックで、システムに異常が発生しています

!!」

「令子ちゃん!」

「ええ、行くわよ!」

「しかし、すつげえなあー」

「クスクス・・・横島さん、そんな顔してたら笑われちゃいますよ」

目の前に広がる様々なアトラクションを、小鳩特製のお弁当を頼張りながら呆けた様子で見渡す忠夫の目には、溢れんばかりの好奇心があった。おそらく、彼の尻尾が外に出ていればかなりの高速で左右に振られていただろう。

「で、どうすんの？小鳩ちゃん」

空っぽのお弁当箱を小鳩に返しながら尋ねる。小鳩はごそごそと制服のスカートのポケットを探り、金色のVIPと書かれた2枚のカードを差し出す。

「西条さんに貰ったんですけど、このカードがあれば好きだけ遊べるですよ」

「へー。あの人も中々気が効くなー。よ、っと」

腰を柔らかい芝生から持ち上げ、小鳩に向かって手を差し出す忠夫。

「んじゃ、目一杯楽しもうかー」

「はいっ！」

差し出された手を握る小鳩は、元気良く返事を返して立ち上がった。とりあえずは、一通り楽しんで罰は当たらないだろう。

「そっち行つたわよ西条さん！」

「了解……！ 君を逮捕する！」

狭苦しい通気口を抜けた美神の前から、ボガードが慌てて逃げ出していく。その前を塞ぐように立ちふさがったのは、霊剣ジャステイスを構えた西条。

「ジャステイス・スタン！」

「ギャウツ?!」

西条の持つ剣から放たれた、雷撃のような一撃はボガードをその場に麻痺させた。

動かなくなつた事を確認しながら、ゆっくりと近づいていった西条は、完全に麻痺している事を確認した後、疲れたような溜め息とともにようやく剣を収めた。

「ふう・・・これで一件落着かな？」

「まだよっ！ 今連絡があつたわ。上で、もう一匹確認されたいわよ！」

「やれやれ・・・！」

通信機を耳元に当てたまま、西条の横を通り過ぎて走り去る美神。西条はその後を追って、首を振りながら走り出すのだった。

「うーん、いきなり動かなくなるってーのも、なんだかなあ」

「ちよ、ちよつとビツクリしました」

ジェットコースターの降り口付近で、小鳩と忠夫の二人がベンチに座って休憩している。

先程まで乗っていたアトラクションが、降りる場所の直前で止まり、職員が慌てて駆け回っていたのだ。

止まった場所が良かったから被害が無かったようなものの、運が悪ければ大惨事となっていたかも知れないその事に少し冷や汗を流しつつ。

隣で疲れたような顔をしている小鳩に、ハンカチで風を送ってやる。

「あ、ありがとうございます」

「んにや、たいしたことじゃねーって」

ほつと一息ついた様子的小鳩に、こちらもようやく冷や汗が引いた事を感じて大きく息を吐く。

「あ、小鳩ちゃん飲み物でも飲む？」

「え、あ、飲みます」

辺りに自動販売機でもないかな、と探しながら立ち上がった忠夫に、慌てたような小

何処かへと、走り出していった。

「あれ？ 小鳩ちゃん?!」

忠夫が、ジューズの缶を2つ持ってベンチに戻ってきた時には、其処に小鳩の影は無い。

「おい、見たか今の」

「ええ。イベントかしら？ 学生服の女の子、驚いてたみたいだけど・・・」

「へっ?」

慌てて匂いを嗅いでみる。雑踏の匂いと、食べ物匂い、小鳩の匂い、油臭い機械の匂い——そして、妖しの気配。

「なっ?!」

黙っていなくなるような娘ではないし、後ろを通り過ぎていったカップルの会話、そして今嗅いだというか感じた匂いからすると、なんだか嫌な予感がする。

「もしかして、ヤバイっ?!」

僅かに残った小鳩の匂いを頼りに、駆け出す忠夫。もう少し冷静に探してみれば、ベンチの後ろに落ちている、からっぽの弁当箱を見つけた事ができただろうが、この際結論は同じであつただろう。

ベンチの上には、表面に水滴を滴らせる冷たい缶が転がっていた。

「大変です！ マツキー4号が、お客様を攫って地下に逃げ込みましたっ！」
「なにいつ?! GメンとGSは何をやっているっ！」

地下のモニターには、小鳩を抱えたまま通路を走るマツキーキャットの姿が映し出されている。他のモニターに目を移せば、連絡を受けた西条と美神がその進路の先へと回り込もうとしている姿を見る事が出来ただろう。

「いかんっ！ お客様を危険な目にあわせるわけにはっ！」

「隔壁を閉じます！ GメンとGSの方達に最短距離の通路を知らせろっ！」

慌しく動き出す職員達。その後ろでは、最高責任者であろう依頼人が、額に掻いた汗を取り出したハンカチで必死に拭いながら指示を出していた。

「出口は塞ぐんだっ！ なんとしても此処で、お客様が怪我する前に助け出すんだぞっ！」

「はいっ！」

彼らがもう少し他のモニターに意識を分けていけば気が付いただろう。マツキーキャットが入った地下への通路から、その出入り口がふさがれる直前に滑り込むように何者かが侵入した事に。

その侵入者が、とんでもないスピードでマツキーキャットに追いついていった事に。

「いたっ！ って、あなた、小鳩ちゃん?!」

「あ、横島さんの雇い主の人っ！ と、西条さんっ！」

「やれやれ・・・横島君は一体何をやってるのかなあ」

隔壁を閉じられ、袋小路となったその通路。

的確な指示と、素早く閉められた隔壁でようやく追い詰める事の出来たロボットを前に、美神達は膠着状態となっていた。

原因は言うまでも無く、ロボットの腕の中に抱え込まれた小鳩である。

「・・・ちっ！ 人質のつもり?!」

「ケツケツケ！」

ロボットの耳の中から、頭だけを出して愉快そうに笑う——ボガード。ロボットを操り、小鳩を攫つて此処まで逃げた、性悪な妖精であった。

「これ以上罪を重ねる前に、大人しくした方が君の為だ。直ぐに彼女を開放したまえ」
その言葉に反応するかのようには、抱え込んだ小鳩の首にロボットの手を伸ばすボガード。

耳の中に隠れてはいるが、意図する所はきちんと美神達に伝わっていた。

「脅迫のつもりかしら・・・」

「全く・・・今ので罪状が2つほど追加、だね」

首をつかまれ、盾にでもするかの様に人質となつている小鳩の目には涙がたまつてい
る。

「よ、横島さん〜」

小さな声で、一緒に来た彼へと呼びかけるも、その言葉が届く訳も無く——。

と。

ボガードと小鳩の背後の壁が、いきなり軋んでゆっくりと持ち上がっていった。慌てて振り向くボガードと、何事かと目を見張る美神達の目の前で。

どう見てもかなりの重量、そして機械的にロックされているであろうその隔壁は、じりじり、と持ち上がっていく。

「ふんぬおおおおおつ!!」

聞こえてきたのは、何処かで聞いた事のある声。というか、美神にとってはいつも聞いている声であるし。

西条と小鳩にとつても今日、しっかりと聞いた声だ。

小鳩は感極まったように、胸の前で掌を組んで、涙目で喜んでいるし。

美神は何となく胡乱な目付きで、でもしよがないなーといった感じで見ているし。

西条は西条で、懐からとりだした通信機で制御室にロックの解除を依頼している。苦笑いしながら。

そして、ロックの解除とともに跳ね上がった隔壁の向こうから現れたのは――。

「ロナルド・ドッグ、参上っ! その娘は俺の嫁――じやなかった! 犬族のヒーローとして、貴様の狼藉、もはや許さんっ!」

「……で、なにやってんの。横島君」

「……ち、違う! 拙者……いやいや、私はデートなんかせず、今日休みを貰って

ゆっくり家で寝ている筈の横島とかいう好青年では無いでござるよ?」

「馬鹿だねえ」

「動揺してござるとか行つてる時点でバレバレね」

犬の姿のぬいぐるみを被った、馬鹿だった。

冷たい視線を送ってくる美神に動揺しながらも、マッキーキャットに向かって霊波刀を展開するロナルド・ドツグ。

「人のデートを邪魔しやがってっ! お付き合いは一番最初が大事ってTVで言ってたのに、この馬鹿たれー!!」

「最早フォローの可能性すら感じないね」

「・・・いい度胸じゃない。後できつちり、騾ときましようか」

すっかり気を抜いて笑う西条と、幾つも井桁を浮かべた美神の前で、霊波刀とか言う結構特殊な部類の霊能を使って、ボガードに切りかかる馬鹿は、始めの一撃で怯んだボガードからあつさり小鳩を取り返し。

「同じ猫なら美衣さんのほうが百倍魅力的じゃー!!」

ある意味自分の首を締める台詞とともに——一撃に怯んだボガードから小鳩を浚い、あつという間に抱えて逃げ去っていった。

「え?」

「ギヤ?」

「・・・ま、いいけどね。ジャスティス・スタン」

呆然とする美神の隣を歩いて通り、同じく呆然としていたボガードにあっさり麻痺攻撃を叩き込んだ西条は。

「依頼達成。ほら、令子ちゃん、行くよ?」

ロボットの耳の中からボガードを引きずり出し、それを片手でぶらさげたまま美神に笑いかけるのだった。

「では、さらばっ!」

「あ、横島さんっ!」

「私は横島ではないっ！ ロナルド・ドッグだっ！」

すつかり日も暮れた地上に出て、抱えていた小鳩を地面に降ろしたロナルド・ドッグと言ひ張る馬鹿は、その台詞を残して走り去っていった。

しばし走り去っていった方向に手を伸ばしていた小鳩は、その手を胸に当てるとほとと安堵の息をつく。

「また・・・助けてもらつちやつたな」

ちよつと嬉しそうに笑いながら、頬を赤く染める小鳩に、何処からとも無く声がかける。

「おーい！ 小鳩ちゃんー！」

のこのこと歩いてきたのは、汗だくの忠夫。そりやあ走り回つた上にあれだけ分厚いぬいぐるみを被つていれば。

とは言え本人はばれているつもりは全く無い。

「いやー、探したつて。いきなり居なくなるもんだから」

「ええと、その・・・ありがとうございました」

忠夫に向かつてびよこん、と頭を下げる小鳩に、慌てたように忠夫が応える。

「え、そんな当たり前だつて！ ごめんなー、折角のデートなのにはぐれちゃつて」

「・・・ふふふ」

「わは、わはははっ!」

額に汗をかきながら頭を搔く忠夫に、可笑しそうに笑う小鳩。なんだか良い雰囲気そのタイミングで。

夜空に、大輪の花が咲いた。

「あ、花火」

「あー、もうそんな時間なんか」

二人一緒に夜空の花を見上げる。しばし言葉も無くその光景を眺める二人であったが。

「横島さん・・・」

「こ、小鳩ちゃん?!」

す、と忠夫に寄りかかる小鳩。俯いている為に顔は見えないが、いきなりの接近に忠夫のハートはヒートアップ。

「oooooooooooo小鳩ちゃん?! 嫁でいいのか?! 俺はやったのか?!」

鼻息も荒く小鳩を抱きしめるように、震える手をその背中にまわそうとした忠夫は――

「いだだだだっ?!」

小鳩の指が、お尻の尻尾の付け根辺りを力強く摘んだ事で動きを止めた。

「・・・美衣さんって、誰ですか？」

静かに、顔を伏せたままで問い掛ける小鳩。

「いや、俺がちよつと嫁に誘つた——んぎゃー!!」

更に籠められる力。

「だ、だから子持ちの人妻で——ふんぎゃー!!」

更に。

よくよく見てみれば、忠夫も気付いていたかもしれない。小鳩の額に浮かんだ、幾つかの井桁マークに。

「誤解じゃー! 濡れ衣じゃー!」

「でも、百倍可愛いんですよね？」

「可愛いと言うよりも美人——ほぎゃー!!!」

しばし、花火の音と共に。遊園地には何処か楽しげな少女の声と、情けない半人狼の悲鳴が響いていたそう。

「な〜んか、腹立つわねえ・・・ほら、西条さん次行くわよっ!!」

「勘弁してくれ・・・もう、7件目だよ・・・」

「いいからっ！ 今日には飲みたい気分なのっ!!」

「ちよ、ちよつと怨むよ横島君・・・」

その夜の繁華街に、苛立ち混じりの美女と、半泣きの青年の声の木霊していたのは何故だろうか。

第参話。

深夜。某温泉より程近い、都会の喧騒等とは完全に無縁のその場所で。

普段は、精々森を渡る風の音、虫の鳴き声、獣の声が響き渡るだけのその場所で。

——今、轟音が鳴り響いていた。

巨大な『ナニカ』と、それに比べれば細い——比較しての話であつて、本来ならばどれほどの長さを持つのだろうか——蛇のような数多くの『ナニカ』が、森の一角を砕きながら闘争を繰り広げているのだ。

「——っ！——いわえっ！」

「——あつ！——っ!!!」

どごん、と一際巨大な音が響き渡る。それは地面を揺らし、その奥底に流れる何かを一時のとは言え塞き止める。

それとともに動きを止め、巨大な『ナニカ』から一斉に離れて行く細い『ナニカ』達。細いその影が完全に夜の帳に紛れ込み、再び動き出す事がないのを確認してから、その巨大な影も夜の空気に溶け込むように消えていった。

その日、東京の空は、灰色の雲で覆われていた。その、昼なお薄暗い都会のビル郡の一角に、今日も今日とてお仕事に精を出すGS美神除霊事務所のメンバー達の姿がある。

「うひよおおおおおおおつ!」

「ガアアアアア!!」

表面の塗装の剥げ落ちた、ぼろぼろのビルの屋上の扉を蹴り開けて、真っ赤なバンドナを巻いた青年が飛び出してくる。その後を追いかけてその背中に迫る、暗い雰囲気をつらな纏った数体の悪霊達。

「美神さーん！どこっすかー!!早く早くもう限界ー!!」

「ちっ!中々にすばしっこいわねっ!横島君、そいつの動きを止めなさい!」

「簡単に無茶言わんで下さいっ!」

ビルの屋上、先程忠夫が蹴り開けた扉の上に設置された給水塔の影から、ボウガンを構えた美神がそう叫ぶ。

忠夫を囲むように展開する悪霊は、前後左右から僅かづつタイミングを逸らして襲い掛かる。それを、あるものは手に展開した霊波刀で受け流し、あるものはしゃがみこんで避けながら忠夫が叫び返す。

「クルシイ・・・イタイ・・・!」

「だからって生きてる人間に迷惑かけるんじゃないってのっ!其処お!」

頭の中に直接響き渡るような、悪霊たちの怨嗟の声。その声を吹き飛ばすような美神の声に、一瞬気を取られたその悪霊は、額に突き刺さった霊体ボウガンの矢でこの世から消滅させられた。

「さっすが美神さん!」

「気を抜くんじゃないの!まだ居るわよっ!」

悪霊から逃げ回りながらも快哉を叫ぶ忠夫に声をかけながら、再び矢を番えていく。囿を囲んでいるのは四体、破魔札と忠夫と今片付けたので3体。偵察に出したおキヌは

「美神さん、下から来ます!」

「おキヌちゃんっ?!——チッ!」

屋上の床を突き抜けて飛び出してきた幽霊の少女、おキヌの後を追いかけるように数体の悪霊が湧き出てくる。舌打ちをしながら適当に辺りをつけてボウガンを打ち出し、すぐさまそれを投げ捨て神通棍に霊力を通して左手に破魔札を広げる。

「オレハ、オレハシニタクナンカナカッターンダー!!!」

「もう止めてっ!こんな事続けても——」

「全く……! 成仏もせずに命有る人間に迷惑をかける馬鹿どもっ!このGS美神令子が——」

幸運にも矢は一体の悪霊を貫き、打ち減らしていた。横合いからの不意打ちに動揺し、一瞬隙を見せたそれらに向かって破魔札を投げつけながら、美神は、告げる。

「——極楽に、行かせてあげるわっ!!」

破魔札の爆発と共に飛び込んだ、亜麻色の髪を靡かせた美神の神通棍は、悪霊の体を砕いて尚、燦然と輝いていた。

「ふう、何とか片付いたわね」

「だから、俺を巻き込まんで下さいっ！」

目に見える範囲に悪霊が居ない事を確認し、ようやく神通棍を収めた美神に何処となく煤けた忠夫が半泣きで迫る。

「あんたも大概タフよねー。半分とは言え妖怪なのに、どうして破魔札の爆発に巻き込まれてそれで済んじゃうのかしら」

「タフで済ますなあああっ!!こうなったら、傷物にした責任を取って嫁に来てもらうー
—きやいんっ!」

馬鹿に靈力を箠めた拳骨を振り下ろし、頭を押えて悶えるそれを踵で「ふみふみ」しながら辺りに靈力を広げ、敵の残りがいない事を確認する。

「・・・おキ又ちゃん?」

「・・・え、あ、どうかしましたか?」

その視界に入ったのは、何処となく落ち込んだような雰囲気少女。いつも明るい彼女らしくなく、俯いたまま自分の、床から浮かんだ足を哀しげに見つめていた少女は、美神の声で慌てて頭を上げた。

「それはこっちの台詞よ。おキ又ちゃんこそ、どうかしたの?」

「いえ・・・何でもないです」

「美神さんに苛められたのかっ?! 例えば囿にされたのにしばらくほっとかかれたと、か

ようやく援護してもらったと思つたら悪霊ごと纏めて吹っ飛ばされたとか、しかも責任取つて嫁に来なかつたとか?!

「あんたは黙つてなさい」

「ぐええ……」

自分の状況を忘れて足元で問い掛ける半人狼を、更に力を籠めた踵で踏み潰しながら強制的に静かにさせる。

「クスクス……いえ、何でもありませんよ」

その様子を、楽しそうに眺めながらおキヌが答える。まだ僅かに陰がありながらも、ようやく何時もの雰囲気を取り戻しつつある少女をほっとしたように優しく見つめながら。

「ま、馬鹿もたまには役に立つのかしらね」

美神は、足の下青年に視線を下ろした。

「……うううっ！ 今なら神秘が覗けるっ！ しかし、それは侍としては余りにも恥ずべき行為っ！ しかし、俺の野性が、狼の本能がっ！ 今こそその時だと告げているよ
うな気がしないでも無くは無い訳でっ！」

「一生眠らせてなさいその本能っ!!」

——結局、神秘を覗く前にあつちの世界を垣間見かけた訳で。

そんなこんなで、帰りの車の中。

何時もなら「まあまあ、美神さんその辺にしてあげた方が・・・」と言いながら止めに入ってくれる筈の少女が物思いに耽ったままの性もあつてか、ちよつとりカバリーが追いついていない半人狼の青年は、ぼろぼろの姿で目を覚ました。

「・・・いたたた。美神さん、もうちよつと優しくしてくれてもえーやないですか」

「私の神通棍喰らつておいて、「いたたた」で済ます非常識にかける優しさなんて無いわ

「よ」

何時もの如くあつきり目を覚ました忠夫に、何となく納得いかなさげな声が運転席から返ってくる。

ちなみに、助手席に放り込んだのは美神である。とは言えおキヌも手伝つて二人掛りではあるが。

そのおキヌは、今も少し悩んだ素振りを見せながら、何時ものような忠夫を心配するような台詞も無く車のシートに掴まつて浮かんでいる。

「美神さん、おキヌちゃんどうしたんつすか？」

「・・・さあねえ。さつきからあんな調子で、こつちも困つてるのよ。おかげでやり過ぎちゃつたし」

「久し振りに綺麗な川が見えましたしね」

バックミラー越しにおキヌの方を見ながら、こそこそと運転席と助手席で話す二人に、おキヌの小さな声が聞こえてきた。

「美神さん・・・私・・・」

「ど、どうしたのよおキヌちゃん」

鏡越しに見える少女の顔は、思いつめた表情で。

「さつきの人、とつても苦しそうでした。死にたくないつて・・・まだ生きていたかつた

んだって……すごくかわいそうで……」

「……ああいう霊は、他人に自分の苦痛を分かかって貰いたくて人を殺しつつけるわ。……死んじやったもんはしよーがないのに。何時までも現実から逃げ続ける、そして、同じような霊を作っていくのよ」

「……」

ハンドルを握る美神の言葉に、少女は再び俯いて沈黙する。

「ま、おキヌちゃんにはもうちよつと死にぞこなつて欲しいけどね……」

「えっ？」

その少女の耳に、小さな声が聞こえた。目線をあげれば、鏡越しの視線は逸らさずいて、運転席の女性の顔は殆ど見えない。それでもほんのりと恥ずかしげに染まった頬は、夜の近づく薄闇の中でも僅かに見えた。

「そうそう！　じゃないと、俺の身が持たないしっ！」

「あんたのは自業自得でしょうがっ！」

視線を前に固定したままの美神が、片手をハンドルから離して助手席の青年に裏拳をかます。

「……いったら。ま、それはともかく」

「横島君。本格的なお仕置きが必要かしら？」

「そんな照れ隠し——そ、それはともかくっ!!」

言葉の途中で膨れ上がった殺気に、慌てて話題を逸らしながら、シートの上で体をひっくり返して後ろのおキヌを直接見る忠夫。

「俺としては美人は大歓迎っ！ おキヌちゃんが居なくなったら、俺はさびしいな」

「・・・ありがとうございます、横島さん」

何となく流れる良い雰囲気、運転席の女性からちよつと不満げな空気が広がっていく。

「——この子の可愛さ限りない。山では木の数萱の数」

そんな雰囲気の中、夕日を頬に受ける少女の唇から優しげな歌声が響き渡る。

「星の数よりまだ可愛い、ねんねや ねんねや おねんねや・・・」

何処までも優しいその歌は、日も沈みかけた夕闇の街に、ゆつくりと余韻を残しながら消えていった。

「・・・私が、生きていた頃に覚えた歌なんです。もう、殆どその時の事、思い出せないけど・・・」

「・・・ん、いや、いー歌だよ」

「そうね・・・。なんだか、懐かしい歌・・・」

寂しげに笑う少女の歌声に、ただ聞き惚れていた二人が静かに、心のままにそう告げる。

「・・・思い出せないけど、忘れない歌。大事な事は、忘れない事。美神さん、横島さん」
「何？」

「なんだい、おキヌちゃん」

その笑顔は、何時もの、おキヌの笑顔だった。

「・・・私は、きつと、今を忘れません」

「そう」

「俺も、絶対に忘れないよ」

一人は、視線を前に向けたままそっけなく、それでも口元を緩やかに曲げて。

一人は、真つ直ぐに視線を合わせたまま、とても嬉しそうに笑いかけながら。

一人は、その二人との出会いを心に刻み込みながら――

――突然降り注いだ光の柱に、溶け込むようにして消えていった。

「――つ!!」

街灯の付き始めた街並みに、急ブレーキの音が響き渡る。

「おキ又ちゃんっ?!」

「何よ今の強烈な気配っ?! いきなり——おキ又ちゃんは何処っ?!」

路肩に止められた車の上に、混乱と驚きが満ちていく。

「い、今の光に溶けて、消えちゃいましたっ!!」

「っ! もう、なんだってのよっ?! 横島君、匂いは追えそうっ?!」

「無理っす!! まるで本当に消えちゃったみたいに唐突に途切れてますっ!」

慌てて立ち上がり辺りの匂いを嗅ぐ忠夫が、鋭い美神の声にそう返答する。

親指の爪を食い千切らんばかりに噛み締めながら、美神は辺りの気配を探る。

「・・・駄目、霊的な痕跡も全く無いわ。一体・・・」

「まさかUFO?! これがあぶだくしよんってやつなのかつ?!」

「TVの見すぎよっ! 少し黙ってなさいっ!」

唐突にトンデモ理論をぶちまける馬鹿に全力の拳を叩き込む美神。

「でも消えましたよっ?! 攫われましたよっ?! 都会はなんて恐ろしい所なんじゃー

!!」

「ああもう黙れっ!!」

顔面に食らった一撃を、一瞬後ろに仰け反っただけであっさり回復した異様な耐久力を見せる半人狼に、再度ワンツートコンビネーションを叩き込みながら車から降りる。

懐の携帯電話が通知を告げたのは、その瞬間だった。

「誰よっ?! お兄ちゃんっ?!」

「・・・何かあったのかい? 西条さんじゃなくなつて、昔の呼び方で僕の事を呼ぶだなんて」

電話の相手は、オカルトGメンの西条輝彦。慌てた美神の声で、何かがあつた事を察知しつつゆっくりと話し掛ける。

「それが、たつた今おキヌちゃんが消えちゃつて——」

その声色に少し落ち着いたのか、美神が途方に暮れたような声で西条に今起こつた事を伝える。

「おキヌちゃんつて言うのは・・・」

電話の向こうで、紙を捲る音が聞こえた。

「・・・人骨温泉での除霊の際、令子ちゃんが雇つた幽霊の少女だね?」

確認するように、西条が電話の向こうで念を押す。

「そうよ。オカルトGメンの方に、いえ、違うわね」

電話を耳に当てながら、考える素振りを見せる美神。

「なんで西条さんの方に、その情報が回つてるの?」

「察しが早くて助かる。おそらく、おキヌという少女の消失は、今起きている事件に関係

していると思う。・・・僕の霊能者としての勘だがね。こっちに來れるかい？」

「行くわ」

迷わず即答した美神は、携帯電話の電源を切ると素早く懐に戻し、車の運転席に飛び込むようにして座る。

「飛ばすわよっ！ 何時までも寝てないで、とつとシートベルトを締めなさいっ！」

「う、ういっす!!」

よろよると起き上がりながらシートベルトに手を伸ばす忠夫を横目で確認し、ギアを入れながらクラッチを繋ぎ、アクセルを一気に底まで踏み込む。

「うおわっ?!」

シートベルトを締め切れなかった、加速に思いつきり体勢を崩す半人狼の悲鳴を無視しながら、美神の車は道交法ぶっちぎりでおカルトGメンへの道を加速していった。

「お兄ちゃんっ！」

「お義兄さんっ！」

事務所の隣のビル、其処にあるオカルトGメンのオフィスの扉を叩き壊さんばかりの勢いで開き、ついでに隣の肝臓に伸び上がるようなボディブローをかましておく。

「令子ちゃん、落ち着いて。横島君が痙攣し始めてるよ」

「時と、場合を、考えろって、体に、教えて、いる、のよっ！」

もんどりうって倒れた忠夫にストンピングの嵐を降らせながら、荒くなつた息を深呼吸して落ち着かせる。

大きく息をついて、疾走で少し崩れた髪の毛を手櫛で梳きながら西条に向かい合う美神。

「で、何がどうしたのよ西条さん」

「ああ、昨夜人骨温泉の近くの森で、妙なものが見られていてね。あの辺りで除霊作業をやった事の有る令子ちゃんなら何か気付いた事でもないかな、とも思つて連絡したんだ

が」

「オカルトGメンに流れてきた目撃情報？ 思いつきり霊的な事件ってこと？」

そろそろ痙攣がゆっくりと止まりつつある忠夫を放置し、西条に渡された報告書に目を通す。

「・・・何よ、これ」

「ま、確かに警察じやちよつと無理だよ。巨大な人型の何かと、大量の蛇みたいな何かが悪戦つていたなんてね」

報告書によれば、深夜、温泉旅館の湯治客が、露天風呂で突然聞こえた轟音で気付いたという。

静かな夜を震わした、幾度もの爆音は夜半を過ぎても響きつづけ、最後に巨大な揺れとともに収束。次の朝そこを見に行った従業員が見たものは、巨大なクレーターのみであつたと言う有様。

「・・・臭いわね」

「で、心当たりは？」

「心当たりねえ・・・うーん・・・あ。」

「あるんすね？ さあきりきり吐いて楽になりましたよー！」

何時の間にやら復活し、こちらに向けて何処からか調達した卓上ランプの光を向けて

くる忠夫に灰皿を投げつけつつ、慌てて自分の冷や汗を止めようとする美神。

と、誰かの視線を感じた。

「灰がつ！ 灰が目につ！」

「で、何をやったんだい？」

不自然なまでの笑顔で美神に詰め寄る西条。顔はものすごく笑顔だが、目が全く笑っていない。

「令子ちゃん、正直になるんだ。今なら怒らないから」

「え、う、あく。御免なさい」

ちよつと、昔の光景がフラッシュバックした美神であった。

「目があー！ 目があー！」

「……お、怒らないって言ったのに」

「時と場合による。全く、迂闊に地脈に手を加えちゃ駄目だろう?」

西条の拳骨が振り下ろされた頭頂部をさすりながら、美神は西条に涙のたまつた視線を向ける。何処となく拗ねたような、ちよつと子供っぽさの有るそんな仕草に昔を思い出したりしたもの、美神からは見えない角度で唇を少し曲げただけの西条は。

「……はあ。ま、妹の手助けは兄の役目、かな?」

溜め息とともに卓上電話の受話器を取り、あちこちに連絡を取り始めるのだった。

美神の説明を要約すると、人骨温泉に出没する幽霊を除霊する依頼を受け、其処に向く最中の出来事であつたと言う。

突如、巫女服姿の女性の幽霊——おキヌ——が、一抱えも有る岩を、景色を楽しみながら歩いてきた美神に向かって振り下ろしてきたそうだ。

それが、彼女達の出会いであつた。

かるゝく苛めて、泣きながら逃げ出そうとする少女を呪縛ロープで捕獲し、彼女の事情を聞いてみれば自分の代わりに身代わりになつて、本人曰く山の神になる事を期待し

て地脈に括られたという立場を変わって欲しかったのだと。

お金にならないから、と放つて置いたら何故か着いて来て、結局依頼場所まで来る始末。依頼主に聞いてみれば、事前情報どおりやっぱり依頼された除霊対象と違うよう
で、如何したのか、と悩んでいたそのときに。

折りよく、除霊対象が現れたのだ。何故か山が大好きな。

これで依頼があつさり片付く。しかも元手ゼロで。と、言う訳で。

山の神の立場を変わつてもらい、おキヌは首尾よく括られた立場から開放され、依頼主は霊が出現しなくなった事に満足し、登山服姿の霊は山の神となれることに狂喜乱舞し、美神は報酬丸儲けできた事に満足し、八方丸く収まる筈であった。

——ところがどっこい。

依頼場所に妙な存在が現れ、しかも気心の知れ、最早美神にとっては妹のような存在となっていたおキヌが消え。

今頃になつて、何かが起こり始めていた。

「とりあえず、此方の方でも情報を集めてみる。令子ちゃんたちは」

「ええ、現地に向かつてみるわ。幸いあそこの旅館なら知ってるし、山の神見習が知り合

いだから」

「美神さん、おキヌちゃん大丈夫ですかね？」

真剣な表情で話し合う二人を余所に、そわそわと落ち着きの無い感じで今にも駆け出しそうな忠夫。

「横島君、あんたこれ持つて先に行つて。もしかしたら一刻を争う事態になるかもしれないわ。あんたの鼻なら、なんか見つけられるかもしれないでしょ？」

見かねたように美神が忠夫に通信機を投げて寄越す。

「分かりましたっ！先に行きますっ！」

それを受け取った忠夫は、そのままオカルトGメンのオフィスの窓から飛び出し、着地と同時に駆け出していった。

「全く、焦っちゃって。．．無理しないでよ、横島君」

「そんなに心配する事は無いさ。彼だつて修羅場は潜つてるんだらう？」

一言呟いて身を翻し、出口に向かって歩き出した美神に西条の声がかけられる。

「それに、だ」

ドアノブを捻り、扉を開けた美神の背に言葉がかけられる。それを背中で聞きながら、歩みを止める事無く出て行こうとする美神。

「君がおキヌちゃん立場でも、彼はきつと同じように焦ると思うよ？」

閉まるドアが一瞬止まり、今度は勢い良く叩きつけるように閉じられる。それを面白そうに笑いながら見ていた西条は再び電話機に手を伸ばしながら、にやけた頬を隠そうともしていなかった。

「ま、兄からの助言は以上だね」

きつと耳までほんのり赤く染まっているであろう妹分を思い浮かべながら、西条はダイヤルをプッシュするのであった。

第四話。

「何よ……これ」

いつもの服から白いスラックスに履き替え、事務所を出た美神は一路おキ又と始めて出会った場所——人骨温泉へと向かっていた。途中で車を降り、しばらく歩けば其処はもう、いつかの場所。

景色の良い、反対側は崖で、緩やかな上り坂のカーブであった。美神が、初めておキ又と出会った場所である。

「地脈が、無茶苦茶じゃない……」

アスファルトで覆われた道路に手をつき、何かを探る美神。感じられたのは、あちこちで歪み、塞き止められ、その閉じられた堰を無理やりに抉じ開けようとしたような痕跡だった。

「何かが起こってるのは間違いないけど」

す、と手を地面から離し、立ち上がる。空を見上げれば、黒く、厚い雲に覆われていて。嫌でも不吉さを感じさせる空模様。

「嫌な予感がするわね……」

再び歩き出した美神の足は、それまでよりも幾分と速い物だった。

「おお、美神さん！」

「どーも。オカルトGメンからの要請で来ましたわ。で、詳しいお話、聞かせてもらえるかしらっ？」

「ありがたいこつてす。ささ、今お茶のほうお入れしますので、どうぞこちらにおねげえしますだ」

当初の目的地、温泉宿に着いたのはそれから十数分の後の事。さくさくとお茶と中々美味しいお茶菓子が並べられた。

それらを食べながら、目の前に資料の束を広げ、対応してくれた従業員に話を聞く。

「ふ……ん。つまり、この温泉宿があるのが此処で」

よく磨かれた、貝殻のような爪が地図の上を滑っていく。

「クレーターのあった場所が此処、ね」

とんとん、と爪で地図を叩きながら、視線で従業員に確認を取る。

「ええ、間違いねえつす」

「・・・妙ね」

「へ？」

腕を組みなおし、先程確認した地脈の乱れを思い出す。

「確かに距離も方角も、地脈の乱れを感じた位置と合致するわ。でも・・・後、少なくとも4・5箇所は同じような感触があった。他に、同じような目撃証言は無いの？」

「え、ええ。あんなのはこの前が初めてで」

——幾つもの地脈の乱れ。最近になって初めて目撃された『ナニカ』達の争い。堰き止められた地脈と、それを乱暴にこじ開けようとした痕。

「駄目ね・・・情報が少なすぎるわ。こうなったら現場を——」

美神の台詞をさええきるように、腰に下げていた通信機がノイズを発する。

「——神さん！美神さん！」

「おほほほ。ちよつとすいませーん」

通信機から飛び出てきた、先発の半人狼の悲鳴が小奇麗な部屋に響き渡る。驚いた表

情で此方を見やる従業員を笑顔で誤魔化し、通信機を取り出しながら部屋を出る。

「どうしたの、横島君！」

「大変つす！おキヌちゃんがいましたー!!」

「なんですつてええつ?!」

その大声に驚いたように、廊下の向こう側から他の宿泊客や従業員が顔を出す。それを視界の隅に引つ掛けたまま、通信機に叫ぶようにして叫び返した。

「今からそつちに行くわ！ 動くんじゃないわよー」

「は、早く！ 助け——」

ブツン、と音を立てて切れる通信。

「ちよ、横島君！横島君つてば!!」

がながんがんと通信機をぶつたたくも、返つて来るのはノイズばかり。返事を返さないそれを元のように腰に下げ、置いてきた車に向かって駆け出す。

「全く……！ おキヌちゃんに続けてあんたまでいなくなつたら、本当に許さないからねっ!!」

不安に揺れる心を無理やりにねじ伏せながら、呼び止める従業員の声も無視して駆け出した彼女の瞳には、今までに無かつた心細さと、思い出してしまった何かが浮かんでいた。

時間は少し遡る。

オカルトGメンのオフィスの窓から飛び出し、うろ覚えの人骨温泉に道路も障害物も驚いたように見てくる通行人も、何もかもを無視して突っ走る。

「おキヌちゃん、今行くからなー！」

ド派手な土煙ととんでもないスピードで走る忠夫の後ろには、へこんだアスファルトと仰天する人々、掻き分けられた生垣が惨憺たる有様で一直線に残っていた。

それでもそういった被害は、都会から離れるごとに少なくなっていく、同時に忠夫の速度も上がっていく。

田んぼのあぜ道を飛び越え、所々にある家を避けようともせず飛び越え、こんもりと茂った林を突っ切っていく。

そして――

「……、何処だよ」

迷った。

辺りは何時の間にやら森の中。昼尚薄暗いその場所に、既に獣道さえない。

「……ヤバイっ！やば過ぎるっ！あんだけ勢い良く飛び出しといて道に迷いましたー、てへ。とか言ったら、殺されるっ！」

あれだけの暴走に近い疾走の中でも、幸運にも落とす事の無かった通信機を握り締めながら震える忠夫。

「ああつ！でも、連絡しないと此処が何処かさえもわからんっ!!」

頭を抱えて苦悶する半人狼。傍から見れば喜劇だが、本人はいたって真剣に検討中だ。

――何が一番危険度が低いのか。

「も、もうちよつと辺りを探し回ってからでも良いよな？」

誰に聞く訳でもなくそう尋ね、返ってこない返事を自分に都合よく解釈しながら辺り

を見回す。

「森だ」

そのまんまである。

「そーじゃなくつて！ええと、ええと、上だ上つ！」

セルフ突つ込みも忙しげに、視界を確保する為飛び上がる。辺りの木々の幹を蹴り上がりながら、森の上まで到達した忠夫の視界に写ったのは。

「あ、神社」

古い、かなりの年月を経た神社と、元は真つ赤に染め上げてあつたであろう鳥居、そして、それに付随するかなり大き目の平屋の屋敷であつた。

そこまですを確認し、自由落下で落ちていく。

「ふんっ！」

掛け声一つで足から着地し、その衝撃も抜けきらぬ内に駆け出していく。

「建物があつたら人がいる！人がいたらまず！」

目指すのは先程の神社。古いながらも境内に草が生い茂っていた様子もなく、また建物にも所々修繕の跡があり、人が住んでいる様ではあつた。

『人骨温泉は何処ですか？』これに決まりだなっ！さすが俺、ついてるなー！」

それまでの追い詰められたような表情は何処へやら。すっかり笑顔で駆け出す忠夫

は、木々を掻き分けいとも容易く境内に出る。

「な、なんだべっ?!」

がさがさと繁みを揺らして飛び出してみれば、早速目当ての人影がある。警戒させないようにゆつくりとそちらを向き、朗らかな笑顔で。

「——嫁に來ないか? って、そうじゃねーだろ俺ええ!!」

「きゃー!! 変態だー!」

思わず手を握った肩までの黒髪を持った巫女服の少女に、思いつきり警戒されながら悲鳴を上げられた。そして、忠夫が条件反射で行動する前に、良く観察すれば気が付いただろう。

その少女が、おキヌと余りにも良く似た風貌をしている事に。

「わっわっ?! えっ? おキヌちゃん?! 俺だよっ、横島だつてばっ!」

「そんな人知らないだー! 父っっちゃー! 変態がただよー!」

しかしまあ、過ぎた事は取り返しがつかない訳で。目の前で、おそらく境内を掃除する為の物であろう箒を構えてこつちを睨みながら、そう叫ぶ少女に忠夫は必死で言い募る。

「ちよ、ちよつとまって! 今、美神さんを——」

懐に手をつ突っ込んで、先程収めた通信機を取り出そうとする忠夫。しかし、その動き

は一時中断せざるを得なくなつた。

「家の娘に手を出す変態は、何処だー!!」

神社の本堂から、眼鏡をかけた、髪薄い、おそらく神主であろう人物が飛び出してきたからである。

手に、黒光りする細長い物を持って。

「そこかー!」

意外に軽い音とともに、忠夫の耳を掠めて何かがすつ飛んでいく。

「うそーん」

「・・・今のは威嚇だ。ゴム弾とはいっても直撃すれば骨の一本や二本容易いぞ?」

にやりと笑う、おそらく神主であろうと信じたいが信じられない、髪薄い人物。

「其処を動くな。早苗、警察を」

「分かつただつ!」

両手を挙げてホールドアップな忠夫を視線と銃口で牽制しながら、巫女服の少女にその声をかける。

駆け去っていく少女を呼び止めようとするも、神主が殺気の籠った目で睨みつけている。

「あ、あの〜」

「変態さん。この神社の神主として言います。ちよつと頭を冷やしてきなさい、コンクリートに囲まれた場所です。あの世でも良いですが」

「神主の言葉じゃねえっ?!」

「はっはっは、八百万の神がいる国です。一人くらいこんな神主がいても良いでしょう?」

全くもって関係ない。と言うか、既に神主の言葉ではない。

「まあ、娘を持つ男親としては——変質者はとつと動いて撃たれなさいと」

「き、気持ちはわからんでもないが、俺は変質者じゃないっ!」

そう言つて、懐に手を突つ込む忠夫。通信機を取り出して、美神と直接話をつけてもらうつもりであった。

で、あつたが。

目の前の人物が、その動きをどう取るかが、問題であつた。

「えつと、この通信機で——どわたあつ!」

視線を向けた先には、銃口を構え、こちらに向かつて引き金を引く神主の姿。迷わずそのトリガーは引かれ、忠夫に向かって放たれるゴム弾。

「動いたね?今動いたねっ?!」

「こつちの話も聞けえええつ!」

「変質者の言葉など、聞く必要も無いわあつ!!」

慌てて逃げ出す忠夫の後ろから、幾つも幾つも飛んでくるゴム弾。

「まああてええええつ!!」

「み、美神さんに連絡をー!!」

必死で走りながら通信機のスイッチを入れる。呼びかけること数回目。

「美神さん、美神さんー!!」

「どうしたの、横島君!」

ほんの数瞬迷い、最も大事そうな事を告げる。

「大変つす!おキヌちゃんがいきましたー!!」

「なんですつてええつ?!」

途端に響く通信機の向こうからの声。とは言え忠夫の言葉も、全く確認をしていないので大事そうな事ではあるが実際はデマと、かなり問題のある発言であった。

「今からそつちに行くわ! 動くんじゃないわよ!」

「は、早く! 助け——」

其処まで喋った時、通信機は、後ろからの銃弾で吹っ飛んだ。

「実弾ー?!」

「知り合いの猟師から護身用にと受け取ったのだ!」

「神主が殺生するんじゃねー!!」

山々に、半人狼の悲鳴が木霊した。

「横島君っ!」

「きやいんきやいーん!」

忠夫のバンダナに仕込まれた、何時ぞやの発信機を頼りに辿り着いた美神に、泣きながら忠夫が飛び掛る。

「怖かったっすー!ほんまに怖かったんすよー!!」

「ちよ、こらっ!何処触ってんのよ、離れなさいっ!!」

「おお、どうやら嘘は付いていないようですね」

此処は神社の境内。なんとか神主が弾切れになるまで粘りきり、後ろから弾が飛んでこなくなった事で少し余裕を持った忠夫が、素手で構えを取る神主に何とかかんとか説明して。

境内まで視線で脅されながら戻ってきた後、雇い主が直ぐに来る、という忠夫の言葉に睨みながらも待つことにした神主であった。

言葉通りそんなに待つことも無く、境内に続く階段から走る音が聞こえ、ようやく新しく弾を籠めた銃を下ろした神主を見て心の其処から安堵した忠夫は、美神に向かって思わず飛びついてしまったのだ。

「きゃっ?!?!、この、いい加減にしなさいっ!!」

まあ、こちらも無事な忠夫の姿を見て安堵し、その為不意を突かれた美神が怒りの拳を繰り出すまでの行動ではあった。

少し赤い顔で息を荒げる美神に、その足元で自分の血に沈む忠夫を横目で見ながら神主は声をかける。

「で、この氷室神社に何の御用ですか?」

「はあはあ・・・ええと、貴方は?」

「此処の神主です。いや、私の娘にそちらの男性がいきなり妙な事したらしく、此方も

手荒い対応となつてしまつた事をお詫びします」

「あ、此方こそ至らない所員で。この馬鹿っ！」

互いに笑顔で頭を下げあいながら、美神は忠夫に蹴りを入れる。

「父つちや、変態はどうなつただか？」

「おお、早苗。いやこちらの勘違いだつたようだ。警察の方には、母さんから連絡を入れ

てもらつてくれ」

「わかつただ」

おずおずと、本堂の陰から顔だけを出すようにして少女が声をかけてくる。神主とその少女の会話を見ながら、美神は驚いたような、納得したような表情になっていた。

「——成る程、あれじゃ横島君が見間違うのも無理は無いわね」

「でしょ？」

「・・・もう少し寝てなさい」

境内に、ごっつん、という音が鳴り響いた。

「成る程、事情は分かりました。ですが早苗は私たちの娘。その、おキヌという方とは違
いますな」

「ええ。そのようですわね」

気絶した忠夫を引きずりながら、とりあえず腰を落ち着けようという神主の言葉に
従つて、一家が生活しているのだから屋敷へ案内された美神達。

恰幅の良い、年配の女性——おそらく、神主の妻——に出されたお茶を啜りながら、事
情を説明する事と相成つた。

「ですが」

神主は、手に持った湯飲みをゆっくりと机に置き、言葉が続ける。

「貴方が聞いたおキヌという娘の話に、心当たりがあります」

「・・・え？」

「少々お待ちを」

美神の声に答える事無く、神主はすつと立ち上がると部屋を出て行く。左程も無く

戻つて来た彼のその手に握られていたのは、年季の入った一本の巻物。

「我が神社に代々伝わる古文書に、この神社の由来が書かれているのですが・・・」
その巻物を美神にも見えるように開き、其処に書かれた文を示す。

——300年前、元禄の頃。

ある地霊がいた。その力は非常に強力で、地震や噴火を引き起こし、土地を荒らしていた。その地霊の名を

——『死津喪比女』

死津喪比女は、その凶悪なる性のままに暴れまわり、ほとほと手を焼いた藩主によって呼ばれた高名な道士によって退治される事となる。

しかし、その強さゆえに、その退治には大きな代償が必要であった。

人身御供という、代償が。

道士は、怪物を封じる装置を作り上げ、一人の巫女を地脈の要に捧げる事でその代償とした。

道士によれば、いずれ娘が山の神となり、邪悪な怪物を完全に退治するであろうとのことであった。

「・・・と、言う訳なのです。おや、どうされました？ 頭を抱えられて、頭痛でも？」

「い、いくえ。なんでもありませんわっ！ おほほほほほほっ!!」

「つまりは美神さんのせいな訳っすね」

「・・・」

無言で打ち下ろされた神通棍は、こんな時ばかりタイミングよく復活した半人狼の頭頂部をえぐって叩き伏せた。

「不味いわね・・・おそらく、その死津喪比女っていうのが復活しかかってるわ」

「なんとっ?!」

忠夫を黙らせた美神は、とりあえず、誤魔化す事にした。

「ま、こう見えても私もGS。しっかり退治してあげるから、心配要らないわっ！」

「元々美神さんが——ぐえ」

足元で、口を滑らせた忠夫が踏み潰されていたりするが。

「で、どうするんすか？」

「ま、見てなさい」

氷室神社より少し離れた、開けた森の中。辺りの木々に何枚ものお札を貼って回っている美神と地面に座り込んでごそごそとやっている忠夫の姿がある。

「地霊って言うのは、大地に住まう精霊か、地脈のエネルギーを喰らう妖怪の事を指すわ」

張り終わった事を確認し、その中心辺りに立った美神はおもむろに首にかけたネットクの精霊石を外し、地面に埋め込んだ。そして埋め込んだ精霊石の周りに、半径1M程の魔法陣を書きはじめる。忠夫は今度は何時ぞやの真っ黒いロープを取り出し、美神の話聞きながら辺りをうろつき始める。

「今回は、後者ね。そして、最近になって荒らされた地脈と、それを堰きとめようとする力、その堰を再び壊そうとする力。塞き止めてるほうが多分、その道士とやらが作り上げた装置なんでしょうけど・・・うん、これで良いわね」

出来上がりを確認し、何度か頷くと、ぐるりと歩いて戻ってきた忠夫の隣に移動する。

「状況から言って、おそらく今は死津喪比女がエネルギーを求めて、地脈を荒らしている最中なんじゃないかしら。つまり、あつちにとつてエネルギーは喉から手が出るほど欲しい物なんじゃない？ 其処に、純粋な地脈のエネルギーの塊である精霊石の力を流し込んでやれば……」

「成る程、餌つてわけっすね」

「そう言う事」

両手で印を組み、靈力を高めていく美神。

「叩くなら、エネルギー不足の今のうちっ！ 最悪でも情報ぐらいは得ないとね。その妖怪ぶったおして！ 西条さんまで連絡が行く前に解決して、おキヌちゃんも取り戻して、誤魔化すわよっ！」

「ばれないように、がこんなに急ぐ本音っすねー」

呆れた様に呟いた忠夫は、目の前で輝き始めた精霊石と魔法陣を見ながら、一気に緊張の度合いを高めていった。

「——来るわよっ！」

精霊石の力が流れ出して、1分も立たない内に、美神の声が響く。その余韻が消え去らぬ内に、魔法陣が中心から爆発したように吹き飛んだ。

「うおっ！」

「出たわねっ！死津喪比女！」

数メートル上から美神達を見下ろすのは、女性の姿をした、足に当たる部分が蛇のような、と言うよりも植物の根のように伸びている妖怪であった。地面から伸びたその部分を含めれば、証言のように蛇のようにも見えただろう。

「——ほう。極上の地脈の波動に引かれて来て見れば、えらくちっぽけな人間じゃないかえ？」

「はんっ！ どうやらあんたがここら辺りの地脈を荒らしていたって言うのは、大当たりみたいだね！」

両手の印を解いた美神が、神通棍を構えて前に出る。

「ほお・・・小生意気な小娘が。気に入ったわえ、存分にいたぶり尽くしてから喰らってやろうぞ・・・」

「ちよつと待った」

歪んだ唇から突き出した舌で、ぬらり、と口の周りを舐めた死津喪比女が動き出す前に。

忠夫が、ゆっくりと笑顔で歩み出る。

「なあ、おキヌちゃんって名前に聞き覚えは無いか？」

「……不愉快な名前を聞いたぞ。わらわを封印したあの装置、その生贄になった愚かな娘の名を」

せせら笑いながらそう忠夫に答える。拳を握り締め、その手に靈力を纏わせながら更に続ける。

「んじや、冥土の土産にもう一つ良いかな？」

あくまでも仮面のような笑顔を崩さずに、暴発しそうな両腕を背中に隠して言い続ける。

「中々弁えておるわ。良かろう、お前は褒美として、その小娘の苦しむ様を見ながら生かしてやるわえ」

「あー、つまりさ。おキヌちゃんの名前を聞いたのは、昔なんだよな？ 復活してからは知らない訳？」

「……ふん。知っておれば真っ先に殺しておるわ」

それまでの優越感に満ちた表情を、残念そうな物に変えながら死津喪比女は答えを返した。そして、その両手を美神に向かって差し出す、その直前に。

「へー。そうなんだ。そう言えば、愚かな娘ってほざいてたけどそれに封印された大妖怪ってのはものすつごく恥ずかしい奴だよな。誰とは言わないけど」

「……横島君。いくら本当の事でも……ま、恥ずかしいわよね。誰とは言わないけ

ど」

「あつはつはつは」

朗らかに笑う二人。それを見る死津喪比女の瞳には、もう憤怒しか無かった。その怒りに曇った瞳が、二人の額に浮かんだ幾つもの井桁マークを見逃した。いや、気付いていたとしても、全く意には介そうとしなかったであろうが。

「・・・貴様ら、わらわを怒らせたこと、黄泉路にて後悔するが良いわっ！」

死津喪比女の両手が、伸びた。それまでの人に近い腕の形を変え、まるで鳶のようになつた上腕は優に二人を捕らえる距離までその手を伸ばし、捕らえようとす。

その速度はまさに閃光。人の目で捕らえきれるかどうかのその速度は、簡単に二人の首を捕らえ、捻り千切る事が可能であつただろう。

相手が、人であれば。

「——つぎけんなこんボケー!!」

瘦せても枯れても腐つても、半人狼は半人狼。超感覚と歌われたその視覚には、迫り来る閃光さえも見て取れる。

そして、仲間を貶されて尚怒りを覚えない人狼は、いない。

二本の腕は、たった一振りの霊波刀で薙ぎ払われ、あらぬ方の地面を扶る。

「なっ?! たかが人間風情が「その人間風情に負けたんだろぅがっ!」ぐうっ!」

「横島君! 足元っ!」

一足、只一足で死津喪比女との間合いを詰める。美神の言葉に反応し、怒りのままに叩きつけようとした霊波刀は死津喪比女の体を支える、何本かが捻り、寄り添いあう根のような部分を半分ほど薙ぎ払う。

「硬っ!」

その声に慌てて振り向けば、その姿は既に先程の位置から死津喪比女を挟んでちょうど反対側まで走りぬけた後。そして、振り向いた背中に、何枚もの霊札が張り付き、

「吹き飛びなさいっ!」

爆散する。背中を抉られ、僅かにぐらついたその足元に、再び迫る3つの小さな物体。

「この、下郎どもめがあああっ!!」

「油断大敵っ! 喰らいやがれ、唐巢神父特製の聖水まぶした石ころっ!」

一個は角度が悪かったのか僅かに抉りながら弾かれ、更に一個は振り払われた死津喪比女の腕に弾かれる。

そして残り一個は、残った根を貫通し、反対側の木の幹に突き刺さって動きを止めた。
「があっ!」

ぐらり、と。大木が倒れるように、ゆっくりと傾き落ちる死津喪比女の体。それから離れるように円を描きながら美神の元へ戻る忠夫。

「美神さん、こいつ」

「ええ、いくら何でも、ね。高名な、とまで言われた道士が梃子摺るような相手だとは思えない……」

小声で話す美神達の目の前で、ちょうど普通の人間と同じ高さになつた死津喪比女が、怨嗟の声とともに立ち上がる。

「根つここに薦みたいな体、んでこの匂い……美神さん、ちよつといいつすか？」

「……任せたわ」

「フオロー、お願いします」

目線と簡単な言葉だけで打ち合わせを済まし、霊波刀を構えて様子を見ながら声をかける。

「……どうだ？ 根つこがなけりや、もう終わりだろう？」

「小僧がつ！ 本体から切り離されたとして、まだわらわには余力があるわつ！」

「……へへ、たった一人で、何ができるつてーのよ？」

「ふ、ふははははつ！ わらわが一人だと、誰が言つた！」

にやり、と笑う忠夫と美神。

「いくや、誰も」

「口八丁も良い所なんだけどね。此処まであつさり鎌かけに引つかかるようじゃ、そりやどんなに力が強くても退治される訳ね」

意地悪く笑う二人の前で、一瞬言われた事が理解できなかつた死津喪比女は唾然とした表情を形作る。

「横島君っ！ 引くわよっ！」

「了解っす！」

美神の両手が印を組み、忠夫が懐から取り出したスイッチを押し込む。同時に、あたりの地面が数え切れないほど盛り上がり始めるが。

「ハッ！」

「ぼちつとな」

二人の行動の結果は、即時現れた。地面に埋め込まれた煙幕が辺りを包み込み、周囲を囲むように設置された霊札が霊波ジャミングを掛け始める。肉眼と、霊的な探查能力に対する二重の攪乱。そして、

「ふははははっ！さらばだ、なんだかゴボウみたいな匂いのする妖怪ー！」

「だ、誰がゴボウだ下郎ー！」

木の枝の間に、ぴん、と張られたロープを、美神をお姫様抱つこで搔つ攫つて思いきり踏んづける。

それは見る間にするすると何処かに消えていき、次の瞬間、二人は夜空に打ち出された。

「横島ー！これは聞いてなかったわよー!!」

「言つたら反対するじゃないっすか！ 嫁さん候補を抱えて夜空を駆ける。俺、今、カッ
コ良いー！」

「・・・あ、あんな馬鹿どもに」

いまだ煙幕で塞がれた視界の向こうから聞こえてくる声の中身に、何となく脱力した死津喪比女は、あたりに生えてきた『他の死津喪比女達』に慰められながら、さめざめと涙を流していた。

どごん、と、爆音とともに氷室神社の本堂の屋根に穴が開く。その音を聞いて慌てて駆けつけてきた一家が見たものは、木屑と埃に塗れて真っ赤になりながら男性の襟首を掴んで殴り続ける亜麻色の髪の女性であった。

「このっ！ 記憶を失えっ！」

「がふっ！ いや、事故やないっすかー！」

「いくら！ 事故でも！ このっ！ 鷲掴みに！ すんなっ!!」

「いやー、最高でした。ごっつあんですっ！」

「黙れえええっ!!」

突如真面目な顔でそう美神に言った忠夫の頭を、それまでよりも3倍の靈力で殴る真紅の美神。角が生えていそうである。

床にたたきつけられた忠夫は、そのままの勢いで床板を突き破り、

「おひよおおおっ?!」

「今度は何よー!!」

美神と一緒に、その下に開いた暗い穴へと落ちていく。どうやら、床板の下に隠し通路でもあったようである。

ヴァイオレンスの過ぎ去った跡には、神聖なる本堂の屋根と床に開いた穴と、それを呆然としながら眺める父と娘。そして、その横で電卓を取り出して修理費の計算と請求書の製作を始めた母だけが残っていた。

第伍話。

「——これは、賭けなのだ」

暗い。辺りは剥き出しの岩と、遙かな古代より積み重なった土の壁。そして、僅かに零れる光。

「お前と私の、な」

牙のような鍾乳石が天上からぶら下がり、地面は不自然なまでに均されている。人の手の入ったその地下洞窟は、今は只、時を待つのみの方、であった。

「守らねばならぬ。それが、私のこの影に過ぎぬ身の証なのだから」

眩く影の後方に、それまでに無かった光が差し込む。影の言葉より他に音も無く、静寂に包まれていた洞穴は、久方ぶりの来客を経て、その内に抱いた疑問を、さらけ出す。

「許せとは言わん。が——」

最後の一言は、背後の騒音に掻き消されて、洞穴の半ばを占める冷たい水に波紋を生み出す事さえ、無かった。

「ふう。お尻が擦り切れるかと思つたわ」

「……とりあえず、退いてほしいです。美神さん」

神社の天井を貫き、あまつさえ怒りとか恥ずかしさとかなんか諸々が原因で、更に突き破つて床まで貫通。

突き破つた床板の下には、あからさまに怪しげなスロープがあり、忠夫と美神は其処を滑つて更に下へ。

着いた先には固い地面と怪しい空間。何処の神社の地下に、此れ程大げさな仕掛けがあるというのだろうか。

予測を確信へと変えながら、クツション代わりから飛び退く。幸い半人狼が庇つてくれたおかげで怪我は無いが、それまでの展開がアレだから、ま、礼は何時かの事とする。「……成る程、此処が、あの神社の本当の聖域か。異様なまでに強い地脈の気配と、妙

な感覚。道理であんな辺鄙な所に、いやに立派な建物があると思ったわ」

「あたたたた・・・。いや、それだけでもないと思いますよ？ ほら、あの変な物」

忠夫の言葉に振り向いた美神の視界に入ったのは、直径2M程の球体を、6本の柱が不揃いに立ち支える、前衛芸術のような物体であった。それが、霊的な構造物である事を示すように球体の周りには注連縄が巻いてあり、それなりの雰囲気というものをもし出している。

「ふ・・・ん。ビンゴ、かしら？」

「ですかね。それなら、おキヌちゃんが近くにいるかも——」

「——探す必要は、ありません」

キヨロキヨロと辺りを見回す忠夫の後ろに、いきなり、というよりも、突然写し出されたように、黒い影が浮かび上がった。

「・・・！」

そのことに酷く驚きながらも無駄口を叩く事無く、素早く飛び退き、霊波刀を展開。同時に、美神も神通棍を伸ばす。

「・・・霊波刀か」

二人を、いや、忠夫の作り出した霊力の剣を見、一瞬だけ驚いたように目を見開く。そのまま、何事も無かったかのように、その影は二人に向かって訥々と話し出した。

「現代の退魔士達ですか？」

「そうよ、つて言ったらどうする?」

「お待ちしておりました。用件は、死津喪比女の事に関して、ですな。……あれがこの地脈の堰の頸木から抜け出してはや数ヶ月。そろそろ、誰かが来る頃だと思っております」

ゆつくりと、頭を下げる影。再びその顔が美神達の前に現れたときには、完全に作られた笑顔だけが浮かんでいる。

「ようこそ、現代の退魔士たち。私は、最早名も無き影。——その昔、この地に死津喪比女を封印した道士の残留思念、と言ったところでしようか」

只、目だけが、凝り固まった信念で輝いていた。

「まずは、説明せねばなりませんまい。あの死津喪比女を封印した少女、おキヌという名の少女の事を」

「知ってるの?!」

「おキヌちゃんは何処につ!」

残留思念の道士の口から滑りでた言葉に、ようやくの痕跡を見つけた美神達は思わず反応してしまう。

「……そうですか。貴方達が、おキヌを此処から解き放つたのですか」

「……な、なーんのことかしら〜」

「完全にバレバレつすよ！ 美神さん！」

「しっ！ 誤魔化せば良いのっ！」

「そう言う事は、せめて聞こえないように言つて欲しいものですが。とは言い、結果としては最良ではなくとも次善でありますので、お氣になさらぬよう」

「……そと話し合っているつもりなのに二人に突つ込み、そしてその会話に結論を持ち出す道士。いとも簡単に、あっさり振り返つた美神は誤魔化するような笑顔を真剣な物に変え、道士を睨んで腕を組む。

「……どういう事よ。地脈を弄られて、復活までされて、それが次善？」

「……それは、また後ほどに。先ずは、説明を」

その視線を避けるように、道士は軽く手を振り上げた。

「私は、私に課せられた役目は、死津喪比女の復活に対応する事。その為に、道士の人格より形成された写し身。貴方達は、この記録を見る権利と義務がある、と判断します」

振り下ろされたその手の先から、辺りの情景が一変する。

直後、美神達の視界は、太陽の光と自然の緑、空の青さに占められていた。

「えらく大規模な装置ね」

「それでもありません。あくまでも、この空間だけ、ですから」

「うわ、美神さん味神さん！ 何も無いのに何かありますよー！ ほらほらー！」

楽しげな声に出所を探れば、それは上から聞こえてきた。振り仰いだ美神達の目に写ったのは、おそらく鍾乳石にぶら下がっているであろう、両手両足で抱きつく格好で、何も無い空間に浮かんでいるように見える、忠夫だった。

「・・・あんだ、何時の間に登ったのよ」

軽く頭を押えながら問う美神。その質問に答える事も無く、忠夫は上から辺りを見回す。

「うっわ、山の形おんなじ」

「良いからとつと降りてこんかいっ！」

「・・・先に進めて良いでしょうか？」

律儀に待っていたのであるうか、そう聞いてきた道士に手の動きだけで先を促しつつ、飛び降りてきた半人狼の声を聞く。

「間違いないっすね。周りの地形がおんなじっす。でも、生えてた木とか川の形からすると、300年くらい前かな？」

「・・・その通りですが」

「良いから、先、続けて」

どうやら映像の場所を確認していたらしいが、行動がアレなので美神はいささか恥ずかしそうではある。

そして、頷いた道士の動きとともに、辺りの情景が動き出す。がさがさと揺れる茂みの中から、小さな影が三つ出てきた所でようやく忠夫が美神に並ぶ。

小さな影は、粗末な、服というよりも布に近いそれを纏った子供達であった。子供達はこそこそと隠れるように移動しながら、前方を眺めて動きつづける。その視線を追った美神達の前に、新たな影が写し出された。

「おキヌちゃん……！」

「……巫女服じゃないおキヌちゃんも新鮮つすね〜」

なんとなく横でのんびり呟いた忠夫に、美神が勢い良く肘を打ち込む。そんな光景は環形無く、目の前では、おキヌが子供達に詰め寄せられ、そして子供達を説得し、最後は実力行使で縄で縛って気に吊るす。そんな光景が展開されていた。

「……この頃から、怒ると怖かったのね」

「……ですな」

おキヌは瞳に決意を湛え、強張った面持ちで歩いていく。その表情を子供達に見せないように、振り返ることも無く。

そして、場面は切り替わる。次におキヌが現れたのは、それなりの規模の城をその背

に背負う城内の屋敷、その庭先であつた。

城主らしき立派な服を着た丁髷姿の男性と、それに従うこちらも丁髷姿の侍と思しき何人かの男性達。城主の隣には道士の姿もあつた。屋敷の中から、庭に集まつた年若き女性達を、濟まなさそうな表情で眺めている。

「・・・話は聞いていると思うが、もう一度、説明する」

苦々しげに、搾り出すようにして城主が放つた言葉。

要約すると、この時代で暴れていた死津喪比女を、公儀から「退治せよ」と命令が下り、その為に「生贄」が必要となる事。

そして、その生贄を選ぶ為のくじ引きを、今この場で行なう事。

その話を聞く女性達の表情は、冴えない。あるものは恐怖し、あるものは諦観し、あるものは——それでも、視線を落とそうとはしていない。

口惜しげに、城主と道士が準備していた籤の入った箱を指し示す。

「・・・怨んでくれるな、とは言わん。だが、領主として、私個人として、そなたらの縁者には苦勞は「父上えええっ!!」なっ?! 女華姫、何故此処につ?!」

廊下の向こうから、爆音とともに巨大な物体が疾走してくる。どうやら女性のようにあるが、着物の袖になんとか押し止めようとする数名を引きずりながら、全く意に介した様子も無い彼女を、姫というのは正直アレだ。

「何故ですつ！ 何故わらわを人身御供の選定の中に含めて頂けないのですかつ?!」

実の父、というか城主の胸倉を掴み上げんばかりの勢いで、女華姫と呼ばれた女性が迫る。

「姫よ、お前は自分の役目がある。ワシ亡き後、この領地を背負って行くのは、お前と、お前の夫たる人物。だから・・・堪えてくれぬか」

どうやら、城主は姫を選定の中に含めず、そしてそれを不服に思った姫が閉じ込められていた離れから脱出、そして、此処まで辿り着いた故の親子喧嘩となつたようだ。

「違いますつ！ 民草の為に命を張らずして、なんの主家かつ！ 姫も15、あの娘達も15！ 命に何の違いがあろうぞつ！」

まるで岩石のような、それでも必死に涙ながらに訴える我が娘の心優しさを嬉しく思いつつも、城主は姫を必死で諭す。

しかし、姫も譲らない。平行線の話し合ひは、それを呆気にとられたように眺めていた、集められた女性達の中から一人の女性が進み出た事で、終わりを告げる。

「お、恐れながら、私が志願いたしますつ!!」

「おキヌ・・・!!」

進み出たのは、先程までの重苦しい雰囲気の中でも顔を伏せる事の無かつた僅かな女性達の内の一人、おキヌであつた。

場面は更に進み行く。

城に逗留し、禊を行なうおキヌ。それを必死で説得し、思いとどまらせようとする姫。
「おキヌ……！ わらわと、わらわと代われ！ お前はわらわと違って器量も良い！
お前なら、これから先幾らでも幸せを掴める！ 皆もそう望んでおる……！」

夜の庭に、軽い音が響いた。

「おキヌ……」

姫の頬に平手を振った村娘を、姫は驚いたように見つめる。険しい表情のおキヌは、
ふ、とその表情を和らげ、叩いた頬をそつと撫でた。

「姫様……貴方には、優しい家族が居るじゃないですか。そんな事言ったら、その家族
が悲しんじゃいますよ？」

「だが、だが……!!」

苦しげに、心底苦しげに姫が呟く。

「それに、命に違いは無いって言ったのは、姫様でしょう？ 村娘だって、お姫様より価
値が上だなんてことは無いです。それに、もう、終わりにしたいんですよ。誰かが家族
を失って悲しむなんて」

そんな姫の、とうとう蹲って泣き始めた姫を優しく抱きしめながら、おキヌの口から
柔らかな歌声が響き渡る。

それは、忠夫達が聞いた、子守唄だった。

夜空に歌声が響き渡る。子供のように嗚咽する姫を抱きながら、おキヌはただ、歌い続ける。何時の間にか、空には満月が輝いていた。

「ええ娘や・・・ほんまにええ娘や・・・」

滂沱の涙を流しながら、映像のおキヌたちを眺める忠夫。その後ろでは、美神が困ったように頭を掻いている。

「で、これを見せてどうしようってのよ?」

「・・・それでは、先を続けます」

問うた美神に視線を合わせる事も無く。道士は誤魔化すように先を続ける為、手を振り上げた。

其処から先は、装置に向かって連れて行かれたおキヌと、それを妨害する死津喪比女、そして。

「わらわは姫じゃっ! 村娘ばかりに良い格好はさせぬっ!」

「姫ー!!」

「私の命を、どうか、どうかみんなの為に・・・!!」

水脈に飛び込み、装置を動かす人柱になったおキヌと、襲われていた姫の前で枯れていく死津喪比女。

最後に、本体が眠りに入った事を告げ、死津喪比女は枯れていく。その様子を口惜しげに眺めながら、おキヌの飛び込んだ水脈に近づいていく道士。

——そこで、映像は途切れた。

「成る程。おキヌちゃんが居なくなつた事で装置が稼動不能に陥つた。そして、そこから溢れ出た地脈の力で、死津喪比女が復活した、つてわけね」

「んじゃ、おキヌちゃんは今何処に居るんつすか?」

「・・・おキヌは、今、あの装置の中で調整を行なっています。おキヌの霊体そのものを武器にし、地脈の力を籠めた直接攻撃で死津喪比女の本体そのものを、倒します」

最初は、何を言っているのか理解できないようであった。しかし、理解の色が浮かぶと共に、その表情が怒りに満たされていく。

「あんた、何言ってるか分かつてんの?!」

「まさか、おキヌちゃんをミサイル代わりにするつもりかよっ!」

「・・・映像を見せたのは、貴方方に邪魔して頂きたくなかつたから。おキヌは、守る為に命を捨てました。彼女なら、やってくれる。だから、彼女の邪魔はしないで頂きたい」

睨むでもなく、声を荒げるでもなく、ましてや、取り乱す事など欠片も無く。無表情に、冷徹に、そう言い放った道士の目には、その押し込められた感情が渦を巻いて荒れ狂っている。しかし、それに疑問を持つ暇も無い。

「死津喪比女の狙いは地脈の力の確保。そして、その力を使って再び暴虐の限りを尽くす事。それは、なんとしても止めなければならぬ。しかし、その本体は地下深く、人の手では手の出せない場所に在る」

「だからって、おキヌちゃんを犠牲になんてさせられる訳無いだろうがっ！」

「——では、如何するのです？ 幸いにも此れまで、死津喪比女の根が他の地脈へと伸びる事は防いでくれました。しかし、それももう限界。あの妖怪は新たな地脈へと根を伸ばす事に成功しています。最早、この装置でも止められない。早晚再び江戸へとその影響を「黙んなさい……！」」

道士の言葉を遮り、美神がその前に立つ。苛ついた様子で、足先が規則的なリズムで地面を叩いていた。

「黙って聞いてりやグダグダと……！ やってやれば良いんでしようがっ！ おキヌちゃんは私の事務所の大切な所員よ。その娘を、ミサイル扱いさせるわけには行かないわねっ!!!」

美神の怒号が、狭い空間に響き渡る。怒り心頭、と言った様子の二人の視線を受け止

めながら、道士は溜め息と共に疲れたように言葉を吐き出した。

「もう一度聞きましよう．．．では、如何するのです？」

「．．．気に入らないけど、こつちには一流の呪術師がいるわ。そいつに呪いをかけさせた細菌．．．そうね、死津喪比女だけに影響のあるカビでも作ってもらつて、即席の細菌兵器でも作らせるわ。ちよつと待つてなさい！ 横島君、携帯っ！」

「ういつす！」

脳裏に勝ち誇つた様子で高笑いでもする褐色の肌の同業者でも思い浮かべたのか、苦々しげに忠夫の差し出した携帯電話をプッシュする。

「．．．あれ？ おかしいわね」

しかし、その電話は何処へも通じる事は無い。地下の為ではない。こういう環境の事も考えて、地球上何処からでも通じる特製の電話を使っている。勿論、厄珍堂のロゴ入りだ。

「あんの馬鹿、不良品？」

「．．．美神さん、やばいかもしれないっす」

がんがんと携帯電話を叩く美神のすぐ傍で、忠夫が緊張した面持ちで呟いた。

次の瞬間、洞穴は、巨大な揺れに包まれる。

「な、何よっす！」

「ちっ！ 死津喪比女め、此処を真つ先に叩くつもりかっ!!」

その頃、地上の氷室神社は、薄っすらとした靄に包まれていた。靈視能力のあるものならば気付いたであろうか。その靄が、死津喪比女と同じ波動を纏っていた事を。そして、その靄が内部と外部を隔てる、結界のような役割を果たしていた事を。

空から眺めれば、氷室神社を中心に、半径1KM程がその靄に覆われ、中心部の神社だけがぽっかりと浮かんだ孤島の用に存在している様子が見て取れただろう。しかし、その地下部分にいる美神達に、その状況を把握する術は無い。

地脈の力で強化でもされているのか、はたまた道士本人が己の靈力で強化していたのか、崩れる事も無かった地下部分から飛び出した美神と忠夫、そして道士が見たのは、周囲を囲む用に存在する靄と、境界線でも引いたかのように、靄と何も無い所の境目で飛び散る、火花のような地脈の力。

そして――

「ははははははっ！ 何時まで隠れているおつもりかえ？ さつさと出てこないと、結界ごと潰してしまうわえ！」

結界を囲むように存在する、幾輪もの死津喪比女達であった。

「死津喪比女、何のつもりだ」

「ふ、無様な残りカス風情が生意気な……勿論、鬱陶しい堰を、根本から取り除くつもりに決まっておるわ」

話し掛けた道士に、軽く視線を送りながらそう答える。

「新たな地脈の力を得た以上、地脈堰もそれほど困る物ではないわえ。但し、邪魔な物である事には違いない。とつと叩いておかないと、再び何をやらかすか分かった物ではないわえ」

余裕の表情で、馬鹿にしたように道士を嘲う死津喪比女達。その視線は、道士の横に立つ忠夫たちにも注がれる。

「おや、丁度良い。わらわを虚仮にした愚か者どももおるではないかえ……」

その顔を歪んだ喜びで満たしながら、舌で唇をぬらり、と舐める。その様子に気味の悪差を感じながら美神が対抗する。

「ふん、結界に邪魔されてこつちに来れないくせに、何が根本から取り除くのかしら?!」

「・・・や、不味いと思いますけどね」

忠夫の、小さな小さな呟き声をしっかりと聞きとめた美神も、何かに気付いたように動きを止める。

「そうじゃのう・・・お前らが飢え死にするまで、このままの状況を保つ、と言うのも捨て難いがな。くつくつくつ、なんとも不便な物よのう、生ある人間とは」

口元に手をあて、馬鹿にするように笑う死津喪比女。それを憎々しげに睨みながら、美神は更に言葉が続ける。

「へえ・・・、それなら、一体どういうつもりなのかしら?」

言葉自体は冷静だが、握り締められた拳と、額に浮かんだ井桁マークがその内側を示している。

「勿論、こうするのさ・・・!」

「何っ! 地脈が・・・!」

軽く地面が揺れる。道士の驚きの声は、美神達にもしつかり届いていた。

「どうしたんだよ、おっさん！」

「地脈堰に通じる地脈が塞ぎ止められようとしている……！ 馬鹿な、貴様にそんな力はっ！」

「無かつたわえ。わらわも、只、眠っていただけでは無いからのう」

更にその顔に浮かんだ喜びの色を深める死津喪比女に、道士の視線が突き刺さる。そうしている間にも装置に流れ込む地脈の力は細くなり、とうとう対抗するべく稼動していた装置も、僅かに零れる光を覗いて、ついには沈黙するしか無かつた。

神社を囲んでいた火花は消え去り、弱まった結界は靄を押えてはいるが、死津喪比女の花の力には及ぶべくも無い。

「さあ……縊り殺して、わらわの栄養にしてやるわっ！」

神社を僅かに鎧う結界を、微かな抵抗と共に乗り越えた死津喪比女達は、ついにその境内へと侵入を果たしてしまった。

辺りを囲む死津喪比女、その数、数十輪。背中合わせの美神と忠夫、そして、その隣の道士を囲むように広がった死津喪比女は、全く同時にその手を振り上げた。

「死ぬ」

只一言、その一言だけで、前後左右の全てから凶悪な力の籠った腕が伸び来る。

それは靈波刀を構える忠夫と、神通棍と破魔札を準備する美神に迫り――

「――させませんっ!!!」

――地面から飛び出してきた、体中に奇妙な模様を浮かべたおキヌによつて吹き飛ばされた。

「おキヌちゃんっ!!!」

「御免なさい、二人とも。遅くなりました」

ペこり、と頭を下げる何時もの雰囲気の彼女に、それまでの緊張は何処へやら。安堵の溜め息をつく二人。

「良かった、無事だっ」「それと、今までありがとうございました」・・・!!」

頭を下げたままで、続けられた言葉。

「ちよ、おキヌちゃん?」

「何を言い出すのよ・・・」

理解したくない。その言葉のもつ意味を、理解なんてしたくは無い。それでも、言葉は、訂正される事は無く。

「とつてもお世話になりました。美神さん、横島さん、家族を無くした私に、もう一度で

きた家族みたいでした。色々あったけど、こんな短い時間のお礼しか出来ないけど、ちよつとおまけしてくださいね？」

す、と上がってきたおキヌの表情は、笑顔。諦めたような、それでも、報われたような。

「人工幽霊さんとか、他にもたくさんの人たちに、もつと一杯お礼を言わなきゃ駄目なんですけど、私がありがとうございました、つて言つてたつて伝えてください」

笑顔を崩さずに、何時もの口調で只、続ける。

「ちよつと待つてくれよつ！ 一体どんなつもりで」

「そうよ！ そんな縁起でもない——」

崩れない笑顔の中から、一滴の涙が零れた。静かに、ただ静かに微笑みつつけるおキヌの顔。ただ、頬を伝う幾筋もの涙だけが、その表情を裏切りつつける。

おキヌが現れたと同時に展開した、神社の内部の結界は、死津喪比女を絡めとり、その動きを止めている。そちらを一瞬だけ視界に収めると、おキヌは体に描かれた模様の光を強め始めた。

「美神さん、あんまり横島さん苛めないで下さいね？ そんなに心配しなくても、大丈夫ですよ、きつと。・・・横島さんなんですから」

「おキヌちゃん！ 待つて!!」

「横島さん、お嫁さんは、無理みたいです。あんまり美神さんに心配かけちゃ駄目ですよ？ それと——」

「おキヌちゃん!!」

おキヌに向かつて伸ばされた忠夫の手をすり抜け、その前にそつと浮かぶ。

「——最後の、贈り物です」

すり抜けた筈のおキヌは、忠夫の口に、自分の口をゆつくりとあてがう。

「ふふふ……私が貰っちゃったみたい。後、最後の我が俣……良いですか？ 偶に、本当に偶にで良いですから、思い出してくれると……嬉しいな」

止まったはずの涙が、再び零れ出す。

「何をいつてんのよ！ まだ、まだきつと他に方法があるわつ！ こんな事で、こんな所で終わらせてたまるもんですか!!」

「——そうですね。でも、今は間に合わない。美神さんなら、きつと、他の方法を見つける事も出来ます。私が駄目だったら、お願いしますね」

「俺は、まだ今のプレゼントのお返しもしてないんだよつ!!」

「もう貰いましたよー。私、とつても、とつても幸せですから」

零れ落ちる雫は、留まる所を知らなかった。言葉は届かず、心は互いを思うが故に。

それでも、涙でぐしやぐしやになった顔に、最後まで崩さぬ笑顔を浮かべたまま。

「幽霊なのにこれ以上幸せになったら、きつと私、弾けちゃいます。ぱちん、つて。だから、もう、良いんですよー」

「おキヌちゃんー!!!」

必死で伸ばした二人の指は、確かにおキヌの腕を掴んだ。

——掴んだ、筈だった。

その感触は、二人の手の間をすり抜ける。

「く、くはははははっ!!」

その手を見つめ、呆然とする二人に聞こえたのは、周りを取り囲んだ死津喪比女達の哄笑だった。

「手前ら……何が可笑しい!!」

「ふふふ……お涙頂戴の劇も良いが、今のわらわにとつて、あの小娘がその魂ごと砕けようと知ったことでないわえ」

「どう言う事だ?」

それまで、苦痛を目に宿しながらおキヌと美神達の会話を見守っていた道士が尋ねる。その体は徐々に薄れ始め、最早消え去るのも近いと思われた。

「一体なにをやったつてのよっ!!」

「居た……! 死津喪比女の本体っ!」

その時まさに、おキヌは死津喪比女の本体である球根に突撃をかます直前であった。体に描かれた模様が更に光を増す。

「……え?」

だが、その光は突如として消え去り、後には何時も通りの巫女服のおキヌが居るばかり。

「ふええっ?」

そして、彼女の体は引つ張られていく。元居た場所へと、先程別れを告げた美神達の

「——え」

最後に、地面から、輝く巨大な拳が突き上げられた。それに巻き込まれ、吹き飛ばす津喪比女達。

「もう一度言うっ！ わらわは姫じゃっ！ 村娘ばかりに良い格好はさせぬっ!!!」

「・・・め、女華姫様っ?!」

「なんじやそりやあああっ?!」

先程のおキヌと同じような模様を体中に纏った、巨大な、見上げるほどの巨体を持った、——女華姫様の登場であつた。

第陸話。

「皆様！ TVの前の視聴者の皆様！ あの光景がご覧になられますでしょうかっ!!」

胴体部分に浪花TVと書かれた一機のヘリコプターが旋回しつづけている。中に乗っているのはクルーとリポーター。どうやら、現在起こっている現象を取材に來たらしい。

「現在地は〇〇県S地区っ！ 一帯が煙のような物で包まれています！ 先程、先発の取材陣が突撃を敢行したようですが、今の所連絡は来ておりません！ 大変危険な可能性もあります！ 付近の住人の皆様は、直ちに離れるか、もし既に囲まれているようならば決して外には出ないで下さい！」

必死で声を囁らすリポーターの眼下には、風が吹こうともヘリのローターが接近しようとも動かない、不思議な煙が漂っていた。おそらく、全国のお茶の間ではこの事態に興味津々程度の意識しか持っていないだろうが、それでもリポーターは声を囁らす。

「もう一度言います！ 絶対に近づかないで下さい！ 大変危険なものである可能性も考えられます！ 付近の住民の皆様は——うおっ?!」

がくん、と、機体が揺れた。慌てて近場の手すりを掴み体を固定する。それでも、機

体の揺れは中々収まろうとはしてくれなかった。

「ばつきやろうつ！ 無茶な事するんじゃねえつ！」

「何があつたつ?！」

コックピットから罵声が響く。安全ベルトのおかげで落下は免れたりポーターが問
い返すが、結果として、その必要は無かつたと言える。

答えが、凄まじい勢いでカメラの前を通り過ぎていったからだ。

「今の——うおおおつ?！」

再び、収まりかけた揺れが再発する。

「今度は何だああつ?！」

「下ですよつ！ 下ああつ!!」

コックピットから響いたのは、罵声でなく、悲鳴。嵐の中で舞い踊る木の葉のように、
二転三転する視界の中で、微かに引つかかったのは——

「煙が、吹き飛ぶ……」

まるで燃え上がるように、火花を散らしながら消えていく煙と——巨人に群がる、奇
怪な、禍々しい影達だった。

時は僅かに遡る。

「ふしゆるるるるる・・・」

「また、また貴様かえっ!!」

突き上げられた拳によって、幾輪かの花をいともあっさり散らされた死津喪比女。その前に雄雄しく立つのは、その昔この地を治めた領主の娘、女華姫。

但し、身長20M。まっちょ。しかも体中に光り輝く模様が沢山張り付いてる。

「この前の夜、あれだけ痛めつけてやったにも係わらずっ！しっこい奴は、嫌いだわえっ！」

「ふ。本体との連結を切られそうになって、慌てて逃げ出した小心者の台詞とは思えぬわ」

心底うっとおしそうに叫んだ死津喪比女に、不敵に笑い返す女華姫。

「それに、じゃ」

「・・・ちっ!」

微動だにしなかったその体を、ゆっくりと動かし構えを取る。右手は握り締め、腰の辺りに。左手は自然な動きで上がり、拳一つ分頭より上がって開かれる。対抗するかのように、死津喪比女達も散開する。

「今度は、本気で行けるわっ!!」

「ほざいたなああっ!!」

ぶつかり合う、巨人と妖怪。その衝撃は、全てを薙ぎ払う豪風のように。

—— 辺りを覆った、靄をも全て薙ぎ払う。

凄まじい勢いで飛び交う、砕かれた木々や小石達。次の瞬間には、再び構えを取った女華姫と、更に数輪砕かれた死津喪比女の姿。

「・・・ふ、ふははははっ!」

だが、響いたのは死津喪比女の哄笑であった。確かに砕かれはした死津喪比女の花達。しかし、それは結局ただの端末。幾輪散らされ様とも、今のよう——

「所詮、この程度かえっ!」

地面が盛り上がり、豪風に吹き散らされた花々よりも、更に多くの花が出現してしまえば元の木阿弥である。

「・・・くう」

そして、刺のある花を散らした豪風も、決して無傷ではられない。右腕には幾筋もの傷が刻まれ、胴体や頬にも、一直線に傷がある。重傷ではない。重傷ではないが――

「長期戦は、不利と言う事か・・・」

刻まれた傷は、魂そのものに刻まれた傷。数を追いつづけければ、何時かは己の形を保つ事さえ危うくなる。

「・・・不味い、かもしれないなあ」

それでも、女華姫は不敵な表情を崩さなかった。

「……すつかり、萱の外ですね、俺ら」

「……あんな怪獣大決戦に入って踏み潰されたくは無いわよ」

最早、ただ呆然と眺めるくらいしかやる事の無い美神と忠夫は、不貞腐れたようにしゃがみこんで、拾った小枝で地面に書いた○×ゲームに興じていた。

「ああつ……！ 危ないっ！ 其処ですよ、姫様…… あつ、後ろ後ろ……！」

なんだか必死の決意も、折角の台詞も全て色々とめちやくちやになつたおキヌも、その傍で声援を送っていた。美神達に背を向けて。

前に回りこまなくても、後姿から耳が真っ赤に染まっているのは見える。……どうやら、結構恥ずかしいらしい。

「……ま、何とかなるでしょ」

「だと良いんですけどねー」

「そうも言つてられなくてな」

「うわわっ?!」

「道士様っ?!」

唐突に、非常に唐突に、先程消えた筈の道士が出現する。美神と忠夫の真ん中、○×ゲームの跡の上に。

「召喚っ?! こんな子供の遊びでっ?!」

「違うっ!!」

思わず突っ込んだ忠夫に叫び返ししながら、居場所をささつと横にずらしてこほんとい息。

「力の源を、地脈に繋がる装置から切り替えただけだ。——妻と同じ物にな」

「あ、結婚されたんですかー、おめでとうございます」

「あ、これはどうもご丁寧に……じゃなくてっ!!」

深々と頭を下げるおキヌに、照れたように、恥ずかしそうに笑顔で頭を下げ返し、お礼を返した所で我に返る。空咳を3度繰り返し、なんとか真面目な顔に戻す。

「今の姫は「おキヌちゃん、あんまり心配かけさせないでよ……」……おい」

「美神さん……」

ようやく自分で此方を振り向いたおキヌを、優しく抱きとめながら美神が囁く。その優しい声に、止まった涙が零れ落ちそうになるのを感じながら、感極まったようにおキヌが呟く。

忠夫も、それを幸せそうに、涙を堪えながら見ている。

道士は、いじけて一人で五目並べを始めた。

「おキヌちゃん、もう、さつきみたいなのは無しだつて」

「……あ、あああああなのっ! 御免なさいっ!」

忠夫に真つ赤になりながら、美神の腕の中で頭を下げるおキヌ。一体何に対する「御免なさい」なのか、それはおキヌの頭に、自分の顎を乗せるようにして半眼で忠夫を睨む美神辺りが一番良く分かっているのかもしれないが。

「……そろそろ良いかな？」

「や」

「なんでだああつ!!」

ぷい、とおキヌの頭に顎を乗せたままの美神が顔を逸らす。何とか入って行けなさげな雰囲気、必死で割り込んだ道士が哀れではある。

「だって、協力しろとか言われそうなもの。しかも無料で」

「だああああつ!!」

どうやら、さっさとおキヌを助ける手段——女華姫様、ご登場——をやらなかった事で少々ご立腹のようではある。

そんな彼女を見て、思いつきり頭を抱えて蹲る道士。

「美神さん……」

その光景を、ちよつと困ったように見ていたおキヌが、その手を、そつと、自分を包む美神の腕に触れさせる。

「……ま、妹分の頼みじゃしようがないわねー」

「美神さんとおキヌちゃんがそう言うなら、俺に異存は無いつすよ」

まだまだ不貞腐れたような表情ながらも、波々おキヌを離して話を聞く体勢をとる美神。それを一緒になって、と言うか黙って見ていた忠夫も、その横に並ぶ。樂しげに笑いながら。おキヌも、何時ものように二人の後ろにふわり、と浮かぶ。

「それじゃ、GS美神除霊事務所が、貴方の依頼を受けてあげるわよ」
覇気に満ちた笑顔で、所長が、そう宣言した。

「あー、つまりだな。今の姫は、そう、エネルギー不足と言う奴なのだ」
ちなみに、そのたまわる道士の後ろでは、声高らかに笑いながら、「エネルギー不足」の姫様が、死津喪比女達相手に大激闘を繰り広げていたりする。

「……あれで？」

「あれでも、だ」

呆れた様に呟いた美神の感想も、当然と言えば当然だろう。しかし、道士は真剣な、いや、切羽詰った表情を崩さない。

「あれは、我が妻は、妻自身の願いで私が括った」

「・・・まさか、貴方」

「そう、この氷室神社そのものに、だ」

その魂を地脈に括られ、何時かは山の神となる事を目的としたおキヌ。

そして、その魂を、神の宿る社に括られた女華姫。

「只の人の魂を、神様にまで昇華させるつもりでいたのっ?!」

それは、どれほど無謀な事であろうか。神域にて育った訳でもなく、ましてや強力な例能を持つていたわけでもない。そんな力があれば、死津喪比女を倒す為に、そして、その際におキヌを犠牲にしなければならなかった程に、追い詰められることも無かったのだから。

「そうだ。私は、妻にどれほどの苦難が在るか知っていて、彼女を括ったのだ」

その事は、滅多に見られないほど、忠夫やおキヌたちが始めて見るほどに蒼褪めた美神の表情が、何よりも雄弁に語っていた。

「其処までしてあれを退治したかったのっ?! 其処までしなけりゃいけない程、死津喪

比女が——」

「——そんな訳が無かるう。言つた筈だ。彼女自身の願いであつた、と」
疲れたように、諦めたように道士が呟く。

「説得した。何度も、何度も諦めるように言つた。最期の瞬間まで、止めろと言つた。だが、だがそれでも……!!」

悲しげな、しかし、誇らしげな道士の視線が、事態を理解し始めたおキヌの瞳に合わせられる。

「私は幸せだつたと言うのだ……。良き夫を持ち、沢山の孫と領民に笑いかけながら、だから幸せだつたと言うのだ。そして、願わくば親友にもこの幸せを知ってもらいたいと言うのだ……!!」

誇らしげに、それでも瞳から涙を零しながら、道士は続ける。

「その為なら、幸せを掴ませる為なら、苦難などいかほどの物かと笑うのだ……。！」
ふ、と。全てを、背負つた全てを降ろしたように、疲れた声が続けられる。

「……真つ白に染まつた頭で、悲しそうに、それでも嬉しそうに笑う彼女の願いを、断る事など出来なかつた。妻の死後、その魂を括り、神社として子孫に繋げて行つた」
視線が、死津喪比女と戦う女華姫に向けられる。

「そこまでの信念を持った妻が、誇らしかつた。そして、それでも止めたかつた……。！」

だから、最後まで悩んでしまった。賭けは、昔の私と、その影の賭けは……どっちが負けたのだろうか」

沈黙と共に聞いていた美神が、ようやくと言った感じで言葉を舌に乗せる。それは、確かに驚愕と困惑に踊らされていながらも、美神令子としての意を崩さない、彼女らしい言葉だった。

「——了解。この依頼、きっちり方を付けてあげるわ。だから、言いなさい。一体、何がエネルギー不足の原因なの？」

「……妻のあの姿は、武神としての姿。他の神通力などを一切持たず、只、己の身で戦うだけの、神としては最低限の機能しか持たない結果なのだ。それでも、アレには足りない物がある」

疲れたような声も、重荷から開放された虚脱感も、全てをひとまず置いて、道士は美神の言葉に答える。

「信仰だ」

「……成る程、神としては、若すぎるって事ね」

「どういうことですか？」

「どうやら二人の間では十分に通じたいが、全く把握も出来ていない忠夫と、その横でこくこくと頷くおキヌに説明する美神。」

「若すぎるって、300年近くも括られてる訳ですよ？　ならなんで」

「たつたの、300年よ。しかも、神として、こんな僻地の神社じゃまともに信仰も得られていないでしょうね。それなのにあれほどの力の放出、魂ごと消滅しても可笑しくないわ」

なんとも極端な言い方であるが、神は、信仰を餌にする。人々から集めた信仰と言うな心の力を触媒に、己の力を高めていく。

そう、恐れられてこそ、畏れられてこそ神なのだ。

確たる背景も無く、只一人の願いと、たつた一つの一族の信仰。得られる力など、それこそ微々たる物である。

そうであるにもかかわらず、未だに響く爆音と閃光。

足りない分は、己自身を代償にするしかない。

「そんな・・・じゃあ、姫様はっ?！」

「・・・本気で、自分を代償にしても潰す気ね」

「だから、それが分かっていたからこそその・・・いや、所詮は只の天秤か。妻の魂と、おキヌの魂との」

沈黙が、辺りを包む。誰もが心に虚しさを感じていた。理不尽さを思い知っていた。だからこそ、諦めてなんてやれる筈が無い。

「美神さん、オカルトGメンと、って言うか、義兄さんと連絡取れませんか？　どうやら、靄も消えたみたいですし」

「義兄さんはとりあえず置いておくとして・・・何ですよ？」

半人狼は、何時の間にか耳を押えるバンダナを外し、その両耳をピンと立てて何かの音を探っていた。驚いたような道士の目線を至極あつさりとは無視しながら、

「お、いたいた。こーいう時って、警察とか消防とかよりも早い人たちって、いるんですよねー」

悪戯好きの、子供のような笑顔を浮かべた。

「西条さん！　良かった、通じたわねっ！」

「令子ちゃんかい?! 今、人骨温泉に向かつて移動中だ! 状況を——」

「詳しく説明してる暇が無いのっ! 良いから、こつちの話を聞いてくれるかしらっ?!」
通信機の向こうからは、どうやらプロペラが回転する音と空気を切り裂く音が聞こえるようである。

だが、今はそれを気にしている場合ではない。

「——分かったっ! それで、何をすればいいんだいっ?!」

「ありがとっ! 良い? 先ずは——」

機関銃のように話される、美神からの頼み事。それを、周りの騒音に掻き消されないように通信機を耳に押し当てた反対の手で、耳あてを押えていた西条の口から訳がわからないといった感じの声が洩れる。

「・・・え?」

「急いでっ! あんまり時間が無いのっ!」

その一言を最後に、音を立てて切られる通信。首を捻りながらも、頼み事を適える為に西条が取った行動と言えば、たった一回の転進であった。

そして、それだけでも、十分であった。

「……これは、力が漲つて来る?！」

「おお、効果あり。偶にすげーな、俺」

「ぬおっ?!」

突然己の体に、力が満ち溢れ出した事を感じ、握り締めた拳を開いたり閉じたりする女華姫の耳元で、聞いた事の無い声が聞こえた。

慌ててそちらを見やれば、何時の間にか肩の上に誰かが立っている。

「お主は……おキヌの」

「同僚つす。おキヌちゃんに求婚中。んで、なんで力が漲つて来たかってーと」

驚く女華姫に、悪戯が成功したような笑みを見せながら、親指を上に向けて立てる忠夫。

そちらを振り仰いだ女華姫の目に入ったのは、

「妙なトンボじゃな」

「違う違う。あれはへりこぶたーって言うらしいっすよ？俺も乗った事無いけど」
どうやら、すっかり忠夫の中では無かった事になっているらしい。

「んで、あの中にはかめらつてーのがあって、それはこの国の皆が見てるTVに繋がってるんす」

「・・・時代は進んでいくと言う事か」

全く訳が分からないなりに、とりあえず分かった事を噛み砕く。つまり――
「成る程。今のわらわの勇姿が」

「この国のみんなの前で、かっこよく映るように説明してもらってるんす。そしたら後はほっといても問題なし!!」

ぎりり、と音さえ立てて握り締められていく拳。先程までは、いかにも頼りなく思えたが、今なら地面ごと砕けそうだ――。

「さーて、悪者退治と」

「洒落込もうぞっ!」

女華姫は、そう叫んで突っかけた。

「ただ、わらわもちよつと恥ずかしい・・・」

「だいじょーぶ。立派立派っ!!」

「女子に対する言葉ではないな」

そんな会話も聞こえたりするが。

「見えますでしようか?! あれが、東京に大地震を起こそうとした妖怪と、それを防ぐ為に降臨した武神との戦いですっ! 皆さん、この映像はCGではありませんっ!

今、人々を守る為に、この地の神様が戦っていますっ!! . . . 此れで良いですか?」

「上出来上出来。ほら、神様の後光が大きくなった」

「皆さんっ! 今、あの武神は守る為に戦っていますっ! どうか、その勝利を祈ってくださいっ!」

「うーん、やっぱりプロだねえ」

上空のヘリの中。正確に言えばヘリではなく、どちらかと言うと輸送機に近いオカル

トGメンの装備の一つである機体の扉の前で。

ニアミスをした報道ヘリ、しかもその後の死津喪比女と女華姫の激突で生まれた衝撃に撃墜されたヘリのクルーを拾い、応急措置も程ほどに特ダネの一言で懐柔し、実は結構なヤバイ位置まで連れて来た西条は目の前の包帯だらけのカメラマンとリポーターに賛辞を送りながら、下の様子を眺めていた。

「全く、こんな強引な手段で信仰と言うか祈りを集めて……後で困らないと良いけどね」
苦笑いしながら、ヘリの奥に引っ込んで何かごそごそしだす西条。

再び扉の傍まで来たその手には、長い袋が存在していた。

「小僧、何のつもりかえ？」

「あ、ちよつと喧嘩を売りに来ましたー」

女華姫の足元と言わず、既に肩の辺りまでその高さを伸ばした死津喪比女の花が間う。それに軽い答えを返す。見る間に死津喪比女の顔が残忍な表情を浮かべ――

「なら、纏めて消滅させてあげるわえっ!!」

「相手は泥臭いゴボウっす！ 頑張つて姫様！」

「ちや、ちゃんと温泉に入つてから来たわー!!!」

そんなにゴボウ呼ばわりが気に入らなかつたのか。そりやそうだ。

そんな訳の分からない怒り心頭の死津喪比女に向かつて、更に続けて忠夫が叫ぶ。

「今っす！ 姫様、靈力砲！ 勿論目からっ!!」

「何いっ!!」

その言葉に伸ばしかけた腕を引つ込め、慌てて防御の体制をとる。

しかし、何時まで経っても目から靈力砲は来ない。恐る恐る目を開けた死津喪比女の瞳に写つたのは。

「ふんっ!!」

「うそつきー!!」

「騙される方がアホなんじゃー!!」

振り下ろされる、女華姫の拳。動きを止めた死津喪比女達の、その集団をしつかり決める。

「それキツクだ姫様っ!!」

「ちっ! そう何度も騙されると思うなっ!」

今度はしつかり広がり、薙ぎ払われた巨木のような足の被害をできるだけ小さく――

「足っ?!」

「わーっはっはっはあ! 今度は嘘じゃないもんねー!」

「こ、このクソガキー!!」

悪態ついても時遅し。しつかり薙ぎ払われた足は、その範囲内の死津喪比女達の根っこを引つ掛け、無理やり持ち上げる。

「それ捕まえてっ！ できるだけいっぺんにっ！！」

「応っ！！」

一声答えた女華姫は、吹っ飛ぶ死津喪比女達の体を、根っこごと大量に引つ掴む。

「そーれっ！ 収穫じゃああっ！！」

「そいやっ！ そいやっ！ そいやっさ！！」

女華姫の肩の上で応援するように扇子を広げて踊る忠夫。その扇子は何処から取り出したのだろうか。

「この、この程度っ！」

「黙って引っこ抜かれてなさいっ！」

なんとか掴まれた腕を振り払おうとやたらめったら攻撃する死津喪比女達の目に、こちらに向かって腕の上を駆けて来る美神の姿が映し出される。

その手に輝くお札に嫌な予感を駆り立てられ、掴まれた花全部で同時に攻撃しようとして。

「其処までですっ！」

上から急降下してきたおキヌが、その手に握った呪縛ロープを巻き付けながらぐるぐ

ると回る。

「こ、小娘ええっ!!」

「不気味な花束ねー」

「病氣の人とかに送つたら絶対嫌がらせですよねー」

ふよふよと浮かぶおキヌに、片手でぶら下がる美神。最後に言い残していった言葉に井桁マークが何個も浮かぶが、伊達に超が幾つもつくほど高品質且つ高級な美神の装備じゃない。しかも、今回はその中でも特級の奴を使っている。何時かは千切れるだろうが、それまでの時間は与えない。

「女華姫様っ! 力を送って固定する感じて一気にやつちやつてっ!」

「心得たっ!」

「頑張つて、姫様ー!」

「そいやっ! そいやっ! そいやっさ!! あ、そーれっ!」

一人だけ、と言うか一匹だけふぎけているように見えるが、本人はいたって真剣である。その証拠に、額には珠のよーな汗が。無駄とは言っちゃいけない、多分勤労の汗である。

とまれかくあれ、根っこを張って必死に堪えていた死津喪比女も、流石に耐え切れなくなったようである。

ぼこん、と音を立てて、収穫される芋のように引きずり出される目玉のついた球根のような本体、大小2株。

「こ、こんな無茶苦茶な奴らにつ?!」

「わらわの領民達と、わらわの親友と、わらわの夫を苦しませた報いじやあああつ!!」
勢い良く、死津喪比女達の花束を投げ捨てた女華姫が、大きい方の球根に向かって拳を振り上げる。

対抗するように、球根の表面の目から、雷光のような妖力波を放つが、女華姫の拳は止まらない。

それを突き抜け掻き散らし、問答無用で、突き刺さる。拳を、腕を、肩を、顔を焼かれながらも——それは、球根を貫通した。

「こ、このおおつ?!」

小さい球根は、僅かに残った根を揺らしながら、その瞳に力を溜める。しかし、それを放つ寸前に、その瞳に、凶悪な弾丸が直撃した。

その弾丸は一瞬にして燃え上がり、球根全体を炎で包む。

「がああああつ?!」

「痛たたた…美味い所を持っていくのも楽じゃないねえ。しかし、さすがドクター・

カオス。拾い物とは言えいい仕事してる」

その一撃を放ったのは、某ブラドール島でマリアが破棄したモノを、こっそり拾っていた美神が、それなり以上の金額で製作者に依頼し改修した巨大なライフル。美神の車のトランクにこっそりと積まれていたその引き金を引いたのは、西条であった。肩を脱臼しながらも、ロングショットを見事に決めた、言葉通りの美味しいところ取りの男であった。

そして、後で銃刀法違反についてこつてりと叱つてやろうと決心しながらも痛みにも肩を押さえる西条の前で、炎に包まれ悶え苦しむ死津喪比女の本体に、女華姫の踵落しが——見事な角度で突き刺さり、その断末魔ごと、地面に深く、叩き付けた。

それが、3000年と言う時間に比べれば余りに短い戦いが、過去への決着の一撃となつた——。

「お久し振りです、姫様……！」

「ようやく、ようやく終わったの」

夕日の沈むぼろぼろの境内で、巫女服の少女が綺麗な和服を着た姫に抱きつき、泣いている。

「全く。そう泣くでない。これでわらわも満足して成仏できると言う物なのに」

「でも、でも……私のせいでも……！」

「馬鹿者」

ぺしつ、と軽い音を立てて女華姫の平手がおキヌの頭に振り下ろされる。それは、どこまでも暖かい掌だった。

「お前の『せい』ではないわ。——お前の『為』なのだから」

「ふ、ふえええん」

「……子供みたいによく泣くの。何時ぞやとは、逆ではないか」

振り下ろした掌を、そのまま頭を撫でる動きに変えながら姫が呟く。その瞳は、何処までも優しく、どこまでも暖かい。

「なあ、おキヌ。わらわは、幸せであった。だから、今度はお前の番」

「ふえ？」

泣きはらした顔を上げたおキヌの目に、氷の塊が突然現れる。

「おキヌちゃんっ?!」

「成る程、氷室神社ね」

その氷の中に、眠るようにしておキヌの体があった。それは、確かに死んでいるように見えながら、同時に生あるものの息吹を感じる、不思議な、不思議な氷の棺。

「左様。あれは、おキヌの肉体を閉じ込めた氷。此れに掛けられた呪を解けば、おキヌは再び蘇る」

「・・・今まで何処におった？ 後で話があるからちよつと来るのじゃ」

「い、今はそれどころでは無かろう？ な？ な？」

「うわ、弱」

「入り婿は色々と大変なのだよっ!!」

呆れた様に呟いた二人の前で、突然現れた道士が姫に襟首掴まれて確保された。

「地脈の力、わらわの力、それに命あふるる若い女性と、正しき肉体の所持者である魂。此れだけあれば、十分にお前は復活できる」

「そ、それは私の台詞・・・」

「何時までもわらわを出てこさせなかつた亭主は黙っておれ。さ、おキヌ・・・」

しかし、女華姫の視線の先で、おキヌは困惑したように浮かんでいる。「どうした？」

「あ、あのっ！ もうちよつとこのままで居られないでしょうか？」

慌てたように告げたおキヌの目には、迷ったような色がある。

「だって、その、突然すぎるし、それに・・・」

「記憶を失う事か？ またこの馬鹿亭主が余計な事を」

「だって本当の事だろうっ!!」

掴んだ襟首を持ち上げ、拳を振り上げる女華姫に、道士が必死で両手を振って抗議する。それを見た女華姫は、溜め息と共に道士を降ろしておキヌに向かい合う。

「——本当に大切な事は、忘れない事」

「・・・っ」

それは、確かに彼女が言った言葉。何故それを知っているのか、そして、何故、そこまで優しい顔ができるのか。

「後ろを見てみなさい」

優しい声に促されて見てみれば、其処には此方を、何時も通りの表情で、事務所で、仕事帰りに、いつも何処かで見ていた笑顔で、こちらを見つめる二人の姿。

「生きて、おキヌちゃん。いつでも、何時までも、待つてるから。幽霊のままに居るより

も、生きてゐる事には意味があるわ。例え今の貴方の記憶が、掌から零れる水のように消えたつて、必ず残る物はあるわ。——だから、また、生きてゐる貴方と、会いましよう?」

「お別れじゃない。お別れなんかじゃない。絶対俺は忘れない、忘れてなんかやらないからね。迷う事なんて無い・・・俺達は、何も無くしたりなんてしないから! また会えば良いだけさ! だろ?」

力強い笑み。その事を、心の底から信じてゐる笑顔。別れる訳じゃない。さよならする訳でもない。いつかまた、必ず出会う。

それだけは、忘れちゃいけないことだから。

「生き返つたらまた求婚するから、待つてくれよ、おキヌちゃんっ!」
「あんたは結局そこかいっ!!」

親指立てて、笑顔のまま。美神の神通棍に吹っ飛ばされる忠夫を見て。

「・・・良い、人達を得たな」

「ええ! 私の、姫様と同じくらい、大切な人達です・・・!」

「・・・生きよ、おキヌ。幸せになれ。それが、わらわの願い」

す、と振り上げられる女華姫の腕。

「・・・絶対に、絶対に忘れませんっ! 例え忘れても、絶対に思い出しますっ! だか

ら、だから——！」

「ああ、さよならじゃない！」

「また会いましょう、おキヌちゃん」

振り下ろされた腕が告げるのは、おキヌの刻む、命の鼓動。

そして、おキヌは、その肉体は——300年ぶりに、再び時を刻み始めた。

「なあ、おキヌ。いつか、沢山子供を作って、この神社を、わらわを尋ねてくる事も、覚えて置いてくれるかや？」

「——勿論ですよ、姫様っ！」

第漆話。

——氷室 キヌ の日記より。

○月×日

今日から、日記をつけ始めることにしました。私は、どうやらきおくそーしつ、とか言うものらしいです。自覚は有りませんが、義父さんや義母さん、早苗お姉ちゃんが言うんだから間違いないでしょう。

あ、義父さんや義母さん、早苗お姉ちゃんは何にも憶えていない私を保護してくれた、とつても優しい人達です。

目が覚めたら氷室神社、あ、私が今住んでいるところです。其処に居ました。そして、知らない人達が4人も——あ、そうそう。義父さん達の他にも、とつても昔の格好をした、弓矢を背負った、お髭の生えたんだか光々しい人も居た筈なんですけど……。義父さん達に聞いても「命の恩人」って、苦笑いしながら答えてくれるだけで何も教えてくれないんですよねー。

誰なんだろ？

それはともかく、何故だかもう忘れてたりするのがとつても嫌だから、こうやって日記をつけています。とりあえず、元氣です。

△月○日

学校、とゆー所に通う事になりました。寺子屋みたいな物らしいです。あれ？ 寺子屋ってなんだっけ・・・うーん。

ま、いいかー。

皆とつても親切で、お友達もたくさん出来ました。せーふくって言うのも結構気に入ってます。・・・あの人に見せたいなあ、って、誰の事だろう？ むー。

疲れたので寝ます。

×月◇日

学校から帰ってきたら、神社の前で義父さんと知らない人たちがなんだか騒いでいました。笑顔で義父さんが鉄パイプみたいなのを取り出したら、慌てて逃げてっちゃいましたけど。

なんでも、ちよつと前に色々あつたらしくて、神社がぼろぼろになつたりしばらく煩かつたりしたそうです。不思議に思つてぴっかぴかの境内を見てたら、義父さんが「命の恩人曰く、せめてものお詫びだそうだ」って。

命の恩人なのに、奇特な人も居たもんですねー。

あと、ぷれぜんとを貰いました。あーいう人たちに絡まれたら、迷わず引き金を引け、だそうです。「ごむ弾だから平気だよ」って言つてたけど、これ、なんだろう？
とりあえず引いてみようと思います。

・・・さ、早苗お姉ちゃんのお部屋まで、一直線に穴が開いちゃいました。お姉ちゃん怒りの声が聞こえ、あゝゝゝ。

◇月〇日

今日は朝から、とつても寒い日でした。そして、不思議な人と会いました。

朝、遅刻しちやつて通学路を走つてたら、目の前の曲がり角をすつごい速さで男の人が走り抜けていきました。

泣きながら「俺は変質者じゃない！ 誤解なんやー!!」って言つてました。

しばらく眺めてたら、車の窓から体を半分乗り出した風紀の先生と体育の先生と担任の先生に追っかけられてすつごい速さで逃げていきました。

・・・どうやって運転してたんだろ？

そしたら、男の人が逃げていった方から、もつと早いすぴーどで戻ってきて「堪忍やー！　ちよつと心配になっただけなんやー!!」って叫びながらまた通り抜けていきました。その後ろから、ものすつごく美人ですたいるのいい女の人が、車の・・・おーぷんかーって言うんですよね？

その運転席でもものすつごく怒りながら「あんたには忍耐とか堪え性とかそういうものは無いのかー!!」って、思いつきり跳ね飛ばしてました。

ええと、嘘じゃありませんよ？

その、跳ね飛ばされた頭に真つ赤な布を巻いた男の人は、死んだように動かなくって、心配してたんですけど、美人の女の人が車から降りて、ロープを取り出した瞬間、何事も無かつたみたいに「奥義、死んだふりっ！」って言って、また走り出したんです。

そしたら女の人も車に飛び乗って・・・車が勝手に動いたみたいに見えたんですけど、気のせいでしょうか？

「ええいっ！　相変わらずでたらめなっ！」とか言って、すつ飛んでいきました。女の人の声とは違ってたみたいだけど・・・空耳？

それを何となく眺めていたら、戻ってきた先生たちに「大丈夫か?! なにかされたんだべなっ?!」って、心配させちゃいました。どうやら私、泣いちゃってみたいんです。でも、別に悲しいとかじゃなくて、懐かしいって言うか。

今日は、そんな不思議な朝でした。

・ ・ ・ 嘘じゃないですよー。

「なんぼなんぼでも車で跳ね飛ばす事は無いでしょっ?!」

「煩いわねっ!　そもそも何であんたはあんな所まで散歩とか言っ出て出かけてんのよっ?!」

夜の東京、広い道の上。

走る車は今だ多く、眠らない街の象徴であるかのように光の航跡が何時までも、何処までも続いている。そんな道の上に、とつても騒がしい一台の車があった。

「ええつと。て、手前も手前だ人工幽霊一号つ！ 事務所ほつといて、しかもお前ブレーキ掛けた様子も無かつたじゃねえかつ!!」

『失礼な。事務所とはしつかり繋がっていますし、勿論ブレーキじゃなくてアクセル吹かしましたよ』

車の内側から、エンジンの音ではない、はつきりとした声が聞こえた。それに驚いた様子も無く、無言で霊波刀を展開する赤いバンドナを巻いた青年。

「壊すつ！ 完膚なきまでに「お給料から差つ引くわよ？」あう〜」

横合いから突つ込まれた、ハンドルを握る亜麻色の長髪を持った女性の声で、渋々輝く霊気の刀を引つ込める。

「・・・大体さー。美神さんだつて直ぐに来たつて事は、どーせ直ぐ其処にいたくせにさー」

「・・・な、何の事かしら？」

ぶつぶつと、美神と呼ばれた亜麻色の髪の女性を横目で見ながら呟く青年。その言葉に、慌ててそっぽを向いた女性は誤魔化すようにアクセルを踏み込む。

「おキヌちゃん教室に、厄珍堂から仕入れた監視カメラ仕掛けようとしたくせにー」

「何で知ってんのよっ?! それにまだやってないっ!!」

「やろうとしたんかいっ?!」

「う、あ、ひっ引っ掛けたわねっ?! 卑怯よっ!」

「んぎゃーっ?!」

真つ赤になった女性が、運転席に座りながら、短いグリップを握り締める。瞬時に其処から光り輝く棒が延び、迷わず振り下ろされたそれは青年の頭頂部を抉って悲鳴を上げさせる。

完全に両手を離して居る筈のハンドルは、それ自体がまるで意思を持っているかのよう勝手に動いている。

車の上のどたばた騒ぎも知らぬげに、エンジンの音も高らかに、彼は住処を目指して速度を上げた。

そう、其処までは、ある意味何時も通りの光景だった。

足りない物を補うかのように、互いが互いに笑顔で待つ。

その瞬間まで。

事務所の車庫に車を停める。ギアをニュートラルに戻し、サイドブレーキを掛け、車庫の壁に光の輪を作り出していたライトを切る。辺りに、ふと、静けさが戻った。

「……そんなに心配しなくても、ちゃんと戻ってくるわよ」
「……俺も、そう思います」

エンジンの暖気が抜けていき、僅かに呼吸するように湯気が立つ。それも次の瞬間には、夜の空気に溶けて消えた。
「待ちましよう。何時までも」

「勿論」

互いに見えない笑顔を、互いに重なる視線が確かめ合う。言葉の余韻は、やはり夜の空気に溶けて消えたが、それでも、笑顔は、見えない笑顔は消えなかった。

『オーナー、お客様です』

その声と共に、車庫の内部に光が満ちた。どうやら事務所の管理に戻った人工幽霊一号が、気を利かせてくれたらしい。

ちよつとだけ不満に思いつつも、声に答えながら車から降りる。

「こんな時間に？ 全く、誰よ」

『それが・・・その』

何時に無く歯切れの悪いその声に、僅かに眉根をひそめる二人。

『もう、そちらに着かれます』

「・・・居たっ!」

「小竜姫？ どうしたのよ、そんなに慌てて」

「嫁に来ないか？」

そちらを見もせず、息を荒げる小竜姫にタオルを差し出しながら裏拳を打ち込む。

めり込む確かな感覚を感じながら、隣で何かが倒れた音は、丁重に無視させていた。いた。

「ああつ?! 横島さん、なんで気絶してるんですかああつ?!」
 「・・・あれ? こいつに用が在ったの?」

ようやく息を落ち着け頭を上げた小竜姫の目に写ったのは、血まみれで倒れる忠夫の姿。

その今だ噴き出す血流を無視して、その頭をがくがくと揺さぶる。それと同じタイミングで噴き出す赤い噴水が、辺りの壁を彩った。

『あんまり汚さないで欲しいんですけどね・・・!』
 「起きてっ! 起きてくださいってばー!」

その光景をかりかりと頭を掻きながら苦笑いで眺める美神。忠夫の頭から吹き出した血が、どう見てもリットルを超えているのは気のせいか。

「起きないと、捕まっちゃいますよー!」
 「誰によ?」

「それはっ・・・不味い、もう?!」

振り向いた小竜姫の視線の先、何も無い空間が歪み出す。徐々にそれは亀裂を生み出し、歪みが直径2Mを超えた瞬間、ガラスの碎けるような音と共に、その中から二つの影を生み出した。

「なっ?!」

「ひい」

『いだああっ?!』

歪んだ空間が、元通りになる直前。美神はその現象に驚き、忠夫は気絶したまま。

小竜姫は気絶した忠夫を、車庫の壁をぶち抜きながら外に投げ捨て、人工幽霊はその痛みに悲鳴をあげる。

「・・・着いた」

「良いのですか? こんな場所にゲートを構築したりして」

「・・・問題無いと思う。どうせ相手にはばれてるだろうし」

歪んだ空間が戻ってみれば、二人の影は、両方とも女性のようである事が見て取れた。鋭い視線を持った片方は真っ黒な翼とベレー帽のような帽子を被り、それより頭一つぶん低いもう片方は2本の角と立派な、というか豪華な和服に似た服を着ている。

「・・・小竜姫?」

「あー、えー、お久し振りで」——嫁に来ないか?——あああああああ」

一体何処から涌いて出たやら。気付いた瞬間には、もう、其処に居た。小竜姫の目にさえ止まらない、非常理な行動である。小竜姫は、もう頭を抱えて言葉にならない。

右手を握られた黒い翼の女性は、驚いたように小竜姫の名前を呟いた女性に視線で問いなながら、握られた手に力を籠める。

「あだだだだっ？　じよ、情熱的なの?!」

「・・・やっちゃえ」

「イエス、ママ」

その光景を見て、ぶすつとした表情の角の生えた女性は、迷わず親指を地面に向ける。その瞬間、黒い翼の女性の左手には、一本の注射器が握られていた。次の瞬間には、その手が震んで持っていた注射器が忠夫の首に迫る。

それを、忠夫は、

「ふぬりゃあぁっ?!」

どう見ても骨格上不可能な、首を途中から横にずらすという行動で、避けた。

驚いたような女性の表情を目に、忠夫は、心からの恐怖を注射器に感じながら、そして頭の直ぐ下で響いたナニカ大切な物が歪んだ音を聞きながら、ゆつくりと白目を剥いて崩れ落ちた。

手を握ったまま。

「す、凄いきど馬鹿、心底馬鹿・・・」

よっぽど獣医と注射がトラウマなのだろうか。呆れた様に眺める美神の前で、小さな

方の女性が、繋がれたままの手とは反対側を握り、それを手錠で固定する。

それを目にして、ようやく小竜姫が再起動した。

「ま、待つてくください！ 本気ですか?！」

「・・・勿論」

小柄な女性は、寂しげに微笑んで指を鳴らす。その背後に、再び歪んだ空間が現れ始めた。

「いえっ！ そうじゃなくてこれ以上・・・ああああつ?！」

「では、現時刻よりミツシヨンを開始します」

「・・・頑張つて」

最早消え行く歪みに、忠夫を引きずりながら溶け込んでいく手錠で繋がれた女性。それを見送る黒い翼の女性と小竜姫。

「ちよつと、待ちなさいっ!!」

慌てて伸ばされた美神の手の向こうで、消え行く女性が口を動かしたのが、悲しげな顔と一緒に微妙に見えた。

伸ばした手が何かを捕まえるよりも先に、歪みは完全に消え去った。その内に、忠夫と女性を取り込みながら。

「また、また不祥事の予感が」

「こちらも報告は受けている。ま、諦めろ。運が良ければ——」

ぼんぼんと、小竜姫の肩を慰めるように叩く黒い翼の女性。それに対し、心底諦めた表情で小竜姫が呟く。

「だって、ここ最近不幸続きなんですもん……」

「……とりあえず、後ろの殺気はどうにかならないか？」

二人の肩は、とんでもない握力で握り締められた。

「う、うとうう……いだったっ?！」

寝返りを打とうとして、首の痛みで飛び起きる。なんだかえらく柔らかい枕と、丁度良い感じに当たる夜風が勿体無くは思ったが、それでも飛び起きてしまったからには

しようがない。

きよろきよろと、辺りを見回す。

和風と言うか、微妙に中華が混じった建物。向こうに見えるでつかい門。妙に記憶の端つこに引つかかる光景であった。

「えーと、妙神山？」

「・・・やつと起きた」

「へ？」

後ろから聞こえた声に振り向いてみれば、其処には角の生えた、年の頃14、5。忠夫にとつては少し年下の、まるで華の咲いたような笑顔でこちらを見る正座をした少女の姿があった。

「——嫁に・・・いや、あとちよつと？」

「・・・えっ?!」

少女は、とてつもない衝撃を受けたような表情になる。忠夫は自分の言葉の何がそんなにショックだったのだろうか？ と疑問に思いながらも、再度その少女を観察する。

「むー、小竜姫さんの妹さん?・・・ん?んんんっ?!」

ぐぐつ、と少女に接近し、その匂いを嗅ぎ回る。落ち込んでいた少女は、それを撥つたそうにしながらも少々嬉しそうである。

「・・・ま、まさか」

「・・・分かった？」

ぶるぶると震える指を、少女に向かつて真っ直ぐ指す。その前で、楽しそうに笑う少女の匂いは、確かに前に嗅いだ匂い。多少変化はしているが、記憶に残るその匂いは――

「天竜っ?!」

「・・・びんぽーん、大正解ー」

どンドンどん、ぽふぽふー、と、何処から取り出した小さな太鼓を叩きながら、玩具の笛を吹くその少女は、竜神界の王女、天竜姫の成長した姿であった。確かに面影は残っている。が、まだまだ蕾の儂さとは言え、それが朧に霞む月のような神秘的な雰囲気となつている美少女であった。

「でも、あんまり変わつてないな」

「・・・せくはら厳禁」

「ゴメンナサイ」

一体何処を見たのやら。ごりごりとした冷たい銃口の感触を額に感じながら、数え切れない何度目かの「口は災いの元」を体験学習する半人狼であった。

「はあ?! さっきのが天竜姫?!」

「そうなんです」

所変わって此方は事務所。応接間のソファ―に腰掛けながら、人口幽霊の淹れた紅茶が湯気を立てている。それに口をつけることも無いまま目の前に座る小竜姫たちを睨みつけていた美神の口から、驚きの声が紡がれた。

「だって、全然違うじゃない」

「・・・竜神界の秘法とか、裏で先代竜神王夫妻の暗躍が在ったとか、色々理由は在りませんが・・・おかげで大変だったんですよ? 竜神王は暴れるし、老師は話を聞いた途端にカメラを持って戦闘形態で妙神山を飛び出すし、家臣団は寝込むし」

ぶつぶつと愚痴を垂れ流す小竜姫は、何処となく真つ黒なオーラを放っている。そして、そのオーラを纏いながらゆらりと立ち上がると、一瞬にして美神の目の前に陣取った。

「それもこれもっ！ みーんな美神さんの所の所員が悪いんですー！ 横島さんとか横島さんとか横島さんとかがー!!」

「お、落ちていて小竜姫っ！ 私に言ったってしようがないでしょっ?!」

「あの人が年下でも大丈夫って言ってくれたならー!」

「それはそれで大問題でしょうがっ?!」

「・・・それもそうですね」

ふ、と虚脱したように、美神に迫っていた小竜姫の瞳から力が抜け落ち、同時にその目が焦点を外す。

「ふ、ふふふ・・・妙神山に帰りたくないよう。えぐえぐ」

「小竜姫、そろそろ任務について説明させてもらっても良いか?」

「えぐえぐ・・・」

「・・・ふう」

部屋の隅っこに移動して、神剣で床にのの字を書き始めた小竜姫を余所に、黒い翼の女性が美神の前に移動する。

「私の名は、ワルキューレ。今回、お前を護衛する事が私の任務だ」

「……どういふ事よ？」

緊迫した空気を余所に、その背景では再び黒いオーラを背負った小竜姫に挟られつつける床に、文句を言いたいが言えない全身鎧がおろおろとしながら偶に痛みで仰け反っていたりする。

「それは——」

「美神さんが、か？」

「……うん。色々あつてしばらく動けなかった。目が覚めたら、お布団の横で父さんが初めて見る怖い顔で悩んでた」

本来ならば小竜姫がお茶を楽しんだり、のんびりと日向ぼっこをする場所である縁側で。並んで腰掛け、夜空の星を眺めながら語り合う。

「……犬飼君も危ないつて、そう言われた」

「俺も？」

忠夫の視線が、俯く天竜姫に向けられる。表情は見えないが、とても、とても苦しんでいる女の子が、其処に居た。

「……とっても大きな力が動いてる。美神さんは、それに巻き込まれる。そのそばに居

る者は、否応無く巻き込まれる。何が、って聞いたけど、難しい顔して答えてくれなかった」

ぐずる声が聞こえ出した。それを発しているのは間違いない、隣に座る天竜姫。拳を膝の上で握り締め、綺麗な服は、見るも無残に皺が寄っている。

「……だから、諦めろって。ひつく、犬飼君は、絶対に美神さんを見捨てて、安全な所に行くようには見えない。危ないって分かっても行くから、ひつく、今のうちに諦めておけって」

泣き声は、段々と大きくなり始める。

「……嫌だよ。私と一緒に危なくない所まで行こうよう。ふええ……。でも、ひつく、えぐつ、犬飼君は、そんな犬飼君は嫌だよ……。ふえ、ふえええん」

泣きじゃくる。思いは矛盾し、それでも納得できはしない。分かっているのだ。隣で、慌てながらわたわたと手を振る青年が、自分がいろんな人に迷惑を掛けても、見て欲しいと願った青年が、そんな行動をとる訳が無いと言う事は。

「……やっと、やっと大きくなれたのに、えぐつ、これで一緒になれると思ったのにつ、お別れなんて、諦めるなんて、できないよう……」

抑え切れない心を、育った体に対して、まだまだ小さな心から溢れる思いを、ただ、言葉と涙で訴える。自分の顔はぐちゃぐちゃだろう。でも、どうせ構わない。こうやって

顔を伏せて、泣いている間は見られる事も無いのだから。

「……ふえ？」

「あー、その、だから、此処に連れてきたんか」

ぎゅつ、と暖かい物に包まれた。縮こまった体の上から、暖かさ、困ったような声
が聞こえた。

「危ないなら、そうじゃ無くなれば良い。俺が強くなれば良いって事だもんなー。シンブルだけど、分かりやすくして良い」

「……ぐすつ」

「御免な。心配掛けて御免な。怖がらせて、御免な。でも、お前の父さんの言う通り、俺にや其処まで聞かされて、自分は安全な所に、つつーのは無理だよな」

「……うん、分かっている」

自分を包んでいる暖かきの正体は、分かっている。表情も、分かる。多分、困っているけど、とつても大好きな笑顔を浮かべている。

「……だから、強くなつて欲しい。危ないけど、死ぬかもしれないけど、私は、『今のままの』貴方が——」

「俺が？」

もういい。ぐしやぐしやだけど、見つとも無いけど、この言葉を言うのなら、あの笑

顔を見ながら、瞳を見ながら、言うって決めた。

大きく深呼吸して――

「ま、あの小ぶりなのに鍛えられたお尻、相変わらず美味しそう・・・」

「あれ？ 横島じゃねーか」

「うわわっ?!お前らっ?」

全部、台無しだった。

「成る程ね。理由はわからないけど、魔族の一部が私を狙ってる、ってこと」

「そうだ。以上の理由から、人界に存在し、尚且つ、お前と親交の深い小竜姫、それから魔族側の応援として私が派遣された。近年、魔族―神族間ではデタントの流れが生まれつつある」

「緊張緩和？ 良く貴方達魔族がそれを受け入れたわね」

ソファーに対面しながら会話するワルキューレと美神。互いに表面上は静かでありながらも、その視線は氷のようである。

足を組替え、やや前傾姿勢をとる美神。

「本来ならば、お前には真実を告げず裏から護衛する予定だった。ところが、作戦開始直前になって竜神族から横槍があつてな。――小竜姫の派遣の代わりに、横島忠夫を妙神山にて修行させよ、と」

「あいつを？ なんでよ」

「分からん。上では色々な動きがあるようだが、な」

隠されている。美神は、そう感じている。真実も話しているようでは在るが、なにせ相手は戦乙女。情報戦くらいはやっているだろう。視線を更に鋭く変えながら、美神は問う。

「……で、なんでそんなに大事そんな事までべらべらと噂してくれるのかしら？」

その、挑発めいた言葉には答えず、背後を親指で指すワルキューレ。

「小竜姫のアドバイスさ。所員が居なくなったら、絶対に怪しむ。護衛対象との信頼関係は護衛する上ではあるに越した事は無い、とな」

「の、割りには全然信頼を得ようとする素振りが見えないのは、気のせいかしら？」

最早殺気を隠そうともせず、美神はワルキューレを睨み付ける。背中に隠された左腕には、ソファアの隙間に隠してあつた破魔札が握られていた。勿論、後で後悔しそうなほどに超高級な物である。

「・・・任務に私情は要らん。それだけだ」

「あら、そう？ 貴方の顔には「気に入らない」って書いてあるわよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

人工幽霊には、二人の間に火花が見えたらしい。

「う、うごごごごごつ」

「な、なんつーがきんちよだ」

「ま、まあ、タイミングが悪かったみたいね」

「……ぶー」

事務所の視殺戦も知らぬげに、妙神山修行場では、男3人が微妙に死にかけていた。それに背を向けながら、ぶんむくれる天竜姫さん。

辺りには、山盛りの空薬莖と銃撃痕、其処此処の柱が焼け落ちかけ、クレーターが静かな和風の庭を彩っている。

「……かく」

「あ、こら死ぬ前に俺と一戦やってから……あう」

「ふ、ふふふ、だらしないわよあんた達……あ、もう駄目」

「・・・馬鹿」

ちよつと赤く染まつた頬を夜風で冷ましながら、天竜姫のお言葉が、夜の妙神山に響き渡る。

夜空は、まだまだ明けはしない。

朝は遠く。

それでも、月は輝いていた——

「のう、まだあの二人は起きて来んのか？」

『ま、もうしばらくは寝てるさ。最後の一欠片まで靈力を使い切るなんて、早々無いからな』

「・・・どうせ、座学は嫌だ、とか我が俣を言ったのじゃろう?」

『正解』

同時刻、人狼の里、長老宅の囲炉裏の前で。

「しかし、あれらがここまで苦勞するとはなあ」

『ふん。力はそこそこだが、相手が多数にもかかわらず1対多数を2箇所で行つてゐるよ
うなものだ。しかも相手が連携取れるとなりや、生きて帰れただけでも御の字だな』

「・・・もう少しだと思ふのじゃがな」

『最後の最後に、ようやく2対多数、だな。・・・見込みはある。そう心配するな』

「すまぬの、マーロウ殿」

『嬢ちゃんの頼みだ。気にする事無い。・・・しかし、不気味な奴らだった』

「と言うと?」

『——虫なんだか、植物なんだかわかりやしねえ。根つこの生えた昆虫、が一番近い
な。なにか探つてやがったみたいだが、何をやっていたのやら』

「・・・ふむ」

ぱちつ、と囲炉裏の中で炎が弾けた——

第捌話。

「で、何でお前から此処にいるんだよ？」

「なんだこの野郎文句あんのか。むしろ何でお前が平気な顔して歩いてるのが聞き
てーぞ？」

「ふう、修行が足りないわねえ」

「んだんだ」

こくこくと頷く何処となく煤けた忠夫の横には、こちらも少々煤けた勘九郎が並んで
歩いている。その後ろには、あつちにふらふら、こつちにふらふら、雪之丞がよたよた
と。黒ずんだ、元何処かの柱を杖に歩く雪之丞は、何故か他二人よりも黒焦げの度合い
が少々大きい。

「・・・こつち」

「おー。あ、その前にご飯が食べたいなー」

「・・・大丈夫。問題無い」

「いや、もーさつきから腹の虫が・・・」

その三人の前を歩くのは、忠夫より頭一つ低いくらいの身長にまで成長した天竜姫。ふんだんに用いられた装飾と、内側から零れるような不思議な輝きを持った布で出来た服。

そこそこの重量はある筈なのに、彼女の歩く音は軽く、装飾同士が擦れ合う音さえ聞こえない。水面に張った蓮の葉の上を歩くような、そんな雰囲気であった。

「・・・3日くらいご飯食べなくても死なない」

「おい、なんだか天竜怒ってないか？」

「知らないわよ・・・とは、流星に言えないわねえ」

忠夫の情けない声にも、振り向く事すらせずに氷河のような声を返す天竜姫。困惑したようにその後姿を眺める忠夫の横で、勘九郎は笑いを噛み殺す事に必死にならなければならなかった。

「ち、畜生、体力馬鹿どもめっ！」

先程よりも、若干距離が離れてそんな声が聞こえたりもする。そんなふらふらの雪ノ丞を無視して、馬鹿と言われた二人は鼻歌交じりに歩く速度を上げたのだった。

天竜姫様ご乱心の後、ぞろぞろと男三人を引き連れての行脚は天竜姫を先頭にどんどんと妙神山の内部へと歩いていく。

目の前を行く小さな背中が「不機嫌です」とばかりに此方の意見を拒絶しているので、自然と会話の相手は余裕のある隣の大柄な男となった。

「ま、雪之丞の修行の仕上げに、ね」

「ほー。つつー事は今まで山ごもりでもしてたとか？」

「あら、正解。ここんところずっと二人で山暮らし。あー見えて中々鋭敏にはなってるし、なにより基礎体力と霊力は厳しくやらせといたから、もうそろそろ次のステップに進む頃合なのよねー」

きつと、その基礎体力と鋭敏な感覚は、隣の兄弟子から身を守る為に必死で頑張ったんだろーな、と思う忠夫である。きつきから目線がちらちらとこっちの腰辺りに注がれてるし。

なんとなく一步横にずれる忠夫であった。

「……つまらないわねえ。雪之丞もそんな時だけはすつごく頑張つて逃げるのよねえ。深夜だろうが明け方だろうが一発で起きちゃうし」

「南無南無」

自分の想像が当たっていた事に少々恐ろしさを覚えつつ、更に一步距離を取る。合わせた掌は後ろを歩く、ぎりぎりです大事な何かを守り通した男への賛辞である。

微妙に違うか。

「何回夜中に俺のテントに潜り込むんじゃねえつつても、油断すると侵入されそうになるからな。……朝起きたら隣にこいつが笑顔で寝てるんだ。悪夢だぜ？」

「頼む、同意を求めんな。そして俺の後ろに回るな。衆道は俺の担当じゃないっつーの」

「アホかつ!! 俺は潔白だつ!!」

「あらあら、それじゃ三人一緒に「嫌じゃあああつ!!」ま、残念」

そこらに杖代わりの木の枝を放り出した雪之丞が、真つ青な顔で忠夫に並ぶ。3人で並んで歩くには狭い通路だが、一番大きな個体との心の距離がとても遠かった。

後ろで楽しげに騒ぐ三人というか、そのうちの一人が構つてくれないもやもやで、更に先頭の不機嫌さと歩く速度が増してはいるがそもそもコンパスに違いがありすぎるのであんまり距離は開いていない。

それでも歩いていけば、何時かは目的地に辿り着く。

「・・・着いた」

「お、さんきゅー」

つんつんと引かれたジージャンの感触にそちらを振り向けば、其処に在るのは何時か美神が修行を受けたのと同じ場所。どうやら気絶した忠夫と、それを引きずってきた天童姫が出たのはかなり修行場の奥まった場所であつたらしい。

騒ぎを聞きつけた、管理人が居ない事で足留めを食らつていた勘九郎、雪之丞と一緒に辿り着いた其処は、どうにも懐かしさを覚える場所であつた。

「うわー、なんか、あんまり前の事でもないのにひっさしぶりに思えるな」

「とんでもない所ね。仮想空間かしら。それにしても無茶苦茶な広さね、此処」

「おお、それっぽいっ！ 今から何やるんだっ?！」

三者三様の感想を浮かべる中で、その荒涼とした大地の中心にある、直径2 M程の魔法陣の更を中心に天童姫が進み出る。

「・・・えつと、そつちの男の人は、一人だけでいいの?」

ちよつと首を傾げ、不思議そうに勘九郎を見る天童姫。その手には書類が握られており、どうやら派遣された小童姫の代わりに一時的に管理人代わりをするようである。

「ええ。あくまでも雪之丞の総仕上げよ」

「あれ？ 勘九郎はやらねーんだ」

「人に修行をつけてもらうのってあんまり好きじゃないのよねー。ほら、私ってどっちゃって言うのと攻めだし。ね、雪之丞？」

空気が、そよ風と言うには少々空っぽさだけが先に立つ風が、それに巻かれて舞い上がる土埃が、全てが、固まった。

「誤解を招くような事を言うなああつ!! それと横島つ！ 手前もドン引きするんじやねえつ!!」

「づ、誤解なのか？ 本当だよなつ?!」

何時の間にやら天竜姫の後ろに隠れて、半分だけ出した顔で恐る恐る覗き見る忠夫に、必死の形相で雪之丞が吼える。

嬉しそうに忠夫の頭を撫でる天竜姫は、最早こちらを見てもないし、元凶は腰と頬に手をあてて、くねくねと不気味に動いているだけである。

「あ、別に受けでも良いわよー」

「だああつ!! とつとと始めてくれええええつ!!」

先程までのうきうきした様子も無く、見るも無残に半泣きの表情で、雪之丞が悲痛な声を上げた。

「・・・では、妙神山管理人代理、天竜の名において、『うるとらすーぱーでんじやらす

あんどはーど』……言い難い……『修行こーす二人前』、てすと、始めます」

横文字の辺りを棒読みで述べる天竜姫。そのいかにも過ぎるネーミングに固まる忠夫と、とりあえず灰になる直前に復活した雪之丞が「きーてねーよっ！」と叫ぶ前に、天竜姫の腕が振り上げられる。

「ゴウウウウ」

「キシヤシヤシヤシヤッ！」

岩石が軋みあうような音と共に、岩で出来た一つ目を持つ巨人、剛練武が現れ、耳障りな笑い声と共に四本の鋼の刃で出来た足を持つ、真つ黒な姿を持った禍刀羅守が現れる。

「マジでっ？」

「……まじで」

ふるふると震える指先で、忠夫がその二匹を指す。たった三文字の答えを、無表情のまままで返してきた天竜姫の方から、指差した二匹に視線を戻す。

「……や、やばっ?!」

「へっ! 面白くなってきやがった——うおっ?!」

腰を落とし、後ろに飛び退ける体勢をとった忠夫と、魔装術を纏い、突撃する為に前傾姿勢になった雪之丞。その僅かな動きが、その後の展開を決定付ける。

先ず、先制したのは禍刀羅守。

二人の間に割り込むようにその右前足を振り下ろす。それは容易く地面を切り裂き、回避した二人の距離も、それぞれ前と後ろに跳んで回避した二人の距離も引き裂いた。前に跳躍した雪之丞に、更に追撃の一手を送る禍刀羅守。まるで馬の後ろ足のように跳ね上がった右後ろ足の刃は、強かに雪之丞の背を叩く。

後ろに跳び退った忠夫に追撃したのは、突然の一撃をかました禍刀羅守の後ろに隠れるようにして迫ってきた剛練武。その拳は既に振り上げられており、忠夫の着地と同時に振り下ろされた。

轟音と、鋼と鋼がぶつかり合つたような音が響く。辺りは一瞬にして剛練武の起こした土煙にまかれ、誰もが、視界を奪われた。

「……………」

「心配?」

その光景を、胸の前に小さな拳を作つて見ている天竜姫の横に、勘九郎が並び立つ。声に反応し、僅かに肩を揺らす。しかし、視線は前を——忠夫に向かつて振り下ろされた剛練武の拳が巻き起こした、その轟音の発生源を見つめて動かない。

同様に、隣に立つ勘九郎の視線も、禍刀羅守の刃を背中に貫つた雪之丞がいるであろう位置から動かない。

「でも、多分大丈夫よ」

「・・・うん」

深く、優しい声だった。何時ものちよつと高音入った背中にぞぞつと来る声ではなく、落ち着いた、大人の男性の声。

返された声も、また、深く。信頼と、精一杯の「頑張れ」が籠った、きつと届かないであろう声だった。

「・・・だつて」

「あいつは」

土煙が、晴れる。僅かに吹いていた風が、一陣だけ強く吹き、隠された物を、紛い物の太陽の下に、さらけ出す。

「犬飼君だから」

「雪之丞ですからね」

「———このやろおおおつ!!」

土煙を払った風に、掻き消された声を上書きするように。二つの声が、荒野に響く。方や土煙とともに跳ね飛ばされた小石や砂で体中に小さな擦り傷、切り傷を作り。

方やおそらく地面に顔面から、無防備な所を固い地面に打ちつけたにもかかわらず、真つ赤な額と鼻の頭に擦り傷だけ。

それでも、その口から放たれた言葉は、同じ物だった。

「・・・がんばれっ！ 犬飼君っ!!」

「気合入れなさいっ！ 雪之丞っ！」

「応っ！」

「言われなくてもっ！」

地面に突き刺さった剛練武の拳を、駆け上がるようにしてその瞳に接近する忠夫。少し離れた場所で、振り向いた禍刀羅守に正対する雪之丞。

戦いが、始まった。

「こっつ、怖えええっ!!」

瞳から滂沱の涙を流しながら、それでも剛練武の腕を駆け上がる。その腕が地面より

引き抜かれるよりも一瞬早く、右手に展開した靈波刀を、爪の形にして剛練武の角に引っ掛ける。

駆けて来た勢いのまま、掴んだ角を支点に一回転。

「こんのおっ!」

そのまま、勢いを殺さずに、掴んだ手を離して空中で一端身を捻る。そのまま靈波刀の形に戻した右手を、弱点の瞳に――。

「・・・へ?」

突き刺さらなかった。剛練武の瞳は柔らかく靈波刀を受け止め、ゴムのようにぼよよんと跳ね返す。以前小竜姫は言っていた。「次からは見た目も重視してみますか」と。つまり、既に強化、改良済みである。

「小竜姫様のあほー!!」

「ゴオオオオツ!!」

かなりの勢いで突き刺そうとしたせいもあってか、結構な距離を跳ね飛ばされ、折角縮めた距離も再び開いてしまった半人狼は、慌てて背を向け戦略的撤退を開始した。

「ちっ! あの馬鹿さつさと・・・このっ!!」

「クケケケツ!!」

一方、雪之丞も苦戦を強いられていた。動きが見た目よりも速く、しかも後ろの二本

を地面に突き刺し、僅かに浮かせた体の前半分から2本の刃が、雨霰と降ってくるのである。

あるいはかわし、あるいは腕の部分の魔装術で反らし、致命傷にならないものは僅かに体をずらして皮一枚切らせるくらいのもりで流す。

どうやら禍刀羅守も強化を施されているようで、完全にフリーになった2本の刃が生み出す速度は、雪之丞の目にはまるでその数倍の数を持つて襲い掛かるようにも見える。

「ぐっ、埒があかねえ．．．ジリ貧かつ!!」

「ケーツケツケツケツ!」

強化されていたとしても、その細かい攻撃を繰り返す性格は変わっていないらしく、厭らしい声を上げながら、ひたすら刃を振り下ろす。

「．．．んなろ。やってやろうじゃねえかつ!!」

だが。

「ま、相手が雪之丞じゃねえ」

勘九郎の口から、微かに零れるようにして、そんな言葉が洩れ聞こえた。

「オラアツ!!」

「グキヤアツ?!」

再び、鋼と鋼がぶつかり合うような甲高い音が聞こえた。先程と違うのは、その音を立てたのが雪之丞の背中ではなく――

「手前の武器と、俺の拳っ！ どっちが先に根負けするか、一つ試してみようかいつ!!」
「グ、グキヤアアッ!!」

禍刀羅守の刃を、ギリギリで掻い潜った雪之丞が繰り出した拳だと言う事。それは、禍刀羅守の刃の、横面を、思いつきりぶつ叩いた。

「ドンドン行くぜえっ!」

連続で鳴り響く打撃音。一撃ごとに刃が震え、撓む。しかし、禍刀羅守はその連撃を止めない。止められない。止めた瞬間に、目の前の男は、禍刀羅守の懐、一番弱いその場所を、確実に抉ってくるだろう。

それは、先程の、一撃を避けたその瞬発力が証明している。
しかも。

「・・・やれやれ、冷や汗かいちゃうわね。これだからバトルジャンキーって奴は」
先程までは、僅かに掠っていたその攻撃も、全て見切られ、カウンターされていた。戦闘の中で、集中力を限界にまで高め、思考の全てを戦いに割り振る。もう、彼の頭の中には目の前の禍刀羅守以外の事は欠片も、無い。

その光景を、雪之丞の全力を見せ付けられた勘九郎は、修行の量を増やす事を己に

誓った。まだまだ、弟弟子に追いつかれる訳には行かないのだから。

「オラオラどーしたっ！ 大分ガタついて来たぞっ!」

「キィイツ!!」

言葉通り、禍刀羅守の刃は、既に亀裂を生み始めていた。それに比例するかのようになり、更に鋭さを増していく雪之丞の一撃。あらゆる角度から打ち込まれる刃を、あらゆる角度から打ち出す拳で迎撃する。

亀裂は広がり、とうとう限界が見えたその瞬間。

「クキヤアアツツ!!」

禍刀羅守は、雪之丞ではなく、目の前の地面に2本の刃を突き刺した。跳ね上がるように、雪之丞の頭部に雪崩れ落ちる、全く傷付いていない2枚の刃。禍刀羅守の、後ろ足。

「それが、どうしたああっ!!」

しかし、雪之丞は、その動きを止めなかった。むしろ、一步踏み込み——折れかけた前足に、全身全霊の力を籠めた拳を打ち込む。禍刀羅守の一撃は、雪之丞の背中を僅かに掠め、地面を抉り。

雪之丞の一撃は、禍刀羅守の前足を、打ち砕いた。

「ゲームセットだ、な。せいっ!」

勢いのまま前方に倒れ、腹を、最大の弱点をさらした禍刀羅守に、雪之丞は肉食獣の笑顔を向けながら、そのどてつばらに最後の一撃を打ち込んだ――。

「・・・ふう」

「ま、50点つて所かしら」

「うっせーな。横島はどうした？」

「ん？ ほら、あれ」

禍刀羅守が光とともに消え去り、辺りには名残のように光を反射する砕けた刃の破片が散らばる。大きく息をついて魔装術を解除した雪之丞に声をかける勘九郎。

少々辛口の点数に、ちよつと納得いかなげな雪之丞が発した問いの答えは、

「おっひょー!!」

「ゴアアツツ！」

今だ、涙を流しながら逃げ回る忠夫であった。

「死ぬっ！ 死んでまうっ！ こつちの攻撃が通らないって反則じゃー!!」

忠夫とて只逃げ回っていた訳ではなかった。あちこちに散らばる手頃な大きさの石を投げつけてみたり、すれ違いざまに足元に切りつけてみたり、もしかして、と角に攻撃してみたり。

しかし、ゼーンぶ、硬い剛練武の装甲に弾かれてしまつていたのである。

「どーせーっちゅーんじやー!!」

その悲鳴も当然と言えば当然だろう。実際、弱点の筈の目はまるでゴムのように衝撃も、靈波刀の斬撃も、打撃さえも吸収してしまふのだから。

「何かないんかー!!」

必死に辺りを見回す忠夫。しかし、此処は街中や森の中ではなく、妙神山の中に作られた異界。最初からあるものといえ、砂と、岩と、一部の建築物を構成する物だけである。

「・・・あ」

縦横無尽に駆け回る忠夫から離れ、うずうずと参加したがる弟弟子を引きずりながら天竜姫の傍に向かった勘九郎が見たものは。

しゃがみ込み、ごそごそと何かを拾う忠夫。当然その隙を剛練武が見逃す訳も無く、その背中に向かつて拳を振り下ろす。

再び巻き起こる粉塵。飛び出す忠夫。その手の中で、太陽の光を反射する――

「ゴ、ゴアツ?!」

「ふ、ふふふ・・・怯んだな? いま、怯んだよなっ?!」

――禍刀羅守の、砕けた刃。

今、靈波刀を箆手状に展開した忠夫の手の中で輝く禍刀羅守の刃は、果たして剛練武に通用するのか？

剛練武は、ちよつと後ずさつてしまった。

にやり、と、いやに汗をだらだらと流しながら忠夫が一步進む。

じり、と剛練武が下がる。両手を突き出し、ぶんぶんと振りながら。

言葉で表せばこうだろう。

——「お前、そりや反則だろっ?!」

だから、忠夫は眼で答えた。

——「そんなの、きいてないもんねー」

「ゴワアアアッ!」

「逃げんなやゴラアアッ!! ゲーっゲツゲツゲ!」

とつても楽しげに、と言うか何かを吹っ切つてしまったように拾つたナイフを握りながら——いやいや、拾つた禍刀羅守の刃の欠片を握りながら、己より倍も高い身長を誇る剛練武を追い掛け回す忠夫は、とつても良い笑顔だった。

「……え、と。合格で良いのかな?」

「いーんじやない？　ドーでも良いけど、早いところ止めたげないとトラウマになるわよ、アレ」

首をかしげた天竜姫の声と、呆れたような勘九郎の声が、風に巻かれて飛んでいった。

「・・・話にならないわね」

「そうか。ならば好きにしろ。此方も此方で勝手に動かさせてもらう」

「・・・え？」

ようやく落ち込むだけ落ち込んで、底を叩いて復活した小竜姫が顔を上げた時、後ろからはそんな会話が聞こえてきた。

「ちよ、ちよつと待っててください！　一体何がどうしたって言うんですか?!」

「ドーもこーも無いわ。そっちの考えだけで動かされるのが、私は気に入らない」

「こっちはそんな個人の我が俣を聞いている場合ではない。事は重大なのだ、何故それがわからんっ!!」

ワルキューレの手が、重厚な作りの机に振り下ろされ、大きな音を立てる。

「だったらその「じゅーだいな」理由つてのを説明しなさいっっていつてんのよっ!!」

対抗するように美神も立ち上がり、同じように机を叩く。二人の視線はぶつかり合い、その瞳と瞳の距離は既に10cmも無い。互いに一步も譲らずに、ガチでぶつかる互いの意地。

「こっちは所員を持ってかれて仕事に差し支えがあるっっていつてんのっ!」

ばん。

「それがどうしたっつ?! たかが一回や二回の仕事くらい、自分ひとりの力で切り抜けて見せろっ!!」

ばん。

「ふぬぬぬぬ〜っ!!」

ぶち。

「いい加減にしてくださいーっ!!」

「うわきゃあっ?!」

とうとう額をごりごりと押し合いながらの睨み合いにまで発展し、最早どちらが先に

抜くか、と言う状況にまで陥っていたその瞬間、ぶち切れた小竜姫の堪忍袋の音と共に、辺りを強烈な竜気の奔流が荒れ狂う。

以外に可愛げのある悲鳴をあげて吹っ飛ぶ二人。

「何すんのよ小竜姫っ！」

「そうだっ！　そもそもこの——」

「其処まで。これ以上無駄な争いを行なうようであれば」

二人の間に仁王立ちになり、左右からの抗議を聞くと見せかけて問答無用で殺気を放つ。そして、おもむろに腰に下げた神劍を抜き。

「この小竜姫が、お相手になりますよ？」

にっこりと、微笑む。二人には、その笑顔で微笑む小竜姫の後ろに、荒れ狂う暴龍を見た……ような気がした。素早く両手を挙げ、降参の意を同時に示す。

「美神さん、悪いようにはしません。神族としての、竜神族としての小竜姫で無く、只の小竜姫の名に誓って、貴方にとって、不利益となる事はいたしません。この保証では、足りませんか？」

「……むー。あなたが其処まで言うのなら」

まだ納得行かない様子でありながら、小竜姫が、神族としてではなく、小竜姫として約束した事にとりあえず矛を収める美神。

「なっ?! 小竜姫、それは神族としてかなり問題のある「ワルキューレ、貴方もです。私は、あくまでも護衛としてこの場に参りました。貴方もそうでしよう? 違いますか?」
「……あ、う、いや、全くその通りだ」

暖かみのある笑顔で微笑む小竜姫に、毒気を抜かれた表情で、ぽかんとした答えを返す。

「ならば、互いに譲り合う事から始めないと。ほらほら、握手握手」

ニコニコと笑いながら、美神とワルキューレの手を引つ張る小竜姫に、二人はなんだか素の表情。気付けば握手どころか握り合った手を上下にぶんぶか振り回されていたりする。

「……全く」

「……しようがない、かな?」

「と、言う訳で」

笑顔のまま、小竜姫が、小さな声で呟いた。

「早速、お仕事ですか」

その一言で、場の雰囲気が一気に変わった。

「……私が行きます。ワルキューレ、援護を」

「了解した。あー、美神」

「……何よ」

静かに、なんでもない様子を保ちながら、神剣を納めた小竜姫が窓に近づいていく。勿論神経は限界まで張り詰めており、いつでも動ける状態を保っている。

美神の名を、そう、初めて美神の名前を呼んだワルキューレは、部屋の真ん中に置いてある、先程まで美神とワルキューレが叩き合っていた机に手をかけ、その手が机にめり込むほどの力を籠める。

「……此方にも少々不手際があつたようだ。謝罪する」

「硬いわねー。もうちよつと楽に生きないと駄目よ?」

「ふん。あいにくと性分だな」

互いに顔を見たりはしない。硬い声同士でありながら、互いに互いの方を見ようともしていないながら、それでも、僅かに、何かが緩んだような気がしている。

それを、苦笑いと共に眺めながら、小竜姫は窓から見えない角度で指を3本立てた。

一本目が折れる。机を握り締めたワルキューレの手に力が籠る。

二本目が折れる。小竜姫が、鞘から僅かに剣を引き抜いた。

三本目が折れた瞬間、振り向きざまにワルキューレが、手に持った人一人分以上の大ききはある机を思いっきり窓に向かって投げつけた——。

「美神令子っ! その命、頂きに來たぶほおつ?!」

どうやら強襲でもするつもりだったらしく、窓ガラスを破りながら高速で飛び込んできた、黒い蝙蝠の翼に、シエードのサングラス、しかも筋肉モリモリの裸の上半身に直接袖の破けたジャケットと言う、いまだき映画でも見ないような格好の魔族は。

「はい、其処まで。動くと首が落ちますよー」

飛び込んだ瞬間に机のカウンターを食らい、怯んだと同時にうなじにとん、と落とされた冷たい鋼の感触を感じて、そろそろと両手を挙げたのだった。

「ま、そちらの方が専門家ですから」

「ああ、任せてくれ。魔族の軍隊式情報収集の極み、こいつの体に叩き込んでやる」
「・・・て、手加減は？」

朗らかに手を振る小竜姫を尻目に、捕獲された魔族を引き連れ、ワルキューレが部屋の扉を潜っていく。勿論魔族の後頭部には銃口が押し当てられており、妙な動きをすれば即、ズドン、と言っている。

意外な呼吸の合い様と、その後のなんとも手早い行動に、美神は呆れた視線で眺めるだけであつた。

「手加減？ 無用だ」

「そ、それは普通我の台詞ではー！ー?!」

「ああ、しかしお前には発言権以外が無い。困ったものだな。早く吐かないと大変だぞ

「？ 色々は無くなるかしれんなア
ま、いーけどね」

第玖話。

「・・・さて、小竜姫？　ちよつと、お聞きしたい事があるんですけど」

「は、はい。なんでしょう？」

ソファーに挟まれていた机が無くなり、何となく手持ち無沙汰に置き場の無い空の湯飲みを弄くっていた小竜姫は、美神の言葉に頭を上げる。

視線が、不安と嫌な予感で埋め尽くされていたりするのは此処最近の波乱万丈のせいであろう。

多分。

「ええと、こちらも護衛と言う立場なので今回、報酬は無しですが？」

「違うっ！　いや報酬無いのっ?!　護衛させてあげてるのよっ?!」

先んじて答えられた言葉が報酬の事であるのは置いといて。

しかしながらその内容に思い切り小竜姫に迫る美神。言っている内容がアレではあるが、それはそれ。

助手が居なくなり、しかも魔族がこつちを狙っているとくれば、しばらくの間、少なくとも今回のゴタゴタが片付くまでは、お仕事による荒稼ぎは無理である。

「さ、させてあげてるって・・・美神さん、それはあんまりではないでしょうか」
「だってっ！　だってだってー!!」

「流石に今回は経費で落とす事も出来ませんし。こう見えても、そーゆう事には煩いんですよ、こっちゃんも」

駄々っ子のように両手をぶんぶん振り回して抗議する美神から、湯飲みの置き場所を探す振りをしながら視線を反らす。

一応ながら神族。どうやらそう言った事にはお堅いようで、あくまでも護衛してやっているという上層部の判断がこの時ほど恨めしいと思つた事は無い小竜姫であった。

「と、ともかく。今回は現金、貴金属、その他諸々の形の残る報酬は認められていません。上が一度決めた事を覆すのには、中々時間が必要ですょ？　勿論、私たちの基準で、ですが」

「一体どれだけ時間がかかるのよ、それっ?!」

ほぼ寿命の無い神族、しかも相手は上層部。この辺りで、美神の頭の中には100年とか1000年とかの単位しか浮かんでいない。

「諦めが肝心ですよ、諦めが・・・」

「わ、私が悪かった。そんなに荒んだ目をしなくてもいいじゃない・・・」

既に空っぽの湯飲みを両手で包み込むように持ち、遠くを見るような、焦点の合つて

いない視線で虚空を見上げる。なんとなく、理不尽な気がした。今の状況も、此処数100年無かったこの胃の痛みも。

一番初めは直属の老師が孫馬鹿になった辺りだが。

「・・・ふ。いつその事、こんな世界なんか・・・」

「落ち着いてー！ お願いだからこんな所で逆鱗なんか触らないで小竜姫っ!!」

湯飲みを落とし、ゆらりと立ち上がった小竜姫は、おもむろに背中に手を伸ばし、己の逆鱗に触ろうとした。慌てて羽交い絞めし、全力で押さえにかかる美神。

こんな所で龍が暴れ出そうものなら、とんでもない事になる。

少なくとも、事務所は再起不能だろう。

「人工幽霊一号っ！ 物理的に消滅したくなかったら手伝いなさいっ!!」

『えええっ?! そんな恐ろしい事を平気で言わないで下さいよっ?!』

「平気じゃないしこっちはその恐ろしい事の真っ最中なのっ!! 良いから早く手伝いなさーい!!」

部屋の隅っこでなんでもない全身鎧の振りをしていた人工幽霊に応援要求。

しかし、人工幽霊は怯えている、と言ったところか。

「ワルキューレー!! お願いつ！ さっきの事は謝るから助けてー!!」

既に涙目で、じりじりと背中の逆鱗に向かって進んでいく小竜姫の左手を、必死で押

さえ込む美神の悲鳴。

小竜姫の目は虚ろで、乾いた笑い声だけがひたすらに、伏せた顔の辺りから響いてい
る。

ところで呼ばれたワルキューレはというと。

「さあ、目的と人数と作戦と見返りと黒幕。及び、お前の知っている事を洗いざらい吐
け。魔族にも温情はある。お前が此方に協力してくれれば、身の安全と暖かい食糧、一
定の温度に保たれた清潔な環境を用意する」

「・・・う、うう」

「しかし、黙秘権というありもしない権利を使用するつもりなら・・・ああ、私の口から
は不憚すぎてちよつと言えないな」

「し、しかし、我は誇り高き——」

事務所の車庫で、何処から持つてきたのか安い机と、電源不明の白熱灯を小道具に、尋
問と言うかなんと言うか、とりあえず情報収集に見えないことも無いのか。

「——ああ、分かる。よく分かるぞ。その立派な翼、ファッションセンス、そしてまるで
神話の英雄のようなその筋肉。よほど苦勞したのだろうな」

「分かるかつ?! そうだ、この筋肉を維持し、育てるのに我がどれほど苦労しているか! それを奴らは、デミアンとベルゼブブは、事もあろうに「筋肉だるま」等と抜かしおる!」

それまでの厳しい雰囲気は何処へやら。優しく語りかけるワルキューレに、名前も聞かれなかつた事に気付かない可哀相な魔族は、とくとくと語り出す。

「そうか。それはきつと嫉妬なのだ。そいつらは貴方のような立派な物は持っていないのだろう」

「はっ! あんな人間のガキみたいナリや、蠅風情にはこの素晴らしさは分からんのだ! 殴る事。此れに勝る力感はない! それをクローンや醜い肉塊ぐらいしか持ち合わせの無い愚か者どもはわかっておらん! どうせ今頃・・・そういえば、あのお方は一体誰なのだろうか・・・」

「あのお方というのは、かなりの存在なんだろうな」

さりげなく、あくまでさりげなく続きを促す。警戒されては駄目だ。

「ああ。いつもデミアン経由でしか指令は下されなかつたが、どうやらかなり上位の存在——はっ?!」

「結構。それでは、選べ。牢獄か、地獄の底で氷付けか」

其処まで、喋るだけ喋ってどうやら漸く自分の状況を思い出したようである。そう、

今、彼は捕虜であり、現在尋問中なのだ。

「ちよ、ちよつと待て！ 我は今確かに情報を話したではないかっ?!」

「ん？ ああ、勝手に話して、私が勝手に聞いていただけだ。その証拠に、私は一回も質問などしていない。記録を聞くか？」

そう言いつつ、帽子の下から、小さな機械を取り出すワルキューレ。何処に隠してる。

「・・・え？」

「それでは、もう会う事も無いだろうが、達者でな」

「・・・マジ？」

ぱたぱたと、無表情のまま手で手を振るワルキューレ。そうこう言っている内にも名前を知らない魔族の背後には、アサルトライフルを構えた魔界軍所属の者達が立っている。

彼は、呆然とした表情のまま、強制送還されていた。

「・・・まあ、どつちにせよ安全、一定の温度、食糧もある。嘘は付いていないさ。ちよつと寒い、臭い飯でも食って更正する事だ」

きびきびとした動きで身を翻し、聞こえる筈も無いそんな言葉を呟きながら、ワルキューレは悲鳴と巨大な竜気渦巻く上階へと、その足を進めていった。

「・・・剛練武、お疲れ様」

「ゴルルルル・・・」

禍刀羅守の折れた刃を持つて追いかけてくる忠夫から、必死に逃げ回っていた剛練武は、しばらく後に漸く天童姫のお許しが出た事で、一つしかない目から涙を流しながら消えていった。

「・・・ふ、ちよろい」

「よ、よく言うわねー」

「勝てば官軍！ こつちも危うくミンチになる所だったんだからええやん」

大いに胸を張りながら、呆れた視線の勘九郎に向かつて威張る忠夫。その横では、くすくすと笑いながら剛練武を帰した天竜姫が寄り添うように立っている。

「・・・納得いかねえなあ。本当に真面目にやってんのか、お前」

「馬鹿ね。過程はどうあれ、結果としては問題なく、合格よ。まあ、相手を間違つた上に分断されてるから、70点で所かしらね」

最初に、二対二から一対一。その上、相性の上では禍刀羅守にはより動きも早く、そこそこの攻撃力、そしてなにより禍刀羅守の斬撃を見切れるだけの目がある忠夫が当たってれば、此処まで苦戦する事も無かつたであろう。

おそらく、カウンターまがいの一閃で、ほぼ勝負は決まっていた筈である。後は装甲と安定した打撃力に勝る雪之丞と協力して剛練武を叩けば、鈍重な動きしか持たないそれを仕留めるのは、そう難しい事ではない。

「やー。流石に即連携できるほど一緒にいねえしな」

「ま、互いに良い機会だったかしらね」

ぼりぼりと頭を掻く忠夫に、苦笑いしながらそう締める勘九郎。雪之丞は言われた内容を理解する為頭を捻っている最中である。

「・・・すー、はー。良し」

忠夫の隣で、気合を入れるかのように深呼吸を繰り返していた天竜姫が、決然とした面持ちを上げる。

その気合の入りっぷりを示すかのように、両の拳は胸の前で握り締められ、かもし出す雰囲気はまるで背後に金色の龍が見えるようである。

「・・・それでは、「アッテンションー!!」」

いつに無く緊張した様子で、天竜姫の上げた声は、背後に突然開いた空間からの声で掻き消された。

「よろしいっ！ 資格有りと認め、諸君らを私の指揮下に置くっ！ 言っておくが、この先は小竜姫の訓練ほど甘くは無い——ぞおおっ?!」

突然現れた、ワルキューレの男性版といった感じのベレー帽を被ったその男の魔族は、いきなり耳元を掠めた銃弾を、悲鳴をあげながら必死で避ける。

「・・・私が言いたかったのに」

「あー、天竜。いきなり撃つちゃ駄目だ。せめて一声かけてやれ、な?」

「・・・うん」

今だ銃口から薄い煙を吐き出すリボルバー、しかもどう見ても成人男性でも扱いかねるそれを、着物の袂に戻しながら不機嫌な声を出す天竜姫様。

何処か方向性のずれた注意をしながら、優しく諭す忠夫。

それを微笑ましげに眺める勘九郎と、銃声と突然の闖入者に魔装術をまとい、展開に付いて行けなくなっている雪之丞。

「そ、そもそも人に向かつて撃つては駄目でしょうっ?！」

銃弾の衝撃波でベレー帽の落ちた魔族は、ハイスピードで動く心臓を押えながら抗議した。当然の如く流されたが。

それでも、今だ荒れ狂う心臓を押え、息を整えながら地面に落ちた帽子を拾う。登場時の張り詰めた、鋼のような雰囲気は何処へやら。

・・・帽子の汚れをちよつと寂しそうに払うその背中には、哀愁が漂っている。

「えー、すいません。ちよつと良いですか?」

「ええ。少し二人きりになりましようか?」

気を取り直して声をかけながら顔を上げれば、目の前にはやたらとごっついい男の姿。何時の間にか両手は、帽子を握ったままで拘束されていた。

目の前の、頬を赤らめた「男」に。

「い、いえ、結構です!」

「ま、シャイなのね。遠慮しないで、手取り足取り腰取り教えてあげるから。こつちも中々——良いわよ？」

「だだだ誰かつ！ 助けてくださいー!!」

必死で振り払おうと手に力を籠めるも、何故か籠めた筈の力が滑り落ちていくように流される。

勘九郎、無駄な高等技術の使い方では、ある。

視線の先には、忠夫に「子供は見ちゃ駄目」と言われて目隠しされながらお姫様抱っここで離れて行く、その密着した体勢に満足げだが子供扱いされた事に不満げな天竜姫と、それと一緒に魔装術を纏ったままで、決して背中を見せないように離れて行く雪之丞の姿。

「ふふふ．．．オイシソウ．．．!」

「いやー!」

「どんまい」

出だしから、いきなり不幸な奴である。

次の朝、とはならず。

「ぜはー！ぜはー！」

「そこまで嫌がる事無いのに」

「嫌がりますっ！ 普通はっ!!」

息を荒げ、髪がぼさぼさになり、何故かズボンが脱げかけたりしながらも、男性の魔族は無事だったようである。何が、とは聞いてはいけない。そーゆうもんだ。

「ごほんっ！ あー、私は、魔界軍情報士官、ジークフリート少尉です。よろしく！」

空咳一つでいろんな物を立て直し、ジークフリートと名乗ったその魔族は、綺麗な敬礼を此方に見せる。

「あら、よろしく」

最も、勘九郎の視線にビビっていたが。

「先ず、此方の状況ですが——そ、そちらの方々は？」

「あ？ 俺らか？」

「ええ。此処から先の話は少々厄介な物ですので、関係者以外は遠慮願います。——よろしいですね？」

視線を鋭くし、勘九郎達にそう伝える。その視線は、先程まで美神の事務所に於いて、その所長と対峙していたある魔族、ワルキューレに良く似た物であった。些細な違いを上げるとすれば、その根底に感じられるのが、炎か、氷かと言うくらいなもの。

絶対零度にも似たワルキューレの冷たい視線と、奥底に燃え上がる炎を秘めたジークフリートの視線。

しかし、それを受けて尚、部外者と言われた二人が怯む事は無い。

「おいおい、面白そうな事なら俺も一口噛ませろよ」

「そうねえ……どうやら、横島君が関っている所を見ると、美神令子とその周辺も関係者かしら？ ああ、答えは要らないわ。私たちは「偶々巻き込まれた、不運な通りすがり」で結構よ」

「……まあ、良いでしょう。此方も戦力が必要だ。勘九郎さんに、雪之丞さんでしたね。香港とGS試験の件は報告を受けています。先程の試験を通過したのなら、それなりの期待は出切るでしょうし」

其処まで言い、言葉を切ったジークフリートは突然大きな声で、言い放つ。

「ああ、しまった！ 迂闊にも只の通りすがりに聞こえるように話してしまった！ ……
天竜姫様、よろしいか？」

空々しい空気の後、大げさな動きでそうのたまう。最後に、天竜姫に問い掛ければ、帰ってきたのは小さな領きが、一つ。

「では、失礼して。現在、美神令子には我が姉、ワルキューレとこの妙神山の管理人、小竜姫が付いています。此方の分析と新しく入った情報によれば、少なくとも相手は後2人」

ジークフリートはズボンのポケットから、小さく折りたたまれた紙を取り出し、それに視線を落としながら読み上げていく。

因みに、新しい情報の出所は、推して知るべし。

「既にあちらの戦力の内1人を捕らえ、無力化に成功しています。残る2人ですが、デミアンとベルゼブ。何れも武闘派、反デタント勢力として悪名高い奴等です。詳しい情報は今だ収集中でありますが……」

「……おそらく、無駄。神族と魔族が一緒になって反デタント勢力潰しに躍起になっている中で、それだけの情報しか掴んでいない。それは、相手が慎重だから」

歯切れ悪く、ジークフリートが言葉を濁す。続けたのは天竜姫。冷たい声と視線で、

忠夫の服の裾を握り締めながら、呟くような小さな声で、言い切った。

「ええ。魔界の情報局も同様の意見です。時間がかかりすぎる、と」

「・・・間に合わない？」

「ほぼ、確実に。向こうも動き出す事でしょうし、うちが情報を集める前に、美神令子が襲われる事は間違い無いでしょう」

ジークフリートと天竜姫。互いの視線は頭2つ分ほど高さに差があるが、共に、相手の話す言葉を元に真剣に検討を重ねている。

「・・・急いだ方が良い」

「師匠殿に話は通してあります。犬飼さん・・・失礼。横島さん、後、そちらの通りすがりの修行を受けられる方も、どうぞ」

ジークフリートが、忠夫を犬飼と呼ぶと同時に、天竜姫から厳しい視線が突き刺さる。慌てて言い直し、ジークフリートは空間に扉を作り出した。

輝く扉に、先程から無言の忠夫と、いたって気楽な様子の子の雪之丞、ぶつぶつと何かを考えている様子の勘九郎が消えていく。

読み上げた紙を、ポケットに戻す事無く一言呟き、灰に変える。それを握り潰し、風任せに辺りに散らばせていたジークフリートは、3人に続いて扉をくぐって行った天竜姫のむくれながらの言葉に、苦笑いを浮かべていた。

『……犬飼君って言つて良いのは、私だけなの』

「やれやれ……恋する女は、可愛げがあり、怖い。姉上も少しは見習えば良いのに」
肩を震わし、笑いを堪えながら、ジークフリートもまた扉を潜つて消えていく。最後に、扉が消え去り、辺りは再び生命の無い、静かな空間へと戻つていった。

「おせえぞつ！ 何だよ此処は？」

「入り口ですよ。その椅子に座つて、氣を楽にして下さい……あー、天竜姫様？」
扉を通つて出てみれば。

其処は十人も入れれば狭く感じるであろう、六角形の小部屋であつた。幾つかの椅子が

並んでおり、小竜姫が飾った物であろうが、花瓶に、小さな花が生けてある。

そんな彼女らしい小さな心遣いに感心しつつ、忠夫と雪之丞に椅子に座るように促して——既に着席し、待っている天竜姫に、気付いた。

「……？」

「首を傾けても駄目です。急激な成長で体にどんな無理が掛かっているか分からないから、天竜姫様は待っているよう、師匠直々のお達しが在った筈ですよ」

「……むー。ケチ」

「ケチで結構。後で問題になるのは御免です」

ぱんぱんと手を叩きながら、天竜姫に椅子から降りるように告げる。ひどく残念そうに文句を言いながらも、素直に天竜姫は立ち上がり、すたすたと忠夫の横に立つ。

「……大丈夫？」

「んー、まあな」

見上げた顔は、何時かよりも近くで見れる顔は、何故か迷っているようにも見える。何に迷っているのか、定かでは無い。

無いが——少し、不安を感じさせる物であり。

「準備はよろしいか？ それでは」

「あ、応。頼む」

「小竜姫よりも強い師匠か……楽しみだぜ」

ジークフリートの声に、その不安を確かめる機会は、失われた。

「……うおっ?!」

「ほー、すげーな」

一瞬視界が揺らぎ、次の瞬間には辺りはすっかり違っていた。殺風景な、椅子と小さな花瓶に生けられた花以外何も無い所から、何処と無く中華風の雰囲気漂う、小さな部屋へ。

漢文で書かれた掛け軸や、壁に描かれた模様。

先程の部屋と同じ大きさながら、其処には通路ではなく、部屋としての空気が在った。

「お? ジークフリート、どした?」

辺りをキョロキョロと見回して見れば、其処には硬直し、小さく震えるジークフリートの姿。

「大丈夫大丈夫大丈夫……天竜姫様もいる直ぐに戻れる問題無い問題無い勘九郎さんが近づいてきていても大丈夫だから黙っていよう沈黙は大事だ私は知らなかったんだ」

「おい、どうした？」

「は、はいっ！ 一切全く問題ありませんっ！」

ぶつぶつと息継ぎさせせずに呟きつづけていたジークフリートは、雪之丞が肩を叩く事で漸く正気に戻ったようだ。

だが、雪之丞を見る視線がとても可哀相な者を見る目だったのは、なぜだろう。

「こ、こちらにどうぞ」

ちよつと蒼褪めたジークフリートの案内で、出口から続く廊下を渡っていく。通路から外を眺めてみれば、広い湖とそれを囲む森林、そして、遠くに靄で霞む山々が見える。ぼーつとそれを眺めながら、何時の間にか、忠夫は立ち止まっていた。

ジークフリートと雪之丞の姿は既に無い。どうやら気付かずに先に行ってしまったようだ。そんな事を頭の隅っこで考えながら、只、風景を眺める。

「……どーせーつちゅーんだ」

言葉が、口から零れた。

「美神さんが危なくて、守りたくて。でも、危ないところに行くとき天竜が泣いて、泣かせたくなんて無くて。やれる事って言えば、強くなる事」

がしがし、と頭を搔く。

「なんだかなあ・・・いつぺんに沢山在りすぎて、訳分からん」

がしがしと頭を搔いていた手が、ゆつくりと止まる。

「柄じゃねえなあ。美神さんは魔族に狙われる、おキヌちゃんは居なくなる、天竜には無理させる、小竜姫さんには迷惑かける。ぐだぐだじゃねえか、俺」

止まった手が、ゆつくりと、降りた。

「可笑しいよなあ。嫁さんが欲しかっただけなのに、とんでもない事になってやがんの。あれか？ 運命の神さんは、俺に嫁を取らせん気か？ いつか一発殴っちゃる。男限定で。んでも美人さんの嫉妬だったら良いかなー」

上げた顔には、まだまだ曇りが多すぎた。

「・・・でも、なあ。どっちも、何だよなあ。守りたいし、泣かせたくない。欲張りなかなあ、俺。・・・はあああ」

重い、溜め息が零れた。自分でも考えが纏まっていけない事くらいは把握している。問題は、その事が全く考えを纏める助けにならない事。そして、事が既に、只の半人狼で

ある自分に、どうしようもない規模に成つて来ている、そんな予感。

「……ん？」

ふと、視界の隅を、何かが掠めた。そちらに視線を上げれば、なんだか、どつかで見た事のあるものとそっくりな物があつた。

更にそれを辿つて、視線を横にずらせば、其処には。

「……猿？」

何故か、何時の間にかキセルを吹かしながら立つている、中華風の服を着た猿が居た。とは言え、眼鏡を額に引つ掛けているし、その瞳には確かに知性の色がある。

猿は、ゆつくりと口から紫煙を吐き出し、満足げに目を細める。

——と、次の瞬間。

「——つつつ!!!」

雷光の速度で、手に持ったキセルが、忠夫の頭に振り下ろされた。目の前に火花が散るのを見ながら、しゃがみ込んだ忠夫は心から驚いていた。

見えなかつたのだ。キセルの動きが、そして、動きの起こり、つまり予備動作さえもが。

「なににしがんだこのクソ猿!!」

「・・・フウー。この戯け」

猿は、視線さえこちらに向けなかった。顔は前に固定したままで、再び啞え直した、中身の灰さえ零れていないキセルを吹かす。

「守る? 泣かせたくない? ふん。軽すぎる言葉じゃの」

「・・・っ!」

「守る為に、居たい場所にはいないのは何故じゃ。泣かせたくないのに、危険な場所に行つたくらいで泣かれるのは何故じゃ」

言葉は、確かに伝わっていた。何時から居たのだろうか、そんな事さえ思わなかったが、確かに、何時の間にか、其処に居た。

「やるべき事を見据えられんようなアホは、とつと尻尾丸めて帰れ。・・・それが嫌なら、しつかりと考えろ」

キセルの灰を落とし、ふらりと猿は歩き出した。

「守るだの、泣かせたくないだの。そんな事は一々言う必要も無いわ。やるだけやって、駄目だと思われたから、『大丈夫だと信じてもらえなかったから』お前は此処に居る。ワシは、もう心配される事なんて無くなったわい」

向こう側から、ジークフリートが駆けて来るのが見えた。

「時間はある。考えろ。どうすれば良いのかを聞くのではなく、どうしたいのかを、決め付けろ。一々迷つて暇なぞ、未熟者に在る物か。と言う所で、「師匠！ 齊天大聖老師っ！ こんな所に」騒がしいぞ、ジークっ!! 全く・・・弟子への最初の教え、終わりじやのう」

振り向いたのは、額に金色の輪を嵌めた、真つ白な髭をたくわえた、老猿であつた。

「い、いだだだだ・・・」

「ああつ?! 美神さんがなんだか酷い事につ！ おのれ卑怯な奴らめ、何処に潜んでゐるっ?!」

「いい加減にしないか。因みに美神令子は、お前から溢れた竜気で吹っ飛んだのだが、まさか気付いていなかったのか？」

「ええつ?! そんな馬鹿なっ!」

「……もう良い、休め、な？」

部屋の端で、ソファーや小さな備品類、書類に埋もれてうめく美神を掘り出すワルキューレ。小竜姫は慌てたように、構えていた剣を鞘に収めるとこほん、と一回咳をする。

「ふ、何時いかなる時も緊張を緩めてはいけないと言う「嘘付けえええっ！」ごめんさない」

漸く上半身を救出された美神が、ソファーを持ち上げてもらいながら引つかかっていた足を抜く。勿論誤魔化そうとする武神には、後でこの事をネタになんか強請ろうとか思っていたりするが。

「……！ く、くつくつくつ、あつはつはつ!! まあ、その辺にしておいてやれ。どうやら、怪我の功名だな。美神、お前の尻の下だ」

「何よ……って。これ、もしかして？」

美神が摘み上げたのは、全長10cm程の、悪趣味にデフォルメされたような蠅人間。「……ベルゼブブ？ さっきので巻き込まれたの？ バツカね」

「う、ううう。重い、痛い、何か痺れた、かた「黙れ」……きゆう」

思わずこめかみに浮かんだ幾つかの井桁を、怒りと共に霊力漲る左手へ。一瞬でぐつたりとなった蠅を、ワルキューレに投げて超越す。

「ほら。ちゃんと預けときなさい」

「了解。・・・硬いのか？」

「お尻のポケットに偶々破魔札の束入れてたのっ!! 失礼な事を言うなあっ!!」
呆れた様に、真っ赤に染まる美神を見る二人。

何となく、笑い出しそうになったワルキューレと小竜姫であった。

第拾話。

「うおーい、横島ー！ 飯だぞー!!」

「おーう」

広く、澄んだ湖のほとり。柔らかい陽射しは空気を丸ごと包み込み、暖かな空間を作り出していた。

湖の縁に突き出すようにして存在する巨岩の上で。忠夫は、今日も今日とて釣り糸を垂れている。

「んぐつ……で、どーよ?」

「むぐ……だくめだな。全く釣れねーよ」

雪之丞の持つてきた食糧、主に鮮度の良い果物、そして付け合せに少々辛めに味付けのされた何かの魚の煮た物。取り合わせや味の組み合わせのことを一切考慮していない、適当に持つてきた事が見て取れる物ばかりである。

要領を得ない雪之丞の問いにも、釣り竿を降ろす事無く目の前の羽根を眺めつづける。釣り糸に結ばれたそれは、魚が餌に食いついた事を知らせる物である。

が、忠夫が此処で糸を垂れ始めてからというもの、実に一月。

今だ、一度も動いた事は無い。

「よく飽きねーな。俺だつたらとつと投げて寝てんぞ？」

「・・・そーだな。そーすりや良かったんだよなー」

ふと、その言葉に初めて気付いた、とでも言わんばかりに。

忠夫は、釣り竿を傍らに置き、ごろりと寝転がった。

「・・・戻らなくてもいいんか？」

「かまわねえよ。どーせあの猿のゲームに付き合わされるだけさ。今はジークがやってるから、俺は休憩」

食べ終わった果物の皮を湖に思いっきり投げ捨て、そのまま寝転がる雪之丞。

「つたく。俺は猿の遊び相手、お前は此処で魚釣り。いい加減、体が鈍りそうだけ」

「そーだな」

「この何処が妙神山で一番危険な修行だつてんだ？ これじゃ何時まで経つてもあのクソ兄弟子を——ちっ」

小さな舌打ちで、雪之丞の言葉は途切れる。しばらく続いた沈黙の中で、忠夫は、何となく、空を見上げる。

「・・・わかったような、わからんような」

「あー？ 何か言ったか？」

「んにゃ」

蒼い空を流れる白い雲。降り注ぐ暖かな光。全部を閉じ込め、それを全て拒否するよ
うに、ゆっくりと瞳は閉じられる。

「——俺の、勝手だよ。ふあああ」

「……くかー」

「……すぴー」

さんさんと降り注ぐ太陽の光の下で。二人分の寝息が響いた。

「ワシの本体は、奥でこの場を保つのでパワーの殆どを使っておる。この体は術で作
り上げた、分身よ」

「師匠、あまり余裕は——」

「煩いの、分かつとるなら邪魔するでないわ。小僧、お前はあそこに見える岩の上でしばらく魚でも釣つとれ。道具はジークに持たせる。お前は、この時間で何かを見つけてみい」

呆れた風に呟いたジークフリートの言葉を一蹴し、老猿はキセルで湖のほとりにある巨岩を指す。

つられてそちらを向いた忠夫が、その意味を問いただす為に老猿に視線を戻せば。

「……あれ?」

「師匠の術はもう解けましたよ。全く、ご老体と言つても相変わらざるの無茶苦茶さだ」

老猿は居なかつた。ジークフリートの苦笑いの籠つた言葉が、彼の足音と共に聞こえてくる。

「心外身の術、と言うんだそうです。とは言え、この場を維持しながらですから、多分、力も早さも、殆ど無い筈です。記憶と、自律した知能と、身に付けた技。そんなものでしょう」

「……げ」

先程の、頭頂部に食らつた一撃を思い出して頭をさする。痛かつたし、はつきり言つて見えなかつた。あれを、技術、の一言で片付けられてどのような反論が出来ると言う

のか。

「見えなかったんだけど……」

「ああ、師匠曰く『瞬きの瞬間と心臓の鼓動と呼吸の把握、それから遠心力と重力』だそうです。意味はさっぱりですが。僕も、一回やられましたからねー。結構痛いでしょう？」

困った表情と、楽しげな表情を足して2で割った顔で、頭を擦りながら同情の視線を向けてくるジークフリート。

当惑の表情で同じように頭を擦る忠夫。

言葉にすればたったの三つであるが、その中身はとんでもないの一言に尽きる。瞬きの瞬間を正確に見切り、拍子を掴んで不意を討ち、打撃の威力を制御されきった自分以外の力で追加。

「……と、とんでもねえ猿だな」

「ええ。ともあれ、師匠の言葉通り、あそこで待っていてください。後ほど食糧と一緒に道具をお持ちします」

そう言い残し、ジークフリートは踵を返して廊下を歩いていく。その先から、雪之丞の声が聞こえた。

「おいつ?! 猿が、変な猿が居たぞ——おいつ?!」

すこーん、と良い音を立てて、雪之丞の後頭部に、ゲームのコントローラーが突き刺さる。それが飛んできた先からは、忠夫も里で遠くに聞いた事の在る、猿の声が聞こえてきた。

「あー、迂闊な事を言うとは、危ないですよ。師匠、結構大人気ないですか——んがっ?!」
今度は、分厚い本がジークフリートの顔面に突き刺さった。落ちたそれを見てみれば、やたらとメカメカしい表紙に、戦闘機のような物が跳んでいる所が書いてある。

「~~~~~っ?!」

「と、とんでもなく凶暴な猿だなおいっ?!」

ビビる忠夫の足元で、ジークフリートと雪之丞がひたすら直撃を喰らった部位を押えて悶えている。

そしてその光景は、次の瞬間に即頭部に突き刺さった、薄く、丸い、中心に穴の開いたDVDのせいで、忠夫の意識と共に吹っ飛んだ。

ある日はジークフリートがご飯を持ってきたり、ある日は雪之丞が持ってきて一緒に昼寝したり。そんなこんなで2ヶ月目。

「ふあああああつ……釣れねーなあ」

欠伸と共に出てきた涙をこすりこすり、忠夫はひたすら羽根を見る。じつと見ているも、羽根は微動だにしやしない。

何時の間にか、羽根から視線が逸れていた。

辺りには、緩やかに風が吹いている。緑と、青と、土の匂いのする風だ。太陽の光で十分に暖められたそれは、この岩の上に常に吹いていた。

「ジークは『この場の時間の流れは、外の世界では一瞬に過ぎないから焦らなくても大丈夫です。特に雪之丞さん』って言ってたけど、とつと戻らんと駄目なんだがなあ」

湖面は相変わらず、僅かに波打っただけであり、忠夫の声に答える者も居ない。時折、銀色の物体が飛び跳ね、新たに波を作り出す。その波が垂らした糸に伝わると、糸もまた

波打つようにその細い体を躍らせる。

「……っ」

握り締めた竿から、小さな音が聞こえた。何処かに飛んでいた意識が、ふと手元に戻る。何時の間にか、竿は強く握り締められている。

他でもない、忠夫の手によって。

「ふうう、駄目駄目。今日はもう止めっ！」

誰に言う訳でもなく、そう言つて竿を投げ出し寝転がる。頭上の方向から、騒がしい声が聞こえてきた。どうやら、また雪之丞が負けたようだ。

聞くとともに無しに聞き流しながら、つらつらと色んな事を考えた。

泣きながら、自分を心配してくれた天竜。おキヌちゃんを笑顔で見送りながら、帰りの車の中でハンドルを無表情に握り締めていた美神。笑顔で、必死で涙を堪えながら、それでも涙を零しながら笑顔で再開の約束を交わしたおキヌ。

どれもこれも。たったの数週間前にあつた事だった。

「つたくよー。心配させるなつて言いたいんだろー？ わかつてるつちゅーねん。簡単にできないから苦労してるんやんけー」

ぶちぶちと呟きながら、体を起こして釣竿を再び握る。針についた餌が全く、一回も換える必要が無いほど魚に興味を持たれていない事にやるせなさを感じつつ、ひゅつ、

とそれを湖に投げ込んだ。

水音は小さく、広がる波紋は大きく。

「心配される事が無くなったって言ったってな。軽いつて言われたってな」

遠くで、また銀色の光が反射した。風は吹き続けている。羽根は、まだ、動かない。

柔らかな風が、木の葉と共に踊った。

「ふっ！俺に出来る事なんてたかが知れとるつちゅーんじや。悪いかつ！あーそーだよ開き直りだよっ！馬鹿やろー！わーっはっはっはあっ!!」

突然立ち上がり、腰に手をあて大声で笑う。釣竿は、そこらに放り投げた。

胸を反らして大笑いしながら、忠夫は大声で叫びつづける。

「無くなった？それこそ心配されてたってことじゃねーか。そんなら俺だつていつか心配されなくなりや良いんだろっ！足りないつてんなら足しやあいい！簡単な事じゃねーか！軽いつ？そりや『今の』あんたからみりやそーだろさっ!!」

ぎん、と。湖の向こうに沈み始めた日を睨む忠夫の眼は、不思議と色々吹っ切れていった。

「そんなら——」

別にその向こうに何かが見える訳でもない。何か答えを見つけた訳でもない。只、開き直っただけだ。決め付けただけだ。

「軽く無くなるまで、言い続けてやるさっ!!」

すつきりとした顔で、地面に落ちた釣竿を爪先で引つ掛けて蹴り上げる。胸の前まで浮かんだそれを、引つ手繰るように掴み取り、肩に担いで夕日に背中を向ける。

「あー、すつきりした! さくて、明日は絶対に釣つてやる。ジークに魚を運ぶ物準備してもらわんとなー」

釣竿だけを肩に担ぎ、寝泊りしている部屋に向かって歩き出す。鼻歌交じりに、猿にジークフリートの不手際をちくつてやろうとか思いつつ。

「あいつも生真面目な癖して、意外な所で抜けてんなー。これじゃ釣つても持つて帰るのが大変じゃねー……か……」

足が、止まった。

そのまま、ダツシユで先程まで釣り糸を垂れていた所に戻る。おもむろに釣り竿を振り上げ、全力で餌のついた針を投げる。

「……おいおい」

ゆっくりと、錘と針に引かれて糸の角度が垂直になつて行く。水面に触れた糸は、その弛みを無くしながら、そよぐ風に靡いて動きつづけている。

そう、糸は、動いている。糸だけが。

「……あ・ん・のっ! クソ猿!!!」

忠夫の絶叫が、穏やかな水面を揺らした。その眼前では、真っ白な羽根が、揺れ動く糸の上でありながら微動だにしていな。

ただ糸に結んであるだけの羽根が、糸の動きに影響されてくると踊るように動くのが普通である筈の羽が。

それは、月のように、同じ面だけを見せていた。

其処までを確認した忠夫は、釣竿を投げ捨て、走り出した。目指すは老猿のゲーム部屋。此処でも一番広い、その部屋だ。

「騙しやがったなー!!」

「んだーっ！ この猿、ハメ技は汚ねえぞっ!!」

「キーツキツキツ!!」

まつしぐらに駆け行く忠夫の目的地から、雪之丞の叫びが聞こえた。どうやら格闘物でもやっているらしいが、後から響いた猿っぽい笑い声がとんでもなく癪に障る。

どたどたと音を立てながら、目の前の扉を蹴り開ける。

「くおらっ!! 猿、あの羽根動かねえじゃねえか!!」

「キツ?・・・キーツキツキキキ!!」

扉の向こうから現れた忠夫の声の内容に、ゲームのコントローラーを投げ出して腹を抱えて笑う猿神。その光景を見た忠夫の額に、更に井桁が浮かんだのもやんぬるかな。

「ああっ! 二人とも、そんなに興奮して精神を乱してはいけません!」

慌てたようなジークフリートの声が聞こえたが、忠夫と雪之丞は怒り心頭といった様子で笑い転げる猿神に詰め寄る。

「うっせえっ! 一発殴らんと気がすまんっ!」

「そーだそーだっ! この猿——うおおっ?!」

二人の姿が、壊れたTVに移された映像のように歪んだ。

「キツキツ……ふん、よーやく気付いたか。そんな事にもこれほど時間をかけると言う事自体が、己の未熟さよなア？」

「師匠?! もう、良いのですか?!」

笑い転げていた猿神が、笑いすぎで目の端に浮かんだ涙を拭いながら立ち上がる。何時の間にか、しやがみ込んだ二人の目の前には泰然と立つ猿神の足があった。

「て、手前っ! 喋れるんなら最初からそー言っつけ、この猿っ!!」

「ジ、ジーク、聞いてないぞ、一体何だよこれ……!」

体全体を襲う不快感を必死で堪えながら、搾り出すように言葉を発する二人。その二人を楽しそうに見つめながら、猿神はおもむろに右手を伸ばした。

「ふんっ!!」

気合の声と共に、伸ばした手の平から、一本の棒が飛び出した。それを振り上げ、猿神は忠夫に話し掛ける。

「どうなったかは、お前が見せてみる事じゃの」

そのまま、一息で振り下ろした。

棒が、空間を切り裂く。まるで紙に書かれた絵を切り開くように、其処から全てが解けていった。

「……あっ!!」

気が付くと、其処はあの場所に行った際に座った椅子の上であった。目の前には、手を振る天竜姫が居る。

「あれ？ 天竜？ えーと、あれ？」

「・・・お帰りなさい、犬飼君。ちよつと、遅かった」

ぺたぺたと心配するように体を触っていた天竜は、漸く安堵の息を放つと少し離れて笑顔を見せた。

「・・・大体、一分。直ぐ戻ってくると思つてたのに」

「——そう言うでない。ワシとて計算外じゃ」

「うおっ?!」

慌てて椅子から飛び降り、振り向く。先程と変わらない格好で、棒を抱えるようにしてキセルを吹かす猿神がいた。

猿神はにやり、と笑つて空咳一つ。

「うおっほん！ それでは、これより妙神山最難関の修行、本番を始めるぞ」

「え？ まだ始まつてなかつたのかよ?!」

「当たり前じゃ。先程までの言わば準備。あの場はワシが作つた、お主等の魂に過負荷を掛ける為の場じゃよ。その為、と言うかの、その手段として、擬似的な超加速を魂に強いておつた」

忠夫の言葉に、呆れた視線と答えを返す。口元からは、くわえたキセルからの紫煙が昇っている。

「……ふう。その過負荷から開放された今、お主等の魂は一時的にその出力を増している。このスキに己の潜在能力を引き出せ。出来ない時は、死ぬ時じや」

言葉の途中で背中を見せて歩き出す。出口は、忠夫の記憶が確かならば禍刀羅守たちと戦った場所に続いている筈だ。

ゆつくりと息を吐き、勢いをつけて立ち上がる。

「……あー、なんか休んだのに休んでねーよなあ」

「ごきごき」と言いそうな感触を覚え、肩を回すが所詮はたった一分ほどしか立っていない生身の体。期待したような骨のなる音は聞こえては来ない。

それでも体を伸ばし、馴染ませるようにあちこちを動かしていく。

「……大丈夫？」

おずおずと天竜姫が話し掛けてきた。少し俯いてはいるが、瞳は此方の瞳をしつかりと捕らえている。

その、たった一言の言葉に苦笑いが浮かぶのを感じるが、今の忠夫は、それだけだ。

心配そうな天竜姫の頭に、軽く手を乗せて、落ち着かせるように何度か動かす。もう頭一つしか変わらないその位置を、色んな気持ちを籠めながら、ゆつくりと動かしつつ

る。

「あー、もう大丈夫。．．とは、言い切れんなあ。でも、大丈夫って言う」

「．．．？」

「ん、そー言うこつた」

勝手に歯切れの悪い言葉を残し、勝手に自分だけで納得し、微妙な感覚を残しながら離れていく手。

言葉の内容は良く分からないが、それでも、ちよつと違う、と天竜姫は思った。
きつと、大丈夫だと、彼女は感じたのだ。

「．．．頑張って！」

「応っ!!」

だから、駆け出していくその背中には応援だけで、良い。

「て・め・ええええつつ!! 一体何してやがったー!!」

「あら、やーねー。椅子に座った途端動かなくなっちゃったから、心配して人工呼吸と心肺蘇生と診察でも?」

「何処までだつ?! 何処までやったああつ!!」

「……ふふふ」

目の前でにやりと笑う勘九郎に、雪之丞の背中に芋虫が這つたような感触が走る。隣で大変哀れそうにこつちを見ているジークフリートの目が、嫌な予感を倍増させる。

「……どつちを選ぶかでちよつと手間掛け過ぎたわね。上を剥いてこれから人工呼吸を「わかつたつ! 分かつたからもう黙れえええつ!!」……やっぱりそつちの魔族の口に」とけば良かったわねー」

「勘弁してくださいよもうつ! 折角可愛い弟弟子が居るじゃないですかつ!!」

流し目を送ってくる勘九郎に、必死で手を振りながら拒否の意を示す。

「て、てめつ! 同じ釜の飯を食った仲だろうがつ!」

「それとこれとは別問題ですつ!」

「まあ……それならたつぷりとお礼を……じゅるり」

二人は、一目散に逃げ出した。

「遅いぞー」

「やかましいっ！ 手前にいきなり勘九郎のどアップが目の前にあつた男の気持ちがかかるかっ?!」

扉を潜ると、雪之丞的には2ヶ月ほど前に修行を受けるためのテストとして戦つた場所だつた。のんびりと声をかけてくる忠夫の胸倉を引つ掴み、半分泣きそうになりながら言葉を叩きつける。

「何でお前がガキとは言え女の出迎えて、こつちがアレなんだあつ!!」

「ハイ♪」

「・・・むー」

雪之丞とジークフリートに続いて扉を潜つて来た天竜姫と勘九郎を指差し、吼える雪之丞。よっぽど怖かつたのだろう。

それに答えて楽しげに手を振る勘九郎と、その横で子ども扱いされてむくれている天竜姫。体は成長したとは言え、そういつた行動はまだまだ子供のようでもあり。

「・・・後で天界特製の呪縛術、教えてあげる。でも忠夫に使つちや駄目」

「あら、良いの？ ラッキーね」

「やめて下さい。お願いします」

やつてゐる事はとてもえげつない。こちらに向かつて90度の角度で頭を下げる雪之丞と、隣で何故か同様に頭を下げるジークフリート。それに満足しながら、忠夫に向かつて視線を向ける。

「・・・ん」

「おー」

一つ頷きを見せると、答えるように笑顔で手を振ってくれた。その顔に、何処となく安堵を覚えた。あの人なら、きつと何とかしてくれる。そんな思いと共に。

不安は、もう、欠片も無い。

「始めるぞ。内容はいたつて簡単。ワシとの戦いの中で、己の魂を研ぎ澄ませ。出来なかつたら、死ぬだけじゃ」

「おいおい、いーのか爺さん。そんな小さな体じゃ、一撃でふつ飛ばしちゃうぜ?」

漸く、と言つた感じで忠夫の横まで歩いてきた雪之丞が、苛立ち混じりの言葉を放つ。

「ふむ。そうじゃの、なら——」

「んげ」

二人の前で、猿神は見る間に巨大化していく。二人の腰ほどの高さしかなかつたその体は、身を包む衣を獣毛に変えつつ、何処までも大きくなっていく。

唾然とする間に、その体は2階建ての家くらいにはなっていた。

「——これなら、満足か？」

「ゆ、雪之丞、責任取れよっ?!」

「ほー、良いね良いねっ! 面白くなってきたじゃねえか!!」

壮絶な笑みを浮かべる雪之丞と、不遜な笑みを浮かべる戦闘形態の猿神。忠夫は腰が引けている。

「先手必勝ッ! おらあっ!!」

「死なないように頑張れー」

一声叫んで瞬間で魔装術を纏い、突っかける雪之丞。猿神は何処からとも無く「金剛如意」と書かれた棒を出現させ、構えた。

飛び出していった雪之丞を見送りながら、忠夫は霊波刀を展開し、辺りに散らばる石を拾う。

先ず、雪之丞の全力の拳が繰り出された。

「ふん」

「まだまだっ! もう一丁っ!」

腕を持ち上げその一撃を防いだ猿神に、跳ね返された反動のまま宙を舞いながら霊波砲を当たるを幸い巨体にぶち込む。

幾重にも爆炎が広がり、巨体を覆い隠すように煙が踊る。

次の瞬間、煙の上部を突き破って、猿神の巨体が飛び出した。あつという間に手も届かない上空に、持っていた棒を伸ばして消える猿神。

その体の上に連れて行つた棒が、消えるような速さで縮んで見えなくなり、更に次の瞬間には二人の上に影が落ちる。

「ハアツ!!」

「どわああつ!!」

慌てて飛び退いた二人の間に、落下と言うよりは突撃といった方が正しい勢いで猿神が落ちてくる。その勢いのままに棒を振り下ろし、打たれた地面は抉れて砕け散る。

「と、とんでもねえぞこの爺っ!」

「無茶苦茶やああつ!! 勝てるかこんなもん!!」

「馬鹿たれっ! 俺らなら何とかなるだろがっ!!」

もうもうと吹き上がる土煙を前に、罵声を投げつけあう二人。

「こう言う時はあれだ! 自分の力を信じろつてママも言つてた!」

「自分の力なんて信じられるか! 相手の力量を良く見ろや! 勘違いで勝てりや苦労はあるかいっ! 戦いなんて常に力学だろーがよっ!! 目の前の現実を直視せんかー!!」

「——無駄口を叩く暇があるようじゃな？」

今だ土煙の晴れぬ向こう側から、猿神の棒が雷光の速度で繰り出された。それは簡単に空気の壁を突き破り、今だ回避行動中の雪之丞を叩き伏せる。

「があっ?！」

「あのでかきでこれかよ……!」

そのまま吹っ飛び、岩に叩きつけられる直前で忠夫が割って入った。しかし、勢いを殺しきれずに諸とも岩に叩きつけられる。

「どうした? その程度か?」

「……っつぎけんなああっ!! 俺は、誓ったんだっ! 強くなるってなあっ!! 俺を、赤ん坊の俺を置いて歳も取れずに死んじまったママになああっ!!」

ふらふらと立ち上がり、構えを取る雪之丞。

「つたくよー。いつもいつもこんなばっかりやなあっ!」

雪之丞を受け止める為に消していた霊波刀を展開し、並んで構える忠夫。
「でもなっ! 嫁を貰わずに一人身で死ねるかあああっ!!」

「戯け」

眼前の巨体が、消える。

「誓いも、思いも、叶えられぬなら只の言葉に過ぎん」

棒が、真横から突き出された。どてつばらに直撃するコースのそれに、ギリギリで靈波刀を合わせて防御する。

「なっ?!」

「故に、貴様らの言葉には重さが足らん」

靈波刀の防御も、必死の回避も役には立たなかった。一撃で吹き散らされ、直撃は避けたもののまるで半身を根こそぎ持っていかれるような衝撃が襲う。

「ぐあっ!!」

「どうじゃ? 否定できんだらう」

そのまま隣の雪之丞ごと、吹っ飛ばされた。魔装術を纏う雪之丞は既に流血し、しかも2発目である。受身も取れずに落下し、強かに地面に体を打ちつけた。

忠夫は魔装術を纏っている訳でもなく、例えば人狼の身体能力があっても、紙の盾ほどの役にしか立たなかった。

一撃、その一撃で、あっさりと襤褸屑のように転がる。

悠然と立つ猿神は、それを只見下ろすだけ。

「……げっ、(っ)ほっ!」

「まだ、立つか」

「へっ、当たったり前だろうがよ……」

それでも、このまま寝ているわけには行かない。血を流す体に無理やり力を流し込み、笑う膝を拳で起こして立ち上がる。

歪む視界を頭を振ってハッキリさせ、立ち上がった二人は猿神を睨みつけて、傲慢な笑いを見せつけた。

「こんな所で寝てちゃ、美神さんに殺されるわい」

「ママに笑われる前に、泣かれちまうぜ」

「……ふん」

綻びそうになる顔を隠しながら、猿神は再び棒を構えた。

「来い」

「おおおおおっ!!!」

振り上げた手には、何があつたのだろうか。霊波刀か、それとも霊力を籠めた只の拳か。

忠夫は、千切れ飛びそうになる意識を引きとめながら、それでも只、全力でその手を繰り出す。

隣に、同じく血だらけの雪之丞が見えた。その先に、涙を堪えながら、小さな拳を握り必死で声を囁らす天童姫が見えた。隣で、何時の間にか魔装術を纏って、それでも動

かすひたすら拳を握り締める勘九郎が見えた。

ふと、頭に、おキヌの涙混じりの笑顔が浮かんだ。美神の、見た事無いくらい心配そうな顔が浮かんだ。シロの、タマモの、無邪気な、何処か捻くれた、そんな笑顔が浮かんだ。小鳩の、柔らかな笑顔が浮かんだ。今まで会った色んな人の、色んな顔が浮かんで消えた。

「は、はははははっ!!」

何となく笑い出したくなって、その思いは素直に喉から迸る。

「守るっ! 泣かせたくない! 心配させたくない! 軽い? それがどうしたっ! 猿神だかなんだか知らないがっ!!」

握った拳に、更に力が籠り出す。弾けそうな快感を覚えながら、笑いながら忠夫は吼える。

「——文句があつても、聞いてやらんっ!! 俺は、このままで、いつか軽くなるまで!!」

もう視界は殆ど閉ざされていた。微かに見える、金色の輪の切れ目に叩きつけるように、握った拳を突き出した。

「重ねて重ねて、重くなるまで言いつづけてやらあっ!!」

「・・・犬飼君！」

「あ、ちよ、・・・ああもうっ！ 雪之丞、生きてるっ?!」

結果としては、猿神は悠然と立っており。ぼろぼろの雪之丞と忠夫は、反撃を食らって吹き飛ばされた、只それだけである。

駆け出す天竜姫の後を追い、自分が何時の間にか魔装術を使っていた事に驚きながらもその後を追いかける勘九郎。

ジークフリートは、一息ついた後、元通りの大きさに戻った猿神に向かって歩き出した。

「・・・どうでしたか？」

「ま、大丈夫じゃろ」

キセルを取り出し、吹かし始める猿神。「どっこいしょ」と年寄り臭い声を漏らしながら、地面に胡座を掻いて座り込む。

「……くつくつく、ようも言いよるわ」

「お人の悪い」

困ったように笑うジークフリートの視線の先には、戸惑ったような雪之丞が写っている。その姿は、先程猿神に突っ込んだ時とは明らかに異なっていた。

それまでの、あちらこちらのでこぼことした歪な印象が無くなり、全体的にシャープな、戦闘機にも通じる魔装術を纏っている。

「ふう。ようやく、此処まで来たわね」

「お？ あ、勘九郎か、っておい。これどーなってるんだ？」

自分の体のあちこちを触りながら雪之丞が戸惑ったように問い掛ける。それに軽く笑いを誘われながら、その疑問に答えてやる。

「ほら、この鏡を見てみなさい」

懐を漁っていた勘九郎が、小さな手鏡を取り出して突きつける。それに写っていたのは、目の部分を残して布のような物で覆われた、雪之丞の顔。

「やるわね、あの神様。私の今までの修行が勿体無く思えてきたわ。——顔を隠す面を

被るのが魔装術の次の段階。己の心に潜む鬼を制御し、潜在能力を引き出してコントロールする。真の『魔装』とは、人にして、人に非ず、鬼にして鬼に非ず、よ。あー、やだやだ、私も追いつかれないように頑張らなきゃねー」
嬉しげに微笑む巨漢に、驚いたような顔をしてしまう雪之丞であった。

「・・・犬飼君、犬飼君?!」

その隣で、今だ目覚める様子の無い忠夫を必死で揺さぶる天竜姫。その顔には動揺が大きく現れている。

「師匠、大変ですよ！　もし横島さんが死んでたら・・・!」

「・・・おおおおお起きんか小僧っ!」

ジークフリートの言葉に、やたらと凄まじい形相になった猿神が、一瞬で忠夫の上に乗馬乗りになって往復びんたをひたすら繰り返す。

忠夫がもしお亡くなりになれば、猿神はとても寂しい事になる。そんな理由で、今までに無く必死に揺さぶる猿神だった。

「・・・邪魔」

「おうっ!!」

天竜姫が取り出したショットガンは、正確に猿神の後頭部に直撃。たまらず吹っ飛ば

猿神。但し傷一つ付いていない辺りは流石と言った所か。

「・・・あ、息してる」

「さ、先に言ってくれい、天竜や」

「師匠、さすが武神の最高峰だけありますねー」

取り戻した忠夫を膝の上に乗せ、膝枕の体勢でほっとした表情を見せる天竜姫と、その横でぐらぐらする頭を抱えて涙目の猿神。それを感じしたように眺めるジークフリート。

意識を失っている忠夫の口から、小さな呻き声が洩れた。

「・・・犬飼君、おき——ひやうっ！」

「んむー」

その手が、何時の間にか天竜姫の背中に回されていた。真っ赤になって身を伸ばす天竜姫は、それでも忠夫の頭を降ろさない。

「・・・や、ちよつと、犬飼君！」

「ん、んん？」

そろそろ目を開け始めた忠夫の手は、段々と下のほうへ向かっていた。更に真っ赤になる天竜姫は、その感触にひたすら硬直している。

爺と軍人も硬直しており、勘九郎はどうとう疲労から気絶した弟弟子を、扉の向こう

に鼻歌交じりで引きずっていった。

「……あ」

とうとうその手がそろそろ危ないところまで降り始め——

「ん、物足りない。後ちよつと」

「……」

天竜姫は、無言で忠夫を投げ捨てた。

第拾壹話。

——ぺちぺち。柔らかい物で柔らかい物を叩く音が響く。

「……むー」

ぺちぺちぺちぺち。スピードアップ。微妙に不機嫌な誰かさんの声が聞こえる。

「……むー」

ぺちぺちぺちぺちぺち。最早、連打である。それでも起きない、不機嫌な誰かさんの横で昏倒している忠夫。

「お、おうおう」

「……?」

ぺち。一回だけ響いて音が止まった。不思議そうに忠夫の頭の上の方向から覗き込む少女。頭には角が生えており、綺麗な着物は地面に直接座っているにもかかわらず、全く汚れた様子が無い。

呻き声は、言葉となつて洩れていく。

「……ううう、天竜」

「……ひやう」

名前を呼ばれた少女、齡14、5に見えるその竜神族の王女は、驚いたような嬉しそうな顔で微かに赤く染まった頬を押える。

「……違うつ！ 断じて違つぞー！ 俺は年上が趣味！ ……くかー、すぴー」
「……むー！」

ぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺち。

再度始まった、天竜姫曰く、乙女心を弄んだ為のお仕置きであつた。所謂『往復びんた』は大変情けない音を響かせながら、何時までも起きない半人狼の青年の頬を、撫でるように過ぎ去つていった。

深く考えると色々と危険な寝言では、ある。

気が付くと、薄暗い場所に居た。ふわふわと頼りない足元、滑るように動く視界。夢の中、と言うのが一番近いかもしれない。

『……………』

「おわっ?!」

気配を感じて振り向けば、腕を組んで只其処に立つ姿がある。真つ赤な下地に、白色で「鳥獣戯画」風の様々な動物の絵が画いてある上衣。金縁の黒い生地で作られた直垂。但し、腰に下げていた4本の刀は、無い。

久し振りに見るような、いつも見ているような、影法師が其処に居た。

「び、ビックリしたっ! いきなり現れるんじゃねーよっ!」

『……………』

影法師は何も答えず、歩き出す。懐をござと探りながら、只一直線に歩いていく。

「…………? おーい、無視すんなよー!」

沈黙。只、歩く音が聞こえる。不思議な事に、何も無い筈のその場所を、影法師は確かに足音を残しながら進んでいく。

草を掻き分け、踏みつける。ぬかるんだ土に足跡を残し、絡まる蔦を蹴り飛ばす。

ござと懐を漁っていた手が止まったかと思うと、何故か其処だけは音も立てずに引き抜かれた。

手の上にあつたのは、何時か、初めて影法師と出会つたときに、禍刀羅守から生まれ出でた力で作られた、キセル。

影法師は、それを持つたまま腕を振る。

次の瞬間には、キセルは釣竿に変わつていた。

「ん〜？ 何がやりたいんだか？」

首を捻り捻り、忠夫は後を付いて行く。先は見えないし、辺りは相変わらず薄暗いまま。

他に手がかりも無く。只、滑るように歩いていく。

「……？」

前方に、光が見えた。どうやら影法師の目的地は其処のようである。光は、あつという間に近づいていた。明らかに、影法師と忠夫の進む速度よりも速い。

薄暗さに慣れていた目が、眩しさえ覚えて閉じられる。

漸くそれを堪えて目を開けてみれば、目の前に座つて釣竿を垂れる影法師の背中。

「……釣れるのか？」

返事は、相変わらず無い。釣竿を辿つて視線を飛ばせば、其処に広がる巨大な水溜り。

差し渡して直径500Mに及ぼうかと思えるその広さに、水溜りと言う表現は当てはまらないかもしれないが、忠夫は何故か水溜りくらいで丁度良い、と思つた。

水面は僅かに波打っている。辺りには他に何も無い。

波は、中心部から広がっているようであった。相変わらず沈黙を守る影法師の隣に立ち、目を凝らして其処を見る。

小さな渦巻きが、見えた。

「穴でも開いてんだな、ありゃ」

素直にそう思った。どれだけ大きな水溜りといえ、穴があればいつかは枯れるだろう。しかし、その内部を満たす水は、何処からとも無く滾々と湧き出しているようであった。

「・・・なんだこりゃ?」

訳が分からない。おそらく、記憶に微かに残るこの場所は、影法師に説教喰らった場所のようだ。しかし、その時にはこんな物は無かったような、視界の隅に在ったような。呆、と眺めている忠夫の足元に、ほんの少しだけ、冷たい感触がした。視線を落とすと、足元で僅かに揺らめいていた波が、少し、大きくなっていた。

中心部に目をやる。

渦は、巨大化していた。

「うおっ?!」

最早水溜りの半ばを埋め尽くさんばかりの大きさになったそれは、貪欲に水面を歪め、引きずり込んでいく。

足元を濡らした水も、何時の間にか消えていた。

見る間に消えていく水溜り。

視界に、銀色の光が写った。反射的に追いかければ、渦の中心と、影法師の垂らした釣竿にそれは続いている。

影法師が、僅かに手を動かした。

一瞬にして渦の中心から引きずり出された糸の先端には、小さな、直径2cm程の、寶石のような珠がある。

それが空中を舞った瞬間に、影法師が手元の竿に捻りを加えた。どういう動きを持っているのか、釣り針らしきものがついているであろう先端は、あっさりと珠を開放する。勢い良く飛び出した珠は、放物線を描きながら影法師の元まで飛んで行き。

『あぐっ』

「また変な物喰った!?!」

大きく口を開いて待ち構えていた影法師の口の中に、ホールインワン。うむうむと満足げに頷きを繰り返して、再び竿を振りかぶる。

「ゴリアアツ！ 勝手に変な物食べるんじゃない——おおおっ?!」

掴みかかろうとした忠夫は、無理やり引きずられるようにして後方へ。

渦の中心へと釣り針を投げこんだ影法師は、忠夫の視界の中でどんどん小さくなっていった。

「手前、何時かその悪食絶対に躩なおしちやるからな——!!」

声が届くか届かないか。最早、米粒ほどの大きさになった影法師にそう叫ぶ。声が聞こえなくなった水溜りのほとりで、影法師は僅かに体を揺らす。

——硝子が割れる軽い音を立てて、影法師の狼面に、罫が入った。

「つうかむしろ俺が喰うっ！」

「・・・おつけー、こっち」

「う、え、あ？」

なんだかどうとも宿主と言うかなんと言うかな台詞と共に、飛び起きた忠夫の襟を引っ掴んで引きずり出す天竜姫。

何がなんだか分かっていない忠夫は、その細身の何処にそんな力があるのか不明な天竜姫に、されるがままに連行されていく。

「・・・良かった。同意が得られればこっちのもの」

「何っ?! 何に同意したんだっ?!」

「・・・ぼ」

頬を赤らめる天竜姫は可憐であったが、忠夫はひたすら嫌な予感を、久し振りに真つ赤な首輪が襲い掛かってくる光景を幻視していた。

「いーやー! そういうのは大人になってからー!!」

「・・・えっち」

「誤解じゃー！ 濡れ衣じゃー!!」

じたばたともかく忠夫を、がっちりとホールドする天竜姫の纖手。細いその手の何処にそんな力があるのやら。

「あ、あの、天竜姫様？ 今はそれどころでは無いのでは？」

おずおずと、黙ってその光景を見ていたジークフリートが話し掛ける。隣では猿神が不貞腐れたように背中を向けて胡座を搔き、キセルを吹かしていたりする。

「・・・ちゃんすは物にする為にある」

「え、いや、全くその通りなのですが」

「ジークつ！ へるぶみー!!」

涙目で助けを求める忠夫に、更に力を籠める天竜姫。ジークフリートとしても、一応同門であるからして結構頑張ってみようと思った。

「ですが「・・・何？」は、どうぞ此方に。枕は二つで宜しいですか？」

「う、裏切り者ー!!」

「ええいつ！ 離して下さいっ！ 小竜姫殿みたいに胃を痛めるのは御免です!!」

色々と問題発言を発するジークフリートの胴体に、必死で伸ばした足を絡めて蟹バサミ。

それを振りほどこうとする、天竜姫の視線にビビった魔界の軍人。

ぐいぐいと忠夫の襟首を引つ張る天竜姫。

誰も構つてくれなかつたので、不貞腐れから拗ねを超えて、いじけに入り始めた猿神さん。

どうにもこうにも、奇跡の生還は感動とかとは無縁のようであった。

「うおおおおつ!! 何でまたお前のどアップがあるんだあああつ!!」

「やーねー。何度も言わせないでよ。人工呼吸と心臓マッサージと診察よー」

「撫でまわすな近づくな鼻息を荒くするなあああつ!!」

「あら、積極的。攻めがお好き?」

「涅槃の向こうまで飛んでいけえつ!!」

「ほーっほっほっほっ! まだまだ甘いわよーっ!」

「この化けもんがー!!」

天竜姫が潜ろうとした扉の向こうでは、今回もギリギリであった雪之丞が、勘九郎と必死の防衛線を繰り広げていたり。

何を守るか? ……きつと聞かないほうが良い。

ともあれ、パワーアップした筈の雪之丞をもつてして化け物と言わしめる勘九郎。それこそ世界法則の修正でも入っているんじゃないやなかるうか。

一般的に、「お約束」とか言うものの修正が。

「なっ！ だからその話はまた今度と言う事でっ！ なっ！」

「・・・ジークの馬鹿」

「ぼ、僕は被害者だと思っんですけどね」

結局、忠夫をジークフリートから引き剥がせなかつた天竜姫は渋々その手を放したようである。

蟹バサミに10分近くも締め付けられ、呼吸困難で蒼褪めた顔を見せながら必死で抗弁するジークフリート。

猿神は不貞寝を始めている。

「そうっ！ 今は修行の成果を知るのが一番最初だろ？」

「・・・むー。お爺ちゃん？」

「なんじゃ、天竜や」

先程まで何処からか取り出した布団を被つて丸くなつていた猿神は、一瞬にして天竜姫の隣に姿を現していた。雰囲気も既に完全に余裕を取り戻している。

「・・・犬飼君、何か変わったの？」

「ふ、この齊天大聖直々に修行をつけたんじゃぞ。ばばーんとばわああつぶしておるわ！ かーつかつかつかつ！」

孫に良い所を見せる爺様の如く、大いに胸を張つて威張る猿神。一頻り高笑いを繰り出した後、眼鏡を嵌めて忠夫を睨む。

「・・・手を出すなよ？」

「なんの事じゃあつ!!」

忠夫の抗議も柳に風。すらりと無視して忠夫を見つめる。

「師匠の戦闘経験は膨大な物になります。それからすれば、高位神族や魔族でもなく、力を積極的に隠す術を知らない者ならばかなりの力を見抜けますよ。楽しみですね、横島さん」

「お、おう。でもなー、爺に見つめられるつてのもなんかなー」

「だまつとれ。・・・ん？」

猿神が、冷や汗を流した。

「ん？ んんん？」

「え、何？」

「どうしたのですか、師匠」

滝のように汗を流しながら、猿神は忠夫に近づいていく。眼鏡を外し、目を擦り、再び嵌めてまた凝視。

しばし、沈黙が広がった。

「……ふ」

「……お爺ちゃん。正直に言いなさい」

良い仕事をした、とばかりに眼鏡を外して額の汗を拭う武神の最高峰。齊天大聖、やり遂げた表情で背を向けた。

その襟首を掴んで引き止める天竜姫。何気に目が据わっていらっしやる。

「なななな何の事じゃ？ ワシはもう寝るで、1000年後位に起こしてくれと有り難いなーと思うんじゃが」

「……正直に言わないと、猿って呼ぶ」

「てーんーりゅーうー!!! それほっ! それだけはあああっ!!!」

ふい、とそっぽを向いた天竜姫に縋りつく猿神。齊天大聖、最早威敵の欠片も無い。

「なあ、やーな予感がするのは俺だけか?」

「・・・人生、色々ですよ?」

どんよりと背後に縦線を背負いながら呟いた忠夫の言葉に、ジークフリートは優しく肩を叩く以外の術を持たなかった。

「あー、うー、小僧、ちよつと霊波刀を作ってみろ」

「え、ここうつすか?」

頭を掻き掻き、とつても衝撃を受けた後の表情で猿神が言う。忠夫は素直に右手を上げて、何時ものように意識を集中させ始めた。

「あ、あれ?」

「・・・やはり、か」

しかし、その手には何時までたつても見慣れた霊波刀が顕現する様子が無い。数百年ぶりの途方に暮れた声を出しながら、猿神は額に汗をかいてすまなそうに忠夫に告げる。

「どうやら、霊力が大幅に減少しておるようじゃな」

「「「・・・ほっ」」」

「・・・おかしいのう、今までこんな事は無かつたんじゃがのー」

やれやれ、とばかりにやけにニヒルに肩をすくめる猿神。しかし、額に掻いたでつかい汗は隠しようも無かつた。

その言葉を理解しきれていなかつた三人に、漸く理解の色が広がり始める。

「し、師匠ー！ それで良いんですかー!!」

「うわー！ うわー!! なんじゃそりやああつ！ さっきの死ぬような思いは一体なんだつたんじゃー！ 訴えてやるつ！ 責任取れー!!」

「・・・お爺ちゃん、役立たず」

「年寄りを労わる気が欠片も無いのおー！」

瞬時に詰め寄るジークフリートと天竜姫。忠夫はその後ろで頭を抱えて悶えまくり。地面を転がり、じつたんばつたん、大暴れである。

さもありません。アレだけの苦勞をしたうえで、更に死ぬ思いまでして雪之丞が魔装術のパワーアップと言う結果を得ているのに、何故か忠夫はパワーダウン。

そりや、悶え転がりたくもなる。

「わっはっは、わは、はは、は。——ええと、代わりにこれを。だから許してくれ、天竜や〜」

「弱っ!!」

「師匠！ それは神族として、武神として余りな態度では無いですかー！」
「・・・お爺ちゃん、まじめにやって」

天竜姫の中で猿神の株が下がり始めていたのは言うまでも無く。

冷たい冷たい天竜姫の視線と声の前に、武神はひたすら泣きながら頭を下げるのであった。

『オーナー、報告します』

「・・・何よ」

所変わってGS美神除霊事務所。ようやく押しつぶした蠅を軍に引渡し、一息ついた美神達3人。

その上から、人工幽霊の声が響いた。

『私の結界が、無効化されています。すいません、全く気が付きませんでした……』

「あ、やつぱり」

「どう言う事ですか、美神さん？」

納得したように、苦々しげな人工幽霊の言葉を至極あつさりを受け入れる美神に、困惑した小竜姫の声がかけられた。ワルキューレは全身鎧の運んできたお茶を受け取りながら礼を言っている。

「人工幽霊一号の持つ結界は、人界でもトップクラスよ、間違い無く。それがいともあつさり2回も突破されて、しかもそれを人工幽霊が把握し切れていない。……可笑しいでしょ？」

「それは、相手の結界に対する技術が上回っていただけだろう？」

淹れたての紅茶の香りを楽しみながら、目線を合わせずにワルキューレが言葉を返す。視線は、揺れる琥珀色の液体に落ちたままである。

「……ふん。成る程、魔界も一枚岩では無いって訳ね」

「当たり前だ。何処の組織でも、巨大になれば歪みが生まれるのは必然。何処でも、な」二人の視線が交わった。その中には悪意や敵意は無い。ワルキューレの視線にはもどかしさと苦々しさがあり、美神の視線には真剣さと労わるような色がある。

「どう言う事ですか？」

「・・・おそらく、軍の一部が手引きをしている。この事務所の結界は、それほど簡単にジャミング出切る程度の柔な物ではない。それに、美神を襲う連中は、必然的に反データント派閥となる。神界と手を組むとは考えられんからな」

『お褒めに預かり光栄です』

人工幽霊の、平坦な、それでも何処か照れくさそうな声が響く。それに手を軽く上げて答えながら、もう一方の手で少し冷めた紅茶を一口。

芳醇な香りも、既に感じられないような気がした。

疲れた溜め息を一つつき、ワルキューレは頭を下げる。

「信じてくれとは言えん。我が軍の中に、裏切り者が居ることは確か。だが、今だけは、我慢して欲しい。お前は私の命に代えても「ストップ」・・・当然、か」

目を瞑り、腕を組んでワルキューレの言葉を妨げる。小竜姫は、只紅茶を楽しんでいる。諦め、覚悟を決めた目で立ち上がった彼女を引き止めたのも、また、美神の言葉であつた。

「何度言えば分かるのかしら？ 私は、守らせてあげるって、言ったの。分かつたら黙って座って、此処から離れる手段でも考えなさい」

「・・・良いのか?」

驚いたようにワルキューレが問い掛ける。その目は見開かれ、ポーカーフェイスは崩れて欠片も無い。

「良いも何も無いでしょ。使えるものは使うのがGSの鉄則よ。さて、此処が駄目となるともつと強固な防衛陣地に籠った方が良いわ。小竜姫、貴方の所でも問題無いかしら?」

「ええ、勿論。只、どうしても移動中は無防備ですから何らかの手段を考えないと・・・ほら、ワルキューレも」

「あ、ああ」

ぐい、と小竜姫に手を引かれ、戸惑ったままソファーに腰掛けるワルキューレ。その耳に、小さな声が届いた。

「クスクス・・・あれで結構照れ屋ですから、素直に皆で考えた方が良いでしょう?」
「プツ、あれで、照れ隠しなのか?」

「ええ、彼女らしい、とつても、美神さんらしい言葉ですよ」
「ばん、と美神がソファアの肘掛を叩いた。

「ほらっ! 無駄口を叩いてる暇があったらとつと考える! さもないと小竜姫の懐が痛む私の作戦で行くわよ!」

怒られた二人は、小さく肩を揺らしながら必死でおなかと口元を押え、何かを我慢するのにお大変だった。

「クスクスクス・・・もう、また上層部に文句言われるんですよ」

「く、くつくつくつ、ま、まあ良いじゃないか。とりあえず作戦を聞こうか？　・・・プツ」

「わ、笑ってる暇無いでしょうが!!」

しばし、怒声と小さな笑い声が、事務所の一室に響き続けた。

「ちっ！　無能な奴らめ。おかげでこの私が一々出向かなければならん」

数分後、事務所の見えるビルの屋上に小柄な影があった。フード付きのトレーナー

と、半ズボンを履いたその姿は一見只の子供のようである。

しかし、その顔に浮かぶ表情は、子供にしては歪みすぎている。

「まあ、良いだろう。あいつらなんぞ最初からあてにはしておらん。全く、最初から私が出向けば面倒な事など無かつた物を」

一步、踏み出す。事務所の窓には全てカーテンが引かれており、しかも気配からするとどうやら結界を強化しているようである。

「無駄な事を」

嘲笑と共に、一足飛びに跳ね上がる。結界にぶつかる瞬間、懐から取り出した魔符が一瞬光って砕け散った。着地点は、事務所の正面、問答無用の力押しのもりである。

「さあ、精々無駄な足掻きを見せて——むっ!!」

歪んだ笑いを浮かべながら、歩みでたその子供の目の前で。

車庫から車が飛び出し、2階の窓から人影が飛び出し、屋根裏の窓からもう一人、飛び出した。

「ちっ！ 逃がすか・・・あ？」

車庫から飛び出した車の運転席には、亜麻色の長い髪がはためいており。

2階の窓から飛び出した人影にも、その髪はあつた。

何故か、屋根裏から飛び出した影には更に真っ黒な翼が生えていた。

「こらあああつ!! 何処の世界に生身で空を飛んだり羽を生やしてる人間がおるか!!」

「・・・ば、馬鹿か?」

呆れた様に呟いた少年の目の前を、車に乗った女性が叫びながらすれ違つて行く。空を飛ぶ二つの影は、その声にも反応せず只一目散に、ある方角へと飛んでいく。

ドリフトを決めながらそれを追いかける車に向かつて、疲れた様子でその少年は手を上げた。

「・・・運が悪かったな」

一撃で、車は吹き飛んだ。瞬間の事である。ほぼ確実に、車上の人影も吹き飛んだ筈である。かなりの爆音が響いたが、空を飛ぶ影がそれを振り返る事は無い。

「妙神山の方角か。・・・魔族と神族が見捨てた? ・・・ふむ。ともかく、魂を回収してから、報告だけでも済ませておくか」

訝しげに眉を潜ませながら、少年の姿を持った何者かは車の残骸に向かつて歩いていく。

その眉が、残骸の程近い所まで近寄つて、驚愕に歪められる。

「ば、馬鹿な・・・居ないっ?! 奴は只の人間だろうがっ?!」

慌てて辺りを見回すも、その姿は影も形もありやしない。

そして、わたわたと辺りを見回していたその後頭部に、結構な衝撃が走った。

「な、なんだっ?!」

衝撃を与えた物を引つ掴んで確かめてみれば。

「く、靴?」

所謂、只の靴であつた。呆然と、炎と煙を上げる車の前で立ちすくむおそらく魔族。しばらく、其処に立ち止まっていたそれは、ふと気がついたように慌ててその場を離れていった。

「よっし、命中!」

「よくもまあ、こんな事を思いつくものだ」

「お、おかげでこっちはもうへろへろですよ」

空を飛んでいる影は、何時の間にか3つに増えていた。その内二人が頭に手を伸ばし、被っていた亜麻色の鬘を外す。現れたのは、黒い艶やかなショートカットと、2本の角。

紛れも無く、小竜姫とワルキューレである。

「やっぱり便利ねー、この竜神の装具」

「あ、後で返してくださいよっ!」

「分かってるって。．．．ちえ、一つくらい良いじゃない、ケチ」

「だ・め・で・す!!」

準備する物、美神と同じ色と髪型の鬘二つと服。もしもの時の雇用に、忠夫に使わせるために準備していたものである。

次に、車が一台。少々高くついたが、保証は神族が受け持つてくれるので問題無し。むしろ、おキヌが帰ってきたときの為に買い換えようと決めていたので良い機会であった。

最後に——カセットテープとラジカセ。人工幽霊でも代用可能だが、車に乗り移つていては危険なので此方を使用。

美神の声を吹き込んでおいて。

本人は竜神の装具の力で空を飛び。

超加速の使える小竜姫がラジカセもって囀になる。

ワルキューレがわざわざ目立つように翼を出して飛んだのは、欺瞞行動の一つ。その後、美神が飛び出し、変装した小竜姫が美神の声を出しながら、わざわざ車で姿を見せる。

攻撃されるだろうから、その瞬間に超加速でもって離脱。

目の前にはつきりとした目標を出しておき、更に本命をド派手な分かりやすい物でカバー。

最後の一撃は、ま、おまけである。

「此処の使い方。力で劣っても弱いと限らないのが、この世の中ってものなのよ」

「こんこん、と自分の頭を叩いてみせる美神。笑顔でそう述べる彼女に、二人は苦笑いを零しながら速度を上げた。」

「・・・と、言う訳です」

『ザツ——ふむ、どうやら、美神令子の周りには厄介な護衛が付いた——ザツ——ようだな』

「ええ。捨て駒のおかげでそれが分かったのは良いのですが、問題は何故美神令子を見捨てたのかが」

『——ザツ——妙神山に向かえ。其処に必ず居る。——ザツ——今度は失敗するな。良いか？必ず——ザザザザツ！』

「・・・故障か？」

『——ザツ——必ず、命を狙うんだよ？——ブズツ』

「・・・ちつ、コロコロ指令を変えるんじゃないよ！」

狭い地下室に、しばし火花の明かりがちらついた。

第拾貳話。

「何?! 何で俺が二人がかりで拘束されてんのっ?!」

「はいはい動かないで下さいねー」

「・・・危ないから」

試験場から出て妙神山の広い庭で。とりあえず修行も終わり、やたらと殺気を振り撒いている雪之丞と、高笑いしながら雪ノ丞で遊んでいた勘九郎を宥めすかしてティータイム。

とは言え紅茶ではなく、目の前の庭と同様和風に緑茶と羊羹であるが。

「危ない?! 今危ないって言ったっ?!」

「そーいう可能性も否定できないですかねー」

「・・・一回くらい冒険してみよー」

「俺は可愛い嫁さんと平和に暮らしたいんじゃー!!」

お茶を啜って一息ついて。

のほほん、としていた一同である。

突然猿神が立ち上がり、ジークフリートと天竜姫に忠夫を捕まえるように指示。

嫌な予感をびしびしと感じて忠夫が腰を浮かすも、隣に座っていた天竜姫が全身で即、確保。

全力で振りほどけば大丈夫だったのかもしれないが、忠夫にそんな事ができるはずも無く。ましてや、ささやかながら捕まった腕に柔らかい物が押し当てられていけば……逃げる事を躊躇つても、まあ、しょうがないといえましょうがない。

「……平和に暮らす為の第一歩。ふぁいと」

「というか人生諦めが肝心ですよねー」

「俺の目を見て言えジイイイクっ!!」

がっちりしつかり楽しげに。どこか子悪魔のような笑みを浮かべているのは気のせい。いか。捕まえた忠夫が、動くたびにほんのり赤くなって何故か動きを止めるのが、とっても楽しそうである。

反対側で関節極めているジークフリートは、あっちの空を眺めて遠い目であるが。

「ちよ〜と、痛いかもしれないが我慢せよ。何、別に天竜に格好の悪い所を見せてしまった八つ当たりではないぞ?」

「嘘だああっ! さっきまで滅茶苦茶へこんでたやないっすかー!」

「……死ぬなよ?」

「イーヤー!!」

猿神は、辺りに涙を撒き散らしながら悶える忠夫の心臓の位置にその手を置く。眼鏡の向こうに覗く目は、嫌に暗い雰囲気だ。

「楽しそーね」

「やっぱり体動かした後は甘いもんだよなー」

もぐもぐと栗羊羹を食べる雪之丞達は、我関せずと喧騒の外。何気に、忠夫の分は二人のお腹に消えていた。

「それにしても、襲ってきた奴の姿しか見れなかったのは痛いわね」

「無茶言わないで下さいよ。あんなに人が一杯居る場所でやりあった時の被害なんて考えたくも無いですし」

「超加速で一気に、と言うのは無理なのか？」

妙神山に向かつて空を飛ぶ3人組。GSに神族、魔族のいたって普通じゃない彼女達。ご一行は、今だその道程の半ばにいた。

あまり無茶な加速を行なうと、ワルキューレと小竜姫はともかく人間の美神にかかる負担が大きい為、一応「それなり」の速度である。

「無理・・・じゃないかもしれないませんが、失敗した時のリスクを考えると」

「小竜姫はエネルギー切れ、もし逃げられようものならこっちの切り札が一枚露呈しちゃうのか・・・」

「それもそうか。なら、先ずはどんな状況でも戦えるだけの戦力が必要、か」

顎に手をあて考えるワルキューレと、未だにだるそうな表情を隠せない小竜姫。

そんな二人を眺めながら、美神は助手の事を考える。妙神山に、最も危険で最も効果的な修行を受けに行かされた、頼りになるのかならないのか、でも此処一番ではいつも頑張っている半人狼の青年を。

「・・・あんまり、無理してなきや良いけど」

「へえ、美神さんもそんな顔するんですねー」

「意外といえば意外……でもないか？」

頬に当たる風が勢いを増す。後で後悔するかもしれないが、両隣から頓珍漢な事を言ってきた二人を引き離す為に努力を惜しみたくない美神である。

「い、急ぐわよっ！」

「やれやれ……男の所に急ぐ女を邪魔したくは無いのだが」

「誰が横島君の所に急いでるってのよっ！ 妙神山に急ぐのっ!!」

「語るに落ちてますねー。それはともかく——お客さんです」

そう呟いた小竜姫と、それに合わせるようにワルキューレが速度を落とす。

訝しげに二人を振り向いた美神の目に写ったのは、後方から迫る真つ黒な霞。

「ベルゼバブ、か。どうやらクローン技術で己の分身を作り出すというのは真実らしいな。情報局もその中身が正確なのは良いのだが、もう少し速く伝えられん物か」

「厄介なのは同じなんですがね。美神さん、空中戦に不慣れな貴方は妙神山へ。此処は私とワルキューレがいれば十分です」

両手に拳銃を構えるワルキューレ。神剣を鞘から引き抜く小竜姫。

止まった美神に、視線だけで先行を促す。

「……そういうのは趣味じゃないんだけどね」

「何を言ってるんですか。おそろくそつちにはもう一人、デミアンが行く筈ですから、そちらをお任せするという事ですよ？」

「ま、数は多いが所詮コピィ。武神と戦乙女のタッグには及ばんさ」

完全に迎撃体制をとった二人の表情は見えないが、きつと二人とも見惚れるような表情だろう。

出しかけた神通棍と破魔札を引つ込め、渋々美神は先を向く。

「死ぬんじゃないわよ」

「必要の無い約束はしない性質でな。あまりそう言う事を言うと運が落ちる」

「きつと横島さんも貴方に会いたがってますよ」

言葉も半ばに飛び去っていった美神に、聞こえる筈も無い答えを返す。風を切つて妙神山を目指す美神が、振り向く事など、きつと無い。

二人は、それでも振り向かない。此処が、引くべき所ではないと分かっているから。

ワルキューレと小竜姫が、互いを見もせずとその武器を微かに触れさせあう。

軽い音が、手に持った武器を通して互いに響く。儀式のようなそれは、ある意味で、誓いのようなもの。

死ぬな、と伝え、頑張れ、と伝える。

互いが互いに、音を響かせる。

「——妙神山管理人、竜神、小竜姫。この武神の名に賭けて！」

「魔界第二軍特殊部隊大尉、ワルキューレ。戦乙女の誇りに賭けて——」
雲霞の如く。

そう言う他に無い。視界には、不気味な蠅の姿の魔族が写っている。

例え相手の力量を鑑みても、苦しい事に間違いは無い。

だが、それが如何したと言わんばかりに二人は吼える。

『邪魔だああっ!!』

「此処は、通さんっ!!」

二人は、ベルゼバブの群に飛び込んだ。

「い、いだだだだ」

「我慢せい。神界の神器、そうそう容易く馴染む物でもないからな」

「・・・ふう、収まった」

「はやっ?! お主どーいう精神構造しとるんじゃっ?!」

胸を押えて蹲っていた忠夫と、その傍でキセルを吹かしていた猿神様。あっさりと復活して立ち上がった忠夫に流石に呆れた様子である。

「や、慣れっしょ」

「違うっ! 絶対に違うっ!!」

「・・・お爺ちゃん、煩い」

キセルでびしっと忠夫を指した猿神の後頭部に、天竜姫のチョップが襲い掛かる。ペし、とやたら情けない音を立てて当たった手を振り振り、天竜姫は忠夫に目をやった。

「・・・後は実戦でやると良い。さつきワルキューレと小竜姫から連絡が在った」

「姉上からの報告によれば、現在妙神山の南10kmで交戦中との事。美神令子が此方に先行しているようですが・・・」

「美神さんがっ?!」　　．．．つて、小竜姫さん達、大丈夫なんか?」

「まず、問題無いでしょう。姉上だけなら援護が要るかも知れませんが、何しろ組んでいる相手が名うての武神、小竜姫殿ですから。それより、美神令子の受け入れ態勢と――

――」

其処まで言つて、ジークフリートは目線を入り口の方に向ける。暫しの間も無く、妙神山の門が爆発音と共に吹き飛んだ。

すかさず戦闘態勢を取る雪之丞と勘九郎。ジークフリートは呆然とした表情で顎を落とす。猿神も同様にあきれ返つた顔で顎を落としている。

何気に天竜姫は何処から取り出したのやら、バズーカ砲を担ごうとして持ち上げられないでいた。

．．．少々長すぎたようである。

「くおらあああつっ!! 横島ああつ!!」

「ひいつ! なんか知らんが怒つてはるっ?!」

門を蹴破つた勢いのまま、竜神の装具の力ですつ飛んでくる美神。空中で一端姿勢を変え、そのままくるりと半回転。

直後、忠夫の顔面に美神のかかどが突き刺さつた。

悲鳴も上げずに吹つ飛ぶ忠夫。その更に先に、土煙を上げながら着地する美神。

吹っ飛びながら瞬時に体勢を立て直し、着地と同時に忠夫が逃げ出す。

その後頭部に、美神が天竜姫からすれ違いながら掠め取ったバズーカが着弾した。

「・・・あー、すつとした」

「こんだけやって言う事がそれですかいつ!!」

「んー、相変わらず不死身で安心したわ」

「他に無事を確認するやり方は無いんかー!!!」

爆炎の向こうから、使用済みのバズーカを重々しい音と共に投げ捨てた美神に、煙を上げながら突っ込んでくる忠夫。

それを軽く笑いながら、安心したように笑いながら美神は顔の前で手を振って、胸を張りながら声高く。

「あるけど私の気分よ」

「無茶苦茶やああっ!!」

らしいといえぱらしくもあり。らしくないといえぱらしくなくもあり。

ともかく、美神と忠夫、気持ち的に、久し振りの再会であった。

「さ、て。横島君、多分追っ手が来るから足止め頼んだわよー」

「うえっ?! マジッすか?!」

「まじ。私はあんたの受けた修行を受けさせてもらうから、そっちは任せたわ」

軽く、あくまでも軽く言い放つ美神。

その軽さが、忠夫に一瞬の戸惑いをもたらした。

「で、其処の誘拐犯のお嬢ちゃん。言いたい事は在るけど、修行受けさせてもらえるんでしようね？」

「・・・多分、そう言いだすと思つてた。あと、犬飼君には事後で承諾は得たから問題無し」

「ちよ、ちよつと待つたつ！ 美神さん本気ですか?! 俺が言うのもなんですけど、本気で危ないですつて!!」

トントン拍子で進む話に、ようやく、と言つた感じで忠夫が割り込む。必死で押し止め様と、両手をふりながら二人の間に割り込んだ。

「何でつすかつ?!」

「・・・決まつてるじゃない。私の知らないところで妙な動きされて、しかも事務所まで荒らされて。私が黙つてる訳無いでしょ？」

不敵な笑み。ギンギンに漲つた靈力。美神は、確かに何かに苛立ちも感じている。が、それだけでは、無い。

「私は、美神令子よ。後輩に抜け駆けで追い越されちゃ、私のプライドが黙つてないわ」
「そ、そんなつもりは無いつすよう」

その迫力に、腰を引き引き後ずさる忠夫。弱気な風情がなんともはや。きつと尻尾が見えていたら股の間に巻き込んでいるに違いない。

「自分の身は自分で守る。それが出来なきゃGSなんてやってらんないの。．．それに、今はあんたと人工幽霊しかいないんだから、ね」

それに、目の前で情けない顔をしている半人狼の青年に、まだまだ並ばせてやる訳には行かないから。前を歩く者の、それが後ろへ続く者に対する義務だから。

そして、自分の居場所は自分で護るものだから。声には出さず、顔にも見せず。

美神は何処までも美神らしくありたいと。

「分かつたらとつとと迎撃に行かんかあああつ!!」

「キャイン!!」

何時か、が来るまでは。こうやって、尻を蹴って追い立てるのも、私の仕事。もうしばらくは——譲ってやれない楽しみだ。

「……ふん？　ベルゼバブめ、小竜姫達に捕まった、か」

一人、凄まじい速さで妙神山に向かうデミアン。その感覚に、少し離れた場所で争う何者かの気配が引つかかる。

方や巨大な2つの気配。方や小さいながらも多数の気配。

先発したというか、勝手に先行したベルゼバブの事を考えに入れば、間違い無くその気配は護衛の彼女達とぶつかり合っている蠅の物だろう。

「足止めには丁度良い。それに、此処まで派手にやってくれば幾ら奴等でもごまかしは効かん。……くつくつくつ、面白くなってきたじゃないか」

もう、視界には妙な首無し石像の立つた、厳しい門が見える。間違い無く、あれが妙神山であろう。

おそらくは門番のつもりなのであろう。首無しの石像達が、慌てながら構えを取る。彼らは門の前にて並び立ち、己の体を持ってでも押し止めるつもりのようなのである。

「雑魚が。とつと叩き壊して美神令子の命、貰い受けるか」

速度を殺さず、門番の直上からパワーダイブ。勢いを増しながら、両腕を槍の形に変形させていく。

速度は十分。籠めた魔力も十二分。慌てて防御の体制を取った門番の、腕の隙間を縫ってその心臓部に――

「おらあああつ!!」

――突き刺さる直前に、門番達の影で僅かに開いた門の隙間から飛び出した、奇妙な鎧を纏った小柄な男の霊力砲を、諸にカウンターで喰らって吹っ飛んだ。

「おっしやあつ!!」

「問答無用だのう、右の」

「結果オーライというのだ、左の」

「おう、あんた等も囹役ご苦労だったな!」

鬼門達の巨体の影から、僅かに開いた門の隙間。突っ込んできたデミアンに向けて、全身全霊の霊力砲。

いたって単純。だが、今回は上手く行ったようではある。

「ふ、俺だって何時も何時も何とかのいつ覚えとは違うんだよ。頭使う事くらい簡単だぜっ!」

「馬鹿ねー。上から魔力砲の乱射喰らってたらどうするつもりだったのよ?」

「・・・そんなときや新しい魔装術の力で耐えるっ！　んで打ち返す！」

「そうなつてたらワシら消滅してたな、右の」

「諸行無常だな、左の」

多分違う。

空を仰いで幸運に感謝する鬼門達は置いといて。

魔族が、それも刺客として使われるほどには戦闘力の高い魔族が、カウンターとは言え一発で落ちるわけも無く。

「・・・ちっ！　雑魚が増えたか！」

「ふん。やっぱりこつちの方に来て正解だったな！」

「バトル馬鹿の嗅覚も、恐ろしい物があるわね」

美神とすれ違いに出て行ったのは、どうやら直感のみで敵の接近を感知した為らしい。勘九郎との生活の中で磨かれた能力も、戦場と敵を見つけるのに一役買ってはいるようだ。

最も、感謝する事は無かろうが。

「んじゃ、私は参加しないから頑張つてねー」

「おおっ！　こいつは俺の獲物だっ!!」

ひらひらと興味無さ気に手を振る勘九郎を振り向きもせず、雪之丞が突っかける。

魔装術に無駄が無くなった為であろうか、身体強化に使われる靈力の配分が増え、何気に速度も上がっている。

「存分に試してらっしゃいな」

「あんたは行かんの？」

「・・・貴方も大概唐突よね。私は子供に興味は無いの。それに、雪之丞も新しい魔装術を試したくてウズウズしてるわ」

何時の間にか。確実に達人とまで言われる境地に居る筈の勘九郎に気付かれもせず、忠夫が隣に立っていた。

ゆっくりと腕を上には伸ばし、次にしゃがんで足も伸ばす。最後に仰け反って背筋を伸ばし、準備体操も完了である。

「——よしっ！ 忠夫、行きまーす!!」

音高らかに頬を打ち、忠夫は一声上げて、目の前に広がる戦場に突っ込んでいった。両手には何も無い。いつもなら既に展開している靈波刀も無ければ、唐巢神父の石も無い。

それでも、ちよつと気合を入れ過ぎて叩いた頬を痛そうにしながらも、進める足に迷いは無い。

「美神さんは、嫁さん候補は、俺が——」

走りながら、右手を振り上げた。気合一閃、振り下ろす。

「——守るっ!! あの人の背中には、他の誰にも譲らねえっ!!」

何も無かった右手には、「金剛如意」と書かれた棒がある。齊天大聖、猿神、ハヌマン。神話に謡われた、その代名詞ともされる、神鉄で鑄られた神界の武の極致が扱う神格武装、大寶貝。

——如意金鉈棒が、威風堂々、其処に在る。

「はあっ?! 老師が如意棒を貸したあっ?!」

「ええ。本人曰く「止むを得ず」らしいですが。不味い・・・ですよ?」

「不味い、どころの騒ぎじゃないですよっ!! アレはれつきとした神器なんですよ!

そ・れ・を・お・お・おっ! 弟子とは言え、人界の存在に貸し出しちやったら・・・あうう、胃が痛い〜」

「小竜姫っ! さっさと来い! 手が足らんっ!!」

「ううう、また不祥事がああああ・・・」

「気にしないで下さい。今更一つや二つ増えたって、誰も気にしませんから」
「なんのふおろーにもなつてなあああいっ!!」

激しく空中戦が繰り広げられている妙神山上空に、一人の竜神族の悲鳴が響き渡つたりした。

「あらあら、武器に振り回されてるじゃない」

「・・・あれは、お爺ちゃん永年のパートナー。そう簡単には使えない」

門の上で、強固な境界越しに戦場を覗く二対の目。安全な所で観戦している勘九郎と天竜姫の目には、如意棒の重さに梃子摺っている忠夫が写っている。無論、振う事が出来ると言うだけでも空恐ろしい膂力が必要であるが、当たらなければどうという事は無い訳で。

「ふぬりやああつ!!」

「うおつ?! 危ねえじゃねえか横島つ!!」

「しよーがねーだろつ! 目茶目茶重いんだよ、これつ!!」

空気を纏つて振りぬかれた如意棒の先を、嘲りの笑みを浮かべたデミアンが浮かんで避ける。

勢いのままに如意棒は地面に突き刺さり、硬い岩を打ち砕いて亀裂を生んだ。雪之丞の鼻先を掠めながら。

「どうした？　今度はこちらから行くぞ？」

「やばっ?!」

「ちっ!!」

デミアンの顔が、二つに裂ける。その割れ目から飛び出したのは醜悪な肉塊で出来た化け物。

左右に飛んで避けた二人の間の地面を砕く。

「ちつくしよー！　ちよろちよろ動き回るし当たりやしねえじゃねーかつ！」

「俺の拳も全く効いた気がしねーな。おい、どーするよ？」

「どーするつたつて・・・戦略的撤退、は、駄目だな」

如意棒を構えた忠夫の後ろには、妙神山の門がある。その上には、その奥には。

彼女達が、居るのだ。

「ふん。そろそろ本気で行かせて貰う」

デミアンが、嘲笑を浮かべたまま膨らみ出した。いや、その勢いはそんな生易しい物ではない。

地面を潰し、視界を埋めるそれは、奔流。

爆発的に膨れ上がった肉塊の上で、高らかに笑う一体の魔族。

「はーっはっはっはっ！　所詮はひ弱な人間どもという事さ！　ほらほら、しっかり守

らないと後ろの門ごと吹っ飛ばぞっ！」

肉塊から、何本もの不出来な粘土細工じみた竜の首が盛り上がる。その口内にはひとつの例外も無く、巨大な魔力が蓄えられている。

「やべえ！ 纏めて吹っ飛ばす気か！」

雪之丞が飛び出した。魔装術に巡る霊力が、ほぼ限界近くまで高められている。その拳は、今だ高笑いを続けるデミアンの顔に向かって振り上げられている。

忠夫は、後ろを振り向いて声を上げようとした。逃げろ、と言うつもりだった。

——言わなかった。

妙神山の門の前で、天竜姫が信頼に満ちた笑みを浮かべながら、王の如く、凜と立っていた。

喉元までせり上がった叫びを、思いつきり飲み下して前を向く。右手に持った如意棒を、両手に持ち替え、砕けよ、とばかりに握り締める。

「あの爺は、確か——」

体を翻し、一回転。途中で遠心力で滑る如意棒の勢いに逆らわず、中心部分を持っていた手を端まで滑らせ其処を掴む。

ギリギリまで体を捻り、手の中から飛び出そうとする如意棒を握り締め、己のイメージを送り込む。

「——こう、やつてたよなあっ!!」

出来ないかもしれない、とは思わなかった。手の中の武器が、応えてくれないとも、全く思わなかった。何故なら、天竜姫達を守る為だから。

如意。意の如く。

如意棒の表面に刻まれた、たった四文字の言葉。

そして、忠夫の意の如く。応えた如意棒は瞬時に己の長さを変え、紛い物の竜を薙ぎ払う。

「馬鹿なっ?! 何だそれはあっ?!」

「孫みてーな女の子に頭が上がらない爺馬鹿の、文字通りの相棒だよっ!!」

混乱の怒号を上げたデミアンの顔を、雪之丞の拳が貫いた。

「・・・なんだっ?!」

貫かれた顔が、粘土のごとく歪んで雪之丞の腕を取り巻いた。それはそのまま雪之丞の拳を取り巻き、拘束する。

慌てて引き抜こうとする雪之丞の正面に、再び盛り上がる化け物の首。顎を開いたその中に、膨れ上がる魔力の渦。

「まずは貴様だあああっ!」

「こ、のっ！ なめんなあつ!!」

気合の声と共に、魔装術が魔力の奔流を跳ね返す。それは強かに肉塊の中心を穿ちつつ、背後の巨岩に当たって爆炎を撒き散らした。

「ぐぬっ……！ 貴様もかあああつ!! たかが人間風情が、どうしても梃子摺らせるっ!!」

「手前が、その程度だっただけだろうがっ！」

デミアンの声を一蹴し、雪之丞が拘束を引きちぎって忠夫の隣に着地する。

「切りがねえっ！ ど真ん中に穴が開いたつてのに、効いた様子もねえぞっ?!」

「なら、どっかに弱点があるんだろうよっ」

肉塊から、槍のように伸びた触手が襲い掛かる。それを受け流し、あるいは弾きながら忠夫が声を張り上げた。

「いやー、お前一人で来てくれて助かったぜっ！ どうやら仲間も居ないみたいだしな！」

「貴様ら如き、他の馬鹿どもの手を借りずとも殺してくれるっ！」

勢いを増す槍の嵐。雨霰と降り注ぐそれらを、二人は必死で避けていく。

「おいっ！ 挑発してどうすんだよっ！」

「弱点があるなら、あいつの中か他の所か！ でもって、ああいう他の奴らを馬鹿にする

奴は、絶対に安全な所に隠すか自分で持つてる！ だから・・・！！」

忠夫は、再び伸ばした如意棒で槍を打ち払って停止する。大きく息を吸い込んで、声の限りに叫び倒す。

「——あああつ!!! 弱点見つけたあああつ!!!」

「何っ?!」

「何処だっ?!」

その叫びに、思わず動きを止めるデミアン。同じく動きを止めて忠夫を振り返る雪之丞。

「デミアンと雪之丞の視線の先には、例の如く、悪戯の成功した悪ガキの顔で、ゆっくり手を上げる忠夫が居る。」

「たった今。其処だろ?」

「ニヤニヤ笑う忠夫の指の先には、人間の子供の姿を取ったデミアンが、ポケットにあたる部分を押えている。」

「・・・あ。」

「ほほーう」

「な？ ビンゴだろ？」

にやり、と二人が悪い笑顔をデミアンに向けた。

「ちよ、待った！ お前らそれは汚いだろっ?!」

「わははははっ！ 引つかかる方がアホなんじゃー!」

「それそれそれっ!!」

ここぞとばかりに攻め立てる、とつても厭らしい笑顔の忠夫と雪之丞。デミアンも抗議しながら弱点を動かそうとするが、それは僅かに遅かった。

「いただきっ!!」

「のわあっ?!」

伸びた如意棒と、防ぎきれなかった靈波砲がその位置に突き刺さる。デミアンのポケットから飛び出す小さな何か。

慌てて宙を舞うそれに手を伸ばしたデミアンを、直上から落ちてきた人影が光り輝く神通棍でしばき倒す。

「んがっ?! み、美神令子っ?!」

「良くやったわね、あんた達っ!!」

「ふ、ふざけるなっ！ 此方はお前を殺しさえすれば目的は果たせるんだぞっ!!」

衝突の衝撃で吹き飛んだ己の弱点を視線だけで探しつつ、目の前を飛び退る美神に触

手を伸ばす。

「あら？ 良いのかしら。私を殺しても、あんたの弱点は他の二人が壊すわよ？」
「なっ?!」

動きを止めた触手の隙間を縫って、再度美神が跳躍する。今度は、前に。

「やーっぱり。打算で動くタイプね、あんた」

「くっ!!」

一閃。輝く神通棍は、デミアンの体を引き裂き、地面まで貫通する勢いで叩きつけられる。その輝きは、今までのものと比べるのも馬鹿らしく。

「美神さーん！ あぶないっすよー！」

「おっけー。じゃーね。バイバーイ♪」

ドクターカオス謹製の神通棍であればこそ、今の美神の靈力を受け止めきれたのであろう。最早、神通棍と言うよりも少々ランクの低い神劍、高ランクの靈刀に近い。

衝撃で動きの取れないデミアンを余所に、振り切った姿勢の美神を横合いから雪之丞が搔つ攫う。

雪之丞の肩に右手で掴まり、残った左手で別れの挨拶と共に手を振る美神。

それを、今だ立ち直りきらない遅々とした動きでデミアンが追撃し様とし。

己に掛かった、巨大な影を見て振り向いた。

「・・・な、なんじゃそりやああつ!!」

デミアンの視界を埋め尽くす、巨大な巨大な如意棒の姿。

「お前つ、幾らなんでも無理矢理すぎるだろうがつ!!」

「全くよねー。時給250円と骨付き肉にしては、良い仕事してるわー」

「・・・ふ、不条理だああああつ!!」

それが、デミアンの最期の言葉だった。

その日、妙神山に、でっかい何かが倒れた音が鳴り響いた。

第拾参話。

「うう、いてーよー。腕が上がるねーよー」

「だーっはっはっはっ！ 何だあ？ もうへばったのかよ」

「うっせえっ！ 文句があんならお前がやれやあっ！」

デミアンをぶちっと潰した如意棒は、するすると縮んで元のサイズに早変わり。横たわる如意棒の横では忠夫が腕をふりふりさめざめと泣いていた。

どうやら、かなり痛いらしい。

元々が武神、斉天大聖の武装である。かの神の膂力と神通力を持つて自由自在に操れると言った品物を、例えば人狼の血を引いていると言つても人界の存在が扱うには、それなり以上の負担が掛かる。

ようするに、半人狼の超回復能力を持つて傷付いた筋肉を修復中。つまり、忠夫の腕は強烈的な筋肉痛に襲われているような物では、ある。

「ふん！ 男は黙つてこれだろう？」

涙目の忠夫の前で、ぐっと握り拳を作る雪之丞。

ぱっつんぱっつんに張り詰めた靈力と、鍛えぬかれたその拳。確かに、武器としては

申し分ない。

それを半眼で眺めながら忠夫は愚痴る。

「そもそもさー。あの爺がちゃんと結果出してくれてりやよー．．．んがつ?!」

「喧しい。不可抗力じゃろうが」

「頭がつ?! 頭が割れるように痛いっ?!」

背後に立った猿神の、手加減は効いているがそれでも半端じゃない拳骨で、忠夫の頭からは、真っ赤な噴水が吹き上がる。いつもなら頭を押えて悶える所だが、痛い腕がそれさえも許してくれはしない。

結果、蹲ってひたすら痛みを堪える、公園のオブジェのような物が出来上がる。

「．．．割れてる。血圧高め?」

「おおおおおお、そういう問題でもないぞ、天竜ううう」

「やれやれ。ともかく、姉上達も決着を付けて此方に向かっていますから、それまでにはそれ、止めといて下さいね」

傘を差して降り注ぐ赤い液体から身を守りつつ、忠夫の背中を撫でる天竜姫。苦笑いしながらそれを眺めるジークフリート。

「あだだだだ．．．．．ふんっ!」

今だ動かす事さえ億劫な両腕を感じつつ、忠夫は気合で血を止める。鼻を摘んで気合

一発。何故か止まる赤い噴水。人体の神秘、此処に極まれりと言った所であろうか。

そもそも、正確には人体ではない上に存在自体が不条理であるが。

「ジーク、お前に大事な話がある。ちよつと来てみ?」

「な、何ですか?」

呆れた、いや、最早それを通り越して感嘆の表情を浮かべているジークフリートを引きずつて物陰に連れ込込む半人狼。

その長く尖つた耳に、小さな声で囁いた。

「姉上つて、美人か? 性格は良いか? 一人身かあつ?」

「えー、と。少なくとも戦乙女と謳われるくらいでしたから、一人身です。身内の欲目でも結構美人だとは思いますが。性格は・・・ちよつと、きつめかな?」

「ほほう・・・」

キラン、と光る忠夫の目。どうやら、ロックオン寸前だ。ジークフリートとの付き合いは、修行の際に籠つた空間でそこそ長いものとなつている。

彼の人柄からすれば、少なくとも嘘はつかないだろう。

後は、己の瞳で確かめるだけである。

「ふ、ふはははははっ!! そーだよなっ! やっぱこーいう出会いつて大事だよなっ?! 性格がきついつてつたつて、あの人に比べれば何ほのもんじやー!!」

「へえ、あの人って、誰かしら？」

「そりやもー思わず求婚した嫁候補一号にして雇い主！ 美神れい……こ……さんではナイデスヨ？ モチロン」

何時の間にか、忠夫の背後に女性の影が。亜麻色の長髪を後ろに流し、華の咲いたような笑顔で、凶悪な唸りを上げている神通棍を構えた美神令子、先程まで腰に手をあて、潰れたデミアンの居た場所で高笑いを上げていた筈だが。

タイミングが悪いのか。それとも運が悪いのか。あるいはそういう運命か。

はつきりと、全部であろうが。つまり、ある意味不可避。

「あら、こんな所に試し切りに良さそうな半人狼が」

「……ばずーかは長すぎ。今度は手投げ弾も試してみたい」

「て、天竜までっ?!」

後ずさった忠夫の後ろで、俗にパイナップルと呼ばれる爆弾をお手玉している天竜姫。振り返った忠生からはその背中しか見えないが、既にお手玉の数は軽く10を超えている。

「あうあう……ひ、必殺Bだーっしゅ!!」

「……手が滑ったー」

「どうやら躰が必要みたいねっ!!」

「んぎゃーっ!!」

両手をなんとか振り上げながら、忠夫奇跡の大脱出……などというものが成功する筈も無く。

妙神山に、光と音の連爆が、只ひたすらに響き続けた。

「ああ……やっぱりぼろぼろにいく!」

「覚悟の上だろうか? そう嘆く事もあるまい」

「そうは言っても実際に見ると……こう、ぐつと胃に来ませんか?」

「……魔界軍の胃薬だ。使うか?」

「恩に着ます」

服のあちらこちらが切り裂かれ、中々に艶やかな格好の小竜姫と、こちらも体中切り傷だらけのワルキューレ。

とは言え、溜め息と共に「魔界軍常備薬・胃薬編・こいつあすごいぜ！」と書かれた薬包を投げ渡すワルキューレにも、それを受け取って迷わず水も使わずに中身の粉を飲み下す小竜姫も、少々疲れた様子が見えるのみである。

「けほっ！ こほっ！ ……あく、良いですね、これ」

「だろう？ 最近腕の良い魔女と繋がりが出来たらしくてな。技術提携のおかげで軍の薬品関係の質が上がってきているんだよ」

咽ながらも癒されたように目を細める小竜姫を、少し誇らしげに語りながら見つめるワルキューレ。

「…神族にも大丈夫、と。良し良し、中々貴重なデータが取れたな。後で教えてやれば喜ぶだろう」

「ん〜っ！ さあっ！ 行きましょうかっ！」

何気に実験台だったらしい。ともあれ、二人は妙神山の門に向かって歩いていく。

辺りはまるで爆撃でも受けたかのような、惨憺たる有様である。一直線に軽く弧を描いて押しつぶされた地面と、あちこちにある、尖ったもので穿たれた痕。

そして、未だに燻り続ける爆発跡と、切り裂かれたような地面の亀裂。あと銃痕と散らばる紙吹雪。

「凄まじい戦いの跡だな……。どうやら、デミアンとかいう奴、余程の相手だったのだらう」

「こちらには老師が居られますから、絶対に天竜姫様“だけ”は大丈夫ですよ」

瓦礫を避けつつ門を潜る。鬼門達の体が無いので、どうやら彼らは無事のようにだ。門を潜った内部は、更に凄まじい事になっていた。

何しろ、一番最初に目に入ったのが、倒れ伏す猿神とジークフリート、雪之丞なのだから。

「ろ、老師っ?! そんな、斉天大聖を倒すほどの魔族が、殆どその実態を把握されて居なかったとしても言うのですかっ?!」

「ジークっ! ジークフリートッ! お前の状況を報告しろっ! 上官の命令に背くつもりか貴様あっ!!」

師匠と弟分の傍らに駆け寄り、必死の形相で揺さぶる二人。

見たところ、殆ど……と言うか、全く外傷が無い。完全に気絶しているようではあるが、二人とも息はしている。

隣に倒れ伏す雪之丞に目をやれば、彼も同じく外傷は無い。妙な所が在るとすれば、その体に魔装術の名残のような、非常に小さな霊力が纏わり付いている事位であろう。

「……あら？　小竜姫様じゃない。どうしたのよ、そんなに慌てちゃって」

飄々と、崩れ落ちかけた小屋から勘九郎が歩み出る。その手に持たれているのは、冷たい水を満たした桶と、3枚の布切れ。

余りに余裕のあるその雰囲気、二人は困惑、硬直する。

そんな二人を訝しげに見ながら、勘九郎は水桶の中に布切れを放り込み、纏めて絞つて3人の頭に乗せて行く。何気に甲斐甲斐しくも見えるあたりが恐ろしい。

「ん、やっぱり目覚めはキスカしらねー」

「はっ?!　やけに禍々しい気配がっ?!」

「うおおおっ?!　止めろっ、いい加減普通に寝れんのかお前はあぁっ!!」

その一言で飛び起きる、若い方の二人。お爺さんは今だ昏倒中。

ジークフリートはともかく、雪之丞はちよつとトラウマを刺激されたようである。

「……あー。そろそろ、現状を説明して欲しいんだが?」

「姉上、何時の間に!」

「……いや、もう良いから。早く説明してくれ」

本気で驚きながらそうのたまうジークフリートを、頭を抱えながら見るワルキュー

レ。その肩に、優しく手が置かれた。

振り上げば、とつても嬉しそうな笑顔の小竜姫が、親指を立てながら其処にいる。顔に、でかでかと「仲間！」と書かれているようにワルキューレには見えたと言う。

「違うっ！ 私はそっち側じゃないっ！」

「ふ、私も初めはそうでしたよ・・・」

とつぴんぱらりんのぷう。

「つまり、デミアンは無事に撃退できた、と言う事か」

「はい。残留魔力反応もありません。確実に、滅ぼしました。そちらの方は？」

「逃げられた、と言うべきなのだろうな。此方の方で大きな衝撃音がしたと思ったら、直ぐに撤退されたよ」

未だ少々ふらつきながらも、きつちり敬礼の体勢をとって報告を行なうジークフリートの前で、ワルキューレは辺りを見回しながら溜め息をつく。

「それにしても、名に負う妙神山が、此処までやられたとは、な」

「・・・あー、そのー、それは誤解です」

「何？」

「デミアンと言う魔族の仕業ではないのですか？」

辺りを見回っていた小竜姫も合流し、鋭い視線で問い掛ける。しかし、ジークフリートは目線を泳がせながら、言葉を濁すばかりである。

痺れを切らしたワルキューレが詰め寄るが、それでもジークフリートの目線は定まらない。

そのまま二人の女性の視線を受け止めていたジークフリートであったが、暫しの後、諦めたような遠い視線になりながらようやく言葉が続ける事ができた。

「えー、まず、これはデミアンの——いえ、門より前の場所は奴の仕業である部分もあるのですが、奴のやった事では在りません」

「どういう事だ？」

そのまま、疲れた溜め息をつくジークフリートの頭を掴んで視線を固定させるワルキューレと小竜姫。しかし、そんな事をされているにもかかわらず、ジークフリートの表情は変わらなかった。

「次に、『やられた』のではありません」

その視線が、宙を睨んで固定された。そのまま、何かを追いかけるように上に昇つていき、暫しの間も置かずに下がり出す。

視線の先には、奇妙な、拳より少し大きいくらいの黒い物体があった。それは、まるで図つたかのように3人の間に転がってくる。

「——現在進行形で、やられています」

凶悪な爆音と、熱を伴わない膨大な光が弾けて、散った。

「死ぬーっ！ マジで死んでまうーっ！」

「逃げるなアアツ！ どう言う事よっ！ 人界における武神の最高峰、猿神の修行を受けて靈力が使えなくなつたつてのはっ!!」

「知りませんつてばっ！ それは俺のせいじゃないでしょーがあっ!!」

「やかましいっ！ 人にこれだけ心配させといて、何が「俺、靈波刀使えなくなつちやいました」だああっ!!」

右から左、上から下へ。瞬時に振りぬかれたそれを避けたと思つた瞬間、狙い済ました足元への一撃。

辛うじて避ければ、今度は避けた方向から、ゴム弾が何個も飛来する。足首の力だけで跳ね上がり、回避。幾つかが爪先を掠めて反対側の岩に突き刺さる。

「・・・捕獲失敗。今度こそ、連れて帰つて教え込む」

「何をだあああっ!!」

「・・・えへ」

何時も、凜とした雰囲気を持った天竜の頬がちよつと綻びる。照れたような笑顔は、確かに見た目相応には愛らしいが、やっている事がかなり、怖い。

「とうとう其処まで堕ちたのね・・・！ 良いわ。私が責任もつて極楽に送つてあげるから、其処に座つてその首差し出さなさい」

「誤解やーっ！ 俺は年下よりも綺麗な年上の女がいいーっ！ 美神さんみたいな姉さん女房がいいんやあぁっ!!」

「だ、だっただだ誰が誰の奥さんかあぁっ!!」

因みに、その一撃は、今までのどの攻撃よりも速かったようである。

ようやくすすきりするまで神通棍が唸りを上げて、弾切れの銃に給弾し、使い切った閃光弾の代わりに今度は麻痺性のガスでも準備しようと、獲物を捕らえきれなかった少女が拳を握ってお空に誓い。

頬の赤みが取れた女性が、青年の足を持って引きずりながら門へと向かう。

「あれ？ 小竜姫達、何でそんな所で蹲ってるのよ？」

「・・・し、至近距離で閃光弾の直撃を喰らいました。まだちよつとふらふらします」

「くっ、か、帰ったら訓練だな」

「成る程。それは大変でしたね。ささ、こちらへどうぞ。ああ、僕は犬——ごほんっ！

横島忠夫。只のしがない嫁さん募集中の男です。貴方は？」

「え、ああ。わ、ワルキューレだ」

「ワルキューレさんですか、良い響きですね。美人ですね。——嫁に来ないか？」

「何時まで寸劇やっとなるかっ!!」

先程まで引きずられていた忠夫は、例によって例の如く理不尽なまでの再生能力で、

瞬時に復活。

というよりも、ぼろぼろのピンク色の物体に纏わりついていた布が、完全に元通りになつている事から考えると、もしかしたら根性で復元している可能性も捨てきれない。

ともかく、美神の横薙ぎのローキックは、蹲るワルキューレに膝を突いて語りかけていた忠夫のわき腹を抉って蹴り倒す。

「ああっ！ 小竜姫さんがサービスカットしてるッ！ これは俺の嫁に来るという意思表示としかああっ!!」

「っ！」

「うおおおっ?! 目が、目が痛いっ?!」

びす、と良い音を立てて忠夫に向かって目潰しをする小竜姫。恥ずかしげに左手であちこち切れ目のある服を押える頬を赤らめた彼女の右手の人差し指と薬指は、迷う事無く忠夫の両目を突き刺した。

ごろごろと転がりながら、目を押えて悶絶する半人狼の青年。天竜姫は目の前に転がってきた彼に、迷わず鳩尾に向かってその踵を振り下ろす。

「・・・浮気者、成敗」

「げふう・・・」

「馬鹿はほつといて。それより、どう言う事よ。うちの助手の霊力が無くなったっての

は？ 私にはちゃんと効果が在ったわよ？」

美神が小竜姫に詰め寄りながら、下から半眼で睨み上げる。ちよつと後ずさつた彼女を追い越して歩み出たのは、小竜姫の上司にして、武術の師匠。

齐天大聖であつた。

「全く持つて不明じや。ワシとて修行相手の状態位は見えておる。確かに、手応えはあつた。新たな力に目覚めても可笑しくないほどの、の」

「……でも、駄目だつたんでしょ？」

猿神は、真つ白な髭を扱きながら、ぴくぴくとヤバ気な痙攣を始めた忠夫を流し見る。

「さて、な。駄目だつたと決めるには、少々早い気がするぞ？」

「え？」

「ともあれ、女子の為に頑張つた男には、それなりの報いが在つてもええじゃろう。ワシの相棒を貸しておいた。精々、使いこなせるように、実戦に連れて行つてやることじやな」

その肩が僅かに揺れているのは錯覚ではあるまい。楽しげに、言うなれば、罇の入つた卵から、一体何が生まれてくるのかと待ち構えている子供のようにならう。

猿神は、新しく出来た弟子の一人を眺めている。

「ああっ！ そう言えば、老師、どう言うつもりですか！ アレは、如意金鉈棒は神界の

武器ですよっ?! それをそう易々と……」

「ま、えーじやろ。神鳴落とす奴とか、海を裂く神器に比べれば、アレは只の持ち主の想像力で形を変えるだけの、硬い棒じや。物騒な物でもないわい」

「ですがっ! あれは老師の……! 齊天大聖老師の、貴方のもう一つの——」

勢い良く迫る小竜姫の眼前に、皺の入った猿神の手が突き出される。思わず言葉を止めた小竜姫に、彼女にしか聞こえない言葉で猿神が呟いた。

「あ奴には、必要じゃ。それが、上層部の答え。何、お前に責任が回る事は無い」

「……え?」

「全く、難儀な」

何時ものように何かで肩を叩こうとして、それが無い事に気付いて、仕方なく自分の手で肩を叩く。その背中が、ちよつと物足りなさげに見えたのは、果たして小竜姫の目の錯覚だったのであろうか。

「……ん」

「お、天竜か。すまんな」

「……ありがとう」

「かっかっかっ!」

その背中に回り、ゆつくりと肩を叩く天竜姫。

たんとん、たんとん。

岩のような硬さを誇る筈のその背中は。今は柔らかく小さな手を受け止める。表情を緩ませながら、闊達な笑い声を響かせる猿神の顔には、憂いも影も、全く無い。

背中から響くりズムを感じながら、猿神はキセルを取り出し火を付ける。

目に染み込むような青い空に、真つ白な輪が、広がりながら消えていった。

「う、うおお・・・小竜姫さんの艶姿・・・！でも、ワルキューレさんに返事を貰ってない・・・！」

「全く。ほら、折角和んでるんだから、邪魔しないの。帰るわよ」

ほのぼのとした空間を前にして。何となく割り込めなかつた忠夫は、猿神と天竜姫を

優しく見守る小竜姫、ジークフリートとワルキューレにも話し掛けられず。

せめて求婚の返事だけでも、と突破を試みるも美神に襟首掴まれ引きずり戻され。

「後生やー！　せめてお返事だけでもー！」

「結果の分かり切ってる事を聞かないの。さっさと帰って事務所の片付け、始めるわよ」
背中越しの会話であつたが、美神には忠夫の顔が目には浮かぶようであつた。言うなれば、目の前で餌を取り上げられた子犬であろうか。

そんな事を考えつつ、自分の顔に浮かんだ笑みに気付いてはいないが、それでもなんだか良い気分では、ある。

どうやら、パートナー・・・もとい。GS見習にして助手の青年は、雇い主の為に死ぬほど危険な目に遭つていたらしい。いきなり連れ去られて、しかも魔族に狙われていて。

護衛に來た魔族は、そう悪い奴でも無さそうだが、厄介な事になりそうだ。

それでも、そんなに不安じゃない。

彼は、彼が、頑張ってくれたから。頑張ってくれたと知つたから。ならば、私も見せてやろう。美神令子の、美神一族の流儀って奴を。

共に歩ける存在があることが、とても幸せと知つたのだから。

そいつが、少なくとも命懸けで頑張ってくれるくらいには、自分が好意を持たれてい

ると証明してくれたような物だから。

だったら、せめて見せてやろう。

一人で立てると言う事を。此処までおいで、と言える位に、胸を張って、意地を張って張りぬいてやろう。

「行くわよ、横島君！」

「う、ういつす！んじゃな、皆あ！」

だから、此処まで来れたら、すこしは考えてみようか、な？

「ところで、横島さんって棒術も使えたんですか？」

「いや、ドがつくほどの下手くそじゃな。昔のワシと良い勝負じゃ」

歩き去つて行く彼と彼女を見送りながら。猿神とその弟子は言葉を交わす。

「ありや只振り回してただけじゃよ。はつきり言つて、そこらの棒切れを扱つてゐると
変わり無いわい」

「……んん〜」

「お、おおう……其処じゃ其処」

「それでは、我らは帰還する。報告もせねばならないのでな」

「私も、姉上と共に魔界に戻ります。今回の騒ぎは、違和感が大きすぎますからね」

魔界軍の姉弟が、敬礼と共に魔界への門を開く。しっかりと形作られたその直線的な腕の下では、苦笑いと沈黙がある。

体を翻して歩き出しながら、弟の方が呟いた。

「まあ、あれだけストリートなのは初めてですから、ねー」

其処まで言つて駆け出したジークフリートの足元に、ワルキューレが打ち出した銃弾が着弾する。

するとそれらを避けながら、ジークフリートは門を潜つて行つた。

「ちっ！ 待たんかジークっ！ 上官命令だぞっ！」

素早くマガジンを入れ替えながら、ワルキューレが後を追う。猿神達からは、残念な事にその表情は見えはしない。

ただ、天竜姫の手に力が籠っただけである。

「あだだっ?! 痛い、痛いぞ天竜やつ?!」

「・・・むー」

涙目で悶えながらも、孫のような娘の手から逃げ出す訳にも行かず。顔を蒼褪めさせた小竜姫の耳に、何かか軋む音が聞こえたような気がした。

そんな騒がしい3人の所に、耳を押えながら雪之丞たちが歩いてくる。

「うへえ・・・まだくらくらするぜ」

「こっちはまだ耳鳴りがしてるわよ・・・」

「あら、お帰りですか?」

冷や汗を流しながら、小竜姫が振り返る。どうやら背後の苦悶の声と、助けを求め視線はスルーするようである。

背中に突き刺さる視線を必死で無視しながら、小竜姫は雪之丞たちを送り出す。

その横を、軽く手を上げながら通り過ぎていく雪之丞と勘九郎。

「・・・ま、しばらく退屈はしねえだろ」

「私も修行しなおさないとね」

その言葉だけを残しながら、崩れ落ちかけた門を潜って歩み去る。

すっかりぼろぼろになった妙神山を見渡しながら、小竜姫は溜め息をついた。

「・・・私一人で如何しろって言うんですか、この状況」
「ぎやああああつ?!」

「・・・あ」

妙神山に、断末魔の悲鳴が響く。そんな事も露知らなさげに、今日も今日とて日は沈む。

山の端から僅かに覗く月は、細い細い、糸のような月である。

——まるで、誰かの嘲笑に歪んだ唇のような。

「・・・さて、仕掛けは整いつつあるようで」

「くつくつくつ。僕らの楽しみを奪われないように、だね」

「・・・そんな事の為に、私の時間を割かせたのか？」

何も無い。いや、其処には、存在だけが、ある。

空虚な空間と、光無き故に、只『感じられる』何者か達。

「——お待たせしたかな？」

「いえいえ、時間は既に問題ではありませんからねえ」

「それでも、偶には礼儀とか言う物を尽くすべき場ではある、と思つたんだよ。私は、ね」

「・・・奇妙な事だ、とは、僕は思わないでおくよ」

「では、そろそろ我らにも説明してもらいたい物だが？」

「せっかちなだね。あんまり焦るのも良くは無いですよ？ とは言え・・・まあ、気持ちには、分

かる、かな？」

空虚な広がりには、無限の回廊を行くようでもあり、精々3M四方の空間のようでもあり。

いや、広がりだけではないだろう。交わされる言葉にさえ、大した意味は在りはしない。

広がる余韻と、その言葉に乗せられた筈の情報さえも。

——只、虚ろな——

第拾四話。

「ど・っ・っせーいっ!」

今日も今日とて、GS美神除靈事務所は依頼を受けては西東。悪霊が出て、依頼と報酬があればそこが仕事の現場である。

と、言う訳で。

「こんにやろっ! でりやつ! ふんぬりやあああつ?!」

「やめんかあああつ!!」

本日2件目のお仕事。廃ビルに渦巻く悪霊達は、きつちり破魔札で極楽行きとなりました。GS美神除靈事務所において現在、唯一の所員である忠夫と一緒に吹き飛ばしなから。

「何すんすかあつ?!」

「そりやこつちの台詞よっ! 周りを見なさい周りをっ!」

半分は妖怪の血が流れている筈であるが、何故か破魔札の爆風をもろに食らった忠夫はちよつと煤ける程度で済んでいる。だから美神も遠慮なく巻き込んでいふ・・・と言

うわけでは、無い。

普段は、よつぼどの事が無い限りちやんと狙つて影響範囲から外しているし、相手の呼吸も掴んでいるのでやろうと思えばサポートだつてやれる。

やらないが。

何故かと言うと、其処は其れ。美神にだつて良い所見せたいだとか、簡単に主役を譲つてやるほど甘く無いとか、むしろ支えて欲しいとか。色々と複雑な気持ちがあるのである。口が裂けても言わないであろう。

ともかく、そんな彼女にとつても今回の状況は、結構頭の痛いものであり、思わず纏めて吹き飛ばしちやつたとゆーのもあり。

「うおっ?! ぼろいビルが更にぼろぼろにっ?! 一体誰がこんな事を・・・」

「あんだでしよーがっ!! 横島クン? な・ん・で悪霊ごと床とか柱とか壁とかをぶつ壊すのっ?! 解体予定だから良い物を、普通の建物だつたらどーするつもりよっ?!」

依頼は、悪霊退治。ビルの解体ではない。ところが忠夫、一生懸命猿神から貸してもらつた如意棒を振り回して悪霊を叩いていたのは良いのだが、その重量を支えきれずにあちらこちらをぶつ壊す始末。流石に斉天大聖の伝承武器と言つた所か。

今にも神通棍を振り下ろしそうな美神を必死に手で牽制しながら、忠夫は右手に持つた如意棒を肩に担ぎなおした。

「や、結構重いんすよ、これっ?!」

「うああああつ?! 霊波刀の方が悪霊相手には役に立ってたじゃないのよあのポケ
猿うううっ!!」

よっこいしょ、と年寄り臭い声を出しながら、肩に担いだ如意棒を振り下ろす。鋭く
振り下ろされた其れは、空気を切り裂きながら、減速しきれずに床を抉る。

「んー。威力は高いんですけどねー」

「そー言う所、冥子みたいよね。高火力なのに下手するとあたりに被害を撒き散らす所
とか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

頭を抱えて蹲っていた美神は、如意棒の抉った地面を見ながら呟いた。余りと言えば
あまりな評価に固まる忠夫と、色々と思いついたりこれから先のことを考えたりで嫌な
事しか思い浮かばなかった美神の間に、とつても重い沈黙が漂う。

「あは、あははははははははは、はは、はは、は」

冷や汗を流しながら見詰め合った二人は、何となく笑ってみた。もう、乾いた笑い声
しか喉から出なかつたが。

そんな二人の足元から、小さな音が聞こえた。

笑う事をやめて、と言うよりも、笑うしかなかつたが丁度良いタイミングで止める切

欠になったとも言うが。ともあれ、足元を見下ろした二人の目に入ったのは、一寸づつ広がっていくヒビ。

「崩れるかしら?」

「多分」

何でも無い事のように言葉を交わした二人は、次の瞬間に駆け出した。

「ぎゃーっ?! 俺のせいかつ?!」

「他にどんな理由があるのよ、この馬鹿タレええっ!」

数秒後、ぼろぼろのビルは崩れ出し、数分後には、瓦礫の山が出来上がっている事であらう。

「あんた本当に冥子みたいになる気じゃないでしょうねっ?!」

「不可抗力でしょーがつ?!」

二人の悲鳴を飲み込みながら、ビルは結構あっさり倒壊したそう。

「だ・か・らっ！ 人目のある所であー言う事すんなっつってんでしようがっ!!」

「あ、危ないから・・・ちよ、ちよつと抱っこしただけやないですかー」

「・・・つつっ!!」

耳の先まで真っ赤になった美神さんは、足元でずたぼろになりながらも余計な事を口走った半人狼にストンピングの雨霰を降らせている。勿論、これ以上無い位に真っ赤っ赤である事は言うまでも無く。

実際の所、忠夫がお姫様抱っこして脱出した直後にビルが本格的に崩れたので、判断としては間違っつてはいなかった。

問題は、脱出地点に依頼人がおり、その依頼人に何となく微笑ましい物でも見るかのように見られたのが一番の原因だっつたりする。

「わ、わかつたらもうしない事っ！ 返事はっ?!」

「・・・りよ、了解しました・・・今度から人目の無い所でこっそりやりますっ!」

「・・・そ、そう言う問題じゃないでしょっ?!」

ちよつと期待したのは秘密。

ともあれ、依頼人の微笑まじげな視線が痛い。美神は手早く忠夫を車に——小竜姫からの報酬と言うか必要経費というか、とりあえずそんな名目で新しく買った4人乗りのオープンカーである——放り込み、営業スマイルで依頼人に終了を告げて車に飛び乗る。

最後に見えた手を振る依頼人の生温かい笑顔が、なんだかとおつても気恥ずかしい、帰りの車の中であつた。

「う、うう、一体何なのね。いきなり崩れるような建物には見えなかつたのね」
瓦礫の山の中から、そんな声が聞こえたとか聞こえなかつたとか。

「……駄目ね、屋内では封印させときましょ」

事務所に戻つて協会に提出する報告書を書きながら、美神の口から零れたのはそんな言葉である。

「宝の持ち腐れつて事かしらね。つて言つても、他の霊能者でもあんなの使える奴は居ないんだし、±0なのかしら？」

ぶつぶつと呟きながらペンを走らせる美神所長。唯一の所員は現在応接室にて、報酬の骨付き肉にむしやぶりついている。さつき見ていた相変わらずのその姿に、ちよつと

微笑ましい物を感じつつ、美神はしばらくペンを走らせつつける。

途端に、その顔が真つ赤になった。

「だあぁっ?! 忘れなさい私っ?!」

頬に溜まった熱を振り払うように、頭を左右にぶんぶか振り回す美神。毎日手入れしている亜麻色の髪が、辺りの空気をかき混ぜた。

机の上の書類に覆い被さるように倒れこみ、ほんの少しだけ、口の中から気持ちが悪れ落ちたりも、する。

「・・・ちよ、ちよっただけ、う、嬉しかったかな?」

机に伏せた美神の眩きは、くしゃくしゃになった報告書だけが知っている――

「何がっすか?」

――とは限らない。例えば同じ事務所に居る、やたらと耳の良い半人狼が騒ぎを聞きつけて様子を見に來たりする事だつて、ある。

その声を聞いて、美神は石像の如く固まった。

次に、絶対に顔が上げられなくなつて、わたわたと顔を伏せたまま意味も無く腕を振る。

最後に、記憶が無くなるまで忠夫の頭を殴りつづけようと思つて、真つ赤なままの顔

を上げた。

「美神さん？」

「んきやあつ?!」

心配した忠夫が目の前に居たりする訳で。

「ど、どうしたんっすか?!」

「何でもないっ!! 何でもないからっ?!」

一瞬にして柔らかく体を受け止めていた椅子から飛び降り、背後の壁まで後ずさる。怪訝そうな表情の忠夫が、ゆっくりと机を回って美神に近寄り、真っ赤に染まった美神がじりじりと逃げるように動き――。

「いけっ! 其処なのねっ! 後一押しなのねー!!」

『声が大きいですよっ!!・・・あ』

「・・・え?」

突然部屋の窓から聞こえた声と、部屋の中から響いた声で、固まった。

部屋の中から聞こえた声は人工幽霊の物である。

聞き覚えの無い外の声に目をやった二人が見たものは、窓の外でカメラを構えた変な

女性。全身びったりと覆うその服は、結構なスタイルの良さをしつかりはつきり反映している。耳につけたイヤリングが眼球だったり、額にも目があったり、髪型が非常に変わった。そういう要素も多分に含んでいたが。

「……で、あんた誰よ?」

「え? あ、あれ? ……お邪魔みたいなのね」

窓の外に浮かんでいた女性は、するすると下のほうへと消えていった。後に残ったのは妙な空気。互いに目を合わせて、疑問を浮かべる。最も、たった今起きた事も疑問の一つではあるが、忠夫はちよつと心配そうな色がある。

「……何よ?」

「……いや、どうしたのかなー、と思ひまして」

一瞬動きを止めて、視線を泳がせる美神。しかし、寸暇の間も置かず。

「あ、あんたみたいなたたわけが気にする事じゃないわよっ!! この馬鹿たれがーっ!!」
「あうんっ?! 何故っ?!」

照れ隠しの右フックは、忠夫のテンブルを正確に抉って昏倒させた。

『オーナー、お客様です。窓から』

「・・・邪魔しまーすなのね〜」

「——両手を上げて壁に手をつけなさい。今なら無料で極楽に逝かせてあげるわよ。抵抗しない事ね」

暫しの連続する衝撃音の後。窓が開いて先ほど降りていった女性が入ってくる。美神は迷わず霊体ボウガンを取り出して、一応警告しながら引き金を引いた。

当然ながら、引き金を引いたら矢が飛び出したりするわけで。

「のひよーっ?!」

「ちっ、外したかっ!」

「いいいいいきなり神様に何て事をするのねーっ!!」

矢は自称神様の頬を掠めて壁に突き刺さり、しばしその尾を振るさせた。悲鳴と涙を大量にばら撒きながら、自称神様は両手を上げて速攻で壁に手をつき説得開始。

「わわ、私は神界上層部の依頼で貴方の事を調べに来た、ヒヤクメっていう神様なのねーっ!!」

「・・・本当でしようね?」

「う、疑わないで欲しいのねーっ!!」

霊体ボウガンを降ろした美神を振り向いて、ヒヤクメと名乗った彼女は少々怯えながらも胸を張る。

ちよつと涙目ではあるが、確かに神様っぽい気配はしている。そこまで確認した美神は、ようやく殺気を収めて溜めていた息を吐き出した。

「で、その自称神様が何の用なのよ?」

「じ、自称って。酷いのねー」

「覗き見してる神様に、どう敬えつてのよ。ほら、ちやきちやき説明しなさい」

「全くつす。あ、俺、横島忠夫。好きなものはお肉と散歩とサバイバルと年上の綺麗なおねーさん。嫌いな物は玉葱とイモリと鉄砲と注射と飛行機。ささ、貴方の説明を!」

「え、え、え?」

「ああ、心配は要りません。怪しい者ではないです。ただお嫁さんが欲しい年頃の半人狼ですから。と言う訳で——嫁に来ないか？」

「十分以上に怪しいわっ!!」

自然に会話に割り込んで、自然に求婚を始めた半人狼は、流れるような美神のワンツーで壁に叩きつけられて沈黙する。

「ひ、光が見えた・・・」

「ふんっ!!」

「あの一、説明しても良い?」

汗を流しながら、ヒヤクメはそろそろと手を上げた。

「ふーん、私の前世にねえ」

「それが、神界上層部の考えなのねー」

しばらく復活しないように、念入りにしばき上げた後。忠夫は呪縛ロープでぐるぐる巻きになり部屋の隅。人工幽霊が持ってきた紅茶で喉を潤しつつ、ヒヤクメと美神は話し始めた――のが、10分ほど前。

琥珀色の液体は既に尽き、部屋の隅で拘束から抜け出る事の出来なかつた半人狼が、拗ねながら暗い雰囲気を放っている。

それを完璧に無視しながら二人の会話は続いていた。

「魔界の武闘派が何故貴方の命を狙うのか。それに対して和平推進派が何故秘密裏にそれを阻止し様と動いているのか。ワルキューレ達も、この前の事でちよつと派手に動きすぎたせいかしばらくは動けないそうなのねー」

時間移動能力者。時間を行き来する、因果律さえも覆す事が出来る、と言われている能力を持つ、異能者。

とは言え、その能力も完全な物ではなく。因果律を覆す事が出来るのかどうかは、その事象がありえたかどうか、に左右される。要するに、絶対に在り得ない事は起こしえない。

強力と言えばこれ以上無く強力ではあろうが、万能では、無い。

その、時間移動能力者を執拗に狙う一派。それが、魔族の武闘派であると言う。

また、和平推進派の方も同様に調査に入る予定であったが、前回のベルゼバブ、デミアンとの争いの際、神族と魔族が争った、という形になってしまっている為、緊張の高まった魔族―神族間を刺激しない為にも、今回の調査は神族側の分析・調査官であるヒヤクメに一任される事となったという背景がある。

「ま、とりあえず任せてなのねー。私の全身にある100の感覚器官は、伊達じゃないのねー。しつかりばつちり、心の奥の奥まで覗けちゃうのよねー」

「え？　ちよ、待つて――」

嫌がる美神の肩を押えながら、その心の奥、記憶の底、魂に刻み込まれた前世の記憶へと――

「……あれ？　プロテクトが掛かってる」

「……どうかしたの？」

ちよつと不機嫌な、それでも我慢してやると言った風情の美神は、目の前で首を捻るヒヤクメに問い掛ける。しかし、彼女からの答えは無く、ひたすら首を捻っている。

と、その瞳が突然ギラギラと輝き出した。

「ふ、ふふふっ！　俄然興味が湧いてきたのねー！　私つてば好奇心の塊なのよねー！

見たいっ！　知りたいっ！　燃えてきたああっ！」

大声で叫んだかと思うと、腕を一振り、何処からとも無く表面に巨大な眼のついたトランクを取り出す。彼女の身長半分ほどもあるそれの中には、一見只の闇しか広がっていない。おもむろに両手を突っ込み、暫しの間も無く引き出された右手の先には、トランクとコードで繋がったノートパソコンらしき物がある。

ややあつて引き出された左手の先には、ゴム製の吸盤がついたコード。それを美神の額に押し当てると、ヒヤクメはノートパソコンに何かを打ち込み始めた。

「ふふふっ！ 封印も掛かってないし、これならあつさり上手くいきそうなのねー！」
「ちよ、ちよいまちっ！ まさかっ！」

「その通り！ 貴方の時間移動能力、ちよつと借りるのねー！」

「へー、最近はこんな小さな『ばそこん』もあるんすねー」

ヒヤクメは、背後から聞こえた声に反応して動きを止める。慌てて振り向けば、其処に居るのはさつきまで簀巻きにされて放り出されていた半人狼。

そちらに目をやれば、何故か全身鎧がロープでぐるぐる巻きにされてシクシクと泣きながら転がっている。

「な、何で？ どーやって？」

「ふふふ、身代わりの術っ！」

「それは絶対に使い方を間違ってるのねー!!」

「んー、なんて書いてあるかわからんなー。ていつ」

本気で驚いて仰け反ったヒヤクメの隙を突き、呆れる美神の静止が届く前に。忠夫の指は、読めない文字の書いてあるキーを適当に叩いていた。

「ああああっ?!」

「へ?」

突如、忠夫達を包んで広がる光の球体。しつかり3人ともその中である。

「勝手に弄つちや駄目なのねー!」

「この馬鹿犬ううっ!!」

「狼っすー!!」

光が弾けた次の瞬間には、動く物は何も無い。いや、部屋の隅で――

『く、このっ! あのアホ狼に出来て私に出来ない訳がつ!』

全身鎧がじたばたと。

「どーすんのよっ! こんな所に来ちゃってっ!」

「私に言われても困るのねー!!」

「うわ、此処臭いなー」

「何でそんなに余裕なのよっ!!」

暗い空間、いや、通路だったのかもしれない。光に包まれた直後から、美神達は引き

ずられるように上下の無い空間を通過していた。放り出されるようにして落ちたのは、黒い雲に包まれた、寒々しい雰囲気広がる都市。

ヒヤクメ曰く、時間移動には成功したらしいが、忠夫の適当な操作のおかげで正確な時期は不明との事。

場所は、平安京。1000年以上前の、京都であった。

「如何しよう・・・帰れるのかしらっ?！」

「だって、なんか臭いんすもん」

「上下水道が発達してない上に、貧富の差が激しい時代だから・・・って、そーいう場合じゃないでしょうがっ!」

ともあれ、おろおろする神様と、鼻を摘んで顔をしかめる半人狼と、そんな彼らを見ながら頭を抱える時間移動能力者は、どうやら目的地には着いたようであった。

丁度その頃、平安京に程近い森林の中に開けられた、空間の穴の奥にある異空間にある某魔神の秘密基地で。

「アシユ様！ 何処ですかっ！ アシユ様あつ!!」

「メフェイスト、もう少し静かに。幾ら——」

「——そんな事は良いですからっ！ これを、この魂を……!」

強大な力を秘めた、魔界でも頂点に近い地位を占める存在。魔神、アシユタロスは—

「……せめて、お父様と呼べないものか」

「ああもうっ！ 一々落ち込まないで下さいっ!」

戯れに作った筈の、己の作り出した魔族、メフェイストⅡフェレスからないがしろにされて、ちよつとへこんでいたりする。

「どうした。今日が初仕事ではなかったか？ いや、早く戻ってきてくれたのは嬉しいが、娘の成功を喜ばないほど狭量な親ではないぞ?」

「それが、ちよつとマズツちやつて……」

メフィストに背中を撫でられた事で、アシユタロスは元気を取り戻し、焦る娘の話を聞く事にした。

作品、それも昆虫を下地にした試作品とは言え、作り上げてみると中々どうして情が涌く。その上ここ最近——と言っても千年単位ではあるが——一人研究やらなんやらを続けていた彼にとつて、土偶とか埴輪以外の存在との、新しくできた娘のような存在との生活は、とても楽しい物であつた。

気が付けば、そんな娘も立派になつて。「何か役に立ちたい！」と言つて飛び出していったのが3日程前。

バイタリティだけはとんでもない物があつたので、ちよつと心配が過ぎてその辺に合つた五月蠅い土偶を蹴り飛ばして壊したり、埴輪をやたらと作つてみたりした以外は問題無い、と思つていた。

ところが、そんな娘がえらく慌てた様子で駆け戻ってきた。

逸る心を抑えつつ、立派な父親をふるまうアシユタロス。

「で、どうかしたのか？ 私に出来る事なら何でもしてやろう」

「この魂に、新しい体作つて!!」

「……」

「願いを叶えるつて言つたのに、惚れるつて言つたのに、私を庇つて菅原道真つていう悪

霊と戦って死んじゃったの！　お願い——お父様っ!!」

「任せなさい!!　おとーさまに、まかせなさいああいつ!!　．．．何いいいつ!!　惚れるだっつ?!」

本人曰く立派な父親像は、30秒で崩壊した。

「おとーさんは、おとーさんは許しませんよっ！　まだお前には早いっ！　メフィスト、

お前はまだ1歳なんだぞっ?!」

「．．．うううう〜」

必死で押し止めようとするアシユタロスに、涙目で唸って抗議するメフィスト。気のせいかな、誰かの魂を握っているその手の平の中で、先ほどまで放たれていた光が握力に負けて消えようとしていた。

「大体そんな何処の馬の骨とも知らないような男に「アシユ様の馬鹿あつ!!」．．．メフィストー!!」

アシユタロスの言葉の途中で、大声で叫んで身を翻したメフィストは、そのまま部屋の壁を打ち抜いて駆け出していった。

後に残されたのは、呆然と左手を突き出したままの格好で固まる魔神様。

暫しの後、アシユタロスは膝から崩れるようにして両手をついた。

『アシユ様．．．』

「ああ、これが反抗期か……」

『ただ男が出来ただけでは……』

「聞こえんっ！ きーこーえーんーぞおおおっ!!」

耳を押えて頭をぶんぶん振っている、己の主人を眺めながら。砕けた自分の体を接着剤で固定していた土偶は、嫌に疲れた溜め息をついた。あの娘にしてこの親あり。昔は良かったなあ……。と、取り留めの無い事を考えつつ。

土偶の頭の中には、在りし日の陰のある笑みを浮かべた、それこそ魔神という呼び名にに相応しかつた頃のアシユタロスの姿が浮かんでいた。

目を開いた瞬間に見えた、部屋の隅で大声を出しながら耳を押さえ、膝を抱えている現在の姿に打ち砕かれたが。

「待つてて、高島殿！ 私が新しい体を作るからね・・・！」

駆け出したメフィストは、その足で自分が生まれたところに駆け込んでいた。右手には高島と呼ばれた者の魂。左手には――

「一寸だけ、削るだけ。・・・大丈夫だよね」

怪しく輝く四角錐。それぞれの頂点に球体が付いており、水晶のようなその外見からは分からないが、アシユタロスにはとてつもない力の結晶体である、と教えられていた。「くっ！ 硬い・・・ならっ！」

尖った爪で削ろうにも、その結晶は異様な硬度でそれを許さない。色々と道具を持ち出してみたが、やはり削られてはくれなかった。

ひたすら心ばかりが焦るメフィストは、切羽詰った様子でそれを睨む。

「後で補充して、吐き出してはれないように戻すっ！」

そして、それを迷わず飲み込んだ。

「・・・んっ、ぶはっ！ 良し、これで――」

高島の魂を、手術台のような、人一人が寝転ぶことが出来るだけの広さしかない硬い代の上に置く。

そして、辺りを見回して、使えそうなものを探す。

「えつと・・・これ、が良いかな？」

取り出されたのは、奇妙な形をした丸い球体。其れの表面に指を這わし、複雑に動かしていく。指が表面を走るたびに、その球体から滲み出るように光が溢れ出した。

「よし、調整はこれで大丈夫・・・見た目もそっくりな筈だし」

それを高島の魂の隣に置き、台の上にある蓋を閉める。

と、何かを思いついたようにその手を止めたメフィストは、しばし宙を見上げた後、再び辺りを荒らし始めた。

「よ・・・つと。折角だから、もう簡単に死なないように、ちよつと強くなってもらおつと」

ガチャガチャと音を立てながら戻って来たメフィストの腕の中には、色々な光を放つカプセルがある。その数、実に20個近く。

なんだか、台の上の魂が必死で抗議するかのように光を放っているが、其れを無視してどんどん放り込んでいく。

「んふふー。それじゃ行つてみよー！」

勢い良く閉められた蓋の向こうに、激しく点滅する光は消えていった。

第拾伍話。

「……で？」

「……吐き出せなくなっちゃった。てへ」

「……の・馬鹿娘ええっ!!」

すまなさそうに軽く頭を下げながら、反省の色無く舌を出したメフィストの前には、両手を握り締めながらお怒りの魔神アシユタロス。

プルプルと震えるその握り拳が、やり場の無いエネルギーをバチバチと火花を立てて放出させる。

だが。

だがしかし。

「ごめんなさい……」

その様子を見てシユンとした愛娘の姿を前にしては、そのエネルギーも雲散霧消せざるを得ない訳で。

しかも、メフィストの目には涙が今にも零れんばかりに溢れている訳で。

「——よしっ！ もう勝手な事をするんじゃないぞー」

『はやつ?! アシユ様、良いんですかそれで?!』

「当たり前だろうが。可愛い娘が素直に謝っているのに許さん道理があるかあつ!!」

あつさり腕を組んでむやみやたらに胸を張ってふんぞり返りながら、一言で謝罪を受け入れたアシユタロス。

直属の部下の土偶が、えらく慌てた様子で問い掛けるが、所詮は土偶。可愛げの欠片もないので意見は一蹴。確かに長い事掛かって集めたエネルギー結晶は惜しくもあるが、最近方向転換を考えてたりするのでモーマンタイ。

そんな上司と部下の掛け合いを見ながら、涙を溜めていたメフィストは、一瞬にして笑顔になって、元氣一杯賭けて行く。

「ありがと、お父様っ! それじゃ、高島殿連れてくるねー!」

「うむ。・・・あれ?」

『・・・あれでも女、ですかなあ』

余裕綽々頷き返したアシユタロスが、違和感を感じて首を捻るが分かる筈も無く。何処となく感心したような土偶の眩きが、固まるアシユタロスの傍らを通り過ぎていったような気がただけである。

メフィストが駆け出していったその直後。アシユタロスに説明する為に目フィストが後にした部屋の真ん中で。高島の魂が放り込まれた台が「チーン！」とレンジっぽい音を立てる。

ゆっくりと開く蓋の中から、白い霧が広がって、冷たい空気に触れながら溶けるように消えていく。蓋の向こう、台の上では何かがごそごそ動いている。

「……んがああっ!!」

ごそごそ動いていた影が、爆発的な勢いで体を起こし。

半開きの蓋にぶつかって、かなり良い音を立ててもとの体勢に戻る。

・・・完全に動きを止めたようだ。

倒れこんだ勢いで、未だ漂っていた白い煙が吹き飛んだ。

煙が晴れた後には、ちよつと奇妙な男性の姿。額にでつかいたんこぶを作り、白目を剥いて気絶中。

「……んごー、すぴー。ううう……や、やめろう……ぶつとばすぞう?!」

狼の耳と尻尾。体中を覆った獣毛。真っ白な毛で全身を彩ったその元人間、現在獣人の名を、高島と言う。

そんな魔族の一味とは裏腹に、平安京は今日も平和……では、決して無い。激しい貧富の差と、妄執じみた強力な結界に隔てられた内と外。外からの魔の流入を防ぐ、という名目で創られたその結界は、今は中で生まれた悪霊、悪意を沈殿させ、薄れさせる事無くその濃度を増していく悪循環を繰り返させていた。

結果、平安京はその名とは裏腹に、人の生きる魔都と化す。

しかし、どんな所でも生きていけるのが人である。魔が居るのなら其れに対する力を求め、浄化と言う手段を取らず、濃縮した魔を討ち滅ぼす。

簡潔に言うると、GSに取ってはまさに稼ぎ時が延々と続いている訳であつて。

「えーつと、堀の裏に2体。木陰に1体、あと池の中に1体なのねー」

「了解っ! はあっ!!」

一体何処から調達したのやら。この時代の着物を来た美神は、何故か変わらない格好

のヒヤクメの目を利用してながら荒稼ぎをやっていた。

塀を飛び越えてきた餓鬼を破魔札で消し飛ばし、木陰に隠れた悪霊を木の幹ごと神通棍で貫き散らす。池の中に居る奴には、浮かんでくる前に破魔札を投げつけて池ごとふっ飛ばせば問題無し。

「んー。とりあえずこの屋敷にはもう居ないのねー」

「それじゃ約束の報酬のほうを頂きますわ。毎度ありー♪」

額に平手をかざして辺りを見回すヒヤクメの横を通り過ぎ、縁側を登って屋敷の中へ。

「実に見事、流石は今評判の巫覡。術も天晴れなれど、その姿も美しい・・・」

「あら、おだててもびた一文まけませんわよ？ あとその手が触ったら5倍頂きますわ」
「う、噂通りだな」

感動したように、屋敷の中で見守っていたやたらと長い帽子を被った、いかにも貴族な男が手を握ろうと迫ってきたが、美神の一言とつれない態度であっさり引いた。なにやら残念そうにぶちぶちと呟く男の台詞を聞き流しつつ、美神は屋根に向かって声をかける。

「どーおー？ 検非違使は嗅ぎつけたみたいかしらー？」

「ういーつす！ えーと、あと数分で到着しそうでーす！」

屋根の上では忠夫が検非違使——要するに、勝手に霊能力を使って商売をする輩をとつ捕まえる役目の人々——警戒中。どうやら屋敷に向かつて駆けて来る馬の足音を、きつちり聞き取つていようである。

こちらもそれなりに時代に合わせた服を着ている。が、美神のものと比べると明らかに安っぽい。最も本人が全く気にしていないようなので良いんだろう。

「おっけー。それじゃ降りてきて足止めお願いねー」

「またつすかー？ 俺最近あいつらに顔覚えられちゃつてるみたいなんつすけどー」

「私に比べりやマシでしょーが」

「それは、まあそーですけどね」

赤いバンダナを巻いているとは言え、黒髪に黒い目の完全に日本人な配色であり、更に貧相な服を着ているため人込みに紛れやすい忠夫に比べ、亜麻色の長髪、一見して高価な服、碧がかった瞳にとんでもない美貌。何処を取つても目立つ事この上なしな美神では、確かに比べた場合に軍配が上がる。

「ほら、ヒヤクメ」

「神様使いが荒いのね〜」

溜め息一つつきながら、ヒヤクメは報酬を受け取つてほくほく顔の美神の腕を掴んで宙に舞う。そのままドンドンと高度を上げていけば追跡どころか発見すらも難しいだ

ろう。何せ、仮にも神様だ。それなりに己の身を隠す術の一つや二つ位は。

「早くっ！ この前みたい矢を射掛けられるのはご免よ！」

「ふえくん、穩行の術をしつかり教えてもらっておけば良かったのね」

・・・無かつたらしい。

「居たぞ、あそこだっ！」

「おのれ、また空を飛んで逃げる気かあっ!!」

当然、そんな彼女達は物凄く目立つ訳で。高層建築など無い時代。塀や大きな屋敷はあれども空を飛ぶ物を見逃すほどに視線が塞がれる障害物は無いので、ちよつと上を見上げればあつさり怪しい影が見つかったりするのである。

「善良な一般市民」と言うか、靈能力を持つもの達を纏め上げ、平安京の表と裏にその根を這わせた陰陽寮の目——京中に存在する密告者——の通報で駆けつけた検非違使達は、頭上を通り過ぎた影に向かって馬を走らせながら、背中に背負った矢筒から一本引き抜き弓に番える。

そして、ぎりぎりと引き絞られた弦が矢を射ち放つその瞬間。

「うおっ?!」

「なんだあつ?!」

轟音を立てて、四角い物が地面を抉った。

目の前に突然ぼろぼろの塀が飛んでくる。縦横1m、厚さは10cm程の其れは、驚いて弦から手を離した彼らの前に突き刺さる。

放たれた矢は塀を貫き切れずに頭を半分出した所で動きを止め、検非違使達の乗っていた馬も目の前に突然現れた壁に驚き竦み上がる。

「どうどうっ！　ちっ、また奴かあっ?!」

「く、このっ！　何処だ、『赤布鬼』っ！」

「・・・人狼だっっーの」

塀を投げつけた忠夫は、そのまま低い姿勢で走り出す。一回姿を見られてから、なんとも妙なあだ名を付けられたものである。

「赤い布を頭に巻いた剛力の鬼」を従えた「人に在らざる色の髪を持つ妖女」が、京の化け物達を蹴散らしながら、人の大事な物を奪っている。

そんな噂が、京にはじりじりと広がり始めていた。発端は、陰陽寮。

理由はいたって簡単「俺らのシマでかつてなことすんなやゴラア」で、ある。

巫覡と陰陽寮の関係は、民間と公的機関という位置付けから言えばオカルトGメンと民間GSの其れに近いかもしれない。だが、美神達の居た時代と決定的に違う事と言え
ば——陰陽寮の権力が、大きいと言う事か。

その為、お膝元と言われるこの京で、陰陽寮に属さない凄腕の巫覡の存在は、とって

もうざつた事となる。

とは言え。

だからどーしたとゆー人達もいる訳で。

「おーっほっほっほー！ 商売繁盛ー！」

「お酒はお神酒として分けて欲しいのね〜」

「こりや美味いっ！ こりや美味いっ！ 良い肉使つてやがんなあっ!!」

一仕事終えたら一休み。稼いだ反物、お酒に米俵といかにも高価な巻物、絵画にその他諸々につこり報酬現金払い。

やけに羨びた都の外れの地区、更にぼろぼろな掘つ立て小屋の中。そんな場所に似つかわしくなさ過ぎる宝物の数々が、美神の後ろで唸っていた。

それを誇らしげに眺めながら高笑いする美神と、その隣で指をくわえてお酒を欲しが
るヒヤクメ。忠夫は報酬の一部として受け取った、新鮮な食料に舌鼓を打っている。

「むぐむぐ・・・むぐ？」 みふあみふあん、ふあひゆへのふえなかい

「口の中の物飲み込んでから喋らんかいっ！」

今にもどんちゃん騒ぎに突入しそうな室内に、決るようなボディの音が響く。

「もぐおおおつ?!」

「ひーっ?! こつち来ないで欲しいのねええっ?!」

「うわ・・・」

一瞬にして阿鼻叫喚の地獄絵図。口を押さえて悶える忠夫の目の前から、必死で逃げ出すヒヤクメ様。張本人の美神は既に2歩下がって退避済み。

「・・・むざ」

「んぎやああつ?!」

「わーっ?! 横島クン、私が悪かったから堪えてええっ?!」

「・・・ええと、失礼させて頂いても「ぶ」・・・ええ?」

——自主規制——

「ああもうっ?! 折角の戦利品がちよつと汚くなつちやつたじゃない!」

「美神さんのせいでしょうがああ?! 何で俺が綺麗にしなきゃなんのですかっ?!」

「……いや、こつちの方を無視しないで欲しいんだが」

い

狭い室内に、ぼろぼろの布切れを纏つた忠夫が美神のかき集めた報酬を、新しめの布で擦り上げる。とりあえず芸術品の中でも被害の酷かつた物は諦めて、あんまり影響を受けなかつた物は綺麗になつた。流石に食料品は例え綺麗になつても食べる気にならないので小屋から少し離れたところに放置してある。

何とかかんとか一息ついて。

漸く、こんな辺鄙な所まで訪ねてきた変人を見る余裕が出来た。

「えーと、西郷さん……で良いのかしら?」

「ああ。それにしても、そんなに似ているのかい? その、西条という人物と」

腰の後ろまで届こうかと言う髪。凛々しく引き締まつた面立ちに、見た目は普通だが

かなり高級な布地が使つてある陰陽師の服。

美神達の時代の、西条輝彦にそっくりの男性が、鼻を摘んで座っている。どうやら、先程の災害はギリギリで避けおさせたようである。

「ええ。居る訳無いのに本人かと思つたわよ」

「・・・ふうん」

そつけなく言い放つ美神を観察しつつ、他の二人にもさりげなく視線をやる。一見して怪しい3人組だが、どうやら――。

「人間の女性と、神・・・それに妖怪かな？」

「半分正解だなー」

「あたらずとも遠からず、なのね〜」

その声に答えたのは、扉を潜つて戻つて来た後、再びお神酒と称してお酒を飲み始めたヒヤクメである。かなりの量を飲んでる筈なのに、顔色一つ変えていない。

お神酒が嫌いな神様はいないという所か。

「・・・で、西郷さんつて言つたわね」

「陰陽寮の人だろ、あんた。何の用？」

す、と忠夫が美神の横に並び立つ。何時でも飛び出せる体勢をとりつつ、何処と無く警戒している様子が無いのは、彼が西条の前世かもしれないという考えから。ここまで

そつくりな人物が、しかも靈能力者として存在する者が、全くの無関係とも思えない。こつ言う時に頼りになる筈の神様は、徳利を空けながら静かにこちらを見やるばかりである。

「……本当に高島とそつくりだよ。君も、な」

「俺は、横島だつーの」

そして、彼が自分を見る視線に籠められた寂しさにも、その原因は在つたのかもしれない。

「単刀直入に言おう。君たちに——最近京で噂の『赤布の鬼』と、『人外の妖女』と言われる君たちに依頼したい事がある」

「……へえ？」

胡座を組んでいた足を組みなおし、正座に構えた西郷の口から出た言葉は、こんな所まで態々出張つての依頼であつた。

「私たちを厄介者扱いしてる陰陽寮のお役人さんが、依頼？」

「ま、普通に考えたら怪しすぎつすよねー」

「……だろうと思つたよ。だが、これは私個人の依頼なのでね。陰陽寮とは関係無い」
懐をごそごそとし出す西郷に、僅かに忠夫が腰を浮かしかけるが。美神は視線で其れを止める。西郷が取り出したものは、小さな箱であつた。受け取つた美神は、特に警戒

する事も無くそれを開ける。

「へえ！ 結構な大ききさじゃない」

「精霊石・・・つすか？」

「ああ。ちよつとした伝手があつてな。何でも西方よりの流れ物らしいが、とてつもなく強力な力を秘めた霊石だと聞く。未だ陰陽寮でも殆ど知るもの無い筈だが、何故・・・いや、まあ良い。とりあえず、これが報酬の前払いだ。依頼成功の暁にはもう一つ」

精霊石は、確かにこの時代においてはとてつもない価値を持つだろう。美神達の時代に於いても、其れこそ精霊石の鉱脈があれば小さな国の国家予算を十二分に賄つて尚余りあるだけの利益を齎してくれる程。質と量によつては下手なオイルダラーなんぞ目じゃないくらいの、巨額の資金源となる。

また、GS達にとつての切り札であり、その用途も幅広い。そして、高い。アホみたいに高い。

「依頼内容の確認が先よ。貴方、かなりの水準の陰陽師よね？ それなのに、個人として私みたいな民間に協力を依頼しにこんな所まで来る。しかも、同僚にも告げていない。・・・よつぽど危ない橋、なんでしょ？」

それに、『あの』西条さんの前世が、此処まで高価な報酬を払うんだから、それなりに上に危険な筈。

最も、西条の前世とは確定していないのだが。

ともかく。美神は何故かそう感じていた。目の前の男性が、自分が兄と慕った人の前世である事を。ならば、少なくとも交渉はこちらが有利。何せ、来世とは言え付き合いは長いものだから、考えている事の端々くらいは読み取れる。

「・・・相手は、菅原道真の怨霊。理由は——敵討ち、だよ」

身構えていた美神は、遣る瀬無さげな、疲れと僅かな濁りの混じった西郷の笑みに、少し所では無く驚かされていた。

京を追われた菅原道真公が、怨霊となって京を呪っている。

そんな噂が流れ出して暫しした頃、陰陽寮はその怨霊に襲われた。

まさか、と。

幾ら怨霊とは言え、あの知性に溢れた道真公が、たった一人で陰陽寮を打ち伏せる事ができると思っているのか。

陰陽寮に詰めていた西郷が目にした物は、そんな考えを霧消させる程に禍々しい、瘴気を纏った道真公であった。

詰めていた理由なんて大した物ではない。いや、大した物なのだが。

同僚が、高島が、なんと藤原の娘に夜這いをかけようとしたと言うなんとも情けない理由であった。前回、こつびどく振られてから多少は落ち着いたかに見えたが、ぜんぜん反省していなかったようである。

ともあれ、直々に同僚を確保して、処刑だ何だと脅しをかけ、同時に裏で高官達にせめて島流しくらいで納めてもらえようように根回しをしていた為のお泊りである。

それでも、同僚は性格にやや所でなく難があり、そのくせして異様なまでに腕が良い。術の腕もさることながら、その策謀というか引っかけと言うか。ともかく、セコイだの卑怯だの言われようとも、何が何でも、どんな絶望的な状況からでも、悪ガキのように笑いながらひっくり返す鬼札。

そして、認めたくは無いが、頼りになる同僚であり——個人的に親友と言える位には、仲は良かった、と思う。

ぶつかり合い、あるいは噛み付き合い、それでも、信頼していたし、友情と言うもの

は感じていた。

夜半も過ぎた頃であつただろうが。突然鳴り響いた爆音と、誰かの断末魔の悲鳴。

高島を閉じ込めた牢から離れ、慌てて駆けつけた西郷の目に写つたのは、陰陽寮の、凄腕の陰陽師達が次々と打ちのめされていく、悪夢のような光景であつた。

道真公は、狂つたように辺り構わず打ち壊し、叩き潰し、すり潰している。時折、狂気の籠つた哄笑を上げている彼に、かつての面影は欠片も無い。

必死で応戦するも、全く敵わず次々とやられていく仲間達。

西郷も持てる力を振り絞るが、正直、死さえ覚悟したと言う。

そんな時、あの馬鹿は現れた。

何処から連れてきたのやら、かなり露出度の高い、奇妙な服を着た女性——いや、人では無かつたのかもしれないが、朦朧としていた意識は、確認する暇さえ与えてくれ無かつた。

馬鹿は、高島は、いきなり道真公の背後に現れたと思つたら、両手に持つた符を——やはり、何処かに隠し持っていたようだ。見張りに付いていたのが自分でなかつたら、逃げ出しただろう、あの馬鹿は——目の前の背中に叩きつけ、驚いた道真公が振り向いたその瞬間。

女の手を引いて、全力で逃げ出した。

勿論、ありとあらゆる悪口雑言を投げつけながら。舌は出すわ、半尻出して挑発するわと中々に頭の痛くなる光景であつたと。

しかし、結局彼らは戻らなかつた。

朝日が昇り、西郷が意識を取り戻した時には、辺りは呻き声と、かつてはかなりの大ききであつた陰陽寮の跡のみ。

駆けつけてきた者達の治療を受けていた西郷に届けられた報告は、京の大路を駆け抜けていった男女二人と道真公が、京の外れで戦い——最後に、男が女を庇つて倒れ、道真公は日が差すと共に逃げた、と言う物だつた。

暫しの後、届いた報告には、高島の遺体が見つかった、と。

——およそ、5日前の事である。

西郷の胸に去来した感情は何だつたのか。虚しさか、恨みか、それとも、純粹な悲しみだつたであらうか。

次の日から、傷も癒えぬ内に西郷は動き出した。

陰陽寮は当てに出来ない。不意を突かれたと言えど、怨霊の牙は確かに彼らを深く傷つけた。しかし、己一人では勝てないと言う事も、その身をもつて確認している。

質より量を、とも思つたが、生半な力では只さらされる骸の数が増えるのみであろう。陰陽寮に詰めていた陰陽師は、ピンからキリまであれどもそれなりに腕のある者達。それで勝てないと言うのなら、それこそ、一騎当千の力を持つものを。

そんな西郷の耳に入ったのが、京で最近噂の、凄腕の巫覡の事。陰陽寮でさえ手を焼いていた悪霊、餓鬼、その他諸々の悪しき者達を打ち払う、剛の者達の噂。

陰陽寮のほうには、今回の事を収める代わりにしばらくお目こぼしを、と言う事で話をつけた。

後は、本人達を見つけるだけ、という所で、神の思し召しかはたまた運命の悪戯か。空を行く怪しい影を見つけ、追跡に式紙を飛ばして背中に貼り付けて。

アジトへと戻った所で、こうして交渉に来たのだと。

「うそっ?! 何時の間になっ?!」

「あんたほんとーに神様かっ?!」

「そんな目で見ないで欲しいのね〜! 灯台下暗しって言うのね〜!!」

西郷は、明日の朝、答えを聞きに来ると言つて出て行つた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「やはは……俺らしいって言うかなんちゅーか」

「……………」

「えと、美神さん？」

小屋の中には、重い空気が漂っていた。西郷が見せた、決意に満ちた表情のせいもある。だが、最も大きな原因は、口を閉じたまま動かない、美神。

彼女は顔を伏せたまま、ただ、沈黙している。

「う、受けるんすよね？ 報酬も良いし、何たってこつちには「ねえ、横島クン」……はい？」

そんな空気の中で、必死に一人話していた忠夫に掛けられた声は、とても沈痛な物であった。

顔を上げた美神の目には、普段は見せない心細げな色がある。

「な、なんつすか？」

「……あんたは、馬鹿よ」

「……………」

唐突に発せられた言葉にも、何故か何時ものような覇気が無い。囁かれた言葉は確かに悪口なのに、忠夫の耳には、泣き出しそうにさえ聞こえた。

「……馬鹿で、元気で、あけすけで。ちよつと使えそうだから雇ったのに、靈力は使え

ないとか言うし、美人と見れば見境無く嫁に来ないかって言うし」

「あうう」

「でも、でもね」

美神は、戸惑ったように。あるいは、何かを見つけたように、只、言葉を続けていく。
「・・・死んじやつたら、その、あの、ええと・・・私は、多分、困る、わ」

其処まで言つて、美神は顔を真つ赤にして俯いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人の間に、とつても微妙な沈黙がわだかまる。美神は真つ赤な顔のまま動かないし、忠夫は忠夫で言われた事が予想外すぎて固まつたままである。

「・・・う、あの、えつと。美神さん？」

「なななな何よっ?!」

「偽者?」

真つ赤な美神の飛び膝蹴りは、およそ3倍だったとか何とか。

「顎がつ?!顎がああつ?!」

「ふ、ふんつ! 全く、へへへ変に気を使う必要なんて無かつたじゃないのよっ!!」

顎を押さえて悶え苦しむ忠夫を余所に、美神は憤然としながら窓の傍に立つ。

星は明るい。都会のように空気が汚れておらず、また光も少ないこの時代。月も星も、夜空を我が物顔で照らし出していた。

「——やってやろうじゃないっ! 道真だろうが神様だろうが悪魔だろうがっ! きつちりしばいて、報酬がつぽり頂いてやるわ! おーっほっほっほっ!!」

「顎がああつ?!」

「・・・結局、何時も通りなのね」

窓の縁に身を乗せて、夜空に向かって高笑いする美神の横で。ちよつと気を利かせて外に出ていたヒヤクメが、お酒をあまりながらそう呟く。

笑いを堪えながら、美神に見つからないように背中を丸めて窓から離れ、反対側まで

歩いていく。

見つかつたら、多分酷い事になる。だって、彼女の耳は、未だ赤さを失っていないのだから——。

「心配ご無用！ 頑丈さとしぶとさだけは自信ありつすよっ！」

「ま、期待しないで——つてのは、無し。いいわね？ しっかり頑張りなさい！」

「・・・くすくす」

第拾陸話。

「ぶえーつくしっ！．．．うー、さぶさぶ」

台の上に体を起こした“高島”が、裸の腕を擦って寒さを誤魔化し辺りを見回す。彼自身は知らないが、再度の調整でその獣毛に包まれていた体は、一応普通の肌の色を見せていた。

「．．．此処、どっよっ」

ビーカーにフラスコ、何に使うのか分からない鉄のような金具に、えらく尖った錐が幾つも並んでいる。怪しい器具に囲まれながら、高島は寒さに体を振るわせた。

「うおっ?! 俺、裸じゃねえかっ！．．．ちくしよー、美人のおねーさん方と朝を迎えるんならともかく、こんな所で裸でいたって面白くもねーな」

そう呟きながら、高島は台から降りて辺りを漁り始めた。流石に何時までも裸でいる事には抵抗があるようだ。しかし、辺りにあるのはあんまり触りたくないような何かとか、蛍光色に塗られた手の平サイズの球体とか、壁にずらりと並んだ空っぽの、人一人が入れそうな大きさのカプセルとか。

そんな場所を、素っ裸で漁る一人の男性。はつきり言つて、犯罪以外の何者でもありません。

「……なんもねーな」

辺り構わず探し回るも、服の代わりになりそうなものは一切無し。いや、有るにはあつたが。

「……どう見ても、女用だよな」

寝ていた台の下にあつたのは、女性用と思しきやたらと露出の多い服。手足をびつたり覆う部分はあるものの、何故か胴体部分の多くが網目になっていると言う、深く考えなくても中々に、目の毒になりそうな服である。

「……」

それを手にとつたまま、あたりをキョロキョロ無言で見渡す高島。挙動不審もいい所である。服を見たとき頭に何かが掠めた気もしたが、とりあえず、この服は使用済みか否か。それが彼にとつての最重要事項である。

ちなみに、繰り返すようだが、素っ裸。

「ばいーん！ きゅっ！ ばいーん！ ……だな。間違いない、きつと美人のねーちゃんを着てるんだらうなあ」

ぐぐぐっ！ と顔が迫り、一瞬我に返つて距離を取る。しかし、再び気付けば目の前

に。

「・・・はっ！ いかんいかんっ！ そんな事よりも服を探す・・・一寸だけならいーよ
ね？」

誰に問い掛ける訳でもなく、誰もいない部屋に高島の問いが響き渡る。当然返事は返つてこないが其れこそ望む所である。

「・・・でけえ。流石だ」

何が。

「ほそっ！ いーぞいーぞっ！ 期待が持てるぞこれはっ!!」

何に。

「くんかくんか・・・ほわあく、えく匂いやく」

嗅ぐな。

「高島殿ー！ 目が覚め・・・た・・・？」

ばん、と音を立てて開かれる部屋の扉。其処から飛び込んできた女性と、バツチリ目が合う高島。因みに真つ裸で、目の前の女性と同じ服の匂いをかいでいる真つ最中。

「・・・あれ？ メフィスト？ あれ、夢じゃなかったのか？」

「た、たたたた高島殿っ?! それ、私の・・・」

「・・・うおおおっ！ メフィスト、無事だったかああっ!!」

ばたばたと指差した手を振りながら、メフィストは真つ赤になって混乱中。其処に、感極まったように泣きながら飛び掛る高島。彼的には、感動の再会とかそーいう美しいシーンなのかもしれないが、なにせ相手は生まれて一年らしい初心な女の子。勿論、男性の裸なんて見るのは初めてな訳で。

「んきやあああつ?!」

思わず悲鳴が飛び出すのも当然である。それに構わず、ダイブを敢行した高島は、そろそろ落下を始めている。着弾点は正確にメフィストの胸の中。

しかしながら、此処には彼女の父親みたいなのが居るわけで。

「人の娘に何してやがるかゴラアアッ!」

空間を引き裂いて現れた、額に井桁を浮かべた紫色のマツチヨな魔神のドロツプキツクは、見事に滞空中の高島の顔面に突き刺さる。思いつきりカウンターで喰らった高島は、悲鳴をあげる事さえなく吹き飛んだ。

「・・・はっ！ 川の向こうで美人のねーちゃんが手招きをつ?!」

『目が覚めたようだな』

高島が意識を取り戻した時には、既に魔神とその娘の姿は無かった。代わりに、土偶が彼の横で、額にコード付き吸盤のような物を押し当てて、何かを計測中である。ふと高島は何時の間にか、着慣れた陰陽師の服を着ている事に気が付いた。

「・・・あんた、何?」

『気にするな。アシユタロス様がお待ちだ、とつとつその扉を出て左に行け。黒い扉の奥だ』

キュポン、と音を立てて高島の額から吸盤をはがしながら、土偶は機械のモニターを振り向いて操作し始める。その背中が、厄介事は御免だと全力で主張しているようにも見えたので、高島は素直に出て行くことにした。

言われた通りに扉を潜り、狭い通路を歩いていく。暫しの間も無く現れたのは、言わ

れた通りの黒い扉。

おずおずと其れに手を掛けようとすると、扉は勝手に開いて高島を受け入れる。空ぶった勢いで中に飛び込んだ高島の目に写ったのは、結構な広さの部屋の中心に置かれている、いかにも年代物の机と、それを囲むように配置された巨大な本棚。そして、机の向こうに置かれた椅子に座る、先程ドロップキックをかましてくれやがった紫色の角付き男と、真つ赤な顔でこちらをちらちらと見るメフィストである。

「・・・意外に早かったようだな」

「おー、メフィスト！ 元氣だったかー？」

「ひゃうっ?!」

重々しい口調で話し掛けてきた、マツチヨな角付きを綺麗にスルーしてメフィストに話し掛ける高島。長い耳まで真つ赤に染めながら、妙な声を上げたメフィストは高島の声に反応してちよつと後ずさる。

「・・・無視するんじゃない」

「なんだよー、そんな恥ずかしがる事ないじゃんかよー。いつかは見せあうんだから。さあ・・・このまま人気の無い所へでも」

「みみみ見せ合おうっ?! 何をつ?!」

「大丈夫、優しくするから!!」

「何がよっ?!」

完璧に無視された形のアシユタロスは、何時の間にか自分の隣で娘に迫っていた馬鹿と娘の間にさり気無く——全く持ってさり気無くなかったが——割り込んだ。

背後の娘がなんとか回り込もうとしているのを体捌きだけで妨害しつつ、目の前の男を睨み付ける。

「……ええと、どちら様で?」

「メフィストの父だ」

「……おお、お義父さんっ?!」

「ききき貴様にお義父さんなどと言われる筋合いはまだ無いわっ!!」

其処まで叫んで、深呼吸。冷静に冷静にと己に言い聞かせつつ、高島を睨む視線に更に力を籠めてやる。殺気が多少籠ってしまったのは気のせいだ。

「高島とか言ったな? お前は、わが娘を愛しているのか?」

「……へ?」

目の前のマッチョから放たれた言葉に、一瞬呆気に取られて妙な声を上げる高島。魔神の後ろでは、その娘が回り込む事を止めて何故かもじもじしていたりする。

「どうなのだ?」

「……愛? 愛……。何だろう、涙が溢れてくるや……」

遠くを見ながら、何故か涙を堪える仕草をする高島。

上を向いて。涙が、零れないように。

「・・・まあ、嫌いなら命懸けで庇ったりはしないっすけど」

何とか意識が戻ってきた高島の口から、小さく零れたのはそんな中途半端な言葉だった。頬をぽりぽりと搔きながら、高島は目を合わせずにそう言った。娘が背中の後ろでむくれている気配を感じながら、魔神は苦笑いとともに話し始めた。

「確かに、それは認めるほかあるまい。娘の無鉄砲さによってお前が人間でなくなってしまう事は、謝らねばならん」

「・・・へっ?!」

「なんだ、気が付いてなかったのか？ お前の体は、今、人狼と呼ばれる妖怪の物だ。まあ、実際には他にも色々混じっているが・・・その影響は現在調査中だな」

「・・・マジで?」

呆れた様に呟いたアシュタロスの言葉に、高島は暫し呆然とした表情になる。先程——意識を失う前までは、人間として生きていたのに突然妖怪になったと言われれば、反応に困るのが普通であろう。

何せ、最早以前の自分ではないのだから。

「・・・どうした?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

顎に手をあてて悩み始めた高島と、背後で深刻な表情になっている娘に気付かれないように。アシュタロスはその平に魔力を溜め始める。

——目の前の男が、娘を傷付けるような言葉を吐いたその瞬間にこの世から完全に消滅させるつもりで。

娘は可哀相であるが、この際しようがない。記憶を操作する、と言うのは絶対にやりたくないが、余りにも気に病むようであれば、それも考えに入れておこう。其処まで考えながら、高島が放つ言葉を待つ。

「なんだ、それだけかよー。ビビったなあ、もう」

「・・・・はあ？」

魔神様は、思わず此処数千年来無かった事に、顎が外れると言う気分を味わう事になった。

「そ、それだけか？」

「そりやもうっ！ 死んだと思ったのに生きてて、しかも俺に惚れる予定の美人のねーちゃんがいるっ！ まさに男子の本懐であるっ!!」

びしっ！ とやたら元気に親指を立てる目の前の男に、アシユタロスは手の平に溜めていた魔力を霧散させられた。

呆れた。心底呆れていた。

メフィストを気に掛けて、とか、嘘をついているとかではなく。どうやら、心の底から本気でそう思っているようなのである。

——よっぽどの大馬鹿か、とんでもない大物か。

こみ上げて来る笑いの衝動を堪えつつ、背後で驚いている娘を見やる。どうやら、流石にやり過ぎたかも、と後悔していたようではあったが、男の様子にこちらも啞然としているようだ。

先程までの、男がこの部屋を訪ねるまでの悄然とした様子は何処にも無い。

「嫌われるかも、と言っていたな、メフィスト。どうにも、お前の惚れた相手は、中々に面白い」

「ア、アシユ様！」

「お父さん、だ」

どうやら其処は譲れないらしい。何故か真面目くさった顔でそう告げるアシユタロスに、メフィストは拳に力が籠るのを自覚しつつその隣をすり抜ける。今度は妨害されなかった。

「高島殿、御免なさい。私が勝手に・・・」

「あー、良いってもう！ ほら、そんな顔するんじゃないやねえっての！ 可愛いのが台無しじゃねーか」

軽く笑いながらメフィストの頭を撫でる高島を見ながら、アシユタロスは机の引出しを開いて一本の棒を取り出した。長さ30Cm程の、飾り気の無いシンプルなそれを、振り向いたメフィストに投げ渡す。

「良からう。条件はさつき言った通りだ」

「・・・本当に？」

「我が名とお前に賭けて誓おう。但し、一回は戻ってくる事」

其処まで聞いて、メフィストは輝くような笑顔でアシユタロスに抱きついた。離れ際になほつぺたにキスをしながら、言葉を残して駆け出していく。

「——ありがとう、お父様っ！」

「どわああああっ?!」

棒を受け取った反対側の手で高島を引きずりつつ、とんでもない速度で飛び出していった娘を見送りつつ、アシユタロスは、顔が緩みそうになるのを必死で我慢していた。

「行くわよ、高島殿！」

「何処にだっ?!」

「道真公の怨霊をぶったおしに！ 倒せたら、一人で好きな所に行つて好きな事やつても大丈夫だと認めてやるつて！」

「……いやじゃあああつ！ また死にたくねええええつ！」

「最後に道真公が目撃されたのが、此処だ。．．．本当に、大丈夫なのか？」

「任せるのねー。これでも一応神様なのね〜」

京の外れの開けた場所、美神達と西郷は、地面に方陣を描いたり、あちこちに符を貼り付けたりしながらヒヤクメに話し掛ける。

「大分神通力もたまったから、簡単に見つけられると思うのねー」

広場の中心に一人立ちつつ、目を閉じて軽く言葉を交わすヒヤクメと、そこら中を美神の指示の元走り回っている忠夫を見ながら符を敷いていく西郷。

「こんなもんっすかね？」

「まあ、この時代ならこれが精一杯かしらね。私の使える術体系とは、ちよつと違うから」

そうこうしている内に二人も戻ってくる。それを確認しつつ、西郷は方陣の中心にある小さな花を見た。

梅の花、である。

「道真公の屋敷にあった梅の木から株分けされた梅の花。おそらく、これを媒介とすれ

ば此処に呼び出せるとは思うが……」

「所詮は本物じゃないから、近くにいないと効果は薄いのね」

権力の集中を嫌う藤原氏などの有力貴族の反発が表面化するようになり、また、中下級貴族の中にも同調するものが現れ、当時右大臣に昇進し右大将を兼任していた道真公は、齊世親王を皇位に就け醍醐天皇から篡奪を謀ったとされ、罪人として大宰権帥に左遷されたという。

その時に、梅の花に「自分が居なくても春を忘れるな」と歌を残して去って行った。

その梅の花に繋がる物を触媒として利用し、道真公を自分たちの戦いやすい時間と場所に誘き出す。

とは言え、あちこちにコネのある西郷だからこそできた事ではある。何せ、一応罪人として扱われた人物の事である。それに繋がる梅の木を探し出すだけでも一苦労であるし、あくまでも陰陽寮には関係無いというスタンスを貫く以上は、西郷個人の力のみで施術を行なうしかない。

「ま、今回は運が良かったみたいなのね。居るわ、近くに」

「……そうか」

何時になく真剣な表情のヒヤクメの言葉に、一言だけ返して花の傍に立つ。そのまま地面に座り込むと、西郷は徐に念を凝らし始めた。

「・・・気付いたみたいなのね」

「横島クン、行つて」

「ういっす!」

美神の視線と声に促され、忠夫は瞬時に駆け出した。その姿は寸暇の間も置かず近場の木陰に消え、残るは方陣の中心で念を凝らす西郷と、視線を遠くに向けながら集中しているヒヤクメ。神通棍を構え、破魔札を左手に広げて戦闘準備を整えた美神。

「・・・うわあ」

「梅の香りが凄いわね」

方陣が僅かに輝くと共に、辺りに梅の花の香りが広がり始める。西郷の霊力が高まるとともに、その匂いは更にきつくなり。

「来たのねー!!」

ヒヤクメの声と同時に、一瞬にして禍々しい雰囲気は蹴散らされた。

「・・・があ?」

「道真公・・・!」

「な、なんか人格崩壊してない?」

「で、でも、とんでもない魔力なのねー!!」

溶け出すように現れた道真公は、一瞬だけ呆然とした様子であった。しかし、次の瞬

間には訝しげに辺りを見回す。

その瞳が、虚ろな感情を宿さない瞳が、美神達を見つけた。

——にやあああり

歪んだ唇から狂気が零れるような、そんなおぞましい笑いであった。ゆつくりと近づいてくる道真公。その両手には、鋭い爪が伸び始めていた。

「来るわっ!」

「があああああっ!!」

道真公の体から、幾条もの雷が舞い上がった。それは意識を持つかのように、落ちた地面を焼きながら美神達へと迫っていく。

「在思の念、災いを禁ず! 雷よ、退けっ!」

西郷の声とともに、雷の進行方向が僅かに歪んで、隣を行く雷に接触した。その瞬間、雷は互いに強烈な爆炎を巻き起こしながら地面を焼き砕く。

「くそっ! 進路を歪めるだけで精一杯かっ!」

「ちよつと、強すぎるわよっ!」

「当たり前なのねー! この時代の陰陽寮は、この京の状況のせいもあって凄腕ぞろいなものねー! それが、わきゃあ!」

「それが、あつさりコイツにやられたわけ、ねっ! そりゃ強い筈だわ!」

飛び交う土塊と石から身を守りながら、3人は言葉を交わす。愚痴るだけ愚痴った美神は隣に立っている西郷に視線で合図を送った。

「はっ!!」

西郷の気合の声とともに、土煙に囲まれた視界の無い広場に、幾つもの人影が生まれ出す。それは、西郷と美神の姿をした式紙達。

「私の灵力でブーストした西郷さんの式神！ 見抜けるかしら?!」

「美神さんの右、30m先なのねー!」

ヒヤクメの声に反応し、すぐさまそちらに破魔札を飛ばす。未だ舞い上がる土煙の向こうで何かが爆発した。

「・・・あんまり効いてないみたいなのねー」

「ああもうっ! 結構高い上に残り少ないのにつ!」

理不尽さに悲鳴をあげながら、美神は己の姿をとった式紙と場所を入れ替わる。間髪入れずにその式神は、飛び出して来た道真公の爪に切り裂かれた。

手応えのなさに悠長な事に首を捻る道真公の背後から、美神は神通棍を振り下ろす。

「があっ?!」

「ちっ! 流石にしぶとい・・・!」

「はあっ!」

慌てて振り向いた道真公の背中に、西郷の放った靈力が突き刺さる。しかし、道真公は直撃を受けたにもかかわらず怯んだ様子さえ見せなかった。

辺りを覆う土煙に紛れ込みながら、美神も西郷も式紙と場所を入れ替わる。次の瞬間にはそれが雷に焼かれて元の紙に戻るのを視界の隅に入れながら、美神は懐から破魔札を取り出した。

「チャンスは一回……！ 仕込んだ靈的煙幕が効いてる内に、ヒヤクメ、頼んだわよっ！」

「了解なのねー！」
威勢良く聞こえる軽い返事にちよつと不安を覚えつつ、美神は荒れ狂う道真公の背中に突っかけた。

「大分苛ついてきたようだな・・・」

「ええ。とは言えこつちもそろそろ危ないけどね・・・つと！」

既に式紙はその数を残り数体まで減らされていた。土煙に偽装して靈的に展開された煙幕も、そろそろ功かが切れる頃だろう。煙幕の向こうから伸びてきた雷をぎりぎりであわしつ、美神と西郷は汗だくで動き回っていた。

「があああああつ!!」

「・・・しぶといわねえ。」

「呑気に言ってる場合じゃないと思うんだけどね」

既に何度神通棍で切りつけただろうか。何枚の破魔札を直撃させただろうか。それでも、も道真公は弱った様子を見せ無かった。

いい加減呆れた思いも浮かぶ物の、美神にとつては受けた依頼を果たすと言うのが信念である。

「ヒヤクメ、まだなのっ?！」

「まだなのねっ! もう少し・・・! 後右に3m!」

西郷と同時に道真公の左右から突っかける。振り向いた道真公が雷を発する直前で、今度は背後から式紙がいきなり飛び掛った。道真公はそちらが本物と思ったか、振り向

きながらそれに向かつて爪を振るう。しかし、それは式紙。そのことに気付いた瞬間には、美神と西郷の攻撃が顔面に直撃していた。

「ぐがあっ?!」

「・・・今なのねー!!」

よろめいた道真公が、方陣の中心に足を踏み入れる。間髪入れずに美神と西郷が印を組み、仕込まれた罠を発動させた。

方陣のあちらこちらから、輝く紐が投げかけられる。それは道真公のあちこちに絡みつき、その動きを繋ぎとめる。

「横島クンっ!!」

「ういっすっ!!」

その背後から、突然忠夫が出現し、手に持った如意棒を振り上げた。道真公は拘束されておろ、避ける事は不可能――。

「がっ!!」

不可能な筈、であつた。

一声吼えた道真公は、一瞬で拘束を引きちぎり。

右手の爪で、背後から突撃して来た影に向かつてそれを振り上げ。

振り下ろされた先は、首。

影の首を、その爪は薙ぎ払いながら切り落とした。

——道真公が、唇を歪めて嘲笑する。

——美神と西郷が、してやったりと笑った。

切り裂かれた人影が、小さな紙切れになって宙を舞い。

戸惑って動きを止めた道真公の上から、音が聞こえた。

次の瞬間には、轟音が、道真公を左右に分断した如意棒が地面に突き刺さって鳴り響いた。

「あたたたた・・・・」

「よっしやあつ！」

「しかし、本当に頑丈だね、君は」

「全くなのねー」

道真公の体は、正中線から真つ二つに裂かれて地面に倒れていた。その横で立ち上がる忠夫。手には如意棒を持っている。

その様子を確認して、ガッツポーズをとる美神と、呆れと喜びの混じった表情の西郷。ヒヤクメも苦笑いしながらそれを見ている。

——煙幕で視界を奪いつつ、捕縛結界の中心に誘導し、それに捕まった道真公の背後から、一枚だけの忠夫の姿をとった式紙を発動させる。

美神と西郷の式紙だけしか見ていないため、それを即式紙と結びつけるのは難しい。しかも、他の式紙に比べてちゃんと——一言だけとは言え——言葉を話す、ちよつと格上の奴である。

仕留めたと思って動きを止めた所に、煙幕の向こう側で、如意棒を地面に突き刺して伸ばし、上空で待機していた忠夫が思いつきり空中から奇襲する。

間違い無くこちらの持ち札の中で最大威力を誇る如意棒の一撃は、そうして道真公を切り裂いたのだ。

「ううう・・・しんどかった」

「私たちのほうがしんどかったわよ・・・」

「まあ、今日はもう動きたくない気分だね・・・」

「神通力も空っぽなのね」

4人は揃って疲れた息を吐くと座り込む。何せ相手の火力はこちらよりも遙かに上。掠っただけで黒焦げ確定の雷を、何回も避けつづけていた二人の疲れは大変な物だった。

その為もあるうか。目的を達成した喜びが、彼らの注意力を奪っていた為もあるうか。

あるいは、ヒヤクメに神通力の残りが有れば、そのことに気付いたかもしれない。

だが、結果として。

「があああああつああつ！ ああああああつ!!」

「「・・・っ!!」」

道真公は、まだ、消滅してはいなかった。

分かれたれた半身を無理矢理右腕で押さえつけながら、左腕には今までに無いほどの巨大な雷が宿っている。

4人がそれに反応するよりも早く、それは地面を蒸発させながら迫り来る。

如何あがいても、避けられるタイミングではなかった。

「——つつせりやああつ!!」

「見つけたあつ!!」

その雷は、宙を駆けて来た女性の一撃で弾かれ、進路に割り込まれ、ずらされる。その直後に、女性にぶら下がっていた男が飛び降り、その雷を右手を突き出し上空に跳ね上げた。

「——高島、けんつぎんつ!! . . . やっぱ怖えええつ!!」

「私と高島殿の幸せの為に、道真公、再戦よつ!!」

「「. . . はあああつ?!」」

人狼の体を持つ元陰陽師、高島と。

魔神の娘、メフェイスト。
空に広がる爆炎を背に、大見得切つての登場であつた。

第拾漆話。

『アシユタロス様、結果の方が出ました。．．．しかし、これは』

「ふむ。見せてみる」

書齋のような、と言うよりも正に其処は書齋なのだろう。部屋の中心に置かれた重厚な机を囲むようにおかれた本棚。それに隙間無く詰め込まれた本の数々。どれもこれも、まがう事無く知識の詰まった箱である。

机の上に腰掛けたアシユタロスは、部下の土偶が持つてきた書類を受け取りながら、部下の不安げな声音に眉根を寄せた。

どうやら、あまり良い結果が出なかつたようである。溜め息をつきたい気持ちを堪えつつ、手元の書類の束を捲り上げていく。

「．．．これは」

何枚かに目を通した時点で、アシユタロスは絶句する事を余儀なくされた。それから、言葉を発する事も無くひたすら紙を捲り上げていく。

全部の書類に目を通した時点で、アシユタロスの口元からは疲れたような溜め息が、そうとは知らずに零れ落ちていた。

『不安定すぎます。あの個体は、獣の集合体としての素体でしょう。本能と言うのか、自己保存というのか・・・ともかく、そういった物が互いに干渉しあつて、徐々に——』

「獣を媒体にした下級魔族の生産は、難しいか。そう言った意味では、メフィストが昆虫を媒体にした単体特化型であつたのは僥倖だな・・・」

『ええ。ですから、あの高島という青年の体は——』

苦々しげに眩きが洩れる。それは、娘の悲しみを思い浮かべてしまったせいか。

「・・・あと、数ヶ月、か」

『サンプルとして集めていた素体を破棄します。・・・どうされますか？』

土偶が、目を合わせる事無く、そう主に尋ねる。アシユタロスは顎に手をあて、何かを考えているようだ。

手元のリモコンのような機械を操作し、ハニワ兵に指示を与えつつ、土偶はアシユタロスが言い出すであろう事を考えて、溜め息が出る思いであった。

・・・何故なら、己の主が娘の泣き顔なんて見たいと思うような、若しくは気にしないような人物であれば、そもそもこんな状況にはなっていない訳で。

「娘を悲しませる訳にはいかんさ!! 良し、分離装置の製作に入るぞっ!!」

『あー、やっぱり』

「何をしている? 手伝え、あいつらが帰ってくる前に仕上げる必要がある」

『ハイハイ。そう言い出すだろうと思ってハニワ兵達に準備させてます』

両の手を打ち合わせて、娘の笑顔と幸せの為に動き出した魔神様。部下の土偶は、これからしばらく突貫作業が続くであろう事に、始まる前から疲れたような声を出した。

早足で出て行く主を見ながら、手早く書類を纏めてその後を追う。失敗するとか、不可能であるとかは考えていない。此処最近の主の能力と親馬鹿っぷりを一番知っているのは、彼なのだから。

「ふーはーはーはーはあっ!! 娘を送り出すのは父の役目! 後顧の憂い無く幸せになつてもらおうではないかあ!!」

『・・・はあ』

ただ、ちよつと最近ネジが外れ気味ではないかなー、と思う中間管理職である。

「・・・高島?」

「あれ? 西郷じゃねーか——手前、よくも俺を牢にぶち込みやがったなあ?!!」
「・・・本当に、高島か?」

高島・メフィストが乱入して来てその直後。一番反応が早かったのは西郷であった。何故、目の前に高島がいるのだろうか。死んだという報告は受けている。遺体の確認もした。確かにそれは本人で、なんとも表現しづらい感情が浮かんできたのを憶えている。

る。

しかし、今、目の前で己の胸倉を掴んでいるのは確かに、あの馬鹿。

少々どころでなく雰囲気——と言うか、人外の気配はする物の、癖や仕草、そう言つた物が、確かに彼の記憶と合致する。

「おう！　ちよつと色々あつて獣混じりになつたけど、な。うははははつ！　美女の為

なら死んでも生き返つてやるわいつ！！」

「は、はは。ははははははつ！！」

そうだ。

こいつは、そう言う馬鹿だった。

込み上げて来た感情は、決して歓喜等ではない。喜びでなく、動揺でなく、驚きではなく。

そう——「高島は、そう言う奴だ」と言う、再確認。

「そうか・・・そーか、そーだったな。君つて奴は、そー言う奴だった」

「ふふふ。どーだ、驚いたか」

「いや、なんだか馬鹿らしくなつた」

互いににやりと笑いつつ。同時に振り向けば、其処には道真公が居る。しかし、最早不安は無い。互いに考えている事は同じ。とつと邪魔者ぶつ飛ばし、一回酒でも奢ら

せてやろう。

「んじゃ、先手はお前な」

「……獣混じりなんだろう？ 君のほうに向いてるんじやないのかい？」

「……それとこれとは別問題だろうが」

とは言え。二人並べばいつかの通り。

「うわー。えらい美神さんとそっくりな女性やなー」

「そりやそうなのねー。あれ、美神さんの前世なのね」

忠夫とヒヤクメのちよつと先では、美神とメフィストが睨み合っていた。美神は神通棍を構え、何故かやたらとピリピリしている。メフィストは特に悪感情は無いようだが、それでも目の前に立つ女が殺気を——と言うか、苛立ち混じりの気配を振りまいているのには反応している。

「……何よ」

「……あんた、魔族よね？」

神通棍を斜めに構え、それに通す靈力を増大させる。妙神山での修行の成果か、靈力量は以前の物とは比べ物にならない。

それをチラリと目だけを動かして観察し、メフィストは美神を睨み付ける。

「ええ。それがどうしたつてのよ？」

「私の前世が、魔族？　．．．んでもってあの馬鹿の前世が元陰陽師で、人狼？」

ぎりぎり、と美神の口元から、歯を食いしばる音が聞こえる。どうやら、かなりご立腹のようである。

「ちよつと、馬鹿つて何よ。私の夫にケチつける気？」

「はあ!？」

かくん、と美神の構えた神通棍の先が落ちた。抜けてしまった靈力を慌てて通わせなおしつつ、美神は足に力を籠める。

「私はねー、これからあの怨霊ぶつたおして、二人で暮らすの。沢山子供産んで、幸せな生活を送るのよ。邪魔しないでくれる？」

「．．．．．へ？」

神通棍から靈力が完全に抜けて、只の棒切れと化した。

——二人で暮らす？　沢山子供を産——

ぶんぶんと、やたらと高速で頭を振る美神。亜麻色の髪が、しつかりと整えられた髪型が崩れるのもお構い無しに、ひたすら今頭に浮かんだ考えを打ち消す為に努力する。

美神がようやく雑念を払った時には、メフィストは既に高島の下へ駆け出していつていた。

「．．．成る程。分かりましたよ美神さん」

「うきやあつ?!」

何時の間にか忠夫が背後に立っていた。囁くような声であったが、不意打ちの形で聞かされた美神は飛び上がる。

「ななな何がよ横島クン?!」

「つまり、美神さんが嫁に来るのは前世から決まっていた事なんすねえつ?!」

忠夫、ジャンプ。アンド、ダイブ。振り向いて後ずさり、距離を離れた美神に向かつて跳躍。一瞬の動揺さえあればいい。その隙さえつけば、今の美神さんなら抱きつく事さえ可能だ――。

「――つだりやあああつ!!」

「キヤイーン!!」

だが甘い。美神の攻撃は、既に条件反射の域。例え意識が反応しなくても、体に染み付いた反応が、美神の体を勝手に動かして迎撃する。

飛び込んだ忠夫を迎えたのは、柔らかい胸では無く、硬い膝と抉りこむようなアツパーの連係であった。

「高島殿？」

「お、メフィスト。所であのお前そつくりな美人さんは誰だ？」

開口一番ふざけた事を抜かす口を引つ張りながら、メフィストは高島の隣に着地する。

「ははは・・・どうやら、君が高島と一緒にいた女性か」

「あら、ドーも。メフィストって言いますの」

あくまでも淑やかに、頬に手をあてながら挨拶するメフィスト。外向きの笑顔も完璧だ。只、高島の唇を引つ張っているもう片方の手を無視すれば。

何時の間に身に付けたかは知らないが、どうやら近所付き合ひも大丈夫なようである。

「ふむ。どうやら君なら高島に手綱を付けられるようだね。いや良かったな高島、これでお前も年貢の納め時のようだな」

「人聞きの悪いことを言うなっ！ 大体俺はその程度で他の美女を諦めるような「た・

か・し・ま・ど・の？」スミマセン！一寸した気の迷いです！」

引き剥がした唇を摘む手が、何時の間にか己の首を掴んでいる事に恐怖を覚えつつの高島の言葉であった。西郷はそれに何とはなしに愉快さを覚えながら、再び道真公に向き直る。

「いちやつくのは後にしてくれ。あいつを祓った後なら幾らでもしてくれて構わないから」

「お前にはこれがそー見えるのかおいつ?！」

「あらあら♪ 何処から見ても仲の良い夫婦でしょう?！」

張り詰めたと言うには程遠い。しかし、何故か心地よい雰囲気のまま。全力の攻撃をあっさり跳ね返された事による動揺から立ち直った道真公に立ち向かう。

「があああつ!!」

「んふふー。アシユ様から受け取った秘密兵器の力、思い知らせてあげるわつ!!」

メフィストが手を振ると、その手の中には一本の棒があった。それは、アシユタロスから受け取った、飾り気の無い細長い棒切れ。それを握って力を籠めると、その先端から、とんでもない輝きが溢れ出した。と同時にビリビリと辺りの空気がそのエネルギーの余波で震え出す。余りの圧力に、思わず高島と西郷は数歩退いた。

「私を通してエネルギー結晶から引き出したこの力、受け止められる物なら受けてみな

さいっ!!」

「……とんでもないね。夫婦喧嘩は死に繋がるよ?」

「……俺もそう思うわ」

一振りすれば空を切り裂き地を砕き。そんな凶悪な、というのも生易しい神通棍に良く似た武器を構えつつ、嫌に生き生きとした目をしているメフィストからちよつと引きつつ。

男性陣は、何とはなしに道真公が可哀相になつてきていたりもする。

道真公も、完全に腰が引けていたりするが。

「——ちよつと待ったあつ!」

「美神さん、ストツプ、ストーツプ!!」

「あれは美神さんの前世でも、美神さんとは関係無いから気にしないでいいのねー!!
つていうか気にしないで欲しいのねえっ!!」

其処に、ずりずりと忠夫とヒヤクメを引きずりながら美神が乱入する。引きずられる二人も必死である。何せ、メフィストが持っている武器はとんでもない威力があるようにしか見えないし、美神は美神で真つ赤なままで打ち切れている。

そんな二人の接触など、考えただけでも恐ろしい。美神の腕を引つ掴んで、全力で半人狼と神様が押さえつけているのに、美神は全く意に介した様子も無い。

空恐ろしさを憶えつつ、しかし二人の決死の努力は報われない。

「・・・何よ」

「納得いかないわっ！ 何で私の前世と横島君の前世がくつついちゃってんのよっ?!」

「み、美神さんも大概意地っ張りなのね〜」

冷や汗を垂らしながらのヒヤクメの台詞に、殺気の籠った視線で応えてやる。あつさり沈黙した彼女は放って置いて、胸倉に掴みかからんばかりの勢いでメフィストに迫った。

「あんなのの何処が良いわけ?! 美人と見れば見境なしだし、馬鹿だしアホだし間抜けだしどっか抜けてるしっ!!」

「何ですってえっ?! 高島殿の事も良く知らないくせに何であんたに其処まで言われなきやならないのよっ!!」

「こそばゆいのよっ！ 痒いのよっ!! 幾ら前世だからって、横島クンと——ゴニョゴニョ——じゃなくたって良いじゃないっ!」

「だって、惚れちやっただかしようがないでしょっ!」

「やーめーてーっ！ 私と同じ顔でそう言う事言うなああっ!!」

ぎやあぎやあわいわい喧々轟々。

突如始まった二人の口喧嘩に、周りの人間も呆れて声が出ない。と言うか、撒き散ら

される殺氣と靈力、魔力の奔流が、辺りに火花を散らしまくっているので大層危険でさえ、ある。

「・・・がー」

ぎやあぎやあ。

「・・・がああつー！」

ばちばちどかーん。

「があああつ!!」

ぎやー、死ぬ死ぬマジで！ 美神さん、落ち着くのねえええつ！ 高島あつ、横島君

でもいいから何とかしろおっ!! できるかああつ!![×]2

「うがああああああああああつ!!!」

「喧しいっ!!」

しばらく放って置かれながらも、何故か大人しく待つていた道真公は、とうとう痺れを切らしてこつちを向けとばかりに大声で吼えた。

しかし、それはこの場合、最悪の行動である。

口喧嘩しながら、無意識の内にあたり甚大な被害を及ぼしていた二人が、同時に振り向く。やかましくも大声で叫んだ道真公に、視線は互いを睨んだまま同時に神通棍とアシユタロスの秘密兵器が向けられた。

それは、額をぐりぐりと擦り付け合いながら、頭突き一步手前な視殺戦を繰り広げている二人の腕の先でぶつかり合い、火花を散らして重なり合う。と、まるで音叉がぶつかった時の様な、澄んだ音がその重なった地点から響いた。

瞬間、アシユタロス謹製のその秘密兵器と美神の神通棍は、接触点から巨大な光条を紡ぎ出した。それは、メフィスト一人のときよりも更に極太の光の束のような物であった。と言うか、既に巨大な光線のようにしか見えない。

まるで共鳴するかのように、二人の神通棍の中間点から噴き出したように見えるそれは、迂闊にも喧嘩に割り込んだ道真公に一瞬で迫り。

「ぎ——」

悲鳴さえまともに上げさせること無く飲み込んだ。

後に残ったのは、二人の横から何処までも真横に、一直線に伸びる破壊の跡と、碎けた神通棍とアシユタロスの秘密兵器。

「んぐぐぐぐぐぐぐ」

しかし、二人は未だその事に頓着する様子さえ無く、額をぐりぐりとしながら、今度は無言で殺気を振りまいている。

「……どーするよ」

「……どーしようかね」

「・・・下手に手を出して死にたくないのねー」

ヒヤクメの言葉が、呆然とその光景を眺めていた4人の総意であつただろう。

「い、いい加減落ち着いたか？ メフィスト」

「だって、だって〜！」

ぼろぼろの血だるま半歩手前の高島が、涙目のメフィストの頭を撫でて落ち着かせている。かなりの被害を被つたようであるが、なんとか説得に成功したようである。

とは言え、足元には気絶した西郷が転がっていたりするが。

「・・・えーなー」

「だ、駄目よ。そんな目をしても！ 指くわえてこつち見ないっ！」

こちらはこちらでぼろぼろの忠夫が、羨ましそうに高島達を見ながら横目で美神をちらちらと見ていた。視線の先の美神は、ちよつとどもりながらもあつちを向いて拒否。

こちらも同様に、目を回したヒヤクメが足元に倒れている。

哀れな犠牲の元、なんとかうやむやになった二人の争いは、ようやく日も暮れようとする京にまでは影響を及ぼさずに済んだようである。

「ほら、あの親父さんの所に戻らなきゃならんのだろ？」

「・・・うん」

なんとも仲睦まじげに見える二人であったが、それを目にする来世の二人の間にも微妙な空気が流れている。

何せ、見た目的には殆ど同じな前世が、背中の痒くなるような雰囲気元語り合っていたりする訳で。

「あー、もうっ！ 横島君、ヒヤクメ、とつとと行くわよっ！」

「えーなー」

「だからそんな顔で私を見ても駄目な物は駄目っ！ ほら、ヒヤクメ！」

いまだに気絶したままのヒヤクメを引き擦りながら、美神はアジトへ歩いていく。どうやら、見ていられなくなってきたようである。

引き摺られるヒヤクメは声も無い。と言うかいまだに気絶したままであるからして

文句の一つも言い様が無い。

「・・・あれが、私の来世?」

「ま、そんなもんだろ。気にすんな、俺の来世もアレだしなー。お前の来世の尻に引かれてんのは気にいらんけどなー」

ふわりと浮き上がったメフィストの腕に捕まりながら、高島がそうぼやいた。

暫し彼女達が去って行った方向を見つめつつも、そのまま宙を舞ってアシユタロスが待つ異空間への入り口に向かって飛んでいく。

残されたのは、ぼろぼろに荒れ果てた大地と、何処までも抉られた巨大な痕。

・・・そして、未だに気絶したままの西郷。彼が目覚めたのは、騒ぎを聞きつけて漸く駆けつけた陰陽寮の同僚に、医師の所へ運ばれる最中であつたとか。

そして、疲れて傷付いた体を引き摺り屋敷に戻れば、何故か其処には自棄酒を飲む美神と、どんちゃん騒ぎをしている忠夫、ヒヤクメがいたりして。

結局、その宴会に巻き込まれたり、たまに近所から苦情が来たりしたのを謝り倒して許してもらつたり、屋敷の使用人達が西郷に泣きついてくるのを誤魔化したり、陰陽寮からの突き上げに何とか間とか交渉の末見逃してもらつたり。

西郷の苦労は、美神達がヒヤクメの神通力が溜まりきり、美神達のいた時代に戻るまで続いたそう。

「ただいまー！ アシユ様、道真公やつつけてきたわよー！」

「おお、お帰りメフィスト。で、どうだった？」

「・・・あー、秘密兵器、壊れちゃった」

「そーかそーか・・・って何いいいっ?!」

一応異空間に作られた秘密基地と言うか研究所なのだが、メフィストにとっては自分の家と同じような物らしい。軽く挨拶なんかかましながら、研究室にてごちゃごちゃとした機械を製作中のアシユタロスに報告する。

高島は居心地悪げにその後ろに隠れていたりするが。

「馬鹿な、アレはそう簡単に壊れるような物では」

『アシユタロス様ー！ チェックお願いしますー！』

「・・・まあ、今は良いか」

えらく驚愕の表情を浮かべていたが、部下の声にあっさり体を翻して機械の製作に取り掛かる。その背中にしがみ付くようにして、メフィストが後ろから覗き込んできた。その軽さにちよつとほのぼのしつつ目線で問いかけようとしたが、瞳が面白そうだと言っているので苦笑いを堪えながら、精々重々しく答えてやる。

「実はな、検査の結果お前の惚れた相手の体が、後数ヶ月しか持たない事が分かった」

「・・・え？」

「だからだな「高島殿、大丈夫なのっ?!」・・・おい」

がばっ！ とアシユタロスの背中から一瞬で飛び跳ね、後ろで所在無さげに立っていた高島に掴みかからんばかりの勢いで迫るメフィスト。

高島も、いきなり聞かされた衝撃的な言葉に固まっている。

「・・・ごめ、御免なさいっ！ 私が余計な事をしたせいで・・・!」

「いや、あ・・・そっか、って嫌じゃああっ！ 童貞のまま死にたくねえっ!!」

「落ち着いて！ 絶対に、絶対に何とかするからっ！ だから、諦めちや駄目っ!」

途端に起こる大騒ぎ。メフィストは完全に泣き出さんばかりだし、高島は大混乱である。アシユタロスは、「やっべ」と言う顔でその光景を見ているが、流石に何とかしない

と不味い。

このままでは、確実に現在の状況がばれた時に悪者である。

「あ、あのな、メフィスト」

「ふ、ふええええん」

「うおおおおおつ?!」

声をかけようとした瞬間、メフィストは高島の胸に取りすがって泣き出した。高島は魂が抜けたような表情で、宙を見つめてフリーズしている。

脂汗を掻きながら、泣き出した娘に向かって両手を突き出し泣きやませようとするアシユタロス。しかし、その奮闘が報われる事は無かった。

『出来ましたよ。これでおそらく普通の人間並みの寿命は得られるはず…って、何やっ
てんですか?』

「「・・・へ?」」

3つの口から発せられた、同じ音ながらも違う意味のこめられた言葉達。土偶が呆れた様に見つめる前で、暫し時間が止まった。

油の切れたロボットのような動きで、メフィストと高島がアシユタロスに向かって首を動かす。

見られたアシユタロスは、誤魔化すように笑顔を浮かべながらも頭の片隅で「この馬

鹿部下がああっ!!」とか思っていた。

「いや、な? ふっ・・・じよ、冗談だ」

「悪質すぎるわっ!!」

えらくダンディーな、顎に左手をあて、反対側の右手を左手の下に挟むポーズでそうのたまわった魔神様に、娘と娘婿の拳が突き刺さった。

「・・・おおおおっ?!」

「え、つと、つまり、この機械に入って数日我慢すれば」

『余計な因子は取り除ける状態になる。とは言え、受け皿は用意しなければならん。でない、折角取り除いた因子が戻ってきてしまうのでな』

顔面を押さえて蹲った魔神を余所に、メフィストは土偶から説明を受けていた。何気にあっさり主を無視している土偶も中々慣れて来た様である。

喜び勇んでカプセルの中に入った高島を余所に、土偶はその横に取り付けられている機械を操作し始めていた。

『これで良し。後は、適当な依代にでも手を当てて、念じれば簡単に分離できる状態になる』

「・・・良かったあ」

安堵の息をつくメフィストの前には、カプセルの中に浮かんだまま、眠ったように目

を閉じている高島の姿。どうやら、負担が掛からないように、終わるまでは自動で眠らせてくれるようである。

「・・・高島殿が、普通の人間並みの寿命、か」

「やっと、やっと帰ったか・・・」

数日後、美神達を送り出した西郷は、疲れきった声を上げていた。その後ろには、抱き合つて喜ぶ使用人達の姿がある。一部は未だに酔いつぶれているし、また一部では二日酔いの態をさらしている者達もいる。目の前で人間が3人消えたと言うのに、驚くどころか狂喜乱舞している。よっほど辛かったのだろうか。

幸い、高島が来る事もあったので女性の使用人はいなかったが——もしいれば、屋敷自体が破壊されていただろう事は、西郷達は知らない事である。

「ふう……これでゆつくり「お、いたいた。おーい、西郷——」……誰か嘘だと言つてくれ……」

そんな西郷の頭上から、聞き慣れた声が振つてきた。しかも、どうやら今度は腐れ縁の方である。

結局、こちらは大変であつた。飛んできた二人の頼み事は、高島の体に宿つた獣の因子を引き取つてくれる場所を探しているのと、ほとぼりが冷めるまで京を離れて暮らすので、「金貸してくれ」との事。

なんとも幸せそうな二人はちよつとむかつ腹が立つたが、西郷としても道真公を倒した事で陰陽寮の中でも重要なポストに付けていたりするのでそのお裾分け、と言つた所もあつた。

幸い、獣の因子の方は結構簡単に引き取り手が見つかった。

最近メキメキと台頭を表している式神使いの家で、一寸した問題があつたからだ。

それは、強力な式神を作つたは良いが、当主しか扱えるだけの霊力が無い。しかし、見た目が怖いので扱えない。という訳の分からない理由である。

早速出かけて現物を見てみれば、なんとも強面な12体の仏教の武神の姿をとつた式

神達。

当主は可愛い系の美女であり、高島が飛びかかろうとしてメフィストに撃墜される一幕もあつたが置いていて。

「わあ〜、可愛いので〜」

「おわああつ!! 舐めるな甘噛みするなしがみ付くなあああつ!!」

「くらー! それは私のよー!!」

高島から取り出した獣の因子は、無事12神将と名付けられた式神として生まれ変わる事になった。やたらと懐いているのは、もしかしたら自分の親と思っているのかもしれないが、その光景は千数百年後にとある名家をとある半人狼の青年が訪れた際に良く見られる光景とそっくりだった。

「ありがとう。お礼に〜家で出来る事なら〜何でも〜一回だけ聞いてあげる〜」

そんなこんなであつさり引き取られ。ついでとばかりに余つた数種類の因子も式神関係の家に分けてみたり。そちらの方からは結構な現金をゲット出来たり西郷にもコネが出来たりと意外な副産物も多かつたが。

「やれやれ・・・ようやく片がついたかな」

「ありがとな、西郷」

「ありがとう、西郷さん」

「……ま、あんまりメフィ——葛の葉さんを泣かせるんじゃないぞ？」

「よけーなお世話だ」

漸く、3人は落ち着いてお茶なんぞを飲んでいた。夜もふけ、空には朧な月が浮かんでいる。静かに、珍しい事に静かにお酒でなくお茶を飲む3人。

「……ま、今度来る時は子供でもこしらえて来い」

「ぶっ!!」

突然の発言に、同時に飲んでいたお茶を噴き出す高島と、旧姓メフィスト現葛の葉。高島が人間と同じくらしいの寿命になったと言う事で、彼女は思いつき考えを跳躍させて人間になっていた。

父親がちよつと考え直すように言ったりしたが、強引に、というかその内に眠るエネルギー結晶の力を使って無理やり変わったらしい。それでも、人間にしてはとんでもない靈力を秘めていたりするが。

「全く、お茶くらい静かに飲ませろよなあ」

「そそそ、そうよっ!」

何とか落ち着いた表情を取り繕い、再び茶を含む高島と葛の葉。

「……孫も、良いな」

「ぶほあっ!!」

しかし、突然その二人の後ろに出現した魔神様がのたまわった。余りと言えば余りにもなその出現に、再びお茶を嘔き出すお二人。

「・・・どなた様でしょうか？」

「ん？ ああ、メフィストの父だ」

「ああ・・・やつぱり」

西郷だけは、全く冷静さを崩さずに対応していたりするが。と言うか、既に色んな意味で諦めの境地に到っていたりするのもかも知れない。何せ、使用人達の苦情で、屋敷から酒と名のつく物全てを取り払った男である。

「ごほっ！ ごほっ！ いきなり如何したんですかアシユ様！」

「お父さんだと言うに・・・。いや、父の役目を忘れていたのでな」

そう呟くと、アシユタロスはイイ笑顔で高島の肩を叩く。

西郷が、面白そうにその反対側に立った。

「成る程・・・手伝いますよ」

「ふ、助かる」

「え？ 何っ?! 何だっ?!」

高島の襟首を掴んで立たせた西郷が、逃げないように術で縛る。アシユタロスは、その目前に立つと、何故かデコピンの構えを見せた。

「娘を取られた父親は、取った奴を一発殴つて良いと言う。……殴つたら死ぬので此れで我慢だな」

「……がんばつて高島殿っ!!」

「嫌じゃああつ?!」

楽しげに素振りをする魔神の隣で、葛の葉が両手で拳を握つて応援している。しかし問題は魔神のデコピン素振り一回事に、尋常じゃない衝撃波が生まれて床に穴をあけていることだろう。

「頑張れよ、高島」

「行くぞ、せーのっ!!」

「高島殿ー、頑張れー!」

「んぎやああつ?!」

その夜、西郷宅が半壊したとかしなかつたとか。

その後、西郷の下にはたまに手紙が届くと言う。やれ今年は豊作だの、葛の葉の料理が美味くなつてきただの、また子供が産まれただの。そんなたわいも無い物が多かったが、忙しい毎日の中では、とても楽しみな物であつたと。

「……で、何で君は此処にいるのかな？」

「父さんと母さんが、「お前は母さんに似て頭が良いから京で色々学んで来い」って」

「……で、何で僕の家に来るのかな？」

「あいつは良い奴だから」だって」

「……はあ」

二人の子供達がえらく長い寿命を持つたり、他の人外と結婚したり、京で大騒ぎを起こしたり、或いは京で陰陽師として名を馳せたり、上の方の貴族に見染められて大変面倒な事になつたりと、まあ色々であつた。

そんなこんなで、西郷は、何時までも退屈とはかけ離れた人生であつたとき。めでたしめでたし。

「僕の胃以外ね！」

第拾捌話。

「ふひいひい．．．到着なのね〜」

事務所の一室、美神達が過去へと飛ばされたその部屋の中空に穴があき、其処から疲れきった誰かさんの声が聞こえた。

寸暇の間も置かず飛び出してきたのは、神界からの調査官、ヒヤクメであった。

穴から転がり落ちるように地面に着地し、へろへろと座り込む。

「ちよ、こらっ！ ヒヤクメ、退きなさい！」

「なのねええっつ！！」

その上に、美神が落ちた。悲鳴も途中で途切れ、絡まりあつて団子のように転がる。流石にいきなりの落下ではバランス感覚に自信があつても、着地地点を変えるのは難しい。

そして、過去に行ったのは三人であつた。

美神、ヒヤクメ、そして忠夫。

つまり、未だ開いたままの穴からもう一人滑り落ちてくる訳であつて。

「退いて、退きなさいってばー」

「そんなこと言われてもなのねー!」

「——おとおおおとおおおつ?!」

「うわきやあつ?!」

更に絡まる手足と頭。見事に頭から落ちてきた忠夫は、それを絡まりあつた二人の間に突つ込んだ。

「なんだつ?! やーらかいつ?! 良い匂いつ?! 此処は桃源郷かあああつ?!」

「動くな触るな引つ付くなああつ!! うやつ?! ひやうつ?! あ・・な、なにすんこのバカツタレエツ!!」

「にぎやあああつ?!」

「ごそごそともがく忠夫の手やら顔やら色んな所やらが、二人の女性のに引つ付く訳で。」

まあ、忠夫の気持ちも、分からなくは無。分からなくは無いが、その引つ付いてい相手の内、少なくとも一人はかなりこーいつた事に対して免疫が無い訳であります。

一瞬で団子状態の其処から飛び出した美神が、左手ではだけかけた服を押さえながら振るつた神通棍は、助手の半人狼と神様を、仲良く天井に叩き付けた。

二人が天井に張り付いたままであつたのは3秒ほど。しかし、重力を無視したままで

いられずに、結局自由落下を開始する。

半分気絶しながら落ちてきた忠夫の目に写ったのは、上下逆さの美神が足を振り上げ、どうやらボレーシユートをかまそうとしているらしい所であった。

「——何ん?」

首から上が弾けとんだような痛みが、答えであった。

「・・・おや?」

『ふんぬっ! くのとっ!! てやあっ?!』

目が覚めた忠夫の目に最初に写った物は、何故か呪縛ロープでぐるぐる巻きの人工幽霊一号 in 全身鎧。えらく気合を籠めながら蠢いているが、全く緩んだ様子を見せない

ロープにそろそろ痺れを切らし始めている。

「なにやっつてんだ？」

『ちよ、ちよつと黙つて下さい！ 後、多分後ちよつとで……！』

「ふーん」

不思議そうに尋ねる忠夫も、何故か簀巻きにされていた。左側頭部にたんこぶができてそんな感覚があるが、縛られている状態では確認する事さえ出来ないのではほつて置く。どうせ、しばらくすれば引つ込むし。

簀巻きにされている事には全く動じていない忠夫が、辺りの様子を確かめる。どうやら事務所の部屋の片隅で、人工幽霊と一緒に転がされているらしい。すわ、美神さん達も危ないのでは？ と辺りを探れば、ソファアの所で二人分の話し声。

「……やっぱり不可解なのねー」

「狙いは、私の中にあるエネルギー結晶なんでしょう？」

「それは間違いないと思うのね。だつて言い方は悪いかもしれないけれど、美神さんは魔族を前世にもつただけの、「只の人間」なのねー」

どうやら深刻そうな会話である。このままこつそり聞き耳立てることも可能だが、それは何と言うか——仲間に対する態度じゃない、と思つたので。

「——ふむふむ。そうなる、あのメフィストとか言う魔族が言つていた『アシユ様』辺

りが怪しいっすね」

「そうかしら・・・？ なーんか、違うような気もするのよねー、何となく」

「・・・どうやって縄抜けしたかとか、何時の間にとか、そー言うことは気にしないのねー？」

「だつて横島くんだし」

と、言う訳で。さり気無く会話に割り込む事に成功した。角度的に見えないが、全身鎧が居たところから非常に驚いた空気が流れてきている。が、別に気にするほどの事でもないし。

忠夫の隣でソファーに腰掛けた美神は、諦めたような目をしていた。

ともかく、横に置いといて、と前置きし。会話は暫く続けられる。焦点は一つ。誰が、メフィストが飲み込み、現在美神の魂にくつついているエネルギー結晶を狙っているのか。

忠夫も美神も、メフィストを作り出した魔神のことなど知りはしない。ヒヤクメだけが、『アシユ様』とメフィストが呼んだ事、そして、作り出されたメフィストが、それなりの魔力を有していた事、何より、人の魂に新たな肉体を与えるだけの技術を「あの時代に」持っている事から、一つの推論を立てているに過ぎない。

しかし、美神の言葉が否定する。

前世と言えども、完全に影響下から抜け出す事など出来はしない。それが、魂自体に焼き付けられた記憶と言う物だから。

それが、「なんとなく」違うと言う。

ならば、誰が？

「駄目、情報が足りないのねー」

「……つてなるわよねえ」

其処まで考えて、結局諦め体を伸ばす。結構話し込んだが、結論としてはそれが精一杯なのである。エネルギー結晶の情報が洩れたということも考えたが、それにしても余りにもお粗末な刺客である。強大な力を持つエネルギー結晶、それ故に、それが他人の手に渡った場合には「危険」が付き纏う。その他人に、或いは部下に裏切られるかもしれないと言う。

しかし、現れたのは打算に満ちた魔族たち。はつきり言つて、忠誠を求める事すら可笑しい。己の作り出した部下を、それこそメフィストのような部下を送り付けなかったのは何故？

足りない、と皆が思っている。何か、重要なピースが欠けていると。

「……とりあえず、手に入れた情報を持って帰るのねー」

「ま、専門家に任せるのが一番でしょうね」

「ふああああ……」

疲れたようにソファーに深く座る美神。隣に座った忠夫は、既に欠伸をかましていた。それを苦笑いとともに眺めつつ、ヒヤクメはゆつくりと立ち上がる。これから帰って直ぐに報告書の作成に入らなければならない。

「身の回りには気をつけてるのねー」

「はあ……面倒くさい事になっちゃったわねえ」

ヒヤクメはそんな言葉を背中で受けつつ、窓を開けて身を乗り出す。おそらく、神界だけでなく魔界のデタント派も、今か今かと報告を待ちわびている事だろう。其処まで考えて、窓の縁に足をかけたヒヤクメの耳に。

『……助けてー』

床の辺りからそんな遠慮がちな声が聞こえたが、丁重に無視して差し上げた。

——別に本体じゃないんだから、その全身鎧から抜け出せば良いだけなのねー。

「んじや、帰りますねー」

「そうねー。あ、横島くん、明日休みね。疲れたわ」

「……大名商売やなあ」

そして、部屋の電気も消されたのだった。人工幽霊が、全身鎧から抜け出せば良い事に気付くまで、後2時間。

「……休みかあ」

事務所を出た半人狼が、夜空の月を眺めながら歩き出す。流石に疲れているのか、少々足取りも重そうだ。

てくてくと歩くその顔は、ぼけーつと何にも考えていないようだ。

と、何かを思いついたのか、立ち止まって手を打ち合わせる。電灯の下に、軽い音が響いた。

「おキヌちゃんの所に言ってみるのもいいかもしれん。ついでにご飯も取れるしなっ」

再び歩き出した忠夫の歩む先は、既にねぐらのアパートを向いていない。行き先は、何時ぞやの田舎町。何時も狩りに行く森と比べれば少々遠い位置であるが、今から行けば、深夜前には着くだろう。

身をかがめた半人狼が、勢い良く地面を蹴る。

月を背中に、夜空に舞った。

「・・・おキヌちゃん、どーしてるかしらねー」

キングサイズのベッドに寝そべりながら、そんな呟きを発したのは某除霊事務所の所長であった。

次の日、某田舎町にて。

「おキヌちゃん！」

「あ、早苗お姉ちゃん」

山深い、小さな町。その中心に程近い場所にある高校で。町の外れにある神社から、自転車で通う二人の・・・と言うか、双子のような姉妹がいるそう。

片や艶やかな黒髪を腰まで伸ばし、もう一人が肩の辺りで切り揃えている以外には、

二人の纏う雰囲氣くらいしか見分ける術が無い、例えるならば、こんこんと静かに清水の涌き出で続ける水源と、音を立て太陽のきらめきを跳ね返しながら流れる溪流のよう
な。

「——ええ、またなんだべか？」

「うん……。お友達になりましょうって」

「そりや、怖い物知らずっていうんだ。皆知ってるべき、家のお父さんの事」

校舎の裏を、樂しげに会話しながら校舎の入り口に向かつて歩く二人。とは言え片方は困ったような雰囲氣であるが。

「山田先輩でも、まだ義父さんとともに会話できてないのに」

「でも、段々弾が見えてきてるみたいなんだべき、山田君。見えても体がついていかな
いってぼやいてた」

「……。えーと、さすが、おねえちゃんやんの恋人さんだね」

「やつだなー！ そんな、照れるべきー!!」

きやいきやいとさざめく二人の少女。真昼の風が、そんな二人を優しく包んで走り抜
けていった。

「……。相変わらず元気だなー、おキヌちゃんも」

そんな二人の姿を、立ち入り禁止の筈の屋上からこそと眺める人影がある。ジージャン、ジーパンに赤いバンダナ。嬉しそうに眺めるその人影の名を、偽名横島忠夫、本名犬飼忠夫と言う青年。頭や背中にくっ付いた、木の葉や苔、木屑など。どうやらしっかり森の中を駆け巡ったようである。

しかし、それは制服に身を包んだ者が殆どを占めるこの場所で、あからさまに同年代でありながらも私服なそいつは、どこかおどおどとした表情もあいまって不審人物に相違ない。

「・・・此処ですか？　しかし、鍵が掛かっている筈では」

「それが、ゴキブリのように壁を登って行ったという話です」

「ヤバツ?!　もう見つかったんかい?!」

がさごそと音は立てないが、素早く低い体勢で動き始めたその姿。たしかにゴキブリのようである。

「——いたぞおっ!!」

「其処を動くなあつ!」

「動くなど言われて止まる馬鹿がおるかあああつ!!」

そのままフェンスを越えて、雨樋を伝って滑り落ちていった忠夫を追って動き出す先生方。昼休みも終わろうと言うのに、とっても真面目な先生であった。

「なんだか騒がしいだべな」

「また変な人でも来たのかしら?」

その追跡者と逃亡者の戦いは、既にある意味何時もの事となっていた。警察に通報しようにも、誰が信じてくれるであろうか。屋上から、命綱一本付けないで飛び降りるわ、車に轢かれても——大抵同じ運転手であるが——次の瞬間には平気で走り出すわ。

先生達が意地になっていると言うのも大きいが。

「あ、授業始まつちやう。帰ろうか?」

「んだ」

とりあえず、目立った被害は未だ無し。

「どうつすかね?」

「・・・あまり、長い事は持ちこたえられせんな」

氷室神社。その地下に、巨大な洞穴があると言う事を知る物は殆どいない。精々神主夫妻くらいのものである。娘達——先ほどの、そつくりな容貌を持った二人の少女——には、色々な理由があつて伝えていない。その時がくれば、程度である。

その地下に、二人の男の姿があつた。黒い装束に身を包んだ、髭をたくわえた中年くらいの男と、反対に白い、古代のそれに近い服を纏つた、背中に弓を背負つた、20代に見える男。二人の間にわだかまるのは、焦つたような、そして何かを待ち望む、そんな雰囲気。

「・・・連絡の方は?」

「ここらの山の神とは。皆、快く協力してくれるそつす。死津喪比女を倒した女華姫の、たつての頼みつすから、協力しないわけにはいかないそつす」

「有り難い事です」

年上の男が、手を一振りする。辺りが柔らかい光に包まれたかと思うと、其処に光の線が走つた。それは、見る間に一つの形を作り上げる。数秒後に出来上がったのは、光で編まれた一枚の地図であつた。

「・・・また、増えてるっすか」

「ええ。このような事態を予測できなかったとは・・・」

困惑したように腕を組む男の前では、呆れた顔の年若い男が苦々しげに頭を掻いていた。

「いや、そりや無理つてもんっすよ。反魂の法が成功したって言うだけで、とんでもない事なんすから」

地図の中心には、神社らしい建物が描かれている。それを広く囲むように、光で作られた輪が取り巻いていた。

そして、それを更に取り巻くように蠢く、無数の赤い点がある。

「予想以上の増加です。このままでは、支えきれません・・・。げに恐ろしきは、人の執念、と言った所でしようか」

「・・・誰も、死にたくなんかないっすよ。気持ちは、良く、分かるっす」

赤い点が増える度に、僅かづつ光の輪が歪んで、縮む。時折、辺りの山々から微かな光が神社に流れ込んでくると、光の輪もそれが流れ込むたびに押し返そうとはしているが、赤い点の増殖はそれよりも明らかに速かった。

「仕方有りませんか・・・」

「気は進まないっすけどね」

そう言い残して、山の神たる男性は、姿を消した。

「・・・ふう、逃げ切ったか」

高校から離れた場所にある公園の中。幾つもある遊具の中でも、一際異彩を放つそれは、コンクリートで作られた某マツチヨなお姫様の彫像であった。とは言え、筋骨逞しいという以外に表現の仕様の無い高さ5 M程のそれは、誰が見ても姫とは言えない威圧感と凛々しさがあるが。

「ありがとうございます、女華姫さん」

張り付いたその像の背中から滑り降りながら、忠夫は何となく拍手を打つ。先ほどの像の足元を通り過ぎていった先生方から、死角を作り出してくれたお礼である。

流石に、此れほど威圧感のある像の上に隠れているとは思わなかったようである。誰も、目を向けたくなかったとも言うが。

そろそろ日も傾き始め、後数時間もすれば辺りは夜に包まれる頃合である。

「学校、終わってるよなあ。放送も聞こえたし」

数十分も前にチャイムと一緒に聞こえたのは、放課を知らせるスピーカーからの声だった。距離はあるが、耳の良い半人狼にとつてはばつちりしつかり聞こえていて当然の物である。

溜め息を付きながら滑り落ちる忠夫は、その事に気を取られていて気付かない。像の足元に、何時の間にか腰掛けている少女の存在に。

「きゃっ?!」

「うおっ?!」

地面に降り立った忠夫の後ろから、聞き慣れた声が聞こえた。とは言え、最近はずっと聞いていなかった為か、一瞬誰の声か思い出せなかったのだが。

「・・・あれ、おキヌちゃ——やばっ?!」

「え、あなた、私の名前を・・・?」

像の足元は、腰掛けるのに良い位の土台があった。これだけ巨大な物になると、しっかりとした土台が必要な為か。其処に腰掛けていたのは、確かに学校で見た少女、おキ

又である。

おキヌの左側には学校の鞆、右側には幾つか湯気を上げるお饅頭が入った袋と、お茶の缶がある。右手に持ってたった今口元に運ぼうとしていたお饅頭が、出来たての暖かさを持っている。

足元に野菜と醤油のビンが入ったスーパ一の袋があることを考えると、学校帰りに買物により——義母にでも頼まれたのだろう——ちよつとおやつでも、としゃれ込んでいたのだろうか。

思わず忠夫が名を呼んでしまった少女は、困惑したように眺めている。その事に寂しさを憶えながらも、忠夫は咄嗟にこの場から離れようとした。

記憶が戻っていないのならば、まだその時期では無いと言う事。無理やり記憶を戻そうと言うのでは、色々と困った事になる可能性もある。自然に、あくまでも自然に戻る事が前提である。

だから、離れようとした、のだろう。

——知らない人を見る目が、胸に痛くなかったとは言えないが。

「え、ええつと、すいませんでした——」

「あ、ま、待って下さ——きやつ?!」

逃げるように走り出した忠夫を引き止めたのは、後ろで聞こえたそんな声。慌てて立

ち上がったおキヌが、バランスを崩して倒れそうになった。

気付いた時には、滑り込んでクツション代わりになつていた。いきなりのヘッドスライディングで流石に痛い、背中になんだか柔らかい感触が当たり、何故かとても得した気分になつたのでかなり良し。

「あ、ありがとうございます」

「い、いえ、それではこれにて御免っ！」

忠夫の上から起き上がったおキヌに、怪我の無い事を確認して走り出そうとした。

そうしたら、誰かに腕を掴まれた。振り向けば、驚いたように忠夫の腕を掴んでいるおキヌの顔がある。

「あ、あのっ!!」

「は、はいっ?!」

やたらと気合の籠った声であつた。いや、気合と言うかなんとと言うか。そう、それは勇氣と言うのが近いのかもしれない。俯き加減に、上目遣いでこちらをみやるおキヌの視線に動揺しながら、忠夫は思わず返事を返した。

「お、おおお茶でも飲みに行きましようっ!!」

「・・・はへ？」

既に誘いかけでさえないそれに、否定の余地が与えられていない事に気付いているの

か、本人は。ともかく頬を赤く染めた彼女は、驚きに硬直した忠夫を引き摺って歩き始めた。

歩きながら進路を微妙に変え、片手で鞆とスーパ一の袋を引つ掴んでいったあたりはしつかり者と言つた所であろう。

兎にも角にも、忠夫にとっては初めての、逆ナンパと言う奴である。

「こ、此処です！」

「う、ういっす」

ふと忠夫が気付けば、何時の間にか目の前に、こじんまりとした喫茶店があつた。茫然自失している間に目的地に着いていたようである。

外見はシツクに飾られ、それなりに落ち着いた雰囲気をかもし出している。あまり学

生が寄るような雰囲気には見えないが、おキヌも一応華の女子高生である。姉や友人とこう言ったところに寄り道でもしているのであらうか。

「いらつしやいませー」

ドアに取り付けられたベルを鳴らしながら踏み入れれば、其処は外見と同じく落ち着いた雰囲気の内装である。壁に下げられたメニューも、アンティークと思しき椅子とテーブルのセットも中々の年代物に見える。

カウンターの向こうでは年嵩の男性がグラスを磨いており、入ってきた二人に笑顔を向ける。二人に向けて声をかけた青年は、エプロン姿も板についたウェイター然とした姿であった。

声をかけられたおキヌは、緊張した面持ちで忠夫の手を握る手に力を籠める。その表情は、決戦に赴く武士のようだ。

「何名様でしょうか？」

「おおお大人2枚!!」

「……2名様ですね？」

「い、いくらでしょうか?!」

「……えーと、店長ー」

「どうやら、おキヌも初めて喫茶店デートと忠夫の手を握っている状況にいつぱいっ

ばいのようなのである。にこやかなままで途方に暮れたウェイターは、店長と呼ばれた男性に声をかける。

「マスターだ」

「どーでもいいっすから。大体この前まで屋台の親父だったくせに」

「・・・上手くやれ」

言葉少なにそう答え、再びグラス磨きに精を出し始める。そんな元一等地の喫茶店の店長、前赤提灯の親父、現純喫茶の「マスター」の男性に向かってこれ見よがしに溜め息を付きながら、商売用の笑顔を再び貼り付けたウェイターは、こちらを伺うようにして見ている少女に根気良く説明を始めるのだった。

「おれんじじゅーす、一つ」

「あ、俺も？ ええつと、同じ物をお願いします」

漸くメニューを睨みつけながら、うんうん唸っていたおキヌは注文を聞きに来たウエイターにそう告げる。目線で尋ねられた忠夫も無難に返し、ウエイターはそれらをメモするとカウンターに向かって歩き出した。苦笑いを隠しながら。

「・・・あ、あのっ！」

「はいー！」

「こ、こ言うところは初めてですか？」

「え、ええつと、初めてっす！」

未だにメニューをウエイターが回収を諦めたくらいには無意識の内に握り締めながら、その陰に隠れるようにおキヌが尋ねる。何故だか忠夫もその余波を食らってえらく緊張気味である。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ぎこちなく返した答えに話題は止まり、なんともやりづらい沈黙がわだかまる。二人は気付いていないが、マスターとウエイターがそれを大変面白そうに眺めている。

「ご、ごめんなさい、突然こんな事しちゃって・・・」

「い、いや、問題無し無し！　こんな可愛い女の子のお誘いなら、断る方がおかしいって！！」

しよぼんとしてメニューの後ろに顔を隠したおキヌに対し、必死でフオローする忠夫であった。効果が有ったかどうかは定かでないが、おキヌはメニューの上から僅かに視線を覗かせた。

「本当ですか・・・？」

「本当だって！　可愛いつてば！」

「そ、そつちじゃないんですけど・・・あう」

今度は、頬の赤さを隠す為にメニューの影に隠れるおキヌ。それでもちらちらと覗く目は、なんだかともつても恥ずかしげ。

「・・・てんちよー」

「マスター、だ。・・・3枚、上手く行く方に」

「賭けになりませーん」

そんな会話をオレンジジュースの受け渡しをしながらやっている二人。彼らの視線の先には、相変わらず照れながら恥ずかしげにメニューに隠れるおキヌと、漸く何処を間違えたのかに気付いて慌てる忠夫の姿があった。

「あの、お名前は？」

「犬か——横島忠夫でっす!」

注文されたジュースが届き、二人で無言でそれを半分ほど頂いた後。漸く落ち着いた二人は、会話できるくらいの雰囲気をかもし出していた。

「横島さん……ですか」

「ういっす」

忠夫の名前を、ゆっくりと飲み込むように口にする。大切な物をその胸に取り戻したように、おキ又はほっと、安堵の息をついていた。

「あれ? 如何しちやつたのかな、私ったら」

「……んや、俺も何となく……あれ?」

二人は、我知らず笑みを浮かべていた。それは、心の底から浮かんできた笑顔。染み出すような、と言ったところであろうか。理由は知らない、けれど、何故か零れる笑顔。おキ又は、己の浮かべた安堵の表情の理由を知らない。忠夫は、自分の事を覚えていてくれた事が嬉しくて、と言う程度の理由しか思いつかない。

それでも、目の前の人が笑っている事が嬉しくて。

笑顔は、共鳴するように広がっていく。

「クスクス……可笑しいな、何でだろ?」

「わは、わははっ! さて、なんででしょーかねっ?!」

カウンターに腰掛けて、雑誌を開いているウエイターも、その向こうでグラスを磨きつづけているマスターも、聞くとも無しに聞こえて来るそんな会話を耳にしながら、彼らも知らぬ内に笑みを唇に刻んでいた。

それを皮切りに、二人の間には穏やかな空気が流れ出した。取りとめも無く交わされる会話。学校の事、家族の事、それから――

「ごーすとすいーぱー……ですか？」

「まあ、見習だけだね。助手やってんだけど、美神さんって言う上司がいてさー」
仕事の事。

「美人……ですよね？」

「そりやもうっ！ 伊達に俺の……あれ、どうかした？」

「知りませんっ！」

むくれて視線を逸らすおキヌ。何でだろ？ と悩む忠夫を見ているうちに、またこみ上げて来る楽しさ。

時計の針が、帰らなければならぬ時間を指し示すまでの短い間。それでも、大切な時間を過ごしている。

弾けるような笑顔を見せながら、おキヌの頭には「あの人がいれば、どうなっただろ？」何ていう、誰かが怒って細長い棒を振り上げる光景が浮かんでいたりする。その

女性の名前もわからないし、そもそも会った事さえ無い筈の女性であるが、それでもおキヌは何となく。

「ちよつと、申し訳無いかも．．．」

「ん、何が？」

「い、いえ、何でもないです！」

そんな気持ちも浮かんだり。

——しかし、そんな小さな幸せさえも、打ち砕こうとする悪意も、ある。

第拾玖話。

「なんだなんだなんだああつ?!」

「きやあああつ?!」

閑散とした商店街を走り抜ける青年が居る。近くの高校の制服を纏った少女をお姫様だつこで抱えながら、とんでもない速度で誰もいない商店街を駆け抜けていく。青年の着ている服はあちこちが焼け、あるいは切り裂かれたように破れていた。

しかし、その手に抱かれた少女の服には僅かに煤が残るのみ。この状況下で無傷である所は、流石の忠夫と言うべきであろう。

「なんでこんな事になつてんじやああつ?!」

「きやーっ! きやーっ! きやー!」

悲鳴を上げながら必死にしがみ付いている少女を抱えながら、半泣きの青年は日も暮れた町中を疾走していた。

『イタゾ・・・!』

『アレハ、オレノモノダ・・・!』

「邪魔じゃあつ!!」

「んきやつ?!」

青年の進路を防ぐように、数体の悪霊が出現する。あるいは地面をすり抜け、あるいは電柱の影から滲み出すように。

青年は、それを目にした瞬間に、抱えていた少女を前方斜め上に放り投げた。そちらに一瞬気を取られた悪霊達が青年に意識を戻す前に、低い体勢で滑り込むように悪霊達の中心へと潜り込む。

勢いを殺さずに半回転しつつ、右手を振って如意棒を手にとる。そのまま遠心力を利用し、ぶん回す。

「おつりやああつ!!」

『ガアツ?!』

「おち、おち、落ちるー!!」

進行方向の障害物ごと薙ぎ払い、吹っ飛ぶ駐車違反の軽トラックと叩き折られた電信柱の下をすり抜ける。

背後に抜けた悪霊達が体勢を整える前に、前方でわたわたと手を振って落下中の少女を確保。再び飛ぶように走り出す。

「(っ)怖かったですよ?! さつきから何回目ですかー!!」

「あああ勘弁?! だってあれ重いんだって!」

「私は重くないですっ!」

「ぢが・・・ぐる。じい・・・」

真つ赤になって首を締めてくる少女に必死で言い訳しながら、そろそろ真つ赤になり始めた視界を意識しながら、半人狼の青年は無人の町を走り続けている。

誰も居ない、夕闇に包まれ始めた黄昏を。

「・・・うー」

「あー、だから誤解だつてば、おキヌちゃん」

「・・・えつち」

「誤解やー!」

程なく、彼らはある建物へと辿り着いていた。其処は、この町で唯一の高校である建物であった。あれから幾度かの悪霊達との接触を回避し、あるいは先程のように蹴散らしながら、忠夫は一番高い建物へと到達していた。

屋上まで一気に壁を駆け上がるといふ離れ技をかまし、漸く落ち着いて腕の中の少女を見下ろしてみれば。

何故か、林檎のように頬を染めた少女が恨めしそうに睨んでいた。

理由を聞けば只一言。

「胸を触りましたよね？」

「だから誤解やあつ?! 濡れ衣やー! そんなどさくさ紛れの事なんて……くつ、全

然記憶に無い……! 何て勿体無い……ハッ?!」

「……えつち」

「のわああつ?!」

ジト目で少女に見られ、恥ずかしさと猛烈な自己嫌悪に苛まれたりしつつ。忠夫は屋上の冷たい床の上をごろごろと転がっていた。

もう少しじっくりと観察していれば気が付いたかもしれないが。おキヌと呼ばれた少女の目に宿った懐かしさと、あんまり嫌がってない様子に。後、ちよつとした悪戯っぽい噛み殺した笑い声とか。

「・・・なんなんでしょ、さっきの」

「んー、悪霊には間違いないと思うけど」

震える肩の動きが止まり、不安げに声がかげられた。床の冷たさがジージャンの背中から染み込んで来る事に寒々しさを覚えつつ、忠夫はあくまでも軽く答えを返す。

「私を、狙ってるんでしょうか？」

「・・・さあ？ どーだろ」

忠夫は、自分の声に自信が持てなかった。幸いにも暗さに紛れて互いの表情を伺う事は出来ないが、声色だけは誤魔化せない。おキヌに不安を与えない為にも、どうか誤魔化せていてくれと。

「嘘、ですよ。今の」

「え？」

「何となく、分かっちゃいました」

がば、と跳ね起きおキヌの顔を直視する。彼女の表情は、決して諦めの色に染まっては居なかった。軽く微笑みさえ浮かべながら、おキヌは忠夫をそつと見つめる。慌てて跳ね起きてしまった事に、失敗したという考えを浮かべながらも。彼女の瞳から眼を離すことは出来なかった。

「誰もいない町、あんなに沢山の幽霊さん達、ジェットコースターみたいな速さで走る貴

方。・・・一体、何が起きてるんですか？」

「・・・ごめん」

「教えて、くれないんですね」

「ごめん」

「良いですよ」

視線を合わせたまま、視線に思いを籠めながら、謝罪の言葉は虚しく響く。少女は、しかし笑みを絶やささない。二度目の謝罪に返事を返しつつ立ち上がる。緩やかな夜風に、長い黒髪が踊った。

「多分、大丈夫ですよねー？」

「何で・・・？」

「何となく、です」

誰も居ない町に、光が灯る。その光に照らされた、こちらを見る顔にあるのは、どこまでもまつすぐな信頼。

「——だって、横島さんですから」

「・・・！」

「・・・あれ？ 私、何で」

驚いた。心底驚かされた。目の前の少女は、おキヌは、未だ幽霊であった時の記憶を

取り戻していない。記憶をなくした、田舎町の高校に通う一人の少女である筈だ。しかし、彼女の言葉は確かに、忠夫の記憶に在るものだった。

己の言葉に首を捻る少女を、抱きしめたい気持ちさえ覚えつつ。

忠夫は、言葉を返した。

「おうっ！ 任せてみなさいっ！ うははははっ!!」

「ふふふふ……」

硝子が、割れた。どこかで、そんな音がした。

始めは、小さな小さな亀裂であつた。それを塞ごうとする力と、雪崩れ込む悪霊達の

せめぎ合い。

一人の少女を守る為に形作られた薄い薄い硝子の瓶は、その回りに肉食魚の如く集る悪意に、徐々に押されていた。

硝子には、防ぐ力はあつても、倒す力は無かつた。滅ぼす力が、浄化する力が無かつた。

悪意は増え続けた。妄執に惹かれ、命に惹かれ、やり直す機会を目指して。

小さな流れは、何時しか奔流となつて渦のように硝子の瓶を取り囲む。悪意が悪意を呼び、集まつた悪意が更に巨大な灯台となる。それは、決定的な欠陥だつた。守る事に特化した故の、守れないという矛盾への導火線。

外と中とを隔てる——境界線——壁は、いつしか、歪み、撓み、磨耗していった。

そして、何時の間にか亀裂が走っていた。それは、誰にも気付かれる事の無い、僅かな綻び。

悪意は、狂喜した。

妄執を引き摺り、悪霊の群が動き出す。

塊は侵入できなかつたが、小さな個は容易くその隙間をすり抜ける。

個の群は、何時しか一本の流れとなる。流れ始めた悪意を止めるには、瓶は、磨耗し

すぎていた。

挟じ開け、引き裂き、穿つ。

何時しか、瓶は——おキヌを守る為の結界は、限界を超えていた。

——ピキン

「……何だ？」

「綺麗な音……」

——パキッ

「……っ！ 何だ今の感じっ!!」

「……え」

——カシヤ……アアン

「横島さん、あそこっ!!」

「——空が」

『……オオオオオオオオオオツ!!』

「割れた……!」

空に、亀裂が走っていた。距離にして数kmはあるだろう。しかし、その亀裂は巨大であった。月光を反射する何かを振りまきながら、狂気の籠った声を上げた悪霊達が、

まるで鬨の声を上げるかのように高らかに哄笑しつつ、結界の内部に侵入し始めた。

「こりや、やつべえかも」

「一体、何が・・・？」

二人の目の前には、夜空を侵食し始めた悪霊の群が居た。罅割れた空から、濁流のように流れ込み始めた彼らは、地面に触れる直前で四方八方に散り始める。

時折、巨大な塊も落下していた。それは、あたりを舞う小さな者を吸収しつつ、更に巨大になっていく。その上から、もう一つ、巨大な塊が落下した。二つは争うようにもがきながらも、何時しか一つの塊へと変貌を遂げる。

それは、辺りにある建物を踏み潰しながら、忠夫達から見て左の方に進んでいった。

「・・・グロっ！」

「・・・すぷらっつたー、ですねー」

二人が漏らした感想は、そんな物であったが。

「逃げませんか？」

「異議無し」

流れ落ちる濁流は、粘り気を増して泥濘の様にさえ見え始めていた。落下した場所を中心に、町を悪意に染めていく。誰も居ない筈なのに、町に灯っていた明かりが消えていく。それは、上空から見れば綺麗な円を描いていた。

二人はそれを見る事無く、高校の屋上から飛び降りる。勿論、おキヌは忠夫の背中に乗っている。衝撃どころか音さえも立てずに着地した忠夫は、駆け出そうとして急ブレーキをかけた。押し付けられた柔らかさに、月に向かって遠吠えしたくなるのを必死で堪えつつおキヌを見る。

「……ジト目で見られたが、真剣な表情で誤魔化した。」

「誤解だ、おキヌちゃん。ちよつと嬉しいだけだ」

「……ナニガデスカ？」

誤魔化せなかつたようだ。

他に車の走っていない道路を、只一台エンジンを響かせながら駆け抜ける車があ

る。何故か屋根が剥ぎ取られたように無く、それを運転しているのはおキヌである。

「きやーっ！ 右カーブ右カーブうっ!!」

「おりやおりやおりやああっ!!」

それを追撃する黒い影達。それに向かって車から放たれる、閃光のような速度の何か。

「ぶつかろううっ?!」

「んどわあっ?!」

緩やかな筈のカーブを、何故か車はドリフトしながら白煙を上げて曲がっていった。車の上に立ち、例によって例の如く唐巢神父特製の聖水をまぶした石ころを投げていた忠夫が、振り落とされそうになって慌ててシートにしがみ付いた。

「おキヌちゃん、真っ直ぐ、真っ直ぐだつてば!」

「無免許の高校生に無茶言わないで下さいっ!!」

ハンドルを握り締め、前傾姿勢で半泣きのおキヌが抗議する。しかし、視線は前から逸らせない。車は走っていないが、所々に放置された自転車とか車とかがあるため全く気の抜けない状況に陥っているのだから。

「ごめん、俺GS免許ぐらいしか持つてないからっ!」

「そーいう問題じゃないですうううっ!!」

どこかの外れた答えを返す忠夫に、涙混じりの絶叫で突っ込むおキヌ。思わず視線も前から逸れた。

「おキヌちゃん、前っ!」

「え、きやあああつ?!」

慌てて視線を戻したおキヌの目に写ったのは、半分だけ店先の駐車場から道路にはみ出して停められているバイクであった。

ぎゅ、と目を瞑ったおキヌの体が、ふわりと持ち上げられて宙を舞った。

足元から響く、豪快な金属音と何かが砕けたような音。

目を開けば、再び忠夫に抱えられて腕の中。何故か安心してしまったおキヌに、忠夫は真剣な表情で声をかけた。

「おキヌちゃん」

「は、はいっ?!」

忠夫は、おキヌの後ろを指差した。其処にあるのは、何処にでもある小型の大衆車。幸い先程の車と同じように、鍵は刺さったままだ。

「もう一回。次はがんばろうっ!」

「も、もーいやですうううっ!!」

残念ながら、聞き届けられなかった。

——同時刻、氷室神社地下洞穴。

「お連れしたつすよー!」

「おお、美神殿! お早いお付きで……!」

新米の山の神が、不機嫌さを隠そうともしていない様子の美神を連れて来ていた。難しい顔で光で編まれた地図を眺め、時折なにかを口ずさんでは指を動かしていた道士は、明るい表情と共に迎え入れる。

「……で、ドライブ中の人をいきなり呼びつけといて、何の用よ?」

「え? 美神さんさつきまで車を停めて双眼鏡のぞ——」

空気が裂けた。道士の目には、そう見えた。次の瞬間には、地面にずたぼろになって

転がる一応神様なお方の姿。道士は、背中を走る嫌な予感を集団で感じていたりする。

「……こちらへ。詳しい説明をいたしますので、どうか」

「……別にいいけど」

二人とも、地面に転がる山の神には一顧だにくれていない。道士としては危険に自分から近づきたくないなどはないし、美神としても口は災いの元と言う言葉を知らない奴には手加減するつもりは無い。最も、その影響を一番受ける奴の耐久、回復能力が高すぎて、そいつを基準にされた山の神は暫く復活しそうに無いが。

「これは？」

「この地の見取り図と、現在張られている結界の状態です」

美神は眉根を寄せる。地図の中心に示されているのはどうやら現在地、氷室神社のようである。それを中心として、半球をかぶせたような形の光が地図の殆どを覆い、その回りに僅かな赤い光が点滅している。

どうやら、何かを目的とした結界のようである。——と言うよりも、この場に居る面子からするとおキヌに関連した者である事は間違いないことは分かる。

しかし、今美神の目の前にある半球には、巨大な亀裂が入っていた。時折、其処に向かつて吸い込まれていく幾つかの赤い点が見える。

「破れてる……おキヌちゃんとあの馬鹿がいきなり消えた事と関係あるの？」

「……見てたんですか？」

「……………」

不自然な、異様に不自然な沈黙がわだかまる。たつぷり一分はフリーズした美神は、冷静な表情で言葉を続けた。

「あ、あた、あたしがそんな事するわけ無いでしょうが」

「いや、だって今——」

動揺していた。表情は余裕の態を取り繕っているが、この上なく動揺していた。迂闊にも突っ込んだ台詞を吐いた道士に、殺気の籠りまくった視線がぶつけられる。

「さて、この結界ですが」

「……ず、ずるいっす」

「人生経験の差ですな」

すかさず話題を戻した道士の背中に、漸く言葉を搾り出した山の神の声がかげられた。そちらを一瞥さえせず、道士は冷静に答える。しかし、その肩が僅かに強張っている事を本人だけが知っていたりする。

「現在は、隔離・偽装結界として動いています。隔離されているのは、数を数える事すら馬鹿らしいほどの悪霊と」

道士は、目を瞑り祈るように。

「おキヌ。そして、横島忠夫と言う名の青年です」

「どう言うことかしら？ 事と次第によれば、いくら貴方でも容赦しないわよ」

美神は、己の靈力を高め始める。それは、己の親しき者を危険に曝した故の怒りか。それとも、裏切られたと言う疑いからの反動か。

腰に下げた神通棍に手を伸ばす美神の背後から、山の神の必死な声が聞こえた。

「ま、待つて下さいっ！ 誤解つすよ！ ほら、道士さんちゃんと説明しないと・・・！」

「いや、これは間違い無く私の失策です。責は、私にある」

美神と道士の間に割り込んだ山の神は、美神の殺気に当てられながらも冷や汗だらだらで説得する。しかし道士は目を瞑ったまま肯定とも取れる事を言うし、美神はどうとう取り出した神通棍に靈力を流し込み始めた。

「良いから！ さっさと説明しなさい！ 詳しく！ 正確に！ さもないと本気で吹っ飛ばすわよっ?!」

「・・・ええ、勿論」

ぎりぎりど歯を食いしばる音さえ聞こえそうな形相の美神。道士は、そんな彼女の目をしつかと見つめると、再び地図へと手を振る。其処には、赤い光の点で浸食されつつある半球内部の図と、その内部で侵食されていない部分との境界線を動き回る二つの蒼

い点があつた。

「これは、そちらの山の神殿の手助けによつて創られた「もう一つの世界」。・・・「迷い家」と言う物をどこ存知ですか？」

「・・・山の中で迷つた人が、偶然と幸運によつて見つけ出す家、でしょ。その家の中にあるものを一つだけ持ち帰れて、それは持ち主に富や幸運を授ける。でも、その家は二度と見つからない、いえ、見つける事ができない」

道士は、その美神の言葉に頷きを返す。大筋で合つていふと言う事を前置きし、道士が語つたその仕組み。

迷い家は、この世の空間とは別の場所にあり、其処に迷い込んだ者がその家に辿り着く。

その、別の空間を創りだす術を、山の神と共同で改良し、もしもの時には使用するつもりで作り上げた。

目的は、勿論おキヌの保護の為。

おキヌの魂と、その肉体の繋がりは、薄い。原因は未だ持つて不明である。しかし、現実問題として、その繋がりの薄さが一つの現象を引き起こしつつあつた。

おキヌの肉体を狙つて、悪霊達が蠢き始めていたのだ。

「始めは、些細な事でした。おキヌの後を、意識も自我も失いつつある悪霊が、何体か

追っていたと言う事。それ自体は、大した事ではありません。幸いにも、この町は充分に靈的保護を行なえる環境にありましたから」

水室神社に連なる者としての名、水室キヌ。それだけでも僅かとは言え護りの力を持つ。そして、本人の持つ靈的資質。なにより、この神社に祭られている神の護りを受けているという事。

「切欠は、姫がこの地を離れた事。護りの力も、加護の力も減少し、そこに漬け込まれました」

悪霊が、集団でおキヌに襲いかかろうとしていたのだと。幸いにも神社の結界にて守りきる事が可能なレベルであり、また深夜と言う事もありおキヌには気付かれずに済んでいた。

それが、幾度となく繰り返され、その度に襲ってくる悪霊の数が増え、困った道士は知り合い出会った山の神に相談し、おキヌの為に、と協力を依頼したのだ。

「結界自体は上手く行つたんです。地脈の力を応用して、ここだけじゃなく他の山の神にも協力をお願いして、それまでに無い強力な結界ができたんですけど・・・」

「・・・強力すぎたのね。靈的な物を、全部通さない程に」

それは、地脈の力さえも塞ぎかねない物となった。地脈の力を利用した結界が、地脈の力を塞ぎ止める。本末転倒も良い所である。しかし、おキヌに危険は迫っている。そ

の為、地脈の力を受け止める事が可能なレベルまで落とさなければならなかった。

そして、「迷い家」を参考にした結界の再構築。時間は少なく、余裕も無い。しかし、何とか目途が立ち、試験的に動かす直前に。

「結界が、破られました」

「予想よりも遥かに早く、大量に悪霊が集まったんす」

このままでは、おキヌが危ない。二人は、止むを得ず、その結界を発動させた。

隔離・偽装。この世とは別の世界を限定的にとは言え創りだし、そしてその場に現実世界そっくりの環境を作り上げる。悪霊達は、己がそれに囚われた事にさえ気がつかない筈であった。二人は、時間を稼ぎ出せた事に安堵の息をついていた。

……発動と同時に、おキヌと忠夫が捕らえられるという事態が発生するという、イレギュラーが起こるまでは。

「……まあ、300年前とは人の数が違いすぎるし、生まれる悪霊の数も桁違いになっている事が予想出来なかったのはわかるわ。それに、山の神といっても成り立て。そういった方面の知識、まだまだでしょ?」

「……すまない。私の失策です」

「恥ずかしながらっす」

美神は、呆れた様に二人を眺める。大の男が揃って落ち込んでいる様は中々にうつとおしいものが有るが、それは置いといて。今は、もっと重要な事が、ある。

「中に入れるの?」

「ええ。入り口は確保して——まさかつ?!」

「無茶つすよ! 今、あの中にどれだけの悪霊が——」

「うるっさいっ!!」

美神の怒号が、洞窟の中に響き渡る。その瞳は、不安と焦燥に揺れている。

「いい? 今、あの二人が、私の事務所所属員達が危ない目にあつてるの! . . . 横島君だけならそんなに心配はしないけど、おキヌちゃんも居るのよ?! さっさと入り口を開きなさいっ!!」

それは、あまりにも美神らしくない。超一流と謳われるGS美神令子。彼女は、須らく勝算を見出してから勝負に挑む。それは、すなわち戦略的に体勢を整えてから挑むと言う事。

それを疎かにするものに、勝利の女神が微笑みつつづける事は無い。それを、良く知っている女性である。

しかし、同時に、なによりも美神らしくも、ある。

焦りも露に道士に詰め寄る美神。しかし、道士は首を振る。

「まだだ。まだその時ではない」

「その時って何時よ?! 今! あの二人が! 横島君が! おキヌちゃんが! 危険な目にあつてるんでしようがっ!!」

道士の胸倉を掴み上げ、美神は必死に迫る。

美神の後ろから、どこか聞きなれた響きの声が聞こえたのは、その直後であつた。

「——すまぬ、遅れたわ」

「……どうやら、その時のようですな。運は、此方に向いているようだ」

「……え? 貴方——」

「次、次は俺の番だっておキヌちゃん！」

「いーえ。だって横島さんもう3台も壊しちゃってるじゃないですか」

「おキヌちゃんだっておキヌちゃんだろ？」

その頃のお二人さんは、自動車の運転席のドアノブを二人で握って楽しげに言い合っていた。題目、「どちらが今度は運転するか」。

相変わらず辺りは太陽の光も無く、二人の背後には怪しい影がうろうろとしているのが見える。しかし、運転の楽しさを知り始めた二人にとってはあんまり関係なかったりする。

「じゃーんけーん」

暫く沈黙と共に楽しげに睨み合っていた二人は、おもむろに拳を持ち上げ掛け声を上げる。

「ぼんっ！」

「きゃー！ 私の勝ちですねー！」

「あう」

忠夫、チヨキ。おキヌ、グー。実に嬉しそうな表情で運転席に飛び乗ったおキヌの顔を、肩を落とした忠夫が車の前を回って助手席に乗り込む。既に石が種切れなため、既

に事故った時の脱出装置くらいしかやる事が無い。

「いつきますよー!」

「おーう」

「えいつ!!」

二人の当初の目的は何処へやら。何時の間にか真夜中のドライブへと変わっていたり。

いつきに底まで踏み切られたアクセルに答え、真つ赤な屋根の無いオープンカーは、蹴飛ばされたように夜の道を加速していった。

——境界の内部に悪霊が満ちるまで、後12時間。

第貳拾話。

窓の外では日が沈み、既に黄昏さえも遠い時刻となっている。

「……ふう」

デスクに置かれた書類を一纏めにし、「持出厳禁」と赤い印が押してあるファイルにしまいこむ。思わず洩れた溜め息は、漸く此処までこぎつけた、と言う安堵と充足感か。それとも、まだまだ足りない物が多すぎると言う疲労か。

「装備は殆ど整った。隊員達の頭数も揃ってきた。なのに」

デスクの隅に諸々の書類に埋もれていたノートパソコンを引きずり出し、電源を入れる。微かな起動音を耳にしながら思うのは、超一流として名を馳せる妹のような女性の姿。

「……令子ちゃんクラスとは言わないまでも、せめて実戦経験のある統率者が欲しいな」
画面が要求してきた十数桁のパスワードを打ち込み、オカルトGメン日本支部のデータベースを開く。更に幾つかの項目を選び、前線を担当する者達のデータを開いていく。

スクロールさせていく先には、数十人の顔と詳細な身体的データ、経歴、靈的特徴、得

意な武器・道具の種類。そんな物が無機質に表示されていた。

どの顔写真も若く、まだまだ新人と言うのが画面を通してさえ伺われてしまう。

「ま、無いもの強請りは趣味じゃない。ともかく彼らに実戦経験を積ませる事が先決なんだけど——」

ノートパソコンに目を向けたまま、右手で小さなマウスで操作、開いた左手でデスクの上を探る。

手に触れた硬い金属の感触を握り、その傍に纏めて置かれていた灰皿と煙草を引っかけ。煙草の箱を一掃すり。出てきたであろう一本を勘だけで口元に咥え、一挙動でジッポーに着火する。

口腔内を満たす煙の味に眉を顰めながら、数口も吸わず煙草の吸殻の詰まった灰皿に押し付けた。

「——大規模な訓練は金が掛かりすぎる。かといって現状では総員出動するような事件は起きていない。まいったなあ」

イスの背もたれに体重をかけ、天井を見上げた。白い蛍光灯に照らされた無機質な白い天井は、この所少々黄ばみ始めている。

無意識の内にまた煙草の箱を取り一振り。手応えの無さに視線をやれば、中にはもう一本も入って居ない事が見て取れた。そんな事にさえ日頃しない舌打ちを打ちな

がら、補充に立ち上がった西条の懐で重厚な筈のクラシックが安っぽく響く。

取り出した携帯の画面に表示されているのは、先程まで脳裏に浮かんでいた一人の女性の名前だった。

挨拶も前置きも無く、電話の向こうの相手が切羽詰った様子で話し掛けてくる。取り合えず落ち着かせる事に成功し、一通りの事情を聞いた後。

西条の頬には、確かに笑みが刻まれていた。

「・・・幸運の女神かな？」

緩めてあつたネクタイを閉め直しながら、西条は手近な卓上電話を取る。連絡先は、こんな時間でも必ず人の居る待機室。

「警報を頼む。全力出動、非番のスタッフにも緊急召集を掛けてくれ。後、ネクロマンシー技能を持つ隊員を大至急揃えてくれ。レベルは問わない、どうせ一流所は出払ってる。当直中の隊員はブリーフィングルームに1分以内に集合、急げっ！」

必要な事を喋り終えると、西条は受話器を置いて走り出す。部屋の扉を蹴り破らんばかりに飛び出し、手元の時計で時間を確認しながら先を急いだ。

「・・・遅れた奴はボーナス50%カットだ」

一つだけ、伝え忘れたのか態と伝えなかったのか、そんな事を呟きながら。

「なー、おキヌちゃん」

「なんですかつ?! 今忙しいんですけど——わっ、ブレーキどこっ?!」

暗い闇に包まれた道路を、回りの暗さに圧倒されているライトの光を頼りに走る車。おキヌの慌てたような声と共に、蹴飛ばされたように加速した。

「あ、アクセル踏んじやった」

「・・・・・・・・」

「あああつ?! 横島さん、どーしたんですかそんなパズルみたいになっちゃって?!」

ブレーキと間違えて踏んだアクセルを戻しながら、ほっと一息ついたおキヌの後ろで生々しい音が聞こえた。バックミラーで確認すれば、まるでヨガの修行僧の如く四肢を絡ませた忠夫が上下逆さに転がっている。

「・・・シートベルト、忘れてた」

「駄目ですよ? 危ないですから」

「たつた今、身をもつて知りました」

間接をパキパキと鳴らしながら、後部座席に忠夫が座り直す。とうとう10の大台を越えた車の乗り継ぎ回数だが、根本的などころで運動神経の鈍いおキヌと、自分の足以外で移動する事に不慣れな忠夫ではあまり運転技術に改善は見られなかった。

「これこれ。これ、何? テレビ?」

「・・・ああ! えっへん。これはですなー、カーナビって言うんですよー」

得意げに説明するおキヌ。運転席と助手席の間から身を乗り出した忠夫の顔が、彼女の顔のすぐ傍にあるが、気にしている様子も無い。むしろ、少々嬉しそう。

「成る程。つまり、これが道案内してくれるってわけか」

「その通りです! ...でも、動いてないですね」

カーナビの画面は、大きく「ERROR」と表示されたまま沈黙を保っている。二人

掛りであちこち弄るが、全く変わった様子が無い。ちなみに、この間におキ又たちが乗る車の数cm横を、電信柱や壁が掠るギリギリで後方にすっ飛んでいつている。

余所見運転は危険である。

「うーん、壊れてるみたいですねー」

「残念だなー」

忠夫が名残惜しげに適当に目に付いたスイッチを弄る。幾つ目かのボタンを押したとき、画面に地図が表示された。

興味深々で覗き込む二人。その間も車はアクセルを踏まれつづけ、それに忠実に答えて加速し続けている。

「えっと、如何すりや良いのかな？」

「喋るらしいですよ？ その通りに動かせば良いって——」

『次の角を右です』

突如、ナビから明瞭な女性の声が発せられる。忠夫は驚いて飛び退き、おキ又は——。
「は、はいっ!!」

素直にハンドルを右に切った。高速道路並みの速度で流れていた風景が、一回転しながら後方に流れていく。

車体はスピンスし始め、狭い曲がり角を通り過ぎようとしたその瞬間。

「えいつ!!」

サイドブレーキも併用しながらフルブレーキ。ハンドルを調節しながら曲がり角の入り口に車の鼻先を合わせる。車の中で固定されていない物が派手に跳ね回り、窓ガラスに当たって鈍い音を立てた。

「(ト)ン(ト)ン」

辺りに甲高いタイヤの悲鳴が響く。アクセルを僅かに踏んで鼻先を曲がり角に突っ込む。慣性で流れる車体を制御しつつ、車体の後部を右前方に流し、遠心力とタイヤの摩擦が均衡した瞬間アクセルを踏み込む。

壁と接触したサイドミラーを落としながらも、車は奇跡的に無事にカーブを曲がっていった。

「ふう……ああつ?! 横島さんがまたバズルみたいにつ?!」

「……………」

シートベルトはきちんと付けましょう。

「……お願い、西条さん」

美神は携帯の通話を終わらせると、目の前に立つ道士に向かって話し掛ける。

「とりあえず、こっちは何とかかなりそうよ。大規模な霊障、それを未然に防ごうとした土

地神の創った結界に、大量の悪霊が閉じ込められているから開放される前に除霊を手伝って欲しい——って事になるわ」

「・・・時間はどれほど掛かりますか？」

その言葉に、美神は腕を組んで難しい表情を作るしかない。どれだけオカルトGメンが訓練されていようと、場所的、距離的に言って、少なくとも——

「後、2時間は」

「・・・ぎりぎりですな」

溜め息を付いた道士は、先程山の神が消えた場所に視線をやる。

「此方は、もう少しは早くなりそうですが・・・」

「状況は芳しくないわね・・・」

「道士の胸倉を掴み上げた激情は、今はとりあえず落ち着いている。暫しの間の安全は、おそらく大丈夫であろう。」

しかし、其処から先の為の手段が確保しきれていない。少なくとも、それまでは『彼女』に頼るしかないのだから。

「結界は持ちそうなの？」

「・・・結界を破る事より優先しておキヌを狙って動く雑霊が殆どですから。結界の安定に關しては問題無いかと」

「『彼女』はどれ位なら？」

「……正味、1時間持てば僥倖」

「……上で、Gメンの到着を待つわ。何かあつたら直ぐに連絡を頂戴」

美神は最後にそう言い残して背中を向ける。彼女の視線の先には、空中で揺らぎながら時折口を開く穴がある。それは、結界内部に繋がる通路。とは言え、それはあくまで入り口でしかない。

内部には未だ大量の悪霊が蔓延り、下手に開放してしまえば彼らは辺り構わず巨大な被害を撒き散らすであろう。

おキヌを連れ出せば、その瞬間目的を失った彼らは結界に攻撃し始めるだろう。一端破壊された結界は、強度を保ちつつも機能は十全とは言いがたい。

悪霊達を誤魔化す筈であつた偽装機能が、充分に動いていないのである。凶らずも、おキヌと餌とした形になってしまった事を、道士はひたすらに悔いていた。

「——頼む、無事で居てくれ……！」

祈りは、虚しく暗がりに響くのみ。

『次の角を左——と見せかけて右です』

「えっと、えいつ!」

おキヌの可愛らしい声とは裏腹に、車は高音域の絶叫を上げながらカーブを曲がる。後部座席の忠夫は最早声も出せないようだ。

『・・・チツ。次は左のような気がします』

「こつち?!」

道と言うよりも田んぼの畦道としかいいようの無い其処を、只の軽自動車が土ぼこりを撒き散らしながら走り抜ける。ライトも既に片方碎け、両側のサイドミラーも既に無い。忠夫もあちら此方に頭をぶつけてたんこぶだらけだ。とは言え気絶しているので文句の言いやうも無いのだが。

『しづとい・・・。右左左右右左右! 三番目が正解です』

「左ねっ！」

畦道をバウンドしながら飛び出した車は、着地と同時にスピンしながら左に走り出す。どう考えてもカーナビがそんな指示を出す訳は無い。無いのだが、初めて実物を見た二人と、運転に集中しきっているおキヌ。

三次元的にでも辺りの状況を捉えているかのような、車の動ける限界を完全に見極めているような、そんな運転で狭い道を突っ走る。既に罅の入った硝子のせいでもも前は見えていない。只、耳と車の動き、僅かに垣間見える前方だけが頼りである。

再び流れる音声を頼りに、右に左に車を操る。

幾つもの曲がり角を超え、道なき道を踏破する。

——何時しか、彼女達は町の中心部に向かって誘導されていた。

『……お疲れ様でした』

そして、それは唐突に終わりを告げる。

「え……？」

「……あだ、あだだだだ」

エンジンが煙を上げ、車が止まる。ナビから聞こえる声が、掠れ始めていた。

後部座席の忠夫が起き上がったのを感じながら、おキヌは視線を感じて右の窓を見る。

『此処で』

「・・・っ?!」

窓の外には、幾つもの禍々しい光。それが、悪霊達の目が放つ物だと分かった瞬間、おキヌの喉には悲鳴が絡み付いていた。

『——ゲーム・オーバーッ!』

「おキヌちゃんっ!!」

最早当初の目的さえ忘却し、僅かに残った知性で機械に潜り込んだ悪霊は、最後にその機械ごと如意棒に貫かれて消滅した。

『オ・・・ノレ・・・、ダガ・・・ニ・・・ガ・・・』

「逃げるよー!」

「ど、どうやってですか?!」

突き刺した如意棒を跳ね上げ、屋根を纏めて吹き飛ばす。おキヌの体を固定していたシートベルトを力任せに引きちぎって再び左腕一本で抱え上げた。腰に回した手に伝わる、今にも折れそうなその感触。

不安げに揺れる瞳が、周囲を囲む悪霊達を見ていた。

気絶してしまった事を悔いながら、辺りを観察する忠夫。前後左右、上に至るまで完全に包围されている。一体どれほどの数が集まっているのだろうか、視界は、ほぼ全て

彼らに埋め尽くされ様としていた。

車を囲んで直径20 m程のいびつな円が形成されていた。彼らが襲い掛かってこないのは、互いに牽制しあっているせいであろう。所々で、互いに絡み合つては離れていく姿が見受けられる。

しかし、円も段々と狭まってきている事も見て取れた。

おそらく、後一押し。

それだけで、雪崩れを打つたように彼らは殺到するだろう。

それが分かつてしまうだけに、忠夫は動けないでいる。

「よ、横島さん」

「大丈夫、何とかする。絶対」

おキヌが、目を瞑つて此方の首元に抱きついてきた。恐怖で彼女の体が震えているのが分かった。安心させるような言葉を何とか吐いたものの、どうにもこうにも難しい。

——二人とも、無事で切り抜けるのが。

「へ、へへへ。しようがねーよなー」

「・・・横島さん？」

ならば、この腕に抱いた暖かな少女だけは、守り通したいのならば。

「痛いのは——」

多少の代償くらいは、何ぼのモンじゃ、と思う。

「大つ嫌いだけど！ おキヌちゃんが怪我するのはもつと嫌いじゃああつ!!」

如意棒を振り上げ、振り下ろす。それは地面を強かに抉つて土煙を巻き上げた。それに触発されて動き出す悪霊達。円が、潰れるようにして動いた。

殺到する。彼らの妄執に従つて。願いに従つて。理性を、優しさを失つた壊れた自我に従つて。

数は膨大、狂気は妄執と混じり合い、既に歪んだ願いと化し。

歪んだが故に、それは純粹な、混沌。

だが、そんな物に、そんな奴らに渡してやるほど。

「おキヌちゃんは、絶対に渡さねえつ!! 優先権は俺に有り、じゃあああつ!!」

——おキヌは、この腕の中の彼女は、軽くないつ!

忠夫は全力で吼えながら、地面に突き刺した如意棒を伸ばす。咆哮に魔を退ける力が

無い事は分かっている。だが、それでも己に吼えかける。

抱きしめた少女を守りきれなければ、己の存在意義自体、無い。

それが、忠夫のあり方だと。

おキヌを庇つたまま上空から落ちてきた悪霊の群に突っ込んだ。すれ違いざまに、何体かと接触する。ぞつとするような痛みと感触を覚えながら、それでも握った手から力を抜かずにひたすらイメージを注ぎ込む。

何処までも、より早く、もつと早く。ひたすらに、伸びろと。

悪霊の牙のような物が背中を搔いて落ちていく。爪が、体当たりが、強烈な悪意が吹き付ける。

それは、ほんの数瞬の事であつただろうか。瞬きにして、一体何回分の事であつただろうか。

忠夫を囲む圧力が消え、上を見上げれば、其処には既に何も無い。真つ暗な空があるだけだ。

息つく暇も無く如意棒を縮める。一瞬にして手の中に収まったそれを、足元に蟠りながら駆け上る悪霊達から遠い所に向ける。

——伸ばして、適当な所に突き刺して、縮めて逃げるっ!!

足元はびつしりと悪霊に満たされている。殆ど水平に如意棒を構えながら、一見何も

なさげな場所に向かって伸びろと念じた。

如意棒は、直ぐに答えて伸びていく。

一瞬にして100Mほど伸び――

「・・・そりゃ、反則だ」

――「真つ黒な巨大な壁」を貫通して、遠くの地面に突き刺さった。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・!』

「・・・っ!」

「あれ、何なんですか・・・?」

穴を穿たれた壁から、震えるような大音声が響く。次の瞬間、その中心に、巨大な瞳が出現した。

突き刺さった如意棒はそのまま、今はそれにぶら下がっている状態であるが、その内確実に棒ごと落下する事は目に見えていた。

しかし、目の前に穿たれていた穴は既に塞がっている。

「やるしか無い、かな」

「ちよ、本気ですかつ?!」

「もつちろん！ 本気も本気。真面目だぜっ！」

ならば、自身の肉体を持って、もう一度、貫く。其処まで考えて、不安げにしがみつく少女を抱えなおす。今度は、よりしつかりと、何事があつても守りきれるように。

「止めて、止めてくださいっ！」

「御免な、そりや怖いだろうけど、少しの我慢だから。大丈夫だつて」

「そうじゃなくて……！」

何事かを続けようとした彼女の声は、傾きを水平に近づけ始めた如意棒の動きで途切れさせられた。

無言で両の手に力を籠め、背中と頭でおキヌを守る盾となる。

ズキズキと痛む背中が、火傷をしたように熱いが今となつては関係無い。とりあえず、先ずは彼女を逃がす事。そして、何とかして神社に届けるか、美神に連絡を取る。

「あー、そつか。最初つかからそーしてりや良かったんだよなあ」

「横島さんっ！ 横島さんってばっ?!」

「…嬉しかったんだよな、俺。おキヌちゃんが元気そうで、楽しそうで、もうちよつと、見ていたいと、そう思ったんだ——」

——縮め。速く速く。目の前の壁を突き破る為に。

「もう一回、見ないとな」

「・・・え？」

それは、一瞬の出来事だった。

縮み始めた如意棒の先端に掴まった忠夫達が、巨大な悪霊の壁にぶつかる直前に、10tトラックほどの大きさの光の塊が、その壁を真横から殴りつけた。

壁はそのまま横に吹っ飛び、勢い良く地面に叩きつけられる。

それに僅かに引き摺られながら、斜めに流れる視界には、特に目立つ物は無い。

如意棒が中ほどまで縮みきった頃、その先で再び光の塊が乱舞した。幾つも幾つも、今度は精々軽自動車ほどの大きさだが、それに直撃された悪霊達が、吹き散らされて行くのが良く見えた。

「わっ?!」

「きゃあっ?!」

其処まで認識した瞬間、忠夫とおキヌは既に収穫の終わった田んぼに着地していた。意識を逸らしたせいも、かなりの衝撃が伴った物の二人とも奇跡的に被害はない。

「——おお、久し振りよの、おキヌ」

「え——?」

懐かしい口調が、聞きなれた声でおキヌの耳に届いた。その口調は、とても優しく心を揺さぶる記憶の影。その声は、優しく迎えてくれた人の声。

振り向いたおキヌが目にしたのは。

「さ、早苗お姉ちゃん……!」

「……まあ、そう見えると思うたわ」

「ま、まさか、もしかして……あの、女華姫さまっすか?!」

「そちらも久しいの、横島と言うたか?」

忠夫の声に笑顔を返した、おキヌと瓜二つの容貌を持った早苗と呼ばれる巫女服の少女は、雄雄しくも細い腕を組んで、仁王立ちで其処に立っていた。

「め、女華姫さまって誰ですか?」

「・・・そうか、おキヌは・・・」

「あ、あの、早苗お姉ちゃんじゃないんですか？」

「・・・」

寂しげな笑みを浮かべた義理の姉。その表情は、いつも見ている姉のものでありながら、同時に酷くおキヌの胸を締め付ける。

「少々、体を借りておるだけ。そう心配する事も無いわえ」

「えっと、どー言う事つすか？ 女華姫さま、成仏したんじや？」

さり気無くおキヌの背後に回って、自分の背中を見せないようにしながら何でもないように忠夫が尋ねる。

「・・・いや、その予定であつたが」

「ふんふん」

「神界の方から、正式に武神としての勧誘が来て、な」

照れくさそうに話す女華姫。因みに見た目は巫女服を着た早苗だが、中身は筋骨隆々、威風堂々たる和風ターミネーターである。女性だ、一応。

とは言え人妻である為、忠夫にとつては射程外。しかし見た目相応に恥ずかしげに頬を掻く動作は、そうでなければおそらく求婚していたであろう程には可愛らしい仕草である。

「……その、つい、な？」

「……つい、ですかい」

どうやら、その手続き関係で神界の方に行っていたらしい。あれほどの實力を見せた、人から人の手によって神へと変わった女神、しかも300年程しか括られていない存在。

しかし、その何処までも強き心。人の為に、友の幸せの為に尽くせる優しき心。そして、情報媒体を通じたとは言え一気に人の心を掴んだカリスマ。

ともあれ、そう言った様々な表の要因と、これから先、反デタントとの争いが予測されている状況で、戦力として使えると言う裏の要因。

それ以外にも様々な要因はあるが、取り合えず、正式に武神として神界に連なる事になつたのだと言う。

ところが、さつさと済ませて帰ってくるつもりが中々に手続きが終わらない。さすが神界、そう言った事には厳格である。しかし、これも先々を見通して、己の領地に住んでいる人々の為、何よりおキヌの為に我慢していた所に。

一寸した事で極最近知り合つた、ある神界の情報分析官から大変な話を聞いたのだ。

「おキヌちゃんが危ないのね〜!」

物凄く端的に言ううとそう言う事だ。しかし、手続き中にこの場所を離れる訳には行か

ない。直ぐにでも駆けつきたい気持ちはあったものの、距離的なことを考えると間に合わない可能性も高い。

そうして困っていた所に、某神様が、「良い手があるのね〜!」と、教えてくれたのが、己の子孫たるこの少女。

強力な、類稀なる霊媒の力を持った少女の存在である。

善は急げとヒヤクメを通して道士に伝え、其処から山の神に、山の神から早苗本人に事態を告げる。中々帰ってこないおキヌを案じていた早苗は、山の神の言葉にすぐさま頷き、「それ」を始めた。

『神降ろし』。人が、己の肉体に神を降ろし、その力を行使する、ある意味究極の加護である。

己の直系血縁である事。氷室神社の巫女である事。強力な霊媒能力を持つ事。何より、本人の願いが、女華姫の願いと一致した事。

どれか一つ欠けても、実現は難しかったであろう。

しかし、彼女はそれを成し遂げ。

そして、「彼女達」は、今、此処に居る。

「とは言え、人の肉体では器として脆すぎるゆえに、余り長い事は顕現してはおられぬ」
「……じゃ、どーすんすか」

「……後、2時間。それだけ逃げ切れれば此方に勝ち目が出てくるわ」
苦笑いする忠夫の前で、余裕綽々の女華姫が笑う。何せ一度は死津喪比女と戦った戦友同士、それなりに気心の知れたものもある。

「しゃーないっすねー。もう一頑張りっすか」

「ま、しつかりやる事よの」

漸く背中の痛みが引いて来た忠夫が、俯くおキヌを庇うように前に出る。如意棒を振り構えれば、目の前では早苗に降りた女華姫が、拳に光を灯らせて、顔に似合わない、漢らしい笑みを浮かべている。

「っせいっ！」

「はあっ!!」

忠夫の伸ばした如意棒が、背後のビルごと接近しつつあった悪霊達を薙ぎ払う。其処から洩れて散開しながら、なおも迫る悪霊達。その顔面に、幾つ物光の塊が直撃する。それは良く見れば、拳の形を取っていたり。その一瞬で打ち出された光の拳の数。

——およそ、千。

「相変わらず無茶苦茶っすねー」

「全部終わったら筋肉痛よの、間違い無く」

如意棒を元の長さに戻して、肩に担いだ忠夫の横で、女華姫は拳を突き出した体勢で固まっていた。

同時に拳から、幾つも幾つも神通力の塊を打ち出す。莫大なエネルギーに支えられた、無茶と言えば無茶、そんな攻撃である。神として顕現していた間ならば、直接殴つても問題無いが、今降りているのは只の少女の体である。下手に殴れば骨が折れる。と

いう訳で、慣れない飛び道具風味でやっているのであつたりする。

何故か一回打つごとに、実際に拳を引いて放ち、打っている。

「さて、鬼ごつこと行きましょーか」

「昔を思い出すのー」

どこか楽しげに話す二人の背後で俯いたまま、一言も喋らないおキヌの瞳から――。

一滴の涙が零れ落ちた。

第貳拾壹話。

「……んのおおっ!!」

「せいっ!」

忠夫が振りぬいた如意棒を掻い潜り、何体かの悪霊達がおキヌに迫る。その眼前に素早く回りこんだ早苗が拳を振り抜き、すれ違いざまに叩き落す。

「はあっ! はあっ! も、もうちよつと止められんかえ?」

「無茶言わんで下さいよ女華姫様っ! これ滅茶苦茶重いんすからっ!!」

「……ふうう。靈力の輝きも鈍い。動きも遅くなつとるのう」

「色々あつたんつすよー」

早苗 in 女華姫の拳が放つた烈光を喰らつた悪霊達が弾け飛び、その後方で息を荒げた少女が再び拳を構える。狙いは新たに迫る悪霊達。

重たげに如意棒を構えた忠夫も、再び飛び込む体勢を取る。

忠夫の動きが遅くなっているのは疲労の為でも何でもない。純粹に、身体強化に回していた分の靈力も現在は失われている為である。

如意棒の重さも、前の忠夫になればそう大きなハンデとは成り得なかつたであろう。

只、今はその重さが負担になりつつある。それだけである。

「ちつくしよー！ 絶対向いてねってこれえつ！」

「泣き言を言うておる暇があるなら、攪乱を——」

前方の群に向かって構えた二人の横合いから、大量の悪霊が出現する。そちらを見もせずに女華姫は神速の拳を振りぬいた。

弾ける光、それは正に綺羅星の如く。

「つはあ・・・ふう。武神流星拳・・・なんての」

「そもそもまだ武神じゃないつしよ、たしか」

「細かい所ばーっかり気にしおる。わらわの夫と良く似とるわ」

小首を傾げながら聞いてくる早苗嬢。中身は女華姫であるが。どっちかと言うと某銃を模した格闘技であろう。

そんな軽口も叩きつつ、何とか前方の群を駆逐する。忠夫が独楽のように回って如意棒ぶん回し、女華姫がバラけた群を片端から蹴散らしていく。もう、幾度目の波を持ちこたえただろうか。幸いにも——実際の所場所が境界の縁近くであり、回り込まれる事が無いだけなのであるが——後方からの襲撃は無く、背後に庇ったおキヌには未だ到達を許していないのが救いか。

蹴散らし、殴り飛ばし、掻き乱す。そんな戦いを、もう一時間近い時間過ごしていた。

忠夫はまだまだ余裕がある。例え身体強化の力が失われたといつてもそこは人狼の血を引く者。多少息を荒げつつはあるが、ことタフネスに関してはもうしばらくは問題無し。

問題が有るとすれば。

「つ……あ、はあつ、はあつ！」

「大丈夫っすか、女華姫様っ！」

「い、委細問題無いっ！」

肩を震わせ、崩れ落ちそうな膝に力を籠めながら姫は言う。拳に宿った光にはいささかの衰えも見えないが、膨大な数の悪霊を相手にたつたの二人で戦う限界は、もう直ぐ其処まで来ているように見える。

『オオオオオ……!!』

「マズっ?! でかいの来たあつ！」

「お、おのれええええええっ!!」

力を振り絞り、巨大な光の塊を練り上げる。まるで光の球体に包まれたような早苗の目の前に、空を覆うような大きさの、巨大な霊の集合体が迫り来る。

進路上の悪霊達をその身に取り込み、更に質量と禍々しさを膨れ上げながら、その巨体は突撃した。

「はあっ!!」

『オ、オオオオオっ?!』

しかし、その形の無い体が彼女達を押しつぶす前に、その前面に早苗の打ち出した光の巨弾が炸裂する。弾けるようにその集合体は膨らんで、後方に大量の悪霊達をばら撒きながら吹き飛んだ。

「ちつくしよ、一体何度目だよあいつ・・・!」

それは、幾度となく繰り返し返された光景であった。遠くに吹き飛ばされ、その体を半分、いや数分の1まで減らされた集合体は、諦める事無く再び此方に迫ってくる。その過程でまた周囲に漂う悪霊達を吸収し、更に巨大になりながら。

結界内に薄く広がりつつあった悪意の群は、段々と忠夫達に向かって収束しつつある。それ故に、悪霊の集合体——霊団の規模は、より巨大になりながら、迅速に復活していくようになっていた。

「・・・あ」

拳を振りぬいたままの体勢で、膝から崩れ落ちるようにして早苗が倒れた。

「——女華姫様っ?!」

「・・・ほっ! く、くそ・・・運動不足にも程があるわえ・・・!」

水分の無くなった喉から、無理やりに気管を抉じ開けて咳が洩れる。地面に突っ伏し

た早苗は必死で肘を突つ張り立ち上がろうとするものの、その腕は意思に反して力を籠める事を許さない。

例え膨大な神通力を誇ろうとも、それを発する土台たる器は人の体。むしろ、いかに相性が良いといつても此処までその力を振るえた事こそが驚嘆であった。

「さ、早苗お姉ちゃん……！」

「おキヌ、下がっておれ……」

何時の間にか、後で此方を見ていたおキヌの姿が、うつ伏せに倒れこむ早苗の横にあった。おキヌの差し出した手を掴み、それに縋るようにながらゆつくりと立ち上がる早苗。膝は震え、荒いだ息はまだまともに整った様子も無い。

しかし、それでも、おキヌを後ろに庇つて立ち上がる。

「そんな顔をするでない。わらわは——」

思いのままに動いてくれない細い腕を、今だけは少し疎ましく思う。早苗の腕、女性らしいほっそりとした華奢な腕を動かしたのは初めての体験である。

しかし、今は目の前の火の粉を払える、背中にかばった親友を——守れるだけの、頼りになる腕が欲しかった。

ふらふらと持ち上がった腕には、燃え上がる炎のように燐光が纏わりついていて、それを必死で腰だめに構えて狙いをつける。

忠夫が、必死で動き回って囿になっているのが見えた。如意棒を持っていないようだ。逃げる時にはあれが必要になるだろうが、現状ではそれさえも難しい。ただ、その時を待つ。

「もう、もう止めてっ！ どうして、二人ともそんなにボロボロになってまで私なんかを……！」

「……ふ、ふふふ」

体中にかいた汗が、服に染み込んで非常に鬱陶しく感じてしまう。いくら神降ろしをするからといっても、もうちよつと動きやすい服が良かった。

そんな益体もない事を考えながら、おキヌの声に笑いを返す。

「おキヌが、そんなおキヌだから……優しい娘だから。わらわの大切な友、故にわらわは」

忠夫が悪霊達に包围されるたびにその囲みを無理やり突破して、傷だらけになっているのが見える。時折此方に向かおうとする悪霊には、一瞬だけ出現させた如意棒を伸ばし、正確に狙い撃ちして落としている。

だが、その度に僅かに姿勢を崩し、離脱に僅かな間を必要としてしまう。

その背中に、一体が体当たりを喰らわせた。

「つだああつ?! こんにやろー! こんにやろー!」

痛みで半泣きになりながら、如意棒をやたらめったらに振り回す。既にジージャンはあちこちが破け、血塗れである。その頭上から、雪崩れのように悪意の群が襲い掛かった。

悪霊に包まれ、姿を消す忠夫。

「いやあああああつ?!」

「わらわは、お前を——守り抜くつ!!」

全力を振り絞った光弾は、天地を斜めに貫く柱の如く。

光の軌跡を残しながら、忠夫を包んだ悪霊達を欠片も残さず消し飛ばした。

「・・・心ごと、な」

「早苗お姉ちゃん?! お姉ちゃんっ?!」

小さな眩きを残して、項垂れる早苗。その体からは完全に力が抜け落ち、意識も完全に無くなっている事が見て取れた。肩を揺さぶるおキヌの声に、答えが帰ることは無い。

しかし、その意思を同じくする者は、その想いを受け取った。

『オオオオオオオオオ・・・』

「何で、何で・・・」

おキヌと、その腕に抱かれた早苗を囲むように悪霊達が舞い踊る。

恐怖に震えながらも、早苗に縋りつくように、あるいは守るように抱きつくおキヌを嘲笑いながら。

『ヨコセ……』

「……お姉ちゃんは、お姉ちゃんだけは……！」

『オマエノカラダ……ヨコセエエツ!!』

「……誰か——じゃない！ 私だって！」

想いは引き継がれた。早苗の体をゆつくりと地面に横たえ、震えながらもその前に両の手を広げて立つ少女。

まるで、何時かの光景の如く。

「——やらせてたまるかあああつ!!」

だから、彼は、突き破る。恐怖を、畏怖を、運命を。

赤いバンダナは既に無い。押さえられていた白い狼の耳は、僅かに傷付き血を流しながらもピンと立つ。少々間抜けにも破けたジーンパンからは、赤と黒でまだらに染まった、真つ白であつただろう尻尾が棚引いている。

疾風のように飛び込んだ彼は、行く手を阻んだ悪意を蹴倒し、薙ぎ払い、殴り飛ばしながら嘯み破る。

「おおおおおおおおおつ!!」

「横島さんっ!! . . . え?」

おキヌに襲い掛かろうとしていた不埒者を、美神直伝の——体で覚えたことをそう言うならばだが——ドロップキックで撃墜する。とは言え霊力なんて箆っていない。驚いて包囲を広げたその隙、其処が狙い目だ。

尻尾と耳を見て混乱したおキヌと、倒れている早苗に傷が無い事を視線で確認。着地の勢いを殺さず二人を搔つ攫い。

「もーこうなつたらヤケクソじゃあああつ!!」

二人を両手に抱えたままでは如意棒も振るえないので、如意棒は右手に出現させて蹴り飛ばす。泣きそうなほど痛かったが、ぐるぐると回転しながら飛んでいつてくれた如意棒のおかげで道は開けた。

後は後ろも見ずに――。

「何処までも逃げ切つたらー!!」

全力でそつちに向かつて走り抜ける。時にゴキブリの如く地面を低く走り抜け、鼠のように狭い空間をすり抜ける。

忠夫の逃げ足、本領発揮。

「ええつと、本物? ……あー、結構やわらかーい。そう言えば、初めて触つた気がする……」

「うわひやつ?! おキヌちゃん今は勘弁――!」

後ろ向きに小脇に抱えたおキヌが尻尾を握つたりして、少々ふら付いたりもしながら。

ところがどっこい、相手も妄執で動く悪霊達。相手が相手ならば、先程まで戦つていた相手の突然の転進に驚きもしただろうが、機械的に彼らを追いかける。

「大分手薄になつてるけど……如意棒を使うのは無理、かなー」

忠夫と女華姫の奮戦は、決して無駄な戦いではなかった。十重二十重に取り巻いていた悪霊達の包囲網。それが今は、あちら此方に隙間のある網となっている。

地面に突き刺さっていた如意棒を、すれ違いざまに拾い上げて引つ込める。

「重いもんなー、これ」

「重くないですー!」

「キャインツ!!」

乙女の勘違いで尻尾の付け根をきゅつとされた半人狼の悲鳴を残しながら、三人は包囲網の外へと抜け出していた。

背後からは、相変わらず大量の悪意の群。目の前には、未だ明ける様子さえも無い暗い空。

その先に見える——氷室神社のある森。

「あうあー! 締めちや駄目握つちや駄目捻つちやいやー!」

「きやー! 横島さん後ろから沢山来ましたー!」

「のおおおつ?! もげるー!」

後ろ向きに抱え込まれている為、おキヌの目には怒り狂ったように追いかけてくる悪霊達のはつきりと見える。普通なら恐怖で気絶してもおかしくないが、体をしっかりと抱きしめた腕の温かさ、しっかりと握り締めた手の中の柔らかい尻尾が紛らわせてくれ

た。

思わず握り締めたのは不可抗力だ、きつと、多分、おそろく。

「大丈夫だから離してくれおキヌちゃん！ ほらほら来たからー！」

「だってだってー！」

悲鳴を上げるのはしようがないだろう。おキヌの目の前、つまり忠夫の後方10m程の所は既に悪霊の津波で埋め尽くされているのだから。

しかし、おキヌが、忠夫の言葉の意味を理解する前に。

その悪霊の壁は、上空から飛来した、無数の矢で駆逐された。

「間に合ったつすー！」

「援軍だよなっ?! そーだよなっ?!」

氷室神社の上空に浮かぶのは、100人近い男達。手に手に矢を持ち剣を持ち。神々しくも勇ましく、殆ど全てがムキムキ若しくはむさ苦しい。

「山の神連合軍、到着したつすよー! 先輩方、行きましょー!」

「応っ! 皆、山男の意地を見せてやれええっ!!」

一際立派な髭を持った、一番大きなゴツつい男の声の元、背後に控えた山の神たちが一斉に矢を連射する。それはまるで矢自体が意思を持つように、正確に悪霊に当たって消滅させる。

「さ、貴方達は二人を連れて——」

「下がつとくから後頼んだぞー!!」

「——後ろに……って、もうあんな所つすか」

道士と頭を突き合わせて話していた、おキヌの代わりに山に括られた元ワンダーホーゲルの幽霊は、現在はそれなりに周囲の山の神たちにも認められ始め、それなりにコネを持つていたりする。

それを使って今回お願いした訳だが、彼も此処まで沢山来るとは思っていなかった。周辺の山々だけでなく、遠くは本州以外からも来ていたりするのである。

それなのに、これ程までに集まった理由はと言うと。

「うおおおっ!! この戦いを女華姫様に捧げるぞー!!」

「正に漢の理想! 夢の具現筋肉……! その女神からのお達しじゃー!!」

「蹴散らせええっ!!」

と、言う訳で。女華姫の勇姿に惑わされた、暑苦しい集団だつたりして。

「こらあつ! 新米、ばやばやしてないで手を動かせええっ!!」

「うーつす!!」

名のある山の神も来ているおかげで、ワンダーホーゲルは体育会系の下つ端扱いである。慣れているので何ともないが。

山の神は、女性も居るには居るのだが、今回は何故か男比率高すぎて。目の保養とは程遠し。

「つ、着いた・・・!! ってなんじゃこりゃあつ?!」

「わー、人が沢山、機械も一杯ある・・・」

氷室神社の周りを囲む森を抜け、境内に駆け込んだ忠夫と担がれたおキノの見た物は、境内を埋め尽くさんばかりに敷き詰められたトラック、バギー、四角い箱を積んだ大きな車の群達。

そして、その間を駆け回る、迷彩服に身を包んだ一団であった。

その中から、見知った亜麻色の髪を持った女性が駆けて来る。

「良かった……！ あんた達、無事だったのね！」

「美神さん、どうやって此処に？」

迷彩服の一団の中で、一人だけ動き易そうなパンツスーツに身を包んだ美神の姿。その姿に湧き上がる安堵を堪えながら、忠夫は呆然と質問する。

美神は、それにニヤリと意地の悪い笑顔を返した。

「使えるものは使う。GSの鉄則よ？」

「……と言うか、本来は商売仇の筈なんだけどねえ」

忠夫の背後から聞こえた声に振り向けば、こちらも場にそぐわない、パリツとしたオーダーメイドのスーツに身を包んだ西条の姿がある。

彼は苦笑いを堪えつつ、手に持った通信機に話し掛ける。

「準備の終わった班から順次整列。破魔札マシンガン班は前衛、近づいてくる霊をうち漏らすなよ。銀の銃弾を籠めたアサルトライフルで中距離は押さえろ、絶対に防衛ライオンを突破されるな。ネクロマンシー部隊は待機」

『了解しました！』

通信機を懐に収め、西条は美神達に視線を向ける。その瞳には、悪戯っぽい光が踊つ

ていた。

「さて。組織の力、特等席で見えていくかい？」

状況は、一変していた。

「東の山の分隊は矢で打ち減らせ！ 近づいてきた奴らは西のもんで止める！」
「任せたあつ!!」

上空からは、まさに雨霞と矢が降り注ぐ。それを掻い潜って肉薄する霊達も、山の神たちが持つ神剣に刈り取られて消えていく。

「いいかつ！ 敵を倒すんじゃない、味方をフォローする事だけ考えろ！ そうすれば

誰も死なずに済む！ 怪我した者は直ぐに下がってヒーリングを受けろっ！」

「破魔札マシガン、引き付けろ！ まだ、まだまだぞ・・・今だっ!!」

「矢が無いぞ！ お代わり急いで持ってこいっ!!」

神社に接近するものは、あるいは霊体ボウガンの矢に貫かれ、あるいは大量にばら撒かれた破魔札に包まれて消えていく。傷付いた者も後方に待機したヒーリング術者達にすぐさま手当てされて復帰する。

女華姫と忠夫によって討たれた悪霊達は、その数をさらに減らしていった。

「うわ、すっげ」

「ほら、ぼやぼやしてないで。あんたはこれでも着けてなさい」

その光景に驚嘆の声を漏らす忠夫の背後から、赤いバンダナを持った美神が近づいてくる。

何処か暇そうなのは、下手に割り込む必要も無いと割り切っているためだろうか。

「あ、すいませんっす」

「全く・・・ま、あんたにしちゃあ、頑張った方よね。ほら」

そう言つて、美神は微かに笑いながら忠夫の頭にバンダナを巻く。前から。

当然、結構な近距離に美神の顔があるわけで、忠夫は何故かとてもなく動揺したりしてしまふ。

「・・・ん、っと。これでよし」

灰かに香るのは、香水だろうか。それとも、美神の匂いだろうか。離れた美神が再び何処かへ歩いていく。どうやら西条の所に向かったようだ。忠夫が現状を把握しきれずに呆然としているその時に。

「・・・あの、横島さん」

「うえっ?! あ、いや、違うんだっ?!」

「何がですか?」

心細げに語りかけて来たのは、先程まで未だ目を覚まさない早苗の様子を看ていたおキヌであった。何となく後ろめたさを感じつつ、忠夫はおキヌと視線を合わせる。

「・・・横島さんって、人間じゃないんですよね?」

「え? うん、そーだけど」

「・・・はあああああ」

聞き様によつてはとんでもなく重い言葉である。であるが、おキヌは忠夫の軽い返事に、何かが嵌ったような感覚を覚えていた。

「うん・・・よしっ!」

「何が?」

「・・・いえ、秘密です」

不思議な笑みを、儂げな笑みを浮かべたおキヌのその顔に、忠夫は何故か不安を覚える。何処かで見たような、そんな笑顔であった。忠夫が、それを思い出す前に、おキヌの口からは更に言葉が滑り出す。

「人間じゃないとか、どーでも良いんです。横島さんが、「いつもの」横島さんだったから、大丈夫だつて感じるんです。胸のあたりが、ぽかぽかしてくるんです。・・・可笑しいですか？」

「や、良く分からんけど可笑しくは無いな」

ほんのりと笑いつつ、忠夫の手をそつと握るおキヌの手。柔らかさと、ほんの少しの冷たさと、ちよつとだけ震えを感じる手。

「多分——なんだと思います。でも、あの人たちが追いかけてくるのが私だつて言うのも、分かつたんです。分かつちやつたんです」

「え？」

その手が、す、と離される。その感触に、空恐ろしさを覚える。喪失感さえ感じてしまふ。

「横島君、おキヌちゃん！ 不味いわ、後退するわよつ!!」

「総員退避！ 下手に刺激するな、ボディを組んだまま静かに素早く境内まで下がれ——！」

持たずにその音色は途切れてしまう。

「馬鹿なっ！ 彼らはまだ笛を使いこなせちや居ないんだぞ！ あんな状況下でまともに吹ける訳が無いだろう！ 下がらせろっ！」

「了解っ！ おい、早くこつちに来るんだ、下がれっ！」

「横島君！ 行つて！」

「了解っす！」

切羽詰った周囲の声と、美神の凜とした声に押されて忠夫が飛び出す。すぐさま彼らのところまで駆け込んで、幸いにも全員男なので襟首引つ掴んで美神達のところへ投げ捨てた。

「ちくしょう！ 何で、何でこんな時に……！」

「実戦でいきなり霊能が全力で使えると思つていたのか?! 無茶も良い所だぞ！」

投げ捨てられた男達は、西条に怒鳴られながら境内に転がり込むようにして飛び込んだ。その後ろから、忠夫が必死に駆け込んでくる。それを確認して、西条は通信機に叫ぶ。

「結界展開！ 出力は最大だ！」

「了解！ 結界、起こせっ！」

機械音とともに、数台有ったトラックの荷台部分が持ち上がり、複雑な模様の書かれ

た板のような物が立ち上がる。その傍にいた男達がなにやら操作すると、その模様は機械音を放ちながら光り始めた。

それに反応したのか、霊団がまるで触手のように霊で出来た腕を何本も伸ばしてくる。

しかし、腕は境内に入る直前に、見えない壁にぶつかって停止した。

「……結界車、正常稼動中！ ですが負荷が大きすぎます、長くは持ちませんよ！」

「了解！ 今の内に「あれ」の準備を終わらせるんだ！」

西条の声に反応して、隊員たちが動き出す。結界は、何度も繰り出される霊団の腕を弾き、止めてはいる。止めてはいるが。

「だ、駄目です！ 負荷が急激に上昇中！ 持ちません！」

「くそ……！ ネクロマンシー部隊で足止めする予定が——」

霊団、悪霊達が溶け合って出来たそのレギオンとも言うべき存在は、その内に含んだ霊の数によって厄介さが等比的に跳ね上がる。しかも、目の前で荒れ狂う霊団は、少なくともかなりの広範囲にわたって存在していた霊達が、数を減らされたとはいえ集まって出来た存在である。

だからこそ、虎の子まで持ち出しての準備であった筈が、その虎の子を起こす前に限界が迫ると言う結果になっていた。

「……今の内に逃げませんか？」

「……そーしたいのも山々なんだけど、ねー」

冷や汗だらだらで及び腰の二人が、前方の狂騒劇を見ながらじりじりと下がる。しかし、その先にあるのは本堂のみ。

「西条さんが、「あらかた片付くまで出入り口は閉じておいてくれ」って、道士に言っちゃったせいで出入り口塞がってるのよねー」

「……嘘だと言ってー！ いややー！ 死にたくないー！」

「うるっさいっ！ 私だってまだ死にたくないわよっ?！」

「其処、少し静かにしてくれっ！」

ぎゃあぎゃあど騒ぐ二人と、それに突っ込む西条。その隙を突かれた、と言えばそれまでであろう。しかし、誰も、彼女の動きに目をやっていなかったのもまた事実。

彼女は、おキヌは、静かに寝息を立て始めた早苗を救護班から受け取った毛布で包むと、ゆっくりと立ち上がって歩いていった。

今にも壊れそうな結界の縁ギリギリまで。

「……そうですよね。きつと、誰も死にたくなんて無いですよね」

『カラダ……イノチ……ヨコセ……!』

「辛いですよね。苦しいですよね。きつと、誰かの命でそれが無くなるのなら、躊躇って

もやっっちゃうくらい、辛いですよね」

『サムイ……クルシイ……イタイ……』

『タスケテ……タスケテ……!』

二人が、西条が気が付いたときには、おキヌは既にそこにいた。先程忠夫が投げ込んだ、ネクロマンシー部隊の落下地点。

「おキヌちゃん?!」

「何やってるの?!」戻って、早く!」

しかし、おキヌがその言葉に返したものは、こちらの不安を掻き消すような、優しい優しい笑顔であった。

「私の体をあげるから、他の皆には手を出さないで下さい……」

『オオオオオオツ!!』

「——つて、言つてたと思います。少し、ほんの少し前の私なら」

「「……え？」」

おキ又はしやがんで、足元に転がった細長い何かを拾い上げる。それは、先程投げ捨てられた隊員が落とした笛。奇妙に捻子くれた、如何見ても楽器とは見えないその笛。

ネクロマンシー。死霊使いの笛。

「でも、もう駄目です。だつて——」

『オオオオオ……!』

目の前まで迫つたおキ又は、狂気に包まれた霊団が群がろうとする。それに必死で抵抗する結果と、彼女に駆け寄ろうとする3人の姿。空では、未だに山の神達が必死で霊団に攻撃を仕掛けつづけている。

「——大切な人たちを、思い出しちゃいましたからっ!!」

鍵は、一体なんだったのか。早苗が、いや、女華姫が彼女に残した意思か。それとも、何時かのように彼女を救った青年の姿か。それとも、その青年が、人ではない存在である事か。

あるいは、青年に赤いバンダナを着ける女性の姿だったのかもしれないが。

「私は、おキヌ！ 氷室キヌで、二元幽霊の、GS美神除霊事務所の所員です!!」

吐息とともに、笛に吹き込んだのは一体なんだったのだろうか。目の前で苦しむ霊達に對する悲しみか。大切な人たちを守りたい、そんな、誰もが持つ感情であっただろうか。

—— 貴方達にも、大切な人が、居たでしよう？

—— 貴方達が死んで、悲しんでくれる人たちが居たでしよう？

—— お願い。私から、もう、何も、失わせないで。

—— ゆっくり、眠ってください。

結界に、氷室神社を中心として、町を囲んだ結界に、優しい音が響き渡る。

それは、祈りを籠めた鎮魂歌。

霊団は、動きを止める。

その中から、湧き出すように、何百と言う霊達が現れる。彼らは、霊団に取り付くと、再びその中に潜り込んで行く。

霊団が苦しむようにもがく。再び現れた霊達は、優に1000を超えていた。そして、それらも再び潜り込んで行く。

幾度も幾度も繰り返し返される、優しい音色の舞踏会。

——音色が鳴り止んだ時、其処に残っているのは、幾つもの巨大な瞳から滂沱の涙を流す、巨大な魂塊であつた。

「もう、大丈夫です。あれは、霊達の残した負の感情の集合体です。悲しさや、辛さ、苦しき。皆、此処に置いて、逝くそうです」

空を見上げるおキヌの瞳に写るのは、天の裂け目に向かって流れていく幾つもの光の軌跡たち。

それを嬉しげに眺める彼女に、美神は静かに手を広げる。

「おかえりなさい、おキヌちゃん」

忠夫が、静かにその隣に立つ。

「おかえり、おキヌちゃん！」

「——ただいま、二人ともっ!!」

弾けるような笑い声と、恥ずかしげな声を耳にしながら。

西条は呆然と空を眺めていた隊員に声をかける。

「ほら、準備は終わったのかい？」

「は、はっ！ 全て完了しております！」

「なら、それをタイマーで10分後に設定。

——総員撤収！ 「アレ」以外は何も残す

な！ 国民の血税で賄っているんだからな！ 上空の山の神様達にも伝えてくれ！」

『了解しました!!』

「うん、なかなか良い返事だ」

満足げに笑った西条は、そう言い残して美神達のところに向かつていく。後ろでは、隊員たちが忙しげに動き始めているのが心配でわかった。

「……ま、後顧の憂いは絶っておかないと」

山の神達が一足先に出口から出て行き、美神達が楽しげに潜り、隊員たちが機材を回収して出て行く。

結局、誰もが西条が外に連絡していないのに出入りが出来た事を不審に思わなかった事に苦笑いを浮かべつつ、西条もその出入り口を潜って行った。

「退路は作っておくものだよ。いつでもどこでも、必ず」

最後に、未だ蠢き、涙を流しつづけるそれにそう言い残し、時計が残り1分を切った事を確認して出て行く。

丁度一分後、一台だけ残されたトラックの荷台から放たれた「精霊石弾頭ミサイル」は、外し様も無く目の前の巨塊に着弾し、全てを浄化する光を弾けさせた。

第貳拾貳話。

「伏せろっ！ 衝撃が来るぞっ！」

退避していたトラックの陰、建物の裏、木や岩の陰。隠れる場所がない者はそこらの地面に急いで寝そべる。

最後に結界から出てきた西条の声に、出口から出て様子を見ていた者達は迷わず従う。

西条が美神達の隠れたトラックの陰に身を隠すと同時、閉じた結界の出入り口が、爆音を響かせながら火花を散らす。

暫くの間、辺りには余韻と振動が広がっていった。

10秒ほども続いたその衝撃が収まり、そろそろと隠れた場所から顔を出す皆。誰も一言も離さない時間が続き、1分ほどもたつて漸く西条が言葉を発した。

「・・・ふう。ミッシェンコンプリート、だね」

『オオオオオオオオッ!!』

氷室神社の境内に、割れんばかりの歓声が木霊する。美神が溜め息を付きながら辺り

を見回せば、其処に在るのは歡喜の声を上げる神と人間の姿。

その向こうには、忠夫が担いだ早苗に向かつて駆けて来る、氷室神社の神主夫妻の姿もあつた。

「……ま、終わりよければ全て良し、つてね」

「そーいうものなんですか？」

「そーいうものよ、おキ又ちゃん」

そう言い会つて笑みを交わす二人の後ろで、忠夫が早苗を降ろして逃げ出した。

神主がそれを何時もの奴を片手に追い掛け回し、妻が早苗を優しく抱きしめる。そんな光景を見ながら、おキ又は零れる笑顔を美神と忠夫に向けていた。

「誤解じゃー！ 濡れ衣じゃー！ 俺はなんも悪い事やつてねええつ?!」

「なら何故逃げるかああつ?!」

「そんなもん持つて追いかけてくる奴が居れば普通逃げるわああつ!!」

「ええい、足ばかりか口先までも良く回る!!」

「いーやー!!」

笑顔に少々苦笑いが混じつたのは、この場合はしようがないと言えよう。

「お疲れ様なのね〜」

「すまぬ、世話になつたな、ヒヤクメ殿」

神界にある小さな部屋。其処は滅多に使われる事も無くなつた、神降ろしの際に使われる儀式の間。狭い空間の其処彼処に、梵字のような、記号のような模様が描かれている。

その小部屋の扉を潜り、背中を伸ばしながら廊下に出た女華姫を待つていたのはおそろく様子を見ていたであろうヒヤクメであつた。

「上手く行つたみたいね〜」

「うむ。おキヌは記憶を取り戻せたのかや?」

「バツチリ! 多分、もうおキヌちゃんが悪霊に襲われることも無いのね〜」

おキヌの魂と、その肉体の繋がりの薄さ。それが、今回の騒動の元凶であつた。魂と肉体の繋がりが薄いと言う事は、その魂に取つて代わられる可能性があるということ。

魂と肉体の繋がりを断ち切れば、普通は肉体の生命活動が停止する。それが、死と言うものの一つの形である。

もし、薄くなった繋がりに付け込む事ができるのならば？

魂は新たな肉体を得る。生命活動を行なっている、新たな命を。おキヌを狙った悪霊の願いは、ただ、生き返る事。それは、彼らにとって、何よりも優先され、だが同時に何よりも難しい願いだ。

故に、その機会を狙ってあれだけの悪霊達が、たった一人に襲い掛かると言う状況を招いたのだ。

この場合、おキヌの魂と肉体の繋がりの薄さは、おキヌの記憶にも一因がある。

肉体は、「300年前」のおキヌの肉体である。例えば、特殊な儀式を経て現代に蘇ろうとも、その肉体は300年という時間を記憶している。

そこに、記憶を失った魂が戻って来た。

「おキヌ」の記憶を無くし、「氷室キヌ」としての記憶を重ねていくおキヌの魂は、その肉体との間に、段々とズレを生んで行く。

結果として、肉体は魂を本来の持ち主として認識出来なくなり、結果、魂と肉体の接点は弱体化していった。

そして、今、記憶を取り戻した魂と肉体の間で、急速にその認識の差が埋められつつ

ある。

「——だから、多分もうおキヌちゃんが襲われる事は無いのね」

「・・・そうか、良かったのお」

心からの安堵の溜め息を付く女華姫を、微笑ましげにみるヒヤクメ。しかし、その表情が突然凝固し、冷や汗を流し始める。

ぶるぶると震え始めたヒヤクメの様子に、流石に女華姫も慌てて声をかける。

「ど、どうしたのじゃヒヤクメ殿?! 持病の癩でも持つておったのか?!」

「い、いや、何でも無いのね、あ、でもあるかも・・・」

頭を抱えながら蹲るヒヤクメ。その横でオロオロとしながら周囲の人影を探す女華姫。しかし、こう言うときに限って何故か誰も居ない。

暫く蹲っていたヒヤクメは、諦めたような表情ですつくと立つと、心配した表情でこちらを見やる女華姫に、指を一本立てて告げた。

「女華姫、上層部からのお達しなのね」

「・・・はて? 上層部・・・何故に?」

「行けば分かるのね・・・うう、不安なのね」

背中を丸めて、それきり何も言わずに歩き出すヒヤクメを追って、女華姫も少々不安げに歩き出す。

とぼとぼと前を歩くヒヤクメは、不安というよりも疲れたような雰囲気である。

とは言い彼女が迷う筈も無く、また一応上層部からの呼び出しである。最短経路を辿りながら、ヒヤクメは女華姫を重厚な扉の前に案内した。

「……このね」

「だ、大丈夫であろうか？」

「……女華姫は、大丈夫なのね。確実に。あんまり頑張らないで欲しいのね」

其処まで言つて、ヒヤクメは素早く身を翻して走り出す。脱兎の如く、とは正にこの事であろうか。その背中に伸ばした手を引つ込めながら、女華姫は不安げに扉を開く。

その眼前に広がっていたのは、数十人の神様、しかもかなりの高い神格を有した者達ばかりが一同に会し、なにやら喧々轟々と討論している所であった。

会議場らしき其処はかなりヒートアップしており、誰も女華姫が入ってきた事に気付いていない。

時折、会場を雷光やら火の玉やら、槍やら剣やらが拳やらが飛び交つていたりするのは、幻覚であろうか。

「ごしごしと目を擦する女華姫の耳に、騒がしさに慣れた為もあるが、会話の内容が聞こえてきた。」

「だーかーらっ！ 絶対に武神ですって！」

「いーやー！ 闘神だつ！ 拳と拳のぶつかり合い！ 熱き血潮の滾る音！ 絶対に内の所属だ彼女はっ！」

「待って下さい！ 彼女は領民を持った事のある、指導者としても有能な人物ですよっ?! 戦神です戦神！」

「何を言うっ！ 護るべき者の為に力を振るうあの姿を見なかったのかっ?! 彼女こそ守護神の名に相応しかろうっ!!」

喧々諤々。時折会場の端で殴り合っている男性神や、それを溜め息付きながら癒してやっている女性神の姿も見える。

「どうやら、女華姫の所属と言うか、属性を話し合う会議のようであつたが――。

「はっ！ 武器を使うしか能の無いヘタレがよくもまあっ！」

「・・・その言葉、武神全体への侮辱と取りますよ？」

「おおっ！ かかつてこいや！ 手前とはまだ決着が付いて無かつたよなあっ?!」
「その首、何時までもあるものと思わないほうが良かったですなっ！」

「大体守る守ると言いながら、敵も倒せない甘い方々が！」

「よー言つた！ それならお前をぶち倒すっ!!」

拳が飛び交い、悲鳴が響く。罵声と暴力に満ちたその場所で、女華姫はただ啞然と立っていた。

その横をすり抜けるように、倒れた神を担架に乗せた、赤い十字のマークの入った女性神が二人、通り過ぎていく。

「全く、何時まで同じ事やってるのかしらねー」

「治しても治しても、すぐ戻ってつちやうんだから。もう3日よ？ 3日」

3日。それは、順調に手続きを済ませていた女華姫が、突然「少々お待ちください」との一言で待たされ始めた頃である。

つまり、目の前で起こっている大騒ぎのせいで、女華姫は直接駆けつけるのに間に合わなかったという訳である。

「たのもー!!」

「だからっ!!」「しかしっ!!」「喰らえー!!」「なんのっ?!」

「たのもー!!」

剣戟の音が鳴り響く。あるものは振り下ろされた神剣を籠手で止め、逆の手で反撃の拳を繰り出し、しかし神剣を滑らせながら頭突きをかましてきた相手にニヤリと笑みを返す。

笑みを返された神様は、こちらにも負けじと笑い返し、二人同時にぶつ倒れた。

「救護はーん。また倒れたわよー」

「はいはーい」

そんな二人を纏めて担いで放り出した女性神に礼を言いながら、再び現れた赤十字の二人組みが回収する。

その横で、女華姫は呆然と立っている。

「・・・あら？ おーい、皆ー」

「「「「何だっ?!」」」」」

「話題の「本人の登場よー?」」

睨み合っていた会場中の視線が、一斉に女華姫に殺到する。同時に掛けられる数々の声。やれ内の所属にならないか? だの。内にくれば神器の一つや二つや三つだの。

そんな声を掛けられた女華姫は、俯いたまま返事もしない。どころか、段々とヤバげなオーラを放ち始めている。

「・・・そんな事で」

『え?』

「そんな事で何時までも話しあつとつたのかあああつ?!」
爆光が膨れ上がり、会議場中を蹂躪する。女華姫様、大暴走。

「ぎゃーっ!」

「まてまて話せば分かるって!」

「B A O O O O O O O O H!!」

「にぎやー！」

「あらあら。怒らせると怖いわね、神様らしいわ。——やってみれば破壊神つてのも良いのよねー。駄目元で誘つても良かったかしら？」

のほほんと呟いて会場を出て行く女神の背に、現役の戦闘神達の悲鳴と、暴走した女華姫の雄叫びが重なり合つて届く。

彼女が閉めた扉の向こうからは、そのまま暫くの間悲鳴が木霊しつづけたとか。一応、荒神の類は断つたらしい。

「皆様おつかれっしたー！　と言う訳で、成功を祝つて！」

『カンパライ!!』

元ワンダーホーゲルの掛け声とともに、氷室神社の境内に、乾杯の音が響き渡る。参加者はGメン隊員と、援軍として駆けつけた山の神達。ほぼ誰一人無く一氣に一杯目を飲みきると、誰が準備したのやら、背後にそれこそ山となつて積み上げられている酒樽の群に突撃する。

「うっすー！　一番、酒樽一氣やりまーす！」

「手ぬるいつー！　ワシと競争じゃあつー！　負けたほうがもう一樽な！」

「んごっつ、んごっつ、んごっつ!!」

「おーい、つまみはまだかー？」

「あー、あの山の神様ですかー！　いや、おれGメンに就職して引つ越すまではあそこに住んでたんですよー」

「・・・ああ、川で4回溺れた坊主かつ!!　連れの女子は元気か？」

「そんな昔の事……えーえー未だに元気で、現在俺の嫁ですよ。大体あいつはあの頃から……」

かなり大変な作戦だったとは言え、いや、だからこそ、だろうか。人も神も関係無く、宴の輪は広がっていく。あちらで誰かが飲みすぎでぶっ倒れ、こちらで芸が面白くないと周囲から罵声が掛けられる。

かと思えば、救護班の一部や山の神の中に居る女性に群がる者も居る。極一部の結構良い雰囲気のままに居れば、勿論平手やら拳やら神通力やらで吹っ飛ばす呑んでくれも居る訳で。

悲喜交々、宴の席の賑わいは、誰が止める事も無くブレーキの壊れたトラック状態。

もう夜半もとつくに過ぎて、後3、4時間もすれば太陽が昇る。そんな短い時間を惜しむような、全力投球の大騒ぎ。周辺住民に気を使わなくてもいいことだけが救いであろうか。

「……ふう」

「お疲れ様、八兵衛さん」

「おお、これはかたじけない。おキヌ殿は参加されないのですか？」

その光景を見ながら、一人ゆっくりと本堂の階段に腰掛けて酒をあおっていたのは何時ぞやの神族。韋駄天の八兵衛であった。

今回の彼のお仕事は、本来のお仕事、届け物である。何かというと、現在皆が飲んで食べて大騒ぎしているお酒やつまみ、そう言ったものの詰め合わせ。

送り主は、色んな所から、とだけ。

まあ、送り先が「女華姫宛」になっているから色々と予測はつけられる。

一端手続き中の本人に持っていったが、彼女に「飲まないから神社の者にやってくれ」といわれた物の有効利用といったところか。

簡単な酒肴とたつぷりと中身の入ったとつくりを持つてきてくれたおキヌに礼を言い、丁寧な動作でそれを受け取る。仮面にしか見えないその顔が、何処となく嬉しそうに見えるのは気のせいではないだろう。

「ええと、一応義父さんに止められてますから……」

「そうですか、残念ですなあ。美神殿たちは？」

「家の方で、色々と話し合ってるみたいですけど……あ、美神さーん、横島さーん!!」
小首を傾げて腕を組んだおキヌの目に、家の窓を開けてこちらを見やる美神達の姿が映る。手を振り声をかけて見れば、二人の視線がおキヌに止まった。

「……あれ？」

「呼んでいるようすな。……ああ、おキヌ殿にはこれを。では、拙者は是にて御免!」
ぱたぱたと手招きする二人の動きに不思議そうに呟いたおキヌを残し、八兵衛は慌て

て飛んでいく。何となく首のあたりを捻りながら。

おキヌは、彼が最後に手渡していった紙切れを懐にしまうと、美神達の所へと駆け出していった。

「ええっ?! 美神さんの事務所につ?!」

「ああ。お前の身を守る事は、この場所ですら難しくないだろう。しかし、それ以上の事・・・特に、お前の気持ちを考えて、な」

家の応接間。僅かに他の部屋よりも広く、洋風の装いとなっているこの部屋に居るのは全部で6人。

神主夫妻に美神、忠夫、西条。そして、おキヌ。早苗は現在ベッドの上で唸りながら就寝中。流石に肉体的にも精神的にもかなりの疲労があつたようである。

「正直に言うかね、おキヌちゃん」

ソファーにゆつたりと座り、手足を組んだ美神が、目を瞑つたままでそう呟く。

「此処に居ても良いんじゃないか、と思うのよ。私はね」

「そんな、美神さんっ!!」

悲鳴のようなおキヌの声。忠夫と西条は一言も話さずに沈黙を守る。神主夫妻は、真剣な表情でおキヌを見つめている。

「……どちらでも、構わん。おまえの好きな方を、お前が選ぶんだ、キヌ」

「そうよ。おキヌちゃんの意に添わない事をする必要なんてないの」

「わた、私、邪魔なんですか?」

がたたつ! と音を立てて、美神と神主夫妻が席を立つ。おキヌの瞳からは今にも涙が零れそうになっている。

そんなおキヌに西条を覗いた4人が駆け寄り、必死で慰めに回る。

「違う、違うぞキヌ! ただ私達はお前が自由に選べるように——」

「居ても良いのよ? どっちでも好きな方に!」

「どっちも嫌なら俺の所に嫁に来」「お前は黙れえっ!!」「」

駆けつけた割にあんまりな台詞を抜かした馬鹿は、神主と美神の突っ込みでぶっ飛んだ。そのまま西条が開けた窓を飛び出し庭に落ちる。

しつかりと窓を閉め、鍵をかけた西条の目の前では、漸く誤解が解けたおキヌが恥ずかしげに涙を拭いながら笑っていた。

「それなら、私——」

「ふうふう」

「ふうふう……お疲れ様でした」

美神達の出で行った応接室に、神主の溜め息と妻が入れたお茶の湯気が広がってい

く。神主は、その湯のみの温かさにほっとしながら、日頃は出ない、かなりの上質なお茶であろうそれをゆっくりと啜っていった。

「・・・両方、か」

「ええ。家にも帰ってくるし、あの方たちの所にも帰る。帰る所が二つもあるなんて、とっても嬉しい、ですって」

くすくすと、口の端から零れる笑みをお盆で隠し、神主の妻は静かに笑う。その声を快く感じながら、神主は短い間の娘の事を考えていた。

「・・・いつその事、早苗の妹か弟でも作ります?」

「ブホー!!」

思いつきり吹いた。

「ごほっ! ごほっ! お前なあっ?!」

「あら、良いじゃないですか別に」

澄ましながらお茶のぶちまけられたテーブルをふきあげる妻。それを見て額を押さえながら、神主は天井を見上げてみた。

「そーいえば、昔から押しが強かったよな」

「当たり前です。頑固で朴念仁で、鈍感な貴方を落としたんですからね。何かご不満でもっ」

布巾をお盆に乗せて、ついでとばかりに神主の手の中にある、残り僅かな湯飲みも取り上げながら。

「いや。いい妻だよ、お前は」

「あら、今頃分かつたんですか？」

「・・・はあああああ」

「うおおつ?! やるなこの若い者っ!」

「わーっはっはっはあつ! 酒なら飲み慣れ取るわいつ!!」

美神とおキヌが、部屋から叩きだした忠夫を探して境内に回る。庭に落ちた筈の忠夫

の姿が無かったからだ。

いや、ワンダーホーゲルに引きずられて行っただけなのだが。

ともかく、二人が発見した時には、忠夫は何故か上半身裸で、巨大な盃を呷って絶好調な状態であった。

「何やってんのよあの未成年は……」

「ふむ……一応公務員なんだがね、ウチの隊員は」

「あはは……と、止めてきますね」

困ったように笑いながら、おキヌが忠夫の所に駆けて行く。何処となく弾んだようなその歩みには、溢れそうな嬉しさがある。

「……Gメンの方、大丈夫なの？ 西条さん」

「ん？ ああ、心配無いよ。記録映像は取ってあるし、何より山の神様と共同で、アレだけの規模の霊的災害を未然に防げたんだ。ま、多少予算の使いすぎで突っ込まれる事は在るかもしれないけど」

「あれだけ破魔札ばら撒いて、精霊石弾頭なんていう無茶なシロモノ使えば、そりやそうよねー」

美神が呆れた様に呟いたのも当たり前。破魔札をばら撒き、巨大な火力で圧倒する。個々の実力で及ばずとも、火力と手段で勝る為の闘い方。当然ながら、お金のほうも大

変だ。

例えば、精霊石弾頭ミサイル何て言う、名前だけでもとんでもないこの秘密兵器。ミサイルの先に、握り拳2個分ほどの巨大な精霊石がくっ付いている。手の平にすつぽり隠れるサイズで3億4億当たり前の物質が、それだけの大きさで使い捨て。

個人で使うには、余りにも割に合わない。と言うか準備だけで破産する。

「ま、どうせ使わないなら使わないで、演習にでも使われてたと思うよ、5年か10年後くらいに」

「だからって、アレだけ豪快に使うんですもの。こつちとしては呆れるしかないわね」

そんな、美神の言い残した、ちよつとだけやつかみが混じつた言葉に、西条は困つたように苦笑いを見せる。

「——使うしか、無いんだよ。現状ではね」

足早におキヌの歩いていった方向に進んでいく美神の背を見送りながら、西条は小さく呟いた。あちこちのポケットを漁つて煙草を探すも、補充を忘れた事を思い出す。溜め息を付きながら、西条は一人、愛車へと足を向けた。

「上司が参加する宴会ほど、部下の士気を落とす物も無い、か・・・」

誰に聞こえる訳も無し。

「うふふ……食べちゃお」

「いやー！ おキヌちゃん勘弁ー!!」

「だーめー」

美神が其処に辿り着いた時、何故か忠夫の悲鳴と、おキヌらしき声が聞こえた。らしき、と言うのは、その声の調子がおキヌの物とは思えなかったからだ。

美神は、その声のほうに向かって進んでいく。

唐突に開けた視界に入ったのは、小さな、ペットボトルの蓋よりも小さなお猪口と、その隣に置いてある果実酒。実に手の込んだ事に、陶器製のその瓶の表面には明らかにお手製のラベルが貼ってあり、この辺りの山の神であるワンダーホーゲルの顔が書いてある。

下手人らしい神物は発覚した。

しかし、状況が把握できない。

お猪口の中身が、まだ半分ほども残っている事から、おキヌが飲んだ量はおそらく本当に舐める程度であろう。

誰が飲ましたかは、おキヌと一緒にいる馬鹿以外に思いつかないからひとまず置いておく。

——あ、おキヌちゃんってお酒弱いんだ。

ふと、夜空の星を眺めた美神の頭に、そんな事が思い浮かんだ。

至極、どうでも良い……と言うことも無いが、そろそろ現実逃避も止めたほうが良さそうだ。

「うふふ……はむっ♪」

「いやー！ 耳は、耳は駄目えー！」

「はむはむはむ……」

「食べられる、食べられるー！」

取り合えず、視界を前に戻してみる。

1、何故か、忠夫が上半身裸で、おキヌに背中に押し掛かっている。バンダナも取られておキヌの手に在るようだ。

2、何故か、おキヌが仄かに桃色に染まった顔で、忠夫の背中から忠夫の耳を甘噛みしている。

3、何故か、忠夫の鼻の下が伸びている。どうやら背中に押し付けられているようだ。何かが。．．．私よりはささやかなくせに。

4、何故か、辺りから他の人の影が無くなつて行っている。よろしい。非常ディーモルトによろしい。

5、なんだか、負けたような気がする。艶気とか。色気とか雰囲気とか。．．．飲ませないようにしましょう。うん。

甲高い音を立てて、美神の手の中で神通棍が伸びた。何故か何時もよりも調子が良いようだ。意味も無く、神通棍から火花が散るほど靈力が籠つてしまっている。

きつと、戦いの後で気が立っているのだろう。そうだ、そうに決まっている。間違いない。でなければ——いやいやいやいやいや!!!

「ふふ．．．ふ．．．ふにやあ〜」

「ぜはっ！ ぜはっ！ た、助かった．．．！ ．．．いや、ちよつと勿体無かつたかな？」

「——へえ、何がかしら？」

艶やかな髪を忠夫を包むように流しながら、忠夫の背にべったりと引つ付いていたおキヌの体から力が抜ける。アルコールが完全に回りきったようである。

Tシャツの下に手を入れられそうになり、必死でカバーしていた忠夫がほっとした表情でおキヌを降ろす。

声が聞こえたほうに振り返れば、其処には鬼神が立っていた。

目線が合った瞬間に、忠夫の生存本能が最大レベルの警報を鳴らす。背筋に悪寒が山ほど走り、なんと言うか、何もされてないのに走馬灯が見え出した。

「言い訳はいいわ。謝罪もいらぬ——いえ、言葉は不要ね」

「まままままず話し合う事が大事だと考えるしだいであるでござる!!!」

「あら、何を話し合う必要があるの?」

忠夫は、最早何も言わずに倒れた。

——と見せかけて、倒れる勢いを利用して、そのまま後方宙返り、一回捻りも入れてみたり。

着地と同時に、駆け出した。入れた捻りのおかげで、さつきとは反対方向を向いている。あとはもう、何も言わずに全力ダッシュ。

そうしようとした所で、後頭部に何かが突きつけられた。

「そう言えば、貸し出されてた拳銃、そのままだったわね」

「す、直ぐに返したほうが良いと思いまっす！」

「試し射ちが終わってからね？」

まあ、命だけは、助かったらしい。

翌日の昼下がり、町を走り抜ける一台の車がある。乗っているのは3人。一人はやた

らと包帯だらけでボロボロであり、もう一人は頭痛と気分の悪さを堪えて真つ青な顔。

ハンドルを握る女性性は、少々不機嫌、後残りは上機嫌と言う、中々複雑な表情である。

「うう、頭が痛いです」

「おおおつ、か、体が動かん……!」

「二人とも、自業自得。少しは早苗ちゃんを見習いなさい」

助手席に座った少女、おキヌの姉は、色々な手続きの為氷室神社を一端去るおキヌの所に、松葉杖代わりに父の渡した金属バットをつきながら、ふらふらになりながら現れた。

そして、驚き支えようとするおキヌに対し。

「……頑張つてな、おキヌちゃん」

たった一言を残し、倒れるように眠りについた。疲労と体を襲う痛みで気絶した早苗を抱えるおキヌの目からは、留まる事無く涙が流れつづけていた。

その後、二日酔いがぶり返さなければ良いシーンだったのだが。

高く昇った太陽の下、GS美神除霊事務所の3人組が帰っていく。彼らの家に、職場に。

空は高く、雲も無い。今日は快晴との予報である――。

「てんちよー、ありがとうございましたよー」

「ふん。さて、どれにするか」

「えつとー、火災に地震に霊障。ガス爆発つてのもありますけど？」

「霊障だ。伊達にバカ高い保険料払ってねえぞ？」

「了解、保険屋と連絡とってきますねー」

町中で、突然廃墟と化した喫茶店がある。忠夫とおキヌが一番最初に霊団に襲われた際に残骸を残してほとんど砕け散った喫茶店だ。あの騒ぎから一夜明け、物珍しげに周辺住民が集まってきているし、そろそろパトカーと消防のサイレンの音も聞こえ出した。

それでもマスターは椅子に座ったまま、一枚のコインを磨いている。表に数字、裏に女性の横顔が描かれた、日本ではあまり見られない硬貨であった。

「さて、北か南か——」

鏡のように磨かれたそれを、親指の動きだけで跳ね上げる。きらきらと太陽の光を反射しながら回るそれに、一台の男女3人が乗った赤い車が写ったりもする。

「あー！ またそんなので行き先決めてー！」

「やかましい。経営者は俺だ」

「横暴だー！ 南が良いぞー！」

「それは——」

高く舞い上がったコインが落ちてくる。くるくると空中で回るそれに目をやり、落ちてくる所を衝撃を殺しながら右手の甲に受け止めて左手で零れないように蓋をする。

「——」
「女神さま」に聞いてくれ」

開いた手の下にあったのは、微笑む女神の横顔だった。

第貳拾參話。

木々が重なり、太陽の光さえも十分に届かない森の奥。

所々にある、枯木の倒れた後から覗く太陽。そこだけは暖かな光が差し込み、小さな翡翠色の芽がその命を主張している。

その小さな芽を、少しだけ大きな嘴が突付いた。

「ピイツー！」

「・・・はあっ！ はあっ！ あ、貴方、本当にタフねえ」

ふらふらとその小鳥の横に駆け込んできた女性は、息切れしながらその場に膝をつく。あちこちが擦り切れ、草臥れたスーツ姿の女性の雰囲気はこの場にはとてもそぐわない物であった。

暫しの間、必死で息を整えながら座り込んでいた女性が漸く、と言った風情で立ち上がる。

ふらふらと頼りない足取りながらも、彼女は再び歩き出していた。

数歩歩いて後ろを振り向く。その拍子に張り出していた小枝に金色の髪の毛を引っ掛け、それに舌打ちしながら日向で未だに食事中であった小鳥の雛のような存在に声を

かけた。

「ほら、行くわよ。．．．早くしないと、貴方の兄弟もお仲間も．．．彼も危ないわ」

「ピー！」

その声に顔を跳ね上げたそれは、一声鳴くと羽を広げて地面を蹴る。既に此方を見ても居ない女性の肩に着地すると、甘えるように、あるいは急かすようにその頬に嘴を寄せた。

「ああもう．．．分かったわよ。後でちゃんとご飯あげるから」

「ピー〜」

苦情のようでもあり、嬉しそうでもある。そんな声を上げるそれに苦笑いを向けながら、彼女は今度こそ歩き出した。

「落ちたら拾わないわよ？ ガルーダ」

「ピー！！」

「で、また食費も無くなつちやつた、と」

「……あー、まあ、そう言う事だね」

「だ・か・ら！　ちゃんと取れる所からは雀つて下さいってアレほど言ったでしょーが！！」

東京、GS美神除霊事務所。人工幽霊一号の宿るその事務所の応接室に、所長の怒声が響いて揺れる。

その前で流石に決まり悪そうに、しかし手に持った井と口の間を往復させる箸の動きを止められない男性がいる。

「大体先生はあの時も……」

「いやしかしだね美神くん。私としては除霊を生活の種としてやっている訳ではないのであって」

そう言い訳がましく弟子に答えながら、空っぽになった器を置く。その満足げな顔に向かつて、更に対面に座る美神が口を動かそうとしたタイミングで、応接間のドアが開

いた。

「お茶、持ってきましたよー」

「ああ、ありがとうおキヌくん、しかし君は料理が上手いんだねえ」

「あ、あはは」

おキヌが持つてきた丼を受け取りながら、ご近所の人妻、ご老人、子供まで、幅広く好評を得ている笑顔を五割増で浮かべる神父。

優しげな雰囲気と、見ている此方まで心洗われる笑顔であつたが、何せ口の周りにご飯つぶが幾つもくっ付いていたりするので台無しである。

「先生、おべんと」

「おや、これはすまない」

美神が慥然とした表情で自分の頬を指差す。その言葉に気恥ずかしげに笑いながら、唐菓神父は米粒を丁寧に取ってちゃんと食べた。ここまですっかり食べてもらえれば、作つた人も農家の人達も満足であろう。

「と、言う訳で、だ」

「何がどー言う訳なんですかつ?! 何で僕がこんな所に居るんですかつ?!」

「美神さんからの指令で、お前にサバイバル技術を叩き込むことになりました。以上」

「なんですかそれはああつ?!」

己の師匠が生きている事と神と米作農家の皆さんと非常に珍しい弟子の優しさに感謝の祈りをあげ、美神が唸っておキヌがそれを見て苦笑いしている頃。

唐巢神父の弟子、ピートと、美神除霊事務所のもう一人の所員、忠夫の姿が、とある山中にあつたりする。

「いやな? 唐巢神父つてアレだろ、生活能力ちゅーかお金を稼ぐ意欲が欠如しとるだろ」

「・・・まあ、それは否定しませんが」

「俺みたいに自分の食い扶持位は自分で獲つてこれるならまだしもなー」

腕を組んで真面目ぶった表情で、忠夫が目の前に縛り上げられているピートの目を見つめている。

ピートは、己の師匠の事ながら流石に思い当たる事が多すぎるようである。何せ、今日も忠夫の投石に使われる聖水を作り上げ、取りに来た美神に報酬として現金収入を貰い、しかしその場で空腹の余りぶつ倒れたのである。

慌てた美神は外で薔薇に水をやっていたピートを呼びつけ、車に運んで一路病院へ。すつかり顔なじみになった初老の医師は、唐巢神父の顔と軽い診察だけでこう述べた。『栄養不足と空腹、それから疲労だな。この年齢にしては信じられんほど頑健な肉体をしておるから、点滴と食事だけで十分。点滴が終わったら連れて帰って、お粥と柔らかい物でも食べさせてやれば良い』

呆れて天を仰いだ美神の隣で、ピートは最近の真つ赤な家計簿を思い出していたりした。

「確かに最近食事してなかったみたいですし、そろそろ危ないかなー、と」

「普通は一日三食じゃわい。まあ、ピートも神父が倒れると困るだろ？ だからお前がそつちのフォローをしてやれだとき」

とゆるわけ。

さつさと自分の中で結論を出した美神はその場でピートをふん縛り、点滴を受ける唐

巢神父を余所に事務所に連絡。おキヌに炊き出しを、忠夫にピートへの授業を伝えると、自分は暫く神父の横で溜め息つきながら待機。

文字通り駆けつけてきた忠夫に混乱するピートを引渡し、担架に乗せた神父を車で事務所に運んでいったのである。

「美神さんらしいっちゃ、らしいよなー」

「・・・そーですか？」

「そーだよ。と、言う訳で」

ピートを拘束するロープを解き、首をかしげる彼の目の前で忠夫は頷く。

「とりあえず、山と川、どっちが良い？」

「ええと、流れる水はあんまり好きじゃないですね」

「そか。・・・お前も物好きやなー」

ピートがその言葉に反応する暇も与えず、彼の襟首を引っ掴む。そのまま駆け出し、一路更に山奥へ。

「え？ え？ えええっ?！」

「とりあえず、体で覚えてもらおうのが手っ取り早いよなー」

先ずは、山菜——の訳が無い。

「レッスンそのいちー！」

「ここ、ここ何処ですかっ?!」

「復唱っ！ はい、れっすんそのいちー!!」

「そ、そのいちー」

僅かに足元には道のようなものが見て取れる。それは、俗に獣道と言われる物である。しかし、その周囲には異様な雰囲気満ちていた。

そう、あえて言うならば、周囲の存在が恐怖している。

「先ずは自分の命が最優先！」

「・・・え？」

胸を張ってそのたまう忠夫の横で、ピートは不思議そうな顔で聞き返した。

「相手が獲物でも、怪我したら何にもならんっ！ 怪我を治すのに余計に肉が必要になるし治るまでは狩りも出来ん！ やばい時はヤバイっ！ 体で覚えるのだーっ！」

「いや、のだー！ じゃなくて・・・そもそも、一応殺生は僕達にとって良い事じゃ無」
「しゃーらっぴゅー！」

囁んだ。

それはともかく、やや決まり悪げに此方を指差す忠夫の迫力に押されたか。ピートは怯んだ様子を見せる。

「良いかつ！ 此処じゃそんな甘ったれた言葉は通用しない！ 狩るか狩られるか！ 弱肉強食、それだけが真実だっ！」

「いや、だから」

「それにつー！」

びし、と指をピートに突きつけたまま、忠夫は更に言い募った。

「そんな事で敬愛する恩師の手となり足となり働く事ができると思ってるのかっ?! ああんっ?!」

「そ、それは・・・」

ずいずいと押されていくピート。気付けば背中が大きな木に当たっている。

「唐巢神父の為だ。良いか？ 唐巢神父の為だっ！ りぴーとあふたみー！」

「か、唐巢神父の為……。そ、そうかつ！ これもまた一つの愛の形なんですわねっ!!」
微妙に違う気がする。

が、ともあれピートはなんだかやる気になったようだ。その余りの手の平の返しつぷりに今度は忠夫がやや引くも、ここぞとばかりに口車。

「そうだつ！ これも人のため！ ほら、神様だつて親指立てて許してくれてるじゃないか！」

「ああ……。ああ、僕は、僕はまた一つ世界を知りましたよ、横島さんっ！」

壮絶に間違つた方向に行き始めた信仰心だが、ピートの回りにはまるで祝福するかのように光が集つていたりする。何とかの一念、岩をも通す。

そんな新興宗教のような雰囲気の中で、忠夫は地面が僅かに揺れ始めたのを感じていた。

「……。良し、それでは始めるぞ」

「分かりました！」

揺れは、小さいながらも徐々にその規模を増している。忠夫の嗅覚に、ある匂いが届き始めた。

「先ずは、ゆっくりと後ろを見ろ」

「はいっ！……え」

のっそりと繁みを掻き分けて、巨大な何かが出現した。その巨体は高さだけで3mはあるだろうか。体中にごわごわとした毛を纏い、その毛のあちこちは緑色に染まつている。どうやら、苔でも生えているらしい。

「よ、横島さん？」

「この辺りの主だ。クツソ強いぞ？」

口元からは、天をも突かんばかりの巨大な牙。それは、とてつもなく歳経て半ば神靈とかした、猪であつた。

「は、初めから危なくないですか？」

しかし、ピートの問いに答えは帰らない。

怪訝そうに顔を動かさず視線をやる。先程まで其処にいた筈の忠夫の姿が無い。

「ええっ?!」

「早く逃げないと危ないぞー」

「ええええええっ?!」

その声に振り向いたピートの視界に、全速力で逃げ出している忠夫が居る。既にその姿は木々や繁みに重なって、僅かに赤い布がちらつくのみ。

混乱の極みに達したピートの耳に、大きな鼻息らしき物が聞こえた。

『・・・フゴッ』

「・・・ええと、やばいですか?」

猪は二度三度と後ろ足で地面を搔くと。

『フゴオオオオツ』

「うわうわわあああつ?!」

おもむろに、ピートに向かつて走り出した。木々の隙間をすり抜け、あるいは下草を無理やり蹴り上げながら駆けるピートの背後を、何もかもを蹴散らかしながら主が追う。

岩を砕き、牙で木々を切り倒すその勇姿は正に主。

「じ、自分の命が最優先ってこう言うことですかああつ?!」

そのまま、ピートと主の姿は森の向こうに消えていく。

「・・・れっすんそのに」

その姿が見えなくなつて数分後。忠夫が虫か何かのように木を逆さまに伝つて降りてくる。そのまま先程主が出現した草叢を搔き分け、何かを見つけると嬉しげに呟いた。

「虎穴に入らずんば虎子を得ず! な〜んつってな〜」

その目には、幾つもの掘り返された痕跡と、それでもまだまだ大量に残る竹の子、山芋、そして、主の縄張りだったが故に殆ど誰も近づけず、全く荒されていない山菜の広

がる光景が。

そしてその隙間からのつそりと出てくる一回り大きな巨大イノシシが。
『フゴっ?』

「に、二匹目っ?! きーてねーぞおおっ?!」

『フゴオオオオツ!!』

レツスンそののにの番外。世の中そんなに甘く無い。

そして、ピートと忠夫が命の危険を感じているその時。

「——はっ!」

「・・・どーしたの、先生？」

おキヌからお代わりのお茶とお茶菓子を受け取った唐巢神父が、驚いたように眼鏡の向こうの目を見開いていた。

「これは・・・美神くん！」

「——あつ」

美神も、何かに気付いたように唐巢神父を見た。

「・・・茶柱だねえ」

「良い事ありますよ、きつと」

「だと良いんだけどねえ」

のほほんのほほん。

ちなみに台所では「おおかみ」と表面にひらがなで書かれた忠夫の湯のみが割れているが、人工幽霊にさえスルーされていたりする。

わりと、何時もの事だし。

「・・・・・・・・」

「い、生きてるかピート」

「・・・・・・・・」

ぼろぼろの姿でよたよたと現れた忠夫が、獣道の真ん中で背中に巨大な足跡を付けて

倒れ伏すピートに声を掛ける。しかし、返事は返らない。

「・・・おおピートよ。死んでしまふとは情けない。なんまんだぶなんまんだぶ——さして、埋めるか」

「いきなり埋葬しないで下さいっ!! あと僕はキリシタンですからっ!」

おもむろに適当な地面を両手で掘り始めた忠夫の背に、飛び起きたピートが抗議の声を掛けた。既に一瞬で膝の辺りまで掘った穴の中から、忠夫が驚いたような顔で見ている。

「何なんですかあの猪はああっ?! なんで靈波砲とか精靈の力とか吸血鬼の力とかぜーんぶ!」

跳ね起きたピートが、土と草を撒き散らしながら忠夫に涙目で詰め寄った。

「跳ね返したり無効化されたりするんですかああっ?!」

「ピート」

「えっ?!」

首を掴まれた忠夫が、疲れたような、諦めたような、そんな目でピートを見ていた。そのまま視線をずらし、木々に覆われた空を見る。今は見えないが、そろそろ太陽が一番高く昇る頃であろう。

「・・・そーいうもんなんだよ」

「あああああつ?! もう訳が分からないいいっ!!」

「いやー、流石に如意棒を牙で跳ね返すとは思わなかった」

以外にそう言うものなのかもしれない。

「ともかく。お前は初級からな」

「・・・最初からそうして下さい」

視線を前に戻した忠夫が、ふと思いついたようにそう述べる。

「よし、そんならさっきのレッスンの感想を述べよ」

「自分より弱い獲物に会いに行く」

なんの迷いも無くそう言い切ったピートの眼は、なんとなく荒んでいたそうなの。

「よし、あれだ」

「……流石に可哀相じやないですか？」

繁みの中で適当に折つた木の枝を頭に差した二人の目の前には、小さな小鳥が草を啄ばんでいるのが見えている。

木洩れ日の中でピーピーと囀りながら、なんとも楽しげな風情である。

「まだそんな甘つたれた事を言うのかあつ?!」

「え、でもあんなに小さい——」

そこまで言つて、ピートの口は思いつきり左右に引つ張られた。

「分かつちやいねえ……分かつちやいねえな、ピートさんよお」

「ひたたたたつ?!」

がさがさと派手に繁みを揺らしながら、二人はひたすらに騒いでいた。

「良いか? やるか、やられるか。それが大自然の真理だ」

「わひやりまひたからつ!」

涙目でタツプしてくるピートを離し、忠夫は先程の小鳥を見る。どうやらばつちりしつかり気付かれたらしいが、逃げる様子も無い。はて? と不思議に思いながらも、チャンスとばかりにピートの背中を叩いて押し出す。

「(ブー)ー!」

「うう、御免なさい……」

じりじりと近づくピート。小鳥は囁る事を止め、ピートに向かって斜めに体を開いた。その動きは、彼らにはまるで逃げ出す姿勢に見えたのだ。

「行けっ!」

「ていつ!・・・え?」

ジャンプ一回、両手で包み込むように小鳥に飛び掛るピート。その手の中には、あつさりとまだ羽も生え揃わぬ小鳥の姿が——無かった。

小鳥は後ろにも下がらず、むしろピートの顔面に向かって跳躍し。

「いであっ?!」

「ピピイツ!!」

その短い足で回し蹴り。見事に鼻っ面にカウンターを喰らうピート。思わず鼻を押しさえながら着地したピートの視界を埋めるように、黄色い塊が鼻を押しえた手の上に着地する。

「・・・ピっ?」

ピートには、「覚悟は良いか?」と聞こえたらしい。

「ピピピピピピピピピピッ!!」

「んぎゃああっ?!」

「おお、マウントポジション?! やるなー、あの小さいの」

正確にはマウントポジションではない。一番初めの嘴での一撃で、仰向けに倒れこんだピートの上で更に連打。痛みに転がるピートの上を器用にバランスを取りながら、さらに色んな所に嘴の嵐。

「ごろごろと転がるピートに、流石にやばいと感じたか。」

「うわ、今行くぞー!」

慌てて飛び出す忠夫。しかし、それと同じタイミングで左手にあつた繁みが揺れる。

「何よ、騒がしいわ」——嫁に來ないか?」きやあつ?!

搔き分けながら現れたのは、あちらこちらに泥のついたスーツを着たブロンドの美女。かなり土やら草やらに汚れている物の、はつきり言つて美人の部類に入る女性である。

当然、忠夫は進行方向を曲げた。

速度を殺さずにいきなり直角に曲がる辺りは流石であろう。

能力の無駄な使い道であるが。

「え、貴方、何者?」

「いえ、怪しい者ではありません。ただ困窮にあえぐ友人を助ける為に大活躍中のいぬ——ごほんつ! 横島忠夫という者です。どうですか? 軽く嫁にでも來ちゃいませんか? いえ軽くは無いですが」

「横島……！ いえ、あのー、えっと」

忠夫の名前を聞いた瞬間、その女性の目は大きく見開かれた。そのまま焦った様子で辺りを見回す。まるで誰かを探すかのように。

「ほ、他の人は？」

「いえ、私だけです。あと友人が一人」

「そ、そうなの……ふう」

女性は、漸く落ち着いた様子で一息をついた。改めて、忠夫の顔を見る。

「残念だけど、予約済みなの。それよりも……」

「えー、そーなんすかー?! ちくしょー!!」

心底残念そうに頭を抱える忠夫を見ながら、その女性は困ったように忠夫の背後に視線をやった。

「貴方のお友達、大丈夫？」

「あ」

振り向いた忠夫の目にはには、さらにぼろぼろになり倒れ伏すピートと、その上で勝ち鬨をあげる小鳥の姿が写っていた。

「・・・む」

「・・・むー」

「おや、どうしたんだい二人とも？」

「なんか、こう」

「ムカツとしました」

「・・・そーかね」

事務所に、お茶を啜る音が響く。

「へえ・・・GSねえ？」

「ほんとつすよ！　まあ、二人とも見習いつすけど」

探るような目でこちらを見ている女性の名前は、須狩と言うらしい。思いつきり外人のような風貌の割に、漢字の名前と言うのがアレである。

どうも偽名臭いのだが、忠夫はそれに関しては黙っておいた。

何より、こちらを値踏みしているような目で見ている事であるし。

「・・・え、と。誰に付いてるのかしら？」

「・・・良く知ってるつすね、そんな事」

「職業柄、ね？」

「へー、一体何を？」

「さあ？　当ててみれば？」

互いに朗らかに会話を交わしているようにも見えるだろう。実際の所、結構な探りあいが展開されていたりしているが。

ちなみにピートは向こうのほうで「ガルーダ」とか言う派手な名前の付いた小鳥と睨

み合っている。どうやらなんだか燃えているようだが、放っておく。

「今、その人と連絡取れるかしら?」

「唐巢神父とですか?」

「え?」

女性の顔が、驚きに染まる。まるで、何か思い違いでもしているのかと考えたように。

「ああ、あのおっさんはあつちの——」

そう、神父の名前が出た事でつい忠夫のほうを見てしまい、その隙にガルーダにキックを喰らっているピートを指差す。

「師匠つす。美神さんのほうつすか?」

「え、ええ。そうよ」

「ふーん」

——どうやら、こちらの素性は何故か知られているらしい。美神ではなく、唐巢神父の名前を出した時のあの反応。

「横島忠夫」の雇い主が、「美神令子」だと知っている。

とは言え、そんな考えなどおくびにも出さず。

「ピートー!」

「いたつ?! はい、何ですいたたたつ?!」

「ちよつと此処で、この人と待つててくれな―！」

「えええつ?! ちよつと待つて下さいあいだつ?!」

所々で途切れる抗議を聞き流しながら、忠夫は一路、近くの町へと駆け出した。ちなみに、携帯なんぞは使えない。あつたとしても電波が届かない所ですといわれるのが関の山。

それに、忠夫は一応そう言ったものを預かつては来ているが、一応、美神からの緊急連絡が入らないとも限らないので、不測の事態に備えて壊れないように森の入り口に置いてきている。

又シに踏まれたら壊れるし。

事務所の中に、電話の呼び出し音が鳴り響く。

「あ、出てきますね―」

「お願い、おキ又ちゃん」

お盆を抱えたおキ又が、座っていたソファから降りて電話を取りに行く。そのまま閉じた扉に向かい。

「あいたつ！」

思いつきり頭をぶつけた。

「・・・おキ又ちゃん」

「えへ、えへへへへへへへ」

顔を真っ赤に染めながら、更に赤い額を擦りながらおキ又が改めて扉を開く。巫女服姿の少女がそこを潜って出て行くのを、苦笑いで見送った。

「・・・まだ慣れてないみたいですね」

「しょうがないさ。彼女にとっては、幽霊でいた時間が長すぎる。まあ、そのうち慣れるよ」

神父は、微笑ましげに彼女達を見ながらそう呟く。

「ま、それはともかく」

「な、なんだい美神くん？」

神父の前に座った美神が、半眼で睨みつけていた。それとなく視線を逸らしながら、窓の外を眺める振りをする神父。

「貴方の弟子にきつちりと世間の厳しき、教えるように言っておきましたから……ちゃんとしてください」

「……ちよつと待った」

その台詞を聞いた神父は、油の切れたロボットに良く似た動きで美神を見やる。何故か、額には冷や汗が光っていた。

「誰が、誰に、何を、教えるようにだつて？」

「え？ ……横島君が、ピートに、世間の厳しさを——」

「そこだよ、美神くん」

美神の言葉を途中で手を打って遮った神父が、真剣な表情で美神に迫る。

「世間の厳しさって、なんだい？」

「そりや勿論、お金とか、生活費とか」

「彼が、横島くんがそれを？」

「……あ」

美神の顔が、見る見るうちに蒼褪める。そう言えば、あの半人狼は自分の食べ物を自分で獲って来る奴であった。

つまり、美神の期待しているお金の大事さとか、生活費の必要性とかそういうものを教えるには。

「む、向いてないわね。これ以上なく」

「一体、何を教えると思う？」

誤魔化すように、額に井桁を浮かべた神父に向かって真剣な表情を向ける美神。何故か、神父からは見えない後頭部には、冷や汗が大量に浮かんでいた。

第貳拾四話。

ピートと一緒に出かけた、忠夫からの一本の電話。それは、美神にとつては美味しいお話でもある。内容は至つて簡単。怪しい人物が、何故か美神達の事を知っていた。

そして、彼女達GSに、多額の報酬で依頼を申し出てきた事。

「ふ……ん。成る程、ヤバイ匂いがプンプンするわね」

「でしょ？ で、どーします？ 西条の義兄さん辺りにでも相談するんすか？」

「……先ずあなたの脳味噌の中身と相談する必要がありそうね。ともかく、一応開いてあげるから其処に居なさい」

返答も聞かずに通話を終了。叩きつけるように事務所の受話器を置き、振り向く。目に入つたのは、応接室の扉の向こうから覗いている二つの顔。

おキ又は好奇心とちよつとばつが悪そうな顔で、唐巢神父は顔に手を当て天を仰いでいる。

どうやら師匠のほうは何となく予想が付いている様であり、所員のほうも特に不安げな様子が無い。

「先生？ ちよつとお時間よろしいかしら？」

輝くような笑顔で問えば、何故か唐巢が青い顔で、冷や汗を一筋。

その隣のおキヌが慰めるように、或いは諦めを促すように背中を擦っているが——
まあ、そう言う事である。

「い、いや、これから礼拝の時間が「貴方の弟子が、巻き込まれちゃってるんですけどく？ いいんですかー、愛弟子放っておいて♪」……う、怨むよピートくん！」

「まあまあ。美神さんですから」

「どーという意味かしら、おキヌちゃん？」

ちよつと凄みを効かせたつもりだが、おキヌは軽く笑つて応接室に消えていく。

大分凶太くなつたようである。若しくは、慣れてきているのか。

未だにグズグズと何やら呟く唐巢を車庫に追いやり、おキヌが人工幽霊の端末である全身鎧とともに色々と準備を整えているのを視界の隅に留めながら。

「さあーて。お金の匂いがするわね！ 商売繁盛、気合入れていきましょうかつ!!
おーっほっほっほっほっ！」

高笑いを上げる美神のテンションは、鰻昇りとなつて行く。目指すは某県境、忠夫とピートが向かった森の中。

怪しい女と怪しい小鳥。そんなコンビの所へと。

「横島、ただいま戻りました．．．なにやっつてんだ、ピート？」

「え、ええつと、そのう．．．」

美神と連絡をつけた後、そのまま道無き道を直線で駆け戻った忠夫。鼻を利かせて本能に従い、辿り着けば其処にあるのは微妙な光景。

何故か、正座で小さくなっている半吸血鬼と、その目の前で仁王立ちの須狩と名乗った女性。

「どうやら、かなりご立腹の様子である。」

「．．．丁度良いわ。貴方、横島くん？」

「う、ういっす！」

氷のような視線。まるで、背筋に冷たい鋼の棒を突っ込まれたかのような感覚を覚え

た忠夫は、背筋を正して直立した。

「一体、どう言うつもりなのかしら？」

「と、言いますと？」

「いの子よ」

主語の無い、そしてあまりにも端的なその言葉。要領を得ない忠夫であったが、腕を組んだ須狩の視線の先を見て納得した。いや、させられた。

「・・・ピート。おまえ大人気ないぞ、流石に」

「うえっ?! そ、そんな、横島さんが言ったんじゃないですか?!」

その視線の先では、元は黄色かった毛を所々煤けさせた小鳥が、随分と恨みがましい目でピートを睨んでいる。

どうやら靈波砲でも喰らったらしい。

「はっはっは、ピートは馬鹿だなあ。——あれは野性の掟だ」

「は?」

「ペットとか家畜に適応しちや駄目だけふう!」

「ピート」

体をくの字に折り曲げて吹っ飛んだ忠夫の足元には、軽く素早いステップを踏む小鳥が居る。額に浮かんだ井桁マークが、何を表しているのかは言うまでもあるまい。

「は、話に違わぬ墓穴つぷりね．．．」

「ふ、因果応報ですよ．．．南無南無」

それはブツデイストだキリスト教徒。

「と、ともかく．．．美神さん達には連絡つきましたけど、到着にはもうちよつと時間がかかると思います．．．あたたたた」

ごろごろと4回転ほどして止まった忠夫は、逆さまになったままそう告げる。何せ現在地は完全に森の中。

道といえば獣道以外に無く、また連絡手段も先程のように電波が通じる場所に行きでもしない限り、無い。在るとすれば、忠夫のバンドナに仕込まれた発信機くらいであるか。

「よい——しよつと」

逆さまの体勢から、二本の腕と全身のバネだけで飛び上がって捻りを一回。それだけで、忠夫の視界は元に戻る。

思いつき蹴りを喰らった鳩尾を撫でつつ、先程まで居た場所で威嚇する小鳥に向かつて構えた。

「よし、来いやああっ！」

「だから止めなさいって言ってるでしようがっ!!」

吼えた瞬間、須狩の右ストレートが綺麗に入る。鼻から入って後頭部に抜けた衝撃が、忠夫の足をぐらつかせる。

しかし、まあ、普通の一般人の女性であるが故に、ダメージと言ってもその辺りが限界であろう。

「いたたたた・・・」

「あー、そんな思いつき殴るから」

「貴方はなんで平気なのよっ?!」

「慣れてますからね、横島さんは」

涙目で手首を握ってプラプラと振っている須狩の突っ込み。

しかし、忠夫は平気な顔して未だに小鳥と睨み合っている。呆れた様子でそれを眺め、日頃の騒ぎを思い浮かべるピートであった。

「……………うわんっ！」

「……………ピイツ！」

互いに一回づつ吼えると、とりあえずは此処までといった風情で二匹が背を向ける。

忠夫は、ピートを向いて須狩を指差し、此処に居ろ、と身振りで示すと森の中へと歩みを進めていく。

ピートはそれに疑問を抱いた様子も無く、不機嫌そうな小鳥と不思議そうに二人を眺める女性に向かって声をかけた。

「さて、横島さんが戻ってくるまでに情報を整理しておいてくださいね？」

「……………お気遣い、感謝するわ」

二人の行動が示すのは、「困っているみたいだから助けるけど、はつきり言つて信用していない」と言う事。

そして、「でも依頼主だし話すべき事はきちんと選んで話せ」と言う事だ。

「さて。美神さん達が到着するまで、後数時間はかかるよなあ」

森の中、枯れた葉と枝を蹴り上げ、忠夫はひたすら麓へと駆けて行く。降り積もった茶色の葉が、巻き起こした風に運ばれて行く。

その葉が再び地面に落ちる頃には、忠夫は既に遠く離れた場所に居る。

「こつちから迎えに行つて、森の中は担いでいけば良いかな」

犇めき合つた木々をすり抜け、張り出した枝を飛び越える。

着地と同時に一步踏み出せば、蹴り出した足が先へと進む。

意識の大半を思考へと振り分けながら、その体はひたすらに疾駆する。

「……やましい気持ちは無いぞ、うん。これは必要だからだ」

誰に聞こえる訳でもないが、何となくそんな言葉が口をつく。ちよつと位は良いよな、と思いつつ、半人狼は森を行く。

微妙に顔の造形を崩しながら。

「……でへへへ、はっ?! いかんいかん!」

とりあえず、わきわきと手を動かすのは止めた方が良い、切実に。

「つて、あれ?」

視線も前に向いておらず、意識も殆どがやましい方向にずれていたにもかかわらず、気が付けば、麓の町に程近い、森の切れ目に到着している。

時間が飛んだような気分になりながら、忠夫はそこらの地面を観察する。

探しているのは、此処に隠しておいた物。

「お、あつたあつた。無くしたら殺されるかもしれんしな—」

通信機と残り少ない現金、着替え。その他諸々生活用品である。ちなみに、無くしたら殺されるのは通信機。なぜなら単純に一番高いから。

そして森の中に持っていかなかったのは、無くしたり壊したりしたら怖いから。

生活用品なんかを持ってきているのは——空き巣対策と言う事で。

「えつと、ちよちよいのちよい．．．で」

程なく、美神の持っている通信機に繋がる音がした。

「もしもし〜」

電話の向こうには、爆音とも言えるほどの騒音が在った。

「えー?! 何よ、横島君?!」

「美神さーん、もうそろそろ着くそうですよー!」

その頃、美神達は既に忠夫の近く・・・と言うか、上空に来ていた。

移動手段は、西条経由のオカルトGメン御用達へり。

何か怪しい物、例えば法に引っかけたりそうなのがあれば報告する事、そして無理はしない事。

西条は、それだけの条件でへりを貸し出してくれた。はつきり言つて甘いのか、それとも美神の靈感と自分の直感を信じるが故か。

ともかくあつさりとOKを貰い、そのまま近くのへりポート経由で一つ飛び。

パイロットは何時ぞやのフェンリルやら死津喪比女やらの時に借り出されたパイロット。美神達の顔を見た瞬間に逃げ出そうとした所を、いとも容易く捕まって、泣く泣くお空の案内人。

そんな彼の悲哀も知らぬ氣に、美神達は忠夫の発信機目指して一直線と相成つたのである。

「分かったわー! ああもう、煩いわねこのへりっ?!」

「そりゃ消音装置もついてない、普通の奴ですからねー! これ以上無茶言わないで下

さいよー！」

「・・・悪かったわよ！ ええつと」

前方のコクピットからマイク越しに返された言葉に少々冷や汗を流しながらも、美神は手元の受信機を覗んだ。

こちららとこちららを見ているパイロットの表情は、勘弁してくれと全力で表明しているが放置する。

「あら、すぐ其処じゃない」

「えー、どの辺りですかー!？」

騒音に掻き消されつつある美神の言葉に反応し、おキヌは窓から下に広がる緑を覗く。しかし、当然ながら開けた場所など見つからない。

「下に降りれば分かるわよ。ほら、先生早く準備してくださいっ!!」

「そ、そうは言うがね美神君。私はこれでも病み上がりなんだがねっ?!」

真つ青な顔で美神の差し出したパラシュートを受け取り、それでも何とかそれを手早く身に付ける。

いやに手馴れているようにも見える辺り、実はこの神父若い頃はやんちゃだったのかもしれない。

「それじゃ、先に行ってますねー!」

「はいはい、それじゃ——つて?!」

自分が装着したパラシユートのベルトを締め、その他諸々の道具を準備していた美神の髪が風に吹かれて舞い上がる。

慌てて振り向いた美神の目には、おキヌが全開になったドアから身を乗り出すのが見えたり。

「・・・あれ?」

「おキヌちゃん! パラシユートオオツ?!」

「だああつ?! ドアを開ける前にこつちに一言位くれええつ?!」

流れ込んだ強風はヘリの中で荒れ狂い、軽い物を踊らせる。美神達の荷物の中にあつた破魔札が一枚飛んで、パイロットの顔に張り付いたのは運命の悪戯だつただろうか。

ともかく、そのせいでヘリの体勢は思いつきり崩れ、おキヌは首を傾げたまま・・・落ちていった。

「わ、私、今、飛べないの忘れてましたあああつ!!」

「お馬鹿あああつ!!」

美神が天井に張られたロープを掴み、おキヌに向かって手を伸ばす。しかし、その手が扉の向こう側に届いた時には。

既に、おキヌの姿はない。

「おキヌちゃん！」

「待ちたまえ美神君……」

へりの窓に顔をぶつけた神父が、窓の外を眺め、体中にこんがらがった緑色のビニールシートを巻きつけながら美神を止める。

「先生っ!!」

「大丈夫だよ。彼が来た」

「えっと、えっと、えっとっ!」

重力に引かれながら自由落下中のおキヌ。よりによって自分のオトボケがこんな形で自分の首を締めることになろうとは。

それでも彼女は必死で冷静になろうと努力しつつ、あと十数秒でできる事を探してい

た。

「こゝ、こんな事でまた死んじやったら、死んでも死にきれないっ?!」

彼女に後ろを見る目があったのなら、そちらから凄まじい速度で駆けて来る一人の青年が見えただろう。

しかし、残念ながら今のおキヌは肉体的には普通の人間。

後頭部に目なんか無い訳で。

「そ、そだっ!!」

何かを思いついたのか、おキヌは巫女服の袂を探る。

背後の青年、忠夫は、おキヌの落下地点に向かってひた走る。

「んぎゃーっ?! おキヌちゃんおキヌちゃんおキヌちゃんー!!」

地面を抉り、木々を蹴飛ばし、障害物を跳ね飛ばしながら忠夫が駆ける。

何故かへりからふらりと落ちたおキヌは、手足をばたつかせながら100m程先の上空から降っている。

その光景を見た忠夫の頭の中には、もうひた走る以外の選択肢などありはしない。

「間に合えええっ!!」

風を追い越し、盛大に土煙を撒き散らし、何か別の物が見えそうになりながら。

忠夫は走った。頑張った。

そして、何とか間に合った。

「よっしゃ来いっ!!」

両手を開き、腰を下げて受け止める体勢を整えた忠夫の耳に、不思議な音色の笛の音が聞こえた。

「・・・・・・・・」

忠夫の目の前で、おキヌが森のそこから湧き出るようにして集まってきた霊達に包まれゆっくりと落ちてくる。

「・・・・・・・・」

程なく、忠夫の前におキヌが死霊使いの笛を吹きながら着地した。

「——ふう、ありがとう、皆」

「・・・・・・・・」

「あれ、どうしたんですか横島さん」

こくん、と小首を傾げたおキヌの様子は大変可愛らしいものではあったが、忠夫の返した反応は、広げた腕を所在無さにぶらぶらとする事だけであった。

安堵の表情を浮かべればよいのやら、それともなんだそりやと言えば良いのやら。

「来ただけ、だね」

「・・・あー、もう。しまらない子達ねえ」

へりの上で、そんな会話がなされたとか。

「ふえーん、痛いですー」

「全く、心配させるんじゃないの!」

しばらく後に大荷物を投下したへりから、美神達が続けて降りてきた。

どうやら神父がかなり神経を削りながらパイロットに謝ったようで、青かった唐巢神父の顔色は白に近いものとなりつつある。

頭に拳骨を落とされたおキヌの泣き言をよそに、美神はへりから降ろした荷物の点検

にかかる。

パラシユートをつけて一緒に降りてきたと言つても、そこは商売道具。

いざと言う時に壊れてましたじやお話にならない。

「ほら、あんたもぼつとしてないで、これとこれ、担いで」

「え、ういつす」

衝撃から立ち直れずに呆けていた忠夫の頭を小突き、美神は何時もの巨大なりユツクと——やたらと長い、2 M程はあるであろう緑のビニールシートに包まれた何かを指差す。

「あれ、これなんつすか？」

「ああ。・・・あのへりの中でいーもの見つけたから、ちよつと借りてきたの」

「また君はそういう事を・・・」

唐巢神父が頭を抱えるのを綺麗にスルーしながら、美神は破魔札と神通棍を身に付ける。

リユツクを担ぎ、長物を肩に担いだ忠夫は、そんな神父を気の毒そうに見ていた。

「ひーん、痛いですー」

「やー、流石に今回はおキヌちゃんが悪いと思う」

「よ、横島さんまでー！」

結局、何処まで行つても緊張感とは無縁な彼女達であつた。

「……あ、おかえりなさい。あれ、先生？」

「ああ、ピートくん。無事だったようだね」

繁みを掻き分けて忠夫達がピート達の所に戻れば、其処では相変わらず能天気そうに小鳥が草を啄ばんでいる。

「あれ？ 須狩のねーちゃんは？」

「あ、う、そのー」

何とはなしに聞いてみれば、ピートは真つ赤になつて視線を逸らす。不審げに見つめていると、諦めたように小さな声で呟いた。

「その、お花を摘みに……」

「……うーん、ちよつと様子を見てくるか」

「へえー」

「へ？」

ハモつて聞こえた二人の声に振り向けば、美神とおキヌが刺すような、絶対零度の視線で睨んでいた。

おキヌの手は笛に掛かっているし、美神の拳からは靈気が溢れて火花を散らす。

「花を摘む」という隠語を知らない忠夫の迂闊さが、この場の雰囲気を作り出しているのだが。

「ええ？ ええ？」

「・・・変態」

「ええっ?!」

二人同時にそっぽを向かれて、忠夫はとても混乱している。何がなんだか分からなくなりピートに視線で助けを求めると、何故か神父と一緒にぼそぼそと喋りながらこちらをちらちら見るばかり。

「お、俺が一体何をしたあつ?!」

「・・・スケベ」

「あうっ?!」

須狩は程なく戻ってきたのだが、忠夫はその間中針の筵に延々と座らされつづけたよ

うに憔悴しきっていたそうな。

「初めまして、ミス美神。お噂はかねがね……」

「あら、ドーも……噂以上の事もお知りのようですけど?」

「ええ、まあ」

須狩の差し出した左手を握りながら、美神は完璧な営業スマイルを保っている。

互いに目を逸らしては居ないが、その真ん中の空間では何かドロドロとした物が生まれそうな雰囲気であった。

「で、ご依頼と言う事ですけど?」

「……報酬は、ざっとこれだけですわ」

依頼の内容も言わず、須狩は手早く何処からとも無く電卓を取り出しそれを突きつけた。

それに表示されているのは、美神の予想よりも2桁は多い額である。

思わぬそれにかなり心を揺さぶられつつも、後ろから見ている師匠と所員の視線をひしひしと感じて少し考えた。

「・・・どうやら、相当の危険がありそうですね」

「ええ。後、場合によっては——」

須狩の腕が返され、再び電卓の上を指が動く。

2度目に突きつけられた額は、先程の1、5倍。

「受けましよう!!」

「美神さん、いーんすかそれええっ?!!」

「良いのよっ!」

「あああ、相変わらなすのだね・・・」

忠夫の悲鳴は一言で切って捨てられ、神父の苦悩は届かない。とりあえず、美神の理性をあつさりと吹き飛ばすほどの額ではあったようだ。

「み、美神さんの急所をあつさりと・・・!」

「おーっほっほっほ!! やっぱり私の靈感に狂いは無いわね!」

「大丈夫なんでしょうか・・・？」

「覚悟は決めたほうが良いかも知れませんねえ」

「神よ・・・試練なのでしょうか・・・しかし、なんででしょうかこの空虚さは・・・」

「驚愕と歡喜、困惑と諦念。そして虚しさをたつぷりとブレンドした言葉が飛び交う空間で。」

「・・・そ、そろそろ説明させてもらっても良いかしら？」

失敗したかもしれない、と今更ながらに冷や汗交じりで引き気味の須狩は思った。

「救助？」

「ええ、そう。対象は——茂流田。私のパートナーよ」

完全に巻き込まれた形の唐巢神父が膝を抱え、ピートがその側でおろおろし。

それを視界の端に引つ掛けながら、美神達は須狩の話聞いていた。

「・・・なんで、救助しなきゃならないような事に？」

「それは、依頼と関係あるのかしら？」

「あら、隠すような事なの？」

「隠していると思う？」

「違ったかしら？」

「さあ？」

ピリピリと、一度は鎮火していた空気が再び燃焼し始める。段々と短くなる言葉のやり取りの中、二人は一度も目を逸らさない。忠夫とおキヌはドン引きである。

「・・・まあ、良いわ。——おいで」

先に視線を逸らしたのは須狩。

つい、と逸らした視線の先に居る小鳥を招き、駆け寄ってきたそれを手の平に乗せる。

一見、とても賢い小鳥に見えるが、美神の目には全く別の存在として写っていた。

「これ・・・！」

「これ、なんて言わないでもらえるかしら」

「・・・成る程、とんでもない事してくれたわね」

可愛らしく鳴く小鳥からは、確かに未だ小さいとはいえ、強烈な存在感を感じさせる魔力が漂っていた。

「ガルーダ。しかも幼生・・・ね」

「流石」

「魔族、それも中級の凶悪な魔獣。そんな存在が、人界に、しかも人に懐いてる・・・」

「・・・予定とは違っちゃったけどね」

誇らしげ、ではない。

かと言って、苦々しげでも無い。

むしろ、照れくさげ、と言うのが正しいだろう。

美神は、そんな須狩の表情に首を傾げる。

「・・・魔族のクローンなんて作って如何するつもりだったのかしら？」

「二——っ!!」

美神の一言で、場の空気が凍りつく。いや、

「くろーん、つてなんつすか？」

「あつちで教えてもらいなさい」

一人はてなマークを飛ばしまくっていた田舎侍が、神父とその弟子の所に追い立てられた。

「・・・メドーサ、そしてベルゼバブ。それが、私達にこの話を持ちかけてきた魔族よ」
「・・・また嫌な名前を聞いたわね」

須狩の話によれば、始まりはメドーサと言う女魔族がその話を持ってきたのだという。

彼女は、自分の目的は何ら明かさなまま、巨額の報酬と十分な実験設備、そして須狩達でさえ知らないような技術を持ってその計画を進めていったのだと。

「暫くは順調に進んでいたわ。私は良く知らないけれど、茂流田のほうも何らかの形で結果を出していたみたい」

魔族の細胞を、他の者と混ぜ合わせる。そんな実験だったらしい。しかし、その結果が出る前にアジトを移す事になり——茂流田の実験も、ストップしていた筈だった。

「・・・今度は、ベルゼバブとか言う魔族が現れたの」

その魔族は、茂流田と須狩にクローン技術を伝え、その代わりに合成技術と——クローン技術との融合を模索させた。

ベルゼバブは、全く異質な技を持つてクローンを作り出していた。己の分身を生み出すその技術を解析し、様々な既存の技術と組み合わせ、再現を可能にする。

それが、須狩の担当であった。

対して、茂流田の担当は——

「知らない。いえ、彼も分かかっていないみたいだった」

しかし、それでも彼らの科学者としての本能は留まる所を知らず。

その過程で生まれたのが、ガルーダや他の存在達だと言う。

「何でそんな研究を？」

「あら、知らない技術があつて、研究には困らない環境があつて、知識欲と探究心を満たすだけの要素がある——他に、どんな理由が要るのかしら？」

「・・・そー言うのをマッドつて言うのよ」

「否定はしないわ」

その過程で——須狩は少し恥ずかしげに誤魔化した——色々とあり。

結局、ある程度研究を完成させた時点で一端打ち切る事に決めた。

ベルゼバブは報告を纏めた書類とデータを受け取り、報酬もきちんと払って消えた。

何も問題無い。その筈であった。

「……少なくとも、あのメドーサって言う魔族は——いえ、何でも無いわ」

その夜。

研究所に、警報が鳴り響いた。

アラートの原因となったのは、研究途中で破棄されたモノ達の廃棄場所。

彼らの墓場であった。

引き払う準備も終わり、報酬をどうやって運び出すかを話し合っていた二人は急いで

モニター室に駆け込んだ。

薄暗い部屋の中、無機質に並ぶ監視カメラの映像には何も写っておらず、ただ、ぐしゃ

ぐしゃに砕けた鋼鉄製の扉と、須狩の知らないカプセルが開いている光景が映し出され

ていた。

「……茂流田は、何か知ってたみたい。私を研究所の外に連れて行って、一流のGSを、

少なくとも貴方達クラスを呼ぶように言ったわ。それから、研究所の全隔壁を閉鎖。現

在は、全く状況が分からない」

扉は特殊合金で出来ており、例え対戦車砲の直撃でも破れない。それでも、彼は美神達を呼ぶように、と言った。

「・・・時間を稼いでる。多分、そう。それが、昨日の夜」

「ご丁寧に研究所にある車は全部「何故か」故障しており、結局此処まで歩いてくる事になったのだと。」

そう告げて、須狩は顔を伏せた。

「今、私が話せる事は、これで全部」

「成る程。口封じって事かしら」

「はいはいはいはいっ!!」

顎に手を当てて考え込んだ美神の耳に、忠夫の声が煩く響く。

「何よ」

「このまま何事も無かったかのように「却下」・・・くうくん」

腰の引けた忠夫の背中を、冷たい風か撫でていった。

第貳拾伍話。

——薄暗い部屋だ。

明かりと言えば、半分以上が沈黙したモニター群の中に僅かに灯る画面のみ。

「……ちつ。隔壁は動かんし緊急用プログラムは停止。対霊警備システムも沈黙。使えるのはモニターとこちらの逃げ道も塞げる物とは」

キーボードを叩く男性の見つめる画面には、E R R O Rと表示された幾つかの項目が映し出されている。

ちらりと視線を傍らのモニターに飛ばせば、また一枚の隔壁が抉じ開けられたシーンが映し出された。

狭い通路を疾風のように進むそれに、幾つもの火線が突き刺さる。

しかし、『そいつ』は全く意に介することすらなく、ひたすら前へと進んでいくのみ。画面の端にちらちらと写るのは、小さな、人形ほどの人影達。

男は、それを見るとキーボードの傍らに放り投げてあつた通信機を取る。スイッチを押し、耳に当て、聞こえてくるのは怒号と銃撃音。

「どうだ、そつちの状況は？」

「はっ！ 目標は依然進行速度を衰えさせる事無く、居住区のほうへ向かっております！」

素早く返つて来た返答を耳に、再びキーボードを操作する。

表示されたのは施設内の地図。

左手で通信機を耳に押し当てながら、右手で地図の上をなぞって行く。

「・・・匂いか。クライアントには我々を逃がすつもりが無いらしいな」

「それならば、こちらには臭気ガスなどの装備で対処可能——」

「止めておけ。目標を見失えば、どんな行動に出るか分からん。最悪お前達に襲い掛かってくるぞ。命令は現状で固定。取り得る手段、全てを使って、しっかり足止めしておいてくれ」

囁んで含めるように説明し、通信機のスイッチを切る。

「ことん、と軽い音を立てて置かれたそれは、頼りなくも此処と他を繋ぐ一本の糸であつた。」

「茂流田？ こつちの準備は終わったよ」

「ん、ああ。そうか」

茂流田と呼ばれた男性の右手のドアを開け、何処となく強気な顔立ちの、褐色の肌をもつ女性が声を掛けて来る。

とは言え、その格好は中々刺激的。殆ど模様にはか見えない何かで僅かに覆われた上半身。そして、何よりも目立つのが、その額にぼっこりと突き出した角であろう。

「どうしたんだい？」

「いや、何でもないさ」

茂流田の気怠げな声に、眉根をひそめたその女性は訝しげに問う。

しかし、返つて来た答えもまた何処か素っ気無いものであった。

「無事だよ。あいつがそう簡単に失敗するもんか」

「・・・そうだな」

腕を組んで目線を逸らしながら、気恥ずかしげに女性が呟く。

耳に届いたその言葉に苦笑いを零しながら、茂流田は椅子を立った。

「ん？ 何処に行くのさ？」

「あいつらに顔を見せに良くだけだ。どうせ騒がしくて困ってるんだろ？」

「元気だけはあるからねえ」

苦い笑いでなく、微笑を零した女性は身を翻す。

彼女が開いたままのドアを潜りながら、茂流田はモニターに目を飛ばした。

「・・・胸糞悪い」

それは、誰に向けた言葉であつたのだろうか。

「駄目、通じないわ」

「中と連絡が取れないって事？」

森の中に存在する、巧妙に朽ちかけた館偽装されたその建物。

旧華族の屋敷として一部の者達に知られるその建物は、しかし更に一部の者達に取っては、見た目とは裏腹に高度に電子化された研究所であった。

その巨大な建物の正門。

古めかしい扉の横の壁に、蔦や苔に偽装されて隠れていた電話を、須狩はゆつくりと元の位置に戻した。

「つまり、中の状況は完璧に不明、って事かしら」

「そうでもないわ。茂流田の居場所なら予想がつくし、隔壁が閉じられているといつても——」

須狩は一人、扉を素通りして歩き出す。

周囲を警戒しながらそれに続く美神達。ガルーダの雛は須狩の頭の上である。なんとも緊張感に欠ける光景である。

「ええと、此処ね」

「これは……隠し通路かね」

須狩の手は、館の壁に生い茂る苔を取り除き、その下に隠された真新しい鋼鉄の扉を覗かせていた。

その横にある壁を調べ、ただのレンガにしか見えないその部分を一度叩く。

表面があっさりと剥がれ落ち、その中に存在する電卓のような小さな機械をさらけ出した。

十数桁の番号を迷う事無く打ち込めば、鋼鉄の扉はあっさりと自分からその口を開いていく。

「……おかしいわね」

「何がですか？」

その眩きで、中を覗き込もうとしていたピートの動きが停止。

訝しげに振り返った彼の瞳には、気難しげに顔をしかめる須狩の表情が写っていた。

「ここは、ごく最近に作った非常用の出入り口なの。私はここから脱出したから、良く憶えてるけど……」

そう言いながら、辺りを見回す。

「……一体、何が狙いなのかしら？」

「……とりあえず、中に入らない事には始まらないわね。横島くん、先行して——横島くん？」

腰にぶら下げた破魔札と神通棍をいつでも取り出せるようにしながら、偵察役としては現在のメンバーでも随一の半人狼に声を掛ける。

だが、忠夫は真つ青な顔で硬直したまま動かない。

「どうしたの？」

「み、美神さん、ヤバいっす……！　なんか、ここに入っちゃいけないってピンピンに——！」

尻尾を丸めて今にも逃げ出しそうに、腰を引かせて忠夫が叫ぶ。

「美神さん、横島さんがこんな嫌な予感を感じるのって……」

「……そうね。これは、予想したより厄介な事になるかもしれないわね」

「だ、だったら逃げましょうよ」

とは言え。

忠夫とて困っている者を見捨てるのは流石に嫌だ。しかし、それを超える危機感を感じているのもまた事実。

何がそんなに怖いのか。

それほどまでに恐ろしいのか。

それさえも、答えを返すものは無い。未知とは恐怖なのだ、とは誰の言葉だったか。しかし、それに気を取られている内に、美神が忠夫の首根っこを掴んで引き摺り始めた。

「ちよ、美神さーん!!」

「うるっさい! 久し振りの大儲けなんだから、ちよつとやそつとの事で諦める訳には行かないでしょうが!」

必死で手足をばたつかせながら抗議するが、何故か美神には逆らえず。

軽々と放り投げられ、忠夫はあえなく先行偵察役となったのである。

「こんなんばっかりやー!」

「頑張ってくださいねー!」

「横島くんもおキヌちゃんも偵察に行くのに大声で叫ばないっ!」

「こもつとも。」

「美神さんも十分声大きいですよね？」

「・・・まあ、美神くんだからねえ」

「こ、こいつらに任せて大丈夫なのかしら？」

今更ながらにそんな事をのたまう須狩の隣で、困惑気味のピートと諦め気味の唐巢神父が二人仲良く遠い空を眺めていた。

「ううう、怖い、暗い、狭いっ!!」

ずりずりと狭い通気口を這い進む。忠夫が飛び込んだ裏口は、ほんの少し進んだ所で行き止まりであった。

正確に言えば、隔壁が閉じられていて、どうしようもなかったと言う所だが。

「嫌な予感がするー!」

通気口の中は、以外にも埃一つ積もっておらず、しかし当然ながら明かりなどは無い。それでも、とりあえず方向感覚頼りにひたすら奥と思われる方向に進んでいく。確かに、この先に何かがある。

いや、居る。

背中には嫌な汗が流れっぱなしだし、不気味なくらい静かな事も気に掛かる。通気口というからには音の通りは良い筈であるし、あちらこちらに繋がっている筈。そんな事を考えながら、ひたすらに腕と足を使って這い進む。

「……ん?」

視界を、何かが掠めた。

動きを止めて、そちらを凝視。

「鼠かな?」

正直、こんな狭い所であればつたりと出会うのはかなり勘弁であるが、それでも向こうが逃げるのが先だろう。

「・・・え？」

「動くな！ 両手を上げて、直ちに伏せろっ！」

——それが、鼠であつたなら。

突然の声に、忠夫の動きが止まる。

それを命令に従つたと見たのか、通気口の先、分岐になっているところの左右から、小さな人影が飛び出してくる。

「に、人形？」

「失礼な！ こう見えても由緒正しき純国産、自衛ジョーだぞっ！」

幾つも連なる音を立てて、迷彩服を着た人形達が銃を構える。

その数、およそ10体ほど。構える銃は爪楊枝程度の大きさで、はつきり言つてひたすらに頼りなさそうである。

「・・・元がパチモンじゃねーか」

何でそれを知つてるのか。TVか漫画の悪影響か、それは知らねどいい加減に——

「・・・総員構え！ 一応弱装弾、発砲は任意っ!!」

口は災いの元を憶えたほうがいいだろう。

狭い通気口に、細い火花が舞い踊った。

「あだだだだだだっ?!」

「よし、撃ち方止めー!」

慌てて何とか動く両手で顔を庇い、身を縮めて火線から身を守る。

しかし、口径とか言う前に、根本的に威力が無い。

「いてーじゃねーかこの野郎っ?!」

ちよつと怒った忠夫は、攻撃が止まった瞬間に、全速力で前進した。

這いながら。

さながら台所の黒い悪魔のようである。

「て、転進転進ー! 後ろに向かって積極的前進ー!」

「うははははー! 大きい事は良い事だー!」

隊長らしき個体の声に、人形たちは一気に後方へと走り出す。

歩幅は小さく、その体にしては大きなりユックを担いでいる者もあるが、中々に統率の効いた動きで逃げていく。

「工作班、準備は良いかつ?!」

「行けます、パターンは2ー2ー4です!」

「まーてー!!」

調子に乗りまくりの忠夫は、前方で交わされたなにやら危険な香りのする言葉を聞き

流した。

まるで軟体動物のように体をくねらせ、曲がり角を素早く切り返し――

「うわははははは――きやいんっ!!」

爆発した。

方向転換の後、すぐさま前進しようとしたのが不味かったのだろう。良く見れば、明かりの殆ど無い中でも、半人狼の目なら捉えていたのかもしれない。

勢い良く這い進んだ先には、地雷がたっぷり設置してあった。

思いっきり腕をその上に落とし、次の瞬間には通気口内に小さな爆発音が連続して響く。

煙が晴れた後に出てきたのは、ちよっぴり涙目の、煤けた忠夫。

「……げほっ。ふ、ふっふっふっ」

「目標の損害軽微、戦術的撤退続行――」

「またんかゴルアアアッ!!」

再び始まる追撃戦。

方や時折喰らう手榴弾やらパンツァーファウストやらの爆発を、時には防御し時には

直撃されながら、それでも前に進む速度を緩めない忠夫。

方やひたすらに火力をぶっつけながら、全速力で後退していく迷彩服姿の人形達。まるで、一昔前の怪獣映画のようである。

いや、どちらかと言うとパニツク物に近いかもしれないが。

「ど〜こ〜だあああ!」

「た、隊長! そろそろ弾薬が・・・!」

「もう少しだ、走れっ!」

最早当初の目的も忘れ、ひたすらに追いかけていく忠夫。

またもやぶつかった分岐で、左右を眺めてみる。

右にはどうやら出口らしき灯りがあり、左には幾つかの足音が消えていくのが聞こえる。

迷わず左に進路を取り、摩擦で発火しそうなくらいの勢いで這い進む。

「そこかあつ?! ——ふわっ?!」

その眼前を塞いだのは、前方から投げ込まれた幾つかの筒。

そこから噴き出した煙幕である。

おそらくこの機に乗じて攻撃か撤退をするつもりだろう。

しかし。

追いかけるのは簡単だが、さつきみたいに一遍に撃たれてはかなり痛い。

両手を上げて防御。凌いで一気に間を詰める・・・!

「・・・あれ？」

しかし、予想した攻撃は来なかった。

変わりに。

「せ、戦車っ?!!」

キヤタピラの音も勇ましく。晴れた煙幕の向こうから、大量の戦車が出現した。

「照準、よし! 安全装置解除——!」

「ま、待て待て待て待て——!」

今度は、忠夫が後ろに下がる番であった。

「発射ああっ!!」

「スンマツセン調子に乗りすぎましたああっ!!」

しかし、そんな言葉は今更過ぎた。

慌てて後退する忠夫を追いかけるように、何発ものミニ戦車砲が着弾する。

それは確かに硬い金属の壁をへこませ、しかも爆発して煤けさせてさえいる。

「だあああっ?!」

「逃がすな——! 撃て撃て——!」

「せ、戦闘は火力と機動力と数とか後諸々……」

凄まじい密度の弾幕が、忠夫を追いかけて迫ってくる。

しかしそこは逃げ足に関してはお約束の修正が入った忠夫である。

恐るべき事に、弾丸が着弾する事は一度も無かった。

床との摩擦で煙さえ上げながら後退していく。

「んぎやあああ……あ？」

その摩擦が、いきなり無くなった。

足が何かを突き破り、慣性の効いたまま忠夫の体は宙を舞う。

突き破ったのは通気口の出口に付けられた金網であり、宙に舞ったのは、ただ単に通

気口から放り出されたからだ。

「お、おおおっ?!」

空中でクロールするように、暫く手足をばたばたとさせていた忠夫だが、重力の頸木は彼を捉えて離してはくれない。

あえなく、地面までの落下を始めた。

「ふんっ!」

両手両足を使って着地する。僅かに痺れるような衝撃が走ったが、十分に許容範囲内である。

たかだか2M程度の落下など、余裕と言わんばかりの見事な着地であった。

しかし、慌てて立ち上がるうとして通気口のある場所を振り仰いだ忠夫が見たものは。

「そりゃ」

「んごっ」

額に角の生えた、色つぽい女性の踵であった。

「おお、グーラー殿！ ご協力、感謝いたします！」

通気口から自衛ジョーが顔を出し、下で忠夫を踏みつけている女性に向かって敬礼する。

グーラーと呼ばれた女性は、軽く手を振ってそれに答えると、忠夫を簡単に担ぎ上げた。

「お疲れー。私はこいつを茂流田の所に連れてくから、そつちは電気系統の方、お願いね」

「はっ！ 任せてください、こちらにはその道に詳しい者もおりますので！」

その言葉を合図に、自衛ジョー達は再び通気口の先へ消え、グーラーは忠夫を担いで扉を潜る。

その間、忠夫は気絶したまま頭の周りにヒヨコを飛ばしていただけである。

「遅いわねー」

「ですねー。あ、そう言えばお茶持ってきたんですけど？」

「さっすがおキヌちゃん、気が効くわねー♪」

魔法瓶から暖かな液体が注がれる。

全員に配り終えたおキヌは、ゆっくりと暖かさを楽しんでいる美神の側に腰掛けた。

「遅いですねー」

「そうですねー。あ、美味しい」

「えへへ、早苗お姉ちゃんが送ってくれたんですよー」

「へえ、あの娘も中々渋いわねー」

そんな二人の向こうでは、神経質に爪を噛んでいた須狩がお茶の温かさに頬を緩ませ、ピートと唐巢が正座しながら二人一緒に啜っていたりする。

「ふう……どうだい、ピートくん。お茶も良い物だろう？」

「ええ……なんとというか、落ち着きますね」

「……ふう」

なんとも爺臭い雰囲気をかもし出している師弟の隣を、ガルーダの雛が地面を突付きながら通り過ぎていった。

「この精神安定的な効果は、中々のものね……。今度、茂流田にも勧めてみようかしら

？」

「ピ」

お前ら一体何しに来た。

「茂流田、居る？」

「ああ、こつちだ」

声を掛けながら部屋を覗き込んだグーラーの視界には、肩と頭の上に小さな黄色の物体を乗せ、ひたすらにキーボードを叩いている茂流田の背中があった。

その回りには更に多くの黄色が在り、あちらこちらを元気に飛び回っては鳴いている。

「分かった分かった。後でなら遊んでやるから……！」

「……相変わらずの懐かれっぷりねー。世話係としては少し複雑だわ」

体中をふわふわとしたガルーダの雛に纏わりつかれながら、それでも一心不乱に機械を操作する茂流田。

それを、呆れた様に眺めながら、グーラーは肩に担いだ忠夫を降ろした。

「そう思うのなら、本来のベビーシッターの役目を果たしてくれないか？ こつちも今手一杯……誰だ、そいつは？」

「そもそも子守り自体私のガラじゃないんだけどねえ。こいつは、侵入者……かな？」
その言葉に茂流田はキーボードから離れ、昏倒したままの忠夫を見る。

「……須狩が上手くやってくれたようだ。こいつは——」

「初めましてお姉さん！ 僕の名前は犬——ゴホンツ！ 横島忠夫です！ 嫁に来ないかー?!」

「きゃっ?!」

目を開いた忠夫は、一瞬にして警戒するかのようになり、目を見直し。

グーラーが目に入った瞬間、警戒していた事さえ忘れてグーラーの手を握っていた。

「よ、嫁?」

「ええ勿論!」

「だ、だって私精霊だし」

「美人のねーちゃんにそんな事は関係ないっすからっ! へいかもーん!」

グーラーの手を掴んでいた両手を離し、受け止めるかのように大きく広げる。

それならば、と言う訳でもなからうが。

『ピッ!』

「ちよ、お前らじゃなげふうっ?!」

迷わず突貫した黄色い弾丸の群は、一発も外れる事無く忠夫の全身に着弾した。

「は、話に違わぬ奴だな．．．！」

「え、あれ？」

きよとん、と沈黙した忠夫を眺めるグーラーの隣で、何故か茂流田は戦慄さえ覚えていたりする。

主に、あまりの状況の無視っぷりに。

「き、黄色い悪魔が．．．はっ?!」

「あ、起きた」

「おはようございます結婚しましょう式は教会ですかそれとも神道が良いですかそうですか心配しないで下さいこう見えても勉強してますからああっ!!」

「お、落ち着きなさい！」

冷たい金属の床に沈んでいた忠夫だが、目覚めた瞬間に再び目に入ったグーラーの格好が、彼に全ての迷いを取り払わせた。

直後、とち狂ったが。

扇情的に過ぎる格好は、少々刺激が強すぎたのかもしれない。

鼻息も荒く一瞬で接近した忠夫は、肝臓の位置に抉るような衝撃を受けて蹲る。

「うおおお・・・インチの爆弾を実体験するとは・・・！」

「全く。せっかちは嫌われるわよ？」

「だからって内臓が吹っ飛ぶような一撃は無いと思うっす・・・」

やれやれ、と言った風に肩をすくめるグーラーの前で、忠夫はよろよろと立ち上がる。

何とかこみ上げて来る色々な物を飲み下した忠夫は、漸く辺りを見回した。

「はいはっ！」

「制御室の近くの部屋。普段はあの二人が雛達と遊んでやってる所だけだね」

一見無機質な鋼鉄製の小部屋だが、よくよく見れば部屋の隅には小さな水道と後付けの水のみ場が設置してあったり、その横に鳥の餌が入った袋が幾つも積み上げられていたりする。

更にその反対側には、寝床と思しき藁が山のように積んであった。

「ま、私の職場でもあるけどね」

「とゆーと?」

「・・・昔は色々であったけど、今は二人との契約で子守りしてるのよ。——あの子らの苦笑いを浮かべるグラーの視線の先には、黄色い小鳥が元氣良く扉の向こうから洗われる光景があつた。

小鳥達を連れて現れたのは、目つきの少々悪い、スーツ姿の男性である。

「横島忠夫くんだね? GS美神除霊事務所」

「そうっすけど。あ、もしかして茂流田さん? 須狩さんの依頼で来ました」

軽くぺこりと頭を下げた忠夫に向かって、茂流田は安堵の多分に籠った吐息を吐いた。

「そうか、無事か。彼女は」

「ええ。今、正門の前に居ます。美神さん達と一緒に」

ゆつくりと、肩の荷が降りたように軋んだ音を立てる椅子に座る茂流田。

「それについてだが、ちよつと厄介な事になっていてね。どうやら、メインの発電機と繋がるラインが切られていて、非常用のバッテリーでなんとか凌いでいる状況なんだ」

「・・・つまり?」

「隔壁の操作は出来ないし、須狩との連絡も取れない。通信機でも使えれば良かったん

だが・・・残念ながら、使用不可でね。さつき、なんとか修理できないかと手をうった所さ」

「あんたが通気口の中であつた奴らさ。ちよつと融通は利かないけど、やる事はやつてくれるよ」

其処まで聞いて、忠夫は思い出したように懐を漁る。

偵察役として、一応連絡用に通信機を持つてきていることを思い出したのだ。

「・・・あ」

しかし、期待した物は得られなかった。

流石に地雷やらなんやら、更にガルーダの雛達の一斉攻撃は堪えたらしい。

ジージャンのポケットの中には、真ん中から折れて一目で使い物にならないと思われる通信機の残骸しか出てこない。

「あちゃー」

「済まないね。まさかいきなり、その、ぶ、プロポーズなんてしてくるとは思わなくてね」
「いや、それより返事のほうをつ!!」

瞬時に詰まる二人の距離。

高速移動さえ超えて、最早瞬間移動に近いその速度。

こんな時ばかりいつも以上のスピードが出る辺り、間違つた方向に全力疾走してい

ることだけは確かである。

「・・・ふーん」

「な、なんつすか?」

じろじろと、忠夫を眺め回すグーラーの瞳。

その深さに少々腰を引かせながら、忠夫はちよつと冷や汗たらり。

何となく、品定めと言うか——チエツクされている気がしてならないのである。

「ふふふ・・・成る程、あなた、純粋な人間じゃないわね?」

「へ?」

「まあ良いわ。それに、中々——」

妖艶な笑みを浮かべながら、グーラーが忠夫の首に手を回す。

その真近で見た表情にドキマギしつゝ、忠夫は自分の正体があつさりとばれた事に驚きを隠せない。

種を明かせば、元々「喰人鬼女」としての習性をもつグーラーにとっては、相手が「餌」かどうかくらいの見分けはつくと言っただけの事なのだが。

「——美味しそう」

「こ、これはオツケーって事ですかああつ?!」

「その辺にしておけ。頼むから」

がぼつと抱きつき、その柔らかさと暖かさを堪能していた忠夫から、グーラーがあたり引き剥がされる。

茂流田が、グーラーの腕を掴んで引つ張ったのだ。

「ああつ?! 綺麗なねーちゃんの柔らかさがーっ?!」

「君も君だ。相手の事くらいもうちよつと知つてからでも良いだろうに。骨になつてからでは遅いよ」

恨みがましい目で見てくる二人を余所に、茂流田は再びキーボードへと向かう。

非常に残念そうなグーラーの視線と、こちらも残念そうな表情の忠夫が何となく手持ち無沙汰で立ち尽くした。

「・・・一応、協力者なのだから、文字通り「食べられて」は困るんだよ」

「ちえつ。それじゃ、また後でね?」

茂流田の背中越しに聞こえてきたその言葉。言外に「今は」と付いているその言葉に従つたのか。

グーラーはとりあえず、今の所は手出しを諦めたようである。

しかし忠夫は気付かない。

食欲を押し隠した流し目とともに送られた、色艶たつぷりのその言葉に期待を膨らませ、一人で鼻息荒くしていた。

「つと。できたぞ、後は電源の復旧待ち——」

一際大きな音を立てて茂流田が最後のキーを叩く。

その言葉が終わらぬ内に、薄暗い小部屋に光が灯った。

それは、電源の修理が終わった事を示している。

そして、茂流田とグーラーが安堵の溜め息を付いたその瞬間。

茂流田の懐から、悲鳴のような叫びが聞こえた。

「茂流田指令っ!! 大変です、隔壁が、隔壁があつ?!」

「如何したっ?!」

「隔壁が、全部開いていきますっ!!!」

屋敷の中に、その地下に、重低音が響き渡る。

機械の響きを伴ったそれは、沈黙の広がる部屋にも響き、そして何も対応できない内に、全ての幕は開いていく。

「——しまった、これもトラップか……!」

「ど、どー言うことぞっ?!」

「施設内の隔壁が、アイツを止めていた防壁が、全部無くなつたつて事だつ! 不味いぞ、直ぐにここを離れ——」

大きな、巨大な咆哮が鳴り響く。

それは苦痛か、それとも歓喜か。

グーラーと茂流田に取っては畏怖の響き。

そして、忠夫にとっては。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——』

「ま、まさか・・・」

「逃げるわよ、かなり近いわっ!!」

何時か聞いた、強大なる存在の自己証明。

「フェ、フェンリル狼の咆声にしか聞こえないんですか?！」

「・・・その通り。私の最高傑作にして、一番のきかん坊さ」

アルテミスと共に去った筈の、神話の時代の魔狼。

魔獣フェンリルの咆哮であった。

第貳拾陸話。

緩やかに曲がる所々に錆の浮いた鋼鉄製の通路を、二つの荷物を担ぎながら駆け抜けていく。

視界に入った黄色と黒の縞々の書かれた壁の横を、減速ついでに思いつき蹴りつけた。

重い衝撃が足に返るが膝のバネで相殺し、キツクの勢いで開いた扉の中にある金属製のバーに足を引っ掛けぶん回す。

その結果として直ぐ後方で轟音と共に隔壁が閉まり、通路は振動で満たされる。

「無茶苦茶だね……!」

「こつちも必死なんじゃー!」

背中に背負ったグーラーが呆れた様に呟くが、正直言つてまともに受け答えしている余裕が無い。

何せ、たつた今閉じた隔壁が、背後で甲高い音を立てながら歪み始めているのだから。重厚な壁である筈のそれは、未だ一度も目にしていない後方からの追跡者の手によつて蹂躪され始めている。

今までの逃亡状況と一際分厚い先程の隔壁から予想すると、おそらく——持つて2分。

あちらの移動速度と、こちらの抱える荷物の重量、そしてその為に減殺されているこちらの移動速度を考えると、漸く少しの余裕が出来たと思つてもいいだろう。

「次の角を右、それから直ぐに左だ！　そこから先には幾つかさつきみたいな隔壁がある！」

「あーもーっ！　指示出すだけなのは楽だなおいっ！」

「依頼の内容が僕達を救助する事なんだろう？　これが一番良いんだからしようがないじゃないか。それに、僕だつて」

そう言つて、忠夫に小脇に抱えられたまま茂流田は肩をすくめた。

「こんな体勢で文句の一つも言つちやいない」

「その余裕は何処から来るんじゃない？！」

茂流田は、すくめた肩をそのままに、軽く頭を振りながら。

「人生経験の差。かな？」

えらく余裕ぶつてのたまつた。

ふつふつと込み上げる理不尽に対する怒りを、八つ当たり気味に壁にぶつける。

再び現れたレバーを足に引つ掛け回しながら、忠夫はなんだかとても泣きそうだつ

た。

一方その頃。

「よーし、慌てず騒がず急いで前進――」

『じゅう』

狭い通気口の中を行くのは黄色いもこもこの群と人形達。

ガルーダの雛達は小さな嘴に寝藁を咥え、またその周囲を誘導しながら進んでいく人形の兵士達も背中に引き摺るようにして持つており、戦車の上にも藁の束が重ねて積まれている。

先頭に行く戦車の上から掛けられるパチモノ人形の声と共に、雛達は元氣一杯、楽しんで遠足でもするかのような雰囲気ですら行進を続けていく。

更にもう一方その頃。

「だーっ！ もうあの馬鹿は一体何やってんのよっ?!」

「美神くん、冷静に、冷静に……!」

丁度その頃、美神達も忠夫が侵入していった入り口の前で一悶着起こしていた。

とは言っても、先程聞こえた『狼』の遠吠え、そして突然開いた正門の鍵、反応を返さない偵察係の通信機、と、これだけの問題が揃っていながら状況を把握しろと言うのが無茶だろう。

ともあれ、美神達は忠夫を追って突入するか、それとも暫く様子を見るかで困っていたのである。

「大っ体ねえっ?!」

「な、何かしら?」

「何でフェンリル狼の声がこんな所で聞こえるのよっ?!」

そして、狼の遠吠えは、その咆哮に秘められた魔力は、美神達にとっては悪夢のような物であったのだ。

「ち、知的好奇心が溢れちやつて……。メドーサが面白い物手に入れたとか言うもんだから、ちよつとだけ培養してみようかな、とか、今度はベースに完全な人狼を使つてみようかな、とか色々、ね？ 分かるでしょつ?!」

「分かるかあつ!! 知的好奇心でも何でも人に迷惑が掛からない程度に収めてなさいつ!! しつかりと！ 出来れば鍵掛けて二度と出さなあつ!!」

「ええつ?! 私に死ねつて言うのつ?!」

「人に迷惑掛けずに研究できんのかああつ?!」

美神の怒号が響き渡る。

その前で何故か酷くショックを受けた表情で須狩が膝から崩れ落ちるようにして両手をついた。

「そ、そう言う考え方もあつたのね……。!」

「ぬあああああつ?! このマッドはあつ!」

振り上げられた美神の神通棍を振り下ろさせまいと神父とピートが押さえに掛かる。

巫女服の少女は一人ドアの前にてひたすら落ち着かなさげな様子で中を伺っているが、未だそこから何かが出てくる様子は無い。

そんな寸劇めいた状況の中で、須狩の頭の上でうとうととしていた雛が突然飛び上がった。

「あ、こら、何処に行くのっ?！」

須狩が慌てて止めようと動くが、雛は素早い動きでその手を掻い潜る。

そのままドアの前におキヌの足元を潜り、通路に飛び込むと一声、鳴いた。

「ピイイイイ……!」

明るい太陽の差し込む先は、蛍光灯の白い光も掻き消されて、ただ溶けるような陽射しの中にある狭い廊下。

その少し先は、先程の咆哮が轟くまでは確かに鋼鉄の壁で塞がれていた筈の道であった。

遮断されていた通路はその先で分岐しており、左右どちらも先を伺う事は出来ない。

蛍光灯の光に照らされて、微かな埃が空気を白く汚すのみ。

通路の向こうからは、相変わらずの静けさだけが答えを返してくる。

「……どうしたのかしら?」

「さあ……。別に、変わった様子はない」

それは、小さな小さな音だった。時計の針が進む音のような。

更に小さな足音が、急いで遠くに離れる音。

ふと、そちらを振り仰いだ美神と須狩の目に入る、天井近くに作られた通気口。

左右に一組ずつ、見える範囲の通路には、およそ3M程の間隔を開けて設置されているようだ。

おそらくは、無機質な廊下に沿って張り巡らされた空気の循環機構である。

地下と言う空気の籠りやすい、またそれに続く通路であるが故に神経質なまでに設置されているその口には、当然の如く金網が付けられている。

訝しげにそちらを眺めながら、美神は違和感に気付いた。

「……あそこ、開いてるわね」

指差した先には、ぎりぎり一人が通れるかどうか程度のサイズしかない通気口が、ぼつかりと口を開けており、その下には其処に付けられていたであろう金網が、所在無さげに立てかけられていた。

美神達は知らぬ事だが、それは忠夫が侵入の際に抉じ開けた物だったりする。

二人揃ってそれを見ながら、首をかしげていたその瞬間。

美神達の視線から外れた通気口の金網が、4つの連続した小さな爆発と共に剥がれて落ちた。

慌てて須狩を背後に庇い、神通棍を伸ばした美神の目の前に、パラシュートを広げながら戦車の一団が落ちてくる。

「待つて！ あれは、こつちの味方よ！」

破魔札を広げ、投げつけようとした美神の手を抑えながら須狩が叫ぶ。入り口で靈力を高めていた神父とピートも、その言葉に慌てて手の平に湛えた光を打ち消した。

「空挺戦車とは・・・またマニアックだねえ」

「あれはデザインが格好悪くて装甲が薄いから嫌いな。だから主力戦車クラスをモデルにしてるから、正確には違うわね」

その光景を、入り口から眺めながら唐巢が呟く。顎に手を当て、何度も頷きながらそう言った彼の瞳には一気に高まった緊張が一気に途切れた反動か、疲れた色が浮かんでいる。須狩のピントのずれた反論にも反応せず、頭痛を堪えながら唐巢神父は静かに天を仰いだ。

「ピート！」

『ピート!!』

更に通気口からは何本もタコ糸のようなロープが投げ下ろされ、それを伝って迷彩服を着た人形達が降りてくる。

しかし、須狩の肩に止まった雛が一声鳴くと、その奥から今まさに降りてこようとしていた人形達を吹き飛ばしながら、黄色い雛の群が溢れ出した。

通路の下とか上から悲鳴のような声が聞こえるが、雛達を止めるだけの意味は無い。

「わ、こゝら、貴方達ちよつと待ちなさい——」

一瞬にして黄色いもこもこになった須狩を横目に、美神は縮めた神通棍の柄で頭をか
りかりやる以外に、虚しさを表現する方法を持たなかつた。

「ほ、報告します！」

「部隊長殿、大丈夫ですか?！」

「ええいつ! こゝこの程度おつ?！」

「首が、首がもげかけてますつて! 衛生兵! 衛生兵——!」

気合の声を上げた途端にぐら付いた頭を、背中に赤い十字の書かれたリユツクを背
負つた人形の取り出したミニサイズガムテープの切れ端で固定しつつ、部隊司令と呼ば

れた人形は須狩の前で敬礼する。

体中に小さな黄色い羽毛を纏わりつかせ、更に膝やら肩やら頭の上やら、更には座り込んだ床の周りやらに雛達を必死で宥めながら須狩は漸く答えを返した。

「げ、現状を説明して頂戴」

「はっ！ 現在、横島忠夫と言う人物との接触到に成功し、彼の協力を得て茂流田司令がグラー殿と共に逃走中。先程入った通信によれば、もう間もなく到着するとの事です！ しかし、その後方よりフエンリルの追撃を受けており、そちらの方は横島殿の遅滞戦術により何とか時間を稼いでいるのが現状です！」

「そう・・・茂流田は無事なのね？」

「最後に確認した際には、怪我一つ無く」

それを聞いた須狩の体から、安堵の溜め息と共に力が抜け落ちる。緩んだ頬をピシヤリと叩きながら、それでもその笑みは中々消えてはくれなかった。

「ご苦労様、とねぎらいの言葉を衛生兵に担がれて消えていく人形に送りながら、須狩はゆつくりと立ち上がる。

「さて、後は合流してから、かしら」

遠くから聞こえる遠雷のような、隔壁が勢い良く閉じる音を耳にしつつ、振り返った先には――

「生きた自衛ジョー・・・その手のマニアに売れば一体数万はするかしら」

「それは流石にどうかと」

「言うだけ無駄だよピートくん」

「美神さん、よだれよだれ！」

ぎらぎらと目に嫌な輝きを灯した美神の口元をハンカチで拭うおキヌと、それから必死で目を逸らしながら遠い空を見ている神父。そして、その隣で冷や汗を流しながら突っ込むピートの姿があつたとか。

「んだりやあつ!!」

背後を付いて来る気配は、確実に隔壁をぶち破りながらそれでも接近はしていない。

それが、出来ないのかそれともしてないだけなのか。不安はあるし、それなりに策はある。

が、だがしかし。

「追っかけられるつてのは嫌っすー!」

人狼としては、狩猟本能に任せて追撃戦をしている方が性に合っている。

そもそも、可笑しい事だらけであった。

あの時、電源が復旧し、施設内の全隔壁が一斉に開いたその時、何故か未だ姿を見えないフェンリルはこちらに来ず、どうやら居住区のほうへと向かったらしい。

そして、一通り荒らしまわった後、再びこちらに戻ってきて、そして現在の状況に至ると言う訳である。

茂流田の話によれば、どうやら二人の匂いを元に向かつてきていると言う事であるが、忠夫にとつてもそれは異論を挟む内容でもなかった、訳ではない。

普通は、新しい方の匂いに向かつて追跡するのが狩りの定石である。

しかし、何故か、一々戻らなければならぬ古い匂いを追いかけた。

「あの子達、無事だといいいけど」

「心配する事は無い。流石に通気口まで入って来る程小さくは無いし、雛達には自衛ジョー達も付いてる」

「あんた等ほんまに余裕やなああつ?!」

だばだばと涙と汗と鼻水を垂らしながら必死で走る忠夫には、流石にそんな余裕は無い。

意思に依じてひたすら動く足に感謝の念と幾ばくかの愚痴を抱きつつ、全速力で掛けていく。

疾走は、限界を見る前に終わるのであろう事だけが、救いと言えば救いか。

高速度下の為、表面に浮いた錆や表示された文字ごと融け合い、灰色にしか見えない壁が左右をぶつ飛んでいく。

目的地は、近い。

それらしき匂いを感じた上、本能が囁く感覚を信じるのならば、おそらく到着まで後数十秒。

「・・・あれかつ!!」

白い蛍光灯の光に慣れた視界に、太陽の光が嫌に目立つ。

白は全てを内包する色ではあるが、やはり太陽の光は特別だ。

月の光に導かれる種族の出自とは言え、陽光を覗かせる曲がり角は、気持ち逸らせ足を進めるものだ。

ついでとばかりに壁を蹴りつけ強引に曲がる。

慣性に引つ張られたグーラーと茂流田が呻き声を漏らす、今は構っている余裕が無い。

「美神さんっ!」

「横島くんっ?!」

扉の向こうに見えた背中に、何故か、興奮より、安堵よりも先に、帰ってきたという気持ちを抱いた。

「うおっとっ?!」

「きゃっ!」

扉を飛び出し急ブレーキ。反動で前方に放り出されそうになったグーラーを、重心を調整しながら体の捻りで一周させる。

ぼすん、と軽い音を立てながら、両手でしっかりと抱えなおされたグーラーは。

「茂流田放り投げてどーすんの?」

「野郎はいいのっ!」

忠夫の無常な言葉と共に前方やや斜め前に滑空する茂流田を発見し、呆然と呟いた。

「茂流田、しっかりっ?!」

「ああ、須狩……今、人類は空を生身で飛ぶ存在ではないと言う新しい哲学が浮かんだ

よ……」

「それは常識じゃないかしらー」

氣付けのつもりか壊れた電化製品でも直しているつもりか、茂流田の頬に須狩の往復びんたが飛びまくる。

見る見るうちに膨れ上がるそれを見ながら、忠夫はちよつと不味い状況になつていた。

「あらあら、人がせつかく心配してやつてれば。これはまたどーして喧嘩売つてるのかしらっ」

「ちがつ、不可抗力っ！ だって勢い付け過ぎたんですつてっ！」

「横島さん・・・不潔」

「イヤー！ そんな目で俺をみるといてー！」

見ようによつては半裸の女性を抱っこした状態に見える忠夫は、面白がつて首に腕を巻きつけてきたグーラーの暖かさや柔らかさ、そして耳にあたる吐息の甘さに悶えつつ、必死で目の前の二人に抗議する。

暫くの間、とある少女が拗ねて忠夫のお尻、尻尾の付け根辺りを抓っていた事や、とある女性の神通棍が唸りを上げて地面を裂いた事などは、神父とピートが涙ながらに知っている。主に恐怖の涙かもしれないが。

「うおおっ?! 痛い、なんかものっそ痛いつ?! 特に尻尾の辺りが!!」

「そんなに強く抓つてませんっ!」

「むしろ神通棍の直撃を貰った頭のほうが心配だがね・・・」

「なんで平気なのかしら・・・?」

そつちは慣れたらしい。

いかにも不服そうな表情で靈力を最大限まで膨らませつつある美神はさて置き、現状は結構制限時間一杯であつたりするのである。

漸くジンジンと痛む尻尾の付け根から意識を引き剥がした忠夫は、慌てた様子で美神の両肩を掴む。

「美神さんっ! 今すぐ脱いでください——」

肉が肉を打つた筈なのに、聞こえた音は機関銃の乱射の如く、轟音の連打であつた。

「はあっ! はあっ! こ、この非常時に馬鹿つたれはああっ!!」

「ち・・・ちが・・・匂い・・・」

血の海に沈んだ忠夫が、耳まで真っ赤に染まった美神に必死で声を上げる。

「・・・囧と、偽装と言う事か! 横島くん、しかし、それでは・・・!」

「だ、大丈夫ですよ・・・」

何かに気付いた唐巢が、よろよろと立ち上がった忠夫に抗議の視線を向ける。

それに対して何とか手を振って宥めながら、忠夫は額の赤いバンダナを外す。

向こうで漸く須狩の往復びんたから開放された茂流田を立てた親指で差しながら、とても楽しげな笑みを浮かべた。

「あつちに考えがあるそうで」

「つまりだね。我々が研究していたのはオカルト技術の軍事転用では『無い』のだ」
「・・・アレだけの成果があつて？」

背中を指差した半眼の美神の背後には、戦車から藁を降ろして一纏めになっている生き人形達とガルーダの雛。

それを溜め息を付きながらも頬を緩ませ手伝っているグーラー。

そして、現在研究所内をうろついているフェンリル狼。

聞こえは悪いが、これだけの研究結果があつて何をするつもりだったのか。

目線で問い掛けた美神に答えたのは、茂流田の隣で笑いを噛み殺していた須狩だった。

「オカルトの家庭利用・・・だそうよ？」

「「はあっ?!」」

「ああ!」

理解不能の声を上げた美神、唐巢、ピートの横でおキヌが納得したように手を叩く。

ぼん、と軽く胸の前で手を合わせたおキヌに、3人はそろつて胡乱げな目を向けた。

「ゴキブリとか鼠とか!」

「大当たり」

ニヤリと頬を歪ませて答えた茂流田の横では、須狩が肩を竦めて呆れたような、それでも何処か楽しそうな表情を浮かべている。

「ま、元は軍事利用を考へてた会社にいたんだがね——首になつちやつて」

「妙な物ばつかり作るわ、勝手に魔族と手を結ぶわ・・・あつちも扱いに困つてたわよ、

ほんと」

あつはつは、と軽い笑い声を上げる茂流田の表情に、後悔とかそう言った物が一切無い。

それはそれで危ない人物なのであるが、この場合は。

「マ、マッドサイエンティストがコンビで……！」

「そりや会社も困るわよね、普通」

二人なので危険度2倍で倍率ドン！　と言う事で。

「自衛ジョー達は害獣、害虫退治。グーラーは見ての通り子守りにピッタリ……とは言い難いかもしれないわね。母性本能と子守りの能力は十分なんだが、代替食がイチジク以外に完成しなくてね」

「ガルーダの雛は子供達のボディガード。見た目もアレだし、これから本格的に調整して……と。まあ、色々と考えてたからなー。他にも居るけどまだ調整中だったりするね」

指折り数えていく二人を余所に、唐巢と美神のGSコンビは頭を抱えていたりする。

おキヌは楽しげに話を聞いているが、ピートは首を傾げて違和感の元を思索中。

「コンセプトだけが先行した感じだねえ」

「開発だけじゃ商品はできないって事かしら」

正直な所、売れるかどうかは微妙すぎる。一応付喪神とか妖怪とか精霊とか、そー

いったオカルト的なものはまだまだ社会に受け入れられているとするには速すぎるのだから。

「……あれ？　じゃあ、フェンリルは番犬ですか？」

おキヌの物騒すぎる番犬——忠夫とか里の連中が聞けば泣くだろうが——発言に、茂流田と須狩は苦々しげな表情を形作る。

「あれは、昔の技術を流用して軍事利用を目的に開発したんだよ。僕達が」

「会社の連中にせっつかれてたのもあったけど……ベルゼバブの方からも色々あったのよ。……ま、おかげで会社とも魔族とも縁は切れた筈だったの」

苦い。

ここに来て初めて見せた二人の表情は、後悔とも口惜しさともつかない複雑なもの。

色々あった、と一言に言っても、会社との恫喝さえも含まれた交渉、魔族との神経をすり減らすような取引を経て、ようやくあの子に——フェンリルを、軍事利用と言う目的から開放する事が出来た筈だった。

「間違つたと言う事くらい理解している。だが、後悔はするべきじゃない」

「あの子は、フェンリル狼のあの子は、悪い子じゃないの。むしろ、私たちの目を覚まさせてくれた恩人みたいなものなの」

二人の瞳に宿るのは、決意と覚悟。

「頼む。こちらも全力を尽くす。だから」

「あの子を止めたいの。だから」

卑屈になるでなく、ただ頼るのでなく。

「手伝つて欲しい・・・！」

己の意思を、叩きつける。

「・・・報酬に色つけてよ」

美神は、ひらひらと手を振りながらグーラーを口説こうとしてガルーダの雛の群に押し掛かれてゐる馬鹿をド突きに行く。

「神は自らを助くるものを助く、だね」

「そこまで聞いて、見捨てる訳にも行きませんかからね」

神父と現在の弟子は扉の見張りに赴き。

「頑張りましょう！」

巫女服の少女は、両手で拳を作つて気合を入れる。

彼らに向かつて頭を下げた二人の元に、美神に蹴飛ばされた忠夫が転がつて来た。

「……むー。やつぱり」

「な、何かしら？」

その視線が、須狩の体のラインをなぞる。

どうやらイヤラシイ視線では無いようだが、須狩は思わず茂流田の背中に隠れた。

上から下までじっくり検分した忠夫は、拳を握つたまま不機嫌そうにむくれていたお

キヌに向かつて背筋と腹筋を使って跳ね上がり、その肩を握つた。

「え、な、なんですか横島さん」

「おキヌちゃん！」

「ひゃ、ひゃいつ！」

真剣な表情の忠夫に押され、おキヌは顔の温度が上がるのを自覚した。

「美神さんではボリユームがありすぎて多分無理！ 今こそおキヌちゃんの出番だ！」

言葉が鼓膜を揺らして脳に伝わり、忠夫の視線が胸を向いている事を確認する。

どうやら、誤解とか濡れ衣とかそう言う言い訳はさせないで済みそうだ。

「どうせ私はそんなに無いですよー!」

「いひやいいひやいごふえんふあふあいいー!!」

忠夫のほつぺたは、意外に良く伸びたそう。その後ろでは振り上げた拳の落とし所に困っている雇い主が居たりするが。

第貳拾漆話。

「煙幕、投射！」

自衛ジョーの一体が通信機に叫ぶ。

向こうから決行の合図が返ってくるのを待ち、隣に控えた二体に向かつて指を振る。

軽く頷いた彼らは、手に持った長い筒を通路の向こうに向け、引き金を迷わず引いた。

——痛い

先から飛び出したのは銃弾ではなく、小さな黒い筒。それは、大きさの上では信じられないほど大量に煙を吐き出しながら、通路の上を転がっていく。

——怖い

通路の左右に別れた彼らの間を、煙の壁を突き破りながらスーツ姿の男女が駆け抜けていった。

「隔壁閉鎖っ！」

——助けて

「了解、機関始動！ 全速前進っ！」

そこまで確認した後は、迷わず後方に下がるのみ。

更に生み出されつつある煙幕の向こうから、唸り声と爪が金属を叩く音が聞こえる。煙を纏いながら飛び出てきた三体の前には、後部にロープをくくりつけた戦車達の姿がある。

「アイサー！ 全速前進！」

戦車の上に体を乗り出していた一体が、駆け出してきた内の一体の声にあわせて号令をかける。

——お父さん、お母さん、

耳元から口元までを覆うように付けられた通信機は、戦車の内部に納まった生き人形達に声を届けた。

軽い音と共に、戦車がキヤタピラを唸らせる。

金属の床に噛み付いたそれらは、ゆっくりと、だが確実に車体を前へと進めて行く。全部で20数両にも及ぶとはいえ、やはりサイズからしてみれば考えられないほどの馬力を生み出したそれらに引かれたロープは、隔壁を閉じるレバーを勢い良く引き摺り落とした。

——怖いよ

「上手くいったみたいね・・・」

「よし、じゃあ私達は準備に取り掛かるよ」

「手伝います!」

入り口の脇に積まれた藁を撒き散らしながら、美神達が顔を出す。

一足速く抜け出した唐巢神父とピートは駆け足のまま辺りに聖水を撒き始める。

続いて出て来た美神は、更にその回りを囲むようにして数個の精霊石を埋めていく。

「——だから、やっぱりあの場所じゃないと調整が」

「でも、時間がどれくらいか不明だと負担がかかりすぎるでしょ?」

「大丈夫だ。一応、制限付きの短時間に設定してあるから——」

最後に出てきたのは茂流田と須狩。須狩の衣服はおキヌが着ていた巫女服であり、茂

流田が着ているのは忠夫のジージャン、ジーパンとTシャツである。

流石に少々サイズが小さい為、動き辛そうである。

「・・・やるしかないのね？」

「ああ」

溜め息をついた須狩は、慌しく動く美神達を横目に前線司令部と書かれた小さく簡易なテントに向かう。

「あの子の位置は？」

膝を折り曲げて覗き込む須狩の前で、首にガムテープを巻いた自衛ジョーが敬礼。そのままはきはきとした言葉で報告する。

「現在、横島殿とおキヌ殿を追跡中！ 後方遮断の作業も並行して——」

「開けて」

「はあっ?!」

驚いた人形の首が傾き、隣に控えた衛生兵が慌ててガムテープとマッチ棒で固定する。

それを邪険に払いながら、傾いた視界のまま部隊司令はしゃがみ込んだ茂流田に問い掛けた。

「そ、それは・・・命令ですか？」

「いや。頼む」

「……つくづく、ですなあ」

ヘルメットを取った部隊司令は、その影と溜め息で己の口元を隠す。それは、不安を感じながらも緩んだ顔を隠すため。

一言も喋らず敬礼を返し、真剣な面持ちで背後に控えた隊員達を見る。

全員、通信機や地図から離れ敬礼の形を整え、こちらの指示を待っていた。

「司令官殿の頼みだ！ 総員、全力で励めっ!!」

『サー、イエッサー!!』

その場の人形達だけでなく、通信機の向こうからも、既に入り口近くで暖気を始めた戦車の上からも敬礼と共に一糸乱れぬ答えが返る

満足げに頷いた部隊司令は、すぐさま近くの戦車へと駆け出していった。

少々ぐらつく首を、なんとか必死で抑えながら。

「ぶー」

「お、おキヌちゃんや。そんなに怒らんでも良いじゃないですか？」

「……どーせ私は物足りないですよー」

階段を2段どころか踊り場ごと飛び越しながら上へと向かう二人組み。

片方はスーツに身を包み、もう片方も同じくスーツに着られながらもしつかりともう一人の首に手を回している。所謂、お姫様抱っこという奴だ。

とは言えこのお姫様、少々ご機嫌斜めのように。

「いや、だからね？ 純粹にサイズの問題で、別におキヌちゃんが魅力的じゃないとか
そーいう訳では」

「でも、美神さんとか須狩さんくらいは欲しいですよね？」

「そりやも……う……ええと……ほんっ！」

半眼だったおキヌの目が、冷たさを増してジト目になりつつあるのを発見した忠夫は
冷や汗だらだらである。

さつきからの全力疾走のせいで掻いた汗とは違うその冷たさは、現在の状況を鑑みてもそれなりに場違いな筈である。

筈であるが。

「や、大和撫子さがおキヌちゃんの魅力だと思うよう？」

「……」

「あああつ！ 耳は――！ 耳は引つ張らないで――！」

ほんのりと頬を赤く染めたおキヌが、無言で忠夫の狼耳を片手で引つ張る。

現在忠夫はバンダナを外し、耳を露出させた状態であるから引つ張る事が出来たのであるが、犬に限らず動物にとって耳は脳にも近く敏感な場所である。

故に、地味に、痛い。

出来るだけ正確に後方との距離を測るために、と外したバンダナであったが、こんな所でこんな被害が出ようとは、お釈迦さまも気付くまい。

「……もう」

「いてててて」

両手でおキヌを抱えている為、手を当て様にも擦ろうにも何も出来ないもどかしさがあるが、それよりもおキヌがちよつと落ち着いてくれたのが何よりである。

呆れた様に溜め息をついたおキヌは、まだ赤みの残った顔のまま、先程引つ張った忠

夫の耳を優しく撫でる。

その手の平の温かさに、気のせいではなく痛みが引いていくのを感じた忠夫は驚きの視線をおキヌに向けた。

「ヒーリング、って言うんです。弱いけど、もう痛くないですよね？」

「・・・おお、本当だ」

ぴこぴここと軽快に動く忠夫の狼耳からは、引つ張られた赤みも痛みも消えていた。

それを微笑ましげに見ていたおキヌであったが、突如、よし、と小さく気合を入れて忠夫の首に腕を回して。

先程よりも密着度が倍増し、おキヌのとても甘い香りが鼻をくすぐり、忠夫の胸元にささやかながらもなんだかとも柔らかくてアブナイ感触が当たったり。

「おおおおおおおキヌさんっ?!」

「私、生き返れて良かったと思うんですよー」

さらさらと流れるおキヌの、その名の通り絹のような髪の毛が、真つ赤に染まったおキヌの表情を包んで隠す。

艶やかな黒の向こうに隠れた口元から、囁くような小さな声が忠夫に届く。

もう、忠夫の脳味噌はヒートアップしすぎて爆発寸前であつたりして。

「どーですか?・・・ふふふ、柔らかくて、暖かいですか?」

きゅつ、と。

おキヌの腕に力が籠められた。

「あうあうあうあうあああああつ!？」

忠夫の中では、理性と欲望が大戦争。

理性が列車砲をぶつ放し、欲望が空母から戦闘機群を発進させる。

心象風景だけでカタストロフが起きそうであった。

「夢だあ! こんな幸せな状況がいきなり来る筈があるかああつ!! 俺は、俺は騙されんぞおおおつ?!」

「・・・えいつ♪」

「ぬほおおおおおつ?!」

頬を真っ赤に染めたまま、しようがないなあ、という表情をしたおキヌは、大変楽しそうに更に腕に力を籠めて行く。

今まで散々初見の女性に求婚しながら、しかし一度もともに成功した事の無い忠夫は突然の猛攻にひたすらサンドバッグである。

忠夫の鼻の下が伸びに伸び、理性と欲望の均衡は既に崩壊寸前。

戦況がどちらに傾いているかなど、既に言うまでもないだろう。大鑑巨砲主義の時代は既に終わっていたという事か。

しかしそこで上手く行くほど世の中甘くは出来ちやいない訳で。

ついでに言えば、運命の神様というものが居るのなら、忠夫が美味しい目を見た後は必ず本人に反動が返ってくるのもお約束。

『・・・随分と楽しそうねえ』

「ひいつ?!」

地獄の底が開いたら、実は上げ底で更に下がありましたー、つてな感じの所から響いたような声が、忠夫の耳に突き刺さった。

施設内に張り巡らされた通気口を縦横無尽に駆け回る生き人形達の車両群。中には偵察用のバイクがあつたりする訳で、そこから偵察部隊がたまたまおキヌと忠夫の様子を見ていた。

準備を終えて須狩と茂流田の居なくなつた司令部で指示を出していた美神の元に、そんなデバ亀めいた情報がたまたま飛び込んできたり。

つくづくトラブルがあつちから寄つて来る性質の持ち主である事が原因の一つであろう事に疑いを持つのは不可能だが、まあ、運が悪いとしか言い様が無い。

「ちがつ、思つてません思つてませんちよつとどころでなくグラグラ来たとかいつそのままとか柔らかくて暖かくて気持ちえーなーとかいい匂いやなーとか滅茶苦茶思いましたけど思つてないっす!　・・・はっ?!」

『退職金代わりに天にも昇る気持ちで地獄に送ったげるわ』
「ヘルアンドヘブンツ?!」

どのような手段でヤラれるのか知らないが、忠夫の本能は大音声で警告と警戒を促している。

器用な事にズボンの中で尻尾を丸めた忠夫は、美神の強烈な殺気が9割を占めているような、そんな言葉で漸く意識を取り戻した。

抱っこしたままのおキヌが残念そうに膨れているのは必死で視界の外に出す。

色々な意味で凶悪で危険な感じであったからである。

主に状況を忘れそうになるからであるが。

「・・・え?」

そして、それに、気が付いた。

慌てて回転しながら慣性を殺しつつ急減速。最後に壁を蹴りつけ勢いを殺しきりながら、忠夫の耳は忙しく動き出す。

「きやつ?! ど、どうしたんですか横島さん?」

「・・・やほ」

——背後に迫っていた、フェンリルの気配が消えていた。

「美神さん、フェンリルがいなйтす! そっちで把握してませんか?!」

『なつ、この馬鹿！　こんな時に色ボケなんぞしてるからでしょーがつ!!』

全神経を緊張させて、ギリギリまで張ったピアノ線を爪弾くような緊張感の中。

只ひたすらに、周囲の気配を感じていく。

それは、まさしく、獣と獣の駆け引き。

呼吸を減らし、耳を澄まし、意識を凝らして変化を読み取る。おキヌの緊張した、速いテンポの呼吸と心臓の音、衣擦れの音。通気口の中を駆け回る、バイクに乗った自衛ジョー達の声。通信機を通して美神に伝わっている発見なしの報告。

足音も、衝撃音も、呼吸音も聞こえない。

だが、たしかに、近くに居る。

こちらが狼なら向こうも狼。

しかも詳しいスペックは不明だが、あちらの方が能力的には圧倒的に上だろう。

おキヌが、不安げにあちらこちらに視線を飛ばしながら忠夫の胸に掴まっている。

じりじりと、背後から火に炙られるような焦燥感。

言うなれば、こちらを見据える獣の視線。

「……くっそ」

額に流れる汗が嫌に成る程うっとおしい。

「横島さん……」

『クオオオオン……』

それは、いつのまにか、ふと視線をやった先に、居た。

「……っ!?」

小さな、まるで迷子の子犬のような声。ゆつくりと振り向いた二人の視界に、白銀の獣が写り込む。

大きさは昔見た、あの時の陰念の変じたフェンリルよりも、思っていたよりも遥かに小さかった。

精々体長2M半。

あの月夜に見た太古の魔獣、終わりの獣に比べれば、それは腕一本にも満たないサイズでしかない。

しかし、それは。

『グルウ・・・グルルウ・・・グル・・・グルルウ』

そう、大きさは、強さとイコールでは、無い。

硬直した二人の前で、暫し辺りの匂いを嗅ぎ回る素振りを見せていたフェンリルは、二人を視界に捕らえると同時に酷く苛立った声を上げる。

いや、苛立ったというよりも、期待を裏切られた怒りの方が大きいのか。

一瞬にして狭い通路は凶悪な意思で満たされ、世界が歪んだような印象さえ受けてしまふ。

例え半人狼といえど、超一流のネクロマンシーといえど、まともに正面からぶつかれば掌に落ちた雪よりもか弱い存在でしかない。

それだけの威圧感と、そして力を持っていた。

「・・・嘘だろ」

「よ、横島さん」

おキヌが忠夫のスーツの裾を引き、逃げる算段を付けようとしているのが分かった。しかし、忠夫は眼前の獣を見据えたまま、戸惑ったように動かない。

「横島さん・・・！ あれ、如意棒とかでなんとかならないんですか?!」

「・・・駄目だ、おキヌちゃん」

齊天大聖の武器にして、神界の神器。

人界に存在する物質よりも、遥かに硬いその武器を、しかし忠夫は取り出さない。

「如意棒は、使っちゃ駄目だ・・・！」

「・・・え？」

悲痛な、絞り出すような声。思わず忠夫の顔を振り仰いだおキヌの目に、困惑がふんだんに塗されたその表情が写る。

「おキヌちゃん、あいつは・・・」

視線を決してフェンリルから逸らさない忠夫の声は、恐怖に満たされては居ない。忠夫の声に反応し、再びフェンリルを見据えたおキヌには、その理由が分かった。

半分とは言え人狼であるからこそ、魂を癒す超一流のネクロマンシーであるからこ

そ、二人にはそれが分かる。

「泣いてる・・・？」

「ほんとに子供じゃねえかよ・・・！」

忠夫の目に映し出されたのは、どこまでも不安げにこちらを伺いながら、同時に匂いのついたスーツを纏っていたのが求める人達でない事に困惑し、そして怒りながらも怯えている人狼の子供。

例え姿がフェンリルに変わろうとも、その根幹を同じくする以上は、理解は容易い。

そして、おキヌの感じたそれは、ただ一途に親を求める子供の嘆き。

最早人の感じる事が可能な魂というキャパシティを壮大に外れているとは言え、彼女にそれは、確かに届く。

故に、彼女の瞳に恐怖は無い。

「逃げるよ、おキヌちゃん！」

「待って下さいい！」

視線を合わせたままじりじりと退がる忠夫のネクタイを掴んだおキヌは、懇願するようには言い募る。

「あんな子を置いて、そんな・・・！」

「分かつてる！ 分かつてるけども！」

『——横島くん、おキヌちゃんをそこらへんの通気口に押し込んで』

小さな声で叫ぶ切羽詰った二人の耳に、静かな、しかし圧倒的な揺らぎの無さを伴った美神の声が聞こえる。

「こつちでも確認したわ。あんた達から見て右上の通気口に今自衛ジョーの偵察部隊が居るの。なんとかそこにおキヌちゃんを避難させなさい」

美神の前にはグーラーが何処からかもいで来たモニターが鎮座している。

その後部からはコードが延びており、それはさらに通信機の受信装置へと繋がっている。

元は家の屋根裏とか床下とかを見るための規格調整であるが、それはこの際置いておこう。

ちなみにグーラーはそれを届けた後、ガルーダの雛を引率して須狩たちに付いて行った。体中に黄色いもこもこが集っていたが。

『そんな、美神さんっ！』

「黙って。横島くん一人ならともかく、今のおキヌちゃんの状況じゃ色々無理があるわ」

通信機とモニターの向こうから、おキヌの悲鳴が上がる。

美神は、眉をひそめ、表情は冷静さを保ちつつも必死で頭を巡らせつつづけている。

「そのサイズなら通気口に潜り込むのは難しいでしょうけど、その施設内の構造ならフェンリルのほうが詳しいみたいね。こっちの目的が目的だから、なんとかして私たちのところに引つ張ってこなくちゃならないの」

いくら事前に茂流田たちの協力と、自衛ジョー達の使っている地図を用いて施設内部の構造を頭に叩き込んだとは言え、所詮それは付け焼刃。

ここで暮らしていたフェンリルのほうが、地の利という点では遥かにリードを持っている。毎日散歩に連れ出していたと言うアホ二人は存分にしばいたが。

通気口に逃げ込んでも、それで凌ぎきれれるのか、という点では不確定要素が大きすぎる。

何より、完全に忠夫達を見失ったフェンリルが茂流田達の所に向かわないとも限らない。

必要なのだ、囧が。

美神達の待つ罠の入り口まで誘導できる、それだけの能力が。

現在の二人の位置から、目標としていた地点までの間には、フェンリルがしつかつかの存在を誇示している。

『……了解つす!』

『え、横島さ——』

冷や汗を流しながら逡巡していた筈の忠夫が、思い切った表情になった瞬間に、その姿はモニターに映し出された映像からは消えていた。

画面の向こうから慌てた声が聞こえ、映像がブレる。

次の瞬間右に振られたカメラは通気口に押し込まれ、呆然とした表情のおキヌを発見していた。

『待っ——』

通信機から、金属と金属がぶつかり合う耳障りな甲高い音が響く。

移動したカメラが映し出したのは、おキヌの眼前に通気口の入り口を塞ぐように斜めに突き立てられた如意棒。

そして、次の瞬間には。

『いよっしやあつ!!』

爆発音のような踏み込みと共に、フェンリルの横をすり抜けた忠夫が居た。

「へいへいへい! おつにさっんこつちらあ〜!」

全力疾走を敢行しながら、忠夫は必死に挑発を繰り返す。

なんとも子供じみた内容であるが、彼も伊達に困として何度も何度も死線を潜つちやいない。

後方から追いつがるフェンリルの視界に入りつつ、その爪が、牙が、背中を掠めるたびにフェイント急制動または慣性ドリフトかましつつ、するりするりと擦り抜ける。

勿論余裕は欠片も無い。何せ相手は「あの」フェンリル。

いくら中身が子供でも、その動きは神速瞬歩。

爪をかわした次の瞬間には牙が髪の毛を数本食い千切る。

『グルアッ!!』

「うひよおおおっ!」

海老反りになって爪を避ける。

体勢を持ち直す前に牙が来る。

通路の壁についた手を、指の5本で弾き出す。

僅かに右にぶれた体の横で、ド派手に顎が噛み合わさった。

「ふっふっふう! 里で鬼ごっここの忠ちゃんと呼ばれた俺の逃げ足、そう簡単には触れねーぜッ!」

さつき海老反りになって爪をかわした際に掠ったらしく、立派なスーツのお尻が破け、真っ白な尻尾がぶらぶらと。

耳出し尻尾出しで威張りつつ、忠夫は階段を駆け上がる。

踊り場まで駆け上がり、フェンリルが追いつこうとした瞬間に跳躍反転壁を蹴る。

着地点はフェンリルの背後、後ろも見ずに再加速。

背中からは轟音と共にフェンリルが壁に衝突した音が聞こえたが、ちらりと見ればへこんでいるのは壁のほう。

フェンリルは頭を一振り苛立たしげに、すぐさま忠夫を追いかける。

「やっつけられつかあつ!! 全速後進だーっしゅー!」

体を低く、頭を下げて加速体勢に入りながら、忠夫はひたすら冷や汗だった。

「見えたあつ!!」

目印代わりの戦車が一台、ぼつんと窓辺に置いてある。

現在地は地上三階、先程の裏口のほぼ直上である。

「人狼スラツシユキーツク!!」

最後の一步を踏み込みながら、意味は無くとも格好つけながら、忠夫は窓ガラスを蹴り破つて飛び出した。

一瞬の浮遊感の直後、すぐさま重力の頸木が彼を捕らえる。

ほとんど自由落下しながら背後を見れば、こちらを追いかけて窓枠を蹴るフェンリルの姿がそこにある。

『グルアアアツ!!』

「ぎゃーつす!!」

空中で意味も無いのに必死でクロールをしている忠夫の尻尾の毛を掠めながら、フェンリルの爪が振り下ろされた。

根性で泳いだおかげでもあるまいが、その爪は数本尻尾の毛を持って行つただけで済んだようである。

そのまま至近距離で落下しつつ、互いに着地と同時に駆け出せるように姿勢を整える二匹、いや一人と一匹。

方や4本の足に力を溜めつつ、方や2本の足をバネを縮めるように筋肉を緊張させていく。

衝撃を殺す効率は下がるだろうが、着地してからの加速のほうを優先させる体勢である。そして、6本の足が地面を同時に叩き――

『グアツ?!』

「またかああつ?!」

その足元で、大量に敷き詰められた地雷が連爆を起こして火花を散らす。

何処から調達したのやら、ペットボトルの蓋程度のサイズしかない筈のそれは器用に連動爆破、一瞬にして視界を白い煙と土煙で覆い隠して完全に塞いでしまった。

しかし、2匹は動かない。

煙の中に見えるのは、着地地点で蠢く影。

手を伸ばせば届く場所にいるというのに、逃げる事も、爪を振るう事も無く只ばたばたと動いていたりする。

そして、風が吹いた。

『オオ・・・オオオ・・・!』

「くさ、臭い、臭い・・・!」

「見たかその名もカメモシ地雷っ! 匂いで蹴散らす嫌がらせ兵器!」

「……効果は抜群かもしれませんが、屋内で使ったら家人にも被害が及ぶと思うんですが……」

ようするに、前々回冒頭の臭気ガス装備とはこの事だったようである。

確かにカメモシは臭い。その匂いで捕食者を追い散らす、ある意味彼らの最大の武器であるのだから。

だがしかし。

人間にとつても臭い事に変わりはない。

それを中心で、しかも大量に喰らつて悶えるフェンリルと忠夫を囲むように、ガスマスクを装着した美神達と生き人形達が繁みを揺らして登場した。

「あのマッド、凄いけど馬鹿よね。絶対」

「ピートくん、準備は良いかい?!」

「あ、はいっ!」

とは言えそこは狼の性を持った忠夫とフェンリル、なんとかかんとか立ち上がり、涙目ながらも続行可能。

しかし、今度は美神と唐巢、ピートが罾を動かした。

『グルオオオツ?!』

「何で俺までーっ?!」

精霊石を使った捕縛結界は、GS業界でも随一のプロ二人とその片方の弟子によって素早く構築、発動される。

ついでに忠夫も巻き込まれて、身動き取れなくなっていたりするが不可抗力と言えは不可抗力であろう。

別に殺傷能力の高い結界でもなく、純粹に捕縛を目的としたものである為危険は無い。

むしろ、精霊石をふんだんに使用し、事前に時間を掛けて準備した上で余計な目的を持たせずに捕縛に特化している為、効果の程は計り知れない。

勿論、フェンリル狼にとっては左程の脅威でもなかったであろう。

少なくとも、陰念の変じたフェンリル狼であれば、十数秒もあれば結界ごと蹴散らしていてもおかしく無い。

ただ、今回はGS達にとつての有利な条件が多すぎた。

月の光、月の魔力が薄い昼間である事、フェンリル自体がそもそも——言い方は悪いが——紛い物であり、本来の魔狼に比べれば遥かに「弱い」事。

そして、今はまだ子供であり、力づく以外に罠を破る方法を持たない事。

罠とは、獲物を取る為の物であると同時に、己よりも強い者を、より安全に確実に倒す為の物なのだから。

故にフェンリルは破れない。

いかに強力な爪を振るえても、強靱な顎を持つていても、それを使えなければ意味が無い。

無理矢理に餌を食い千切ろうとするフェンリルの力を受け流し、より深く、効率よくその動きを制約する。

この辺り、流石は超一流のGS達、と言った所であろう。

『グルルルウ……!』

「たーすーけーてー! へるぶみー!」

ついでに巻き込まれた忠夫が狂乱するフェンリルの側でえらくビビっていたりするが、美神達にも構っている余裕が無い。

綱渡りのような力の均衡を、全力で押し留めている真つ最中なのだから。

「くツ……須狩たちはまだなのっ?!」

「も、もう直ぐとの事ですっ!!」

「は、早くしてくれると有り難いのだがね……!」

当然、長くは持ちはしない。

しかし、それで十分な筈であったのだ、本来ならば。

須狩達の言い出した「切り札」が、停電の為に復旧に時間が取られなければ、捕縛と

同時に勝負は決していた筈なのだ。

そして、事態は更に動く

『ゴ、ゴアアッアッ——アアアアッ!!!』

「・・・なんだっ?!」

フェンリルが、立ち上がった。

異様な、それまでに無かった気配を放ちながら、先程にも増して強大な力で結界を引きちぎり始める。

結界のあちらこちらから火花が散り、同時に——

「暴走してる・・・?!」

——フェンリルの体から、その身に纏う純白の獣毛を赤く染めながら、真っ赤な血が流れ出す。

「——まさかっ?!」

忠夫が、何かに気付いたその瞬間に。

『オオオオオオオンッ!!』

結界が、それを構築する力の流れが乱れ、それに乗じて完全に罫を食い破られた。

轟音と共に地面が割れ、フェンリルの咆哮が木霊する。

余波で生じた衝撃に吹き飛ばされながら、忠夫は美神達に向かって転がっていった。

「ピート、あんた最後とちったわねっ?!」

「違いますよっ?! 誤解ですってばっ!」

「す、すまない美神くん。お腹が減って力が・・・」

「「あんたかああっ?!」」

転がっていった先ではピートが美神に襟首掴まって釣り上げられていたが、その横で力なく突つ伏した神父の言葉に忠夫も含めた3人の言葉がはもる。

弟子二人の暴言はともかく、一応半病人の所を無理矢理と言うか流れで連れ出してきたようなものであることを忘れては居ないだろうか。

憶えていてもそれはそれで鬼であるが。

「どーすんのよっ! 高いのよ精霊石の結界つてっ?! 先生にそんな大金払えないじゃないっ!!」

「問題はそこじゃないっすよっ!!」

額に幾つも井桁を浮かべながら、倒れた神父の胸倉を掴み上げる美神に向かって必死で声をかける忠夫。

その指の先には、唸り声を上げながらこちらを睨むフェンリル。

「・・・やば」

しかし。

「ちよつと待ったあつ！」

「こんなこ——」

「待て須狩！ それは僕に言う権利があるだろうっ!!」

「あら、レディーファーストって知らないの？」

突然狙っていたかのようなタイミングで建物の2階に張り出したテラスの上から、何故か仁王立ちの須狩と茂流田が現れていきなり揉め始める。

暫く喧々譁々と話し合っていたが、漸く交渉成立したらしく、二人揃って空咳ひとつ。

「こんな事もあろうかとっ!!」

「それだけかあああつ!!」

強烈な美神の突っ込みも何のその。

陶酔した面持ちの二人は、完全に自分の世界に入り込みながら背後の扉を開いた。そこから飛び出す5つの影。

それは茂流田と須狩の回りに着地する。

「これが子供狙いのガルーダ進化形態だ!」

「これでシエアはバッチリ確保っ!」

「科学戦隊ガルーダファイブっ!!」

ぼーん、と。

5つの影の後ろに、5色の煙幕が舞い上がる。

赤いジャージを着たガルーダはえらくやる気満々でポーズを決め。

青いジャージを着たガルーダは反対にやる気なさそうに肩を竦め。

黄色いジャージを着たガルーダがカレー片手に所在無さげに立ち。

ピンクのジャージを着たガルーダ(♂)が膝を抱えて本気で泣いており。

緑のジャージを着たガルーダが、優しく肩を叩いて慰めていた。

統一感があるようで、実際の所全く無い。いや、あるのだろうか？

呆然とする美神達の横で、唐巢神父がお腹を押さえて蒼褪めながらも、キラキラとした目で何度も何度も頷いている。

「様式美の極みだね・・・！」

「光栄ですな」

神父の言葉に、茂流田は大変満足げであつた。

第貳拾捌話。

「フオオオオツ！」

赤いジャージを着たガルード、言うなればガルードレットが声高らかにフェンリルを指差す。

びしっ！ と音さえ立てそうなくらいには、それは気合の入った行為であった。だがしかし。

青いジャージを着たガルードブルーがその肩を引き止め、やたらと気障っぽい感じに顔の前に立てた指を2、3度ふった。

それを見たガルードレットが怒りも露にブルーの胸倉を掴み上げる。

しかしブルーは動じた様子も無く、その手を邪険に振り払う。

辺りに気まずい空気が流れ、その真つ只中で睨みあう二匹。

その視線はちらちらとピンクのジャージを着たガルードピンクに向かうが、オスなのにそんな色のジャージをアミダくじの結果で着せられたピンクは未だ体育座りでへこんだまま。

レッドとブルーの視線に焦りが宿り始め、二匹は視線で会話する。

しかし、誰にもどうしようもない。この雰囲気は晴れてはくれない。

と、そこに緑のジャージを着たガルーダグリーンが「まあまあまあ」といった感じで二人の間に割り込んだ。

「クオッ！」

「クオオオオ〜」

「クエエエ・・・」

天の助けとばかりにレッドとブルーは悪態？を付きながら視線を逸らす。

そして、互いにそっぽを向きつつも、漸くフェンリルに向かって構えを取った。

黄色いジャージを着たガルーダイエローが、その後ろで右手に持ったカレーをしげしげと眺めているが、既に誰からもスルーされていた。

「・・・ふむ、まだぎこちなさが残るな。教育プログラムにもう2、3本追加するか」

「せめてDVDにしてよね。結構場所取るんだから」

「そーゆう問題じゃないでしょあんたらああっ!!」

額に怒りの井桁を浮かべた美神の叫びも当然。

何故かフェンリルは興味深々と眺めていた為に、そして茂流田と須狩以外の者達は状況が把握できずに固まっていた為問題は無かったが、彼らの前にはフェンリルが存在し

ているのである。

ちなみにグラーはガルルダ達が飛び出した扉の影から、恥ずかしそうに顔を覗かせている。仲間と思われたくなかつたらしい。

「その通りっ!」

「先生?!」

美神の叫びに答えるように、ピートに肩を借りて立っていた唐巢神父が凜と叫ぶ。

力強く拳を握り締めながら、その瞳には炎が燃え盛っているようにさえ見える。

「ぎこちなさっ?!」だがそれが良いっ! 例え初めはぎこちない繋がりであったとしても、数々の戦いを超え作り上げられていく友情! そう、初めから完璧なものなど無いのだよっ!」

「あんたもかああっ!」

柳眉を逆立てながら怒鳴る美神。

殆ど活火山の爆発を思わせるそのド迫力も、しかし彼らには通じたようには見えはしない。

へなへなと膝から地面に崩れ落ちた美神は、頭を抱えて一言唸るのが限界であった。

「ああもう・・・突っ込みきれないわよ・・・!」

「美神さんを圧倒するとは・・・恐るべし・・・!」

忠夫が一人感心しているが、補助しようとはしていない。
やはり巻き込まれるのは嫌らしい。

「さあ、貴方達！ あの子を捕まえなさいっ！」

「怪我一つさせるな、怪我するな！ 後はしつかり頑張れっ！」

マッドコンビの声も高らかに、5体のガルダが構えを取る。

その先にいるのは、戸惑ったようにガルダを見つめるフェンリル狼。

ガルダ達は、それぞれ一声吼えと、すぐさま全速力で駆け出している。

フェンリルはその姿を見ると、一瞬怯えた様子を見せ——

『ガッ、ガアアッアアッ！』

再び瞳に狂気を宿す。

「フオオオオオッ!!」

5対1、数の上では5倍にあれど、捕獲・保護を目的としている集団と狂気に侵され排除しか考えられない個体。

戦況は、未だ先を見せない。

「もう・・・横島さんつたらっ!!」

「あー、おキ又殿。流石にこれは無理ではないかと・・・」

「駄目ですか・・・あ、そーいえば」

「その紙は何ですか?」

「えへへー、私の親友からの贈り物ですよ?」

牙が打ち合わされ、爪が舞う。

切り裂かれたジャージの欠片が地面に落ち、それを踏みにじるようにして加速する。

前方から正面衝突間違い無しのコースで突っ込んだ影の背後から、左右にばらけて影が走る。

散開した影の軌道に動揺し、一瞬踏みとどまってしまった隙を突いて正面の影が跳ね上がる。

視線を上に向けた瞬間に、その更に背後から真っ直ぐ走ってきた影が、滑り込みながら4本の足の間を擦り抜ける。

慌てて追いかけた視線の向こうには何も無く、上下に揺さぶられた視界では左右の挟撃を追いかけ切れない。

冗談のような速度で迫る2つの影に、片方は牙で、片方は爪で対応する。

しかしそれは只の反射行動、適切からは遙か彼方にある行動。

爪は皮を一枚切り裂き、牙は何も捕らえない。

爪と牙とを皮一枚で見切った2体は、しかし何をするでもなく狼の横を駆け抜ける。

左右に背中を見せながら逃げる影の、どちらを追いかけようかと逡巡したその瞬間に。

「クエエエツ!!」

上空に飛び上がったガルーダが狙い済ましたタイミングで落下し、背中に組み付き拘束を図る。

それを力任せに振りほどきながら、フェンリルから振りほどかれて吹き飛んだガルーダに追撃をかけた。

『ガッ?!』

「クエエツ!!」

「クワアッ!!」

後方に擦り抜けた筈のガルードが、即座に反転しゃがみ込んで地面を這う足払い。僅かにつんのめつたフェンリルの左右から、新たに飛び掛る2つの影。

豪咆一喝、超至近距離での大音声に動きの鈍つた2体の体をすれ違いざまの左右の爪が掠めて過ぎた。

しかしそれで終わらない。

通り過ぎるフェンリルの尻尾を2体は同時に掴んで引き摺られる。

その瞬間、追撃を掛けられようとしていたガルードが再び正面から飛び掛る。

それに向かつて開いた顎が虚しく噛み合わさる音を左に聞きながら、ガルードは転がるように回避、右前足を瞬時に手の平で払う。

右側にバランスを崩したフェンリルは、そのバランスをわざと更に崩しつつ掴まれた尻尾に力を籠める。

一瞬で解き放たれた尾は、掴んでいた2体を弾き飛ばしながら白銀の弧を宙に画いた。

「うわこつち来たあつ?!」

『グルアッ?!』

転がりながら向かう先は、忠夫達とグラーに連れられて2階のテラスから降りてき

た茂流田達の居る場所へ。

慌てふためく美神達を余所に、転がる体を勢い任せに引き起こし、半ば慣性に引き摺られながら楕円を描いて茂流田に向かう。

「こんの馬鹿犬っ！」

『ウオンツ!!』『狼っすー!!』

何故か抗議が2重音声で聞こえるが、無視して美神は神通棍を振り下ろす。

「はやっ?! つち、抜けられたっ！」

「美神さん、今手加減全然してなかったんじゃ・・・」

美神の一撃で抉れた地面を指差す忠夫を蹴飛ばしながら、美神は後方へ抜けたフェンリルを追撃。

「——Amen!」

疾走体勢に入った美神達の目の前で、ピートと唐巢神父が同時に結界構築。

それは即時に効果を發揮し、しかし即時であるが故に準備した物と比べて脆すぎた。

「充分っ！」

『グルアツ!!』

しかし、いかに脆かろうとも結界を破ると言う行動の為にワンアクションを必要としたフェンリルは、僅かな減速を強いられた。

地面を抉つて一瞬で最高速まで乗った忠夫は、その僅かな減速を活用し切る。

左に突然出現したようにさえ見える忠夫に、フェンリルは驚きながらも爪を振る。

それを必死でかわしながら、忠夫は顎を地面に触れされる直前まで頭を下げ、懐に潜り込む。

「いよいよいよっつー！」

『ツ?!』

忠夫がその手で払つたのは、振るわれた爪の反対側。

しかしフェンリルも只では転ばない。

転げる最後の瞬間に、後ろ足に力を籠めて大跳躍。

跳ぶ、と言うよりも前方に落下するようなその体勢のまま、フェンリルは更に進攻する。

「つてー！」

進行方向に展開された戦車群から、幾つもの黒弾が打ち込まれた。

それは正確にフェンリルの鼻面に着弾し、同時に太陽のような光を大音量と共に撒き散らす。

超感覚との相乗効果も相俟つて、それはフェンリルの視界と聴覚を確実に奪い去つていた。

「と、止まらないっ!!」

しかしフェンリルは止まらない。

苦しげに頭を振りながら、ふらつく足に力を籠めて、再び茂流田達に向かって再加速。後方のガルード達は、魔獣同士の争いに巻き込まれないようにこちらから距離を取っていた為まだ追いついていなかった。

美神やピート、唐巢神父では、この短時間には効果的な手段が無い。

自衛ジョー達の戦車群は既に抜かれ、砲塔の反転も、再装填も間に合わない。

「駄目だっ! やめな——!」

「グーラーっ! 馬鹿?!」

「茂流田、グーラーを止めて——」

須狩を背後に庇って茂流田が立ち。

その二人を庇うようにグーラーが立ちはだかる。

フェンリルの瞳には既に理性の色は無く。

あるのは恐怖と助けを求める感情と、何時の間にか、滂沱と零れる、涙。

しかし、鋼をも貫く牙を備えた顎は、フェンリルの思いとは裏腹に。

限界まで、広げられた。

牙が、肉を貫いた。

「——え？」

「——っ?!」

「よ．．．」

「横島あああああああああああつ!!」

恐怖に震え、混乱に震える狼の牙は、父と慕う人でも、母と想う人でも、姉と懐いた鬼でもなく。

鬼を突き飛ばして滑り込んだ、半人狼の肩に、深く、深く突き刺さっている。

フェンリルの直ぐ後方におり、閃光弾を思考と状況と経験で予測し、そしてフェンリルの見せた僅かなふらつき瞬間に追いついた忠夫が、鎖骨とあばらごと貫かれなが

ら、その顎の先にいた。

「泣くなよ」

『グルウ、グル、グルルルウ』

「あんた……」

突き飛ばされたグーラーには見えていた。

割り込んだ忠夫が、その両手で身を守るでなく、攻撃するでなく。

抱きとめるようにその腕を広げた行為が。

茂流田のスーツを真紅に染めながら、食い込んだ牙の痛みに顔を顰める素振りさえなく。

忠夫は、広げた腕で、フェンリルを優しく抱きとめている。

「泣くほど怖かったんかー。そらそうだよなー、親の所に行きたかっただけなんだもん
なあ」

『グルルルル……』

フェンリルの瞳には、既に狂気の色は無い。

ただ、懇願と、戸惑いと涙がある。

その背中を優しくぽんぽんと叩きながら、忠夫はフェンリルに噛み付かれたまま尻餅を付く。

「そうだなあ……。俺はお前の親父じゃねーし、今のお前はあっちに行くのは危ないんだ、な？」

4本の足を地面に降ろしたフェンリルの顎が、倒れこみそうになる忠夫に食い込みながら、その体を支えている。

ゆつくりと、その地面が赤く染まっていく。

背後のグーラー達も、必死の形相でこちらに駆けて来る美神も、忠夫の目には入らない。

「だから、さ」

忠夫の頭を過ぎるのは、母が亡くなったあの時の事。

顔をぐちゃぐちゃにして泣きじゃくる己に、とんでもなく非常識な父親が、それまで表情を無くしていた父が、慌てた様子でゆつくりと大きく抱きしめてくれた時のあの両手。

「なんだっけなあ……。そう、泣いてる子供を、泣かせたままでは駄目だ、とか言うてたっけ」

ぼんぼん。

忠夫の手が、優しくその背中を叩く度。

牙から力が抜けていく。

蓋が取れた事で、傷口からは新たな血が、湯水の如く湧き出していた。

「なんとかすつから、さ」

『——オオオオオオオオオオッ!!』

完全にその牙を抜いた狼は、半人狼に抱かれたまま、世界に響く泣き声を上げた。

「ちよつとだけ、我慢してな？」

『ゴルツ?!』

開いた口の中に、忠夫の手が突っ込まれた。

「・・・よし」

『ゴ、ガア』

ぶちぶち、と、繊維質の何かを引きちぎる音が、驚きに動きを止めた周囲に響く。

苦しげに悶える狼と、その音。

そして、忠夫の会心の声の向こうから。

「……さま、貴様、きさまあああつ!!」

フエンリルの喉の奥に突つ込まれた忠夫の腕の先から。

「あんた——」

「お前は——」

体中から緑色の触手を生やした、蠅の姿をした魔族の、驚愕と怒りに満たされた怒号が木霊した。

「てめえか、^{ベルゼ}クソ蠅野郎」

「横島忠夫、貴様、よくもおおおつ!!」

ぐったりとしたフエンリルに押し掛かれた忠夫の力の入らない手の平から、ベルゼバブは羽を動かし離脱する。

瞬きする程の間に上昇し、その勢いのまま反転。

怒りに突き動かされるまま、フエンリルの体に巢食つて負の感情だけを極限まで増大させていた魔族は、それを見破りあるう事か引きずり出した男に向かつて突撃する。

「折角こいつらの『作品』で殺す、最高の、取つて置ききの喜劇をぶち壊しやがつてえつ!!」

「こうなれば、貴様から殺してやるわあつ!!」

「はっ！ 子供の腹んなかに居座る寄生虫が何ぬかすっ！」
忠夫が吼える。

しかし、その手には何も無い。

如意棒も、霊力も、何も無い。

あるのは、ただの拳のみ。

それも、全力で一回殴れるかどうかの、頼りない拳のみ。

忠夫には、今の忠夫にはそれが限界。

だから――

「横島さんっ!!」

「——おキヌちゃん?!」

2階のテラス、茂流田たちが登場したその場所に、極彩色に輝く札を握り締めたおキヌが居る。

その手には、おキヌを足止めし、おキヌの居る通気口に侵入されるのを防ぐ為につつかい棒にした、斉天大聖の神器があつた。

美神の声に答える暇も無く、おキヌはベルゼバブの真下にいる忠夫に向かって、その手に持った如意棒を、思いつきり、全力でブン投げる。

それは、回転しながらとんでもない速度で飛んで行き——

「さんきゅー、おキヌちゃんっ!!」

「死ねええええ!!!」

「お前がなっ!!」

忠夫の手の平に完璧に収まり、一瞬で半円を描き、そのままの勢いで——。

「なっ?!」

「吹っ飛ばえええっ!!」

ベルゼバブを直撃する。

「がああっ?!」

強かに重い衝撃を叩き込まれたその体は、抵抗する事さえ許されず、地面と平行に

すつ飛んでいく。

その先では。

「・・・フオオオオオツ!!」

ガルーダ達が、怒りに満ちた表情で待ち構えていた。

「ちよ、待て——」

『フオアアツ!!』

すつ飛んできたボールを、ガルーダブルーが蹴り上げる。

真上に打ちあがったそれを、グリーンが更に斜め下に蹴り飛ばす。

振ってきたそれに、ピンクが色々と八つ当たりも含めつつ、強烈なピンタを打ち込ん

で更に左に弾く。

飛んで来たそれに、何処から取り出したのかわからないが、真つ赤なカレーを持った

イエローが、その皿ごとアツパー気味に叩きつける。

最後に、打ち上げられたカレー塗れのベルゼバブを、レッドが全力で蹴り飛ばした。

「がああつ?! 何だ、何故抵抗できんつ?! 何故だああつ?!」

「——何処までも、性根の捻じ曲がった野郎ね」

最後に待ち受けていたのは、怒りを通り越して凄絶な、感情が籠りすぎているが故に

無表情であるにもかかわらず、何処までも冷たい美の女神。

「あんたは——」

「くそ、くそお、くそおおおおおっ?!」

神通棍には、既に許容量ギリギリまで霊力が詰め込まれていた。

現代でも手に入る通常の神通棍でなく。

「ヨーロッパの魔王」ドクター・カオス謹製の神通棍でさえも受け止めきれなくなりそうな程の。

「うおおおおおっ?!」

「——極楽にも行かせない」

膨大な霊力を撒き散らしながら、美神はベルゼバブに向かって走り出す。

そして、すれ違いざまに叩き込まれたその一撃は、火花を通り越して放電現象さえ引き起こしつつ。

「貴方は、此処で、消えなさい」

蠅の王に、断末魔さえも上げさせず、その体を断ち切った。

その光景を見ながら、忠夫は一つ、ずっと気になっていた事の答えを手に入れていた。それは、己を抱きしめた父が、そのまま困った表情で、ただ、ずっと抱きしめたままだった理由。

何か声を掛ける訳でなく、ただ、困った顔で固まっていたその理由。

忠夫の体の上では、中型犬程に縮んだ元フェンリル狼が、涙を流しながら必死で傷を

舐めている。

それを、ゆつくりと抱きしめながら、忠夫は困ったように笑っていた。

「参った・・・」

「横島さんっ!」「横島くんっ!」

こちらに駆けて来る皆の姿を見ながら、忠夫の視界は段々と光を失っていく。

死にはしない、と思った。

それくらい、何となく分かる。

ただ、困った。

『クウーン!』

「——泣いた子供の泣き止ませ方が、わかんねえ」

そこまで呟いて、忠夫の視界は完全に閉ざされた。

次に目覚めたら、何故か後頭部が凄く痛かった。

「痛た・・・いだだだだっ?!」

「あ、起きました?」

「う、あ、えーと? おキヌちゃん? あれ?」

辺りを見回せば、何時か見た気がするし、そして何故か絶対に思い出したくないような気もする状況だった。

金属で囲まれた部屋——に見えるが、全体的に狭いし、何故かそこ此処に棒が突き出していたりロープがぶら下がっていたり固いであろう椅子が無機質に並んでいたりする。

忠夫の記憶は必死で忘却しようとしているが、そこはオカルトGメンのヘリの中であった。

その固い床に、忠夫は毛布を引いただけの床の上に、体中を包帯となんだかよく分からない匂いの薬を塗られて、横たえられていた。

「こゝ、此処は？」

「病院の前ですよ。もうすぐ担架が来ますから、もうちよつと待つててくださいね。いま、美神さんが唐巢神父をピートさんと一緒に担いでお医者さん呼びに行つた所です」

そう告げるおキヌの顔は笑っているが、何故か瞳が笑っていない。

「・・・おキヌちゃん、なんか機嫌悪くない？」

「知りませんっ!!」

ぷくー、と膨れて、おキヌは視線をあさつての方向に逸らしてしまった。

そのまま忠夫は戻つて来た美神の、これまた異様に冷たい視線に曝されながらベッドに直行する事になるのだが。

まあ、その理由は顔を洗う前に鏡を見れば分かるだろう。

端的に言うとはつぺたに綺麗なキスマークが、しかもギリギリ唇から外れていると
言う危険な所にあるのだ。

勿論、誰のとは言わないが。

そして、忠夫は知らない。

それを頂く直前まで、悲壮な表情の美神が呼んだへりに担ぎこまれるその直前まで。美神が、膝枕をしながら、泣きそうな顔で必死に彼の名前を呼び続けていた事を。

そして、「うくん、お腹一杯。でもお代わり」などと緊張感皆無の寝言をほざくいて放り出され、強かに後頭部を打ちつけて睡眠から気絶に移った事を。

「もうっ！ 横島さんったらー！」

「あの一、おキヌさん？」

「それじゃ、僕は色々と準備をしてくるよ」

「ええ。私達は美神が教えてくれた場所まで行ってみるわ」

元の姿に戻ったガルダと、他のガルダに再び体中に纏わり付かれつつ、須狩はへりに乗り込む前に美神が差し出したメモに目を通す。

そこに記されているのはGPSの細かい座標と大まかな地図、そして紹介文。

曰く、「あなたの所の馬鹿なら、多分そうするだろうから、暫く面倒見てやってくれ」と書かれた——人狼の里の場所を示したメモをひらひらと風に泳がせながら、須狩は安堵の溜め息を付いた。

「何とかなったのかしら？」

「なつたんじやない？ 結果オーライだよ」

元研究所のガレージから、一台の軽トラックを運転して来たグーラーが、笑いを含んだ声で答えた。

その荷台には、山と積まれたガルーダ達の餌と、戦車とか。

そして――。

「ウオォンツ!!」

「はいはい、分かった分かった」

元氣一杯に尻尾を振る、人狼の子の姿がある。

「それじゃ、僕は先に行くよ」

「ええ。連絡はいつものやつで、ね」

茂流田は、そう言い残して歩き出す。

その後ろを、重厚な足音を立てながら、巨大な石像がついて行く。

「移動機能付家庭用重機動ゴーレム式金庫」ちなみに特許出願中。武装も特になく、固いだけの、遅い、重い、固いの三拍子揃った金庫である。

それ故、フェンリルを傷付けずに捕獲するのには向いていないため沈黙していたのと

――中身が中身な為、こっそり隠してあったのだったりする。

二人は気付いていないが、一般家庭で使用するにはでか過ぎるし、家の中を歩けば間

違い無く床が抜ける素敵仕様である。

美神達への報酬は、施設内の金庫の中。

暗証番号と開け方は教えてあるので、特に問題はないだろう。

美神も流石に所員が負傷した為、そちらの方を優先したようだ。

「ま、金庫の中に比べればはした金だけど、一応足りるでしょ」

重々しい足音が消えた先には、しっかりとつきり巨大な足跡が続いている。

それを眺めながら、須狩は助手席に乗り込んだ。

「ねえ、グーラー?」

「なんだい?」

「惚れた?」

「さあね?」

唇を触りながら素っ気無く言い放ったグーラーの頬は、しかし言葉を裏切り赤味を増す。

それを微笑ましげに眺めながら、須狩は窓から身を乗り出した。

「——きつと、明日も晴れるわね」

「ウオント!」

下界の騒ぎも知らぬよう、空は何処までも蒼かった。

第貳拾玖話。

軽い足音を立てて、冷たい朝の空気の中を、朝の光の恩恵を堪能しながら歩くのは、大変に気持ちが良い、と陰念は日課の朝の散歩を楽しみながら考える。

周囲の馬鹿侍カルテツトとか時たま暴走する長老とか、アホみたい強いが中身は真性の悪ガキであるコンビとかはうざったくあるものの、この雰囲気は嫌いではないし、それを十分に堪能できる此処での暮らしは——自分でも意外な事に——嫌いではなかった。

とは言え気に入らない事も、ある。

未だに人の姿を取れない事とか、そのせいでがきんちよどもに馬鹿にされた事とか、そのくせに何故かやたらと懐かれてたりする事とか。

元人間とは言え、同じ——と認める事を拒否するのは、今更だ。それこそ弱音以外の何物でもない——狼なのだから、べたべたとくつついたり背中に乗ったりするのは勘弁して欲しい。

むかついて吼えると長老とか4人組み辺りが何処からともなく出現しやがるし。

泣かせた日にやあ庭の木に吊るされるし。

不良大人コンビも良く一緒に吊るされてるが。

「っーか、一時は敵だった奴に子供の遊び相手ををさせる時点で巨大に間違ってるだろ？ なあ?!」

「・・・ああ、そーか。」

「グルウ・・・」

馬鹿に交われれば馬鹿になるのか、それとも類は友を呼ぶなのか。

人狼自体が馬鹿だつて言うのは・・・ぞつとしねえなあ。今、人狼だし。

とは言え昨日は突発的に宴会だったし、ガキどもも夜遅くまでヒヨコやら人形やらと遊んでたからなあ。

この静けさも、もう暫くは続くだろうよ。

美衣姐さんの朝飯が喰えないのは心底残念だが、腹すかせて食う飯も楽しみだし。

「・・・ああ、あの飯だけでも此処に居る価値はあるな。うん。」

狐の小娘も、犬塚のおっさんの所の小娘も、最近は静かだし。

いや、違うな。ありや、何か企んでやがんな。

「ま、どうせおっさんがまた大騒ぎして、相方のおっさんが便乗して、長老が刀と靈波刀ぶん回して終わるだろ。」

「の——は——っ！」

「グル？」

あんだあ？ 朝っぱらからうるせえなあ。

『おつれ達の戦車は世界一ーっ!!』

「かったくて強くて小さいぞー！」

『かったくて強くて小さいぞー!!』

「製作者あーの技術も、世界一いいいっ！ U R Y Y Y Y Y Y!!」

『製作者あーの技術も、世界一いいいっ！ U R Y Y Y Y Y Y!!』

「声がちいさあいつ！ 腹から絞りださんかああっ!!」

『サー、イエツサー!! U U U R Y Y Y Y Y Y Y Y!!』

・・・あー、そう言えば軍人の生き人形だったか。

突込みどころも満載だが、作った時はよっほどストレスでも溜まってたのか？ い

や、確かあれからそんなに時間はたつてねえよなあ。

この短期間でガルダにフェンリル狼のガキに生き人形か、やっぱあいつら確かに腕は良いわ。

しかし、最後に見た時は知的な姉ちゃんだったのになあ、随分とはっちゃけちまって。係わるのも面倒臭えし、あつちに行くか。

「ちよ、ガルダ殿っ?! これは訓練であつて苛めじゃないって何時も言ってるぎゃあ

あああつ?!」

『びびいーつ!!』

「ぶ、部隊司令殿おおつ?! 衛生兵ー! 衛生兵ー!! また首が取れそうだぞおおつ
!」

「び?」

「ああつ?! それは地ら——」

・・・あのサイズであの爆発か。確かに腕は良いんだよなあ、腕は。

ふん、ま、別に良いさ。

今更含むもんもありやしねえし。

あー、ねむ。

「クアアアア・・・ア?」

——視線? 誰だ?

「クウン?」

げ、フェンリルのガキじゃねえか。

折角昨日までのぶっ続け宴会一週間、何とか逃げ切ったのに何やってやがんだ須狩と
人狼のババ——ゴホンツ! お、奥様方は!

・・・いねえよな? 良し、いねえな。

・・・何時もは大人しいつつーか、奥ゆかしい素振りをしときながら、怒らせたら長老より怖いかもしれんからな、あの——ゴホグホウエツホツ！ き、綺麗で清楚で美人な奥様方はああっ!!

びびび、ビビってねーぞ？

「クウーン」

「グルル・・・」

んだあ？ 人狼なんて珍しくもねーだろが。

あれか、俺が人型じゃないから珍しがってんのか？

違うだろ。「フェンリル」ってのはほら、駄目だろ、群に馴染めないのが普通だろうが。

人のこたあ言えねーけど、よ。

だーかーらっ！ そんな興味津々の邪気の無い純粋な目で俺を見るなああっ?!

「グ、グルルツ！ ウオンツ!!」

「キャインツ?! ク、クウーン・・・」

あ、やべ。つい吼えちまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・キューーン」

「グルアアアツ?!」

うおおあああああっ?! 泣くな、泣くんじゃねえええっ?!

「——で、言い残した事はあるでござるか？」

「ガウツ?!」

「全く。女子供を泣かせるとは、まだまだ躰が足りないようですネー」

「飯前に動かさせるんじゃないでござるよ」

「こっちに來んかい!!」

あ、いや、違うんだっ?!

尻尾は、尻尾を引つ張るなああつ?!

あーれー

「あら、美味し」

「ふむ、ワシの茶畑で取れたものじゃが、気に入っていただけただけようで重畳」

長老宅の縁側。

手作りと思われる、飾り気の無いシンプルな、側面に「明鏡止水」とぶつとく書かれた湯飲みを抱えて長老が頷く。

その隣で慣れない正座に少々苦しみながら、須狩は長老の淹れたお茶を頂いていた。こちらはこちらで「成敗」と書かれた湯飲みから立ち昇る香りに、足の痺れを忘れて感嘆の溜め息を漏らしている。

「……ふう。凄いわね、この精神的安定感。次の発明に使えないかしら？ ……あ、あら、すいません。折角のお茶なのに無粋な話を」

「ふおつふおつふおつ。構わんよ、それが体に染み付いた性と言うもの。我らにも充分に憶えがある」

恥ずかしそうに口元を押さえた女性に、片手で急須を持ち上げてお代わりを促す。須狩は、嬉しそうに空になった湯飲みを差し出した。

「どうじゃな、此処は」

「……とても、良い所ですね」

里の彼方此方からは炊事の煙が上がっている。

グーラーは、現在化け猫の美衣と言うえらく艶っぽい女性の所で、彼女の息子とともに皆の食事を作っているところだろう。

何とも、柔らかな空気が辺りを満たしていた。

「ちっ！ 犬飼、そっちに行つたぞ！」

「任せるでござるっ！ そりゃああつ!!」

縁側に座つた長老たちの前を、虫取り網を振り回しながら馬鹿コンビが走つていった。

「ピーツ?!」

「今日の昼飯は焼き鳥でござるー！」

「うわははははっ！ どつかで見たようなヒヨコだが、まあいいかつ!!」

一週間に及ぶ宴会で、きっちりしつかりばっちり説明をした筈であった。

獲物ではない、と。

宴会が始まる前から二人で飲んでいたらしいあの馬鹿二人は、綺麗さっぱり忘れているようであるが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ちよ、長老さん?」

長老の手の中で、「明鏡止水」の文字が虚しく砕け散る。

ガルーダの悲鳴に立ち上がろうとして、隣の破砕音に振り返り、その怨念めいた迫力に思わず仰け反つた須狩は、足の痺れでそれ以上の脱出ができなかった。

「……イツペンノコラス、ヨウシヤナク、サイゲンナク、ミジンモノコサズ」

「長老さんー?!」

「うおあつ?! 犬塚、ちよ、長老がチヨウロウになつてでござるよつ?!」

しかし振り向けど誰もおらず。

犬飼の視界の中では、地面に落ちた網の中でガルーダが、かたかたと漂う妖気に怯えて震えるのみであった。

「い、犬塚ああつ?! 貴様、せめて一声かけてから逃げんかああつ!!」

「カリツクス……!」

ぎやー

人狼の里。人狼が、剣の修羅と戦の鬼と太古の魔狼と鳥神と、妖怪達と僅かな人間が穏やかに住まうその場所は、まあ、いつも通りと言え——いつも通りであった。

「へー、強化合宿つてーのがあるんだ」

「はい、もう今から楽しみで♪」

フェンリルの牙で傷付いた忠夫が運び込まれた病院は、例によって例の如く白井総合病院である。

真っ白な病人服を着た、包帯で体をグルグルに巻かれた忠夫が体を起こしているベッドの横で、霊能業界では名高い六道女学院の制服を着たおキヌが器用に林檎の皮を剥いている。

大騒ぎの末記憶を取り戻し、その際に目覚めた死霊使い——超一流のネクロマンサーとしてのおキヌの資質は、東京での保護者を自認する美神によって更に磨かれる為の地盤を築かれていた。

その一つにして、美神も強く勧めた事。

それが、「六道女学院」への編入であった。

トップである六道家当主に直接交渉し——とは言え、左程の苦労は無い。既に己から光を放ち始めているダイヤの原石は、俗悪な言い方をすれば良い人材だ——霊能力者養成学校へ。

此処最近のゴタゴタもあつてか、漸く通い始めたその学校生活。

おキヌは中々に楽しんでるようだ。

その事を話すおキヌの顔には屈託が無く、終始笑顔だけが浮かんでいる。

おキヌの話によれば、今度の週末に泊りがけの合宿——除霊実習があるとの事。

夏にもあるそうであるが、窓の外は枯葉と天気によつては雪も降る季節。

よつて、今回の合宿は冬季合宿と相成る訳である。

「で、何処に？」

「ええつと、それが……」

綺麗に16分割されて、ピクニックの時に使う紙製のお皿に盛られた林檎に爪楊枝を突き刺す。

それをくるくると回しながら、おキヌの言葉の続きを待った。

何故か少々悪戯っぽいその表情は、一体何を意味する物か。

「人狼の里近くの山、らしいんですよ」

静止した爪楊枝の上から林檎が横に飛び、反射的に手を伸ばす。

途端に背中と胸に走った痛みに硬直し、それでも林檎に手を伸ばす。

しかし、残念ながらそれはポロリと真つ白なシーツの上に僅かな湿り気を残して落ちた。

「美神さんも一緒に行くんですけど・・・あれ、そう言えば横島さんは行かないんですか？」

「・・・3秒ルールだよな」

「聞いてます？」

一瞬の迷いの後、素早くそれを回収、保護。

じつくりと全方向から見回すが、どうやらばつちくはなさそうだ。

流石にあの何よりも患者最優先の医者が勤めている病院ではないと言う事か・・・！

「落ちたものは食べたらアカンが、それは汚いからで。つまり汚くないこれは食べても大丈夫な訳で・・・」

「横島さんってば！」

ぶつぶつと呟きながら、再び爪楊枝に刺した林檎を観察する。

糸屑一つ付いていないそれは、「食べて」と言わんばかりの光沢を放っていた。

そして何より、これは、そう。

「女の子が剥いてくれた林檎……！ これを食べずして俺は己が許せるのか?! 否、断じて否!! ならばそう、腹の一つや二つや三つくらい壊した所で決して後悔はせんっ！」

「……もう」

「ああっ?! そんな後無体なっ!!」

頂きます、と口を開けた所で、林檎はあつさりと取り上げられた。

それを親指と人差し指で摘んで足元の林檎の皮の入ったゴミ箱へ落としたおキヌは、少々頬を膨らませながら爪楊枝を取り出す。

一転、今度はちよつと恥ずかしげに笑いながら。

「えつと、その、はい……」

「……」

爪楊枝で突き刺した林檎を、こちらの口元に差し出してきた。

頬を赤らめ、恥ずかしそうにしながら、おずおずと上目遣いでこちらを見やるおキヌ。その手元には、食べてくださいとばかりに林檎がある。

忠夫は、おもむろに自分の頬を全力で抓り、引きちぎれそうな痛みを感じて慌てて離す。

そのまま周囲をぐるっと観察、カメラの類が無い事を確認する。

改めておキヌを見た。

恥ずかしそうに俯いている。

「神よ……斬るなんていつて御免なさいっ！ 今此処に漢の夢が、理想が形となつて現れている……！ ああ、生きてて良かった!!」

「そ、そんな大げさな……」

「いただきますっ!!」

感動の涙を大量に撒き散らしながら、忠夫は口を限界まで一気に開く。

相変わらずバンダナはしているし、尻尾も病人服の下で分からないが、開放されていればきつと最高速で左右に忙しく動いていただろう。

おキヌは気恥ずかしげに、それでも嬉しそうに、お約束の例の言葉を発した。

「あ、あーん」

「横島君、入るわよー?」

「んあっ?!」

病室のドアが、ノックの音と同時に開く。

颯爽と、半端に礼儀正しい亜麻色の長髪を持った訪問者は現れた。

ある意味、狙つても出来ないであろうタイミングで。

「……………」

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

沈黙。

いや、硬直と言つたほうが正確であろう。

忠夫とおキ又は爪楊枝に刺さつた林檎を中心にドアを向き、片手に白い髭を生やした外人のおつさんが画かれた香ばしい揚げた鳥肉の匂いを放つ箱を持つて固まつた女性に視線をやつたまま硬直している。

朗らか、いや、いつそ楽しげと言つても良いであろう表情でドアを開けた、所員のお見舞いに来た所長は、現在進行形で混乱している。

窓も開いていないのに、一陣の風が吹いた。

「——美神さん、それはっ?!」

「え?」

止まっていた時が動き出す。

忠夫の視線は、ぼつちり美神の持つた箱に向いていた。

そう、ドアを開けた美神でなく、口の前に差し出された林檎でなく、それを持つたおキでなく。

「肉ですかっ?!」

「え、ええ」

「肉っ！ それも病院の味気ない奴じゃなくて、脂の乗った美味しそうな奴ですかあ
つつ?!」

「ま、まあ」

ぎらぎらと、そう、餓えた肉食獣の目を一点に集中させながら、忠夫は鼻をひくつかせている。

病院の食事とは、大抵がコスト、栄養のバランス、カロリーを考えて作られた物である。

だが、だがしかし。

大抵の場合、特に若い成人男性にとっては——はつきり言つて物足りない。味付けは薄味が多く、量も充分ではない事が多い。

そして、忠夫は半人狼である。

一日の摂取量は、実際の所運動量を考えても半端な物ではない。はつきり言つて、忠夫は現在餓えていた。

それも、特に肉系統に。

「ハッハッハッハッハッ．．．!」

「ま、待てっ！ おすわりっ!!」

「ふう、食った食ったあ！」

「そりや良かったわね・・・」

久し振りの、こつてりとしたお肉の味を堪能し終えた忠夫は、漸く落ち着いた表情でベツドに座り直す。

その隣ではおキヌが鞆からティッシュを取り出し、脂で光る忠夫の口元を指差しながらそれを手渡している。

それを見ても無しに見ながら、美神はなんとも言ひ難く認めたくない焦燥感に駆られていたりもする。

「で、怪我の具合はどうなの？」

「あ、それなら大丈夫ですよ。もうすぐ満月ですし、肉も食いましたし」

月は未だ空には居ないが、昇ったその形は半円を少し上回る程度の満ち具合。

後一週間もしないうちに、人狼にとつてそのポテンシャルが最大限まで発揮できる満月まで満ちるだろう。

とは言え、それを待たずに忠夫の体は治りかけている。実にとんでもない、人狼と言う種族の自己治癒能力であろう。

最も、霊力の使えない忠夫が、そこまでの治癒能力を誇つていふと言うのは不思議ではあるのだが――。

「本当に、体だけは丈夫よねー、あんた」

「わっはっはっ！ それが取り柄ですからっ！」

――馬鹿は風邪引かないとかそう言う言葉が浮かぶのは何故だろうか。

ちなみに、ゴキブリ並みの生命力とは良く言うが、精々丸めた新聞紙で叩かれたら終わりのアレに比べれば・・・似たようなものかも知れない。

「心配はしてなかったけど、ね」

「そうそう。横島さん、美神さんったら横島さんが噛まれた時は「わーっ!!!」

「え、何々？」

「なんでも無いわよっ!!」

取りあえず忠夫の後頭部に一撃かまして意識を刈り取り、美神はおキヌを抱えてぼそ

ぼそと。

忠夫が数十秒のホワイトアウトから復帰した時には、何故かニコニコとつても楽しそうなおキヌと、真つ赤な顔の美神が並んで座っていたりした。

「ま、まあ、それなら丁度良いわね」

「へ？」

「2、3日休みあげるから、ここでゆっくりして行きなさい。私は別の仕事があるから視線を合わせぬままに、美神は立ち上がると忠夫に背を向けて歩き出す。

どうにも消せない頬の赤みが、美神の照れ具合を示していた。

「除霊つすか？」

「もう、やっぱり聞いてなかったんですね？ 合宿に美神さん達も来てくれるんですよ」

「そーいう事。ま、色んな所で毎年やってる事だし、そう心配するもんでもないから、大人しく体を優先させなさい」

ひらひらと背後に向けて手を振りながら、美神は病室のドアを潜る。

その背中を追いかけるようにおキヌも立ち上がると、とびつきりの笑顔を忠夫に向けながら。

「お土産楽しみにしてくださいね？」

その言葉を残して出て行った。

しやりしやりと林檎を齧りながら、何とは無しに思い耽る。

おキヌちゃんが楽しそうで良かったとか。

丁度良かったってなんだろうとか。

さつきのお肉は美味かったとか。

おキヌちゃん嫁に来てくれんかなー、とか。

美神さんが嫁に来てくれたら良いのになー、とか。

合宿と言う事は友達とお泊りか、とか。

「・・・友達?」

そう言えば。

おキヌの通う学校は、「六道女学院」と言う名前だった筈。

「女学院・・・」

何だろう。

喉に小骨が引つかかったような、それでいて今すぐにも行動を起こさなければいけないと言う、この否応無く急きたてられるような感じは。

「丁度良い?」

おキヌちゃん。女学院。合宿。冬。人狼の里近くの山。美神さんの言葉。
肉。林檎。狼のプライド。いや肉。じゃなくつて。そう、女学院——

がぼっ！ と、忠夫はシーツを跳ね除け立ち上がる。

そして痛みに悶えて蹲る。

しかし、次の瞬間には、涙目でぐつと堪えて再び不屈の精神で立ち上がる。

「よ、嫁さん候補が山盛りの予感がするっ！」

そのまま神皿に盛られた残りの林檎を咀嚼もせずに飲み下し、おキヌが持つてきてくれた生活用品衣服その他の入った鞆を漁る。

中から何時ものジージャン、ジーパンを引きずり出し、個室と言う事で——隔離室とも言う——一気に脱いで一気に着替える。

荷物の中にパンツとか在ったのは見なかった方向でっ!!

此処まで掛かった時間は約一分。

脱ぎ散らかした着物をキチンと畳んで鞆を背負い、窓から下を覗けばおキヌと美神の乗った車が駐車を抜け出し、ゆっくりとウインカーを点灯させて視界から消えていったところだった。

後部座席には、幾つかの大きな鞆とスーツケース。

と、言う事は。

「直行かつ！ ならばつ！！」

窓枠に足を乗せ、大跳躍。

そのまま近くの電信柱にしがみ付き、落下より速く地面に下がる。

「あ、こらっ！ 君は美神くんところの——」

「退院しまつす！」

「またんかああつ！！」

何時ぞやの医師が背後で叫んでいるが一言だけ残してそのまま加速。

勢いのままカーブを曲がり車道に出る。

手足を使って道路を駆ければ、随分と先に美神達の車が見えた。

目標捕捉、追跡に入る。

なんと言つても狼は狼。追跡と長距離走行はお手の物。

とどのつまりは、美神達の心配も、懸案も余所に、忠夫は道路とか屋根とか電線の上とかを疾走しながら、「六道女学院」の冬季強化合宿に参加する事と相成った訳である。

いや、参加とは言わない。

乱入だ。

とまれかくあれ合宿突入。

だがしかし、そこは天下の六道女学院。

たかが冬季合宿とは言え、並みな物の訳が無く。

「で、なんであんたが居るワケ？」

「それはこっちの台詞よっ！」

「あらあら、今日はあの子連れてきてないの？」

「何であんたが居るのよ?!」

「やあねえ。心配しなくても大丈夫よ、私は女の子には興味無いし」

何故か居る某オカマの凄腕魔装術者とか。

「そうか・・・お前も置いていかれたんか」

「うつつ、酷いんですジャー！ セクハラの虎の汚名がこんな所までワツシをー！」
「・・・一緒に行くか？」

「横島さんー！ ワツシは、ワツシはああつ!!」

「・・・ふ、その話、俺も一口噛ませてもらうぜ」

「うおつ?! お前なんで此処につ?!」

「ふ、目付きが危ないから女子が怖がるって言われてな・・・置いていかれたのさ」

「ああ、やつぱり」

「手前から発殴らせろつ!!」

いい加減オカマの手から逃れたい異性交遊とかにも興味しんしんな某犯罪者顔の魔術者とか。

「先生、折角報酬の分け前が貰えたんですから、養生してくださいね」

「ああ、ピートくんすまないね・・・」

「それは言わない約束ですよ。さて、それじゃちよつと何か狩つて来ます」

「ピートくんつ?! 買つて来るんだよねつ?!」

「? ええ、狩つて来ますよ?」

ちなみに清貧コンビには出番は無い。

殆ど部外者の気もするが。

とは言えこの強化合宿、とんでもない事になるのだけは確定だった。

そして、豪雪吹き荒ぶ雪山に、某妖怪の声が木霊する。

「ふっふっふっ．．．あの犬ころと狐の小娘にやられてから積んだ修行の成果、たつぷりと見せてやるわっ!!」

多分、無理。

第參拾話。

「よし、これで大丈夫だろ」

湿った土がこびり付き、すつかりと冷たくなつてしまつた両の手に息を吹きかける。湿り気を帯びた暖かい吐息は、掌に僅かな熱を残して冬の空氣に溶けて消えていった。

「横島あー！ 置いてくぞーっ！」

「おー！ わりい、今行くー！」

掘り返した地面から跳ねて抜け出し、開いた穴の隣に盛り上げである土を後ろ足で蹴落とすと、たちまちの内に中に赤い布を折り込んだビニール袋は埋まつてしまった。

満足げに頷き、傍らに放り投げてあつたりユックを背負う。

とつとつ先に行つてしまつた同行者達を追つて、忠夫は狼の耳を出したまま、寒風吹き荒ぶ中を駆け出した。

「つたく、何やってんだよ？ 耳出でんぞ」

「横島サン、何時ものバンドナはどうしたんですカイノー？」

「ああ、あれにやあ発信機が仕込んであるからな。埋めてきた」

少し行つた先で不機嫌そうに立つ小柄な男性と、その横で巨体を寒げに震わせている男性が声を掛けてくる。

それに軽く答えを返しながら、忠夫は地面の匂いを嗅ぎ始めた。

「……ん、こつちだ！」

「便利だな、お前」

「流石は人狼といった所ですノー」

びしつと欠片の迷いも無く、忠夫は東の方向を指差した。

此処は人里離れた——と言つてもアスファルトで舗装され、充分に管理がされている道路が通る程度の距離でしかないが——山中の一角、細い道路が前後左右に別れた交差点のど真ん中である。

既に日は落ち始め、いよいよ寒さは厳しくなり始めているがジージャン、ジーパンと軽装の忠夫と、脛まで覆う黒いコートを羽織つた雪之丞は全く寒そうに見えない。

防寒着をびつちりと着込んでいても、そもそも南国——と言うか、ジャングルで育つたタイガーにとっては辛い物があるようだ。

この、珍しい取り合わせが生まれた原因、なんて物は無い。

あえてそれをあげるとすれば、巡り合わせとか運命の悪戯とか言う物くらいしか当てはまらないだろう。

要するに、偶然である。

美神達の車を追跡していた忠夫が、大きなリュックを背負って、それよりも巨大な影を背負って泣いていたタイガーに出会った——行く気満々で準備していたのに、エミは一言も残さず当然のようにとつとバイクで出発していった——のも偶然なら、鬱陶しくなつていい加減拳で黙らそうとした時に何処からとも無く雪之丞が出現し——財布をこれまた一人で行った勘九郎が持つていた為、飯を集れる知り合いを探してうろついていた。すきつ腹を抱えながら——全員が全員とも留守番と言うか置いてけぼりを食らつた事が判明。

迷わず手を組んだ彼らを、一体誰が責める事が出来ようか……！

保護者とか雇い主とか兄弟子とかはいともあつさり地獄の責めを喰らわせるであろうが。

ともかく、嫌な想像を同時に浮かべた3人は、全く同じタイミングで頭を高速で振つた後おもむろに互いの手を固く握り合つたのである。

——嫁っ！ 多分同い年の女の子っ！ 沢山居れば一人くらいはOKかもしれないっ！

——ここであのオカマを亡き者に……ついでに彼女が欲しい。優しく大人しい感じの子が良いぜっ！

——出番……久し振りの出番ですジャー！ 何とか活躍してレギュラー、いやせめて準レギュラーの座をワツシのものにー！

もんもんと涌き上がる黒い何かを背負った3人に、通りすがりの母子連れの娘が指を指して母に何かを問い掛け、母は細い涙を流して彼らを生温かい視線と笑顔で見送った。

そんな心温まるシーンを挟みつつ、彼らは街を駆け抜けた。

忠夫は半人狼の身体能力任せに殆ど音も立てずに疾走し。

雪之丞は魔装術を展開してその横を併走、瞬発力では劣れども、最高速なら互角か上。タイガーはそんな二人にロープで縛られて引き摺られつつ、段差で打ってあちらこちらに打撲の痕を作りながら。

どんどんとぼろぼろになって行くタイガーの断末魔の痙攣を背後に背負いつつ、欲望塗れの3人は、一路、六道女学院へと向かって風を突き破りながら駆けて行った。

「しよっぱなからこれは酷くないですカイノーっ!？」

「文句があるなら自分で走れっ!」

「冗談じゃないわよ、ったく」

苛立たしげに荷物を車の後部座席から引き摺り落としながら、美神は毒づいた。

「あら、だつて貴方達じゃ純粋な徒手空拳での靈的格闘、道具を使わない戦闘は教えられないでしょ？ 向き不向きって奴よ」

「そりゃ分かるしあんたの腕も知つてるけど。でも何であんたがおば様とコネ持つてるわけ？」

その荷物を片手で軽く担ぎ上げた偉丈夫、鎌田勘九郎は美神にウインクしながら立たた人差し指を左右に振る。

「この業界、そんなに広くは無いのよね。ましてや名家、六道家よ？ 私たちの事情を考えたたら大木に寄るのは悪くない選択だし、そもそも受け入れてくれた恩を忘れるほど恩

知らずな渡り鳥でもないわ」

要するに、六道家の下に付く代わりに仕事を紹介してもらう、と言う事である。

六道家は大きな戦力を有する手札を、多少の対価で保持できる。

勘九郎達は六道家に回ってきた仕事を——例外なく厳しい物ばかりだが、雪之丞辺りは望む所。しかも白竜道場出身と言うのは聞こえが悪いので、それ以前の彼らが依頼を受けられる頻度は多くなかった——回してもらえる。

霊能の大家と言う物も、その維持やら発展やらしがらみやらで中々に厳しい物があると言う事だろう。

しかし、まあ、互いに理想的といえれば理想的な環境なのだろう。

少なくとも、それを言った勘九郎の目に鬱屈した物は無い。むしろ満足げな色はつきりと見えている。

「渡り鳥い？ 見た目はカブトムシが良い所でしょうが。まあ、確かに実力つて言う事なら問題は無いでしょうけど」

ふと、それまで半眼であった美神の目が訝しげな色を帯びた。

あたりをきよるきよると見回しつつ、美神のスーツケースを肩に担いだまま小揺るぎもしない勘九郎に問い掛ける。

「あれ？ 雪之丞は？」

「ああ……冥子ちゃんがね……顔が怖いって泣いちゃって」
「OK。把握」

遠くを見る目になった美神と、疲れた表情で胃の辺りを擦る勘九郎は、そのまま暫し無言のままで佇んでいた。

が、左程の間も置かず小雪の混じり始めた冬の風に押されるようにして、旅館の中に入っていった。

「あ、美神さーん！」

「あら、おキ又ちゃん。早かったわね」

「……へ？」

ガラス張りの玄関に手を掛けた美神が彼女を呼ぶ声に振り向けば、そこにはこちらに向かつて手を振りながら駆けて来るおキ又の姿。

合宿の説明会に参加していた筈であるが、どうやら早々に終わったようである。その姿を見て目を丸くしている勘九郎に、詳しい事情を省いて簡単に説明する。

この前見た時には幽霊だった少女が、見た目そのままに生きた肉体を持つている事にかなり驚いた様子であった物の、勘九郎は肩を竦めながらではあるが祝福してくれた。

「良かったわねえ。これで心置きなく行けるじゃない」

「はいっ！」

「何がよ……?」

何処に、では無い辺り美神も何となく意味は掴んでいるようだ。

目付きがうろんげな物になっているし。

「あ、そうだ美神さん! こつち、こつちに來て下さいっ!」

「ちよ、ちよつとおキヌちゃんっ?」

見た目に寄らず強引にずりずりと美神を引き摺って行くおキヌを見送りながら、勘九郎は苦笑いを浮かべて一言。

「……ま、幸せそうなのは何よりよねー」

ドアを開いた勘九郎は、スーツケースを担ぎなおすと鼻歌交じりに暖かい空気に満たされたロビーを歩いていった。

「ほ、本当に美神お姉さまだわ・・・」

「スゲエ・・・」

「で、この人達が今回チームを組む事になった弓かおりさんと一文字魔理さんです」

美神を引っ張ったおキヌが到着した時、その場は妙な緊張感に包まれた。

現在地は別館の大広間、学校指定のジャージに身を包んだ女学院生達が各々の部屋に戻ろうとしていたその時であった

そこに、美神令子、現役の中でも超一流と言われ、またその莫大な収入、美貌、そして華麗と称される除霊スタイルからGSを目指す者達、特に女性GS志望者の中では圧倒的な人気を誇るカリスマの登場である。

先程まで行なわれていた実習直前の説明会も終わった為に、既に割り当てられた部屋に帰った者も少なくは無いが、それでも広間のあちらこちらから飛んでくる憧憬の籠められた視線の数に、美神は何となく気疲れに近いものを感じていた。

「あ、あー。うちのおキヌちゃんがお世話になるわね、よろしく」

「もう、美神さんったら！ そんな言い方しなくても良いじゃないですかー！」

拗ねたような、照れたような顔で美神に詰め寄るおキヌを片手で押し留めながらそう言った美神の前では、紹介された弓と一文字が硬直したまま動きを止めている。

それにちよつと困惑しつつも、握手を求めて手を差し出す美神。

「い、いえっ！ こちらこそよろしくお願ひしますっ！」

その手を数瞬見つめた後、漸く再起動に成功した弓は慌ててジャージで手を擦ると、感極まつたように頬を染めながらその手を握り返した。

それに営業用に近い笑顔を返しながら、美神はその隣で同様に硬直していた一文字にも握手を求める。

こちらは緊張でガチガチになりながらも、ようやつと、と言った感じで握り返してき
た。

「よ、よろしくお願ひしますっ!!」

「そんなに緊張しなくても良いわ。それじゃ、おキヌちゃん、私はお婆様の所に行くから、あんまり——まあ、心配する事も無いわね」

「はいっ」

元氣良く返事を返してきたおキヌに微笑を返しながら、あくまでも優雅に余裕を持って、しかしかなりの早足で美神は去って行った。

どうやら、突き刺さる視線の圧力が、握手を境に増した事に耐え切れなかつたようで

ある。

「氷室さんっ！」

「おキヌちゃんっ！」

「はい？」

暫し感動の面持ちで握手を交わした手を見つめていた二人は、やおらとてつもなく真剣な表情になるとおキヌに詰め寄る。

その迫力に押されながら、おキヌは二人が同時に差し出してきた、美神と握手を交わした手とは反対側の手を不思議そうに眺めている。

「ぜひっ！ お友達にっ！！」

「え？ 良いんですか？」

「勿論っ！！」

「わあっ！ ありがとうございますっ！」

おキヌとしてはこれから実習に向かう上で、チームとして身近になるであろう二人を、実はさりげに心配しているであろう美神に紹介して安心してもらう、ぐらいの気持ちだったのであるが、意外な効果も現れたようである。

こうして、出会ったばかりのおキヌと弓、一文字の3人は、周囲の心底羨ましがな視線の中で、互いにしっかりと友情の握手を交わすことになったのであった。

勿論、二人に打算が無いとは言わない。

むしろ、有名人にお近づきになるチャンスとばかりに行ったのは間違いないであろう。

しかし、である。

切欠は何であろうと、おキヌという娘は端的に言つて「とても良い子」であるので、逆に言つてしまえば切欠さえありさえすれば、以外に何とかなるであろう。

「氷室さん、美神さんとはどんな関係なんですか？」

「あの、美神さんの事務所に住まわせてもらつて、そこでお食事を作つたり除霊に参加したりしてゐるんです。えつと、お姉さんみたいな感じかな？」

「あれが美神令子さんかあ。凄いな、なんつーか、気合が違うよなあ」

「もう、他に言い方はありませんの？」

「あはは・・・まあまあ」

そんなこんなで美神とおキヌの事を話の種にしつつ、3人は連れ立って広間を出て行く。

弓と一文字の間に少々しこりはありそうな物の、おキヌと言う潤滑油を挟む事で、会話は段々と朗らかな物になっていった。

そして、広間には残念そうな表情をした者や、指をくわえている者、何とかしてお近

づきになれないかと試行錯誤するもの達が、暫し沈黙の中で佇んでいた。

それはさて置き、今回の合宿の計画であるが、今回の課題は悪環境の中での除霊である。

雪山で、目的の式神を探してそれを除霊すればノルマクリア。

流石に本物の悪霊は危険と言う事で、今回の目標は悪霊ではなく式神符と言う簡易な術を掛けられた符を式神として構成した物で、六道女学院では実技の際に良く使用される物である。

ある程度の力を持たせる事が可能ではあるものの、今回はそこまで強くない式神を使

用。

更に生徒達には発信機を持たせ、必ず3人組での行動を義務付ける。

そしてスタート地点と山の彼方此方に教員と協力してくれるGS達を配置。

救助用のヘリコプターも3台配備すると言ふ念の入れようである。

とは言え、今回の目標の中には「命懸け」という概念が含まれていない以上、これが当然といえば当然な所だろう。

あくまでも、まだまだヒヨッコも良いところの殻付きの雛鳥達、段階を踏んで除霊に慣れていく事が必要なのであるから。

当然、今回のこの山も嚴重な選択の元に選ばれた場所である。

魑魅魍魎の類が少なく、更に靈的環境がある程度整つていて、意外な程に安全な山である。

実は、人狼の里が近くにある為、たまにそこから鍛錬とか修行とか称して人狼達が出てくるのである。

当然、その際には食糧を自給したりするのであるが、何せ強者揃いの里である。

トチ狂った悪霊なんぞは目じゃないし、ある程度の知恵と知識をもった妖怪ならば、此処には近寄つたりしない。

——仲間を傷付けられた人狼が、どれほど恐ろしいか知っているから。

と、言う訳で。

極一部の地元住民を除いて人間達は知らねども、此処は不思議と安全な山として聳えているのである。

そんなこんなで日も暮れて。

ちなみに実習は次の日、朝から夕方日が沈む前までである。

あくまでも雪山という環境下での除霊作業を体験する事がメインな為、できるだけ他の危険性は排除してある。

それを妥当と見るか甘いと見るかはさて置いて。

「で、どうするんだ、横島?」

「ここまで来て怖気づいたんですカイノー?」

「い、いやしかし・・・」

ちなみにこう言った場所でのお約束と言うか、美神達の泊まっている旅館の名物のひとつが——温泉である。

冬の冷たい空気の中。

ちらちらと降る雪の中。

そんな中で少し熱めの温泉につかるといふのは、中々に贅沢を感じさせてくれる物である。

そして、旅館に程近い森の中、寒さに震えながら鼻水を垂らした馬鹿3人が、暖を取る為の焚き火も焚かず、真つ暗な中で明かりも点けずに縮こまっていた。

この時期、夜の寒さは心底身に凍みると言うのに、だ。

「へっへっへっ、あの向こうには桃源郷があるんだぜ？ 男なら行くべきだろうが」
「しかし、俺は侍であるからして、そのっ」

「横島サンは見たくないんですかノー？ 温泉の中で仄かに桃色に染まった女子の肌を？」

要するに、だ。

馬鹿三人は、今まさに覗きの算段を立てている所である訳だ。

しかしそこは腐つても侍として育てられた忠夫。

無防備な女性の裸を、こっそりと覗くというのは意外な事に抵抗があるようだ。

とは言え――。

「据え膳、だぜ？ ここで行かないきや漢が廢るつてもんだっ！」

「横島サンが行かないなら、ワツシと雪之丞だけで行きますけんノー」

「待った！ 俺も行くー！」

そこはやはり忠夫というか、それとも彼の誇りの為にも若い男の性と云おうか。

どちらにしても、しっかりとらばつちり犯罪な訳であるが、彼はあつさりと言を撤回している訳で。

馬鹿3人は、気配を消しつつ匍匐前進を開始する。

雪の冷たさも何のその。

荒い呼吸とギンギンに血走った目が叫んでいる。

パライソはそこだ、と。

あの高い塀の向こうに、男達の目指す天国がある、と。

目的はともかく、籠りまくった邪念はさて置き、そこに居たのは、確かに一つの目標に向かつて邁進する、誇り高き漢達の姿であった。

いや、際限無く馬鹿でスケベな3人であった。

「・・・OK、進路クリア、発進、どうぞ」

「一番、特攻隊長伊達雪之丞、行くぜっ！」

小さく気合を入れながら、タイガーが土台になって壁に手を付き、その上に忠夫がよじ登る。

タイガーの上で壁に手を付いた忠夫が安定した事を告げ、そして雪之丞がその上に乗った。

慎重に気配を消しながら、雪之丞はゆっくりと頭を持ち上げて行く。

壁の向こうからは、誰かが体を洗う音が聞こえる。

確かに、居る。

呼吸を細く細く絞りながら、慎重に、更に細心の注意を払いながら頭を上げていく雪之丞。

そして、いよいよその視界に温泉の湯気が写り始めた。

ああ、俺達の夢がそこにある——！

「……くつ、湯気で何にも見えねえつ！」

「落ち着け雪之丞！ 風が吹けば湯気は消える筈、この時期なら山からの風は確実に吹く！ 落ち着いてその時を待つんだつ！」

「焦つては駄目ですジャ——！」

互いに励ましあいながら、男達は今、確かに一個の個体として動いていた。

慎重に、気配を殺しながら周囲と同化する。

この程度、この程度なら問題無い……つ！

「まだか……まだなのかつ……！」

「……！ 来るぞ、雪之丞つ！」

忠夫の耳が、何かを感じたように動く。

そして、その言葉通り、次の瞬間。

浴場に満ちた湯気を薙ぎ払うように、冷たい夜風が吹き抜けた。

「……!!」

「……雪之丞、雪之丞?」

「どうしたんですかいノー?」

しかし、忠夫の肩の上に乗った雪之丞は返事を返さない。

まるで石になったかのように、体中の筋肉を硬直させていた。

それを訝しげに思っていた二人の耳に、聞いてはならない言葉が聞こえた。

「あら? 雪之丞じゃない。なんでこんな所に居るの?」

「男湯かいっ?!」

哀れ、雪之丞。

期待を完全に裏切られ、無念の中、憤死っ!!

硬直した雪之丞は、そのままゆっくりと倒れこんだ。

男湯の中に。

「やだ、すっかり冷たくなっちゃって。……しようがないわね、しっかりとたっぷり暖め

てあげましょうか♪」

(雪之丞おおおとおおおっ!!!)

忠夫とタイガーは、聞こえない筈の悲鳴を聞いた気がした。

しかし、彼の犠牲を無駄にはいけないっ！

そうあっさりりと割り切って、忠夫達は涙を2秒で振り切って真なる目標を探し始めたのであった。

「黙祷おー、はい終了。次行くぞー」

「やれやれですノー」

酷い。

「さつきは手近ですまそうとしたからアカンかった。今度はちゃんと確認せんとな」

「しかし、他にそれらしい建物も無いですノー」

再び森の中に戻った二人は、今度こそはと周囲を見回す。

しかし、旅館の周りにそれらしき壁は見当たらない。

暫く彼方此方を見回していた忠夫の耳に、楽しい女性達の声が聞こえたのはそんな時だった。

「——じゃない。——って」

「そ——な。弓さ——ですよ」

「いや——も、お——だって」

忠夫の耳は、その音源を捜して超高速で動き出す。

タイガーに手振りで静かにするように伝えた忠夫の耳は、暫しの後、その声の元を見つけて出していた。

流石、人狼の超感覚。

純血の人狼に比べればかなり劣るとはいえど、いともあっさりとその方向を見つけ出していた。

そして、その声が聞こえた方向は——。

「上かつ!!」

「屋上露天風呂っ?! 難易度高すぎじゃないですかイノー?!」

そう、6階ほどもある旅館の屋上部分から、その声は聞こえていたのだ。

覗きを行なう不埒な輩から乙女の柔肌を守るのに、純粹に高さで對抗する。

難しいと言えば難しいが、逆に言つてしまえばその効果は絶大。

黄色い声が響いてくるそこを口惜しげに眺めるタイガーの横を、忠夫は迷いの無い歩みで通り過ぎる。

「よ、横島サンっ！ まさか——」

「何を迷う必要があるんだタイガー。そこに、女湯がある。それだけで十分だ。そうだろう？」

決意に満ちた表情であつた。

曲がらぬ、折れぬ、日本刀にも似た決意であつた。

それは、最早信念に近い意思であつた——。

壮絶な、スケベ根性であつた。

「行くぞ、タイガー。——準備は良いか？」

「いや、ちよつと吹っ切れすぎだと思ふノー」

「いきなり冷静になんやつ?!」

雰囲気をつち壊したタイガーに突つ込みの手刀を入れながら、忠夫は静かに気配を消して這い進む。

その気配の消しっぷりは、雪之丞のそれさえもあつさりと上回る。何せこちとら野性の獣相手に磨いた技術。

そんじよそこらの直感じゃ、そう簡単には読ませはしない・・・!

「ちっ! 雨樋が無い!」

「他の所から行つたほうがいいんじゃないかノー?」

「いや、今は一分一秒が惜しいっ!」

忠夫は、まともに手がかりさえも無い只の垂直の壁に、おもむろに一本指を立て、力を籠める。

「フツ・・・!」

その指はいともあつさり、静かにコンクリートの壁を貫き、しつかりと忠夫の体を持ち上げ始めた。

「よし、行くぞ」

「・・・え」

背後で硬直したような声が聞こえたが、今はさつき言つたように時間が惜しい。

背後を一顧だにせず、忠夫は反対側の手を更の上に突き刺した。

「ま、待ってくれるとうれしいんジャー!」

「俺が空けた穴を使えばいいだろ?」

タイガー、じつと手を見る。

どう見ても忠夫よりも太い。

壁を見る。

忠夫はまるでイモリか何かのようにすると昇り始めている。

恐る恐る穴に手を掛け、全身の力を籠めて体を持ち上げ始めた。

何とか、行けそうである。

そこまで確認したタイガーは、忠夫の後に続いてゆつくりと昇り始めた――。

「も、もう無理ジャー……」

「馬鹿、此処まで来て諦めるのかっ?！」

あつさりと限界が来た。

しかし、タイガーは頑張った。

現在地は地上4階、ほぼ3分の2を踏破した所である。

そこで、タイガーの指は限界を訴え、ぶるぶると震え始めていた。

「頑張れタイガーっ!　そこに、そこに俺達の夢があるんだぞっ!!」

「横島サン……」

見下ろしたタイガーの目には、無念等一欠けらも写りこんではいない。

ただ、全てを託すような笑顔を浮かべたタイガーは。

ゆつくりと、その手を壁から離れさせた。

「後は……頼みますジャ―！」

「タイガーあつ―！」

伸ばした忠夫の手は届かず、タイガーは夜の闇に消えていく。

それを呆然と見つめた忠夫は、暫しの後、再び力を籠めて壁を登り始めた。

「ま、あの体格じゃ無理だよな―」

かなり下のほうで、巨大な何かが分厚い雪に人型の穴を穿った。あの音ならば打ち身が精々であろうと判断し、ほんの数瞬だけ黙祷を捧げた忠夫は、次の瞬間には鼻息も荒く登り出す。

少し、また少しと体を引き上げていく。

そして、数々の仲間の無念を糧に、彼は今、天国の扉に手を掛けた。

「……む、浴場に人影なし。脱衣室に気配有り。現状固定のまま待機」

どうやら、先程の声の主達は既に上がった後のものである。

しかし、忠夫の視界に写る曇り硝子ドアの向こうに、一人のものと思しき影が映りこんでいた。

ゆつくりと息を凝らしながら、忠夫の目はそこを凝視する。
冷たい風も、酷使した指の痛みもなんのその。

「・・・来たっ!」

そして、その瞬間が到来する。

思えば、長く辛い時間であった。

そして、辛く、険しい道程であった。

数々の犠牲を乗り越え、忠夫は今、ミッションを成功させようとしていた。

ついに――。

「あら、結構良さそうな温泉じゃない」

「美神さ――」

「えっ?!」

ドアを開けて出てきたのは、バスタオルを片手で押え、もう片手にお猪口と徳利の乗ったお盆を持った美神令子、その人であった。

その、意外と言えば意外であり、しかしむしろ何故考えに入れていなかったのか、と言う驚きの中、忠夫の口から思わず声が洩れた。

そして、それは風の悪戯か。

たまたまと言つても良いほどの、奇跡的な偶然と言つても良いほどの、そんな確率の中。

その声は、美神令子の耳に届いた。

「なんで横島く——んきやあつ?!」

「ぶほおつ?!」

「こ、この馬鹿つたれえええつ!!」

「美神さん、見える、見えますつてええつ?!」

「え、あ、ひやうつ?!」

一時の驚きから立ち直った美神が、その手に持ったお盆を投げつけ、それを顔面に喰らった忠夫が仰け反りながら必死で壁にしがみ付く。

そして、その視界に写ったのは、一瞬で耳まで真っ赤に染まった美神が、怒りのままに駆け出そうとした姿。

次の瞬間には、その体を覆い隠すにはあまりにも頼りない布が捲れ上がり、かなり危うい所までが忠夫の視界に写り込む。

忠夫の言葉でそれに気が付いた美神は、全身を桃色に染めながら、慌てて両手で体を覆うバスタオルを掴みなおして蹲る。

その、美神にしてはあまりにも初心な反応は、忠夫の心に容赦無くクリティカルヒツ

トっ!!

「よよよ、横島アアアッ!!」

「や、美神さん超可愛いつすよ?」

「こ、殺すっ! ぶっ殺すっ!!」

これには思わず忠夫もサムズアップ。

しかし美神は激昂する。

当然と言えば当然だが。

最早耳とはいわず全身を真っ赤に染めた美神の殺気が、浴場を満たして忠夫に向かって収束し始めた。

事此処にいたって漸く現状を把握した忠夫は、慌てて両手を壁から離して即離脱。

「待てえええっ!!」

「御免なさいいいいっ!!」

「許すかああっ!!」

美神の叫びを受けながら、地上六階の高さからフリーフォール。

途中で壁を蹴って減速し、そのまま膝のバネを使って雪の上に軟着陸。

途中で雪の中から体を起こしたタイガーを拾い上げ、魔装術を展開しながら男湯から脱出してきた雪之丞と合流。

「逃げるぞっ！」

「横島、お前?!」

「鼻血ですカイノー?! 自分ひとりだけずるいですジャー!!」

鼻を押さえた手の横から真つ赤な血をぼたぼたと垂らしながら、鼻の伸びきつた忠夫と魔装術を纏った雪之丞、雪を払いながらのタイガーは、そのまま山中へと消えていった。

「おば様っ!!」

「何々、令子ちゃん々?」

「合宿の目標変更っ! 馬鹿犬をとつ捕まえるわっ!!」

「・・・良いけど、その前にくその真つ赤なお顔はどうしたのく？ 風邪かしらく？」
「ち、違いますっ!!」

そして、合宿は擬似除霊作業から山狩りへと変貌を遂げたのであった。

第參拾壹話。

「だから止めようって言ったじゃねえか！」

「フザケンなっ！ 手前一人だけ美味しい思いしたくせに何言つてやがる！ こちとら危うく下まで脱がされる所だったんだぞっ?！」

「それに横島サンだつて間違い無く乗り気だったノー！」

深々と降り始めた雪を蹴り立てながら、取りあえず犯行現場からダツシユで離れる忠夫達。

互いに責任を擦り付け合いながらも、ひたすらに動きつづける足は止まらない。

「大体なんでよりにもよつて美神の旦那を覗くんだっ!!」

「.....」

「横島サン、鼻血鼻血」

タイガーが渡してくれたポケットティッシュを鼻に丸めて詰め込みながら、忠夫の鼻は、そう、伸びきっていた。ピローン、と。

体格に見合わず細々とした事に気の回るタイガーの行為も、後から後から溢れ出す赤い液体を止める事は適わない。

その横面に一発拳を入れながら、雪之丞は苛立ち紛れに加速した。

「つてえなっ！ 折角の記憶が飛んだらどーすんだっ!!」

「その前に自分の首が飛ばんように祈っとけっ！」

「・・・まさに最悪の状況ですジャー」

ぼつり、と呟いたタイガーの目には、それほどの高さを持たないまでもしっかりと白い冠を被った山の連なりが映し出されている。

おそらく、全く目的地の事を考えずに只走っている前方の二人を眺めつつ、タイガーは真つ白な溜め息を腹の底から吐き出した。

「・・・はい、これでオツケーなワケ。貸し一つ、しっかりと覚えとくワケ。おーっほっ

ほっほっほっほっ！

「こゝこの根性曲がり……！」

禍々しい雰囲気を撒き散らしている魔法陣を背後に控え、頬に手の甲を当てた所謂タカビー笑いを甲高く、しかもご機嫌絶好調と言った様子で上げるエミの目の前には心底口惜しげに歯軋りする美神の姿がある。

かなりの規模を誇る旅館の大広間である此処には、現在エミと美神、そして六道親子と彼女達を中心に円状に座った六道女学院の生徒達の姿がある。

エミも美神もともに業界では最高峰と謳われる人物達である。

そんな彼女達の、と言うよりも片方が放っている強烈な威圧に十数名かは真つ青な顔を見せているが、一部の者たちは真剣な表情でメモを取ったりエミの術を僅かたりとも見逃すまいと目を皿のようにしている。

この辺り、流石は名門と言った所か。

「二人ともく仲が良いのね。冥子、ちよつと寂しいわ」
「どう言う目で見たらそう見えるのかしらあああああ？」

廃棄された炭鉱の底から聞こえてくるような美神の唸り声に対し、「こゝゆゝ目」と笑顔でのたまわりながら自分の目を指し示す冥子。

その横でニコニコと笑いながら、姦しい女性達を見ている六道家当主も、何故か微笑

ましげなオーラを発している。

「あく、そう言えばエミさんく、どんなのを掛けたのかしらく？」

「ほーっほっほっほっ．．．ごほん。大した物じゃないワケ。この旅館を中心に設定した領域から出ようとすると——」

「痛いっ?! 腹が捻じ切れるように痛いいいっ?!」

「何だ何だ? お前、なんか拾って食っただろ?」

「え、えーと．．．も、もしやつ?!」

「心当たりがあるのもどーかと思えますがノー」

「おキヌちゃんに剥いてもらった林檎．．．は、捨てられちゃったしなあ」
「二辺死ぬと良いぞ(ですノー)二」

「つて言うワケ」

「有効時間は？ この規模の陣からするとそんなに長いもんじゃないでしょ？」

美神が指した魔法陣は、直径1M程度の、儀式に使う物としては簡易に過ぎるものがある。

中に描かれた文字や図形も少なく、何時ぞやのアルテミス召喚に使われた物とは比べる事すら躊躇われる。

しかし、美神の不満げな声を聞いたエミは、それこそ自信に満ちた表情で答えた。

「ざっと丸1日。擬似的に地脈に繋いであるから維持の為の霊力は要らない上に、合宿のターゲットとして使うのならそれくらいで問題無いワケ」

その言葉を聞いた生徒達は目を丸くする。

たったこれだけの時間で、しかも触媒があるとは言え「この程度の」魔法陣と儀式で、半人狼という霊能力持ちに対し有効で、尚且つ地脈に接続し維持の労力も時間的な要素も十分に余裕を持たせる仕事。

感嘆の声を漏らす生徒達に向かって、エミは妖艶に唇を歪めて見せた。

「——私を舐められちゃ困るワケ。それでも、黒魔術に関してなら国内で私の上に出る奴は居ないワケ」

「ま、黒魔術「だけ」は確かにそうよね」

だけ、を強調して、あさつての方向を見上げながら呟いた美神にエミの視線が突き刺

さる。

それを口笛など吹きつつあつきり無視し、美神は懐から取り出した機械を弄り始めた。

「令子ちゃん、それ、何〜？」

「受信機」

言葉少なに答えた美神が、スイッチを入れて光の灯った画面に見入る。

しかし、期待したような反応は得られなかったようで、忌々しげに舌打ち一つを残してダイヤルを捻り始めた。

「あの馬鹿、バンドナ外してたわね……。でも、甘い」

暫しの調整の後、受信機は確かに一つの光点を映し出した。

それを射殺さんばかりの視線で眺めつつ、美神は辺りに座る生徒達に向かって離し始めた。

「今回の合宿のターゲットは、内の所員、馬鹿犬、横島忠夫！ 頭に妙な飾りを付けてるから直ぐに分かるわ。見つけたら問答無用で攻撃していいけど、必ずチームごと、そしてチームとチームで連携する事。開始時刻は明日の朝、制限時間は午後4時まで。後で受信機とあなた達用の発信機を渡すから取りに来て頂戴」

「あの、質問ですけど……」

おずおずと手を上げたのは、それまで円の中心に程近い所から美神達を見ていたジャージに身を包んだおキヌ、弓、一文字のグループの内、弓であった。

「何かしら？」

「その、横島さんはどう言う方なのですか？ 所員と言うからにはそれなりの——霊能を持つてらつしやるんですよね？」

その言葉に、美神は少し褒めるような色を乗せた笑顔を返し、次に渋い顔になった。褒めるような顔になったのは、美神が忠夫の情報を求められなかった場合には話さないつもりであった事がある。

情報は、時として己の生命を左右する。

事前に得られる情報は貴重な物であり、故に誰も聞かなかつた場合には少々お小言でも、と思つていただけに、美神の顔にも安堵に似た表情が浮かんだのだ。

そして、渋面になったのは極単純な理由である。

忠夫のスペックを思い出したのだ。

「……取りあえず、足は速いわね。後、避けるだけならとんでもないわ」

「そ、それだけですか？ 避けるのが上手くて足が速いだけで、お姉さ——美神さんの事務所の所員を？」

「……横島さんは、凄いですから」

小さな声で、しかし誇らしげな色を籠めたおキヌの呟きが零れる。

それを聞きとめたのは、隣でおキヌと同様に座り込んでいる一文字だけであつたが、彼女もまた続けられた美神の言葉に耳を傾ける。

「……まあ、あいつならよつほどの相手でもない限り必ず生き残るわね」

「この仕事、死んだらそこまでなワケ。認めたくは無いいけど、令子レベルの所で生き残っている以上、生半可なもんじやないワケ」

至極詰まらなさそうに呟いたエミの言葉に、生徒達は考え込む。

多くの生徒達の視線が、楽しげに微笑んでいるおキヌに集中するが、それを遮るようにして美神の言葉が放たれた。

「一つだけ言える事は……あいつは馬鹿だから、絶対に攻撃はしてこないと思うわ。でも、もし不埒な事を言われたら——」

美神の親指が、天井を指して即反転。

「——仕留めなさい」

「美神さーんっ?!」

「駄目よ、おキヌちゃん。これは、あいつに自分のした事を分からせる為なの」

ぎつ、と首を狩るジェスチャーと共に放たれたあまりと言えばあまりな言葉に、おキヌは慌てて立ち上がって抗議する。

しかし、美神はそんなおキヌに、悟りきったような笑顔を見せ、あつさり抗議を却下。

わたわたと手を振るおキヌの肩を優しく叩きながら、美神の目は絶対零度の怒りが籠って輝いていた。

「アホくさ。私はもう寝るワケ」

「ねえ、令子ちゃん？」

「何、冥子？」

呆れの多分に籠った目でその光景を眺めていたエミが、生徒達の円を擦り抜けながら出口に向かう。

それを半目で見送っていた美神の横に、エミと入れ替わるようにして、冥子が唇に人差し指を当てながら、珍しくも悩んでいるような顔で問い掛けてきた。

「何で、そんなに怒ってるの？」

その一言で、辺りの雰囲気が一変した。

先ず美神の頬が一瞬で朱に染まり、それを真近で見たおキヌに不思議そうな色が浮かんだ。

円の中ほどまで来ていたエミが、そう言えば、と呟きながら振り向き、美神の顔を見て不審気な色を浮かべ、そして術の触媒にされていた物を見て、とてつもなく嬉しそう

澄ました顔でのたまうエミの胸倉を掴もうにも、するりするりと生徒達の間を擦り抜けるエミを、激昂した美神は捕捉仕切れない。

神通棍さえ取り出しながらエミを追い掛け回す美神を、生徒達は呆然と眺め、六道親子は微笑ましそうに眺めるだけで止め様とはしていない。

誰もが、目の光景に動きを止めていたその時、美神とエミを除いて只一人動いた少女は、おもむろに息を荒げる美神の背後に回りこむと――。

「んきやあつ?!」

「・・・おつきー」

「おキヌちゃんっ?!」

わしっ、と後ろから腕を回して美神の胸を掴み上げた。

慌てて胸を庇いながら振り向いた美神の目の前で、感嘆の声を上げたおキヌは暫く手の平わきわきと動かし、それに見入りながら自分の世界に入っていた。

暫し、沈黙の漂う中、ただおキヌが小さな声でぶつぶつと呟く声が聞こえる。

そして、おもむろに視点を自分の胸に移し、何度か手と胸の間を視線が彷徨う。

更に沈黙が続く、美神が不審なおキヌの行動に声を掛けようとしたその瞬間。

「――美神さんっ!!」

「にや、にやにっ?!」

微妙に嘖んでいる美神を至極真剣な目で見つめつつ、おキヌは決心したように問い掛けた。

「お、大きい方が好きなんでしようかつ?!」

「主語が無いっ?! 誤解を招くような事を言わないでっ!!」

「令子、やっぱりあんた・・・」

「だから誤解するなああつ?!」

「令子ちゃん、あのね、おばさん、人の事についてはとやかく言わないけど。それって非生産的だと思うの」

「違あああああああうっ!!」

「? えへへ、良く分かんないけど、私は令子ちゃん好き」

「冥子おとおおおっ!!!」

生徒達はドン引きし、エミは納得したような表情で腕を組んで頷き、六道母は頬に手を当てて只微笑み、六道娘はほんわかとした笑顔で美神にくっつく。

混沌とした状況の中、真剣な表情で答えを待っておキヌに突っ込むべきか否かで美神は一杯一杯だった。

「あら？ 騒がしいと思ったら、皆此処に居たのね」

「あ、鎌田さん」

「勘九郎でいいわよ、私もおキヌちゃん、って呼ぶから」

「からり、と乾いた音を立てて大広間の襖が開く。

そこから顔を覗かせたのは、ほかほかと湯気を立てている勘九郎。

元々体格もよく、引き締まった体をしている為、浴衣の合わせ目から覗く胸板がとつてもせくしー。

カオスの真つ只中にありながら、一人それに反応した起爆剤にして自覚無き天然娘は、とても朗らかな笑顔で勘九郎との交流を深めていたりする。

「そうそう、さつきあなたの所の横島君見たわよ？」

「ええ、知つてます。もう、なんで私の時に、つてきやー！ 私つたらー！」

自分の言葉に照れて頬を染めているおキヌに、なんだかとても微笑まじげな表情を見せながら。

勘九郎は、更に続けて言葉を発す。

「後、うちの雪之丞と、えーつと、あの、私より大きな、タイガーって呼ばれてた子も居たわね。好みじゃないけど」

「タイガあああつ?!」

それまで混乱する美神を眺めていたエミが、その一言に反応し、勘九郎の元に駆け寄る。

そのごつつさにやや圧倒されながらも、エミは勘九郎の温泉パワーで満足げな顔を見上げた。

「ちよつと、どう言う事なワケ？」

「さあ？ 私も雪之丞が飛び出した後しか見てないから、よく分からないけど・・・」ズルイ」とか言つてたわね、確か」

「あの、あたしも見たよ、多分」

エミと勘九郎、おキヌの間に恐る恐る声を掛けて来たのは一文字魔理。

彼女の言葉によれば、お風呂上りに廊下の窓を開けて涼んでいたら、突然上から巨大

な物が降つて来て、その時にタイガーと言う単語を聞いたと言う。

「虎？」と思つて下を覗き込もうとした瞬間、更にな上からけたたましい音とともに人影が落下。

驚いて改めて下を覗いた所、先に落ちたと思しき巨大な人影と、後から落ちたと思しき人影が、二人連れ添つて駆け出して行つたと言う。

「……あんの馬鹿虎ああつ！」

「おーっほっほっほっ！ 語るに落ちたわね、小笠原エミっ！」

「あ、あんたはその状況をどうかにかしてからほぎくワケっ!!」

「何ですつてえっ！ つーか、冥子、離れなさいっ!!」

一体いつから話を聞いていたのやら、美神が高笑いとともに現れた。

片手に冥子をぶら下げながら。

視界の端に移る、羨ましそうに人差し指を咥えているその母をしつかりと無視し、娘を引き剥がそうとしている美神を余所に、エミは魔法陣に向かつて歩き出す。

「こうなつたら、タイガーには特に強めに呪を掛けといた方が良くも知れないわね……」

「その必要は無いわよ。こら、冥子、いい加減に離して頂戴っ！」

エミの歩みが、美神の一言で止まる。

疑問を視線に乗せて問えば、美神からは一言で答えが返った。

「多分、あの馬鹿達の事だから足の引つ張り合いになつてゐるわ。ほら、冥子っ！」

「ふえ、令子ちゃん、私のことが嫌いになつちやつたんだ」

——空気が、凍つた。

「ふえ、ふええええ」

「ちがつ！ 冥子、落ち着いてっ!!」

「令子、何とかしなさいっ?! こんな所で死にたく無いワケっ?!」

「え、何? どうかしたの?」

「冥子さん、ほら、飴ですよー!」

必死で泣き出そうとしている冥子を止めに掛かる三人。

勘九郎は、どうやら未だその爆弾の被害に在つた事が無いらしく——冥子が雪之丞ほどではないにしても、あんまり近寄らなかつた。ごく最近、漸く良い人だとは気がついたらしい——まわりの状況に困惑気味であるが誰も構つちやいられない。

そして、冥子を止めてもらおうとその母を捜した美神とエミの目に写つたのは。

「あらあら、やつぱり仲良しね、それじゃ、生徒の皆さんは、明日に備えてそ

ろそろお部屋に戻りましょうね。はい、こっちですよ。」

「おば様、止めてえええつ!!!」

生徒達を先導しながら大広間を出て行く六道家当主、六道冥華の姿。

どうやら娘が大事にされているように見えたのがご満悦らしく、なんとも華やかな笑顔で手を振りながら、足取りも軽くあつさりとその姿を襖の向こうに消してしまった。

何とか冥子をぐずる程度に止めるまでにかかった時間が30分。

疲れきった状態から復帰する事のできなかつた3人は、そのまま疲れた体を引き摺りながら割り当てられた部屋に戻っていった。

ちなみにそのまま寝てしまった冥子は勘九郎が背負つて運んでいった。

本人曰く、

「全く興味が無くつて力持ち。私以上に適任が居るかしら?」

との事。

もうなんだか全部どうでも良くなつていた為、あつさりとその方向で決定したらしい。

「寒い・・・腹減つた・・・足が冷たい・・・」

「ぐだぐだ言うな・・・こっちまで疲れてきたじゃねえか」

「とは言つても、冬の山、しかも夜は厳しすぎですジャー」

がたがたと震えながら、本降りになりつつある雪の中を、膝まで冷たい白の中に埋めながら歩く三人。

忠夫の耳は完全に伏せられており、その唇は全員洩れなく紫色になっている。

「な、何でワツシがこんな目に……」

「……お前ら、俺を見捨てたら、エミさんと勘九郎にチクるからな」

「大体、お前が呪いになんて掛かるのがわりいんだろぅが」

ちなみに呪いだと判明したのは、一番それを多く見る機会に恵まれているタイガーのおかげである。

一瞬互いの視線が交錯するが、直ぐに前を向いて歩き出す。

この極限状況で体力を消耗するのを避けようとする、それはそんな本能が訴える奇妙な状況であつた。

それでも、ここで眠つてはヤバイ。

そう思いながら、必死で足を動かす三人。

暖を取れないまでも、せめて雪を凌げる場所を。

宿には帰れない、温泉に入りたい、暖かいご飯を食べたい。

そんな、切実な願いを思い浮かべる3人の前に、小さな光が写る。

「おい、二人とも。俺はもうヤバイかもしれん。とうとう幻覚まで見え始めた」

「あー？ そんなもん俺も見えてるよ。タイガー、お前は？」

「ワツシもですジャー。気の効いた幻覚——幻覚？」

3人の目に、光が灯った。

誰一人言葉を話す事無く、只ひたすらに加速していく。

雪を蹴立て、虎の幻覚を纏い、魔装術を展開し、狼耳を立てて雪に足が沈む前に次の足を踏み出しながら、3人は目標めがけてまっしぐら。

接近すれば良く分かる。

それは、カマクラであった。

雪で作り上げられた、小さな小屋ほどもある、エスキモーでも住んでるんじゃないかというそのサイズは異様に怪しくはあったものの、その中からは煮える音が聞こえ、そして仄かに味噌の混じった香りが届く。

暖を求め、食事を求めて駆け込んだ3人の目の前には。

「助かったああつ!!!」

「……ん？ 忠夫、なんで此処に居るでござるか？」

「親父いいいいいつ?!」

何故か犬飼ポチが居た。

この糞寒い中、何時もの侍装束の上に一枚だけ「I LOVE・沙☆耶」と書かれた手作りの半纏を着込み、くつくつと音を立てる鍋の前で胡座を搔いて一人で手酌をしている犬飼ポチ。

「犬飼ー、追加の肉狩つて来たぞー。．．あれ、忠夫じゃないか」

「犬塚のおっさんもかいつ?!」

カマクラの中に駆け込んで、鍋の底に残っていた肉を争って食べる雪之丞とタイガーを余所に硬直していた忠夫の背後から、これまた聞きなれた声が聞こえ、振り向いた忠夫の目に写ったのは、手に鳥と兎を持った犬塚父。

こちらも何時ももの服の上に、分厚い熊の毛皮を一枚引つ掛けただけの格好である。

「いや、チョウウロウが出てな？」

「またかい」

一氣に狭くなったカマクラの中に、乾いた笑い声が木霊した。

「ふう、ごつそさん」

「お、もう良いのか。すっかり食べんともたんでござるぞう？」

満腹の表情で腹を叩く忠夫に、苦笑いしながらポチが話し掛ける。

その手に持った「昇り籠」と書かれた一升瓶の中身は既に空に近い。

それを横から手を出して中身を罅割れた茶碗に移しつつ、犬塚父も笑いかけた。

「いや、結構食べたぞ、こやつ等」

その言葉通り、実際の所3人でかなりの量の鍋を食べている。

タイガーと雪之丞もまったりとした表情でくつろいでおり、途中で勧められた酒の効果もあつてかうとうとと船を漕いでいる始末である。

「所で、さつきも聞いたがなんでお前が此処に居るでござるか？」

「……あー、色々あつて」

言えない。

一応これでも侍である。しかも、目の前に居るのは女性を大事にすることにかけては定評のありまくる人狼の二人である。

まかり間違つても「女湯を覗いちゃつて、現在逃亡中です」とは口が裂けても言えない。

と、言う事で、話を誤魔化す事にした。

「お、親父達こそなんで此処に居るんだよ。何時もならとつと吊るされて終わりじゃねえか」

「まあ、今回は別の用事が会つてでござるな。長老に掴まる訳にはいかないのでござるよ」
「これだ。まあ読んでみれば分かる」

犬塚父から一升瓶を取り返した父はともかく、犬塚父が差し出してきた手紙には、かなり重要な事が表に書かれていた。

「……果たし状？」

「里の結界の外で、美衣殿が見つけたらしいんでござるが……問題は、それじゃなくてでござるな」

ひっくり返して裏を見れば、其処にあるのは。

「狐と、人狼の娘へ・・・シロとタマモかっ?!」

「そう言う事。ちよつとチヨウロウから逃げてる時に、たまたま見つけてな。シロは隠していたつもりらしいが、何、屋根裏は我らの得意な逃走経路の一つ。まだまだ甘いわ」
何が甘いのか。そもそも甘いとかそう言う問題ではない。

娘に宛てられた手紙をあつさり見る親も親なら、屋根裏に隠すシロもシロであるが、取りあえず半眼になった忠夫から手紙を受け取りつつ、二人の人狼の里の兵たちは、二人揃って精悍な笑みを浮かべた。

「もしもの時の為に控えるのは、親の役目だろう? それに——」

「子供の喧嘩に親が出るのもどうか、とは言ったんでござるがなあ。まあ、しかし——」
人狼の里の住人に、ひいては人狼の里に喧嘩を売って来るほどの、自信。

ならば、それほどの強敵ならば。

『楽しいめそうじゃないか』

そう言って、二人の修羅は、小さく弾けた真つ赤な炭の光を受けながら、酷く楽しげに——微笑んだ。

第參拾貳話。

—— 一部の人々にとっては大混乱の一夜が明けて ——

「頼んだわよ、おキヌちゃん」

「良いですけど・・・全力で、って言うのがアレですね」

「丁度良いじゃない。練習だと思って気楽に、ね？」

旅館に添えられるように円を組んだ六道女学院生達の視線が集中する。彼女達を囲むように円を組んだ六道女学院生達の視線が集中する。

おキヌが美神と懇意にしている事は既に彼女達の中にも広まりきっており、尚且つ既にGS美神除霊事務所にて助手として働いており、更には一流のネクロマンサーであると言う、彼女。

良くも悪くも値踏みするような視線が集まる中で、何時もの巫女服の上から暖かそうなダウンの上着を着たおキヌは、取り出した笛にそつと唇を寄せた。

『ジュリリリリリリリ——』

おキヌが指示されたのは、情報収集と逃げ足と回避能力にとんでもなく特化している馬鹿を捕まえる為、こちら側の戦力補強として霊達を召喚する事、である。

それなりの靈力持ちなら何とか耐えられているようではあるが、未だ發展途上の学生達には中々にキツツイものがあるようで。

「い、一文字さん！ 一文字さーん！」

「ああ、弓……なんかバスが来たよ。大勢だから特別運行？ 黄色い泉でキイズミ行き？ ははは、何処だよそれ？ 何？ 六文？ あたしは一文字だつての」

「ちゃんと勉強しなさいっ!! それは乗っちゃ駄目ですわああっ!!」

何処となく透けかかりながら昇つて行くこうとする一文字の胸倉を掴んで引き摺り落とし、その真下で白目を剥いて気絶しているようにも見える、もう一人の一文字の開いた口に押し込みながら弓が叫ぶ。

似たような光景が彼方此方で目撃されているが、皆一様に必死である事だけは共通していた。

「あらあら、皆大変々」

「お母様、どうしましょうか？」

「そ〜ね〜」

少し離れた場所では間違い無く現状で一番の靈力持ち達が、のほほんと困っていたりもするが。

ともかく、おキヌの方もそろそろ呼吸が苦しくなってきたようであり。

『ピリリリリッ——』『ぷはっ!!』

真つ赤な顔のおキヌが笛から口を離し、荒い呼吸で酸素を貪るように求めているその足元で、美神は体を引き起こしながら額に井桁。

しかし、その美神の怒りが爆発する前に。

「すうううううう…」

「おき——」

『ピュリリリリリリリリリリリリリリリ——!』

僅かに呼吸を整えたおキヌが、美神が制止する暇も無く、大きく息を吸って盛大に吹き込んだ。

再び直撃を喰らって蹲る美神と、一端引つ込んだのにまた学院生達の口とか鼻とかから洩れ始める白いナニカ。

そんなあつと言う間に生まれた生死の狭間の空間で。

おキヌは、そろそろぼんやりと白くなり始めた意識を最初から閉じていた臉に更に力を籠める事で無視しつつ、いい加減に誰か来てくれないかな、と思っていた。

何せ、殆ど全く手応えが無いのである。

万単位の悪霊が集まった霊団を浄化したおキヌの力、本人は自覚が無くとも、はつきり言つて無茶苦茶のレベルに達している。

死津喪比女を相手にする際に流れ込んだ地脈のエネルギーが同調したのか、それともあたりの山々に木霊する笛の音の相乗効果もあったせいかな。

ともかく、出力、変換効率、ともに文句無しの筈である。

しかし未だに霊達が集まってくる様子が無い。いや、確かにこちらに接近してくる存在はあるのだが、その数が少な過ぎるほどに僅かなのだ。

「まだまだだなあ・・・」と、少々へこみつつも、僅かなりとは言えこちらに近づいてきた存在にお礼と協力を、と。

おキヌは笛を吹きながら、閉じていた目をゆっくりと開いていった。

『ジュリリリリリリ——プビュ』

吹いた。いや、笛は吹いていたのだが、なんと言うか、目の前に現れた者が余りにも予想をブツ千切ってくれたので。

「ごほっ！ ごほっごほっ！ み、美神さんー！」

「・・・なあにいかあしいらああっ！」

「な、何で怒ってるんですかー?!」

「周りを見なさい周りをつ?!」

何故か蹲っていた美神が、よろよろと立ち上がりながらも凄く怒った表情で詰め寄ってきた。

その言葉に辺りを見回せば、死屍累々と言う言葉がピッタリくるような惨状が広がっている。

皆倒れ伏し、辛うじて意識のある者達が昏倒した者を揺さぶって復活させようとしていたり、その後ろで式神を全部出してしまった冥子が、その母に「制御が甘い」と怒られていたり、更に後ろの旅館の窓から、寝巻き姿のエミが殺気の籠った視線で体乗り出して何かを探していたり。

「えつと・・・風邪ですか？ あんまり雪国の夜に油断しちや駄目ですよ？」

「おキヌちゃんおキヌちゃんおキヌちゃん・・・！」

のほほんとそんな注意事項を述べる、雪国での生活経験をお持ちのおキヌであったが、背後の美神がその肩を血涙混じりに握り締めた事で何となく嫌な予感を感じていた。

「み、美神さん？」

「ちようつと、お話ししましょうかあああああ？」

「えうつ?!」

そのままおキヌの襟を掴んで引き摺り始めた、幾つもの血管を浮かべた美神の肩を、軽く叩く勇者が居た。

「何・・・よ、お?!」

『何か用があるのではあるまいか？』

『御呼びに応え、参上仕つたでござる』

そして、美神の誤算、その二。

振り向いた美神の視界には、ごつつい戦国時代風の鎧を着込んだ二人の武者。

肩の上には人魂が浮かんでおり、その雰囲気と薄っすらと向こう側が透けて見えることから彼らが幽霊であることは分かる。

だが、問題は。

『我ら、人狼族の地侍なり。——して、何用でござるか？』

彼らの頭の上にある、ピンと立った二つの狼耳と、その鎧の後ろに垂らされている柔らかな尻尾であった。

ひよう、と音を立てて雪が舞う。

視界を、気紛れに吹いた風に掬われて舞った粉雪は、太陽の光を反射して尚、その輝きを一欠けらたりとて失わせない。

白い世界、と言われる程に、確かにその光景は只白く、そして美しかった。だが、故に。

その世界は、容易く命を奪う世界。

冷たく、白く、冷厳な。

残酷なまでの純白。

降り積もるが故の、喪失。

——とは言え。

「誰でござるか？」

「さあ？ あんたの知り合いじゃないの？」

「うーむ・・・あんな歳の割に露出度の高いのは知らんでござるなあ」

「ま、ちよつと無理よね」

「きーさーまーらあああつ!!」

子供は風の子元気の子。

真剣な表情で、尚且つ聞こえるように言っているのではないかと言わんばかりの声で、シロとタママは時代錯誤な事に果たし状を出してきた雪女の前にいた。

「んんっ! ごほんっ! え・・・と——ほーっほっほっほっ! よく来たな、小娘どもっ!!」

「芸が無い、捻りが無い、意外性が無い。5点」

「いや、それはちと厳しくは無いでござるか? 何事にも形式という物はあるでござるし、いくら使い古されたとは言ってもそれを踏まえる事も大事でござるよ」

接触直後にいきなり失礼千番な事をほざかれた上に、折角気を改めて口上を述べようとした所でその口上さえもズンバラリ。

切れ味の良いタママの辛い評点もさることながら、フォローと見せかけて追撃かますシロも中々の猛者である。

「大体何よ、指定した場所が東の山、杉林の近く? 何処よそれ。付くのにえらく時間くつつちゃったじゃない」

「うっ?!」

「もつと他人に分かりやすい目印は無かつたんでござるか? 呼び出した方がそういう事には気をつけないと駄目でござるよ」

「うううっ?!」

シロとタマモの言葉のナイフが突き刺さる。

こう、グサグサツと。

よろよろと後退した雪女は、ちよつと涙ぐみながらも抗弁する。

「う、うるさいわっ! そんな事より——」

「うっわ、聞いた、シロ? そんな事だつて」

「信じられん神経でござるな……! 大人気無いのもここまで至ると驚きが来るとは、拙者、初めて知つたでござる……!」

「う、うううっ」

容赦が無い。実に容赦が無い。

まさに口撃であらう。

一言話せばタマモがサクツと急所を突き、その隙間を埋めるようにシロが塩を塗りこめる。

未だ何らアクションを起こしていないのに、雪女のハートはぐさぐさである。

ちよつと落ち込んで膝を抱えてしまった雪女に、シロとタマモは二人目線を合わせて何かを確認しあう。

「ああ、友達居ないんだ（でござるか）」

「うわーん！」

見事な止めであつた。

きらきらと輝く雪を蹴立てながら、雪女は真昼だと言うのに夕日に向かつて駆けていく。

それをニヤリと悪者笑いで見送る二人の目に、その赤い夕日は確かに見えていた。

「しかし、意外ね・・・あんたがこんな方法で納得するなんて思わなかつたわ」

「拙者の身に憶えが無いでござるからなあ・・・流石にこちらが悪いかも、と思うと迷いがでるでござる。ならば、初めから抜かぬのも刀法でござるよ」

「・・・ま、いーけど。どうせ、あの手のには挑発位しか効果が無いでしょうし」

シロの言葉に薄つすらと、本人さえも分からない程度の笑みを浮かべながら、不思議そうにこちらを見てくる瞳を見返す。

少し前よりも確かに成長した彼女は、こちらよりも僅かに高い背と腰まで流れるような銀の長髪を持っていた。

これまた同様に、同じくらい成長したが僅かに負けている凹凸を再確認してちよつと

腹が立ったものの、今はまだ良しと割り切る事にする。

いつか見てろ、とは口に出さないが。

「しかし、あーやって逃げてったでござるよ?」

「馬鹿ね、あの手のしつこい女は——」

遠くを見るタマモの目。何処までも冷静で、しかし同時に震えるような魅力を籠めた、その視線。

そして、その先に、間欠泉が吹き上がるように、逆落としの滝のように上に向かって炸裂する巨大な雪の柱が出現した。

「——この、性悪いぢめつこどもめ——」

「きちんと処理しないと、何時までもこつちを恨むわよ」

「……やれやれ、面倒でござるなあ」

その雪柱の上から、まだちよつと涙目のままの雪女が吼え猛る。

苦笑いとともにそれを眺めつつ、シロは右手に靈波刀を、タマモは体の周囲に幾つも狐火を作り出し、二人同時に突っかけていった。

「・・・忠夫、お前ちよつと来い」

「何で?! 犬塚のおっさん、俺は関係無いって!!」

「いや、お前のせいだと思うでござるよ。悪い影響ばかり与える愚息ですまん、犬塚」
シロとタマモが突っかけた、その後方の雪化粧をした茂みの中。

しつかり風下に陣取った人狼3人と雪之丞、タイガーは、シロタマの口撃に色んな意味で慄いていた。

近くの木にしがみ付いて無実を訴える忠夫の襟首を掴んで引つ張りつつ、ヤル気的笑顔を浮かべた犬塚父が額に青筋浮かべて殺気を放ち、犬飼ポチが笑顔で忠夫の指を一本一本剥していく。

それを横目に見ながら、雪之丞とタイガーは何故自分達まで巻き込まれたのか、理不尽に思いながらも雪女のはだけた胸に視線を集中させていた。

「ま、ママに似ている……！」

「し、刺激的ジャー……」

鼻の下をビローンと伸ばしながら、シロとタマモの攻撃を吹雪や隆起させた雪の壁で必死に回避している雪女の、動くたびにポロリと行きそうな上下左右に激しく揺れる胸に合わせて頭を動かすその様は、兄弟子とか雇い主が見たら即シバキが入りそうなくらいには情けない物であった。

「お、決まりそうでごさるな」

「いや、果たし状を里に出すほどの相手だ。切り札くらいは持っているだろ」

楽しげに忠夫を弄っていたコンビが、それでも常に視界の端に捕らえていた状況が変わった事に気付く。

シロが強引とも思えるほどに踏み込み、攻め立てれば、後方からタマモがその隙を埋めるように狐火を打ち込み、幻術で翻弄する。

靈波刀を凌げば左右から包み込むように狐火が殺到し、それを雪の壁で何とか防ぎきったと思つた瞬間に、その壁ごと靈波刀で切り倒されそうになって慌てて後方に飛び退る。

完全に係が取れている事に驚いている忠夫の頭を小突きながら、親父達は誇らしげに笑んでいた。

「娘達もしつかりと成長しているでござる。お前は、ちゃんとやっているんでござるな？」

「シロに追い越されちゃ、兄としては面目が立たんだらう？」

「ほっとけ」

少し不貞腐れたように呟いた忠夫は、しかし嬉しそうな表情を隠しもしない。

妹分達の成長を、あるいは隣に立つ二人よりも喜んでいるのは彼なのかも知れない。

「くっ！ やはり、本気を出さなければならぬようねー」

「なら、最初から出すのが当然でござらうがっ!!」

「はんっ！ 所詮は3流って事かしらっ!!」

口惜しげに叫びながら、一際巨大な壁を作り出し飛び退る雪女に、前方の視界を塞ぐ壁を溶かし、貫きながらも距離を取る二人。

警戒を忘れず、雪女だけでなく、周囲の状況にも気を配る。

後方の警戒をタマモが担当し、前方をシロがカバーする。

長老の依頼によつて老犬マローウに叩き込まれた連係は、二人の新たな力といつても過言ではない。

故に、狼と狐の少女は負ける気がしていない。

ただ、二人とも、どうせパートナーとして戦うのなら、と同じ顔を思い浮かべている

だけである。

「出でよ、我が下僕たち!!」

朗々と声高く宣言した雪女の声に呼応するように、その周囲の雪が吹き上がる。

その雪は一瞬で雪女の身長よりも高く跳ね上がり、次の瞬間にはその傍らに収束し、奇妙な形を作り出す。

それは、高さ3M、幅1M程の、細部まで作りこまれた巨大な白い鎧武者。

「ほーっほっほっほっ! 靈峰の万年雪を核に、わたしの妖力と雪で作りに出したゴーレム達よっ!」

心底勝ち誇ったように笑う雪女は、しかし前方の少女達が絶望とか不安の表情を湛えない事に懸念を抱く。

いや、浮かべているあの表情は——同情とか、哀れみとか言わないだろうか。

「その歳で人形遊び・・・ほんっーとに友達居ないのね」

「拙者、本当に悪い事言ったかもしれないでござる・・・すまぬ」

「どやかましいっ!!」

緊張感皆無であった。

とは言え、雪女の従えるゴーレムの数、およそ50。

その実力は定かではないが、50近くを相手にするには、2人というのは少々きつい。

しかも、雪女もここぞとばかりに後方から攻撃してくるだろう。前衛を持った遠距離攻撃能力者ほど厄介な者はない。

シロの突撃とタマモの援護射撃で、まともに集中さえ出来なかつた先程とは全く逆の展開さえありうる。

軽口を叩きながらも、二人の手にはじつとりと嫌な汗が流れている。

だが、しかし。

此処には、かなり恣意的なモノがあるとは言え、しつかりばつちり彼らが居る。

「ちよつと待ったアアツ!!」

「何っ?!」

シロとタマモにとつては、久し振りにさえ思えるその声とともに、彼女達の後方から3つの影が飛び出した。

3つは一瞬にしてゴーレムたちの懐に飛び込み、次の瞬間にはその胴体に巨大な穴を穿ち、あるいは頭から股間までを一刀両断し、あるいは四肢を切り落とし動きを止める。「又ルい。期待外れでござるな」

「余計なお世話かな、こりやあ」

「・・・とんでもねえな、おっさんら」

担いだ刀の背で肩を叩きながら、残念そうな表情を浮かべる親父達。

その横で、魔装術を纏った雪之丞が、驚いたような、しかし闘志に溢れた笑みを顔を覆った布のような仮面の下に作り出している。

その光景に唾然としている雪女の視界に、茂みを掻き分けて更に2つの影が進み出る。

片方は巨大な体格を持っており、その体格に見合った力感を少々感じさせる男であり、もう片方はえらく得意げな笑みを浮かべた、狼の耳を持った男であった。

「何者っ?!」

「ふっふっふっ・・・呼ばれて名のるもおこがましいが、美人のおねーさんの質問とあらば答えぬ理由などないので力一杯名のりますっ! 嫁に来ないかー!」

「全然全く名のってないっ?!」

「しかもワツシ達は何にもしてないんですがノー」

忠夫は全力ハイジャンプ。

高度良し、勢い良し、しかも相手は突っ込みとタイミングをずらされて動揺しているので大チャンス。

——これが、口八丁ってやつさ・・・!

そんな壮大に間違った馬鹿は、雪女に向かって状況も忘れて飛び掛る。

例によって例の如く求婚しないと思っていたら、どうやらタイミングでも計っていた

らしい。

しかし、その軌道に割り込む者が、ここにはしつかり居るワケで。

「兄上ーっ!!」

「どわーっ?!」

ジャンプ一番、空中で抱きつくようにキャッチ。

そのまま慣性を無理矢理制御しながら真下に落下するように、足場もない筈なのに勢いだけで姿勢を入れ替える。

団子のように一塊になって落下した忠夫達は、盛大に雪煙を巻き上げる。

呆然と眺める雪女の視線の先に、呆れた様にそちらを眺める人狼二人の影がある。

「馬鹿だなあ」

「馬鹿でござるな」

「馬鹿だ」

「馬鹿ですノー」

散々言われた忠生はと言えば、落下前に入れ替えられた体勢のおかげで逃げる事すら出来ずにシロの下。

はちきれそうな喜びの笑顔を浮かべたシロに、全力で舐めまわされていた。

「兄上ー! 兄上でござるー!」

「イヤー！　こんな皆が見てる場所じゃイヤー！」

「成る程、ならば直ぐに誰も居ない場所にいくでござるよ！」

「そー言う意味じゃねええつ!!」

いきなり手足をホールドしてこちらの動きを止め、掛かるシロの視線に、なんとなく獲物の気持ちに分かりそうになりつつ必死で脱出を試みる忠夫。

色んなところになんだか柔らかいものが当たって思考が少々危ない方向に走りそうになるが、段々と犬塚父の方から叩きつけられている視線がやばい物になりつつあるので大変である。

助けの視線を他の連中に送るも、雪之丞とタイガーは半目で見えてくるだけであるし、ポチに至っては腹を抱えて笑っている始末である。

ならば、とどこかに居る筈のもう一人の少女に視線を飛ばせば。

「ちよつと、シロっ！」

「何でござるか、女狐」

「半分こつて約束でしょう？」

「タマモー！　お前もかー!!」

「あら、手段と目的を間違えないだけよ？」

頭の方から掛かった声には、何故かやたらと色気があった。

「お前らあッ！ わたしを無視するなあッ！！」

雪女の怒声も当然であろう。

怒りに肩を震わせて、こちらを鼻息も荒く睨み付ける美女。

シロタマも全く意識を向けていないし、雪之丞や親父達は既に興味を失ったように少し離れた場所で座り込んで、タイガーはそちらにのしのしと歩いていつている真つ最中である。

取りあえず、いたくご立腹のようなのでそちらが先、と判断し、全く協力する様子のない男連中に恨みがましい目線を向けながら、少女達を宥めすかして立ち上がる忠夫。

「兄上、どうするつもりでござるか？」

「あれくらい私達で何とかなるわよ？」

「ま、見てろつて。親父達にもちよつとせつつかれたからなー、たまにはイイ所見せんと、さ」

飄々とした態度でシロとタマモの頭を軽く二、三度撫でるように叩き、一人で前に進み出る。

警戒したように手を振り上げた雪女に向かって、忠夫は挑発するように言葉を投げた。

「おねーさん、俺から言わせて貰えばまだまだつすねー」

「・・・何がよ」

「まず第一に！」

びしっ！ とゴーレムたちを指差す忠夫。

「弱いっ！ そして、その造形には信念がないっ!!」

「な、何ですってっ!!」

激昂した表情で、忠夫に向かって叫ぶ雪女。

しかし、ゴーレム達は良く出来ているとシロタマにさえ思えるものであるし、忠夫の言う信念とやらの見当もつかない。

後方で首を捻る二人を余所に、忠夫の挑発は続いていく。

「信念がないから弱いっ！ これは、強い！ と思つて作つてないからそうなる！」

「くっ！」

「・・・ホントですカイノー」

「さあな。でも、あつちにはや心当たりがあるみたいだぞ？」

雪之丞の言葉通り、雪女は怯んだ様子を見せている。

畳み掛けるように忠夫の言葉が投げかけられた。

「強いと言えば、怪獣に某光の巨人に鋼の英雄っ！ それくらい作つてから出直したほうがいいんじゃないっすか？ あ、勿論出来なけりや引いてもいいっすよー」

へらへらと、しかし緊張で耳を立てながらのたまう忠夫の言葉に、一生懸命考えたデザインなのに弱いと一刀両断された雪女は、とつても腹が立った。

「な、何よ……やってやろうじゃないのよ!!」

「やや、しまったー! あいてにゆうりなじようほうをあたえてしまったー」

「はんつ! 自分で自分の首を締めたこと、あの世で後悔するが良いわつ!」

思いつきり棒読みなのが、雪女は嬉々として妖力を高め始める。

そして、高らかに差し上げた指を、気合の声とともに弾いた。

その音に伝えて動き始める鎧武者姿の雪のゴーレム達。

互いに形を崩しつつ、雪女の後方で合体しながら変形開始。

驚く事に、殆ど間も置く事無く、その姿を現したのは――。

「これならどうかしら? ふふふ……強そうでしょう? 前に潰れた村で見た、ぼすたー

とやらに書かれていたモノよつ!」

それは、巨大な人であった。

雪で出来ているが故に、真っ白であるが故に色はないが、あればそれは銀と赤の色をまとっていたであろう。

それは、子供達のヒーロー、正義の味方。そう、光の巨人――

「いきなさいつ! ええと、確か、ウルト――」

『ちえすとおっ!!!』

いきなり、巨大ゴーレムが真つ二つになった。

「……へ？」

「ふ、作るだけならまだしも、名前を呼ぶとは……色んな所から怒られる前に、（ギャグ補正で）証拠隠滅されるに決まってるじゃないっすか」

「だ、騙したわねっ?!」

「はて? 何の事やら〜」

「汚っ! 兄上それは酷いでござるっ!」

「……あつちの方が、口じゃ上ね」

雪崩れのように崩れ落ちる大量の雪。

どうやら核ごと「切り倒された」らしく、再生する様子もない。

実に恐るべきは、著○権保○法であった……!

『はて、何故か知らんが取りあえず斬ってしまったでござる』

『うむ。しかし、達成感があふれるでござるな』

「あ、何処のどなたか知りませんが、ご協力ありがとうございます」

崩れ落ちる雪の上空に、人魂を纏わりつかせた侍姿の二つの影。

そちらに軽く頭を下げつつ、見知らぬ雪だるまから譲ってもらった万年物の永久結晶

を失った事で半泣きになっている雪女に向かった忠夫に――。

『いやいや、礼には及ば――対象発見!!』』

キュピーン、と。

ヤバげな視線が向けられた。

第參拾參話。

振りぬいた抜き手が空気を割き、僅かに纏った湯気が飛行機雲のように一瞬だけ棚引いて冷たさに負けるようにして消えていく。

「ふっー」

地面から直角に振り上げられた素足が頭を超えて跳ね上がり、制止する暇も無く振り下ろされる。

足の裏で叩かれた雪が衝撃音と共に舞い踊り、日の光を反射して舞い落ちる。

その蹴り足を踏み込みの前動作とし、勢いのままに進む体を最低限のバランス調整に意識を割きながら左右の連撃連撃連撃。

引いては突き、突いては引くその動作に微塵も揺るぎの気配は無い。

まるで目の前に相手がいるかのようにフェイントを織り交ぜながら、包囲を敷くようにじりじりと打点を収束させていく。

そして、無呼吸で怒濤の如く突き出されつづけたその拳を、最後の締めとばかりに上半身の捻りと体重移動だけでなく、爪先から拳の先端まで連動させて右の一撃。

ピン、と伸ばされた拳と肩の直線。それをなぞるような、太い眉の下の目線は、厳し

く、だが同時に何処か不満げでもある。

「……ふん」

溜め息のように言葉を吐き出した上半身裸、胴着のズボンだけを着た男性——鎌田勘九郎は、素足のまま、僅かに踏み荒らされた雪を今度こそはしっかりと足跡を付けながら、地面にビニールシートを敷いて、その上に几帳面に畳まれている胴着とタオル、魔法瓶の所に歩いていく。

火照った筋肉の上を流れ落ちる汗を奇麗に洗濯されたタオルで拭き落としつつ、いそいそと替えの胴着を着込んで魔法瓶を開ける。

何処か緩んだ勘九郎の持った魔法瓶の蓋に、暖かそうな湯気を上げる琥珀色の液体が流し込まれた。

「……ふう、さすがは六道家のメイドさん、良い葉知ってるわね」

出掛けに己の主人を起こしに行つた、唯一この合宿に付いて来ている六道家当主の懐刀に渡された紅茶の味と匂いに頬が際限無く緩んでいくのを感じつつ、のっそりとシートの上に座り込んだ。

「全く、弟弟子の癖に兄弟子を追い越そう何て100年速いのよ」

そう呟きながら、頭をぐしぐしと擦って汗を拭き落としていく。

いくら鍛えているとは言え、山の寒さは厳しい物であるし、何より闘う者として体調

管理は大前提である。不利な条件は少ないに越した事は無い。

早朝から動かしつづけた体の熱が、ゆつくりと辺りの冷たさに吸い込まれるようにして消えていくのを感じながら、勘九郎は紅茶のお代わりを注いだ。

「ま、壁は高いに越した事は無いし、越せないで挫折するなら其処までだしねー。最も、雪之丞がそんなに諦めの良い奴ならもっと楽に生きていけるんでしようけど」

何時も何時もあつさりと返り討ちに会っていた筈なのに、それでも全く諦める事無く稽古を挑んでくる弟分の、地面に這いつくばって口惜しげに怒り狂っている表情が目に見え浮かぶ。

当分負けてやるつもりなど無いが、白龍道場を抜けてからの彼の成長は、確かに目覚ましいものがある。

それまでの力押しメインの戦いと、本能にでも刷り込まれているんじゃないかと言う直感的な戦術観だけでなく、不意打ち、奇襲に奇策も織り交ぜつつある弟子は、此処最近だけでもひやりとさせられた事が数回はある。

最も、それに数十倍しただけは実にあつさりと勘九郎に地面に這わされているのではあるが。

「やれやれ・・・意地を張るのも楽じゃないわよね」

飲み込んだ紅茶で暖まった息を吐き出しながら、その白さが日の光に溶けていくのを

何とはなしに眺めてみる。

そのまま余韻を楽しみつつも、折角弟弟子が居ない環境で自分の修行が出来るのだから、と未練を切りながら重い腰を、引き剥がすようにシートから浮かせた。

ふと、その動きが止まる。

浮かせた腰をゆつくりといつでも飛び退ける体勢にまで動かしながら、重心を低く降ろしていく。

勘九郎は、前方の茂みを睨みつけた。

「——どなたかしら?」

低い声で問い掛けた勘九郎の視線の先に、茂みを擦り抜けるようにして現れたのは――

『おはようございます』

『おはようございます』

「あ、ああ。お、おはようございます——ってなんでよっ!」

人魂を傍らに浮かべ、深々とお辞儀をしながら朝の挨拶をしてくる、淑やかな雰囲気纏った長い黒髪の、蒼い着物を着た女性の幽霊と、銀色の長髪にメッシュでも入っているかのように一房だけ赤い髪を混じらせた、白い着物を着た変な言葉遣いの女性の幽霊であった。

忠夫は、ゆつくりと歩み寄る。

その先に居るのは、蹲つて肩を震わせている雪女。

苦勞の末に手に入れた、靈峰の万年雪から作り出したゴーレムの核をいともあつさり切り捨てられて、大シヨツク絶賛發信中の雪妖である。

「……よ」

「ど、どーも！ 綺麗なおねーさん、俺、犬——ゴツホン！ 横島忠夫！ 嫁に来ないかー?!」

「・・・でよ」

「あ、あれ？」

反応の無さに戸惑う忠夫。

今までの例に寄れば、大抵こう言うときには突っ込みとか拳とか神通棍とかキツツイ言葉とか冷たい目とかいらん邪魔とかが入ってきたのに、それが無い。

求婚に対する反応の無さで無く、突っ込みとか邪魔とかが無い事に戸惑いを覚える辺りが何ともはや。

既に、彼の中では突っ込み待ちが根付き始めているようでは、ある。

「兄上ええええ」

「忠夫おおお」

途端に、背筋にびくつと悪寒が走った。何となく落ち着いたので、視線でそちらを眺めれば、シロタマが凄いい目で睨んでらっしゃったそうなの。

二人の背後でなにやらごうごうめらめらと燃え盛っているようであるが、所詮妹分の可愛い独占欲だろう、と無理矢理自分を納得させる。

気を取り直して雪女に振り向く忠夫。

とある拾った雑誌にこう言うことが書いてあったのだ。「傷心の女性に優しくすれば、意外にころつといつちやうぞ？」と。

なにやら間違つた方向に思考が逸れているのは間違いないだろう。しかし、そういった小細工までも使うようになったのは、成長と言うべきか墮落と言うべきか。

ともあれ――

「あの一、おねーさん？」

「・・・つぎけるなああつ!!」

「おひよーつ?!」

問題なのは、相手が傷心状態にあるのかそれともブチ切れ5秒前なのか位は見分けてからでないかと危険だ、と言う事だろうか。

「大変だつたのよ! 遠かつたのよ! ええそうですよ歩きましたよ歩いたわよ悪いなああつ!!」

「ぐげつ! 首、チヨークチヨーク!!」

「霊峰だかなんだか知らないけどやたら歩きにくいし道は狭いし何よあれは道じやなくて崖じやない壁からほんのちよつとだけ出っ張つた物を道何て言うんじゃないわよおまけに変な首無しのでつかいの追っかけまわされるしつ!」

「知らないつすよおおお・・・グエ」

「しまいには崖から落ちたわよ痛かつたわよお陰で泣いたわよええそうですよこの歳になつてガン泣きしたわよ悪かつたわね良い歳しててええつ!!」

「返事が無い、只の屍一步手前のようだ。」

的確な雪女の頸動脈攻めで、忠夫はあつさり白目を剥いてあつちの世界へレッツ
ゴー。

自分の言葉で即リーチ一発ツモな逆切れ雪女さんは、気絶した忠夫の頬を叩いて話を聞くとばかりにぶん回す。

その光景を引きながら見ていた周りの者たちは、どんどんとボロボロになりながら信号機みたいに顔色を変えていく忠夫よりも、自分達に被害がきませんよーに、と祈るの
で精一杯だ。

余裕があつても割り込みたくは無い光景であろうが。

だがしかし。

ちよつと腰が引けつつも、助けにいかねばなるまいと。

「あ、あのー、ちよつと良いでござるか?」

「あによつ?!」

ぎらん、と雪女の瞳が光つたようにシロには見えたという。

「兄上を返して欲しいんでござるが・・・」

「・・・へえ。兄上、ねえ?」

にたり。

そう言う表現がびつたり、ちよつと黒い笑みである。

真つ白なお肌が怒りで少々赤く染まり、瞳は未だに潤んだまま。

忠夫を振り回した際に乱れた服は、更に危険値を突破しつつあり、タイガーと雪之丞は食い入るようにそれを見つめて鼻を押さええていたりする。

タマモはそれを冷たさ半分、呆れ半分の目で眺めている。

「……ふっふっふ。おーっほっほっほっ！ 駄あ目！」

「なっ！」

雪女の手がゆらりと動き、気絶した忠夫の体を撫でまわすように動き——次の瞬間には、彼女の腕の中に首から下を氷漬けにされた忠夫の姿。

そして、驚愕と怒りの表情を浮かべるシロに向かつて、雪女はちらり、舌を伸ばして見せた。

「形勢逆転——かしら？」

「人狼の幽霊……しかも、その戦装束でござるか。一体何百年をお過ごしやら」

『ふむ、この時代にも未だ我らの血族が生き残っておつたでござるか』

「……何ゆえ、そのような姿になってまで現世に留まる必要が？」

『主等も人狼なら分かるであろう？ もっと強く——只、それ故に』

雪女が作り出した某。パチモン光の巨人を叩き切った人狼幽霊2人組は、忠夫の捕獲に向かう前に目の前に歩み出してきた2人を無視する事は出来なかつた。

方や鎧と鉢金を見に纏つた、人狼族の幽霊達。

方や着流しを纏つた人狼族の剣士達。

何気なく言葉を紡ぎつつも、最早周囲の事など目にすら入っていない。

只、眼前の修羅を——己の力と技に全てをかける事が、存在の仕方とさえ捉える4人の剣の鬼達は睨み付ける。

殺気ではない、怒りや憎しみであろう筈が無い。

只、喜びと期待がある。

「もしや、ご先祖様なのかもしれないでござるな」

『・・・ならばこそ、名を聞くのは——』

「必要無い、か。確かに、これがあれば」

『十分過ぎる、でござるよなあ』

4つの音が、それぞれの腰から響いて奏で合う。

踵を僅かに浮かす犬飼、犬塚の2人に対し、ゆつくりと地面に降り立ちながら刀を構える幽霊達。

4人の表情に共通するのは、等しく浮かんだ力ある笑み。

最早始まりの言葉さえなく、現代の修羅達は、過去の劔鬼に、滑り込むようにして突っ込んだ。

「らあっ!!!」

『甘いっ!!!』

犬飼は駆け抜けざまの横薙ぎ、犬塚は真正面からの刺突。

しかしそれは金属が触れ合う音さえせず、いともあっさり受け流され——

『ふんっ!!!』

「ちいつ!」

あまりにも鮮やかに流されたが故の、僅かな体勢の隙を突くように真つ向からの唐竹割り。

しかし斬りかかられた2人はむしろ懐に飛び込む事を選び——その体が、相對する相手を擦り抜けた。

一瞬動揺の氣配を浮かべるも、動きを止める事無く地面を蹴る。

背中を、大氣ごとかち割る一撃が掠めて行つたことに冷や汗を流しながら相棒と合流。

互いの死角を庇うように体勢を整えた二人の前には、10メートルほどの距離を詰めようとせすに、にやにやと笑みを浮かべる幽霊達が余裕の態で刀を担いでいた。

「強いな。ああもあつさりと流されるとは」

「ああ。技量だけなら長老よりも上でござる」

『只、戦の中を生き延びた時間。最早、数える事すら虚しい程の時間——我らも只眠つていた訳ではないのでござるよ』

『こやつの相手も少々飽きておつたでござるからな……久々に、手加減という物が必要でござるかな?』

挑発そのものの言葉に、しかし掛けられた2人は心底樂しげな笑みでもつて応えを返

す。

「無用、全くもつて無用でござる。確かに腕はそちらが上。しかし、だからと言って！」
「勝てぬ、と言うのは勘違いも甚だしい！」

『——良く吼えた!!』

「吼えぬ狼などおらぬわあつ!!」

べつとりと体に絡みつく剣気の中、修羅達は錯綜を開始する。

邪魔の入らない場所へと駆け出しながら、4人の顔には堪えきれない歓喜の表情が浮かび続けている。

「ほーらほーら！ 3 回回って「にゃん」って言いなさいっ！」

「くっ?! 狼である拙者に対し、それは余りにも酷くないでござるかっ?!」

「シロ、頑張れー」

「タマモオオオオッ!!」

首から下が氷の塊に包まれたままの忠夫を横に、喜び絶頂の雪女。

シロは忠夫を人質に取られた格好で、なんとも手出しのしようが無い。

取りあえずそんな状況で、全く協力してくれないタマモは一体何を考えているのやら。

懐から取り出したティッシュを鼻に詰めている雪之丞もタイガーも頼りになるとは思えない。

シロ、ぴーんち。

このままでは誇り高き人狼であるにもかかわらず、よりにもよって猫の鳴き真似をさせられてしまうではないか。オノレ猫め——いや、猫が悪いと言う訳ではない。美衣の作る料理は美味しいし、ケイはとっても良い子だ。面倒見は良いし何より素直である。

未だに長老に吊るされる事のある陰念とは天と地ほどの差さえもある。

そう、つまり悪いのは猫ではなくて料理が美味いと言うのはつまり美味しい料理を作れる人物が悪い訳が無く、故にお腹が減ってきたので今日の料理は何だろうか——。

「シロー、よだれよだれー」

「じゆる・・・はっ?! なんでもないでござるよ?!」

てんでばらばらの方向に走り去る思考を目の前の現実に力づくで引き戻すシロー。

雪女がなんだかとも遣る瀬無い表情になっていたり、忠夫の唇がそろそろ紫色になつていたりするのがなんともはや。

それを見たシローは、口惜しげに唇を噛み締め、俯くようにして顔を隠す。ぷるぷると拳を震えさせながら、やつとの思いで口にその言葉を乗せた。

「・・・にや、にやあ」

「・・・プツ」

「タマモオオオオオツ! 貴様、今笑つたなああっ?!」

「だ、だつて・・・あははははははっ!」

快活に笑うタマモに対し、真つ赤なお顔で怒鳴るシロー。

最早雪女そつちのけで騒ぎ出した2人を横目で見ながら、何処となく羨ましげな表情で人差し指を唾える雪女。

未だにお腹を抱えて笑い転げるタマモを怒りを籠めて一瞥した後、シローは赤みの消えない顔で雪女を睨み付ける。

睨まれた雪女はと言うと、慌てて表情を取り繕いながら余裕を持つてその視線を受け

止めた。

「さあつ！ 兄上を返してもらおうでござるよ！」

「……そ〜ねえ。じゃ、こう言うのはどうかしら？」

如何にも良い事を思いついた、と言う風情の雪女が、忠夫を包んだ氷塊に触れる。

一瞬その手の平が輝き——次の瞬間には雪女は地面を蹴って浮き上がる。

「今回はこれ以上難しそうだし、最後に意趣返しもできたから此処で引かせてもらうけど置き土産——楽しんでいてね？」

そのまま、ひょう、と粉雪交じりの風を纏って上空へと飛んでいく。

最後に、甲高い笑い声を残しながら。

「えい」

「——熱っ！ こら、退場する敵に攻撃するなんてズルイじゃないっ?！」

「知らないわよ。ほらほら」

途中で投げられた、地面からのタマモの狐火に何度か袖を焦がされされながら。

「えい！——あ、落ちた」

「——あーれえー」

「まだ余裕ありそうねー」

最後に投げられた狐火は、見事に雪女に直撃し、森の向こうに煙を上げながら落下さ

せた。

「ふ、ちよろいつ!」

「将来が怖いですノー」

「全くだな・・・美神のねえさんでも見てるようだぜ」

「なんか言つたつ?!」

がーつ、と威嚇してくる少女に、隣の雪之丞と共に視線をあつちの空に向けて韜晦する2人。

とは言え、その下手くそな口笛交じりの行動も、シロの悲鳴じみた叫び声が聞こえるまでの短い間だったが。

「あ、兄上ー!」

忠夫を回収に向かったシロの方を慌てて振り向けば、彼女の目の前には今まさに盛り上がりつつある雪の塊があった。

そして、その盛り上がりつつある塊の頂上部にある——忠夫の顔。

白目を剥いて紫色の唇で、半分魂が抜けかかっていた。

「忠夫おおおつ?!」

「うお、マズツ?!」

「横島サンしつかりするんジャーツ!」

慌てて駆け寄る彼らの足元が、いや、彼らの足元の雪が不意にズリリ、と動いて忠夫の元へと動き出す。

足を取られて動きの止まったその目の前で、雪の塊は徐々に形を取り始めている。

早送りを見ているかのように、それは一瞬で形を整え、細部を調整するように各部から粉雪を振り落とし、そして、誕生の歓喜を示すように、その「両手」を高く突き上げた。

「雪で作ったゴーレム……！ 性懲りも無く、クソ厄介な物を！」

「こんな事ならもうちよつと気合入れて焼いときやよかつたわね……！」

雪之丞の言葉が示す通り、それは2本の腕と2本の足を持ったゴーレムであった。先程までのものとの差異を比べれば、その2階建ての一軒家ほどの大きさもあるうが、何よりも、そのゴーレムには――。

「冗上を核にしたからでござるか？」

「多分、そうだと思いますジャ―」

尻尾があつた。

すらりとした、とは言い難いデザインであるものの、しっかりと2本の足で立ち、尻尾をゆつくりと動かすそのゴーレムの頭部に当たる場所には忠夫の頭が突き出している。

サイズがサイズだけに、その体から見ればちつぽけな忠夫の顔が其処にあるのはなんともしユールなデザインではある。

口が無い故に、声をだすことはできないが、代わりとでも言うようにそのゴーレムは大きく右腕を振りかぶり、一番手近にいるシロ——ではなく、少し離れた所にいる雪之丞たちに向かって態々走りこんで殴りつけた。

「うおっ?!」

「なんでこつちに來るんジャー?!」

雪女の妖力で作り上げられたとは言え、核が忠夫であるから、としか言い様が無い。

巨体に似合わなさ過ぎる速度で、まさに砲弾のように突っ込んできた拳を慌てて回避する2人。

一抱えはある拳は回避した2人の居た地面に突き刺さり、しかしそれを砕けずに己を地面を覆う雪へと変えた。

「脆っ!」

「雪でござるからなあ」

突っ込みながらさり気無く男2人と距離を取るシロタマ。

手伝う気が無い、と言う訳ではないだろうが、取りあえず囹役というかターゲットはタイガーと雪之丞に自動的に任される事になったらしい。

飛び退いた男達に体ごと向き直りながら、ゆっくりと拳を引き上げるゴーレム。

その拳は地面から引き上げられながら、辺りを覆っていた雪を吸い込むように巻き込んで巨大化していく。

数瞬も置かず元の大きさの2倍ほどになったそれを、再びゴーレムは振り上げた。頭のところでカクカクと動いている忠夫の頭が大変奇妙な光景を作り上げている。

「タイガー殿！ 何とか隙をつくれんでござるか?!」

「分かったんジャー！ 雪之丞サン、なんとか時間を稼いでつかあサイー！」
「任せとけっ！」

振り上げられた拳に自分から突っ込むように、魔装術を纏って呐喊する雪之丞。

その背後で、タイガーが意識を集中させながら幻惑の準備に入る。

「はっ！ 雪の塊なんざ、たいして効きやしねーよ！」

叫びながら腕を体の前に構え、全力で前方に跳躍した雪之丞を正確に打ち落とす軌道で拳が迫る。

確かに先程の光景を見れば、雪之丞の判断は間違つてはいないだろう。

いくら巨大な拳とは言え、その重さが1tを超えるほどの重さには見えない。

そして、その強度も先程の打撃で証明済み、地面を抉る事さえ出来ずに逆に粉碎されたその光景は、雪之丞の魔装術のスペックからすれば何ら問題は無い程度のものである筈

であつた。

しかし、一つ、雪之丞は分かつていなかった。

核になっているのが「忠夫」である事。

シロタマに攻撃せず、雪之丞たちを狙う程度には核の影響を受けている事。

そして、忠夫は真つ正直に正面からの殴り合いをするようなタイプでは無い、と言うことを。

響いたのは、雪の塊が粉碎される音でもなく、ゴーレムの腕が落ちる音でもなく、金屬のハンマーで巨岩をぶつ叩いた時に聞こえるような音だつた。

「——ぐがあつ?!」

「なつ?!」

トラックに跳ね飛ばされたように雪之丞が吹つ飛び、タイガーの横を掠めて背後の木々を薙ぎ倒す。

混乱の表情を浮かべたタイガーの目に写つたのは、雪之丞とぶつかった拳の、雪の剥がれた部分。

「——岩つ?!」

「まさか、さっきの地面を叩いた時に?!」

雪之丞と衝突した部分から、ぱらぱらと落ちる雪の欠片。

その下に、灰色の塊が覗いている。

それは僅かに軋む音を立てながら、ゆっくりと剥がれ落ちて地面を覆う雪に突き刺さる。

雪で出来た拳の中身が全て岩と言う訳ではない。先程地面を叩いた時に、その表面を覆う雪ごと取り込んだ小石や土塊、そう言ったものをかき集めて出来た即席の凶器。

その証拠に、剥がれ落ちた岩の厚さは5cmにも満たない物でしかない。

しかし、十分な速度の乗ったその拳は、硬度とその後ろに満たされた雪の重さも相俟って、確かに一撃分の武器としては十二分に役目を果たしている。

言うなれば、百科事典の角で思いつき叩いた、と言うのが近いだろうか。

結果として、油断を多分に含んでいた雪之丞は踏ん張りの効かない空中と言う事もあり、容易く吹き飛ばされる事となったのだ。

「・・・結構、厄介かしら」

「タマモ、溶かしきれぬでござるか？」

「この辺り一面雪だらけなのに？ 向こうは幾らでも雪の補給が聞いわ。下手すりゃこっちの妖力が先に切れるわよ」

臍を噛む二人に見せつけるように、ゴーレムはことさらゆっくりと拳を下ろして剥がれ落ちた岩を再び小石や土と共に回収していく。

そして3度その拳が持ち上げられ、硬直していたタイガーに向かって振り下ろされる。

「何の！ ワツシの幻覚を食らうんジャー！」

直撃。

迷いの無い拳を諸に喰らつて、嫌に良い笑顔で吹き飛ぶタイガー。

そのまま雪の上をスキーのように滑りながら、ふらふらと起き上がった雪之丞の隣で停止した。

「な、何でジャー……？ 間違い無くバツチリかかった筈ですノー」

「……お前、横島に幻覚かけただろ？」

「……あ」

馬鹿故にだった。

確かに核は忠夫だが、気絶して白目を剥いている者に幻覚を掛けた所で何の役に立つと言うのだろうか。

「どーするよ？ あいつ、結構セコイぞ」

「まさに横島サンですノー……」

魔装術を纏っている訳でもないのにあつさり立ち上がったタイガーに、ゴーレムに対し心底面倒臭げな視線を向ける雪之丞。

あちらの再生は雪が続く限りはほぼ際限無し。

しかし、こちらの戦力は幻覚能力×2と狐火、そして近接戦闘を得意とする者が二人。そして何よりの問題は、時間制限があるっぽい所であろうか。

こうして相談している間にも、忠夫の体温と体力はどんどんと失われていつているのだから。

そうこうしている間に、再び振り上げられるゴーレムの拳。

雪之丞が反射的に飛び退き、タイガーがほうほうの態で回避し様としたその拳は——
「見つけましたわっ!!」

「横島さん!!」

「うわ、何だこれっ?!」

横合いから飛んできた、一条の靈波砲で軌道をそらされ木々を薙ぎ倒す。

「あ、あんた達、誰? って、おキヌちゃん?」

「あ、おキヌ殿ではござらんか」

「あ、シロちゃんにタマモちゃん、久し振りー」

「のんびりと挨拶してる場合じゃありません事よっ!」

六道学院、おキヌと弓、一文字のチームが其処にいた。

第參拾四話。

風を斬る。

大気ではなく、気体ではなく、意味在る物ではなく、故に意味無き物をも斬る。諸々のモノを含めた全てを斬る。

その過程であり、また同時に結果として発生する表現こそ、其れなのかもしれない。斬られた風は、斬ったのもまた風であるかのように——只、流れて踊る。

鋼でありながら、刃。

切っ先でありながら、腕。

腕にして、武器。

武器にして、己。

己を磨き、肉体を磨き、精神を磨き、技量を磨き、高みに至るをこそ己の存在証明とするが故に。

故に、金属の塊でありながら——是こそ、我が身体にして我が誇り。

「お．．．おおおっ！」

右から袈裟懸けに振り下ろす刃の先が、確かに触れた筈の相手の刃の手応えさえも残

さずに流される。

するり、と僅かに開いたこちらの右半身に滑り込むように、柄を上、切つ先を下に、刀身を斜めに構えてこちらの刃を滑らせた侍が潜り込む。

冷や汗の流れる間も無く、本来ならば止める刃を瞬時に左手一本で握り返し峰を返す。

そのまま勢いを殺すどころか、更に振り下ろした片手に加速を入れた。

地面を覆う雪に切つ先が沈み込み、僅かな反動をその身に得る。

反動を逃さぬように、左胸を斜め上に突き出すような体勢で体を逸らす。

峰を叩きつけた地面の固さによっては、いかに身体能力に定評のある人狼と言えども、手首を痛める可能性もありうるが、幸いにして地面は雪に覆われている。

しかし、刀身、手首を傷める可能性を考えると上策とは言えない、言えないが——こうでもしないと首が飛ぶ。

侍の刀が初速を得た、と思つた瞬間には。

『つせいっ!!』

「ぬうっ?!」

冷たい、鋼の冷たさとはまた違った冷ややかさを纏つた刃が、薄皮一枚の差で頸動脈を掠めて首周りの空気ごと背後に吹き抜けていた。

こちらの開いた体に沿っているように、互いの間に僅かな隙間を残してすれ違う二人。

だから、開いた体を閉じる勢いのまま、地面に峰打ちをかました為に刃を上に向けているそれを、技も何も無く膂力任せに横に薙ぐ。

全ては瞬間の判断任せ、己の反射神経と体に染み付いた動き任せ。

それでも、人狼の鍛冶師が鍛えた里に伝わる刀は、体を前に泳がせた侍には鉄棒で殴りつけるくらいには効く筈であつたし、当たり所が良ければ真つ二つ位の勢いは――。

『なんのっ!』

「それは幾らなんでも反則でござろうっ?!

掠りもしない。

重力だの慣性の法則だの、この世界を支える物理原則を無視できるその存在は、前に流れつつける姿勢のまま意思だけで「後ろに動いた」。

ギリギリ、と云うか紙一重で見切られた感もあるが、重厚な鎧を身につけた胴体にも一筋の傷さえ付けずに避ける。

舌打ちしつつ後方に飛び退り、一足よりは僅かに広い間合いを取った。

隣で雪を踏みつけ着地する影。

視線も向けずに声をかける。

「如何でござるか？」

「反則だな、ありや」

互いに珠のような汗を額に浮かべながら、体中の彼方此方に、放つて置けば数十秒も待たずに完治してしまふ程度の切り傷を抱えながら、彼らは樂しげに言葉を交わす。

『……やれやれ、もう息が上がつてでござるか？』

「とつくの昔に息をする必要が無くなった先達の台詞ではないでござるか」

一本取られた、とばかりに苦笑いを浮かべる、人魂を傍らに浮かべた鎧武者達。

頭の上にはピンと立った狼の耳、お尻からは軽く持ち上げられている細めの尻尾。

人狼族の先達、戦乱の時代を戦い、それでも尚、己を磨く事を忘れぬ狼達。

その余裕とも取れる行動は、刀を構えて慎重に呼吸を整えている犬塚、犬飼に苦笑いを浮かべさせるに過ぎない。

悪意ゆえの挑発でなく、彼らが既にこの世の者でない事すら忘れて熱中していたと言うだけの事。

「で、如何にかなりそうでござるか？」

「正面からは無理。何とか一対一に付き合つてはくれたが、体力が持たん」

彼我の状態を見比べれば一目瞭然。

こちらが肩で息をしていたのに対し、向こうは息をする必要が無いし、ましてや幽霊

に体力と言う概念があるのかどうかさえ知れたものではありやしない。

体の彼方此方に傷を追っているのに対し、向こうは無傷。

出血は体力、集中力とも奪っていく上、再生だって代償ゼロとはいかない。

体力だの靈力だの、何かしらで埋め合わせが必要なのが、この世のケチ臭さと言う物だ。

「かと言つて2対2でもなあ」

「危なく2人纏めて開きになる所でござつたしなあ……」

体力で負け、連係もおそらく百年単位で互いを修行相手としてきたあちらが上。

技量に至つては比べる事すら虚しくなる。

有利な点と言えば——

「ただ、つけこむ隙はあるでござるな」

「……あれかあ。成功したのは一回だけだぞ？ しかも長老相手に」

「やらねば負けるでござるが？ お前がやらのなら拙者は逃げるでござる」

これも、幾つかある。

刃を交わし、ギリギリのラインで見極めた貴重な情報。

第一に、劍撃の軽さ。

肉体と言う器を持たないが故に、体重移動を利用した一連の動きにも、体格に見合つ

た圧力が無い事。

第二に、対応力の低さ。

数百年単位で互いを相手取った為に、同じレベル同士の間で磨かれた動きの純粹な無駄の無さという点では勝てる気がしない。

こちらの攻撃を受け流す、という点では芸術的でさえある。

故に、攻撃されたとしても、軽さの為に弾き飛ばされるといふことが無く、むしろ流れた体を狙い撃ちされる事が殆ど。

ライバル関係の見本とも言うべき二人ではある。

しかしそれは相手の動きをついつい予想してしまふと言う事でも、ある。

犬飼・犬塚ではなく——体に染み付いた、稽古相手を思い浮かべてしまふのだ。

故に、思わぬ行動に出られた際に、僅かながら動きが止まる。

そして、最後に——

こちらの知識の中に、「犬飼忠夫」が居る事。

力で負け、速度で負け、技で負け——しかし、生き汚さとセコさと常識外れの行動で、何時も何時も修行だのお仕置きだのから逃げおおせた馬鹿息子。

それも、また、一つの特異な発展系。

『相談は終わったでござるかな?』

「応っ!!」

2人同時に刃を鞘に収め、突っかける。

犬塚は左に鞘を納め、犬飼は右に鞘を収めての、最後の一撃といわんばかりの全力疾走。

——走りこみながら、寸前で踏みとどまって、その勢いをも利用した鞘走り。

鎧姿の人狼幽霊達はそう判断し、対応する為に構えを取る。

奇しくもそれは鏡で移したような左右対称。

駆ける2人の間から待ち受ける二人の間まで、巨大な鏡がそそり立っているようにさえ見える完璧な対称関係。

「我が全身全霊を籠めた刃——」

「止められるか・・・?!」

幽霊達は応えず、失望したように目を細めながら鞘と手、肩の向きから考えられる一撃のラインに対応し——

『力任せがお主等の応えでござるか——』

『——ならば、出直して来るでござる』

タイミングを取ってカウンターに——

「うっそびよーん」

『びよんっ?!』

シリアスな空気をぶち壊す、あまりといえはあまりにもな台詞と同時に繰り出されたのは、構えた刃ではなく、最後に踏み込んだ足を基点に、幽霊達の間を抉じ開けるようにして振り上げられた2本の足。

一瞬脱力した幽霊達が慌ててその蹴りに合わせて刀を振り上げ、しかし蹴り足は振り上げられた途中で力づくで振り下ろされる。

足を振り上げた姿勢のまま足を踏み下ろせば自然と体が前のめりになり、そして戸惑うように振り上げられた刀に向かって頭が落ちる。

響いたのは、磨きぬかれた金属を擦り合わせたような音。

『噛み止めたでござるかあっ?!』

二本の刃は、人狼の牙によって縫いとめられ、口角から血を流す2人の不敵な表情を映り込ませて動けない。

そのまま、動きを止めた幽霊達に向かって止めの一撃を――

「・・・っ?!」

繰り出そうとした二人の目に、刀を噛みとめられた瞬間に手を離れた幽霊達の手が写る。

其処には、靈力という力が収束され始めており、彼らにとつても見慣れた物が出現し様としていた。

『惜しかったでござるが——』

『此処まで、でござるな』

武器を失つたのならば、靈波刀がある。

戦場を駆け抜けた2人にとつて、武器を奪われる事、それによつて生じる隙はそのまま死へと繋がる特急券。

ならば、奪われる事の無い武器、彼らにそもそも備わつた刃——靈波刀を扱う事は、当然といえば当然の事。

攻撃を全力の鞘走りからの一撃と判断させる為に、犬飼達の刃は鞘の中。対して靈波刀を出現させるのに掛かる時間は、一瞬。

そして、彼我の距離は超至近。故に。

——己が未熟つ、すまぬ!!

2人の脳裏に、只その一言が駆け抜ける。

誰に宛てた言葉か、何に対しての謝罪なのか。

その答えが浮かぶよりも先に、2人の体に向かつて見慣れた光が顕現し、そして。

『はい、そこまで』

『で、いざいなるな』

横合いから突き出された薙刀と、やや細身ながらも靈力の流れが固まつて見えるほどに収束された2本の靈波刀が左右からその軌道に割り込んだ。

「ふあ?」

「ふえ?」

小揺るぎもせずを受け止めた薙刀と靈波刀の先を視線で振り仰いだ二人の目に、青と白の和服を纏った2人の女性の幽霊の姿。

薙刀を両手で突き出しているのは青い着物を着た女性、細身ながらもやや背は高く、烏の濡れ羽色、と言つてもまだ足りないような艶やかな黒い長髪を持った、そしてその黒髪の間から狼の耳を生やした淑やかな妙齡の女性。

左右の手から靈波刀を展開しているのは、少々小柄ながらも出る所は出て、引つ込む所は極限まで引つ込んでいるような、白銀色の髪に一房だけ赤い色を混じらせた、こちら長い髪を持った澆刺とした感じの少々若い印象を受ける女性。

互いに差異を備えていながらも、共通するのは、その微笑を浮かべた表情と——全く笑っていない目であらう。

和装の女性の声が聞こえた瞬間に、今まさに突き出そうとしていた靈波刀と同じく凍結したかのように動きを止めた鎧武者姿の幽霊達は、油の切れたロボットのような動きで首をぎこちなく振り向かせる。

漸く、と言つた感じで振り向いた彼らの目に写つたのは、そんな笑っているようできく笑っていない和装の幽霊達。

『言い訳は聞かんでござるよ』

『ま、待つたでござる！ 今回は我らに落ち度は無いでござるよー！』

『で、貴方も同意見かしら？』

『も、勿論でござるとも！』

両手開いて高々と天に突き上げ、だからと冷や汗を滝のように流しながらのたまう男性が2人。

その頬に靈波刀と薙刀の刃を当てて、いつそ可愛らしいと言つても過言ではない笑顔で迫る女性が2人。

先程までの気迫も無く、呆然と——いや、何となく背筋を伸ばしながらその光景を眺めていた犬飼犬塚に助けを求める視線が飛ぶも、2人は咄嗟に視線を逸らしてそ知らぬ振り。

『さ、あちらでじつくりお話を聞かせていただけますわよね、愚弟殿に旦那様?』

『夫と愚兄がご迷惑をおかけしましたでござる』

深々と慎み深く頭を下げてくるご婦人方に最敬礼を返す犬飼達の目の前から、某売られていく子牛のような瞳で引き摺られていく侍達。

嵐のような展開を、只、身に覚えのある者達としては遠い目で見送るしかなかった訳で。

『ちがっ?! だから助けを求める少女の笛の音が——』

『あらあら、結婚……何年目だったか忘れましたが、浮気ですか? これは少々本気でやらないと駄目みたいですね』

『然り然り』

『情状酌量とか大岡裁きとかは無いでござるか?』

『……今までありませんでしたか?』

『ございませんでしたあつ!!』

『ならば今回も無しで』

『酷つ?!』

ど〇ど〇ど〇な〇〇な〇。

嫌に成る程既視感を覚える光景を前に、犬飼達は脱力しつつも雪の上に仰向けに寝転がる。

冷たい雪の温度が、未だ熱と汗の引かぬ体から適度な速度で冷ましていった。

「……死んだ、と。負けた、ではなく、死んだと思つたでござる」

「同じく。返しの技術だけで、こうまで押されきるとは、なあ」

腹の立つくらいに蒼い空に、呟く声が消えていく。

一度も自ら攻撃を仕掛ける事無く、まるで稽古のように反撃と受け流しただけでこちらを追い詰めてくれた先達たち。

……まあ、いらん所まで先達であつたようではあるが。

「……慢心していたか?」

「否定できるものならやってみろでござる」

「・・・高い、な」

「高いでござるなあ」

それは冷たい空気の前にある空か。

それとも、只高みにある者達への感想か。

だが、しかし。

どちらにせよ——

彼らの頭に浮かぶのは、同じ答えであつたという。

「つくしようがあつ!!」

「下品な叫びはお止めなさいっ!! 耳障りですわっ!」

「んだとおっ?!」

人狼達の戦場から、白く化粧を被った疎らな木々を挟んだ反対側。

雪之丞、タイガー、シロタマと合流した弓、おキヌ、一文字達は、正直な話苦戦を強いられていた。

手数が増え、火力も増強されたというのに、だ。

雪之丞は魔装術を纏って顔を庇いながら立ち、弓もその隣で6本の手を持った半透明の鎧のような物を纏って同じく防御姿勢を取っている。

水晶観音、と呼ばれるその鎧は、弓家に伝わる秘術の粹。

常は水晶の珠を通した首飾りとしてあるそれは、一度戦いとなれば弓専用の鎧となつてその身を守る、彼女の戦衣装である。

2本の腕しか持たない人間にとつて、そもそも無い4本の腕を操る為には相応以上の修練が求められ、故にそれを使いこなせるだけの修行を積んだ彼女は、歳若いながらも多くのGSの卵が集まる六道学院の中でも、確かにトップクラスの力を持った霊能力者である事は間違いない。

だがしかし、その彼女と、ほんの一握りの霊能力者が、己の命を天秤に掛けて挑む修

練を生還した雪之丞を持ってしても、いかんともしがたい状況というのはあるのだ。

「おキヌさん、一文字さんの容態はっ?!」

「出血は止まりましたけど、まだ意識が戻りません……!」

「……本当に、馬鹿なんだからっ!!」

唇を噛み締めながら叫ぶ弓の眼前には、既に原型を失いつつある雪で出来た醜い塊。

あちらこちらを崩壊させながら、その崩壊した雪さえも吸収し膨れ上がる巨大な雪塊。

最初は、それでも人間の出来そこないの形を保っていた。

人質にとられた形の忠夫を助ける事を主張するおキヌの必死の声に、それでも何とかしようと挑む雪之丞、タイガー、シロ、タマモ、そして弓と一文字。

おキヌの笛も、動きを止める事は出来なかった。

単純な知恵さえ持たない、ゴーレムと言うよりもロボットのようなそれに対し、説得という意味合いの強いおキヌの笛では通じにくい。

鈍重な外見にそぐわず高速で動き回る癖に男連中だけにしつかり攻撃してくる雪のゴーレムに対し、戦いが長引いてしまうその中で、徐々に忠夫が雪の中に引きずり込まれるように沈んでいき、その姿が完全に取り込まれた瞬間。

雪像は崩壊した。

終わつた、と油断した彼らを襲つたのは、その崩壊した雪の塊から出現した幾つもの手らしき物体達。

らしき、と言うのは、あるものは6本目の指をもち、あるものはその長さがちぐはぐであり、そもそも腕の形すらしていない物であったりする為である。

呪を籠めた雪女が意図した物かどうかは定かではない。

しかし、結果として暴走をはじめたゴーレムは、手当たり次第に周囲の木々や石、土を雪ごと吸収し、或いは雪を強烈に圧縮して氷の塊を作り出し。

それを弾丸として、蠢く指の先から打ち出し始めたのだ。

一瞬反応の遅れた弓は、それをまともに喰らい掛け、そして——飛び出してきた一字に庇われた。

呆然とした表情を見せた弓を庇つた一字の頭部を掠めた石は、高速で飛び去り背後の木を穿ち、そして崩れ落ちた一字を背後に庇つて立つ魔装術と水晶観音を纏つたを盾に、おキヌのヒーリングで治療を施されている真つ最中である。

シロとタマモは雪之丞たちから見て元ゴーレムを挟んで反対側、狐火と靈波刀、獣の瞬発力を用いて弾丸の狙いを半分受け持ちつつも挑んでいるが、高速で、しかも大量にばら撒かれるそれらを相手に攻めあぐねている。

飲み込まれた忠夫の姿は見えず、その事も焦りに拍車を掛けていた。

「くっそつ！ うつとおしいつたらねえぜつ！」

「だからつて此処を離れる訳にはいかないでしょ！ 生身で喰らつたらどうなると思つていらつしやるのっ!!」

「分かつてるつ！ だからこうして——」

顔を一本の手で庇いながら、同時に背後を庇うように残りの手で靈波砲を撃ち、あるいは飛び来る弾丸を打ち払いながら声を交わす2人。

背後に居るのは、友人達。

雪之丞にも怒りはある。

いともあっさり雪の中に取り込まれた友人に、そして怪我をさせてしまった女性に対する負い目から自分に。

それらを助ける事の出来なかつた自分に対して。

だから、必死で慣れない頭を動かしている。

「あんの馬鹿ヤロウつ！ 覗き位でなんでこんな事になりやがるつ?!」
そんな彼の足元から、2人の怒号と弾丸の音に紛れて声が聞こえた。

「ワツシに、ワツシに任せてつかあさい」

「タイガー？ 何を任せろつて言うんだよ」

「そうですね。あの子達みたいに避けられるならばともかく、生身の貴方ではどんな目

に遭うのか……」

匍匐全身で進んできたタイガーに対し、疑念を籠めた問いを返す。

しかし、タイガーはその瞳に決意を籠めて、只一言とともに2人を見返した。

「考えがありますんジャー。長い間は無理でも短い間ならなんとかなりますノー」

「……分かった。おい、お前！」

「お前とは失礼ですわねっ！ 大体、何が分かったつて言うのです」「いいから聞けえっ

!!!」は、はいっ！」

雪之丞の、強烈な意思を籠めた一喝に思わず素直な返事を返してしまった弓は、己の口から滑りてたその言葉に戸惑いと恥ずかしさ、そして多くの怒りを覚えつつも、2人の男の視線に反撃の口を閉ざす。

「良いかっ?! 俺が突っ込む、お前はその後ろ。やれるなっ?!」

「……で、でも」

「や・れ・る・なっ?!」

2人が突っ込んでしまえば、残されるのは生身のタイガーとヒーリングをかけ続けているおキヌ、そして未だ意識の戻らぬ一文字。

だがしかし、逡巡は一瞬。

目の前の男達は、不思議な事に、何とかする為に通じ合っている。

それが分からない事は腹が立つが、どうせこのままではジリ貧である。
ならば、そう、ならば。

「失敗したら、覚えてなさいっ！」

「はっ！ 上等っ!!」

やってやろうではないか。

駆け出す2人。

その間を、或いは頭上を、或いは足元を擦り抜けて迫る木々の破片や石ころ達。

そして、おキヌと呻き声を漏らし始めた一文字を庇うように背中を向けて立つタイガー。

「タイガーさんっ?!」

「ふんっ!!」

その顔が気合の声とともに虎の形を取り、だがその肉体に次々とめり込む弾丸の群。
「ぜんッぜんッ! 痛くないですノー!!」

虎面の唇を歪め、その口元から牙を見せて不敵に笑うタイガー。

しかし、めり込んだ弾丸の根元からはだくだくと赤い液体が流れ出し、その足元に徐々に赤いシャーベットを作り始めている。

「精神感応を自分にかけておりますジャァ。こつちは気にせず、そつちの女子をお願いしますノー」

立ち上がりかけたおキヌを振り向きもせず、淡々と言葉を放つタイガー。

その光景を見たおキヌは、口元を引き絞ると無言で一文字のヒーリングに戻る。

「う、あ。おキヌ・・・ちゃん?」

「一文字さんっ?!」

必死のヒーリングが効果を顕し、薄く目を開いた一文字。

その瞳は虚ろながら、彼女達を庇って立つタイガーの背中を写りこませ、そしてゆっくりと見開かれる。

「大丈夫ですかノー?」

「あ、あんたこそ・・・」

「ワツシは大丈夫ですノ。女子に良い所を見せるのは、男の本懐って言うものです
ジャー」

僅かに横面を見せて笑う虎の顔は、誇り高く笑っている。

「だらしがねえぞ横島ああっ!!」

苛立ちが多く交じった一撃は、雪の中心に感じる微かな忠夫の気配を目掛けて全く遠慮なく放たれた。

爆散する土塊と岩と木々の破片、そして雪と氷と、直撃を喰らって錐揉みをしながら一緒に吹き飛ばされる忠夫。

「はあっ!!」

「シロ、今っ!!」

「心得たあつ!!」

雪之丞の一撃で、体の中心から核である忠夫を抉り取られた雪塊の動きが止まる。その隙を突いて猛獣の群の如く襲い掛かる3つの影。

そして、雪は弾け飛ぶ。

「・・・まあ、顛末は分かったけど」

「中々の見物だったわよ? 特に最後の方は」

少しだけ小高くなった丘の上で、眼下の情景を見下ろす美神と勘九郎。

その目には、小さな、体長1M程の雪で出来たゴーレム達が、美神とほぼ時を同じくして追いついてきた他の生徒達と戦っている光景が広がっている。

最も、打ち出す弾丸は精々木切れや雪球が精一杯のそれらを、学生といつても大量の

靈能者たちが殲滅している、と言ったほうが近くはあるが。

「で、あんたは見てただけなの？」

「下が頑張ってるのに手を出すほど、野暮じゃないわ」

暖かそうな冬山装備に身を固めた美神の横で、未だに裸足に胴着姿の勘九郎が笑みを返す。

それを気だるげに横目で見ながら、美神は背後で黒焦げの上に檻褌カスのようになっていたピンク色の何かに意識を飛ばした。

「・・・結局、あんた何しに来たのよ？」

「お、俺、全く良い所無し・・・でも良い物見たから後悔はしていない」

「記憶を失えっ!!」

きやいーん、と響いた泣き声と、更に続く執拗な打撃音を耳にしつつ、勘九郎は美神に聞こえるか聞こえないかの声を放つ。

「そう言えば、この辺りに伝わるちよつと面白い昔話を聞いたんだけどねー」

返事は無い。少々打撃音が少なくなつたくらいか。

「とあるお侍さんのお嫁になる為に、わざとお風呂を覗かせて責任取らせた人狼がいる
そうよー」

背後の打撃音が止まり、何かが飛び起きる音がして、そしてその何かが何かを言おう

として、最早爆撃音に近い更なる打撃音が響き始める。

やれやれ、と笑いを籠めた溜め息を一つつきながら、勘九郎は歩き出す。

その横を、此処最近良く目にする12体の式神達が走り抜け、青年の悲鳴が一際膨らんで途絶えた。

どうやら治療が終わったようだ、と式神達が走ってきた方角へ足を向けながら、修行相手だ、と言つて氷漬けの忠夫を解凍しようとしてやりすぎて焦がして冷や汗をかいていた狐の少女と、その足元で忠夫を抱えて名前を呼んでいた狼少女を連れて行つた、人狼の男2人を思い出す。

「・・・年上は趣味じゃないのよねー」

喧々轟々と魔装術を纏つたまま、学生であろう水晶で出来た鎧のようなものを纏つている少女と言いつている弟弟子と、その横で甲斐甲斐しく巨漢に包帯を巻き過ぎででかいミイラを作り上げている少女、その横で困つたような表情でこちらの背後を眺めている少女が目に入る。

その横には、何処からか白いテーブルと椅子を取り出し、その上にティーセットを準備した侍女の目線の先で椅子に座つて舟を漕いでいる良く似た母娘。

褐色の肌を持つた呪術師は、今頃ホテルで午睡を貪っている所だろう。

「ま、60点かしら」

雪は、暖かい陽射しの元でゆっくりと溶け始めていた。

「ああ、知らない」

——…!!

「彼女が何処にいるか？ 見当もつかんね」

——…!!

「来客中だ。では」

——…!!!

チン、と音を立てていやに古めかしい黒電話が切られた。

「全く…君は仕方が無いにしても、彼はもう少し落ち着いても良いと思うのだが、ね」

ゆつくりと手を掲げると、その電話は溶けたように消える。

「それも業、か」

こちらに歩いてきた彼が、何気ない動作で何時の間にか其処にある椅子に腰掛け、何時の間にかあるテーブルの上から、何時の間にかあるワインの満たされたグラスを掲げる。

「・・・どうだね?」

意図の読めない質問に対し、疑念を視線に乗せただけで答えた。

「ふむ。それでは、あれは?」

指差す方向を見れば、其処にもやはり何時の間にかあるガラスの入った窓。

透けて見えるのは向こう側、星のような瞬きが満たされた空間。そして椅子に座った彼と掲げるグラス、瀟洒なテーブル。

「あれは?」

指し示されたのは真正面に座る彼の背後、これまた何時の間にかある古めかしい柱時計。

ガラスのはめ込まれた時計板と、その中で動きを止めた針。

その下には、同様にガラスの奥で動きを止めた振り子。

止まった時を示す物の表面に、同じく目の前の彼の後姿と椅子、グラス、テーブル。

「……分かるかね？」

——違和感がある。

——決定的な、何かが。

——何が？

——そうだ、何故

「自分が写っていないのか。だろう？」

そうだ、私が——私？

私……俺？

俺……僕？

僕……私？

それは——誰だ？

「さあ？」

その一言の余韻を最後に、闇が落ちた。

第參拾伍話。

「……なーんか、忘れてるんつすよねー」

「ふーん。で？」

事務所の外に見える光景は既に暗く、しかし街が放つ光が暗さに抗い活気を作り出している。

窓の下を走る車の列も、帰宅ラッシュを終えた時間となつては少々疎らで、時々まっラックが騒音を立てながら行き過ぎるのみである。

応接室のソファアに腰掛け、今日の除霊の報酬である骨付き肉の骨を口の端から飛びださせたままの忠夫は、首を捻って唸っている。

「思い出せたの？ それ」

「うーん、それが全く駄目なんつすよねー」

うんうんと唸りながら首を捻る忠夫の横で、所長用の豪華な椅子に腰掛けたほんのり頬の赤い美神は、素っ気無い振りをしながらこつそり神通棍を取り出した。無論、忠夫がこの前の合宿の事を思い出した瞬間に再度忘れるまでしばき倒す為である。

「そろそろ諦めれば？」

「・・・そつすねー。思い出せないんなら大した事じゃないんでしょーから」

「大した事無いって何よおっ!!」

「何で怒るんすかあっ?!」

思い出したら殴ろう、と心に決めていたが、言葉の内容がとつても腹が立ったのでがつつりしばき倒してみた。

まあ自業自得と言う事だろう。覗きは犯罪だし。OK OK、問題無し。

そんな感じに所長が自己完結しながらも、今日も今日とてGS美神除霊事務所に半人狼の悲鳴が響く。

台所で鼻歌交じりに紅茶を淹れていたおキヌの口から、微かな溜め息と少々の苦笑いが零れた。

「いつもどーり、ですな〜」

鼻を心地良く攪る六道家からの貰い物の紅茶の葉が醸し出す香りを楽しみながら、おキヌはいそいそとクツキーの入った箱の蓋を、カパン、と軽い音と共に開け放つのだつた。

「お茶が入りましたよー」

「ぜはっ、ぜはっ。あ、ありがとうおキヌちゃん」

綺麗に後ろに流されていた長髪を、所々跳ねさせながら息を荒げていた美神が振り返る。

その手に持った神通棍に赤い何かがつ付いていたり、足元でモザイクでも必要なんじゃないか、と言う良い感じにスプラッターな物体がもぞもぞと蠢いていたりする。

が、おキヌはそれを苦笑い一つであっさり流すと、奇跡的に赤い液体が付着していないテーブルの上に湯気を立ててるカップを3つ、丁寧に置いた。

「ふう、全く・・・この馬鹿ときたらっ！」

「お、俺が何したつちゅーねん・・・」

「横島さんがそー言う事に鈍いのが悪いんだと思いますよー」

神通棍をデスクの引き出しに放り込み、跳ねた髪を後ろ手に撫で付けながら美神がソファーに腰掛ける。

その様子を横目に見、笑いを堪える表情でおキヌがその正面に腰掛ける。

最後に、ふらふらとゾンビのような動きで忠夫の手がソファーの肘掛をまさぐり、それを手掛かりに体を引き摺ってソファーに登った。

「何よ、おキヌちゃん」

「いーえ。何でもありませんよー。クスクス・・・」

「・・・おーい」

楽しげに肩を振るわせるおキヌと、それを半眼で睨む美神。

そしてちよつと寂しそうに頭の上の赤い噴水を押さえる忠夫。

『・・・フツ』

「てめ、人工幽霊一号！ 今鼻で笑いやがったなツ?!」

『・・・』

「あ、この、お前も無視するんかああつ!!」

『・・・ハツ』

「うああああああつ！ 一度ならず二度までもつ！ もー勘弁ならん、其処になおりやがりやあつ!! たたつ切つちやるつ！」

何処からとも無く聞こえてきた、鼻で笑う声に対し天井を向いて怒鳴る忠夫。

威勢良く叫んだ忠夫に対し、突然背後に出現した何時もよりも一回りは大きな全身鎧が無言で切りかかる。

それを振り向きざまに真剣白羽取りで止めながら、忠夫は余裕ぶつた笑いを浮かべてやったのだ。

「あぶねーっ！ 死ぬ、死ぬかと思つたじゃねえかあつ!!」

(ふ・・・その程度でこの俺を如何こうしようなんぞ、百年速いな!)

『本音と建前が逆です・・・!』

「てかお前何かでつかくなつてねーかつ?!

見慣れた全身鎧のフォルムは残る物の、あちらこちらに増加したパーツが取り付けられていたり刃物が剣から大剣に近いほど大きくなつていたりと何故かバージョンアップされているようである。

『ふふふ・・・私も何時までも同じ位置に留まつては居ないのですよ・・・!』

「な、何やりやがった・・・!」

仰け反つた体勢ながらもじりじりと押し返し始めた忠夫に対し、更に体重を掛けながら押し掛かるようにして潰しにかかる全身鎧。

『いえ、この前のお客様の首元に、ネックレスが掛かつていたじゃないですか・・・!』

「うん？ あ、あーあー、おキ又ちゃんの同級生だつて言う美人のねーちゃんなあ。初対面の筈なのにもすつごい目で睨まれたから・・・こ、怖く無かつたよ？」

『目を逸らしながら言つても説得力はありませんね・・・！』

ぎりぎりど歯を食いしばりながら持ちこたえる忠夫に対し、不自然な体勢ながらも気を抜けば押し返されそうな事に緊張を隠して人工幽霊が力を籠める。

それを呆れた目線で眺める所長は、一つ溜め息をついておキ又が紅茶と一緒に持ってきたクッキーに手を伸ばした。

「あら、美味し」

「この前、一文字さんと一緒に来た弓さんが持つてきてくれたんですよ。美神さん外出してて残念そうでしたけど」

「へー。やっぱりあー言う所の娘は、そこら辺きっちりしてるわねー」

ほのぼのとした会話を交わしながらクッキー片手に語り合う女性陣。

「ふぬおおおつ!!」

『くぬおおおつ!!』

殺伐とした咆哮を交わしながら剣を間に押し合う馬鹿達。

「あ、そー言えば一文字さん、どーもタイガーさんといひ雰囲気らしいですよ？」

「へえ・・・タイガーが？」

「弓さんと一緒にお見舞いに行つたんですつて。とっても良い感じだったそうですよ。最も、弓さんは弓さんと雪之丞さんと一緒にお見舞いに来たんですけど」

「・・・春ねえ」

「もうそんな時期ですかねー」

既に日も暮れている筈なのに、何故か2人に柔らかく注ぐ日の光が見えた。

他人の色恋沙汰に話の花を咲かせる2人を余所に、僅かな空間を隔てた背後では何時の間にか腕が4本に増えた全身鎧が、段々と体を起こし始めた忠夫に対して更なる圧力を掛けんとしていたりする。

「何だその腕はあつ?!」

『その女性の首飾りをちよちよつと分析いたしました。改良してみました。何、こちらもこちらも無機物の身、誠意を籠めた説得の結果、快く教えていただけましたよ・・・!』

「そりや他人んちの門外不出の秘術でしょうがあつ!!」

あつさり一流派の大事な大事な秘奥をパクった不屈き者に対し、一体何処から取り出したのやら、美神の破魔札連打が人工幽霊とついでに忠夫にもお仕置きとして襲いかかる。

表面に書かれた値段が50円とか100円程度なのは美神も理性が残っている証拠か、それとも骨の髄まで守銭奴つぷりが染み付いている為だろうか。

後者の可能性が圧倒的に高いのは言うまでも無い。

『のおおおおつ?!』

「ああつ?! 美神さんっ!」

その光景を見たおキヌがソファから立ち上がり、美神を責めるような目で睨む。

彼女の視線は美神が投げつけた格安破魔札の取り出した場所にも向いており、少々困ったような声音で言い募る。

ちなみに美神が取り出したのは、学校帰りのおキヌの鞆からはみ出ている一冊の本にホッチキスで適当に止められた紙袋からである。

「それ、私の参考書のじゃないですか! 『はじめてのじよれい・決別編—そして今日とは違う明日へ—』のおまけなのに!」

一番最初の本は半額、全部集めるとGSグッズが一揃い完成する、お買い得かもしれないでもない気がするるときっと幸せなんだろうな、な逸品である。

『内容はちゃんとGS協会の検定通ってるし、神通棍っぽい棒、まるで精霊石のような石、超格安破魔札、見鬼君に良く似た人形等もおまけで付いて、とつてもお買い得アルヨ—』とは業者のお言葉。

一番最後に付いて来ると噂の超小型精霊石クオーツが、特別価格で別売りじゃないかと巷ではもっぱらの噂である。

「あ、後で厄珍堂にでもつけといて」

そつちか、そつちなのか、と煤けた半人狼と事務所の管理幽霊が半眼で見ているが、綺麗にすばつとスルーした・・・と言うかそれに気付いてもいないおキヌは、美神の言葉に安心した表情を浮かべてソフアーにゆつくりと腰掛けた。

「・・・あれ？ どうしたんですか、2人とも。そんなに汚しちや駄目ですよ」

「『いーえー。何でもありませんよー』」

「・・・？ 仲が良いんですね」

その一言に全身鎧と忠夫は互いに顔を見合わせ、溜め息一つついてそれぞれ別々の部屋の角で天然の二文字を人差し指で書いてみたり。

それをあくまで微笑ましそうに眺めるおキヌの横顔を見ながら、美神の頭にはやつぱりおキヌちゃんが一番手強いかもしれない等と胡乱な考えが横切っていた。

「でも、次からはもう買わない方が良いわよ、コレ」

「えー、だつて爆発したじゃないですか」

額を押さえて溜め息をつく美神の脳裏に浮かぶのは、異様に小柄な腹黒悪徳サンングラス髭エセ中国商売人のおっさんの怪しい笑顔。

一番最初に本物、でもコストパフォーマンスは文句無しの品を見せておいて、次で一気に回収、そのまま知らん振りを決め込むだろうあのおっさんに、後で裏付け取つとい

て搾り取ってやろうと思いつつ。

「……それ位なら六道学院でも使わせて貰えるでしょうが。そう言う場所なんだから」
「でもでも、ほら、表紙が美神さんなんですよ?」

「……肖像権の侵害もプラス、ね」

額に青筋浮かべて握り拳に靈力をギョングン通わせる美神の背中には、巨大な般若が見えたとか見えなかったとか。

「でも、おキヌちゃんも真面目やなー。参考書とか買うなんて」

「え、だって、その……」

一頻り落ち込んだにもかかわらず、誰の注目も集める事が出来ないと悟った忠夫が何時の間にやらひよこりと復活しておキヌの抱える本を覗く。

話し掛けられたおキヌは両手の人差し指を合わせて、頬を僅かに染めてもじもじと。

「何時か、その、共働きでGSなんて……きやー! 私ったら、私ったら!!」

耳まで赤く染めて隣の忠夫をばしばしと叩くおキヌ。

それを半眼で眺める美神。

いきなり予想外の一撃を後頭部に喰らってソファァーに顔から突っ込む忠夫。

未だに部屋の隅で落ち込む人工幽霊一号。

何処か緩んだ雰囲気を打ち砕く一撃は、夜景を写しこんだ窓を突き破って舞い込んだ。
だ。

「——美神っ！ 美神令子はいるかっ！」

「ワルキューレっ?!」

黒い羽を持った魔界の軍人が窓ガラスを突き破って乱入し。

「また会ったね美人のおねーさん嫁に來ないかがふっ!!」

「あんたは黙つとれっ!!」

彼女をして反応させさせずに忠夫がその手を握り締め、次の瞬間ワルキューレの視界から横つ飛びに消え。

「よよ横島さん！ 何人が良いですかっ?!」

「うががが……? お、多くても良いんじゃないかなっ?!」

「やだ、そんな……が、がんばりますねっ!!」

吹っ飛んだ先で、思考がいらん方向に吹っ飛んでいたおキヌの問いに脊髄で答え、何か知らないが真つ白な糸が蟻地獄に引きずり込もうとしている光景が忠夫の脳裏に浮かび。

「おキヌちゃんも落ち着きなさいねええええ……!」

「きゃー?! 美神さん痛い痛いっ?!」

地獄の炎を背負った美神のウメボシでぐりぐりとこめかみを扶られ台無しになった。

ちなみに人工幽霊一号は悲鳴も上げられず部屋の隅で海老反りになって悶えている。

緩んだ雰囲気は結構丈夫だったようである。

「ふむ。何時も通りのようだな」

「何処がよっ?!」

「説明が要るのか?」

「……必要無いわ」

「ほん、と空咳をして場の注目を集めたワルキューレが、頭に被ったベレー帽の位置を両手で調節しながら美神に声を掛けてくる。

その長い耳が、僅かに赤く染まつていたのは美神の気のせいだっただろうか。

ともかく、両手を下ろしたワルキューレの表情は、先日の魔族襲撃の際と同じくいたってクールな物であつた。

「時間が無い、手短にブリーフィングを行なう」

「え？」

「日本時間にして10時間ほど前、魔族、神族に対してある場所より救援要請が入つた」
此処に至つてウメボシからコンボで移行していたアイアンクローからおキヌの後頭部を開放した美神が問い返すよりも早く、立て板に水と言つた感じで機関銃の如く説明を開始するワルキューレ。

その表情には、先程までには無かつた焦りが僅かに浮かんでゐる。

「ちよ、ちよつと待ちなさいワルキューレ！ 一体何を——」

「時間が無い、と言つた筈だ。頼むから最後まで——」

「——お待ちなさいワルキューレっ!!」

「なのねええっ?!」

美神達の口論を掻き消すように、壁を突き破つて砲弾のような何かが飛来する。

それは2人の間を突き抜け、ついでに途中で誰かを轢いて反対側の壁に罅を入れつつ停止すると、暫しの間を置いてずりずりと床に落ちて伸びた。

「ああつ?! ヒヤクメがつ! なんて酷い事をつ!」

「し、小龍姫がやったのねー!」

がばつ、と起き上がった砲弾は、何故か傷一つ見当たらないご様子でだばだばと涙を流しながら投擲犯を訴える。

しかし訴えられたほうはそれを軽く無視しながら、素早く美神に近寄ると一言述べた。

「金塊ーも! 協力してください!」

「OKっ!!」

「待てコラ」

小龍姫のいきなりの一言にあっさり懐柔された美神は、とても良い笑顔で真剣な表情でこちらを見る神族とシェイクハンド。

魔族のほうは思わず裏手で何も無い空間に突っ込みを入れつつ二人の間に体を割り込ませる。

「美神! お前は仮にも人界でトップクラスの霊能力者だろうが! 良いのかそれでっ!」

「良いのよっ! お金があれば良いのっ!」

「ふふふ・・・美神さんとの付き合いは、私のほうが長いんですよ」

「小龍姫も小龍姫だつ！ 神族の癖に金の話が先で良いのかつ?!」

喧々諤々と叫びあう神族魔族にGS。

異様といえば異様なのかもしれないが、GS美神除霊事務所と言う場においては「まあ、そう言う事もあるわな」の一言で片付けられてしまう程度の事である。

「しかし、契約は契約！ 神族が先に美神さんと契約したのは事実ですつ！」

「・・・ふつ、甘いぞ小龍姫！」

びしっ！ と勇ましく小龍姫を指差すワルキューレ。

その姿はまさに戦乙女の名に相応しく、思わず横で見ていた忠夫が1歩後ろに下が
る。

そして指差された小龍姫といえば、こちらは口惜しげに奥歯を噛み締めていたりす
る。

「確かに、美神令子は重要な要素だ・・・神族魔族に係わりの無い、人間として、尚且つ
それなりに戦力となり得る存在だからな」

「クツ・・・！」

「しかし、そう、だがしかし、だ。今回はもう1人、重要な人物がいるな？」

心当たりがある、という表情を隠し切れず、しかしそれでも口を閉ざして視線に口惜
しさと気合を入れて睨み返す小龍姫。

美神は美神でその会話を、聞き耳を立ててしかし突つ込まない。

「そう、あの男だ……こちらは、既にコンタクトに成功した。我が弟が、な」

「……あなた一人しか来ていないと思つたら、そう言う事ですか……」

美神と忠夫が思い浮かべたのは、苦労性ながらそれなりに頼りになるような気がしなくも無い一人の魔族、ワルクューレの弟、ジークフリート。

おキ又は痛む頭を抱えて部屋の隅でちよつと涙目、ヒヤクメに吹き飛ばされた忠夫は部屋の隅でそろそろ動きを止めかけている全身鎧とパズルの如く絡まりに絡まり、ヒヤクメは力尽きたようにその隣でへばっている。

「……これでファイファイファイ、だな」

「……まあ、良しとしましょう」

二人の間でなにやら合意に達したらしく、漂っていた緊張感を和らげつつ臨戦体制を解く。

そしてやおら同時に美神のほうを振り向くと、笑顔でハモって一言のべた。

「と言う訳だ（です）」

「さっぱりわからんわっ!!」

そりゃそうだ。

「それでは、先程の続きだが——」

その後も少々揉め事は在ったものの、漸く、という感じで落ち着いた雰囲気を取り戻した事務所内にワルキューレの平静な声が響き渡る。

——曰く、発端は、突然送られてきた通信であつた。

神界、魔界のデータント派に送られてきた通信の内容は、緊急を要する援助を求めめる類の物。

送り主は、月に住まう神族、月神族から。

時としてはるかな距離を隔てた地球上にさえ影響を与えるその衛星は、古来より膨大な魔力——本来の意味での魔力とは違うモノなのかもしれない。月に住まうのは、カテゴリ分けをするのなら神族なのだから、どちらかと言うと純粋なエネルギーに近いもの

だろう——を有するその性質にもかかわらず、同時にその距離と言う概念から手を出すには難しすぎる天然の要害としても存在していた。

そして、地球に存在する神族魔族両方とも繋がりを持たない、ある意味独立した存在として幾星霜を過ごしてきた。

が、その通信の内容によって、その状況は一変する。

反デタント派の魔族が、その膨大な魔力を狙って月に侵入してきたのだ。

月神族も必死の反撃を試みたが、全て徒労に終わり、そして地球に存在する者達に救援を申し込んできたのだと言う。

「もし、反デタント派の魔族たちが月に存在する魔力を活用できるとなれば、現在の緊張緩和の流れが一気に覆る可能性があります。それ程、あの地にあるエネルギーは膨大な物なのです」

しかし、此処で問題が一つ持ち上がる。

誰が、救援に向かうのか、だ。

神族が行けば、其処に存在する魔族との戦いに当然なるだろう。

それは未だに魔族の中に存在している潜在的反デタント派に良い攻撃の種を与えるような物。

火薬庫に火種を放り込むような真似をする訳には行かない。

それでは、魔族が対応するか？

これも、否。

神族も魔族も決して一枚岩では無い。

しかし、だからと言つてはつきりに見える形で内紛を起こしてしまえば、神族のタカ派が急先鋒となつて馬鹿をやらかすかもしれない。

また、魔族側も下手にそちらに戦力を回すわけには行かない。

仮にも衛星一つを攻める相手である。

それなり以上の力を持った者が居る筈であるし、それに対抗できるだけの戦力を回せば——均衡の保たれている現状を、神族側に傾ける事になる。

魔族内でもそれに対する懸念が真つ先に上げられた。

故に、どちらにも属さない勢力。

しかし対抗できるであろう者達。

要するに、美神令子とその周辺の者達で、何とかしてもらおう、と言う事になったのである。

・・・まあ、話が此処で終われば良かったのだが。

その後に、一つ余計な事がくつ付いた。

とどのつまり、両陣営とも月神族に恩を売リたかつたのである。

最も、距離的な問題からどれほどの価値があるのか全くの不明である恩であるが。

だから、交渉役として両陣営から選ばれた彼女達に、ちよつとだけ、可能ならばこうして欲しいな、と言うニュアンスで伝えられた事がある。

こちらの陣営が音頭を取つて、率先して救援活動を行なつた、と。

そう言う形が取れたら良いな、とか。

根が真面目な2人であるから、当然の如く競争のような態を取つた。

超加速で先手を取ろうとする小龍姫に対し、ワルキューレが閃光弾を使用したりしたのも、それに腹黒な偉い柱達が巻き込まれ、その事を後々まで他の同族達に指さし笑われながらぶつとい釘を刺されたのも先の話ではあるが笑い話ではある。

「……この期に及んでそんな事を」

「そう言わないで下さい。組織という物は中々厄介な物なのですから」

「ヒヤクメまで協力させた者の台詞か？」

呆れた表情の美神に対し、疲れたように溜め息を吐く2人。

ふと、ワルキューレの言葉に思い出したように小龍姫が問い掛ける。

「そう言えば……ヒヤクメでも発見に梃子摺つたのに、よく見つけられましたね？」

「ああ、それが。ヒヤクメ？」

「なんなのね〜？」

真面目な話をしていた3人の横で、柔らかい絨毯の上に車座になって緑茶を堪能していた忠夫達の間から、ヒヤクメがひよこつと顔を出して聞き返す。

右手に湯のみ、左手にクツキーを持ってご満悦の表情である。

「そつちでは見つけていたのか？」

「勿論！ 大分苦勞したけど、私に掛ければ、なのね〜！」

「ほう、流石だな」

もつと褒めて、とばかりに胸を張るヒヤクメの隣で忠夫が不思議そうな顔をしている。

しかし、その表情が何かに気付いたように呆れを形作り、苦笑いに締められた。

その表情を横目で見ていたワルキューレが唇にそつと人差し指を当て、美神が額に手を当ててて天を仰ぐ。

「で、何処だ？」
××

「えつと、×の、×なのね〜。全く、苦勞したのね〜」

「・・・だ×。そう×だ。ジーク、聞こえたか？」

『了解しましたっ！』

ワルキューレが頭に乗せたベレー帽を外すと、その中から小さな悪魔が現れた。

マイクとスピーカーを掛け合わせられた、小さな鬼の口に当たるスピーカーからジーク

クフリートのはきはきとした声が響き、小龍姫が呆気に取られた表情を浮かべる。

「さて——これで本当にファイフティ・ファイフティだな」

「ず、ずるいですよっ！」

「ふふふ……。魔族にズルいとは褒め言葉だな、そうは思わないか？　神族の小龍姫殿」

楽しげに微笑むワルキューレに、小龍姫が半眼で睨みを利かす。

とは言え今更それが何かをもたらす訳でもなく。

引き分けなのに、小龍姫は凄く口惜しい思いをしたので後でヒヤクメに何か奢らせてやろうと思っていた。

「美神さん、宇宙までいくんすかー」

「あんたも来るのよ。月に行くんなら人狼のあんたが居た方が良いに決まってるじゃない」

「どうやってつすか？」

「ロケットを予定しているが？」

「・・・それは空を飛びますか」

「当たり前だろう」

「・・・じゃー！」

良い笑顔で素早く逃げ出した忠夫を確保する為に、ヒヤクメの千里眼やらおキヌの浮幽霊ネットワークやら小龍姫の超加速やらワルキューレの狙撃やら美神の手加減無し
の神通棍やらが大活躍し、そのせいで大分時間を取られたのはご愛嬌・・・であろうか。
「いやーやーつ！ 鉄の塊が空を飛ぶわけないんやあぁつ!!」

「つべこべ言わずにとつと来なさいっ！ ほら、さっさと乗るわよー！」

「飛行機もいやー！ ロケットも嫌やあぁあつ!!」

「ワルキューレ」

「ほれ」

「あふう」

某魔女謹製、魔界軍御用達の、象も1秒でぐっすりの睡眠薬『もう疲れたよ、パトラツシユ。お前、実はチャウチャウなんだけど今まで嘘ついててカンベンな?』が効き過ぎたりもしたが。

ともかく、GS美神除霊事務所御一行、某国星の町に向かってレッツゴー、と相成ったのである。

第參拾陸話。

「ふうあああああああああ．．．あ？」

大きな大きな欠伸をしながら体を起こした忠夫は、テープで貼り付けてでもあるかのように重い瞼を擦り擦り、動かす度にゴキゴキと気持ち良さを伴って音を立てる体をゆっくり伸ばしていった。

開いた視界に写るのは、機械の群と幾つかのモニター類。
鼻をツンと突くのは消毒液の匂いであろうか。

ふらふらとする頭で見渡してみる。

横たわっていたのは端々に解れが見えながらもパリツと糊の利いたシート、そして天井の近くで音を立てて暖気を吐き出す空調用の穴らしき物。

そして。

「ぬ、起きたか小僧」

見覚えが在るけどいつもなら一緒にいる筈のもう一人はともかく、寝起きにはあんまり見たくない顔だった。

「何でじゃあああつ！ 寝起きが爺の顔とか最悪やないかああ！ やり直しを要求する

！ 俺は意地でも寝直すぞ！　．．．ぐー、すびー」
「．．．α、目覚ましを」

寝台の上で手足をばたばたと駄々っ子のように振り回した挙句、あからさまに狸寝入りと分かる躰を上げ始めた忠夫に対して額に血管を浮かべた老人が取った行動は、只一言を放つだけである。

そしてその言葉に答える者が居る訳で、うつ伏せになつて薄くて堅い枕を抱え込んだ忠夫の後頭部に、ゴリツと物騒な音を立てて何かを押し付ける。

「いえす・ドクター・カオス。サウンド・データ・ロード完了。ベル音・スタート——ちり・りりりん・ちり・りりりん」

「あびやびやびやびやびやびやびやっ!!」

鈴を転がしたような、軽やかな声とは裏腹に、押し当てられた物体からは部屋を蒼白く染める程のスパークが踊り狂う。

放電が走るのと全く同じタイミングで体を跳ねさせながら忠夫が見たものは、マリリアに良く似た、いつか見た小さなマリリアの後継機。

彼女曰く、「娘達」らしいが。

そしてそこまで見て、そのまま入眠せずに昏倒した。

マリリアと同じ色、しかし真つ直ぐな長い髪を持った少女はたっぷり10秒近くスイツ

チを入れ続けた後、おもむろにそのスイッチから細い指を離してスタンガンを不思議そうに小首を傾げてしげしげと見つめた。

「ドクター・カオス。効果がありませんでした」

「かっかっか。まだまだ経験が足りんのう」

やれやれ、と言った風情で溜め息をつく己の製作者の態度を、期待に込められなかつたが故、と結論を下した α は、ほんの少しだけ残念そうな表情を作ると、寂しげに一言呟いた。

「ちり・りりん・・・」

「もーえーから。大人しくスイッチから指を離せ」

寂しげな呟きとは裏腹に、その手元からは少々焦り気味にぱたぱたと手を振るカオスの髪を余波で逆立たせながら、凶悪な電光が何も無い空間に向けて放たれつづけていた。

「・・・なんでいきなり焦げてんのよ」

「俺が聞きたいです・・・」

たつぷり10秒は高電圧にさらされたにもかかわらず、何故か青いジージャン、ジーパンバンドナに僅かに焦げ目を付けただけの忠夫は納得いかなそうな目を向けてくるカオスの「付いて来い」の一言に従って暫く歩かされた。

着いた所はなにやら騒がしげな格納庫、そして迎えたのは見慣れぬゴテゴテとした白い服——所謂宇宙服を着た美神の呆れた視線であった。

「ほら、これ着て来なさい」

「えー、やっぱ俺も行くんすか?」

事此処にいたって諦めの悪い言葉を吐く忠夫に対し、背中と首筋に押し当てられる固くて冷たい金属の感触。

ギチリ、と動きを止めた忠夫がゆっくりと顔だけ動かして後方を振り向けば、そこにいたのは額に井桁を浮かべた戦乙女と女神様。

「緊急事態だ、と言った筈だが？」

「これ以上手間取らせるようなら・・・叩き落しますよ？」

「サーイエツサー！ 直ちに着替えてきますサー！」

如何にもこうにも急いでいるというのに、飛行機以来空を飛ぶ乗り物が駄目になった忠夫を追い掛け回して余計な時間を取られた事に大分ご立腹の様である。

宇宙服を小脇に抱えて駆け出した忠夫の後頭部に、今度逃げたら酷いぞ、という意味の籠められた視線が3対突き刺さりまくる。

年上のお姉さま方に見つめられて、状況も原因も忘れてちよつとドキドキしたのは秘密である。

「やれやれ。本当にあの調子で大丈夫なのやら」

「それはこっちの台詞よ、カオス。そっちの方も手抜かりは無いんでしょうね」

尻に帆を掛けて疾走していった忠夫と、それを見送った美女達の傍らから苦笑いが零れる。

相も変わらず真つ黒なコートに身を包んだカオスは、美神の言葉に笑いの表情を消した後、少々眉根を寄せて不愉快の意思を示した。

「わしを誰だと思つとる。この「ヨーロッパの魔王」に不可能な事などそうそう無いわい。α達はメインコントロールルームで待機、状況開始と共にオペレーティングの補佐

に回るように指示しとるし——」

カオスの視線がふつと上を向く。その視線の先に在るのは巨大な、まるでライフルの弾丸のような形をした鉄の筒。

一本の巨大な円筒を囲むように4本の筒が添えられており、その全体から氷結した白い霧を僅かに零し始めている。

それをなぞるようにして視線は更に上に向かい、天頂部付近を少しだけ心配そうな色を籠めた、しかし誇らしげな目で眺めている。

「マリアも『完全に』スタンバイ済みじゃ」

「しっかし、これだけでかい図体なのに行けるのが私と横島君、それにマリアだけつてのがねー」

頭をぼりぼりと人差し指で搔きつつ不満げに愚痴を零す美神に対し、ワルキューレと小龍姫から諭すような言葉が掛けられた。

「確かに戦力的にはもう少し欲しい所ですが……その代わり、神族と魔族から道具を貸し出していますし」

「ドクターカオスの最高傑作とヒヤクメの千里眼を利用したサポートも付ける。と、言うかそれが限界なのだが、な」

そう声を掛けながらも、2人の表情にも不安の色は隠せない。

月と言う、これまで隔絶されていた場所に、いくら実績があると言つても只の人間と半人狼、そしてたつた一体のアンドロイドを送り込み、そこに居る魔族を退けると言うなんともインポッシブなミッションをやつて貰おうというのだ。

とは言い憂鬱な表情をしているのは3人だけで、カオスはと言うと普段に無く高揚した雰囲気である。

「月か・・・流石のわしも興味を引かれる場所だわい。後1人乗ればわしが行くんじやがな」

「なら爺が行けば良いじゃねーか」

不貞腐れたような声で、通路の向こうから美神と同じ宇宙服、男性用のそれを着込んだ忠夫がぶちぶちと呟きながら歩み寄る。

その言葉に対して目を輝かせたカオスは、しかし一転澁面を作つて首を振る。

溜め息をつきながらおもむろに懐を探り出したカオスに怪訝そうな目を向けながら、忠夫は足を引き摺り引き摺り嫌そうな顔で美神の隣に肩を落として立ち止まった。

「わしもそうしたいのは山々じゃが、なあ。・・・全く、最近は笑顔で涙みを効かしよる。ますます姫に似てきおつたわい」

「はあ」

「あー、マリア。調子はどうじゃ?」

取り出されたのは小さな通信機。

それに向かつて声を掛けるカオスの目には、疲れた色がふんだんにあつたりする。

『イエス・ドクター・カオス。全計器・全系統に異常・在りません』

「小僧が行きたくないと駄々をこね取るんじやが」

『横島・さん・が?』

通信機に向こうから聞こえてきたのは、平坦な筈なのに酷く落ち込んだようにも聞こえる、忠夫にとつては久し振りに聞いた声。

素早く反応してカオスの手から通信機をもぎ取り、忠夫は目一杯元氣良くその通信機に向かつて言葉を放った。

「マリアかっ?! 嫁に來ないかっ?!」

『イエ「第一声がそれかあっ!!」』

横合いからかっとなってきた拳が、忠夫の問いに寸暇の間もおかずに何かを答えようとしたマリアの声を遮って忠夫の意識を刈り取った。

冷たい床の上を滑走する忠夫を見送りながら、拳の主である美神が忠夫の手から離れた通信機をキャッチしてそれに話し掛ける。

「あー、マリア? うちの所員が迷惑を掛けたわね」

『……ノー・プロブレム。問題は・無いと・判断します』

「そつう？ なら良いけど」

カオスが苦々しげな、まるで娘を取られる父親のような表情で昏倒した忠夫をロケツトの入り口まで引き摺っていくのを横目に見ながら美神は通信機越しの声を聞いた。

その声に残念そうな響きを聞いてしまったような気がして、なんとなく面白く無さげな表情を作るつた美神は簡単にこれからそちらに行く事だけを伝えてスイツチを切る。

少し苛ついた表情で踵を返した美神の目には、笑いを堪える神族と魔族の震える肩が写つて見えたり。

「何よっ?!」

「くつくつ．．．いや、いい加減素直になつてもいいと思うのだがな。如何だろうか、解説の小龍姫」

「ぶっ．．．ここ、こつちに振らないで下さいよ。で、でも私は可愛いと思いますけどね．．．クスクスクス」

目の端に涙さえ浮かべて互いの肩を叩く2人に対し、耳まで真つ赤に染めあげた美神が吼えたり表情を見れば説得力皆無の言い訳を延々と並べたりもしたが、二人の肩の震えが大きくなつたりした以外は大した効果は見られなかつたという。

「・・・はっ?! ここは誰? 私は何処っ?!」

「ベタベタ過ぎて駄目。0点」

「いきなり駄目出し喰らったっ?!」

目を覚ました忠夫がきよときよとと辺りを見回す。

隣にごつつい椅子に座って計器類のチエツクを行なっている美神の横顔、そして正面に複雑且つ何の役割を持っているのかさえ分からないような計器とスイッチの群。

体を起こそうにもシートベルトでがっちり固定され、首と肩から先、足くらいしか動かす事は出来そうに無い。

「特殊なプレイか!」

「違うわっ!!」

「ごきん、と音を立てて吹っ飛んだ顔が、何時もなら体ごと吹っ飛ぶようなその衝撃を動かせない為までもに喰らってダメーじ全開。

とは言え意識が刈り取られたのも僅かの間、拳を繰り出した美神も体を固定されている為何時もほどの威力は無く、結局あっさりと意識も元に戻る。

『ふっふっふ、準備はええかの?』

「OKよ。カウント始めちゃって」

「え? え?」

小さなモニターの向こうにはやたら澁刺としたドクターカオスと心配そうなおキヌ達が生居る。

状況を把握できないまま進む会話に忠夫が質問の声を上げる暇も無く。

『カウント——面倒くさいの、省略。発射——』

『「こらあああつ?!」』

多数の抗議の声も何のその、カオスは手元のコンソールに一際大きく目立つ位置に設置されたボタンをうきうき全開で押し込んだ。

途端に美神達の体を強烈な振動が揺さぶり始め、忠夫の混乱が最高潮に達すると同時に加速開始。

天に向かって一気に駆け上がる。

「ぎゃーっ！　ぎゃーっ！　飛んでるーっ?!」

「こ、この馬鹿オス！　帰ったら覚えてなさいよおっ!!」

呆然とその様子を眺める小龍姫達。

その横で傍らのモニターに映し出されたマリアと交信しながら、眉根も動かさず淡々とお仕事をするマリアの娘達。

そこからなんら異常を訴える報告が上がってこない事に1人満足げに頷くカオス。

名前の通り、たった一人で混沌と困惑と混乱を作り上げたヨーロッパの魔王は、1人楽しいな笑みを崩さないまま呟いた。

「遠足は帰ってくるまでが遠足じゃ」

この天才にかかってしまえば、月旅行は遠足と大差ないようである。

「い……ったあ」

「(い)(い)(い)……」

「ほら、いい加減起きなさい横島君」

地球の重力の頸木から逃れ、人類でもほんの一握りしか存在した事の無い宇宙空間に到達したロケットの中で。

緊張感と恐怖と強烈なGのため意識を飛ばしていた横島の耳に、体から力を抜きながら美神が声を掛ける。

耳を擦る心地良い声に意識を覚醒させた忠夫の目に入ったのは、目をパチパチさせながらこちらを見やる美女の顔。

混濁していた意識が一気に覚醒レベルまで達し、しかしぎりぎりまで張り詰められていた緊張感が解けた事で少々混乱気味の忠夫は唐突に未だベルトにその見を拘束されたままの美神に向かって飛び上がる。

不思議な事に、今の今まで忠夫をシートに固定していた筈のベルトは噛み合わさったままふわふわと空間を漂っている。

「美人のおねーさまの目覚ましー！ これやー！ これ欲しかったんやああつ!! 嫁

にこーい、ばっちこーい!!」

「てかベルトはどうしたのよっ?」

慌てて迎撃の拳を振りかぶる美神。

しかし一瞬ベルトを解くべきか、それとも不自由な体勢のまま拳を振るべきか迷ってしまい、そしてその一瞬で忠夫には十分だった。

「しまっ——」

既にその距離は至近。

拳を振るっても勢いをつけて飛び込んできた馬鹿を迎撃するには少し空間が足りない。

そこまで判断した美神は、直ぐそこまで迫った未来予想図を思い浮かべて、一気に顔を赤くして動きが鈍る。

脳裏に先程散々笑ってくれやがった神族と魔族の2人に対する恨み言と、ほんの少し、本当に少しだけ何かを期待して体を固くした美神に——

『あ・姿勢制御・失敗しました』

「おいっ?!!」

「・・・へ?」

ロケットの外装に程近い場所に固定されていたマリアの声が割り込み、それと同時に

機体が70度ほど傾いた。

重力があればそれでも放物線を描いて美神の胸にダイビングしていたであろうが、ここは既にその頸木の無い宇宙空間。

慣性の法則にしたがってそのまま直進した忠夫の行き着く先は、柔らかい天然物のクッションなどではなく固い固い内装部分。

重い音を響かせて、しばし壁に突き刺さったままの忠夫がゆっくりと浮き上がる。すつかり白目をむいて、水死体のように仰向けになったまま気絶していた。

『ソーリー・ミス・美神。お怪我は・ありませんか?』

「だ、大丈夫よ」

『体温の上昇・発汗・血圧・脈拍共に上昇』

「・・・何よ」

マリアの顔が映し出されたモニターに向かって、僅かに赤みの残る頬をさらしたまま半眼で睨み付ける美神。

しかしマリアもマリアで何故か無表情の中に不機嫌そうな色を隠せない。

『ミス・美神』

「だから何よ」

『マリアは・ミス・美神がそのままの方が・有利と・判断します』

「何がっ?!」

『しかし・今のミス・美神も・魅力的ではないか・と。以上の理由から・マリアはとても・：困ります』

「知らんわああっ!!」

本当に困ったように言うマリアに対し、美神は手近なそこそこ柔らかい物に八つ当たりしながら吼えるのだった。

ちなみに、その後、何故か壁に衝突した時よりもボロボロになった忠夫が目覚めないように、例の睡眠薬を打ったりしたのは秘密である。

マリアも反対はしなかった。

何故か、と聞いても判断不可、としか答えを返さないであろうが。

判断不能、でないのが味噌である。

「大分近づいてきたわね・・・」

『予定ポイント・到着まで・後・1時間・15分・42秒01』

睡眠薬が切れたのと空腹でゾンビの如く起き上がった忠夫と簡単な食事を済ませ、窓の外に見える月を眺めながらトランクを開ける美神。

中に詰められていたのは竜神族御用達である竜神の装具と魔界軍の武器の数々。

それを満足げな表情でお腹を撫でている忠夫に幾つか投げ渡し、美神もまた竜神の装具を身に付け始める。

「げぶ・・・んで、どうするつもりなんすか?」

「そうね・・・正直、情報が欲しい所なんだけど。マリア、月神族からの通信はまだ無いの?」

『イエス・ミス・美神。こちらからの・連絡用周波数での・発信にも・反応無し』

月神族からの連絡が無い。

最後に入った物が、あの緊急の援助を求める通信であると言うのがこれ以上なく不安を掻き立てる。

額と腕に竜神の装具を付け終えた美神は宇宙服付属のヘルメットをかぶって一呼吸。酸素の循環と呼吸に不備が無い事を確認してヘルメットを外し、魔界軍の武器の中に在ったライフルに弾を籠め始めた。

「——最悪、月神族全滅つてのも考えておかなきゃね」
弾丸と銃に集中している表情に陰りの色が濃く写る。

しかし、その事について考えをめぐらせる間も、対策を立てる間も無く。

船内が、一瞬にして甲高い音と赤い光で満たされた。

『・・・っ！ ミス・美神！ 前方に・異常な・エネルギー偏差！』

「なっ?!」

マリアの警告に慌てて月の見えていた窓に視点を飛ばす美神と忠夫。

2人で張り付くようにして窓から覗き見た先に見えたのは、先程よりも輝きを増したように見える、巨大な月。

いや、輝きが増しているのではなく、その表面を走る光が一点に、こちらに向かって突き進んでくるのだ。

それは、巨大な漏斗のようにも、穴に吸い込まれる大量の水にも見えた。

無理矢理引き剥がされるようにして月の放つ光が収束し、全体の輝きを振り合わせながら迫る。

「マリア、緊急回避っ!!」

『イエス・ミス・美神!』

「のわあああつ?!」

船体を轟音と強烈な振動が襲う。

船体の彼方此方に設置された補助ブースタと後部のメインブースタを全開で吹かしながら最大加速、蹴飛ばされるようにして斜め前方にすっ飛んでいく。

帰りの燃料の事など考えていないその機動は、大気圏の突破・突入にさえ耐え切る筈の外殻を揺るがし、計器のあちらこちらに赤をともしながらの決死の疾走。

正体不明の、攻撃なのかどうかさえも判然としないその現象は、しかしその内に秘めるエネルギーだけでも考えたくなくなるほど膨大な物。

その最初の接触を、全開に吹かした勢いで左に擦り抜ける。

しかし、そのエネルギーはまるで意思を持っているかのように、そして何かに引き付けられているかのように濁流さながらの動きで追撃する。

だが、ドクターカオスの手が入った機体が、マリアの手によって思う存分にその性能を発揮する。

設定されている筈の、機体保護の為のリミッターを全て停止させ、内部の者達の事も最低限度しか考えていないその速度。

しかし、そうでもしなければ。

もし、目の前のこれが、攻撃だとするならば。

完全に、完璧に、一切の誤差無く、回避し切れなければ。

落ちる。

「もーいやああっ！ お家帰るー！」

「やかましいっ！ 黙っとれえっ!!」

これだけ振り回されて尚元気だけはある内部の者達の喧騒に安堵の思いを持ちながら、マリアはひたすら操船を続ける。

捻り落し、急上昇し、急旋回を繰り返し――。

『……！ 第三・第五補助ブースタ・停止・メインブースタ・出力・低下！』

しかし、いかに天才の手が入っているとやえど、いかにその最高傑作の操船と言えど、それが存在している以上、そして物理法則に乗っ取って構築された物である以上、限

界は、ある。

『乗員保護の為・緊急脱出を・提案！』

「……くっ！ 了解、行くわよ横島君！」

「う、ういっすっ!!」

始めの接触を、左前方に擦り抜ける事を選択した為、また逃げ切れないときの事を考えた為でもあるが、月の表面は既に程近い所、視界を全ての大地が埋める程度の距離にある。

生身の人体ならばいかに地球に比べて小さいとはいえ、月の引力に引かれて激突、原型が残れば恩の字だったであろうが、今は乗員が2人とも竜神の装具を装着済み。

そしてマリアにも、この程度の高さならば問題無く着陸できるだけの装置がある。だが、同時にこれは賭けでも、ある。

もし、これが本当に攻撃だったのならば、最低1人は着陸する前に追撃を喰らうだろう。

狙う対象を放棄した宇宙船に変えてくれなければ、そして脱出が間に合わなければ、もしも散開が間に合わなければ、全員が――。

分の悪すぎる駆けである。しかし、選択の余地が無い事も確か。

そこまで考えて、美神は宇宙船のハッチから飛び出した。

続けて飛び出す忠夫と、船体下部からコードを引きちぎりつつバーニアを吹かすマリアが左右に分かれて加速する。

そして、追撃を掛けたエネルギーは。

『――!』

「横島くんっ!!」

「なんでじゃあああつ?!」

地面に向かって最後の足掻きとばかりにブースタを吹かしながら落下していく船体にも、頭だけで後方を振り向いた美神にも、センサーでその動きを捉えていたマリアマもなく。

忠夫を直撃し、その奔流に飲み込みながら月の大地へと突き進んでいった。

『マリア・行きます!』

「ちよつと待ちなさいっ!」

そして、その光跡を追いかける二人の前で、無音の、巨大な光の爆発が発生し、次の瞬間には全て消滅していた。

——渦巻いていた。

——轟々と、音を立てながら。

——暗い天を覆い隠すようにして、月の光が渦を巻く。

「……で、今度はなんだつちゅーねん」

前に視線をやれば、そこには相変わらずの大きな狼頭の侍の姿。

直にどつかと腰を下ろし、釣り糸を垂れながら片手の上で小さな玉をからころと転がしている。

もう片方の手は服の中なのであろうか、中身の無い袖だけがふらふらと頼りなさげに動いている。

よくよく見れば、その手の中の玉には何か文字が入っているのが見えた。

『集』『光』？ ……何のこつちや」

狼頭の侍が、その玉を持った手を振り上げ、まるで撒き餌でもするようにそれを——
釣り糸を垂れていた水面に投げ入れた。

その玉は、何時か見たままに渦巻いている水面の流れに乗って、渦の中心へと流れていく。

そして、それを追いかけるように上で渦巻いていた光が動き始めた。

「ほ〜」

感嘆の溜め息を付く忠夫の前で、光の渦が水の渦の中心に流れ込んでいく。

それを眺めていた狼頭の侍は、こちらから見える横顔を厳しく顰めると、口元に手を当てて何かを吐き出した。

それは、小さな玉だった。

先程投げ入れた物と同じ。

違いと言えば、何も文字が浮かんでいない事。

そこまで見て、意識がすつと薄くなっていた。

視界に写ったのは、光が全て吸い込まれて消えるシーン。

そして――

からころ、からころ。

そんな軽い音だけが、最後まで耳に残った。

『けっけっけっ……ほら、行けよ』

「五月蠅いねえ……あんたに指図されなくても行くよ」

先端が二つに分かれ、互いに左右を指している槍——刺叉と呼ばれるその武器を手に持った女が、声の主を睨み付ける。

おどけた調子で肩を竦めたそれを、苛立たしげに舌打ちしながら視界から外した。

『分かっているだろう？ お前には』

「ああ。もう後が無いって言いたいんだろう？」

『なら——』

「五月蠅い、と言った筈だ。私は私の好きなようにやる。結果を出せば文句は無いだろう」
背中越しの声に対し忌々しげに答えを返し、視線を少し上に向ける。

見えるのは、四角く区切られたモニターの上に映し出された、ヘルメットを被った男

の姿。

光を反射しているせいとその顔は見えないが、女にはその顔が簡単に思い出された。「もう、会いたくない……って言ったんだがねえ」

小さな、本当に小さな、声にもならないそんな言葉を紡ぎながら、目の前に開いたゲートに向かって歩みを進める。

突然の魔力の奔流。

それによるエネルギー収束の遅滞。

そして、たまたまその現象を見ていた監視網に引つかかった、半人狼の青年。

「……ああ、でも——」

ゲートを潜り抜けながら、その先で眠る馬鹿の顔が浮かび、そして消せない。

「——はっ、戯言か」

己を嘲笑うように唇を歪めながら、最後の1歩を踏み出す。

何を言いかけて止めたのか。

何を思い歩みを進めるのか。

何が、欲しいのか。

「くだらない」

奥歯を食いしぱり、背後に感じる嘲笑の籠った視線を鬱陶しく思いながら。

「くだらない・・・筈、だ」

メドーサは、眠る忠夫の前に行く。

——そして、四度目の衝突の幕が上がる。

第參拾漆話。

太陽の光を受け鈍く輝きを放つ月の大地の上を、後方に光の糸を引きながら矢の如く加速していく存在と、そのやや後方をロケットもプロペラも羽根も無く、ただ意思と竜神の力で疾走する存在がある。

一点を指して突き進む二人の前には、人間の存在を許さない、呼吸も、体温の維持も、身体機能の活動さえも許さない冷たく暗い空間が、ただ敷き詰められていた。

『――！ミス・美神！横島・さんの発信機・反応・途絶！』
「……っ！大丈夫、まだ生きてるわっ！」

一瞬、絶望に染まりかけたアンドロイドの表情に希望の色と疑念の色が浮かび上がる。

希望の元は美神の言葉のみ。

だが、事、こう言う場合と状況では嘘を言わない人物である、とマリアは判断する。

疑念の元も美神の言葉。

忠夫のバンダナに仕込まれている筈の発信機、そこからの信号の途絶。

普通に考えれば、耐火、耐水、対衝撃、六道家の十二神将の殺到にさえ耐え切った実

續のあるそれが壊れるほどの事態の発生を意味する。

——はたして、それはこの環境の中ではどれだけ致命的な事か。

だが、速度を落として並んだ美神の手の中にある機械は、そのモニターは、確かに動く点を表示している。

「周波数はコレ。バンダナが取れたか発信機が壊れたか知らないけど、竜神の装具が暫くの間は横島君を守るわ。でも——」

『……該当周波数に・動的反応・有り。宇宙服に・該当する装備・無し』

「厄珍堂の発信機。見舞いのフライドチキンと一緒にお腹の中、1ヶ月は持つって話よ？ 万が一、六道学院の強化合宿に付いて来られた時用だったんだけど、塞翁が馬つてやつね！」

何処か冷たい半眼で美神を見ているマリアはさて置き、得意げに受信機のスイッチを幾つか弄る美神。

モニターの表示が何度か切り替わり、そして求める距離単位の映像が写った。

手の届く距離まで接近し、美神の横から受信機を覗き込むマリア。

その光学センサーに映し出されたのは、高速で、こちらから離れるように動きつづける光点。

直線的な動きでなく、まるで何かを追いかけているようなその動き。

『即時の・救援を・提案!』

「駄目よ。多分、あんたじゃ相手が悪すぎる。私に任せて、あんたは——」
停止し、美神が指差したのは、後方。

振り向いたマリアのセンサーが感じ取ったのは、先程脱出した、宇宙船。

「あれを、何とか確保しておいて。竜神の装具のエネルギーが切れたり酸素が無くなったりしたら、私も横島君も死ぬわ」

高速で演算。

提案の妥当性・合理性を確認。

想定外のエラー、発生。

再起動、再確認——認証。

想定外のエラー。

原因不明、対処不可。

要再起動。

再起動——

「迷ってる時間はないわ。頼んだわよっ!」

動きを止めたマリアの横を、最大加速で美神がすっ飛んでいく。

それを押し留め様とした手を、困惑の目で見つめながら。

マリアは、その手を胸元に当て、もう片方の手できゅ、と握り締めた。

『・・・機械でも・迷う事が・出来るのですね』

感慨深げに、だが未練をふんだんに塗した表情を、誰も見る者のいない虚空に残しながら。

マリアは、月面に荒く着陸した船に向かって全力で加速した。

プログラムではなく、ただ、己の思いを判断基準に置いて、たった一つの答えを胸に。

『確保後・直ぐに・貴方の・元へ——!!』

アンドロイドの少女は、迷いの全てを振り切った、凜とした表情で虚空を駆ける。

——数分前。

冷たい月の砂漠の上に、大の字で寝転がる忠夫が居た。

そして、そこからほんの数歩の距離を保って、刺叉を地面に突き刺して、それを背もたれ代わりに肩膝を立てて座る魔族の女が1人。

名を、メドーサ。

振り仰いだ、何も無いが故に黒く見える空に浮かぶ青い星で、3度、忠夫と争った敵対関係にある筈の、蛇の性を持った魔族である。

初めは、日本。

竜神族の王女を狙った作戦で、最後の最後で邪魔をしてくれた厄介者。

次も、日本。

GS協会に浸透する為の作戦で、マリアと言う機械の少女と共に邪魔をしてくれた敵。

そして、香港。

原始風水盤の一件で、こちらのココロを揺るがしてくれた・・・何なのだろうか？

答えは出ない。

今この場で出す気も無い。

目前の男の為に、最早この身に利用価値など見出されていないに等しい。

こんな、上手くいけば幸運な、程度の。

しかし、無事に帰れるかどうかは未知数の、こんな作戦に駆り出され、あまつさえ、おそらく本命であろうもう一つの目的にもまともに係わってはいない。

利用価値の無い者に対する強者の態度など、神話の時代よりも昔から代わり映えしない。

捨て駒ぐらいに扱われ、最後にゴミのように捨てられるか。

若しくは、この作戦で――

「……くだらない」

馬鹿馬鹿しい。

だからどうした。

元より道を外れた外道の身。

今まで同じようにやってきた事を、同じようにやられるだけの事。

ならば、その策を食い破って、必ず逃げ延びてやる――そんな考えさえも浮かばないほど、メドーサは何かに疲れていた。

「――ああ、何もかもがくだらないねえ。くだらない過ぎて……笑う気も起きない」

神に、神族に疎まれたあの日から。

道を外れたあの瞬間から。

もしかすると、そのずっと前から。

逃げた所で、逃げ延びた所で——帰る場所など、在りはしない。

「だから、さ」

「忠夫を見る目には、疲れた色の中にも燃え盛るような色がある。

「ちよつとだけ、さ」

そして、その何分の一かだけ、何かを求める色がある。

「・・・迷ったんだ」

目を瞑り、息を整え、己のコンディションを調整する。

最も強く、最も誇り高き己を見せつける為に。

「・・・ふん。悪党は悪党らしく、何処までも行かなきゃならないのさ。降りる事なんて、

ハナから無理だ」

時を待つ。

「迷ってるあたしなんざ、あたしじゃないんだ。だから・・・」

男が、微かに動いた。

「これ以上、迷わせて、くれるな」

狼頭の侍が、張り詰めた空気の中、月光を吸い込み巨大な輝く渦へと変化した水面を凝視する。

地面にその尻を突き刺した釣竿の柄を柔らかに握り、新たに口を膨らませると幾つかの小さな玉を足元に吐き出した。

唾液に濡れている訳でも無いそれは、柔らかく光りながらその表面に同じ文字を浮かべている。

無言のまま、瞬きすらする事無く渦の中心を見つめる目が、何かを見つけて一気に集中の度合いを跳ね上げた。

月の色に、蒼白く輝く渦の中心から。

——真つ黒な手袋を付けた手が生えていた。

両足を地面に思い切りめり込ませ、釣竿を握る手に力を籠めて電光石火の速度で振り上げる。

先端についている釣り針が、重りのようにその手の周りをくるくると回って、それを追いかける釣り針が絡みつく。

そして、次の瞬間。

手から、漆黒の力が溢れ出す。

それはまるで触手のように蠢きながら、何本も、何十本も、何百本もの大木がいきなり出現したように吹き上がる。

どれほど渦が荒れ狂おうと、月光が降り注ぐと、小揺るぎだにしなかつた空間が、唸りを上げて軋み出す。

しかし、今にも砕け散りそうなその場所は、まるで触手を受け止めるようにその先端と溶け込み始める。

それに舌打ちしながら、狼頭の侍は足元の玉を渦に向かって蹴り飛ばした。

何時の間にか表面に浮かんでいた文字は、『封』。

幾つも幾つも、水面に浮かび上がり、時には沈みながら渦の中心へと流れていく。

中心部の水面は、徐々に蒼白い輝きを失って黒い輝きを放ち始めている。

そして、最初の一個が辿り着く。

手が、ぴくん、と小さく震えたかと思うと、突然ばたばたと慌てたように動き出した。

その手から溢れる奔流も勢いを増し、全身の力を振り絞って耐える狼頭の侍にも余波が襲い掛かる。

牙をさらけ出し、両足を更に地面に喰い込ませながら、それは最後に転がつていた2個を、手に持った竿に叩き付けた。

『迷』『彩』と書かれたそれを。

釣竿と針、そして糸が色を失い消え始める。

そこまですを確認した狼頭の侍は、見えなくなりつつある竿を口に啣えて地面に伏せた。

その頭上を、凄まじい勢いで切り裂きながら奔流が走る。

そうしている間にも、次々と玉が逆巻く渦の中心に飛び込み、そして徐々にその流れを小さくしている。

やがて最後の一つが辿り着き、手が徐々に沈み始め、そしてその中指の先端が消え、侍

が溜め息を付いて立ち上がった瞬間に。

最後の衝撃が、空間を揺るがした。

無形の衝撃波が水面をしぶかせながら走り抜け、片手で防御体勢を取った狼を直撃する。

その衝撃が突き抜けた瞬間、忠夫からは見えなかつた顔の半面、罅割れたその半面が砕け散り、その破片が辺りに散っていた黒色のオーラに染まりながら後方に飛んでいく。

それを見送る事無く衝撃をやり過ぎた狼は、今度こそ油断する事無く状況を見守り、そして何事も無い事を確認すると、全身の力を抜いて座り込んだ。

暫く呆然とした雰囲気醸し出していたその顔が、少し考える表情になると、再び、今度も半分砕けた狼面の口元に手を当て玉をいくつか吐き出す。

『同』

『伸』

『着』

『納』『豆』

『粘』『着』等々。

それはもう様々な文字を浮かべた玉を次々叩きつけ、そして漸く落ち着いたように大

きな溜め息を吐いた。

最後に、欠片の飛び去った方角を見送つて、「あちやー」という感じで額に手を当てる。その隙間から見える、砕けた半面にある筈の無い瞳は。

まるで。

それまでの狼の物ではなく、獣の物でもなく、人間の――

びくり、と宇宙服に包まれた腕が動く。

ゆつくりと持ち上がったそれは、何かを掴むように天を突き、だが何も掴まずに己の頭部を保護するヘルメットへと辿り着く。

「月の魔力に——当てられたかあっ!!」

「ガオッ!」

警戒と言う意味である程度の距離を取っていた筈なのに、一瞬にしてそれがゼロになった。

刺叉を斜めに構えたメドーサに、その頭に狼頭の侍の頭部を微かにダブらせた忠夫の爪が降り注ぐ。

足を踏ん張り、真正面からの一撃を、構えた刺叉で受け止め、そしてそのまま返しの一撃を喰らわせる。

筈、だった。

受け止めた衝撃が、刺叉を持った手ごと、メドーサの体を後方に吹き飛ばす。堪えるとか、受け流すとか。

そう言うレベルの力ではなく。

純粋な魔力の差と、異常な速度に対応し切れなかったが故の、単純な力負け。異質な筈の魔力と、月に満ち溢れたエネルギー。

それを背景にした、ただの暴力。

吹っ飛んだメドーサは背後の岩を砕きながらそれに埋まり、忠夫はそれを見て歯を剥き出しにして愉悦の表情を浮かべる。

喉を限界まで仰け反らし、高らかに勝利の凱歌を歌った。

「アオオオオオオオン!!」

——その胴体に、巨大な魔力砲が突き刺さる。

鳩尾を中心に無理矢理にくの字に曲げられた体が、先程のメドーサと同じく後方にすつ飛んで岩を砕いて粉塵を撒き散らした。

「……つたく。馬鹿力が」

濛々と吹き上がる砂塵の隙間から見えるのは、忌々しげに口元の血を親指で拭うメドーサの姿。

口の中を切っただけか、特に外傷を負った様子も無く、表情に苦痛の陰も無い。

「グル、グルルルっ!」

「だが、馬鹿だ」

砂塵が収まるよりも早く、己を噛みとめた岩を砕きながら忠夫が走る。

そのまま余裕の笑みを浮かべるメドーサに向かって、刃の如く伸びた爪を振り下ろし、そしてそれは彼女に掠る事すらなく無為に月の大地を抉る。

数十メートルは吹き上がった砂塵の向こうから、メドーサの嘲笑が響いた。

「クッククック。知恵も無く」

「グルアツ?!」

その笑い声の方角に向かい、砂塵ごと切り払うようにして爪が走る。

しかし、切り払われた砂塵の向こうには何も無い。

「罨も無く、策も無く」

「ガアアアアアツ?!」

前後左右に向かつて、地面を抉りながら、岩石を薄くスライスしながら、生み出した砂塵を更に細かく切り碎きながら、しかし本来の目的を果たす事など一度も無い。

「ただ、力任せに暴れる・・・獣だねえ」

メドーサの嘲笑が、目の前に出現した。

「超加速。お前なら、横島忠夫なら、知っている筈だ」

「グルツ!!」

目標を、獲物を見つけた獣が襲い掛かるように、左右の爪が一瞬のタイムラグを付けながら振るわれる。

それを、刺叉を僅かに傾け、更に忠夫の懐に潜り込みながら、完璧に、完全に、無傷で、この上なく問答無用に擦り抜けたメドーサの拳が、忠夫の顎をカチ上げた。

「魔力砲も、私が飛べる事も、しぶとさも、あの程度の一撃で落ちるような雑魚じゃない事も」

「グガッ?!」

その瞳が、刺叉を体ごと捻って全身の力を乗せたままのメドーサの瞳が、全くの無関心を示したその瞳が、忠夫の頭部を包む狼の頭に向けられた。

「——お前は、要らないな」

顎を跳ね上げられて完全に無防備となったそのどてつ腹に、真横から刺叉の柄が打ちつけられた。

狼は、顎を限界まで広げ、そしてそこから赤い液体を僅かに吐き出しながら、最早言葉も発せずに吹き飛ぶ。

勢いのまま進行方向の岩に突き刺さり、それを砕いても勢いは衰えず更に吹き飛ぶ。1 km近くも地面と平行に吹き飛んだ忠夫は、最後に地面に頭から突き刺さって漸くその生身での短時間飛行を終えたのだった。

そして、うつ伏せに倒れこんだその頭に、ダブった狼の影すらも無いその頭に、太陽の光を受けて出来たメドーサの影がかかる。

「あいつを出しな。弱くて、ゴキブリみたいに動き回って、悪知恵が回る、しぶとい、お前の数十倍も手強い——横島忠夫をつ！」

殺気を視線に籠めながら、刺叉が忠夫の首に当てられた。

(ヒイイイツ?! なんやあつ?! 何でこーなつとるんやあつ?!)

以上、現在の忠夫の脳裏を占める思考である。

一瞬の意識の混濁から目覚めてみれば、体中ほとんどもなく痛むわ、何故か後頭部に
とんでもない殺気が叩きつけられているわ、何故かとんでもなくライブでピンチー、も
うお腹一杯なんです勘弁してくださいな状況だわと、中々にイヤーンな状態であった。

(しかもこの声はメドーサやないかあつ! 神様、俺何か悪い事したつすかあつ?!)
強いて言えば覗きとか十字架を切り倒そうとしたりとか。

まあ、それを上回るトラブル磁石の性であるうが。

とりあえず、このまま寝た振りでもしながら美神かマリアが来てくれるのを待とう、と決めて必死で目を瞑って死んだ振り。

だがしかし、メドーサの刺叉が軽い音を立てて握りなおされ、先端がちよつと項に突き刺さる。

「・・・何時まで寝た振りしてる気だい？」

うわーい、ばれてーら。

「ぐ、ぐー」

「このまま死にたいか？」

「オクターブ下がった声に慌てて両手を振り、伏せていた頭を上げてみる。

中々に、壮大な光景であった。

それは、言うなれば山脈であった。

チヨモランマであった。

エベレストであった。

同じであるが、まあ、要するにド迫力なのだ。

おキヌや小龍姫は言うまでもなく、そして美神でさえも勝てないであろう、漢の夢。

それは巨大な――

「し、下から眺めると凄い迫力やあ〜！」

「ふんっ!!」

掬い上げるような爪先が、サッカーボールか何かの如く忠夫の頭を蹴り飛ばした。

縦に数回、綺麗に回転しながら後方に吹き飛ぶ忠夫。

潰れた蛙そっくりの声を出して再びうつ伏せになった忠夫は、地面に叩きつけられた反動で起き上がり――

「チャンス! すたこらさっさだぜえー!」

脇目も振らずに後方に向かって逃走した。

「・・・ちっ! 抜かった、この狸っ!」

「誤解だが結果オーライっ! そんなでもって狼じゃああっ!!」

灰色でなく、魔力でなく、白い狼の耳を後方に向けながら全速で逃げ出す。

それはどれほどみっともなからうと、どれだけ力が弱くても、いかに頼りなく見えようとも、メドーサが知る横島忠夫の姿であった。

「このっ!」

「うどわああっ?!」

飛び上がり、空中から魔力砲を連打し始めたメドーサに対し、うろちよるとまさに台所の黒い悪魔の如く驚異的な動きで逃げ回る忠夫。

まるでこちらの狙いを見切っているかのようなその動きに、メドーサの魔力砲は幾度

となく余波で吹き飛ばしながらも一度足りとも直撃を与えられていない。

「ふははははっ！　なんかしらんけど今日の俺は絶好調だぜっ！」

「ちっ！　なら——」

「うおおおっ?!　そう言えばヘルメットが無いっ、さ、酸素っ!!」

「今更かいっ?!」

「死ぬのは嫌やあぁっ！　まだ嫁さんも貰ってないのに、こんな寂しい場所で死にたくない——」

どぼどぼと涙を撒き散らしながら、それでも足を止める事無く逃走を続ける忠夫にちよつと早まったかねえ、などと後悔を浮かべたメドーサの前から、忠夫がいきなり忽然と消えた。

「——っ！　超加速っ?!　しまった、竜神の装具「嫁に來ないかぁあっ?!」うわあっ!!」折角の超加速も、竜神の装具も、月の恩恵も何もかも、自分の生命のピンチに動揺してとり合えず状況を弁えずトチ狂いました、な忠夫には無力であった。

視界から消えたと思った次の瞬間、何時の間にかこちらの手を握っていた忠夫を、反射的に真上から肘で殴り落としたメドーサは、荒い息を付きながら地面に着弾した忠夫の所へ降りていく。

勿論刺叉はいつでも繰り出せるように、全身全霊で集中していつでも超加速状態に入

れるようにしながら、だ。

「真面目にやる気は無いのかいっ！」

「失礼なッ！ 俺はいつでも本気で求婚しとるわいっ!!」

時と場所と立場と相手を弁えないのが玉に瑕。

叩き落された忠夫はがばつ、と跳ね起き、目の前に突き出された刺叉の不穏な輝きに顔を引き攣らせる。

「全く……なんでこんなのがわたしの最後の相手なんだろうねえ」

「さ、最後？」

溜め息と共に、疲れたような視線でこちらを見てくるメドーサの瞳を見返す忠夫。

メドーサは、何でもないさ、と小さな声で呟くと、刺叉を更に突き出して弄ぶように忠夫の喉をその先端で突つついた。

「さあ……最後の質問だ。この期に及んで、これだけ危機的な状況で——あんたは、まだわたしを仲間に誘えるかい？」

嘲笑を浮かべたメドーサの顔。

何処までも悪役な、何処までも甚振るような、そんな歪んだ喜悦を浮かべた、そんな表情を目の前にしながら。

忠夫は、心底不思議そうな顔で聞き返した。

「当たり前だろ？ 何で今更聞くんだ？」

「い——命乞いかい。そんな事言っても、安全な所まで行ったらあつさりと手の平を返すんだらう？」

僅かに、ほんの少しだけ。

メドーサの声が、躊躇った。

「いんや。美人のおねーさんと喧嘩するのは嫌やしなー。それに、最後つちゅー事は：もしかして、ヤバイ立場にでもなってる？」

「…ああ。多分、この作戦が上手くいこうが失敗しようが、もうわたしに帰る所は：あんたに言ってもしょうがない、か」

「マジでっ?! やほーいっ！ なら嫁にならんかあっ?! 大歓迎、もう忠夫、土下座でもなんでもしまっせえっ！」

心底から喜んでいる目の前の馬鹿に、なんだか体中から真剣身とかやる気とかがこっそり奪われていく感触を感じながら。

それでも、自分の事を、喜んで受け入れてくれると言うその言葉に。

嘘でも、真実でも構わない、そんな感慨さえ思い浮かべながら。

メドーサは、本当に、久し振りに——微笑んだ。

「ああ…考えてやっても、良いかも知れないね」

『聞いたぞ．．．。その言葉、確かに聞いたぞっ！』

「——ッ?! ベルゼバブっ!!」

「へ?」

忠夫の目に写ったのは、小さな、本当に小さな穴だった。

それは、驚いたように虚空を見上げたメドーサの脇腹の直ぐ横の空間に開き、そこから小さな弾丸を、ベルゼバブを吐き出した。

重々しい音が響いた。

メドーサの脇腹に突き刺さった弾丸は、液体を撒き散らしながら反対側に突き抜け、そして再び開いた穴に消えていった。

彼女は、その己に開いた大きな穴に手を当て、至極残念そうな表情を浮かべ。

——そして、ゆつくりと、倒れた。

「メ、メドーサ？ メドーサっ?!」

「……五月蠅いねえ。一々騒ぐんじゃないよ……。分かったた事さ。ああ、分かった事だ」

慌ててその体を支える忠夫の目前で、メドーサの体が力を失っていく。

「馬鹿野郎っ！ お前、俺の嫁になるって言ったじゃねえかっ!!」

「……魔族が嘘をつかない訳が無いだろう?」

「それこそ嘘だろうがっ!!」

急速に熱を失う体と、押さえても止まらない暖かい液体。

そして、意外なほどに軽い身体。

目が焦点を失い、段々とその瞳に宿る輝きも薄れていく。

「……クツクツクツ。さ、て。何処から何処までが嘘なのか——嘘塗れの生き方だよ」

「何とかしろよ！ 何か無いのかっ?!」

「あるよ」

簡単に、簡潔に述べられたその言葉を、忠夫はあまりの都合の良さに一瞬理解する事

ができなかった。

だが、理解してしまえば話は早い。

希望の色を濃くした忠夫の瞳が、早く言えと叫んでいる。

薄れ行く視界の中で、何でこいつはこんな馬鹿なんだろう、と取りとめの無い事を考えつつ。

メドーサは、それを舌に乗せた。

「・・・あんたの命、賭けられるかい？」

どうせ、戸惑うのだろう。

一瞬でも迷う様子が見えたのなら、それこそ魔族の嘘だ、と言って目を瞑る。

だが、だがもしも、もしも――。

「さっさとしろおっ!!!」

――迷う事無く、答えてくれるのなら。

——それは、
血の味にするキスだった——

第參拾捌話。

「——急げっ！ 周辺の魔力が安定していない内に回収するんだっ！」

「神無様！ 内部には誰も居ませんっ！」

「何っ?! く、一步遅かったのかっ」

辺りを徐々に風いで行く魔力の嵐が吹き荒れる中、月の砂漠に斜めに傾いて着陸した美神達の乗ってきた宇宙船の周りに、奇妙な仮面をつけた女性達とそれを指揮する刀を持った女性の姿があった。

そのハッチを押し開けた仮面の女性の1人が、指揮官と思しき女性に大声で報告し、それを苦虫を噛み潰したような表情で受けた女性は暫しの黙考の後宇宙船の確保を指示する。

統率の取れた動きで宇宙船のあちらこちらにロープを巻きつけ始めた部下を見ながら、指揮官は周辺に意識を配っていた。

その視界に、小さな光点が写る。

身構えるよりも先に、その光点は一気に大きくなつて上空を通り過ぎた後、すぐさま反転して何かを構える。

遠目には分からなかったが、接近すれば良く分かった。

それは、鉄パイプを何本も束ねたような銃身を持った兵器と、それを抱えて無表情にこちらを見下ろす女だった。

誰何の声を放つよりも早く、その銃身が回転を始める。

「ふ、伏せろーっ!!」

叫ぶだけ叫んでいち早く地面に伏せた指揮官を掠めるように、銃撃音というよりも既に爆音に近いそれが頭上を通って後方で巨大な砂塵を巻き上げた。

斜線上の全てを打ち砕きながら、その猛威は指示に従って伏せた部下たちを満遍なく掠めるようにして穴を穿ち、しかし余波でさえも傷一つつける事無く大地を抉る。

不毛な大地を十二分に鉛弾で耕した後、余熱を吐き出しながら回転を終えたガトリング砲を再び軽々と構えたその脅威は、凜とした声で宣言した。

『フリーズ！ 動けば・撃ちます！』

「う、撃つてから言うなああっ!!」

指揮官のちよつと涙を浮かべた抗議に、はた、と動きを止めたその物騒な女性は小首を傾げ、僅かに困ったような表情を作ると。

おもむろに訂正した。

『動かなくても・撃ちます！』

「『無茶苦茶言うなああつ!!』」

とり合えず、そのとてつもなく軽そうな引き金が引かれる前に、その場にいた女性たちが全員武器を捨てて両手を上げながら、涙ながらに抗議をしたのは当然の行為であつただろう。

しかしその抗議に対し、その女性は完璧なスルーを見せながら続けて叫ぶ。

『直ちに・この場から・退去して下さい。その船の所有権は・こちらに・あります!』

その宣言に対し、仮面を付けた女性達の間でざわざわと小さなざわめきが起こる。

暫しの後、彼女達の視線が一点に集まり、それを受けた指揮官は物凄く嫌そうな顔をしながらも一歩前に進み出た。

「……つ、つかぬ事を伺うが、もしや地球から救援に来られた方か?」

『……え?』

「我らは月の女王、迦具夜様に仕える月神族の者。何やら誤解があるようですが……」
変化は、一目瞭然であった。

ガチリ、と動きを止めたガトリング砲の所有者——マリアは、暫しの硬直の後、おもむろに視線を逸らして冷や汗たらり。

変な所で器用なアンドロイドである。

いや、これも生体ベースの上にメタソウルを使った霊力の使用までも可能にしたドク

ター・カオスの細工であろうが、それにしても凝り過ぎの感がありである。

ともあれ、ここそと手を一振り物騒な兵器を何処へとも無く収納したマリアは、すたつと指揮官の目の前に着地して不自然なほどに無表情で右手を差し出し、一言。

『拳を・交わして・友情を・育みました。——良い話・ですね?』

「……こ、これが救援かあああつ?!」

『さあ・握手を』

「交わしてないっ! 銃弾だし、一方的だし、そもそもこつちを知らなかっただろうがっ?!」

『……知ってました』

「『え?』って言ったじゃないかっ! 大体今の間はなんだあつ?!」

そこまで無表情を保ちながら右手を突き出しつづけていたマリアは、そろそろ時間が掛かり過ぎだと思つたらしく、こほんと空咳一つ。

そして、空いた左手を一振り。

『私の・ログには・何も・ありません。さあ・握手を』

「……はい」

右手に相互理解の握手を。

相手もそれを受け入れてくれたというのに、何でとても蒼褪めているのだろうか。

理解に苦しむが、これも月神族というものなのだろう。

郷に入れば郷に従え。

問題無し。

『では・船体の・保護を・お願いします』

一言だけ残して再び脚部のロケットに着火したマリアは、部下達に慰められている指揮官を見下ろしながら飛び去っていった。

左手に、意味も無く——と、本人だけは思っている——回転させてしまったガトリング砲を抱えながら。

そして、左手には武器を、と言った所だろうか。

何処の宗教戦争だ。

竜神の装具を身に付け、受信機を睨み付けながら美神が空を駆ける。

視線の先にはちよこまかと激しく動きつづける光点が一つ。

先程まで激しく動き回っており、そしていきなり止まったかと思えば再びちよこまかと動き出す。

かと思えばつい先程から光点がいきなり消え、そして別の地点に出現すると言う行動を繰り返し始めている。

「あんの馬鹿！ こんな所で超加速なんて乱用したら、ガス欠で身動き取れなくなるわよ！」

更に速度を増しつつ、光点の予想移動地点へと駆ける美神。

うろちよろうろちよろと不規則に動いてはいるが、何せその美神の事務所の所員、忠夫の行動だ。

大体の予測くらいは、簡単に付く。

まあ、それは、美神にとつての常識であるが。

「そろそろ見える筈——居たっ！」

上空を飛んでいるが故に、美神はその姿を容易く発見する事が出来た。

どこかふらふらと、それでもかなりの速度で大地を駆ける忠夫と、それを追いかける

ようにして蠢いている無数の緑を。

それが忠夫を囲むように動き、球体を形作りながら目標を取り囲む。

次の瞬間、圧縮されたようにそれが潰れ、そして轟音と土煙が舞い上がった。

「・・・うわあ」

「あーっ！ 美神さん美神さん美神さはあああんっ！！」

「ちよ、馬鹿、こつち来るなああっ！！」

潰されたと思った忠夫は、何時の間にかその包圍網の外をこそこそと逃げ出している。

超加速を使ったようだが、とりあえず今だガス欠には陥っていないようだ。

腹部を押さえながら全速力で駆け出した忠夫は、斜め前方に美神を発見してそちらに必死で方向修正。

どぼどぼと涙を流しながらこちらに向かって来る忠夫に、美神は慌てて拒否の叫びを上げるが心細さとピンチで一杯一杯の忠夫は問答無用で走ってくる。

そして、その後を追いかけて。

『待てえええっ！！』

「蠅、蠅がああっ?!」

「ベルゼバブの群なんか引つ張ってくるんじゃないわよーっ！！」

緑色に染まったベルゼバブの群が、空間を羽根が叩く音で埋め尽くしながら、収まった土煙の向こうから大群で出現した。

数を数えるのすら面倒くさくなるような、と言うか、目視する事すら脳が拒否する光景である。

津波のような勢いで迫る群に、美神が慌てて背を向けたのも当然と言えば当然だが、背を向けられたのはベルゼバブだけではない。

その津波の前方を必死で駆ける忠夫もまた、置いてかれた形になる。

当然、忠夫も必死である訳なので、置いて行かれては堪らないとばかりに。

「みつかみさああん!!」

「きゃあつ?! こ、こらっ! しがみ付くんじやないのっ!!」

「だって、だって、死ぬかと思ったんすよおおおつ?!」

跳躍一閃、次の瞬間には美神の腰をがっちりキャッチ。

真つ赤になって忠夫を振りほどこうとする美神だが、忠夫も振り落とされては堪らないので肘とか膝とか拳とかが届かない位置まで、美神の身体をホールドしながら移動する。

「こ、このセクハラ狼があああつ!!」

「やーらかいっ! 暖かいっ! おお、俺は今生きてるぞおおおつ!!」

例えここで助かっても後で死にそんな行為である。

だがしかし、現在進行形で抱きつかれている美神が黙って居る訳も無い。

背中に回ろうとした不屈き者の襟首を掴み、そのまま閃光のような膝蹴り一閃。

顎を力チ上げられて上体を反らした忠夫の足首を引つ掴み、そのまま上に引つ張つて上下を逆さまにすると、おもむろにその胴体に細い腕を回してがっちりホールド。

地面に向かって大加速。

「死ねこの馬鹿っ！」

完璧なパワーボムであった。

地上3階程の高さから叩き落された忠夫が地面を碎き、凄まじい勢いで砂塵が舞い踊る。

一瞬目の前の展開に呆気にと取られて動きを止めていた蠅達が、その煙幕に向かって雪崩れ込み。

次の瞬間に炸裂した、数個分もの精霊石の光が、彼らを問答無用で薙ぎ払った。

「ちいっ！ この依頼が終わったら黙って借りとくつもりだったのにつ！」

「そ、それを世間一般では窃盗と言うっす……」

小脇に抱えたボロボロの忠夫、何故か微妙に首が傾いている彼に拳を一つ振り下ろした美神は、戦果を確認する程間も置かずに再び超加速に入る。

煙幕代わりの砂煙の中に、ついでとばかりに置いてきた虎の子の精霊石達は上手く効果を発揮してくれたようで、視界の端に移る制止した緑色の大群達は完全にこちらを見失っているようだ。

それだけを確認した美神は、そのまま前方だけを見て宙を駆ける。

行き先は、先程宇宙船が不時着した辺り、おそらくマリアがこちらに向かつて来るであろう方向である。

暫し、超加速のまま疾走を続けた美神は、後方から緑色の影が消えたことを確認してすぐさま地面に着地。

先程殴ったお陰で首が元通りになつてゐる忠夫を放り出すと、超加速を解除してマリアに通信を開始した。

「マリア、聞こえる？ こっちは無事に横島君を回収できたわ。そっちは？」

無事、と言つても現在は美神の横の地面に、前衛芸術まがいのオブジェとなつて突き刺さつて居る訳であるが。

びくびくと奇妙な痙攣を始めたそれに一瞥を送り、まあいいかとあつさり思い直して通信機からの返答を待つ美神であつた。

『——クリア・良く聞こえます・ミス・美神』

ややあつて響いた声は、何処かしら安堵の色を感じさせる物。

『現在地より・ミス・美神の位置までの・到着予想時刻は』

「待つて。敵が居るの、こっちに來ないほうが良いわ。あなたのロケットは目立つから」
確かに、竜神の装具の力で宙を駆ける事の出来る美神達に対し、マリアはあくまでロケットを使用した飛行である。

故に、どうしてもその噴出炎が目立つてしまい、遠距離からでも容易く捕捉されてしまう可能性が高い。

とは言え、出力等の関係上、重量物の運搬には有効なのであるが。

それも、美神がマリアに宇宙船の確保を指示した要因なのである。

『ノー・プロブレム。敵性存在・確定ならば・直ちに合流する事を・提案します』
それもまた、選択としては間違っていないのであろう。

純粹に戦力を増強する事が、有利に働かない事は少ないのだから。

だが、今回は状況が悪すぎる。

相手の数が問題なのだから。

今度ベルゼバブの群に捕捉された場合、脱出は難しいだろう——先程の忠夫や美神のように超加速でも使わない限りは。

しかし、現在の状態から言って、エネルギーの使用は極力避けるべき物。

故に、美神は通信機に向かって否定の言葉を掛け様とし、しかしそれを遮って直ぐ側から掛けられたマリアの声にかなり驚いた。

『それに・既に到着・しています』

「ま、マリアっ?!」

振り向いた美神の視界に、しかしマリアは存在しない。

だが、声は確かに聞こえるし、そう、言うなれば——気配に近いものがある。

『——光学迷彩・霊波迷彩・対探査装置・解除。ステルスモード・停止。通常モードに・移行』

「……あのトンデモ科学者、無茶苦茶するわねー」

再び響いたマリアの声の発信源から、その姿がいきなり出現した。

マリアの娘達の中でも、偵察・情報収集に特化した存在であるシータの機能、ステルスシステムを使用していたらしい。

実の所、ガトリング砲を振り回したのもアルファの機能だったりする訳だが。

マリアが心配になったカオスが、アルファ達に比べて拡張性に富むマリアに、今回色々と持たせてみたのだ。

勿論、彼には彼でデータ収集等の目的がある訳だが、どうしても単なる心配性の父親が、遠足に出かける娘にごちゃごちゃと武装させてしまった感が否めない。

『ドクター・カオス・ですから』

さらり、と美神の毒づきに対応したマリアの姿は、何処となく胸を張っているように見えたらしい。

えっへん、である。

ちなみに忠夫は、何時の間にか痙攣が止まってグツタリしていたり。

とまれかくあれ無事？合流を果たした美神達は、未だ首を捻ったりお腹を押さえたりと落ち着きの無い忠夫に美神が竜神の装具の額当てを貸したり、それを見ていたマリアが力オスに強請って絶対に壊れない発信機付きバンダナを作って貰ってプレゼントし様とか思っていたりと色々あつた物の、マリアの先導で月神族たちの居る船の所へ。

「嫁に來ないかーっ！」

「いきなり恥を晒すんじゃないっ！」

「救援はっ?! 地球からのまともな救援はまだなのかああっ?!」

『呼ばれ・ましたか?』

「いやーっ! こんな救援はいやああっ?!」

・・・・更に色々あつた物の。

最早主にマリアと忠夫と美神の拳が光って唸ったせいとは言え、疑いやら恐れやら呆れやらでちくちくと突き刺さる視線を向けてくる月神族に引き連れられ。

到着したのは、巨大なクレーターの端にある小さな谷の隙間であつた。

「ようこそ、遠来よりの方々。私は月の女王、迦具夜と申します・・・」
ごきん、と鈍い音が響いた。

「どーも。で、いきなりだけど詳しい話を聞かせていただけるかしら？」
開いた手をぷらぷらと振りながら、美神が目の前の女性に語りかける。

足元まで届く長い髪、爪先まで覆い隠すゆつたりとしたスカート。

それでいて、豊かな体のラインをはつきりと浮き立たせた服は、確かに目の毒である。
う。

女王、迦具夜姫は、美神の足元で頭頂部を押さえて蹲る忠夫を戸惑ったように見た後、
その深く、だが優しさと気品の調和の取れた瞳で美神を不思議そうに見返した。

「その男性の方は、人狼族の者でしょうか？」

「・・・ええ、一応ね」

「一応じゃないっすうううっ!! 何でいきなり殴るんすかああっ!!」

二本の腕の力だけで上体を反らした忠夫は、自己紹介する暇すら与えず己を殴り倒した
雇い主に抗議する。

そもそも、今回はまだ求婚のきの字も出していないのに、何故殴られなければならない
のか。

非難を籠めた視線で見ると、返って来るのは冷たい視線。

己の日頃の行いを省みる、と言う意思の籠められた、それはそれは否定の出来ない視線であった。

月に来てからだけでも2回はやってるし。

その後方ではマリアが珍しくも非常に不満そうな表情を浮かべているが、尻尾を丸めて耳を伏せた忠夫には見えていなかったり。

「で、月の女王様が何でこんな貧相な所に居るのかしら？」

辺りを見回した美神の言葉も当然だろう。

周囲にあるのは粗末な幾つかの椅子と、部屋の一面で砂嵐を映し出すモニター群、そして岩がそのまま表出している壁。

まるで何処そのテロリストの秘密基地、と言った感じである。

「……それに付いては、まことに我ら月警官の手落ちとしか。不甲斐ない……！」

搾り出すような声で、苦渋に満ちた発言をしたのは美神達をここまで案内してきた月警官の長、刀を持った月神族であった。

神無、と迦具夜の呟きに答えるように頭を下げたその女性は、僅かに目の端に悔しさゆえの涙を浮かべつつ事の次第を語っていく。

「……月の大地に、あの蠅の魔族が現れたその時、我らは警告の後攻撃を仕掛け——そ

の小ささと、俊敏さに苦戦しながらも一度は追い払う事に成功しました」

今思えば、それは追い払ったと言うよりも頃合を見て相手が引いていったようなものだった、と言う。

それでも部隊の半数以上が傷付き、自力で動けない者も多数出る始末。

何とか月神族の城——人間達の存在する物質界と霊界の境目、亜空間に存在するそこに帰還した後。

1時間ほどで、城の内部に異変が起こった。

神無の言葉を継ぐように、目を伏せた迦具夜が言葉を紡ぐ。

「……気が付いた時には手遅れでした。城の内部にあの魔族が溢れ返り、私達は脱出するだけで精一杯——私達の城は、あの魔族に乗っ取られてしまいました」

おそらく、撤退の際に開いた穴から侵入されたのだろう。

亜空間の内部にも満たされた月の魔力は、ベルゼバブにとつては格好の餌。

あつという間に増殖に増殖を重ねた数の暴力に、反撃の拠点となるであろう月神族の城は乗っ取られ、地球との連絡も救援を求めた後は魔族からの探査を避けるため中斷。

僅かに地表をモニターしながら地球からの援軍を息を潜めて待つていることぐらいしか出来なかつたのだと。

「ふ……ん。先ず拠点から潰すとは、ね。なかなかやつてくれるじゃない」

「ですが、私達にもまだ出来る事はあります。正直な話、正面切つてあの魔族と戦つても勝てる気はしません。が、貴方達のサポートくらいならば——臚、居ますか？」

「は、ハハハ」

迦具夜の招きに答えて、粗末なドアを開いて出て来たのは何処か平安時代の陰陽師にも似た服を着た女性であつた。

神無が清流のような雰囲気とするならば、こちらは優しげな湖、と言つた所だろうか。静々と美神達の前まで歩み出たその女性は、美神達に微笑みかけながらその額の竜神の装具を外していく。

「エネルギーの補充をいたします。暫しお待ちを……」

「あ、ありがと」

忠夫と美神から装具を受け取つたその女性は、何故か忠夫にウインク一つ残して再びドアを潜つて行つた。

「ま、マリアさん？ 何故睨まれるのですよーか？」

『……………』

「そして、もう一つ」

そう言つた光景を見事にスルーして見せた迦具夜姫は、目線で神無に合図を送ると一枚の地図を持ってこさせる。

広げられた周辺のものと思しき地図に書き込まれているのは、現在地と書かれた赤い点と、もう一つ。

「私達が脱出に使った、緊急用の脱出路です。此処からなら、城に潜入できるかと・・・」

「・・・つつつてもねえ」

難しい表情の美神が、腕を組んで唸る。

依頼内容は月から魔族を追い出す事。

と言う事は、自然と城に巢食う蠅魔族を何とかしなければいけない訳だが。

「あの数つすもんねえ。潜入できても、袋叩きに遭うのが関の山のような気がするんすけど」

ベルゼバブの、反則とも言える物量である。

一対一ならばそう苦労はせずとも何とかできるであろう。

美神とマリア、忠夫が居るのだから。

しかし、はつきり言つて先程忠夫を追いかけてきたのがその全てだとは思えない。

しかも、追いかけてきたベルゼバブの数だけでもとんでもない量なのだ。

城を攻めるとなると、それこそあつという間にこちらが削り殺されるであろう。

「・・・成る程、ね。何とかなるかな?」

「うえっ?!」

だが、暫し口を噤んで思考に浸っていた美神の口から出たのは「何とかなる」の一言であった。

身を仰け反らした忠夫の目の前で、美神はまるで悪役のような笑みを作ると、神無に向かつて確認を取る。

そして、それが無事である事を確認した美神は、今度はマリアに向かつて指示を出した。

曰く――

「マリアー。あれ、時限爆弾みたいに出来る？」

『イエス・ミス・美神。所要時間・30分』

「み、美神さん……いやーな予感がするんっすけど、アレってなんすか？」

冷や汗をたらだらと流した忠夫が、どっかと椅子に座って休憩を始めた美神に恐る恐る質問する。

「核ミサイル」

「……はっ?」

「いやー、宇宙船に積んどいて良かったわ。備えあれば憂い無しって奴よねー」

至極あっさりとのたまわった美神の言葉に、忠夫の顔から一気に血の気が引いていく。

核ミサイルを本気で使用するつもりなのが怖いのもある。

何処から手に入れたかは知らないが、それをおそらく金の力で手に入れた美神が空恐ろしいのもある。

だが、最も忠夫の顔から血の気を引かせた原因は。

「じ、時限爆弾つすか?」

「そ。頑張つてね、横島くん」

「やっぱりかああつ?!」

時限爆弾と言う事は、誰かが設置しなければならぬと言う事で、とどのつまりこう言った場合、ほぼ間違いなくその役割が回ってくるのが自分だと理解していたからである。

マリアが行っても良いのかも知れないが、いかにステルスが使えても、巨大な兵器を使用できても、彼女には速度が足りない。

超加速と言う、まさに神魔の領域の速度に達する事が出来ないから。

それに、もしマリアが「行く」と言っても、多分忠夫は自分が行くと言っただろうし、それは美神でも同じである。

そんな思考は、美神にはお見通し。

だったら、最初から雇い主が言い出してやれば、話は簡単に進むだろう。

「文句ある？」

「・・・無いです」

肩と頭を落とした忠夫に、その視線から見えない事を確認した美神は、その旋毛を優しさと信頼の籠められた微笑で眺めるのだった。

「ちよ、ちよつとトイレに行つてきまつす」

「こちらです」

ふらふらと蒼褪めた表情のまま、ずりずりと足を引き摺って神無の後をついて部屋を出て行く忠夫。

それと入れ違いで入ってきた臃は、美神にエネルギーの補充が終わった竜神の装具を手渡し、首を傾げながら尋ねてきた。

「あの、男性の方、とても顔色が悪かったですけど・・・」

「柄にも無く緊張してるんですよ。放つて置いて良いわよ。やる時はやってくれるから」

本人が居ない故に言える言葉ではあるが、本人の目の前で言つてやれば——いや、言わないが故の美神であろう。

簡素な板で仕切られたトイレの中で、液体がばちやばちやと音を立てて流れ落ちる。赤いそれは、忠夫の口元から零れた血液。

渦を巻いて流れていくそれを見ながら、忠夫は激しく蠢く己の腹部に手を当てて、その手をゆっくりと口元に当てる。

ごぼり。

更に大きな血塊が、忠夫の口から零れ落ちた。

「げほっ！ げほっ！ . . . つ、月じゃなかったら死んでたかも知れんなあ . . .」
腹部の盛り上がり、徐々に喉元にまで動いて来る。

痛みに顔を顰めながら、それでも忠夫は悲鳴を上げない。

ただ、目を瞑って堪えている。

「が、頑張れ俺っ！ 多分もうちよつとっ！ でも、もう少し手加減してほし——」

一際、大きな音が響いた。

その、ちよつと前。

狼頭の侍は、手に持った、びちびちと跳ねる活きの良いビッグ・イーターを見つめて思案していた。

随分と長い間考えていたが、漸く納得が行ったのか、おもむろにそれを口元に持つていき、あんぐりと顎を開ける。

ビッグ・イーターは本気で慌てて嫌がり、更にびちびちと暴れ出す。

その尖った牙が侍の目の前で噛み合わされ、その衝撃と音に思わず離れた手から、とんでもない勢いでそれは逃げ出していった。

後に残るは、背後にまな板やら包丁やら鍋やらを従えた、非常に残念そうな侍のみ。
——悩んでいたのは調理法だったようである。

第參拾玖話。

まず、忠夫の口を抉じ開けて巨大なビッグ・イーターがずるん、と出て来た。

「……」

『……』

口元からまだだらだらと血を流す青年と、その口内から出て来たずんぐりとした頭部に幾つもの目を持った怪物が視線を合わせて沈黙を呼ぶ。

ぎよろんとした眼球、ぎつちりと敷き詰められた牙。

何処を如何取つても可愛いとは決して言えない、見るだけで危険と分かる凶悪な怪物であつた。

状況を理解しえていない表情でそれを眺める、狼の耳を持った口元を真つ赤な血で染める、まるで獲物をマルカジリした直後の様な様相の半人狼の青年であつた。

「ぎやー……?！」

『ギョルワアアアツツ?!』

耳の毛を全部逆立たせながら忠夫が叫び、それに触発されたように怪物が魂消るような悲鳴を上げる。

互いに互いの事を認識した瞬間の、魂の底からビビッた悲鳴の二重奏。

狭い狭いトイレの個室の空間に、仕切りも砕けよとばかりの叫びが木霊する。

「何か変なの出たああっ?!」

『ギョルル・．．！ ギョツ?!』

「あ」

忠夫が背中を仕切り板に叩きつけながらそう叫ぶと、反対側に勢い良く後退りした怪物が、思いつきり——落ちた。

穴に。

何処とは、言うまい。

こんな所にある穴など、一つしかないのだから。

暗闇に消えていった怪物の痕跡は、忠夫の口元から出て来た時に付いたであろう唾液と血液の跡だけ。

おそるおそる怪物が落ちた穴を、鼻を摘んで覗き込んだ忠夫の瞳には、半分の恐れとなんだか哀れむような色。

しかし驚くべきなのは、精霊である月神族の秘密基地にトイレがあつた事か、それとも何故か所謂ポットン便所と言う田舎では割とポピュラーなタイプだった事か。

——水洗ならばこんな悲劇は起こらなかつたのに．．．と、警戒しながら覗き込んだ

忠夫の目の前を掠めて。

「冗談じゃないよおおつ!!」

「ぬおおおおつ?!」

怪物が、まるで若い女性のような声を口から出しながら穴から飛び出してきた。

奇跡的に、特に目立った付着物は無い。

必死で身体をくねらせた怪物の努力が実ったのか、それとも月神族にはトイレを利用する機会が無いのか。

答えが前者ならば夢が無いが、後者と言うのもそれはそれで謎である。

ともかく、天井近くまで跳ね上がったそれは最後の力を振り絞って床に着地。

まるで慌てて服を脱ぐように、その背中が割れて脱皮。

残った皮を振りほどくようにして現れたのは――

「なっ、何でいきなりこんな所なのさっ?!」

「・・・メドーサああつ!!」

「え? あ・・・」

ぜはぜはと息を荒らげる、年の頃で言えば忠夫の一つか二つくらい下であろう少女、紫色の長髪を靡かせた、将来の素敵なスタイルが約束されている身体のラインを持った、ミニスカートを履いた――狼の耳と、スカートの端から狼の尻尾をはみ出させたそ

の女性の名を、メドーサと言う。

何故か若返っているようだが、本人である事を簡単に理解できるくらいには面影があり、だが以前に比べて毒気の抜けた、むしろ可愛さの面に出るその容貌には、残念な事に今は強張りが強く出てしまっていた。

トイレに落ち掛けたともなれば当然であるが。

かなり本気で焦った表情を浮かべていたメドーサが、周囲の状況を把握するよりも早く忠夫がその背中までがっちり腕を回して正面から抱きついた。

ひどく驚愕の表情を浮かべたメドーサが、それでも聞き覚えのある声に僅かに、少しだけ頬を緩める。

そして、己よりほんの少しだけ高い所にあるその顔を見上げ、忠夫のその頭部についている狼の耳、そして口元を濡らす血液を目にした瞬間。

忠夫の腕の中で、石化の魔眼にでも魅入られたかのように硬直した。

「良かった・・・！ 良かったなあおい、メドーサっ！ ・・・・あ、あれ？ メドーサ？」
「・・・く」

彼女の視線は忠夫の耳に釘付けであった。

言葉も耳に入らない様子でそれを凝視していた彼女の手の平が一瞬光り、そしてその手に見慣れた先が二つに分かれた槍、刺叉が出現する。

それを片手で握り締めた彼女は、瞳に恐怖と怒りを浮かべながら、思い切りそれを振りかぶり――。

「食われてたまるかああっ!!」

「んぎやあああつ?!」

異様な雰囲気に腕の力を緩めた忠夫の側頭部を、髪の毛を数本持つていきながら振り落とした。

音速でも超えていたんじゃなかろーか、と言う具合にその先端は固い岩盤の床を砕いて罅割れさせる。

トイレを轟音が揺さぶり、尻餅をついて後退する忠夫の頭部を目標に、メドーサはもう一度刺叉を振りかぶった。

彼女の瞳はちよつと逝つちやつており、忠夫はまさに蛇に睨まれた蛙状態である。

動きの鈍くなった身体を必死で動かし両手を振る忠夫。

頑張ったのに何故かいきなり訳の分からない理由で叩き殺されたとあつては悔いの残る事間違いない無し、主に嫁がもらえていない事だが――なので、彼も彼なりに必死である。

「ま、待てつ! 落ち着けメドーサあつ!!」

「ふ、ふふふふつ!! この私を、食べるものなら食つてみなあつ!!」

駄目でした。

余計なフエイントも無駄な動きもまともな精神状態にも一切無く、虚ろな笑みを浮かべたメドーサが、瞳をキュピーンと輝かしながら刺叉を振り上げる。

突き刺す、ではなく叩き潰す気満々である。

そして、その先端が真つ直ぐに天井を指し、そのまま全力で叩きつけられようとした、その瞬間。

「何事だっ?!」

トイレのドアを、真つ直ぐに伸ばされた脚が吹き飛ばした。

メドーサと忠夫の間を、真ん中から蹴り折られた扉がすつ飛んで行き、そしてそれに視界を一瞬遮られたメドーサの瞳に正気の色が戻る。

月神族の秘密基地、そのトイレにて。

なんとも曰く言い難い沈黙が漂った。

耳を伏せて真剣白羽取りの前段階の格好で、扉を蹴り開けた神無を「やば」って感じに見ている口元血だらけの忠夫と、きよとん、とした表情で忠夫と神無に視線を往復させながら刺叉を振り上げた姿勢のまま固まっているメドーサ。

そして、そんな2人を呆然とした表情で眺めていた神無の瞳が、メドーサを捉えて困惑したように広がり、次の瞬間には驚愕で埋め尽くされる。

そのまま弾かれたように刀を抜いた神無は、構えを取りながら叫ぶ為に思いつき呼吸を吸い込み。

「敵グモーツ?!」

「しーっ?!」

突進してきた忠夫の両手に口を塞がれ沈黙させられる。

だがしかし、これでも月警官の長である神無。

忠夫の両手を慌てて振り払うと、一端離脱する為地面を蹴り扉の在った所で反転、迦具夜姫を守る為、そして報告の為に駆け出そうとした。

が。

「超加速っ!!」

背後から聞こえたのはそんな声。

次に視界に入ったのは、自分の体を捕らえる4本の腕。

ばたばたと両手脚を暴れられて、壁に手を掛け全力で抵抗する神無。

しかし、月の魔力に満ち溢れた半人狼と、歴戦の魔族が相手では長く持つ訳も無く。

必死の努力の甲斐も無く、囚われた神無は最後の人差し指を剥がれさせ、トイレの中へと引き摺り込まれて行ってしまったのであった。

「ヤバイ、いきなりバレたぞ・・・！」

「自分でド壺に嵌ってるような気もするけどねえ」

「むーっ！ むーっ!!」

暫しの後、ようやく血を拭いた忠夫とメドーサの視線の先には何処から取り出したのやらロープでぐるぐる巻きにされた神無が、口に布を噛まされて唸っていた。

その目の前で頭を抱えて蹲る忠夫と刺叉を担いでその横にやけながら立っているメドーサに殺気の籠った視線を向けながら、神無の顔には怒りと焦りの表情が浮かぶ。

それを楽しげに見つめていたメドーサは、神無の目の前に片膝をつくとその顎に細い

指を当てて顔を向けさせた。

「・・・さて、どーしてやろうか」

「やめんかつ！ これ以上状況を悪くせんでくれえつ!!」

そんなメドーサの頭頂部に軽い拳骨を落としつつ、半泣きの忠夫がメドーサと神無の間に割り込んだ。

叩かれた頭に戸惑いながら手を当てているメドーサはさて置き、忠夫は必死で誤魔化す為に神無を説得にかかると。

何せ、相手が相手に状況が状況だ。

一歩間違えば、雇い主の雷がダース単位で降り注ぐ事は間違い無い。

「え、えつと、じ、実はっ!」

「・・・・・・・・・・?」

「実は・・・そのう・・・あのー」

怒りの中にも疑問を浮かべた神無が、視線で顔中に冷や汗を流しまくっている忠夫に続きを問う。

しかし、忠夫は笑顔で固まるばかりで続きを述べず、流れる汗の量がどんどん増えていくだけだ。

そろそろ疑念が消えて警戒の色だけを残り始めた神無の前で、溜め息を付いたメドー

サが忠夫に囁いた。

「……しようがないねえ。私に任せな」

「……物騒な事は駄目だぞ」

「分かつてるって」

渋々とメドーサと位置を入れ替わった忠夫は、後頭部に突き刺さる神無の視線をひしひしと感じながら横に退けた。

そして、忠夫と場所を変わったメドーサはと言えば、スカートにあるらしいポケットに手をつ込み、暫しごそごそと如何見ても探るほどに深さの無い底を探った後、おもむろに奇妙な物体を取り出した。

それは、言うなれば取っ手のついた蚊取り線香であった。

そして、神無の眼前にそれを突き出し、その取っ手をメドーサが回転させるとそれに連動して蚊取り線香部分が回転し始める。

「ほーれ、ぐるぐるぐる」

「んなもんが効くかあっ!!」

「……ぐむう」

「効いたよ」

「め、メドえもんっ?!」

「誰がだ」

メドーサは忠夫に冷たい視線を向けながら、やはり如何見ても入りそうに無いミニスカートのポケットにその秘密道具（ヌルからの技術提供によって作り出された催眠・洗脳装置）を収納。

何となく物欲しそうな視線を向けてくる忠夫に軽く片手を振りながら後は任せたと
言わんばかりに場所を譲った。

未だ納得いかなげな顔であるものの、忠夫もそんなに時間に余裕が無い事は分かっている
ので虚ろな表情を浮かべる神無の前に座り、だが、暫し悩むような表情を見せる。

無論、怪しげな道具で神無の意識を奪った事を悔いている——訳では、無い。

「・・・いや、やっぱ愛だよな、うん」

「さっさとやりなっ！」

後方から足が飛んできたので危険な考えを余所にやり、真剣な表情を作りながら神無
に向かつて語りかけた。

「怪しくないぞー。今の女の子は俺の娘だぞー」

「待てコラ」

額に青筋を浮かべたメドーサの手が、握り潰さんばかりの力で頭に絡み付いてきたの
で一瞬で真面目な表情は崩れたが。

「いだだだだっ?! 何すんじやー!」

「誰が誰の娘だいつ!」

ぐきり、と音を立てながら無理矢理振り向かされた忠夫の顔を思いつきり睨み付けながらメドーサが叫ぶ。

それに対して忠夫はとても良い笑顔を返し、親指を立てて見せた。

それでも納得いかなさげに更に手に力を籠めながら娘が怒っているの、壁に奇跡的に割れずに引つ掛けてあつた鏡を指差してやる。

胡乱氣にそれを眺めたメドーサの顎が落ちた。

「何でこんなオプシヨンがついてるんだあつ!!」

「はっはっはあつ! 尻尾も付いてるぞっ!」

「うああああつ?!」

己の尻尾を見ながらくるとその場で回転するメドーサを、忠夫の暖かい視線が追いかけている。

それを発見したメドーサは、己の尻尾を追いかけのを止め5割の苛立ちと3割の怒り、そして残りの気恥ずかしさやら照れくささやらを籠めた拳を、耳まで赤く染めながら忠夫に向かってマウントポジションで振り下ろし続けるのだった。

「お帰り、えらく遅かったわね。逃げたかと思つたわよ……って、何でトイレに行くだけでそんなにボロボロになってんのよっ?!」

「……こけました」

顔だけをボコボコに膨らませたその状態で、それが通用する訳も無いのだが。

とりあえず、美神はどうせまた月警官達にでもセクハラか何かいらんことをやって、集団で袋にでもされたのだろうと溜め息一つであっさり流した。

その思考が何となく読めた忠夫は膨れ上がって見えない眼からだくだくと涙を流している訳だが。

あの後、神無には何も無かつたと言う事にしてトイレから出て行ってもらった。

そして現状を聞いてくるメドーサに簡略化した説明を。

そしたら何故だかメドーサさんは、いやに殺気をばら撒きながら忠夫に冷や汗流させながら、「一口噛ませな」と仰った。

蠅に不意打ちとは言えやられた事が大層ご立腹の様子であったので、忠夫としても父の威厳を保ちつつOKを出してみたり。

出したつもり威厳が鼻で笑われてへこんだのは秘密である。

ともかく、マリアのほうも準備が終わったようで、一抱えもあるゴテゴテとした球体を引つさげたマリアが宇宙船を置いてある倉庫から戻って来た。

時間的な余裕はあまり無い、と言うか、時間が掛かれば掛かるほどベルゼバブのクローンが増える事が予想される為、いきおいマリアの準備終了がそのまま出発の合図となる。

「マリアの方も準備は出来てるわ。あんたは爆弾持つて裏口から潜入、仕掛けたらさっさと戻る事。私とマリアで囿やってるから、出来るだけ早く戻るのよ」

「ういっす」

『イエス・ミス・美神』

今は美神達に見つからない内に、と言って先ほど忠夫から聞いた裏口の辺りに先行している筈のメドーサを思い浮かべながら、忠夫はマリアからその時限爆弾を受け取っ

た。

爆発までの時間は調節可能、設置したらパスワードを打ち込めばいつでも解除可能。

短い時間で改修した割にはそれなりに安全設計になっているのがマリアの真骨頂なのか、それともマリアの気持ちなのか。

しかしそれも何となく上の空でマリアの説明を聞いている忠夫の耳には半分くらいしか届かない。

『横島・さん?』

「……はああああ」

『……スイッチ・オン』

「のびやびやびやびやあっ?!」

頑張って作ったのに説明を聞いてもらえなかったり、ねぎらいの言葉とか「凄いな、マリアは」とか言ってもらえなかったマリアが拗ねてスタンガンで忠夫を痺れさせた以外に特に問題は無く、強いて言えば忠夫の記憶が一部飛んだことくらいだろうか。

ともかく、迦具夜達を含めた最終確認を行なった後、いよいよ作戦開始と相成った訳である。

「迦具夜姫。最優先目標はベルゼバブの排除で構わないのよね?」

「ええ。その爆弾がどれほどの物かは分かりませんが、損害は問いません」

「……言質は取ったわね、マリアア？」

『イエス・ミス・美神。アナログ・デジタル・靈波・可能な限りの・保存媒体に・記録・シール完了』

「え？ ……あ、あの、どれくらいの被害が「さあて、行くわよ、あんた達っ!!」あ……」
おずおずと心配そうな表情を浮かべて胸の前で手を組み、こちらを見送ってくる迦具夜姫と、その横で何かを思い出そうとしているかのよう首を捻っている神無、そしてお気楽な表情でひらひらと手を振る臍を残し、美神達はダツシュで出発したのだった。

ともかく、この時点で神魔のどちらの陣営も、恩を売る所か下手をすると完全に關係を断たれたりする可能性が出て来た訳であるが、美神達には知ったこっちゃないのである。

形式の上とは言え、報酬が何処から出ていると言っても、依頼主が「損害を問わず」と言っただけだから。

後は依頼を遂行して、その結果なにか文句をつけられても言質は取っているので問題無し。

事前に小龍姫やワルキューレに連絡を取るべきではないか、と言う意見が出るかもしれないが、秘密基地とは名ばかりの避難所では、未だ魔力の荒れが収まりきっていない月面から地球までの連絡は不可能であったので、状況が許さなかつたので、の一言で片

付ける予定。

ちなみに、横で聞いていた忠夫も記録を取ったマリアも反対はしなかった。

忠夫は流石に冷や汗を垂らしたりはしたが。

完全に後の事を考えていない、いや、考えてはいるが手段を選んでいない美神達のおかげで色んな所が泣く事になった、という次第である。

「準備もよし、と。さて、それじゃ——始めますか！」

小龍姫が使う物と同じデザインの神剣、竜神族の両刃の剣を構えた美神が、見渡す限りの砂漠のど真ん中で瞳を閉じる。

呼吸を整え、ゆっくりと精神集中を始めた美神の昂ぶりと呼応して高まる靈気があたるの砂を巻き上げ、最後の気合の呼気と共に炸裂した。

ややあつて、砂塵の収まった中心にはギリギリまで六感の高まった美神とセンサーを最大限まで稼働させ、無手のまま佇むマリアの姿。

静かに時を待つ美神達の元に、はたして長く待つ事も無く目的の存在は出現した。

美神達を囲むように空間に無数の小さな穴が開き、吐き出されるようにして小さな魔族を生み出していく。

耳障りな音を立てながら、蠅の王の異名を持つ魔族、ベルゼバブはそそり立つ壁の如く布陣した。

『……良い度胸だな、人間。既に此処は俺様が支配する場所と分かっているの挑発か?』
「挑発? 舐めんじやないわよ。たかが数頼みの蠅如きが、このGS美神に真正面からブチ当たろうって方が喧嘩売ってるわね」

鼻で笑った美神の周辺から、怒濤の如き殺気の波が襲い掛かる。

だが、美神の表情に陰りは無い。

勝気な笑みを崩さぬままに、沈黙を守りながら佇むマリアをちらりと横目で見た美神は、その首が了承の意を伝えて僅かに上下した事を確認して更に余裕の笑みを浮かべる。

「害虫駆除に一々挑発する馬鹿はいないでしょ？　ぶちぶち潰してたんじゃ面倒臭いから、纏めて出て来て貰えるようにしただけよ」

『い、言わせておけばっ!!』

「大体何？　その緑色。気味が悪いにも程があるわっ！　野菜の食べすぎで染まったのかしら？　魔族の癖に健康志向なんて100年早いわよ、おっっほっほっほっほっほっ!!」

楽しそうだなあ、と忠夫辺りなら口に出したかもしれないが、隣に立つのはマリア。口に出さずに思考の中だけで収めつつ、怒りに目を晦まされたベルゼバブの壁の背後に新たな穴が開き、追加の蠅が湧き出しているのをセンサーを駆使して捕え続ける。

——センサーが捕らえ得る範囲だけでも、その数は軽く万を超えようとしていた。

『余裕をブツこいてられるのも今のうちだぜえ・・・分かるか？　おまえ達の周りにいる俺だけでも、街一つ潰すのに一日も掛からねえ！　このまま増え続けて、月を覆い尽くすほどに増えちまえば、俺に怖い物なんてねえっ!!　神も魔も、俺に平伏すしか無くなるんだぞっ!』

「ハッ・・・馬鹿じゃない?」

全方位から同時に放たれた怒号に、その野望に五月蠅げに顔を顰めた美神は冷たい視線と小馬鹿にしたような笑いで答えを返す。

月光を照り返す神劍を構え、後ろ手にマリアへと合図を送りながら、美神はあつさりとその魔族の言葉を切り捨てる。

複眼を怒りの色に染めたベルゼバブは、4枚の羽根を怒気と呼応させて激しく動かしながら突撃の為の力を溜め、押し潰すようにその包囲の輪を一気に締めさせた。

『骨の一欠けらまで養分にしてやるっ！』

「たかが街一つと、超一流のGS……どっちが手強いかわからないような害虫は——このGS美神令子が、極楽へ行かせてあげるわっ!!」

『ミツシヨン・スタート。戦闘出力・最大。——1番から・20番まで・起動!』

美神達を囲むように、真っ白な煙が弾けた。

周囲の空間を完全に覆い尽くしたその煙に巻かれたベルゼバブ達は、もがき苦しむ間も無くとも容易く落ちて行く。

驚愕に彩られたその表情も、しかし怒りに意識を取られ、突撃の為にだけに力を溜めていた己の身体を止める事は出来なかった。

次々と、包囲の内側から膨張してくる白い壁にぶつかって、取り込まれては落ちて行く分身達を見ながらそれらよりも外側に配置していた為、巻き込まれる前に後方へ離脱する事の出来た者達の間にも動揺が広がっていく。

同じメンタリテイを持つが故に、そしてそれがあまりにも脆いが故に、止まった動き

は全く同じタイミングで発生し、そしてそこを狙って打ち込まれた光条と爆炎に巻かれて更に数多くのクローンが落ちて行く。

『く、クソがつ！ これでも喰らえっ!!』

思わぬ反撃に一気に包囲を乱したベルゼバブが、漸く反撃の一撃を返し始めた。

光条と銃弾が飛んできたと思しき場所へ向かって、白い煙の届かぬ場所から次々と打ち込まれる魔力砲。

出力もあり数も多いそれは、だがしかし致命的な欠点があった。

砲台となるベルゼバブの体が小さい故に、どうしてもその砲口を超えるサイズのエネルギーは打ち出され難いのだ。

細い、まさにレーザーの如きそれは全く同じタイミング、全く同じ狙いで打ち込まれる——そして、白煙の中、別の場所から正確に打ち込んだ個体に向かって反撃されたミサイルに巻かれて碎けて更にクローンは落ちた。

『何ッ?! ち、畜生! もつと数を呼んで押し潰して——ぎやあつ!!』

叫ぶと同時に更に巨大な光線の群が周囲を薙ぎ払い、次々とベルゼバブが落ちて行く。

ベルゼバブの個体に弱点があるとすれば、それは致命的なまでの打たれ弱さ。

人間の作った——とは言え、今回の物は1000年の時を生きる天才の作った物、親

馬鹿ゆえに持てるだけ持たされたマリアに使用できる道具の中にあつた殺虫剤であるが——道具でさえも落ちてしまうその貧弱さ。

そして、数を頼みに思い上がってしまった精神の未熟さ。

実際の所、既に美神達の姿はその白煙の中には無い。

とつくに超加速とマリアのステルス機能を駆使して脱出済みである。

大気が無い故に風が無く、その場に漂いつづける殺虫剤の煙は既にその直径を1 km 近くに広げ、内部で動き回りながら攻撃してくる何かに気を取られたベルゼバブは、かなり離れた所で高笑いを上げつつマリアからその状況を聞いている美神を発見する事すら出来ずにいた。

「ほーっほっほっほっ！ 小さい脳味噌じゃその程度よねーっ！ 馬鹿正直に相手にしてあげる訳無いでしょうがっ」

『自律駆動型・移動砲台・『マンダ』・損耗率・1, 5%。装甲に・軽微な損傷。更に増援を・感知』

靈気を放射する前に仕込んでおいた殺虫剤が作動し、煙幕兼特殊武器が効果を發揮したと同時にマリアがガンマに装備されているのと同じ空間圧縮格納の機能でそれを呼び出し、最初の砲撃で包囲を崩れさせたベルゼバブ達の隙間を超加速を使った美神がマリアを引っ張り脱出。

生体ベースになったので重量がかなり軽減されていたが故に出来た事であろう。

ちなみに、マンダはカオスがわざわざ鋼鉄の8本足を武装を削ってくつつけたが、だがそもそもそれを扱うマリアの娘の1人の機動力に追いつけなかったが故に失敗作となった物である。

失つても痛くないので問題無しな捨て駒戦力である。

白煙の中をがちやがちやと足を動かかしランダムに、かつ魔力砲の打ち込まれるタイミングや方向さえも学習し、予測しながら回避行動を続けるそれを捕らえるのは容易い事ではない。

全く持つて物騒な、いや、流石はドクター・カオスと言うべきなのだろうか。

——結論、美神が笑いを堪えられなくなった。

「おーっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっ!!」

『酸素と・エネルギーの無駄遣いは・止めた方が・よろしいのでは?』

マリアの手渡したハンカチに描いてあった首輪付きの何処かで見たとような、と言うかいつも見ている男によく似た似顔絵に、少々引いた美神であった。

第四拾話。

「3、いや4匹か・・・？」

「ブブブー。羽根を動かさずに止まつてる奴が居るから5匹だ」

月神族達の秘密基地より徒歩1時間、走つて5分飛んで2分のその場所に、元月神族の城への秘密「だった」通路はある。

高さ3M程の崖に刻まれた亀裂、その奥へと進めば真つ暗な壁面に仕込まれた様々な装置と怪しげな術が亜空間に存在する今はベルゼバブの居城となつたそこに通じているのだ。

作戦開始と同時にここまで全速力で、しかし地面を這い進むようにして一抱えほどの機械を担いで駆けて来た忠夫を迎えたのは、先んじて忠夫にこの場所を聞いていたメドーサの姿。

暇そうに欠伸をしながら気持ちよさげに月光浴なんぞかましている姿は、やはり混じつた人狼の要素のせいだろうと思わせる物がある。

それでもやはり歴戦の女魔族、例え狼の耳が生えようが、例え狼の尻尾が生えてそれが只でさえ短いスカートの裾を持ち上げ様が、息一つ乱さず駆けて来た忠夫の姿を捉え

た途端に緩んでいた雰囲気が一気に締まる。

とは言えその緩んでいた雰囲気と言うのも、やはり緊張の中で故意に緩ませた物ではあつただろうが。

「・・・分らないね。くそつ、情報が多すぎてうざったいくらいだよ」

「慣れだ慣れ。こちとらこれでも十年とちよつとは半人狼やつてるからな」

兎にも角にも合流し、その時を同じくして地平線の向こうで湧き上がる白煙と閃光。

美神とマリアが囚役を開始したのを合図に突入し様とし、メドーサの「ここは既にバレてるよ」の一言で少々焦りながらも情報収集から、となつたのである。

仮にも元の主たちを追い出す事は成功したとは言え、そもそも根城とすべきその場所の事を元主達が熟知していない訳が無く、ならば当然の如く地盤を固め、予定外の攻撃を防ぐ為にも構造及び周辺を探索するのは当たり前前行為である。

構造についてはとある手段により問題が無くなった。

ならば後は風潰しに周辺を探索するだけ、となるとここでベルゼバブの非常識な数が生きて来る。

単純な人海戦術、ローラー作戦と言う奴だ。

結果、いともあっさり秘密の通路は発見され——そして、そこに何体かの見張りを残す事となつたのだ。

「さーて、どうするかな。急がないと後が怖いしなあー。美神さん怒らせると命が幾つ在っても足りないしなあ」

「・・・その前に、だ。それ、見せてみな?」

「ん? おお、いーぞ」

折角圏が頑張っているのに——いや、半分以上楽しんでるような気がピンピンにするが——こんな所で躓いては話にならない。

発見されない事が第一条件なのにも係わらず、唯一の通路は見張り付き。

この通路を見つけながらも塞がなかったのは、おそらく、いや間違い無く——毘だから、若しくはここを突破されてなお撃退する自信があったから、だ。

そんな所にこのこ出て行つては、自分から死地に飛び込むようなものである。

と言う事で、まるで娘に対する父親の如く、勿論本人はその気満々なのであるが、人狼の超感覚の手解きなんぞをのほほんやりつつも頭を悩ましていた忠夫であったが。

メドーサの、時限爆弾を見せてくれ、の一言にいと容易く切り札を渡すと言うのは流石に如何だろうか。

渡されたメドーサのほうも、かなり呆れた様子である。

「・・・あのさあ。私が言うのもなんだけど、こんな簡単に信用して良いのかい?」

「あー」

問われた忠夫はと言えば、心底不思議そうな顔で見返すのみ。

ややあつて、何を問われたかと言う事に気付いたように手の平に拳を打ち合わせると、ゆっくりとその手をメドーサの頭に置いた。

「ばつかだな。娘を信用しない親父なんで、俺は知らんぞ?」

無論人口の少ない人狼の里で育った忠夫であるからして、その認識の範囲がとても狭く、尚且つこの場合彼の頭に浮かんだ父親は良く娘にガチで斬りかかられたりそつぽを向かれて不貞腐れたりしているのだが。

「だ・か・ら! 娘じゃないって言ってるんだろぅがっ!!」

がおう、とまさに狼の如く吼え猛りながら頭の上の手を叩き落すメドーサ。

耳も尻尾も天を突いて逆立っている。

だが、へちやり、と疲れたようにその耳と尻尾が地面を叩き、そして心底呆れた声色で続けて言う。

「・・・私は、裏切り、裏切られる事が当たり前の中で生きて来た女だ。何時あんたを裏切るのか分からないんだよ!」

呆れた声は、徐々に怒りを帯びて跳ね上がる。

その言葉と共に視線を跳ね上げたメドーサの瞳に写るのは、だがただ笑いを浮かべる忠夫の顔。

戸惑う事すらなく、今まさにメドーサの手の中にある切り札を見る事すらなく、忠夫は笑つて再びメドーサの頭を優しく撫でる。

「心配すんなつて。裏切られるなんて欠片も思つてねーし、それに——」

あつけにとられ、ただただその顔をきよとんと見つめるメドーサの顔は、外見以上に、まるで少女のように幼く見える。

「俺は、お前だけは、絶対に——裏切らない。横島、いや、犬飼忠夫の誇りに賭けて」

誇り高き狼の誓い。

己の名と信念に賭けたその誓いは、死ぬ時まで、いや、例え死んだとしても違えられない事のない言葉。

めつたに見えない真剣な表情で、だが優しさを籠めた動きでメドーサを撫でながら、忠夫は魂の底からそう言い放つ。

言葉を理解し、そして動きを止めたメドーサは、暫しの沈黙の後俯いて表情を隠した。それは、彼女がどれだけ欲していた言葉だっただろうか。

それすら知らぬ忠夫は、俯いたメドーサの顔を心配げに下から覗き込もうとし、問答無用で殴り飛ばされた。

悲鳴すら上げずに顎をカチ上げられた忠夫はゴロゴロと転がって背後の崖に頭をぶつけて悶えている。

その襟首を、無言のまま、しかし忠夫には見えぬようにぴくぴくと今にも崩壊しそうな頼の緊張を保ったメドーサが引つ掴み、そのままオーバースローでベルゼバブの見張る秘密通路に投げ込んだ。

そして、彼が通路の向こうに完全に消えた事を確認して、おもむろに手の平に靈力を満たし、全力で通路の壁に叩き込む。

連打、連撃、そして結果としての連爆。

完全に崩落した通路は、既に月神族の城への通路の用を果たさない。

後に残るのは、僅かに崩れる瓦礫の山と、その少し前に立つメドーサ。

そして、その足元に転がる切り札、時限式の核爆弾。

「甘ったれの、馬鹿たれの、アホ半人狼が……。言ってくれるじゃないか」

ともすれば気を抜いただけで崩れそうになる顔を必死で抓りながら、ポーカーフェイスを全力で保つメドーサは足元の切り札を抱え上げ、おもむろに意識を凝らし始めた。

「父親面するのなら、すこしくらい気張ってきなつてんだよ!!」

切り札を抱えた腕とは反対側の手を一振りすれば、そこにあるのは己の得物。

最早分かち難い半身とさえ言える、出現させた己の武器を思いつきり豪速で振り回しながら、メドーサは壁にぶつかりそうな位に勢い良く、飛び出した。

「あは、あはははははははははっ!!!」

堪えきれない快笑を、誰も居ない月面に響かせながら。

元蛇神で、元魔族の、大馬鹿曰く狼の娘は、迷う事無く突っ込んでいった。

「……娘が反抗期なんです」

『……それが手前の遺言か？』

ベルゼバブにとってはこの上ない不意打ちであつただろう。

策も何も無く、突如として飛来した物体は秘密通路の中を巡回していた個体を跳ね飛ばし、そのまま通路を貫徹して反対側へ。

見事その物体は月神族の城のお膝元、その偉容が、まるで山をひとつそのまま改造したような城の直ぐ側まで転がりつづけ、頭を下にして漸く動きを止めたのだった。

警戒しながら城に残っている残存戦力、要するに残つたベルゼバブクロンを総動員して包囲して見れば、中心に居るのは何故だかさめざめと涙を流す、現在その殆どのベルゼバブクロン達が躍起になって襲い掛かっているGSの一味であつた。

警戒しつつも包囲の輪を縮めたベルゼバブ達に聞こえたのは、そんなお昼の生電話にでも掛かつてきそうな沈んだ声。

未だに頭を地面に擦り付け、お尻を上げた姿勢で、忠夫はひたすら情けなかつた。

「今なら犬塚のおっさんの気持ち分かるかもしれない……女心とは、かくも厳しいもの

なのかつ!!」

『知るかつ! とりあえず死ねえつ!!』

集る蠅。

逃げる忠夫。

例によつて例の如く、全速力で逃げ出した忠夫を、蠅の群が包围を押し潰すように襲い掛かる。

そして、超加速。

後に残るのは、何も無い所に攻撃を仕掛け、悔しがるベルゼバブ達——
の、筈であつた。

『ぐぎやあああつ?!』

包围網の一角が、言葉通り「吹き飛んだ」。

驚愕で動きを止めたベルゼバブ達の視線が、その一点に収束する。

複眼で映し出された忠夫の顔は、冷や汗塗れでぎこちなく、凜々しいとは程遠い顔で、
だが、たしかに笑つていた。

「何時もなら、逃げて逃げて時間稼ぎでいいんやけどなー」

右手に、如意棒。

靈力を失つた忠夫が、その代替として武神、斉天大聖より借り受けたそれは、なんの

拍子にか靈力を取り戻しつつある忠夫にとつては軽々とは言えないまでも、なんとか片手で振るえるほどの重さへと変わりつつある。

月の魔力に満ちた忠夫の身体は、それを可能にしつつある。

そして、地球に比べて軽い月の重力は、その速度を更に増し、立ち昇る土煙を切り裂いて振るわれたその軌跡は、確かにそれまでに無い豪速を見せていた。

「俺の娘にを怪我させたのは——正直腹に据えかねてんだよなあっ!!」

忠夫の頭上で、残像さえも残しながら振るわれたそれは固い岩盤を打ち砕いて砂へと変える。

再び吹き上がった砂塵が、一瞬その真ん中に人型の穴を開け、その対角線上の包围網が、再び広範囲に吹き飛んだ。

既に包围はその役目を果たせず、檻を食い破りつづける獣の餌食となるばかり。

気合が入っているのかそれとも見た目そのままに腰が引けているのか、そんな咆哮を上げる狼は、ただ我武者羅に如意棒を振るいながら、それでも突き破った檻を更に外側から攻め立てる。

「ふんぬりやあああっ!!」

『ちよ、調子に乗るなあああっ!! やれ、ヒドラアッ!!』

だが、ベルゼバブはそれで終わらない。

一気に散開し、的を散らし、そして彼らの切り札を切る。

合図に答えたのは——ベルゼバブの背後で偉容を誇っていた、月神族の城だった。

城のあちらこちらから、生々しい質感を持った肉の腕が無数に生え、そしてその先端に光が灯り、全く同時にその光が弾けた。

『警備要員ヨリノ信号ヲ感知！ コレヨリ、戦闘形態ニ移行！！』

城より響くのは、巨大な罅割れた重低音。

本能で危険を感じ、超加速で離脱した忠夫が居た位置に向かって強烈な魔力砲が幾千条と繰り出される。

「ゴラアアツ?! そりゃ反則だろーがつ?!」

『喧しいっ！ 人造魔族を憑依させた月神族の城だ！ 直撃喰らってとつとと死にやがれええっ!!』

人造魔族——おそらく、ガルーダやゴレム、そしてフェンリルクローンと言った技術を作り出した2人、茂流田と須狩の技術を利用したと言うのならば「人造」と言う言葉に間違いは無いのだろう。

かつてメドーサを通じて供給された技術が、いまやこれほど凶悪な結果として現れるというのは皮肉とさえ感じられる。

背筋にビリビリと走る本能の叫びに従って、必死で城から距離を取りながら回避を続

ける忠夫を、更にその砲撃の外側から合間を縫うように襲い掛かるベルゼバブ達。

忠夫の最初の攻撃でかなり数を減らしたとはいえ、未だ距離を取りきれない事を考えるとかなりの脅威である。

「と、とりあえず距離を取らんと死ぬっ！ マジで死ぬっ！！ っとうそやあああっ?!」

忠夫の悲鳴もやんぬるかな。

必死で後方に向かって全力で駆ける忠夫を追いかけられるように、巨大な城に足が生え、その底部にあつた根つこのような物を引き千切りながら——忠夫を追撃し始めたのだ。

ゆっくりと踏み出されるその一步は、しかし巨大さ故にたつたの一步で忠夫の全力疾走で開けた距離を埋めていく。

当然、距離が縮まるほどに砲撃の狙いは正確となり、余波で忠夫が吹き飛ぶ回数がどんどんと増えていく。

そして、ついに。

『はーっはっはっはっ！ 止めだあっ!!』

至近弾を喰らって体勢を諸に崩した忠夫の鳩尾めがけて、前後左右から数百匹のベルゼバブが殺到した。

「ま、まだ可愛くて美人の嫁さんも貰ってないのにこんな所で死んでたまるかあああっ!!」

必死で手足をばたつかせる忠夫だが、超加速に入ろうにも蠅の群が一気に襲い掛かるおぞましい光景と、その背後で再び光を溜めて狙いをつける砲口、そして動揺した精神状態ではそれさえもままならない。

しかし、ここで諦めてなるものか、と一気に如意棒を伸ばして地面に突き刺し離脱を図る。

如意棒が忠夫を攻撃範囲から連れ去るのが早いか。

それとも、ベルゼバブとヒドラの一撃が貫くのが早いか。

結果は――。

「——だらしがないねえ」

——結局、分からなかった。

ヒドラが取り付いた月神族の城の中程が、轟音と共に内側からの攻撃で弾け、その爆炎が収まらぬ内に1人の女性を吐き出した。

城を内側から破壊した女性——メドーサは、忠夫の姿を発見すると同時に超加速。

次の瞬間には、忠夫と共に追撃するベルゼバブ達の間をついでとばかりに叩き潰しながら後方へ抜けている。

ヒドラの砲口に灯っていた光も、流星に内側から食い破られたショックで霧散していた。

「お、遅いぞメドーサっ!!」

「ふん、文句を言える立場かいつ?!」

『き、貴様っ!! 何故生きているっ?!』

半泣きで苦情を訴える忠夫に対し、その襟首を掴んだメドーサは鼻で笑ってぐうの音もでない台詞を叩きつけて黙らせた後、まさに三流の台詞を吐いた蠅魔族に向かつてにやりと底意地の悪い笑みを見せつけた。

「さあて。知りたかったらお前の無い脳味噌を1000年くらい頑張つて働かせてみな
！」

『う、裏切つたなあっ?! どうやって此処に来たっ!!』

「はん、裏切つたもクソも、最初つからあんたらとの縁は切れてたさ！ それに、来させ
たくなかつたら私を殺したと思つて油断せずに、ゲートを開くパスワードくらい変えと
くんだったねっ!!」

忠夫を单身無茶苦茶目立つ方法で突入させ、更に通路を潰して侵入経路を無くした—
—と、思わせて、メドーサが出入りに使っていた亜空間ゲートのパスワードで侵入。

慢心と過信に溢れたベルゼバブは、完全にメドーサの息の根を止めたと思ひ込んだ故
にその事を失念していた。

いや、失念していたとしても問題は無かつたのだろう。

メドーサは滅び、そして月は完全にベルゼバブの物となる筈であつた。

そこに、マリアが、美神が、そして——忠夫が居なかつたのならば！

「じゃあね。もう二度と会いたくないよ！」

「待て、メドーサ、首、締まつ?!」

加速で後方に身体が流れ、思いつきり首の絞まる忠夫の悲鳴を無視して最大加速。

そのまま、再び開いたゲートを通って脱出したメドーサを追って追撃を掛けようとしたベルゼバブ達の背後から、巨大な悲鳴と。

『な、何だっ——』

それよりも巨大な衝撃と、太陽のような熱量と、膨大な光が全てを押し流して消し去った。

『『マンダ』 損耗率・74%。ベルゼバブ・残存・2%』

「あらあら、ここまであっさり引つかかってくると逆に申し訳無い気分になるわねー」とは言うものの、美神の声音にそんな色は欠片もあるはずが無く、あるのは爽快感とほんの少しの不安だけ。

それは、淡々と状況を説明するマリアも同様であった。

彼女達の目の前には、既にそのほぼ全てを打ち落とされたベルゼバブ達の群。

増援も既に無く、後は最後の後始末だけ、という状態である。

そんな状況で、何が不安なのかというと、それこそ言うまでも無く現在此処に居ない

一人の半人狼、忠夫が未だに連絡さえしない事である。

「……おつそののよ、あの馬鹿」

「イエス・ミス・美神。……増援を・感知——?」

マリアのセンサーが、再び開くゲートの波動を感知する。

しつこくもまだ数を繰り出すつもりか、と舌打ちをし掛けた美神の目に、ベルゼバブ達の動きが変化したのが見て取れた。

それまで白煙を囲むようにしてひたすら攻撃を仕掛けていたのにもかかわらず、突然動きを変え、マリアの視線が向く先に一気に腕を向けたのだ。

「何っ?! まさかっ?!」

『『マンダ』最後の・武器・起動っ!!』

マリアは、迷わなかった。

叫ぶその声に即時の反応を返したのは、今まさにベルゼバブ達の視線から剥がれた白煙の中を、半分の足を失いながらも驚異的なバランスで動きつづけるその機械。

それは、一瞬動きを止め、次の瞬間。

巨大な爆発を引き起こした。

「……………」

「自爆装置・起動・確認。お疲れ様・でした。次の・『マンダ』は・もつとうまく・やつ

てくれるでしょう」

その高く高く巻き上がるドクロ型の黒い煙に向かって敬礼するマリアの横で、口をパクパクと動かす美神がその光景を眺めていた。

自爆装置だけならまだしも、ドクロ型の最後の華を仕込む辺り製作者の趣味がうかがえる。

完璧なタイミングで炸裂した自爆攻撃に完璧に飲み込まれたベルゼバブ達は、最期の台詞すら許されずに灰へとその姿を変えていたのだった。

「……つくづく、天災の考える事は分からないわね」

「ドクター・カオスですから——横島・さんっ!!」

完全に呆れた顔でそれを眺めていた美神の横を、ロケットを吹かせたマリアがすっ飛んでいく。

目標は、たった今開いたゲートから吐き出された忠夫と、それを抱える紫色の長髪を靡かせた、どこか見覚えのある少女。

そこまで確認した美神の脳裏に、一人の魔族がにやにやとした嫌な笑みと共に浮かんだ。

「メドーサツ?!」

マリアを追いかけるように、そして追い越すように美神も空を駆ける。

辺りに、聞こえない筈の重低音の悲鳴が木霊した。

2人同時に駆けつけて一番最初に見たのは、何故か忠夫が少女を小脇に抱えてお尻を叩こうとしているシーンだった。

抱えられたメドーサは、させてなるかとはかりにサソリのように足を振り上げ踵でキック、ジャストミート。

仰け反った忠夫が鼻を押さえながら涙目で抗議するも、メドーサの怒号と共に繰り出された拳がその顔を陥没させる。

「う、うら若き乙女になにするつもりだいっ?!」

「心配させるような娘にお仕置きして何が悪いかああッ?!」

とうとうくんずほぐれつ取っ組み合いになったが、メドーサの嘯み付きが忠夫の頭に決まって涙ながらに悲鳴を上げる。

そんなけたたましい光景を見ていた二人がフリーズするのも当然であろう。

だが、漸く、忠夫の頭から流れる血が地面を赤く染め出したころ、二人は再起動に成功した。

「よ、横島あああッ!!」

「はいいいいッ!!」

「説明しなさいっ!! 何でメドーサが此処に居るのよっ?!」

美神の額に青筋が幾つも浮かぶ。

隣のマリアも平静を保ちながら、しかしその両手にパイルバンカーとガトリングを展開させていたり。

ぎゅいんぎゅいんと唸り始めたそれに耳を伏せて、さらに美神のド迫力の咆哮に押された忠夫は仰け反りながらもメドーサを背後に庇う。

庇われたメドーサはといえば、未だに忠夫の頭を齧りながら面白そうにその光景を眺めているだけで何も言わない。

「ち、違うっすっ! こいつはメドーサじゃなくて・・・」

「な・く・て?!」

「犬飼メド子! 俺の娘ですつ!!」

せめてもう少し良い名前は無かったのか。

メドーサの噛み付きが威力を増し、美神が神通棍を構えて靈力を放電現象の如く火花を散らして放出し始め、マリアのガトリングの回転が最高潮に達しようとしている。

「・・・あなたの娘とか何とかは置いといて。何でいきなりそんなのが此処に現れるのかしらあつ?!」

「即時の・解答を・求めます。浮気・ですか?」

「お、俺が俺一人で産みましたあつ!」

そして、美神の神通棍が振り上げられ、マリアがとてつもなく冷たい目で銃口を向けつつパイルバンカーを装着した腕を、弓を引くようにゆっくりと引き絞り、メドーサがそんな2人を睨みながら後方へ飛び退り。

そのまま、血生臭い事件が一つ、で済んだのだろう。

また訳の分からない戯言を、で済んだのかもしれない。

しかし、忠夫は色んな意味でアウトだった。

「——トイレでつ!!」

ずぎぎつ、と音を立てて2人が引いた。
背後のメドーサの顎が外れている。

「(血とか)色々一緒に出て大変でしたっ!!」

だがしかし、そんな事を知らない二人に如何聞こえたか。

調子が悪いと言って作戦開始前にトイレに消えた忠夫。

帰ってきた時にはとてもすすきりとしていた忠夫。

・・・色々?

「め、メドーサ、あんた・・・」

「・・・消毒を・推奨」

「ち、ちがあああああうっ!! こらっ、あんたも誤解を解けええっ!!」

メドーサの悲痛な悲鳴が木霊する。

それに答えるように、その後頭部を握られむりやり立たせられた忠夫の口から、それを否定する言葉が――

「そ、そうっすよ! ちよつとした手違いで穴に落ちたけど大丈夫っす!!」

「誤解を助長するなああっ!!」

心底から哀れみの視線を向ける美神とマリアの前で、そんな視線を向けられたメドーの拳が忠夫の意識を綺麗に見事に刈り取った。

誤解を解ける筈の証人の意識を奪ってしまったメドーサが、起きろ起きろと半泣きで往復ビンタを永眠させかねない勢いで繰り出しつづけ、それを鼻を摘んだ美神とどこか哀れみを感じさせる視線で少女を眺めるマリアが、少し距離を取りながら生ぬるい目で眺めていたのは、月だけが知っている事実である。

「起きろおおっ!! 起きて誤解を解けえええっ!!」

「う、ううう。き、切れるかと思つた」

口と喉が。

「ぎゃああつ?! この馬鹿ああつ!!」

更に美神とマリアが距離を取った。

第四拾壹話。

「だーかーらっ!! なんであんたが付いて来るのよっ?!

「お前に付いて来てる訳じゃない! そっちの馬鹿が付いて来れば地球に帰れるって言ったんだろっ!!」

「ま、まあまあまあまきゃいーん!」

月神族達の秘密基地、その入り口直ぐ傍で睨み合いながら罵声を飛ばす二人の女性。

亜麻色の長髪をヘルメットを被る際に邪魔にならないよう綺麗に後頭部で丸く結い上げた美神が腰の神剣に手を伸ばし、紫色の長髪の間から真つ白な狼の耳を覗かせたメドーサが両の拳を握って構える。

取り成すように二人の間に滝のような汗を流しながら忠夫が割って入るものの、次の瞬間には2人同時に視線もやらずに繰り出された裏拳で顔面をへこませ、悲鳴を上げながら後方に吹っ飛んだ。

地面をころころと転がっていった先に待ち受け、その身体をそっと抱きとめたのは優しい笑顔を浮かべるアンドロイドの少女、マリア。

ふらふらと立ち上がった忠夫の宇宙服を軽く叩き、あちらこちらに付着した砂を落と

すと、砂と涙と汗と流血で汚れた顔を、取り出したハンカチで迷いもせずにと撫でるように拭いていく。

きよとん、と呆けた表情を浮かべていた忠夫は、先程まで美神と一緒にあって怒っていたようにも見えた筈の、マリアの表情を覗き見た。

「マ、マリア？　怒ってないの、か？」

「ノー・プロブレム。横島・さんが・一度身内と・認めた者を・見捨てる可能性・0%。マリアは・それが・横島・さんだと・知っています」

ですから、と前置きを置いたマリアは、そつと忠夫の頬に手を伸ばす。

その暖かさに、顔を赤くしながら慌てる忠夫を樂しげに見つめた後、伸ばした手を胸に当てて、瞼を閉じて言葉が続けた。

「貴方の・望みの・ままに——浮気・以外なら」

「だから浮気なんてしてないっちゅーのにっ!!」

最後にしっかり釘を刺して来るマリアであった。

だがしかし、聞き様によっては・・・いや、聞いただけならば何処から如何聞いても完全無欠に完璧に、滅法良い雰囲気の話喧嘩以前のいちやつきにしか聞こえない訳で。

「はっ?!」

忠夫の額に閃光が走る。

そう、それはまるで人が宇宙に出た事により目覚めた能力の如く。

宇宙と言う、極々限られた者達だけが存在を許されたその場所に立った事で、忠夫に何らかの変化、いや、進化が起こったのか。

そして、その脳裏に浮かんだイメージが伝えてきた物は。

「……横島あああああつ？」

「……俺、死んだな」

悲しい悲しい未来予想図でした。

どうやら極限まで研ぎ澄まされた殺気が忠夫を貫き、それをまるで刃物に突き刺されたように感じた忠夫が一瞬思い浮かべた幻像だったもよう。

刃物の光は決して人の範疇を僅かに越える事が出来た者達を感じるイメージなどではなく、そして頭部にそんな物が突き刺されれば普通逝く。

詰まる所、即死レベルであった。

何で2人は怒っているのだろうか、と視界を埋め尽くす星々の光と、懐かしくさえ感じる青い惑星を零れる涙で歪めながら、忠夫はマリアの斜め上をすっ飛んで秘密基地の

入り口に着弾した。

流石に神劍は危険だ、と判断するだけの理性が残っていた美神が振り上げた神通棍と、メドーサが容赦手加減一切無しでカチ上げた刺叉を同時に喰らった忠夫は、今回ばかりは受身も取れずにドア代わりに偽装された薄い岩盤を突き破ってポロポロ・・・何時もの事か。

「お、俺は悪くない・・・」

「どやかまつ・・・ふんっ・・・くぬぬぬうううっ?!」

びくびくと頭部から噴水のように血潮を吹き上げながら、それでも必死に忠夫が抗議の言葉を上げようとするが、何故か怒れる2人には通用しない。

もつとも、同時にそんな忠夫を怒鳴りつけようとして不愉快な事にハモってしまい、同時に鼻息も荒くそっぽを向こうとしてしまい、それすらも不愉快な2人は互いの手の平を頭上で合わせて力比べ。

片や月の魔力でエネルギー全開のメドーサと、それに竜気を全開放しながら対抗する美神。

2人の視線は火花どころか放電現象さえも起こしていたそうなの。

「何事だっ?!」

「あ、美神殿・・・と?」

ともあれ、それだけ門前で大騒ぎなぞしていれば月神族達が気付かない訳も無く。

壊れた扉の破片に埋もれた忠夫を気付かぬうちに踏みつけながら、神無と隴の2人組みが開けっ放しとなったそこを潜って駆けつける。

その背後を、ゆつくりと歩いて迦具夜が現れ、彼女に追隨するように月警官達も駆けつける。

抜き身の刀をぶら下げた神無の隣では、隴が見慣れぬ、と言うか居なかつた筈のメドーサを見て目を見開いていた。

その視線の先で額をゴリゴリと押し合いながら視殺戦から肉弾戦に移行寸前だった2人は、互いに微妙なアイコンタクトを繰り返して一つ空咳、何事も無かつたかのように素早く分かれる。

そんな2人を、と言うよりもメドーサを訝しげに見ながら、迦具夜と隴は美神に向かつて話し掛けた。

ちなみに、忠夫は漸く破片の隙間から突き出した手を神無に発見してもらい、月警官総出で救出活動の真っ只中、要救助者となっていたりする。

「皆さん、無事のようにですね・・・良かった」

「え、ええ。とりあえず依頼の方、月神族の城に巢食う魔族の排除、完了したわ」

心の底から安堵の溜め息を付く迦具夜の言葉に、額に汗をかきながら良心をちくちく

と突き刺される美神である。

確かに言質は取っており、しかも城を無事に取り戻してくれ、とは一言も言われていないのだから特に嘘を付いた訳ではない。

だがしかし、こんな事なら駄目元で最初からちゃんと説明しておけば良かったかなー、と思つてしまうほどに、迦具夜の浮かべた笑みは優しいものであった。

「・・・私たちに出来る事等、大した物では在りませんが・・・臚、宴の用意を」

「い、いやいやいやいやつ！　いーですからっ！」

「まあ・・・なんて謙虚なお方」

「御免なさい私が悪かつたです説明するのが面倒臭いとか駄目だった時に説得するのが嫌だとか思つて御免なさい！　だからそんなキラキラした目で見ないでお願いっ!!」

自分の行いとか状況の全てとかを把握してやっているのならまだしも、全くの純粹な感謝の気持ちから出た行動なだけに、美神のハートはズッキズキである。

心臓の辺りを押さえながら、少しだけさぼった罪の思わぬ大きさに半泣きで宴の準備に駆け出そうとする月神族の面々を引き止める美神。

唐巢神父辺りが見たら、まず己の正気を疑い、おもむろに頬を抓つた後、五体倒地で神に向かつて涙を流しつつ感謝の祈りを一週間。

だがしかし、そんな精霊達の中で、1人だけ迦具夜に直接指示されたにも係わらず、警

戒すら浮かべて、一人掘り出された忠夫を刺叉の先で突付いているメドーサに向けている者が居た。

「あの……そちらの方は？」

「えっ？ あっ？ そのっ！」

不味い、非常にピンチである。

何せ、たった今臆が指差した先に居るのは、元ブラックリストの女魔族メドーサさんその人である。

はつきり言って、バレてしまうと依頼未完遂と言う事にされても文句は言えないし、その上、確実にメドーサの身に色々と良くない事が起こるだろう。

だが、だが、である。

散々張り合っていた美神だが、何故かメドーサを積極的に排除しようと言う気にはなれない。

と言うよりも、そんなつもりは無い。

ムカツク奴である、が。

——同時に、あれは、馬鹿でアホで頼りになるんだかならないんだか分からない、それでも、多分、嫌われたくない無節操な半人狼の、本人曰く身内なのだから——

ぶんぶんぶんぶん、と残像さえ見える速度で、真っ赤なお顔の色よ落ちろと言わんば

かりに頭を振る美神。

冷静に、冷静にと自己暗示をかけながらポーカーフェイス代わりの笑顔を浮かべる。完璧だ、この営業スマイルは仕事を始めてから磨きに磨いた一級品。

これを見破る事が出来るのは、おそらくほんの一握り……！

「……何か？」

「なななな何でも無いわひよっ！」

滅茶苦茶どもった上に少し声が裏返った。

表情は取り繕えても内面までは上手くいかないと言う典型であった。

「どうした、臍」

「あ、神無」

状況悪化。

只でさえいきなり出現した怪しい人物として、メドーサが疑われているかもしれないと言うのに、お堅い上にクソ真面目な雰囲気的神無が出現した。

それなのに忠夫は中々復活しないので苛ついたメドーサの刺叉がお尻に刺さって樂しげに悲鳴を上げているし、マリアは我関せずとその光景をニコニコと眺めているだけである。

後で殴ろう、と心に決めた美神は、何とか誤魔化す為に脳を高速回転させ始めた。

「あの子なんだけど・・・」

「その、実は——」

「ん・・・？ ああ。横島殿の娘だな」

「へ？」

思わぬ所から、予想を斜め45度にブツ千切った上メビウスの輪でも描いてるんじゃないか、と言うような答えが返ってきた。

純粹に疑問符を浮かべる臃と、顔に縦線を入れながら口をぽかーんと開けた美神の前で、当然のように神無の言葉が続けられる。

「耳と尻尾。どこから如何見ても同じ種族じゃないか」

「え？ え？」

「間違い無い。断言しよう。横島殿の娘だな」

うんうんと1人頷く神無の隣で、臃が首を傾げながらも神無が其処まで言うのなら、と納得した様子を見せている。

そんな2人を見つめていた、胡乱げな美神の視線が忠夫とメドーサに移される。

一瞬視線が合った2人は、次の瞬間に目をそらした。

そしてそのまま立ち上がり、忠夫が宇宙船まで案内する、と物凄く真面目ぶった表情で提案し、メドーサもそれに対して頷きを一つ返すと、迷う事無く、自然を装って歩き

ながら、しかしありえない程高速で、秘密基地の格納庫めがけて扉を潜って消えていく。

「・・・迦具夜姫、それじゃ、私たち帰りますね。あ、予備の竜神の装具とか、魔族の武器とか置いて行きますから。それ使って今度は城を落とされないように」

「しかし、折角ですから「気持ちだけ・受け取らせて・頂きます」・・・あ」

詫びのつもりか、神魔族から貸与されているだけの筈のそれらを迦具夜に贈る事を約束する美神。

まあ、最も彼らも何らかの形で貸しは作りたいであろうし、人間に貸し出せる程度の多少の武具をやった所で問題にはならないだろうが。

丁重に頭を下げるマリアを余所に、完全に表情の消えた、しかし額に青筋を浮かべた美神が、同じように歩いているようにしか見えないのに、まるで滑るような加速で扉を潜って行く。

マリアも、迦具夜達に下げた頭をゆっくりと上げると、その後をロケットを噴かせながら追いかけていった。

後に残るのは、虚空を見上げながらぶつぶつと「娘だ。間違い無い、娘だな」と繰り返す神無。

そして、さっさと月神族の城（があつた場所、裏口でなく正門である）までのゲートを開き、後片付けの準備のつもりか襷掛けをした臈。

残念そうに、だがどこか含みのある——分かつていますよ、と言わんばかりの——笑みを、優しさを多分に籠めて浮かべる迦具夜姫。

そして、その周囲で残念そうに宴会の準備を片付けている月警官達であった。

狭い通路を、スタツカートを効かせながら響く3つの足音。

そのテンポはどんどんと加速していき、終いには乱打の如く軽快なリズムを刻み出す。

要するに、追われる二人と追う一人がほとんど加速しているのだが。

「・・・あの娘に何をやったあああつ!!」

「上手く行つたから良いじゃないっすかああああつ!!」

「方法を教えなさいっつってんのよっ!!」

きつとおそらく多分間違い無く悪用するだろう。

先程の反省も、どうやらあつさり遠く離れた銀河の彼方のようなのである。

実に、実に短い美神の素直さであつた。

草葉の陰で唐巢神父が泣いているだろう、いや、故人ではないが。

ともかく、宇宙船の周囲をぐるぐると回り続ける美神と忠夫を余所に、追いついたマリアと、その輪から離れて一人立ち止まっていたメドーサが、忠夫がとつ捕まるまでその光景を眺めていたり。

何故だかとっても慈母めいた笑みを浮かべながら、メドーサに格納庫に準備してあつた、おそらく宇宙船に積み込む予定であつた物資からお菓子や食糧などを渡してくるマリアがいたり。

忠夫から詳細を聞いた美神が、暫し悩んだ後、メドーサに洗脳装置を貰う事が悔しくて歯噛みしながら諦めたりとかしたものの。

漸く、人間一人、半人狼一人、元魔族の人狼+α一人、アンドロイド一人は月を離れ

る事に成功したのだった。

「……………これは」

「城は……………何処なんでしょうねえ」

「……………まあ、城はまた作れば良いだけの事です。皆、暫く休暇はやれないのでそのつもりで」

『えええええええええつ?!』

朗らかに巨大な城を完成させるまでの休日出勤と、ほぼ間違い無く徹夜じみた残業を

確定させた迦具夜の言葉に月警官達から悲鳴が上がる。

そんな光景を溜め息を付きながら見ている神無の視界を、僅かに残された瓦礫の上をひよいひよいと歩いていく臙の姿が掠めた。

危なげなく、身軽にでこぼことした月面を進む臙を見ていた神無は、そんな彼女を引きとめようと一步を踏み出し。

「おぼ——え？」

落ちた。

「か、神無っ!!」

突如姿を消した神無が居た所に、臙が慌てて駆け込んでくる。

そして、其処を探すまでも無く、彼女が姿を消した原因はいつも容易く発見された。

ぼつかりと開いた穴の奥、深く続く階段に座り込んだ神無の姿があったのだ。

「いたた・・・ち、地下部分は無事だったようだな」

「もう、貴方が怪我したらどうするの。私は力仕事には向いてないのよ?」

「そつちの心配が先か・・・」

やれやれ、と打ちつけた腰を擦りながら立ち上がった神無を、臙が左手を差し出し引き上げる。

余程の衝撃が襲ったのだろう、階段は所々が崩れ、壁にも数箇所亀裂が入っていた。

ともかく、この上に新たな城を建設するのは危険だろう、と判断を下した神無は、引き上げてくれた隼に礼を言いつつ、黄色いヘルメットをかぶって工事の陣頭指揮に立つ気満々の迦具夜の元へと歩き出す。

「・・・ん？」

「どうしたの？」

「いや、今、揺れなかったか？」

隼は返事を返す事が出来なかった。

突き上げるような衝撃が、2人の立つ地面を粉碎した。

「ねー、美神さん・・・メドーサ中に入れても良いじゃないっすかー」

「駄目。マリア、地球とは連絡とれそうなの？」

「イエス・ミス・美神。交信可能距離まで・後・13分」

シートに座って落ち着かなさげな様子を見せる忠夫の言葉を、美神は立ったの2文字の言葉で切って捨てる。

宇宙船の中、小さなモニターに映し出されるメドーサの姿は、宇宙船の外壁に座ってうつらうつらと船を漕いでいると言う実に平和な物である。

元魔族とは言え、それでも蛇神の属性を持つメドーサは、現在特に酸素を必要として

いる状態に無い。

無論、靈力切れとなればまた別問題なのであるが、その事もあって、また美神とメドーサ双方の意見ともあって、忠夫の言葉も虚しく、メドーサは宇宙船の中には居ない。

「横島・さん・もう直ぐ・地球とも・交信する必要が・ありますから」

「・・・あー、そうだよなあ」

漸く月面の魔力の乱れの範囲から遠ざかり、そしてその乱れ自体が収まった事もあって、短い時間だった筈なのにとても久し振りに感じる地球の面々との交信が可能になった。

と、なれば、当然そこにメドーサが居ると色々と面倒な事になりかねないので、どちらにせよ好都合、いや、むしろ以前までのメドーサの立場を考えれば必要な対応とさえ言えるだろう。

「でもなあ・・・」

「はいはい、話は後よ」

何処となく幸せそうな寝顔のメドーサが映し出されていたモニターが一瞬歪み、そして、美神達にとってはおほんの少しの間の出来事であった筈なのに、とても懐かしく感じる面々の、喜びに染まった顔が映し出された。

諸々の報告を済ませ、その結果に胃と頭を押さえてしやがみ込んだ小竜姫に、ワル

キューレが魔界軍御用達、某魔女の新作胃薬『最高にハイって奴だあああつ!!』を手渡していたり、カオスが神魔族を押しつけて通信機を占領し、娘に向かつて親馬鹿っぷりを全力で発揮してみたり、おキヌの笑顔に美神と忠夫が癒されてみたり。

そして、モニターの向こうで忠夫に向かつてヒヤクメが「貸し一つなのね」と、にやにやとした笑顔でのたまわってみたりといろいろ在ったものの、漸く、彼らにも終わったのだと言う感慨が込み上げてくる。

まあ、どうやらメドーサの事は流石にヒヤクメにバレてしまっている様ではあるが、あの笑顔と台詞からすると報告をしてくれないようである。

何を貸しの代償に持つていかれるかと少々恐ろしくは在るが、同時にヒヤクメなので大した事でもないだろう、と、ほっと胸を撫で下ろす忠夫。

そして、それを苦笑いと共に眺める美神であった。

「……ばあーか」

彼女は、そんな会話を耳に残しながら、微かな笑顔を残して飛び去った。

それに、最も早く気付いたのは、通信を切り、センサーを船外部に向けたマリア。

「……横島・さん！ メドーサ・ロスト！」

シートから飛び起き、地球の面々を映し出していたモニターに齧り付く忠夫の目には、先程までメドーサが居た場所の映像が映し出されている。

其処には、うつらうつらと船を漕ぎながら、僅かに微笑んだ寝顔を見せていた少女の姿は既がない。

船内に、困惑と疑念の色が飛び交った。

「マリアのセンサーがパッシブからアクティブに切り替わり、周辺の状況をサーチする。」

だが、その探索範囲には反応が無い。

おそらく、既に範囲外に出たか、或いは、人狼族の、いや、ハンターの技能である気配や魔力、霊力を殺して引つかからない状態になっているか。

ともかく、その現在地がわからない事も不安をあおるが、何よりも。

「何で、だよっ!!」

「・・・落ち着きなさい」

目的が、分らない。

「マリア、ちよつと止まってくれっ!!」

「・・・ソーリー。帰りの燃料・及び・現在位置・加速を・考慮。地球に帰還する事が・不可能となる可能性・82%」

月の重力を脱し、そして地球に向かって加速中である船が、一端停止し、そして再びコースを変更しながら帰還するという事は——難しい。

普通の状態であっても、巨大なコントロールセンターに大規模な計算装置、そして多大なマンパワーを使用して、それで成功させるのが宇宙行なのだ。

そして、月の魔力の奔流を回避する際に使われた大量の燃料が、その計算を補って余

りあるマリアの娘達とドクター・カオスの能力を持つてしても、不可能である推測の後押しをするだけ。

ならば、と忠夫はヘルメットも被らず竜神の装具を身に付け、宇宙船のハッチに手を掛ける。

「ちよつと行つてきます！」

「待ちなさいっ！ 何処に居るかも分からないのに——」

「——ノー・ミス・美神！ メドーサの位置・確認！」

美神の声を遮つて、マリアの僅かに高揚した口調が割り込んだ。

モニターに映し出されたのは、二つの点。

中心で輝く光点と、そのやや斜め後方で、距離を更に離れさせながら移動するそれである。

「横島・さんの・体内に設置されていた・発信機・です！」

「……あー、そう言えば、アレつてあんたの中に居たんだっけ」

「とゆーか体内つてなんつすかあっ?! 俺聞いてないっすけどおおおっ?!」

張り詰めたマリアの声とは対照的に、困ったように頬を掻きながら天井を見上げる美神と、だからだと冷や汗を流しながら己に何時の間にかそんな物が仕掛けられていた事に恐怖する忠夫であった。

ともかく、そうとなれば話しは早い。

とつとと家出娘を確保して、お尻ぺんぺんである。

再びハッチに取り付く忠夫の後方で、美神がやれやれと溜め息をつきながらヘルメツトを被り、シートに身体を固定する。

どうやら、手伝うつもりは無いようだが、かといって邪魔するつもりは欠片も無いらしい。

色々と心中複雑な物があるであろう美神も、ハッチのハンドルを高速で回転させ始めた忠夫に無線機越しの声を送るだけ。

「・・・あんまり遅いようなら、置いてくからね」

「了解っすー！」

「メドーサの・目的も・不明です。気を付けて！」

「分かっているって！」

視線も寄越さずに後ろ手に美神が放り投げた受信機を引っ掴み、狭いハッチを擦り抜けて忠夫は飛び出した。

宇宙船の進行方向に背を向けて飛び去った忠夫の後方には、地球が巨大な蒼さを真つ暗な虚空に映えさせている。

「……帰還可能時刻まで・後・25分・43秒」

「……ほんと、馬鹿なんだから」

マリアの制御の下、再び閉じた船内に酸素が満たされる。

ヘルメットを鬱陶し気に脱ぎ捨て、放り投げた美神はシートの肘掛に頬杖をついて目を閉じる。

だが、言葉とは裏腹に、その唇は僅かに弧を描いていた。

「ねえ、マリアもそう思うでしょ?」

「イエス・ミス・美神。ですが——」

「ですが?」

僅かに言葉を止めたマリアに、先を促すように目を閉じたまま言葉を繰り返す。

閉じた視界に写るのは、暗闇と、真つ直ぐに前を見ながら振り返ることも無く飛び出していった半人狼の横顔。

そして、多分間違いない無く、自分と同じように微笑んでいるであろう、アンドロイドの少女の顔。

多分、今頃地球ではヒヤクメ辺りが飛び出した忠夫を発見して大混乱であろうが、まあ、それ程心配する事も無いだろう。

そして、美神は静かにマリアの言葉を待つ。

「ですが・だからこそ・横島さんのだと——マリアは、想うのです」

何時に無く感情の籠ったその声に、ほんの少しだけ緩んだ頬で同意を示しつつ、美神はゆつくりとシートを倒す。

そう、心配する事は無い。

普段は頼りにならない事この上なし、でも、あいつは、やる時にはちゃんとやってくれるのだから、やってきたのだから。

ふ、と。

唇の間から僅かに零れる吐息が、僅かに生み出された笑いの欠片である事を自覚しながら、美神はゆつくりと目を開く。

「無節操な馬鹿狼だこと」

「捕まえて・しまえば・こちらの物です」

「あら、そう簡単に行くかしら？」

「行かせ・ます」

「ふーん」

互いに何かを意図した会話でもないだろうに、2人の表情だけは共通している。

笑いを堪えるような、楽しむような、そして、何かに甘えるような。

だから、2人同時に飛び去っていった馬鹿のいるであろう方向を、マリアはモニター越しに、美神はシートの上に仰け反った体勢で見つめるのだった。

「將を射る為には・まず・馬を射る事からと・言いますし」

「・・・餌付けしてたのはそれか」

基本的な対応は変わらないようだが。

「五人姉妹・ですから・男の子も・欲しいです」

「あんたもかなり規格外よね・・・」

「ドクター・カオスの・娘ですから」

モニターの向こうで「えっへん」と胸を張るマリアに、苦笑いを返す美神であった。

第四拾貳話。

焼け爛れ、半ば炭と化した巨腕が虚空を抉る。

瓦礫の破片に貫かれた片方の複眼は、未だ奇妙な色彩の液体を垂れ流し塞がる様子を見せていない。

極大の高熱は4枚存在していた羽根の内、1枚を焼き取り2枚を歪めさせていた。

だが、無傷で対象を睨み付けるもう片方の複眼は、ギラギラとした憎しみと殺意を隠せてはいない。

黒い破片を一振りのたびに欠け落とさせながらも、振るわれる腕に躊躇は無い。

それは、蠅の王と呼ばれたそれは、昆虫の腹部とは似ても似つかない、植物のようにも見える所々を傷付かせた球体の上で、咆哮を上げた。

『メ、ドオ、サアアアアアアアッ!!』

「はっ！ 五月蠅いって言ってるだろうがあっ!!」

蟻と象、と言う比較が最も近いだろうか。

縦の長さだけでも4、5階建てのビルに相当する巨体を震わせながら、己の周りに飛

び交う僅かに生き残ったクローン達に魔力砲の一斉射撃命令。

巨体の表面を、それこそ蛇の如き曲線と人狼の瞬発力をもって駆け回るメドーサを、その数十条の光は捕らえない。

むしろ、足場となる己の身体を徒に抉るのみ。

だが、巨体であるが故に、その一撃はまさに針で突付かれたような物でしかない。

そして、込み上げる怒りと恨みは、その程度の痛みで怯む事を許さない。

苦々しげに舌打ちをしながら、目の前に飛び出してきたクローンを打ち払う。

加速、加速、回避、加速、回避。

動きを止めた瞬間が、そのまま己の窮地を呼び込むタイミング。

故に彼女は止まらない。

荒れ狂うベルゼバブ・オリジナルの体の上を駆け抜けながら、そしてその個体の情報を集めていく。

「・・・やれやれ。もしかしなくても厄札かねえ」

溜め息一つと同時に斜め前方に跳躍回避。

離れかけた身体を、突き刺した刺叉で無理矢理引きずり戻して着地、再加速。

着地点は既に魔力砲の雨霰を受けてささくれの如くなっている。

『ヴオオオオオオオオッ!!』

「黙りなあっ!!」

一歩左に強く踏み込み、右に流れる体の制御を放り出して無理矢理反転、一瞬見えた口内に向かつて、力の限りで靈力砲を打ち込んだ。

無防備に直撃を喰らったベルゼバブは、しかし咆哮さえも止めはしない。

怯む様子も無く、僅かな驚愕に身を凍らせたメドーサに向かつて腕を振るう。

豪速を持つて虚空を割ったそれは、紫色の髪の毛を数本持つていかれたメドーサを翳めて己の身体を穿つ。

「く、あっ?!」

『メドオオオオオザアアアッ!!』

穿たれた身体は、僅かな痛みを穿った腕と己の身体に残しながら、その欠片を周囲に撒き散らした。

幾つかの欠片は、慌てて両腕で顔を庇ったメドーサを直撃する。

苦鳴を奥歯で噛み殺し、着弾の衝撃で後方に仰け反ったメドーサめがけて追撃の魔力砲が十数条迸る。

無理矢理に引き戻した意識でそれを捉え、回避に次ぐ回避。

立て直した体勢のまま、再び着地した巨体の胴体部を蹴り再加速。

「ふん。良いさ、来な」

それでも、皮肉げな笑みは消える事無く浮かんでいる。

「貴様と私、捨て駒同士……立場は同じ、生き汚さも同じだ。なら、そう、それなら」
 駆け出しながら槍を扱く。

長い間、己の一部として共に歩んできたそれは、こんな時でも常と変わらぬ固さを縮んだ持ち主の手に返す。

慣性に流されて尻尾と耳が踊る。

短い間の付き合ひとは言え、己の一部であるそれは、千切れた縁と無理矢理繋がれた縁に相応しく命を示す。

「——いや……やめた」

ニイ、と、外見に相応しくないほどに歪んだ笑みを浮かべながら、しかしその中に、確かな喜びを馴染ませながら。

上方——いや進行方向から言えば前方か——の複眼に刺叉の切っ先を、貫く意思を籠めて突き出しながら。

これは、私の、「魔族メドーサ」が最後に作った負い目。

「メドーサ」として生きるのならば、生きたいのならば、自分のケリくらいは自分で付ける。

他人に尻拭かれて納得いくほど、「魔族メドーサ」も「メドーサ」も腐っちゃいない。

だから、それと、そして。

「少し見ていたい、面白い奴を見つけたんでねっ！ 死ぬ気は無いつ！ だからあんた

が1人で逝きなあああああっ!!!」

『グルアアアアアアアアアアア!!!』

問答無用で、突っ込んだ。

「ふんぬおおおおりやあああつ!!!」

宇宙空間を一人で進む忠夫。

美神から受け取った発信機の示す方向に向けて、ひたすらに全力で直進する。

ただし、犬かき。

別に泳ぐ必要がある訳無いのだが、竜神の装具を身に付けながら空を飛ばなかった忠夫に、その辺りのノウハウがある訳で無し。

と、言う訳で。

全く関係の無い無駄な動きに貴重な体力をがんがん突っ込みながら、忠夫はひたすら宙を行く。

忠夫が頭の前に小さくした如意棒と髪の毛で作った釣竿をつるし、その先端には発信機が吊るされていると言う状態で。

まさに、人參をぶら下げられた馬であるが、彼は至って真剣そのものである事を忘れてはいけない。

故に、馬ではなく馬鹿なのだ。

「メドー！ 今父さんが行くからなああっ!!」

竜気が意志の力に反応して、ただひたすらに加速する。

発信機に写し込まれた光点との距離が、徐々に、ほんの僅かずつではあるが縮まってい
いく。

しかし、それでも忠夫はもどかしい。
なので。

「奥技！」

動かす手を休めずに、誰に聞こえる訳でもない宣言を試してみた。

それまでリズムミカルに、だが高速で動いていた両手足の動きが変化する。

よりダイナミックに、より力強く。

そう、本能の告げる動きではなく、技術と理性のコンチェルト。

大きく体の横に広がり、関節の稼動限界寸前まで背後に持ち上げられた両手が虚空を叩く。

並べて真後ろに伸ばされた二本の脚が、それこそ人魚の如くバネのような動きを見せた。

そう、それは――

「人っ狼！ バタフライイイイツ！！」

繰り返すが、別に身体を動かさなくても進む。

まあ、何故か加速している辺りが思い込みの怖さという物だが。

叩き落した数は既に20を数え、負った傷も既に全身に及んでいた。

どうやらベルゼバブの方も既にクローンを新たに作り出す事は出来ないらしく、どれ

ほど数を減らされようが、増援のクローンが出てくることは無かった。

だが、同時に、そのオリジナルであろう本体が致命傷を負った様子もまた、無い。

巨体のあちこちが欠け、そこから僅かに液体を流しつつはあるが、その巨体ゆえに掠り傷と言っても過言ではないだろう。

しかし、メドーサの負った傷は、掠り傷とは言っても物が違う。

痛みを感じる様子さえ無く、ほとんど狂気に飲まれた魔族の動きは全く減じる事は無い。

だが、メドーサもまた、未だ月光の届くこの地点でならば、その魔力が新たに得た傷をあつさりと治していくのだ。

「……全く、便利だけどぶぎけてるねえ、この身体は」

そう呟きながら、己の身体を砕いて振り下ろされた手をさかのぼる。

螺旋を描きながら辿り着いた先は、数千の単位でこちらを写しこむ複眼の目の前。

溢れる霊力任せに全力で砲撃連打。

爆裂がベルゼバブの顔を包み、だがすぐさまその衝撃も収まらぬ内に襲い掛かるクローンの魔力砲。

跳躍、加速、再着地。

こちらを見失った巨体の背後に回り、死角からその背部の羽根を狙う。

だが、それをさせじと襲い掛かるクローン達。

どうやら視覚を共有してでもいるのか、それとも思考ごと共有しているのか、同時に見えないはずの背部に向かってオリジナルの殺気が叩きつけられた。

『ガアアッ!』

「ふっ!!」

オリジナルの巨体が一気に加速、僅かに引き離されたメドーサとの空隙にクローンが潜り込み、己の身体を弾丸代わりに体当たり。

身体を捻って回避したメドーサは、脇腹の横を擦り抜けた小さな影に向かって刺叉を投擲する。

旋回しながら回避する寸前に、狙い済ましたタイミングで投げ込まれたその先端に貫かれたクローンは、悲鳴も上げずに消滅した。

だが、その一体の犠牲の代償に、無手となったメドーサに一気に収束するクローン達。上下左右前後、全く同時に襲い掛かる彼らに、メドーサは小馬鹿にしたような笑みを浮かべて見せてやった。

「戦場に、一本だけ武器を持っていくわけが無いだろうが!」

一瞬光った手の平の先から、次の瞬間には新たな刺叉が具現している。

同時に突っ込んでくる弾丸の群に対し、むしろ逆に突っ込む。

そして、弾丸に向けて加速すると言う事は、その向かった方向との距離が縮まると言う事。

故に、無理矢理ずらされたタイミングの中、先ず前方のクローンが弾けて消えた。

回避された他の方向の個体達は慌てて方向修正、一群となつてメドーサに突っ込んでいく。

ちらり、と背後から迫る群を見たメドーサは、僅かに弧を描きながら宙を駆ける。

戦闘機を追いかけるミサイル群、その様子はそれが最も近いであろう。

だが、この戦闘機は、背後に向かつて攻撃できるのだ。

「ぶっ飛びなあっ!!」

狙いもつけずに予測と超感覚の情報だけで霊力砲の弾幕を張る。

なす術も無くそれに突っ込んだ群は、一瞬にして焼き潰された。

そして同時に、それがクローン達の最後の攻勢であった。

全てのクローンベルゼバブを潰したメドーサは、その爆炎に紛れ再びオリジナルの背中に着地する。

「ふ、う。後は、このでかぶつだけかい・・・」

こと、体力と言う点で言うのなら、メドーサのそれは以前よりも増強されている。

元々高スペックであったメドーサの蛇神としての、魔族としてのそれを更に増強する

ように、互いに否定しあうのではなく、まるで忠夫の意思でも働いているかのよう、メドーサの肉体の内部で二つの要素は混じり合っている。

故に、月の魔力を最大限に受けたメドーサの肉体は、全くと言って良いほど疲労していない。

そう、肉体は。

だが、精神は、確かに疲労を感じていた。

それでも全包围に警戒を払いながら、同時に僅かなチャンスを逃さずに攻撃し続ける。

それも、効いているのかいないのかが不明なほどの巨体に向かって。

無駄なのでは、という思考が浮かび、それを鼻で笑って意識の底に沈め、いい加減にしろ、と怒りを覚えてはそれを理性で無理矢理押さえつける。

「これで、終わりだ——」

だから、最後の一撃とする為に、己の全力を更に集中させていたメドーサは、その一撃に、決着の為の一撃に、意識を取られすぎていた。

それを、油断と言うのかもしれない。

それを、虚を突かれたと言うのだろう。

だが、どれほど言葉で取り繕おうと、どれほど状況が変わってから後悔しようとも――

「なッ?! ぐ、あっ!!」

——発生した事象は、消し去る事など出来はしない。

「ぐ、ううう。畜生、妙な物腹にくつつけてると思つたら——」

それは、茶褐色の触手であつた。

いや、触手と言ふのは違ふのだらう。

それに最も良く似た物を上げるとするのならば、そう、「根」だ。

「蔓」、「茎」、でも構わない。

詰まる所、メドーサの足元だけではなく、ベルゼバブオリジナルの巨体のそこかしこ

から突如鎌首を持ち上げた、本体と比較すれば余りにも細いそれは、植物のそれと全く同じ外見をしていた。

「——クローンの思考同調だけかと思つたら、合成もされてやがったのかつ!!」

メドーサの細い身体に巻きついた、それこそ蛇のようなそれは、かつて——死津喪比女と呼ばれた妖の、花と本体を結んでいたそれと同じ物だった。

死津喪比女の残した球根の欠片と、それを探し回っていた、僅かにその身に蓄えた栄養と生存本能だけで生き延びていた葉虫。

葉虫はたまたま座学を嫌がつて訓練に出てきていた人狼と九尾の狐の娘達に滅ぼされた物の、その欠片は生き延び、数奇な、と言うよりも性質の悪い運によつてメドーサの手に入る事となつていた。

そして、かつてメドーサが人間の技術者と共に開発した、合成術。

魔に落ちた人と、人狼を合成させたキメラ——陰念。

人と、魔と、狼と、蛇の要素をその身に取り入れつつ、それでも崩壊する事無くフェンリル狼にまで昇華されるほどの安定を見せたその技術。

現在のベルゼバブを構成するその技術と要素に、それを手に入れた本人が関っているとは——

「皮肉に、してもつ、性質が悪すぎるっ!!」

もかくメドーサの肢体に、それこそ一本一本に意思があるとしても言うかのように巻きついて行く根。

一本を引き千切れば三本が新たに巻きつき、多少の被害を覚悟で靈力砲を至近に打ち込み数本を纏めて焼き潰せば動く前に十数本が包囲する。

何よりも厄介なのが、その固さであった。

岩のように固い、と言うわけではない。

ただ、クローンよりはしづとかった。

そして、始めに居たクローンよりも、その数は多すぎた。

超加速——否、そもそもこの身を捕らえる物を全て対処するだけでも時間が足りない。
い。

おそらく、いや、間違い無く、超加速が切れた瞬間に、また新たに包囲されるだけ。

靈力砲——否、生半な威力では動きを止めないのは先程の一撃で証明済み。

威力を高め様にも、溜めの時間の間に更に手におえなくなるだけ。

力任せに——否、数が多すぎる、間に合わない。

その意味する事は、つまり。

「……手詰まり、かい」

浮かんだ表情は、諦めでもなく、怒りでもなく、悲哀でさえなく。ただただ、呆然としたものだった。

その表情さえも、次の瞬間には根に覆われて消える。

『ゲハ、ゲハハハハハハハハハハハハハハハッ!!』

蠅の王の哄笑が響く。

その眼前に捧げられるは、内部にメドーサと呼ばれる少女を捕らえた茶褐色の繭。次々と己の体から生み出された根を巻きつけ、更に拘束を重ねていく。

数瞬後には、ベルゼバブの複眼ほどはあろうかという歪な球体が浮かんでいた。

そして、高まる哄笑と共に、その球体を巨大な2本の腕が押し包む。

ぎり、と、押し固め始めた。

ぎりぎり、と、己の一部ごと押し潰し始めた。

ぎりぎりぎりぎり、と、その瞬間に向かつて――

「俺の娘に——何にしてやがるっ
!!!!」

むしろ、軽い、と感じる程の音であった。

咆哮と共に、2本の腕と、少女を拘束していた球体が、文字通り「弾け飛んだ」。僅かに絡みつくそれを引き千切り、娘と読んだ少女の呼吸を確認する。

体の骨のあちこちに罅が入り、痛み故か意識を失つていても、その呼吸は荒いながらも確かに生きている事を証明していた。

安堵の溜め息を一つ付き、優しくその頭を撫でるとゆっくりと背後に庇う。

月光がまだまだ届くこの位置ならば、そう心配する事無く意識も戻るだろう。

だから、今は。

目の前で、両腕を失って、五月蠅い咆哮を上げているこの化け物——いや、このクソツタレを。

「ぶつとばすつ!!」

『ギャルアアアアアアアアッ!!』

怒った。

久し振りに、ほんとーに、腹が立った。

人の娘を、たった一人で突っ込んでいった無茶な娘を。

傷つけやがった目の前の蠅が。

「——犬飼ポチの息子にして、犬飼沙耶の息子、そして犬飼メドーサの父、犬飼忠夫！
狼の誇りと侍の誇り、手前に思う存分見せてやらあつ!!」

怒りが最後の引き金となったのか、それともただ単に時期が来ただけか。
それでも、例えどんな理由であろうとも。

今、忠夫の五体の隅々まで——妙神山での修行で無くなった筈の靈力が、完全に満ちていた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！」

咆哮を、腹の底からの咆哮を上げる。

その体が、真っ白な獣毛に覆われる。

その左手に、猿神より借り受けた如意棒が出現し、その右手に、久方ぶりの靈波刀が、「フアング・オブ・グローリー」と命名した靈波刀が顕現する。

超感覚は冴え渡り、身体に満ちる力は暴走寸前まで昂ぶっている。

だから、忠夫は——迷う事無く、突っ込んだ。

「っらあっ!!」

性懲りも無く伸びてきた根の群を、体ごと捻ってぶん回した如意棒が遠心力と自重でブツブツ切れる。

千切られて宙を漂うそれを足場に、全身の力で己の身体を蹴り飛ばす。

前へ。

眼前で根が球体を作り出し、ハンマーのように繰り出してくる。

縮めた如意棒を口に咥え、靈波刀に全力を籠めながら超加速。

一瞬の間に数百条の軌跡が描かれ、中心部を貫徹しながら超加速を解除、抜け出したと同時に再加速。

前へ、前へと。

後方から、上から、下から、左右から、槍の如く根が突き出される。

超感覚で全てを捉え、身体は慣性任せに進ませながら背後を振り向き——

「ッ!!!」
咆哮一声。

靈力にほぼ全て変換されたそれは、破壊する事は不可能でも動きを止める事なら十分に可能。

弾かれ、仰け反ったそれらを置いてけぼりに更に加速。

再び前方を向いた視界を埋め尽くし、炭化し、黒く煤け、半ばからへし折られたベルゼバブの腕が振り下ろされる。

回避するには近すぎる。

如意棒を突き出し、防御——

「んがああっ?!」

いかんせん、重量差がありすぎた。

思いつ切り後方に吹っ飛ばされる。

流石に如意棒には傷一つ付いてはいないが、両腕の骨に数箇所亀裂。

痛い、猛烈に痛い——月の魔力は周囲にこれ以上無く満ちているので問題無しと無理矢理納得して、後方に高速で吹っ飛んでいく身体を停止——。

「くっ!」

「うおっ?! メドーサっ!!」

忠夫の腕を引つ掴んで、痛みを堪えながら引き止めたのは何時の間にか意識を取り戻したメドーサであった。

「・・・ったく、この馬鹿っ！　なんで此処にいるのさっ！」

「な、なんでもクソもあるかっ!!　お前が勝手に居なくなるからだろうが！　出かける時はちゃんと親に一言言ってから出かけんかいつ!!」

「わたしやガキかっ!!」

「ガキだろ！」

根が伸びてきたので親子喧嘩は一時中断、2人で迎撃に集中する。

「真正面から行つて勝てる相手かいつ！　頭を使いな、それがあんたの得意技だろうがっ！」

「・・・そりやそうだ」

喧嘩していたにもかかわらず、背中合わせに根を迎撃する2人の呼吸はぴたりと合っている。

近づく物を蹴散らし、その先で憎々しげに咆哮を上げているベルゼバブを睨む。

そして、如意棒で薙ぎ払っていた忠夫の瞳に、今度は怒り任せの色ではなく、何時も楽しげな色が浮かんだ。

背中合わせに迎撃に励んでいたメドーサの首に腕を回し、その耳元に囁き掛ける。

一瞬驚きの色を浮かべたメドーサも、振り払う前に聞こえてきたその言葉に方眉を上げながらも頷いた。

「タイミング合わせろっ!」

「上等っ!!」

忙しく腕を動かしながら、大きく息を吸い込む2人。

忠夫の指が三本立てられ、二本、一本と折られ、そして最後の一本が折れた瞬間。

「———っ!!」

空間を、巨大な咆哮が揺るがした。

互いに共鳴しながら広がるそれは、細い根を半ばから引き千切り、太い物さえも吹き飛ばしながらベルゼバブに向かって通路を作り上げていく。

「よし、行きなっ!」

「やっぱ怖ええええっ?!」

根の群が怯んだその一瞬、その通路めがけて全力で忠夫を襟首掴んでブン投げるメドーサ。

忠夫は、恐怖で涙をだばだばと流しながら、弾丸となった自分に回転をつける。

回転が急すぎるが故にまるで球体のようにも見えるそれは、狙い違わずベルゼバブの顔面へと直進し——

『ゴガアアツツ!!』

だが、その進路上にはそれを迎撃せんと横薙ぎに振るわれる巨腕がある。

そう、それは、狙いがデッドボールとは言えまるでバットとボールにも見える。

そして、このボールは、変化球だった。

球体から、一瞬だけ如意棒が突き出され、一瞬だけ巨大化した後すぐさま消える。

しかし、その一瞬で、ボールの軌道を変えるだけの重心を生み出す事に成功した。

カクン、と落ちたボールは、今度こそ本当の狙いであつた胴体部に突き刺さる。

回転を縦回転から横回転へと変化させながら。

そして、胴体突き刺さる直前、再び如意棒が、忠夫の意思に従つて一気に伸びた。

それは、曲がらぬ筈の如意棒が、曲がつて見えるほどの超高速。

さらに、如意棒が直撃する直前に超加速。

二重の速度が生み出した結果は、押し折る、と言うよりも切断であつた。

『ゴ、オ?』

己の腹を、球根にそっくりなその部分を真つ二つに切り裂かれたベルゼバブが、理解不能の声を上げる。

だが、結果は、彼が状態を把握するよりも早く。

『ゴ——』

そして、その視界に写る、月からの小さな光点だった。

「良いのですか、迦具夜様？」

「良いですよ。多分、もう使われる事も無いでしょうし……それより、神無、ちゃんと休んでいなさいと言ったでしょう？」

「いえ、しかし——」

「全く、臆と貴方が居ないので皆心配しています。貴方は早く傷を治す事に専念しなさい！」

「りよ、了解しました！」

「いだだだだだだだだだだあああつ?!」

「よ、横島さん、目が覚めたんですかっ?!」

「お、おキヌちゃん……? 此処は?」

「病院ですよ! だから、ほら!」

例によつて例の如く、肉体の無茶な酷使と重度の貧血で気絶した忠夫が目覚めたのは、最早顔なじみとなった白井総合病院の一室だった。

清潔なシーツと大きめに設計してある窓からの太陽の光が、懐かしい地球に帰つてきたことを証明している。

「もう、3日も目が覚めなかつたんですよ」

「……あれ? 美神さん達は?」

随分と心配そうなおキヌに押し付けられ、柔らかいベッドに身体を横たえた忠夫が尋ねる。

「美神さんだったら、もうすぐ戻ってきます。何でも、栄養が付くもの買つてくるつて」

あの後、どうやら忠夫は無事に船まで辿り着いていたらしい。

美神の話に寄れば、石で構成され、表面に複雑な模様が描かれた船が忠夫を宇宙船まで案内して来てくれたとの事。

帰還したのが太平洋のど真ん中、意識を取り戻さない忠夫と美神、マリアを回収した

神魔族の一行は、そのまま忠夫を連れて病院へ直行。

マリアのサーチによって、霊力の過剰消耗と重度の貧血、肉体の多大な疲労が原因と
言うのは分かっていたが、一応大事を取って、と言うことらしい。

マリアは、忠夫の看病をしたがったらしいが、宇宙での活動データとマリアに搭載さ
れていたアルファ達の武装をチェックする為渋々とカオスに連れられてカオスの秘密
基地へと帰っていったらしい。

小竜姫達はマリアの観測データとヒヤクメの物を貰い受け、報酬を払ってそのままそ
れぞれの陣営に戻っていったらしい。

彼女達にとっては、これからが忙しいのだろう。

「……え？」

「え？　って言われても、それだけですよ？」

忠夫は、船に乗せられて美神達の所に戻って来た——と言うことは、メドーサは？

「……………」

「横島さん？」

おキヌちゃんが知らないという事は、少なくとも美神さんは話していないという事。

それは、そうであろうが——ならば。

「美神さんを探しに——」

「必要無いわよ。ほら、お見舞い」

「美神さ——ムグツ?!」

再び身体をはね起こさせた忠夫の耳に、どこか不機嫌そうな美神の声が響いた。

慌てて美神に迫り、事情を聞こうとする忠夫の口に、お見舞いの品であるフライドチキンが押し込まれた。

そのまま、おキヌに聞こえないように小さな声で囁く。

「・・・メドーサなら、上空で別れたわ。ヒヤクメもマリアも口裏合わせてくれるそーよ」

「ムグムグムグツ!!」

ズックくん。

「・・・で、今、あいつは何処に?」

「さあ? どーせどつかに居るんじゃない? 発信機も壊れちゃったみたいだし」

美神が忠夫の目の前に発信機をぶら下げる。

その画面に表示されているのは「LOST」の4文字。

そこまで確認すると、忠夫はすぐさまドアを開いて飛び出していこうとし、美神に襟首捕まえられてベッドに引き摺り戻された。

「寝てなさい」

「でもっ!」

「どうせ今夜には逃げ出すつもりでしょうが。だからそれまで寝てなさいつつつてんの」

どこかつつけんどんに言う美神ではあったが、その表情は呆れの中にもしよーがないな、と言う色が濃い。

ほら、と新たに揚げたての鶏肉を突き出してくる美神の手から、瞳に炎を燃え上がらせながら忠夫は肉に齧り付くのであった。

後ろのほうでは、美神の手から直接餌を貰っているように見えるその光景を、おキヌが人差し指を咥えて羨ましそうに見ていたりする。

と、その忠夫の顔が歪んだ。

べ、と吐き出した舌の上には、銀色に光る小さな機械。間違いなく発信機的なそれである。

「……美神さん」

「……ちっ！ おとなしく丸のみしてればいいのに！」

忠夫の乏しい学習能力の、珍しい勝利である。

——夜。

案の定、と言うべきか、病院をプロレス医師との激闘の末脱出した半人狼は、よろよろとふらつく足でねぐらと言うかアパートまで何とか辿り着いていた。

病み上がりの半人狼VS最近増々技に磨きが掛かってきたと看護士に評判の医師の対決は、異様な盛り上がりを見せながらも忠夫の辛勝に終わったようだ。

「と、とりあえず保存肉食つてから探しにいかんと身が持たん」

懐から取り出した鍵をノブに差込み、捻る。

ドアが倒れた。

「・・・あれ？」

まあぼろい建物やからなー、と判断し、押し入れに保管してある保存食へと歩みを進める忠夫。

押し入れの襖を開いた。

メドーサが満足げに口元を拭っていた。

「なんでやねんっ?!」

「ふん。見た目は悪いが味は中々良いじゃないか」

見れば、2kgはあつた筈の肉は完璧に姿を消しており、残っているのはその下に敷いてあつた和紙が数枚だけ。

「良かった見つかつたでもなんでああ俺の肉少しくらい残しとけコンチクショー!!」

「五月蠅い黙れ。親とか言うのなら子の食事くらい大目に見ろ。それで、結局何が言いたいんだい?」

わたわたと混乱のまま両手をばたばたと振っていた忠夫は、そう言われてふと何かを考える表情になる。

それを、どこか楽しそうに見つめるメドーサであつた。

「・・・メドえもん?」

「違うだろうがっ!!」

暫し、狭い室内に男女のけたたましい声が響いた。

「・・・帰つて来たみたいね、あの馬鹿甥は」

「あ、もう良いんですか？」

「ええ、美味しいお茶ありがとう花戸さん。ごめんなさいねー、家の子が迷惑かけてるみたいで」

「いえ、そんな・・・」

「さて、それじゃあ——」

メドーサに頭を齧られている忠夫の背に、とんでもなく冷たい悪寒が走った。

「——締め上げちゃいますか？」

第四拾参話。

「あ、あの、どうされたんですか？」

「良いのよー。大丈夫大丈夫」

恐る恐る、と言う言葉がこれほどピツタリくる態度も無いだろう。

安っぽいちやぶ台の上に音も立てずに湯飲みを置いて、ゆつくりと立ち上がった妙齡の女性に、その雰囲氣に仰け反りながら小鳩が問う。

その女性は、声音と表情だけは柔らかく、しかし額に青筋、背後に阿修羅を背負いながら軽い言葉で何の保証にもならない大丈夫を繰り返すだけ。

部屋の隅で元貧乏神、現在は一応は福の神が怯えてカタカタと震えているのは気のせいではない。

むしろ、小鳩もそちらに行つて一緒に膝を抱えて居たいくらいである。

「でででも、あの、そのつ、お茶のお代わりとか！」

「ご馳走様、本当に美味しかったわ。きつと良いお嫁さんに成れるわね」

取り付く島も無い。

立ち上がった彼女は、青褪めて必死で時間稼ぎをしようとしている小鳩の頭を一度撫

で、そのまま振り返りもせず、に玄関の靴に爪先を通す。

そのまま、小鳩の伸ばした腕もそのままに——何故かボロボロの、開けようとすれば軋む音が必ず出るドアを無音で開けて、全く音を立てずに隣の部屋へと向かつていった。

何時の間にか、隣の部屋から響いていた喧騒が消えていたのに気付いたのは、その瞬間。

小鳩は、ゆつくりと伸ばした手を下ろして、胸の前に掻き抱いた。

その肩を未だ緊張で固まったままのぎこちない笑顔で叩く、貧乏神。

「貧ちゃん……私、私頑張ったよね？」

「ああ、ああ……！ 小鳩は、小鳩はよーやった！ 後はあいつ次第や！」
継りつくように抱きついてきた、涙目の小鳩を抱きとめながら。

貧乏神の瞳にも、また、涙。

「……ま、アカンとは思うが」

「……うん」

2人の視線が行く先は、隣人にして滅多に帰ってこない彼女の想い人、壁一枚隔てた横島忠夫のねぐらである。

たまたま学校から帰ってきた小鳩が、忠夫の部屋の前で腕を組んでドアを睨みつけていたその女性に声をかけ、それが忠夫の母——戸籍上は、であるが——と知り、帰ってくるまでお茶でも、と誘ったのが悪かったのか。

それとも、学校に行つて居る時間や此処に帰つてくるのが殆ど無く、むしろ出かけている時間の方が多いと正直に答えてしまったのが悪かったのか。

むしろ、かなり気合を入れてこんな時間までおもてなしたのが悪いのか。

その上、何でこんな時に限つて、と言わんばかりの最悪のタイミングで、色々な事を話して彼女が修羅を背負つたその瞬間に、隣の部屋から喧騒を響かせた彼が悪いのか。

ともあれ、小鳩の「逃げてー！」と言う心の叫びは届かなかつたらしい。

あの鬼気を発しまくっている女傑の前で、それを口から出すのは無理だつたし。

「貧ちゃん・・・」

「な、なんや小鳩?」

しかし、だからと言って心配な気持ちも薄れる訳も無く。

「ちよつと、見てきて?」

「小鳩?!!」

何と言うか、極寒の吹雪が壁の向こう側から吹き始めているので偵察要員を出して見る事にしました。

「ほら、窓の外からだつたら全部見えるでしょ?」

確かにこの狭いボロアパート、窓の外からならばその内部をほぼ全て見渡す事は不可能ではない。

精々、玄関とその近くにあるトイレが見えない程度であろうから、彼女が期待しているシーンを覗いて来る事は十分に可能であろうし、玄関から侵入するよりは確実にある。

先程の、忠夫の母と名乗った女性の放つ鬼気を考慮の外に入れれば、の話であるが。

「大丈夫・・・私の家族の貧ちゃんなら、きつとやれるわつ!」

「こ、小鳩、そこまでワイの事を信頼してくれるのか・・・。よ、よしつ! 小鳩の為なら一肌でも二肌でも脱いだるわいっ!!」

言っておくが、きらきらと輝く瞳で貧乏神を見上げている彼女には一欠けらの悪意も無い。

ただ、隣に住んでいる滅多に帰ってくることの無い青年の事が心配なだけである。

だからこそ、彼女は真摯に頼んでいるのだ。

これで奮い立たなければ男ではない。

故に、貧乏神は震える膝をぎちぎちと音さえ立てながら伸ばし、己の頬を気合を入れるように叩くと迷わず花戸家の窓から飛び出したのだった。

「——メドーサ、逃げるぞ」

「はあ？」

頭部からだくだくと流血しながら、先程までの悲鳴も涙も鼻水も、そして情けなさの極致といえる表情も消した忠夫は、非常に緊張した面持ちで玄関を凝視していた。

その雰囲気にも、思わず嘔み付いていた頭を放したメドーサが疑問の声を投げかける。とは言え背中にべたりとくっ付いたその姿勢は、誰が何と言おうと特定の人々（一部人外も含む）に目撃されれば吼えるか泣くか撃たれるか殴られるか斬られるか、な光景ではある。

「俺の本能が告げている……。今、俺はライブでピンチが絶賛好評発売中だ……。！」

「……。意味不明だねえ。齧り過ぎてなんか切れたか？」

「良いから早く！ 玄関……。はヤバイっ！ 窓から——」

狭い空間に、轟音が鳴り響く。

落雷が至近に落ちたようにさえ聞こえるその音は、最早扉としての役を果たさなくなつて立てかけられていただけのドアの断末魔。

障子に隔てられていて見えはしないが、既に脅威は直ぐ其処に存在しているようだ。とつとつと修理しようと思つていたのに、完全に粉碎されてしまったので新しいのでも

作ろうか、と一瞬現実逃避しかけたが、即座に意識を逃亡へと収束させる。

先ず、脱出経路の確保を、と窓に向かつて一步を踏み出し——次の瞬間に目の前を掠めて飛んでいった鋼の刃に足止めされた。

忠夫の目には、そのナイフの表面に写った血の気の完全に引いた自分の顔さえ見えたと言う。

それは重々しい音を立てて突き刺さり、窓からそつと半分だけ顔を出そうとしていた貧乏神の鼻の先端をちくりと突き刺して漸く止まる。

白目をむいた彼が、窓の下で生々しい音を立てたが誰も気にはいられない。

「・・・何が起きてるんだい？」

「とりあえず、滅茶苦茶怒ってるみたいだから・・・死んだかもしれん、俺」

青から白、そして土気色へと顔色を変えていた忠夫だったが、現状をとりあえず把握する。

窓からの脱出は・・・と言うか、逃げ出すのは止めておいた方が良いだろう。

初めて実母の実家で出会ってから早幾年。

その後も何度となくわざわざ人狼の里まで訪ねて来ては、母と共に面倒を見てくれた女傑である。

忠夫は知らねど自分の夫に対し実家に帰ると見せかけて、フェイントかまして姉の所

に宿泊していたと言う裏話があったりする。

その度に実家を訪問——と言うよりスニーキングした——その夫が、結構な割合で実家に迷惑をかけてたりする、と言うのも此処では関係の無い話である。

小さい頃から何度かお世話になっており、何がしか——主に彼女の夫に唆されてだが——の悪い事をやつた後、逃げたら折檻が十割増しになると言うことは身をもつて体験している。

ならば、とりあえずやる事は。

「ちよつ、こらつ！」

「黙つてろつ！ 良いか、絶対開けるなよ?!」

すたんつ、と押入れの襖を開き、小脇に抱えたメドーサを放り込む。

そのまますばんつ、と襖を閉め、今この瞬間も迫りつつある脅威に対し、最善の体勢を取る……!

玄関と部屋を僅かに隔てていた最後の砦が、ドアを蹴り飛ばされても、ナイフで骨組みに罅を入れながらも健気に耐えていた障子が、開かれた勢いで粉碎された。

「なんか知らんがすんませんっしたあつ!!」

——完璧だ。

完璧なまでの、土下座。

そう、怒れる魔神様に対して最も効果的（彼女の夫の体験談）であつた土下座を受け継ぎ、尚且つその後の様々な経験で磨かれた土下座。

忠夫の人生の中で、最も見事な土下座であつた。

まさにキングオブ土下座。

土下座・オブ・土下座ズ。

目の前に立つた気配が僅かに足を止め、考えるように腕を組んだのが感じられた。

此処で、最後のもう一押し・・・！

「あ、相変わらずお若いっすね、百合子おばさ」「おばさんって言うなゆるてるやろうがあつ!!」ぎやいーんっ!!」

肩甲骨の間を踵で完全に踏み潰され、反省の色を感じたのか少々殺気を収めていた彼女は再び猛り狂う。

どうやらちゃんと靴を脱いで上がってきたらしく、ハイヒールでなかったのが不幸中の幸いだろう。

何はともあれ、一応忠夫の母と同じくお嬢様と呼ばれる人種の筈の、育ちのよさに心から感謝の念を捧げながら。

「ごんの馬鹿甥はっ!」

「ゆ、百合子さん、いらつさーい……」

忠夫の母の妹、忠夫の偽装した戸籍上の母、横島百合子である。

「……ぶーん」

百合子の視線が、狭い部屋の中を縦横無尽に駆け巡る。

最初に止まったのは押入れの襖、明らかに歳若い女性の物であろう細い指が、只でさえポロポロのそれを音も無く突き破つてまたその奥に戻っていく。

次に向いたのが、窓の外。

微妙に赤いナニカを付着させた小柄な手が、重力に必死で逆らつてプルプルと振るえながら窓枠に指を引つ掛けている。

部屋の隅には乱雑に畳んで……と言うよりも、ぎりぎり分類されていると言えない事も無い状態でジージャン、ジーパン、Tシャツに下着類が積み重なっていた。

そして、よくよく見ればその一番下に、あまり着られた様子の無い黒くて厚手の学生服の袖が見えていたり。

未だに踏まれ続け、呻き声を上げている忠夫の背中から足をどけ、ゆつくりとその袖の埋まる服の山に近づいて行く。

酸素を貪りながら起き上がった忠夫の目に写ったのは、今まさにその小山の最下層部

から引きずり出された「学生服」であつた。

「……へえ？」

だらだらだらららら。

最早、体中の水分を垂れ流してゐるのではないかと思われるほどの冷や汗に包まれながら、忠夫の尻尾は完全に丸められている。

背中しか見えないが、学生服を摘み上げている彼女の、その背中には鬼が居た。

「どう言う事か、説明してみなさい」

「はっ！ 本日半刻程前に本宅に帰還仕りました拙者は、てれびを視聴しつつ本日の夕餉を食さんとし、新鮮なる山の幸を捌こうと致しましたが故に大変騒々しく、つきましてはこれより本宅を出仕いたした後に周辺住民の皆様にたいし奉りながら謝意の証としまして三回回つて美人のおねーさんはいねがー！「お黙り」はい」

説明を命じておきながらそりや無いよ、と忠夫は思うものの、誤魔化すつもりかそれすら不可能なのか、ただ単に己の混乱を吐き出した彼にぶつけられたのは圧力が増した鬼氣であつた。

正座のまま、カタカタと震える忠夫の目の前で、ゆっくりと振り向いた百合子は黙つて忠夫の耳、狼の物ではないそれを摘むと力一杯振り上げる。

「……」

「痛い痛いだだだだああつ?! 黙って抓らんといてー!!」

「千切るからね」

「だからってそんな物騒な事言うのは止めてー!!」

「ガタガタぬかすんじゃないわよ、この馬鹿甥っこ!!」

「んぎゃー!!」

忠夫の耳を引つ張りながらも、百合子の意識の半分は別の所に向けられている。

悲鳴を上げる忠夫の向こう側、扉の辺りでちらちらとこちらを伺う、隠れているつもりでも三つ編みがちよこんと見えている少女と、襖に体重をかけてしまつて、しかしそれに気付いていない押入れの中の誰かに。

そして、地面に落ちて悶えている貧乏神と、更に窓の外の一——誰か。

「……ふう。場所変えるわよ」

「え? あいだだだああつ?!」

溜め息を一つ突いた百合子は、忠夫の耳を掴んだまま玄関に向かって歩き出した。

上の方向から斜め後ろに痛みの向きが変わつた為、抵抗も出来ずに引き摺られていく半人狼の青年の悲鳴を耳にしなから。

このまま此処に居ては、何がしかの余計な雑事が増えると判断しての事だが、とりあえず何故か周囲の存在を引き付けてはいるようである甥の姿に、何処となく夫の姿をダ

づらせてしまったのは不安と言うかその要素があると言うか。

とりあえず、ことさらゆつくりと玄関に向かう間に廊下を隣の部屋に駆け込んでいった足音一つ、軋む音を立ててなくなった襖が一枚。

何時の間にか消えた窓枠の向こうの小さな手と、そして。

「……よい、しよつと」

懐をござごそと漁り、小さな飴玉を一つ取り出し、背後も見ずに背中側の窓枠の向こうにそれを親指で弾いて放り投げる。

それが空中で何かにぶつかり、次の瞬間にはその姿を消した事に気付いた者は、百合子を除いて、居ない。

「ほら、さっさと歩け！」

「なら離してえええつ!!」

悲鳴が段々と離れて行き、完全に聞こえなくなった頃。

小鳩が恐る恐る忠夫の部屋を覗き込む。

誰も居ない。

開いた窓と、閉められた押入れの襖。

乱雑に放り投げられたと思しき衣服と電源の入っていないTV、敷きつ放しの為薄っぺらになってしまっている布団、それ以外に何も無いが故に生活感の薄いその部屋を一

瞥すると、聞こえたと思つた少女の聲の發生源が居ない事に首を傾げ、それでも小鳩は忠夫の無事を祈りつつ、貧乏神を回収する為に小走りで駆け出していった。

そして、彼女が消えたその後で、窓の向こうの足場も何も無い空中に、じわりと溶け出すようにして、マリアの娘の一人、シータがその迷彩を解いて現れる。

手の平でコロコロと飴玉を転がしながら、何故気付かれたのだろうか、と心底不思議そうに首を捻っていた。

病院を抜け出すであろう事が簡単に予想できた為にマリアが付けた監視員——幾ら半人狼とは言え、病み上がりなのだから——だったのだが、それ程心配する事も無く無事に帰宅した忠夫。

そして、その部屋の中にいたメドーサ。

勿論、これらの観測データは保存済みである、が。

「脅威判定・A+。早急に・母へと・伝達する・要・有り」

ロケットを噴かして、夜空へと駆け上がる。

無論、色々な意味で脅威だからだ。

ちなみにメドーサは。

「くう。すぴー」

騒がしいのが居なくなったので、疲れを癒す為に睡眠に入っていたり。

「家族連れの会話で賑わうファミリーレストラン・・・次はこれもいいかも知れんな」

「店長ー。本当に雇うんですかー？」

「何故君はそんなにやる気が無いのだろうか・・・？」

「がやがやと、騒がしいながらも微笑ましさの方が上回る。」

所々からは小さな子供達の嬉しそうな声が聞こえ、キビキビと動き回る店員達が店内を所狭しと駆け回る。

そんな街中の、価格も質も量も手頃、としか表現しようの無い、何処にでもあるファミリーストランの角席で、髭を生やした壮年の男性と、その隣で砂糖とミルクを多めに垂らしたコーヒーをやる気なさげに啜る青年と、そんな2人の前に1枚の紙を置いて静かにストレートの紅茶を飲んでゐる若い女性の姿がある。

紙に書かれてゐる簡単なプロフィールと、貼り付けられた1枚の胸から上の写真。

それは、一般的には履歴書と呼ばれる物である。

「・・・いや、だってまだ次の店何やるかも決まってるのにウエイトレスを雇う必要性がわからないでしょうが」

「人手は何時でも居る物だろう？ それに、看板娘がいればお客さんも増える」

「・・・そうなのか？」

「そうなのだ」

小首を傾げる女性の態度は、高い身長とかなりのプロポーション、ポニーテールに纏められた、さらりと音さえ立てそうな程綺麗な長髪、それなり以上に整った、だがあまり表情の浮かばない顔に比べて幼くも見える。

だが、しつつかと頷いた店長と呼ばれた男性の態度に、少しだけ嬉しそうな色を浮かべながら照れ隠しに紅茶を一口。

「だから止めとけてばさー、姉さんはー」

「いい加減姉と呼ぶのは止めると何度言ったら分かる」

「しよーが無いじゃん、染み付いたような物だしさー」

だが、対照的に青年の方は何処までもやる気なさげである。

そもそも、給料はかなり良いが店長の道楽に付き合えなければ雇わない、と言うこの条件に、何故か小さい頃からの知り合いが応募したと言うのが納得いかないのだ。

それ以外にも色々とあるようではあるが、ここでは割愛しておこう。

「ま、こちらとしては文句無し。後は此処に判子だけ貰えるかな」

「拇印で良いか？」

「だから——」

その瞬間、3人の間に緊張が走る。

「む」

「あ、ヤバ」

「・・・ほう、こっちはともかく、そちらも分かる、か」

「ともかくって・・・まあ、俺も伊達に酔狂に付き合ってますけどね、なんで姉さんが分かるのさ」

「何となく」

がた、と音を立てて席を立つ3人。

店長が素早く伝票を取り、真つ先にレジに向かつて歩き出す。

その後を追いかけるようにして二人の男女が付いて行く。

そのまま手早く会計を済ますと、母とその息子だろうか、耳を引つ張りながら入店してきた二人連れとすれ違いに脱出した。

「で、給料だが・・・」

「幾らでも構わん」

夜風を切つて、店長と新人ウエイトレスが先を行く。

青年は、自動販売機に硬貨を入れて何やら飲み物でも購入しているようだ。

「良いのかね？」

「ああ」

さつさと商品を取り出し、後方から追いかけてくる青年を視界の隅に収めながら、女性には僅かに頬を緩めて続きを言った。

「——もう、逃がす気は無いからな」

「・・・やれやれ。果報者め」

「どれにしますー？」

交わされた会話も知らず、能天気な声をかけてくる店員に苦笑いを送りながら。

差し出された安い、だが暖かい緑茶の缶を開ける。

「お茶とコーヒー？ 私の方が嫌いか？」

「何でそうなるのかが心底分かんねえ．．．！」

「——ふう。一途と唐変木はどっちが勝つか」

小さく呟き、喉を湿らせた。

ほのぼのとした雰囲気であふれていた店内は、その2人の客が座った瞬間から別の何かに変わろうとしていた。

子供は泣き出し、大人は背筋に悪寒を感じ、幸せそうなカップルは寒さを感じてよりそい、更に幸せそうに・・・一部、例外を含む。

「ええと、その、仕事とご飯の確保にかまけておりました・・・」

「それで、時々学校に行くのを忘れていた、と」

伝票を握り締め、レジに殺到するお客達。

店員も背中に嫌な汗を流しながら、しかしプロ根性を遺憾なく発揮して笑顔崩さず対応をする。

「わは、わはははは・・・」

誤魔化すように頭を掻きながら笑う忠夫の目の前で、しかし店員が置いていった水にもメニューにも手を付けていない百合子の顔は動かない。

まさに、鉄仮面。

背後にロビ〇マス〇が見えるようだ。

と、その隣にコーホーと呼吸をしながら機械で爪を出してるやつが増えた。

「・・・仕事楽しいのかい？」

「そりやもう！ 美神さんとかおキヌちゃんとか美衣さんとかマリアとか小竜姫さんと

かワルキューレとかヒヤクメとかグーラーとか月神族の人達とかその他にもたくさん
の美人のお姉様方との・・・ゴメンナサイナンデモアリマセン」

鉄仮面の横に細目の弁髪は中国人追加。

テーブルに頭を擦りつける忠夫の背後では、ほぼ全てのお客さんを安全な場所、店外
へと誘導を始める店員達。

カップルは何気に「君は僕が守る！」とか言いながら盛り上がっているようだが。

しかし、以外にも百合子は溜め息一つで背後のオーラ？を掻き消し、水を一口飲んで
しようがない、といった意味の濃い視線を向けた。

「・・・ま、男の子だからねえ。仕事が面白いのも、綺麗な女性に惹かれるのも分かるけ
ど」

「でしょ?! でしょ?!」

「けどっ!」

使い込まれた、しかし日々の手入れを欠かさないが故の光沢を放つテーブルに、これ
またしつかりと磨かれたコップが音を立てて置かれる。

不思議な事に一滴も水を零さないその上から、刺し殺すような視線が忠夫に向けて放
たれた。

「約束したわよね? ちゃんと行かなかったら、お仕置きだつて」

「……きやいん」

仰け反った忠夫の額から、止め処も無く溢れる脂汗。

魔族をも倒して来た、一応これでもGS免許をもつ半人狼の青年は、思いつきりビビっていたりする。

「今回は見逃してあげるわ。嚴重注意でね」

「え？ マジっすか?!」

「但し!!」

再び吹き上がる威圧感。

忠夫は怯えている！

店員は震えている！

店長は逃げ出した！

カップルは馬鹿ツプルに進化した！

「明日一日、あんたに付いてじっくりと見させてもらいますからねっ!!」

「イエスマム!!」

「み、美神さん！　横島さんの骨付き肉用の皿が！」

「へ？」

病院から忠夫が脱走した、と言う連絡を受け、やつぱりか、と苦笑いを浮かべながらソファアーに身を沈めた美神の元に、夜食でも、と言って台所に入ってしまったおキヌが駆け込んでくる。

その手に持つのは、「忠夫の肉専用」と太字で書かれた一枚の大皿。

常ならば、依頼終了時に歩合分のそれなりに高級な骨付き肉を提供する為のそれが、綺麗に真つ二つになっていた。

それを手渡された美神はと言えば、呆れた様に溜め息一つ、それを小竜姫達に壊されてから新調したテーブルの上に置くのと疲れたようにソファアーに大きく身を沈め直した。

「まくた、厄介事に引つかかったわね、あの馬鹿」

「ど、どうしましよつか?!」

「ほつときなさい。多分、もう無駄だから」

「そ、それはそうだろうと思ひますけど?!」

何気に酷い発言をしつつも、慌てた様子で意味も無く辺りをぱたぱたと走り回るおキヌを見ながら、美神は何処までも呆れた様子で天井を見上げた。

「ま、この割れ方なら死にやしないですよ」

亀の甲羅じゃあるまいし、そういう判別方法もどうかとおキヌは思った。

第四拾四話。

— A M 4 : 4 7 —

早朝、と言つてもまだ太陽は顔を覗かせてすらおらず、ただ、ぼんやりと東の空が明るくなつてきたような気がする、そんな時間。

「ごそごそと起き出して来た忠夫は、寝不足の頭を抱えながら窓を開けた。

冷たい、しかしほんの数週間前に比べれば段違いに暖かくなつてきた朝の空気が部屋を巡る。

その中で、背中を一杯に伸ばして大きく口を開けた欠伸を一つ放つた青年は、何かを思ひ出すようにしばし頭を捻つた後。

「……まあ、いいか。さーて！ 朝飯でも獲りに行くかつ！」

「『行くかつ！』じゃないよこの馬鹿つ！！」

背後からの蹴りで窓から落ちた。

気配を全く感じなかつた忠夫が、きつちり地面にめり込んでから飛び起きる。

朝露で湿つた土を、全身を水でも払うように震わせ散らしながら蹴り落とされた窓を見上げれば、其処には仁王立ちでこちらを見下ろすスーツ姿の妙齡の女性。

忠夫の叔母にして戸籍上の母、横島百合子の姿がある。

「ゆ、夢じゃなかったんかあああつ?!」

「朝っぱらから近所迷惑な声上げてないで、きつさと上がってこんかつ!!」

すこん、と軽くも固い音を立てて、バンプスが忠夫の額に直撃する。

仰け反った忠夫が額を擦りつつ涙目で入り口に向かつて駆け出した事を確認し、百合子もまた窓を閉めて部屋の中に戻っていく。

「い、いきなり窓から突き落とす事ないやんつ!」

「黙らんかいつ! 昨日の夜に言われた事を寝て起きたら忘れる鳥頭が悪いに決まってるやろうがドアホツ!!」

玄関に立てかけてあつたドアを蹴り飛ばして帰宅した甥に対し、その腰の引けた抗議よりも巨大な罵声を叩きつける。

あつさり怯んで縮こまった忠夫にそれ以上の何を言う訳でもなく、鼻を一つ鳴らした百合子はその隣に据え置かれた簡易な台所に向かつて歩き出した。

その姿を若干怯えながら追いかけていた忠夫の目に入ったのは、何処から如何見ても新鮮ですよー、と主張してやまない食材の群を包んだ新聞紙やらビニール袋の一塊と、その直ぐ傍に転がる鍋釜包丁に炊飯ジャー等々の調理道具。

そして、皿に茶碗にお椀が数組。

一体こんな時間に何処で購入したのか不明であるが、必要な物が一通り、確かな存在感を持つている。

「全く・・・人狼だからって野菜を取らないのは、ただの好き嫌いの言い訳だって姉さんも良く言ってたじゃない」

「うっ?!」

「冷蔵庫も無いし、鍋も無い。調味料も碌なのが無い辺り、典型的な男の一人暮らしの台所ねえ」

根本的な所で別の種族である人狼に、人間の食生活が適用されるのかどうかは知らないが、それでも忠夫のその台所は確かに余り使われた様子が無い。

最も、料理——と言うか、燻製肉を作ったり、干し肉を作ったりと言う事自体はこまめにやる忠夫であった。

何時ぞやの空き巣騒ぎのせいもあり、ねぐらに溜め込む食料自体が減っているのは事実であるが。

ともあれ、溜め息一つ付いて忠夫を邪険に追い払い、布団を片付けさせ、ちゃぶ台に座らせた百合子はおもむろに腕まくりをすると、食材の山に向かつて朝の戦いを挑み始める。

その音を何とはなしに聞きながら、忠夫はまだ碌な番組もやっていないTVのスイツ

チを入れるのだった。

「ほら、出来たよ」

「うわー、飯だ」

「当たり前でしようが」

30分ほどもして運ばれてきた、ほかほかと湯気を立てる料理の数々。

白く艶やかに輝く白飯に、これぞ朝ご飯といわんばかりの醤油の匂いも香ばしい鮭の切り身にツンと黄身の立った生卵。

豆腐やネギがゆらゆらと泳ぐ味噌汁など、見ているだけでもご飯をかつ込みたくなるオーラを放っている。

陶器が古びた木の板の上に乗る音が暫し響き、簡素ながらも十分に食欲をそそる品揃えである。

3人分のそれをちやぶ台に置き、やれやれと自分の肩を揉み解しながら、百合子は押入れに向かって歩き出した。

そして、忠夫が止める間も無くその襖を快音と共に全開にする。

開いた襖のその奥で、ゆっくりと尻尾を振りながら小さく丸まり、なんとも幸せそうな寝顔をしているメドーサの首を有無を言わさず引つ掴むと、そのままちやぶ台まで片手で持ち上げて運んで座らせた。

かくんかくんと前後左右に頭をふらふらさせながら、脳味噌の9割方が眠っているんじゃないか、といった様子で目の前の料理に手をつけ始めるメドーサ。

どうやら昨日は大変疲れていた性もあり、また、安心して眠れる、と気が緩みでもしたのだろうか、かなり深い睡眠を取ってしまったようである。

あの緊張感は何処に行つたんだろーか、と現実逃避しながらも、目の前の叔母の視線が痛すぎて折角の暖かい朝食が冷えていくのをただ目を逸らしながら悲しむ忠夫であつた。

暫しの拷問のような沈黙の中、メドーサが糸目で朝食を口に運ぶ音だけが響く。

殆ど無意識に動いているであろう手が食べ物を口に運ぶたびに、尻尾がぱたぱたと動

いている所を見ると、かなり満足しているようではある。

刺すような視線で忠夫を睨みつけていた百合子も、その視線を逸らさぬまま無言で箸をつけ始め、その流れに乗つかるように忠夫もまた朝食を食べ始める。

折角のまともな朝食も、忠夫にとっては全く味の感じられない物だったとか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・あふ」

流石に半分以上寝ぼけているメドーサの食事の速度は遅く、食べ終わったのはほぼ三人同時である。

そのままひたすら冷や汗をどぼどぼと垂れ流す忠夫と、それを半眼無言で睨みつづける百合子を余所に、メドーサは欠伸を一つ漏らすと部屋の隅に畳んで置かれていた布団を剥ぎ取り、押入れの中に突っ込んだ。

そのまま自分も這い上がり、おもむろに布団に包まると満足げな息を漏らして襖を閉める。

「むふう。はすはす・・・・すぴー」

どうやら、完全に惰眠を食う体勢に入ったようである。

奇妙な沈黙が一瞬部屋を包み、百合子がそれを破るように立ち上がると、額に青筋を

浮かべながら拳を鳴らす。

いやいやと首を振りながら部屋の隅まで尻を床に付かせたまま後退する忠夫。

誤解だ、と言わんばかりに両手を前に突き出し必死で振ったが、目の前の般若はにっこりと笑つて親指を下に向けた。

「人様の娘を連れ込むとは何処の何様やあんたはあああつ!!」

「違うんやあああつ!」

説得というか説明するのに、太陽の光が部屋の中に差し込むまでかかったと言う。結局、完全に納得はしてもらえなかったようであるが。

— A M 7 : 5 0 —

「あ、朝っぱらから、なんちゆうハードな……」

「無駄口叩かんとちやつちやつと歩くっ!!」

久方ぶりに着込んだ学生服の襟元を気にしながら、何時もに比べればそれこそ欠伸の出るような速度で学校に向かって歩いていく。

保護者連れで登校する、と言うのも全く格好がつかないが、それを言つて取り止めてくれるほど甘い叔母でなし。

忠夫はがつくりと肩を落としながら、まるで普通の学生のように通学路に行く。

何時もなら時間ギリギリに屋根の上を駆けて行く忠夫が、普通に通学路を歩いていけばそれなりに人にも出会う。

そんな時間帯に、前方で、パン屋のウインドウを覗き込みながら何やら真剣な様子で話し合っているセーラー服を着込んだ女生徒と目があつた。

「あ、おはようございませう横島さん! と、百合子さん……」

「お、小鳩ちゃん! よ——め……ごっほんっ!! うえっほっ!!」

「何を朝からムセとるんや? お二人とも、おはようさん!」

危うく咽元まででかかった朝一番の求婚を無理やり飲み下した忠夫であつた。

己の後方で、笑顔でひらひらと手を振る叔母の顔を見た瞬間に僅かに後退さつたよう

ではあるが、気を取り直して深々と頭を下げる小鳩。

そして、その隣でえらく気合の入った挨拶をする貧乏神。

「あら、2人ともこの時間に学校？」

「え、ええ。このパン屋さん、何時もこの時間に昨日の売れ残りを安く売ってくれますから」

「まあ、お袋さんが働けるようになったと言つても切り詰められる所は切り詰めんとあかんからなあ」

朗らかに言う小鳩の笑顔に、曇りや悲しさは一つも無い。

それよりも、小鳩の母が働けるほどに体調が良くなっている事を喜んでいる節がある。

忠夫はそれに笑顔を返しつつ、疑問に思った事を投げかけてみた。

「あれ？ 小鳩ちゃん、百合子さんと知り合いなのか？」

「え、ええ。昨日会ったばかりですけど・・・」

その時の事を思い出したのか、少々蒼褪めながらも答える小鳩。

背後では、なにやら貧乏神と百合子がちやごちやと話し合っている。

そちらに視線を向けながら、忠夫は苦笑いを見せつつ肩を落とした。

「そっかー。いきなりでびっくりしたやろ？・・・あれ？ ちゅー事は小鳩ちゃん家つ

てこの辺?」

「え?・・・あのー、お隣さんなんですけど」

気が付いていなかったのか、と拗ねるような、それでいて責めるような視線を向けてくる小鳩に、忠夫は硬直する事で肯定を返す。

そのまま、ゆっくりと膝をつくと渾身の力で地面を叩いた。

鈍い音と共にびびしと罅の入ったアスファルトに、忠夫の涙が染み込んで行く。

「お、俺の馬鹿っ! そんな美味しい状況に気づかなかつたんか・・・!」

「其処まで落ち込まなくても・・・」

フオローのつもりか優しく声を掛けながら肩に手を置いた小鳩も、これほどシヨツクな様子を見せ付けられれば悪い気はしないようであり。

「ほら、これから何時でも会えるじゃないですか!」

「小鳩ちゃん・・・」

「よ、横島さん・・・」

その言葉に元気を取り戻したか、ゆっくりと立ち上がった忠夫の前に、両手を胸の前で組んだ小鳩が、すつ、と接近する。

朝っぱらから中々良い雰囲気を作ってくれてる二人に対し、通勤途中のサラリーマンの方々が昔を懐かしむような暖かい目を向けていたり、家の前の掃除をしていたおば

ちやんがハンカチで目元を拭っていたり、幼稚園児と思しき娘さんを連れだした奥様が、子供にはまだ早いと愛娘の目を塞ぎつつじつくりと足を止めて鑑賞していたり、通りすがりの独り者っぽい方々が男女を問わず呪いの視線を向けていたり。

しかし、なんだか2人の空間を作り上げている彼らにそんな物は目に入らない。ゆつくりと、だがしかし確実に2人の間の距離は縮まり――。

「……ま、試してみれば分かるわね。ほら、忠夫、口開けな」

「え？　むがつ?!」

百合子の声に振り向いた忠夫の口の中に突っ込まれた、曰く言い難い味の何かによって寸断された。

口の中に広がる甘酸っぱくもこってりとしたあんことしめ鯖とチーズのかほり。

それは非常に敏感な忠夫の嗅覚を満遍なく侵略し、そしてその刺激としか言い様の無い食べ物に対する侮辱とも取れる感覚が忠夫の脳髓を走り抜ける。

気が付いた時には、忠夫は小鳩の豊かな胸に倒れこんだ己の身体を一寸高い所から見ていた。

『……とうへぶん!!』

「帰ってきて横島さーん!!」

何かをやり遂げた表情の忠夫は、凄く良い笑顔を浮かべ、親指を立てながらゆつくりと上昇して行く。

それを必死で忠夫の肉体の方を抱き止めながら制止する小鳩。

ますますその柔らかさを享受する事になった肉体は、しかしその事を感じる余裕さもなくヤバげな痙攣を繰り返しながら白目を剥いている。

「駄目か」

「駄目ねえ。売れないわよ、これ」

「上手く行ったらパン屋のおっちゃんと一緒に会社でも起こすつもりやったんやけどなあ」

「一発狙うのもいいけど、先ずは地盤をしっかりと固めないとねえ。商品開発はお金も時間も、スタッフも要るから。持続的な新商品の展開が出来ないと一発屋で終わっちゃうわよ」

至極残念そうに食べかけの危険物を弄ぶ貧乏神の隣で苦笑いしながら、百合子は足元の小石を拾う。

気合一閃、投げ放たれたそれは、何処からとも無く近づいてきていた骸骨頭の黒い布を纏った、巨大な鎌を持った何者かの横を擦り抜け、今まさに恍惚の面持ちで上に向かって加速しようとしていた忠夫の後頭部を何故か直撃する。

幽霊、と言うか魂の筈なのに物理攻撃だと思われるそれに打ち落とされた忠夫は、真つ逆さまに落下して動きを止めつつあった肉体に重なり、暫しの間を置いて心配そうな小鳩の目の前で復活。

「はっ!? 何かとても良い思いをしたようなっ?! 具体的に言うとなんか何と云うか、こうっ、天国?!」

どちらの意味にも取れる言葉であるが、肉体が感じた方であろう事だけは間違い無いだろう。

忠夫だし。

両手で頬を押さえて鼻の下を伸ばした忠夫の襟首を、気配もさせずに接近した百合子が後方から引つ摺む。

「はいはい、ほら、さっさと学校行く!」

「あー! ちよつとまって百合子さん! いま、俺の人生で何か新たな境地が開ける所ー!」

ずりずりと問答無用で引き摺られて行く忠夫を見ながら、小鳩は雲一つ無く晴れた空を見上げて誓うのだった。

「・・・小鳩は、小鳩は負けません。何時か、百合子さんみたいに横島さんをしっかり捕まえます!」

「.....」

何時もなら貧乏神の合いの手が入るのだが、今回ばかりは好奇心に負けて劇物を食べたせいであの世とこの世の境目を彷徨っているので無理だった。

拳を握り締めてそらを見上げるセーラー服の少女の足元で、二口ほど齧られたハンバーガーらしき物体を持ったままビクビクと痙攣を繰り返す、エセメキシカンな神様は。

『六錢？ ちよつと高くないけ？』

『と言うか、お前も一応神だろうが』

少し斜め上で誰かと親睦を深めつつあるので。

— AM 8 : 15 —

ざわざわと喧騒の響く廊下を一人で歩き、目的の場所まで一直線。薄い扉を横に動かせば、そこは忠夫の教室である。

「ういーつす」

「・・・ええ？」

「・・・タイガー、幻覚使いました？」

気怠げに挨拶をした忠夫に向かい掛けられる、同業者2人の夢でも見てるんじゃないかなろーか、と言う言葉に少々口元を引き攣らせながらも、何事も無かった風を装って席につく。

空っぽの鞆を机の上に投げ出し、その中に入れっぱなしの新品同然の教科書たちをチエツク。

おぼろげな記憶を頼りに一揃いがあることを確認したら、未だに2人で頬を抓りあっている友人達の所に行くとしよう。

「横島さんの偽者がーっ?!」

『やっぱりそーかつ!!』

「マテやコラアアアツ!!」

ピートの絶叫でそれまで動きを止めていた生徒たちが動き出し、机を教室の片隅に追いやり始める。

何人かの男子生徒が外に駆け出し、女子生徒たちは開いたスペースに幾つものコンロを設置したりバケツに水を汲んできたりと大忙し。

更にその隣ではタイガーの巨体に肩車した男子生徒が、天井に滑車を取り付け始めるに至って漸く忠夫は抗議行動を取り始めた。

嬉々としてロツカーから三角の怪しい覆面を取り出し始めた男子生徒に教科書を投げつけ、こちらから必死で目を逸らして肩車するタイガーの膝裏を蹴り飛ばし、その上の男子生徒もろともスツ転ばせる。

涙目でコンロの火が点かないと何度も何度もスイッチを入れる女子生徒に新しいガス缶を渡しつつ求婚をかますも何故か泣きながらダッシュで逃げられ物凄く落ち込み。

悔しいのでピートを先頭に人一人は簡単に中に入れるほど巨大な鍋を持ってきた集団に向かって、思いっきり机を投げつける。

「ああつ?! 折角徹夜で作った怪しい帽子がつ!!」

「タ……イガー……退いてく……れ……ぐふつ」

「大丈夫？ 野良犬に噛まれたと思つて諦めないで訴えましょ!!」

「ピイピイト！ 堪えろおつ!! お前が崩れたら持ちこたえられんぞー!」

一瞬の内に喧騒が狂乱へと変貌した教室内で、色々とドラマとか生死に関する事態とかが発生する。

それを机をブン投げた姿勢で黙つて見ていた忠夫であるが、大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせるのと、おもむろに未だ落ち着かない集団に声を掛けた。

「気は済んだかお前らあぁっ!!」

『わりとっ!!』

ノリだけは良いクラスのようにある。

とは言え、半分近くは未だに疑いの視線を向けている辺りがなんともはや。

「いたた・・・横島さん、本当に久し振りに学校に来ましたねー」

「・・・そんなに久し振りだっけ?」

虚空を見上げて記憶を頼りに指折り数え始めた忠夫の周辺で、またもや完璧なチームワークを見せながら教室が元通りになつて行く。

鍋は再び数人掛りで持ち上げられて何処かへ去つて行き、コンロも簡単な点検をされた後何時の間にか消えている。

覆面を破かれた男子生徒は近くの女子生徒から針と糸を借りて修繕を始め、タイガー

に潰された男子生徒は担架に乗せられて医務室へと運ばれて行く。

最後に女子生徒に声を掛けられた忠夫を含めた全員で机を元の位置に戻しながら、漸く一段落ついた教室内は何時もの喧騒を取り戻していた。

「・・・ふう。つて、あー、確かに物凄く久し振りかもしれない」

「かもしれない、じゃ無いですノー。ほんとに良く進級できたとワツシは不思議で仕方ないんジャー」

忠夫の記憶が確かならば、少なくともねぐらに貯める食料の量を減らし始める以前にはそれなりに登校していたはずである。

そもそも、早朝から毎日の如く狩りに出かけたらしなければ、結構・・・とは行かないまでもそれなりに来れていた筈なのだ。

そう、空き巣が入ってそのせいで食糧を余り貯めなくなるまでは。

「つまりあの空き巣が全部悪いんかー!!」

「うわあっ?!」

「いきなりどうしたんですカイノー?!」

突然大声を上げた忠夫の形相に、タイガーとピートは揃って下がる。

教室の生徒達の視線が忠夫に集まり、「ああ、横島か」みたいな表情を作ると再び元の会話相手に視点を戻した。

息を荒げて何故か怒る横島の背中を落ち着かせるように撫でながら、ピートは横島の家が空き巣に遭った事があるのを説明する。

それを聞いたタイガーがなんとも哀れむような表情になり、ピートと同じくその背中を軽く叩く。

それを見ながら一部の女子生徒達が歓声を上げていたりするが、力の限り丁寧に無視させて頂いた。

GS試験の頃から何となくそー言った怪しげな集団が発生していた事もあり、2人も慣れた様子である。

ただ、あんまり学校に来ていない為不慣れな忠夫が背筋に悪寒を感じて正気に戻ったのは予期せぬ幸運と言っても良い……のだろうか？

「OK OK 落ち着いた。ピート、後で教会に遊びに行っても良いか？」
「駄目です」

額にかいてもいない汗を拭いながら笑顔を浮かべる忠夫に対し、これまたピートも笑顔で拒否。

ただ、その額に冷や汗が流れているのを見ると、しっかりと忠夫の行動は予測されているようである。

流星に教会の像を切り倒されかけたと言う出来事は、記憶にしっかりと刻み付けられ

ているようだ。

至極残念そうに舌打ちする忠夫を警戒しつつも、やや焦った様子で話題の転換を図るピート。

「そ、そう言えばこの学校って不思議ですよね！ 新年度になってもクラスメートが変わらないだなんて！」

『——っ!!』

空気が、凍った。

「それに、ほら、教室も相変わらず2年の教室……あれ？ 変だ、今度は3年——あ、あの、タイガーに横島さん？ 何故僕の両手の関節を極めているのですか？」

無言で固定させた両腕を持ち上げ、そのままピートを引き摺りながら教室を出て行く二人。

教室の生徒達も、誰もが視線を合わせない。

暫しの後、おそらく体育館の裏辺りで、忠夫とタイガーの声とピートの悲鳴が木霊した。

『狼!』

『虎!』

『滅殺!!』

『ちよつと2人とも！ その鬨気と妙な掛け声は何ですか?!』

『快刀乱麻ツ!!』

『ぎゃー!!』

——AM 9:50——

たつぷり一時間以上もかけて常識と言う物を叩き込んだ2人は、とても良い笑顔で体中に足跡を付けたピートを引き摺って行く。

教室の扉を開けて覗き込めば、丁度一時間目の終了を知らせる鐘が鳴る所だった。

「横島あー、今回はやむをえん事情があつたから不問にするが、折角学校に来たんだから授業をしつかり受けるよー」

「ういっす！ すんまつせんした先生！」

チヨークを片付けた男性教諭が忠夫の頭を軽く叩きながら教室を出て行き、同時に室内が喧騒に満たされる。

教師でさえボロボロのピートに軽く視線を向けただけで出て行く辺り、一応タブーという物はしつかり伝わっているようだ。

二人掛りでピートを椅子に座らせ、その学生服に付いた足跡を手際良くはたいて落として行く。

「全く、相も変わららずピートも迂闊だよなー」

「本当ですジャー」

「い、磯野家空間とか外国生まれの僕が知る筈無いじゃないですかっ!! . . . あ」

「待った！ 今の無しで！」

——再び凍りつく教室の空気。

そして、溜め息をついた2人に再度抱え上げられ運ばれて行くピートの姿を目にしなから、教室の面々は何事も無かつたかのように次の授業の準備を始める。

前の席では、今度は誰が次の授業の担当をする先生にこの事を伝えるかじゃんけんしていたり。

「主よー！ この扱いはあんまりではないでしょーかーっ!!」

「うっさい黙れこの天然地雷踏み！」

「一応わっしも南米生まれなんですがノー」

そんなこんなで忠夫の新学期一日目前半は、特に何事も無く過ぎて行くのであった。

ところでその頃百合子はと言えば。

「ええ、そんなんです。西瓜くらののが、その、止まらなくなると言う——」

「そうですか——いや、一人暮らしの上そんな大病を患っていたとは……」

「知り合いの医師に見せた所、かなり高度な医療技術が即急に必要との事でしたので：私達の方も慌てておりました物ですから」

「いえいえ！ そう言う事情があつたのでは仕方ないですからね。幸い去年の単位はギリギリ足りていますし、まあ、病欠と言う事で何とかしましょう」

「ありがとうございます……」

「いえ……」苦勞をされましたねえ」

涙と一流俳優顔負けの演技を縦横無尽に使いつつ、突然学校に行かなくなった甥のフオローに校長先生を始め職員達の元を動き回っていたりする。

応接室、と書かれた部屋の扉を頭を何度も下げながら閉めた百合子は、

「……まだまだ甘いわねえ」

ちろつ、と舌を出し、悪戯っぽい笑みを浮かべながら、そろそろ昼を指そうと言う腕時計の短針を眺めつつ歩き出したのだった。

第四拾伍話。

——昼休み——

「タイガーのくせにいいっ!! タイガーのくせにいいいいっ!!」

「け、血涙っ?!」

「そんなに悔しがる事無いと思いますがノー」

もっしやもっしやと、巨大な、それこそ百科事典2冊サイズはありそうなお弁当箱の中身を幸せそうに頬張るタイガーを、忠夫の目から溢れ出す赤い液体によつて染まった視界が映し出す。

7割が白米で占められ、残りの3割にはやや黒く煤けた卵焼きや少々塩気の強すぎるウインナー等々、その隣で不恰好ながらも切り分けられたトマトやキャベツが彩りを添える。

破けて中身が少し零れたコロツケを箸で摘み上げながら、タイガーの目じりは限界点を超えて下がりつづけ、そしてその油っこい揚げ物を宝物でも扱うように持ち上げ。

「ああ、幸せジャー……」

「ふぬおおおっ!」

「耳血っ?!」

ぷしゅー、と間の抜けた音を立てながら忠夫の耳から噴出する血液。

タイガーの幸せに塗れた台詞を、忠夫の聴覚が拒否したらしい。

床に倒れてじたばたともがく忠夫を尻目に、タイガーは今日も朝早くから手作り弁当を届けてくれた一文字魔理に感謝を捧げつつ、悪いと思いながらも優越感に浸り続けるのであった。

「横島サンも早く弁当を作ってくれるような人が出来るといいですノー」

「ぎゃあああつ?! 斬るっ! 武士の情け、離せ、離してくれピイイイトオオオオツ!!」

「落ちていて下さいいいっ!! タイガーも煽らないでくれええっ!!」

教室であるにも関わらず、これまでになく高出力の霊波刀を展開して、哀れむような視線を向けてくるタイガーにその切っ先を向ける。

羽交い絞めにして忠夫を抑えながら、ピートもまた、混乱と喧騒の真っ只中で健闘中。

そんな彼らに、或いは鬱陶しげに、或いは嫉妬の涙を零しながら、或いは周りがそうするので何となく、ときばきと食事を片付けたクラスメート達は立ち上がり、「せーの」と掛け声一つで男女問わず椅子を持ち上げ。

『食事中はお静かにっ!!』

掛け声一つで投げつける。

しかし、愛に目覚めた虎と、嫉妬に狂う狼は伊達じゃない。

「ピート（サン）バリアー！」

「なんで僕がーっ!! ぐわあああああつー！」

生贄の羊を差し出ししながら、尊い犠牲の末、辛くも窮地を脱出することに成功したのだった。

「ピートサンじゃ体格が違いすぎて隠れられんジャー!! んごっ?!」

「よーしっ! 敵は残り一人だ、次弾装填ーっ!!」

「なんのっ、このバリアーはリサイクル可能だぜっ!」

バリアー（小）とバリアー（大）が抗議の唸り声を上げたとか。

「おい、そつち椅子は足りてるかー？」

「えつと、後2個お願いー！」

「オツケー。おら、横島ー、早く持つてつてくれよー」

「何で俺が……」

昼休みも後僅か。

あの後も幾度となく攻め立てる物量に抗し切れなかつた2枚のバリアーは、保健委員達によつてえつちらおつちらと運搬済み。

無傷でそれを感謝の涙で視界を塞がれながら見送つた忠夫は、3秒だけ黙禱を送つてそのまま教室整理に駆り出された。

なにせ一応半人狼。

肉体労働ならばお手の物、そのどちらかといえは細身の身体に、どうしてこれだけの運搬能力があるのだろうか、と首を捻られつつも「まあ、横島だしなー」で片付けられる辺りがなんともはや。

ともあれ、がたごとと騒音を立てながら、教室の中はあつという間に元通りになつて行く。

背中に重ねた机を5つ、両手に椅子を鈴のようにぶら下げながらお呼びのかかった方へと駆け回る忠夫も、手慣れた様子で受け取っては並べて行くクラスメート達も、日頃の行動が良く分かるほどの手際の良さではあった。

「これで最後、だよな？」

「ん、完璧ね」

「うー、腹減ったー。全く、飯ぐらい食ってから肉体労働に呼べっちゅーねん」

教科書やらノートやらが散らばっていたのも元の持ち主の所へと無事帰り、肩を回したり首を捻ったりしているクラスメート達の間を通り、自分の席へと着席した忠夫が、これだけは死守した鞆を取り出す。

「何言ってるのよ。大体原因は何時も貴方達でしょーに」

「そうそ。タイガーもピートも2人だけならそんなに騒がしくないのに、お前が来ると何時もあーだからな」

鞆の中からごそごそと、変わり栄えのしない干し肉の塊でなく——周りからたまに恵んでもらったりしているが——綺麗に布で包まれた弁当箱を取り出した忠夫を横目に見ながらクラスメートが苦笑いを浮かべる。

「俺が悪いっちゅーんかつ?! おおっ?! 文句があるなら嫁に来てっ！」

「だが断るわっ！」

「即答っ?!」

ひゆるりらと風が背中を撫でる感触を感じながら、さめざめと涙を流した忠夫が弁当箱の布を解いて行く。

その背後でこの年代なら当然であろうが、反射的に求婚を断った少女がほんの少しだけ残念そうな表情をしていた事も、それを回りの少女たちが横目で見ていたりするのも非常に残念ながら視界の外である。

弁当箱の蓋を開き、中身が少し片寄ってしまった事に心の中で百合子に謝りながら箸を取る。

豪華でもないし、特に取り立てて何がどう、とも言えないその中身は一言で言うなら普通、であろう。

だが、忠夫の鼻は、その蓋を開いた時から大きくなつた匂いに、はっきりと何かを感じていた。

感情の無い、と言うよりもまるで表情が抜け落ちたように、力の抜けた顔で出汗巻き卵を摘み上げる。

無言でそれを口に含んだ忠夫の胸に、暖かいても、寂しいとも言える感情が通り抜けていった。

「・・・美味しい、なあ」

一言だけ呟くと、無言で、大事そうに箸を動かす。

次々と口の中を満たす料理のあちらこちらに、その味は潜んでいた。

僅かに違い、しかし確かに違う。

確かに違い、しかし、どこか同じ。

どこか同じで、でも、違う。

——久し振りに食べたような、それでも初めて食べたような。

小さい頃に亡くした、もう食べる事の出来ないと思っていた、それは確かに——

「……(ぎょ)馳走様でござる」

ばん、と軽い音を立てて両手を顔の前で打ち合わせる。

久し振りの、食後にきちんと手を合わせて言ったその言葉。

つまり、母の躰は、忠夫の根っこにしっかり根付いているという事なのだろう。

ちかちかと、不意に瞬いた教室の灯りの中、タイガーとピートが保険医に追い立てられるように教室の中に蹴りこまれたのが視界の端に写った。

——昼休み終了——

きーんこーんかーんこーん。

重々しさの余り感じられない、電子音で奏でられた鐘の音に背中を押されるようにして生徒達が席に付く。

体中から湿布の匂いをさせているタイガーとピートを鼻を摘みながら横目に見つつ、忠夫も会話を止めて自分の席に向かって歩き出した。

軽い音を立てて椅子を引き、勢い良く座ると尻尾が痛かったりするので位置を調節しつつ腰掛ける。

何時の間にか奇妙な色合いに染まっている窓の外を何とは無しに眺めつつ、教室の扉を開いて教師が出てくるのを待つ。

「……あれ？ 先生、遅いなー」

「珍しいわねー。あの先生、時間にだけはものすつごく煩いのに」

午後一番の始業のベルが響いたにもかかわらず、薄っぺらなドアが開く事は無い。

ざわめき出した教室の中、窓の外にある校門を何となく見ていた忠夫の視界に、荒れ果てた校庭が写りこむ。

「……まあ、いいか」

何かちよつと気になるが、何故だかとても如何でも良い事のような気がしたので、教師が来ないのを良い事に机に覆い被さつて睡眠を貪る体勢へと移行する。

何時もの合板でできた滑らかな感触でなく、ちよつとごつごつとした感じを受けるのが不満ではあるが、とりあえず睡眠を阻害するほどではないと判断して顔を伏せた忠夫の耳に、廊下をぱたぱたと誰かが駆けて来る軽い足音が聞こえた。

教室の外からは、それ以外に全く音が聞こえない為良く響いたその音に生徒達の視線が集中する。

ややあつて教室の扉の前で止まった足音の主は、まるで逡巡するかのよう、或いは覚悟を決めるかのよう、に暫しの間を置いた後、からり、と軽い音を立てて教室の扉を開いた。

「皆さん、こんにちば！ 今日からこの教室の担任になった「嫁に来ないかー!!」きゃあーっ?!」

元氣良く緊張の多分に含まれた笑顔で顔を浮かべながら、それでも明るい声で挨拶をしてきた、まだ着なれていないスーツに身を包む長い黒髪の同年代にさえ見える歳若いその教師の挨拶は、半分眠っていた半人狼がいきなり求婚した為中断を余儀なくされた。

教室の後方で顔を伏せていた筈なのに、一瞬にして手を握ってきたその生徒は、次の瞬間に教室中から飛んで来た罵声と文房具、教科書やら辞典やら、そして一人だけ無事だった忠夫に対する恨みの籠った霊波砲やらなんやらを真横から喰らって黒板に突き刺さる。

嵐のような飛来物に埋もれつつ、黒板に穴を開けたその生徒をなにやら巨大な生徒と金髪の生徒が引つ張って行くのを尻餅をつきながら眺めつつ、その2人が全くの無表情で視線も合わせずハイタッチを交わした意味も分からぬままに。

「あ、気にせず続きをどうぞですじゃー」

「ほら、横島さんも大人しくしててくださいね」

「て、手前から後で覚えてろよ・・・!」

なにやら不穏な視線を交わす3人組の内の一人に促され、ほかの生徒達も全く気にしていないようなので顔を引きつらせつつ立ち上がり、顔にかけた眼鏡を気を取り直すように慣れない手つきで位置を調節しながら。

「あ、愛子です。気軽に愛子先生って呼んで下さいね?」

「むしろ教師と生徒よりも夫婦の付き合いを希望し……ま……御免なさい」

それでも懸命に笑顔を浮かべながら自己紹介をする新任の教師に対し懲りない馬鹿に、クラスメート達の視線の集中砲火はかなりの損害を与えたようである。

教室の隅でいじけ始めた忠夫を余所に、他の生徒達は興味津々と言った様子で質問を投げかける。

「担当の授業は何ですかー？」

「え、えつと、その、古典……とか、かな？」

「うおおおおつ!! 俺、俺、古典得意です!!」

教室の男子生徒たちがヒートアップ。

控えめに言ってもスレンダーな美人、しかも見た目も若く新任の眼鏡を掛けた不慣れな様子の女教師という単語がクリティカルヒットしたようである。

「そ、そうなの？」

「ええつ! だから「お、俺は物凄く苦手です! 是非放課後の個人授業をー!」……抜かった! その手があつたか!!」

悔しげに机を叩きながら殺意を籠めた視線で睨む他の男子生徒を尻目に、満面の笑みを浮かべた鼻息も荒い男子生徒が立ち上がる。

その瞳に浮かんだ若気の至りに引きつつも、何とか教室を落ち着かせようとした愛子

に続けて掛かる声。

「先生ー！ 彼氏とか居ますかー？」

「えええつ?!」

教室の中ほどから女子生徒が好奇心満載で質問する。

顔を赤らめながら頭を振る初々しい教師の態度に、男子生徒はガッツポーズを取り、女子生徒たちは残念そうな、しかし親しさに満ちた笑顔を浮かべて歓迎する。

「何か俺ら放置されてんなー」

「横島サンは何時もそんな行動してるから飽きられたんじゃないですカイノー。ワツシは魔理サンが居るから気にならないですジャヤー」

「僕はそんな事にあまり興味が無いですからねー」

「・・・ケツッ!」

「ちよつと! どう言う意味ですかそれはっ!!」

「へーへー、モテル男は言う事が違いますねー」

「彼女も居ないくせにそんな事を言っても、全く説得力が無いですノー」

「ぐっ・・・!」

教室の前方で起きた初々しい教師とにぎやかな生徒達による喧騒と、後方で起きた霊能力者三名による乱闘が収まるまでにはもう少々時間が必要のようである。

「ええと、2—3、2—3は、と．．．」

リノリウムの床をバンプスの踵がリズム良く叩く。

懐かしい、と言うよりも記憶の中でさえ遠く、むしろ阻害されるような雰囲気を感じてしまっている自分に僅かに苦笑しながら目的地を探して百合子は歩いていった。

通り過ぎる教室は、空いているものもあれば黒板に向かつて数式を書いている教師と、それをノートに書き写している生徒達で埋められている物もある。

あるいは真面目にノートを数字と単語で埋める者があり、またあるいは目を開いてノートに芯の出ているシャープペンを走らせながら寝ている者も居れば、堂々と船を漕

いで教師に叩き起こされている者も居る。

時折、興味深げにこちらを見てくる者や隣席の者とこそそと話しながらこちらを見てくるものも居るが、特に興味以外の視線は感じない。

それでも、何となく部外者である、と強く感じてしまう事が、歳を取ったと言う事なのだろう。

「ま、あつち側に居た頃は私も似たようなもんだつた……かしら？」

一応切れ者のお嬢様、で鳴らしていた筈ではあるが、それでも通りすがりに見ている教室の中の光景に懐かしい物を感じるのが、遠の昔に卒業した者の感慨なのかもしれないが。

くすくす、と小さな笑みを零しながら先を急ぐ。

そろそろ授業も始まっている筈であるし、甥の教室も次の授業も把握してはいるが、折角の機会なのだから出来るだけ沢山見ておきたい。

「……姉さんの代わりに、ね」

母としての役割を果たす事はできないけど、と心の中だけで呟きつつ、足を進めていた百合子の視界に先程次の授業の担当だから、と挨拶をしておいた教師が戸惑ったように立ちすくんでいるのが写った。

「……どうされたんですか？」

「ああ！ 横島……君のお母さん。いえ、それが——」
教師がドアに手を掛ける。

ぐ、と力を籠め、引いたにもかかわらず。

「鍵でも掛かつてるんですか？」

「いえ、そんな事は無い筈なんですが……」

教室の窓から中を覗いても、見えるのは誰も居ない教室。

窓に鍵が掛かつていない事を確認し、引いてみるもやはり開かない。

「生徒達は……？」

「それが、私がここに来るまでは確かに声が聞こえていたんです……」

困惑の表情を浮かべる教師を余所に、百合子の視線は舐めるように窓の向こうの教室を移動する。

誰も居ない教室、整然と並べられた机と椅子、開いた窓、きつちりと纏められながらも風に煽られて揺れるカーテン、黒板の下に積もったチョークの粉。

そして、その一点で停止した。

「妙ね」

「え？」

こちらの眩きを聞いたのか、疑問を浮かべた教師を放置し隣の教室を覗き込む。

別の教室で授業を受けているのか、それとも体育の時間なのかは不明だが、空き教室となつているその扉を開け、中に入つて窓を開く。

春めいた風が吹き込み、カーテンを揺らした。

それを確認し、再び教室に取つて返す。

気圧されたように道を開けた教師に視線もやらず、再び窓越しに誰も居ない開かない教室を覗き込む。

「チョークの粉、動いてませんね」

「え？ ええ。それがどうかしたんですか？」

教師の疑問に答える事も無く、腕を組んで扉を睨み付ける。

「誰だか何だか知らないけど・・・私の楽しみを奪つた代価——高くつくわよ？」
にやり、と笑みを浮かべ、「全力を籠めて」目の前の扉に手を掛けた。

視界の隅で教師が腰を抜かしていたが、放つて置く。

「……つまり、作者が何を言いたかったのかということ——」

リズム良く黒板をチョークが叩く音がする。

それを既に半分以上が睡魔に襲われつつある脳で処理しながら、忠夫は愛子の後姿を見つめていた。

「……先生と生徒。年上のねーちゃん。イイっ！ すっごく良い!! できれば優しくこう、ああっ?! ぼかーもうっ! もうっ!!」

「思考がだだ漏れですノー」

「むしろ眠気よりもそっちの方が優先される辺り、横島さんらしいけどね……」

愛子に突然奇声を上げた事を叱られつつも、どこか尻尾でも振っていきそうな雰囲気
の忠夫に溜め息を付く2人。

そんなタイガーとピートの顔にも疲労の色が濃い。

始めは興奮していた男子生徒達も一人、また一人と睡魔に襲われ何人かが顔を伏せてその度に怒られていたり隣の者に突付き起こされていたりするが、教室の中からも段々と活気が失せているような気がしていた。

ノートは既に4ページ目に突入しており、体感時間では既に数時間経過しているのではないかと思われる。

だが、教室の隅に掛けられた時計の針は殆ど動いておらず、ただ、皆、疲れていた。

元気なのは教壇に立つて笑顔を浮かべながら古典を読んでいる愛子と、突然叫んでは怒られている忠夫くらいである。

堪らず、といった感じに前方の女子生徒が手を上げた。

「せ、先生、ちよつと休憩しませんか？」

「え？　だ、駄目よ！　まだ時間はあるじゃない！　それとも、私の授業、詰まらなかつた？」

途端に動揺しながらも、涙目で詰め寄る愛子に手を上げた女子生徒も身体を仰け反らせながら両手を振る。

安心したように息を付いた愛子は、再び眼鏡の位置を直しながら教壇へと、「うきうき」と言った感じで歩いていった。

「・・・おかしいんですがノー。何がおかしいのかが分からんですジャー」

「タイガーもかい？」

板書を続けた手の痛みを散らす為にぷらぷらと手を振りながら、凝った肩に手を伸ばす。

タイガーも背中を伸ばしたそうにしているが、流石にそれは憚られるのか背中を丸めて溜め息を付いただけに止めていた。

「先生ー！ 俺の嫁に出来ない理由を100文字以内で説明してくださいー！」

「だ、だって教師と生徒だし・・・」

「説明になってませーん！ 早く早くー！」

どうやら怒られた事で元気になったのか、がったんがったんと子供のように机を揺らしながら説明を求める忠夫に対し、困ったような顔で暫し考えていた愛子が一言。

「ほ、ほら、未成年の場合は保護者の同意が必要だしね？」

「ならば話は早いでござるー！」

「いぎるつて！」

愛子の質問にも答えず、すつくと立った忠夫はおどろおどろしく雲が覆っている校庭への窓を開けて叫んだ。

「おぼさー百合子さんと呼びなさいってあれほど身体に教えたやろうがー!!」きゃいーんっ?！」

轟音と共に扉を開いた百合子が、窓の外に向かって吼えるアホの背中にロケットのよ
うなドロップキック。

悲鳴のエコーを残しながら落下していった甥を余所目に、腕を組んで鼻息を一つ吐く
と、愛子に向かって振り向いた。

硬直していた愛子は、まるで怯えるかのように後退り、一瞬だけ迷いの表情を浮かべ
ると、決意したように両手を握り締める。

対する百合子は腕を解き、そして。

「……先生かしら？ 家の息子が何時もご迷惑をおかけしています」

「え、あ、いえ。こちらこそ……」

花の咲くような笑顔を浮かべ、深々とお辞儀した。

思わずつられて頭を下げた愛子には見えない。

下げた頭の向こうから、まるで猛禽類のような視線が見つめているのが。

そして、その視線が、愛子が思わず頭を下げながら、照れたように頬を掻いた瞬間に
緩まった事を。

「……ま、良いか」

「え？」

「何でもないですわ。校長先生には許可を頂いていますから、授業参観、させて頂いても

——よろしいですね」

「あ、え、あの」

言葉こそ質問であるが、口調では答えを求めている百合子が愛子に背中を向け歩き出す。

教室の一番後方まで辿り着いた彼女は、ゆつくりと腕を組むとまるで女帝のように教室を睥睨した。

空気が一瞬で締まり、眠気に負けていた者達も完全に覚醒する。

窓の外から這い上がってきた忠夫が何で百合子を呼んだのか、すっかり忘れて首を捻りながら着席するのを確かめながら。

愛子が、警戒の残る視線を向けつつ、それでも決意したように胸の前で両手を握り締めたのを視界の隅に写しながら。

「ふふふふ……」

百合子は、楽しげな笑みを浮かべたのだった。

第四拾陸話。

疲れた雰囲気の漂っていたその空間は、さつきまでのそれを忘れたかのように緊張感で満たされている。

生徒達の誰もが黒板を注視し、板書される一言一句を見落とすまいとペンを走らせ、あるいはこれまたピアノ線のように張り詰めた教師の声を全て留めようと全神経を集中させている。

例外は、その教室の後方に準備されたパイプ椅子に座る、足を組んでその膝の上で腕を組んでいるスーツ姿の女性と。

(見られている．．．！ ミスったら死．．．！ 死にたくねえええつ?! そんな刺し殺すような視線で見んといてー！)

その女性の視界の中心で、冷や汗を滝のように流す一人の男子生徒くらいであろう。後方に意識の全てを割り振りながら、時折カタカタと貧乏揺すり——いや、緊張による震えを止められずにいる忠夫は、今ひたすらに精神力を削られている所である。

教壇に立つ教師、これまたスーツ姿に眼鏡をかけた愛子もそれに気付いてはいるが、

授業参観を受けている生徒の反応なんてこんなものだろう、と割り切って流している。

本音の所では触らぬ神に祟り無し、なのであろうが。

教室を満たす緊張は、時を追うごとに高まりつつある。

二トロで満たされつつある空間を、誰もが——百合子以外の誰もが願いつつも、はつきりいつて怖すぎで動けない。

後方の女帝が何か動くたびに、教室中に反応が発生するほどに、それは皆の共通認識である。

今も百合子が軽く腕を持ち上げ、その手に巻いた細い皮製のベルトで固定された腕時計を覗き込んでいるだけであるにもかかわらず、教師の声は一瞬止まり、生徒達の意識も確実に半分以上が向けられている。

それを何事も無いように受け流し、彼女はゆっくりと手を上げた。

「・・・先生？　ちよつと良いかしら」

「はっ、はいいいっ?！」

腕の内側に巻いた時計を指差し、軽く笑顔を見せながら時計の盤面を二、三度叩く。

「その時計、壊れてますわ。もう終了の時刻の筈ですよ?」

「え、あ、しまっ——そ、そうですか?」

慌てたように教室の隅に掛かった時計を見上げ、立ち上がった百合子の顔を動揺を隠

し切れない様子で見ると。

その視線も、前後の繋がりが不自然な愛子の台詞も、訝しげにこちらの腕時計を見ている忠夫の顔も、教室中の生徒達から収束する視線もそ知らぬげに、百合子は少しばかり呆れ気味に。

「こう見えても元会社社員ですから、ここに——」

とんとん、と自分の頭、こめかみの辺りを人差し指で悪戯っぽい笑顔で軽く叩く。

「コンマ以下まで計れる時計が備わってますの」

「は、はあ。・・・そ、それじゃあ、この授業は此処までにします。皆さん、次の授業の準備を忘れないで下さいね」

それだけ言い残すと、怯えたように素早い行動で教科書やらチョークやらを片付けると、そそくさと教室を出て行く愛子。

その瞬間、生徒達は骨が無くなりでもしたかのように脱力すると、皆揃って机の上に突っ伏した。

「忠夫、ちよつと来なさい」

「ぐえっ?!」

そんな中、心配すら半人狼に悟らせず、無音で忠夫の襟首を掴んだ百合子が後方の扉を開けて教室を出て行く。

いともあつさりとした退場に、教室の面々も呆氣に取られて言葉も無い。

一部の女子生徒達は立ちほだかる壁の巨大さに闘志を燃やしたり頭を抱えていたり真つ白になっていたりする物の、殆どの生徒達は、疲れきつた体と精神を労わる事に余念が無い。

男子生徒達は男子生徒達で美人教師の到来、と吼え猛りたいところだが、休息を求める若い肉体が魂の叫びに答えたくても答えられずにダウン中。

人外ということもあり、日頃の生活のせいもあつてか体力、精神力共にタフなタイガーとピートが、疲れた様子を見せながらも顔を突き合わせて小声で相談し始めたのは、そんな教室の片隅だった。

「タイガー……どう思う?」

「世が世ならどつかで初の女性大統領にでもなっていたかもしれませんノ」

「全く持つて同感だけどそっちじゃなくて」

冷や汗を零したのは、その映像がくつきりと脳裏に浮かんだせいだが現在は関係無いのでスルーする。

ぱたぱたと手の平を振るピートの前で、タイガーは顎を押さえながら難しい表情を作る。

ピートの言いたい事は何となく分かる。

おかしいと思いつつも、何がおかしいのかが分からない。

そんな違和感が、何時までも消えずに思考の中をぐるぐると巡っているのだ。

顔を上げればピートもまた真剣な表情で窓の外やクラスメート達を見ながら考え込んでいる。

たった一時間の授業で疲れきった様子の級友達や、奇妙な色に染まった外を覗き見る度に何か危機感が込み上げるも、次の瞬間にはその思考に靄が掛かったように消えていく。

頭の中の靄を払おうと思考を、注視を繰り返す2人の視界が、授業が始まる前にように蛍光灯が瞬いた事で点滅した。

「——この電灯も寿命かなあ」

「——放課後にでも新しい蛍光灯を貰ってきた方が良いでしょうカノー」

朗らかな笑顔で交わされる会話。

互いに凝った肩を揉んだり首を捻ったりしながらの、ただの雑談。

「そうだね。教会の電気も何とかしないとなあ」

「また止められたんですカイノー？」

「先生がねえ……この前の依頼の報酬、全部落としたらしくて」

不思議な事など何も無い。

不可解な事など何も無い。

不自然な事など何も無い。

「ま、僕は里帰りしてたから知らないけど……多分、必要な人にあげたんじゃないかな」
「実に唐巢神父サンらしいですジャー」

故に、疑問は何も無い——

「なんでじゃーっ?!」

「五月蠅い」

鈍い音を立てて忠夫の顔面がリノリウム張りの廊下に突き刺さる。

次の瞬間には何事も無かったかのように体を起こし、己を叩き伏せた百合子を抗議の意味をふんだんに塗した視線で見返すも、圧倒的な圧力であっさりとおなかを見せて降伏した。

——敵は強大也！ 勝算はゼロ！ 全くのゼロです！

——ええいつ?! こうなれば降伏して反撃の時を待つのだ！ チャンスは何時か来る！ 今は雌伏の時！ 総員、あたら命を無駄にするな！

——艦長おおおつ!!

「り、理由をお聞かせ願えますでしょうか?!」

「私に勝ちたかつたら後20年は人生経験を積みなさい。決起するならそれからね」
「俺の脳内艦橋を読まないでぐえっ?!」

看破された思考もありがたいアドバイスも、踏みつけられた後頭部の痛みで吹っ飛びそうである。

脳内戦艦の第三艦橋辺りが溶けるのをイメージしながらも、鼻を摘んでの気合で止まった流血を心の支えに立ち上がる。

——まだです！ まだやれますよ！

——ようし！ 機関全速！ 日の昇る方角へ舵を向けるっ！

「2度ネタは死に値するわね」

「そう思うなら2回も後頭部踏まんでもえーやんかー・・・」

ややくぐもった声ながらも、顔面が床に密着した状態ではつきりと喋れる辺り無意味に小器用な男である。

鼻を摘んで気合一発の止血は、2度目が失敗してしまうので自然治癒に任せながら立ち上がる。

半眼でこちらを見てくる叔母に、誤魔化すような笑顔を向けると溜め息一つ付かれたが、ともかく話は先に進むようである。

「・・・分かつてるわよね？」

「勿論っ！ 教師と生徒が駄目なら卒業を待つてか・・・ら・・・」

咽元に当てられた鋼の冷たい感触に両手を上げて降参しながら、忠夫は百合子の殺気を何とかしてくれと斬ろうとした神様に縋ってみたりするのだった。

「ええと、時間と外、ですよね？」

ふう、と溜め息を付いた百合子が手首を返すと、持っていた凶悪なフォルムのナイフがあつさりとその姿を消す。

「他の皆は怪しいと思っていなみたいね？」

「……俺も百合子さんに蹴り出されるまでは不自然に思わなかったし」
おそらく、と百合子は続ける。

教室の皆が不自然に思っていない事、教室から蹴り出された忠夫がおかしいと思つた事、そして、後から教室に侵入した百合子が騙されていない事。

何より、廊下に出たにもかかわらず、窓の外の光景に変化が無い事。

「入り口は教室の扉、とは言え、一方通行らしいわね」

「で、教室ごと取り込まれたのが俺たちで——」

「なんらかの方法で、一辺に騙した、と。GSの助手やってんでしょ？ 何か良い手は無いの？」

「……あー、すんまつせん」

「つたく、知識と知恵は武器でしょうが」

「せ、説教はそのくらいで勘弁を……えつと、それから、維持できるのは教室内だけ——いや、限定するのは早いか。それより、出口と入り口がイコールじゃないって方が厄介……」

ぶつぶつと呟き始めた忠夫を見ながら、少々不満の残つた、それでもどこか頼もしげな目で忠夫を見つめる百合子。

それは、やはり成長した息子を見る母の目、と言うのが一番近いのだろう。

「……でもって、校内が再現されてるみたいだから——全部危ないっ?」

「ま、ちよつと遅いけど間に合ったみたいだから良しとしましょうか」

そう言つて、百合子は顔を跳ね上げた忠夫の襟首を掴み上げる。

その視界の先に写るのは、廊下の向こうからどんどんと連鎖的に点滅を繰り返しながら近づいてくる蛍光灯。

「下校までは待つてあげる、わ、よっ!」

残り数メートル手前の蛍光灯が点滅した瞬間、思い切り掴んだ忠夫を放り投げた。

ふわり、と浮かんだ瞬間に受身を取ろうと考えた忠夫の視界を、点滅する蛍光灯が埋め尽くし。

「——あだあつ?!!」

気が付いたら、受身も取らずに後頭部を地面に叩きつけていた。

「——つとつ」

「うわっ?!」

たたらを踏んだ百合子の目の前には、驚いた様子で立ちすくむ数人の教師達。窓の外では先程よりも傾いた太陽が、それでも燦々と光を降り注がせている。止まっていた腕時計の針は、今は再び何時ものように時を刻み始めていた。

「……やっぱりそう来るわよねー」

「よ、横島君のお母さん?! 今、何処から——」

駆け寄ってくる教師達を見ながら、百合子は営業スマイルを浮かべ、誤魔化しと時間稼ぎに入った。

下校時刻までには、しっかりと帰ってくるだろうと、心のどこかで確信しながら。

「すませーん！　ちよつと手強い相手だったんで遅くなりましたー！」

「何がですかノー」

「おつきい奴が」

教室中から教科書やら文房具やら机やらが飛んで来た。

きつちり全弾直撃を受けて扉の向こうで沈んだ忠夫を、少々顔を赤らめた女子生徒達と義憤に燃える男子生徒達が睨みつけてくる。

「いきなりセクハラ発言をかまさないでよね！」

「手前ええええ、横島！　折角新しい美人の先生が来たつてのにこのクラスの恥を晒しやがつて！」

自分の上に積み重なった机と教科書類の隙間から覗いてみれば、やはり教壇に立つのは——スーツ姿、眼鏡をかけた女教師然とした愛子。

ともかく、先ずは疑われないように！

「それはともかく先生改めて嫁に来ないかー!!」

ジャンプ一閃、飛び掛る。

後方で重力を思い出したように積み重なった諸々が、忠夫の抜けた空間を埋めるように崩れ出しているが既に意識の隅にさえ無い。

「きよ、教師と生徒だから駄目よっ!!」

「そんな事言わんとー! さあさあさあさあさあさあっ!!」

「え、その、あの、だって、私、まだ——」

掴んだ両手を離さないように、しかし痛くないように絶妙の力加減で握り締めながら迫る。

動揺しているようであるが、物凄く嫌がって居る訳では無い。

——押せば行けるか?

当初の目的をほぼ忘れつつある忠夫の背中に、悪寒がマーチを奏でながら行進した。

「……横島君? 授業の邪魔なんだけど」

「……さつき男子の中で協定が結ばれてなあ。抜け駆けした奴はリンチなんだ、これが」
背後なので見えないが、後方で何かぐつぐつと煮える音と怪しい呪文が聞こえ出した。

人狼の本能が危険を察知したので、脱出を敢行。

無論、チャンス逃すつもりなど欠片も無い忠夫であるので。

「とうっ！」

「ちっ！ 逃げたわよっ！」

「しかも先生を攫つていきやがった！ 追えー！ 奴を縛つて重石をつけて、東京湾に沈めてやれー！」

出入り口を塞ぐ机を蹴倒し、愛子を抱えて全速力で駆け出す。

腕の中の彼女は状況を把握しきれずに疑問と動揺で一杯の表情であるが・・・それもまた、良し！

「と言う訳で駆け落ちじやー！」

「わ、私の意思はー?!」

無視！

「ちいつ！ しつこい！」

「落ちろー！」

「待ちなさいっ！」

半分とは言え人狼である忠夫が全速力で廊下を駆け抜け、階段を駆け上がり、時には飛び跳ねるように階下に下っているにもかかわらず、曲がり角を曲がったり踊り場から廊下に飛び出すたびにそこには計ったようにクラスメート達が待ち受けている。

しかし、慣性ドリフトやフリーフォールを繰り返す度にお姫様抱っこされている愛子が悲鳴を上げてしつかりと抱きついてくるので、ちよつとの我欲に惑わされて駆ける速度も五割増である忠夫を捕獲するには至らない。

「うわははははー！ 今、俺は星を取った配管工よりも早いぞー！」

「きやああつ?!」

ロツカーで作られたバリケードも何のその、蹴倒し飛び越え踏み砕く。

まさに無敵モードで快進撃を続ける忠夫を止める者は居ないのか、と思われたその瞬

間。

「まちゃんシャイ！」

「そこまでです!」

廊下を塞ぐように、巨体と金髪が行く手に立ちはだかる。

「ピート・・・タイガー・・・何のつもりだ?」

「ふ、言わずと知れた事ジャー」

「乱暴狼藉も此処までです!」

二人は共に構えを取り、忠夫に攫われた愛子を助けようと靈力を漲らせる。

しかし、愛子の柔らかさと暖かさと良い香りに惑わされた忠夫に怖い物など無い。

例え、目の前を塞ぐのが友であっても、今は――

「目先の嫁の為なら全力以上を發揮できるのが俺じゃあああつ!」

呼应するように靈力をぶん回す。

腕の中の愛子の体が緊張したように固まったが、直ぐに片付けてしまえば問題無しつ

!

「あつ! 一文字さんが暴漢につ!」

「何いいいつ?! 魔理サンに傷一つでもつけたら「隙ありつ!」ジャー?!」

いともあつさり余所見をしてくれたタイガーの後頭部に、久々出番の唐巢神父特製聖水を塗した石が突き刺さる。

悲鳴を上げながら、それでもタイガーは満足げに。

(あそこで振り向けないような漢になりたくないんジャー……)

笑顔で、きらきらと涙を流しながら崩れ落ちた。

「タイガアアツ!!」

「敵ながら天晴れっ! タイガー、お前も漢だ!!」

「くっ、ならば僕が!」

崩れ落ちたタイガーに賞賛の声を上げた忠夫は、両手に靈波砲の光を灯したピートの声に立てた人差し指を軽く二、三度振って余裕の態。

「ピイイト。大変だよなあ、吸血鬼ってさああ」

「な、何を?」

にやりと笑って懐に手を突っ込んだ忠夫を警戒しながら、ピートは両手に靈力を更につき込んで行く。

直撃すれば愛子ごとダメージを負うと言うのは既に眼中に無かったり。

「ここは学校なんだ……つまり、家庭科室とかあるんだよなあ……」

「ま、まさかっ?!」

「喰らえ、ガーリックパウダー爆弾っ!」

その言葉の内容に思わず防御体勢——鼻を摘むだけだが——を取りながら、顔を庇うように両手を上げて後方に飛び退る。

しかし、ニンニクの粉末の代わりに飛んできたのは。

「人狼サイクロンマグナムっ！」

「どわああっ?!」

遠慮容赦の無いボディーブロー。

直撃を喰らったピートは後方のロッカーに激突し、それに埋もれるように消えていった。

「ふっ！ この犬飼忠夫！ 嫁の為なら修羅になる！」

「ちよ、一寸待ちなさい！ 友達じゃなかったのー?!」

「戦場に情けは無用っ！」

そう言い捨てて駆け出す忠夫。

ピートとタイガーが発見されるまで、もう少々時間が必要のようである。

「だつ、大体、何でこんな事をするのよっ!」

「何でつて、そりや嫁に来るつて言つたからつす!」

「言つてない! 一回も言つてないっ!!」

「・・・あれ?」

暫し全力で、しかし息も乱さず駆けていた忠夫が急ブレーキをかけた。

そして、中を睨んで思考の海に浸り――。

あ、と一言呟き漸く愛子をゆっくりと降ろす。

腰が抜けたのか、廊下に座り込んだ愛子の隣で忠夫は頭を抱えると。

「・・・当初の目的、忘れとつたあああ」

そう呟きながら、今までの行動を思い返して「やってもーた」と後悔したのだった。

「・・・えつと、愛子先生?」

「な、何ですか？」

かなり長い間落ち込んでいた忠夫であったが、幸運にも——かどうかは定かではないが——クラスメート達の襲撃を受ける事無く、漸く、といった様子で立ち上がった。

隣に座り込みながらこちらを伺っていた愛子に声をかければ、愛子もまた立ち上がりながら、少々どもりながらだが聞き返してきた。

「——なんで、先生になろうとしたんすか？」

「え……」

警戒心も露に身構えていた愛子は、そんな忠夫の質問にきよとんとした表情を返す。

そして、ゆつくりとその言葉を噛み砕くように沈黙し、暫しの間の後、一つ頷くと、ゆつくりと手近な教室の扉を開けて入っていった。

それを見つめる忠夫の視界に、教室の扉の中から手だけを出して招く愛子の姿が写る。

招かれるままに教室の中に入っていった忠夫は、机の上に行儀悪く腰掛けたスーツ姿の愛子を見て、なんとなく慣れた様子だな、と思う。

「問題児の悩みを聞く……青春よね……！」

小さく呟いた彼女は、嬉しげにガッツポーズを取って勢い良く机から立ち上がった。

「あのね、私、これでいいのかなって悩んでいた時に、ある人に出会ったの」

その人は、と言った後、少々小さな声で、照れたように言葉を濁しながら。

「えっと、その時、私は悪い子……不良って言ってもいいのかしら。そんなだったんだけどね」

そんな彼女を叱りつけ、生徒として暮らしていた彼女に、一つの道を示してくれたのだと。

「ちよつと、怖かったけどね？」

そう語る彼女の目には、恐怖の色は無く。

むしろ、尊敬の色が濃い。

その人は、纏まったお金が必要だろうから、と見知らぬ彼女に大金を渡し、困らせていた人達と一緒に謝ってくれ、そして色々と手を回してこの学校を紹介してくれたのだと。

——これは、言わない事だが。

——どうやら、そう決意した事で彼女はちよつと成長したようだ。

——先生として、生徒に接する為に、彼女は「こうなりたい」と思い、そして彼女は、その存在はその願いに答え、元々の本体であった机から少しだけ「卒業」させてくれたのだ。

——故に、今此処に居るのは、「机妖怪」でありながら、「先生になりたいと願う机妖

怪」なのだ。

今、彼女の本体は、本来の学校の倉庫でひっそりとその存在を主張している。

「だから、生徒としてじゃなくて、私もあんな人になりたいな、って思ったの。先生に、人を導いて上げられるような人になりたいな、って」

その時の事を思い出したのか、微笑を浮かべる愛子の顔は服や眼鏡によつて多少誤魔化されてはいるが、確かにまだ高校生と言つても十分に通じるものでもあり。

「だから、先生になりたいって、思ったのよ」

「だからって、生徒を騙して無理矢理勉強させたって駄目っしょ」

「——っ?!」

微笑が消え、緊張がその表情を覆い隠す。

「シヨック療法……違うような気もするけど、そんな感じっす。百合子さんのお陰っすけどねー」

しかし、対照的に忠夫は笑みを崩さない。

先程見せた靈力を放つことも無く、何もしないと云わんばかりに椅子を引き出し、腰掛ける。

「よっ、と。授業中の皆の顔、見てましたか？ 疲れきつてて、殆ど耳に入っていない」

「……え」

「予想外だからって百合子さんを追い出して、無かった事にしてやり直して——それじゃ、駄目なんじゃないかなーって」

はっとしたように口元に手を当て、後退る。

がたん、と足に当たった椅子が乾いた音を立てた。

「わた、私、だって……」

「ま、気楽な学生の戯言っすけどね。生徒の事を考えてちゃんと休憩したり、親が授業参観とかいきなり言い出してもおどおどせずにしつかりと対応したり。——『あの人』は、そんな人じゃないんっすか？」

「……あ」

口元に当てた手が、ゆっくりと降りる。

俯いた表情は前髪に隠れて見えないが、多分、眼鏡は涙で濡れて居る事だろう。

今にも土下座したい気分ではあるが、もう一踏ん張り。

それが、必要だろうから。

「だから——頑張ってください！」

「えっ？」

『これまで』が駄目でも、『これから』がありますって！ なんぼでも取り返しは効きます！ 美人の女教師！ 最高の響きじゃないっすか！ 皆に謝って、もう一回、ちゃん

とやりましようつて！」

顔を上げた愛子の瞳は、溢れた涙で濡れている。

それでも、驚いた顔の裏側には、まだ、やる気が残っている筈。

だから、忠夫は手を伸ばしながら重ねて言う。

「頑張りましょ！ 『愛子先生』!!」

「・・・うん。頑張る。謝って、頼み込んで——もう一回、頑張るから」

微笑を交わす二人。

ゆつくりと、愛子の手が忠夫の手に重なった。

「御免なさいっ!!」

生徒達を戻し、教室を開放し、先ず愛子がやった事は、教室の前に集まっていた教師達に頭を下げる事だった。

難しい顔をする教師達に説明をし、その後、何が起こったのか分からない、と言う表情で眺めていた生徒達にも謝罪と説明をする。

「学校妖怪、ねえ……。おい、誰か校長先生に連絡来てないか確認とつてくれー!」
教師の一人が駆け出し、残った者はそれを待つてから、とばかりに沈黙した。

外は既に日も沈み始め、校庭は部活に汗を流す者達で溢れている。

しかし、横島も、ピートも、タイガーも、生徒達も、誰も帰ろうとはしていない。

「大丈夫かなあ。心配やなあ」

「ま、大丈夫でしょ?」

挙動不審に落ち着かない様子の忠夫の頭を、待ちくたびれたと笑いながら百合子が叩く。

その指が指す方向を見れば、こちらに駆けってくる老年一步手前と言った感じの男性の姿。

呼びに行つた教師と共に駆けてきたその男性、校長は、荒れた息を何とか落ち着かせると、空咳をひとつ打って重々しい口調で話し掛けた。

「——話は聞いている。どうやら、双方に手違いがあつたようだ」

「はあっ?!」

「先ず、愛子君」

「は、はいっ!」

俯いた表情で肩を震わせていた愛子が、飛び跳ねるようにして顔を上げた。

見えたのは、苦い顔の校長。

なんと言われるのかと緊張する彼女に、その言葉はかけられた。

「この学校に、『愛子』という名の教諭は居ない」

溜め息混じりに吐かれた言葉に肩を落とす愛子。

そして、その後方で、何処から取り出したのやらチェンソーやら釘バットやら鎖

チェンソー付きのヨーヨーやらを取り出す生徒達。

それを冷や汗交じりに眺めながら、校長は慌てて続きを述べた。

「そして、ようこそこの学校へ。転校生の「愛子」さん」

「はへ?」

「教師となるには教職免許が必要なのだよ。そしてこの国は法治国家だ。……唐巢さんは説明してなかったのかね?」

呆然と、妙な声を上げた愛子の顔にだらだらと脂汗が流れ始める。

そう言えば、ちゃんと手順を踏む事も必要なのだと、あのちよつと額が広い男性は言っていたような……。

「……てへ」

『コラアアアアアツ?!』

誤魔化すように舌を出した愛子を、生徒達が揉みくちやにする。

慌てて逃げ出しながら、それでも笑顔のままの愛子は。

「……ありがと」

「どーいたしました。お礼は嫁に来てくれるだけでOK！」

すれ違いざまに忠夫にウインク一つ残して、僅かに頬を染めながら隣を駆け抜けていったのだった。

「やれやれ。んじゃ、私も帰るわね」

「え、もう?」

校門を出て数歩目、立ち止まった百合子は忠夫に言った。

肩と目頭を揉みながら、あつきりと踵を返して颯爽と歩いて行く。

「ま、色々見れたしね。人を見るのにトラブルって言うのは最適なのよ」

そう言つて、ひらひらと手を振りながら歩いて行く。

そんなもんかなー、と首を捻つた忠夫は、最後に一つだけ聞いて見たい事があつたのを思い出した。

「そー言えばさー! 本当にコンマ以下まで時間分かるのー?!」

振り向いた百合子は、軽く鼻を鳴らして。

「キャリアアウーマンにそんな技術が要る訳無いじゃない。競馬のジョッキーなら別だけ

どねー」

「んじや、ハツタリ?」

「そ」

呆れた顔の忠夫の耳に、付け加えるように呟かれた言葉が聞こえてきた。

「全世界の現地時間を、時差含めて秒単位で把握できる程度あれば十分よ」

そう言い残して、いろいろな意味で強烈な叔母は、叔父の所へと戻つていったのだつた。

その後帰宅した忠夫の前に、マリアとその娘達が三つ指ついて出迎えしてたり、百合子に紹介してくれ、と言われて思わず「嫁ー！」と言いなながら飛び掛ったところに寝起きの悪いメドーサの攻撃が直撃したり、気絶から覚醒したら覚醒したで日が昇り始めてたり、メドーサに散々マリアが長女として迎えようとしただの、ほんの少しだけ満更でも無さそうな表情で愚痴られたりした物の。

今日も今日とて、忠夫は朝から増えた食い扶持を稼ぐ為に、学校に行かず狩りに出かけるのだった。

——再襲来も、時間の問題かもしれない。

第四拾漆話。

朝だ。それも、めつたにないほど空気の澄んだ気持ちの良い朝だ。

清々しい朝の価値は計り知れない。

窓から差し込む朝日は一日の活力を呼び覚まし、春の少しだけ肌寒い空気の中で囀る小鳥の鳴き声は、否が応にもこの季節の特別さを思い出させてくれる。

しかしながら、此処最近は朝から増えた食い扶持を稼ぐ為に狩りに出かけていた半人狼にとつて、日の出の時間が早くなった事と山菜が採れるようになった事、そして山々に新緑が増え始めている事の方が季節を感じさせてくれたのも事実である。

「・・・あたたたた。ちつくしよー、山の主の子供らもでっかくなりやがって・・・親子連携で奇襲されるとは思わんかったぞっ！」

朝日を背負いながら安アパートに向かうのは、足を引き摺りながら、拾ったらしい木の枝を杖代わりによたよたと歩く忠夫である。

時の流れを強敵と言うか縄張り争いに近い関係の相手の戦力強化に感じながら、それでも背負ったリュックには山菜と川魚が突っ込んであるあたりは抜け目が無いと言うか何と言うか。

肉が取れなかったのは残念だが、今日一日くらいは持つだろう、と溜め息混じりに歩く忠夫の耳に、朝の静けさを破りながら聞き覚えのある声が木霊を伴って響いてきた。

「……んあ？ タイガーじゃねーか」

「——!! ——つ!!!」

遠くに見えるビルの上、口元にメガホンの如く手を添えたタイガーが、朝日に向かって吼えていた。

耳を澄ませば。

「何でジャーっ！ 彼女持ちのタイガーなんてタイガーじゃ無いとはどー言う事なんじゃアアツ!!! 幸せなワツシなんてタイガーじゃ無いとはどー言う意味ですカイノオオオツ?!!!」

「朝っぱらからウチの事務所の恥晒すんじゃないワケっ!!!」

ビルの屋上の扉をバイクでブチ破った褐色の肌の女性ライダーが、ウイリーしながら吼える虎に向かってブーメランを投げつける。

モロに側頭部に直撃されて昏倒した虎は、追撃とばかりにバイクから降りた女性のくり出したストンピングを喰らって痙攣を始めた。

超感覚と呼ばれる自分の視力のせい朝からスプラッターな光景を目撃した忠夫は、触らぬ神に祟り無しを決め込む事にしたのだった。

「・・・春やなあ。春だからしよーがねーよなあー」

そう呟きながらも歩き出す忠夫であったが、何となく自分の役割を取られたようにも
思え、ちよつと背中を煤けさせていたり。

帰宅し、世間一般よりもかなり早めの朝食を作る。

とは言つても、採れたて、釣れたての食材に火を通し、塩を塗しただけの簡単サバイ
バル料理である。

押入れの中で忠夫から強奪した布団に丸まっていたメドーサが、布団に未練がましくしがみ付いているのを引き剥がし、炊き立ての白米と共にちやぶ台に置かれた朝食の前へと設置する。

百合子が置いていった調理器具やら炊飯ジャーやらの文明の利器は大変便利であつたし、食事のバリエーションが増えたのも確か。

寝ぼけ眼の過去の凜々しさとか警戒心とか鋭さとかを何処かに忘れてきた娘は、見えているのかも分からないような細目のままで、しかし正確に箸を運びながらゆつくりと咀嚼して行つた。

「・・・肉が無い」

食事終了と共に漸く目の覚めたメドーサから吐かれた言葉に苦笑いを零しながら、忠夫は食器を台所に運んで行く。

「ま、偶には不作の日もあるんだよ」

「肉が欲しいんだっ！」

どん、とちやぶ台を叩いたメドーサは、ときばきと食器を片付ける忠夫に不満の意を大いに表明して見せた。

「わーったわーった。今晚は何とかすつから、さ。どーせ夜まで寝てんだろ？」

台所に立つ背中越しに返って来たそんな言葉に何度か念を押しながら、同時に頼まれ

たのでちやぶ台の足を畳んで部屋の隅に片付ける。

ぶちぶちと不平を零しながらも、以外に素直に行動したメドーサは襖を開けて押入れの奥に潜り込んだ。

押し入れの中で勝手に引っ張り込んだ電球の小さな明かり点け、腰を落ち着けたところで、おもむろに着ている服の胸元を引っ張ってみるメドーサ。

覗きこんだ所で、見えるのはすっかり寂しくなった曲線ばかりである。

昨日は危うくアンドロイドの少女に懐柔されそうになった物の、まだ、色々と諦めている訳ではない。

収集した「横島忠夫」のデータの中にあつた、年上のスタイルの良い女性が好みである、と言う一文。

どう見ても年上には見ええず、ナイスバディと言うには物足りない胸と腰に歯痒さを覚えながらも、数年先を見越して努力を誓う。

娘と言う位置は悪くない。

男女の關係としては近すぎるような気もするが、何、あの無節操な男の事。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ。まだ諦めた訳じゃないよ……。絶つ対に、私のモノにしてやるんだからねえ……」

一人胸の内に炎を燃やしながら、再び開いた胸を覗き込む。

無い物は無い、と言う事実に少々落ち込みながらも、健やかな成長の為には栄養と睡眠、と割り切り拳を握り締めるメドーサ。

と、一人世間的にはとんでもない方向に向かつてひた走るメドーサの部屋、つまり押し入れの襖であるが。

その薄暗い押し入れの襖が、いきなり開かれた。

そして差し込む光と、飛び込んでくる忠夫。

「すまんメドーサッ！ ちよつと匿つてく……。れ……。？」

上半身を押し入れに突っ込んだ忠夫の前で、あるかないかの谷間を覗きこんだまま硬直するメドーサ。

沈痛な、なんとも座り心地の悪い空気が満ちた。

その向こうから聞こえてくるのはメドーサの知らぬ女性の声。

忠夫にとっては昨日散々異空間の授業で聞いた、教師を目指す机妖怪愛子の声。

「ちよつとー！ 横島くーん！ 居るんでしょーっ?! 学校行くわよーっ!!」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「先生達から聞いてるんですからねーっ！ 最近学校にまともに来てないんですつてーっ?! 私がキツチリ更正させてあげますからねーっ!」

どんどんどん。

愛子の声と、薄い玄關のドアが叩かれる音。

段々とテンポは速く、音は大きくなっている物の、気まずい空気を打破するには至らない。

このままでは不味い、何が如何とは言えないが不味い、と言う思考が忠夫の脳裏を走り抜ける。

混乱した脳味噌は「えーらいこつちやえーらいこつちやヨイヨイヨイヨイっ」と訳の分からない返事しか返さないし、硬直したままのメドーサがふるふるると震え始めているのはとても危険な兆候のような気がする。

どれほどの時間そのまま居たのだろうか。

諦めたのかドアを叩いていた愛子の声は聞こえなくなり、目の前のメドーサの震えは段々と大きくなり、そしてその瞳には羞恥と怒りの色が浮かび始めている。

だが、事此処に至って忠夫は父親であろうとした。

そう、彼は彼なりに頑張ろうとしたのだ。

「…あ、明日があるさっ！ ほら、今は公園の砂場の山でもいつかは富士山あうらばっ
！」

「そこまで小さくないわああっ!!」

駄目だった。

色々と、駄目駄目だった。

朝は、アパートの一室が崩壊寸前まで追い詰められる事で終わりを告げたのだった。

さて、舞台は少し遡る。

魔界の、とある魔神の居城にて、物語の歯車は、歪な音を立てながら、無理矢理に回らせ始められていた。

『・・・本気ですかアシュタロス様?』

「うむっ!」

二本の角をそそり立たせた紫色の角付き男が、重々しく——と言うにはちよつとばかり威勢良く頷いた。

それを見た部下の土偶の目から光が消え、暫しの間を置いた後、再びゆっくりと再起動。

主の顔を確認し、全く持って問題を感じていない表情である、と最早カウントする事すら億劫な程の年月によって積み重なっているデータが判断する。

『・・・アシュタロス様ああああつ?!』

「ん、なんだ?」

『な・ん・でよりもよってこんな時期にそんな事をする必要があるんですか?! データントだの何だので最近の問題が多すぎるんですよおおおつ?!』

「ふ・・・そんな事か」

鼻息一つで部下をあしらった上司は、やれやれ、と言った様子で両手を広げて肩を上

げる。

しようがないなあ、と言う感じの表情と、大げさに過ぎるオーバーアクションに在りもしない額の血管が膨らんだような気がしたり、無い筈の胃がシクシクと痛みを訴えたような気がしたり。

「ふふふふふ．．．。無駄だよ」

『何がですか?! 納得の行く説明をして頂けるんでしようねええつ?!』

「もう行った後だからな」

あつはつは、と快活に笑う魔神が土偶の肩を叩く。

叩かれた土偶が言われた意味を理解するのに魔界でも群を抜いて優秀な演算装置でさえ十数秒の時間を必要とした。

そして、理解した後、物も言わずに後方にぶつ倒れた。

「おわあ! ちょっと待てこれは洒落にならんぞっ! 接着剤、接着剤は——」

陶器の割れる音と、魔神の焦ったような声が、巨大な本棚に囲まれた部屋に響いたのだった。

「ういーっす・・・」

「あら、今日は珍しく遅いのね」

「朝からごたごたとしてたもんで・・・」

何だかとても久し振りの事務所の空気は、やはりねぐらであるアパートの一室とは別の意味で落ち着く空間である。

何時ものように高価な、だが機能的なデスクに腰掛けた美神は、昼間からあちこち埃っぽい格好で出勤してきた忠夫を苦笑いで眺めている。

疲れた様子で柔らかいソファアに腰掛けた忠夫は、大きく溜め息をつくとき体の力を抜いて脱力した。

「あれ？ おキヌちゃんは？」

「学校に決まつてゐるでしょうが、この不良学生」

言われてみればその通りである。

朝も早くからサバイバルに出かけ、月に行つてから一度も来ていなかった事務所に顔を出したことから、と言う理由でサボつた忠夫と違い、おキヌは成績はともかくとしても真面目に学校に通う優等生なのだ。

まあ、事務所に顔を出すというよりも、美神達の顔を見たかつたと言うのが、忠夫も気付かないもう一つの大きな理由だつたりはするのだが。

「そーゆー訳で嫁に来ませんか?」

「たわけっ!!」

全く前後の繋がりも無く美神の手を取らんと飛び掛つた忠夫であつたが、美神の右拳が擦り抜けるようにその顔面にカウンターでジャストミート。

重力を忘れたように空中に暫し留まつていた忠夫であつたが、物理法則に抗える筈も無く轢かれた蛙のように事務所の床にずり落ちた。

「よし、今日も絶好調っ!」

「ひ、人を殴つた感じで調子を計らんでくださいい・・・」

拳の得た感触に満足げな表情を浮かべる美神も、文句を言いながら鼻を押さえ立ち上がる忠夫も何処と無くほつとした様子が、ほんの僅かに見て取れた。

月まで行つて、魔族達と命を削りあう戦いをし、誰一人欠ける事無く無事に帰つてくれた安堵もある。

だが、それ以上に。

G S 美神除霊事務所が、G S 美神除霊事務所としてあるという事が、彼女たちにとつては何よりも落ち着くのだ。

「今日はまだ依頼は無いけど、ま、折角だからお茶でも飲む？」

「え？ 美神さんがつか？」

「おキヌちゃんのお陰で機会が無かつたけど、あの子が来るまで誰がクライアントの応対してたと思つてんの？」

ウインク一つ残して台所へと歩き出す美神の耳に、何処からとも無く声が響く。

『オーナー、お茶でしたら私が——』

「いーのいーの。偶には私が淹れるから、あんたもゆっくりしときなさい」
『ですが——』

「オーナー命令よ」

ぴしやりと言ひ放つて部屋を出て行く美神を見送りながら、忠夫は撃墜された位置からソファアーに移動し、今度こそ身体を落ち着けた。

台所からは美神が紅茶の葉の位置を人工幽霊に聞く声が聞こえ、なにやらガチャガ

チャと引つ掻き回すような音も聞こえる。

おキヌを雇つてからというもの、台所を完全に任されていた彼女は彼女が使いやすいうようにレイアウトを変えたらしく、少々梃子摺っているようである。

しかし、人工幽霊のサポートもあつてか、暫くするとお湯が沸騰する音やクッキーの匂いが忠夫の耳と鼻を擽つた。

「・・・へーわやなあー」

ずりずりとお尻をソファアに滑らせながら呟いた忠夫の鼻に、紅茶の香りが届き始めた。

「ただいま帰りましたー」

「おかえりなさい、おキヌちゃん」

「おキヌちゃん、おかえりー」

事務所の玄関を潜って声を上げれば、応接室から響く声。

スリッパに履き替え笑顔で駆け出したおキヌを、笑顔の二人が出迎える。

その事に、なんでもない筈の事にたまらない程の幸せを感じながら、ソファーに腰掛けて垂れている忠夫とそれを横目で睨んでいる美神に笑顔を向けた。

「あ、横島さんもう来てたんですか？」

「この馬鹿、学校サボって昼頃には来たわよ」

「えーやないですか。お、おキヌちゃん六女の制服も似合うな」

自覚も無しにいきなりナチュラルに口説き文句をのたまった忠夫に美神が投げたペングが突き刺さり、涙をどばどば振りまきながら流血部分を指差した忠夫が美神に食って掛かる。

それを間に入って押し留めながら、どこか嬉しそうなおキヌはスカートのポケットから取り出したハンカチで忠夫の顔を拭く。

拭かれた忠夫がどぎまぎとしているのがとても嬉しくて、でも後ろから不機嫌そうな視線を向けてくる姉のような女性の視線がちよつと痛い。

「あ、あはは．．．ちよつと着替えてきますね」

「覗いちや駄目よ、前科者」

「やだなー。おキヌちゃんを覗いたりしたら、俺完璧に悪者じゃないっすか」

「……………っ！……………っ！！」

「神通棍は嫌ーっ?!」

無言で忠夫をシバキ倒し始めた美神の打撃音と忠夫の悲鳴を背に、苦笑いを浮かべながら事務所の一角にある部屋に早足で駆けて行く。

できるだけ原型が残っている内に戻った方が良いかなー、とか横島さんなら、とか思いつつ、ちよつと火照った頬を人工幽霊が点けてくれた電灯の下、鞆を持った手とは反対側で押さええながら、少し足を速めるおキヌであった。

「うー、食った食った」

綺麗な満月が浮かぶ空を眺めながら夜道を歩く。

切れかけた電灯が瞬きを繰り返し、道端に設置された自動販売機にはそろそろ姿を見せ始めた虫が数匹、羽根を動かしながら集まっていた。

見上げた空には月と明るめの星が幾つか。

手にはお土産に貰ってきた、おキヌ特製の肉料理の詰め合わせ。

冷えても美味しいものを、と手を加えてくれたおキヌの心遣いにも、賞味期限ギリギリだから、と視線をあさつての方向に向けながらも許可を出してくれた美神にも感謝を捧げながら、揺らさないように歩いていく。

「これで機嫌直してくれるといいんやけどなあ・・・」

出かける前には完全に押入れに引きこもってしまった娘のような存在は、どうやら彼女なりに切実な思いでたんぱく質を欲しがっているらしい。

それが、忠夫がモザイク寸前の物体になりながらも理解した事実である。

とは言えもつと深いところの意味まで理解しろ、と言うのは忠夫には難しすぎる課題だろう。

溜め息半分、苦笑い半分で匂いだけでも期待を持たせるそれを持ち替え、遠くに見えるアパートに向かって歩いていく。

深夜というには早すぎるが、子供を寝かせるのならこれくらいの間だろうという所である。

依頼が来なかったと不機嫌そうな雇い主も、退院祝いに、と心持ち豪華な、それでいて心の籠った料理を作ってくれた同僚も変わり無く、それが安堵を呼び起こす。

同時に、早く嫁さん欲しいなあ、とも思うが未だに成果はゼロ。

「美人でナイスバディなねーちゃんなら言う事無しやのになあ・・・」

TVで聞いた、最近流行の歌を口ずさみながら空を見上げた。

月は、何処までも優しく輝いていた。

お風呂を済ませ、ちょっと晩酌でも、とおキヌが作ってくれたおつまみを上機嫌にテーブルに置きながらコップを取り出す美神。

窓から見える満月が綺麗なので、静かにあれでも見上げながら飲もう。ならば、洋酒よりも日本酒の方が雰囲気的に良いわよね、と鼻歌交じりにグラスに氷を落とす。

人工幽霊に頼んで電気を落とす。

真つ暗な部屋のソファーに腰掛ければ、ちょうど月が窓枠に切り取られて絵画のよう

にも見えた。

「あまり飲み過ぎないで下さいねー」

「分かっているー。おキヌちゃんも、偶にはどう？ 横島君も居ないから安心だし」

未成年に飲酒を勧める美神の言葉に軽く遠慮の言葉を返しながら、後半部分に首を捻る。

聞き返しても軽く誤魔化されてしまったので、大した事ではないのかな、と自分を納得させながら部屋のドアを開けたおキヌの耳に、事務所の中に響き渡る電話のベルの音が届いた。

電話の所までスリッパの音を立てながら駆けて行けば、ちょうど、不機嫌そうな表情の美神が受話器を持ち上げた所に遭う。

あの表情だと断つちやうかもしれないなー、と思いつながら歩みを遅くして近づいていけば、受話器の向こうから微かに聞こえるのは男性の声。

何度か直接聞いたその声は、オカルトGメンと呼ばれる国際的な対霊機関に勤める美神の兄のような存在の声だった。

「西条さんからですか？」

「ええ。それで、西条さん、詳しく聞かせてくれるかしら？」

美神の顔には先程までの不機嫌な表情は既に無い。

一流のGSとして名を馳せる、GS美神令子の真剣な表情に話し掛けるのを躊躇うおキヌの前で、美神は何度か頷くと厳しい顔のまま受話器を置いた。

「・・・どうしたんですか?」

「詳しい話は明日直接此処に来てから、って事だけど・・・」

顎に手を当てて考える美神の態度に、おキヌは何となく不安を感じてしまう。

それを見て取ったのか、美神はおキヌに笑いかけると手招きしながら応接室へと戻っていった。

気を利用させた人工幽霊によって明るさを取り戻した応接室のテーブルには、何時の間にか大きな氷の入ったグラスとオレンジジュースの瓶が一本。

人工幽霊にお礼を言いながら、ソファアに腰掛けた美神の反対側のソファアに座る。

「お兄ちゃん——西条さんの知り合いに、ヨーロッパで魔術を学んだ魔女が居るらしいのよ」

「へえ・・・魔女って言うと、エミさんみたいな黒魔術関係の人ですか?」

「さあ?」と言ってグラスを傾ける美神の顔には、少しだけ不満そうな色がある。

兄弟に知らない異性の友人がいるからかな、と口には出さずにグラスを傾けたおキヌは、美神が続きを言い出すのをゆっくりと待った。

溶けた氷が、グラスの中で心地良い音を立てる。

美神のグラスの中身が空になったのを見て、おキヌは傍らに置いてあつた小さな瓶の中身を新たに氷の上から注いだ。

「・・・ふう、ありがと。それで、何を思ったか魔界と空間を繋いで、そこに自宅を置いてたらしいんだけど・・・」

「凄いですか?」

「ま、只者じゃないわね」

良く分からない、と言つた感じに小首を傾げるおキヌに苦笑いを浮かべながら、もう少しすれば六道女学院でも習うわよ、と返しておく。

まだ少し温いアルコールが落ち着くのを待つ間に、西条からの話を伝えておこう。

「所が、こつちに——日本にお店を移すらしくて、その調整をしてたらしいんだけど・・・その隙を突かれたらしいわ」

「・・・ええと、誰にですか?」

美神がグラスをゆつくりと回す。

その手の中で、氷とガラスがぶつかつて、硬い音を立てた。

「・・・魔族、らしいわね」

「ええっ! あいたつ!?!」

思わず立ち上がった瞬間にテーブルで膝を打つてしまい、涙目で蹲るおキヌの耳に笑

いを堪える美神の姿が映る。

「うゝもうつ、美神さん！」

「くすくす……ごめんごめん。ま、正式に依頼を受けた訳じゃないし、今は西条さんとその魔女が走り回ってる最中だから、そんなに心配するような状況じゃないわね」

そう言つて、グラスの中身を一息に呷る。

コトン、とテーブルの上に置かれたグラスが音を立てた。

「さ、もう寝なさい。明日も学校でしょ？」

促した美神の言葉に従い、まだ少し恨みがましい視線を向けながらおキヌは今度はぶつからないようにソファから立ち上がる。

そして、おやすみなさい、と言つて歩き出そうとした所で、一人の半人狼の顔が思い浮かんだ。

「横島さん、大丈夫でしょうか……」

「……さ、流石に大丈夫だと思っけど」

美神の脳裏に浮かんだのは、中世ヨーロッパでアンドロイドが美神に言つた一言。

——放つて置いてても、向こうからトラブルが寄ってくる。

「ま、まさかねえ……」

「ま、まさかですよねえ……」
暫し、事務所に乾いた笑い声が響いた。

「ねえ、その貴方」

「はい？　つてうわお」

アパートを目前にした忠夫の斜め上から声が掛けられた。

振り仰いだ忠夫の目に写りこんだのは、綺麗に切り揃えられた短めの髪の毛――

―― 触覚と、バイザーのような物を付けた、空に浮かぶ一人の女性。

ばさり、と音を立てて、忠夫の持っていたビニール袋がアスファルトを叩いた。

月を背景に背負い浮かぶ彼女は、まるで彼女自身が光っているようにも見えた。

そして、両手を広げ、まるでこちらを受け止めるように、妖艶な笑みを浮かべ――

「何か、叶えたい願いは無いかしら？ 貴方の魂の代わりに、3つだけそれを——あれ、3つで良かったんだっけ？ ちよ、ちよつと待ってね……ええと、確か此処にカンペが」

出だしで台無しだった。

第四拾捌話。

「ふ、あああああ〜」

満月を背景に、電信柱の上に腰掛けた女性が欠伸を一つ。

奇妙な、露出が多いのか少ないのか微妙なラインの服を着た、一見してステージに立つマジシャンのような彼女は、頭部から突き出した二本の触覚を動かしながら足を組替える。

眠たげな眼差しが見下ろす先には、先程声を掛けた直後から地面に胡座をかいて座り込んだ青年の姿がある。

赤いバンダナを巻いた、青いジージャン、ジーパン姿の青年、忠夫は、彼女の視線を背中に受けながら、しかしそれを意に介さずひたすら腕を組んで唸るばかり。

「むうううう・・・嫁に來ないかつつーのは、この場合反則なのか？ いやしかし、これはまたとないチャンスのような気もするつ！ だがしかしそれは侍としてと言うよりも男として情けなくは無いかあ・・・？ むうううつ?!」

頭を抱えた忠夫が、電信柱の上の女性を振り返る。

軽く手を振りながら、微笑み返してくるその笑顔に思わず手を振り返ししながら、しか

し不図何かに気付いたように忠夫の動きが止まった。

「あの、お姉ーさん？」

「何？」

「もしかして、人間じゃなかったりしますか？」

問われた女性は、一瞬きよとんとした表情を作ると、何を今更と言わんばかりに首を縦に振って頭の触覚を指差した。

「ただの人間が、道具の力も借りずに空を飛んだりする訳が無いでしょう？ 魔族ルシ

オラ、よろしくねー」

「・・・まあ、そらそーですが。でも、なんでいきなり願い事を3つ叶えてくれるだなんて美味しいお話を？」

ルシオラは二度目の自己紹介と共に振っていた手の動きを止め、人差し指を顎に当てると小首を傾げて渋い顔を作る。

何かを思い出すようなその表情からは、困惑と少々の疲れが透けて見えた。

「私の創造者、って言うか主の命令なんだけどねー。『人界まで行って、珍しい魂でも集めてきてくれ』だって。いきなりそんな事言われても、とは思ったんだけど、あれでも一応私の親みたいなものだし」

そのまま愚痴愚痴と溜め息混じりに「主」とやらに対する不満を語り出したルシオラ

に言葉を頷きながら聞く忠夫。

時折入る合いの手や簡単な質問。

それに促され、流れるように語られるルシオラの言葉を要約すれば。

「あー、つまり、良く分からんと」

「そーよっ！ 全く、アシユ父さん——つとと、アシユ様つたら、ちゃんと説明もせず放り出すんだから酷いと思わないっ?！」

何時の間にか電信柱の上から降りて忠夫の襟首を掴まんばかりの勢いで迫るルシオラに、忠夫はカクカクと頷く事で返事を返す。

真近で見た魔族の女性の顔は、控えめに言っても大変魅力的であった。

照れたように視線を逸らしながら頬を掻く忠夫の胸倉を掴み上げながらルシオラはひたすら愚痴り続け、漸く落ち着くまでには30分ほども時間が必要だったと言う。

「はあく、すつきりした」

「そりやようござんしたね」

苦笑いを返す忠夫も、だが特に不満げな様子は無い。

ころころと変わる彼女の表情を特等席で見物できた事で、彼もそれなり以上に楽しんだようである。

よし、と気合の声を上げて立つたルシオラに手を引かれて立ち上がりながら、忠夫はその手の暖かさと柔らかさに少し感動を覚えていた。

「たつくさん愚痴を聞いてもらっちゃったから、私も頑張つて願いを叶えてあげるわよっ！」

「・・・何でもっ？」

「何でも・・・とは言つても、願いを増やせとか、あんまり無茶な奴は却下だけどね」

そう言つて、どっからでも来い！ とあんまり豊かではない胸を張る魔族の女性に、

じゃあ、と半分以上冗談交じりで忠夫が言った。

彼にとつては、無茶も良い所の願ひであつた。

何せ、その願ひの期限は——彼にとつては——数十年単位のお願ひとなるのだから。

まあ、駄目元で言つてみるだけ言つてみようか、と、正直な所、そのときの彼はそう思つていたので。

「それじゃあ、嫁に来てくれんかーっ?! とか。だははははっ!!」

「良いわよ」

「だはははは．．．はあっ?!」

あつけらかんと、非常にあつさりと返つた受諾の言葉に固まる忠夫。

ふぎけるなー、とか。

もつと手順を踏んでから、とか。

鼻で笑われる、とか。

彼が予想していたりアクションを全て裏切る、はつきり言つて予想の斜め上をマツハでかつとぶ答えであつた。

受諾の言葉を貰つた筈の忠夫が、思わず驚愕で軽薄な誤魔化し笑いを咽に詰まらせるぐらいには。

「ま、マジですかっ?!」

「ええ。ちゃーんと、結婚とか言う制度も学習してるわよ。私達魔族にはあんまり関係無い話なんだけど、ね」

その言葉の裏には一度部下が嫁に出て行き、その時に要らん苦勞を背負い込んだ土偶の背中が見え隠れ。

一度した苦勞を二度も背負い込みたくないとばかりに、結婚だの家庭生活だのの相談相手に選ばれた——上司は頼りにならなかつた——彼の苦勞が偲ばれる。

「はい、貴方のお名前は？」

「え？ うえつ？ あの、横——犬飼忠夫つすつ?!」

ふふ、と軽く微笑んだルシオラは、忠夫の首に両手を回して——

「犬飼ルシオラ……かあ。ちよつと語呂は悪いけど、ま、良いか」

——そつと、忠夫にキスをした。

ふむ、と言つてゆっくり離れたルシオラは、人差し指を唇に当てて、ほんの少しだけ恥ずかしそうに上目遣いで硬直したままの忠夫を覗き込む。

がちがちに、石化したように動きを止めた忠夫は、十数秒の間を置いて拳を突き上げ

た。

「我が生涯に、いつつつつつぺんの悔い無しいいっ!!」

「きやあつ?!」

驚いて尻餅をついたルシオラの前で、感涙に咽びながら天を仰いで叫ぶ忠夫。

彼にとつては侍の誇りだとか男として反則じやないかとか、そう言うなけなしの理性もぶつ飛ぶ快挙。

だがしかし、先程まであれだけ懊悩していたのにあつさりと天に帰らんばかりに喜び、侍とか男とか言う以前に人としてどーなのか?

尻餅を付いたまま、呆然と忠夫を見上げていたルシオラを勢い良く振り返る忠夫。

視線が合ったルシオラは、思わずビクツと首を竦める。

鼻息も荒く、目も血走った忠夫は、夜道で出会えば悲鳴を上げて逃げ出したくなるような迫力があつた。

「よ、嫁さーんっ!!」

「きや、ちよつと、こらっ!!」

がばあーつ、と抱きついてきた——傍から見れば押し倒した以外の何物でもないが——忠夫に、慌てたルシオラの肘が何度も振り下ろされる。

しかし、興奮状態MAXハイテンションの忠夫は、その程度の攻撃では怯みもしない。

しっかりと抱きつき、彼女の暖かさといひ匂いを堪能し——そして、あれ？ という感じで肘を振り上げているルシオラを見上げた。

「ルシオラって、魔族なんだよな？」

「え？ え、ええ、そうよ」

訝しげに首を捻りながら問う忠夫に、振り上げたままの肘の振り下ろし場所に迷いながらも返事する。

しかし、納得いかないと言う表情の忠夫は、じつとそこを眺めて、そして再びルシオラを見上げた。

「嘘やあつ!!」

「何がっ?!」

「俺の知ってる魔族のねーちゃんは、皆乳でかかったぞっ！ 神族はあんまり無かったけどっ!!」

無言で振り下ろされた肘の速度は音速を超えていたのではなからるか。

どこか遠い所で、角の生えた女性の背中の逆鱗が逆立ったりしたとか、その余波を感じたお猿の武神が慌てて飛び起き、手に入れたばかりのゲームを踏み碎いて泣き濡れたとか、この状況には全く関係が無い事なので置いておくとしよう。

また、何処かのお城で龍族の王女が炎を背負いながら何かを決意したり、それを見て

いた王が怯えて椅子の後ろに隠れたと言うのも置いておく。

「し、死ぬかと思った・・・」

「魔族の一撃を喰らって生きてる方が驚きだけだね・・・」

今更、といえは今更であるが、ともかく思いつきり吹き飛んで電信柱を数本ブチ折り、つき当たりの家の塀を砕いた所で忠夫はボロ雑巾のようになるも5秒で復活。

人狼がどーたらと言うよりも、既に骨の髄まで補正が掛かっているようにしか見えな
い体質である。

瓦礫の山の中から這い出てきた忠夫の視界に写るのは、溜め息を付きながら目の前に
立つルシオラの靴。

見上げた先で、彼女は疲れた表情を隠そうともせず、手を差し出した。

「ほら。それで？ 願いは後二つよ」

「ひ、一つ叶える度に死にそうになるとか無いよな？」

「自業自得でしょ」

すば、と切り捨てた彼女に引き擦り出してもらいつつ、忠夫は感動の面持ちで身体を
振るわせる。

振り落とされた瓦礫の破片に顔を顰めながらも催促する彼女に、忠夫は「ごほん、と空

咳を一つついて、何時に無く真面目な顔で残りの願いを告げた。

「ひひひひひ、膝枕と美味しい手料理が食べたいなあっ!!」

「・・・そんなので良いの?」

呆れた表情を浮かべるルシオラに、しかし忠夫は愕然とした顔で彼女の肩を掴んで前後に揺さぶる事でその思いを伝える。

「そんな事とはなんだあつ?! 漢の夢を、浪漫をつ! 「そんな事」の一言で斬つて捨てるなんて、神が許そうともこの忠夫が許しませんよっ?!」

「わか、分かったからっ!」

血涙さえ流しながら迫る忠夫に気圧されたルシオラが、すんと冷たいアスファルトに正座する。

ぐい、と襟首を掴まれた忠夫の頭がそれに向かって落下し、軽い音を立てて受け止められた。

「ほら、これで良い?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、念願の「嫁さんに膝枕」を達成したと言うのに忠夫の返事は返ってこない。

ルシオラからは「その表情は見えない」が、文句を言う事も無く、さりとして満足げな言葉を発するでもなく。

原因は、と聞かれれば——刺激が強すぎた、としか返せない。

ルシオラの両太股の間に頭を置いた忠夫であるが、その向きが悪かった。

普通の膝枕は太股に対し直角に頭を置くが、彼女の知識が足りなかったせいもあり、また正面から肩を揺さぶっていた、という状況のせいもあり。

要するに、忠夫は太股に対し平行に、しかもうつ伏せで受け止められたのだ。

直撃である。

何を？

色々だ。

「えっと、タダオ？」

問い掛けたルシオラの太股に、生暖かい液体が滑る感触が走る。

粘り気のあるそれを感じたルシオラが慌てて忠夫を引き起こせば、そこにあるのは白目を剥いて鼻血を大量に流れさせている青年の顔。

明らかにヤバ気な状態でありながらも、どこか恍惚とした、しかし満足げな表情が窺える。

驚いてその頭を投げ落としたルシオラの視界で、忠夫の頭が危険な音を立ててアスファルトに衝突した。

そして、いよいよ痙攣を始めた忠夫の口から、なにやら白っぽいものが這いずり出て

くる。

それは見る間に何かをやり遂げた表情の忠夫へと変化し、ルシオラに手を振りながらゆつくりと上へと向かつて昇り始めた。

『短い夢だったけど、俺、幸せでした……。人の夢って書いて儂いつて読んだよね……。』
「こらああつ！　ちゃんと契約を果たして魂置いてから逝きなさいっ！！」

その尻尾？を握り引き止めるルシオラ。

上の方では何やら巨大な鎌を素振りする、ローブを着たドクロ姿の何者かの姿。

それを威嚇しながら口元に白っぽいそれを詰め込むルシオラ。

魂を置いていったら逝くのは難しそうである。

そして、願いを一つ叶える事に死にそうになっていくのは、気のせいではないようだ。

「ふ、ふふふふふ．．．ま、まだまだあああゝ」

「ほ、ほんとうにタフね．．．」

口の中に無理矢理捻じ込まれただけで復活する忠夫を、タフの一言で片付けるのもどうか。

ともあれ、色んな意味で今まででも最もピンチだった忠夫だが、ギリギリの所で踏みとどまった。

それも、最後の願いの為。

美人の嫁さんが作ってくれる美味しい手料理の為．．．っ！

そう勢い込んで立ち上がった忠夫だが、ルシオラは戸惑ったように辺りを見回し溜め息を付く。

「．．．ここじゃ無理ね。何処か料理の作れるところは無いかしら？」

「んじゃ、俺の家で！ ちよつと待っててくれ、直ぐ準備するからっ！」

その言葉にすぐさま駆け出す忠夫。

後ろでルシオラが片手を伸ばして引きとめようとしているにもかかわらず、その姿はあつという間に視界から消えて無くなった。

所在無さげに降ろした手をプラプラとさせながら、ルシオラは薄く笑いを浮かべつつ飛び上がる。

高くなった視界の先に、やけに古い、小さな地震でも崩れそうな建物の一室に駆け込んでいく忠夫の姿が写る。

それを確認し、その扉に向かってゆっくりと移動を開始したルシオラの唇が弧を描いた。

「ふふふ……結婚もしてあげたし、膝枕もしてあげた。後は、料理を作つてあげるだけで魂はこつちの物……。簡単な命令だったわね」

問題はあの異様なまでの耐久性だが、最後の晚餐に満足した所で肉体をチリ一つ残さず消し飛ばせば良いだけの事。

そう考えながら、ルシオラはアパートに向かってゆっくりと飛んで行く。

契約が結ばれた以上、その履行の為に目的の魂の位置は簡単に把握できる。

魔族との契約は、そう甘いものではないという事を――

「――魂の底まで、教えてあげる」

そう呟いたルシオラの目の前で、アパートの窓が吹き飛んだ。

「……はへ？」

「ただいまっ！　そしておめでどう俺っ！」

「・・・脳に蛆でも湧いたかい？」

扉を蹴り開けんばかりの勢いで帰宅した忠夫に向けられたのは、ちゃぶ台の上に皿を並べ、その前で箸を握って非常に不機嫌そうな顔でTVを眺めていたメドーサの声。

その声を背中に受けつつ、忠夫は百合子が買い揃えてくれた調理器具を並べて行く。

一通りチェックした後——百合子らしい完璧な品揃えではあったが——訝しげに眺めてくるメドーサの横を駆け抜け押し入れを漁る。

「・・・何やってんだい」

「嫁さんが出来た飯を作ってくれるうわあ何もねえっ?!」

どうやら空腹のメドーサが貯蔵していた食糧を全部処理してしまったらしい。

慌てた忠夫は何とか食材の確保を、とかななしの現金が入った財布を手に駆け出そうとした。

が、目の前に箸が弾丸のように突き刺さった事で無理矢理停止させられる。

驚いて箸が飛んで来た方向をゆっくりと向けば、そこには何故か怒り心頭といった様子で刺叉を構える犬飼家の長女？の姿。

びしびしと感じる殺気が否応無しに冷や汗を呼び起こし、真つ青な顔の忠夫が何事か

を言う前に。

「説明しな」

薄い壁を抉りながら、忠夫の首を挟むように刺叉の先が突き立てられる。

「いや、嫁さんが出来たんだよっ！　ちと胸はねーけど、結構美人で魔族の――」

「なあにいつ?!」

「いだだだだああつ?!」

思わず前に突っかけたメドーサに押されて刺叉がさらに壁に食い込み、その隙間で挟まれていた忠夫が悲鳴を上げる。

しかしメドーサは止まらない。

それでも少し慌てた様子で刺叉を離し、必死に刺叉を掴んで脱出しようとしている忠夫の頭を両手で掴み、殺気を全開に尋問する。

「こ、この馬鹿っ！　まさか妙な契約でも結んだんじゃないだろうねっ?!」

「うっ！　ばれたっ?!　でも何でっ?!」

「それでもしなきや、あんたみたいな変なのに嫁が来る訳無いだろうがあつ!!」

「そりや幾らなんでも言い過ぎだあんぎやあああつ?!」

怒り任せに繰り出されたメドーサの左フックが忠夫のレバーを抉り、悲鳴を上げながらすっ飛んで行く忠夫。

吹き飛んだ先は、窓だった。

窓枠ごと粉碎しながら水平に飛行させられた忠夫は、そのまま暫く滞空した後、おもむろに落下していった。

「何でじゃあああつ?!」

「うっさいっ! 死ねっ!!」

綺麗に人型の穴を開けた忠夫が、しかしむくりと起き上がり抗議する。

その上から雨霰と降り注ぐ家財道具に調理道具の数々。

ちやぶ台の直撃を受けて仰け反った所にTVが直撃し、さらに追加で包丁やら鍋やらが落ちてきて。

暫しの後、壊れた窓から息を荒げて下を睨むメドーサと、ごちゃごちゃとした色々な物の下に潰れて埋もれる忠夫の姿があった。

「ちっ! 人の獲物に手を出すとは、礼儀を知らない奴だねえっ!!」

「——タダオっ!! なんてまた死にかけてるのよっ!!」

忌々しげに吐き捨てたメドーサの視界に、上から忠夫の埋もれた場所に向かって降り立つ女性が見えた。

眼下で忠夫を引きずり出し、契約履行前に死んでは元も子もないからとは言っても甲斐甲斐しく手当てをするその姿が——非常に癪に障る。

再び刺叉をその手に握ったメドーサは、気合の声を上げながら、忠夫を抱えたその魔族の女性に向かって飛び掛った。

「っ?! いきなり何よっ!」

「貴様あつ! 気安く人の獲物に手を出すんじゃない、よっ!!」

「お、俺を盾にするんじゃないやねえええ」

振り下ろされた刺叉の柄を顔面にめり込ませた忠夫が言った言葉は綺麗に無視され、そのまま横に投げ捨てられる。

ごろんと冷たい地面に転がった忠夫を挟んで睨み合う、メドーサとルシオラ。

「・・・あら、獲物も何も、契約を結んだのは彼の意思よ?」

メドーサの額に青筋が浮かび、ちらりと一瞬だけ忠夫を睨み付けると思いつきり踏んだ。

足の下で忠夫が車に踏みつぶされた蛙のような状態で悲鳴を上げているが、無視。

「仁義を知らないガキが、その程度で——」

と、言つてルシオラと合わさっていた視点を僅かに下にずらす。

そして、暫しそこを見つめた後、おもむろに鼻で笑つて胸を張った。

「なつ、あんまり変わらないくせにつ!」

「私はまだ成長の余地があるからねえ・・・。それに、未来も約束されてるのさ」

そうだろう？ と忠夫を踏みつけた足を少し上げれば、何故かあつさりと平気そうに顔を上げた忠夫が重々しく頷いた。

その頭を、今度はメドーサと同じく額に青筋を浮かべたルシオラが踏みつける。

「それがどうしたって言うのよっ！」

「いやはや・・・契約相手を満足させてあげられないなんて、近頃の魔族の質も落ちたもんだ、と思っただけさ」

「横から相手かつ攫われた間抜けが言う台詞かしらあつ?!」

「・・・」

「ふぬぬぬううっ?!」

額を擦りあいながら睨み合う二人の足元では、二本の足に踏みつけられたままの忠夫がそろそろ痙攣を始めている。

だが、膠着状態は邪魔者の介入によって壊される。

「——あー、少し良いかな？」

「何だっ?!」

「何よっ?!」

聞こえた男性の声に二人が視線だけで殺せそうなほどの目を向ける。

それに少々腰を引かせながら現れたのは、長髪を背中に流した、高級スーツに似合わ

ない拳銃と西洋風の剣を持った一人の男。

オカルトGメンに勤めるエリート、美神令子の兄のような存在である、西条輝彦が、なんと困ったような表情で立っていた。

その背後にはICPOと書かれた盾を構え、隊列の隙間からおそらく銀の銃弾が籠められているであろうライフルを構えた隊員達の姿もある。

「……今度は何をやらかしたんだい？ 横島君」

「……お、俺にも何が何だか」

「ともあれ、全員、これ以上騒がないでくれ。全く、人が寝る間も惜しんで探し回っていた相手が、何でよりにもよって令子ちゃんの所の横島君といるんだか」

疲れたように、いや、本当に疲れているのだろう。

何時も綺麗に糊の効いているスーツには走り回ったせいだろうか、若干皺が目立つようになっているし、その顎にも僅かに無精髭が見て取れる。

何より、その目の下には少しだけ隈が浮かんでいた。

後方で緊張しながら銃を構えていた、魔族とのドンパチの可能性も考えられた為、市内であるにもかかわらず重装備の隊員達に厳重な緘口令を敷いた後、撤収するように伝えた西条は剣と拳銃を収めて代わりに懐から何やら筒のようなものを取り出した。

訝しげに眺める二人の女性の前で、それを天に向けスイッチを押す。

その筒先から放たれた弾丸は高く舞い上がり、上空で緑色に輝いた。

「ま、トラブル体質とは言え横島君が関っている限り、結局なるようになるんだらうけどね」

諦めたような西条の呟きが深夜の闇に消えていく。

その余韻が完全に飲み込まれ、上空で輝いていた緑色の光が消えると同時に、一陣の風が舞い降りた。

「——西条先輩っ!!」

「ああ、魔鈴君。目標発見、どうやらもう十分厄介な事になっているようだけど・・・」
西条の視線の先には、魔女が居た。

三角帽子に足元まで隠す黒いローブ。

履いているブーツに地面を蹴らせながら、箒を担いで駆けて来る魔鈴と呼ばれた女性
は。

「こんばんは、僕横島忠夫でっすっ！ 嫁に來ないかーっ?! って、あれ?」

「きやあっ?!」

「早速浮気っ?! お仕置きお仕置きーっ!!」

「少しはその迂闊さをどうにかしなあっ!!」

「違うんやあーっ！ 体が、体が勝手に動いたんやあーっ!!」

「な、何なんですかこの状況はっ?!」

いきなり自己紹介をしながら飛び掛つてきた青年が目の前でタコ殴りされていくのを見て、思わず西条の背後に隠れていた。

何処か嬉々としながら土偶仕込みの、だがいつかは使いたいと思つていながらも使用する事は無いだろうと残念に思つていた「もしもの時の48の必殺技：こんな事もあるうかとく浮気編く」を叩き込むルシオラと、彼女と一緒に何故か凄まじいコンビネーションで攻め立てるメドーサに揉みくちやにされる忠夫を見ながら、西条は今夜最後の溜め息を付いた。

何度も何度も繰り返したせいで、骨の髄まで求婚が染み付いてしまったらしい忠夫は、素晴らしい速度で子供が見てはいけないものに変わりつつある。

「・・・訂正。彼が絡むと厄介事が加速する傾向にあるようだね?」

「あさつての方角を眺めないで下さいっ!」

「あー、今日も良い月だ」

「西条先輩いいいっ!!」

魔女の悲鳴が木霊する。

確かに、今宵の満月は、眼下の騒ぎも知らぬげに、煌々と鮮やかに輝いていた。

第四拾玖話。

漸く朝日が昇り、道路を走る車の量が増え始めた頃。

ICPO超常犯罪課、通称オカルトGメンの日本支部、その一室にて、それなりに高級そうな、だが如何にも店売りのテーブルの上に置き去りにされていた携帯電話が小さな光を放ちながら、重厚な、しかし軽い電子音のクラシックを流し始めた。

聞こえるか聞こえないかの呻き声が音楽に抗議の声を放ち、音源を探す腕がテーブルの上を這いまわる。

かつん、と硬質な音を立てて指先が携帯電話を跳ね、一瞬動きを止めた腕はそれを包むようにして掴み取った。

「・・・はい、西条で——ああ、君か」

テーブルの隣にあるソファアの上に使い古された毛布を被って、久方振りの睡眠を貪っていた西条が身を起こす。

所々が跳ねた長髪を鬱陶しげに撫で付けながら、携帯を開いて目を擦りながら開き、その向こう側から聞こえてきた声に答えた。

淡々と伝えてくる電話の向こう側に、欠伸交じりの頷きを返しながら窓に向かって歩

く。

軽い音を立てて開かれたブラインドの向こうから差し込んでくる陽射しに目を細め、骨の音を聞きながら背伸びを一つ。

漸くはつきりとしてきた頭で、暫し報告を聞いていく。

「——つまり、目途は立ったと言う事で良いんだね？」

『ええ』

返ってきた言葉にはは疲労が含まれていたが、同時にはつきりとした肯定でもあった。

「それで、引渡しは何時頃？」

『未定よ。今は試験運用を兼ねた訓練中。慣熟は必要だし、万が一にも不良品付で預けるだなんて、プロフェッショナルの誇りが許さない、らしいわ』

女性の声は呆れも多分に含んでいたが、また、何処か楽しそうな色も濃い。

そう、言うなれば——己の作品の仕上がりを見る科学者のような、同時に自慢の息子を語る母のような。

「しかし、訓練なら……。いや、そうだな。すまんね。正直助かる」

『ま、中級魔族の訓練相手を探すのも大変でしょうから、ね。あちらさんも良い訓練相手ができたって喜んでるみたいだし、私たちの分は予定よりも掛かった時間と合わせて帳

消しにしてくださいね?』

小さな笑い声が響く。

苦笑いを零しながら、窓を全開にして自分のデスクに近づくと西条の顔にはしようがないか、と大きく書いてあるようだった。

『そうね……彼らには後で里宛にお礼に骨っこでも送れば、とつても喜ぶと思いますわ』
「アドバイス感謝するよ。では」

パチン、と軽快な音を立てて携帯を閉じた西条は、デスクの上に投げ出されていた煙草とライターを手にして満足げな表情を浮かべた。

自分のデスクに腰掛け、ゆっくりと煙草に火をつけ大きく息を吸い込む。

堪能するように煙を口の中で転がし、吸い込んだ時よりもゆっくりと吐き出していく。

窓から入ってきた排気ガス混じりの朝の空気を擦り抜けながら外に出て行く紫煙を見送った。

「——美味しい」

男にこのような比喻を使うのもあれだが、酷く艶っぽい笑顔を浮かべた彼はフィルターギリギリまで堪能した後、デスクの上の灰皿をライターの尻で引き寄せて煙草の火をもみ消した。

そのまま空いた手でデスクの上の書類を漁り、反対側の手で煙草の箱を一揺すり。

飛び出たフィルターを唾えながら、お目当てのクリップで纏められた書類を紙の山中から引きずり出し、火を点けながら目を通す。

「よくもまあ通つたと言うか、上の焦りも相当来てると言うか」

書類に記された題名は『友好な魔族との共闘による人材不足の解消、及び世論に対する対応方針』。

『友好な魔族』と言う単語自体がそもそも眉唾物である。

例え現状を一気に好転させる方策だとしても、西条でさえ通るとははつきり言つて思つていなかった。

だが、それでも通つたのは、一重に実績を積んだ、有能であると評価されている西条を持つても未だに経済大国日本の除霊に食い込めていない背景がある。

GS協会と民間GSが幅をきかすこの国で、しかし世界的にもトップレベルの経済水準を誇るこの国で、世界的機関であるオカルトGメンの評価が低い。

それが、彼らには我慢がならない事であつたのだ。

勿論、裏では色々あるのだろう。

大きな金と権力があれば、そこには人の欲を吸い寄せる物が潜むのだから。

とは言え、除霊のできる優秀な霊能者はこぞつてGSとして活動したがるし、当然公

務員である為給料の割に命懸けであるＩＣＰＯに勤めようとする者は少ない。

人材の確保が難しい以上、活動範囲と効率を制限されるのもまた事実。

また、日本支部独自の即応可能な「強力な」霊能者の数を確保できない為、大規模な霊障に対しては非力に過ぎる。

それらを一気に解決できるかもしれない方策——とは言え、それでも立ちほだかる不安要素。

それが、魔族。

人よりも強く、そして『悪』とされる存在達。

しかし、コストパフォーマンスから言えばそれは非常に魅力的な策であった。

言い方は悪いが、人が殉職すれば「それなり」の大金が掛かるし世論の批判は避けられない。

だが、魔族が殉職しても、それは人に比べて遥かに小さな負担で済む。

いかに善たる機関であろうとも、それは、事実。

しかし、それはあくまでＩＣＰＯから見た利点。

魔族を雇うという以上、殆どの人間はマイナスの反応を示すのも当然。

それもまた事実であり、それに対する対応策が——。

「確かに有効かもしれないけど．．．絶対彼の趣味だろう、コレ」

一枚書類を捲り、そこに書かれた文字に眉を潜める。

一際巨大なフォントで書かれたそれは、良い大人であると自負する西条からすれば溜め息混じりのものであった。

『正義警察（ジャステイスポリス）・ガルレンジャー』ってのは正直どうかと思うよ、茂流田君」

びつちりと書き込まれた書類の半分ほどが番組だの子供向け玩具の企画である。

提出された書類の半分以上がそれである事に、西条は疲れたような溜め息を漏らした。

「まさか、上はコレが気に入ったんじゃないだろうな・・・」

まさかなあ、と笑いを噛み殺しながら煙草を吹かす西条。

——彼が知る事の無い事實は、きつと予想の斜め上を行っていた。

「つと、そろそろ彼らを如何にかしなきやいけないな……。とりあえず、令子ちゃんに連絡して、仮眠室の魔鈴君を起こして、二人で食事でもとつてから、と」

デスクから腰を下ろし、煙草の火を灰皿に落とし、携帯電話のメモリーを操作しながら西条は歩き出す。

妹分の反応と、妙齡の美女との朝食を楽しみにしつつ、鼻歌交じりに軽快な足取りでドアに向かう西条の背後で、灰皿からは消えそこねた煙草から立ち昇る紫煙が、ゆつくりと消えていった。

魔鈴が手ずから作った朝食を腹に収め、食後のコーヒーまで啜つて一息ついて、そこで留守番電話を聞いたらしい美神がおキヌを連れて駆け込んできた。

「お兄ちゃ——西条さん！ あの馬鹿どこっ?!」

「み、美神さんっ！ せめて櫛くらい通してからっ!」

あちこちに飛び跳ねた美神の髪に後ろから櫛を通すおキヌ。

息を荒げて詰め寄る妹分に人差し指を下に向けて答えてやる。

相変わらず、動揺したり興奮したりすると昔の呼び方に変わるんだな、と何処か微笑ましくも思いつつ、疾風のように駆け抜けていった美神の背中と何度も頭を下げて走っていったおキヌを見送る西条に、魔鈴が呆然とした声音で話し掛けてきた。

「……今のは？」

「ああ、僕の妹みたいなものとその妹分さ。それより、コーヒーのお代わり貰えるかな？」

流石は魔鈴君のコーヒーだ、凄く美味しいよ」

「あら、おだてても何も出ませんよ？」

何事も無かったように振舞う二人。

満更でも無さそうな笑顔を浮かべた魔鈴がコーヒーの入った魔法瓶を持ち上げ傾ければ、湯気を上げながら西条のコップに中身が注がれる。

鼻を擦る香りを楽しみながらお礼を言えば、彼女はとても嬉しそうな笑顔を浮かべてくれた。

なんとも和やかな空気が辺りを満ちし、二人の間にもそれなりに良い雰囲気の流れ始める。

下から轟音と悲鳴、怒声が響き始めたが、ゆっくりと食後の一服を楽しむ二人の落ち着いた空気は小揺るぎもしなかった。

「で、どうしますか？」

「どうもこうも、魔族に限らず契約と言うものは……難しいからねえ」

柔らかな表情だけは互いに変わらぬまま、淡々と言葉を交わす。

傍から見れば、それは若夫婦の朝の会話にも見える穏やかな風景。

だが、二人の会話は中々に張り詰めた物である。

「しかも契約履行済みが2つ。で、未履行が1つと来たもんだ」

「契約の履行が済んでさえしまえば、後は如何とでもなりますからね。それこそ悪魔のように……. のようにでも」

契約の内容を聞いたときにはあの半人狼のアホらしさと契約のとんでもなさにも呆れた物だが、今思い返しても理解不能である。

悪魔との契約、しかも魂まで賭けて叶える願いが嫁に膝枕に料理ときたものである。

まあ、西条も男であるからして全く分からない訳ではなかったが、それなら他に叶える方法が幾らでもありそうなものである。

その証拠に、目の前の女性も同じことを思い出したのか、呆れを通り越して苦笑いさえ浮かべていた。

天井を見上げて両手を広げた西条に、コーヒーのお代わりを勧めながら魔鈴が問う。

「性根は悪い娘じゃ無さそうでしたから、話せば分かってくれるとは思いますが？」

「問題はわかってくれなかった時の事なんだがね。何せ——」

コーヒーの勧めを手を軽く振って遠慮し、懐から煙草を取り出して軽く掲げて是非を問う。

少し眉根を寄せて困ったような表情を作られたので、至極残念に思いながら再び煙草を引つ込めた。

「——食後の一服は中々乙なもんなんだけどねえ。ま、ともかくだ。何せ、あちらさんが暴れ出したら手に負えないよ、多分」

「健康に悪いとあれほと言いましたのに。私と西条先輩、先程の妹さんと横島さん。コレだけ揃っていてもですか？」

「街中で、しかもオカGのオフィスで朝からドンパチやるのは如何なもんかなあ……」
韜晦しつつも相手戦力の未知ゆえに溜め息を付いて思考の海に潜り始めた西条を余所に、コーヒーカップを片付ける魔鈴。

暫し水音が響き、蛇口が閉められる音と共に、魔鈴にとっては初めて聞く、西条にとつては訓練で、そして何時かの大規模霊障を建前にした実戦で聞いた笛の音が響いた。

同時に窓から悪霊、浮遊霊を問わず霊達が雪崩れ込み、オフィスを突き抜けて階下へ向かつて濁流の如く流れ込んで行く。

呆気にとられた魔鈴に向かつて肩を竦めて見せながら、西条は再び溜め息一つ。

「ま、今みたいに大騒ぎになる要素だけは山盛りだからね、彼女達は」

「・・・それなら、別アプローチしかないですね」

額に当てた手の隙間から覗けた魔女の顔は、名案を思いついたとばかりに笑顔で輝いている。

大騒ぎの後、階下から上がってきたボロボロの忠夫と笛を握って膨れ面のおキヌ、そして睨み合う美神とルシオラを連れて車に乗り込む。

流石に人数が多い為、オカルトGメンのマークがかでかに入ったバンでとなったが、車の中はいやにギスギスしているようにも思えた。

助手席から振り向けば、窓の外に顔を背けて必死に弁解する忠夫に全身で不満を表現

しているおキヌと、その後部座席で未だに睨み合いながら口論を交わしている魔族とG Sがいる。

どうも忠夫を助けるつもりで笛を吹いたおキヌの目の前で、その助けられる筈の本人がルシオラを庇つたらしく、それがいたくご不満の様子である。

「だーかーらー、こいつもそんなに悪い奴じゃないって！ 多分！」

「知りませんっ！」

ぷくー、と膨れるおキヌは中々に微笑ましい物がある、と口元を押さえながら笑いを噛み殺す魔鈴。

忠夫の必死さがさらに可笑しさを引き起こしているが、二人は助手席で笑いを堪えている魔女に気を回す余裕が無いようだ。

「うちの従業員の魂を持つていくですってえ？ ふざけないで欲しいわね！ あれは私が雇つてるの！ 私のモンなのっ！」

「あら、契約は契約よ。当事者でもないくせに口出ししないで欲しいわねっ！」

こちらとは言えばとうとう額を擦り付けあつての視殺戦に突入している。

やたらと危険な発言をしているようだが、本人は気付いているのかいないのか。とりあえずおキヌのご機嫌取りに必死な忠夫は気付いていないのが残念である。

運転席の西条が心底苦しそうに肩を震わせながら笑いを堪えているのが視界の隅に

引つかかる。

薄く涙まで浮かべているところを見る限り、演技ではなく本気のようなのである。

「プツ……クツ……こ、こつちで良いのかい？」

「ええ、そこを右に行つて、次の信号を左にお願いします」

不謹慎だなあ、とは思いつつも、頬が緩むのを押さえきれない魔鈴であった。

一つ間違えば本気で魂を持って行かれるかも知れないというのに、後の緊張感の無さはなんだろうか、と思いつつも、魔鈴は何とかなるんじゃないかと思ひ込む事にした。

そうでなければ、何となく損をしたような気になるからだ。

「あ、此処です」

止まった車から一足先に降り、「KEEP OUT」と書かれた黄色いロープを潜つてその建物の前に立つ。

観賞植物の植えられた鉢が幾つも玄関を彩り、「魔法料理魔鈴」と書かれたその建物には瀟洒な外見を裏切るかのように人一人が簡単に潜り抜けられそうなほどの穴が開いていた。

溜め息を一つ付きながら開店が先になった事を憂いつつ、そろそろと降りてきた訪問者達に気持ち切り替え笑顔を向ける。

「いらつしやいませ。魔法料理・魔鈴へようこそ——」

指し示した指の先で、人気の無いレストランの、どう見ても自動ドアではないその扉がゆつくりと開いた。

「へえ、なかなかお洒落なお店じゃない。．．．その穴が無ければ」

「昨日、そちらの方がいきなり壊された物ですから」

全員の視線を集めたルシオラが、ちよつと気圧されたように一步引く。

「ま、まあそう言う事もあつたわね。それより、ここで何をするつもりなのかしら？ 騒ぎになると契約履行が難しくなるって言うから今まで付き合つたけど、此処まで来て何も無かつたら力づくでも——」

慌てて誤魔化すように言葉を並べたルシオラの気配が膨れ上がり、美神と西条に緊張が走る。

忠夫はおキヌを後ろに庇いつつ、宥める為に目の前に回つて両手を突き出して「どうどう」と馬でもないのに言つてみたり。

そんな彼らを目にしつつ、魔鈴は営業スマイルを欠片も崩さぬままに言葉を紡いだ。

「あら、ここは料理を楽しむ所ですよ？ お客様は横島さん、料理人は美神さん達と貴方。雇用者と契約者で決着を付けつつ、上手くいけば契約も履行できる。一石二鳥だと思いませんか？」

「．．．確かに、悪くないわね」

「貴方、何を言い出すのよ?!」

満足げに余裕たつぷりの笑みを見せたルシオラを余所に魔鈴に詰め寄る美神。

おキヌは焦つたように美神と魔鈴、西条、忠夫の間に視線を往復させ、忠夫は驚いたように魔鈴を見つめている。

魔鈴は詰め寄る美神に顔を寄せ、そつとその耳元に囁いた。

「あら、これは合理的に契約履行を不可能にするチャンスなんですすよ?」

「……………成る程、言いたい事は分かるわ、でも——」

訝しげに、本気かと目線で尋ねてくる美神に、魔鈴は笑顔で無言を貫く。

できるでしょう、と言う意味を乗せた笑みだ。

渋々と、それでもしつかりと頷いた美神はルシオラを睨み、忠夫の襟首を引き摺つて開かれたままのドアを潜り、

「ちよつと待ちなあつ!!」

「この声、まさか……メドーサあつ?!」

聞こえてきた声に振り向いた。

声の先を振り上げば、そこには何故か頭に木の枝を括り付けたメドーサが浮かんでいた。空を飛んでいるのでカモフラージュの意味が無いんじゃないのか、と忠夫以外の誰も

が思ったが、本人がとても真面目なようなので突っ込めない。

美神に襟首を掴まれたまま頷いていた忠夫は置いて、すどん、と降り立ったメドーサが挑戦的に魔鈴と美神、ルシオラを睨む。

「その勝負、私も参加させな」

「と言うか僕はこれ以上の厄介事は勘弁だから彼女が家に帰って大人しくしておけば見なかつたし何も聞かなかつた事にするつてのは駄目かなあ横島君？」

「俺に言われてもなー。最近反抗期みたいで言う事聞きやしないんすよ」

頭を抱えて蹲った西条の、息継ぎ無しの非難の籠った声と視線から目を逸らしながら忠夫が言い訳をする。

最近も何も、まだ数日しかたつていない娘が反抗期なのは最初から何ではないだろうか。

ともあれ、これまた魔族——元、であるが——が人界に、しかも半人狼のGSと一緒に生活していると言う厄介事を通り越して頭痛がするような懸案を、しっかりと保護者と一緒に眠気を我慢して言い聞かせた苦労が水の泡となつて蹲る西条であった。

「良いですよ」

「ふん、ほら、行くよ」

「……待ちなさい」

むんず、と忠夫を掴まえていた美神から忠夫を奪ったメドーサが玄関のマットを踏み、しかし後ろに引つ張られて少し仰け反る。

振り向いた先には忠夫の腹に神通棍を突き立てている美神の姿。

「どー言うつもりよ?」

「あんたにや関係無いだろ」

「ぐるじい・・・っ!　ぐび、ぐびがああつ?!　腹に穴がああつ?!」

ぎりぎりとは忠夫の襟首を引くメドーサ。

持って行かれてたまるかとばかりに全体重を神通棍にかける美神

にらみ合いの真下に居る忠夫は呼吸困難と内臓圧迫で顔色を白黒させている。

今にも川を渡つてあつちに逝つてしまふような忠夫を救つたのは、顔を引き攣らせながらも二人の間に割り込んだ一人の少女。

「ま、まあまあ、美神さんもメドーサちゃんも、早く行きましょう?」

「ちゃんつ?!」

言われたメドーサも聞いていた美神も、あまりの不似合いさに硬直する。

いや、外見だけを取れば十分に当てはまる筈なのだが、以前の姿と掛けられた迷惑を鑑みるとかなり違和感を感じる物である。

ともあれ、そんなおキヌの言葉に毒気を抜かれた二人は、何となく虚ろな視線を合わせた後、おもむろに二人で気絶した忠夫を引き摺って店の中へと入っていく。

魔鈴はその後を小走りに追いかけるおキヌと、始まる前から疲れた様子の西条が玄關を潜るのを見届け、最後に腕を組んでこちらを見つめているルシオラに向かって手招きをした。

「・・・何を企んでいるのかしら？」

「企むだなんて人聞きの悪い。料理を作りたいつて仰るから、場所を提供しただけですよ？」

完璧な営業スマイルを浮かべた魔鈴の横を、不審そうな顔のルシオラが歩いてすれ違

う。その背中が店の中に消えたのを確認し、魔鈴はその後ろをゆつくりと追いかけていった。

全員を飲み込んだ扉が、開いた時と同様ゆつくりと閉まり、カウベルが心地良い音を立てる。

その余韻が消えるよりも早く、窓の外から窺えた内部の者達の姿が掻き消えた。

「へえ、こりやまた懐かしい空気だねえ」

「ここは・・・異界・・・?!」

最後に入ってきた店主が指を鳴らせば、響きが消えると同時に店内の装いは一変する。

それどころか、先程まで窓の外に見えていたオカルトGメンのバンも道路も、建物さえも姿を消していた。

幻術でない事は霊能者達の靈感を刺激する、その空気が伝えている。

人の住む地には無い、弱い存在を強い存在が踏みじり、それを当然の事として肯定する雰囲気肌が肌を刺す。

懐かしげに瞳を細めるメドーサの横で、驚愕に満ちた美神の視線が魔鈴に突き刺さった。

しかし、魔女はその問いに微笑を返し、何処か得意そうに一本指を立てるのみ。

「東京は地価が高いですから、こうやって異界空間にチャンネルを作って自宅にしてるんです」

「ち、地価が高いってだけで？ 無茶するわねー」

呆れた声を上げる美神。

確かに、そんな理由だけで、窓の外には鬮髀の様にも見える模様が浮き出た山が見えたり、いかにも毒ですよ、と言わんばかりの泡を吹き上げる沼地があったりする場所に

自宅を建てるものなどは居まい。

「……異界にしては、やけに魔界に近い気がするんだけどねえ」

「ええ、そちらにもチャンネルが繋がっていますから。結構魔法薬のお得意様なんですよねー。まあ、今回はそれが裏目に出ちゃったみたいですけど」

「ちらり、と視線を向ければ何時の間にか忠夫の隣に寄り添うように立つルシオラの姿が見えた。」

いきなりのチャンネル接続に、また知り合いの魔族が訓練でやり過ぎて部下か弟が怪我でもこさえたかと、急に治療薬が必要になったかと慌てて魔法薬を持ってこちらからも開いてみれば、飛び出てきた見知らぬ魔族が無理矢理に人界へのチャンネルを開いて飛び出していった。

まさか魔鈴の自宅にしか繋がっていない上、殆ど知り合いしか知らないようなチャンネルに接続してくる存在が居たとは、ましてやそれが人界へのチャンネルを開くだけの知能と技術、そしてそのチャンネルの存在を知っているとは夢にも思わなかったとは言え、油断と言えば油断ではある、が。

お陰で開店は延びるし睡眠不足になるし、と昨日は散々だった魔鈴である。

「ともあれ、料理試作用の調理場も食材もありますから、問題無し。さあ、お三方」

振り向いた魔鈴が再び指を鳴らせば、答えて白い煙を纏って湧き出る野菜や肉や魚や

なんだかよく分からないけど食べ物かな、と言った数々の食材の山。

「頑張つてくださいね？」

微笑と共に、魔鈴は告げる。

言われた美神とルシオラ、メドーサの間で火花が散る。

怯える忠夫は先程魔鈴が鳴らした指に答えて、食材と同時に出現した首輪と鎖に拘束
済み。

それを見ていた西条がやや腰を引き気味にしているものの、その更に向こうでは何やらおキヌがこっさり握りこぶしを作っていたり。

ともあれ、睨み合っていた三人は、視線を同時に外すともはや互いを見ようともせず
に食材の山に飛び掛っていった。

「さて、解説の魔鈴君。この状況、如何見るんだい？」

「そうですねえ……」

ぱっと見渡しただけでも三種三様の有り様である。

美神はおキヌを引き連れ肉類の下拵え。

メドーサは暫し食材の山を漁った後、満足が行く物が無かつたらしく窓の外に広がる異界へと誰が止める間も無く、また止める気も無い間に飛び出して行った。

ルシオラはと言えば、額のバイザーを降ろして果物やら果物らしき物やら果物に見えない事も無いものやら、果物の恐れがある物、もしかしたら果物かもしれないモノやらを、一つ一つ吟味している最中である。

「ちゅーか解いてください……」

首輪を付けられたままの忠夫の抗議は無視された。

「美神さんとおキヌちゃんのペアは、流石に横島君との付き合いが長いだけの事はありますね。好物に一点集中、最効率で確実な手を打っているようです。それに、あの量を見る限りでは……」

「成る程、確かに肉類の中でも上質のものばかりを、しかも大量に調理する速度は目を見張るものがあるね。料理は——」

「腕の問題よっ!」

「そうかい」

ニヤニヤと台詞を遮られながらも笑う西条に、やや頬を赤らめた美神が吼える。

その後ろで笑いを嘯み殺しているおキヌの態度辺りに答えはありそうではあるが。

ともあれ、あつという間に煮込まれたり焼かれたりと食材を料理していく様は、確かな技術と錬度の裏付けを思わせる。

「先程飛び出していったメドーサ嬢はどうかかな?」

「コメントのし様がありませんね。食材は十分に揃っている筈なんですけど・・・魔界の空気が流れ込んでいるせいでこの辺りの生態も変化していますから、慣れた食材でも探しに行っただんじやないで——」

窓の外から爆音が響いた

断続的に続くメドーサの雄叫びと何かの咆哮。

そして一際巨大な爆裂音。

しかし何かも負けてはいないらしく、再び咆哮が響き渡り、大質量が地響きと共に魔鈴の自宅を揺るがした。

「——ええと、探しているようです。何を持ってくるのか、楽しみではありません」

「俺はそれを食べさせられるんっすけどっ?!」

「男なら黙つて食べたまえ。それでは、最後のルシオラ君だけど……」

「素気無く断言した西条の視線の先で一つの黄色い林檎にそっくりな果実を選び出したルシオラが、今度はそれをまな板の上に置いて別の部屋へと向かつて歩いていった。

必死で暴れ出した忠夫に向かつて放たれた埃が立つ事を嫌った美神の怒声を聞き流しながら、それを見送っていた魔鈴の顔が引き攣った。

間も無くホクホク顔に戻つて来たルシオラの手にあるそれを見た魔鈴が、解説と書かれたプレートごと白いテーブルクロスに掛けられた机を揺らして立ち上がる。

「そ、それはっ！ 開店祝いの一杯に入れようと思つていた秘蔵の南極の氷、一万年物っ?!」

「あら、この食材しか使っちゃ駄目とは聞いてないわ」

「でも、でも……」

じたばたと子供のように両手を振る魔鈴に妖艶な笑みを返しながら、ルシオラは迷わずそれを鍋に突っ込んで火に掛けた。

顔を蒼褪めさせた魔女の悲しげな悲鳴を背に、楽しげにそれが溶ける様を見つめるルシオラである。

「け、結構高かったのいい……」

「まあまあ、後で僕がポケットマネーで出しておくから。ちなみに幾らだい?」

何処からとも無く突き出された電卓の数字は、迂闊にフオーをしたら西条の顔も蒼褪めさせる事となる。

沈黙した——いや、るるる——と涙を流す魔鈴と忠夫がテーブルクロスの上と床に氷と骨付き肉の絵を書く音だけが聞こえる実況席を余所に、魔鈴の自宅には軽快に包丁が踊る音と、くつくつと音を立てて鍋の中身が煮込まれる音、そしてルシオラの鼻歌と外から響く何か重いものを引き摺る音が響く。

窓の外に吊るされた鳥籠で、お腹を空かせた小鳥が「キシヤー」と虚しく一声鳴いた。「経費で落ちるかなあ……」

公務員の声が、寂しく響いた。

第五拾話。

落ちる。

下へ下へ、何処までも、落ちる。

始まりは何処か、終わりは何処か。

右を見ても黒ばかり。

左を見ても闇ばかり。

それでも落ちている事が分かるのは、身体が揺れる感覚と、耳元で唸る何かを通り過ぎていくのが感じられるから。

頭を下に、足を上。

両手を広げてても何も触れず、距離感も無い。

ただ、落ちていく過程だけを伝える感覚が、ある。

「つていうか何でじゃあああつ?!」

忠夫は、現在真つ暗闇の中を自由落下中である。

「落ち着けつ、落ち着け俺っ!! 先ずは何でこんな事になったのかを思い出せええつ?!」
混乱している頭を抱え、たつぷりと十秒近くは呆然としていた忠夫の脳味噌が回転開

始。

記憶を探り、現状把握とそこから発生する現状打破を頼みに必死こいて思考を巡らす忠夫の耳元では轟々と音を立てて通り過ぎていく風がある。

とは言え辺りは真つ暗闇。

何が見通せる訳も無く、人狼ゆえの卓越した三半規管能力が無ければ上下も分からないであろう黒の中。

「落ち着けるかあああああつ!!」

そりゃそうだ。

いきなりのパラシュート無しのフリーフォール中に精神集中して事態の打破を図れる奴が居たら見てみたいものである。

セールあたりなら可能っぽいが。

「待て！ 待て待て待て俺！ 此処で慌てても良い事等無いぞ！ とりあえずでも良いから何か思いつく事はないんかっ?!」

その時、忠夫の脳裏をふつと横切る何かの映像。

それは、小さい頃の忠夫と両親の思い出であったり、初めて人狼の里を出た時に訪れた母方の実家であったり、一人で里を抜け出した際に出会った一匹の子狐との一夜であったり。

更には真夜中に「嫁が欲しい」と咆哮し、里中から返つて来た同意の声に涙した事であつたり、美神やおキヌとの出会い、都会に出てから知り合つた沢山の人や人外との一シーンであつたりと――

「走馬灯じゃねえかあああつ!!」

その通り。正解者には迫り来るピンチの予感をプレゼント。

「いやあああああつ! 明るい家族計画もまだなのに死ぬのはいやああつ?!」

とまあこのように切羽詰っている忠夫であるが、何故このように唐突にピンチに陥っているのか。

順を追つてみよう。

とある異界のとある場所。

魔鈴と言う名の魔女の自宅が、轟音と共に揺れ動いた。

玄関の扉が屋根から埃が落ちてくるほどの衝撃と共に蹴り破られ、その扉が反対側の壁を砕きながら隣の部屋へと飛び込んだためである。

「出来たっ!」

「いきなり破壊活動を行なうなそんな娘に育てた覚えはありませんよっ!!」

「育てられた覚えもないよっ!」

「私の家があああっ?!」

「・・・ま、まあ、修理費ぐらいは経費で落ちるようにしてみよ」

家主の悲鳴と保護者の絶叫が木霊する中、一人顔を引く付かせた西条が諦めと慰めの言葉を吐いた。

舞い散る埃に美神は慌てて料理を庇い、ポットのお湯を急須に注いでいたおキヌがそれの補助に走り回る。

ルシオラは少し眉根を寄せると、南極の水を溶かした鍋を火から降ろし、蓋をして魔鈴の心配するような視線を余所に別の部屋へと抜け出していった。

一瞬で破壊を繰り広げた、紫色の長髪をあちらこちらに泥やら緑色の液体やらでまだらに染めた少女は首輪で繋がれた青年の元へ歩み寄り、周囲の声を完璧に無視して何かをどさつとその前に置いた。

黒焦げの何かの塊、としかいい様の無いそれは、まるで温泉街を歩いたような匂いを発しながらその存在を誇示している。

「……コレはなんだ？」

「料理」

顔を蒼褪めさせた忠夫の目の前で、しれつとその単語を吐いたメドーサが両手を振り上げる。

軽い吐息と共に出現した刺叉をしつかと握り締めたその腕が振り落とされ、寸暇の間も置かずに振るわれ続ける。

一呼吸の間に無数の斬線が炭の塊に刻まれ、ぱちん、と鳴らされたメドーサの指の音に呼応するかのように弾け飛ぶ。

その中心部に、最後に残った僅かな塊。

手のひらに乗るほどの小さなそれは、外を包んでいた炭の中身とは思えないほど、綺

麗なサーモンピンクをしている。

それを満足げに確認したメドーサは、おもむろにそれを掴みあげると、最初の衝撃で床に転がっていた皿を拾ってその上に適当に放り投げ、忠夫の前に差し出した。

確かに、見た目では新鮮な肉に見えるそれは、何故か相変わらず、いや、更に強烈な硫黄臭を放っている。

恐る恐るその皿を突き出す少女を見上げれば、堪えるような、だが堪えきれずに僅かに零れる楽しげな表情であった。

「食え」

やけに嬉しそうに一言だけを放ったメドーサ。

その内から溢れる感情は、確かに誰かにプレゼントをする少女のそれに良く似ていた。

目の前の少女の感情は、忠夫の父性をガンガンに刺激しつづけている。

できる事なら迷わず口にして、美味いと言いながら頭を撫でたり抱きしめたりしてあげたい所である。

が、同時に、忠夫の本能が警鐘を最大音量で流しているのだ。

——曰く、逃げる。アレはヤヴァイものだ。

「……………し、しんぱーん！ 魔鈴さーん！ これは料理っすかあああつ

「?!」

長い、長い長考の後、忠夫が出した答えはとりあえず食べられるかどうかの確認を行なう事であった。

その声に解説席で西条に肩を叩かれ慰められていた魔鈴は、はつとした表情で顔を上げ、その物体を確認する。

「どうやら、何もかもをいったん置いておいて、まずは目先の問題を解決する事にしたようだ。」

しげしげと眺め、顔を顰めながらも匂いを嗅ぐ。

そして、何度か頷くと。

「料理、と言う問いに対してはイエスですね。食材の選定、調達。焼いただけでは飽き足らず、周囲を焦がすまで焼いて、その中心部だけを抜き取る。おそらく、十分な熱は与えられている筈ですから、正にレアといった焼き加減でしょう。これほど上質の素材を使いながら、しかしその殆どを極上のひとかけらの為に切り捨てる。豪快かつ繊細な料理ですね」

そして、胸を張るメドーサに微笑みかける。

「そして火の通り具合を見極め、正確に捌く技量も見事なら、その作り手としての心も見

事。美味しい物を食べさせてあげたいと言う心のたつぷり詰まった、見事な『料理』です」

実に真剣な表情で仰った。

その言葉に勢いを増し、鼻の穴を広げて自慢げにぐいぐいと忠夫の口に肉の塊を押し付けるメドーサ。

目で「ちよつと待つて」と訴えながら、必死で顔を背ける忠夫。

高速で繰り出される刺突まがいのそれが顔を掠めるたびに硫黄臭が鼻を突き、何だか目まで痛くなつてくる気さえする。

それでもその塊との衝突を避けるべく、いい加減苛立ち、忠夫の上に馬乗りになつたメドーサの攻撃を必死でかわしつづける忠夫である。

「・・・まあ、心がけだけは料理なんですけどね。慣れない方が食べるのはお勧めしませんよ？ 元が人界の生き物に似ているからつて、味とか毒の有無までは似るとは限りませんから」

「それを先に言つて「とつたあつ!!」ふっもがっ?!」

魔鈴を向いて抗議の悲鳴を上げた忠夫の視線が逸れたその瞬間、声を出す為に開かれた口の中につつままれる塊。

問答無用で脳髓を突つ走る異臭。

舌を根こそぎ持つて行く刺激。

味？

例えるのも難しいが、あえて言うなれば。

——BC兵器I歩奥。

「美味いか？ 美味いつて言いな！」

「……………」

「魔鈴君、横島君が白目をむいて痙攣し始めてるんだけど」

「あら。ええつと、確か——」

相変わらず体の馬乗りになった娘に頭をがつくんがつくと揺さぶられながら、顔色を赤白黄色とどこぞの野の花見たいに変化させる忠夫の口元に、魔鈴が懐を探つて取り出した薬瓶の中身が注がれた。

「それは？」

「『魔鈴印の万能薬』ですよ？ 大抵の物ならそれなりに——ま、それ専用で作られたのに比べれば効果は薄いんですけど、それなりに効く優れたもの。魔界軍のほうにも納めますから、効果の程は保障しますわ」

薬瓶の表面に貼られたラベルが嫌に毒々しい赤で、しかも赤の上に踊る、その薬の名前と説明であろう文字が『The 破壊ダー』毒もろとも：何にでも効きますが、使

用上の注意をよく読んでも無駄です』なのはどーいうセンスだろうか。

ともかく、痙攣が既にロツキーの腹筋運動ぐらいに派手であった忠夫の動きは止まった。

それだけが事実である。

「・・・判定不可、かな？」

「復活したら聞いてみましようか」

「美味かったって言えー！」

「はっ?! はっ?! はっ?!」

気が付くと、お花畑であつた。

嗅いだ事も無い香りが鼻を突き、遠くを巨大な川が流れ、その上では何者達かが飛び交っている。

『いい加減諦めて成仏しろ……!』

『何の、引き分けている内は絶対に諦めんでござるよ!』

『これまで何回やりあつたか忘れたでござるが、これほどの好敵手、現世にもおらかつたでござるからな……!』

黒い檻褻切れを纏つた骸骨が巨大な鎌を振り回し、鎧を着込んだ二人の片方がそれをいなして開いた懐にもう片方が切り込んでいく。

その斬撃を落下するように下方方向に加速して回避、髑髏の直上を走り抜けた刃は下から弧を描いて振り上げられた鎌に絡んで引つ張られる。

前のめりになつた体を扶けるように、一瞬で翻つた鎌の先端が胴体に着弾。

『この程度では無駄か』

『当然でござる。その反則めいた鎌の動き、伊達に何度も目にしてはおらんでござるか』

『然りっ!』

着弾した筈の鎌の切っ先に合わせるように、横合いから突き出された靈波刀が鎬を削る。

僅かな膠着の直後、3人の足元から聞こえる女性の声に押されるようにして交錯が再開された。

『頑張るでござるよー!』

『負けたらお仕置きよー』

『是非も無し!!』

遠目にも分かるほど、鎧武者達の体から、爆発したように靈気が吹き上がった。

その頭と尻に、耳と尻尾が、狼のものに見えるのは気のせいか。

『そつちの奥方達も気楽に声援をおくらんで欲しいものだ・・・! それだけで手が付けられなくなる!』

『愛妻家でござるからな!』

『愛妻力でござるなあ。思い込みとも言うでござるが』

『あいさい「ちから」って言うのが重要よ。「りよく」でも「ばわー」でも駄目』

「なんのこつちやあつ?!」

妙なこだわりに思わず突っ込んだ忠夫の声が、川縁の砂浜に座り込んで近くに浮いて

いる船の船頭と白髪を伸ばしたお婆さんと4人で茶を楽しんでいた二人が振り向かせた。

上空の方は忙しい為気付いていなさそうである。

きよとん、と忠夫を振り向いた、流れるような黒髪の女性と一房に赤い色の混じった銀髪の女性は驚いたような表情を浮かべ、落ち着いた見た目とは裏腹の速度で駆け寄ってきた。

『あらあら、こんな所に若い人狼が来るだなんて珍しい』

『いや、良く見るでござるよ。まだ魂の緒が切れてないでござる。逆に珍しくないばたーんでござるな』

何となく気圧されて動けない忠夫の周囲を鼻を鳴らして嗅ぎまわりながら、銀髪の女性 は忠夫の頭にくっ付いた白い紐を引っ張った。

『十分に戻れそうでござるな』

『そうねえ。船頭さんも脱衣さんもお茶菓子に夢中みたいだから、送り返しちやいましようか』

「え? え? 何?」

忠夫の疑問には答えずに、銀髪の女性は右手に霊力を籠め始める。

寸暇の間も置かずにそれは細く、だが流れるような霊力を完璧に纏め上げた短い霊波

刀を形成した。

ところが変化はそこで終わらず、靈波刀は長さはそのまま、女性の細い指がす、と開かれる動きに合わせて扇型に広がった。

よくよく見れば、その扇の一枚一枚は靈波で形成された物であり、それを重ね合わせ、尚且つ互いに干渉し合わせず、全く同じ靈力で作られたもの同士でありながら解け合わないという、技術を超えた域にある、正に秘奥であった。

『しーちゃんお見事』

『それほどでも、でござるよ。さて、それでは』

黒髪の女性が声を掛け、銀髪の女性が照れた様子で頭を掻き、忠夫がこそこそと不穏な雰囲気を感じて逃げ出す中で。

一頻り照れて落ち着いた女性は、扇をゆっくり持ち上げると、それを再び閉じた。

綺麗に、全くズレを見せずに重ねられたそれを、今度は縦に開く。

普通の扇ならば無理であるが、この扇は靈力で作られた物。

よって、構造など在于って無いようなものなの。

ともあれ、想像していただきたい。

閉じられた扇を縦に開けば、それは一体何なのか。

答えは――

『——宴会奥技、靈波ハリセン、行くでござるー!』(↑誇らしげ)

「ちよつと待てえええつ?!」

『へいへいピツチャービビってる〜』(↑物凄く楽しげ)

「そつちも待てええつ?!」

特級の技術を、超難易度の靈波制御を使ってやるのが宴会芸でハリセンとは何ともはや。

付け加えるなら、どつから如何見ても現代に生きた存在でもないのに、なんで野球で使われるヤジを知っているのかと、しかもそんなに楽しそうなのかと聞いてみたい忠夫である。

『星にイイイイツ、なるでござるううううつ!!』

「あひよー!!!」

『『どわあつ?!』』

『あら、3人とも轢いたみたいね』

結局今回も引き分けだったそうなの。

「・・・はっ?!　なんか見ちゃいけない物を見たような気が!!」

がぼちよ、と体を起こした忠夫の顔色はすっかり元通りであった。

視界の隅に魔鈴と一緒にあって持ってきた食材を詳しく調査しているメドーサとか、それを横目に見ながら引いている西条とかが引つかかったが、そこはかたなく嫌な予感しかしなかつたのでスルーに全力を尽くした。

「遅かつたわね。折角の料理が冷えちやうかと思つたわよ」

「み、美神さん?」

「ほら、来なさい」

後ろからの声に振り向けば、そこには何処か恥ずかしそうな顔の美神が腰に手を当てて立っている。

首輪の鎖を引っ張る美神に逆らう気力も覚える事無く、擦り擦りと引っ張られて着席

させられたテーブルの上には。

「お、おとおおお．．．！」

桃源郷が広がっていた。

ハンバーグに分厚いステーキ、骨付きスペアリブからごろつと肉の塊が転がるビーフシチュー等々。

添えられた野菜が彩りを増し、しつかりと湯気を立てる白米が、否応無しに涎を零させる完璧なラインナップである。

「いや、彼女らしい徹底したメニューです。如何ですか、解説の魔鈴君」

「そうですね．．．。此処からでも分かるくらい、香りといい見た目といい、レストランぐらいは開けそうな技術を感じさせます。ですが、それだけでは不十分でしょう。あれには欠点があります」

何時の間にか解説席に戻った魔鈴が淡々と述べる。

テーブルの上で手を組み、その上に顎を乗せて真剣に見入るその表情には、隠し切れない疑問が浮かんでいた。

「と、言うとは？」

「見ていれば分かりますよ」

そう彼女が呟くと、背後の解説も何とやら、美神の少し照れくさそうな表情と共に促

された忠夫が「待て」を解禁された犬のように料理の山に取り掛かった。

「ふまい！ ふまいつふよ美神はん！」

「ええいつ！ 黙って食べなさいつ！ こつちに飛ぶでしょうが！」

口の中一杯に食べ物詰めた忠夫が叫び、それを抱えたお盆でガードしながら、それでも何処か嬉しそうに怒鳴る美神。

その向こうでは、おキヌが少しだけ羨ましそうに急須のお茶を湯飲みに注いでいた。

「んぐんぐがつはぐむぐごつくん美味いはぐはお代わりぱりぱりがつてもぐんぐぶはー!!」

「はい、どうぞ」

「ありがとうおキヌちゃん！ むぐむぐがつがつ！」

ぴかぴかと輝く白米のお代わりを受け取った忠夫が、お礼を言いながらさらに食べ物詰めたお盆でいく。

見る見るうちに減っていく料理の群。

幸せそうな忠夫と、それをほんの少し頬を赤く染めながら横目で見る美神。

何処か心配そうにそれを見つめるおキヌ。

そして、それは起こった。

「むぐぐ……むぐぐつ?!」

「横島くん？ どうしたのっ?！」

どうしたもこうしたも無かった。

ひたすらがつついていた忠夫が、とうとう料理を咽に詰まらせたのだ。

どれだけ柔らかく煮てあろうが工夫を凝らして焼いてあろうが、材料は肉である。故に、当然飲み込みにくい。

「……こう言うことか」

「ええ。相手の好きな物を沢山、と言うのはとても有効な手段ですけど、同時にもう一步の踏み込みが足らなかつた、と言うところですね」

そう呟いて、魔鈴がぼちんと指を鳴らす。

答えて忠夫の目の前に、白い煙が立ち昇った。

だが、その中から程よく冷えた水差しが出現するよりも早く――

「横島さん、これっ!」

「……んぐつんぐつんぐつ! ふはああつ!! あー、やばかつた。ありがとう、おキヌちゃん」

美神に背中を叩かれながら悶え苦しんでいた忠夫の目の前に、人肌よりも少し暖かいお茶が入った湯のみが突き出された。

それを受け取って、一気に呷ってのどの奥に詰まった肉の塊ごと飲み下した忠夫が、

はらはらとこちらを見守るおキヌに笑顔を見せた。

ほつと一息を吐いた二人にお礼を言いながら、忠夫は再び料理の山を攻略に取り掛かる。

一度や二度、咽に料理が詰まったくらいで食べたくないと思わせないだけの魅力が、その料理の山にはあるのだ。

「もう……。はい、あんまり慌てないで下さいね？」

「ありがと。いや、なんか何時も事務所で食べる骨付き肉にそっくりな味でさー。落ちて着く上にすんげー美味しいもんだから、つい」

「無駄口する前にとっとと全部食べなさい！ 残したらシバキ倒すからね！」

耳まで赤く染めた美神の怒声を背に、忠夫は再び口の中一杯に料理を詰め込み始める。

だが、今度は咽に詰まるほどの量が溜まるよりも早く、おキヌが淹れてくれたお茶を啜って落ち着いてから取り掛かるのを繰り返している為、忠夫はひたすら料理に舌鼓を打つ事に成功していた。

それを見ていた魔鈴は、苦笑いを浮かべながら指を鳴らす。

何時の間にか忠夫の前に出現していた水差しは、静かに音も立てずに、消えた。

「……成る程、何時も食べている物なら飽きる事は無い、という事ですか。餌付け歴の

長さを活かしてきましたね。それに、おキヌさんも流石です」

「と、言うこと?」

魔鈴は黙って指を美神達のむこうに向ける。

その細い指を辿った最上の視線の先には、二つの急須があった。

「始めにお茶を淹れておいて、咽が詰まったときに一気のみができるように温めに冷ました物を一つ。肉の脂と味を流して、常に新鮮に味を感じられるように少し熱めの物を一つ。これも、心配りの行き届いた素晴らしい料理と言えるんじゃないでしょうか」

「成る程……」

深々と頷く西条の前で、とうとうテーブルの上を空っぽにした忠夫が、大きく膨らんだお腹を満足げに撫でてげっぷを一つ。

「ごっつあんでしたっ! 美味かったあああっ!!」

「当たり前でしょ」

「くすくす……」

どぼどぼと歓喜の涙を流しながら、忠夫は、最高の笑顔を向けてくる二人に心からのお礼を叫んだのだった。

「さて、最後のルシオラさんなんですけど・・・」

「まだ、戻ってきてないようだね」

ほのぼのと会話を続ける事務所の面々を余所に、西条と魔鈴の視線がルシオラの消えた部屋のドアに集中する。

かたや今度は何を持っていかれるのかと不安げに、かたやもしも契約が履行されたらどうやって誤魔化そうかと思案げに、二人の視線はドアの向こうで何かをやっている気配に向けられていた。

ただ、その西条たちから少し離れた場所では、メドーサが程よく火の通った、忠夫を危うく涅槃に連れて行こうとした肉の塊を前に胡座を搔いて手を出そうか出すまいかと悩んでいたりするのだが。

「・・・もし、美味しいと彼が言ったらどうするつもりなんだい？」

「あら、そうなったら——」

魔鈴はすつと指を立てる。

「逃げましょうか？」

「どうやって」

それが難しそうだから悩んでいるんじゃないか、と西条が視線で抗議する。

だが、それを受け止めた魔女は微笑を崩さない。

「ルシオラさん以外の皆をいきなり人界に転移させて、即此処とのチャンネルを遮断。最低でも時間稼ぎになりますし、上手く行けばこちらとの再接触も難しい状態になるでしょう。その後私の伝手で魔界軍辺りに通報するだけですよ」

「……流石だね」

「あら、メドーサさんがこちらに来た時点で、力押しでも良かったような気がしますけど？」

「そりゃまあ、そうだけど。できれば波風立てない解決法の方が良いだろう？」

呆れたように天井を見上げる西条。

その耳に、蝶番が軋む音を届けながら、ルシオラと名乗った魔族の少女が入った部屋の扉が開いた。

「ふふふ・・・完成よ！」

「で、なんだこれは」

「見てわかるでしょ？」

でん、と忠夫の前に置かれたのは、何処から如何見ても怪しい機械であった。

高さ50cmほどのその機械の一番上には、ペットボトルでも入りそうなほどの穴が空いており、それを囲むように計器だのスイッチだの配線だのがぐるぐるととぐるを巻いて備えられている。

恐る恐る手を伸ばした忠夫の目の前で、それは突然計器を赤く光らせて唸り声を上げた。

「見ても分からんわああっ!!」

「あら、それなら実践して見せましょうか」

鼻歌さえも謳いつつ、警戒する事務所の面々に見せつけるようにルシオラは果物を持つてくる。

それを軽く機械の上に空いた穴に放り込み、続けて溶かした南極の水をその上から注ぎ込んだ。

そして幾つかのスイッチを計器を見ながら調節。

程なくして、その機械は奇妙な音を立てると青い光を放った。

うきうきとルシオラが大きめのコップを持ち出し、その機械の一部を軽く叩く。

忠夫達には全く他の部分との区別がつかなかったが、どうやらルシオラにはちゃんと分かっているらしいその部分は衝撃を受けてぱかっと開き、中から少し太めの管をにゅつと吐き出した。

その管をコップの中に入れ、やはりどれがどう言う役割を果たしているのかさっぱり不明なスイッチを弄ると、その管はオレンジ色の少しとろみのある液体を流すと流し、暫しの時間を置いてコップを満たす。

「はいー!」

「これ、何?」

「果物のジュース。私は砂糖水でも良いけど、あなた達はそれじゃ不満なんですよ?」

突き出されたジュースは、確かに果物らしい匂いを放っている。

どちらかと言うとパイナップルやマンゴーのような、南国系の果物のような匂いを放つそれを恐る恐る口に含む忠夫。

以外にも、すつきりとした匂いが鼻を攪り、後味もそんなに悪くない爽やかな甘さが舌の上を通り抜けていく。

「で、どう？ 美味しかったでしょ？」

「……うーん」

だが、忠夫の口から出たのは賞賛の声ではなく唸り声。

腕を組んで機械とコップ、そして期待するような目を向けてくるルシオラに、忠夫はゆっくりと頭を振って見せた。

「なあ、何で機械を使っただ？ 別に手作業でやっても良いんじゃないの？」

「へ？ だって、汚れるじゃない。それに省ける労力は省いて効率的にやらなくちゃ……」

戸惑うルシオラに、忠夫はすまなさそうな視線を向ける。

そして、果物ジュースが満たされたコップを突き出した。

無言のまま、コップを突き出した体勢でこちらを見てくる残念そうな忠夫の視線に納得いかなげに口を尖らしながらも、そのジュースを口に含むルシオラ。

その瞳が、驚愕に見開かれた。

「て、鉄臭い……ほんの僅かだけ……!」

「俺、半分人狼だからさ。どうしても気になるんだわ」

使用した機械の何処かにミスでもあったのか、それともコーティングに漏れがあったのか。

しかし、現実として転がるのは、失敗したという事実のみ。

敗北を悟り落ち込むルシオラの肩を、優しく魔鈴が叩く。

見上げたルシオラの瞳に写ったのは、敗者を貶める視線ではなく、間違いを悟った子供を見守る母の目であった。

「そこまで、ですな」

「……ええ」

「どうでしたか? 美味しい料理の難しき、分かっていただけましたでしょうか?」

周囲を見渡したルシオラの目に、優しい表情の魔鈴と、どこか申し訳なさげな忠夫とおキヌ、そつぽを向いた美神と、それを笑いを噛み殺しながら見つめる西条が写る。

飽きたのだろうか、メドーサは白目を剥いて床に寝ていた。

その傍らに転がる、歯型の付いた肉片。

ルシオラは知らない振りをした。

「私の負けね。僅かな手間を面倒臭がっちゃ、満足させる料理は作れないってこと、よく分かったわ」

「それが分かれば、貴方も成長したって言う事ですよ。・・・契約、『今回は』どうします?。」

「破棄するわ。勿論、こつちから言い出すんだから、タダオの魂も『今回は』諦める」

「って事は、俺、バツ一っ?!」

「いきなり馬鹿な事を言い出すんじゃないっ!」

悲しみの涙に溺れる忠夫に、美神の神通棍が唸りを上げる。

それを見ながら、ルシオラは溜め息を付いて魔鈴に向き直った。

決意を秘めた視線で、微笑を浮かべる魔女を見つめながら、ルシオラはゆっくりと頭を下げる。

「料理の上手な魔女さん? 私に料理を教えてもらえるかしら? 貴方のお店で」

「歓迎しますわ。看板娘としても、頑張ってもらえそうですしね?」

唐突なルシオラの言葉に、迷う素振りの欠片も見せずに頷く魔鈴。

それは、「今は」を強調した魔族の少女の言葉故にか、それとも全ては掌の上にか。ただ単に、尋常でなく神経が太いという話も無いではないが。

笑顔で返事を返す魔法の差し出した手を握り返し、魔族の少女は何故か人界で働く事となった。

何故か、魔法の経営するレストランのコック見習兼ウェイトレスとして。

「……結局、あの女が一番得してるんじゃないかしら？」

「ま、抜け目が無いと言っておこうか」

西条の目の前のテーブルに座った美神が呟く。

それを苦笑いで受け止めた西条は、先ず手始めに、と残った果物と氷水を機械を使わずに調理し始めた魔法と魔族の少女を見つめ、呆れの多分に含まれた笑みを見せた。

部屋の隅で痙攣しながら転がっていたメドーサを見つけた忠夫が慌てて魔鈴を呼び、

呼ばれた魔鈴も再び万能薬を取り出してメドーサに飲ませている。

その向こうでは、完成したジューズを一口飲んで、なにやら納得いかなさげな表情になったルシオラが、懐から取り出した薬瓶の中身を次々に垂らして調べていた。

「メドーサアツ！ 大丈夫か?!」

「う、うゝん。はっ?! 川と花畑と変な4人組がっ?!」

ギリギリだったようだ。

呆然と宙を見上げるメドーサを落ち着かせるように、おキヌが持つてきた茶を渡す。

とりあえず無事だと一息ついた忠夫の顔の横に、ルシオラが突き出したコップがそつと当てられた。

「タダオ、ほら」

「うん? さつきのと同じのじゃねーのか?」

少々落ち着かなさげなルシオラは、今度は完全に手作りだと言つてそれを渡す。

匂いを嗅いで、全く鉄の匂いがせず、新鮮な果物の鮮烈な香りを確かめた忠夫は、一つ満足げに頷くと、それを迷わず呷つて見せた。

「うん、美味——え?」

どくん、と何かの衝撃が突き抜けた。

忠夫の姿が、ブレた。

「な、何だ？」

「——何を入れたのっ?！」

美神がルシオラに掴みかかる。

しかし、ルシオラも戸惑ったように首を振るばかり。

そして、ルシオラが指差す先には、果物の残りど僅かに残った氷水、そして幾つかのラベルの貼られた小さな調味料の瓶がある。

だが、そこに駆けつけた魔鈴が見たのは、見慣れた調味料と、たった一つ。

彼女でさえ聞いた事の無い薬の名前であった。

「——解毒剤！ 中和剤でも何でも良いから、早く！」

「これです！」

美神が突き出した手の上に、慌てて素早く幾つかの薬瓶を戸棚から引つ張り出して渡す魔鈴。

それらの蓋を一気に開けた美神は、迷わず全部、忠夫の口の中に叩き込んだ。

「もがあっ?！」

「あ、しまった！ 万能薬はさつきメドーサさんにつ！ 待って、それは時空消滅内服——」

歪んだ視界の中で、忠夫が最後に聞いたのは、そんなヤヴァげな単語を含んだ魔女の

声だった。
そして、話は冒頭へ――

第五拾壹話。

とある異界のとある一軒家。

魔鈴さんちのお部屋の中で。

見目麗しき美女と美少女が。

白目を剥いた青年を囲んで。

「時空消滅内服薬……って、どーしてそんな危ない物置いてるのよっ?!」

「だっ、だっ折角作ったのに捨てるの、勿体無いじゃないですかっ!!」

「ふえええーん! 横島さはあくーん!!」

現在進行形で大混乱のど真ん中。

問題の大元である薬を飲ませた美神は、非常に焦った顔で真つ黒なローブをきつちり着込んだ魔鈴に詰め寄り、詰め寄られた魔鈴もうろたえにうろたえ言い訳にもならない反論をのたまった。

おキ又は完璧に昏倒しつつ、しかし徐々に血の気を失って逝きつつある忠夫の頭を抱えて抱きしめる。

しかし意識があれば、言い争う二人と比べればささやかながらもそれなりの質感を持った幸せの何かが押し付けられている事に喜べるのだろうか、彼にとっては非常に残念な事に記憶に残らない出来事な訳である。

そんな狂乱を、何となく乗り遅れた風に輪の外から見ると二人。

「え、えつと、私悪くないわよね？　今回は」

「僕に聞かないでくれるかな……。と言うか、これどうやって收拾つければ良いんだらうね……。」

時空消滅内服薬を飲ませる原因となった飲み物を作り出したルシオラが、困った風に頬を掻きながら隣の男性に尋ねた。

西条は、そんなルシオラの言葉に如何答えればいいものか、と頭の隅で考えつつも、むしろ落ちもついてこの話は終わりになったんじゃ、と油断してしまった己を悔いつつ頭を抱えてそっぽを向く。

時空消滅内服薬、と言う言葉面だけでも危ない匂いがプンプンするそれは、魔法薬関係は専門外である西条でも聞いた事がある程、ある意味で有名な薬であった。

曰く——それを飲んだ人物を、「因果ごと」消滅させる薬である、と。

殺人を犯しても、その人物が居たと言う事実さえ残らない為、製造どころか所持すら固く禁じられるほどの「第一種危険指定魔法薬」である。

とは言え現代ではその製造法さえ伝わっておらず、作れるとしたら中世の頃より生き延びているというドクター・カオス位の物である筈だが、イギリスで天才と呼ばれた魔女も伊達ではなかつたらしい。

魔女の使う魔法、薬、道具。

そう言った物が最も発達したのは、やはり中世の頃であろう。

彼女達だけでなく、オカルト関係者にとつても忌まわしい「魔女狩り」が全盛を迎えていたあの時代の技術は、そのあまりにも苛烈な弾圧の為、その殆どが失われて久しい。それを再び僅かに残された文献や情報から次々と復活させてきた才能は、この危険な薬もうつかり復活させてしまったのだらう。

彼女にも使うつもりが無かったのは確かだろうし——おそらく、好奇心でやってみたらできたとかそういう理由に違いない。

「勿体無いかかそういう問題じゃないでしょ?! なんであんたが持つてるのかって聞いてるのっ!!」

「つ、作つたら出来ちゃったんですもの! 「著者：ドクター・カオス」って書いてあつたら、どんな物ができるのかなーって、気になるじゃないですか!」

ピンゴである。

ともあれ、良い感じに話題の中心が逸れていつている事に気付いていない妹分も、作った後で処理しなかつた魔女にも頭を痛めつつ、魔鈴には反省を促す為に三日くらい冷たいご飯でも食べてもらおうと決心した西条である。

抜け目が無いように何処かが思いつき抜けている魔女に貸し一つ、それで今回の事は嚴重な注意で済ませて、代わりに今度デートにでも誘おうか、と溜め息混じりにガドの固い魔女を見ながら、二人の頭に振り下ろす為に軽く拳骨を作る。

ごっちゃんごっちゃん。

あまり軽いとは言えない音を立てて、二人の頭に西条の拳が落ちた。

「痛あつ?!」

「いい加減にしないか! 今はそれよりも先にやる事があるだろう!」

涙目で睨みあげてくる二人に「君たちは何歳だ」と突っ込みたいのを堪えつつ、瞳に涙を湛えたまま硬直しているおキヌに頭を抱えられていた忠夫の脈を取り、白目を剥いている忠夫の口元に掌をあて、呼吸を確認する西条。

脈、弱々しいながらも有り。

呼吸、段々と小さくなっているようであるが、有る。

意識、確認するまでもなく、無し。

「どうやら、完全に魂が抜けているようだね。生命活動は有るけど、魂が抜けたせいで徐々に弱くなっている」

「何でよお兄ちゃん?! 時空消滅内服薬でしょう?! 因果が消えるんだから、肉体が残っている事自体おかしいのよ?!」

そう、因果ごと消滅するのであれば、今美神達の目の前に忠夫の肉体が有る事自体が妙な話なのである。

「肉体」という「忠夫の因果」が残っているのだから。

美神達の知識にある薬の発現状況は、何も残さず消滅する、と言うそれである。

それこそ、肉体や魂だけでなく、彼女達の記憶から「忠夫」が消え去ってしまう効果があるのだ。

しかし、彼女達の記憶からは消えていないし、肉体は確かにそこに在る。

肉体が存在する以上、因果は消滅しない。

つまり、不完全な発現をしたのだ。

「……消滅薬が発現する前に、肉体から魂が抜け出た、と言うことでしょうか」

「……しかし、内服薬なのだから肉体の方に影響が出ない筈が無いだろうか?」

「いえ、そもそも魂にも干渉する薬の筈です。肉体が消滅しても、魂が残れば「因果」から消し去る事は事実上不可能ですから。薬という形を取ってはいますが、アレは実際の

所強力な呪の塊みたいなものですし」

魔法薬とは大なり小なり、魔力や霊力といった物の干渉を受ける。

作り手たる魔女の力と、様々な呪物との錬金術。

その結果として生み出されるのが「魔法薬」。

伊達に魔法を名に冠した薬ではないという事だ。

「多分、魂が体内で発現した呪をそのまま持つてつちやつたんじやないかと」

「・・・飲む前に、妙な飲まされてたしねえ」

美神達の視線がルシオラに集中する。

やや腰の引けたルシオラは、僅かに目を泳がせながら、それでも反論して見せた。

「べ、別に妙ななんて飲ませてないわよ！　ちよつと、手慰みに魔界で作ったサツ〇リ

ンの5倍くらい強力な奴を試してみただけで・・・」

「十分に毒薬よ、それはっ!!」

ちなみにサツカ〇ンとは、スプーン一杯でお風呂の水が濃い砂糖水程の甘さになるという魔法のような物質である。

現在は発ガン性があるとかで、姿を見ることは先ず無いだろうが。

だが、それを飲んだ時点では忠夫の魂は抜け出していなかった。

問題はそれより後、昏倒した忠夫に無理矢理飲ませた魔鈴印の薬と、忠夫の体内に

あつた魔界製の珍品が妙な反応でもしたのだろうか、と辺りを付けたが特に役立つ情報でもない。

それよりも、そのお陰——と言うか原因でもあるのだが——で、忠夫の肉体がそこに在ると言う事実だ。

「つまり、まだ横島君に干渉する事が可能な訳ね？」

「ええ、何処まで有効かは不明ですが・・・」

それならば、とやおら混乱から立ち直つた美神が気合の吐息を吐き出した。

「西条さんは横島君の身体をテーブルの上に乗かして！ 私が干渉できるか試してみろわ！ おキヌちゃんは笛、ネクロマンサーの笛を準備つ！ あれなら霊体に直接干渉できるから！ あんたはとつとと使える薬でも持つてきなさい！」

最後は顎に手を当てて悩む魔鈴に叫び倒しながら、慌てて笛を取り出したおキヌを引き連れ西条が担ぎ上げた忠夫を追つて早足で駆けて行く。

脳裏に何種類かの交信術、召喚術を思い浮かべながらも条件を当て嵌めどんどんとしてえそうなるものを厳選していく美神の目には、何処か怒りが見え隠れ。

「あの、私は？」

「そこであつち逝つちやつてる蛇娘の面倒でも見ときなさい！」

おずおずと問い掛けてきたルシオラに、この騒ぎの中でもただ一人輪の中に入らないまま、三途の川を眺めたと言う珍しい体験の為、呆けたまま虚空を見上げてぶつぶつと何事かを呟いているメドーサの面倒を押し付け、美神は押し殺したように呟いた。

「ふざけないでよね…。こんな事で居なくなったら、何が何でも、絶対ぶん殴りに行ってやるんだから…。！」

「不味いねえ…。」

「まさか、この時点で発現するとは誰も予想できなかったからね」

「起きてしまった事はしょうがないさ。不幸中の幸いだが、簡単なループに固定できたから良かった」

「何が「良い」ものか。連続する落下、停滞するだけで瓦解に至る。あやつがじつとしておるとも思えん」

4つの声が響く。

苦味を多分に含んだ、ややハスキーな女性の声。

苦笑いを堪えた、少し高い青年の声。

どこか軽い、性別の分からない声。

批判を籠めた、低い男性の声。

何処とも知れぬその場所に、誰とも分からぬ、だが何処か似通った4人の声が響いて消える。

「私と彼女は「彼」に干渉してるから、これ以上何かをするの余裕は無いよ」

「僕も、あつちに取り掛かっている真つ最中だからねえ。よって、余ったのは——」

「・・・我、か。厄介な雑事を増やしてくれる。だが、無視も出来ん」

「そうだねえ。万が一、は危険すぎる。全部台無しは御免だからねえ」

その言葉を最後に、何処とも知れぬその場所からは、誰とも分からぬ声が聞こえなく

なつた。

「落ちる落ちる。助けてくれー．．．」

眩いた物の助けは無し。

むしろ、何でも良いから反応が欲しいと切に願う忠夫である。

一体、ひたすら落下すると言う世にも珍しい事態に陥ってからどれほどの時間が経つたのか。

体感では既に数時間が経過しているにもかかわらず、空腹を覚える事は無いし、周囲の暗闇に変化が起きた様子も無い。

最悪いきなり地面と衝突か、と緊張してみた物の、何時まで経つても終点に辿り着く様子も無い。

実時間がどれだけだと言った所で、結局生物とは慣れる物だと言う事なのだろう。

既に緊張も恐怖も薄れ、その反動か、ただ無為に落ち続けるだけの彼であった、が。

「・・・はっ?! イカン、イカンぞおおっ!! 俺はこんな所に何時までも居るなんて嫌なんじゃああっ!!」

そして、忠夫は考える。

取り得る手段は無い物か。

「如意棒・・・は伸ばしても伸ばしても何にも当たらんかったしなー。右も左も何処まで続いとんのか分からんし、匂いも妙な気配もしなかった、と」

「ごそこそと懐を探り、何か無いかと探してみる。」

小さな手応えが、ズボンの右のポケットに在った。

「・・・骨っこやん」

小さく細い、おやつ代わりのその骨を模したお菓子を啜えてみる。

少々干からびてはいる物の、中々乙な味である。

「つて違う！ 何の役にもたつとらん！」

ぶは、と叫んだ忠夫の口元から、半分ほどになった骨つこが飛んで上に消えていった。忠夫よりも小さいそれは、勿体無いと思わず伸ばした手を擦り抜けてあつという間に視界から消えていった。

落胆する忠夫の手が、思案の形を取る。

胡座を掻き、人差し指を伸ばした両手を頭の上でくるくると回す、所謂一休さんの構えである。

どこからとも無く木魚の音が聞こえ始め、最後に小さな金属音がした——ような気がした。

「・・・やっぱ勿体ねえっ!!」

突如叫んで両手を蠅の如く動かし始める忠夫であった。

どのような状況下であろうとも、狼の習性だろうか、逃げた獲物を思わず追いかけてしまうのは仕方が無い——とは言えない。

むしろ他にやる事が無いから、と言うのがその理由だろう。

無為な時間は、何も出来ない退屈は、それだけでも心を壊す事ができるのだから。

「くっ……追いつけねえかっ！」

必死に手足をばたつかせた忠夫であったが、真つ直ぐ上に昇つて行つた筈の骨つこの欠片も見えてこない事に焦りを感じているようだ。

飛べない狼は——いや、狼は飛べないだろうと言う突つ込みは無粋であろうか。

「ならば、羽みたいな物で……！」

そう呟いて、靈波刀を顕現させる。

蒼白く輝くその刀身も、何処までも続く黒を掻き消すにはか細すぎた。

だが、今回は灯りを求めたのではない。

彼が求めたのは、ついさつき、あの不思議な川のそばで見たあ高度な技術。

「やってやるぜえっ！ 必殺、靈波刀変化！」

むやみやたらに気合の入った声は、忠夫の靈波刀に奇妙な変化をもたらした。

真つ直ぐな、やや太目の刀身を取っていた忠夫の靈波刀が徐々に厚みを増しながら、亀のような速度でゆっくりと細長い長方形に変化していく。

そして、血走つた瞳の先で、それは変形を完了させた。

「……靈波ハーリーセーナー」

微妙に囁れ声で、間延びのした声が響く。

ぱばらぱらぱらー。

何処からとも無く気合の抜けるようなラツパの音が響いた・・・ような気がした。

靈波刀が展開し、何枚にも重ねられた板状のそれが出現する。

互いに干渉しない靈波刀の多重展開、それはとんでもなく高等技術のはずなのだが・・・何処までも小器用な男である。

「そしてええっ！ 靈波・・・ええつと・・・扇！」

一端閉じられたそのハリセンが、今度は左右に開かれた。

微妙に重なり合ったその形状は、確かに扇のようにも見える。

「そしてえええええ!! 人狼・サアアイキック・フライングウウ!!」

何だか背後に二本の斧を構えたロボットが見えたような気がした。

ともあれ、やたらと気合の入った声を上げた忠夫が何をやったのかと言えば。

火事場のクソ力じみた集中力で発現させたそれを下に向け、一生懸命ばっさばっさと動かし始めただけだった。

飛び散る汗、盛り上がる力瘤、浮き出る血管。

まるで扇と言うより団扇のような使い方であるが、何とも暑苦しい上に、本人は本気でやっているから始末に終えない。

折角の高等技術の取得も、なんでこんな事に使われなきやならんのか、と先程使用していた女性が見たら落ち込みそうな無駄使いつぶりである。

「おお、以外にやれるじゃねーか、俺！」

だが、半人狼の膂力故にか、それともなんだか良く分からないこの空間の摂理か、あるいは忠夫の一念が通じたのか、彼の体を感じる速度がはつきりと緩やかになつていったのだ！

不条理な事に。

「おりやおりやおりやー！・・・見えたあつ！！」

そして、彼の目は、靈波扇の僅かな光源の元でもしつかりとその物体を発見していた。落下を続ける「骨っこ」を。

ここぞとばかりに全力を籠めて、更に仰ぐスピードを加速させる。

見る見るうちに獲物との距離は縮まり、そして、それが射程距離に入った瞬間。

「トオオオオオオツッ！」

なんと、忠夫は切り離れた靈波扇を足場に飛び上がったのだ。

制御を離れた一瞬の間に扇は消えるが、その一瞬で最後の加速に事足りる。

と言うか、例え一瞬であろうとも、今まで手から切り離して使用する事が出来なかつたのに、目の前のソレの為ならあつかりとそれまでの常識を覆して・・・理由がとつてもアホである為、凄いと素直に言えないのはしょうがない。

「頂きますー！」

忠夫の跳躍は砲弾の如くその身を加速し、目標に向かって一直線。獲物を捕らえ、一口にしてしまおうと口を開け――

その速度がゼロになる。

「んがあっ?!」

視界が、閃光で埋め尽くされた。

その瞬間。

「――馬鹿な！ 停滞だと！ だからこやつは……！」

何処かで誰かが、半人狼の食欲に負けていたり。

「……あれ、骨つこ？」

気が付けば、そこは暗闇の中では無い場所だった。

頭上からは太陽の光がゆつくりと差込み、初夏の湿り気を含んだ生温い風が頬を撫でる。

風に揺られてさざめく木の葉は、新緑の芽を既に濃い緑に変え、太陽の光を受けながらさわさわと木洩れ日を落としている。

「どーしたでござるか、兄上」

背後から掛けられた声に振り向いた。

十数年近くも傍に在ったその声は、だが、忠夫に確かな違和感を訴える。

不思議そうな表情で忠夫の顔を覗きこんでくるその子供は、短い銀髪の中に一房だけ

の赤を鮮やかに映えさせている。

「し、シロか……?」

「そーでござるよー」

きよとん、と。

何を当たり前の事を、と見返してくる、その少女だか少年だか良く分からない子供の名は、シロ。

昔忠夫が着ていたような、動きやすい着流しにも似た和装を着込んだその少女は――

「そろそろご飯の時間でござるよー。先に行つてるでござる」

明らかに、昔のシロだった。

「……え? え? 何がどーなつてんだっ?!」

そこで、自分の声に違和感を覚えた。

何時も耳に響く声よりも、高い。

そして、視点がいつもよりも地面に近い。

慌てて忠夫が自分の手を見れば、そこにあるのは小さな手。

頭を押さえれば剥き出しにされた耳の感触があり、お尻を見れば着物に開けられた穴から飛び出す尻尾がある。

「え？ 俺、ガキンちよ？」

人間の子供で言えば小学校低学年くらいのもだろう。

訳が分からない、忠夫の頭はそれで占められている。

辺りの光景をよく見れば、そこは遊び場になっていた里に程近い野山であった。

「あーにーうーえー！ 拙者より足が遅いんでござるから、早くしないとご飯が冷たく

なって、おば、あぶあぶ！ 沙耶殿に怒られるでござるよー！」

「ま、待ててー！」

叫ぶだけ叫んであつという間に視界から消え去った少女は、そのまま振り返りもせず
に里に向かって駆けて行つたようだ。

釣られるように駆け出した忠夫は、己の足の短さと、おもわぬ進みの遅さに愕然とす
る。

(そう言えば、昔のシロには結構舐められてたっけなー)

半人狼の出自のせいか、この頃の忠夫は2歳も年下のシロよりも、明らかに身体能力
では劣っていた。

それこそ、普通の少年並みのソレしか持たなかつたのだ。

そして、大人たちはそれを「まあそう言う事もあるだろう」と気楽に済ましていた物
の、数少ない、それこそ忠夫よりも年上の「子供」が居ないこの環境下では、力という

序列をその根に持った人狼の中では弱い者にカテゴリーされてしまっていた。故に。

最も歳の近い子供であるシロは、この時代、忠夫を物足りなさそうに見ていたものだ。「つて物思いに耽ってる場合じゃねえ！」

さつき、シロはなんと言った？

そうだ、この頃は。

——まだ、この頃は。

——そう、あの人が。

「……っ！」

記憶の彼方の、あの人が。

身体を突き動かす衝動に全てを任せ、ただ、地面を蹴った。

遅々として進まない光景が、今は、ただ、もどかしかった。

あまりにも短い手足が、細く頼りない手足が、不安だった。

それでも、もう一度、会えるのなら。

だから、走った。

木々を掻き分け、下草に足を取られ、小川のせせらぎを蹴立てながら、記憶の中のものよりも小さな里に駆け込む。

息を乱し、汗だくで、必死の形相で里を駆けて行く少年を、すれ違う者達が驚いたように見送っている。

少々風変わりな夫婦の、少し頼りなさげな一粒種は、何時ものような人を惹き付ける笑顔でなく、何処か泣きそうな顔で走っていく。

——目指す先は、彼の家。

玄関を音を響かせながら引き開け、飛び込んだ先に、二人が居た。

「おかえり。……つて、もう！ またこんなに汚して！」

「ふやんとふえをあふあつふあふえごふあるか？ ふおがつ?!」

「あなた！ つまみ食いしちや駄目つて何時も言つてるでしょう！ 子供に変な所見せる父親がありますか！ ……どうしたの？」

ご飯を米びつに移していた女性が、どろどろの格好で飛び込んできた忠夫に目を見開かせ、その背後でほかほかと湯気を上げていた煮物に手を伸ばしていた男性が、背後も見ずに振られた鍋の蓋に張り倒された。

腰に両手を当てるで倒れて悶える夫を叱っていた彼女は、きよとんと見上げる忠夫の前でゆっくりと着物の裾を折りながら視線を合わせ、その鼻の頭に付いた泥を、家事仕事で少し荒れた指先でそつと拭う。

未だ悶えるポチを見ながら、台所のある土間を覗き込んだ犬塚がお腹を抱えて大笑いしており、その足元では板張りの廊下に腰掛けたシロが、人狼の里でも2、3を争う剣士を鍋の蓋で張り倒した女性を尊敬の目で見つめている。

「母……うえ？」

「ええ、貴方のお母さんよ」

柔らかな笑みを湛えた沙耶は、忠夫の記憶と寸分変わらない、少しだけウエーブの掛かった長い黒髪を背中に流しながら、ゆっくりと忠夫の頭を撫でた。

「……固定、完了。だが、どうする……？」

魔鈴のお家は、ビリビリと振動中。

原因はと言えば。

「おき、おキヌちゃん、落ち着いてー!」

ひたすら響きつづけるネクロマンサーの笛の音だ。

何時ぞやの冬山合宿の事を覚えているだろうか。

あの時は、おキヌが吹いた笛の音があたりの山々に木霊し、共鳴すると言う現象が起きた為——大惨事だった。

「……………」

「……………」

「お兄ちゃんー! 魔鈴ー! 魂が出てるー!」

あの惨事をぎりぎりで思い出し、すかさず防御体勢を取った美神はともかく。

至近距離で、しかも狭い部屋の中、異界という特殊な状況下で作られた魔鈴の家は一種の結界になっており、その中でおキヌの笛の音を存分に反響させ。

「すうううう……………」

『ピュリリリリリリイイッ!』

「待つて! もう良いから! おキヌちゃんまた聞こえてないでしょおおおお?!」

「あうあうあうあうあうあう．．．」

「あは、あははははは。また川が見えるよ．．．」

「あんたらもかあああつ?!」

更に、忠夫の為、と何時も以上に全力を超えて吹かれたおキヌの笛の音の威力は凄まじい物であった。

メドーサを覚醒させる為に背中を向けており、完全に不意を突かれたルシオラの苦悶の声と、未だ混乱から立ち直っていなかったメドーサの二度目の旅立ちを横目で見ながら、美神はちよつと泣きそうだった。

おキヌの笛の音は彼女の顔が酸欠で紫色になるまで鳴り止まなかつたそうなの。

「けほつ、けほつ! ま、まだやれます! すうううう．．．」

本人に悪気が無いうえに健気なだけに困りもんである。

「おき、おき、おキヌちや——」

『ピュリリリリリリリリリリイイイイツ!!』

「うああああ．．．」

頼みの綱がこんな状況で、果たして忠夫は戻ってこれるのだからか。

第五拾貳話。

「まったく……。寝るから、残り録画しておけ」ってTV番組じゃないのになあ……。ぶつぶつと愚痴りながら、高い天井の下をビデオテープを幾つも重ねて積み上げた台車を転がし、土具羅がとぼとぼ歩いていく。

その全てに「初めてのおつかい：ルシオラ編」と書いてあり、しかも全て爪が折られている。

その量と、彼女が人界へと命令を受けて出発してからの時間も逆算して換算すると、3倍ではなく標準で録画してあるようだ。

ルシオラが開発したDVDもどきもあるのだが、ちよつとアナクロな外見の土偶はアナクロが趣味なのだろうか。

いや、3倍ではなく標準で録画した事で、少なくともアシユタロスは「分かっているじゃないか」と満足げに頷くだろう事は間違い無い。

きつと、その辺りの主を満足させたいと言う思考の結論だ。

「大体、いくら最近目立った争いが無いからって寝すぎじゃないのか？ アシユ様は緊張感が足りない、絶対に」

ここ最近、娘達関係の事以外で彼がやった事と言えば、二度寝、少し早い昼寝、シエスタ、就寝、それから娘達との3食ぐらいである。

流石に寝ている主の姿を見るほど無作法ではないつもりだが、少しは魔神らしい事の一つもやって欲しいな、と切実に思う中間管理職。

と、肩を落として台車の車輪を軋ませながら歩いていた土具羅の足が、止まった。

「——アシユ様が、娘の動きをライブで見ない？」

「ドグラ様——」

そんな馬鹿な、在り得ない——と結論付ける直前で、ややハスキーな声が立ち止まった土具羅の後頭部に突き刺さる声。

己を呼ぶ声に思考を一時中断し振り向けば、頭に蜂の触覚を生やした女性が慌てた様子で飛来するのが視界に写りこんだ。

土具羅の傍を勢い余って飛びぬけた彼女は、着地と同時に固い筈の廊下を削ってド派手に制動を効かしながら、止まった瞬間獲物を狙う豹の如く飛び掛ってきた。

「アシユ様は?!」

「寝ていらつしやる。何時ものようにな」

「またあつ?!」

非常に残念そうに肩を落とした、ファザコン気味の次女は頭の触覚もしよげさせつ

つ、諦めたように溜め息一つ。

自分の掘り起こした廊下の欠片をつまらなそうに蹴りつつ、不満げな表情を浮かべる。

「姉さんばかりずるいよ。私だってアシユ様の役に立ちたいのに・・・」

「そう急くな。年功序列のつもりじゃないのか、アシユ様は」

「でもさ、私だって——ああ、もうっ！」

頭をがりがりと搔いたその女性は、少し寂しそうに悪態を突きつつ飛び上がる。

どうせ部屋に戻って不貞寝でもするんだろう、と辺りを付けた土具羅も、再び台車に手を掛けきゅらきゅらと音を上げさせながら歩き出す。

と、飛び上がった女性が、上空から眉根を潜めて声をかけた。

「ドグラ様あー？ 埴輪兵が地下室になんか運び込んでたけど、知ってる？」

「ウム？ 埴輪兵に特に指示は出してはいないが・・・また、アシユ様がなんかやらせてるんだろう。放っておけ」

「ま、良いけど」

主が黙ってコソコソ何かをやって、部下を驚かせようとするのは今に始まった事ではないのだ。

現に目の前に一人いる三姉妹達が産まれた時は、本当に無い筈の顎が落ちるかと思っ

たし。

興味を失ったようにあつさりと身を翻し、さつき程ではない速度で飛び去っていった次女を見送りつつ、土具羅はふかあゝい溜め息一つ。

「・・・どうせ苦勞するのは私なんでしょ、アシユ様」

完全に諦めた思考とこれから起き得る事態への対策の演算に、先ほどの疑念は保存データの隅へと追いやられた。

——後に、それが全ての鍵となる。

少年の姿になつた忠夫は、とは言え自分にできる事は無いとすぱつと割り切り、すっかり気楽な子供生活を送つていた。

「ふあああああゝ」

「兄上ー、父上達が修行しろつて探してるでござるよー」

「んなもん。パスだ。パス」

大きな欠伸を一つうち、燦々と差し込む光を適度に遮つてくれる木陰で丸くなる。

なんとも心地良い風が隠されていない耳を擦り、とつても眠気を誘ってくれるので抵抗の意思の欠片も見せずに従った。

「・・・情けない。それでも人狼の侍でござるか?! 昨日までは少なくとも修行に精を出していたではござらんか!」

「俺はそーゆーのには向いてねーの。ふあゝ、あ」

「・・・っ!!」

欠伸の音に混じって、軽い音が駆け足で去っていく。

薄目を片方だけ空けて見てみれば、憤懣やるかたない様子のシロが、尻尾と耳を逆立てながら里の方へと走っていく後姿が小さく見える。

その反応に疲れたような溜め息を一つ突いて、また目を瞑った。

——瞬間、本能が悲鳴を上げた。

「どわあっ?!」

「・・・ふむ、避けたでござるか」

本能の警告に従って転がった忠夫の背中を掠め、気配の欠片も感じさせず出現した人狼の木刀が地面を抉る。

もし避けていなかったら、今の小柄な忠夫の薄い腹には綺麗な形に木刀のアザが出来ていたであろう。

ごころごとと転がった忠夫が立ち上がり、頭に巻いた鉢巻に小枝を突き刺した父親に怒鳴る。

「当たり前だクソ親父！」

頭頂部に衝撃が入り顎から突き抜け、目の裏に火花が散った。

犬飼ポチの振り下ろした木刀は、反応すら許さずに忠夫の頭をブツ叩いていた。

「呼び方は父上と教えたでござろうがー！」

「……………」

「む、気絶したでござるか」

普通、子供が叩かれればそうなる。

と言うか、気絶するほどの力で叩いたあたり大人げなさすぎではなからうか。

「………… 不味いでござるな。沙耶に見つかると怒られるでござる」

非常に困った様子でぶくりと膨らんだ忠夫のたんこぶに手拭をあてながら、周囲をきよろきよろと見回すポチ。

実の親子だと言っても誰も信じてくれないであろう光景である。

そして、辺りに誰もいないことを確認したポチは、ほっと一息つく顎に手を当て、思案しながら木洩れ日を零す緑の葉っぱの天井を見上げた。

暫しの後、ぽんと掌に拳を落として結論が。

「——置いてくるか」

「何処にでしようか？」

「それは勿論川岸にでござるよ」

「何で、ですか？」

「川に落ちて頭をぶつけたと言う事にすれば、誤魔化せそうではござらんか？」

うむうむ、と満足げに頷いて、氣絶したままの忠夫を担ぎ上げるポチ。

すたすたと2、3歩進んで、辺りの空間ごと凝結したように硬直した。

「遺言がありますか？」

「・・・誰も居なかった筈でござるが」

「あら、貴方が教えてくれたんですよ？ 氣配の消し方」

油の切れたロボットのようになり、ぎこちなく振り向いたポチの額には滝のような冷や汗が。

振り向いた先に居た笑顔の沙耶の瞳は全く笑っておらず、何故か先ほどのポチと同じように額に巻いた布には木の枝が二本刺さっている。

「な、納得行かんでござる！ なんてちよつと教えただけで人狼を誤魔化せる氣殺が出るんでござるか?！」

「貴方の事なら何でも分かりますから。氣配の探り方とか」

「非常に嬉しいが全く嬉しくないでござるうううっ!!」

ポチは、沙耶の頭の布に刺された二本の木の枝がまるで鬼の角のように見えた、と数年後に長老に語っていたらしい。

「う、あ・・・いつでえええっ?!」

「あ、こら。急に起きちや駄目でしよう」

ゆつくりと浮き上がった意識が、頭部に走った激痛で一気に覚醒域まですつとんだ。

跳ね起きた忠夫の身体は、しかし、柔らかい手に肩を押さえられてゆつくりと後ろに傾いていく。

ぼすん、と軽い音を立ててひっくり返った視界を、優しく微笑む母の顔が埋めた。

「あれ、母上?」

「……せ、拙者にはクソ親父とか抜かした癖に、何で沙耶は母上でござるかああ——くわあつ?!」

視界の隅を木刀らしき影が掠め、おそらくそれが飛んでいったであろう方向から奇妙な悲鳴と肉に鈍器がめり込んだような音が聞こえた。

おそるおそるそちらを向けば、何故かポロポロの父親が涙を流しながら、頭に木刀を乗つけて悶えている。

「お父さんはすっかり怒っておいたから、もう大丈夫よ」

にっこり、と笑うその背後に、阿修羅のような幻影が太字の「ゴゴゴゴ……」と共に浮かぶ映像が見えた。

「わ、分かった。分かったから、母上落ち着いてお願い!」

「あら、私は落ち着いてるわよ?」

「嘘でござい——げふんつ?!」

忠夫の肩を押さえていた右手が、一瞬霞んだ。

もはや動く音さえ聞こえなくなつたそちらから必死で目を逸らしつつ、そう言えば結構バイオレンスな人だつたなあ、と遠い眼になる忠夫である。

「・・・悩み事？」

「え、あ、うん・・・」

「そう」

続く言葉は、無かった。

沈黙が、辺りを満たす。

それでも、その雰囲気は、決して不安を呼び起こすような物ではなく。

どこか、心の底まで、暖かくなるような、そんな空間。

ざあ、と強い風が吹いた。

緑色の天井が揺れ、木洩れ日がその表情を変える。

風に靡く髪を押さえる母は、それでも柔らかな表情を変えなかった。

だから、忠夫は――。

「・・・しつ、しからば御免っ！」

「あ、こらっ！」

泣きそうな顔を伏せて隠し、出来る限り足を動かし、逃げるように森の中へと駆け出した。

だって、彼の微かな記憶が、間違っているのならばと何度も繰り返し夢にまで見た記憶が知っている。

彼の母は——もう直ぐ居なくなるのだと言う事を。
結局、忠夫は夜になっても戻らなかつた。

夜空には、季節外れの朧月。

霧のような雲に覆われた満月は、揺らめくような光を下界に降り注がせている。

「——ほっ」

「……身体に障るでござるよ」

「あら、まだ起きてらっしゃったんですか？」

「まあ、な」

縁側に腰掛け、その月を見上げていた沙耶の肩に、薄い毛布が掛けられた。

初夏が近いとはいえ、まだ辺りを野山に囲まれたこの土地の夜は冷える。

ゆつくりと妻の傍らに腰を落とした人狼は、毛布を持つていた手とは反対側の手に抱えていた徳利と2枚の盃を置き、盃の一枚を手渡す。

苦笑いと共に受け取った彼女の器に、不慣れな手付きで透明なそれを満たした。

軽くそれを叩いた沙耶は、お返しとばかりに徳利をそつと奪い、小さく笑うポチの盃に手慣れた様子で注ぎ込む。

「……ふう。あの馬鹿息子、何処をうろうろしているんでござろうなあ」

「年頃なんですよ。それに、何か……変わったみたい」

ポチは昼間の出来事を思い返す。

力、速度、ともに犬塚の娘にさえ敵わないとは言え、それでも真面目にポチとの修行を——親子のコミュニケーション、と彼は考える——やっていたのに、今日はサボって昼寝などしていた。

思わず寂しくなつて叩いてみれば、完全に寝に入ろうとしていた筈の息子は、振りか

ぶつた所でそれに気付いて、尚且つ一度だけとは言え彼の攻撃を避けて見せた。気が緩んでいたように見えたのにもかかわらず、だ。

「・・・あれはあれで、自分のやり方を見つけたのかもしれない」

「ふふ、分かっているなら良いんです」

「・・・敵わんでござるなあ」

何もかもお見通し、と微笑む彼女の笑顔に当てられたように、ポチは己の額を片手で覆って顔を隠した。

それでも、隠していない口元には、確かに笑みが刻まれてはいたが。

「——私は」

「うん？」

「私は、きつと、あの子を悲しませます」

目を伏せた彼女の手元には、朧な月を移しこんだ盃がある。

その月が、真上から落ちた涙滴を受け、真ん中から歪んで、揺らいだ。

「あの子も、気付いていると、思います」

もう一度、月が揺れた。

ポチは、何も言わずに空を見上げています。

俯いた沙耶にポチの表情は見えず、見上げたポチに沙耶の顔は見えない。

「自分の体なんです。分かります。後、一週間も無いんです。私は——」
盃が、落ちた。

支えていた手は、今は月を揺らしていた雫を押さえるように、沙耶の顔に押し付けられていた。

「わ、私は、満足なんです。とつても、幸せだったんです。貴方と暮らせて、あの子が産まれて、3人で生きていけて……！ 分かっています、納得していたつもりでした。でも、でも——」

30年、と言われていた。

運命が決めたような30年だ、と。

長いといえば長いのだろうか。

それでも、短いと思うのは我が侷なのか。

医術は、無力だった。

霊能も、無力だった。

——どうしても、仕方の無い事だった。

彼女の器は、彼女の魂には、人の器は脆すぎた。

たった、それだけの事、だったのだ。

だが、器の無理は、それを表に出すまいとする魂への負担となり、結局、夫と実家の

者達以外には知られる事は無く。

短い生涯が、結果として残るだけだった。

それだけの事を、彼は、それでも良いと言つて抱きしめてくれた。

「私は、弱いです。どれだけ時間があつても、どんなに満足していても、きつと、納得はできません。だけど、一人では耐えられない。だから、貴方とあの子を残して——貴方とあの子を置いて、一人になる事が、寂しくて、辛くて……」

ぐい、と。

沙耶の身体は、肩を抱えられて引つ張られていた。

傾いた先には、しなやかで固い、夫の体があつた。

不器用な、どこまでも不器用な男は、黙つて引き寄せる事しかできなかった。

「……だから、少しだけ、甘えても良いですか？」

「……」

返事は無かつた。

ただ、抱きしめる腕に、柔らかな力が籠められた。

「……ふふ。結局、私の前でしか泣かないでくれました、ね。流石は、お父さ——」

微笑みと共に、抱き返す為に差し出された腕は、しかし、何も掴めずに、ゆっくりと落ちる。

里に、悲痛な咆哮が木霊した——

——その夜から、既に3日が過ぎていた。

「はあつ！ はあつ！ はあつ！ ぜはあつ!!」

あの夜、父の咆哮を聞き、倒れた母の姿を見た忠夫は、今はひたすら駆けている。

「前」は、ただ呆然として・・・そこから先の記憶は、あまり覚えていなかった。

でも、「今回」は、きつと何かが出来る筈だと——いや、何かをしたいと思つたのだ。何故母が突然倒れたのか、父は何も言ってくれなかつたし、問うのも幼心に躊躇われ

た。

だが、今なら。

何か、やれる筈だと——きつと出来る筈だと、信じたかった。

「はっ、はっ、はあっ……はあっ」

それだけに、思い通りに動かない体が憎かった。

少し走っただけで息が切れ、まるで悪夢の中にも居るかのように、歩みは遅々として進まない。

だから、彼は直ぐに行動に出たのだ。

後どれだけ彼女が持つのか分からない。

最期の時まで母のそばに居ても良いのではないか、とも思ったが、やらなかつたら後悔する。

飛び出したまま、振り返らずに駆け出した。

ギリギリだ、と彼の勤が告げている。

後僅かで、引き返す為の時間も無くなると。

だけど、迷って、悩んで、それでも進んで——そして、彼はそこに辿り着いていた。

「……はああああ」

大きく息を吸って深呼吸。

乱れた呼吸をゆっくりと常の状態へと落ち着けていく。

此処までは何とかやれる前哨戦。

そして、ここからが、彼がやれるだけの、思いついた中での最後のそして最良の手段であった。

息をゆっくりと、限界まで吸い込んでいく。

目の前の切り立った崖も、森のど真ん中に不自然にある広場も、話に聞いた通りであった。

「——天狗殿おおおおっ!!!」

小柄な少年の、少し高い声が、朝靄の漂う森の中に響き渡る。

幾つもの木霊が響き、無理矢理目覚めさせられた小鳥が、その声に籠められた気合に気圧されて飛び立った。

ゆっくりと残響が消え、飛び立った小鳥の立てる音も消える。

反応が無い事に焦りを感じながら、もう一度叫ぼうと大きく息を吸い込んだ少年の耳に、小さな足音が聞こえた。

朝靄の向こうから、白装束の何者かが靄を割きながら歩いてくる。

突き出た長い鼻。

鋭い眼光。

赤い肌。

忠夫を知らぬ彼は、彼を知る忠夫の視線を受け止め、静かに呟く。

「・・・何用だ、小僧」

この時ではないあの時に、彼を懐かしむような目で見ていた彼ではない。

彼は——天狗は、忠夫をただ睨みつけた。

それだけで、辺りの空気が一変する。

押し寄せる威圧感と、背中が総毛立つような危険の香り。

だが、奥歯を食いしばって、耐える。

「は、母上の為に、薬を頂きに参った！」

「・・・ほう」

小さく呟いた天狗は、その手に持った粗い削りの木刀をゆつくりと持ち上げ、振り下ろす。

それだけで、周囲に漂っていた薄靄が消し飛んだ。

「ならば、知っているのか、小僧」

「ああ、知っている！ あんたに勝って、それで薬を持って帰る！」

「ふ、子供の割に、威勢の良い事を」

鋼のような硬質な風が押し寄せるように吹き付ける。

青年となつた忠夫であれば、闘い方もあつたであろう。

だが、今のこの身には力が無い。

それでも、何とかしたいと思つた。

ふと、天狗の視線が訝しげな物に変わる。

戸惑つたように、こちらに吹き付ける殺気が揺らいだ。

「・・・お前一人でやるのか？」

「勿論「二人でござる！」——ってなんで居るんだお前はあつ?!」

目の前の天狗に集中していた忠夫の真横から、何だかいきなり理不尽な声が叫ばれた。

思わずそちらを向いた忠夫の眼に、短いながらも真剣を持った、忠夫よりも小柄な少女が震えながら、立っていた。

顎が落ちるほど驚く忠夫に、シロは額に緊張の脂汗を浮かべながら、それでも氣丈に笑つてみせる。

「あ、あ、兄上を探していたに決まつてるでござろう？ 父上は犬飼殿の家で色々やつてるし、犬飼殿は倒れた沙耶殿の傍から動く氣は無いそうでござる。——沙耶殿は、母の

居ない拙者にとっては母と同じ。兄上を探するのは、拙者の役目だと思つたでござる！」

——追跡は、簡単だった。

いまだ靈力に目覚めぬ子供である忠夫の足では3日の掛かつたその道も、いまだ成長の戸口とは言え純血の人狼たるシロにとっては1日足らずの距離だ。

彼女の鼻は微かに漂う彼の匂いを追いつづけたし、人狼の目はあちこちに残つた忠夫の痕跡を見つけ出す事が可能だった。

そして、いよいよ直ぐ近くと言う所まで来て、森に響いた忠夫の叫び。

声の発生地を駆けつけければ、凄まじいまでの気配を持つ相手に、徒手で向かい立つ忠夫の姿。

そして、母の為に薬を貰うというその言葉。

それだけで、家族の一大事に居なかつた彼に対する怒りも、年上なのに情けない彼への齒痒さも消し飛んだ。

「深くはわからんでござる！　しかし、兄上の言葉には義があつた！　ならば、犬塚シロ——助太刀しない理由は無い!!」

震える膝を堪える子供が二人。

方や何も持たず、方や真剣を持っているとは言え、其処彼処に未熟さが溢れるように見てとれる。

それでも、天狗は一息つくど。

「……小僧と言つた事は訂正しよう。小さな侍達よ、幼い狼の子等よ、未熟な戦士であろうとも、確かにお前達は「闘う者」だ」

「当然でござる!!」

「故に、我も——手加減はせぬ。死ぬな、未来ある者達よ!」

唸り声を上げるシロと、先ほどにも増して威圧感を吹き付ける天狗。
そして、忠夫は——。

「ちよ、ちよつと待つた! おしっこ!」

今までの緊張感も何もかも、全部台無しにしやがった。
思わずシロと天狗も腰砕け。

「兄上ええっ!!」

「良いからお前も来いっ!」

「え、ちよ、そんな! 拙者これでも女子にごぎるうう!!」

腰砕けになったシロを引き摺りながら、一目散に木陰に駆けて行く子供達を目にして、天狗は動こうとはしなかった。

というか、動く前に、引きとめる前にあっさり撤退かましてくれやがった少年の手際の良さに呆気にとられる暇も無かったし。

「・・・女子だったのか。子供は全部一緒に見えるのお」

最近の子供は男も女も連れションをするのか、と驚いていたり。

「ど、どーいうつもりでござるか！ 嫁入り前の女子に何をー！」

「どアホっ！ 前も後ろも無いようなガキにそんな事関係無いわいつ！」

「乙女に対し何と無礼な！」

引き摺りこんで一息ついた忠夫の手を、噛み付くようにしてシロが振り払う。

途端に伸び上がるようにして抗議の声を上げた彼女の頭に軽い平手を打ち下ろしながら、忠夫はどかっどと湿り気を帯びた地面に座り込んだ。

「……まあ、正直助かったが」

「うう……なら叩かなくても良いではござらんかー」

「それとこれとは別なんじゃない」

助かった、と言うのは嘘ではない。

危うく、勝ち目の欠片さえも見当たらない相手に真正面から挑む所であった。

さつきまでの自分の直情過ぎる行動を思い返して冷や汗を拭う忠夫に、シロの拗ねたような視線が突き刺さる。

同じように座り込んだ少女は、何か必死で思考を巡らしている少年が反応しない事に、彼女自身も不思議に思うくらい、唐突に不満を覚えていたが。

「早く戻らないと、多分待つてるでござるよ?」

「でもなあ、正直勝ち方が思い浮かばんしなあ・・・」

思案げに天狗が居るのであろう方向を見つめる忠夫。

青年の彼ならばやり方も、選べる方法も多かつた。

絡め手、セコ技、それらを組み合わせる正面からのぶつかり合いを避けつづけ、ここぞと言う瞬間に渾身の一発。

忠夫との戦いを経験していない天狗なら、おそらく勝率は5割くらいは見込める筈。

だが、今の彼には何も無い。

靈波刀も、如意棒も。

人狼の身体能力も、超感覚も。

唐巢神父の聖水も、人狼としての霊能さえも、無い。

無い無い尽くし。

あるのは余りにも弱々しい少年の肉体と、そんな彼よりも頭一つは小さい少女の助力のみ。

——逃げるか?

と、当初の目的さえ忘れて、戦略的撤退を検討し始めた忠夫の頬に、シロの両手が添えられた。

「そつちじゃないでござるよぐき。」

向いていた方向から無理矢理180度捻られた頸椎が、何だか立ててはいけない音を立てたような気がした。

右、真横を向いていた頭部は、左、一度前を通つて再び横へ。

「待つているのはあの天狗ではござらん。兄上の、母上でござる」

——その一言で、腹が据わった。

無い無い尽くし？

天狗に勝つ方法が無い？

如意棒が、靈波刀が、靈能が、身体能力が無い？

美神もおキヌも居らず、傍に居るのが子供の頃のシロだけ？

上等だ。

一切合切、全部が全部に、皆々様に、もれなく上等をくれてやる。

「・・・おくけくおくけく。やったろうじやねえか。あんな長つ鼻のおっさんなんか知った事か。俺は俺のやりたい事を、やれるようにやってやる！　こちとら人命かかってんだ、あつちの都合なんぞ知ったことか!!」

「・・・あ、兄上?」

「ああ無いさ!　なーんもねえ!　あのおっさんに勝つ方法も、罨を仕掛ける時間も必要な体力も、準備に使う余裕も無い!!」

唐突に立ち上がり、ヤケツパチ気味に叫ぶ忠夫の足元で、いきなり立ち上がった為バランスを崩して尻餅をついたシロが尻尾を丸めているのが目に入った。

おそらく、原因は。

「あああ、兄上、顔、顔が凄く悪いでござる!」

「んだとこらああつ?!」

「ひやいんつ?! て、訂正でござる! 悪人と言いたかつたんでござるよー!」

悪戯小僧を通り越して、魔族やらヨーロッパの魔王やら悪霊やらとやりあつた青年の、目だけが異様に怪しいぎこちない笑顔少年バージョンは、少女にとって少々刺激が強すぎた事だろう。

ともあれ、ふん、と鼻息も荒く拳を握り締めた小さな半人狼の少年は、大きく大きく吼えて見せた。

誰に宣言する為でもなく、ただ、己にそれを刻む為に。

「——何にも無くても、「犬飼忠夫」が、俺が残つてるなら何とかしたらあつ!」

第伍拾参話。

ふむん、と鼻息を突くと心を落ち着けるようにゆっくり胡座を掻きながら地面に座り込む。

膝の上に立てた腕の掌を顎の下に当てて、天狗の居る方をじつと見つめる忠夫に、おずおずと少女が話し掛けた。

その瞳は半分以上驚きで占められているものの、残り半分以下には確かに好奇心と小さな信頼の色が見て取れる。

「兄上……」

「何だ？」

「天狗殿に、どうやって勝つつもりでござるか？」

これ以上ないシンプルな問い。

だが、それを聞いたシロでさえ、それが可能だとは思っていないだろう。

天狗は、強い。

「……拙者、正直勝てるとは思えんでござる。それこそ、長老か父上達二人掛り……」

それでも五分五分ではござらんか？」

「へえ。それだけ分かりや、十分だな。相手の強さも分からんようじゃ、無駄死にするつーからなあ」

とは言うものの、忠夫の知る天狗の強さは、フェンリル狼を相手取った時の修行の際に見た腕前と、親父達からの伝聞のみ。

手加減していたとは言え修行時の剣の冴えは、確かに長老並みの腕前であつたし、親父達が天狗と初めて会つた時の話を思い出せば、あの二人が一緒に掛かつて漸く相打ちと言つた所らしいという。

あの二人を相手取る事に慣れた長老ならばともかく、連携を組んで攻め立てる人狼の侍、しかも里でもトップレベルが二人ともなれば、その腕前は推して知るべしであろう。「……ま、普通に考えりや絶対勝てないわな」

「駄目ではござらんかー！」

涙目で吼えるシロを「どうどう」と両手を下に向けて落ち着け、と動作で示しながら、忠夫は一度だけ頷いた。

「当たり前じゃん。あんな化け物と正面からかち合つても駄目に決まつてるじゃねーかあつはっはー」

「だ・か・ら！ それではどーしようも無いでござろうにー！」

両手を上げ、乾いた笑い声を出しながら降参と言った感じの忠夫に、シロはどうとう腰から抜いた真剣の先端を向けつつ牙を剥く。

だが、向けられた忠夫は冷や汗交じりで腰を引き、何時でも逃げ出せる体勢を取りながらも笑顔を見せた。

その、刃物の光で耳を伏せて尻尾を丸めた格好で、しかも引き攣りまくりながら浮かべたそれを笑顔と言うのならば、だが。

「待て待て待て！ 落ち着けつて！」

「うー！」

他に誰も居ない森の中で、刃物を向け唸る少女と向けられたまま必死に落ち着かせようとする少年。

何処の人情沙汰か、といった感じではあるが、やってる本人達が子供なである事と涙目のままのシロが何とも幼げである事も相俟って、演劇の一シーンのようで微笑ましい。

まあ、シロが持っているそれが本物である事と、実際に切羽詰った状況である事を加味すれば、そんな言葉も吹っ飛ぶのだが。

「俺に考えがある！」

「……ほんとうでござるかあ？」

さつきまであつた僅かな信賴の色も消し、ただ不審そうに半眼で睨む妹分に刀を引けと動作で示しながら、忠夫は精一杯重々しく頷いた。

それでもしないと本当に刺されそうだったし。

「ああ。その為にちよつとおっさんとこ行つてくるから、お前、何があつても動くんじゃねーぞ」

「それは無謀でござろう！ 拙者も——！」

「絶対に駄目。お前が来ると、多分そのまま戦闘開始、だ。ボツこボコにされて、最悪、死ぬぞ？」

それまでの軽薄な態度を一先ず置いて、真剣な表情でシロを諭す。

少女は大変不満そうであるが、何せ、彼女が第二次接触の切り札、命綱だ。

彼女が一緒に来てしまえば、忠夫が考えている離脱方法が不可能になってしまう。

それどころか、本当にそのまま天狗との戦いになり、そして勝てる筈の無い忠夫達ではおそらく手加減せずに襲い掛かってくる天狗相手では命を守る事さえ難しいだろう。

だから、忠夫は何度も何度も言い含めつつ、シロが絶対に来ないと誓うまで説得を続ける。

「・・・分かつたな。お前に、俺の命を預けてるようなもんだ。俺だけじゃなくて、母上の命もな」

「・・・そう言われては、拙者も我慢するしか無いではござらんか・・・」

渋々と座り込んだシロを安堵の溜め息を漏らしながら宥めつつ、忠夫はゆつくりと天狗の居る方へと向けて歩き出す。

作戦会議のため一応かなりの距離を取っていたとは言え、今までの会話が聞かれていたらアウトである。

祈るような気持ちで、それでも心配そうにこちらの背を見つめるシロの視線を感じながら、忠夫は振り向きもせず駆け出した。

先程、天狗を待たせた場所からの距離は400M程。

天狗の聴覚がどれほどの物かは知らないが、彼が接近してこない限り会話は聞こえていない筈。

だが、忠夫は残り100M程の距離まで一気に駆け戻ると、天狗の姿が見えない事に心底の安堵を感じながら、そこで一息ついて待ちの体勢に入った。

走る途中で思いついた、一寸した罠。

無論、物理的な物ではない。

こんな所に仕掛けても引つかかってくれぬ相手とは思えないし、そんな有効かどうか分からないような罠を仕掛けておくほど余裕も無い。

それに、万が一仕掛けている所を見られて警戒されては不利になる。

チャンスは一度。

しかも、相手が此処まで来てくれるという大前提付きの「言葉の罠」。

だが、上手くいけばこの後の展開が非常に楽になると思った。

あまり長い間此処で待つて、これ以上引き伸ばす訳にはいかないだろう。だが、打てる可能性のある布石は打っておきたい。

しかも、結構ローリスクハイリターン、やらなきや損々と来たもんだ。

「・・・来た」

重々しい足音が、森の中でもはつきりと忠夫の耳に届いた。

天狗が先程居た方角から、ゆっくりと、しかしはつきりと音を立てながら天狗が近づいてくる。

「ここそこと茂みに隠れながら、忠夫はニヤリと笑みを浮かべてその「タイミング」を待ち受ける。

それは、あくまで偶々茂みを掻き分けた忠夫がぼったり天狗に会ったと言う演出の為のタイミング。

身体能力では無いに等しい忠夫でも、気配を消す技術なら頭が覚えている。

だが、あまり接近しすぎた所からいきなり気配を表すと、不意打ちと思われるバツサリとなる可能性もある為、出来るだけ不自然ではないタイミングで、その一步を踏み出した。

ガサリ、とわざわざ大きな目の音を立てて姿を見せた忠夫に、天狗の鋭い視線が突き刺さる。

「・・・そんな所に居たか。逃げたのかと——」

全部を言わせる必要は、無い。

むしろ、この状況に気付いていない天狗の方が迂闊なだけだ。

人狼相手に接近がはつきりと分かるように足音を立てて近づいてきてくれるような高潔な相手には、これはきつと効くだろう。

「——へ、変態だー!!」

「何いつ?!」

「子供の排泄を覗く変態が居るぞー! はっ!? まさか、シロだけじゃなくて俺のしつこも覗くつもりだったのかっ?!」

「ま、待て! 何でそーなる!!」

天狗、大慌て。

彼もまさか、深山幽谷に籠って真面目に己を磨く事に集中していたと言うのにこんな

謂れの無い汚名を着させられるとは、夢にも思わなかつただろう。

普通、思わない。

誤解を解こうと必死の形相で忠夫に掴みかからんばかりの勢いで迫る天狗の長い鼻。だが、それこそ忠夫の思う壺。

「ワシはお前らが何時まで経つても戻らんから、逃げたのかと思つて確認を——」

「嘘だー！ 俺達は逃げるつもりなんて無いのに、そんな事を言つても誤魔化されないぞコンチクシヨー！」

「違う！ だから、ワシは——」

「変態だー！ ロリコンでシヨタコンでしかも妙な嗜好の変態が居るー！ 皆に教えなきゃいけないな、これはー！」

「人の話を聞けえええつ！！ 大体なんだその「ろり」とか「しようた」とかはああつ！！」
「おっさんみたいに変態の事だ！」

「ちつがあああう！！」

もはや、登場の重々しい雰囲気も、真面目な求道者の威厳も無い。

そこに居るのは、子供にかけられた不名誉限りないレッテルを必死に剥がそうと抵抗を続ける、外聞の悪すぎる天狗様であつた。

結論、忠夫が納得する振りをするまで、たつぷり10分ほど掛かつた。

「全く、遅くなりそうだったからそれを言いに来ただけなのに、妙な誤解をされるような事すんなよな！ いい歳のおっさんの癖に！」

「おっさんとは幾らなんでも無礼——いや、すまんかった」

疲れきった表情で、忠夫の言葉に反論する元氣さえなくなった天狗は、その鼻まで萎れた様にも見えるほど肩を落としながら素直に謝った。

天狗に見えないようにニヤリと笑いながらそれを確認した忠夫は、成功した罫はさて置き本命をするりと喋り出す。

「そうだ、聞き忘れてた事があつたんだよ。おっさん、今、俺が必要な薬持つてるか？」

「・・・何故それを聞く必要がある？」

訝しげに、少々の警戒を含めた視線で睨みながら天狗が聞き返す。

だが、その言葉にはそれほど力が籠っていなかった。

先程までの忠夫の誤解を解くために使った労力が、天狗と忠夫の思った以上に注意力を奪っていたのだろう。

思わぬ幸運と言うやつだ。

「いや、やりあつてる最中に壊れても困るからなー。おっさんやつつけて、薬の場所が分からなくなつても困るし」

「・・・ふん、小童が。無駄な心配と言う奴だ、それは。ワシもお前らなぞにやられるつ

もりは毛頭無いし、だが、薬は貴重なのも確か。きちんと保管しとる」

「あつそ。んじや、俺はシロの様子見に行くから。——覗くなよ?」

「覗くかあああああつ!!」

悲鳴のような天狗の抗議の声を背に、だが、忠夫はその姿が見えなくなるまで不信の視線を向けながら、シロが待っているであろう場所まで一気に駆け戻る。

残されたのは、掛かってしまった嫌疑を心底嫌そうな表情で愚痴る天狗のみ。

「よし、完璧だ」

「・・・兄上、流石にそれはどーかと」

「ん？ 聞こえたのか？」

「あれだけ大声で騒げば、嫌でも聞こえるでござる」

何度も何度も頷きながら、会心の笑顔で駆け戻って来た忠夫を迎えたのは呆れた視線を向けてくるシロだった。

確かに静かな朝の森でアレだけ騒げばシロにも聞こえただろうし、内容も爽やかな朝にはそぐわなさ過ぎる物だったのも確か。

とは言え、成果としてはこれ以上なく満点だったので問題は無い、と考えた忠夫は、再びシロの隣に座り込んで、小さな声で語り始めた。

「聞こえてたんなら説明は要らないな」

「いや、あの内容は流石に説明して欲しいでござるか・・・」

「説明もなんも、こつちがどれだけ時間をかけても向こうが近づいてこないようにしただけだ。勿論、この後の作戦にも効いて来るんだけどな」

まあ、あれだけ騒がれた後でもこのこ近づこうとは思わないだろう、普通。

内容に問題がありすぎるし、流石に天狗が哀れだとも思うが。

ともかく、胡乱げな視線を向けてくるシロに対し、忠夫は今回の作戦方針を宣言する。

「良いか、天狗には勝てん。そこは分かかってるんだろ」

「・・・歯痒い事でござるが、それは確かに」

「だったら、勝たなきやいい」

「は？」と疑問を顔一杯に浮かべたシロに、忠夫は思いつき悪戯をする悪ガキの笑みを見せつけながら、これからの行動を一つ一つ説明していく。

しっかりと説明しなければシロは納得しないであろう。

だが、その為の時間はさっきの会話で稼いでいる。

「——ええっ?!」

「分かったか?」

「しかし、それは余りにも・・・」

「ばーか」

その作戦を聞かされたシロの顔は、とても珍妙な物だった。

呆氣に取られた、と言うのが近いかもしれないし、良いのかなーと疑問に思っていると言うのが近いのかもしれない。

だが、呆れの成分が濃いのはどちらにしても同じであつただろう。

そんな顔の妹分に、忠夫は片目を瞑りながら、最後の締めをのたまつた。

「俺は言ったぞ? 『俺は俺のやりたい事を、やれるようにやってやる。こちとら人命か

かつてんだ、あっちの都合なんぞ知ったことか!』つてな」

深々と溜め息を付いたシロは、本当に良いのかなあ、と首を捻りながらも、そのやりたい事の為に動き出す。

やりたい事を、忠夫の母を、シロにとつても母のようなあの人を助ける為に、忠夫と天狗を結ぶ線から直角に全力で駆け出した。

「・・・遅い。何時まで待たせる気だ?」

「うっさい! 変態を見張りに来ただけだ!」

「変態じゃないと言っておろーが！」

出来るだけ子供のように振舞いながら、忠夫は先程の場所で座り込んでいた天狗の横に腰掛ける。

背中に当たった木の幹はごつごつとしていて、しかししっかりと忠夫を受け止める。そのまま天狗の不審の視線を受けながら、忠夫はジト目でそろそろ苛立ってきているであろう天狗を睨み続ける。

暫しの沈黙が蟠り、我慢しきれなくなったように天狗が忠夫に問い掛けた。

「・・・武蔵でも気取るつもりか？　だが、この天狗は小次郎では無いぞ」

「んなこつちやねーよ。シロがおつきい方も催したんで、時間が掛かってるだけだ。流石に近くに居る訳にもいかねーから、ついでに見張りに来たんだよ。大事な妹分だから」

シロが近くに居なくて本当に良かったと思わせる台詞であろう。

それを聞いた天狗は大きく溜め息を付くと、視線を逸らして肩を落とした。

「・・・もはや何も言わん」

「やっぱ変態って認めるんだなっ?!」

「違う！　力一杯違うぞ!!」

緊張感の欠片も無い。

慌てたように背中を預けていた木の陰に隠れてガタガタと震えだした忠夫に、天狗は両手を突き出して必死で抗議の声を上げる。

何度も何度も忠夫が確認し、天狗もしつこく否定する。

そんな流れを繰り返し、先程の誤解を解いた時ほどの時間と労力を持って、漸く納得した振りをしてくれた忠夫の目の前で、天狗は心底疲れた様子で腰を下ろした。

「……全く。近頃の子供は……」

「それはそーと、おっさん」

「……何だ？」

「おっさんの薬って、俺でも使い方分かるのか？」

何処と無く覇気の無い虚ろな目ながらも、天狗は律儀に答えてくれた。

「……簡単な説明くらいなら書いてある。ワシも名前だけで薬を全部覚えておけるほど、少ない量を保管しておらんからな」

「ふーん」

だが、と前置きをして天狗は続ける。

「薬と言っても万能薬ではない。あくまで薬草や霊草をワシが調査した物。患者の状態に合わせて正しい物を使ってこそ、その効果は十分に発揮される」

忠夫の顔に、少しだけ不安の色が浮かんだ。

だが、それを吹き消すように、先程忠夫がシロと分かれた所から、遠吠えが響く。

「あ、シロだ」

「今度は何だ・・・？」

「ん・・・あんまり良く聞こえなかった。ちよつと様子見てくるから、来んなよ？」

「言われんでも行かんわ・・・」

さつさと行け、と手を振る天狗に、手を振り返しながら忠夫は駆け出す。

その小さな背中を見送りながら、天狗は「早まったかなあ・・・」と今回の小さな戦士の挑戦を受けた事を、徐々に徐々に後悔していた。

溜め息を付いて空を見上げる。

太陽は既に高く、朝の邂逅から始まった筈の戦いは、天狗に疲労と咽の痛みだけを与えただけだった。

それでも、刃を交える事になればそれなりに得る物もあるだろう、と緩んだ緊張の糸を張りなおし、少年の駆け出していった方角を睨み付ける天狗。

まあ、どれだけ待っても忠夫達は戻って来ず、結局刃を交わす事は無いのだが。

「どうだ、シロっ!!」

「やったでござる! 持てるだけ持って来たでござるよ!」

「うっし! 逃げるぞ!! 俺は薬を持つから、お前は俺を背負ってくれ! お前の方が俺より早い!!」

「・・・何かそれは間違つてござらんかあ?」

「うっさい。効率最優先じゃい」

「じゃらじやらと差し出された小瓶を懷に残らず納め、不満げな少女の背中に乗つかる忠夫。」

「そのまま、子供とは言え人一人を背負つて、それでも忠夫の全力疾走よりも速く駆け出した少女は振り向く事無く森の中を疾走する。」

——作戰成功。

『つまり、だ。目的はあのおっさんに勝つ事じゃなくて薬を手に入れて持ち帰る事な訳だ』

『それはそうでござるが……しかし、どうやってでござるか?』

『あのおっさんは薬を持って無い。んでもって、初対面の時だけど、俺が叫んだら直ぐ近くから歩いて来た。だったら、多分ねぐらは近くだ。なんせまだ早朝も良い所だったし、訓練の為にあちこち移動して汗を掻いたって様子も無かったしな』

朝早くから汗を流して修行をする、と言う事が無い訳ではなからうが、青年の時に会った天狗の話からすれば、多分直ぐ近くに拠点となる小屋なり洞窟なりがある筈。

薬の調査、保管と言う事を考えれば、それらを常に身に付けて移動しているというの
は考えにくい。

——無論、博打ではあるが。

『俺が何とかして引きつけとくから、お前は思いつきり回りこんでそこを探せ。あのおっさんの匂いならさつき嗅いだらう?』

『……薬草とかの不思議な匂いがしたでござるから、確かに難しくは無いでござるが……』
『良いか? あのと距離で俺たちの会話が聞こえて無かったって事は、出来るだけ気配を消して滅茶苦茶遠回りすれば見つかる可能性は低い。迷うな、全力で走れ! 良いか

?!』

『わ、分かったでござる!』

——だからこそ、忠夫が見張りという名目で時間稼ぎに行った。

二人で一緒に行けば忠夫が足手纏いになるし、二人とも居なくなれば不審に思われる。

だが、一人が付いて、しかも徹底的に気を逸らせば成功率は高まる。

それなら、口が回って足が遅い忠夫が囷に行き、足が速いが嘘が下手なシロに薬を取りに行かせれば良い。

薬の保管場所に鍵が掛かっていたりすれば難しくはなっただろうが、こんな山の中で警戒するのは野生の獣くらいだし、天狗も何時も此処に居ると言っていたのであまり盗難に対して警戒はしていないだろう。

——勿論、これも博打だ。

シロが見つかる可能性が無いとは言えないし、忠夫が口を滑らせればアウト。

そして、鍵が掛かっている薬を持ち出せなければアウト。

博打も良い所である。

だが、まあ。

結果として、忠夫の懐には大量の薬の小瓶があるし、二人とも怪我一つ無く帰還中。

天狗が怒つて後で何かしてくるかもしれないが、その時はその時。

騙される方も悪いんだし、こっちは子供なんだから頭を下げれば命までは取られない———と思いたい。

ま、天狗も子供相手に本気で怒るほど恥を知らない訳でもないだろう、というのも計算の内だ。

子供の悪戯だと思つて諦めてもらおう。

「フアイトだシロ！ 風になれ——！」

「兄上、もうちよつと静かにしてらでござる——！」

ともあれ、意気揚揚と凱旋である。

だが、戻った忠夫達を待つていたのは。

「——忠夫、シロちゃん、付いてきなさい」

「へ？」

「貴方も、お願いします」

「・・・ああ」

忠夫の武勇伝を聞いた母の、悲しそうな顔だった。

帰つて来た忠夫から薬を受け取り、話を聞いた沙耶は、それについては何も言わず、布団から身を起こし身なりを整えると、きよとんとする二人と口数の少ない父を連れて、何時にも増して蒼白い顔のまま、ポチの背中を借りて森に向かう。

付いて来ようとする犬塚父を一言二言話して留守を頼み、忠夫をシロに頼んで背負わせると、二人の物問いたげな視線に背中を向けて走つていく父と母。

無言のまま、食べる物も食べずに4人が辿り着いたのは、忠夫が母に話した天狗の居る場所だった。

「・・・む、またお前らか。この悪ガキどもめが、今度は何用だ？」

「天狗様、ですね？ 私は、この忠夫の母、シロの母親代わりをしております、沙耶でござ

「ございます」

「その夫、犬飼ポチ。此度は、本当に相済まぬ事をした。——申し訳無い」

「・・・つ?!」

不機嫌そうに睨みつけてきた天狗も、沙耶とポチに付いて来た少年達も、呆気に取られた。

二人が、深く、頭を下げたのだ。

「・・・どう言うつもりだ？」

「あの薬は、大変貴重な物でしょう。それを、どのような理由があつたとは言え、子供にこのような事をさせてしまったのは親の不覚。子供の責を負うのは親の役目、ですから」

「天狗殿が何ゆえこのような事をやっておられるのかは存じぬ事でござる。だが、親として、子に盗みを働かせたのは事実。——何卒、二人を責めないで頂きたい・・・」
それだけを言つて、二人は頭を下げ続ける。

子供たちは、言葉も、無い。

母の為、と思つてやった事は、無駄だったのか。

駄目、だったのか——

シロも、忠夫も、頭を下げた。

下げるしか、無かった。

いや、それは項垂れると言うのが一番近かった。

「……いや、頭を上げてくだされ」

長い沈黙を破つたのは、溜め息混じりの天狗の声だった。

苦笑いを堪えるようなその声に忠夫が顔を上げれば、天狗の顔に、既に不機嫌の色は無い。

それどころか、何故か嬉しそうにさえ、見えた。

「ワシも少々大人気なかつたな。まあ、確かに正々堂々とは言えぬ物の、薬を持っていかれたのは事実。此度は、ワシの負けであろう」

「……良いのですか？」

「良いも悪いも無いわ。負けたから、薬を渡した。順序が少々変わった所で、文句を言う者も居らんしな。それにしても、中々賢しい子供らであつたぞ」

カカ、と笑う天狗の前で、親たちはもう一度頭を下げる。

そして、子供達に振り向いた。

思わず身体をビクつかせた二人は顔を伏せ、近づいてくる二つの足音に目を瞑る。そして、身体を固くする二人の前で足音は止まり。

二人の頭に一回づつの大きな拳骨が落ち。

暖かい腕が、二人を包んだ。

「——ありがとう。本当に、ありがとう、二人とも」

「全く、もうちよつと考えてから動くでござるよ。拙者も沙耶も、犬塚も里の皆も心配したんでござるからな」

頭を押さえながら顔を上げた二人の目に、嬉し涙を零す母の顔が写った。

ぼろぼろと涙を零しながら、優しく二人を抱きしめる。

その隣では、苦笑いを浮かべたポチが、二人の頭に振り下ろした拳骨をぶらぶらと振っている。

「・・・え？」

「貴方達がやった事は、人から物を盗む事。やってはいけない事だし、それを結果としてやらせた私も悪かったわ。でも、でもね——」

ぎゅつと、二人を抱きしめる手に力を籠めながら、二人の頬に己の頬を押し付けながら。

沙耶は、誰にも見えない、心の底からの笑顔を浮かべている。

「嬉しかったよ、二人とも。貴方達と出会えて、本当に、嬉しいの」

「はは、うえ……」

「沙耶殿……」

「——ありがとう」

おずおずと抱き返した二人は、そのまま母の肩に顔を埋めた。

「……ま、一件落着か。どうかね？ どうせなら此処でその女性の治療をしても良いのだが？」

「かたじけない。是非——」

「——母上っ?!」

「沙耶殿っ?!」

——悲痛な声に振り向いた天狗と父の目に、力を失ってゆつくりと二人から離れて倒れる、沙耶の蒼褪めた顔が写り込んだ。

第伍拾四話。

違うと叫ぶ俺が居る。

違うと吼える俺が居る。

気付くと叫ぶ何か居て。

気付くと吼えるそれが居た。

お前は誰だと問う声が聞こえ。

俺は俺だと答えを返す。

いや、今——「俺」、とはその声は言わなかった。

そう、確かに、「俺」、ではなく——「拙者」、とその声は言ったのだ。

「——小僧らっ！ その崖を回り込んだ所に湧き水がある！ 直ぐに汲んで来い!!」

「りよ、了解したでござる！」

「沙耶、沙耶あっ!!」

「動かすな！ そのまま担いでゆつくり運ぶのだ!!」

「お、応っ!!」

「兄上！ 早く行くでござるよ！ 呆けてる場合じゃないでござる!!」

目の前で倒れ伏した、蒼白な顔色の母が父に抱かれ小屋の中に消えていくのを見送りながら、忠夫は、ほんの十数秒前まで母の笑顔があった位置を見つめていた。

夕食の準備をするつもりだったのだろうか、天狗が持っていた桶を受け取ったシロが忠夫に声を掛けつつ走り出す。

その姿が木陰に隠れて見えなくなっても、忠夫の視線は何も無い場所を捉えて動かない。

夜空の月は、少しづつ真つ黒な雲に隠され始めていた。

僅かに垣間見える月の光に照らされたその小屋は、外見のみすぼらしさからは想像もつかないほどに清潔感が在った。

壁には数え切れないほどの小瓶や里でも良く見る薬草、薄荷のような匂いの霊草、何かの干物に良く分らない物まで様々な物体が綺麗に整頓されて並べてあり、その種類と量からは考えられないほど整理されていた。

その薬の群を、真上に湯気の出る薬缶を掛けられた囲炉裏に灯る炎が不規則に照らし出す。

ぱちぱちと炎が弾ける音に混じって、女性の苦しげな呼吸が僅かに響いた。

「・・・むう」

「どうでござるのか？」

天狗は、その眉根を擧め、意外なほどに冷静な声を掛けてきたポチを見返した。

いや、その表情を見れば分かった。

冷静なのではなく、冷静たろうとしていただけである。

胡座を掻いた姿勢でありながら、その背中には緊張ゆえの強張りが見て取れるし、瞳には縋るような光がある。

だが、天狗に出来る事は、ゆっくりと頭を振る事だけだった。

「——すまん」

「・・・そう、でござるか・・・」

ゆっくりりと、酷くゆっくりりと大きく息を吐いたポチは、そのまま背後の壁に凭れるようにして天を仰ぐ。

人狼を導く月は、長く使われつづけた囲炉裏から出る煤で真っ黒に染まった天井に遮られて見えはしない。

だが、それでも、今は見たいと思った。

「全く原因が不明なのだ。熱が有る訳でもなく、気脈にも問題は無い。さりとして内腑に障りが在る訳でもなく、至つて健康——にしか思えん。だが、確実に『削られて』おる」

「——器が、持たないそうでござる」

天を見上げたままのポチが、呟く。

視線を向けた天狗に、だがその表情は見えない。

「人の身に、零れるほどの中身。天狗殿の尽力には感謝いたすが、やはり、駄目でござつたか・・・」

この人狼も、考えられるだけの手段は取つたのだろう。

人の、妖の、霊の、全てを頼み、全てに縋つたのだろう。

諦観の中に僅かに残っていた希望を己が零してしまったのだ、と気付いた時。

天狗は、己の無力さを百数十年ぶりに齒痒く思った。

「——すまん。偉そうな事を行っておきながら、お主の連れ合いを助ける事が出来なかった」

「いや、拙者も無理を言った。分かっていた事でござるのに、目の前にそれを見せられて……天狗殿に要らぬ負担を掛けてしまったようござる」

それきり、二人の間には沈黙が蟠った。

重い、言葉だけでは打ち砕けない空気が、二人を包んで行く。

聞こえるのは囲炉裏の火が弾ける音と。

「……こほつ、こほつ。ん、う……、ま、全く、大の大人が雁首並べて辛気臭い」

咳き込みながら、ゆっくりと目を開いた沙耶の声。

熱に浮かされたようなその瞳が二人を捉え、かさついた唇がどこか疲れの残る微笑で言葉を紡ぐ。

天井を仰いでいた視線を一瞬で戻したポチが、ふらふらと伸ばされた妻の手を握り締めた。

「沙耶、どうだ？」

「……こほつ。ええ、そろそろ。あの子達は？」

「ワシが近くの小川に、もう一度水を汲ませにやった。ついでに魚の2、3匹も獲って来

るように言っておいた。母の苦しむ姿など、見せたくは、無かろう・・・？」

「ありがとうございます、と一言。」

彼女は、ゆっくりと夫の手を借りて体を起こす。

それでも視線で横たわらせようとするポチに首を振り、彼女は袖に手を入れて、小さな、手のひらに収まるほどの大きさの袋を取り出した。

その紐を緩め、下に開いたもう一方の手で零れ落ちる中身を受け止める。

掌の上に落ちたのは、実家から持ってきた飾り気の無い外見の口紅と、長老と犬塚父の贈った白粉だった。

「それは・・・！」

「天狗殿、あの子達を呼んできて頂けますか？」

「・・・・・・・・・・」

目を見開いてその二つを見た天狗が、沙耶の言葉を聞き、短い間沈黙し、大きく頷くと小屋の扉を開いて出て行った。

噛み締められた唇が、天狗の遣る瀬無い思いを表すように大きく弾けた炎に照らされ、その背は次の瞬間には外の闇へと消えていく。

それを見送り、沙耶はゆっくりと口紅の蓋を外し、その先端を唇に触れさせようとして。

「あっ」

震える手が、それを持ち続ける事が出来ずにことりと床に落とす。
そして、それを拾う、男の手。

「……拙者が、やってやるでござる」

「……ふふ、大丈夫ですよ？」

「任せるでござるよ。拙者、今ならなんでも出来そうでござるからなっ！」

片手で沙耶の背中を支えながら、もう片方の手で目を瞑った沙耶の唇に、何時も彼女がしていたように小指ですくって紅を差す。

緊張故か、慣れない作業故か、それとも別の何か故にか。

小刻みに震える指を、それでも必死にはみ出させないように押さえながら、紅を塗り終わつたポチは、懐にあつた沙耶の持たせた清潔な布を口元に当てた。

差し出された布を唇で食み、そつと瞳を開く。

ポチの瞳に写つた己の顔を見て、満足げに頷いた沙耶は、ただ静かに白粉の入つた小瓶を指し示した。

ポチも何も語らず、その小瓶の蓋を噛んで開くと中身の粉を掌の上に落とし、人差し指と中指で掬つてゆつくりと蒼白い肌に滑らせていく。

「ねえ、貴方？」

「なんでござるか？」

擦つたそうに眉を緩めながら、沙耶は小さく囁いた。

「私、酷い顔色ですよね」

「お前はいつでも美人でござつたよ」

「あら、今までそんな事一言も言つてくれなかつたくせに」

「言わずとも、拙者が誰よりも知つていたのでござるからな」

「私が聞きたかつたんですうー」

不満げに、だが、目じりを下げた表情で、沙耶は頬の上で止まった指に手を添えた。握られた手が一度震え、握った手を握り返す。

「あの子達にこんな顔色見せたくないですから、ちゃんと綺麗にしてくださいね？」
握られた手とは違う手で、ポチの頬をゆつくりと撫でる。

「・・・だったら、泣くなでござる。白粉が落ちてしまうではござらんか」
「あら、貴方こそ。そんなんじや、ちゃんと見えないでしょう？」

沙耶の頬に伸ばした指に雫が落ち、白い粉を湿らせる。

ポチの頬に伸ばした手に雫が落ち、家事でかさついた指を濡らす。

「私の顔、忘れないで下さいね」

「ああ」

「私の事、少しで良いから覚えておいて下さいね」

「ああ」

「新しい奥さん貰っても良いですけど、報告だけはして下さいね」

「絶対に無理でござるな」

「あら、どうしてですの？」

「お前より綺麗な女は居るのかもしれないでござるが、お前より物好きな女はおらんで」

ざるからな」

「まあ。喜んで良いのかしら?」

「好きにするでござるよ」

小さな、涙混じりの笑い声が木霊する。

「それじゃ、あの子達を頼みますね」

「ああ。心配するなでござるよ。拙者と犬塚、長老達でしっかり育てるでござる」

「・・・そこはかとなく不安な面子ねえ」

「ふん」

窓からは、雲の隙間から僅かに覗いた月が光を落としていた。

「・・・兄上、沙耶殿は大丈夫でござろうか」

川原に座り込んだシロが小さく呟き小石を投げる。

それは何度も水面を蹴りながら反対側の川原まで進み、苔生した岩に当たって跳ね返る。

返らない返事を気にしながらも、シロはもう一度小石を拾って投げつけた。

暗い川原に、少女が投げた石の立てる音だけが響く。

「兄上、何か言つて欲しいでござる」

だが、少女に引き摺られるようにして川原まで連れてこられた少年は、連れてこられた時と同じ体勢のまま動かない。

ただ、黙つて虚空を見上げていた。

「・・・兄上？」

「なあ、シロ。お前ならどーする？」

問い掛けは、新たな問い掛けて打ち消された。

不思議そうに顔を上げたシロの目に、必死に何かを考える少年の姿が写りこむ。

少女の視線を受け止めながら、忠夫はもう一度疑問をぶつけた。

「母上が倒れた。何かをしたい。そんな時、お前ならどうするよ？」

「……拙者でござるか？」

——そもそも、忠夫の記憶に、それが無い。

彼の記憶に在るのは、目の前で母が倒れたその瞬間と、そして最期の母の笑み。安心させるような、何かを残すような、そんな想いの詰まった笑顔だけ。

——その間の記憶が、無い。

「……拙者なら、でござるか……」

今回は、天狗の事を知っていた故に彼の所まで辿り着き、そして今のような状況になつた。

なら、忠夫にとっての前は、一体何をやったのか。

それが、どうしても思い出せない。

それが、鍵のような気がする。

何としても、思い出さなければならぬ事のような気がするのだ。

「拙者なら——とりあえず、何か精の付く物を探すでござろうな」

「……例えば？」

「うゝ、例えば……」

顎に手を当て考え込み始めたシロを横目に、忠夫もまた思考に戻る。

だが、その時間も与えられず、彼らを呼ぶ声が夜に木霊した。

「小僧ら、何処に居るー?!」

「天狗殿? 此処でござるよー!」

夜の静寂を打ち破り、天狗が呼びかけた声はシロと忠夫の耳に届いた。

振り向いたシロが、天狗の声が聞こえた方に向かつて声を上げる。

二人揃ってそちらに駆け出しながらも、忠夫の頭は未だに記憶の扉を開こうと動きつづけていた。

——此処で一つ、この話を読む方々に問い掛けたい。

——覚えておられるだろうか。

——少年が、青年であつた時、ある悪魔に、子供にされたときの事を。

「お帰りなさい……つて言うのも、人様のお家じゃ変かしらね」

「……ただいま」

「沙耶殿、お体の方は……？」

少女の問い掛けに、女性は微笑を浮かべながら、だが言葉は何も返さない。

いや、返せない、と言つた方が正しいのだろう。

父に支えられるその体には既に力が入っておらず、紅を差した唇もその下は紫色に染められていて、白粉で塗られた頬の下も、真つ青な色を示している。

だが、沙耶は、ただ笑顔を浮かべるだけ。

苦しいとも、辛いとも、悲しいとも言わずに。

「母上……」

「おいで？」

常ならば、その両の腕は抱きとめる為に広げられるのだろう。

だが、力の通わない腕は動かさず、布団の上に整えられたまま、ただ声と表情だけが何時ものそれ。

だけれども、歩み寄った二人に向けられた声は、疲れの欠片も見えなかった。

「……大きくなったわね、二人とも。あんなに小さかったのに」

目じりが僅かに腫れ、瞳も赤い。

それは、支える父も同じ。

だが、誰もその事を語らない。

「——もうちよつと見ていたかったけど、残念ね」

「……そ、そんなつ！ 天狗殿、何とかならないんでござるかっ?!」

少女の叫びを聞いた天狗は、ゆつくりと頭を振るしか無い。

出来る物なら、彼だつてとつくにやっている。

それが出来なかつたから、彼の拳は何か硬い物を叩いたように赤い皮膚が破け、それよりも赤い液体を流しているのだ。

「すまん」

「駄目よ、シロちゃん。天狗様は頑張ってくれたし、私もそれなりに満足してる。．．．ちよつとだけ、残念だけどね」

シロの縋るような視線が沙耶とポチ、天狗、忠夫の間を巡り、だが、誰の表情にも何も見つける事が出来ずに落とされた。

「．．．シロちゃん。あんまり犬塚さんを困らせちゃ駄目よ？ 女の子なんだから、腕白なものも良いけど、大きくなったら良い男をしつかり捕まえる位になっちゃいなさい。きつと美人になるわよ、貴方」

「．．．くうん。なんで、なんでそんな事を言うでござるかああああ．．．」

「ほらほら、泣かない泣かない。ごめんね、シロちゃん」

堪えきれずに沙耶の座る布団にしがみ付き、顔を埋めて泣き出した少女を困つたように見ていた沙耶は、その向こうで顔を伏せたまま沈黙する息子に声を掛ける。

「忠夫、女の子が泣いてるんだから、男の子はどーするの？」

「．．．頑張つて、慰める」

「正解」

それは、いつも母が言っていた事だった。

だから、忠夫はゆっくりと顔を埋めたシロの傍に座り、その頭を撫でる。

だが、シロの泣き声は止む事無く、布団の中で大きくなるばかり。

「……まだまだねえ。これで、将来お嫁さん見つけれられるのかしら？」

「……頑張るから、大丈夫。絶対諦めずに頑張れば、出来ない事なんてあんまり無い、だったよね？」

「よしよし。ちゃんんと覚えてるみたいね」

そう言つて、母は大きく息を付いた。

「忠夫、頑張りなさい。何でもいい、やりたい事を、精一杯頑張つて。大丈夫、貴方は私とこの人の息子だもの。今は無理でも、いつかは泣いてる女の子を泣き止ませたり、泣かせない事も出来る。私の自慢の息子よ、貴方は」

「母上……」

「でも、出来ない事もきつとある。やりたいのにやれないことも沢山ある。頑張つたつて駄目な事も、あるわ」

そう言つて、母はもう一度浅く息を付いた。

「でも、でもね。本当にやりたい事があつたら、本当に泣き止ませたい女の子が居たら――」

—手段を選ばず、やっっちゃいなさい。石にハサミが負けるのなら、水をかけたら火が消えるのなら、そんなルールは投げ捨てて、貴方がルールを作ればいい。それくらい、やってみせて。頑張っても出来ないと思つたら、出来るように頑張るの。——やれる?」

「・・・やってみる」

「聞こえないわよ」

「やってみる」

「もう一度」

「やれるさ、やれるように頑張るさ!!」

うん、と頷いて、沙耶は嬉しそうに微笑んだ。

儂さの欠片も感じられない、不安の影も形も無い、少年なら必ず出来るだろうと信じきつた顔だった。

顔は伏せたままで、だが、確かに答えを返した息子を優しく見つめながら、沙耶は微かに息を吐いた。

「——なら、大丈夫よ」

「沙耶・・・」

「貴方、後は——」

ゆつくりと、瞳が閉じられた。

「——この子達を、お願いします」

「沙耶殿おおおおつ!!!」

少女の悲鳴が木霊する。

「・・・っ!!」

ゆつくりと息を止めつつある妻を抱きしめながら、夫が必死で堪え続ける。

「ワシは、ワシは、何故・・・っ!」

天狗の拳が床板を砕き、その拳が血を流す。

そんな、最期の瞬間に。

「・・・なあ、シロ」

忠夫は、小さく呟いた。

「俺、思うんだ」

誰もが己の無力を嘆き。

「頑張る時って、何時だよ」

誰もが己の不運を憂い。

「今は無理。きつと、頑張つても無理」

誰もが別れの辛さに震え。

「やってみるって言つといて、やるだけやった俺は、駄目なのか・・・？」

——だから、彼は、吼えるのだ。

「——つぎけんなああああああつ!!!」

突如拳がった咆哮に、呼吸を止めた女性以外の全ての存在から目が向けられる。

あるいは諦めを、あるいは憤りを、あるいは純粹無垢な悲しみを秘めた視線が向けられる。

全ての視線に戸惑いがあり、全ての視線に疑念がある。

だが、全てをブツ千切つて、ただ怒りのままに吼え猛る。

「やってやる！ 将棋の盤をひっくり返して、川の流れを地面ごと傾けて逆流させて、じゃんけんに新しい手を足してやる！ やるだけやって、頑張つたつ?! 駄目じゃねえか！ だったらルールが間違つてる！ そんなら反則技でも裏技でもなんでも使つて、俺がルールになりや良いだけだろーがつ!!」

「あ、兄上・・・？」

「シロっ!!」

その瞳は、只々怒りに燃えていた。

不条理に、苦勞が報われない運命に、無駄だと突き付ける法則に、ふざけるなど吼えていた。

混乱しきつた表情で目を向けた、未だ目から止まらぬ雫を流す彼女に、確認する為に言葉を重ねる。

「良いか、シロ。もー一遍だけ聞けど。『母上が倒れた。何かをしたい。そんな時、お前ならどーするよ?』」

真剣なその表情に気圧されるように、人狼の少女は目を見開き、天狗と男性は出しかけた言葉を詰まらせる。

だが、少女を貫く視線が、飲み込まれかけた言葉を無理矢理紡がせる。

「え……? だから、それは……精の付く物を取って来るでござるが……」

「……蜂蜜、とか」

続きを促す少年の視線に、殆ど思考の止まった少女が、それでも何とか吐き出した言葉。

それが、忠夫の聞きたかった事だった。

——もう一度、尋ねよう。

——覚えておられるだろうか。

——少年が、青年であった時、ある悪魔に、子供にされたときの事を。

——そう。

——彼は『子供でありながら、悪魔の鼠を噛み砕き、竜神の少女を抱え駆け回り、蛇の魔族に立ち向かった』のだ。

——『霊波刀も無く、霊能も無く、だが、身体能力だけは人狼の子供並みにあった』のだ。

「そうさ。俺とお前で、蜂蜜を採りに行ったんだ。熊が出て、二人で逃げ回って、ドロドロになって蜂蜜を持って帰ってきた俺たちを、笑顔で迎えてくれたんだ」

「・・・？」

それは今は彼の記憶にだけある『事実』。

誰もが曲げられぬ、絶対の眞実。

子供の心に刻み込まれた、母の最期の力を振り絞った、沢山の感謝の籠った、少しだけ困ったような笑顔。

傍から見れば、母を亡くした事で悲しみに吞まれた少年の戯言であつたのかもしれない。

視線を交わした大人達は、少年を一時の安らぎに任せようと動き出し、父は自身の為の手術を構え、天狗は眠らせるための薬を布に染み込ませる。

だが、そんな二人の行動は目に入らない。

あと、たった一言だけ。

それだけで、全部をひっくり返せると、彼の心が吼えていた。

「——此処は、違うっ!!」

言葉にすれば、1秒にも満たない時間の叫びでしかない。

だが、それだけで十分だった。

『——そう、違う』

忠夫の叫びに答えたのは、純然たる意思だった。

受け入れる為に記憶を封じ、受け入れ続ける為に魂の力を押さえ続け——変わる為に鍵を掛けた、絶対ながら絶対では無い、何物かの意思だった。

世界は歪む。

不純物を見つけた世界は、体内に入り込んだ異物を吐き出す反射行動のように、己の法則に従って異物を吐き出し始める。

忠夫の周りの空間に振動が走り、背後から忍び寄っていた大人達が弾き飛ばされ、生まれた余波は少女と母の身体を揺らす。

その振動のど真ん中で、魂が引き剥がされる激痛に苛まれながら、それでも目を開いて母の身体に手を伸ばす少年の姿が、ブレた。

一瞬、その小さな背中に成長した彼の姿が浮かび、みちり、と音を立てて肉体から引き剥がされていく。

腰が抜け、太股が抜け、足の先まで剥がされたその魂は、倒れこんだ少年の上から手を伸ばす。

「……ここからどーしろっちゅーのやあああつ?!

次に響いたのは、なんとも気が抜けるような情けない青年の声だった。

青いジーンパン、ジージャン姿のその背後に暗い穴が開き、猛烈な勢いで吸い込み始める。

だが、その影響を受けるのは青年だけ。

家の中の小瓶も、母にかけられた布団も、驚きで硬直したままの少女も、昏倒して倒

れ伏す大人たちも微動だにしない。

だが、じたばたと手足をもがさせる青年だけが、じりじりとその穴に引つ張られていく。

「はーんっ!! 失敗したんか俺はああつ?! いーやー! 格好つけるだけ格好つけて、駄目でしたつて言つてらかなり駄目な奴やんつ?!」

だが、そこでは終わらない。

「もがあつ?!」

もがく青年の口を押し開け、一本の腕が突き出された。

それは獣毛に包まれた、太く強い人狼の腕。

それと同時に青年の額に巻かれたバンドナに、獣の目と、人の目が開く。

『——ゴルオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

響いた咆哮は、確かに忠夫の方から聞こえていた。

狼のそれは、姿も見せず、だが確かに青年と少女の耳に届く。

答えるように目を閉じた母から『何か』が噴き出し、突き出された人狼の掌に収束する。

霊体なのに口の中から突き出された腕のせいで呼吸困難に陥つた忠夫が白目を剥き、それと同時に人狼の腕が、弾けた。

「——また、破綻しただどっ?! 何故、何故あ奴は何時もこうなのだっ?!」

「だから、だろう?」

「貴様か、手伝え。今度こそ固定する!」

「必要無いねえ。迎えは来てる。全く、何時も何時も彼はこうだ」

「——そうか、我は、また、踊らされたのか」

「そうかな? 僕は結構面白いと思っただけど?」

「・・・やはり貴様とは、合わん」
「合つたらそれこそ困りものだよ」

何も無い空間で、たった一つの存在が、長い長い糸に巻かれて動き始める。

それは、優しく呼ぶ笛の音と、強靱な意志と、緻密な古くも新しい魔法と、しようがないなあと言う感じの適当で強い力と、誤魔化すような魔力で綴られた細い糸。

だが、何よりも固い、切れない糸。

だから、彼は戻っていく。

平行世界は、世界樹とも言われるそれは、何故分岐しているのか。

選択する事で、たったそれだけで増えていくそれは、何故増えるのか。

生命が増え、変化するのは——生きる為、生き残る為。

環境に適応し、変化に対応し、遺伝子を残す為だろう。

では、世界が増えるのも、似たような理由ではないだろうか。

幾つかの選択の先にある破滅を避け、続いていく未来を探し、在りつづける為に枝を増やしていくのではないだろうか。

世界も、きつと、消えたくは無いのだろう。

どうしても避けられない破滅が在るのなら、枝が増え様も無い枝なのならば、時には非常手段も取るのかもしれない。

偶々はぐれた因子を取り込み、その瞬間に叩き込む。

無理矢理、乱暴、無茶。

その通り。

全く持つてその通り。

だが、もしかしたら、の一つも無ければ。

世の中はきつと、つまらない。

「はっ?! 此処は誰? 私は何処っ?!」

「はっはっは。一週間も眠り込んで、目覚めて早々捻りがあるようでない台詞だね、横島君」

飛び起きた忠夫の目に、一番最初に写りこんだのは、苦笑いを浮かべた西条だった。

思わず仰け反る忠夫の脈を取り、呼吸を確かめ、瞳をペンライトで確認した彼は何度か頷くと、背後を差してこう言った。

「帰ってきて早々悪いが、あれを收拾つけてくれたまえ」

呆然としたまま忠夫が首を動かせば、窓の外は都会の景色で埋め尽くされていた。

何台も連なつた車たちが放つ喧騒と、姦しい街の声。

里では匂わなかつた排気ガスと、雑多な人々が放つ化粧品や香水。

そして。

「だって、だってだって美神さんばかりアピールしてずるいじゃないですかあつ!!」

「なつ、だつ、誰が何時アピールしたのよおキヌちゃん! ペットの餌付けは飼い主の役

目だけでしょ!!」

「誤魔化しても駄目です! あの料理も、今作ろうとした料理も、何時もよりも気合が入ってるじゃないですか! しかも買ったはいいけど恥ずかくなつて筆筒の中に隠してたフリルのエプロンまで付けて、説得力なんてありません!」

「なんでおキヌちゃんがそのこと知ってるのよ!」

「しかもちよつと化粧までしてるくせに! ふえーん! 美神さんばかりずるいずるい!」

「お、落ち着いておキヌちゃん!」

美神とおキヌが、大量の肉の前でわいわいぎやーぎやーやっている。

しかもおキヌが美神に食って掛かり、涙目のおキヌに美神が押されていると言う非常に珍しい光景である。

ピンクのフリルのエプロンを付けた美神は、意外な事に非常に家庭的に見えて良く似合っている。

だが、おそらく自前の真っ白な飾り気の無いエプロンを付けたおキヌも、その切羽詰ったような表情と美神もたじたじの迫力を除けば、常の優しげな雰囲気と相俟って非常に魅力的だった。

「ま、あそこが最初で——って、もう行ったね」

視線を向けた忠夫は一瞬で消え、次の瞬間には無意識に振り上げられた美神の膝に撃墜されていた。

何時もの台詞を吐く間も無く流血した忠夫を、どーした物かと横目で見ながらおキヌの矛先から外れてほっと安堵の吐息を吐く美神と、倒れた忠夫を揺さぶりながら噴水のように溢れる血潮をハンカチで押さえるおキヌ。

「これ位、この修理ロボット『大工の珍さん』を使えば一発よ。それ、ポチつとな」

「だから怪しげな機械を使わないで下さい——って、なんでいきなり中華風に改築し始めてるんですかあっ?!」

『アルヨー。中華の基本はファイヤアアアアアアアツ!!　　・・・アルヨー』

「・・・ネーミングに問題があったのかしら」

「根本的な間違いに気付いてくださいいいいっ!!」

「魔り・・・店長!　ほら、新しく作ってきたよ!」

『しゃげー』

「何で動いてるんですかつ?!　　と云うかあつちの食材を使うのはやめて下さいって云つてるでしょうっ?!」

「多分美味しいに違いないさ。ほら、んぐ・・・ぐ、ふ」

「ああまたっ!　　ば、万能薬はまだ在庫あつたかしら!？」

その向こうでは怪しげな八の字髭を生やしたロボットが、綺麗な洋風のレストラン魔鈴を見るからに不審な中華飯店に改築しようとして箒に掃きだされ、メドーサが奇妙な極彩色の蠢く何かを食べていきなり前のめりに倒れている。

外に出たロボットに銃弾を打ち込んだ西条は、完全に動きを止めた事を確認して溜め息一つ。

「・・・横島君が無事に帰って来れた事を祝う会、はどうなつたんだろうね」

メドーサが料理を学びたい、とルシオラに対抗して危険薬の密造・保管で説教を喰らつて留置場で冷たいご飯を食べ終えた魔鈴に弟子入りしたり、魔鈴が魔族と元魔族の

問題児二人を抱えてついでに頭も抱えていたり、レストランの開店が延びたり、何時になつたら魔鈴をデートに誘えるのか、と悩む西条が居たり。

その隣では復活した忠夫とおキヌが何気に良い雰囲気を作っていて、美神がそれを不満げに半眼で睨んでいる。

拳が光つて唸るまでカウントダウンは後数秒、と言つたところか。

「あー、全く。結局、僕が一番寂しいのかもしれないねえ」

だが、そんな西条の肩を叩く手が在った。

『アルヨー』

『しゃげー』

「・・・ま、待った！ 幾らなんでも同時はキツイっ!!」

銃弾を喰らつてちよつとへこんだロボットも、齧られて怒り狂った物体も、聞く耳は持たなかった。

「ま、魔鈴君、令子ちゃん！ 横島君でも良いから手伝って——うわわわわっ?!」

なべて世は事も無し。

そして、此処ではないどこかの歴史の枝葉にて。

「兄上っ！ ほら、修行の時間でござるー！」

「待て！ 全部食べてから！」

「早くしないと拙者が食うでござるぞ？」

「こら、子供のご飯を取らないの。ほら、ほっぺにご飯つぶ付いてるわよ」

「ん・・・ありがとうでござーありがとう！ では、行って来るでござーむー。なん
でござるっていつちやうかなー」

「ふふふ、ほら、行ってらっしやい」

「行ってきます！」

「行ってくるでござる！」

「——母上っ!!」

第伍拾伍話

窓の外は、雨だった。

嵌め込み式のガラスを強く雨粒が叩く度に床が僅かに揺れ、明るい室内を微かに傾かせる。

グラスの中身に波が立ち、写り込んだ貧相な男の顔が歪む。

「いよいよよさんすね……」

右手にワインの満たされたグラス、そして左手には大人の握り拳が入るくらいの、コルクで蓋をされたガラスの瓶。

その表面に魔法陣の描かれたその中には、白いローブを纏い、槍のような杖のような細い棒を持った小さな人影がある。

陰鬱な影に覆われたその人影は、グラス越しに勝ち誇った笑みを見せてつけるその男の顔を見たくも無いとばかりに顔を背け、沈痛な面持ちを見せていた。

「げへ、げへげへへへ……」

貧相な顔の上に乗った、これまた貧相な髭を弄くりながら、その男は不気味な高笑いを上げつつ有り金はたいて買ったタキシードに身を飾り、景気付けの美酒に酔いしれ

る。

全ては、明日から。

彼の栄光と巨万の富に満ちた人生の始まりは、明日から。

そう、常勝無敗、最強のギャングブラーとして、彼は明日から一躍有名人になるのだ。

「げーっへっへっへっへっ!!」

——少なくとも、彼の頭の中では、それは確定された未来だった。

カーテンを開いて背筋を伸ばしつつ、すっかり早起きになった太陽に向かって欠伸を一つ。

半分閉じた寝ぼけ眼のまま、軽く体操しつつも一つ欠伸。

今日も今日とて良い天気。

夜明けの太陽は初夏を過ぎて梅雨に入った事を知らせたがるように力強く、さりとして入った筈の梅雨の気配は欠片も無い。

早朝も良い所の筈の都会だが、相変わらずの喧騒だ。

都会にしては家賃も安く、その代わりと言つてはなんだがボロボロのアパートであるが、隙間風に悩まされる事も無くなり、ここ最近はそれなりに快適な生活を送らせてくれている。

アパートの近くを走る道路からは、朝も早くから新聞配達の声が「おはようっすー」と元気良く響き、返事とばかりに『アルヨ』と魔女の店から逃げ出している異様なまでの頑丈さとパワーfulnessから未だ逃走中のロボットの声が――。

「・・・まだ逃げてたんかい」

逃げてます。

とは言え特に害も無く、巷ではその何とも言えない味のある外見から親しまれつつあるメカ珍さんが新聞配達のにーちゃんと挨拶を交わしたらしい声を聞き流しながら、忠夫は窓から飛び出した。

最近はウリ坊だった主の子達もすっかり成長し、主よりは二回りほど小さいとはいえ

中々侮れない相手である。

気合を入れながら頬を叩き、まだ少々肌寒い朝の空気を掻き分けつつ、忠夫は日課と化した食糧調達へと駆け出すのだった。

「——行つたね」

飛び出した部屋の中で、押入れの少女がごそごそと這い出してきた事には気付かぬままで。

二時間後。

「うわははははっ！ 大量じゃいっ!!」

住宅街の塀の上を駆け抜ける、風呂敷包みに大量の食材の元を詰め込んだ忠夫の姿があった。

魚の尻尾や何かの動物の足がはみ出た風呂敷を背負って傷だらけ、しかも頬には赤い何か。

どつから如何見ても不審人物であるが、既に半ば都市伝説と化している為誰もが見てみぬ振りである。

なにやら、女性が声を掛けると一緒に連れて行かれるとか、子供が泣いていると攫つて行く「なまはげ」の変種だとか、いやいや実はジャングルから出て来た未開人だとか種々様々な話があるが、基本的に無視すれば無害だという話なので。

ともあれ、視界に入った次の瞬間には風のように通り過ぎて行く為、未だに官憲のお世話にはなっていないのが事実である。

「たっだいまー！ つつても寝てるだろーけどな！」

「遅い」

「うおわっ?!」

がらつ、と玄関ではなく閉まっていた筈の窓を開けて帰宅した忠夫に、不貞腐れたメドーサの声が掛けられた。

不機嫌な、と言うよりも寝不足で苛苛した様子の彼女は、忠夫の風呂敷を引っぺがし、部屋の隅に放り投げると状況を把握できずに硬直していた彼の襟首を掴んでちやぶ台の前に座らせる。

そのまま台所に歩いていき、すぐさま数皿の湯気を上げる何かを持って戻って来た。忠夫の物問いたげな視線をすっぱり無視しながら、やや重い音を立てて次々と並べられていくそれら。

「おら、食いな。私は寝直すよ、早起きなんてするもんじゃないねえ・・・あぶ」

素つ気無く言い放ち、そのまま押入れに戻っていく彼女の背中を見送りながら、忠夫はどうした物かと冷や汗を流して硬直継続。

目の前の皿達は、不思議な事に、そう、魔鈴の家で食べさせられたあれと比べて不思

議なほどにまともに見えるのだ。

ほんのりとクリームの匂いを上げるシチューっぽい物、おそらく野菜サラダであろう物、そして焼きたての食パンに見える物。

見た目だけならモーニングセットとして店にも出せそうな出来栄であった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

だが、忠夫の本能は、その美味しそうな匂いも完璧な見た目もそっちのけで、ひたすらに警鐘を鳴らしている。

それに、冷蔵庫の中には何も無かった筈である。

つまり、この目の前の料理の元は、おそらく魔鈴さん家のレストラン、若しくは異界からの賜り物。

正直言つて、このままゴミ箱に投げ捨てたいくらいである。

だが、そう、だが。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

メドーサが、押入れの隙間から期待するような目で見ているのだ。

忠夫が振り向くとぱたんと音を立てて閉まるものの、視線を外した途端にほんの少し

だけ開いてまた視線が突き刺さる。

悪意の無い、色々と複雑な物の感じられる視線ながらも、基本的に「食べる」と言う感情が大きい上に、何となく責められているような気になるから困り物である。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ちらり。

ぱたん。

視線を戻す。

かたん。

フエイントを掛けて即振り向き。

ぱんっ。

結構な勢いで襖が閉じた。

視線を戻す。

かたん。

どうあつても顔を見せるつもりが無いようであり、何が何でも食べる所を見たいようである。

意を決して、一口。

ちやんとちやぶ台の上に紙ナプキンと共に準備してあつたスプーンを取り、ぶるぶると震える手を意志の力で押さえつけ、ゆっくりと口に含む。

——シチューは、何故か口の中に入れた瞬間暴れ出した。

「もぐおっ?!」

慌てて噴出しそうな口を押さえ、無理矢理に飲み下す。

不思議な事に、お腹に滑り落ちた途端に大人しくなつた。

が。

——後味が、異様に辛かつた。

「ぼはあああつ?!」

顔を真っ赤にしながら台所に駆け出した忠夫の耳には聞こえない物の、舌打ちしたメドーサはどこか残念そうな表情で押入れから抜け出し、こそこそと隠れながら辿り着いた窓から外へと飛んでいく。

狭い部屋に水道の蛇口が全開で水を噴出させる音と、それが真下で待ち受ける忠夫の口内に流れ込んでいく音が暫し響き、たつぷり数分して漸く止まつた。

荒い息を付きながら戻つて来た忠夫は、襖の開いた空っぽの押入れを見てたらこのようになつた唇で呟いた。

「……見た目と匂いふあ普通なふあけ、凶悪つふよ魔鈴ふあん」

「全くその通りよねー」

「つて何時の間にお前は入ったんじゃいつ?!」

さめざめと涙を流した忠夫の言葉に答え、突如として響く声。

振り向いた忠夫の目に、腕組みをしながら深々と頷くルシオラの姿が目に入る。

その格好は初めて会った時のそれではなく、長い白地のスカートに白い簡素な上着と薄い緑色のカーディガンの組み合わせも目に鮮やかな一般人風。

魔鈴と西条の説得もあり、なんと人界に適応しつつある魔族。

それで良いのか魔神の娘、と言う突っ込みこそご無体であろう。

ともあれ初めて目にしたそんな格好も気にせず突っ込んだ忠夫であるが、その瞬間には唇も喋り方も元に戻っているのが不思議である。

「何時からって……ついさつき。タダオがメドーサの料理の前で脂汗流してた辺りかな？」

「止めろや同僚っ!」

「駄目よ。それじゃ私の出番が無いじゃない」

娘と同じ職場で働くウエイトレスに突っ込む物の、あっさりと流してペットボトルを手渡すルシオラ。

「ま、飲んでみて。すつきりするから」

「・・・大丈夫だろーな？」

「大丈夫だつて。ほらほら」

弾けるような笑顔、とはこう言うものを言うのだろう。

その笑顔に湧き出しかけた不安を打ち消された忠夫は、まだ咽の奥にこびり付くしつこい辛さ押し流す為にも迷わずラッパのみにボトルを傾けた。

なんかどろつてしてた。

「・・・っ?!・・・っ!!」

「え?.. どうしたの?..」

不思議なものである。

流し込んだ液体は確かに水のようにサラサラとしていたのに、口の中にはもう勘弁してくださいと言いたくなる位に後味のしつこい甘さがあったのだ。

再び忠夫は台所に駆け出し、後には首を捻る魔族の少女が一人。

水音と盛大な呼吸音が落ち着き、ペットボトルの中身があらかた流しの穴に吸い込まれてから、漸く忠夫が戻つて来た。

「なんじゃ朝っぱらからこの地獄のコンボはあああああつ?!」

「五月蠅いわねー。朝なんだから静かにしなさいよ」

「誰のせいだよ誰のっ?! てか何で二人していきなり俺に食べさせたり飲ませたりすん

だ！ あれか火曜サスペンス劇場かつ?! ウェイトレスは見てたと見せかけて犯人でしたとか言う落ちかつ?!」

「やーねえ。店長が倒れちやつたからお店休みになっちゃって、暇なだけよ。ついでの意見も聞けなかつたから何が悪いのか聞いてみようと思って」

「どうやら、犠牲者一号は魔鈴だつたようだ。」

間に水道水とは言えりセットの機会があつた忠夫はともかく、おそらく殆ど同時に喰らつたであろう雇い主の冥福を祈りたい気分である。

「というか、あの辛さの後に飲み物を差し出されたら、思わずラツパのみしてしまうであらうから——被害は2乗で済んだだらうか。」

「・・・取り合えず、見た目よりも先に味を何とかしろつて」

「えー、美味しいのに」

「そう言つて、触覚をピコピコ振りながら笑顔で取り出した二本目のペットボトルを飲むルシオラ。」

「凄く嬉しそうなその表情が、全く持つて本気である事を告げていた。」

「・・・も、いい。俺は普通の朝飯を食う」

「あ、待つて待つてもう一本試して欲しいのが」

「頼むから帰れお前はあああつ!!」

忠夫が叫んだ瞬間、玄関がどかんと蹴り開けられた。

「横島くん、急ぎの仕事よっ——つて貴様！ 女を連れこんでお泊りかあああつ!!」
「誤解や美神さああああん!!」

当然、聞いては貰えなかった。

ともあれ、騒がしさだけは此処を超えるアパートは無いだろう。

隣の花戸一家も慣れた物、嵐のような悲鳴と破碎音が隣から聞こえてもぐつすりである。

それだけに、この部屋の騒がしさが日常となつている事実が見て取れるのだが、純粋にあの親子の神経が太いだけ、と言う可能性も捨て切れない。

「わああ．．．．おつきな船ですなあ．．．」

「全く、成金の悪趣味も極まりつて所ねー」

一通り唯一の男性所員をシバキ倒し、反論どころか呼吸さえも止めかねない勢いで忠夫にモザイクが掛かり始め、それから外に止めた車の中から物音を聞きつけたおキヌが駆けつけるまでに掛かった時間が長かった。

これから依頼がだから、と言うおキヌの一言で止まったには止まったのだが、今回忠夫は中々復活しなかった。

なんだか、何時もよりも凄く迫力がありました、とはおキヌの弁。

ともあれ傍からどーでも良さ気に眺めていたルシオラのフォローも在ってか子供は見ちやいけません、な状態の忠夫の誤解もそれなりに解け、GS美神除霊事務所は緊急出動となったのだ。

目指すは東京湾、海上のとある巨大な船。

ぎんぎらぎんに全くさり気無く無い、ド派手な、と言うよりもひたすら金の掛かった

外装の客船は、ボートに乗った4人の目から見てもいやに威圧的だった。

「・・・ねえ、横島くん？」

「ナ、ナンデシヨウカ美神さん」

「何でその小娘が付いて来てるのかしら？」

「あら、良いじゃない。折角暇なんだし、一人くらい大丈夫大丈夫」

ちやきん、と伸ばされた神通棍が忠夫の後頭部をぐりぐり抉る。

両手を上げて降参のポーズの忠夫も、どこかお手上げのようにも見える。

原因のルシオラは、鼻歌交じりに楽しげに、物珍しそうに目の前の巨船に見入っていた。

「大丈夫じゃないわよ！ こちとら仕事で来てんのよつ?! 部外者に邪魔されたらたまらないの！ とつとと魔鈴のところに帰りなさいっ！」

「ま、まあまあ美神さん。ルシオラさんも都会に出て来たばかりなんですし、少しくらい良いじゃないですか」

「やつさしー！ ありがとうおキヌちゃん！」

何処の田舎者だ、とおキヌに突っ込む美神を余所に、ルシオラはおキヌに抱きつき非常に嬉しそうである。

自分よりも背の高い、更にいえば年上のようにも見える彼女のそんな幼げな態度に苦

笑いを浮かべつつ、おキヌも少し楽しそうである。

新しい友人、と言う縁が結ばれつつあるようだ。

それを仁王立ちで睨み付けながら、美神も美神で譲らない。

「あのねえ！ 除霊っていうのは危険なの！ 油断が死に繋がる、命懸けのお仕事なのよ！」

「だから大丈夫ですつて。こう見えても、私、結構強い魔族なんですから」

「……ああつ、そう言えば魔族だった!!」

「どーという意味よっ!!」

そう言えばそーだった、と危うく忘れかけそうになった事実が思い出される。

一連のどたばた騒ぎの中で、彼女が魔族である事を殊更に示す事態にならなかったし、なにより忠夫が危うく消滅しかけるといふ緊急事態の中で、すっかりあっちの方において置かれた事実だ。

今の格好は現地人風であることだし。

流石に3人全員にそれをやられたルシオラが頬を引くつかせてはいたが。

「……ま、まあそんな訳で、行っても良いでしょ？」

「……変に目立ったり、仕事の邪魔したりしない事。久し振りの巨額の依頼なんだから、邪魔したら極楽に行かせるわよ！」

「はいはい」

軽く答えて、魔族の少女は手をひらひら振りながら船室へ。

舵やら航行設備やらの見学に行ったらしい。

後に残るはしかめっ面の美神と困ったような笑顔のおキヌ、神通棍の後頭部霊波放射に耐え切れず痙攣中の忠夫のみ。

どうやら美神の感情の発露が、思いつきりそちに流れたようだ。

「全く……除霊見学に付いて来る魔族なんて聞いた事無いわよ」

「あはは……横島さん、大丈夫ですか？」

「お、俺が一体何をしたああああ……」

何もして無いのが問題なのかもしれないが。

ともあれ、小さなボートは波を蹴立てて、昨夜の雨の影も形も無い青空の下、豪華客船に向かって白い線を引いていく。

トラブルが向こうから寄ってくる、面倒な面子を乗せたまま。

「……ほおー、あれが美神令子か。成る程、調べた通りの美しい女性じゃないか」

「はい。今回の依頼、無事に受けていただけただけで何よりでした」

巨船から降ろされたタラップを上がって来る美神をブリッジから双眼鏡で見っていた男が感嘆の表情を浮かべる。

優男、と言つても良いだろうその顔には、何処までも爽やかな雰囲気か漂っていた。双眼鏡を横に控えた初老の男性に手渡し、スーツの襟を締めて調える。

なんと言うか、良い所のお坊ちゃん、と言う感じではあるが、纏うオーラにはそれなりに気品があつたりする。

「……しかし、依頼と言う形を取らなくても良かったんじゃないかな？」

「ま、まあ、お客様方に安心していただく、と言う意味もございますので」

「ふむ……まあ、良しとしよう。行こうか」

「はい」

意気揚揚と歩き始めた男性の後を追いながら、初老の男性が溜め息一つ。

美神達を通された、豪華客船の一室。

ソファーに腰掛け足を組む美神の前で、初老の男性が恐縮した様子で何枚かの紙を差し出した。

「それで、可及的速やかに乗船する事、という話でしたけど？」

「は、はい。実は、この船なのですが……一度、襲われていまして……」

「……シージャックか何かですか?」

返つて来たのは否定の言葉。

美神も自分が呼ばれた以上、それが霊障関係の事だとは予想してはいたが、続いた言葉は流石に予想外だった。

「せ、潜水艦の幽霊、ですか?」

「はあ。その時に助けて頂いた方の話に寄れば、間違い無いそうで」

襲われたのは去年の慣熟航行の際の事だった。

財閥の威信と幾ばくかの見栄を持つて作られたこの船は、その背負った物ゆえに生半な一流以上のものを求められた。

より良いサービス、より良い航海、より良い料理。

それらの実地訓練を兼ねた初航海は、沖合いに出た途端に終わりを告げたのだ。

突如、至近から放たれた魚雷によって。

幸い、その時は何処からともなく現れた小さなボートの奮闘の結果、大した損傷もなく帰港することが出来たのだ、が。

助けてくれたボートの人物が「奴はまた来る! この獲物を狙つてなあああつ!」と仰つたらしい。

「その人は今何処に?」

「……今回の航海にアドバイザー兼護衛船として付いて来て貰う予定だったので……ぎっくり腰だそうで」

「あ、そ」

……此処から先は美神達には伝えられなかった事であるが。

と言う事で専門家に依頼する事になったのだが、正直な話、始めは手頃なGSか海上保安庁にでも話を通そうと言う事になっていたのだ。

だが、当主の鶴の一声にてGS美神令子に依頼をする事になったのだ。

曰く、客を乗せた処女航海に掛ける金をケチる事はない、盛大にやってこそ意味がある、と。

G S美神令子、確かな腕と、それに裏付けされた巨額の報酬。

そう言った意味では、彼女の存在も一つの広告塔でしかないのだろう。

無論、実力を伴っているからこそその美神への依頼である事も疑うべくも無い事実なのだが。

「わあ、横島さん、これ美味しいですよ?」

「ん、おお! こりや美味い! 朝からまともなもん食ってなかったから余計に美味く感じるなあ・・・」

「へええー、綺麗なお菓子ねえ」

ま、助手と付き添い達は関係なさげにお茶菓子とお茶に舌鼓を打っていたりする訳だが。

目の前の依頼人が不安げな表情になったので隣に座る忠夫に向かって振り向きもせず、裏拳をぶち込み沈黙させたのだが、依頼人は余計に疑わしげな顔になっただけだった。

誤魔化すように立ち上がった美神は、契約書を受け取りじっくり目を通すとおキヌに渡す。

受け取ったおキヌが忠夫の運んできたアタッシユケースに他の書類と纏めて納めたのを横目で見つつ、美神は初老の男性に向かって手を差し出した。

「それでは、今回の依頼、確かに承りましたわ」

「ありがたい。ああ、その、受けて頂けるのでしたら是非お会いしていただきたい方が――」

初老の男性の声を遮り、爆音と共に巨船が揺れた。

断続的に響く爆発音に素早く美神が窓に掛けより外を見る。

瞬間、窓の外に白い柱がそそり立った。

再び大きく揺れる船。

バランスを崩した美神が窓枠に掴まり、荷物とおキヌを抱えて確保している忠夫と僅かに床から浮いて一人のほほんとお茶を啜るルシオラを見る。

声を掛ける寸前、応接室の扉が勢い良く開かれた。

「――GSの方はこちらですか?！」

「どうしたつ?!」

「来ました! 例のヤツです!!」

駆け込んできた、船員と思しき若い男性の声に美神と忠夫の視線が交わされる。

一度頷きあつた二人は、抱えられて状況に置いて行かれたままのおキヌを伴い、荷物を持つて駆け出した。

そして、一人お茶を飲んでいたルシオラはと言えば。

「いつてらっしや〜い」

「手伝うんじやなかつたのっ?!」

軽い笑顔で手をひらひら、完全に見送りの体勢である。

だが、ドアに手を掛けて額に血管を浮かべて怒鳴った美神が見たのは、頬に手をあて酷く驚いた表情の自称強い魔族○だった。

「そんなっ! か弱いウエイトレスに何を言うんですかっ?!」

「言ってる事がさつきと違うでしょうがっ!!」

「GSの方、お早く!」

「ええいつ! 戻ってきたら覚えときなさいよっ!」

とは、言うものの別にルシオラ、手伝うとは一言も言っていないので後で問い詰められても平気だったりするのだが。

あくまでも笑顔で見送ったルシオラの後ろで、最初の振動の際に転んでいた男性が立ち上がる。

「いたた・・・はっ! 三郎様! 三郎様は!」

慌てて飛び起きた男性が、美神達が出て行った扉とは違う扉を開くと、爽やかな笑顔で頭にたんこぶを抱えた男性が気絶していたり。

「さ、三郎様——!」

「あ、これも美味しいわねー。後でレシピ教えてもらおうつと。魔鈴に良い土産が出来そうねー」

何とも温度差のある事である。

「で、どーすすんすか美神さん？」

「・・・潜水艦つてのが厄介よね。相手は海中でしょ？ とりあえず海から引つ張り出さないことには話にならないでしょうし」

船内を甲板に向かって駆け上がりながら二人の間で会話が交わされる。

振動は既に鳴り止み、奇妙な静けさが漂っていた。

軽く50キロはありそうな荷物とおキヌを抱えたまま、美神の少し後方を走る忠夫の表情は平然としている。

この程度の重量ならば無いも同然であるし、何より所長の能力はおキヌと共に一番近くで見えてきた忠夫である。

まあ何とかなるだろう、とは思っていた。

「どーやって引つ張りだすんすか？」

「・・・ま、最悪ボートで逃げましょ」

「美神さああああああんっ?!」

駄目かもしれない、とふと浮かんだ。

ともあれ、駆け抜けた二人の目の前には甲板に続く扉がある。

呆けたような、少し頬の赤いおキヌをそつと立たせて忠夫が扉を蹴り開け、間を置かずに飛び出した美神の耳に。

『どおこだああっ！ 出て来い鱧町いいいっ!!』

「だああっ?!」

潜水艦の癖に思いっきり海上に浮かび、その上で叫んでいる幽霊の声が響いたり。

引いて、いともあっさりと成仏していったのだった。

「……もう大丈夫です。皆、いっちゃいました」

「あー、そう。んじやとつとと帰りましようか」

「——ああつ?!」

と、疲れた様子で船内に引き返そうとした美神の耳に、今度は忠夫の驚いた声が聞こえた。

何事かと忠夫の指差す方向を指した美神の視線の先には、一隻のボートが波を切り裂き巨船の横を駆け抜けていく様子がある。

それは、美神達が来た時に使った舟であり——乗っているのは、えらく錯乱した様子の方ちゃんであった。

「——シエー!!」

そのボートがもう直ぐ船の横を行き過ぎるその瞬間、今度は何故かどつくの昔に振動の収まった筈の巨船の窓から、妙な悲鳴を上げて貧相な男が落下し、ボートのど真ん中に突き刺さる。

——誰が知っているだろうか。

夜のカジノでの勝利を夢見て、調子に乗って深酒が過ぎて幸運の精霊を入れた瓶をテーブルの上に置いて眠りこけていた男がいた事を。

そして、先程の振動でその瓶が落ちて割れ、中に閉じ込められていた精霊が脱出したことを。

怒りに燃えた精霊が、貧相な男に不幸の呪いを掛けた事を！
知る訳が無い。

ともあれ、美神達の前でボートは蛇行し始め、巨船の壁にぶつかってあっさり転覆した。

「誰か溺れてるぞ！」

「当主、当主だー！」

「あの馬鹿ボンボン、今度は何とち狂いやがったつ?!」

「サメだー！」

「誰か銃もってこい銃っ！ 一応当たらないようにそれなりに気を付けて、とつとつサメを追っ払え！」

船員達が美神達の横を駆け抜け、普通は備え付けて無いだろう機関銃や手投げの銃、スパナやらトンカチやらを持って溺れる2人の真上に集まる。

やがて銃声と2人分の悲鳴が響き、もう一つ水音が響いた。

「三郎様ー！ ぼぼぼぼ．．．っ！」

「爺さんが行ったぞー！」

「年寄りの冷や水も良い所だっ！ あの爺さん泳げねえだろうが！」

「当主はいいから爺さんを先に助けろっ！ 当主は別にいいけど爺さんが死んだら先代に祟られっぞ!!」

喧騒が大きくなっただけだった。

「来て、吹いて、終わったって感じっすねえ……」

「何纏めてんのよ。ともあれ、依頼終了！ 絞れるだけ絞るわよー！ あのボート、それなりの借金で差し押さえたんだから！」

「あはは……」

船は行くよ何処までも。

波をチャップチャップ掻き分けて。

帰りの手段が無くなった事に応急手当を受けた3人が陸に送られてから気付き、仕事の予定が空いていたのでちやつかり短い休暇を取る事になったりもしつつ、無論その間仕事が出来ないからと所長が追加で報酬アップに成功し、ほくほくと笑みを浮かべた一幕もありつつ。

美神の高笑いが響く中、娘の心配をする半人狼と学校の心配をするネクロマンサーの女子高生、そして試作品で船の料理長を悶絶させている魔族の少女を乗せて、豪華客船はそのまま処女航海に乗り出したのだった。

第伍拾陸話。

「気持ちいいですよねー美神さん♪」

「……」機嫌ねえ、おキヌちゃん」

今日も天気は晴だった。

燦々と照り付ける太陽の下、甲板の上でちよつと早い昼ご飯を済ました美神は、緩やかな潮風を受けながらのんびりと座っていた。

その視線の先では、客船の中にある売店で購入したつばの広い帽子を被ったおキヌが機嫌良さそうに歌いながら水平線を眺めている。

先程もう一人の従業員に「良く似合っている」と褒められたのがそこはかとなく嬉しかったようである。

現在、船は東南アジアに向かって航行中。

美神達が乗ってから、3日ほどが過ぎていた。

船はこのままあちらこちらに寄りながら世界一周の航路を取り、日本に帰ってくるのは半年後。

乗っている客も殆どが裕福な高齢の夫婦や引退した企業家、それなり以上の富豪達で

占められており、正に船を作った財閥の威信を掛けた航海である。

とは言うものの美神達には関係の無い事であり、彼女達は次の寄港予定地から日本にとんぼ返りする予定となっているのだが。

と言う訳で、まあ久し振りの休暇ということゆつくりしようとして身体をパラソルの下の真つ白な椅子で伸ばした美神の耳に、少し離れた所からの喧騒が響いた。

「一番！ 忠夫、いつきまーす！」

「本気か小僧おー！」

「うわーっ！ ほんとに飛び降りたぞー！」

続いて聞こえる水の音。

船員達の騒ぎを横目に見ながら、飛行機は駄目でも船は良いのねー、と今更の感慨に耽っていた美神の耳に、船員達の驚きの声が聞こえてくる。

「うおおおおっ！」

「でけえぞ！ ありやなんだあつ?!」

「うむ、あれはっ！」

「知っているのか爺さん！」

ざばーん、と腰に紐をつけ、バンダナはそのままに、尻尾のはみ出たフンドシ姿の忠夫が甲板を越えて飛び上がった。

いや、正確に言えば勢い良く紐に引つ張られて水面を突き抜けたのだろう。

紐の先を視線で探れば、何故かコツクの格好をしたルシオラが包丁を片手に忠夫の腰に繋がるロープをもう片方の手で振り上げています。

普通の女性の、いかにも細い手であるのにあれだけの事ができるのは、やはり彼女も一応れつきとした魔族という事なのだろう。

と言うか誰も忠夫の尻尾に突つ込まないのが不思議では、ある。

アクセサリーと勘違いしているのか、それとも海の男は大らかなのだろうか。

大雑把なだけ、と言う話もあるが。

「こらー！ ちゃんと捕まえてなさいーい！」

「無茶言うなやー！ 今のウツボみたいなん、頭だけで俺よりでかかったんやぞー！」

「そうじゃー！ あれはまさに海の王！ その名も海王る——」

何か危険な事を言おうとした爺さんが、周囲の船員達に蝟殴りにされている。

ぐるぐるとロープで巻かれてすっかりぎっちり猿轡をされた老人を、船員達がよっこらせと一声かけて持ち上げた。

「暫く医務室に放り込んでくぞー」

「あー、頼んだ」

「もう歳だからなあ」

「んだんだ。さあてお仕事お仕事」

見なかつた事にするらしい。賢明な判断である。

だがまあ、見なかつた事にしても在る物は在る訳で。

ぞろぞろと連れ立って簀巻きの老人を運んでいく船員達の後方では、ルシオラがロ―プを振り回して先端の忠夫を縦横無尽に操り、忠夫も忠夫で名称不定の巨大ウツボに噛まれそうになるのを必死に回避していた。

ルシオラのところに笛を握ったおキヌが慌てた様子で、しかし帽子が飛ばされないようにしっかりと押さえながら駆けつけるのを横目に、美神は椅子から立ち上がると船室に向かつて歩き出す。

「・・・慣れてって怖いわねー」

誰に言つた言葉やら。

だが、船室の扉に手を掛けた美神は動きを止め、緩んだ雰囲気を一気に引き締め除霊時のテンションまでその知覚を跳ね上げた。

——靈感に引つかかる物があつた。

何が、と言う訳ではない。

が、確かに彼女は感じたのだ。

ドアの中からの、その強烈な圧力を。

ドアノブからゆつくりと手を離し、足音を立てないように下がって行く。

懐には携帯している神通棍が一振りのみ。

意図しない突風が吹く事もあり、海に落ちたら回収できない為、破魔札は忠夫に持たせた荷物の中である。

行くか、それとも退くか。

「……つたく、折角人が羽を伸ばそうって言うのに」

じりじりと下がり、船室の中にある圧迫感が移動しない事に安堵しつつ、甲板に向かつて後ろ向きに進んでいく美神の背に、けたたましい足音が迫ってきた。

「ぶええつくしよんっ!! さぶっ! さぶいっ!」

「もうっ! いくら南の方に来たからって、まだ泳ぐのには早いですよ!」

「あはは、でもほら、コック長さんも喜んでくれたみたいだし良いじゃない」

「良くありません! 風邪を引いたらどうするんですかっ!」

どたばたと美神の隣を駆け抜けた3人は、美神の警戒も何のその。

美神達の船室から少し離れた所に取ってあつた忠夫の部屋——あまり遠い所にあると、もしもの時に合流が遅れるから、とは美神の弁——に飛び込んでいった。

「ちよ、ちよつとあんた達!」

と、美神が声をかけたのに反応した訳でもないだろうが、顔を真っ赤にしたおキヌが非常に残念そうなルシオラをぐいぐいと押しつけて部屋から出てきた。

忠夫が部屋に飛び込んで直ぐ着替えようとした為であるが、美神はそれ所ではない。

何せ、美神の船室から感じる威圧感が、ゆっくりと扉の方に向かって移動し始めたのだ。

「・・・つく! 横島くん、今直ぐに一番高い破魔札持つてきなさい!」

「うえっ?! こ、この先の展開が読める! 俺まだ死にたくないっすっ!」

「良いから早く持つてこんかあつ！」

非常に慌てた忠夫の声をそっちのけで、美神は船室の扉の前を通り抜け、おキヌを背中に庇つて神通棍を構えた。

感じる圧力は只者ではないが、忠夫がお札を荷物の中から取り出し持つてくるまでの僅かな時間を稼げれば良い。

直ぐに取り出せるように荷物の中身も整理してあるので、そんなに長い事は無い、筈。そして背中側で荷物をかき回す音を受けながら、ゆつくりと目前の船室のドアが開いた。

重々しい音を立てながら、豪華客船の船室に相応しく彫り上げられ、飾り上げられたドアが開き、現れたのは。

『……おお、そなた達がこの部屋の主か？』

「……あれ？」

ふよふよと浮く、小さな影だった。

先程までの威圧感はずいぶんも無く、どちらかと言うと優しげな雰囲気その影は、美神達を見ながら微笑を浮かべ——凍りついた。

『ふ、不埒者っ！』

手に持った槍のような杖のような、両端にトランプのマークがくっついた奇妙なそれ

を振り上げながら、警戒心バリバリで美神の後方に怒鳴りつける小さな影。

慌てて振り向いた美神の目に。

「へっ?! ……よ、よよよよよっ!」

股間にタオルを当て、破魔札の束を持って凄く情けなさそうな顔で突っ立っている忠夫が写ったりして。

おキヌは耳まで真っ赤にして窓の外に視線を飛ばし、ルシオラはそのおキヌに両手で挟みこむように頭を掴まれて納得いかなさそうに同じ方向を見ている。

そして、やはり美神の神通棍が唸りを上げて振り上げられる訳でして。

「……あーもー! こうなるって分かってたのに俺のアホおおおっ!! でもちよっと快感がっ?!」

「横島ああああっ!!!」

ぱりーん、と乾いた音を立ててガラスを突き破った半人狼は、再びまだまだ冷たい初夏の海にダイブする事となった。

ひらひらと空中を漂うタオルが、風に巻かれて遥か彼方へと飛んでいく。

水音はそんなに大きく響かなかったそう。

「あつははは、泳いでる泳いでる。この船も結構速いから必死ねえ」

「うわー、うわー、うわー、見ちゃったー・・・」

「即刻忘れなさいっ！ あんの馬鹿はっ!!」

窓の下で必死の犬掻きを敢行中の忠夫（全裸）を無理矢理記憶からたたき出し、熱を持った頬を叩いて意識を焼き付いた画像から強引に引き戻す。

おキヌ達が鮫だの大きなウツボが鮫を食べただの忠夫が追いかけてるだのと騒いでるが、とりあえず無視。

「変態は死んだわ。ご用件は何かしら？ 幸運の精霊さん」

『・・・いや、良いのか？』

「死にやしないわよ」

頭痛を堪えるように額に手を当てた美神の一声であった。

ともかく、と掌を打ち合わせた彼女は、改めて目の前の精霊に向かいあう。

——幸運の精霊『フォーチュン』。

不幸と幸運をもたらす存在であり、彼女が味方につけばギャンブルだろうが何だろうが、おおよそ運が絡む物ならば負けはしない。

ある意味問答無用に強力な力を持った精霊である。

が、一つだけ弱点があるとすれば——彼女自身には幸運をもたらす事ができないと言う事であろうか。

それが可能ならばとある貧相な男に捕まったりはしないし、とつと自力で逃げ出しているのだから。

「で、何？　もしかして私に幸運をくれる訳っ!？」

きらきらと輝く瞳が浮かぶ精霊を下から期待を大量に籠めて向けられた。

何となくその下に腹黒さとかを感じつつも、フォーチュンは重々しく頷いてみせる。

『う、うむ。わらわが少々頭に血を昇らせて、思わず無関係なこの船を沈めてしまおうところだったのじゃ。そんな時、笛の音が聞こえてきてなあ』

頬に手をあて、ほう、と感慨深げに溜め息をついた精霊は、穏やかな瞳で美神達を見

渡した。

窓の外を覗いているルシオラと真つ赤なままで虚空を見上げてぶつぶつと呟いてい
るおキヌはともかく、思わずで船を沈めようとしたとのお言葉を聞いた美神はドン引き
であるが。

『待っている間に思い出して思わず反転してもうたが・・・そなた達である？ あその
音を届けてくれたのは』

「あ、あの圧力はそれかい・・・。まあ間違っちゃいないというか関係者と言うか・・・」
どうやら船室内で、思いつきり不機嫌な精霊が何やら危ない状態になっていたのが美
神の感じた威圧感の正体だったようである。

歯切れの悪い美神の言葉に不思議そうな表情を浮かべながらも、フォーチュンは手に
持った槍を一振り。

と、同時に窓の外から途切れる事無く聞こえつつづけていた忠夫の悲鳴が、一際大きく
響いた。

「——おおおおおおおおおつ?!」

突如として起こった高波は、巨船をぐらりと揺るがしながらもその横つ腹にぶち当
たつて白い波濤に姿を変え、甲板を派手に濡らして流れていく。

打ち上げられた忠夫は、そのまま美神達の後方の窓を突き破つて、そのままその先に

あつた波の衝撃で開いた扉の中に転がり込んでいった。

傾いた巨船がゆつくりと反対側に揺れ、その動きに吊られるように開いた扉が忠夫を飲み込んだままゆつくりと閉まる。

暫しの痛いほどの沈黙の後、内側から開いた扉は、今度はきちんと服を着た、とても疲れた様子の子の忠夫を吐き出したのだつた。

ふらふらとおキヌ、ルシオラの間を通り抜けた忠夫は美神の目の前で倒れこみ、4つの視線が突き刺さる中で、最後の力を振り絞つて手を上げた。

「……海は怖いなと思いました」

ばたん、と手が倒れ、白目を剥いて昏倒した忠夫に駆け寄るおキヌと、嬉々として懐から一対の丸い端子のついた機械——電気ショックを与える機械に良く似ていた——を取り出し、服の上から忠夫の胸に当て始めるルシオラ。

そんな2人から視線を剥がしながら、美神は溜め息一つ付いて向き直る。

「……無理矢理ねえ」

『だが、結果としては助かっておる。服も着れた。問題無い』

幸運を呼び込んだとしても、経過が問題である。

大きな結果を引き起こそうとするのなら、ある程度の強引な働きかけが必要になる、と言うことか。

そう結論付けた美神であつたが、それ以上の言葉が続ける時間は無かつた。

『では。そなたらに幸運のあらん事を——』

「あ、ちよつと！」

そう言つて、精霊はゆつくりと姿を消していったのだ。

引き止める暇も、どんな幸運を呼んだのかも問えぬままに、微笑を残して消えたフォーチュンの残滓は、光の欠片だけを残して擦り抜けた。

後に響くは、とりあえず預金残高が増えていないか携帯で確認を始めた美神の声と、電気シヨックで痺れる忠夫の悲鳴のみ。

その夜。

豪華客船の一際広いホールにて。

「と、言う訳で！ カジノでがっぽり稼ぐわよ！」

「はい美神さん！」

ドレスアップした美神達の後ろで、これまたきつちりと黒いタキシードに身を固めた似合わない事甚だしい忠夫がびしっと手を上げた。

いや、似合わないと言うよりも完全に服に着られている、と言った方が正しいだろう。完璧に着こなした美神や、初々しいながらも楚々とした雰囲気纏ったおキヌ、意外な事に着慣れた様子のルシオラに比べて、全く持って浮いている。

「何がどー言う訳なのかさっぱりなんですがっ！」

そう言つて、ネクタイを巻いた首元や動きにくい肩を気にしながら忠夫が問うと、美神は不敵な笑みを浮かべて指を振つた。

「ちつちつち……分かつてないわね。幸運の精霊がついてんのよ？ 稼ぎ時に決まつてるじゃない！」

「成る程！」

「み、美神さーん！ 私、学生なんですけどー！」

「ほーっほっほっほ！ 問題無いわ！ お金の前には倫理観なんてポイよポイ！」

美神は笑いながら、戸惑うおキヌに何十枚かのチップを握らせる。

そして、おキヌの隣で手を差し出してくる忠夫の手を軽く叩いて、何事も無かったようにルーレットの台めがけて歩き出した。

「俺の分はっ?!」

「あんたはもう幸運使っちゃってるでしょうが。横島君の役目はおキヌちゃんのガードよ。悪い虫が寄らないように強い張ってなさい！」

しくしくと背中を丸めて泣いている忠夫を放って去っていった美神を見送りながら、おキヌは途方に暮れたように掌の上のチップを見つめている。

何時の間にか姿を消したルシオラが気にはなる物の、ギャンブルがどー言うものなのか全く知らないおキヌと、そもそも全裸で海からの大脱出と言う訳の分からない状況から助けられただけで殆ど役立たず指定をされた、涙に暮れる半人狼は、そのままたっぷり5分ほど、その場を動く事は無かったと言う。

その何とも言えない雰囲気悪い虫が寄って来ることは無かったそうだが。

そして、1時間経過。

「——当てが外れたかしらねー」

美神の前には、元の3倍ほどに増えたチップが小さな山を作っている。

増えては減り、減っては増え、そんな事を繰り返しつつの時間では在ったが、幸運の精霊が付いているにしては芳しくない結果と言えよう。

とは言え一時間で3倍と言ったら驚異の結果である筈だが、美神は不満の様子である。

ドカンと一発、が無い分派手さに欠ける為、物足りないと言った方がいいのであろう

が。

「こうなつたらおキヌちゃんに期待するかー……」

じやらじやらと手持ちのチップをかき集め、色鮮やかなアルコールの乗ったトレイを持った通りすがりのスタツフに換金を頼むとついでにカクテルを一つ受け取り、そのグラスを片手に動き出した。

辺りを見回してもカジノを利用してゐる客は少なく、此処がギャンブルを目的とした場所ではなく、あくまで暇潰しの一環としての設置された設備と言ふ意味合いが強いようである。

そもそも乗船してゐる客層が人生のギャンブルに勝つた者達ばかりであるし、世界を回ると言うのがこの船の主目的であるのだからそこまで力を入れておらず、結果として巨大な船には見合つた広さと設備を持ちながら、それでいて暇人が集まる場所となつてゐるのだろう。

そのお陰で、とは少し違ふかもしれないが、美神の探す二人組みは意外にあつさり見つかつた。

「んふふ。かぶつ！」

「いやーっ！ 耳は敏感なのーっ!!」

「あむあむあむ……」

「おキヌちゃんストップもうこれ以上嘯まないでえええっ！ 何かイケナイ気分になっちゃうからああっ!!」

「何やつとるかああああっ!!」

忠夫の背中から絡みつくように押し掛かったおキヌが、外されたバンドナから飛び出した忠夫の狼耳を優しく甘噛している所に美神の拳が光って唸る。

回避も間に合わず即頭部に直撃打。

豪腕一閃カツ飛ぶ忠夫、そして引つ付いていたので背中に乗ったまま一緒に飛ぶおキヌ。

「——っ！」

だがしかし、そこは流石の忠夫である。

空中で必死にバランスを取り、たまたま指先に引つかかったスロットを傾けさせながら縦にくるりと一回転。

途中でおキヌの身体を背中から体の横を滑らせて確保しつつ、膝の下と背中に手を回してがっちりホールド即着地。

『おおおおおっ?!』

「ふっ……人狼舐めたらあかんぜよーっ！」

「ふにゃあ〜」

スロツトの上で高らかに吼える忠夫に向けられる人々の驚きの視線。

腕の中ではくるくると回って漸く位置が落ち着いたおキヌが、なんとも幸せそうな顔で忠夫の胸に頭を預けてうとうとと。

そして美神は背中に阿修羅を背負いつつ、調子に乗っておキヌを抱えたまま高笑いを始めた忠夫に1歩1歩接近していったのだった。

「・・・つたく！ あれだけおキヌちゃんに悪い虫近づけんって言つといたのに、なんであんたが悪い虫になってんのよっ!!」

「ぶいい」・・・」

「んふ〜」

「おキヌちゃん、いい加減それから離れなさい」

ズタボロの忠夫は息も絶え絶えと言った様子で絨毯の敷かれた床に這いつくばり、その上でおキヌが満足げな吐息を漏らしながらご満悦の様子で抱きついている。

額に青筋を浮かべた美神が言葉でやんわり引き剥がそうとするも、ぷい、とそつぽを向いて更に忠夫に押し掛かっていく始末である。

そつと息を吹きかけると忠夫の耳がピクピク動き、それを見てくすくす笑いながら更に二度三度と繰り返す。

「・・・んふんふ」

そして、酒気を帯びたままの赤い顔で忠夫の耳に何時もよりも赤味の増した唇を近づけ、ちろりと小さな舌を出し、おもむろにその耳たぶに――

「す、ストツプおキヌちゃん！ 流石にそれ以上は駄目よおっ!!」

「あんっ」

だがしかし、今度はさつきとは違う赤みに顔を染めた美神が飛び込みギリギリセーフ。

おキヌの襟首を掴んで引き起こし、何故か忠夫から庇うように背中に回して辺りを睨み付ける。

固唾を飲んで見守っていた罪も無い乗客たちは、その一瞥で蜘蛛の子を散らすように——いや、懐かしい物を見る目であったりとか暖かい視線を向けながらであったりとか親指を立てて良い笑顔だったりとか何度も頷きながらであったりとか何気にびったりと肩を寄せ合いながら出て行く夫婦が居たりとか。

この船を作った財閥が、どのような基準で招待する乗客を選んだのか非常に気になる所である。

と、溜め息混じりに周囲から人影が居なくなつた事を確認していた美神の項に、生暖かく湿っぽい感触が走る。

慌てて項を押さえて振り向こうとしたその瞬間、美神の身体に巻きつくように細い手が伸び、しつかりとその動きを押さえた。

「・・・良い匂い」

「おき、おき、おキ又ちゃんっ?!」

「美味しそう・・・」

「ひゃうっ?!」

柔々と美神の項に噛み付きながら、おキ又は鼻を鳴らしつつ美神の肢体に絡みつく。背筋にとてつもない危険信号を感じた美神が必死で抵抗するも、相手は軟体動物のように柔らかい動きで奇妙に避けつつ、絡みついた手は微妙に危険な所へと。

「——はっ?! 何かとつても素晴らしい物が見れる予感が——此処に塔を立てよう．．．我が生涯に一片の悔いなし」

「こらあああああつ! いきなり鼻血吹いて気絶しないで助けんかあああああつ!!」

「うふふふふ．．．」

「あひゃんっ?! こ、こらっ! 本当に怒るからねっ?!」

壮絶な光景であった。

倒れ伏した男は止め処なく赤い液体を垂れ流し、普段は楚々とした少女は妖艶な笑みを浮かべてドレスに身を包んだ美女に妖しく絡みつき、真つ赤な顔の女性は僅かに抵抗する力を弱めながら、しかし必死で脱出を試みる。

その時。

幸運の精霊に今度あつたら破魔札の一枚も投げつけたら、と頭の片隅で考えながら、非常手段と割り切つて霊力全開の予備動作に入った美神の視界が、窓からの轟音と衝撃で塞がれた。

舞い散るガラス、吹き飛ぶ機械、吐き出されるコインの山、鳴り響く警報。

こころと美神の上から転がり落ちたおキヌも、近くでぶつ倒れたままの忠夫にも怪我をした様子がないことを素早く確認し立ち上がった美神の目に、湧き上がる煙の向こうから駆け寄ってくる男の姿が写り込んだ。

「——美神くん、美神くんは居るかねっ?!」

「か、唐巢先生っ?!」

煙を掻き分け、声を張り上げながら駆け込んだのは美神の師匠であり日本でも5本の指に入るGS、唐巢。

薄い頭を落下物から手で庇い、美神達を確認した唐巢は煙の向こうに向かって声を上げる。

「ピート君! 美神くんたちを確認したっ!」

「了解しましたっ!」

そして、彼の声に答えるように、煙の向こうを警戒しながら素早く駆け寄る金髪の青年。

唐巢神父の弟子、ヴァンパイアハーフにしてキリスト系の教会に住み込むピエトロドブラドーであった。

説明する暇も惜しいとばかりに唐巢は寝転がる忠夫を担ぎ上げ、おキヌを美神に任せて煙を噴出す扉とは反対側の窓に向かって走り出す。

慌ててぐっすり眠りこけているおキヌを担いだ美神が続き、ピートはその殿を務めつつ付いて来る。

「先生っ! 何が起こってるのよっ?!」

「説明は後だよっ！ ピート君、窓を開けてくれ!!」

「はいっ！」

駆ける勢いはそのままに、衝撃で倒れていたスロットを両手に一台ずつ軽がると持ち上げた半吸血鬼は、嘔み締めた口元から牙を僅かに見せつつ両手を振る。

放たれた機械の塊は、狙い違わず分厚いガラスを突き破り、その向こうに広がる暗い海へと消えていった。

「——来るぞっ！」

唐巢の声と同時に、背後の煙の向こうで再び巨大な音がした。

煙を突き破り、壁とドアの破片を撒き散らしながら、獣の頭部と人の身体を持ったその存在は、咆哮を上げつつ突進開始。

『グオオオオオオオオツ!!』

「——ダンピール・フラッシュユ！」

「——主よ、災いを彼方へ遠ざけたまえ！」

師弟の霊波がその存在の足元に突き刺さり、僅かの間視界を奪う。

爆裂が過ぎ去り、煙を纏いながら、それでも怯む事無く突進したそれは、スロットに打ち砕かれてカーテンをはためかす窓の前で止まり、悔しげに唸ると苛立ったようにその窓枠を打ち砕いて外に行った。

暫くの間、海の上を何かを探すように止まっていたそれは、何かが聞こえたようにふと視線をあらぬ方に向けると、ゆっくりと向きを変えて一気に上昇し、船を飛び越えて姿を消した。

「……で、説明してくれるんでしょーね？」

内装が破壊され尽くした感のあるカジノの片隅、横倒しになったルーレットの影に座り込んだ美神が問う。

怒った様子ではなく、如何にも『鴨がネギと鍋を背負って来た』という感じである。がしつと唐巢の肩を掴んだ手からは、絶対に逃がさないと言う感情がありありと見て取れた。

「……先生、事は慎重を要するって言ってますんでしたっけ……？」

「……言わないでくれたまえピート君。最後の手段であろう事は分かっているよ……」
すやすやと気持ち良さげに寝息を立てるおキヌと、恍惚の表情で昏倒したままの忠夫、そしてギラギラと目を輝かせながらこちらを見てくる美神から視線を逸らしながら、師弟は冷や汗が流れ落ちたのを互いに確認するのだった。

第伍拾漆話。

「……実は、この客船にはとある国の重要人物が乗つていてね」

処女航海、しかも道は半ばどころか始めの5歩目位だと言うのに、あっさりと壊滅に近い打撃を受けた豪華客船のカジノホールを脱出し、1階層下の倉庫までこそそこそと移動した美神達。

すやすやと気持ち良さそうな寝息を立てるおキヌを美神が背負い、むしろ昇天してるんじゃないかと思う唐巢神父が十字を切った位に恍惚の気絶をかました忠夫はピートが背負つて——何となく嫌そうではあったが——事無きを得た物の。

突然の爆発に、いきなりの唐巢神父とピートの登場。

そして、現れた犀の顔した凶悪な靈的存在と、なかなか突つ込みどころの多い展開であるのは事実である。

しかし、溜め息を吐きつつ語る唐巢を見る美神の目は、「とある国の」の辺りから輝きを増し始め、「重要人物」と聞いた瞬間鼻息も荒く詰め寄る喜びっぷりを見せている。

「それでそれで、せ・ん・せ？ 何処のお国の方かしら？」

「……ザンス王国だよ、美神くん」

美神、渾身のガッツポーズ。

——ザンス王国。

名産品、精霊石。

世界中の精霊石、その80%を産出し、同時に高品質の精霊石振動子という霊能グッズの中枢部品の9割を生産するオカルト国家。

精霊石と言えばこの業界で最も有名な霊能グッズで、その使い方は種々様々。

ある時はグレネードの如く雑魚を纏めて蹴散らし、ある時は強力かつ簡易な結界を作り出し、またある時は霊能の触媒として効果を発揮する、非常に強力な道具である。

この精霊石と言うもの、小さな物は神通棍や見鬼君などにも使用されており、その効果の程は良く知られているが、最後の保険、ピンチを切り抜ける切り札としても高い性能を誇り、GSならば持っておきたいアイテムである。

である、が。

それ単体で効果を発揮するような大粒の精霊石は、これがまた非常識に高価なのである。

3億4億当たり前。

見た目も綺麗で装飾品として、かつ非常時に直ぐ利用できるようにネックレスやイヤリングとして美神も使用している物の、現在彼女が身に付けているそれらだけで軽く1

0億は超すだろう。

そして、そんな物を名産品として産出し、しかも8割方を占めるザンス王国の豊かさ——推して知るべし。

「ありがとうフォーチュン！ 大口よ！ 報酬がつぽりよー！」

「……先生」

「何も言わないでくれたまえピート君。分かっている、分かっているとも……！」

隠れている筈なのに高笑いを上げ始めた美神を顔に縦線入ったピートが指差し、横目で見られた神父は胃の辺りを押さえて見ない振り。

未だに報酬も協力要請も依頼内容も現状さえも分かっている筈なのに、美神の中では札束や精霊石の雨霰が降っていた。

「さー！ そうと決まれば早いとこ依頼片付けちゃいましょうかあっ！ ほらほら先生、早く早く！」

「あ、ああ。それじゃあちよつと移動しようか……。つと、横島くんたちを置いて行く訳には行かないね」

「あーもー！ さっさと起きんかあっ!!」

折角の儲け話を逃してなるものか、とばかりに美神が忠夫に往復ビンタ。

すばばばーんと快音が響く。

胸倉を掴み上げられた忠夫の頬が見る見る赤く染まるのを視界に入れないようにしながら、唐巢は懐から取り出した通信機で連絡を始めた。

そして、数十秒の快音の後、真つ赤に頬を染めた忠夫が漸く跳ね起きた。

「・・・はっ!? 美神さん駄目だそんな女同士なんて非生産的なー! でも混ぜて欲しいっスー!!」

「忘れろおおおっ!!」

と思つたら昏倒した。

平手はあつさりと拳に変わり、フルスイングで振りぬいた拳の延長線上にあつたダンボールやらなにやらを薙ぎ倒しながら忠夫がすつ飛び、怒りと羞恥に耳まで真紅に染めた美神が息を荒らげながら追加のストンピングを嵐の如く降らせまくる。

慌てて唐巢が羽交い絞めにした時には、既に忠夫は虫の息。

何だかモザイクが必要になった物体Xをはんなりと涙目で睨みつけながら、美神は唐巢の何があつたかと問うような視線をきっぱりと無視した。

「先生後生よっ! 止めをー! せめてあと一撃だけでもーっ!! 次に起きても覚えてたら身の破滅なのよーっ!」

「待ちたまえ美神くん! 仮にも君の所の従業員だろうっ?!」

美神を羽交い絞めにしたまま外に引き摺っていく唐巢のアイコンタクトを受け、弟子

である。ピートは取り合えずモザイク代わりに忠夫に毛布をかけた後、おもむろに十字を切っておキヌを背負う。

この騒ぎの中でも全く起きる様子を見せずに幸せそうに眠っているおキヌを抱え上げ、大きく溜め息を付いたピートは疲れたように姉弟子と師匠を追いかけた。

「……おキヌさんも大物だよなあ」

そんな眩きを残しつつ、どうせ忠夫だからその内放っておいても復活して適当に追っかけてくるだろうと放置して。服が血で汚れるのもいやだし。

そう思って忠夫を置いて言ったピートも、まさかあんな事になるとは思ってもいなかった。

所変わつて時間も過ぎて。

「……で、これはナンですか？」

「……さあ？」

覚醒した忠夫が耳にしたのは、そんな怪しい日本語だった。

何故日本語なのかは聞いちやいけない、そんなご都合万歳主義である。

ともあれ、忠夫イヤーは人狼耳。

分析開始、即時判明素早く対応。

結論……ばつちこーいっ！

「——嫁に來ないかーっ！」

「ナニゴトですかあーっ?!」

「貴様、姫に何をするっ!!」

声だけでおおよその年齢、体格、その他諸々の大事な情報を解析した忠夫が飛び掛る

先には、褐色の肌に豊かな肩までの髪を緩やかに流したうら若き美女の元。

忠夫アイは人狼アイ。

驚愕に固まる美女の抵抗を予測し、最も適切な手順で持つてその手を握る為に必要な行動を叩き出す。

——武器、及び危険物未所持。

——驚きの為対応に遅れ、チャンス。

——邪魔者発見、但しこちらのファーストアクションに対応できる距離に無い。

結論。

——G O G O G O G O G O!! 呐喊突貫ワレ奇襲に成功!! 一撃で最大の効果を上

げて見せろと魂が叫んでるっ!!!

「せ、精霊獣よっ!」

「それは想定外ですからーっ!!」

閃光と共に忠夫の頭より大きな拳が出現、跳躍中の為回避不可。

結論。

駄目ぽ。

女性の細い指を飾る指輪が光ると同時に現れた、精霊獣と呼ばれた女性型の存在の拳は真正面から忠夫の顔を吹き飛ばした。

バウンドさえせずに砲弾の如く吹き飛んだ忠夫は、背中側に在った壁にぶつかり跳ね

返る。

「ごころごとと数回転して漸く動きを止めた忠夫の後頭部に、ごりつと冷たい鋼の感触が感じられた。

あからさまに撲殺レベルの攻撃を受けうつ伏せに倒れこんだ忠夫に押し付けられる銃口達。

サングラスを付け、迷彩服に身を包んだ男達が警戒を解かぬままに指示をこう。

「姫様、ドウしますか？」

僅かの逡巡の後、姫と呼ばれた女性が親指を下に向けるよりも僅かに早く、忠夫は顔面を押さえながらむくりと起き上がった。

慌てて警戒を強めた男達が銃を構えなおす。

「いっただあああ．．．あれ？ 此処は何処っ?! てか俺大ピンチっ?! 美神さん達は何処へーっ?!」

「．．．美神？ イマ、美神とイイましたか？」

周囲を見回し、冷たい銃口を幾つも発見し、だばだばと涙を流しながら美神を探す忠夫の前に、冷たい口調の女性が立った。

見上げた忠夫と視線が合う。

とつても怖い目でした。

「貴方、ナニモノですか？」

「はいっ！ 俺は只今お嫁さん絶賛募集中のしがな一般市民でっすっ!! ではこれでお暇を——」

「・・・そこらノ民草が精霊獣にコウゲキされて、ブジでいるとでも？」

再び光る女性の指輪。

呼ばれて飛び出て精霊獣。

後頭部から握り潰されんばかりの力がかつちりホールドされた忠夫。

「唐巢神父がイってました。美神にジヨリヨクをモトめる、と——カンケイシヤですね？」

「違います、只の一般市民っす」

「ならばヒトジチにもなりませんね？ 精霊獣よ、握り潰し「関係者っすー！ 物凄く関係してゐるっすーっ!!」・・・捕らえなさい」

抵抗はしたら問答無用で撃たれそうなので出来ませんでした。

暫しの後には、冷たい金属の床に頬を当ててしくしくと泣く半人狼が一人いた。

体中をそこらに落ちていた荷物を縛るためのものと思しきロープでぐるぐるに巻かれ、ご丁寧な事に両手足にはきつちり手錠が嵌っている。

二人掛りで忠夫が持ち上げられたその隣では、慌しくなった周囲の空気の中、女性は

耳元に囁く男の言葉に何度か頷きを見せた。

「——モドリます。テイサツは父のイバシヨをサイユウセンに探してクダさい」

女性と同じく指輪を嵌めた男達が周囲を警戒しつつ先行し、その後を急ぎ足で女性が続く。

荷物のように運ばれながら、また何やらトラブルに巻き込まれたんだな、と何処か諦めきつた風情の忠夫が呆然と呟いた。

「・・・そーいやメドーサ腹空かしてないかなー」

東京のはずれの森の中で、主と呼ばれるやたら威厳のある巨大な猪と睨み合っていた元魔族の少女が、くしやみした隙に跳ね飛ばされた。

「ふああ……。あれ？ 美神さん？」

「漸く起きたわね、おキヌちゃん」

柔らかいソファアーの上から身を起こしたおキヌが最初に目にしたのは、やれやれと溜め息を付きながらこちらを覗き込んでくる美神だった。

何時の間にか居場所がカジノホールから美神達の船室よりも豪華で広い部屋になっており、少し離れた所ではスーツ姿の男性達が難しい顔で話し合っている。

そこから更に少し離れた場所では唐巢神父とピートが何やら話しこんでいた。

「頼んだよ、ピート君」

「任せてください」

真剣な表情で頷いたピートの姿が霧へと変わり、空調用のダクトへと消えていく。

それをやや不安げに見送った神父が振り返り、ソファアーの上に身を起こしたままのおキヌと目があつた。

見ているだけで安心するような、柔らかい笑みを浮かべた神父が歩いてくるのに軽く頭を下げながら、おキヌは忠夫を探して視線を泳がせる。

「横島さんは何処ですか？」

「・・・あー、まあ、色々あつてね」

苦笑いをしながら唐巢が美神を横目で見る。

見られた方とは言えば視線を逸しながら不満げにおキヌの額にデコピン一つ。

「あたっ?!」

「全く。覚えてないだろうからしょうがないけど、おキヌちゃんも悪いんだからねっ!」

「え? え?」

額を押さえたおキヌがきよとんとしながら見返してくるのに頬を少しだけ赤らめて立ち上がりながら言い放ち、美神はスーツ姿の男達の方へと歩いていった。

「横島君なら、今ピート君に迎えに行つて貰つた所だよ。どうも中々に厄介な事になつてゐみたいだね・・・」

苦虫を噛み潰したような顔で唐巢が答える。

向けられた視線の先には、静かに、だが重々しく話し合っていた男性達の会話に美神が割り込んだ瞬間が写っていた。

「——つまり、ご息女があちら側に荷担していると?」

皺の浮かび始めた初老の日本人が、精霊石を幾つも散りばめた豪華な飾りを被った老人に問い掛ける。

「・・・非常に不可解な事ながら、間違い無い」

顎の下で組んだ手の向こうから覗く、突き刺すような視線に表情を歪めながら答える老人。

周囲はサングラスをかけ、スーツを着込んだ褐色の肌の外国人と、同じような格好をした日本人が緊張も露に睨み合っている。

「わざわざザンス王^ご本人に^ご足労頂いた今回のお忍びでの会談は、失敗と言う事ですか？」

「いや、問題無い。大臣自らこちらが指定した此処まで来て頂いたのだ」
問題無い、と言いながらも、その表情は優れない。

今回のこの事前会談は、ザンス王国の浮沈をかけた物である。

外国製品に押され始めた自国の製品のシェアの獲得の為にも、次の本会談に無事に繋げる為にも、なんとしても納得の行く形で終わらせなければならぬのだ。

経済大国でありながら、世界的にも珍しい多種多様な宗教を受け入れる事が可能であり、そして何よりもこれからのザンス王国にシェアを確保すれば多大な利を得る事ができる国との関係をもたらず為にも。

だが、現状は不利な方向へと動き始めていた。

限りなく情報を絞り、連れて来たのも僅かな人数のみ。

しかもタブーとされている機械の力で動く船の上。

テロリスト達にもかぎつけられない筈であった。

己の娘と言うイレギュラーさえ現れなければ。

「……これは私達の問題だ。私達だけで解決して見せよう」

「……そう望みたいものですか」

「ちよつと良いかしら？」

秘書と思しき若い男性と共に立ち上がった初老の日本人は、横合いから掛けられた美神の声に視線を一瞬だけ向けると、秘書に頷きを見せただけでその言葉を無視して歩き出す。

苛立たしげにその背中に声を掛けようとした美神だが、その彼女に掛けられた声にゆつくりと振り向いた。

「美神令子さん——で良いのかね？」

「ええ。ザンス国王」

握手を求めて伸ばされた手に答えて握り返しつつ、促された美神はゆつくりとソファアーに身を沈めた。

対面に座った老人の表情は硬いままで、だがその雰囲気からは困惑の色が見て取れる。

「——高名なGSと唐巢君から聞いている。是非、協力を願いたい」

「報酬は？」

ただそれだけを、相手が国王であるにもかかわらずそれを全く気にも掛けない態度で聞き返す弟子の姿に師匠が頭を抱えていたり。

「質の良い精霊石を3つ。追加で現金100万」

「USDドル？ ユーロ？」

「USDドル」

「OK、受け賜りますわ」

「噂通り、話が早くて助かる」

そんな会話に師匠は部屋の隅で自分の弟子教育方針の何処が悪かったのかと膝を抱えている。

おキヌがフォローに入ったようなので暫くすれば復活するだろう。

「では、依頼内容の方を詳しく聞かせて頂きましょうか——」

「何だかなー。いっつも思うんやけど、美神さんって絶対トラブル体質だよなー」

自覚が無い事甚だしい。

はつきり言つて忠夫も似たようなもんである。

狭い船室に一人放り込まれた忠夫は、周囲に誰の気配も無い事を確認しつつ身体をくねらせる。

ごきごきと骨の鳴る音を響かせながら、ゆつくりと這うように床の上を転がった忠夫の体からは、しっかりと捕らえていた筈のロープが解け落ちていた。

「ふ。長老に吊るされ続けた俺が、この程度の拘束でとつ捕まえられるとも思つたのかつ！ ふんぬりやああつ!!」

ばきん、と金属の欠片を落としながら手足の手錠が引き千切られ、忠夫は脱出に成功する。

手品師も真つ青の大脱出——と言うか只の力技というか無駄な器用さと言うか。

ともあれ、肩と首をこきこき鳴らしながら立ち上がった忠夫は船室の扉に手を掛け—

しつかりと鍵が掛かっている事に気付いた。

「・・・こんだけしつかり縛つといて、鍵まで掛けるなよな・・・。つつーか普通内側から開ける奴だろオイツ!!」

力一杯扉に蹴りをかますも、只の船室の癖にえらく分厚い扉は開かない。

とは言え今の一撃でへ込みはしたので後数回同じ事を繰り返せば開きはするだろうが——。

「あんまり音立てるとやばいよなあ」

今は誰も居ないようだが、もし誰かが音を聞きつければ見つかる可能性が高い。

流石に鉄砲でばんばん撃たれるのは危ない。ちゅーか怖いので勘弁。

暫し悩んだ忠夫の視界に、小さな嵌め殺しの丸い窓が入った。

おもむろに懐から唐巢神父の聖水を塗した石を取り出し、力いっぱい投げつける。当然ながら、かなり派手な音を立ててガラスは砕け散り、開いた窓からは潮っぽい風が吹き込んでくる。

だが、その窓は、はつきり言って小さかった。

忠夫の頭が通つても、肩が通るかどうかは関節を外してもギリギリなくらいには。

「・・・TVで見たのは通つてたよな」

変形してるんじゃないかと言う位ぐりぐりと身体をこじりながら、ではあるが。

「うっし」

頭を突っ込み、肩の骨を外してゆつくりと脱出開始。

詰まった。

「TVの嘘付きいいいいっ!」

波は答えてくれなかった。

慌てて身体を動かそうにもどう言う具合かしつかりと身体は肩を少し過ぎた辺りで固定され、前にも後ろにも動く気配を見せはしない。

冷や汗をたらたらと流しながら、びちびちと身体を上下に振る忠夫。

さっきのガラスをブチ破った音を聞きつけたのか、扉の向こうが俄かに騒がしくなり始めた。

部屋を一つずつ開いて確認しているのだろうか、離れたところのドアが軋みながら開いた音が聞こえた。

己の良すぎる耳を恨めしく思いながらも、更に激しく上下に動く忠夫に、その上から声が掛けられる。

「・・・何やってんの？」

「良い所につ！ ルシオラ、へるーぷっ!!」

呆れた様に声を掛けてきたのは、ふよふよと浮かぶ魔族の女性。

分かれた後に着替えたのか、格好はこの船に乗り込んだときのような普通の格好とはなっていたが、何故か頬に油污れらしき物が。

「どうしろって言うのよ」

「引っ張ってくれーっ!!」

やれやれと溜め息を付きつつ忠夫の頭に手を掛け、思いつきり大根でも引っこ抜くように力を籠める。

「いだだだだっ?! ストップ、ストップ！ マジで千切れるからーっ!!」

「もー、五月蠅いわねー。男の子でしょ。頭の二つや三つ我慢しなさい」

「首が千切れて我慢できる男の子がおるかあああああつ!!」

我慢以前の問題であろう。

面倒臭げに手を離れたルシオラは、頬を搔きながら思案げな表情を浮かべる。

扉を開ける音が直ぐ傍まで近づき、漸く彼女は何かを思いついたように手を打ち合わせた。

「前が駄目なら後ろよね? セーのっ」

「ちよつと待てーっ!! 何かそれは危険な響きはぶしっ?!!」

思いつき振り上げられたルシオラの拳は、今日何度目かの忠夫の顔面直撃。

だがしかし、がっちり嵌った忠夫は動けず、そのせいで衝撃が全部逃げずに脳を揺らして終わったただけだった。

「・・・あれ?」

「——此処かつ?!!」

「やば」

白目を剥いて昏倒した忠夫越しに聞こえた声に、慌てて海面ギリギリまで高度を下げるルシオラ。

フジツボもまだついていない船の横に身を寄せ、上を見上げれば忠夫の体がつくんがつくん動いているのが目に入った。

「どうやら向こう側から引つ張り出そうとしているようだが、完璧に嵌ってどうしようもなくなつたらしい。」

「やがて諦めたのか、忠夫は動かなくなつてしまった。」

「・・・あれは」

「その、忠夫が身体を出した窓の上から蛇の頭を持った巨体が降りてくる。」

「巨体の背中には迷彩服の何者かが乗っており、忠夫の直ぐ傍までやってくると完全に昏倒している事を確認して再び上昇していった。」

「——魔鈴の本で見たわね。確か、精霊獣・・・ザンス王国の。って事は、あいつらが犯人？」

「そう呟いて、魔族の少女はゆっくりと海面を滑るよう移動し始めた。」

「ふーん。王女がねえ」

「理由は分からん。だが、あちら側に居る事は確かだ。部下が確認した」

苦悩を浮かべた王が視線を落とし、美神も面倒臭げに頭を搔く。

周囲の護衛達も困惑した様子で、言葉を交わさないまでもサングラス越しに視線で会話をしていた。

「つで、そのキャラット王女はどうすれば良いのかしら？」

「・・・悪い子ではない。ただ、少々直情的なところがあつてな。おそらく、何か吹き込まれたのだらうとは思う。出来れば——」

「怪我をさせずに？」

王は、美神の問いにゆっくりと頷いた。

「王族として、国を治める者としては失格なのかもしれんが——それでも、あれは大切な一粒種。何とかしてくれまいか」

「追加報酬はずんでくれるなら♪」

王の苦悩も何もかも台無しな台詞に、おキヌのフォローで漸く立ち直りかけていた神父が壁に頭を叩きつけ始めた。

慌てて止めに入るおキヌを横目に見ながらも、美神のはずんだ表情は消えはしない。

呆氣に取られた王は、暫し呆然とした後、訝しげな表情で言葉を重ねる。

「……言い出した私が言うのもなんだが、可能なのかね？」

「依頼主の要望は最大限尊重しますわ。報酬次第ですけど」

呆れた、しかし何処か愉快そうな笑みを浮かべた王は、背後の護衛達に向かって指を鳴らす。

慌てて部屋を出て行った護衛が、すぐさま取って返して来た時、その手には拳よりも大きな精霊石がビロードの箱に入れられていた。

それを確認してほくほく笑顔で立ち上がった美神は、おキヌにそれを渡して神に祈る神父の襟首をつかむと部屋の外へと歩き出す。

「頼んだ」

「任せて安心、GS美神除霊事務所をよろしくお願いいたします」

ひらひらと空いた手を後ろに向かって振りながら、美神一行、出陣である。

と、部屋を出た美神は、その直ぐ傍で引き止められた。

引き止めたのは、先程の初老の日本人と共に居た、秘書らしき若い男性。

スーツケース片手に歩み寄ってきたその男性は、無言でそれを美神に渡すと軽く頭を

下げて、何も言わずに去って行く。

「美神さん、これ……」

「ま、そー言う事でしょう。ほんと、察しと氣遣いを美德とする国民性なこと」

開いたスーツケースの中身は、ぎっちり詰まった現金。

軽く見積もっても1000万円はあるだろうそれを苦笑いで確認し、蓋を締めて荷物
の所へと歩き出す。

「何にも言わなかったから依頼じゃないし、しらばつくれるのも簡単よね。ま、良きに計
らえて事じゃないの？」

あの、大臣と呼ばれた日本人も結構な狸と言う事だろう。

そもそも、お忍びであるにもかかわらず、護衛を引き連れてきているのだからこのよ
うな事態も予想の範囲内と言う事なのだろう。

そして、この事態に陥ったにもかかわらず、こうして追加報酬を払うと言う事は、彼
女がこの船に来る事を知っていて、更にこの手の物が一番効果的にやる気を出させると
知っていたと言う事か。

もう一つ言うなれば、言葉ほどにはこの会談が成功しても失敗しても関係無いとは思
っていないと言う事で、つまりは1000万程度で交渉が成功するなら惜しくは無
い、と。

「ま、私には関係無いけどね？」

「・・・はあ」

疑問符を浮かべるおキヌの頭を何となく撫でながら、少しくらい神父に分けてもいいかな、と常ならぬ事を思う上機嫌な美神であった。

第五拾捌話。

子供の頃、ちよつとした好奇心から小さな穴や輪つかに手を通した思い出はないだろうか。

なかなかどうして不思議な物で、そういつた思い出の中ではどんなに頑張つても抜けなくなり、ひたすらに焦りが募つて行くばかりであり、他人の助けやほんのちよつとした動きであつさりと抜けて今までの焦りは何だったのだろう、と拍子抜けするのだ。

いよいよ抜けなくなつて消防署やら救急隊やらと大騒ぎになるのも年に数回TVで見かけるが、基本的に子供の頃の、思わず天を見上げて照れたような気の抜けた笑い声を出したくなる、そんな感じの思い出である。

「海の馬鹿やろおおおつ!!!」

例外は何にでも付き物だが。

二の腕の辺りでしつかり半人狼を捕らえて離さない情熱的な船の窓枠は、その巨体の豪華さに比例するかのようにしつかりと作りこまれていた。

具体的に言えば、この状態に陥つた忠夫が真正面から魔族の少女の拳を受けても抜け出せなかつたくらいには。

顔に潮風を浴びて復活した忠夫がじたばたと陸に打ち上げられた鮪のように暴れてみた物の、罅さえ入った様子のない窓枠は二の腕から下を紫色に変色させただけで解放してはくれなかった。

すつかり辺りからは人の気配もなくなり、途方に暮れたのでそろそろ薄つすらと色を変え始めた空と海に向かって吼えてみる。

木霊も返ってくるはずがなく、潮風と塩水を思いつきり吸い込んだせいで咽が痛くなっただけだった。

「うっうっうっ……たーすーけーてーくーれええええっ!!」

全く反応の返ってこない現状に忠夫が絶望しかける。

だが、助けは意外な存在が持つてきたりするもので。

『……何をやっておる?』

「ふお、フォーチューンさんじゃないっすかあああつ!!」

俯いてしくしくと涙を海に零していた忠夫の頭上から、小さな影が声をかけた。

それは、美神達3人に幸運を授けてどっかに行つた筈の精霊さま。

幸運の精霊、フォーチューンであった。

『趣味か?』

「ちつがああああうっ!!!」

あんまり頼りになら無さそうだが。

とは言え漸く来た助け、このチャンス逃してなるものと必死に忠夫は現状の説明をしようとして——思いとどまった。

前回助けてもらった時の事である。

海に落ちた——と言うよりもフォーチュンに落とされたのだが、これ自体は忠夫も悪いと思つているので関係無い。

問題は、その後である。

フォーチュンの幸運によつて海から助け出された忠夫だが、そのやり方が問題であつた。

ぶつちやけ、高波で打ち上げられて、そのまま服のある部屋に叩き込まれたとしか言
い様がない。

これで魔族の少女の拳でも抜け出せないような状況から助けて欲しいといったら、そ
れこそ何が起こるやら想像もつかない、と言うか想像したくもない。

結論、何事もなかったかのようにお帰り頂くのがベスト。

「うーあー、えつと、フォーチュンさんこそ何でこんな所に？」

『そなたらを探しておつた』

きつぱりと一言で答えた幸運の精霊は、少し不思議そうに忠夫を眺めつつも忠夫と視

線をあわせる。

ふよふよと忠夫の目の前まで降りてきた精霊は、こほんと口元に拳を当てて一つ空咳。

『そなた達3人にどんな幸運を授けたのか、教えるのを忘れていた』

「・・・あー、そういや聞いてなかったつすけどねー」

と、ふと気付いた様子の忠夫が聞き返す。

「あれ、3人つて俺はもう済んでるんじゃ?」

『そなたが海に落ちたのは——まあ、原因はともかくとして、わらわもやりすぎた感が否めないから、あれはおまけと言う事だな』

「じゃ、じゃあ俺は嫁さんが来るとかつ?!

現状も忘れてそう期待満々の顔で聞いた忠夫に、精霊の凄く冷たい視線が突き刺さる。

呆れたというか、はつきりと駄目な子を見る目で見られた忠夫はかなりへこんだ。

『好いた女子の一人くらい、自力で何とかするべきだと思うがの? わらわに出来るのは良き縁と出会える幸運を導くくらい。そもそもそなたには既に別の幸運を授けておる』

「あ、そつすか・・・」

心底から呆れた声色で告げられた素気無い言葉にしよげた忠夫に冷たい視線を向けたまま、ため息をついた精霊は肩を竦めて言葉が続けた。

『そなたらに授けた幸運だが、美神には金運を。とは言っても切欠だけ。物に出来るかどうかは美神しだいじゃの』

「・・・このトラブルは絶対そのせいだよなあ」

正解。賞品はないけれど。

『おキヌには健康を。蛇や虫の毒、その他色々な身体に悪いものに対してのな。あの娘もそなたらと付き合う以上は色々巻き込まれるじやろうからな』

「あー、それはありがたいっす」

今度はまともそうなので正直に頭を下げる忠夫。

身体は固定されたままなので出来の悪い玩具にしか見えないが。

『そして、そなたじやが・・・身体も丈夫、その上金運も必要では無さそうだったので、少し限定してみた』

「・・・へ？」

『奇妙な因果が見えたのでな。落下しやすいい性質のようだったので、何処から落ちてもギリギリ助かる幸運を授けてみた』

「なんじゃその限定的過ぎる状況はああっ?! てか俺落ちるのかっ?! 確かに良く落ち

てるけれどもっ!!」

『うむ、落ちる。落ちる男じやの』

「断言しないでええええっ!!」

確かに色んなところで落ちてている。

とは言え生来の丈夫さと反射神経のお陰で今まで大事には至っていない為、必要かといわれると首を捻るしかないのだが。

そもそもギリギリという時点で不安を掻き立てまくりである。

増々高いところ、主に飛行機とかには絶対に乗らないようにしようと思つて誓う忠夫であったが、言うだけ言つて用件を済ませた筈の精霊はこちらを不審そうに見つめてい

る。
嫌な予感を背筋にピンピンと感じた忠夫が、素早くお礼を言つて追い返そうと決めたその瞬間に。

「あの『・・・そなた、もしかして嵌っておるのか?』・・・はい」

見れば分かる状態であろう。好き好んで船窓に引つかかつたまま会話するような変人は早々居まい。

しようがないな、と言う感じで溜め息を付きながら、その手に持った杖と言うか槍と言うかを振り上げた精霊に、忠夫の必死の説得がかかる。

「あのですねっ?! 助けてもらわなくても大丈夫っすからっ!」

『しかしそなた、自力では抜け出せないであろう?』

「だって幸運とか言つて結局碌でもない目に——はっ?!」

口は災いの元。

慌てて閉じてても、一度零れた言葉は無かつた事には成らないものである。

恐る恐る見上げてみれば、そこには額に怒りの血管を浮かばせた精霊が、とても良い笑顔でこちらを見ていた。

ひくつく頬がその心情をはつきりと表している。

『そなた、わらわが信用できないとでも?』

「や、だつてさつきとかは……」

『良い、分かつた。わらわの力、思い知るが良いっ!』

忠夫の言葉を遮るように、精霊は完璧に悪者、しかもボスクラスの台詞をのたまつた。問答無用で振り下ろされた幸運の精霊の杖。

思はず身構えた忠夫であるが、恐れていたような高波とかは起きる気配がない。

その瞬間、天啓のように忠夫の脳裏に一つの想像が浮かび上がった。

何故かピートがいきなり現れて助けてくれるとかいう。

気絶していた忠夫は知らないが、確かにこの船には唐巢神父達が乗っており、ピート

が忠夫を探して船内を動き回っている最中である。

身体を霧状に変える彼の能力があれば、簡単に此処から脱出できるのではないか、そんな考えが忠夫の脳裏を駆け巡った。

そして、背後でごとりと音がする。

「つ?! まさか、マジでピートとかつ?!」

慌てて振り向こうにも船窓は忠夫の身体で塞がれており、中の様子は伺えない。

だが、今の音はドアが開いた音でなく、忠夫の高性能な耳が捉えた感じによれば、船室の上のほう、おそらく通気口がある辺りから響いたようだ。

助かった、と何でピートが居るのかとか、彼が通気口から来たのかとかそう言ったことを全部放り投げて喜色満面の忠夫が声を上げる。

「ピート、良い所に! 助けてくれーっ!」

「もきゅー」

「そーか「もきゅー」かって何だそりゃあああああつ!!」

鳴かない、あの半吸血鬼は「もきゅー」とか鳴かない。

謎の鳴き声? を上げた謎存在は、謎の足音? らしき粘液質の音を立てながら忠夫の下半身へと接近している気配がする。

両足をばたばたと必死に動かしながら脱出を図る忠夫だが、無情にも拘束は緩まな

い。

幸運の精霊に助けを求めようと視線を上げてみれば、何故か感心したようにこちらを見下ろしてくる視線とぶつかった。

『・・・そなた、妙な因果に恵まれておるのう』

「いらないつ！ そんな因果いらなかつ！！」

「もきゆきゆー」

ぺちやり、と何かが足に絡みついた。

生暖かくもぬるぬるとした感触を感じた忠夫の動きが停止する。

『ふむふむ。「我は灼熱の業火に炙られし、鋼鉄の底より来たりし者」とな？』

「なんじゃその通訳はあああつ！ 俺の足に絡んでんのは地獄の使者かなんかあああつ?! てか言葉が通じるんなら助けてえええつ!!」

「もきゆつきゆもきゆー」

忠夫が叫ぶ間も、何処かユーモラスな鳴き声?を上げながら謎の存在はさらに忠夫に何か細くてぬるぬるとした粘液に塗れた物を伸ばして絡み付いていく。

その細さの何処にそんな力があるのか、必死で暴れる忠夫の膂力を持ってしても、その柔軟さと相俟って解放してはくれないのだ。

『「案ずるでない。地獄からの使者などではないぞ。生まれは日本の東京、古臭いアパー

トのじつくりこと煮られた鍋の中、だ。母はメドーサと言う。意識を持ったのは海に流れてからだ。おやそう言えば貴殿には見覚えが……」だそうだ」

「あんの馬鹿娘えええつ!!」

そう、彼？は忠夫が排水溝に流したメドーサの料理から生まれた存在だったのだ！

どうやら海にまで流れていって、漁師の網に掛かって見世物として売られていく途中だったらしい。

テロリスト達に捕まった忠夫を縛っていた何かの荷物を縛っていたらしいロープ。

あれの中には実は檻が在り、それを木の板で囲んで居たのだが、其処に居る事に飽きた彼が脱出した際に解けたロープが忠夫を縛っていたのだ。

何とも奇妙な縁である。

『そなたに非常に己と近いものを感じたので助ける……と』

「うあーっ！　　そういや俺食べたよっ！　　一部だけどっ?！」

「もきゅー」

「あっ！　駄目、其処は駄目ーっ?!」

広い広い大海原に、悲痛な半人狼の悲鳴が響いた。

イメージ映像としてはぼとりと落ちるラフレシア辺りが相応しいだろうか。

「うう……もう、お婿に行けないっ」

『男の純潔なぞ、金を払って引き取ってもらおう程度の価値しかなかろうに』

それはあまりにも極一部の価値観ではなからうか。

ともあれ、体中を謎のべたべたで覆われた忠夫が部屋の中で妙にしなを作つて顔を覆いながらしくしくと泣いている。

ズボンもしっかり履いているので、どうやら色々と無事に脱出は出来たようである。

謎の彼？はと言うと結構な照れ屋らしく、忠夫が部屋の中に引きずり込まれる——と

しか言えない光景であつた——瞬間、すれ違うようにして自由の海へと消えていった。フオーチュンはそんな忠夫を慰めるようにぼんぼんと小さな手で頭を叩き、そのまま姿を消していく。

『では、元気でな』

「二度と来るなーっ!!」

『そう言うな。そなたは中々に面白い——』

そう言い残し、フオーチュンはくすくすと笑いながら完全にその姿を消すのだった。

消えていった精霊に向かつて叫んだ忠夫の耳に、船室の外を駆けて来る軽い足音が聞こえる。

慌てて辺りを探すも、隠れるような場所はない。

というかもう窓には近寄りたくもない。

こうなつたら、とドアの陰に隠れ、霊波刀を展開して振り上げる。

ドアを開けて誰かが飛び込んできた瞬間、思いつきりはたいて気絶させようと言う魂胆であろう。

「——マツタク！　いくらニげだせないからとイって、折角のホリヨをほうつて置くなんて勿体無いデス！」

聞こえたのは、そんな声だった。

しかも、足音からすると一人だけ。

どうするか、と悩む暇もなく開くドア。

そして飛び込んだ女性は、忠夫も見なかったことのある人物だった。

彼女は、壁に張り付いた忠夫に気付く事無く、既に脱出して誰も嵌っていない船窓を
発見し、慌てた様子で一步を踏み出した。

「アッ?!」

——そして、床のぬるぬるを踏んで、滑って転んで頭を打って気絶した。

「……えっと、俺のせいじゃないよな?」

遠因ではあろうが。

「ハッ?! ここは——ヒッ?!」

「そんなに怖がらんでもえーやん。助けたのに」

「夕、タスけた?」

「そ、そうっ! ぬるぬるの化け物に襲われていたあんたを千切つては投げ千切つては投げの大活躍で助けた横島忠夫! 横島忠夫をよろしくお願いします!」

そーいう事にしたらしい。

女性が辺りを見回せば、確かに床は謎のぬるぬるに覆われしかもそれは窓の外にまるで逃げ出したように飛沫を散らしている。

実は照れ屋のにくいアンチクショウが素早くそこから海へと旅立っただけなのだが、状況証拠と忠夫の発言からすればつじつまが合ってしまう。

また、忠夫も体中——と言うか体がぬるぬるに、まるで襲われでもしたかのようにべっとり纏わり付かれており、戦いの激しさを物語っているようにも見えるのだ。

だから、王族としてきちんと教育を受けている王女は胸を打たれたような表情になると、深々と頭を下げて見せた。

「ソウなのですか……。アリガトウございました。アナタはイノチの恩人デス」

「うわ信じたよ……」

ぼそつと呟かれた忠夫の言葉が聞こえなかつたのは幸いであろう。

その実直さに少々良心が痛みはする物の、まあそれはそれとして。

「アヤしい人物と思ひコウソクしてしまいました……。そんな私を助けてくれるだなんて、アナタこそまさに騎士デースっ！」

「いや、侍なんやけども……」

「聞いたコトあります……。サムライイ、東洋の騎士デースね！」

きらきらと尊敬の視線でこちらを見てくる女性を見ると、良心がズキズキと痛む訳ですが。

ともあれ視線を逸らして頬をほりほりと搔く忠夫を、謙虚な人物と言う印象を受けたのかますます輝く瞳で王女は見て来るわけで。

「あー、その、お名前を聞いてもいいかな？」

「これはシツレイを。私はザンス王国の王女、キャラットとモウシマス」

再び深々と頭を下げる女性になんとなく頭を下げ返しながら、忠夫はどーしたもんかと悩んでいた。

と、そんな何処ぞの国の王女が、何故こんな所に、しかもテロリスト達と一緒に居るのかと言う疑問が湧く。

今は居ないが、さつき見たときは確かに怪しい人物達が彼女を守るように居た筈。

「あの、何故こんな所に？」

「：その、怪しいオトコを一人で、しかも放置していると聞いた物ですカラ。——こっそりゴーモンして情報を聞き出そうかト思い、抜けダしてきました」

さらつと危ない発言をかます王女に、忠夫は自分の身が結構ギリギリで助かつたと言う事を悟つた。

どうやら危うくゴーモンに掛けられる所だつた、らしい。

ばくばくと五月蠅い心臓に手を当てながら、どうやらこちらを捕虜から凄い人、に格上げしてくれたらしい彼女の指を見る。

其処には、やっぱりあのごつつい何かを呼び出した指輪が輝いていた。

ふむ、と腕を組んだ忠夫は、自分の立場を利用できないか考える。

どうやらトラブルに巻き込まれたのは間違い無いらしいが、果たして美神が絡んでいるのはどつちだろうか。

まあ、王女と言う重要人物に忠夫という存在が知らされていなかつた以上、彼女達が襲つている方についたのだらうけれども。

こう言うときは不利な方についたほうが儲けは大きい物だし。

「ええと、王女様？」

「ハイ？」

「一体何が起こっているんっすか？」

その言葉に、王女は俄かに表情を曇らせた。

「王様が、ねえ・・・」

「ハイ。どうやら魔族にセンノウさわれているらしいのデス」

クーデターまがいの現状は、目の前のお姫様が何処からかそんな情報を知ったことが

始まりだったらしい。

ザンス王国に眠る大量の精霊石を狙った魔族が、王を操り国を滅ぼそうとしているのだと。

しかも全世界に出回る精霊石の殆どを生産するこの国を潰せば、世界中で活動するG S達にも精霊石が供給されにくくなり、魔族が活動しやすくなる、まさに一石二鳥の作戦なのだ。

「でも、お姫さんさ、その魔族って見たことないだろう？」

「エエ。ですが、魔族はズル賢いからスガタを見せないだけで、ソウ言ったヒトの意識を操るドウグもあると——」

「あ、それは本当。その道具なら俺も見たことあるし。ただなー、国を潰してもあんまり意味ないと思うぞ？」

精霊石の重要な生産地であるザンス王国。

果たして、其処が潰されて、誰が黙ってみているだろうか。

ほぼ確実に、オカルトGメンを始めとする霊能者達が黙っていないだろうし、精霊石の生み出す莫大な利益を狙った各国が動き出す事は間違いない。

物量に押されて、精霊石の鉱床が再び人の手に戻るだけだ。

「・・・それは、分かっているマス。ですが、民が被害をウける事にチガイはありません」

だから、そうなる前に父を止めに来たのだと。

この船には父が居り、そして父を操ろうとしている魔族が居るのだと。

最悪の場合、父を止める為には手段を選ばない。

そう泣きそうな顔で小さく呟いたお姫様は、子供のように見えながらも、確かに王の欠片を持っていた。

今は小さくとも、いつかは大きく育つであろう王の資質を。

「・・・良しっ！ 分かった！」

だけど、だからと言って美人が泣き顔なのは納得行かないのが忠夫。

本当に王様が悪魔に誑かされているのかは知らないし、もしかしたら悪い奴が後ろで糸を引いているだけなのかもしれない。

だけど、侍として、男として。

「・・・え？」

「お姫様が頑張ってたんだから、侍が黙ってみてる訳にはいかんよなっ!!」

何とかしてあげたいと思うのが当たり前。

当然だから、やるだけだ。

「横島忠夫に任せなさいっ！」

頑張るお姫様に、良い所の一つも見せちゃろう。

「だから嫁に来ないか？」

「ナニがだからなのかワかりませんが・・・それはタブーですカラ」

聞いてみるだけ聞いてみた。

脈絡はないが、何となく。

ともあれ、よろしくお願ひします、とこれまた丁寧に頭を下げてくる王女にこちらも頭を下げ返しつつ、関節を外して抜け出した時に落ちていたロープを拾った忠夫は、頭を上げ、きよとんとこちらを見やる王女に囁いた。

「あ、王女様。指がぬるぬるで汚れてまっせ」

「で、見つからなかったの?」

はい。テロリスト達から盗み聞いた話の場所にも行つてはみたんですが、何だか粘液質な物が飛び散っていた以外は特に何も……」

階段の踊り場で合流したピートの言葉に、美神の顔に不審げな色が宿る。

その他にも霧になつて船の各部を見回つてきたピートの情報も顎に手を当て聞いた後、振り切るように頭を2, 3度振り、神父を見た美神は、躊躇う事無く言葉を続けた。「放つて置きましょう。どうせここぞつて言う時以外は役に立たないんだし」

「それはいくらなんでも酷評じゃないかなと思うんだがねえ」

階段の下を覗きつつ、慎重に進み始めた美神と並んだ神父が呟く。

聞こえない振りをしてしながら足音を立てないように降りた美神は、左右に伸びる通路を見渡しながら後ろに向かつて手招きをした。

「あ、でも、それつてここぞつて言う時は頼りにしてゐるつて事なんですよ」おキヌちゃん、口は災いの元よ?」はい」

韜晦するように微笑みながらあらぬ方を見上げるおキヌ。

少し威圧感を籠めた悪態を突いた美神だが、どうもするりとかわされた感が否めない。い。

感心したように、と言うか半分近くは驚愕と困惑の視線で見えてくる唐菓とピートに睨

みを効かせながら耳を澄ます。

通路の先からは何も聞こえては来ないが、僅かに巨船の機関部が立てる音が大きくなつては来ているようだ。

「つたく。ほらほら、さつさと行くわよ」

「しかし美神君、本当にこつちで良いのかね？」

問うたのは唐巢神父である。

今美神達が目指しているのは、ピートが偵察して来たテロリスト達が集まっているであろう船倉ではなく、お姫様が待機していると言う船室でもなく、客船を動かしている機関室である。

誰が言い出すでもなく行き先を決めるのが美神にはなっているが、唐巢神父達も特に不満があるわけではない。

こう言つた非常時にある種特異な適応を見せるのが美神でもあるからだ。

とは言え何の説明もなく余り関係無きような場所に向かっていると、それなりに不安も募ってくる。

「・・・勘、かしらね。外れてくれれば良いけど」

「と言つとっ」

「どーも、ただの親子喧嘩の延長線じゃ済まないような気がするわ」

呟いて、見取り図で記憶していた機関室前の曲がり角まで歩を進める。

小さな手鏡を出し、曲がり角の向こうを覗けば、その不安を肯定するかのよう。「関係の無い」筈の機関室の扉には、銃を下げたテロリストが数人と、何も持たないテロリストが2人。

その指には、精霊石の指輪が嵌っている。

「ピンゴ、かしらねー」

「・・・まさかっ?！」

「多分、だけど」

緊張を一気に跳ね上げた美神と唐巢を余所に、ピートとおキヌは疑問符を浮かべてきよとんとしている。

銃を装備したテロリストが数人と、おそらく精霊獣を使う奴が2人。

さて、どうやって突破するか、と車座になって考え始めた美神達。

通路に設置されたスピーカーから声が響いたのは、そんな時だった。

「——え、もうスイッチ入ってる? すんまつせん。あー、テステス。只今マイクのテスト中ー。本日青天なれど所により理不尽の雨なりー」

「・・・あんの馬鹿っ!」

頭を抱えてスピーカーに憤怒の視線を向ける美神の傍では、状況を理解できない唐巢とピートが声の持ち主に気付いてなにやら嫌な予感を感じている。

おキヌは彼が無事だった事を知り、ほっと安堵の吐息を吐いてはいたが。

「えー、テロリストとザンス王達に連絡します。3分以内に全員甲板に來なさい。さもなくば——」

「むぐーっ!!」

「ここに居られるキャラクターが王女が凄い事になっちゃいます!」

「むぐむぐむーっ!!!」

「アホかーっ!!!」

思わず突っ込んだ美神であるが、スピーカーの向こうから聞こえてきた話の内容は、はつきりいつて問題だらけである。

仮にも一国の王女を人質にとって、しかも敵対する2つのグループを一箇所に集め様とは。普通思わないだろう。

「ち・な・み・に。テロリストの人数も王国から來てるであろう人数も王女から聞いて把握済みなので、一人でも足りなかったら・・・ふっふふのふー」

「あ、相変わらず妙な所で抜け目が無いね、彼は・・・」

呆れたような、と言うよりも呆れを通り越して如何したらいいのか分からない、と言った様子の唐巢とピートを横目に、頭をがしがしと掻いた美神に続いておキヌも走り出す。

「美神さんっ！ 横島さんっ、もしかして！」

「多分そうでしょ。私達を指定しなかったって事は、私達なら何とかするって思ってるわね、あの馬鹿」

慌てて美神達を追いかけ始めた神父達に聞こえたのは、そんなおキヌと美神の会話だった。

思わず零れた師匠としての笑いを噛み殺しながら、音も気にせず階段を駆け上がる。

「先生っ！ ちよつと！」

階段を上がりきり、通路を左に曲がればザンス王達が居る船室に至る、と言うその場所、振り向いた美神が唐巢を呼んだ。

追いついた唐巢の耳に、美神の囁き声が小さく響く。

「——ええっ?! 本気かい美神くん?!」

「娘の命が掛かってるって言えば文句も言わないでしょ！ しつかり頑張ってくださいねっ!!」

叫んで駆け出していった美神の背を見送りながら、唐巢は呆然と引き止めることも出

来ずにふらふらとしていた手を下ろした。

不思議そうに覗き込んだ弟子の目に写ったのは、酷く蒼褪めた師匠の顔。

「・・・やっぱり私の教育が間違っていたんだらうか」

「せ、先生っ！ 気を確かにーっ!!」

単純に、美神家の女は彼と相性が悪すぎるだけのようない気もするが。

第五拾玖話。

巨船の規模と豪華さを裏付けるように、大きめの会議場ほどもある艦橋の中を、忠夫がごそごそと漁っていた。

周囲には通路に設置してあった消火器両手持ち噴射でもって、手加減しながら不意打ち気味にぶん殴って気絶させたテロリスト達と、そのテロリスト達に拘束されていた船員達の姿がある。

時間を区切った上に結構えげつない脅し方をしたので残っているテロリスト達も王の護衛達も甲板に警戒しながら集まり始めている頃だろう。

テロリスト達にとつては旗頭であるし、王側にとつてもでき得る事なら無事に助け出すべき人物なのだから、どんな思惑があつてもある程度までは様子見も兼ねて従つてくれるはず、と思いたいところである。

とは言え何が起こるか分からないことは身に染みて知っているし、現在は忠夫だけで色々動き回っているのだから人手が足りない事もまた事実。

だからまあ、取り敢えずは足りない物を補つたり、時間を稼いだりする必要があるわけ。

「お、あつたあつた通信機。えーつと、それからそれから……」
「むぐーっ！」

「そ、それからつ、何か無いかなーつと！」

じつたんぱつたんと激しく動き回る音が聞こえるが、何せ音を立てている人物の目が洒落にならないくらいにおつとろしいので必死で目を逸らす忠夫であった。

睨み付けている王女様、ザンス王国の王女キャラットはと言えば、そんな忠夫のポケットの辺りと忠夫本人の後頭部の辺りに視線を行き来させながら、「後で覚えてろっ!!」と言う感じに穴が空くほど見つめていらっしやる。

油断した、と言つてしまえばそれまでなのであろうが——正直、父に敵対すると言う形を取つてしまわねばならない事に不安を覚えていたのはある。

そこに如何にも頭は少々軽そうだが、自分を侍と名乗る男が現れ、しかも協力してくれると言う言葉に何故か騙されてしまったことが否応無しに悔やまれる。

きつとあのへらへらした顔と真つ直ぐな言葉に不安だったから騙されたのだ、と結論付けて、手についた謎の粘液を拭う振りをして指輪を取られたことが非常に腹立たしいと怒りを再燃させる。

と、そんな王女の炎のような視線から意識を逸らしながら、眼下に見える甲板の様子を覗き見ていた忠夫の目の前に、ガラス越しにいきなり女性の頭が逆さまに降りてき

た。

「あ、タダオみつけ」

「うおっ!? いきなり変な登場すなルシオラっ!」

「別に良いじゃないそのくらい。それより、さっきの放送、一体何ごとよ?」

上から飛んで来たらしいルシオラを、換気のために開けていた丸い窓から向かいれつつ忠夫が頭をぼりぼりと搔いた。

するりと窓枠を潜り抜けて入ってきたルシオラも、ふわりと浮かんで音も立てずに着地する。

「:いやまあ、ドームも中々に込み合ってるみたいなんでな。面倒臭いから纏めてどーにかしちやろうかと」

「ま、私には関係無いから良いけど。それよりも、あの女の人、何かスツゴイ目で私も睨んでるんだけど?」

ルシオラの言葉にぎくりとした表情になった忠夫が、恐る恐る振り向けば、其処にはさつきまでの後で覚えてろ、な視線からぶっ殺す、な視線にグレードアップした瞳を向ける王女様の姿。

状況を確認してみよう。

空を飛んで窓の外から入ってきた女性。

その頭にはピコピコと動く触角。

イコール、明らかに人間ではない、となった可能性が高い。

更に、彼女の父は「悪魔に操られている」という真偽定かではなくとも彼女が信じている情報。

そして、忠夫が彼女の指輪を奪い、拘束していると言う状態。

全部繋げると。

「ぜ、絶対に誤解されとるよーな」

「? 何が?」

「いや、もーいい。多分何言っても信じちやもらえんし」

情けない顔でとほほと呟く忠夫の隣で、問い掛けるだけ問い掛けてあっさり興味を失ったルシオラは、至つて気軽に窓の外を見ている。

頭を抱えて蹲つた忠夫の肩を、窓の外を見ながら彼女は叩いた。

「ねえ、そろそろヤバそーなんだけど、外」

「・・・うわー、もうこんな時間だし」

指定した時間から、既に5分が経っている。

眼下に集まった、敵対するグループ二つがにらみ合ったまま動きを見せていないのは、一重に王女最優先という利害関係の一致からだろう。

とは言え、はつきり言つて一触即発、ちよつとした刺激で破裂しそうなくらいに緊張感が溢れているのが見て取れる。

「・・・帰つて良いかな？」

「海のと真ん中でどーやって？」

「泳いで参つた、とか」

睨み合う50人近いごつつい男達の、しかも銃を構えているのがバツチリ見えるま前に出るシーンを想像して腰が引けている忠夫を溜め息一つと一緒に呆れた視線で横目にみながら、ルシオラは黙つてその襟首を掴み上げた。

「いやーっ！ お家帰るーっ！」

「自分でセツティングしたんでしょーが。ちやつちやつとケリつけて来なさいっ！」
地面に爪を立てて嫌がる半人狼を魔力に任せて掴み上げ、開いたままだつた窓に向けて振りかぶる。

ピッチャー大きく振りかぶつて、第一球投げました。

「馬鹿たれーっ！ ここ何階やと——」

「あ、そう言えばそうだったわね」

今更なルシオラの声をかすかに聞きながら、忠夫は大きな弧を描いて、睨み合う男達の頭上も超えて、そのまま触先へと落ちていったのだった。

「・・・レンラクはまだかっ?!」

「い、未だナニも・・・」

睨み合う男達の間で交わされている会話は、奇しくも似たような内容であった。

船内放送の直後から全ての持ち場を放棄させて、あるいは己から放棄して集まったテロリスト側と、僅かに王冠だけが見える王を中心に固まっている護衛達。

人数と銃の数ではテロリスト達が上ではあるが、王の護衛たちは少数ながらも、いや少数だからこそその精鋭揃い。

しかも全員が精霊獣を扱えるとも成れば、真正面からぶつかり合えばどちらが勝つかは判断できかねる。

そんな際どいバランスの上に立つ均衡は、しかしその倒すべき敵が目の前に居ると言う事でストレスを否応無しに増す効果しか持つてはいなかった。

互いに南洋の照り付ける太陽の下、夥しい汗を掻いた男たちが、殺気の充満した場所に存在すると言ふ何とも近寄り難い雰囲気である物の、当事者達はそれ所ではない。

胃に穴が空きそうなほどのプレッシャーを感じながら、次にあるであろう指示をひたすらに待っている。

「——っ」

「……ナニかキこえなかったか？」

そんな彼らの頭上を、その指示を出すと思われていた人物が高速でぶっ飛んでいったのだが、瞬きをする瞬間すら恐ろしいと思えるほどの睨み合いの真っ只中にある両陣営に気付いた物はいなかった。

その吹っ飛んでいった物体Xは、舳先を超えて今まさに海に落下中である。

と、両陣営の視線を妨げるように、強烈な暴風が吹き荒れる。

慌てて伏せながら顔を底い、何とか相手の姿を確認し様と視線を上げたその時。

「のわーっ?!」

「うわーっ?!」

何だか真つ黒な布切れに絡まって、見知らぬ男が鼻水だの涙だのを大量に流しながら両陣営のど真ん中を転がりながら横切った。

いきなりの出現に流石に驚いた男たちが驚愕の声を上げながら立ち上がり、その物体の転がる先を見送っている。

今だけは、にらみ合いも王女の安否も完全に意識の外であった。

ごろごろと転がっていったその黒い物体は、やがてその先にあつた金属の壁にぶつかつて快音を立てて、ようやく動きを止めた。

「・・・ナンだ、今のは」

誰もがそう思つた瞬間、その布切れの塊がごそごそと動きを見せ始める。

慌てて銃を構えたり、精霊獣を呼び出す準備動作に入りながら警戒しあう両陣営。

今、敵対する二つのグループが、たった一つの怪しい物体に対応する為一つになつて
いるのだ。

「・・・ふ、ふっふっふっふっふ」

「う、ウゴいたぞっ!」

「何処が幸運の精霊だばつきやろーっ!!」

その幸運のお陰で、いきなり吹いた突風とそれに紛れて飛んで来た布に絡み取られたせいで海に落ちることから免れた忠夫は、現在進行形で出血大サービスだった。

しかも精霊獣とか銃口とかから睨まれている真つ最中。

背中を向けている為どれくらいの数がこちらに向いているのか不明であるが、カチャカチャと響く金属音や、獣の唸り声のような重なり合つて聞こえる精霊獣の音が振り向く気力を全部持つていきそうである。

「……ちよ、ちよつと待つてっ!」

と、布の隙間から手を突き出した忠夫は、邪魔な布を被り直しながら叫んでみた。

何時でも逃げ出せるように身構えながらであるが、どうやら引き金が引かれる気配は無いようだ。

「うあああああ。放送で色々聞いたり通信機渡して王様と直接話したりするつもりだったのにーっ! 何でいきなり俺が真正面にでとるんじやあああつ!」

運命の悪戯であろうか。

悪戯好きな運命の性であろうか。

ともあれ、作戦第一弾が木つ端微塵に碎け散った事は確かであった。

だが、だからと言ってこのままここで硬直している訳にも行かないのが世間のキビ

シー所である。

最悪、どちらかがこの怪しい邪魔者を排除しようと引き金を動かせば、それを切欠に両陣営が血みどろの争いを始める可能性もある。

なので、まずは額のバンダナを外して鼻の上で縛って顔を隠し、黒い布を羽織ってゆつくりと立ち上がる事にした。

無論、出血は布で全部拭き取ってからである。

「ウゴくなっ！」

「おおっと、そんな事言っても良いのかなっ！」

さてさて、震える体と笑う膝を隠して、ハッターリ千万口八丁の出番である。

「横島あああつ!! つて、ルシオラっ?!」

「けほっ、けほっ、も、もー駄目ええええ」

「な、何で王女が簀巻きになつてんのよっ?!」

拘束された王女が床に転がり、ルシオラが呆れた様子で窓の下を眺めているその場所に美神達が踏み込んだのは、忠夫が真下で立ち上がった直後だった。

もう少し速ければ忠夫にも色々と選択肢が増えたのだが、流星にこの巨船の下部から一気に駆け上がってくるのは辛かったらしい。

それでも仕事柄タフネスにはそれなりのものがある美神が扉を蹴り開け、その後ろからへろへろとおキヌが入ってくるまでに掛かった時間を考えれば、僅かに遅かったと言うしかないのであるが。

振り返ったルシオラは口元に立てた人差し指を当てると、静かに、と身振りで示しながら王女に視線をやる。

キャラット王女は、先程までの警戒は何処へやら、寝息を立ててすつかりと気持ち良さそうに眠っている最中である。とは言えさすがに眠れる状況ではない、ルシオラが催

眠か何かで五月蠅いからと寝かせただけである。

ひよいひよいともう片方の手で招くルシオラの元へと静かに歩み寄った美神達に、彼女は窓の外を指差して見せた。

「・・・?! なにやっつてんのあの馬鹿・・・!」

「しーっ! ばたばた煩いから眠らせたのに、また起きちゃうつてばー!」

窓から見えた甲板の様子を見た瞬間、身を乗り出して忠夫に声を掛けようとした美神の背中に、慌ててルシオラが飛びついた。

ついでに口元を塞ぎつつ、小さな声で動きを止めた美神に囁く。

「ほら、その通信機」

「・・・?」

僅かにノイズを混じらせながら、その通信機からは甲板にいる半人狼の声が聞こえてくる。

へたり込んだまま目を回しているおキヌと寝こけているキャラットを横目でちらりと見た美神は、その通信機を手に取った。

「ふっふっふっ．．．キャラット王女の身柄は、今、俺の手の中にある．．．！」

「ウてー！」

「どわあああつ?!」

忠夫の足元と背後で跳ね散る火花。

金属と銃弾が互いを抉りながら耳障りな音を立て、数十発もその弾丸の雨が降った所で漸く弾切れとなった。

素早くマガジンを籠めなおすテロリスト達に向かって、忠夫が必死で声を張り上げる。

「こらーっ！　嘘とちやうんやぞーっ！　ほんまにやるときややるからなーっ！」

「キサマラツ！ 王女のミにもしもの事があつたらどうするキだつ！」

護衛達と忠夫から上がった講義の声に、テロリスト達も動きを止めてちらちらと視線を交し合う。

その視線の先がやがて後方に立つ、銃を持っていない一人の男に集まり出し――

「カマわん、ヤレ」

「しっ、しかしっ！」

「ヤレ」

男の声と共に、戸惑いの中に在りながらも銃が持ち上げられた。

そして、忠夫が身構え、銃の引き金が引かれた瞬間、忠夫とテロリスト達の間立つ影があつた。

人よりも二周りほど大きなその三体の人型の影達は、全く同じ形を持ちながら忠夫の前に回りこんで庇うように両手を広げて弾丸を受け止める。

銃弾がその護衛達が繰り出した精霊獣に跳ね返され、テロリスト達も効果が無いと分かっているのかあつさり銃口の火花は止み。

次の瞬間に、突っ込んできた蛇頭の精霊獣に、護衛達の精霊獣は頭を消し飛ばされて溢れた霊力の爆散と共に姿を消した。

「しまつ、これがホンメイかつ．．．！」

爆炎を上げながら、王の護衛たちの精霊獣を消し飛ばした蛇頭の精霊獣の更に後方からもう一体、今度は犀頭の精霊獣が擦り抜けるようにして忠夫がいた所に突っ込んでいき――

その拳が、何も無い場所を虚しく抉る。

慌てたようにその精霊獣が周囲を見渡すが、王の護衛達の精霊獣を消し飛ばした時に巻き上がった白煙に紛れて周囲の視界は殆ど無い。

諦めたのか、すぐさま2体の精霊獣は身を翻すと、テロリスト達の所へと戻っていった。

「む、無茶苦茶しやがる……。ちよつとちびつたがまあ結果オーライ！」

姿を消した忠夫はと言えば、護衛達の精霊獣が破壊されたと同時に駆け出し、混乱する護衛達の背後を大きく回りながら駆けていた。

そのまま真後ろまで移動すると、目標目指して直角に曲がり足音を立てずに再加速。

黒い布を脱ぎながら、ここまで漂ってきた白煙の中で目星をつけていた場所まで一気に駆けより、目的のそれに向かって布を広げて覆い被せた。

包まれた者が驚いたように暴れるが、すぐさま布を腰の辺りで縛って後方に加速。

疾走しながら懐から取り出した通信機に囁いた。

「ルシオラっ！ 何かオマケで煙幕みたいなのやってくれ！ 出来るだけド派手になっ

！

通信機の向こうから、なにやら呼びかけた少女以外の声も聞こえた気がするが、構ってられないのでスイッチを切った通信機を懐に戻して甲板を駆け抜ける。

後方で、数回の爆音と、背中を焦がす熱を感じながら、忠夫は少し離れた通路に駆け込んでいった。

光り輝く王冠を被っていた人物を誘拐して。

「ま、待てって言ったでしょうがっ！」

「問題無いわ。両方とも全員気絶したし」

「だからって高位魔族が魔力砲打ち込むこたあ無いでしょうがっ！ 王様死んでたら誰が報酬払ってくれんのよ！」

結構なお年だし。

心臓が止まってなきや良いなー、と下の様子が分からない美神が頭を抱えながら悩んでいた。

むしろ、船の甲板に穴が空いていない所を見る限りではきちんと手加減はしているよ
うであるが、人的損害の方が心配である。

打ち込まれた数発のうち、2、3発は両方のグループのど真ん中に飛び込んでいたし。

「ああもう！ とりあえず王様だけでも——」

「いや、その必要は無い」

立ち上がり、甲板に向かおうとした美神の言葉を、非常に疲れたような声が遮った。

「・・・で、唐巢神父はなにをやってるんすか？」

「と言うかだね。君も一国の王をあっさり攫おうとする辺り、美神くんに染まってやしないかね？」

黒い布を取ってみれば、かなり蒼褪めた顔の唐巢神父が出てきたり。

王冠を被っていたのが王様だと決め付け、確認もせずに攫ったはいいが、何故かいきなり唐巢神父が出てきてイリユージョンときたもんだ。

暫し互いに見詰め合った後、大きく溜め息をつく2人であった。

「王様連れて行けば手っ取り早いと思つたのにー！ 今回こんなばつかしやー！」

「もう少し手段を選びたまえっ！ 大体それで上手く言つたとしても、後々困るのは君だろう！」

「だからこーやって顔隠してたんじゃないっすかっ！」

一頻り互いに頭を抱えた後、仕切りなおして通路に座り込む。

「で、本物は何処っすか？」

「・・・私が身代わりになって、今は身を隠している筈——」

「先生っ！・・・と、横島さん？」

「おー、ピートも来てたんか」

何となく気が抜けた様子で話し合っていた2人の目の前に、通路の通気口から噴出した霧が集まって半吸血鬼を形作る。

きよとん、とこちらを見てくるピートに片手を上げて挨拶しながら、忠夫は何だか疲れた様子で吐息をひとつ。

慌てた様子でまた何か厄介ごとでも連鎖反応おこしたんだろーなー、と諦め半分で膝

の上を立てた手のひらに顎を乗せ、視線で話を促した。

「王様が、一人で王女の所につ！」

「・・・もーいーですから。お腹一杯ですからあつ・・・」

懐の通信機が、やたら重たく感じる忠夫である。

「・・・父上？」

「この、馬鹿娘が」

ルシオラの手によって目覚めた王女が、目を擦りながら体を起こす。

暫く状況を把握しきれず呆けていた物の、目の前の人物が己の父である事、そして彼を助ける為にこの船に乗り込んで来た事を思い出すと、父が悪魔に誑かされていたと言う話を思い出して指輪を嵌めていた筈の手を突き出す。

だが、その指輪は忠夫によって奪われており、ならばとばかりに跳び退ろうとしたその腕を、父の手が引きとめた。

「……良く見よ。お前の目は、私をしつかり見ておるか？」

「……え、あ？ 父、上——悪魔にタブラかされていたのでは」
「馬鹿者。ザンス国王が、そうそう悪魔などに引けを取る物か」

そう言つて、掴んだ腕をゆっくりと引き戻す。

娘を抱き止めながら、父は、ただその無事を嘯み締めるように力を籠めた。

「ま、あつちはあれで良いとして。じゃあ何よ、誰が原因な訳？」

『……どーもテロリスト達の中にそれっぽいのが居ましたけど、それにしちやあ王女を人質に取つた俺をあつさり片付けようと思いましたし』

親子の抱擁を気だるげに見つめつつ、忠夫に繋いだ通信機に話し掛ける美神。

忠夫と情報を交換し合つた結論としては、テロリスト達も王を助ける為に乗り込んできた、と言う事であつた。

勿論、どうも胡散臭くはある。

王女を旗頭にしながら、それをあつさりで見捨てるような命令を下したあの男も怪しければ、王族が認めた者しか扱えない筈の精霊獣を操っていたテロリスト達も怪しいものである。

とは言え、精霊獣に対抗できるのは精霊獣しか居ない、と言う触れ込みであるから、必ず持つているであろう王とその護衛達に対抗する為にはテロリスト側にも精霊獣が必要な訳であるから。

「・・・黒幕が居るわね。しかも、精霊獣を扱える者達に関する誰かが。多分、あの中に」
『だと思いません。でも、あの話じゃ別に王様に危害を加えようとした訳じゃないみたいでしたし——』

「・・・だったら、それが本命じゃないんでしょ」

王を害する事が目的でないとすれば、王女を旗頭にした訳は、と言う疑問が出てくる。王を害する事が目的だとすれば、王女は人質として使えるだろう。

はつきり言って、あの直情的な王女ならば前に出ようとするだろうが——

「まさか、それが狙い・・・!」

「美神さん、下、下見てくださいっ!」

何かに思い当たった美神が、おキヌの慌てた声にすぐさま反応して窓辺に駆け寄る。

見下ろした甲板では、横たわるテロリスト達の中からゆっくりと立ち上がった男が、指輪から光を放って精霊獣を3体呼び出した所であった。

「やばっ！」

頭を振りながら立ち上がった男は、呼び出したうちの一体の背中に飛び乗ると、そのまま艦橋目掛けて飛んでくる。

おキヌを引つ張り窓際から美神が離れるのと、精霊獣がガラスを突き破って侵入してきたのは同時であった。

神通棍を伸ばし、身構える美神。

神父とピートが今こちらに向かっている筈であるが、精霊獣が攻撃を仕掛けてくるよりも早く来るかどうかは微妙であろう。

忠夫も偵察として下に残っている為、こちらに間にあるはずが無い。

巨体を震わせながら2体の精霊獣が艦橋に侵入し、男を乗せた精霊獣が破られたガラスの向こうでこちらを見ていた。

「……精霊獣を、ヨばないのか？」

「……」

「……クックツ。王よ、王の精霊獣石はどうしたのだ？」

身代わりとして行った神父が持っています。

ちなみに王女の指輪も、現在忠夫が所有中。

精靈獸に対抗するには精靈獸しかない。

そんな共通項がありながらも、最も手強い筈の王は冠を持たず、直情的な王女が精靈獸を呼ぶことも無く王の影に隠れている。

「アナタ・・・父上は悪魔にタブラかされてなどいないではないですか!」

「王女、それはウソだ」

勝ち誇った表情で、余裕たつぷりに笑う男。

「ナゼなら——王と貴方の命、両方がワタシのネライなのだからっ!」

「あつそ」

「・・・は?」

心底如何でも良さそうにそう言った美神の言葉に、ここが見せ場とばかりに決めていた男がちよつと精靈獸の背中から落ちそうになった。

慌てて精靈獸に拾わせながら、しつかりとしがみ付きなおしてこほんと空咳。

何度か咽の調子を確認するように唸った後、いかにもな笑みを浮かべて美神を見下ろした。

「か、空意地というヤツか?」

「いーえ。ただ、自分からネタばらしする悪役は、もう直ぐ終わるって言う常識、知らな

い?」

「・・・戯言を。良いか? 単純な王女をヒトジチにして、王とアラソわせ、その上で両方のイノチをとると言う私のサクセンに、アナは無い!」

そう言つて嘲笑を浮かべた男に、美神は鼻で笑つて答えてやった。

目の前の馬鹿は勝ち誇つているが、全く分かつていない。

だから、それを教えてやる事にしよう。

「あのねえ」

「ナンだ? 命乞いか?」

「名前も無い一発キヤラが、レギュラー側に勝てる筈がないでしょーが!」

「ぬふあつ?!」

会心の一撃であつた。

美神の言葉は、男にとつてもないダメージを与えたようであつた。

擬音で言うなら、ドギヤーン、と。

「そ、そんなメタナリユウは無しだろうっ?!」

「やかましいっ! こんだけ自分の負けフラグ立てといて、今更何ぬかすかつ!!」

「・・・あ、あのー、美神さん?」

「おキヌちゃん、見ておきなさい——あれが、負け犬の最後の見せ場よ」

「と、言う訳で——喰らいなさい！」

呆気にとられた男に向かって降り注ぐ、破魔札と霊力砲。

今度は前衛2体の精霊獣で防げた物の、目の前の3人を突破するのは難しいだろう。

事前に集めた情報に寄れば、王が護衛として付けた2人の内1人は極東でも屈指の実力者であるし、女の繰り出す霊力も凄まじい物がある。

「な、ならばっ！」

「まだ何かやる気っ?! 大人しく——」

「この船ごとシズむが良い！」

男が懐から小さな箱を取り出し、それについている赤いスイッチを押し込んだ。

小さな機械音を立てたそれを精霊獣に握り潰させながら、男は3体の精霊獣を引き連れ素早く艦橋から離れていく。

「ふは、ふはははっ! 機械にドクされた者たちらしく、機械によってシねえっ!」

時間はほんの少しだけ遡る。

「おー、やってるやってる」

「ねー、タダオー？」

「何だー？」

甲板の上で、テロリスト達を縛り上げていた忠夫が手を休めて艦橋を見上げる。

先程起きた男が精霊獣を引き連れて突っ込んでいったが、人狼の超感覚で聞こえた話の感じからすると完全に美神のペースだったので問題無いだろう、と思ったので、今は別の事をやっているのだ。

なにせ、あーなった時の美神に勝てる奴なぞいないのだから。

何時の間にか降りてきていたルシオラはと言えば、何処に置いていたのやら一抱えもある木箱の中を覗き込みながら、手に持った工具でかちやかちやと忠夫の傍らで作業していた。

「この爆弾、なんか受信したみたいだけど？」

「そーか爆弾が受信したかー」

腰を伸ばして骨の鳴る音を聞いた後、休めていた手を再び動かしながら、一人縛り二人縛り3人縛り――

「ばばばばば爆弾ーっ!!」

「大丈夫よ。解体は終わってるから、別に爆発はしないわ。全く、こんな物をあんな場所に仕掛けるなんて、神経疑うわねー」

慌てて駆け寄ってきた忠夫に軽く答えて、作業を続けるルシオラ。

興味本位で見に行った機関室はテロリスト達に占拠されていたが、そこは幻覚を操る魔族。

少し面倒な警備、位にしか思わず、あっさり侵入を果たして仕掛けられていた爆弾を発見。

巨大な船を動かすに相応しい、重厚なりズムを奏でる機械の塊にうつとりとしていた所で無粋な物を見つけたので、ちよちよいと解体してみたのだ。

最も、工具類を探すのに手間取って、その途中で忠夫を脱出させるのに失敗してみたりましたが。

「これでよし、っと。どーも、あいつがこれの犯人っぽいわよね」

「そ、そりやまあ起きてるのあいっただけだしなあ」

「おっけー。忠夫、これあいつの所までぶっ飛ばしちやつて」

「・・・ば、爆発しない？」

「しないしない」

恐る恐る何度か叩いてみて、大丈夫そうだと不安に思いながらもそれを片手で持ち上げた忠夫は、こほんと一息ついてそれを軽く放り投げた。

2 M程真上上がったそれが、頂点に達して落下を始めると同時。

気合を入れなおした忠夫が、霊波刀を展開させた。

そのままゆつくりと身体を捻る。

だが、霊波刀では切る事は出来ても吹っ飛ばす事は難しい。

だから。

「初公開！ 霊波ハリセンー！」

ぱっぱらぱっぱらー、と聞こえる筈も無い効果音が聞こえたような気がした。

一瞬で薄く分かれたれた霊波刀が扇状に広がり、再び重なり合つて今度は縦に展開する。

その姿は、まさに光り輝く——ハリセンであった。

「ふんぬりやあつ!!」

靈波ハリセンは、薄い靈波刀を何枚も重ねたような物である。

實際縦に振るえば大根なら短冊切りが出来上がるし、薄くなつた為に切れ味も増しているから桂剥きだつてちよちよいのチョイである。

だが、それではハリセンの意味が無いではないか、と言わんばかりに全力で横に振るつたその一枚目が木箱のど真ん中に命中する。

そして、その反動で木箱が飛び出す前に、人狼の速度で振るわれた2枚目が1枚目に重なるようにして衝突する。

続けて、3枚目、4枚目、5枚目・・・と、連続で前の物に衝突するたび、衝撃が蓄積され、倍化し、相乗されていく。

故に、最終的には、まさに「吹き飛ばす」と言う、人狼の膂力だけでも十分じゃないのかと突っ込んではいけない速度で、木箱の形を崩す事無く吹っ飛ばす事を可能とするのだ。

だからどーしたと言われればそれまでなのであるが。

ともあれ、重なり合った衝突音は、まさに快音となつて木箱を打ち出し、目標の目の前にそれを到達させる。

「えい」

何とも良い笑顔でルシオラがスイッチを押し込んで、木箱からは閃光が漏れ出し、次

の瞬間には巨大な華が船の上に咲いていた。

忠夫には見えた。

勝ち誇っていた男の顎が、確かにかこーんと外れたのが。

「……南無南無」

「う、ううう……」

そして、その爆音で周囲の男達がゆっくりと起き上がり始める。

満足げに華の在った場所を眺めているルシオラの横で、どー説明したものかと首を捻る忠夫。

その眼前に、真つ黒焦げになつて痙攣している何かが落下してきたが、指には精霊石の砕けた指輪が3つほど。

冥福を祈つて両手を合わせている忠夫の背中を、ルシオラがちよんちよんとつついた。

「ねえ、何かタダオ睨まれてるんだけど?」

振り向けば、怖い顔のお兄さんたちが、忠夫を物凄く不審そうな目で見ていたり。

それもそのはず、バンダナで顔を隠しただけの変装だけに、髪型も体格も同じくらい
の男が一人、しかも顔を隠していたバンダナを頭に巻いているのだ。

疑うなど言う方が無理である。

「・・・ひ、人違いですよ？」

腰を引かせながら後退る忠夫に、さらに疑惑の念が籠められた視線が突き刺さった。何人かは精霊獣を呼び出していたりもするし。

「・・・君、ちよつと良いかな？」

「るっ、ルシオラ、逃げるぞ！」

「はい」

忠夫の襟首を掴んで飛び上がったルシオラであるが、後方からの声はその行動で確信した事を伝えてきている。

「二げたぞーっ！」

「王女誘拐犯だーっ！ オえーっ!!」

「しかたなかったんやーっ!!」

「潰した方が早くないかしら？」

「これ以上話をややこしくするなーっ!!」

10体近い精霊獣が追いかけてくる中で、忠夫とルシオラは逃走開始。

「こんなんばっかりかーっ!! 海なんて嫌いだーっ！」

「そう？ 私結構楽しかったけど」

滝のように涙を流しながら、沈みつつある夕日を背景に飛んでいく二人。

一人は吊り下げられているだけなので、締まらない事この上ない。
くすくすと笑いながら、ルシオラは海に向かって吼えている忠夫に、速度を増しながら風に負けないように声を掛けた。

「——それじゃ、何処まで逃げようか？」

第陸拾話。

頬を撫でる潮風。

臉の向こうから差し込む朝日。

そして、口と鼻の中に流れ込む塩水の奔流。

「ぐえっほがっほ辛っ！　塩辛っ！　辛痛いっ!!」

目覚めは最悪でした。

「ルシッ、ルシオラッ！　起きろってばごぼふっ!!」

「……ふへ？」

必死で顔を上げて襟首を掴んだまま飛行中の少女に叫び倒す。

しかし、その声に反応して殆ど閉じていた目が開かれたと思つたら、再び海の中にダイブしていた忠夫である。

ばしやばしやと海面を叩く動きにも、後方に吹き上がる物体が海面を割って出来た二つの波も、吹き荒れる風の音にもめげずに片手を離して臉をこすつたルシオラは、そのまま片手を天に突き上げ思いつきり伸びをする。

前から轟々と吹き付ける加速による風と、燦々と照り付ける太陽の光に眠気をすつか

り持つていかれた少女が、ふと水平線しか見えない360度を見回した。

「……ここ、何処だっけ」

動き始めた脳をフル回転させ、居眠り飛行に移る前の微かな記憶を掘り起こす。

思い出したのは、忠夫と呼ばれる青年の襟首を掴んで豪華客船から飛び去ったワンシーン。

どうせ暫くは戻れないんだから、と言う台詞で、さっさと戻ろうとした忠夫を引き止め、様子見がてら夜間飛行とでも洒落込もうと誘ったのは、彼女のちよつとした悪戯心だったろうか。

それとも、ちよつとした気の迷いでもあったのだろうか。

その辺りはまだまだ彼女の経験不足もあるせいかな、彼女自身さえはつきりとは分からない。

ま、それはさて置き遠くからでも見える巨船の灯りを目印に、昨夜はゆつくりとそれを後方から追いかけながら満天の星を楽しんでいた筈である。

その内ちよつと忠夫が寒いだのなんだのと騒ぎ出したので麻酔を掛けて昏倒させ、快い波のリズムを聞きながらゆつたり飛んでいる内に。

「あー、寝ちやつたのか」

しかし、それにしては嫌に速度が出すぎている。

寝呆けて加速でもしたのだろうか。

ちよつと困つたような、誤魔化すような笑顔で誰に言うでもなく呟きながら、額を人差し指でぽりぽりと。

其処に至つて、もう一人の同行者に思い当たつた。

「・・・あれ？ タダオは？」

ふと、下を見下ろすと、海面から出た手がゆつくりと力を失つて垂れ下がっていく所であつた。

片手を離れた所為で更に忠夫の位置が下がり、より深い所で、しかもルシオラ速度の為目の前から叩きつけられる海水に抗しきれずに浮き上がる事さえ出来ず、完全に水没したようだ。

慌てて高度を上げ、速度を落としてぼたぼたと塩水を落とす、なんだか土気色の肌をした半人狼に声を掛ける。

「・・・生きてる？」

返事が無い。屍かもしれない。

「す、捨てていつでも誰も怒らないわよね・・・」

「死体遺棄はれつきとした犯罪じゃアホーッ！」

ぐあばっ！ と海水を撒き散らしながら顔を起こした忠夫は、力一杯突つ込んだ。

心臓が打つ鼓動の音が、耳元で五月蠅い位に木霊している。

耳の直ぐ横に心臓があるようだ、と思いつながら、少女はその小瓶をそつと手に取つた。己の記憶に無い今までも、おそらく同じような出来事が起こっていたのだろう。

それは、今までに無い自分であつた。

それに気付いたのは、それ以前まで必ず付き纏つてきた忌まわしいあの感触が無くなつた時だつたのだろうか、それとも忘れていたような氣になつていただけで本当はずつと自分も気付いていたのではないだろうか。

己に問い掛ける術は無く、また、問い掛けることのできる他人にも聞く訳には行かな

い事だった。

小さな小瓶は、表面に施された飾り彫りの向こうの液体を蟲惑的な色で見せ付けている。

——これは、自分にとって、どう言う物なのだろうか。

最後の手段、なのかもしれない。

いや、切欠に過ぎないのかもしれない。

ただ一つだけ分かるのは、これがもたらすのは恵みだけでは決して無いと言う事。

そして、その諸刃の剣は、使い方を誤れば己のみならず周囲の者達を巻き込むであろう事。

だが、そう、だが——「彼女」にとって、それはほんの少しだけ、魅力的な魔法の薬だったのだ。

ゆっくり一つ頷くと、彼女はその小瓶をそつとスカートのポケットに落とし込む。

含まれた物はほんの少しだが、その僅かな量が良い。

多すぎでは駄目なのだ。

そう、この小さな小ビンの中でさえ僅かな割合しかないそれにこそ、彼女は期待しているのだから。

「……おキヌちゃん？」

「ひゃいつ?!」

迂闊!

なんと言う失態だろうか!

よりにもよって、最もこの小瓶の危険性を理解しているであろう彼女の接近に気付かなかったとは!!

訝しげにこちらを見やる女性の視線は、思わず押さえたポケットに注がれている。

その事に焦りと苛立ちを覚え、驚いてあげてしまった声を平静に戻して凜とした表情を作りながら振り向いた。

「何でふか美神さん」

「.....」

訝しげな視線が、半眼に変わった。

額に感じる冷や汗の量が一気に増えた事を自覚しつつ、船の売店で貰ったその入ったポケットを隠すように僅かに身を斜めにするおキヌ。

暫しの沈黙が過ぎ、やがて美神は呆れたような視線を向けつつ、それでも僅かに疑問と好奇心を表情に見せながら身を返した。

「そろそろ王様達の方も落ち着いたみたいだし、事情の説明に行くから・・・早く来なさい」

「は、はいっー!」

そう言い残して頭を掻き掻き去って行った美神の背中を見送りつつ、おキヌはゆっくりと息を吐いた。

美神の背中が角が曲がって見えなくなった事を確認して、ゆっくりとポケットからそれを取り出す。

表面に貼られたラベルには、しっかりとその文字が躍っていた。

『試供品：アルコール含有率2%——未成年者はちよつとだけよ? byるっしー』

何が。

「・・・頑張ります!!」

何を。

やたら気合の入ったガッツポーズを決めつつ、彼女は知らねど幸運の精霊の祝福でちよつとだけ毒物に対して——この場合アルコールに対して——耐性の上がった彼女は、それをそつとポケットに戻した。

アルコールを摂取した後に襲われていた二日酔いの症状が無い事を見落とした美神が悪いのか、それとも初めてそのときの記憶がすっかり残っていて、利用しようとしている恋する乙女が怖いのか。

ともあれ、幸運の精霊は本当に幸運の精霊だったのか、と言う疑問だけは尽きないよ

うである。

はつきり言ってトラブル増やしただけのような気もするが。

「成る程、つまり彼は美神さん達の事務所の・・・？」

「ええ。所員ですわ」

「つまり、一連の行動は全て計算の上で、と言うことでしょうか？」

「……ま、まあそうですわね」

「イ、イツコクの王女をスマキにしておいてそれで通じるとでも——」

会話に割り込んできた王女を鋭い視線で横目に睨んで制止しながら、ザンス王は組んだ腕の上で細く開かれていた目を閉じ、ゆっくりと息をついた。

王女はまだまだ何か言いたそうではあるものの、流石に今回の事件で大騒ぎを起こした上にしつかりきつちり説教を喰らったばかりなので、少々の自制が働いているようである。

ふむ、と軽く頷いたザンス王は、ソファアに腰掛けた美神の引き攣った営業スマイルに一度視線をやった後、その背後で直立不動で立っていた唐巢神父に目を向ける。

神父と視線をあわせ、小さく頷きあつた王はゆっくりと立ち上がり、背後に控えていた秘書に向けて指を鳴らした。

音も立てずに近づいてきた秘書が差し出した書類に目を通しつつ、目は文を確認しながらいまだぎこちない笑みを浮かべる美神に声をかける。

「実はですな。王女の付けていた精霊獣の指輪を、貴方の所の所員が所持してしまってますな」

「はあっ?!」

「あれは『重要な』国家機密。分かりますかな?」

「・・・は、はあ」

重要な、の所を強調して語る王の言葉に、苦虫を噛み潰した表情になった美神が絞り出すような声で答えた。

心の中では所員を強かに殴ってやろうと決意しつつ、王の言葉を待つ。

やがて、書類から目を上げた王が、鋭い視線で美神を見やった。

「貸し出す、と言う形式にします。担保は報酬の一部。・・・無用な事態はお互い避けたい物ですな？」

「・・・承りましたわ」

書類を差し出してきた温情の籠った王の苦笑いに、安堵の息を吐きながら軽く頭を下げつつ美神はペンを走らせた。

「あんの馬鹿犬！ 帰ってきたら絶対に躡なおしてやるんだから!!」

「美神さん美神さん！ 落ち着いて下さいってばーっ！」

無言のまま、周囲を威圧するオーラを放ちながら船室に戻った美神は、3人は簡単に寝れそうなベッドの上に置いてあったこれまた大きな枕を引き千切りつつ吼え猛る。

おキヌの制止に荒い息をつきつつベッドに腰掛け、恐々とその様子を眺めていた神父とピートを睨みつけた。

「み、美神くん？ それで、横島君は何処にいるのかね？」

「それが分かれば苦労しないでしょうがああああつ!!」

「美神さーんっ!」

迂闊にも一言目から逆鱗に触れた神父の胸倉を掴み上げつつ、血走った目で睨み上げる。

背後からおキヌがしがみ付き、ピートが視界の隅で師匠を見捨てて霧になって逃げようとした所に安物の破魔札を投げつけ、すったもんだの末漸く落ち着いた船室の中は見るも無残な状態になっていた。

ちよつと焦げたまま部屋の隅で目を回している現在の弟子に心配そうな視線を向けつつも、唐巢は乱れた襟を直しつつ、おキヌの差し出した紅茶を啜っている昔の弟子の前に座る。

紅茶を出してくれたおキヌに礼を言いつつ、不機嫌な顔でぶちぶちと文句を言いつづけている美神に目を向けた。

視線に話を促された美神は、カップの中の紅茶を一息に飲み込み、テーブルの上に転がっていた受信機を神父に渡す。

「発信機の反応は無し。昨晚まではこの船から5km後方にあつたけど、朝起きたらなくなってたわ」

「故障の可能性は?」

「厄珍堂の、しかもクソ高い奴よ? あのエセ中国人はぼったくりはするけど、値段相応

の物を卸してる」

まあ、GS何て言うものを商売相手にする以上、不良品を渡して現場で動きませんでした、では話しにならない。

信頼問題どうこうではなく、本当に命に関する問題だからだ。

最も、そうなれば厄珍も商売相手が減る訳であって、むしろそっちの方が痛手と感じている節は在るが。

その言葉に厄珍との付き合いの無い、清貧凄腕GSは不安げな表情を見せる。

いざ除霊の段になっても聖書の一冊と己の磨き上げた霊力、そして世界に満ちる精霊の力と長年の経験から蓄積された戦い方で乗り切る神父は、厄珍のあんまり碌でもない噂しか聞こえてこない為、しようがないといえましょうがないのかもしれないが。

「つまり・・・？」

結論を問い掛けてきた神父に、殺気の籠りまくったオーラを吹き上げつつ、美神は握っていたカップに罫を入れた。

「女と2人でどっか行つたわね、あの馬鹿・・・!!」

カップが、割れるというよりも砕け散ってみたり。

「つまり美神さんは心配だつたり不安だつたり、あとちよつと焼き餅があつたりとかしてる訳なんですよー」

「は、はあ。大変ですね」

「横島さんも横島さんです！ 酷いと思いませんか?! そ、その、私なら何時でも良いのに……」

「あの、美神さんが物スツゴイ目で睨んでくるんですけど……」

「ルシオラさんずるいなー。私も2人つきりとかちよつと羨ましいし……で、でも、ちよつとまだ早いかも……」

コメカミに梅干をたっぷり5分喰らって、おキヌが悶えるまであと10秒。

その頃話題の人物達は。

「うわーっ！ うわーっ！」

「鮫っ?! シャチっ!! あとおつきなウツボーっ?!」

海の仲間達と戯れていました。

ちよつと小腹が空いた、と一頻りルシオラと騒いだ後に忠夫が行ったのが悪かったのかもしれない。

海に落とされたルシオラが、忠夫に魔力砲の2、3発も直撃させたりと大きな音を立てたのが悪かったのかもしれない。

いやいや、その時たまたま海面下に見えた影に、ガチンコ漁方と言ってルシオラが更に一発打ち込んだのが不味かったのかもしれない。

更に言えば、それが大きな音を聞いて様子を見に来た半漁人だったのが悪かったのかもしれない。

まあ、ともあれその半漁人の奥さんらしい人魚が、旦那の敵とばかりに良い匂いを立てて焦げながら気絶した半漁人を抱えつつ、周囲にいた海の仲間達を引き連れて反撃してきたのだけは事実である。

「タダオっ！ 来てる来てる！」

「ぬああああつ?! くっ！ しっかり掴まってるよっ!! 人狼バタフライ、全っ開!!」

背中にしがみ付いたルシオラの声に、忠夫は腕と足の回転を更に速めた。

宇宙空間で身に付けた泳法は、忠夫の体力と臂力によつてその効果をロスは大きいながらも確かに発揮し、後方に跳ね上げる海水の量を一気に増やす。

爆発したような海面を背に、泳ぐと言うよりも海面を跳ねる飛魚のような加速で持つて忠夫は一気に引き離しに掛かった。

「アーンド！ 人狼水かきーっ！」

更に、足の裏に霊波ハリセンを展開。

それまでのバタ足から、両足を揃えてくねるように動かす。

跳ね上がっていた海水が減り、使っていた力の分加速にダイレクトに使われた忠夫の足が生み出す前進力は、もはや魚雷の如く忠夫とルシオラを一気に打ち出した。

「ふははははーっ！ 応用力の勝利じゃーっ！」

「・・・忠夫つて、時たま凄く馬鹿で凄いけど馬鹿ね」

「褒めるか貶すかどっちやねんっ!!」

それでも背中に感じる加速でより強くしがみ付いてきたルシオラの暖かさ、ささやかな柔らかさに更にヒートアップした忠夫はひたすらに、それこそ襲撃者達の姿が水平

線の向こう側に消えても更に速度を維持したまま泳ぎ続け、体力が完全に空になるまで進みつづけた。

最初っから、ルシオラが抱えて空を飛べば良かった事に気付いて一悶着が在ったり、完全に現在位置を見失つて途方に暮れてみたりする事態も在ったりはしたが、まあご愛嬌と言う奴だろう。

「で、どーするのよ?」

「どーするよ」

日はすっかり傾き、水平線の端っこに太陽の下弦が引つかかる。

見渡す限りの水平線という物は、どうしてこうも不安にさせるのか、といい加減空腹も限界、体力も限界の忠夫はぶかぶかと海に仰向けで浮きながら、寝そべった体勢で宙に浮かんで顔を覗き込んでくるルシオラの言葉に答えにもならない答えを返した。

海が荒れていないのだけが救いでは在るが、助けてくれそうな船も見えなければ、視界の中には小さな島の影すら見えず。

ちやばちやばと波の音を聞きながら、薄っすらと輝き始めた月を見上げて溜め息一つ。

「せめて島影ぐらい見えればなあ」

「犬なんでしょ? 帰巢本能とか無いの?」

「狼やつちゅーのに！　．．．うああ、腹減った」

抗議の声を上げてみるものの、どうも腹の虫の方が大声のようだ。

やれやれ、と溜め息をついたルシオラが、忠夫の手を取ったのは、腹の虫が再び鳴いた時だった。

ゆつくりと高度を上げながら、潮水を滝のように流す忠夫と一緒に高く昇っていく。

「．．．うおーい、腹が減ってるから風が身に染みるんやけど」

「しようがないでしょ。上に行けばもっと遠くまで見えるんだから我慢なさい」

そんな情けない声を一蹴しつつ、ぐんぐんと高く昇っていく。

やがて、僅かに空気が冷たくなり始め、忠夫が鼓膜に痛みを覚え始めた頃、その光景が眼下に広がった。

「うお．．．！」

「綺麗．．．」

雲一つ無い光景。

そして、夕日を照り返しながら赤く光る海。

僅かな波が、太陽の光を揺らしながら、二人の顔を赤く染めていた。

半分ほど沈んだ太陽は、半円となりながらもその輝きを未だ失わず、だが、薄暗い。

しかし、2人の目には、彼らを中心に、世界が赤い光と薄い暗さに分かれたように

悲しさも苦しさも不安も無い。

可笑しくて、楽しくて、嬉しくて。

そんな笑い声が、同じような笑顔で、同じように笑いすぎで涙を零した二人の間に、ゆつくりと。

そんな一日の一幕だった。

「ひー、ひー。腹いってー」

「も、もう！ 涙出ちやっただじゃない」

笑いすぎてお腹を押さえているタダオも、照れくさそうに顔を擦っているルシオラも、笑顔のまま。

いまだ残滓の消えぬまま、二人はゆつくりと空を行く。

眼下にあるはずの海は暗闇に沈み、すきつ腹は時折悲鳴を上げるがそれを癒す方法も無い。

それでも、全く不安に感じなかった。

恥ずかしさを誤魔化すように快速でかつ飛ばすルシオラにぶら下げられたまま、忠夫は漸く納まった笑いの衝動を少々残念に思いつつもルシオラを見上げる。

ふと、口をついて出た疑問は、彼も不思議に思うような唐突な物だった。

「・・・なあ、ルシオラ」

「何？」

「まださ、俺の魂欲しい？」

やや速度を落としたルシオラが、細い人差し指を口元に当ててる。

何処か悪戯っぽく月を見上げながら、下から見上げてくる忠夫の視線をこそばゆく感じつつ、彼女は彼女も不思議なくらいに、唐突に口を突いて答えを出した。

「あんまり」

「何で？」

「・・・さあ？」

主であり、父であり、創造主であるアシユタロスの命令。

『珍しい魂』を持つて帰ること。

長女として期待には必ず答えたいと思つて魔界から出てきた身であるし、他に珍しいと思えるような魂も見当たらない中で、忠夫の魂を諦めると言うのはありえない筈の答えだった。

それでも、その答えは、不思議なくらい、彼女の心の真ん中に、綺麗に嵌る物だった。「んー。ま、気が変わっただけかもね。また欲しくなるかもよ？」

だから、すつきりした気分になったルシオラは、からかうように忠夫に目を合わせず

そんな言葉を投げかけ。

「だつたらさ」

忠夫も、同じように前を見ながら、何でも無い事のように、投げかけられた言葉に続いた。

「ん？」

「その、さ」

柄にも無く照れくさそうにしながら、視線は前ではなく下を向き、頭をぼりぼり掻いて、潮水が乾いて出来た塩を落としながら。

「——嫁に來ないか？」

そんな2度目のプロポーズ。

「え……えっと、その、あの……」

「いや、そのなっ！ 俺はいつつも真面目に言っただけどき！ 全部本気で言っただけどなっ！ どーもネタ扱いになつてな、その、なっ?!」

忠夫の言い訳のような言葉を聞きつつ、自分でも思つてもいなかつたくらいに動揺した。

それは、忠夫も同じであつただろう。

今まで何度口にした言葉でありながら、忠夫はその後に言い訳じみた事をいった事

は無い。

ただ、なぜか言いたくなつたのだ。

そのまま互いに交わす言葉が消え、耳元で微かに唸る風の音だけが響く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今度の沈黙は、やたらと長かつた。

気まずいような、緊張感に満ちた雰囲気満ちる。

二人とも、何かを言わなければとも思い、何かを言いたいと思ひ、何か聞きたいと思ふ。

——そして、結局答えはどちらからも出ないまま。

「・・・・・・・・あ、ほ、ほら、タダオっ！」

「お、おお！ あ、明かりじゃねーのか、あれっ!!」

タイミング良く、なのか。

それとも運悪く、なのか。

二人の視界に、瞬く星の光とは明らかに違う光が見えた。

それまでの雰囲気や誤魔化すように、一気に加速しながら光に向かうルシオラ。何となく沈黙を保ったまま、その下にぶらさがる忠夫。

人工の光はそんな二人の目の前で徐々に大きくなり、やがてはつきりと浜辺の向こうに広がる街並みを映し出す。

やがて浜辺の縁の真上に来た二人は、徐々に速度を落としながら高度を下げている。

「よ、よし！　ここで降りしてくれ！」

「でも、まだ結構高いわよ？」

「良いから！」

「う、うん」

まだ何処と無くぎこちない雰囲気を引き摺ったまま、その気まずい空間からのイッコクも早い脱出を図る微妙にヘタレな忠夫である。

ともあれ、言われたままにルシオラは忠夫の腕を離し、そのまま彼女はゆっくりと高度を下げながら浜辺に着地するコースを取る。

先に落ちて行つた忠夫は、柔らかい砂浜に向かって両足を伸ばしながら、幅跳びの選手のような着地体勢を取り。

「ま、どこか見覚えのあるお尻ねえ」

「お、横島じゃねーか」

「何でお前らどわああああああつ?!」

暗い砂浜にテントを張っていた二人を発見し、動揺し着地に失敗して派手に地面とキスをしたのだつた。

別々のテントから顔を出した二人の間を、焚き火の跡を散らかしながら転がる忠夫。

明かりも何も無い砂浜に、結構な高度から飛び降りた忠夫はテントの存在に気付く事も無く、だが常に夜は警戒せざるをえない雪之丞と常に神経を張り巡らせている勘九郎は気付いた為に顔を出し、驚いた忠夫がつんのめって顔面から砂浜に突っ込んだのだつた。

「・・・相変わらず元氣ねえ」

「つたく、こんな所でお前の顔を見るたあなあ」

「それはこつちの台詞じゃああああつ!!」

がぼつ、と砂浜から身を起こした忠夫が、ぶるぶると震えて砂を撒き散らす。

不思議そうな顔をしたルシオラが、ゆつくりとその隣に下りてきたが、勘九郎は一瞬だけ瞳を鋭くした後、特に興味もなさげにすぐ視線を戻した。

雪之丞だけが何だか不思議そうな物を見るような視線で忠夫とルシオラのコンビを見ているが。

「てかお前らなんでこんな所に居るんだよ！」

「仕事よ、仕事。国内じゃ碌な依頼が無くてねえ……」

溜め息混じりの勘九郎の言葉を、雪之丞が不貞腐れたような表情で補足した。

「この馬鹿が男の依頼人を妙な目で見るもんだからごふあつ?!」

「ま、そー言う訳で国外に出稼ぎに来た訳よ」

ぶつとい拳にぶんなぐられ、顎を天に向け身体を仰け反らせ、四肢を突つ張らせながら吹っ飛んで砂浜に頭から刺さった雪之丞に視線もやらずに笑顔でのたまう勘九郎。

拳が振るわれた瞬間に僅かに見えた、テントに隠れて見えないピンクのパジャマがなんと不気味であった。

「こゝ、国外?」

「ええ。ナルニアまでね」

「……なるにあつて何処?」

ルシオラと忠夫が互いに見詰め合つて何ともいえない空気をかもし出す中、勘九郎が欠伸を一つ。

「ま、ちよつとゆつくりしてかない?」

そう言って、テントの中から小さなランタンを取り出した。

第陸拾壹話。

時間は既に深夜。

空腹でぶつ倒れた忠夫の為、ルシオラが獲つて来た魚——魔力砲を海に打ち込むだけだが——を炙る焚き火が、辺りの光景をゆらゆらと映し出していった。

ばちばちと弾ける焚き火の傍で、ゆつくりと「良い漢！」と描かれたマグカップを揺らす勘九郎と、こちらを物凄く不満げに睨んでくる雪之丞に向かつてこれまでの経緯を語る。

漁を終えたルシオラはと言えば、毛布に頭まで包まって、その姿はまるで蓑虫のようにも見えた。

静かな浜辺には、打ち寄せる小波の音と焚き火の弾ける音、忠夫の声以外には何も無いような、そんな雰囲気満ちていた。

「——つてな訳で、泳いだり飛んだりしながらついたちゅー訳ですよ」

「むぐむぐむぐ……んぐ、げふう。——日本を出てまで荒事やりに来た俺らより何でお前のほうが楽しそうなんだよおおおつ!!」

「全然全くこれっぽっちも楽しくないわあああつ!! てか腹減つてんの我慢して説明

してた俺の飯取るんじゃねえっ!!」

雪之丞が繰り出した必殺の拳は忠夫の頬に、忠夫が繰り出した会心の拳は雪之丞の頬に突き刺さった。

見事なクロスカウンターであった。

そして、互いの拳を受けた二人は、にやりと相手に笑ってみせる。

「へ、へへへっ! どーしたどーした! そんな柔な拳じゃ俺は倒れねーぞっ!」

「っ、突っ込みにカウンター合わせるたあ非常識な野郎だなあっ! だが、俺もすっかり立ってるんだぜ?」

とか言いながらも、二人の膝はしっぴかりかくかく震えていた。

まるで生まれたての子鹿の様相を呈しながらも、やせ我慢だらけで立っていた二人は全く同時に左手を差し出した。

「だが、ま、それなりに手強くなってるみたいじゃねーか」

「人狼の拳を受けて立ってる奴に言われたかねーよ」

笑顔で相手の左手を握り合い、健闘を称えながら握手した手にゆっくりと力を籠め。

おもむろに、空けておいた右手で殴りつけた。

夜の砂浜に激しく肉を打つ音が二重に響き、片手を握り締めあっている為に衝撃が全部二人の脳を揺らす。

ぐらり、と後方に揺らぎながらも、握り潰さんばかりに固く繋がった左手を軸に何とか体勢を立て直した。

「おま、汚ねえなっ！ 俺の飯食うわ突っ込みに反撃するわ男の友情の一シーンを無視するわ俺の飯食うわ貴様それでも雪之丞かあっ!!」

「やっかましいっ！ 大体それ関係ねえし俺も腹減つてたしそもそも俺の拳喰らつて立つてるつてのが一番気にいらねえんだよっ!!」

一転、再び相手の手を握り潰す為の握手を解いた二人は飛び退り、一気に戦闘態勢を取る。

雪之丞の身体を魔装術が鎧い、忠夫も低く身を落として何時でも飛び掛る体勢をとる。

僅かな瞬間睨み合い、ふらつきの残る足を根性で堪え、柔らかい砂浜を無理矢理蹴り飛ばして前へ――!

「はいはい、横島君も雪之丞もいい加減にしなさいね」

「うるっさいわよ！ こっちは寝てるんだから静かにしなさいっ!」

呆れた様子で眺めていた勘九郎の霊力砲と、忠夫の説明中に勘九郎が渡した毛布に包まって寝息を立てていた筈のルシオラの魔力砲を喰らつて、二人は仲良く吹き飛んだ。

ざす、ざす、と砂浜に突き刺さった男達の4本の足を眺めつつ、温くなつたインスタ

ントコーヒーを飲み終えた勘九郎が立ち上がる。

「さ、寝ましよ。寝不足は美容の大敵だし」

「・・・もう。折角獲つて来たのに」

「貴女もいい加減寝たほうが良いわよー」

そこはかとなく拗ねたようなルシオラの小さな声に、笑い含みの声をかけつつ勘九郎はテントに潜る。

犬神家×2は放つて置いても良いだろう。

どーせ明日になれば、何でも無かつたように起きてくるに決まっているのだ。

シリアスの欠片も無いのがその理由。

「依頼人とのアポは明日なんだから、あんた達もちゃんと身だしなみくらい整えておきなさいよね。特に雪之丞」

完全に気絶した二人には聞こえていないだろうが。

何事も無く、翌朝。

「で、何で俺まで此処に居るんでしょーか」

「ひ・み・っ♪」

ウインク混じりに紡がれた言葉に、他3人が一気に引いた。

朝日の下でも、いや、明るい朝日の下だからこそ、その野太いヴォイスとごっつい肉体、そして口調の奏でるハーモニーがより際立つて凄まじい違和感を生み出していた。

「・・・雪之丞。お前何か知ってるか？」

「全っ然。興味も無えしなー」

それはGSとしてどーなのか。

余談では在るが、彼が受けた此処最近の除霊依頼は全て勘九郎が選別、交渉、受諾の判断を受け持っている。

弟弟子の性格を把握している兄弟子は、手強い敵が出る、つまり雪之丞が満足できつつ実戦経験を積めるような依頼を選んで受けている。

偶には生活の為に時折そう言った方面以外のものを受ける場合もあるのだが、それでも比率で言えばバトルジャンキーの欲求を満たす事の出来た物の方が多い為、雪之丞も特に文句はつけていないのだ。

この辺りが保護者と被保護者と言われる由縁なのだろう。

ともあれ、今回の依頼は生活費が無くなった為、の方である。

日本のある商社から受けた依頼で、交通費はあちら持ち、滞在費もあちらの用意した場所、と言う破格の物だったのだが、外国の、しかも辺境と言っても過言ではないような土地である。

ぶっちゃけ、殆ど緑しか無い場所。

飛行場があるだけでも御の字であるが、案の定ぼろい飛行機の整備が遅れに遅れ、到着したのが夜の10時。

当然ながら依頼先はとつくの昔に閉まっており、手持ちのつき掛けた上に換金も済ませていない二人がホテルに止まれるだけの持ち合わせがあるわけも無く、結果として野宿となった訳である。

まあ、二人とも山籠りで慣れている為、特に問題があるわけでもなかった。

「ま、この依頼が終わったら久し振りに日本に帰れるわけだし、お前も付き合つて良いんじゃないかねーか？」

「そうそ。交通費くらいなら手伝つてくれれば出すわよ」

「・・・どーする、ルシオラ」

「飛んで帰るのは嫌よ。眠いし疲れるし」

そう言われてしまえば特に嫌がる理由も無い訳で。

二つ返事で協力する、と言うことになったのであった。

勘九郎としても依頼を楽に済ませられるような戦力が得られるのだから異論は無い。

今回の依頼は生活費が目的で、雪之丞と己の修行を兼ねて、な依頼ではないのだし。

「そーかそーか。いや、お前が知らねえ女連れでいきなりこんな国まで来たから、てつきり日本に帰れなくなったのかと思つたんだけどな」

「待てやコラ。何処をどーしたらそんな結論になるんじゃない」

「あ？ 自覚ねーのかこの野郎。いい加減一人くらいは当たつたんじゃねーのかよ？」

「ぐうっ?!」

手当たり次第に求婚しつつ、しかし未だに成功率が0%な忠夫のハートに効果はバツグンだ！

しかし忠夫も負けぢやない、いや負けつばなしじゃいられない。

同世代の男として、なんかそーいう気分なのだ。

「そーいう手前は一人くらい彼女出来たのかよ?」

「おう!」

——しまった罠だ!

にやり、と笑つて、と言うか殆ど勝ち誇りながら、雪之丞は懐からしゅぴつと携帯電話を取り出した。

ぱかつと開いた携帯電話の画面を見せつけるように——見せ付けているのだが——忠夫に示しながら、雪之丞は胸を張つて勝利宣言を上げる。

「弓つて覚えてるか? 六道女学院の生徒でな! ほれ、羨ましいだろ」

「……真つ暗だぞ、それ」

「は?」

忠夫の不審そうな言葉に携帯電話を裏返してみれば、そこにある筈のちよつと照れたような女の子の画像は無く、ただ黒い液晶があるばかり。

かちかちと慌ててボタンを弄り始めた雪之丞に、少し先を歩いていた勘九郎が呆れたように言葉をかけた。

「……最近山に居たのに充電してる訳無いでしょ。更に言えばあんたの口座どーなってるか分かる? 生活費さえ無いのに?」

そう言えば、と雪之丞は思い出す。

ここ一ヶ月ほど、彼女の声を聞いていない。

山籠りで修行を堪能していた事、生活費が無くなってそのまま依頼を受けて外国へ。すとな、と雪之丞の顔から血の気が引いた。

引くと言うよりも落ちた、と言った方が近いような、そんな蒼褪め方だった。

「やややややべえっ！ 絶対怒ってるぞあいつ!!」

「怒ってる、で済むと良いわね」

「そんなに放つて置かれたら、普通愛想尽かすと思うんだけど」

勘九郎とルシオラの言葉に、雪之丞は蒼褪めた顔の上から冷や汗を滝のように流し始めた。

一刻も早く連絡を取りたいが、携帯電話はこんな場所では使えないだろうし、そもそも電話をかけようにもそう言った物さえ見当たらない。

町中と言えども狭い物で、少し先に見える4階建てのビルと言えなくも無い建物以外は、殆ど平屋か2階建ての木造建築ばかりである。

肩を震わせお腹を押さえつつ笑っている忠夫にとりあえず魔装術で殴りかかった後、そのまま雪之丞はビルに向かって突っ込んでいった。

勿論魔装術は使ったままで。

「・・・勘違いされなきや良いけど」

「あんな格好で飛び込んだきたら、普通は驚くわよねえ」

「・・・」

びくびくと痙攣している忠夫の右足と左足を一本づつ持ちながら、ルシオラと勘九郎もそのビルへと歩き出した。

依頼者が指定した、とある商社のナルニア支部に向かって。

「だから電話を貸してくれええっ!!」

「敵はまだ生きてるぞーっ! 奴の言葉に騙されるなあっ!!」

「でも係長、あの人泣いてますよ?」

「分かったそれなら俺が撃つからそのロケットランチャーを貸しなさいっ!」

「文脈が変ですよ係長」

受付嬢の手から細長い筒を奪い取った単身赴任中の男性が、その筒先を玄関先で半泣きになりながら叫び倒している雪之丞に向けてトリガーを引いた。

後方に白煙を撒き散らしながら、筒先から飛び出した弾頭は魔装術を纏う雪之丞の額に着弾する。

巻き起こる煙、飛び散る破片、ついでに吹っ飛ばされる早々にのされた警備員達。

玄関先のガラスがきらきらと朝日を反射しながら宙を舞い、耳障りな音を立てて銃痕の残る床を傷付けた。

ロケットランチャーを傍らに投げ捨て、ネクタイを緩めながら係長が受付嬢を背後に庇う。

衝撃を係長を盾にしてやり過ごした受付嬢が恐る恐る係長の顔を覗き込み、諦めたように溜め息を付いた。

「またお嬢さんと喧嘩したんですか?」

「・・・今は関係無い！ 関係無いが——」

爆発で巻き起こった煙の向こうから、相変わらず「電話を」と言う叫び声が聞こえてきたのを薄笑いで受け止めた係長は、受付の奥に手をつ込み機関銃を、それこそ戦闘機の鼻先にでも付いてそうなそれを取り出しどつしりと構えた。

「——アポも無い侵入者に手加減無用！ 後いい加減に女の子らしい喋り方にしなさいいいいっ!! 偶にはそつちから連絡くれるとパパ嬉しいなあっ!!」

唸りを上げて猛烈に回転し始めた銃身を耳栓を詰め詰め眺めていた受付嬢は、やれやれと溜め息を付くところそり受付の後ろに身を潜めた。

「・・・好きな人を追いかけて日本中を飛び回って、見つけて逃がさないように一緒に働くって、十分に一途で健気な女の子だと思っただけど」

『最近あいつが淹てくれる紅茶が美味しくてな。店長も驚いてたぞ』とか電話するたびにあの小僧の話ばかり聞かされる父親の身にもなってみなさい！ と言う訳でフアイアー!!」

吐き出された弾丸が床を抉り、白煙の向こうに居るであろう侵入者に向かって殺到する。

昨晚の電話で話した久方振りの娘との会話の8割を占めていた男の話による八つ当たりが9割の殺意は、爆発で吹っ飛んでいた警備員達の間を見事に擦り抜けて着弾し

た。

流石に衝撃を堪えきれなかったのだろうか、後方に仰け反った雪之丞に連続で着弾する弾丸の群。

だが、雪之丞は、その弾丸の群の与える衝撃を根性で堪えきると、未だこちらに向かって飛来するそれらから身を捻ってかわし、一気に前進する。

「で・ん・わつて言ったな、今！」

「化け物かああっ!!」

総重量が軽く子供を超えそうなそれを片手でホールドしたまま、銃撃の反動を手首と肘で吸収しながら狙いを補正。

同時に懐から取り出した手榴弾のピンを口で噛んで引っこ抜き、そのままサイドスローで回避方向に投げつける。

だが、手榴弾の爆裂をぎりぎり前方に跳躍しながら回避した雪之丞は、その爆圧を背に受け加速して見せた。

「早くしないと弓がもつと怒るだろうがあああああっ!!」

「ジャツパニーズ・サツラリイーマンを、舐めるなあああああっ!!」

係長は魔装術の拳を怨念じみた執念とともに機関銃の銃身で受け止めた。

歪んだ銃身が射撃不可能を示し、だが、そこでもう一度トリガーを引く。

当然の如く打ち出された弾丸は銃身に詰まり、暴発を起こして機関銃の破片をばら撒いた。

焦りと言うよりも強迫観念に駆られた雪之丞は破片を魔装術の装甲に任せて全てを弾き、至近距離であれだけの大口径の機関銃が暴発した筈の係長は、なぜか少しだけ焦げたスーツ姿のまま両手にデザートイーグルを装備して突つかかる。

「電話を貸してくれええええっ!!」

「アポ無しは認めないいいいいっ!!」

そんな大騒ぎを横目に、勘九郎とルシオラは忠夫を引き摺りつつ受付の後ろに避難していた受付嬢へと名刺を差し出した。

差し出された名刺に目を通し、カウンターのの上から落ちていた書類に目を通しつつカウンターの奥をこそこそと漁る受付嬢。

暫しの間があり、確認が取れた彼女は素敵な受付スマイルを浮かべて取り出したそれを振り回しながら、両手のごっつい銃で雪之丞の拳を防ぎつつも吹き飛ばされてきた係長の後頭部に振り下ろした。

やたらと重い音を立てて叩きつけられたブラックジャックを素早く係長と一緒にカウンターの中に蹴り込み、完璧な笑顔のまま雪之丞の額にテレホンカードを投げつける。

猫眼怪盗のカードのように飛んだそれは、いつそ嘘くさいほどあっさり彼の魔装術の額部分に突き刺さった。

「鎌田勘九郎様ですね。支局長が4階でお待ちです。それからお連れの方、電話はその扉の向こうに居ります庶務にお聞きください」

「・・・やるわね」

「受付嬢ですから」

全く理由になつていないような、そーなのか、と納得しそうになりそうな答えを返す受付嬢に、にやりと何処か楽しいげな笑みを浮かべていた勘九郎の肩から力が抜けた。

笑顔を崩そうともしない彼女の手の差す先へ、階段へと足を向けた勘九郎とルシオラ。

雪之丞は教えてもらった扉をブチ破つて駆け抜けていった。

それを確認した受付嬢は目の前に広がる惨状を見て溜め息一つ。

ぱんぱんと軽く手を叩いてあちらこちらに倒れ伏す警備員達に声をかけた。

「ほら、あんた達もさっさと起きて修理修理！」

「あ、あたたた・・・姐さんが早いとこ出張つてくれれば良いじゃ」

頭を振り振り起き上がった巨漢の顔面に、受付と書かれた三角錐がめり込んだ。

悲鳴も上げずに再び昏倒した巨漢を睨みつつ、三角錐を投げたフォームからゆっくり

所変わつて、支局長室に通されたルシオラ達は、現在支局長が外出中との事でお茶とお菓子のもてなしを受けつつソファアに腰掛けていた。

一人だけ、ソファアに寝かされている青年も居るが。

「タダオ起きないわねー」

起きないのではない。

実際、何度か復活しようとはしていたのだ。

ただ、その瞬間に流れ弾で碎けた床やら壁やらの破片が直撃したり、階段で何度も頭を打つて無理矢理気絶させられていただけである。

無論、犯人達に自覚は無い。

「あら、来たみたいね」

二人の視線が、忠夫から扉に向けられた。

片目を瞑つて紅茶を楽しみながら扉の向こうに注意を向ける勘九郎と、触覚をびこびこ扉に向けて動かしつつ忠夫のほつぺたを突付くルシオラ。

暫しの間があり、軽くノックの音が部屋に響いた。

「——どうも、お待たせしたようだねお嬢さん」

「・・・はあ」

「お詫びとおつちやあなんだが、今夜時間は空いてるかな？　この辺りにしては良い料理を出す店を知ってるんだが」

「・・・良い度胸じゃない、あ・な・た？」

「と言うのは冗談だね。さ、仕事の話に入ろうか」

「誤魔化せると思ったかこの宿六ッ！」

扉が開いた瞬間、ルシオラと目のあつたその男性は瞬時にだんでいーオーラを纏いつつその手を握った。

瞬間移動かと思えるほどの動きの速さ、と言うよりも全く無駄が無い故に知覚を擦り抜けた動きに呆然とするルシオラを、チャンスとばかりに畳み掛けようとしたその男性の後頭部を鷲掴む手。

ギリギリと音が出ていたような気もするが、確認する前に閃光のようなアッパーが決まったので良くは分からなかった。

拳を擦りつつ天井近くまで浮いて落ちてきた男性を足蹴にしつつ、後から入ってきた彼女はゆっくと室内を見渡した。

ルシオラと勘九郎、そして二人の男女以外に誰も居ない室内を。

「あれ？」

「……ふん」

ルシオラが忠夫が何時の間にか消えている事に疑問を持つと同時に、女性が鼻息と共に足を男性から外して地面を思いつき踏みつける。

ぐらりと4階建ての建物が揺れたような気がして、何かがどさつと天井から落ちた。「で、その馬鹿な甥っ子はなんで逃げようとしたのか、言い訳はある？」

「はい！ いいえ！ 逃げていません！ ちよつと天井の汚れを落とそうとしたただけでぐえっ!!」

研ぎ澄まされた感覚で危険を感知、覚醒を果たし、本能に従って天井に張り付いて逃げ出そうとしていた忠夫の言葉は踏みつけられて中断させられた。

完璧な体重移動で足元の甥を逃がさないように確保しつつ、こっそり逃げ出そうとしていた夫に「逃げたら5割増」とアイコンタクトで伝えた彼女は、真つ青になって小さく震えつつも直立不動の体勢になった男性に向かって顎を振って見せた。

「え、えーと、お見苦しい所をお見せしました。私がここの支局長、横島大樹で——」

「その妻、百合子です」

未だ青い顔のままでありながらも何とか自己紹介を済ませた大樹の横では、口から泡

を吹き始めた忠夫にしつかり足を乗せたまま、百合子が柔らかく微笑んでいた。

「進行具合の方はどうですか？」

「ん、おお。後少しと言う所ですかの」

小さな掘つ立て小屋の中から、熱帯のクソ暑い日差しの下だと言うのに黒いローブを着込んだ老人が背中を伸ばしながら欠伸混じりに出てきた。

老人に氷の浮かんだ冷たい水を渡しつつ、その男性はゆっくりと小屋に寄りかかる。

見た目に寄らずしつかりと作りこまれているのか、ボロボロの上に長い年月を経たようなその小屋は、軋む音さえ立てずにその背中を受け止める。

金属製のコップが氷と触れ合い、涼しげな音を奏でるのを楽しむ間も無く氷水を呷った老人は、小屋の中に向けて声をかけた。

「おーい、マリアー。ちと休憩じゃー」

「イエス・ドクター・カオス」

無機質な返事が返り、待つことも無く小屋の中からマリアが出てきた。

カオスに氷水を渡した男性が差し出して来たコップを丁重に断りながら、小屋の近くに設置されている機械のスイッチを入れたマリアは、その隣に置かれていた椅子に腰掛けると機械から伸びているコードを身体に接続し、目を閉じる。

「充電・スタート。スリープモードに・移行・します」

「・・・そうか、アンドロイドでしたね」

気まずそうに渡せなかったコップを片付けつつ、その男性は苦笑いを浮かべるカオスに困ったような目を向けた。

「いや、強力な精神感応であるが故に、マリアの魂と意思を感じ取ったと言う事じゃろ」

「・・・まあ、確かに何処か不思議な子ですけど」

飲み終えたカオスからコップを受け取った男性は、少々恥ずかしげに頭に手を当て

た。

その手が感じるのは、熱帯の陽射しに晒され、仄かに熱を持った金属の感触。ふと、男性の瞳が微かに揺れた茂みに向いた。

「……またか。何人くらいかな？ ……へえ。何時もより少ない、か」

「密猟者かの？」

「いえ、無断伐採の方みたいです。……ああ、頼んだよ」

がさり、と再び茂みが揺れ、黒い影が風のように去って行った。

心配げな表情で見送りつつ、男性は踵を返す。

感心したようにカオスが見ているのを見つけ、照れたように鼻の頭を掻いた。

「流石じやのう」

「ま、昔はこんな事にも使えるとは思っても居ませんでしたけどね」

村の人に知らせてきます、と言って去って行ったその背中を見送りつつ、カオスはゆっくりと首を回して骨を鳴らした。

マリアの充電もあの小さな発電機ではもう暫く時間が掛かるだろう、と計算した老人は、近くに吊るされているハンモックに向かって歩いていく。

よっこいしよ、と年寄りくさい——高齢というのもアレなくらいに年月を重ねてはいるのだが——台詞を吐きつつ、木の作り出す影と時折吹く風のもたらす涼しさを楽しむ

ながら、カオスはゆっくりと目を閉じる。

「さて、わしも一眠りと洒落込むか」

穏やかな睡魔に身を委ねつつ、カオスは瞼の裏に男性の頭を覆っているその構造を描いていく。

鼻と目、耳と口、それ以外の部分を全て覆うようなその鉄仮面は、去って行った男性が付けていた物とそっくりな、しかし僅かに違うモノであった。

「ふうん。密猟者に政府に無断での森林伐採、それから山賊まがいの集団、ねえ」

「山賊の方は着任早々方を付けることに成功したんだが、何せこんな国だからね……」

眉間に皺を寄せながら、勘九郎に話し掛ける大樹。

聞かされている勘九郎も興味が無さそうでありながら、しかし淹れなおされた紅茶を飲む顔は決して愉快な物ではない。

「手っ取り早く現金収入を得るため、と言うのなら以前からあつたし、そう言った輩は政府の方で対応できていたんだが……」

何せ国の殆どが緑で覆われたようなお国柄である。

人口自体も少なければ密林内に整備された道があるわけも無く、ましてやそれなりに設備の整った港ともなれば片手に足る数である。

へりか飛行機でも飛ばせば不自然な場所は簡単、とまでは行かなくとも、それなりに発見できるのだ。

また、港でしつかりと見張っていれば、摘発できる可能性が高くは、ある。

それでもゼロとまで行かないのが人の怖さと言う物なのかもしれないが。

さて置き、そんな中に左遷されてきたとある商社の支局長が、山賊団の首領をどうやってか説得し、山賊団員全員警備員やらなんやらに雇い入れたのが数ヶ月前。

色々と裏取引はあつたらしいが、ともあれ彼らもカタギの生活に慣れて来たようなの

で様子見、と言うのが正確なところでもある。

「で、ちよつとしたプロジェクトを開始しようと思った時に、だ。厄介な事が起きてねえ」

「GSが必要になるような？」

「そう言う事だ」

密猟者と無断森林伐採の激増。

そして、それに伴う治安の悪化。

皮肉にも、密林を根城にしていた山賊が居なくなつた事で、歯止めを失つたようにそれらが一気に加速したのだ。

政府としてはたまつたもんじゃない。

何せこの小国の警察機構なんてのははつきり言つてそこまで大した物ではない。

そして、何とか対応をしようと四苦八苦している時に、更に事態は坂道を転がるように悪化していった。

密猟者達が、何者かに狩られ始めたのだ。

それだけなら自業自得とも言えようが、暫くすると今度は密猟者達だけでは無くなつた。

許可を受けて伐採していたり、調査に入った政府の職員達も襲われ始めた。

密猟者達とは違い、彼らは一週間もすると無事に帰ってきたのだが、彼らの証言に寄れば――

「ジャングルの邪精霊を見た、と言う報告と、帰ってきた者達が密林へ入れないと言う事態」

「・・・襲われて、無事だったの？」

「ああ。その辺りは不明だが・・・ま、政府としても調査に派遣できないで困っている。無論、我々のプロジェクトも頓挫したままだ」

「・・・ふうん」

ジャングルの邪精霊、見た目は奇妙なお面とボロボロの布切れを身につけた、敏捷性と呪いに長けた厄介な存在である。

だが、邪精霊と言っても自然の一部。

普段は人の入らぬ密林の奥深くに居るし、ましてや密猟者達とそれ以外の区別などつける筈も無い。

そして、帰ってきた者達が密林へ入れなくなる、と言う現象。

「クロサキ君が見つけて来た君達なら、何とかなるだろう？」

「えらく評価されてるみたいね、彼は。分からなくも無いけど」

「今の本社の中では一番の切れ者だからね」

深くソファアーに掛けなおし、腕を組んだ向こうから楽しいな視線を向けてくる大樹にウインクを返しながら、勘九郎は立ち上がる。

やや蒼褪めながらも差し出した資料と契約書に目を通しながら、勘九郎は懐からペンを取り出した。

「で、奥方と甥は放つて置いて大丈夫なのかしら？」

耳を澄ませば聞こえてくる、隣の支局長室からの悲鳴と振動、打撃音。

「……いや、あの馬鹿がどーもこつちに來たらしいと聞いたから妻も呼んだんだけどなあ。失敗だったか」

「甥っ子に手伝つてもらつても構わないかしら？」

「本人さえ良ければ良いんじゃないか？ ま、あんまり長引くようだと——」

一際大きな音が響き、建物が揺れて埃がばらばらと落ちてきた。

「ちゃんと学校行かつて言つたやろがーっ！ 何でこんな所に女連れで來とるかあんなたつて子はああっ!!」

「ちがつ、これは事故、そう事故みたいなものだ!!」

「へえ？ その辺りどーなのルシオちゃん？」

「……まあ、限りなく事故と言うかほんとの所自業自得と言うか」

裏切つたな、と言う台詞を最後に、隣室からガラスが割れる音が響いた。

そして暫しの後窓の下から何かが落ちたような音が聞こえ、ざわざわと通行人達が騒ぎ出した。

しかし、その声は一瞬沈黙した後、再び今度はより大きな音で響き出す。

悲鳴やら何やらが聞こえた所からすると、どこもあつさり復活した忠夫が通行人達を掻き分け脱出したらしい。

そりゃ4階から落ちてきた人間がいきなり起き上がって、何事も無かったように凄まじい速度で逃げ出せば驚きもするだろう。

「チッ！ あの馬鹿逃げ足だけは速いんだから！ ルシオラちゃん、ビームよビーム！ 魔族なら出来るでしょっ！」

「そ、そりゃ一応は。あの、どれくらいですか？」
「逃げられないように街ごと吹き飛ばしなさい!!」

高まる魔力の波動とヤバげな雰囲気、駆け出した勘九郎と大樹が間に合わなければ、街の一区画くらいは吹っ飛んでいたのかもしれない。

追伸。

何処と無く煤けた勘九郎がルシオラを連れてロビーに降り立った時には、既に惨状は欠片も見当たらなくなっており、受付嬢がとても素敵な笑顔で見送ってくれた。

玄関先では物凄い量の負のオーラを纏った雪之丞が、通行人達に見境も無くガンを飛ばしていたので一発殴って気絶させてから勘九郎が担ぎ上げた。

結局、少しでも真面目な者が苦勞を背負うのがこの世の法則なのだろう。

「・・・はあ」

「タダオ何処まで逃げたのかしら？」

気楽に呟く魔族の少女が、何となく羨ましくなった昼下がりであった。

第陸拾貳話。

勘九郎達が携えて来た書類を捲り、満足げに頷いた大樹は、デスクの上にある電話を取り番号を押す。

繋がる先は日本の本社、連絡後すぐさまGS達を送り込んでくれた腹心の部下が居る部署だ。

時差の事を考えれば退社時間まではもう少し間が在る筈なので、連絡先の部下なら必ず居るであろう、と確信しコールが切れるのを待つ。

数度のコール音の後、かちやりと音が聞こえ、受話器が持ち上げられた事を示した。「……ああ、もしもし？ ナルニア支局の横島だが、クロサキ君は居るかな」

「私です。連絡を待っていましたので」

少々遠い通話の向こうから、冷徹さを感じさせるほどに事務的な返事が返った。

書類を片付けながら、何事でもないように電話の受け答えをしているであろう彼に何処か堅苦しさを感じつつも、クロサキ君の性分だからまあいいか、と頭の片隅で考える。手元の書類を確認しつつ、知らず唇を笑みの形に持ち上げ、電話相手に語りかける。

「例の件、無事こちらに届いたよ」

「少々遅れたようですが？ 後、ご子息が一緒に付いて来られたとか」

「耳が早い。ま、君の事だから驚かないがね」

先程契約を交わして、まだ一時間とたっていない。

その上、記録が残る海や空の便を使わずに此処まで来た忠夫の事を知っている辺り、一介のサラリーマンとしては異常と言える情報収集能力である。

おそらく支局内にも伝手があるのだろうとは思うものの、今現在では特に害があるわけで無いので気にしない。

最も、彼の利にならないような上司であればその限りではないが、自分を敵に回すデメリットから考えれば、それは、無い。

それまでの思考を思考のゴミ箱に突っ込みつつ、ぺらぺらと書類を捲つて3度目の読み直し。

「ジャングルの邪精霊に対して、魔装術とやらの使い手、しかも二人……結構掛かったんじゃないのかい？」

「いえ、むしろ安いくらいかと。顔を売る事も兼ねている為でしょうが」
半分当たり。

残り半分はクロサキが勘九郎の好みだったりした為だが……知らぬが花。

どの辺りに優先順位があるのか、ある意味では分かりやすい漢、勘九郎であった。ともあれ、ふーん、と興味もなさげに頷いた大樹は、ゆつくりと椅子に背中を預ける。そのまま取り留めの無い話と本社の情報収集を平行させつつ、時計をちらちらと確認する事数分。

やがてその耳が支局長室の前を歩く足音を捉え、数度ノックされるに至り、何でも無いような風情であるとある言葉を口にした。

「つたく、あの馬鹿甥は・・・」

「そー言えばだねクロサキ君。婚約者は元気にしてるのかな？」
がたーん、と。

具体的に言えば、まるでどっかの部署の椅子が、その上に座っていた人物がいきなり立ち上がった為に膝の裏に当たって倒れたような音が電話の向こうから聞こえた。

電話の向こうでは、話し声の後ろに聞こえてきたざわめきも消えており、やたらと妙な雰囲気静けさが漂っている。

ほんの少し目を見開いた後、物凄く楽しそうに近づいてきた妻に一枚の電話番号が書かれたメモ用紙を差し出しつつ、肩を震わせお腹を押さえながら必死で笑いを堪える。

「・・・何のことでしょうか」

「百合子の言う通り、くっ、女子社員の噂話ネットワークも疎かに出来ない物がある

ねえ。ビンゴか……くっくっくっ」

「……あ、もしもし？ 初めまして、私、横島百合子と——ええ、その横島の妻ですわ」

部屋の隅までこちらに聞こえないように離れて携帯電話をかけ始めた妻の、お昼の芸能人スキャンダルを楽しむ時と一緒に顔を眺めつつ、久し振りに聞く懐刀の動揺した声を楽しむ。

時間にして数秒の事であるが、彼が立ち直るには十分な時間を与えて漸く笑いを引つ込めた。

顔は緩んだままであるが。

その表情の悪戯小僧っぷりと言ったら、どこぞの半人狼の甥そっくりである。

直接的な血の繋がりは無い筈なのに。

「で、何で知らせてくれなかったのかな？」

「は、いえ、その、私事ですし、日程が決まってから、と。お願いしたい事もありませんので」

こと情報収集力ならば大樹を舐めちやいけない。

ビジネスには情報は何よりも必要な資源となる。

まあ、それを利用してどうするのか、とかにも驚くほどの物があるのだが。

先程のクロサキの言葉に対してちよつとした悪戯を仕掛けただけ、と言う話もある。ともあれ。

「へえ。ま、楽しみにしてるけど……それはそれとして、だ」

「……まだ何か？」

「いやいや、とにやにや笑いつつ、妻の差し出してきたメモ用紙に目を通す。

ついさつき初めまして、と挨拶をしていた筈なのに、今ではまるで何年もの付き合いがある友人同士のように気安く話している妻に親指を立てて見せた。

ほんの数分の間、此処まで打ち解ける辺り、百合子の話術の恐ろしさを評価すべきか電話相手が将来詐欺にでも引つかからないか心配するべきか。

未だこちらの強烈なカウンセラーから復帰しきれていない相手に、久し振りに弄りがいのあるネタだ、とガッツポーズなぞしつつメモ用紙を読み上げた。

「何々？ 健康診断書と資産調査書、それから収入と支出を——」

「……ちよ、ちよつと待つて下さい！ まさか」

「待たない。ええつと、諸々を示しつつ将来設計を1時間30分に渡つて語り、指輪と一緒に——」

再びがたん、と音が聞こえた。

今度は先程よりも大きく、漸く小さなざわめきが響き出した電話先に、再び沈黙が横

たわる。

そのまま受話器を放り出したようで、固い物同士がぶつかる音を真近に聞かされた大樹の肩が上がった。

耳を澄ませば聞こえてくる、慌しく何かを片付ける音と、

「専務、体調不良の為早退します・・・！」

「え、あ、ちよつと待つてくれクロサキ君！ この案件はわしじや分から——」

激しく慌てた様子のクロサキの上司の声と、ドアが開いて閉まる音。

いつも冷静な部下をからかい、ムカツク上司に嫌がらせを行い、更に自分の楽しみを追及できた一石三鳥の成果に本格的に笑いの発作を起こしつつ、涙目でデスクに突っ伏して腹を押さえながら笑う大樹であった。

「ええ。それじゃ、しつかり甘えなさいねー」

携帯電話の電源を切った百合子が、こちらも軽く笑いながら肩を振るわせる夫の頭を軽く叩く。

スイッチが入ったように馬鹿笑いを始めた大樹を見ながら、彼女は軽くデスクに腰掛けた。

「もうすぐクロサキ君が戻ってくるから、携帯電話の電源切つてしつかり捕まえて会社に戻らせないで甘えなさいって言つといたわ」

「ひー、ひー。さ、さすが百合子、分かつてるじゃないか。ま、人生の墓場によくそつて所だな」

「彼も昔つから残業ばかりしてたしねー」

顔を見合わせ笑いつつ、何度も何度も婚約者に電話を掛けて且つ繋がらない事に物凄く焦っているであろう、日頃はこれ以上なく冷静沈着な部下と元部下を想像しながら、すっかり戸籍上の息子の事を忘れて二人であつたとさ。

「ところで、女子社員ネットワークの窓口は何処かしら？」

「・・・さて、仕事仕事」

さて、折檻折檻。

そう呟いて、百合子はにっこりと笑いながら、そそくさと退出し様とした夫の襟首をがっちりホルドするのだった。

「何か俺の扱い酷くないかここんとこーっ!!　そして見知らぬ人よ!　その幸せを俺にも分けやがれええええええええっ!」

「煩いわねー、起きて早々訳の分からない事で騒がないでよっ!」

がぼつと身を起こした忠夫はルシオラの背中から一本背負いの如く縦回転しながら投げ落とされ、蛙のように地面に貼り付けられた。

流れる涙もしくしくと嫉妬混じりに漏れ出る泣き声も柔らかい地面に吸い込まれて消えていく。

母なる地球は放置プレイが基本なので何も返してはくれないが。

「うう・・・この大地の有り余る包容力が今は憎い・・・!」

「地面に愚痴つて無いでさっさと起きなさい。そろそろ現場に着くわよ!」

溜め息混じりの言葉に顔を上げれば、そこは完全にジャングルだった。

濃い緑の匂いと、雑多な生き物達の気配。

見慣れぬ木々と、極彩色の羽を忙しなく動かしながら行き交う小鳥達。

地面に目を向ければ小さな虫達が忠夫に潰されてぴくぴくと痙攣していたり。

「あ、ちようちよ」

「現実逃避してないでとつと目え覚ましやがれ」

顔に縦線を描きながらひらひらと眼前を過ぎ去っていった名も知らぬ蝶を追いかけようとした忠夫の襟首を捕らえたのは、未だダメージから立ち直りきっていない雪之丞であった。

ややげっそりとした感のある彼に向かって顔を向けながら、忠夫はふと聞いてみる。

「駄目だったな？ そーかそーか！」

「何で嬉しそうなんだてめえはああああ……。それにっ！ まだっ！ 駄目と決まった

訳じゃねえええええ……!!」

ぎりぎりと首を締められながらも、浮かんだアルカイックスマイルは消えませんでした。た。

血の涙さえ流しながら土気色の忠夫を締め上げる雪之丞に拳を落とし、勘九郎は心底嬉しそうに頭を押さえて蹲った弟子の肩を叩く半人狼に目を向けた。

「で、早速だけど協力して欲しいの」

「質問！」

びしっと手を上げて発声した忠夫を指差しながら、とりあえず聞いてみた。

「何で俺は氣絶してましたか?! 確か無事に百合子さんから逃げ切つて合流した筈なんですが!」

「ああ・・・それは」

ひよい、と忠夫の後方で肩を叩いているルシオラに視線をやる。

「ルシオラちゃんがいきなり撃つたからだけど」

「あ、まだらすべすべまんじゅうがに」

「誤魔化してんのか?! 己はそれで誤魔化してるつもりなんかあつ?!」

何も無い所、思いつきり空中を指差しながら視線を逸らしたルシオラに詰め寄る忠夫である。

ちなみに何故ルシオラが魔力砲を撃つたのかというと、百合子が指示したからである為、原因が判明した所で忠夫に出来る事は精々がつくりと項垂れる事くらいである。

珍しい蟹の変種よ、と目を合わせないままやたら自信満々に告げるルシオラに鼻息も荒くにじり寄る忠夫であった。

が。

「氣絶した所でちよつと休憩に連れこも——ごほんつ! 担ごうとした所でその子が代

わりに担いで此処まで連れてきてくれたの。感謝の一つくらいあつても良いんじゃない?」

「ありがとう……! 本っ当にありがとうルシオラ……!!」

「……何か別のベクトルで感謝されてるわね、私」

滂沱の涙を零しながら左手でルシオラの手を握り、勘九郎の舐めるような視線から何かを庇うようにお尻に手を当てた忠夫は心の底から感謝した。

もし彼女が居なかつたらと思うと、背中を悪寒が一個旅団で駆け上がる。

そもそもルシオラが居なければそんな事態に陥る事も無かつたのだろうが、目先の危険が伝える恐怖はその思考をあっさり凌駕し尽くした。

そのまま照れ隠しに忠夫の首を無理矢理勘九郎に向けたルシオラは、体と顔が180度違う方向を向いた忠夫の頭をホールドしたまま少し赤い顔でそっぽを向く。

白目を剥いて真つ青な顔で泡を吹き始めた忠夫に投げキッスなど贈りつつ、ビクンビクンとその直撃を受ける度に痙攣する忠夫に、失礼ねえと呟いた勘九郎は漸く立ち上がった雪之丞に囁いた。

「気付いてるわよね?」

「ああ。誰かさんのお陰で視線には敏感になったからな」

「ま、敏感だなんて。……今日は積極的に行くかうかしら」

「止めろ」

嫌そうに吐き捨て、ゆっくりと靈力を集中させていく雪之丞に残念そうな視線を送りつつ呼応するように靈力を高めていく。

探るような視線の主は音も立てずに4人の周囲を高速で巡りつつ、こちらの様子を観察している。

いや、其れだけではない。

「増えてるわね」

「4、いや5匹……？ まだ増えそうだな」

魔装術の使い手達の言葉通り、本能がそのまま存在しているかのような気配達はその数を増しつつあった。

いまだ泡を吐き出し昏倒している忠夫と、ようやくその惨状に気付いて慌てて忠夫ががつくんががつくん揺らしているルシオラを横目に見つつ、戦力外ね、と舌打ち混じりに現状把握。

ちなみに首の向きは元通りになっているが、体を揺さぶられる度に忠夫の口から聞かないほど小さな苦しげな吐息が零れ、額に流れる脂汗が倍増し、首から鳴っちゃいけない音が何度も何度も鳴っているのは誰も知らない悲しい現実である。

「……来るわよ」

「応」

す、と魔装術者達の目が細まり、一気に纏う気配が闘争のそれへと変質する。

引き摺られるように、いや、呼応するように飛び出したのは、一見すれば小柄なサルほどの大きさで、黒い布を着込み、怪しい仮面をつけた集団であった。

無言のまま、彼らは構えた細長い棒を口元に当てる。

狙いは二人、危険な気配を持った2つの個体。

溜め込んだ吐息を一気に吹き込み、跳ねるように加速。

前後左右全方位からの吹き矢が突き刺さると同時、集団で襲いかかって無力化を図る。

「ふっー！」

「はあっ!!」

だが、高加速を付加された鋭い針は、突如として二人の全身を覆った硬質な何かに弾かれる。

集団に動揺が一瞬だけ走り、一糸乱れぬ行動に僅かな遅滞が生まれた。

そして、その一瞬で十分だった。

両腕を交差させ、露出した目を庇う体勢から一気に跳躍。

左右に分かれた勘九郎と雪之丞は、吹き矢の筒を向けられるよりも一瞬早く手近なそ

れを掴む。

僅かな遲滞も無く吹き矢を手放し爪を突き出した、その黒衣の存在——邪精靈は、己の武器が砕け散った事を認識した。

「お礼は倍付けでつてのが白龍道場の流儀でね！」

「釣りは要らないわ、取つときなさい！」

更なる反撃の間も与えず、己が纏った鎧に絶対の自信を預けた二人は邪精靈をぶん回す。

握り締めた手の下から響いた苦鳴に寧猛な笑みを浮かべ、迷う事無く吹き矢を向けていた別の邪精靈に投げつけた。

仲間の身体と衝突した邪精靈はそのまま吹き飛び、後方の大木を押し折りつつ轟音を立てながらジャングルの奥へと消えていく。

退場させられたそれには見向きもせず、今度は小振りな、だが禍々しいナイフを構え一体、そして唸り声を上げる数体の邪精靈に向き合った。

「……何処かの原始宗教モノっぽいナイフねー」

「大方、俺らの前にやられた奴らが持つてたんじゃねーの？」

ナイフを持った個体に意識を幾分か割り、だが他の個体にも油断せずに意識を割く。

散漫ではなく、集中の飽和。

広がりながら閉じていく意識を心地良く感じながら構えた雪之丞の爪先に力が籠り、地面を跳ね上げながら加速。

耳元を掠めていく空気が鼓膜を打ち、一繋がり音が脳裏を擦りながら意識を戦いへと尖らせていった。

「先手必ツ．．．!?!」

だが、その握り締められた拳が着弾するより、その足が身体を必殺の距離へと運ぶよりも速く、丁度敵との中間地点に何か上空より飛来した。

握り拳ほどのそれは大気との摩擦で蓄えた熱を散らしながら、僅かに雪之丞の速度が鈍ったその瞬間に。

「下がちなさい雪之丞!」

「ちいつ!!」

猛烈な白煙を吹き上げた。

一瞬で視界を奪われた事に舌打ちしつつ、後方から聞こえた兄弟子の言葉に反射的に行動しつつ両手で顔を庇う。

そのまま後方に全力で跳躍し、背中で煙を突き破って地面に足をつける。

かちんかちんと魔装を叩く、小さな針を鬱陶しく思いながらも決してガードは崩さない。

護りの姿勢は崩さぬまま、両腕の隙間から僅かに覗いた瞳で白煙の壁の向こうを警戒する。

だが、暫しの沈黙の後、漸くねっとりとした質感さえ感じさせる程の煙が薄まった後には、何者の姿も残っていないかった。

「逃がしたか……！」

「しかも、ご丁寧に最初に潰した奴まで持つてかれてるわね」

苦々しげに既に魔装術を解いていた勘九郎は、薙ぎ倒された大木の向こうを覗き込んでいた。

抉れた大地と無残な傷痕を残す半ばから折れた木の向こうにある筈の邪精霊の姿は、無い。

「撤退にしてはやけに手が込んでるわ。これは……誰か、居るわね」

「ふん。黒幕が居るなら全部纏めて叩き潰すだけだろーが」

地面を蹴りながら魔装術を解いた雪之丞が、蹴られた事で姿を現した煙幕の源を手に取り。

その小振りな円筒は、雪之丞の袖で表面の土を拭われ、その下から作られて間もない事を示すような金属の光沢を見せ付けていた。

「おい、魔族の姉ちゃん。横島を起こせ。一気に行くぞ」

「は?! え?! あ?!」

好戦的な笑みで邪精霊達が撤退したであろう方角を見つめていた二人は、背後から聞こえてきたルシオラの酷く動揺した声に訝しげに振り返った。

焦った様子で背後を必死に隠そうとしているルシオラに歩み寄れば、なぜか冷や汗を滝のよーに零しているその後ろの地面に突き立った――

「スコップ? . . . ってそんなもの何処から」

「おい、横島は . . . 」

状況その1。

地面に突き立った何処から取り出したのか全く不明のスコップ。

その2。

顔を冷や汗で覆っている怪しい行動の女。

その3。

盛り上がった、地面。

そして、その4。

盛り上がった地面から僅かに覗く、ぱたぱたと結構必死っぽく動く手。

「 . . . 犯人は」

「お前だっ!!」

「ほら見て。今気付いたけどこの針何だか妙な呪いが掛かつてるみたい。つ・ま・り！
私はタダオが流れ針に刺されないように隠そうとしたのよ！」

「今気付いたけどって自分でゆーてるやんかあつ！ それに危うく窒息死する所やった
わいっ！」

「あーもうほらほら、いい加減に痴話喧嘩は止めなさいってば」

「ちっ、痴話喧嘩あつ?!」

「俺のは正当な主張だー!!」

心外な、と叫んだ物の、全くそっち方面に対しては抗議をしない忠夫にちよつとムツ
とするルシオラさんである。

この辺り少々複雑なヲトメゴコロと言うやつか。

ともあれ、ちよつと拗ねたルシオラに苦笑いを零しつつ、軽く手を叩きながら二人の
間に割り込んだ勘九郎は忠夫に向かって手招いた。

「どう? 匂いで追えそうかしら?」

「んー」

勘九郎の言葉に忠夫はすびすびと鼻を働かせる。

半人狼の超感覚、中でも嗅覚は折り紙つきのものである。

追跡行ともなればそれが必ず役に立つだろう、と言う勘九郎の思惑は、早速その効果を――

「駄目っぽいな、これ」

「へ？」

発揮しなかった。

鼻を押さえて苦い顔をする忠夫に思わず詰め寄る勘九郎である。

何せ、此処で匂いによる追跡が出来ないとなれば、最悪再び出会うまで延々とジャングルの中を彷徨わなければならない。

山籠りで慣れているとは言え、やっぱり隣の修行馬鹿と違ってそれなりにバネの効いたベッドで休みたいと思う、最近肌の曲がり角が気になりだした勘九郎、〇〇歳である。

「匂いが多いっつーか濃いつつーか、はつきり言つて混じりすぎてよく分からんぞ、此処」

「・・・あー、まあ日本には此処までジャングル！　つて場所無い物ね」

辺りを物質的に埋め尽くすような緑の匂いは、僅かに残っている筈の邪精霊達の匂い

も混沌の中に取り込んで、すっかり混ぜ合わせてしまっている。其れだけではない。

密林の中に生息する、日本の森とはまた違った生態系や生物の密度が、この環境に不慣れた忠夫の鼻から正確に匂いをかぎ分ける能力を奪ってしまっていた。

だが、忠夫は一つ頷くと、てくてくと邪精靈達が去っていったであろう方角に向かって歩き出す。

そして雪之丞から彼らが最期に居た場所を聞き出すと、しゃがみ込んで四つん這いになりながらじつくり地面を観察し始めた。

「・・・ん。でも何とかなるぞ、これなら」

「追えるの?」

「あつちも慌ててたみたいだなー。あつちこつちに痕跡があるわ」

そう言つて忠夫が指差した地面を見ても、忠夫以外には全く変哲の無い柔らかな落ち葉に覆われた地面にしか見えない。

「こつちから・・・」

つい、と滑る忠夫の指。

その先を見れば、僅かに重なつた木の枝や破れた蜘蛛の巣、少し窪んだ苔の痕や落ちたばかりと思しき葉っぱがちらほらと——忠夫の目にだけはしっかりと見えていた。

「あっちだな」

「お前、本当だろーな？」

「伊達に毎朝狩りやってねーつつの」

「・・・本当に偵察向きね、あなた。人狼ってこんなのはっかりなのかしら」

疑わしげに指の向いた先を眺める雪之丞と、呆れた様に呟く勘九郎。

ルシオラはルシオラで忠夫に何処らへんが痕跡と成っているのかを興味深そうに聞いている。

人狼が狩りを得意とするのは事実であろうし、その超感覚でもつてすれば痕跡を探すのも匂いを辿るのもある程度は簡単な事であろう。

だが、その超感覚を他の人狼達と比べて低いレベルでしか持たなかった忠夫は、それを経験と観察力で補っていた。

それが発揮された超感覚と相俟って高レベルでの追跡力を持たせる結果と成っているが・・・例外としたほうが良いだろう。

普通の人狼ならば、鼻と身体能力だけで十分に足りていた筈なのだから。

「途中から木の上移動したみたいだから、俺が登って上から先導してくるわ」

そう言い残し、するすると音も立てずに太い木の幹を登っていく忠夫。

狼と言うよりも猿と言った方が正確かもしれない。

美衣との一件の中で身に付けた森林での移動技能は、しつかりと忠夫の身になっていくようである。

「ほんつと、便利な子ねえ」

呆れを通り越して何だかどーでも良くなってきた勘九郎の眩きが、元氣良く忠夫の後に追いかけて始めた二人の背中を擦った。

「・・・ふむ。ま、これで何とかなるじやろ」

フラスコの中身を揺らしながら、カオスはゆっくりと立ち上がった。

数歩歩き、小さな木製の机の上にあつた小瓶のコルク蓋を空いた片手で器用に弾き開

け、その中身をゆっくりとフラスコに注いでいく。

小さな爆発がフラスコの中で起こり、紫がかつた煙を吹き上げた。

その臭いに顔を顰めつつも、僅かな変化も見逃すまいと鋭い目で中身を観察する。

ゆらりゆらりと僅かに揺れながら、やがてフラスコの中身はゆっくりと透明に成っていった。にやりと快心の笑みを浮かべつつ、それを揺らさないように慎重に持ち上げながら、再び空いた手で真っ白な正方形の紙を取り出し、片手ですらすらと奇妙な図形を書き込んでいく。

やがて、円と文字とも記号ともつかない紋様でもって記された魔法陣が紙の上に姿を現した。

数度、確認するように全体に目を通し、納得が行った様で軽く頷くカオス。

そのままその紙の上でゆっくりとフラスコを傾けていく。

「……ふむ、完成じゃな」

フラスコの口から滑り落ちた液体は、その魔法陣の上で瞬く間にさらさらとした粉末に変わり、やがてゆっくりと小さな球体を形作っていった。

仕上げとばかりにぱちんとカオスが指を鳴らすと、今度はその球体の下の紙が一気に燃え上がる。

燃え上がった瞬間と同様、一瞬で消えた炎の後には、やや縮んだ球体と、その中に紙

に書かれていた筈の魔法陣が見て取れる。

その球体を摘み上げたカオスは、唇の端を持ち上げるとマントを翻して隣室へと続く扉をノックした。

「出来たぞ」

木製のドアには形だけのノブしかついておらず、当然ながら鍵などは付いていない。軋む音を立てながらあつさり開いた扉の向こうには、鉄仮面を付けた男と、ベッドの上で静かに横たわっている女性の姿があった。

女性の額に乗せていた濡れタオルを取り替えていた男は、カオスの言葉と差し出された球体に焦った様子で、それでも慎重に受け取った。

「これで、大丈夫なんでしょうか」

「まあ。ワシの推論が当たっておれば、じゃが」

何処となく不安そうになりながらもそれを受け取った男はベッドの上に横たわる女性の口元にそれを当て、祈るような気持ちで押し込んだ。

数秒ほど、痛いほどの沈黙が一室に去来する。

全く反応の無い事に一瞬落胆の表情を浮かべた男は、しかし、次の瞬間に。

「——ゴホッ！　ゴホッ！　．．．あ、う」

呻き声と共に女性の口元から吐き出された呼吸に、心底からの安堵の表情を浮かべ

た。

優しい手付きで女性の手首をそっと握る。

直前まで全く動く事もなく、ぞっとするほど冷たいだけであつたその手首は、確かに生きている者の暖かささと鼓動を伝えていゝる。

「ふむ。ちゃんと『時間が繋がつた』ようじやの」

「・・・ありがとうございます。本当に・・・」

「礼はいらんよ。対価が貰えるのならばの」

さて、と首を鳴らして懐から懐中時計を取り出したカオスは、片眉を跳ね上げるとそのまま窓に歩み寄つた。

窓と言つても簡素なガラスも何も嵌っていないただの壁に空いた穴に近いものだが、風通しが良いように作られた建物である為か、外からは涼しさを感じる程の風が吹き込んでゐる。

きよろきよろと外を何かを探すように動いていたカオスの視線が、ある一点で静止する。

その視界の中には、盛り上がった地面と其処から伸びるコード、そしてその端を持つて小さく口を動かしているマリアの姿。

「ぬおっ?!」

慌てて窓から飛び退り、カオスが一人床に伏せた瞬間。

轟音と閃光が周囲を揺らした。

「マリアアアツ!! 仕上げはちゃんと完全密閉してからとゆるたろーがああつ!!」

小屋の中で全く身構えていなかった為、閃光と轟音のコラボネーションを見事に喰らって昏倒した男を残しつつ、小屋の中から駆け出してきたカオスの目の前で、マリアはきよとんとした表情でやや煤けながら不思議そうに握ったコードの残りカスを眺めていた。

だが、カオスがこちらに掛けてくるのを見た瞬間、一瞬とても挙動不審にあちらこちらを見回した後、おもむろにコードの残りカスを全力であさつての方向に投擲。

駆けつけたカオスがジト目で睨むと、マリアは事務的な声と無表情でのたまった。

「ノー・プロブレムです。ドクター・カオス」

「プロブレム山盛りじゃ」

ごつんと拳骨を落とされたマリアはちよつと落ち込んだ。

見事にクレーターになった地面の中心を溜め息混じりに眺めつつ、カオスは呆れた様子でその頭を撫でる。

「だが、まあ結果はオーライと言う所じやのう」

「当然・です。マリアは・早く・帰りたい」

「……ったくのう。ちーとも反省しとりやーせんな」

そこはかとなく胸を張るマリアにデコピンをかましつつ、ぶちぶちとどつかの馬の骨である半人狼に対し正當な八つ当たりを述べつつ、カオスは抉れた地面の中からこそごとと親指の爪ほどの大きさの何かを拾い上げた。

不思議な光沢をもったその楕円形の鉱石の中には、先程の男が被っていた鉄仮面に良く似た模様が内包されていた。

懐から取り出したモノクルでじつくりと検分するカオス。

やがて満足げに頷くと、それを小さなロケットに納める。

「ふむふむ。一二つ目もこれで完了じやの」

背後でデコピンを喰らって額を押さえるマリアを尻目に、カオスは小屋の中へと戻っていったのだった。

第陸拾參話。

忠夫達が邪精靈の跡を追いかけ始め、はや二時間。

照り付ける南国の太陽は既に最高度を超え、緩やかに地平線へと沈み始めている。

ただただ続く緑の迷路を樹上を行く忠夫の言葉に従い潜り抜け、ある時は巨大な蛇と戦いワニと戦いトラと戦い、雪之丞が底無し沼に嵌まり、ルシオラが何故か蜂の群に襲われ、何となく食べてみた果物の毒と忠夫が決死の攻防を繰り広げ勘九郎が頭を抱えて、そんな諸々の苦難を乗り越え、漸く怪しい場所へと辿り着いた御一行。

「怪しいよなあ、あそこ」

全く音を立てずに、バンダナに葉っぱがついたままの木の枝を差し込んだ忠夫が茂みの中から頭を出した。

「でも邪精靈とか居ないわよ？」

がさがさとそれなりに音を立てながら、こちらは木の枝を両手に持ったルシオラが茂みを揺らして頭を出した。

ぴこぴこ揺れる触角が、目の前の小屋を指している。

「面倒くせえな。とつとと突っ込んじまおうぜー」

がさり、と全く無頓着に音を立てつつ立ち上がった雪之丞が、周囲から伸びた3本の手に襟首を掴まれ引き摺り下ろされた。

がこん、と固い物がぶつかり合ったような音が結構大きく響く。

「その力押し思考、いい加減に修正しなさい」

たまたま後頭部が落ちた所にあつた、赤ん坊の頭ほどのごつごつした岩にぶつかつて目を回した弟子に溜め息を付きつつ、何時の間にもやら一行の引率者になつてゐる勘九郎が頭を出した。

目前にちよこんと存在している小屋の大きさ自体は大した物ではない。

精々部屋が二つ三つ、それも三つもあればかなり手狭になるであろう程度の物である。

「・・・確かに、気配は無いわね」

「だけど、邪精霊はこつちに来てゐるんでしょ？」

難しい表情で腕を組んだ勘九郎の呟きに、ルシオラが横合いの忠夫に囁きかける。

その吐息と接近しすぎな距離に少しくらくらとしながらも、忠夫はもう一度その跡を確認していた。

「間違い無い。あの小屋つちゅーか、あの辺りにまでは跡が見える。これ以上はもうちよつと近づかんと分かんけど」

「畏かしら？」

「に、しちやあ．．．ちよつとそれらしい仕掛けも見当たらんし」

「それならいつその事、私が纏めて吹き飛ばして——」

やおら立ち上がり、掲げた手のひらにギユインギユインと物騒な音を立てて魔力をチャージするルシオラ。

慌てて押さえ込もうとした二人の動きを嘲笑うかのごとく、片足を高く持ち上げたルシオラの第一球は、見事に唸りを上げて小屋の壁に着弾した。

突き上げる衝撃、剥がれる大地、碎ける木々、濛々と舞い上がる土埃。

おまけに至近距離で起きた轟音の炸裂に耳を押さええて悶える3人。

「ふふふ．．．名付けて大怪球壺号っ！」

「耳がーっ!! 耳がーっ!!」

「ま、まさかこの子が雪之丞と同じベクトルの行動を取るなんて．．．! とんでもない伏兵がいたもんね．．．」

「う、後ろ頭と耳がいてえ．．．」

綺麗なフォームでいきなり大迷惑を撒き散らしたにもかかわらず、酷くご満悦な様子でにぎと手を動かしている彼女を見ながら、勘九郎はその肩に自然保護まで乗っかっている事を思い知らされ、いつそのまま置いて行こうかと暫し自問。

だがしかし。

「う、うそつ……!」

荒れた大気が生み出した風に土埃が吹き飛ばされた後には、何事も無かつたかのように建っている小屋が一つ。

ルシオラと勘九郎の顎がかくんと落ちる。

はつきり言つてたつた今日の前で炸裂した魔力弾は、魔装術を使用した勘九郎が靈力を全部防御に回してやつと、くらの破壊力はあつた筈だ。

だがしかし、大地は抉れ、無残な様相を呈しながらも、その小屋は全くの無傷でしつかりばつちり存在している。

暫し硬直したままふるふると震えていたルシオラは、何やら色々なプライドを刺激されたのか、今度はおもむろに両手に魔力弾を創り上げ、羽を広げた鷹の如く両手を背中に回し、ちよつと涙目で決意を籠めて宿敵を睨み付けた。

「それなら式号で……!」

「やめなさいっ!」

すぱん、とルシオラの後頭部が勘九郎の手のひらではたかれた。

遠くに立ち昇った煙と閃光、それから少し遅れて腹の底まで響いた爆音を楽しげに感じながら、カオスは顎に手を当て軽く笑う。

「ふむ、襲撃はかなりの実力者、しかも魔族と来たか」

「強力な・魔力の波動を・感知。アラート・イエロー。準戦闘態勢に・移行・します」
「ま、警戒だけはしておくべきじゃろ」

カオスの許可により機関出力と霊力を上げ、センサー類をアクティブに切り替えつつ、マリアは遠くの湧き上がる煙を僅かに心配そうな雰囲気で見詰めている。

それを横目に見たカオスは、一つ頷くと娘の肩に手を置きゆっくりと言葉をかけた。

「何、流石にこんな場所でフィールドワークなどと言うだけはあるぞ、あの男は。人一人——しかも、己の妻くらいはしつかりと担いで逃げ切つておるさ」

「ですが・あれほどの魔族が・そう簡単に獲物を・逃がすとは・思えません」

「時間稼ぎくらいは仕掛けておる。靈波迷彩も持たせておるしな。こつちも巻き込まれん内にさつさと最後の用件を片付けるぞ」

マントを靡かせつつ歩き始めた老人の後を、それでも何度か振り返りつつマリアが追う。

僅かに早足になった二人は、鉄仮面、いや元鉄仮面の男からの情報を分析しながら先を急いだ。

と言つてもその情報には断片的な部分が多い。

何せそもそも言葉を使わない種族が、たまたま思念による交渉が可能だった別種族とイメージとニュアンスだけで伝達しあつた物が元である。

精神構造も違ふ上に、かつてのような敵意を持つた魔族とさえテレパスを通じる事出来るほどの出力を持たない今の彼では、それが限界だったのだ。

「ジャングルの邪精霊が集団でかかつて抑え切れんほどの妖怪か。ふーむ、条件が揃えば研究材料にはもつてこいなんじやがお。・・・ちーとばかり持つて帰つてもばれんかな？」

「ノー・ドクター・カオス。取引の・条件は・即時殲滅・です。既に・密猟者・及び・無許可の伐採を行なった・者達が・捕獲されています。危険性は・高いかと」

「わーかった分かった。ワシの名にかけた約定じゃ。破りはせんさ。何せ——」

マントの中でごそごそと腕が動き、僅かな時間の後、一つの物体が取り出された。

それは、小屋の前で別れた男が着けていた者。

鈍色の光沢を持った、鉄仮面。

「——品物を受け取ってしまったからの。信には信で答えるのが筋というもんじゃろ」

「その割には・先程の言葉に・かなり本気が混じっていた・ようでしたが？」

「こ、これの何が凄いつてのう！ マリアツ!？」

かなり誤魔化しの入った口調だ、とマリアは判断しながら、それでもいい年こいて新しい玩具を手に入れた子供のような表情を見せるカオスに律儀に頷いてみせる。

うきうきとした様子で鉄仮面を持ち上げたり覗き込んだりしながら、それでも足は止めないままにカオスは年甲斐も無くはしやいだ様子である。

誤魔化し3割、本気が6割、後はちよつとしたお茶目と言った所か。

「信じられんほどの高出力のテレパス、その頭部を数十年に渡つて覆い続けた鍛鉄じゃぞ！ 最早純粋な金属ではない可能性が非常に高い！ それこそ、古の精神感応金属並みのレアメタルに等しいかもしれん!!」

「ですが・等価交換にしては・いささか破格と・判断します」

うぐ、と咽をつまらせたような声を上げたカオスだが、渋々頬を掻きながら、それでも言い訳してみた台詞で反論を図る。

「えーじゃないか。ちよちよつとこれの代わりに、目立たんようなテレパスを押さえるアミュレットと妖怪退治を引き受けただけじゃろーに」

「もう一つ。あの男性の・妻と言う女性に・貴重な薬を・使用したのでは？」

「あれは実験も兼ねて、じゃからのう。いやいや、中々いいデータが取れたわい」

あさつての方角を見つつ言い放ったカオスの額に浮いた冷や汗を、マリアはぱっちり観測している。

何せ、使った薬が薬である。

下手すれば、それこそ大問題になっていた筈。

間違い無く夫である男性はその正確な効果を知れば反対していたであろうし、そもそも成功するか否かもはつきりとしないう状況であつさり使ったカオスに、マリアはちよつとジト目を向けている。

なにせ、彼女を目覚めさせた薬の元になつたその名を、「時空消滅内服液」と言つたりするのだから。

それを飲んだ存在を、因果ごと消滅させる至極物騒な薬である。

毒薬どころか製造さえ禁止されるような、超が4、5個付くほどの禁薬なのだ。

とある魔女がカオス著の薬の作り方が載った本を基に作った物をこっそり持っていたり、それをとあるオカルトGメンのエリートに散々叱られつつ泣く泣く処分したと言う話もあるが。

「どーも妙な因果律が絡んでいたようじゃからの。効果の時間を限定して、その辺りの因果を纏めて消滅。ふむ、今思うと中々に危険じゃのう」

「1歩間違えば・存在ごと消えていたと・推測」

至極事務的なマリアの言葉と冷たい視線にちよつと冷や汗の量を増やしつつそのまま言つて、ふと、カオスは思案げな表情を作つた。

「だが、それだけでは無いのも確か。仮にも時空間移動能力者が、それもあの男の言葉を信じるならば何度も異能を行使している者が、あのような状況に陥ると言うのは腑に落ちん」

「異能ゆえの・暴走の・可能性は？」

「いや、あの女は夫の元に戻つてきている。制御下にあつた公算が高い」

人付き合いも無く、時折訪れる食糧や日用品の配達人以外では熱帯雨林の生物達くらいしか居なかつた生活の中に突然来襲した彼女。

今にも意識を手放しても可笑しくない様子でありながら、「どうして・・・」とそれだ

けを言い残して夫の腕の中に倒れこんだ妻。

とりあえずベッドに寝かしつけ、医者に見せようとした彼が見たものは、手足の端々が僅かに透ける彼女の姿だった。

動かせば透けるが動かしさえしなければ波の揺り返しのようにゆつくりと元通りになつていくその手足。

医者に見せようにもこんな病気は聞いたことが無い。

——しかも、彼女は魔族に狙われている。

途方に暮れ、三日三晩迷い続け、いよいよ妻との約束を破つて娘に連絡を取ろうと後ろ髪引かれる思いで小屋を後にしようとした彼に声をかけたのは、そんな時だった。

「無意識下の暴走の可能性は捨てきれんが、それにしても症状が異常じゃ。ならば、むしろ別の可能性……時間移動の際に何かがあつた、か？」

「何か・とは？」

両手を天に向け、肩の辺りまで差し上げる事がその答え。

お手上げ、と言う奴である。

何せ時間移動そのものが未だ未知の部分が多い上に、使用する事が出来た者の記録も殆ど残っていない。

その影に魔族の姿があつたと言うのは、まことしやかに囁かれる話ではあつたが。

「ともあれ、先程の襲撃を見るに、時間移動能力者に対して魔族が何らかの行動を取っていると言う話だけは真実のようじゃがの」

その話が本当かどうかはともかく、今回に限っては盛大な勘違いであるが。

一方その頃勘違いの元凶達は。

「えーと、これがこーなってこつちがこーだから・・・」

「うん？　これはこつちじゃないかしら」

「あーもーっ！ こんな専門外も良い所なのにーっ！」

「私も同じよ……」

小屋の扉に書かれた文字と図形に頭を悩ませていたり。

やたらめつたら大量の数字と象形文字に近い文字の羅列、そしてその周囲を囲むように描かれた図形の数々。

『力は無駄。頭を使うべし。訪問者よ、このリドルが解けるか？ ちなみにヒントは一切無しじゃがの（ハナホジー）』

一頻り頭を掻いたルシオラは、そのパズルの真上に彫られた数行の文を苛々とした目で睨みつつ、再び作業に取り掛かる。

横合いからアドバイスとも言えない程度の口を挟む勘九郎も、いい加減に疲れた様子で目頭を揉んでいた。

「なー、ルシオラ？」

「ああもううるつきいっ！ 今集中してんだから邪魔しないの!!」

暫くちよこちよここと小屋の周りをうろつき、先程からは後に胡座を掻いて座り込んでいる忠夫の声が掛けられたが、ルシオラはそれをあつさり切り捨て勘九郎も無視してリドルを見つめている。

雪之丞は近くの地面に寝転がって熟睡中。

いかに自分が向いていないかを把握しているとは言え、一目みただけで放り出すのは如何な物だろーか。

ともあれ謎解きを開始してから十数分。

解けるどころか解法の糸口さえも見つからない状態で、いい加減に扉の前の二人も頭から煙を噴きそうな勢いである。

「なあつてばー」

「後で構つてあげるから静かにしてなさい！」

何処の親子の会話だろうか。

目線さえ向けようとせず只管頭を悩ませる二人を横目に、忠夫は溜め息つつつ小屋の裏手へと回つていく。

扉のある反対側からは勘九郎とルシオラの話し合う熱の籠った声が聞こえるが、どこにもこーにも進展は無さそうである。

それもその筈、仮にもドクター・カオスの作り出した、オカルト全盛期の頃の現代では失われた結界である。

実の所、もう一度ルシオラが今度は全力で攻撃を仕掛ければ確実に小屋は吹き飛ぶ。だが、その場合中身も吹っ飛ぶ。

そんな事実は知らないが、勘九郎も流石に弑号を使用させる気は無い。

自然破壊は地球に優しくないから。

後で依頼者に何やかやと言われるのも、この国の政府に難癖付けられるのも嫌だし。どちらが建前でどちらが本音かは言うまでも無い。

「解かなくてもいいじゃん」

そう呟いた忠夫は、小屋の壁際に向かって座り込む。

霊波刀を展開しつつ、それを変形、霊波扇に。

「へっほへっほへっほ」

妙な掛け声かけつつ、ちやかちやかと動き始めた。

「！ ドクター・カオス！ 結界付近に残したセンサーが・侵入者・感知！」

「・・・馬鹿な。早すぎやせんか？」

小屋の中に置いてきたセンサーポッドからの連絡が、二人の間に緊張感を生んだ。

生まれてこの方千年間、天才の称号を抱き続けたドクター・カオスの作り出した時間稼ぎのリドルを、ものの十数分で解く。

こうなつてはもし解けたら、と律儀に残してきた行き先を示す地図が仇となる可能性が高い。

目的の物を手に入れることが出来たが故の嬉しさから、ちよつと油断しすぎたようである。

計算では諦めるか小屋ごと結界の限界を超える力で吹き飛ばしてしまうか、若しくはそれなりの時間をかけて素直に謎解きをクリアーするか、だったのだ。

勿論、その頃にはその地図が示す場所からとつとと退散している予定である。

「こうなれば・・・いつその事、魔族と標的を克ち合わせるか・・・？」

「・・・あの・ドクター・カオス？」

「いやしかし、それでは目的が達成されたか分からんし、接近しすぎるとも危険、か。θを連れて来なかつたのが悔やまれるのう」

ぶつぶつと思案の中に沈んだカオスに、マリアが早い口調で淡々と告げる。

「・・・報告・します。侵入者の・霊波調・データベースに・該当・一件」

「ともあれ先ずは対策を考えん事にはいやまてよ該当が……なにイツ?! 本当かマリ……ア……?」

報告の口調に違和感を感じる間も無く流したカオスだったが、続くデータベースに該当ありの報告で漸く我に帰る。

だがしかし、驚きつつも振り向いた時には、既にマリアの姿は無く。

盛大にブースターを吹かしつつ、ロケット花火のようにかつとんで行つた愛娘の残した煙だけが、無情に風に吹かれて散っていた。

「この行動……あやつか! またあやつ絡みかつ!!」

カオスの許可も無くあつさり姿を消し、尚且つその制止する間もない素早い行動パターン。

原因をその頭脳ではじき出したカオスは、全力で小屋の方に駆け出しながら、ちよつと寂しく叫んでみた。

「マリアに手を出そうなどと、1000年早いぞ小僧おおお!!」

間に合うか否かは置いて、どちらかと言うとマリアが手を出す方なのは秘密である。

「犬なのね」

「犬ねえ」

「犬だな」

「喧しいわおのれら！ 狼やっちゅーねんっ!!」

騒ぐ彼らの手には、1枚の地図があった。

その真ん中であからさまに自己主張する×印と、少し離れた場所にありがたいことに日本語で書かれた「現在地」の3文字。

そしてふと目を小屋があつた場所に戻せば、そこにあるのは長さ2M程の地面を横に掘った跡と、それを中心に真つ二つに割れた小屋。

小屋の中心には巨大な穴が空いており、それを中心に無理矢理引き裂かれたような無

残な様相を呈している。

「だって、穴掘りでしょ?」

「しかもこの短時間で・・・これよ?」

「犬じゃねーか」

「狼っ!　じーんーろーうっ!!　ここ大事!　それ俺のアイデンティティーだから!!」

さつさと一人で横に回り込んだ忠夫は床下を探った。

木造建築、しかも掘つ立て小屋よりはマシ程度の建物である。

当然ながら多少の隙間が床にもある。

だが、正確に言えば空間と言うよりも隙間程度の高さしか持たない其処に入るのは、無理だった。

そこに小さく細くした如意棒を捻じ込み、後は一気に巨大化させればアラ不思議、真ん丸い天窗の開いた小屋の出来上がり、である。

ちよつと大きくしすぎた所為か、それとも小屋が貧相だったのが悪いのか。

勢いが着き過ぎで真つ二つになってしまったが。

だから忠夫は穴を掘り、床下に潜り込んだわけだが、それがどーにもこーにも真面目に謎解きをしていた二人には納得がいかないようであり。

「人狼関係無いじゃない。犬も歩けば棒に当たるって訳?　・・・ハンツ」

「鼻で笑うなあっ!! 大体そつちが何時までも解けないから悪いんじやねーかつ!!」
「そんな事言つたつてどーすんのよ、これ! 真つ二つよ真つ二つ! 家主が帰つてきたら大変じゃないっ!」

「一番最初に纏めて吹っ飛ばそうとした奴が言う事かあああああああつ!!」
「もつとも。」

「おーい、置いてくぞー」

「やれやれ。犬も食わないわよねー」

「狼だつつてんだろーが!!」

「ちよつと、どー言う意味よそれ!」

微妙に方向性のずれた突つ込みであるが、一人寝かけていただけの雪之丞は威勢良く歩き出しているし、勘九郎は勘九郎で少々呆れた様子ながらもしっかりと地図を睨みながら先導している。

慌ててその後を追いかけたルシオラと忠夫であった。

先を飛んでいくルシオラを追いかけて早足で歩く忠夫。

が、その歩みは3歩進んで止められる。

小さな、本当に小さな音が、忠夫の横手から響いた。

まるで撃鉄が起こされたようなその音に反応し、素早く振り向いた忠夫の背後から、

空気を引き裂き迫る何か。

全く気配が無かった所為か、殺気も襲撃の緊張感も無かった所為か、ともあれ対応は一瞬遅れた。

遅れた一瞬は取り返せない。

その二つの物体は、派手な音とワイヤーを引き連れて忠夫に直撃したかに思えた。

だが、忠夫が感じたのは、衝撃でも爆発でもなく――

「目がっ?! 目が潰れるううっ!!」

「・・・? 想定外の事態・発生」

がっちりと眼球の辺りに指先を食い込ませる、柔らかくて暖かい筈の細い指先であった。

ワイヤーを巻き上げながらゆっくりと歩み寄ったその両手の持ち主、マリアは、予想とは違う反応に戸惑いつつも作戦通りにキーワードを告げる。

注意を引く為に動かしした結界監視用のセンサーとのリンクを切りつつ、耳元にそつと囁いた。

「だ・れ・だ?」

「んぎよわああああっ!!」

ワイヤーが牽引される勢いも手伝って、更に食い込んだ痛みが脳髓を直接抉るような

痛みだ。

その悲鳴を最後に、忠夫はぴくりとも動かなくなる。

「・・・横島・さん・」

返事が無い。

今度こそ屍かもしれない。

「横島・さん・・・？　これは・早急に・蘇生措置が必要・なのです」

何かを期待する表情から、一気に無表情に変わった彼女は、一見冷静に見える。

だが、きよろきよろと周囲を見回し、おたおたと忠夫の息を調べたり手のひらに人と三回書いて飲み込む動作をしたりと言う所を見ると、どこも混乱真つ最中のようである。

「・・・緊急事態・ですから。そう・緊急・なのです。つまり・ノー・プロブレム」

おもむろに倒れこんで白目を剥いている忠夫に覆い被さり、ゆっくりと目を瞑って接近する。

意味も無く出力が上昇したり、何となく現在の状況を忘れていると思考回路が判断していたりするが、全てエラーと一括処理。

ただ全ての能力を持って、目標に到達する事を最優先事項に設定。

「いき・ます・・・！」

頬の触覚センサーに当たる忠夫の吐息が、否が応でも何と言うかこうある筈の無い色々な感覚とか情熱とかむやみやたらに一杯一杯さ！

しかし、そこで黙っていないのがお約束と言う奴で。

「……う、ん」

「……。……。……。……。……。……。もう・一度・必要だと・判断します」
「ななななな、何やってんのよその痴女おおおつ!!」

「……む? むむむむむーっ!! ぶあつ?! ま、マリア?! え、何事?! 此処は天国俺死んでますかっ?!」

「……。駄目・です。まだ・治療が・必要・です」
「むおっ?!」

「ああああああああああああああつ!!!」

忠夫の悲鳴を聞いて戻って来たルシオラであったが、何せ見たのがいきなり探し人と謎の女性のアレなシーンである。

ぶるぶると震える指先で、羞恥と本人にも良く分からない怒りで感情が一気に限界を突き破り、故に眼前の光景をこれまた何だか良く分からないばらばらの思考で硬直した

がら見てました。

一部始終を。

じつくりと。

見てしまったのです。

「……(ぎ)馳走・さまでした」

「……はうあつ?! あ、いいえ此方こそ結構なお手前で実に幸運と言うかでもあれなん
でマリアがああもう訳わかんねえけどもかくありがたやありがたや……」

やがて何だか傾き始めた太陽の光を受けて銀色に光る何かで繋がっていた二人が離
れ、頬を染めつつ座り込んだまま自分の膝を見つめるマリアと、正座して向かい合った
まま土下座の如く頭を下げる忠夫がいた。

マリアの方はしつかりと自分の行動を把握しているように見えるが、忠夫は完璧に魂
が抜けた様子である。

もじもじと上目遣いで、互いに何となく正座したままの状態で見上げてくるマリア。
混乱の極地に置かれ、もう何が何だか分からないけど何だか色々危険な死亡フラグ
がちらちらと垣間見えているような気がする忠夫。

そして、瞳に何だか暗い炎が灯っていて、更に両の掌に怪しいオーラを漂わせている
ルシオラ。

「だっ！」

「だ？」

「大怪球四号ううううっ!!」

両の掌に作り出された危ない雰囲気をピンピンに漂わせていたそれは、ルシオラの手の中で握り潰され形を変え、投擲と同時にそれぞれが4個に分裂。

計八個のそれは、未だに放心状態の忠夫を容赦無く直撃し、高くたかーく、ジャングルの上空に打ち上げましたとき。

その後、なぜか涙目のルシオラに左足を、そのルシオラにめつちや睨まれつつも何処

か幸せそうにほけつとしてゐるマリアに右足を引き摺られつつ爆音に驚いて戻つて来た勘九郎達と合流。

何があつたかと聞くも、ルシオラに物凄い殺気の籠つた目で睨まれて思わず二人が魔術を使つてしまつたとか、息を切らせつつカオスがその異様な雰囲気の中に乱入し、散々GS試験で痛い目見させられた勘九郎がちよつと蒼褪めて雪之丞の背後に隠れたり。

終いにはマリアの様子で何があつたのかとしつこく聞いたカオスに対し、マリアが、頬を赤く染めつつ。

「堪能・しました」

と言うに至つてお父さんブチ切れ。

つーかマジ切れ。

無言で気絶したままの忠夫にあからさまに怪しい液体を飲ませようとしてみたり、ルシオラが目だけが笑っていない笑顔で親指を下に向けたり、呆けたままのマリアが行動を起こさず虚空を見上げて幸せそうに溜め息をついてばかりなので決死の覚悟で止めに入った雪之丞がボロボロになる一幕があつたものの。

「・・・なんでこうなるのよ。私は普通に依頼を片付けたいだけなのに・・・」

勘九郎の悲哀を籠めた言葉が夕闇に紛れながらも、総勢6人の面子が合流した訳であ

ります。

「・・・離れなさい」

「ノー。それは・拒否・します」

「ごぞおおおおお・・・！」

「・・・」

修羅場。

と、目が覚めたのに怖くて目が開けられない忠夫がガタガタ震えそうになる身体を必死で押さえ込む、そんな熱帯雨林の夜が来たのであった。

「あな、た？」

「目が覚めたかい？ 心配したよ」

「此処は・・・私は何で・・・それに、あなた、仮面が」

「さあ。時間移動に失敗したんじやなかったのか？ ドクター・カオスが暫くその力は使わない方が良いつてさ。これも彼のお陰、かな」

「・・・駄目。あの子が、危ない・・・」

「それこそ駄目だ。今の君じや、僕は安心して見送るなんて出来ないからね。・・・何が あったんだ？」

「・・・分からない。何も、覚えて、無い」

「それなら、今は眠る事だよ。それから一緒に考えよう？」

「ごめんな・・・さ・・・」

「お休み、今だけでも、ゆつくりと——良い夢を」

「・・・う、あ。その言葉・・・何処かで・・・聞いた・・・筈・・・あ・・・」

「・・・ふう、寝たか。やれやれ、まだまだ町は遠いな」

第陸拾四話。

「何だかねえ、雪之丞？」

「あん？」

無言で前方を歩く3人と、氣絶した振りのままで引き摺られている一人を見ながら、勘九郎は横を平然と進んでいる雪之丞に問い掛けた。

山籠りは伊達でなかったらしく、結構な距離道無き道を進んでいるにもかかわらず、雪之丞の顔に疲れは見えない。

何時ぞや忠夫と勘九郎に息を切らしながら追いついてきていた時よりも成長した弟子にほんの少しだけ寂しさと、それを超える頼もしさを感じつつも表情には出さない言葉にもしない。

訝しげに此方を向いた雪之丞に、まだまだ超えられない壁で居る事が兄弟子の役目、と心の片隅で考えつつ、勘九郎は口を開いた。

「私って、実はキャラ薄いのかしら？」

「心配すんな。今回の面子と相性わりーだけだろ」

「あと、あんたも今回薄いわよ？」

「ほっとけ。つかあの連中の中に入ってたら、正直、身が持たん」

まるで自分が常識人のような、全く自覚の無い台詞であった。

ただ、呆れた視線と後頭部にかかる縦線だけは、それが本音であるとしつかり主張はしていたが。

「ふむ、こつちじやの」

「・・・離しなさいよ」

「ノー。拒否・します。むしろ・貴女が・邪魔です」

「聞いとらんだろお前ら」

一人ざくざくと一番前を歩くカオスの眩きも、後方の二人にとっては関係の無い事のようにある。

互いに視線を合わせないまま、前だけを見つめて歩いていく。

時折後方斜め下で痛そうな音が響いているが、既に意地の張り合いに近い状態に突入している二人の意識の外。

死んだ振り継続中の忠夫も悲鳴も上げられずにされるがままである。

未だにさつきのマリアのドアップとその行動に思いつきリリースしている忠夫は、まだまだ再起動には至っていない。

ただ只管に痛みを堪えつつ、混乱と心臓の16ビートが収まるのを待っている。

ルシオラは気付いていないが、センサーで忠夫を調査できるマリアにとっては完全にお見通しなのだが、むしろマリアもどんな行動を取ったら良いのか結論が弾き出せていないので突っ込まない。

そこまで動揺するほどの出来事だったと彼に捉えられていると解釈し、かなり嬉しかったり気恥ずかしかったりしてはいるが、基本的に無表情のまま。

「・・・小僧。月の無い夜には注意せーよ」

殺気と言うよりもおどろおどろしい負のオーラに塗れたカオスの言葉に、ちよつと体が震える忠夫であった。

死んだ振りをいつそ殺してくれと思ひながら続ける忠夫、心の中は色々切羽詰つてい

る。ぶつちやけ、久し振りに会つたマリアがあそこまで情熱的だとは思わなかつたし。

いや、嬉しくないと言えはつきりきつぱり嘘になる。

忠夫だつて若い男、欲もあれば本能も、ある。

だがしかし、武士は食わねど高楊枝。

あと本能が「それはヤバイつて！ バレたら死ぬつてマジで！」と最大級の警報を鳴らしているのだ。

誰に、とか何が、とか、本人も色々突つ込みたい警報なのだが、今の状況を見るとあながち軽視も出来ないのであつた。

「マリアと・横島さんは・固い絆で・結ばれていますから・離れなくても・良いと判断します」

「何よ、その絆つて」

「具体的には・私との間に・娘が・4人ほど」

事態は加速度的に悪化中——!!

無表情の筈なのにどこか勝ち誇つた雰囲気を見せるマリアと、油の足りない機械のような動きでゆつくりと振り向くルシオラ。

無論、視線の先には目を瞑ったままで滝のような汗を流している忠夫が居る。

「タダオ……？　ちよつと聞きたいことが在るんだけど」

「……………」

ぐい、と足を引き摺られて一本釣りのカツオの如く浮いた忠夫の胸倉を掴む魔族の少女。

顔を背けてしかし往生際も悪く目を瞑ったままの忠夫は、冷や汗だらけになりながら、だが、決意を籠めて目をゆつくりと開いた。

「何でございましょうかルシオラさん」

低姿勢であった。

敬語であった。

駄目であった。

あんまり痛くないでね、と半ば以上諦めの入った表情で、それでも引き攣った笑顔を浮かべた忠夫を胸倉掴んで吊り上げながら、ルシオラは絶対零度のオーラを背負って呟いた。

伏せた顔からチラリと覗く、殺意に満ちた視線がなんとも素敵である。

「あなた、アンドロイドと子供作れるくらい節操無しなのかしら？」

「うむ！　非常に残念ながら全くそー言った事はしてない清い身体ですが！　そこんと

こどーなんでしようマリアさん!? 後もうちよつと冷静になつていただけると俺が幸せですルシオラさん!! ちなみに全部で五人娘だあああつ!!」

「何時でも・どうぞで」

「ぶふおつ!!」

につこり微笑んで告げられた言葉に前方を歩いてきた老人が吹きだしたが、最早誰も構つてられない。

思わずふらふらと両手を伸ばしてそつちに行き掛けた忠夫が、超至近距離から吹き上がる膨大な魔力に中てられて逝き掛けた。

恐る恐る視線を向ける。

——シぬほど後悔した、と後に彼は語つた。

笑顔の裏に死神がダース単位で見えたそうなの。

「・・・ルシオラさん?」

「ねえ、タダオ?」

「ヒヤインヒヤインヒヤイン!!」

既に胸倉から首に移つた両手が万力のような力で締められていくのを必死で押し止めながら、彼は悲痛な悲鳴を漏らした。

「・・・こんのつ! 不埒者おおおおつ!!」

一瞬でしやがみ込んだルシオラの姿が視界から消え、次の瞬間、顎が砕けるかと思うほどの衝撃が真下から突き抜けた。

背景に「JET!!」と言った感じの文字を幻視しながら、月の登り始めた夜空を歩く半人狼が一人。

放物線の頂点に達し、重力に引かれて落ちてくる彼を見上げたまま、ルシオラはボソリと呟いた。

「・・・ううー」

訂正。

何やらうめいた。

まるで大切な玩具を取られた子供のような、潤んだ瞳と何処と無く稚気のある雰囲気。で。

ごしごしと顔を腕で擦った彼女は、ちよつと驚いたような表情を作っているマリアを一睨みした後、おもむろに勘九郎を手招く。

渋々ながらも近づいてきた彼の耳を引っ張り、目一杯背伸びして、その耳元に囁いた。始めは痛そうにしながらも、その呟きを耳にした勘九郎の目が光る。

——キュピーン。

何を感じたのか、その輝きを目にした雪之丞が魔装術を纏い、一瞬でカオスの背後に

隠れた。

「・・・いいのね？」

「いいのっ！」

「・・・何でワシの後ろに隠れる？」

「おつさんが苦手みてーだからだよっ！ それより、止めた方が良いぞっ！」

自分より低い所にある頭から生えた角を鬱陶しげに手で退けながら、カオスは雪之丞の声がかげられた先を見る。

自由落下から地面に熱く受け止められる直前にルシオラに捕獲された忠夫が居た。

そして、彼女の横で膨れ上がる何か。

「——ふんぬっ！」

掛け声一つ、勘九郎はその膨れ上がった何かを全身に行き渡らせ、気合一つで——

「・・・さあ、準備OKよ」

——パンツだけになった。

「逃げろ、横島あああああつ！ そいつ、マジだああああつ！！ 食われるぞおおおつ

!!!」

「ふ、ふふふふふ・・・別の女に奪われるくらいならいつその事、奪われちゃいなさい！」

「え?! いきなり貞操の危機?! むしろばっちカモ・・・ふおあああああああ!!!」

大地を揺るがす勘九郎の雄叫び。

迸る霊力が辺りの木々を碎き、彼を中心にしたクレーターを作り上げる。

「・・・あ、あれ?」

ちよつと脅かして、憂さ晴らしついでに反省を促そうと思つていたルシオラは、目の前のソレがもしかして手に負えないほど危険な物ではないか、と今更ながらに気付く。

だが、時既に遅し。

——暴走・開始。

「勘九郎・・・やっぱり濃いよ、てめえは・・・!」

「ひ、必殺っ! サイキック猫騙しいい!!!」

真つ暗なジャングルに、忠夫の必死さ全てが籠つた閃光が炸裂した。

「おーおー、ド派手にやつとるのお」

「まあ、色々とストレス溜まってたみてーだからなあ」

視線の先では、薄暗い月光の下でも分かるほどの勢いで木々が倒れ、多くの生き物が奏でる命の囁きを掻き消すには十分過ぎるほどの轟音が引つ切り無しに響いている。

今回は被害者でなかった雪之丞と、そもそも範囲外なカオスは何をやるでもなく適当な木に背を預けて立っていた。

ふと、雪之丞の視線がカオスに寄り添うように立っているマリアに向けられる。

どこか楽しげに微笑みながら観客になっている彼女を見て、僅かな疑問が頭を擡げた。

「良いのか？」

「ノー・プロブレム」

先程までルシオラと張り合っていたとは思えないほど柔らかな口調で、僅かな笑みさ

え伴ってその言葉は放たれる。

「・・・取られるとは思わんのかの？」

視線は空を見上げたまま、カオスがポツリと呟いた。

言った後で後悔したように頭をがりがりと搔いてはいたが。

「相手は・まだまだ・子供・ですから」

気楽に騒動を眺めていた雪之丞と、頭を搔く手を止めたカオスが驚いた様子で目を向けた。

「最後には・私が・勝利・します」

「・・・まあ、神魔族の見た目と実年齢が同じとは思わんが、のお」

「それにしたって随分と余裕だな」

雪之丞の呆れが多分に含まれた言葉に、スムーズに、ぎこちなさの欠片も無く、マリアは軽くウインク一つ。

「マリアは・年上の・綺麗な・おねーさん・ですから」

「存在年数がワシより年上の娘っちゅーのがなあ」

「幾つだあんたら」

今度こそ呆れだけが籠められた言葉を、マリアは綺麗な笑顔で黙殺した。

暫しの沈黙が蟠り、視界に一瞬閃光が走る。

それを眺めていた雪之丞の耳に、よっこいしよ、と言うカオスの呟きが聞こえた。

横目で見れば、苦々しげな顔をしながら背中を預けていた木から身を起こすカオスが見える。

「やれやれ、爺臭い台詞を吐いてもうたわ」

「爺じゃねーか」

それもそうじゃの、と笑い出したカオスに釣られるように、雪之丞も身を起こす。

「さて、どーすつかなあ」

「ほつといてもえーんじゃないか？ 奴らのねぐらはあつちじゃからのう」

マントを翻し、カオスは懐を探る。

取り出した鉄仮面を真剣な瞳で見つめつつ、何度も振り返るマリアを促し歩き始めた。

未だ騒音が聞こえる方とは、反対の方角に。

「おいおいおいおい！ そつちじゃねーだろ！」

「ふん、最早こうなつてしまつては問題なかる。どーせ有耶無耶の内に片付くに決まつとる」

「動体・靈波センサー・反応あり。横島さん達に・接近中」

「ほーれ。トラブルがあつちから寄つてきおる。ワシ等がおらんでもケリはつくわ。

ち、無駄足を踏んだか」

肩を竦めるカオスに納得いかない様子で詰め寄りながらも、雪之丞はそろそろ始まるであろう闘争に意識を持っていかれている。

引き止めるか、それとも参加を急ぐか、と迷った隙に、カオスはブースターを吹かせ始めたマリアに引かれ、夜空へと登り始めていた。

「おいこら待て爺っ！」

「——伝言を頼むぞ、魔装術使いの小僧」

既に密林の頭を抜け出したカオスから、そんな言葉が飛んできた。

続けて罵詈雑言を投げつけようとしていた雪之丞は、思わぬ威圧感に動きを止める。

「……ワシが『消した』のは、極々最近の未来の因果。何か、起こるぞ。でかいのが」
「あん？」

「嵐の前の風すら無く、誰かが悟る気配の欠片も見せず、僅かな前兆さえ許さず……世界が震える『何か』が来る。油断はするな。そう伝えるんじやぞ。良いな？」

その言葉を皮切りに、マリアの放つ光が勢いを増した。

問い返す間も無く一瞬で小さな点となった二人を見上げながら、雪之丞はその言葉を反芻する。

見送った雪之丞は、ゆっくりと両手を広げ、ぶつけ合った。

「何とも——」

ぱん、と大きな音を立てて打ち合わされた手のひらと拳は、微かな震えを示している。恐怖ではなく、増してや緊張でもない。

「——楽しそうな伝言だな」

己の力を存分に発揮できる機会に恵まれた者の、それは武者震いと呼ばれる反応だった。

獯猛な獣、そのものの笑みを浮かべて血を滾らせる。

その熱さを堪えられないと言うように、堪らず魔装術を纏った雪之丞は、手近な闘争に向けて駆け出した。

「楽しそうな預言じゃねーか、おい!!」

そう、大きく吼えながら。

一方その頃。

「HOおおおHOHOHOHOHOHOHOーっ!!」

「きゃーっ! こっち来ないでよおおおっ!!」

「馬鹿たれえええっ!! お前がそもそもの原因だろうがあああああ!!」

森を気にすら掛けずに破壊しながら、男女と恐怖の大王が掛けていた。

ぎらぎらと目を輝かせる勘九郎に対し、二人に出来るのは逃げる事だけ。

振り向くな、奴が来る。

背中を見せるな、奴が来る。

風より早く、奴が来る。

壁は蹴り抜き、障害は蹴散らし、邪魔する者は殴り飛ばし。

——アイツが、来る!!

「来るなああー！」

流れる涙は風に吹かれて後方へ。

怪笑を上げる勘九郎は、頬に付いたそれを人差し指で一搦い。

ぺろりと舐めて、更に加速。

だが、事態は思わぬ方角へ。

『餌エサえっさー！ 繁殖繁殖ー！』

土煙を跳ね上げながら駆け抜けた忠夫とルシオラ、そしてそれを追いかける勘九郎の間に、巨大な8本足の何かが落ちてきた。

「邪MAあっ!!」

勘九郎の魔装術も使っていない拳に殴られ、空の彼方へ消えていった。

「うそおっ?!」

「てか今の何だおいつ!!」

これだけの面子に——いや、それ所では無いのだろうか——悟られず接近した無音の移動術。

ちらりと見えた八本の足と節で区切られた体。

恐るべき捕食者、蜘蛛の姿をした妖怪であつた。

ある種は糸を吐き巣を創り出す罫の名手。

ある種は毒を持つて時には鳥獣さえも一噛みで殺す無音の死神。

ある種は空気の動きすら感じ取る昆虫達に忍び寄り、姿からは想像も出来ない敏捷な動きで捕食する暗殺者。

その姿は見る者に恐怖と嫌悪を呼び起こす、生まれ持つてのハンター。の、筈であつた。

『キシヤ——』

「うきやああつ!! 蜘蛛おおつ!!」

ルシオラが突き出した掌から生まれた力の塊が、森林の一部ごと先回りをしてしまつた哀れな捕食者達を消し飛ばす。

原型に蛩の要素をもつだけに、捕食者たる蜘蛛が苦手なのかもしれない。知れないが。

「蜘蛛、クモ蜘蛛くもクモ……。いやあああああああ!!!」

撒き散らされる破壊と爆音。

吹き飛ぶ木々、逃げ出す動物、碎ける自然。

ついでに巻き込まれる忠夫。

「・・・お、落ち着け、頼むから落ち着けルシオラ」

「KAHあああああああああ」

「ひいつ?！」

吹き飛ばされて落ちてみれば、そこにはもう一人の捕食者が。

爛々と怪しく目を光らせる勘九郎の口元からは、白い煙が零れるように湧き出している。

「イタダキ! マス!!」

「い、頂かれてたまるかあああああつ!!」

跳躍一閃。

飛び上がった勘九郎は、忠夫が投げつけた石礫を軽く回避し覆い被さるようにその上に。

「甘〜!」

だが、それは当に布石。

跳躍した勘九郎は空中で身動きが取れず、ただ初速で弾道を描きながら進むだけ。

突き出された如意棒を交わす事は出来ない!

「GOHOOOOOO!」

「うぞおつ?！」

いや、それでは間に合わない上に、あの状態から逃げ出せば、最も危険な体勢で追いつかれる可能性が大。

何せあちらは着地即加速が可能であるのに対し、こちらは立ち上がり、その上で加速しなければならぬのだから。

勿論、背後を見せるかすぐさま押し倒されるような不安定な後ろ向き体勢で、だ。

ともあれ、今は無駄な思考を走らせている場合ではない。

今、この状態で出来る事を・・・！

僅かな、ほんの僅かな思考の後、忠夫は思いつきり息を吸い込み、胸から上しか視界に入らないほど接近していた勘九郎に、それを叩きつけた。

『——オオオオオオン!!!』

「Gう?!」

退魔の咆哮。

恐怖と焦りから集中に乱れが生じたとは言え、高密度に変換された靈氣を叩きつけられた勘九郎の身体は拮抗するように落下を止める。

超至近距離で直撃を受けた勘九郎の表情が、魔装術の下で苦く歪んだ。

ほんの、1秒も無いほどの時間、その拮抗は続き、そして再び落下を始める。

その僅かな瞬間が、忠夫をギリギリで救ったのだ。

「——いい加減に落ち着きやがれクソ兄弟子いいいいっ!!」

救いの手は、魔装術を纏った雪之丞の飛び蹴りだった。

轟音に耳を揺らされ、衝撃で意識を散らされ、周囲の把握を忘れていた勘九郎はモロに喰らつて横合いの森へと突っ込んでいく。

一回転して着地した雪之丞は、しかしそれを見つても全く油断する事無く構え直した。

「こ、心の友よーっ!!」

「油断すんじゃないやねえっ! あいつがあれで終わる訳が無いだろうがっ!」

その通りであった。

砕いた木々、散った茂みを踏みにじりながら、暗闇の奥から奴が来た。

「今のは、ちよつと残念だったわね」

「くっ!」

「流石にしぶてえな!」

魔装術を解いた勘九郎は、その肉体美を誇るかのようにびくびくと上腕二等筋を動かしながらゆつくりと歩いてくる。

勿論、魅せる為に魔装術を解いたのは言うまでも無い。

「あらあら・・・3 (PI——) だなんて、今日は贅沢ね」

「く、使い古されたネタだけに突っ込むのは俺のプライドが……!」
「くだらねえ事に拘つてる場合かっ!」

至極最もな雪之丞の言葉に、忠夫は2M程の長さに戻した如意棒を構える。

先端を下に、両手で重心を捉えつつ、全身の力を適度に抜いてどんな行動にも即座に反応できるように。

「先手必勝!」

最初に動いたのは雪之丞。

左手に靈力を籠めつつ、振りかぶった右手で殴りかかる。

初撃の靈波砲で牽制しつつ、懐に飛び込んで乱打戦の構え。

「FHUUUUUUUUUUUU!!」

応じて魔装術を纏う勘九郎。

目の錯覚か、まるで顔を覆う部分が本物の鬼のように生き物じみた動きを見せているような気がする。

左足を半歩引き、牽制の一撃には目もくれず乱打に一撃を持って対抗する為の力を拳に籠める。

「やられてたまるもんかああああ!!」

次に動いたのは忠夫。

飛び出した雪之丞の動くラインから直角に飛び出し、後方に回り込んで挟み撃ちを狙う。

「蜘蛛は絶滅しなさいいいいいっ!!」

そして、最後に動きを見せたのは、いきなり上空に飛来したルシオラだった。

動く物は全て蜘蛛。

見敵必殺サーチアンドでえすとりおい。

「え?」

「UHO?」

「ちよ、待——」

動き始めていた3人を、反撃のしようも無い上空から爆撃。

一切の情も無く、悉く、平等に、万遍無く破壊を撒き散らす。

狂乱の力は差別しない。

それはまさに、一人だけ種でドーピングしまくった最高LV勇者がメダ○二に掛かり、遊び人3人に襲い掛かる様その物であった。

次の瞬間、この日最大の爆炎が森の一角に吹き上がった。

『この度は、当ナルニア航空をご利用頂き、真にありがとうございます。日本まで——』

「大丈夫かい、美智恵」

「ええ、大丈夫」

最終便でナルニアを離れた二人は、機上の人となっている。

幸いにも妻が持っていたパスポート——時間移動の際には外国まで行く可能性もある為、身分証明書代わりに常備している——のお陰で、手続きもスムーズにこなせた。

夫の背中に負われて眠っていたとは言え、目覚めてまだほんの少ししか経っていない。

それでも、一刻も早くと急ぐ彼女の容態が心配で、離れる事は考えられなかった。窓の外を苛立たしそうに眺めながら、それでも疲労からか冷や汗を流している妻に冷たいタオルを渡そうか、と添乗員に声をかける。

笑顔で了承し、引き返していったのを見送りながら振り向けば。

何故か、妻が変な顔で窓の外を指差して硬直していた。

「ど、どうした?!」

「あな、あなた!」 窓の外に老人と女性が黒くてロケツトみたいなマントで火を噴きながらっ?! しかも、わら、笑ってたの! 無表情で片方が笑ってたの!」

窓の外を眺める。

月明かりに照らされた蒼白の雲海が広がり、輝く星々がちらちらと瞬いている。

綺麗な、何の変哲も無い夜空だった。

「・・・上空何KMだと思ってるんだい?」

「だ、だって! 本当なのよ! 飛行機追い越してすっ飛んでったの!」

優しく肩に手を置き、宥めるようにそっと抱きしめる。

少ないとはいえ他の乗客も居り、なんだなんだと視線が集まってくるのを感じつつも酷く動揺している様子の妻の背中を、何度も何度も慰めるように撫でた。

「——疲れてるんだよ。眠った方が良い」

「本当なのがいいいいいいっ!!」

溜め息一つ。

カオスから貰ったペンダントを握り、一瞬だけテレパスを完全に封印していた力場をカット。

問答無用で眠くなれと叩き込んだ。

どうも未だ混乱から立ち直っていないなかつたようだと結論付け、くたりと倒れこんだ妻をそつと傾けた狭い椅子に寝かせて毛布を掛ける。

何事も無かつたように笑顔で濡れタオルを持つてきてくれた添乗員に礼を言い、魔されている彼女の額に静かに乗せた。

ひと息ついて、ふと、視線を感じて見回せば、不思議そうに二人を眺める同乗者たちの視線がある。

曖昧な笑みを浮かべつつ無言で頭を下げると、気にするな、と言う仕草をして、それぞれの行動を取り始める。

「……人の目のある所でも大丈夫って、何時以来かな」

小さく呟いて、さて魔されない為にはどんな楽しい夢を見せれば良いのかな、と悩みながら、幸せそうに甲斐甲斐しく面倒を見始めるのだった。

第二部エピソード。

——『陳腐で使い古された使い回された擦り切れた台詞だが』——

「——今回の報告は、以上になります」

「ふむ。するつてーと、何かね？」

満面の笑顔——ただし、包帯で覆われたその下だが——で答えられているだろうか？不安になりながら、引き攣りそうになる頬を押さえ込む勘九郎。

対面に座るナルニア支局長——横島大樹は、引き攣った口元を隠そうともせず、背後の叫び続けているTVを指差した。

『ご覧下さい……！ 凄まじい有り様です！ 我が国の8割を占める森林、その約5%近くが一夜にして無残な有り様となっております……。専門家によりますと、超小型の隕石説やあるいは大規模且つ極所的な地盤変動、はたまたオカルト的な超常現象の可能性など——』

ヘリコプターの羽音も煩い映像の中、蒼褪めた顔のリポーターの眼下にはすり鉢状に

抉れた大地が見渡す限りに続いていると言う、ある種CGでも使っているんじゃないかと言いたくなるような現実が広がっていた。

勘九郎にとっては気不味い沈黙が蟠り、額に幾つも血管を浮かべさせた大樹は眼の笑っていない笑顔でひたりと視線を固定させる。

ややあつて、ゆつくりと切り出したのは大樹だった。

「あれが、全部その『見るも恐ろしい、触覚を持った8本足の巨大な妖怪』のせいだど？」
「……え、ええ。まあ」

笑みを消して半眼で睨み付ける大樹から思わず目を逸らしながら、勘九郎は冷や汗混じりにそう答えるので精一杯だった。

——『神は天にましまされども全能ではなく、悪魔は地の底に巢食えども』——

「ま、問題ないって」

「そーねー」

底知れぬ大樹の圧力に胃に穴が空きそうな思いで勘九郎が耐えているその隣で、ジューズを啜りながら戸籍上の親子が呟いた。

部屋の隅ではルシオラが膝を抱えて暗いオーラに纏わり付かれており、時折誰かに謝る声やしよぼんと項垂れる姿、はたまた頭を抱えてじたばたともがく様と何とも愉快な——いや、哀れな様相が展開されているが、早朝から見慣れた3人は偶に視線をやるだけで、基本的に無視。

ジューズの底に残っていた氷を音を立てて噛み砕きながら、不思議そうに包帯塗れの雪之丞が問い掛ける。

「・・・問題無い事はねえと思うんだが」

何処と無く擦り切れたジージャンを羽織った忠夫が、傷一つ無い頬を掻き掻きのほほんとして返す。

「百合子さん、そつちの開発計画に問題でもあった？」

「答えはN o ね。レアメタル開発計画だからねー。山の方まで被害出てない見たいだし、インフラ整備の手間も少し省けたくらいかしら？」

「つー訳だ。依頼主側がこー言ってるし、むしろ俺達は妖怪退治のヒーローって事。黙ってりゃ、な」

「ま、ばれたら私達もこれから先が色々と不都合だしねー」

そう言つて、二人揃つてストローに口をつける。

「・・・腹黒い狸が二人かよ」

ちゅーごー、と、空になつたジュースを啜るストローがさもしい不協和音を響かせた。

—— 『悪魔が破滅を求めない。狂おしく情け深く荒々しく、だが真摯に停滞を受け入れる』 ——

日本、カオスの秘密基地。

「帰ったぞ」

「ただいま・戻りました」

音も無く開いたドアを通り、一際広いホールへと顔を出した二人に、部屋の中にいた小柄な影達が駆け寄った。

額にθの刻印が描かれた影がマリアに抱きつき、見ているものも釣られるような笑顔でマリアに優しく抱き返される。

その後をゆつくりと歩いて追いかけてきたδの刻印を持った影が、柔らかく微笑んで二人にゆつくり頭を下げた。

「お帰り・なさい・母！ ドクター・カオス！」

「ご無事で・何より・です」

「おお、シート、デルタ。ただいまじゃ。お土産もあるでな」

マリアに抱きついたままのシートとデルタの頭に軽く手を置き、その背後に目をやる。

駆け寄った二人から数歩ほど離れた所にいた二人へと、カオスの横をシートを抱き上げたままのマリアが歩み寄る。

「ただいま・二人とも」

「お帰り・母」

「お帰り・なさい」

空いた手が α の刻印がある少女の長い黒髪をゆっくりと撫で、背中に回りゆっくりと抱きしめる。

どこか素つ気無い風でありながらも、恥ずかしげにアルファは俯いた。

羨ましそうに指を咥えて眺めていた β の刻印を持った少女は、背後から頭を軽く2、3度叩かれ慌てて振り向く。

苦笑いを浮かべたカオスのマントの裾を掴みながら、ベータはその中に自分でそそくさと飛び込んだ。

腰に抱きつく少女の重みにやせ我慢で耐えながら、カオスは娘達を見回し楽しそうに宣言する。

「さて！ 今回のお土産を早速装着するぞい！ 総員ラボへ移動！」

『イエス・ドクター・カオス』

揃った返事を返して駆け出していた4人を眺めながら、カオスは懐から取り出した鉄仮面を隣に立つマリアに手渡した。

「ドクター・カオス。質問を・よろしいですか？」

「ん。なんじゃ？」

歩き出したカオスの背中を叩いたのは、何時もの事務的な声だった。

振り向いたカオスの目に、がらんどうの鉄仮面と睨み合うようにも見えるマリアの姿が写りこむ。

暫し迷うように視線を彷徨させた後、マリアはそれを切り出した。

「マリア達は・十分な・拡張性を持って・設計されています。しかし・それも有限。何故・これを？」

言葉を受け止め、重々しく頷いたカオスは、高すぎる為に薄暗い天井を見上げながら、小さな声で呟く。

何時もの自信に満ちたそれではなく、どこか迷うような響きで、それは広い空間に反響した。

——『聞こう。それを聞こう。故に君にこそ聞こう。君の為でなく、ましてや世界の為でもなく』——

「1つは、新たな通信・リンク手段の模索。妨害されない通信手段は、あやつらにも有益な物じやろうから、な。此処までは良いか？」

「イエス・ドクター・カオス」

「そして、もう1つ」

天井から視線をマリアに向けたカオスの瞳には、それまでの迷うような色など無かつたように、不遜なまでの自信と意思が籠っている。

「5人のメタソウルの共鳴による——マリア姫の魂へのアプローチ、じゃ。擬似的な精神感応による精神波の共鳴増幅、そして伝達。マリア姫の残滓を持ったメタソウル、可能かどうかはワシにして五分五分じゃがの」

五分五分と言いながら、その顔は絶対に成功させて見せると豪語していた。

半ば納得、半ば発想に呆れながら、マリアはふと悪戯っぽい笑みでもう1つだけ問い掛けた。

彼女も、何となく答えを了解していたようではあるが。

「では・娘達に・個性を持たせる必要も・成長を促す必要も・無いのでは？」

共鳴増幅を行なうというのなら、なるべく元の波長が同じであつたほうが効率は良い

し、何より増幅の値に歴然とした差が生じる。

その波長を変えうる自我の成長や、違いを生み出す個性の発現の可能性を持ったソフトは、必要無い筈である。

だが、マリアはカオスの向こうにちらちらと見える先に走っていった筈の娘たちが不安げな顔を見せているにもかかわらず、くすくすと口元を押さえて笑っている。

訝しげにそれを眺めていたカオスは、頭を掻きながら渋々その答えを口にした。

「・・・あれらもまた、ワシとマリア姫の大切な孫みたいなもんじゃからのお」

「了解・しました。何時か必ず・義父さんと・呼ばせて・見せましょう」

「何でそーなるかつ！ うおっ?！」

澄ましたマリアに不満の声を上げたカオスが満面の笑顔だったりそっぽを向いたり恥ずかしそうな、でも嬉しそうな顔であったりする孫達に背後から抱きつかれて潰される横を通り過ぎながら、マリアは軽い足取りで微笑んだ。

「こ、こら！ 重い！ 退かんかお前ら！」

「楽しい・と思います。幸せと・判断します。これからも・きつと——絶対に」

——『君は、それを、許せるのだろうか。訪い人よ、招かれた者よ、世界の……』——

僅かに肌寒さを感じる風を吹き飛ばし、積もり始めた枯葉を蹴飛ばし、二人はひたすら駆け抜ける。

許しは得た。

納得の行かない事が無くなった訳ではないが、いやむしろ隣を駆けるそいつが最大の不満ではあるが、今更なのでもう何も言わない。

ただ、置いて行くつもりで加速した。

「……ふふん」

僅かに引き離された彼女に向かって軽く振り向き、余裕たつぷり鼻を鳴らしてみせる。

それだけで相手は一瞬激昂した様子を見せ、瞬く間に併走状態へ。

更に速度を重ねて背中を見せて駆け抜けていく。

これが味噌。

本気で置いて行こうと思えば、瞬発力はともかくスタミナには自信がある此方が持続的に加速してやれば良いだけだ。

それを「敢えて」やらない。

やられたらやり返す、そんな気性の奴だと知っている。

ああ見えて、いや見たままなのかも知れないが、負けず嫌いだと分かっている。色々あったし結構長い間を過ごしている。

だが、だからこそ譲れない物もある訳だ。

「ふんっっっ!」

案の定、だ。

この勝負、勝った。

確信を持ちながら、振り向いた相手の横を今度こそその全速力で駆け抜けた。

一瞬呆然とした後、慌てて蹴り足に力を籠めた気配が伝わった。

「だが、もう遅いでござるよっ!」

既に此方は最大戦速。

振り向き、更に一瞬であろうと気を緩めた事で減速した彼女との距離は、あつという間に広がっていく。

場所はあちらも覚えているであろうが、先に辿り着いてさえしまえば此方の物、休まず駆け抜け掻つ攫い、そのまま蜜月を過ごすのだ！

「わーっはっはー！ 女狐は一人寂しく里で酒飲みに絡まれてろでござるーっ!!」

高笑いを上げつつ爆走する少女の背に背負われた小汚いリュックから、一匹の子狐が身体を出した。

呆れた目付きで前方の銀髪を眺め、やれやれと人間臭いアクションで肩を竦める。

遠く離れた場所で舌を出している幻術の写し身を消し、ふっ、と鼻で笑ってリュックの中に潜り込む。

狼の少女にかけて幻惑がきちんと効果を発揮した事には特に感慨も抱かず、邪魔な骨やら缶詰やらを放り出し、残った毛布を小さな手で何度か動かし、狭いながらも何とかスペースを確保する。

そのまま凝った身体をほぐしつつ、高笑いを鬱陶しく思いながらもーっ欠伸。ゆっくりと運送役の背中で眠りについた。

——『敵である者よ。我らシユレーディングが問おう。同じ名を名乗る4人が問おう』——

オカルトGメン日本支部。

夜遅くに起こった小規模な霊障を片付け、この一週間で何度目かのここでの朝日を見た西条は、暫しの仮眠と熱いシャワーの恩恵で半分ほどはすつきりした頭を撫で付けつつ、その部屋のドアを潜った。

先ず目に入ったのは、やたらと危なそうなマークの入った箱と、その回りに散らばる破れた吸引符。

次に目に入ったのが、数十名の制服を着込んだオカルトGメン達と、その真ん中でこちらに手を振る少女だった。

「おはよう、おキヌちゃん」

「もう「こんにちは」の時間だと思えますけど?」

くすくすと笑う少女に誤魔化し笑いを見せつつ、その背後に見える隊員達を流し見

た。

それぞれが疲れた様子で在りながらも、どこか充実した雰囲気を持った彼ら、彼女らは、西条に向けて揃った敬礼をかつちりと示してみせる。

「成果は——聞くまでも無いかな？」

「ええ。皆さん凄いですよ！ あっという間に笛の使い方が上達していくんです！」

「いえ、氷室さんのお陰ツス！」

「そうですよ！ なんて言うか、私、あんな気持ちで笛が吹けたの初めてです！」

興奮気味に西条とおキヌに詰め寄る隊員達に押されながら、西条は美神に無理を言つて頼んだ事が無駄にはならなかった事に安堵した。

代償の借り一つとそれを受けた時の妹分が見せたニヤリ笑いが何とも不安を煽りはするが。

それでも、この体制が機能し始めるだけで「金食い虫」だの「大規模靈障には無力」だの「民間GS協会にシェアを奪われ続けている」だのとネチネチと文句を言われる事は少なくなる筈だ。

一流ではなくとも、数を揃える事により互いに精神面でフォローし合い、同時に協奏効果による効果の増幅を狙う。

結果は、現場に出なければわからない事も多々あるとは言え、部下達は現時点では驚

くほどスムーズな上達を見せている。

それでも規格外の超一流と呼ばれるおキヌには効率でも範囲でも効力でも及ばないのは——まあ、あまり求めすぎでも、急ぎすぎてもしょうがない。

「・・・あるいは令子ちゃんに窮状を悟られたかな？」

「ああ見えて優しい人ですから」

「知ってるよ・・・お兄ちゃんとしては情けない限りだけどね」

微笑む少女に苦笑いを返しつつ、はてさてこの借りは大きそうだ、と一人青くなる中間管理職であった。

——『擦り切れた言葉で問おう。使い古された言葉で問おう。誰もが問われた言葉で問おう。陳腐で、故に虚構を許さぬ言葉で問おう』——

広い、倉庫がある。

外の光も入らないそこで時間を教えてくれるのは規則的に針を動かす時計だけ、そんな場所だ。

その倉庫には面積の半ばまでを占めるコンテナと、幾つかの存在があった。

「改良型のゴーレムもほぼ完成ね……」

「ええ。お爺ちゃんの遺品がこんな形で役立つなんて思いませんでしたけど」

金髪の女性と少女の眼前には、銀色の輝きを誇る巨大な人型が存在していた。

見るものを圧倒する雰囲気と、それだけでは終わらないであろう存在感を誇示するそれは、今は静かに眠るのみ。

その人型の隣には、同じ大きさの、だが緑色のシートに包まれ中身を見せない数体が、コンテナの中に運び込まれていた。

人工の灯りの下で、ほんの少し目を緩めた女性が、味気ない倉庫の片隅で一際異彩を放つ区画に向けられる。

人工物だらけのこの倉庫には場違いな、藁の積まれたその場所には、今は疲れきった十数匹の家族が居る筈だ。

「あの子達にも大分無理させちゃったからね。後で美味しい物でも食べさせてあげない

と」

「可愛いですよ。須狩さん、一匹貰えませんか？」

「駄目よ、アンちゃん。就職先も決まってるんだから」

物欲しそうな視線でそこを見つめる少女に軽く溜め息をつきながら、須狩は今別的事に走り回っているパートナーと話す為には携帯電話を開いた。

「あ、そうだそうだ！ あの約束ちゃんと守ってくださいよ?! その為に実家に黙ってお爺ちゃんのゴリアテ号持ってきたんですから！」

「はいはい。分かっているわよ……。全く、近頃の若い子って強かよねえ」

「当たり前です！ ピートお兄ちゃんかっこ良いんだから、早めに行動しなきゃ！」

「……早過ぎるわよね、どう考えても。お陰で茂流田が余計な苦勞を背負い込んでるし」

関係各所というか、目の前の少女に留学を認めさせる為に駆けずり回っている、近頃電話でしか会えないパートナーの顔を思い浮かべて大きく溜め息をつく須狩だった。

——『初めて貴方の名前を呼びながら、何度も貴方に問うた我らが、幾度となく囁か
れた疑問を紡ごう』——

少々冷たい風が吹き、それでも暖かい窓から差し込む陽射しを浴びながら、十字架の
前に跪いた二人のうち、若く見えるほうから小さくしゃみの音が響いた。

「おや、ピート君、風邪かね？」

「いえ、何と言うか、こう、背中に悪寒が……」

仕事前の祈りを捧げ終えた二人が立ち上がり、そんな何でも無い会話を交わしながら
歩き出す。

今度の依頼人もあまり裕福ではなく、やっぱり報酬に期待は出来ない訳であるか。

「体調には気を付けないと駄目だよ。体が資本だからね、僕達は」

「ええ。分かっています」

忠告をしながら、それでも心配そうな唐巢神父に軽く笑顔を見せて、教会の扉をピートが開く。

「うん、今日もいい天気だね」

振り仰げば、古い、だが手入れの行き届いた教会の壁が目に入る。

この前近所の人々が一緒に掃除してくれたお陰で裏庭の雑草も綺麗に取り除かれており、古いながらも小奇麗な印象を与えていた。

軽く一度頷いて、鍵を閉めて追いついてきたピートと共に歩き出す。

「今日は何処ですか？」

「ああ、少し離れた山村だよ。どうも山の中が騒がしいらしくてね。不安がつてる」

「・・・報酬は期待できそうにありませんねえ」

「何、食事と宿はしつかりとあるからそれだけでも十分だよ」

神父の最後の言葉に被さるように聞こえた腹の虫の音を慎み深く聞こえなかった振りをしながら、どこかよるよるとした様子の子の師匠を支え、清貧コンピは温かいご飯を求め——いやいや、困っている人々を助けに行くのだった。

——『どちらを、選ぶのか?』——

鳥の声、虫の鳴く音、風に吹かれてさやさやとさざめく木々の音を聞きながら、メドーサはゆっくりとその紐を首に結びつけた。

細い、だがしっかりと幾重にも寄り合わされた蔦には、大きな動物のものらしき牙がぶら下げられている。

何度か軽く引つ張り、落ちない事を確認したメドーサは、目の前の存在にそれを誇らしげに見せた。

「どうだ? 似合うかい?」

「フゴッ!」

「そーかいそーかい！」

「ごしごしと固い獣毛に包まれたその頭を何度も撫で付けつつ、メドーサはもう一本の紐と折れた刺叉の先端を取り出した。

くるくると落ちないように縛り付け、それを期待の籠った眼差しで見つめる目の前の獣の首に巻きつける。

「よし、良く似合ってるよ」

片方の牙が半ばから折れているその猪は、嬉しそうに鼻をメドーサに擦りつけた後、何かを問うような視線でメドーサの手を見る。

それを見て取った彼女は、苦笑いを浮かべながら手を一振り。

次の瞬間には、その手には新品同様の刺叉が握られている。

「な？ これは大丈夫なのさ。むしろ、あんたこそ大丈夫なのかい？」

「ゴフツ！」

「は、聞くまでも無かったかねえ」

舐めるな、とばかりに鼻息も荒く太い笑みを見せつけた若い猪は、気にするな、とでも言うかのように軽くメドーサの頬を一舐めして、ゆつくりと森へと帰っていく。

その先には、若い猪よりも二回りは大きいのが、膨大な威圧感と共に座り込んでいた。

その3匹に軽く手を振り、メドーサは傍らに置いてあつた中身の詰まつた風呂敷を担ぐと、地面を蹴つて飛び出した。

『フゴオオオオオオオオオオオオオツ!!』

その背に見送るような雄叫びがぶつかり、思わず振り向いたメドーサであつたが、視線の先には既に何も居ない。

「ふん。小竜姫とどつちが強いかねえ」

楽しげに呟いたメドーサは、一気に上昇すると、そのまま水平飛行に移行する。

飛行機雲さえ引きながら加速していく彼女の目に、小さな山村が写つたが、今はそれには興味も持たない。

精々飛ばして帰つて、やきもきしながら待つているであろう自称父に、土産話と、貰い物ではあるが大量のお土産を届けるのが先決である。

今からその時のあいつの顔が楽しみでは、ある。

「あーっはっはっはっ！ 考えただけでもゾクゾクするねっ！」

そう叫んで、更に一気に加速した。

——『平穩か、反逆か』——

日本でも随一の靈峰、靈能者の修行場として名高い妙神山。

武の達人である竜神の管理人と、古来より名高い武神である猿神。

そして鬼神の構える門を持つこの場所は、ちよつと前までは修行者も居ない平穩な空間であつた。

「で、また上司に怒られて謹慎ですか、ヒヤクメ?」

「ううう。ちよつと下界を覗いてただけなのね」

「幾らなんでも仕事中にやつては、サボタージュと取られても仕方なからう」

すんすん鼻を鳴らすヒヤクメにお茶を差し出しながら、縁側に腰掛けた小竜姫は溜め息をついた。

付き合ひの長い友人でありながらも、どうしてこうも素行が悪いのだろうか、と暫し黙考。

ヒヤクメだから、と言う結論に落ち着いた。

「な、なんか小竜姫が酷い事考えてるのねー!」

「いや、私もそう思うぞ」

「ワルキューレまでっ?!」

ほう、とお茶で潤した咽から満足げな吐息を吐きつつお茶請けの羊羹に手を伸ばしたワルキューレに、ヒヤクメの悲鳴混じりの声が叩きつけられた。

綺麗にスルーしながら羊羹に舌鼓を打つ彼女に、こちらも完璧に無視した小竜姫がお茶のお代わりを勧める。

軽くお礼を良いながら受け取ったワルキューレと小竜姫の後ろの部屋で、体育座りに変形したヒヤクメがどんよりとしたオーラを放ち出した。

それを二人して苦笑いと共に眺めつつ、ふと思いついたようにワルキューレが問う。

「そう言えば老師はどうされたのだ? 休暇中とは言え、挨拶ぐらいはしておきたかったのだが」

「ああ、今天界に行ってます。竜神王の所に」

「そうか」

「ええ」

そのまま無言でお茶を啜る二人。

縁側に少々暑い位の陽射しが差し込むが、突き出した屋根が作り出す影と時折吹き付

けるそよ風のお陰で、むしろ気持ち良いくらいである。

何時の間にか復活したヒヤクメがこそそと羊羹に伸ばした手を二人で叩きつつ、どちらとも無く呟いた。

「平和だな」

「平和ですねえ」

「しよ、小竜姫とワルキューレが苛めるのねー！　こうなつたら言いふらしてやる！

小竜姫が最近TVで見たバストアップ体操を毎日欠かさずやっつてる事とかを！」

「なー！　こっつ、コラ待ちなさいヒヤクメ！」

「待てと言われて待つ馬鹿なんて居ないのねー！」

べー、と舌を出して逃げ出すヒヤクメを慌てて追いかける小竜姫。

そんな騒動をスルーして一人最後の羊羹を齧りながら、ワルキューレはぼつりと呟いた。

「・・・デタントとか凄く簡単な事のような気がするな」

『シャゲーツ!!』

「りゅ、龍になるのは卑怯なのねええええええつ?!」

——『どちらだね?』——

巨大な城のど真ん中が、いきなり轟音と共に崩れ落ちた。

飛び出したのは真つ白な巨龍と巨大な猿。

がっちりお互いに手を掴み合い、睨み合う。

「だ・か・ら・．．．天龍に先に会うのは私だと言っておろうが猿爺いっ!!」

「年長者を立たせようとは思わんのかこのクソガキはあああああ．．．!!」

荘厳な城になんとも腰砕けな台詞が大音声で響き渡り、何事かと飛び出した近衛兵や文官達が諦めたような溜め息と共に元の仕事に戻っていった。

暫しそのままの体勢で睨み合い、壮絶な火花を散らせ、同時に後方に飛び上がった。

巨龍が火炎を吐こうと大きく息を吸い込み、巨猿が何かを取り出そうとして舌打ち

し、ならばと己の毛を何本か引き抜いて吐息を吹きかけようと胸を膨らます。

同時にそれが解放される、まさにその瞬間。

「いい加減に……せんかつ!!」

女性のものらしき怒号と共に、極太の光線が二人を斜め下から突き上げた。

「全く、悟空坊も馬鹿息子も、城を壊すなど何度言ったら分かりおるか! 何ぞ言い訳でもあるかつ?!」

「いや、そうは言ってもですなあ」

「黙らっしやい!!」

びしやりと叩きつけられた言葉に、胡座のままぼりぼりと頭を掻いていた猿神が冷や汗たらり。

自分から言い訳があるかと聞いておきながらの言動では在るが、何と云うか昔から逆らえないお方なのである。

ちなみに竜神王の方は、先程の一撃で完全に昏倒して医務室で唸っている。

医務官も慣れたもので、寝台に寝かせたまま特に何もせず放置していた。

この場合はどうせ放つて置いても回復するし、と言う山ほどの実体験からそれを知っているのだ。

ともあれ、流石に無事だった猿神は右から左に聞き流しながら針の筵に座っていた訳

である。

そして漸く、結構な時間の後、延々竜神王妃の説教を喰らっていた猿神の元に、待ちかねた声が聞こえた。

背後の扉が重々しく開く音と共に、最近聞いていなかったその声が背中を叩く。

「……あ、猿神おじいちゃん」

「おお、天りゆ……う?」

振り向いた猿神の目に入ったのは、「もう一押しが足りなかった」と言つて元竜神王と共に何やら籠っていた天竜姫の姿であつた。

ただ、色々と違つてはいたが。

「そ、それはどうしたんじや?」

「……ん。これでバツチリ。犬飼君もゲツト」

「かつかつ。何だ何だ、また怒られてやんのか?」

「お前はだーつとれ」

何時もなら噛み付く相手を軽く一言で無視した後、驚いた顔からだらしない顔に移行しつつ、猿神はしげしげと天竜姫を眺める。

しかし、やおら難しい顔になると、とある一点を見つめ、視線を元竜神王妃に移す。

「……何?」

「何じゃ？」

二人の疑問も聞こえない様子で、猿神は元竜神王に声を掛けた。

「なあ、ハク」

「何だ、猿」

「ありやいくらなんでも無理があるだろ。遺伝子的に」

「お前もそう思うか」

二人の視線が何処にあつたか、あえて言うまい。

ただ、直後に更に城が壊れたとだけ、竜神王の城の門番は伝えている。

——『答えを聞こうではないか』——

褐色の肌の女性を先頭に、てくてくと歩く3人が居る。

ホクホク顔で歩く小笠原エミの後ろに、ほっとした様子のタイガーとにこにここと天真爛漫な笑顔で式神に乗った六道冥子が続いていた。

「ふふん。初めはどーなる事かと思つたけど、結構いけそうで安心したワケ」

「ワツシもエミさんもどちらかと言うと後衛じゃけーノオ。式神が前衛を守つてくれればやりやすいですノー」

「うふふ。皆も〜喜んでるみたい〜」

六道家当主からのたつての願いと言う事で断れる訳も無く受けた依頼ではあつたが、怖がりの爆弾娘と精神感応で相手の姿を変えて見せるタイガーの相性が意外に良く、またその能力は折り紙付きの式神達の活躍も在つて、依頼自体は全く問題無く解決できた。

エミも楽しんで依頼完了できた、冥子も親友の役に立てた、タイガーも冥子と一緒にあつたにもかかわらず無傷で帰つてこれたと、皆、表情は明るい。

「お母様も〜、これなら〜エミちゃんと一緒に〜頑張つても良い〜つて言つてくれるかしら〜」

「……ま、まあ、今回みたいにちゃんと私達と連携取れば問題ないワケ」

あの六道家当主がこの非常に珍しい成功ケースを見逃す訳が無い。

だが、冥子の面倒を見ると言う事で優先的に美味しい依頼を回してくれるように交渉すれば十分に元は取れるし、何より六道家に貸しが作れる。

それに、冥子を見捨てるのは気が引けるし。

「何より、今回元手ほぼゼロなワケ！ これは美味しいワケ！」

「エミさんって実は美神さんに似てる気がするんジャー」

無論、躰は厳しくいかないと駄目と言う訳で、折角の無傷もあつさりとほこぼこにされるタイガー寅吉であつた。

青空に浮かんだ魔理の笑顔に向かって反省をしつつ、口は災いの元と心に刻み付けるタイガーである。

そんなタイガーの妄想はともあれ、赤くなつた拳に息を吹きかけていたエミは、ふと何かを思いつき。

「ふ、ふっふっふっ」

ひじよーに悪い顔で笑い出した。

「エミちゃんが怖いのだ」

「そーよ！ この前変な爺と組んだ時は駄目だったけど、これなら令子もチョロイんじゃないっ?! あいつに吠え面かかせてやるチャンスなワケ！」

そうでしょっ?! と振り返った先には、何故か今にも泣き出しそうな冥子がいたりして。

ぎくり、と硬直したエミは、その為に一瞬行動が遅れた。

「ふ、ふえ・・・喧嘩したら駄目～～！ ふえ～～～～ん!!」

「あああああああ・・・」

「結局こうなるんジャー・・・」

やっぱり起こった暴走に巻き込まれつつ、どうやって六道家との縁を切ろうかと考えるエミであった。

——『「魔神アシユタロス」よ。天文台へ招かれた者よ。物語の始まりより私達と共に在る君よ』——

とある高校のとある廊下、机に腰掛けたストレートロングの少女と三つ編みの少女が難しそうな顔で悩んでいた。

「うーん。やっぱり家には居ないみたいね」

「ええ。何時もなら朝早く窓を開けてお出かけしてるんですけど、最近は無いですし……」

「朝出かけなくなっただとか？」

「それも無いと思います。いつも楽しそうに騒いでますから、横島さん」

彼にとつては楽しそうな事ばかりではないのだが。

むしろ昼夜問わずであれだけ騒動を起こしておきながら、未だに追い出されないのが不思議な方である。

最近はやつと貧ちゃんの手を貸していたりするが。

これも小鳩の為である。

「ふむふむ。学校に来なくなった生徒、空の自宅……これは、事件の匂いがするわ!」

「横島さんの周りっていつもそんな感じなんですけど」

「それもそうね」

そんな一言で納得される忠夫が悪いのか、それともそんな印象ばかり周囲に与えて

いる忠夫が悪いのか。

どっちにしたって忠夫が悪い不思議である。

ともあれ、と軽く手を打ち合わせ、机妖怪の現生徒、元愛子先生は机の上に立ち上がって天井を指差し。

「次に登校した時に、きつちりしつかり学校に来るように説得しなきゃ！ 不登校の男子生徒とそれを立ち直らせる女子生徒！ これも青春よね!!」

「青春だから、ですか？」

「・・・な、何の事かしら？ それじゃ、もう直ぐ次の授業が始まるから・・・」

下から見上げてくる小鳩の視線とその言葉に何を感じたのか、そそくさと机から降りた愛子は僅かに頬を赤く染めながら、机を担いで教室に駆け込んでいった。

それを見送った小鳩は、窓の外を見上げながら、その豊かな胸の前で二つ握り拳を作って小さく呟く。

「小鳩は、負けません」

頑張らなきゃ、と謎の気合を入れた少女は、決意も新たに自分の教室へと歩き出すのだった。

「——そうか、それが欠けていた物か」

「その通り。それが君がここで忘れていた物」

「それが必要だった、と言う事らしいな」

何も無い空間の、だが足の下に感じられる床の上に立ちながら、アシユタロスは呟いた。

パズルのピースを嵌め込んだ心は、それまでは不確かだった己という存在をしっかりと確立させていた。

自分の周りを取り囲むように存在する4つの影、それ自体は未だに己を隠すようにすつぽりと頭からロープを纏い、覗くのは口元と瞳だけ。

だが、その声には、その雰囲気には覚えが在った。

この空間で、いつも彼に語りかけていた存在「達」だった。

不審げな色を濃く残したアシユタロスの瞳には、それまでの不確かな客人としての神

格は無く、高い知性と堅固な精神を感じさせる鋭さがある。

「何故、こんな事を？」

「私たちの疑問に答えれば、あつさり氷解すると思うよ」

「その為だけに、僕達は此処にいる。或いは、その答えの先の為に」

のらりくらりと此方の問いをはぐらかすその姿勢は、名と意識を取り戻したというのに変わりはない。

だが、特に敵意は感じられなかった。

いや、これまでもそう言ったものを感じた事は無かった。

むしろ、此方に対する親しささえ感じさせていた。

だから、その疑問一つくらいは付き合つてやろうと思つたのかもしれない。

或いは、それさえも誘導された感情だったのかもしれない。

だけど、彼は答えた。

それ故、彼は答えてしまった。

「どちらか、と言われれば——そう、あえて選ぶのならば、「平穩」か。正直、自分でも以外だと思うのだがね。——我が娘達と、この世界に対する己の負の感情。天秤に乗せる気すら起こらんよ」

冷静な、無表情のまま、彼は、どこか楽しそうに、そう答えた。

答えがゆつくりとその空間に吸い込まれ、だが、シユレーディングー達は何の答えも返さない。

彼にしては——魔神アシユタロスにしては珍しい事に、少々気恥ずかしそうに天を仰ぎ、誰にも視線を合わせぬままで呟いた。

「すまないな。どうやらお前達の期待には沿わない答えだったようだ」

——『いや』——

「何?」

——『それこそが、そう、それこそが』——

「なっ?!」

——『待ち望んだ答えだとも!!』——

零れ出しそうな喜びの感情を含んだ4つの声が唱和し、それが切欠であつたように、アシユタロスの言葉が始まりであつたかのように、周囲の空間から、何も無い場所から、アシユタロスに向かつて数え切れないほどの何かが殺到する。

それは、細長いそれはまるで生き物のように魔神の身体を取り囲み、一瞬で全てを終わらせた。

ちやら、と金属音が小さく鳴る。

だが、魔神の名をもつ存在は、その中心に居る筈の彼は、既に完全に囚われていた。

—— 『では、始めよう』 ——

—— 『終わりを、始めよう』 ——

—— 『解放に続くかも知れぬ終わりを、幾千の試行の末に辿り着いた機会から』 ——

——『最後の物語を、始めよう』——

窓の外から差し込む夕日が、何となく寂しさを呼び起こす。

美神は、そんな感情を鼻で笑って吹き飛ばそうとして、出来なかった。

「はあくあ。今日はおキヌちゃんも遅くなるし」

ぼふつと音を立てて、倒れこんだ美神を受け止める柔らかいソファ。

その上に置かれたクッションに顔を埋めつつ、何となく美神は溜め息をつく。

今更一人が寂しいというほど子供ではないつもりだが、やっぱりなんだか物足りないとは思うのだ。

特に、ここ数日、あいつの顔を見てないから——

「……っつ!!」

ぼふぼふふとソファアの肘掛が乱打され、クッションに顔を完全に埋めた美神の耳が真つ赤に染まる。

暫く美神しか居ない事務所にそんな気の抜けた音が響き渡り、やがて疲れたようにその拳がゆっくりと降ろされた。

「……ばあか」

拗ねた表情で顔を覗かせた美神の顔からは、未だ赤みが抜けきつてはいない。

その言葉が誰に向けられた物なのか、人工幽霊一号は、己の本分をしつかりと守つて何も言わない。

そのままの体勢で唸っていた美神であったが、やがてゆっくりと身を起こすと、所長のデスクに歩み寄り、その引出しにかかった鍵をかちやかちやと弄り出す。

一体何個の鍵が掛かっていたのか、どれだけ嚴重に隠していたのか、開いた引出しの底を弄ると、その底が外れて二重底になっていた。

何となく無言になりながら、その中から一葉の写真を取り出す。

写っているのは、美神とおキヌ、そして――

「……大馬鹿狼」

赤いバンダナを巻き、ジージャンジーパンを身に纏った、半人狼。

ゆっくりと椅子に腰掛け、背凭れに体重を預けて天井を見上げ、その視線を塞ぐように写真を持つてくる。

「早く戻ってきなさいよ」

写真に向けて眩きながら、自分でも思っていないかたほど、寂しそうな色が籠った事に驚いた。

だが、同時にそれを不自然とも思わない自分が、一番しっくり来たような気がした。「この私が珍しく待ってるのに、ね」

それを自覚してしまえば、後は何となく口元が持ち上がるのが納得できたような気がした。

「……もしも今すぐ帰ってきたら、ちよつとは素直になつてみようか、な？」

途端。

「んじやなー、お疲れさん」

「おう、横島。お前何か女に贈るもの持ってねえか？ 流石に手ぶらで行くのは不味い
だろ？」

窓の外からそんな声が聞こえてきた。

「んだ、お前まだ諦めてなかったのかよ。しょーがねーなあ」

「おお、手前良いもの持ってんじやねーかつ！」

「精霊獣の指輪つつーんだ。珍しい物らしいけど拾い物みてーなもんだし500円で良
いぞー！」

「ううむ、せめて2000円！」

「売った！」

「マジで?! 買った！」

轟音。

窓の下から閃光と衝撃が突き抜けた。

「あんた達馬鹿でしょ！ むしろ大馬鹿でしょ！ 無知も大概にしないと本気で怒るわ

よ！ むしろ泣くわよ！ それザンスの国家機密でしょうがああつ!! ああもうこの

馬鹿弟弟子と馬鹿狼はあつ!」

「ひ、久し振りにごっついの来たなあ」

「う、う(ぎ)ぎ(ぎ)……」

何時の間にか聞き慣れた声が聞こえ、何時か聞いた二つの声が——片方は殆ど唸り声であつたが——あつという間に離れていき、たつぷり一分は時間が経つた。

「え？　え？　横島君？　うそおつ!!　ほんとに帰つてきちやつたの?!!」

硬直から解けた美神が取り乱す間にも、玄関を開けて入つてきたらしい半人狼の声が聞こえる。

慌てて写真を片付け、元通りに鍵を閉めようとするが、気が焦るばかりでなかなか引出しは元通りになつてくれない。

「あれー？　美神さん何処つすかー？」

ばたばたとこの部屋に向かつて来る足音が聞こえた。

何とか引出しは元通りになつたものの、さっきの自分の台詞が脳裏に木霊する。

ちよつとは素直に、と言うやつが。

ちよつと心の声を聞いてみよう。

——うわどうしようでも帰つてきたしええいやつぱり恥ずかしいいや恥ずかしいことなんて在る筈も無いでしょこの美神令子にでもでも自分で言い出したことだし誰も聞いちゃいないってのいや聞いてたらどーこーって言う事も無いんだけどああやつぱりでもやつぱりうああああああ。

大混乱であつた。

今当に妹分の獣娘達は事務所が見える所まで来ており。

家に帰って誰も居なかった元魔族の他称娘は事務所の上空に飛来しており。

情報収集に来た机妖怪と隣人の少女はそれを見て同時に駆け出しており。

龍族の王女は早速出かけようとして父と祖父母に捕まり写真撮影なんぞをやきもきとやっております。

アンドロイドとその娘達は揃って穏やかな寝顔で横たわり。

そして、何時もの如く、事務所には喧騒と活気が満ち始めた。

「全く、まさか飛行機であんなに梃子摺るとは思わなかったわね。さっさと麻醉掛けといて正解だったかしら？ あ、いたいた。魔鈴店長！」

「ああっ！ ルシオラさん！ 無断欠勤の事は問いませんから早く手伝って——」

「暫く休みます！ ちょっと実家に戻りますから！」

「ああっ?! 待って、ちよつとで良いから手伝ってええええっ!!」

そう言い残して、魔族の少女は空を駆ける。

未だにその胸の中に、小さな芽を残して。

それよりも大きな、不安と焦燥に駆られながら。

「——さて、舞台の準備は整え終わり、そして開かれる最後の一幕」

「開くのは、そして舞台で踊るのは、誰が、何時、何処でとは言いません」
「ただ、開幕の前の一言を」

それでは、それまでの夜に

——良い夢を

最終章

第壹話 『そして始まる夜の唄』

「タマモおっ！ そつち行つたでござるよーっ！」

「馬鹿犬、きちんと止めなさいよっ……！」

振るわれる霊波刀の僅かな間隙を搔い潜つた悪霊が、後方で構えるナインテールの少女目掛けて一気に迫る。

月に吼える 第三部

更に前衛を突き破ろうと襲い掛かる数体を纏めて切り払つた銀髪の少女は、しかし後ろを振り返る事無くむしろ前へと踏み込んだ。

それは放置かそれとも信頼か、そんな今更な思考が僅かに過ぎり、タマモはほんの少しだけ口の端をあげる。

「ま…助けるつもりでこっちに来たら、纏めて焼いてたけどね」

呟いて、後方に飛び退りながら口元に二本の指を当て、その間を通り抜けるように強く息を吹き込んだ。

吐息は指の間をすり抜け、熱と轟音を持った妖火へと変わる。

「それくらいあいつも分かつてるか」

そして、優しく包み込んだ。

金色の炎に巻かれて消し炭となったそれを冷たい目で観察しながら、タマモは一人突き進む相棒に声をかける。

「シロ、大きいのが行くわよ!」

「委細承知! とつととやるでござるよ!」

蒼白い閃光が速度を増す。

周囲を取り囲む霊達に斬られた事さえ気付かせず、駆け抜けたシロは奥に控える一際巨大な霊に切迫。

その手に構えた己の牙を腰だめにしたまま更に踏み込み、相手が振り下ろした拳に合わせて、

「外れでござるなあ」

大跳躍。

次の瞬間には、砕けた地面を尻目に巨大な霊の頭を跳び越していた。

慌てた様子で悪霊が振り向き、それに追従するように周囲に残っていた悪霊達が集る。

「バイバイ」

離れた場所からのその声は、悪霊達には聞こえるはずもない。

聞かせるつもりこそないが、聞こえなくても関係無い。

どちらにせよ、もう聞こえないだろうから。

シロに向かう悪霊たちの更に外側から、いつの間にか浮いていた炎の塊が9つ纏めて降り注いだ。

炎爆は全く同時に発生し、小さな悪霊達を残らず吹き飛ばす。

支配下に置いていた悪霊達が偶然にも壁代わりになった巨大なそれは、体を焼きつかせる炎の激痛に悶え苦鳴を辺りに響き渡らせる。

「すこしは手加減しろでござる、あの馬鹿狐！」

その声は、頭上から聞こえた。

一瞬痛みを忘れ、振り仰ぐ。

あちらこちらを焦がした少女の背中を視界に捉えたその瞬間、彼は気付いた。

既に自分の体がバラバラに切り飛ばされている事に、気付いた。

音も無く崩れる巨体の背後に着地したシロは霊波刀を一振り。

生み出された風が、僅かに残る燐光をそつと押し流した。

数分後、スーツ姿の依頼人を前に、笑顔の美神が小綺麗な部屋の真ん中で電卓をばちばちと弾いていた。

「依頼解決ですね。報酬のほうをよろしくお願いしますわ」

「だから何で拙者を巻き込むのかと聞いているでござろうがあっ!!」

「だから何で何時も何時も巻き込まれる位置にまで近づくのよあんたは」

ホクホク顔で依頼人からアタツシユケースを受け取った美神の後ろでは、狐の少女と狼の少女が喧々諤々と騒いでいる。

とは言っても服と髪の毛の毛のあちこちに煤を付けたシロが、視線も合わせずに椅子に座って自分の髪の毛を弄っているタマモに文句を言っているだけであるが。

「あ、枝毛」

「話を聞けでござるううっ!!」

とうとう頭を両手でがしがし掻きながら天を仰いで叫びだしたシロを鬱陶しげに眺めながら、タマモは枝毛の少し手前に向けて指先ほどの狐火を作り出した。

高温の炎は顕現した一瞬で髪の毛をぷつんと切り落とし、それ以外に何の影響も及ぼす事無く消え去る。

「だから、大きいの行くなって言っただじやない。何も問題ないでしょ」

「範囲が！ 範囲が何時もより広がったでござるよっ!!」

「…ああ」

言われてみれば、と顎に手を当て暫し黙考。

そう言えば、今日がこつちに着てから初めての实战で、気が昂ぶっていたような覚えがある。

ついでにこれが終わった後の報酬というかご褒美の話のせいで、シロもでもあるがかなり気合が入っていた気もする。

そのせいで、ついつい5個で済まず筈の狐火をついつい倍に近い勢いでブチかました記憶があつた。

「…なんで焦げたくらいで済んでるのかしら。自信なくすわねー」

「それが遺言でござるかああ…」

無論、シロが無事だったのは踏み込んだ先にいた大将格の悪霊の体が壁になつたお陰であつて、彼女の炎が弱かつた訳ではない。

むしろそんな彼女の炎を、直撃とは言わないまでも至近で喰らつたにもかかわらず消滅しなかつた悪霊のほうがタフなのである。

霊力の高まりを感じたタママが慌てて椅子から飛び退くと、一瞬前まで彼女が居た場所を霊波刀が水平に薙ぎ払っていった。

振り向いた彼女の目に入るのは、振り切つた霊波刀を構えてじりじりと距離を詰める

少女。

「もう枝毛なんぞ気にならないように、丸坊主にしてやるでござるううう」

「ま、待ちなさいシロツ！ そう、あれはちよつとした事故よ、事故！」

「きつぱりと人災でござるうう！」

両手をぶんぶんと振りつつ誤魔化し笑顔で少しづつ距離をとる獲物を、無表情で殺気を振りまく少女が部屋の隅へと追い詰める。

どん、と背中に壁が当たり、慌てて左右を見渡して逃げ場が無いことを悟ったタマモは、ただでやられてなるものかと妖力を呼び起こし徹底抗戦の構え。

その意気や、良し、とばかりにニヤリと笑ったシロは両足に力を籠め、真正面から飛び掛かり。

「毎度ありー。またのご利用をお待ちしておりますわー」

その勢いのまま、横合いから首の辺りに突き出された神通棍に引っかかって動きを止めた。

くえつ、と奇妙な声を出してくると半回転した彼女は見事に後頭部から床に落ちて良い音を立てる。

へ？ と疑問符を浮かべたタマモも、依頼人に笑顔を見せながら神通棍を突き出している美神が背中に隠して彼女だけに見えるように示された手の形を見た瞬間、今度は抗

えるはずも無い脅威が発生したことに気がついた。

親指を下に向けたその手には、怒りの為かしつかりはつきり怒りのマークが浮かんで
いる。

「さ、あんた達も帰るわよ」

「ま、待って美神さん、話を聞いてっ?！」

「そうでござるっ?! お慈悲を、お慈悲をおおっ?！」

必死で抵抗する二匹をずりずりと引き摺って去っていく美神を見送りながら、依頼人
は噂通りの見た目によらない実力と質実剛健スバルダンっぷりに何度も何度も頷いていた。

「ううう、痛いでござる痛いでござるううう」

「何で私までこんな目にいいいいいい」

事務所のソファアーに蹲りつつ、頭にこさえたでつかいたんこぶを押さえてひんひん泣いている獣娘たち。

その声を台所で聞きながら、エプロンを付けた美神は一人ため息をつきながら調味料の入った小瓶を手を取った。

「つたく、屋根裏部屋とご飯だけで使える戦力が増えると思つたのに」

『まあ、彼女達も初めての依頼でしたから』

何処からともなく聞こえる人工幽霊一号の声に鼻息を鳴らし答えて、小瓶の中身をばらばらと鍋に振り掛ける。

ゆつくりとかき混ぜ更に別の小瓶を一振り。

お玉に取つた汁の味を確かめ、軽く頷くと火を止める。

「たとえそうでも依頼人の前でやるなっつーのよ。全く、何であんなのばかりウチに増えるのかしら」

『類は友を——』

「あらこんなところにパイナップルが」

『すいませんでしたもう言いませんごめんなさいだからその手榴弾のピンを外さないでくださいオオオナアアアアツ!!』

分かればいいのよと笑顔で言い、炊飯器の裏から取り出した危険物にピンをから手を離す。

レバーを外していないから着火はしないものの、建物に取り付いた幽霊にさえ知られないようにそんな物を隠さないでほしいと切に願う人工幽霊一号であった。

オープンから取り出した骨付き肉を皿に乗せ、鍋で煮込まれたお揚げを深皿に盛り付ける。

真っ白な飾り気の無いエプロンを畳んで椅子に引つ掛け、二つを持って餌を待つ二匹の所へと。

G S美神除霊事務所における初めての除霊ということで、成功したらちよつと値の張るお揚げと骨付き肉を買ってやると約束はしていたが少々勿体なかったであろうか。

それでも成功は成功だし、少しは反省しただろうからまあ良いか、と苦笑いを浮かべつつ人工幽霊に扉を開けてくれるように頼もうとして。

「大体兄上があーなのに、何で拙者達は駄目なんでござろうか？」

「…分かってないわね。つまり美神さんも結局はライバルって事よ」
「…やっぱりでござるか？」

全力で扉を蹴り開けた。

人工幽霊の悲鳴が聞こえたような気もするが、無視。

目の前でかたかたと震えつつ怯える二匹の目の前にゆっくりと笑顔で皿を置く。

「さあ、食べなさい」

「み、美神殿？」

「き、聞こえた？」

「何が、かしら？」

首を捻りつつも心底安心した様子で、しかし食欲をそそる良い匂いを立てる大好物に意識の半分以上を持っていかれながら、視線を逸らさぬままに恐る恐る骨付き肉とお揚げに手を出す二人。

「おキヌちゃんも学校だし、私が作ったけど文句は無いわよね」

「へえ、美神さんって料理も出来るのねー」

「いい、頂ますでござるっ！」

タマモは何でも無かったかのように努めて冷静に振舞いつつ、ほこほこ湯気を立てるお揚げに箸を伸ばす。

シロは冷や汗を一筋流しながらもボロを出さないうちにとお肉に齧り付いた。

この辺りが真つ正直なシロと演技に長けたタマモの差であろう。

ともあれ、タマモも箸で摘み上げたお揚げが醸し出す『極上品オーラ』にごくりと生唾飲み込み、熱々のそれを口の中へと――

「――最後の晚餐よ。楽しんでね？」

ぎちりとカラダが固まった。

己の本能が叫んでいる。

やばいやバイ逃げろいやむしろとつとと諦める――諦めたら駄目じゃんっ?!

「ぎ、聞こえてたの？」

無言で笑顔のままの美神が、ゆっくりとひとつ頷いた。

目が全く笑っていないかった。

かたかたと震え始めたタマモの箸の先からお揚げが滑り落ち、深皿の中に戻って沈んでいく。

何とか、何かしないと――!

そう必死で考えたタマモの視線が、隣で肉に噛り付いたまま硬直しているシロに止まった。

彼女はタマモの視線にも、美神の負のオーラにも気を取られた様子を見せずゆっくり

と口の中の肉を咀嚼する。

そして、齧られたお肉を皿に置くと、いきなり立ち上がってこう叫んだ。

「餌付けでござるかああああつ?!」

「はあ?」

「美神殿つ!!」

あつけに取られた美神に迫り、下から責めるような視線で睨み上げる。

僅かに腰を引いた美神に、畳み掛けるように言い募る。

タマモはもしかしたら助かるかもしれないと何時でも逃げ出せるように体勢を整え、しっかりとお揚げを口に放り込んだ。

「この骨付き肉の味はっ! 誰かの為に! 誰かを想って! その誰かの舌にだけ合うように作られた物でござるっ! この犬塚シロ、肉には一家言あるでござるよっ!!」

「:?? :??! だ、誰かって誰よっ?!」

「あふ、あふいつ、おいひいつ! 汁が、汁ふあおいひいけどあふいつ!!」

シロの言葉に一瞬戸惑った表情を浮かべた美神であったが、何時も誰に骨付き肉を食べさせてやっているのかを考え、ふと浮かんだ顔にぼひゅつと音さえ立てて耳まで真っ赤にしながら反論する。

タマモは口の中で暴れるジューシーなだし汁に喜びと苦しみの悲鳴を上げていた。

どたばたと騒ぐ2人と、現状も忘れてお揚げにかぶり付く一人。

「餌付けでござるなっ?!」

「なっ?! 誰が横島君を——」

『あの、オーナー?』

騒ぎの間にも何か言いたげな人工幽霊の声混じる。
が。

「語るに落ちるとはこの事でござるな! 誰も兄上のことだとは——」

「もうひとつ、もうひとつだけ……!」

『オーナー、報告が——』

「そ、そもそもたかが骨付き肉でそんな事分かるわけないでしょっ?!」

暗に認めているような気がする台詞である。

睨み合つて騒ぐ美神とシロも、お揚げに夢中のタママも人工幽霊の声はスルーした。
だが、人工幽霊もこの事務所に宿る存在として、ここで負けるわけにはいかない。
ポリウムを上げて、聞こえるように今度こそ。

『オーナーッ! 報告があります!』

「五月蠅い黙れっ!!」

「素人は静かにしてでござる!!」

最近扱い酷くないですか、とか。

一体なんの素人なんですか、とか。

あと空っぽの皿を指をくわえて見ている貴方はついさっきまで逃げようとしてませんでしたか、とか。

色々理不尽なことを感じつつ、人工幽霊は出現させた全身鎧を部屋の隅でいじけさせる事にしたのだった。

芸の細かいことである。

『良いですよ良いですよ。どーせもう間に合いませんし』

誰も聞いちやいないのである。

そんな全身鎧の声に答えるように、部屋の扉がちやりと開く。

ひよこりと飛び出した頭が事務所の中を一通り眺め、当てが外れた顔を見ると、小さな声で呟いた。

「…相変わらず、ここは賑やか」

その少女の頭には、二本の角が生えていた。

薄暗い通学路。

秋の日は釣瓶落としの言葉通りに、日も落ちて西に僅かな赤い光を残すのみとなった夕暮れ。

日中の暖かさを攫う風が吹き始め、アスファルトの熱も失われつつあった。灯り始めた電灯の下を、二つの人影が歩いている。

「こ、腰がいてえ。愛子も少しくらい加減してくれりや良いのによー」
「もう、横島さんそんな事ばかり言ったら愛子ちゃん怒りますよ」

腰を軽く叩きながら猫背で歩く学生服の青年の隣を歩く三つ編みの少女は、そんな彼を見ながらくすくすと笑っている。

気合を入れて腰を伸ばした青年の腰から枯れ木を纏めて折ったような音が響き、思わず蹲った彼に慌てて駆け寄って後ろから腰を優しく撫でた。

「うう、すまんのう……」

「い、いえ……」

お礼の言葉に僅かに頬を赤らめつつ、立ち上がる忠夫に手を貸した。

小鳩の手を握って立った彼は、今度はゆっくりと背中を伸ばす。

気持ちよさそうな唸りを上げる彼の背後では、離れた手を名残惜しげに眺める小鳩が何度も手のひらを閉じたり握ったり。

「つたく、愛子先生モードは骨まで響くよなあ——小鳩ちゃん？」

「え、あ、はい！」

振り向きながら掛けられた声に、小鳩は思わず慌てて眺めていた手を背後に隠した。

不思議そうな目で忠夫がこちらを見てくるが、何でも無いと首を振って誤魔化す。

「愛子先生になつたら机の中で時間を気にせず授業ですからねえ」

「ん、それがキツツイ。小鳩ちゃんも付き合わなくても良かったんだぜ？」

「……二人きりだと止める人が居ませんし」

小さく呟いたその言葉が聞き取れなかった忠夫が疑問を浮かべて顔を覗き込んできたが、鉄壁の笑顔で誤魔化した。

時間制限がほぼ無し、しかもほぼ密室空間に二人きり。

デンジャーなのだ。

事務所まで押しかけて忠夫に学校へ来るように説教し、その成果を十二分に生かそうとした愛子。

しかも放課後に先生方に根回しした事により、愛子先生として補習授業を受けさせることまで成功する。

だがしかし、一緒に帰ろうと誘いに来た小鳩が参加を表明。

初めは渋々と受け入れた愛子であったが、貧乏ゆえの奨学生を取る努力のお陰で優秀な生徒である小鳩と駄目駄目ながらも元々の頭はそこまで悪い訳でなく、実際の所結構教えがいのある生徒の忠夫——無論それだけでもないが——相手に生き生きと授業をしたものだ。

今は一緒に帰っていく二人の背中を発見し、黒板で一人〇×ゲームの真つ最中であるが。

「くすん…小鳩ちゃんのちゃっかり者…」

そんな呟きが誰も居ない教室に響いたり。

心の奥で愛子に謝りつつ、遠くに見え始めた安アパートの明かりに小鳩は残念な思いを抱く。

遅くなってからの女の子の一人歩きは危険だから、と一緒に帰ってきた忠夫であるが、未だお隣さんが小鳩であることを知らない。

大分遅くなった事であるし、何と云つても育ち盛りの若い青年男子である。

お腹もぺこぺこ、時間的には自宅で母が夕食の支度を終えているだろう。

つまり、大チャンスである。

ご飯で釣つて、家族の団欒に巻き込んで、ゆくゆくは――。

「そ、そうだ！　横島さん、ご飯――」

なんとも心細そうな表情でお腹を擦る忠夫に向かい、小鳩がその言葉に辿り着くより僅かに早く。

『ぎゃー?!?!』

何かがその先から飛んで来た。

派手なメキシカンハットを被つたそれは小鳩の横を通つて忠夫に着弾。

一緒くたになつてごろごろと道路を転がり、数回転して漸く動きを止めた。

『きゆう』

「よ、横島さん?!　貧ちゃん?!」

「うお?!　貧乏神じゃねーかつ?!」

完全に目を回した貧乏神。

飛んで来た先に目をやれば、そこにはふよふよと空を飛んでくる人影。

紫色の髪の毛の少女は、一瞬小鳩に視線を止めた後、興味を失つたように横を通り過

ぎて忠夫の元に。

刺又で服を引つ掛け持ち上げると、あつきり身を翻して安アパートへと沈黙したまま戻っていく。

「こらーっ！ メドーサーっ！ 俺の穏やかな青春にヴァイオレンスを持ち込むなーっ！！」

「五月蠅いねえ。早く帰らないと飯が冷えちゃうだろうが」

「放してーっ！ お願いだから私を解き放つてーっ！！」

「そりゃ山犬だろーが。あんたはTVの見すぎなんだよ」

「俺は狼じゃーっ！！ それにお前だつてしつかり影響されとろーが！」

あれも何回目の再放送だろうか。

新作が出るたびに同系列が流れされては「どうせ一年後には……」と思つて映画館で見
る気も——話を戻そう。

呆然と見送つた小鳩は、足元で呻き声を上げる貧乏神を拾つてため息ひとつ。

『うう……違うねや。ちよつとどころじゃなく怪しい気配がしたからのぞきこんだんや
……。痴漢と違ううううう』

「貧ちゃん。身内から犯罪者は許しませんからね」

『誤解やああああ』

ぴしやりと言い放った小鳩の言葉に、貧乏神はただただ涙を流すのだった。

意外に、本当に意外に何とか食べれる物でした。

何時ぞやの海で出会った妖怪変化の3歩奥みたいな物体ではなく、それなりに料理の皮を被っていた事が心底意外な忠夫であった。

「…魔鈴さん、ありがとうございます」

そうしみじみと呟き、アパートの階段を降りてすぐに彼女のレストランがある方向に向かって土下座をする青年が一人居たとか居ないとか。

口の中に僅かに残る奇妙な違和感と闘いながら、お腹を軽く押さえて駆け出す忠夫。少し離れていただけなのに、何時の間にか成長したんやなあ、と何となく嬉しいような寂しいような感慨に耽りつつ、彼は事務所へと地面を蹴る。

高く打ち上げられた身体を包むのは、すっかり暗くなつた街を通り抜ける乾いた風だ。

「やばい?！」

夜風を割いて屋根の上に着地する。

僅かに聞こえるTVの音と、家族の談笑の声。

邪魔をするのは野暮だろうとでも言うように、降りた足の裏は微かな音さえ零さなかつた。

そのまま大きく身体を跳ね上げる。

瓦に残つた衝撃が、僅かな音を残して消え去る前に、忠夫の足は次の屋根へと降りている。

「うう、もうジージャンにTシャツ一枚は無謀かもしれん…」

かと言って他に服がある訳でもなく、仕方ないなと財布の中身を思い出しながら両肩を押さえながら道路を飛び越え次の屋根へ。

「…くうつ、風も冷たきや懐も寒いなっ!」

特に色々使った訳でもないのに、家賃と電気代とガス代と水道代を収めた彼の財布の中には夏目さんは不在で福沢さんが一枚だけ。

生きていくだけで出て行くものは出て行くし去る者を引き止めても振り向きもしやがらねえ。

それが都会に生きる者の宿命なのだ……!

「現実逃避しても始まらないな。せめて紫式部にせんえんきうさんでもいりや良いのによ」

残存している筈なのに殆ど見ない、そんな都市伝説めいたお札の姿を夢見つつ、電柱の頂上を蹴ってビルの上に大きく跳ねる。

とん、とん、と着地の衝撃を殺しながらリズムを取って、少し離れたスーパーの屋上に滑り落ちるように着地。

動きを止めずに再加速。

「美神さんも美神さんだよなあ。ナルニアに行つてた時の分は時給に換算してくれないっつーし」

コンビニエンスストアの煌々とした白い輝きを眼下に納めつつ、その先のビルの窓に足の横を引つ掛け横に蹴り出す。

直線で行くには目の前の壁は高すぎるが、隣のビルとの間には隙間がある。

進行方向にある別のビルの壁に足を当て、身体を斜め前に蹴り飛ばす。

跳ねた先にある別のビルを更に蹴り飛ばし、三角跳びで隙間を軽く擦り抜けた。

「つと。そーいやシロとタマ、ちゃんと仕事やってんのかなー?」

ビルの間隙を抜けた先にぼつんと存在している公園に着地。

そのど真ん中で宴会を開いている浮幽霊達が気付いて声をかけてきたので手を振り返し、ジェスチャーで事務所の方を指差し横を駆け抜ける。

頑張れよ、と囁し立てながら親指を立てる数十人にサムズアップを返して道路に抜ける。

「到着、つと」

暫し道沿いに駆け抜けければ、すっかり見慣れた事務所がそこにある。

ゆっくりと減速しながら一人ごち、ベルも鳴らさず扉を開く。

人工幽霊が宿るこの建物には無用であるし、そもそも今更だし。

「こんばんわーっす! しろー、タマー、真面目にやってつかうおあつ!」

元氣一杯告げた忠夫は、次の瞬間細い腕に引きずり込まれた。

見た目の繊細さとは裏腹に、抵抗も許さない力で引つ張られた忠夫が身構えるよりも早く、それは彼に襲い掛かる。

美神の神通棍とは全く違うベクトルで、痛みも無いしたんこぶもできない。

だが、それは確かに彼に巨大なダメージを与え得る筈であった。

それは、忠夫を柔らかくも暖かく受け止めた。
具体的には、ぱふって感じに。

「…犬飼君、おひさし」

「……」

あれ？ と小首を傾げる女性が居た。

幼いその行動とは不釣り合いなほど、大人な見た目のヒトだった。

長い黒髪は腰までせせらぎのような清らかさをもっていた。

頭からは立派な角が二本生えており、ほんの少し寄せられた眉根は細い月の様。

身に纏った簡素な和服が、逆にその見事なスタイルを際立たせている。

身長は忠夫と同じかやや高くくらいだろうか。

少なくとも前に体勢を崩した彼を胸元に抱え込めるくらいには。

そう、彼は今、その女性の胸の間に顔を突っ込んで抱き締められているのである。

「あ、あああああああつ?!」

「何やってるでござるかああああつ!!」

「…役得。自分に頑張ったご褒美をあげてる」

忠夫の鼓膜を揺らす、妹分二人の声とけたたましい足音。

酷く焦っている様子であるが、声の調子と足音からすると元気が無いとか怪我をした

とかいう雰囲気でもないので安心した。

そんな判断ができるほど、彼は、忠夫は冷静だった。

ゆっくりと抱き締める手を剥がしつつ身を起こし、目の前の女性の肩に手を置く。

きよとんと此方を見返す女性には、あの少女の面影がしっかりと見て取れる。

前に会った時には見た目妹分達くらい年齢だったのに、彼女は確かに彼の好みど真ん中ストライクの綺麗な年上お姉さんへと変わっていた。

だが、それが彼には悲しかった。

彼の外聞の為にはつきりと明言するが、忠夫はけしてロリコンではない。

成長した事が悲しかったのではなかった。

大きな胸が悲しかったのでもなかった。

「天龍……」

「…何？」

真剣な瞳で見つめる忠夫に驚いたように姿勢を正した天龍は、自分でも気付かぬ内にこくりと咽を鳴らしていた。

背後の二人も何時に無い忠夫の様子に戸惑ったようで、完全に沈黙してこちらを見つめる視線だけが感じられた。

「嘘は駄目だぞ」

「…何で？」

疑問は嘘が駄目と言う言葉の理由を問う物ではなかった。

表情を堅く凍らせた天龍は、僅かに震える舌に言葉を乗せる。

短い、たった3音で構築されるその言葉には、何故分かったのかと聞く意味合いだけが乗せられている。

「俺には」

後方のシロタママも、扉を開いてこっそり覗いているおキヌと美神も、忠夫の真剣な雰囲気にも飲まれたかのように沈黙を守っている。

いきなり成長して、しかも無いっすバディから文句無しの子バディへと変貌を遂げた少女の何が嘘なのか。

何となく視線が一箇所集中してるけど。

ともあれ、たっぷり溜めて、忠夫は言葉の続きを放つ。

「——美神さんの乳があるからぐげらっ?！」

効果音で表すと、ぐわらごらごきーん、だ。

フルスイングの神通棍は、強烈なライナーを道路に向けて放ち、夜だというのに何故か門前の掃除をしていた全身鎧に直撃させて見事な団子を形成させた。

夜じゃないと色々近所の方々に幽霊屋敷の噂を立てられるんじゃないかと言う人工幽霊の何かを決定的に間違えた気使いだったのだが、今更であろう。

「これは私のっ!! あと理由になつてない!」

「…納得」

「すんなっ!!」

一瞬で扉を蹴り開け忠夫に襲い掛かった犯人は、ぜはぜはと息を荒げながら羨ましげに一点を見つめる少女の独白に突っ込んだ。

しょんぼりとした彼女が溜め息をつくくと、あつという間に美女から美少女にクラスチェンジ。

胸元の寂しさも元通りである。

「ま、人狼の超感覚持ちだしねえ。シロも分かってたんでしょ?」

「むう…やはり天然物の強さでござるか」

「ふうー。人狼ってこー言う集団だったわね」

聞いた私が馬鹿だった、と頭に手を当てかぶりを振るタマモと、何度も何度も頷くシ口。

「美神さん…ずるいです」

「あのねえおキヌちゃん？ おキヌちゃんまでそっち側に行っちゃうと色んな所に申し訳が立たないからとつと戻ってらっしゃいな？」

両手を合わせて骨を鳴らす美神の視線は、とてもとても冷たかった。

変な方向に育って、万が一にも氷室神社の神主とかその神様とかにばれると後が怖いので美神も手段を選ぶ気は無い。

「ま、そー言う事だ」

「…御免なさい」

「謝る事ないって。俺は楽しみが増えたしな!!」

何時の間にか天龍の頭を撫でている忠夫に突っ込む気力は美神には無かった。両手はおキヌの矯正中であることだし。

「ふへーん！ 美神さんウメボシは、ウメボシは駄目ですううっ?!」

じたばたもがく少女を捕えながら、後5分、と容赦無く時計を見上げてカウントを進める美神である。

「…折角お爺ちゃんのお伝手で教えてもらったのに」

「へ？ 老師にか？」

「…違う。お父さんのお父さん」

肉体的な成長を促すのは負担が大きい。

だったら見た目だけでも変えてしまえば不利な点は無くなるんじゃないかなろうか、と言う先代天竜王の甘い言葉に乗せられた彼女は、少し遠出してとある神様に教えてもらいに行つたのだと。

とても幻術が上手な神が居る、との言葉で言つた先には。

「…月が七つ」

「待て待て待て待て！」

忠夫の脳裏に警報発令。

慌てて止める忠夫の制止も、残念ながら一歩手遅れ。

「…息継ぎ無しでとつても笑うひとだったの。確か、物語と幻影の神シヤステ——」

暗転。

「まさか拙者がこんな役を振られるとは思わんかったでござる」

「口は災いの元よねえ」

「…あーれー」

「結構余裕やなー。頑張つてこいよ天龍ー」

暫しの後、大きなたんこぶを二個抱えた竜神族の王女が、ソファアの上で恨みがましい視線をシロとタマモに向けていた。

「…痛い」

「抜け駆けは禁止の筈でござろう?」

「そうそう。せめて後5…いや2年待つべきだわ」

「…500年にまけて欲しい」

「却下でござる」

「あの忠夫が我慢できる訳ないじゃない」

何気に人格を否定するタマモに半眼の視線を送りつつ、天龍の隣に腰掛けている忠夫は美神から今日の話聞いてる。

おキヌが淹れてくれたお茶に外を駆けた体が芯から温められる幸せを感じ、お代わりを所望した彼に微笑みながら急須を傾ける少女のコメカミはほんのりと赤い。

まだちよつと痛いそれを表に出さずに笑顔を見せる、それもおキヌの強さであろうか。

「へー、意外に二人ともちゃんとやれたんすねえ」

「ギリギリ及第点かしら。ま、あんたも学校いかなきゃならないしねー」

「愛子に百合子さんへの連絡先を知られたのが致命的つすよ……」

保護者への連絡先を確保した彼女は、それが一番の特効薬である事に気付いていなかったが。

此処に連絡すると言えば万難を排して登校せざるを得ない、そんな凶悪な物なのだ。

「明日は土曜日だしゆっくり休めますけどねえ」

「当然依頼入ってるわよ」

「あ、やつばし?」

湯飲みを啜りながら片手でひらひらと書類を振る美神に、忠夫は苦笑いを浮かべて答える。

「なーに? 嫌な訳?」

「違いますって。食い扶持増えてんすから頑張るつす!」

疲れた様子も見せずに力瘤を作る忠夫に、何となく笑いを誘われた。

くすくすと零れる口元を隠しながら、美神は楽しげに目の前の半人狼を見つめてみる。

頼りなさそうなのに、何とかなるかなとも思わせる彼に、気持ちのままにやや演技過剰の台詞を贈る。

「ま、頑張りなさいな。お父さん？」

「美神さんがお母さんになつてくれればほかもうげきゆ」

とち狂つて飛び掛つてきた阿呆をパンチで撃墜し、くしゃくしゃになつた書類を机に置いた。

途端に突き刺さる幾つもの視線。

顔を向ければ、半眼とジト目が4つほど。

ちよつと腰を浮かせかけた美神の目の前で、額を寄せ合い討論開始。

「やっぱり餌付けでござつたか」

「どーするのよ。現有戦力じゃ正直キツイわ」

「…弱点を突くのが定石」

「まだ大丈夫です。美神さん意地っ張りですし」

聞こえよがしにぼそぼそと囁る4つの頭を睨み付けながら、どーしてやろうかとかめかみを擦りながら、とりあえず神通棍を取り出した。

——和やかな夜は、そこまでだった。

——そして、暗い夜が来る。

倒れ伏していた忠夫が跳ね起きた。

神通棍を振り上げていた美神の動きが止まった。

徹底抗戦の構えを取ったシロとタマモが、一瞬で顔を蒼褪めさせた。

クツシヨンを両手に持ったおキヌが、ぽとりとそれを床に落とした。

ソファアの陰に隠れて忠夫に接近していた天龍の瞳が、窓から覗く夜空に釘付けになった。

——世界が震える、夜が来た。

その瞬間、世界の全ての意思あるものが、十二カの悲鳴を耳にした。

靈力の有る無しに関らず、感覚の程度によらず、勘が鋭いかどうかさえも意に介さず、誰もが何もかもが全てが、それを魂で感じ取った。

——何かが、来た。

——嵐が、来た。

それだけが、はつきりと、分かった。

人狼の里で――。

「長老、長老っ?! あれが、何で?!」

「退け、退くのじゃ!!」

「女子供を最優先に! 闘える男は刀をとるでござるっ!!」

妙神山で――。

「…猿爺。ありや、なんだ?」

「ヒヤクメ、分析できるか?」

「出来ればとづくにやってるのねえっ?!」

ヨーロッパの魔王の根城で――。

「侵入者・あり。防衛装置・3割まで・破損」

「…気分の悪い物を見せよるわ」

「浸透・阻止成功率・12%――防衛装置破損率・5割を超えました」

オカルトGメンの一室で――。

「そうだ、直ぐに出てくれ！ 現状の把握を最優先に！」

「西条先輩！ 内閣府からですっ！」

「回してくれ！ はい、西条で…は？ …馬鹿な、なんであそこが最初に狙われるんですかっ?!」

とある基地で――。

「警戒態勢を取れ！ 総員直ぐに叩き起こせ！ 命令が下ったら即動けるように…何だ今の爆発はっ?!」

「司令、倉庫が、倉庫内の動ける奴が全てやられましたっ！」

「…何が、起こってるんだ」

満遍なく、夜が降りた。

『さあ、始めよう』

『ここが、これからが、終結だ』

『長い長い一日が、幾星霜を重ねた一瞬が、
答えを導く夜を呼ぶ』

「夢の終わりの、始まりだ——」

第弐話 『だけど彼らは月に哭く』

「き、気味悪いわね……」

最低限の灯りだけで満たされた通路を、足音を立てないように抜き足差し足で進む一人の女がいる。

頭部から伸びた触覚を頻繁に動かしつつ、前後に気を配りながらこそそと進むその姿は、一言で言えば不審者だった。

何処から調達したのか唐草模様のほかかむりまで被ったルシオラは、今、一人でアシタロスの居城の地下部をスニーキングしている真つ最中である。

短い間とは言え、ここで生まれ育った彼女でさえ知らないその通路は、人気の無さと静けさから反するように、埃一つ落ちていない。

ゆつくりと更に下層に向かって傾いている滑らかな床を踏みしめ、ルシオラは曲がり角の壁に静かに張り付いた。

本人が意識できる限りの最上限の注意を持って、触覚だけを曲がり角の向こう側にちらりと覗かせる。

「よし、誰もいないって」

誰に言い聞かせる訳でもなく漏れた言葉は、己の不安を消す為のものだっただろうか。

薄暗闇に沈む通路に頭を出し、抜き足差し足忍び足。

彼女の脳裏にはもみ上げの長い怪盗のミュージックがかかっていたとかいないとか。

通路の先に全神経を集中させ、こそこそと歩くルシオラ。

だが。

「うわきゃっ?!」

『あだっ!』

いきなり足元から軽い衝撃と、聞き慣れた声が小さく響く。

何も無かった筈の通路に、縦横1M程の四角い何かが転がっていった。

恐る恐る視線を落とした彼女の足元には、土色の古代人形がうつ伏せに倒れている。

「…土具羅様? 何でこんな所に」

『…いや、そのな、あー。お、お前こそ何でここに?』

二人の視線が交差する。

僅かな沈黙が蟠り、探るような表情を互いに浮かべ、同時に口を開いたその瞬間。

『ポッポー』

曲がり角の向こうから、そんな間の抜けた声が響いた。

瞬時に土具羅を抱え、天井に張り付くルシオラ。

そのルシオラの口を抑え、静かにしろと必死の態度で示す土具羅。

今度は奇妙な沈黙が発生し、互いの間にきよとんとした雰囲気の流れ出す。

ともあれ、眼下を数体の埴輪兵が通り過ぎ、通路の向こうに消えた後、暫く様子を窺っていたルシオラと土具羅は安堵の溜め息を突きながらゆつくりと降下した。

「もしかして…土具羅様も？」

『不本意ながらな』

言葉少なに呟いて、不思議そうな表情を浮かべるルシオラを余所に、土具羅は埴輪兵達に踏み潰されていたそれを手に取った。

あちらこちらをひっくり返して点検し、穴や傷が付いていない事を確認した土具羅は、今度はそれよりも大きな箱をルシオラに手渡しつつ、手早く己の分を再び組み立てにかかると。

『使つとけ』

「…何ですか、これ」

『アシユ様がお作りになられた迷彩装備だ。効果の程は今さつきワシを蹴り飛ばして知っただろーが』

背中越しに聞こえたその言葉に、ルシオラは暫し逡巡する。

彼女でさえ蹴飛ばすまで全く気付かなかったのだ。

もしこの通路がもつと広く、足が引つかからなければ——確かに全く気付かなかっただろう。

しかし。

だがしかし。

『目的は同じのよーだしな。ほれ、さつきと行くぞ』

「うう…：かつこわるーい」

『ぐだぐだ言うなっ！』

手渡されたそれ——ダンボール以外の何物にも見えないそれを組み立て被り、彼女は渋々四つ足移動を開始する。

ダンボール内部に設けられているモニターには、周囲の状況や目の前に行く土具羅がはつきりと見え、更には暗視装置と通信装置まで付いている手の込み様であるが、それがダンボール一枚分の中にあると思うと何となく心細い。

さつきまでは生身の単独潜入だったと言うのに、装備が手に入ったら入ったで不安が変わらないのは何故だろう。

ともあれ、脳内ミュージックを固形蛇に移行しつつ、ルシオラと土具羅は再びこそこ

そと移動を開始するのだった。

「…とゆーか土具羅様、よく埴輪兵に蹴り飛ばされませんでしたね？」

『…そー考えると実は危なかつたなワシっ?!』

「偶々ですかっ?!」

危なくなつたら目の前の土偶を囮にしよう、でもこのダンボールは貰つとこうと思いつつ。

ともあれ、幸運はルシオラ達を見捨てなかつたようである。

通路は、意外にあつさり終わりを告げた。

百数十メートルも進んだらどうか、手足が汚れる事は無くとも擦り傷ができたら嫌だなー、とつらつら考えていたルシオラの目の前のモニターから、いきなり土具羅の姿が

消えたのだ。

「——え？」

慌ててダンボールを持ち上げ辺りを見回す。

何度か被つてモニターを覗いてみる。

前方に広がるのは、何処までも続くようにさえ見える、障害物も何も無い一直線の通路。

だが、居ない。

「土具羅様……？」

慎重に辺りを窺いながら、ゆっくりと前に向かって歩き出すルシオラ。

その一歩が、ある一線を越えた瞬間。

「……っ?!」

視界に光が溢れた。

明らかに人工物のその光を、掌で顔を庇つて防ぐ。

『何で、あれが、ここに……？』

明るさに慣れない視界の斜め下から、呆然とした土具羅の眩きが耳に入る。

その存在に僅かな安堵を覚えたから、と言う訳でもないが、徐々に視界にぼんやりと何かが写り込み始める。

「…何ですか、あれは」

返事は無かった。

ルシオラも、返答を期待していた訳ではなかったのかもしれない。

眼下に広がるのは、異様な程広い空間と、そこにさえ埋まり切らぬように所狭しと設置された機器の数々であった。

そして、その端から端まで1kmはあろうかという正方形の中央には、巨大な物体がそびえ立っていた。

ルシオラは、始めそれが天井を支える柱かと思ったのだ。

だが、視線を上に向けるに従い、それが間違いだったと知らされる。

真つ直ぐに上に向かって伸びていたのは柱ではなく、細い何かの集合体であり、それは天井に付くよりも早く花咲くように広がっていた。

半球型に広がった末端からは、微かな重い音が響いている。

何かの為に作られた物でありながら、何の為に存在しているのか分からない。

そんな思考が僅かに掠め、それを知っているであろう土具羅に尋ね様と視線を落とす。

だが、土具羅は既に移動を開始していた。

姿を探して辺りを見回せば、左にあった階段を慌てた様子で駆け下りていく直属の上

司の背中がある。

『あれは、あれはもう必要無い筈の、とうの昔に廃棄した筈の計画ではなかったのですか……!』

全速力で駆け下りていく土具羅の眩きに首を傾げつつ、ルシオラも地面を蹴って宙を飛ぶ。

その視界を掠める、鈍い輝きがある。

ふと、何かに釣られるように視線が飛んだ。

「……?」

先程までは視界の殆どを埋めていた存在があつた為に気付かなかつたが、それもまた巨大な物である。

何せ、そのむやみやたらに広く高い場所にあつてさえ、一際異様を放つほどの大きさである。

天井までの正確な高さは不明だが、スレスレにまで伸びたそのカプセルの中には、今は鈍く光る何かの液体と、時折湧き上がる泡以外には何も入っていないかつた。

だが、それを目にした瞬間に、ルシオラの背中に悪寒が走る。

其処には、何かが居たのだ、と。

「ど、土具羅様ーっ! 置いて行かないでーっ!!」

背中に張り付いた嫌な感触を振り払うかのように、慌てて眼下の上司に向かって加速した。

第弐話『だけど彼らは月に哭く』

時間は僅かに巻き戻る。

山の向こうから昇り始めた僅かに欠けた月を眺めながら、尻尾を生やした和服を着た細身の青年は溜め息を吐く。

その動きに釣られるように、背中に背負った幾つものビンがぶつかり合って抗議のよ

うな音を立てた。

肩に食い込む紐の痛みに顔を顰めつつ、青年は再び移動開始。

「全く、酷いよなー。だーれも手伝ってくれないだもんなー」

ぶつぶつと愚痴を零しつつ、獣道を慣れた風に駆け上がっていく。

ジャンケンで負けた己が悪いのだが、何故か貧乏くじを引く割合が高いのは何故だろう、とつらつら考え足を運ぶ。

「あ、でも菊さんは流石だよなー。匂いだけでも良い酒つてわかるからー」

背中から漂う芳しいそれに顔を緩めつつ、彼は麓の売店に勤めるお婆さんに感謝する。

何せ、時折誰も居ない筈の山から降りて来る、古風な服を着た人狼の里の者達と肉や魚、手暇にあかせて作った工芸品もどきを色々物々交換してくれる奇特なお方である。

そこまで出かけるのは里に住まう人狼の中でも、犬塚犬飼の問題“兎”コンビと、彼を含めた何時もの四人組ぐらいではあるが。

長老も始めはあまり良い顔をしなかったが、生活雑貨は里の女性陣には大変好評であったし、何より交換するお酒が極上ものの地酒ばかりであったので、数回も繰り返す内に黙認してくれるようになっていた。

明日は満月、宴の夜。毎回大いに歌って騒ぐ彼らに、背中に背負った酒は今回も大好

評間違いなしである。

「楽しみ楽しみ、っとー」

それにここ最近は美衣が出してくれるおつまみも秋の装いと共に豪華になり、例によつて例の如く次の日足腰立たなくなるまで飲むものが続出するであろう事も疑いない。

よくつるんでいる3人組のうちの一人ではないが、思わず零れた涎を慌てて擦り取りながら、彼は慎重に速度を落とした。

目の前には目印代わりの巨木が横たわっており、その姿が漸く帰ってきたと一心地つかせてくれる。

前回の味を記憶の中で反芻する内にもうかなりの高さまで昇っていた月を眺めつつ、彼は懐から通行手形を引つ張り出した。

「やっ——」

里を守る結界を通り抜ける鍵を掴む手が、動きを止めた。

物音一つしない。

日頃なら出迎えるようにさざめく葉が擦り合う音も、深まる秋を楽しむような虫たちの声も、何かに強制されたように沈黙していた。

本能が、最大限の危険を知らせていた。

一挙動で瓶を放り投げ、靈波刀を展開する。

一瞬で汗に塗れた顔で、周囲を超感覚で警戒する。

1秒、2秒、3秒。

何も起こらないのに、本能の叫びだけが収まらない。

変化は、5秒目で起こった。

がさり、と眼前の茂みが揺れ、小さな獣を吐き出した。

思わずそちらに向けた靈波刀を、安堵の溜め息とともにゆっくり持ち上げる。

現れたのは、子犬ほどの大きさの「獣」であつた。

「は、はは。気のせいか——」

引き攣つた笑い声は、震える靈波刀の剣先を静める役にすら立たない。

それでも必死で悪寒の原因を探ろうとして、漸く思考が違和感に追いついた。

——馬鹿な。人狼である自分が、超感覚を最大限に發揮しているこの状況で、子犬が、

ここまで、接近している——！

瞬時に飛び退いた視線の先には、まるで此方を意に介さず、そこにある何かを見ているそれが、居た。

別に意図は無かつたのだろう。

ほんの少しだけ、まるで転がった石を眺めるような無関心さで、一瞬だけ視線が彼に

向けられた。

「——っ?!」

違う。

違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う!!

あれは。

あれは、小さな「獣」などではない。

一度目にした。

あれを知っている。

あれと似たものを見た筈だ。

あれは——狼だ。

あれは——。

「……!!」

思考はそこまで、後は体が勝手に動いた。

霊波刀もそのままに、空いた手で持っていた通行手形を、後方に押し付けるように突き出す。

空間が、結界が向かえるように門を開け、迷わずそこに飛び込んだ。

彼が必死で里を駆け抜け、気付いた時には長老の家の前だった。

腰に刀を下げた人狼達が、駆け込んできた青年を取り囲む。

「ちよ、長老は、ごほっ?! ちよ、長老は居られますか?!」

「ごほっじゃー! 何があつた?!」

各々何かしら感じる物が在ったのだろう。

戦える者達、里の戦力全てが長老の家の前に集まっていた。

それぞれの瞳には警戒と戦意、そして確かな恐れが見て取れる。

咳き込む青年に向かつて美衣が水の入ったコップを差し出す、その時も惜しいとばかりに、青年は痛む肺に必死で酸素を送り、搾り出すようにそれを告げる。

「ごほっ! あ、あれが、あれが、またっ!」

「落ち着け! 何が、何が出たというのじゃ!!」

長老の一喝に、パニックに陥りかけていた青年の瞳が焦点を取り戻した。震える指先で、駆けてきた方向を指差す。

皆の視線がそちらを向く中、長老と、犬塚父と、犬飼ポチだけが、青年の言葉にのみ集中していた。

「——フェンリル狼ですっ!!」

応えるように、夜の闇に包まれ始めた森に、巨大で虚ろな咆哮が響き渡る。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

咆哮に視線を向けた人狼達の前で、その影は一気に膨れ上がった。

一瞬で木々の間から耳が覗き。

次の瞬間には鈍く輝く瞳が見え。

息を呑んだ時には、木々の頂上部分から、その胸が現れていた。

その魔狼は、ただそこに佇んでいる。

ひたすらに、巨大であった。

かつて、彼らが戦ったフェンリルは、今、彼らの傍でグーラーと自分より小柄な狼に押さえられている元陰念のフェンリル狼である。

彼でさえ、あのそびえ立つ巨体に比べれば、半分ほどの大きさでしかない。

誰かの咽が、ごくり、となった。

それを引き金にしたように、人狼達の間には恐慌寸前の声が響く。

「長老、長老っ?! あれが、何で?!」

「退け、退くのじゃ!!」

「女子供を最優先に! 鬨める男は刀をとるでござるっ!!」

誰の声かも分からぬような、突如訪れた混沌の中、必死で叫ぶ長老の声と、刀を抜いて構える犬塚、犬飼の声が続く。

結界に阻まれて見えない外側から、まるで全てを見通すかのように、巨大な魔狼は静かな瞳で其処に在る。

「落ち着くのじゃ! 里の結界も竜神族の結界で強化されておる! 時間稼ぎくらいにはなる!」

グーラーと美衣が視線を逸らせぬままに長老の言葉通りの行動を取り始め、未だに唸りつづける陰念を引き摺りながら後退し始める。

長老宅の前に集まっていた者たちが、各々刀を引き抜き構える。

それら全てを嘲笑うように、僅かに口の端から牙を見せたフェンリルは、ゆつくりとその顎を開いた。

「まさかつ?!」

犬塚父の声が響くと同時であつた。

限界まで開かれた顎が、勢い良く、結界に齧り付いた。

均衡すらなく、抵抗すら見えず、時間稼ぎなど儂い夢であると宣言するように、里を護り続けた結界は――

――月の光ごと、『喰われた』。

「し、まった！ そー言えばこんな能力持ってた！」

「そ、そー言う事はさっさと思い出すござるよっ！」

「犬飼だつて忘れてたじゃねーかつ！」

「言われれば思い出してたでござるっ！」

「ええいこの馬鹿どもは喧嘩してる場合じゃ無からうがっ!!」

地面に膝をつく者、倒れ伏してうめいている者——里の戦力は、一瞬にしてほぼ完全に奪われていた。

突き刺した刀に縋って何とか倒れこむのを防いでいる二人に、長老の声が叩きつけられる。

だが、正直な所、長老にはこんな状況で打てる手は無かった。

敵は人狼の力の源、月光を喰らう魔狼なのだ。

だがしかし、あの時とは違う事がある。

違う者が、居なかった者が、居た。

「み、い…殿！ グーラー殿！ 月光石をつ！」

「は、はいっ!!」

「分かったよ！」

長老の声に反応して、硬直していた美衣が長老の家の中に駆け込んでいった。

あの時、ヨーロッパの魔王が届けた月光を固めた霊石がある。

美衣とグーラーが居なければ、タマモも忠夫も居ない現状では、それを知っていたとしても取りに行くまでに時間を取られただろう。

だが、今は幸いにも彼女達が居る。

結界を喰らい、月光を喰らった魔狼は、未だ動きを見せずに静かなまま。

何を考えているのかは分からないが、動かぬ今だからこそ、まだ挽回できる機会がある。

「長老さん！」

「ほら、あんた達も！」

もしもの時の備えとして——流石にこんな状況は予想外もいいところであるが——倉に仕舞わず長老宅に置いておいたのが功を奏し、美衣達が持ってきた月光石を渡していく。

その数、9個。

フェンリルであつた陰念との戦いに参加した者達が持っていたそれだけが、里にある全て。

首に掛け、立ち上がった長老の周りでは、かつて戦つた者達が優先的に渡され、そして長老に追隨するように立ち上がっていた。

「グルルルル……」

「キューン……」

その長老の横に、元がフェンリルであつたが故に、特に顕著な反応を見せる2匹の狼

が並び立つ。

陰念は激しい敵意を。

彼より小さな雌狼は、はつきりと見て取れる脅えを。

二匹の頭を押さえるように手を置いた長老は、視線をフェンリルから外さぬままで、後方の人狼達に、はつきりと告げる。

「退け」

「…はっ？」

何時でも駆け出せるように構えていた人狼達は、その言葉に虚を突かれた。

行け、でも、行くぞ、でもなく。

告げられた言葉は、逃げる事を命じる物だったから。

「ちよ、長老！ しかしっ！」

「——黙れ小僧ども！ 忘れたか！ この里には、女子供も居るといふ事を!!」
大喝。

前回のフェンリル戦でも、舞台となった森には大きな被害が出ている。

それがもし、この里で再現されれば。

その上、あの巨体である。

動くだけで何かを破壊し、攻撃ともなれば戦闘力の有る無しに関らず薙ぎ払える。

故に、長老は。

「聞け！」

里の頂点に立つ長は。

「動ける者は動けぬ者を連れ、この里から離れよ！」

人狼達を率いる者は。

「——今宵、この時、里を捨てて皆を取る!!」

決断する。

ざわめきは一瞬、迷いも、惑いもまた一瞬。

言葉は里全てに行き渡る。

迷いも惑いも、消えずにある。

だが、それを抱えたままで押し込める。

他の何者が発した言葉であつても否定しただろう。

必ず反論しただろう。

だが。

長老なのだ。

長であり、この里で最も強き戦人であり、最も長くこの里で生きた者なのだ。

「犬塚！ 裏の大八車持って来るでござる！」

「応！ ほら陰念お前が引くんだった！」

「ギャウツ?!」

「つべこべぬかさず！」

「とつとと来いっ!!」

ずりずりと引つ張られていった陰念はともかく、人狼の膂力を發揮した動ける者達が未だ身動きをとる事さえままならぬ者達を連れて行ったのを気配で察しつつ、長老は沈黙を守るフェンリルを睨み付ける。

「長老……!」

「グーラー殿か。早く逃げなされ」

息子と一緒に避難した女性と子供達のところに飛んでいった美衣を追いかけようとしたグーラーが、フェンリルの前に立ったままの長老に声を飛ばす。

だが、帰ってきたのは、まるで根を張り巡らさせた古木のような背中と声だった。

「…死ぬんじやないよ!」

「ふおふお、無論。美衣殿の作る朝飯が楽しみじゃしのお」

殿を務めるのは、その群れの中で最も強い者。

悲壮感の欠片も無く、その小柄な背中中は、ただそこに立っていた。

任せろ、と。

信じろ、と。

語らずとも、その背中は何よりも雄弁であった。

だからこそ、人狼達は迷いを押し込められた。

だからこそ、動けるたった8人の狼達と猫又と鬼では足りないかもしれない皆を運ぶ為、全員が迷わず走り出せた。

聞こえなくなった足音を、苦笑いで送りながら、長老はゆらりと刀を抜く。

「さて、待たせたの」

フエンリルの巨軀から立ち昇る霧囲気が徐々に変化しつつあった。

言うなれば、それまでの静観は観察。

獲物の動きを見て、どのように狩れば最も効率良く事を運べるのかと凶る狩猟者のそれ。

そして、いま纏う霧囲気は、襲い掛かる為に力を蓄える獣のそれ。

「やれやれ。長も楽ではない」

携えるのは刀が一本。

支えるのは己が矜持と磨きぬいた技術と信念。

そして、通さぬという鋼の意志。

『——成る程。脆弱な蟻の群かと思つたが、それでも狼は狼か』

遠く離れた筈のフェンリルから響く、魔狼と呼ばれる個体とは思えないほどに落ち着いたその声に、長老は口元を歪めて応える。

「カツカツカツ。獣には分からぬよ」

『獣と嘲笑うか？ それにも成れぬ弱さを嘆く前に』

「成れぬ？ 戯けが。大戯けが。獣を過ぎて畜生にでも墮ちたか終わりの魔獣」

『戯け？ それを戯言と言うのだ。勝てぬ戦いを挑む愚か者』

分かつている。

分かつているとも。

時間稼ぎに命を掛けても足りぬくらいの相手である事くらいは。

だが。

「尻尾を巻いて逃げた獲物を狩るしか能の無いケダモノの、鼻っ柱を折るには十分じゃ」

『ふ、ん。覚悟は出来ているとでも言いたいのか？ 弱者』

「覚悟なぞ——」

そう、覚悟なんてものは、里を任された時から、根付いている。

育つ子らを、増える笑顔を、里に満ちる幸せを知った時から、根付いた種は咲いてい

る。

「——とうの昔に、ここに有る」

どん、と胸を叩き、刃を構える。

じつとりと掌を濡らす汗が、どれほど絶望的な状況にあるかを教えてくれる。だけども。

住み慣れた場所が壊れると知りながらも、元氣と威勢だけは良く、相も変わらず大騒ぎしながら離れていく声が背中を押す。

馬鹿息子どもめが、と苦笑を零し、頑張れよ、と祈りを唱え。

己の牙に、力を籠めた。

「人狼の里、長老——この壁、あたり容易く抜けると思うなよ……」

——決着が付いたのは、それから数時間も経った頃だった。

とす、と軽い音を立てて、長老は焼け焦げ、倒れた古木に背を預けた。

見渡せば、里の建物はその事如くが焼け崩れるか踏み潰されるか、若しくは原型も無いほど碎かれるかして無残な様相を呈していた。

胸元に下げた月光石の光は薄れ、宿していた満月の輝きも濁りを見せている。

中天にあつた月は、今は西の方角に沈みかけ、その下弦を山の端に引つ掛けるのみ。

「……ふ、う」

搾り出すような溜め息と共に、碎けた刀の柄を放り投げる。

ふと、鼻を擽る香りが漂ってきた。

手探りで匂いの下を探れば、指先に硬質で冷たい何かが微かに触れる。

古木の傍らから、半ば土に埋もれたようにしてあつたそれを引きずり出せば、中で液体がちやぷんと揺れた。

「……粋な計らいじゃ」

何とか動く右手で口元まで瓶を運び、蓋を歯で抉じ開ける。

下品ではあるが、左手がもう動かないのだからしょうがない。

見咎めるような奴らも居らん事だし、と、この期に及んでそんな事を思い浮かべる己に笑いが込み上げた。

心地良いそれごと飲み干すように、口元にあててラツパ飲み。

「ふお、ふお。効くのお」

蒼を通り越して白く見える、それより白い髭の向こうの表情には苦味が無い。

傍らにごろりと投げ出されている、巨大な狼の左前足を眺めつつもう一飲み。

八房持いつたフエンねリルを超えた、ほぼ一瞬で繰り出されるの爪の九連撃と、何よりも強い身体と魔力を持った牙を持つ巨狼は、間違いなく長老の人生で最も強い相手だった。

戦果はフエンリルの前足一本と里からの撃退。

代償は長いこと付き合ってきた刀と——。

「やれやれ、老骨にはちいと厳しかったわ」
刀と。

「厳しかった、のお」

——前足と引き換えに脇腹の殆どを持っていった、フエンリル最後の一撃。

流れ出る血は既に殆ど無い。

送り出す心臓が役目を終えかけているからでもあり、流れ出る物が尽き掛けているからでも、ある。

「しかし、実に無念じゃ」

言葉とは裏腹に、表情には屈託が無い。

「美衣殿の朝餉、食えんかったわ」

ふと、自分の言葉に驚いたように、酒瓶を置いて動く右手で膝を打つ。

「——かーっかつかつか！ そうかそうか！ 成る程確かにその通り!!」

快活な笑い声が、静かな山中に木霊する。

我が子らにも聞こえただろうか、もう大丈夫だと伝えるこの声が。

どうだ見たかと、護り抜いたぞと己を誇る、人生最良の笑い声が。

「他に無念な事が無いわ！ 実に、実に実に愉快爽快、非常に結構!!」

聞こえているか、この声が。

「…感謝するぞ、我が子らよ。何、一つくらい無念があるほうがええわい。ワシもまだまだ現役じゃったと言うことよ」

だから、哭くな、我が子らよ。

「良い月じゃのお。沈みかけているのが少々残念ではあるが」

こんなに良い気分なのだから。

「ああ…そう、笑顔が良い。何よりも、良い」

夢幻であつたとしても。

「良い、のお…」

いついつまでも。笑って騒いでいておくれ。

——そしてゆっくり、笑いながら目を閉じた。

深い深い森の中。

人も寄らぬ山の中。

老いた狼の声を聞き、息を荒らして戻った老いた人狼の愛しい子らは。

大きな声で、泣きました。

第参話 『だから彼女にまた会う日まで』

静かである事と無音である事は、必ずしもイコールで結ばれる訳ではない。

例えば誰も居ない山奥の川辺に居たとしよう。

近くを通る車もおらず、微かに聞えるのは風に揺れる木の葉とせせらぎの音だけ。

それを静かだと感じてても、音が無いとは言わない。

静かだということは、音が少ないそれ以外の何かを感じさせるものなのかもしれない。

「…何か歌でも歌いましょうか？」

『お前潜入工作に向いとらんなー』

「ほら、賑やかなら雰囲気も違ってくると思いませんか？」

『違ってどーなるもんでも無からうよ』

根本的に間違っていた。

月に吼える 第三部

階段を降りきつてしまえば、後は広間の中心に立つ建造物まで一直線の通路が引かれていた。

その場所の広さに応じて通路の長さも幅もトラックが3台横並びで通れそうなものがある。

一歩踏み出すたびにカツン、カツンと硬質な音を立てる靴音に始めは警戒の意味も籠めて宙を飛んでいたルシオラだが、10分も歩かないうちに止めた。

全く誰にも会わないのだ。

城の地上部分、そして歩いてきた距離から想像される大体の構造から、この位置がおそらく中枢部分といっても間違いないだろう。

だが、侵入者が二人ここを歩いているというのに警報が鳴り出す様子も無ければ、誰かとすれ違う様子も無い。

埴輪兵の一体くらいとつ捕まえて情報を聞き出そうかな、と思っていた彼女にとつては少々残念な部分でもあったが。

それにしても、トルシオラは通路の横を見上げた。

まるで区画を区切るように、3階建てのビルほどはありそうな四角い箱が通路の先まで並んでいた。

「大きな箱……。何が入っているのかしら？」

『……あそこに答えがありそうだな』

土具羅の指差す先には、通路側に向かつて口を開いた『箱』があった。

他の箱と違う部分といえば、その少し大きめのドア程度の、ポツカリと開いた穴くらいであろう。

足早に近寄ったルシオラは、周囲の空気が急に冷え込んだのを感じ取る。

寒げに二の腕を擦る彼女の横をさっさと通り抜けた土具羅が穴の向こうを覗き込んだ。

『やはりか……。一体何をお考えなのだ、アシユタロス様は！』

内部を照らす明かりも無いため、ルシオラの瞳には壁のように入り口を閉じる闇しか見えはしない。

だが、押し出されたような上司の言葉には、困惑を通り越した呆れと——僅かな怒りがあったように思えたのは気のせいだっただろうか。

ややあつて首を入り口の向こうから引っこ抜いた彼は、話しかけるなどという雰囲気

纏いながらゆっくりと歩き出した。

肩を怒らせ、短い足でのしのしと地面を踏みしめながら、しかも頭頂部から放射能混じりの白い煙を吐き出す土具羅に話しかけたいと思う部下はあんまり居ないだろう。

その背中を見送り、寒さのために白く染まる息を吐きながら、ルシオラも内部を覗き込んだ。

やつぱり暗闇に満たされた内部は、内に抱えるものを見せてはくれなかった。

面倒くさげに恥ずかしげに、どこからとも無くダンボールを取り出し組み立てる。

しゃがまぬままにそれを被りモニターを見れば、それは簡易な暗視装置だ。

モニターを覗き込んだルシオラは、驚きのあまり硬直した。

モニターの向こうに見えたのは、まるで棺桶のような、人一人分の形の空間を持った空っぽの細長い箱だった。

巨大な箱の中に、直立した細長い箱が細い通路を挟んで隙間もなく並べられ、聳え立つ光景は、一瞬自分の位置を見失いそうになるほど不気味な光景であった。

それが全く活動しておらず、内部に何か居た時の物であろうか、凍えるような冷気を吐き出しているともなれば、とつとと離れたと思うのが当たり前であろう。

彼女もその通りに行動しようとして、しかしモニターに映し出された文字列に足を止められた。

「…形式番号かしら。っていう事は、これ、機械…？　しかも人型の、だったらこの冷氣は冷却…辺りには見当たらなかったわよね」

一直線で見通しの良い通路、しかしこの箱から何かが出て来た様子は無い。

だが周囲の機械が停止しているのに冷氣がまだ残っているとところからすると、入れ違ったか。

「…え」

そこまで考え、ルシオラの額に巨大な汗が描かれた。

通路の横には、これと同じ何かがぎっしり詰まった箱が、碁盤目状に整然と、数え切れないほど並んでいた。

つまり、この中身もそれに応じた数が存在するということだ。

開いているのは目の前の箱だけのようにだが、中身を全て合わせれば一体どれ程の数になるというのか…！

「…ほ、本当に何を考えているのかしら、アシユ様ってば」

一歩踏み出す度に、薄暗いこの場所の中心に近づくごとに、不安だけが心に広がっていくようだった。

夜空を飾るのは、真円には僅かに足りない月と、ささやかに自己主張する幾億の星達。そして、時折森と山の中から輝く閃光ぐらいであつた。

閃光に追隨する轟音が、更に森の木々が焼ける匂いを誘つて弾け回る。

モニターの向こうの光景を呆れたように眺めていた老人は、黒いマントを翻えして立ち上がった。

「マリアー」

「イエス。ドクター・カオス」

苛立たしさと感嘆を半分ずつ混ぜた声音でマリアを呼んだカオスは、未だ外の光景を映し出し続けているモニターを最早一顧だにせず歩き出す。

常より僅かに早く動く足音に追隨するマリアは、全く表情を変える事無くその背を追う。

背後でモニターに一瞬何かの影が映し出され、寸暇の間も置かず放たれた火線が画像を粉碎した。

砂嵐を映し出すだけの平面がブラックアウトした後には、また別の方角からと思わしき映像が映し出される。

見る者もおらぬ画面には、ヨーロッパの魔王の基地を囲う森を焼く炎と、紅の隙間を縫うように駆ける影があった。

「実に不愉快、実に腹が立つ！ あの元助手は人の渡した設計図を何だと思つとる！」

「……ドクター・カオス？ 記憶が？」

「ふん。此処まで計画が進めばワシの記憶の封印など最早必要ないと言う事じゃろ。結局ワシは解呪の為に無駄な時間を使った訳だわい！」

苛立たしそうな態度はその為だろうか、とマリアは思う。

己の研究が無駄に終わったためか、と。

それとも無駄となった己の時間のためか、と。

だが、彼女の思考は即座に否を示した。

無為を知り、有為を知り、無駄さえ己の物とする。

そうやって、目の前の錬金術師は700年もの間自分を磨き続けてきたのだ。

「やはり・間違い・ありませんか」

「ああ。芦に渡した設計図から予想される外觀、運動能力、内装可能な火器、その他諸々。

他称の差異はあれど、その程度、見れば分かる！」

カオスは苦々しげに言葉を吐き出し、手のひらを叩きつける勢いでドアを押し開いた。

開かれたドアが悲鳴のような音を立て、同時に二人のたつ床がぐらりと揺れ、頭上からぱらぱらと僅かに埃が舞い落ちた。

既にこの場所まで振動が伝わり始めている。

カオスの基地として、相当の耐震システムが組み込まれたこの地下施設で振動が伝わると言う事は、「敵」にかなり深いブロックまで浸透を許しているということである。

マリアの娘たちに必用な物を運ぶ準備をさせ、マリアには残り少ない防衛装置の管理管制を任せて次々と潰される監視装置からの画像に見入っていたカオスが動き出したのは、そんなタイミングである。

「お急ぎ・下さい。敵集団は・ECMを・起動中。現在・マリアが保持している・施設内機器・残り僅かです」

「::のう、マリア」

「イエス。ドクター・カオス」

先を急ぐことを促された筈の、カオスの足が止まった。

放たれた声音は、酷く冷静で、平坦で、感情の籠らない物だった。

いや、感情が押し込められすぎて、全てが平坦になった物だった。

「最後に、お前の目で直接確かめてほしいんじやがの。ひとつ、頼まれちゃくれんかの？」

だが、その中に、確かにそれだけは無い、と。

それだけはあつてくれるなど祈るような響きがあつたのは、彼女にとっては気のせいではなかつた。

故に、何時ものように、彼女は肯定の一言を。

「イエス。ドクター・カオス。何なりと——」

囁くように、慰めるように、一瞬だけ、常なら活力に満ち溢れたその背中が、本当に疲れきつたように見えた父親から、その背中から目を逸らさずはつきりと告げたのだ。

「——アクセス」

カリカリと硬い板を引つ搔いたような音が響く。

広い通路、倉庫へ直接通じているその真ん中に、たった一人でマリアが立っている。真つ暗な通路の端から天井に吊るされたまま沈黙していたライトが、彼女の囁きに答えて光を放つ。

無機質な壁面に、どこか暖かさを感じさせる光が跳ね返った。

「——倉庫への・直通回廊・一時開放・対象の侵入を確認後・閉鎖…実行」

僅かに上に向かって湾曲した通路の向こうから、軋る音と共に熱を持った風が吹き込み、寸暇の間も置かず、再び閉じた事を示す轟音が響いた。

基地の中である意味最も重要な研究ブロックと、集めてきた資材を蓄えるブロックは極めて近い場所にある。

その為、その倉庫ブロックへ通じるこの通路にはそれこそ核シエルター並みに強固な隔壁が幾重にも設置されており、妨害電波などもここには届かない。

無論、進入を警戒したのではなく、実験失敗した時の被害を減らすため、ではあるが。

「目標・確認」

機械の殻。

メタソウルという彼女の魂を守る鎧。

そして、彼女の身体。

身体の彼方此方から、かちりかちりと音が響く。

内装された火器の、武装の、安全装置が解除されていく。

丁寧な整備と改良を受けたばかりの彼女の身体は、彼女の意思を余すところ無く汲み取り準備を整える。

何時もながらの完璧さと、整備を受ける度にどこかしら改善されていく、そんな気さえ彼女は感じていた。

システム的には変わらない。ハード面にも変化は見られない。

それでも、「気のせいかもしれないけれど」と、プログラムに全く関係の無いところで彼女は確かにそう感じるのだ。

そして、それを感じた後は、何故か分からないけれども高揚する事に気付いたのは何時だったのだろうか。

結構昔だったような、それとも最近だったのだろうか。

「無駄な思考」と「プログラムに無いモノ」。

それに葛藤するほど幼くは無い。ただ、マリアは有るがまま受け入れ、受け入れたままに在るだけだ。

高揚する気分を引き摺られるように、霊力伝達の経路を通った力が吹き出し始める。

静かに、力強く、しっかりと足を踏みしめ、迷いの欠片も躊躇の切れ端も無く、マリアは、目の前に「ブラスターを吹かせて」停止したそれに相對した。

「——初めまして、ね。『姉さん』」

「初め・まして——『テレサ』」

どこか似通った二人、それは当然の事でもあった。

同じ者によつて設計され、だが片方は設計者の傍らで永い時を過ごし、片方は設計図だけを設計者の友人に手渡された。

同じ設計者——ドクターカオスによつて形作られた二体。

姉妹機でありながら、今は敵対するものとしてここに在る。

「ふうん、ソフト面はデータ通り、本当に700年前のままみたいね……」

「敵対する・意思是・ありますか?」

「随分今更なことを聞くのね。それにインターフェイスもあんまり優秀じゃないみたい……なんでカオスはさっさと消去して新しく構築しなかったのかしら?」

「分からない者には・分からない・事です」

テレサと呼ばれた、長髪をポニーテールに纏めた彼女は、動きやすそうな短いスカートと豊かな表情が肩に書き込まれた番号に違和感を感じさせていた。

微かに怒りを浮かべ、舌打ちしたテレサは吐き捨てるように言葉を返す。

「…ふん。先に作られたからって分かった様な事を。——質問に答えて無かったわね。敵対？ そんな事考えてないわよ」

かちり、とテレサの腕から小さな音が響く。

僅かに眉根をひそめた MARIA は、警戒のレベルを最高度まで引き上げた。

センサーを最大限に駆動させ、相手の動きを観察する。

その顔が、更に顰められた。

「ECM・起動・確認。火器・安全装置解除音・確認。行動と・台詞が・合っていないようです？」

「あら、間違っていないわよ。「こつち」で作られた姉さんには申し訳ないけど、ハード面に差が有りすぎるのよね？ 敵対も何も、勝負になるわけないじゃない」

余裕を持って、微笑さえ見せながらテレサは言う。

MARIA が作られた時期は、中世——オカルトの最盛期といわれる時代である。

ハード面でそれを超えるとなると、ほぼ不可能であろう。

何故なら、当時 MARIA 姫とそれなりに豊かなパトロンを持ち、尚且つ当時のオカルトの隆盛とカオスの錬金術を持って、当時手に入れられるだけの物を MARIA は使用している、いや、いたのだから。

設計図は同じとなるのだから、あとは構成素材と内部機構の改良がハード面の改良だ

ろう。

だが、あの当手を越える物となると、現在の人界では手に入れることすら難しいものばかりで、あつても非常に高価かつ稀少である。では――

「ECMをこれだけ近距離で、しかも全開でかければリンクも取れないでしょ？ それじゃ、さよな――」

「貴女は・随分と・無駄口が多い。それほど・不安ですか？」

「――何が言いたいのかしら？」

「優れたインターフェイスも・感情を読まれる為に・在るわけでは・無いと言うことです。不安は・無駄口を・増やします」

ぎり、と歯軋りの音が聞えた。

苦々しげにマリアを睨むテレサの表情には、誇りを傷付けられた怒りと自分も気付いていなかったそれを見抜かれた動揺が見て取れた。

わざとらしくため息をついたマリアは、その表情の陰に隠してそれまでの会話をデータに保存し、『送信する』。

装備したばかりで運用データの蓄積が足りず、効率的な使用など不可能だが、極近距離ならば十分だろう。

データを受け取った事を示す小さな緑色の光が真横の壁に灯り、交信中を表す点滅を

何度か繰り返した後、消失する。

「少しばかり・硬い？　だから・出力も・上げられる？　剛性が高いから・多少無理しても・平気？　——それが何だと・いうのですか」

「貴女より強いつて言っただつもりだけど？　姉さん」

大きく溜め息をついた。

少しばかりワザとらしかったかも知れない、と大根役者ぶりを僅かに恥ずかしく思いながら。

何も分かっていない妹に、囁いた。

「度し難い。——それは、『消耗品』の・考え方です。それでも・ドクター・カオス・ブランド・ですか」

「…生憎、700年も道具を使い古す程、節操無しの貧乏性がマスターじゃ無いのよね」
マリアの視線が強さを増した。

受け止めるテレサの瞳にも、はつきりとした敵意が宿りだしている。

それまでの油断交じりの物ではなく、純然たる暗い意思。

テレサも何処まで自分の台詞に納得できているのだろうか。

いや、もしかしたら本当は納得などするつもりも無いのかもしれない。

彼女の在り方は、それ自体がそれを否定するものなのだから。

「これ以上話しても無駄かしらね」

「ええ。なかなか・有効な・情報が得られた以外は」

「：持ち帰れなければ無駄でしょう。壊れた人形は、誰にも遊んでももらえないわ」

「自分で自分を繰る糸を知る・操り人形と・最初から・糸さえ与えられなかった・人形に——差は、あると思いますか？」

苦笑い。

どちらとも無くもれたそれは、二人の姉妹にそっくりの表情を与え、しかし互いに確認させて消え去った。

「さあね？」

カツン、と硬質な音が響く。

足を開いて向き合った二人は、視線を絡めて静かに相手をサーチする。

互いに持つ火器の威力が、互いの装甲を打ち破れないとは考えていない。

先に相手の致命的部位を、より素早く、より正確に射撃する。

テレサがマリアをにやりと睨みながら、右腕に内蔵された銃の安全装置を音を立てて掛け、再び外した。

答えてマリアも右腕の銃に安全装置を掛け、外す。

——使用する火器は右腕のみ。

己の性能が相手より優れていると、姉よりも早く正確だと言外に告げる妹の行動に、姉は当然の如く答えて見せた。

「行くわよ、姉さん。700年前の骨董品——」

「訂正を。この身は常に・最高峰。何時・如何なる時も・ドクター・カオスの・最先端にして最精鋭」

「妙な事にこだわるわねえ…」

少しだけ、楽しそうに見えたのは、マリアの僅かな願望だったのだろうか。

「そう、それじゃ、さよなら——『700年前のハイエンド』」

「さよう・なら——『生まれたてのアンティーク』」

動きは一度。

チャンスは一回。

相手の力の限界値も不明。

だから少々小細工を。

果たして、先に動きを見せたのはどちらだったのだろうか。

本当に早いのは、どちらだったのだろうか。

まあ、マリアには最初からまともに勝負する気など無かったのだが。

二人の腕が跳ね上がる。

速度はほぼ同等、ほんの僅かにマリアが速い。

だが、テレサの戦術クラストはその速度差から生まれる結果を冷静にはじき出した。

(相打ち、上等——！)

放たれた弾丸がこちらの機能中枢を穿っても、送られた信号が弾頭を放つよりは遅い。

回避方向さえ計算して打たれるほんの数発の弾丸は、どれかが必ず致命傷若しくは相当の機能障害を負わせるだろう。

それで、十分。

後は「別の」がやってくれる。

舌打ちと諦めも含まれた計算は、冷酷なまでの結論しか示さない。そして、マリアの銃口が動きを止め――。

「なっ?!」

天井から物騒な砲身を束ねた兵器が飛び出した。

戦術クラスタに一瞬齟齬が生じる。

本来ならば必要の無い選択肢。

目の前の機体が備える危険度と、飛び出した砲身の危険度を比較、同時に緊急回避のアラートが発生。

1つしかなかった選択肢が増加した一瞬、テレサの動きが止まる。

その僅かなタイムラグがマリアの狙い。

3点バーストで撃たれた弾丸は、しかし全てが別々の狙った場所を抉り取る。

一発目は、テレサの腕から半分顔をのぞかせた銃を吹き飛ばした。

二発目と三発目を後方に飛び退こうとした両足に打ち込んだ。

最後に後ろに倒れこむテレサに追い付き、背中に回って腕の関節を極めて床に押し付けた。

「さっ、詐欺よ！ 汚いわよ！」

「誰が・銃だけで・勝負すると言いましたか？ 防衛装置に・アクセスできないと・言い

ましたか？」

「う、え、あれ？」

「人生経験の・差です」

マリアの内部に新しく装備された特殊な通信装置、某強力なテレパス能力者から貰った鉄仮面を材料に組み立てたそれを通じてアクセスした防衛装置。

それは全く動きを見せず、飛び出した時のままで天井からぶら下がっているだけだった。

マリアならば、硬直は無かっただろう。

蓄積されたデータと膨大な戦闘経験が、不必要な選択肢を正確なサーチの基で判断にさえ挙げずに蹴り飛ばし、行動を止める事無く残った選択肢から最も正しい物を選び抜いていた筈である。

暫し何やら言いたげに唸っていたテレサは、何度かパクパクと口を動かした後、諦めたように肩を落とした。

「じゃ、何で壊さないのよ」

「捕虜・ですから」

皮肉げに、床に押し付けられたテレサの口元が持ち上げられた。

「あら、そう？　貴女が言ったこと、忘れたの？　私は結局、消耗品なのよ？」
「…っ?!」

轟音と閃光が、通路を満たした。

僅かな振動は、機体のコクピットに座って最終チェックを行なっていたカオスにも伝わる。

その周囲で小振りなりユックサックに親指ほどの8面体をつつ込みつづけていたアルファ達の動きが止まり、心配そうな視線が同じ方向に向けられた。

計器を弄り、レバーの反応を確かめていたカオスの動きが一瞬止まり、しかし次の瞬間には再び迷う事無く動き出す。

釣られたように動きを止めていたアルファ達も行動を再開する。

ややあって、4つの膨らんだリュックを背負ったアルファ達がカオスの乗る機体の周りに固まる。

扉が開き、マリアを吐き出したのはその時だった。

様子を見て、驚いたように、心配そうに駆け寄ってきた娘達へ大丈夫だと示す微笑を向けた後、マリアはコクピットへ回線を開く。

『…派手にやられたの』

「ソーリー。ドクター・カオス。自爆装置は・予想して・しかるべきでした」

『しておらんかったんじゃろ?』

「…あの子も・ドクター・カオスの・娘でも在りましたから」

ちらりと横目を向いたカオスの視線の先、マリアの両手は、肘から先が消失していた。余りにも至近距離で炸裂した衝撃は、とっさに収束した霊力の壁と元々備える装甲でカバーできたとは言え、拘束の為密着していた腕まではフォローし切れていなかったのだ。

体全体を煤けさせ、両肘の先からちりちりと火花を散らす娘の言葉に、カオスは一瞬虚を突かれて唖った後、悼んでいるような沈黙を作り出した。

『…すまん。余計な心遣いをさせたようじゃの』

「ノー・プロブレム。私も・可能ならば・捕虜であつても…」

続ける事は出来なかった。

何故、あんな使い方をされねばならなかったのか。

何故、それならば会話が出来るような機能を付けたのか。

せめて——いや、もうどうしようもない未練だろう。

「私達にも・自爆機能が・在るのでしようか？」

『下らん事を聞くな。次、同じ事を言ったら折檻じゃ』

「ソーリー」

慌てて自分の体をまさぐり出したアルファ達を撫でようとしたが、手が無い事に気付いたマリアは、少し残念そうに首を傾げた。

それでも、カオスの言葉に安堵の色を浮かべる娘達を見ていると、日頃の行いって言うのは大切だな、と改めて思う事だけは止められなかったマリアであった。

『データは受け取った。やはり…あれは、間違い無くテレサだったか。スペックはほぼ互角…まあワシが設計したのじゃから当然と言えば当然か』

「…ドクター・カオス。悪い報告が・一つ」

訝しげな視線を感じながら、だが視線は返さずに前を見る。

今は、その言葉を告げた後のカオスの表情を見ても冷静で居られるほど、気持ちが落ち着いていないから。

「——自爆時に・メタ・ソウルの・拡散を・確認しました」

『馬鹿なっ?!』

怒号。

メタソウルは擬似的とは言え人の魂を再現したモノ。

故に、それは、原則的に己の存在を守る。

ならば、何故自爆が可能であったのか。

カオスの脳裏を思考の螺旋が駆け巡り、寸暇の間も置かず答えを弾き出す。

『まさか……半機械的な制御機構か……!』

メタソウルの成長性も、自我の発生も、自己保存も強制的に捻じ伏せる手段として、それ以上に有効な物は無く、それ以上に冷酷な物も無い。

何処までも効率的に、そして消耗品として、全く同じ性能を持ったユニットとして扱
う為の手段。

それが怒号の理由の一つ。

そして、もう一つは。

『ならば、今ここに存在する「テレサ達」は、全てメタソウルを宿しているのか……』

基地を取り囲み、また侵入を試みている『百数体のテレサ達』。

其処から派生する疑問。

——どうやってそれだけのメタソウルを？

マリアのメタソウルを生み出した時でさえ、悪意を持った霊に侵される事無く無垢な魂の擬似存在を生み出す事が出来たのは幾つかの要素が絡み合った上での事である。

土地や霊脈、月齢やカオスの状態が在ったとは言え、その最も大きな要素を占めるのは紛れも無く、彼女の魂が残した残滓が在ったから。

カオスとの間に生まれた魂を祝福する、マリア姫の魂の存在があつたから。

ただメタソウルの存在が確認されただけならば、マリアが「バッドニュース」と言う筈も無い。

つまり。

『…感じたのじゃな？ 姫の魂の残滓を。己のメタソウルとの共鳴で』

「…イエス。ドクター・カオス」

ぐ、と言う嘔み殺した唸りであつたのか。

お、と言う飲み込んだ怒りであつたのか。

ぬ、と言う堪え切つた悲哀であつたのか。

様々な感情の籠つた単音を吐き出し、数瞬の沈黙を保つた後、カオスはただ前を見る。

『…早い所お前の腕を治さんといかん？』

「このままでは・娘達の・頭を・撫でられませんから」

ふ、と同じように前だけを見た二人が、溜め息のような笑いを零す。

同時に、その表情が凜の一言に占められた。

『行くぞ。このタイミングで襲撃があつたと言う事は、準備が完全に整っていると言う事じゃ』

カオスの記憶の封印を解き、確実に彼を物理的に封じる為の戦力が投入された。

つまり、最早対策を取られないように時間を稼ぐ必要が無い事の証明。

彼がテレサ達に対する策を練るよりも、マリア達を大幅に改良する為の時間も与えられていないと言う事だ。

通信機越しのカオスの声は、全てを飲み込み小揺るぎもしない。

傲岸不遜なヨーロッパの魔王が、其処に在る。

『ドクター・カオスがこの程度だと？ 芦ならば一個旅団は突っ込んでくるぞ。誰かは知らんが目よりもガラス球の方がまだマシのようじゃな。ワシが直々に教えてやるわ、魔王と呼ばれる理由をな!!』

カオスがレバーを握りこむ。

音も立てずに機体が浮いた。

両翼の下に魔女の箒を束ねたそれは、戦闘機にも近い鋭角なフォルムを誇っている。

「何時でも・行けますー!」

『ならば——行くぞ！』

スロットルを一気に前回まで押し込んだ。

目の前の壁が開くと共に、急激なGがカオスの身体を軋ませる。

慣性を無視して一気に最大速度まで加速したカオスフライヤー1号改は、その機体を沈みかけた月に向かって問答無用で打ち出した。

高速で、一直線に夜空を駆ける機体を、地上から打ち出される弾丸が掠める。

基地の外に展開していたテレサ達が攻撃を仕掛けてきたようだ。

にやりと笑って、ボタンを押し込みスイッチを幾つか跳ね上げレバーを右に引き倒す。

進行方向からいきなり真横に滑った機体の予想進路を、膨大な量の弾丸が虚しく貫いた。

だが、それでも追隨してくる銃弾の列がある。

舌打ち一つ、再度変則回避を行おうと手を伸ばしたカオスの耳に、呆れたようなマリアの通信が入った。

『はしやぎ過ぎぎぎ・です』

何時の間にかコクピットの横に並んで飛ぶマリアがいた。

その周囲ではベータの作り出した力場に弾かれ逸れていく閃光が火花を散らしてい

る。

やたらめつたらに銃弾を山と吐き出しながら、装甲と丈夫さだけが取り得の鉄塊がパラシュートを開いて落下していくのが見えた。

デルタが出した機体だろうか。

火線は積極的に、しかも大量に極悪な砲弾をばら撒くそれに集中し、だが殆どは真下から打ち上げられた為に運動エネルギーの多くを失いただでさえ常識外れに堅牢な装甲を穿てずに、表面を削っただけで散らされていく。

「ふん。包囲網の強行突破なぞ久し振りだな。血も滾るわい！」

『…歳を・考えて下さい。娘達の・教育にも・悪いですから』

「なに、これで終いじや」

その言葉が終わるか終わらないかの内に、強烈な振動が大気を揺らした。

轟音の発生源を探して振り向けば、カオスの基地があつた山のあちらこちらから膨大な量の煙と炎が上がっているのが見受けられる。

ややあつて、煙が綺麗な爆風の中で物理法則を無視してドクロ模様を描き出すに至り、マリア達はその原因に思い当たる。

むやみに芸の細かい事である。

無駄なベクトルに凝るのがこの錬金術師の悪い癖であり、カオスらしいと言えばらし

い所なのかもしれない。

ともあれ、半眼で向けられる5対の視線に気付かぬまま、カオスは上機嫌にこう述べた。

「わーっはっはっはあつ！ 自爆装置は科学者の浪漫じゃからの！ 電波妨害が無ければこの手でぽちつとスイッチを押しかけたがな！ 今回はタイマーで我慢我慢!!」

『後で・全員・体の・総点検です』

「……いやまでマリア違うんじゃ。それとこれとは別問題でこれは趣味であつてお前達にはそんな物付けとらんって信じとらんなーっ?!」

マリアに向かって真剣な表情で頷くアルファ達を目にしたカオスは、彼女達に必死で抗弁するも聞き入れられず。

『こんな事も在ろうかと』準備しておいた別の基地に辿り着くまで、カオスはマリア達から向けられる白い視線に晒される事となつたのであつた。

老人を見つめるマリアの瞳に、微かに宿る気遣いの気配を隠しながら。

「う、疑つておるな？ まだ疑つとるじゃろ?!」

『ノー。ドクター・カオス。——理論的に・判断したまでです』

「……………そっちの方が酷くないかの?」

日頃の行いは大事である、と言う事か。

が。
無論、機体の死角でくすくすと笑うアルファ達には流石に気付けなかったようである

第四話 『それでもあの手を忘れない』

「…嘘だと」

瞳を見開いたルシオラが、搾り出した声で土具羅の背中に語りかける。

その光景を発見し、彼女が声を失っていたのはどれほどの時間だったのだろうか。彼女自身さえ分からないほど、長くも無く短くも無い時間だったのかもしれない。

衝撃は彼女を貫き、続けるべき言葉は咽の奥に引つかかったように滑らない。

一心不乱に二つのカプセルの間に設置されたコンソールのキーを叩く土具羅が、最も冷静だったのかも知れない。

その背中に、泣き出しそうな声が小さく当たって解けて消えた。

「嘘だと言ってください…アシユ様…」

月に吼える 第三部

『……………』

虚空に縋りつくような声に、答えるべき者からの答えは無い。

それは答えを知らない為か、それとも答えを教えない為か。

ただ、高速で叩かれるキーが連なる音を奏で続け、モニターのバーが蠢くように進むだけ。

土具羅の小さな身体を見下ろすように、中にルシオラの二人の妹を抱えたカプセルが、こぼりと泡を沸かせて満たした液体を微かに揺らす。

妹達の身体に絡みつくコードが、蜘蛛の糸に捕われたような印象を与えた。

モニターに描き出されるのは、『now lording』と『sub command programming』の無機質な文字列と、98%の数字と共にゲージ一杯まで伸びきっているバー、そして、その背景に大きく記された——『T・C・M』の三文字。

それが一体何を示すのか、モニターを見つめるや突如としてキーを叩き始めた土具羅は知っているのだろう。

だが、ルシオラは知らない。

妹たちが、こんな暗い所で、こんな物に閉じ込められなければならない理由を、知らない！

「…っ!!」

『待て』

膨れ上がった激情のままに、カプセルを破壊しようとしたルシオラを、背中を向けたままの土具羅が言葉だけで引き止めた。

一言だけで動きを止めたのは、その声に含まれていた感情が、押し殺された冷たいものだったからだろうか。

視線だけで理由を問うも、背中を向けたまま、土具羅は振り向きもしなかった。

ただ、言葉だけが流れ出した。

『このプログラムは霊基そのものに組み込むヤツだぞ。力づくで如何こうしようものなら、最悪、二人とも消滅する』

「…だったら、何で！」

『小娘は黙っとれ!!』

問い詰め、肩にかけた手は一喝で身を竦めたルシオラの動きに引つ張られて迷うように宙を泳ぎ、力なく垂らされた。

かちり、と小さな音を立て、数字が98から99へとカウンントを進める。

それが否が応にも不安を掻き立て、さらに速度を増した土具羅の指に視線が自然と吸い寄せられた。

『…ワシはな、お前らが生まれる前からあのお方に仕えとる』

鍵盤を叩くピアノストのように、無骨な土具羅の指がコンソールの上を踊り狂う。

綴られる言葉には、激しい動きとは裏腹に言い聞かせる穏やかささえ宿っていた。

『お前らが生み出された時、アシユタロス様はとある計画の完全破棄を宣言しなされた』
まあ、ワシに言わせればそんな気は最初から無かったんだろうがな、と囁いた声は、喋る間も途切れる事無く弾き出され続ける鍵盤音に掻き消され、ルシオラまでは届かない。

ふと、その視線が上を向く。

見上げれば、視界に収まりきらないほど巨大なそれが、小さな稼動音を上げながら不気味にそそり立っていた。

苦笑い混じりの溜め息とともに、ケジメだったんだろう、と呟いた言葉は、果たして魔神の愛娘に届いたのだろうか。

『計画の内容はさて置き、『コスモプロセス』も、このプログラムも、必要の無い物として放棄された筈だった』

だが、現実として、それは土具羅の眼前に、憎らしいほどしっかりと存在している。

『…何故此処にこれが在り、ベスパとパピリオにこのプログラムが組み込まれようとしているかは分からんし、止められん』

「…じゃあ、一体何を？」

『納得がいかんのさ』

ごうん、と、カプセルが唸りをあげた。

カプセルの中を満たす緑色の液体が、振動に揺れて耳障りな音を立てる。

こぼこぼと連なつて湧き上がりつづける泡が、不気味な色に輝いて見えるのは気のせいだろうか。

『…ワシは、アシユタロス様の第一の部下』

土具羅の指が動きを止める。

モニターに映し出されたのは、プログラムが完了した事を示す無愛想な文字と、それを本体のプログラムに組み込むかどうかを尋ねる小さな疑問符。

軽い音を立てて決定を押しした土具羅の前で、ほんの僅かだけバーが巻き戻り、すぐさま元の長さを取り戻した。

『アシユタロス様の望みを満たす事こそ、我が使命』

引き戻された進捗も、次の瞬間に示された100%の数字が掻き消した。

『――打てる手は打って置かんとな？』

周囲に、光が満ちた。

それまで沈黙を守っていた巨大な柱が唸りを上げる。

灯された人工の光が、それまで見えなかったコスモプロセッサの細部を照らし出した。

土台らしき場所に設置された、オルガンの鍵盤のような物は制御装置だろうか。

そして、その直上にある大きな卵は、一体何なのだろうか。

更にその上で目を開き、こちらを見つめている3体の同じ顔をした女性達は、何者だろうか。

その無機質な視線がルシオラの姿を認め、微かに3人の口元が、全く同じ動きを示す。途端、周囲に赤い光とサイレンが響いた。

第四話 『それでもあの手を忘れない』

出勤から帰ってみれば、時計の針は既に魔鈴の店の閉店時間を超えていた。

疲れと色々な遣る瀬無さが籠った溜め息を付き、西条はスーツの上を背凭れに引っかけ、ネクタイを緩めてイスに腰掛ける。

おキヌのお陰で多少実働部隊が充実したとは言え、まだまだこの国全体に占めるオカルトGメンのシェアも少なければ、評価も余り高くない。

そんな状況下で、一定以上の難しい霊障事件が発生すれば、日本オカルトGメンでもトップレベルの、しかも使い勝手の良い西条はあちらこちらに引っぱりまわされる事になる。

何せ民間GSの実力が高すぎるのだ、この国は。

GS協会の長年の努力と、其処此処に点在する名家達、そして厳しいGS試験を突破した実力者——GS免許保持者達。

緊密に繋がった彼らの関係は、霊障に対する高い対処能力を与えると共に、同業他社に対する一種の堅固な要塞となっていた。

「全く、参るよなあ」

人気の無いオフィス的一角、西条の部屋のデスクに置かれた灰皿を人差し指で手繰り寄せ、胸ポケットから取り出した煙草に火を付ける。

仕事で疲れきった後の一口目は、何時もながらに美味かった。

唾えタバコのまま懐を探り、オフイスの入ったビルの前で購入した缶コーヒーの蓋をあける。

伸びた無精髭の先を擽る湯気と、鼻腔の奥に届いて煙草の匂いと混じるコーヒーの匂いが、僅かながらに疲れを削ってくれた。

煙草を左手の人差し指と薬指で挟んで、右手でコーヒーを呷る。

流れ込んだ熱さとカフェインを飲んだと言う認識が、気の抜けた精神に渴をぶち込んだ。

満足げな吐息を漏らし、視界の端を掠めるデスクの上に山積みになった書類を勤めて無視。

「…仮眠を取ろう。そうしよう。報告書は明日だ、明日」

誰に言うでもなく一人ごちると、毛布を引っ張り出しソファで寝転んだ。

朝一番でシャワーを浴びて、髭も剃ってスーツも着替えて、魔鈴ちゃんのでモーンング、とつらつら予定を立てながら目を閉じて。

けたたましく鳴り出したクラシックに飛び起きた。

音源は、イスに引っ掛けたままのスーツのポケット。

しかし、常の連絡時に演奏し始める緩やかな旋律ではなく、急ぎ立てるような激しい

リズム。

緊急事態発生を示す、着信音だった。

「——はい！ こちらオカルトGメン、西条!!」

携帯電話の向こうの声は、悲鳴にも似た叫びだ。

「西条先輩！ 外を見てくださいっ！ 空が、空が……」

何時もならば、ちゃんと階級で呼ぶように、と叱り付ける所であった。

この前イギリスから漸く引つ張り出したばかりの新人は、未だに学生気分が抜けないのか時折こんな呼び方をする。

しかし、紳士の国出身らしくなくいつも軽い雰囲気の彼の声は、今はパニック寸前の悲痛さで彩られている。

引き摺られるように、西条の靈感に強烈に訴えかける何か引つかかる。

これほどの悪寒に気付かないほど疲れていた自分に眉を顰める間も無く、イスを跳ね除けデスクの上の書類を雪崩の如く崩しながら窓に駆け寄り、ブラインドを挟み開けた西条の目に、異様な光景が広がっていた。

——波打つ黒い雲と黒色に近い紫で覆われた、東京の空だった。

明らかに雲とは違う存在感を持つそれは、時折赤黒く発光しながらゆっくりとうねっている。

まるで、生き物の腹の中に居るようだ、と、停止した西条の脳裏にそんな思考が過ぎる。

呆然と佇む西条の意識を取り戻させたのは、やはり電話の向こうの若い男性が放つ声。

「さつきから電話が鳴りつばなしで、でも俺達もあんなの見た事無くて！」

大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

おもむろに自分の頬を思いっきり抓った。

「あー、これは何か、夢かな？ フロイト先生ならどんな分析してくれるかな？」

「夢じゃないですつてばっ!! 現実です！ 俺もさつきと帰ってハニーをジャ○ネットで買った布団に引つ張り込んでイチヤイチヤしたいですけども！」

「前々から思ってたんだが君ホントはアメリカ国籍じゃないか？ あと何で布団だベツドの国生まれ。それから昼間にTV見るほど暇だとは知らなかったな。後で仕事あげるから此処まで来なさい。別に一人身の僻みじゃないぞ？」

「委細漏らさず丁寧な突っ込みありがとうございます上から下まで手当たり次第のレディ・キラー！ 大体そのくせ何で魔鈴さん落とせないんですかノー・ガッツ！ それに内勤増えてんのは上司がさつきと書類片付けずに溜めてばっかりだからでしょうが現場好きのワーカー・ホリック！ 悔しかったらさつきとオとせば良いじゃないですか

ハード・ボイルドぶってないで!!」

「上司に対する不敬罪と抗命罪と侮辱罪と名誉毀損でボーナス40%カットだ米国かぶれ。それと僕は「固茹で卵」じゃなくて「紳士」なんだ!」

悲鳴と怒号と子供の教育に破滅的な悪影響を与えそうな罵詈雑言を聞き流しつつスーツを羽織る。

緩んだネクタイを締めなおし、廊下を靴音高く駆け出した。

叫び続けて10カウント、息切れでもしたかぜハゼハと荒い吐息しか聞こえてこなくなった頃を見計らって、西条はもう一度携帯電話に話し掛ける。

「落ち着いたかね」

「…色々と納得は行きませんが」

「『常にジェントルたれ』だよ英国紳士は。ならば現状報告を」

「——異変が観測されたのは5分前、範囲は関東全域を完全に覆うほど大規模な物です。厚さと留まっている高度の詳細は不明ですが、富士観測所からのデータによるとほぼ完全な丸いドーム型。現在、魔力及び霊力、神通力、妖力、どれも大規模な変動は観測されていません」

足を止めぬまま、エレベーターのスイッチを押す。

甲高い音を立てて停止した箱に乗り込みつつ、澱む事無く流れてくる情報を吟味す

る。

「異常はそこに見える。だが全く正体不明、か」

「残念ながら。それと一般の電話回線はパンク寸前、オカG本部からも矢のように通信が入っています」

「直通回線だけは確保しておいてくれ。隊員は？」

駆け足から早足まで速度を落とし、扉の前でネクタイをもう一度締めなおす。

上が落ち着いている事が、そのまま部下の精神的安定に繋がる以上、身だしなみにも疎かな事があつては成らない。

いわんや日頃から無精髭だの疲れた様子だのを見知っている部下の前であつては尚の事。

「非番の隊員は現在召集中、あと5分で全員揃います。残りは半数を、笛が使える奴らを優先的に外に出して避難誘導に。残り半分は待機中——何時でも行けます」

それだけ聞いて、携帯電話を閉じた。

最期の一步を踏み出し、自動ドアが開くと同時に勤めて冷静にその部屋に踏み込んだ。

振り返ってくるのは先程まで電話を介していた部下と、壁一面を埋め尽くすモニターの前で通信していたオペレーター達。

そしてモニター越しにこちらを見る、装備を整え隊列を組む実働部隊。

それぞれ西条の顔を見ながら、不安と緊張を見せていた。

皆の視線が集まった所で、笑顔を浮かべて大声で。

「nice workだ諸君！ 冬のボーナスには期待しておきたまえ！」

湧き上がった黄色い歓声とハイタッチを目にしつつ、頬を緩めた西条は歩みを進める。

これほど手際良く準備が整えられ、かつ円滑に動いているのは彼女達が果たした役割が大きい。

敬礼を返してきた部下の肩を叩きつつ、オペレーターの隙間に身体を入れてマイクを掴んだ。

「待機中の隊員たちに告ぐ。可能な限りのデータ収集装備の持ち出しを許可！ 何か掴んだら即報告する事！」

『何人か残して、ですね?!』

「そうだ、直ぐに出てくれ！ 現状の把握を最優先に！」

重なり合った了解の声と、モニターの中で揃って敬礼しすぐさま動き出した部下達に向かつて敬礼を返しながら、頼もしげに見送る。

此処まで来るのに掛かった時間と聞き流した上層部の愚痴を思い返し、西条はふと笑

いを零した。

「これなら有給取つても大丈夫そうだな」

「ええっ?! めっずらしー。実働部隊大丈夫ですか?」

「何、君たちが居るからね」

にこやかにスマイルを付属させつつ告げた言葉に、オペレーターの女性職員が頬を染めて恥ずかしがる様子を目にしつつ、西条がモニターに目を戻した。

ついでに後方から刺さってくるオカG上層部とやりあっている部下の視線を軽く無視。

東京のあちこちを映し出すモニターにICPO超常犯罪課のロゴが入った隊員が現われ、ある者は拡声器で、ある者はネクロマンサーの笛で民衆を落ち着かせているシーンが増え始める。

だが、パニックによる暴動は無さそうだ、とひと息ついた西条の耳に、後方からの慌てた声突き刺さった。

「西条先輩! 内閣府からですっ!」

今度は何だ、と舌打ち一つ。

「回してくれ! はい、西条で…は? …馬鹿な、なんであそこが最初に狙われるんですかっ?!」

手元のコンソールを慌てて操作する西条の顔からは、それまでの頼もしい笑みが消えている。

その場所は、この都市で最も重要な場所であり、その地下には霊的にもこの国の最重要である施設が存在する。

モニターの1つが瞬き、様々な場所を映し出し、最後に1つの場所で固定された。

それは、二つの頭頂部を持った巨大な建物。

都庁と呼ばれるそのビルは、正面玄関から大量の人々と、煙を吐き出していた。

地上階部分に被害は全く見当たらない。

煙が出ているのは、正面玄関と低い階層、そして、マンホール。

示す答えは、地下部分にそれだけの被害が出ていると言う事。

電話の内容も、それを伝える物だった。

「あそこは…特S級の機密施設だぞ…！ 何で——」

だが、それで終わりではなかった。

「——米軍と自衛隊の施設が機能喪失？」

幸いにも死者は出ていないが、負傷者多数。

装備も機体も、ほぼ全滅。

それが今現在で何かに直結する訳ではない。

訳ではないが、特に都庁の地下施設はこの国の霊脈制御に甚大な被害を及ぼすであろうし、基地を襲った理由がそもそも分からない。

だが、何かが起こっている事だけは分かっている。

「…何が、始まるんだ」

沈黙に沈んだその部屋に、呟きに答えられる者は居なかった。

普通ならこの時間、都会のような人工の灯りが無いこの山では、上を見上げれば夜空を埋め尽くす星の天蓋と柔らかな月の光がある筈だった。

「…猿爺。ありや、なんだ？」

「ヒヤクメ、分析できるか？」

「出来ればとづくにやつてるのねえっ?!」

苦々しげに空を見上げる竜神王の視線の先には、薄ら寒い蠕動を繰り返す天蓋がある。

その隣で座り込んだ猿神も、返す言葉を持たなかった。

二人から少し離れた場所では、ベレー帽を被ったワルキューレとナイトキャップを被ったヒヤクメ、そして小竜姫がトランクの前に集まり騒いでいる。

まあ、大声を出しているのはピンクのパジャマを着込んだヒヤクメだけなのだが。

開かれたトランクの中からケーブルが延び、ヒヤクメの額に吸盤で接着されている。

殆ど涙目で空を覆う壁に目を凝らしているヒヤクメの努力の結果は、トランク内のモニターに表示された『不明』の二文字。

小刻みに地面を爪先で叩く小竜姫の構えた神剣が、また咽を冷たく撫でるかと思うと、ヒヤクメの瞳にも力が籠る。

だが、暫く待ってヒヤクメの瞳が諦めの涙で満たされ始めた頃、神剣を一振りした小

竜姫が動き出した。

「最早待てません！ 時間からして天竜姫様はまだそんなに離れてはいない筈！ こうなったら強行突破で——」

「待たんか」

背後からひよいと伸びた老師のキセルが小竜姫の顎に引つ掛けられた。

くえ、と奇妙な声を出して仰け反った小竜姫の向こうから、老師の眼鏡越しの視線が妙神山の修行場入り口に向けられる。

扉は内側に開かれていた。

扉の向こうには、天を覆うものと同じ色の壁が内側の者達を外に出すまいと不気味に存在している。

緩くカーブを描きながら天蓋と繋がるそれは、ドーム型をしていた。

そして、その表に張り付いた鬼達の瞳には、光が無かった。

少し手前には、その角に向かって投げ縄を投げる竜神王近衛兵達の姿があったりしたが。

「あの壁に近付けば只では済まんと、さつきこの馬鹿が身を持って示したばかりじゃろうが」

「い、嫌味つたらしい爺め」

横で眩かれた台詞は無視しつつ、頭から毛を一本引き抜き息を吹きかける。

巨大な猿神の姿を取ったそれは、一飛びで扉に接近し、丁度近衛兵達の少し先で煙を上げて毛に戻る。

涙目で首の後ろを押さえながら立ち上がった小童姫は、しかしそれでも抗弁しようとして、猿神の一睨みで沈黙を余儀なくされた。

「——他の靈的拠点やチャンネルにも通達が行つとる。今は堪えろ」

そう言つて、猿神はキセルを噛み潰さんばかりに力を籠めて啞え、どつかと岩に腰掛けた。

「おーし、左の方は上手く行つたぞー！」

「次は右だ右ー！」

「おおお……！ 鼻、鼻が一寸は低くなつたような気が……！」

「そりや顔面を下にして引つ張ればなあ」

「オーエス！ オーエス！ ……エツスオーエス♪ エツスオーエス♪」

「手拍子してる暇があるなら手伝わんかお前らあああつ！」

「けち臭い事言わないでくださいよたいちよー」

「あ、引つかかった。たいちよー、どーしますー？」

「気にするな！」

「全く訳が分かりませんが分かりました！ フィーリングで！」

「いん。いん。ばき。」

「よし、ミツシヨンコンプリートだぜ！」

「み、右のおおおおつ?!」

「目え回してつぞ?」

「おお、団○3兄弟」

随分と温度差があるようだが。

「…姉さんは、ルシオラはこのの——大逆天号の牢に土具羅様と一緒に入れました」

「ご苦労」

背中越しにベスパに掛けられた声には、それを気に掛けた様子も無い。

視線を眼前のモニターから離さないまま、アシユタロスは椅子に深く腰掛けた。

薄暗く広い空間の中で響くのは、一段低い所に設置されたコンソールの群を操るテレサ達の運指の音と、後方から内臓を揺るがすこの兵鬼の駆動音。

アシユタロスの背中を見つめたまま、何かを言い出しそれを飲み込む素振りを見せたベスパは、結局何も言い出せないまま俯き生々しい床に視線を落とす。

「ふむ。フェンリルが負傷し一時帰還、カオスも見失い——そして、ルシオラと土具羅を拘束、か」

手元のモニターに表示された文字列を目で追いながら、アシユタロスは感情を感じさせない口調で呟いた。

ふ、と目を閉じる。

次に見えた瞳には、楽しげな色が踊っていた

「まあ、計画通りに全てが動くとは思っていなかったがね。く、やはりこうでなくてはなあ」

パピリオは此処には居ない。

大人しく捕まった土具羅と、彼の言葉で抵抗を止めたルシオラの事が気がかりで、今頃この巨大な兵鬼の何処かで落ち込んでいる事だろう。

それでも、ベスパには彼女を慰めに行く事が出来なかった。

只でさえ突然遠く感じるようになった主が、更に離れてしまう気がして。

俯いたまま動きを見せないベスパを振り向いたアシユタロスは、ふ、と息を付くと目を瞑り、躊躇うように開いた。

「——ベスパ」

「はい…」

「お前には要らぬ気苦労を背負わせるな」

「…あ」

くしやり、とベスパの頭に、何時の間にか傍に立っていたアシユタロスの手が乗せられた。

優しく動くその手に、僅かに揺れていたベスパの心は、ゆっくりと落ち着きを取り戻す。

見上げた視線の先には、先程までの冷徹さも、どこか楽しんでいるような不可解さも無く、優しく見守る瞳があった。

「だが、もう少しだけ、手伝って欲しい」

「——はい！」

——この瞳が、この暖かさがあれば、きつと疑問に答えてくれる。

——ずっと、傍に居てくれる。

——だから、私ベスパよ、疑うな。

心の中で己に言い聞かせた言葉が、彼女自身を縛る鎖。

僅かに悔恨の滲む色を瞳の奥に覗かせたアシユタロスは、誤魔化すように瞳を閉じた。

再び開かれたそれに宿るのは、どこまでも冷徹な、感情の無い瞳。

「計画にイレギュラーが生じた以上、これ以上の揺らぎは許されん。不安要素は潰すのみ、だ。やってくれるな、ベスパ」

「何なりと」

「では、これを」

力を籠めて握り締められたアシユタロスの掌が、ゆっくりと開かれる。

先程まで何も無かったそこに、不気味な指輪が出現していた。

髑髏の飾りが付いたその指輪を、アシユタロスはベスパの手を取りその上に落とす。

掌に落ちたソレを握りこんだベスパの瞳には、もう躊躇いの色は無い。

「使い方は、分かるな？」

「はい」

「使用は一度だけで良い。対象は——」

アシユタロスがパネルを軽く叩く。

画像が切り替わり、青年の顔と全身図が表示された。

赤いバンダナを巻き、青いジーパンとジージャンを身に付けた青年の映像の上に、「横島 忠夫」の字が映し出されていた。

「——コレだ」

「はい」

もう一度アシユタロスがパネルを叩くと、下部のスリットから映像がプリントアウトされた。

それを受け取ったベスパは、食い入るような目で、或いは睨み付けるようにそれを凝視した。

一連の行動を取ったアシユタロスは、何の未練も見せず再び椅子に腰掛け、それだけだ、と無言で告げる。

「…行って、きます、アシユ様」

返事は、無かった。

そのまま通路を歩き、外部へと通じるハッチの前に立つ。

最後に振り向いた視線の先でも、アシユタロスは全く動いていなかった。

見送る事も、心配そうにする事も、付いて行こうかとしつこく声を掛けてくる事も、ベスパが大丈夫だからと宥める必要も、無かった。

ぐ、と感情を嘯み殺し、ハッチの開閉ボタンに手を掛ける。
振り向く事無く飛び出した。

巨大な三本角を掠め、全速で加速する。

何かを振り切るような彼女を、今は誰も止めはしない。

人界に繋がるゲートの前で、バスパは首だけを動かし後ろを見る。

一際巨大な全長2KMほどの、膨大な存在感と威圧感を振りまくカブトムシに似た兵鬼と、それを囲むように配置された、比較対象が大きすぎる為小さく見える200M程の上に長い角、下に小さい角を備えたカブトムシに似た兵鬼群。

疑問は尽きない。

どうやってこれほどの戦力を、神魔両陣営に見つかる事無く作り上げたのか。

あの茸にも似た機械は何なのか。

あの人形は一体何なのか。

あの紫とも黒ともつかない壁は何なのか。

そして——これだけの力を持って望む物とは、何なのか。

顔を伏せ、そつと頭に手を乗せ、それだけを噛み締めて。

ベスパは、ドームに覆われた東京の上空に、飛び出していった。

第伍話 『だけど言えないままなのに』

半人狼の青年と人狼の少女が意識を取り戻し、何とか動けるようになったのはもう朝日が昇る直前の時間だった。

それが彼らの故郷に現われた魔獣の「月喰い」の所為であつたとは、二人は知らない。だが、全く同じ状況に陥つた事は、ある。

体中から力の根源を強引に引っこ抜かれた事による一時的な著しい霊力の枯渇が、彼らを事務所に縛り付けたのだ。

忠夫とタマモだけならば、何とか移動することは可能だつただろう。

しかし、満月の光の結晶である月光石の助けさえも無い状態では、忠夫が途中で力尽きるのが関の山。

純血の人狼たるシロに至ってはまともに動く事すら出来なかつた。

それでも身体を引き摺り、嫌な予感の嘔くまみに里へ駆けつけようとした二人を押し留めたのはタマモとおキヌである。

強烈な幻覚とネクロマンサーの笛の同時精神干渉には、いきり立つ二人も僅かな抵抗

を見せたのみで無理矢理昏倒させられた。

悪夢からの目覚めにも似た倦怠感に襲われつつ飛び起きた二人の目に写ったのは、相変わらず不気味な天蓋に覆われている、遅い太陽が昇りささやかな暖かさを振りまいている筈の空だった。

「…まあ、確かにタマモの言う事は正しい。あのまま動いても間違い無く途中で行き倒れとった」

「でしよ？」

オカルトGメンと警察の誘導、そして迅速な対応により落ち着きを取り戻した——いや、不安の中に沈んでいる東京の街は、ただ息を潜めているだけだった。

交通機関は完全にストップし、道を走る車も無い。

ただ、ハンドルを握る物の居ない鉄の箱だけが、長く連なって虚しく路上に放置されている。

時折街角にオカルトGメンの隊員達や警官が車両で街を巡回している以外に、動く物は無い。

たまに聞こえるのも落ち着いて避難する事を促すラジオやTVの放送ぐらいである。

そんな街の中を、本来の使用者達が居ないのをいい事に道路の真ん中を駆ける3つの影。

頬をこけさせ、目の下に隈を拵えた忠夫と、その頭の上に乗った子狐姿のタマモ、そして、その9本の尻尾を後方から睨みつけているシロである。

「正しいが、だ」

「…何よ」

「気絶させるのにムキムキマッチョのむさ苦しい男どもがフンドシ一丁で集団で踊る映像は無いだろう?! おキヌちゃんが早々に眠らせてくれんかったらトラウマもんじゃねーかつ!!」

「元々動けなかった拙者も巻き込まれて悶絶したんでござるからなっ!!」

とは言えシロを優先したおキヌの配慮により、殆ど一瞬だけ垣間見て即時昏倒した彼女とは違い、忠夫はシロが完全に眠りにつくまでの間中それを無理矢理送りつけられ続け、夢の中でも同じ映像がリフレイン。

結果として何故か純血の人狼よりもダメーヅを貰い、目が覚めるまで悪夢に魘され続けたのだった。

ともあれそんな状態でも人狼族の身体能力は発揮され、動きつづける足は忠夫達を薄暗い道の先にそそり立った、怪しく蠢く紫色の壁に近付いていく。

「じゃ、どーいうのなら文句無しに大人しくしてくれた訳？」

「そりゃ勿論美人でスタイルの良い年上のねーちゃんとうはうはイチヤイチヤの新婚生活…でへ、でへへへ…」

「タマモ、やるでいござるよ」

「てい」

だらしなく緩んで虚空を見上げ、両手を怪しく動かし始めた忠夫の頭の上で、子狐が軽い音を立てて右前足を振り下ろす。

零距离から幻術が叩き込まれた。

忠夫の耳に、地鳴りのような足音が聞こえた。

振り向けば其処に、王蟲の如く全身の汗を光らせ、土煙を後方に吹き上げ迫る肉塊の群。

先頭を走っているのが勘九郎そっくりなのは気のせいか。

脇を締める度に響く、どこか間の抜けた音が否が応でも視線を奪う。

「飛び散る汗の飛沫が狂気を誘ううううああああああああつ!!」

「きゃ、ちよつと、忠夫、前に前を見てつてわきやああつ?!」

「あ、兄上えええつ!」

音の壁さえ軽くブチ破りそうな勢いで、タマモを頭に乗つけたまま忠夫は紫色の壁に突っ込んだ。

だが、壁は見た目に反して二人を飲み込み、表面に揺らぎの欠片も見せずにそこにある。

呆然と見送るシロ。

片手を虚しく伸ばした少女の前を、丸まったくしゃくしゃの新聞紙が西部劇の如く風に吹かれて転がっていく。

焼芋の匂いが付いたそれが視界を過ぎ去るだけの時間が過ぎ、彼女は再起動を果たした。

恐る恐る壁に触れる。

手応えは無く、するりと向こう側に突き抜けた。

意を決して息を止め、目を瞑って地面を蹴る。

何事も無く着地し、後ろを振り向く。

壁は、まるで何も無かったように背後に緩やかなカーブを描きながら立っていた。

はて、と首を捻ったのも一瞬。

決死の思いで壁を通り抜けた理由を思い出し、慌てて先行した二人を探して振り向いたシロの目に、少女の姿を取ったタマモが両足で挟み込んだ忠夫の頭を、綺麗な弧を描かせてアスファルトに叩き付けた光景が写った。

暫く断末魔の痙攣を見せた忠夫は、やがて動きを止めると何ともコミカルな動きで地面に埋まった頭を何度か両手足で突っ張って引っこ抜き、あさつての方角をやたら良い笑顔で眺めていたタマモに詰め寄った。

「青筋浮かべてどうしたの？」

「誰のせいじゃっ！ 大体もうちよつと優しくなるとか出来んのかお前はっ!!」

「ちよつとTVで見たのよ。面白そうだったから何時か誰かに掛けようと思ってたの。てへ」

「フランケンシュタイナーはこんな場所で掛けるもんじやないわいつ！ 死ぬかと思つたわこの縞パン娘っ！」

ああ、そう言えばこの前ポチ殿の家でそんなの見てたな、とか。

アスファルトにめり込むほどの勢いで喰らつて何で生きてるんだろかな、とか。

まあミニスカートの女性がやる技じゃないな、とか。

色々と言いたい事はあるが。

「やはり兄上には「でりかしい」が足りんでござる」

真つ赤なお顔の狐娘が出した炎に巻かれ、黒焦げになって倒れた年上の青年を見て口から出たのは、溜め息とその一言だけだった。

第五話 『だけど言えないままなのに』

眼下には大騒ぎしながらも駆け出した3人の姿がある。

その光景を見下ろしていたベスバの口から、言葉と同時に小さな笑いが零れ落ちた。「ふふふ…漸く出て来たわね。アシユ様の為にも、姉さんには悪いけど覚悟してもらおうわよ…！」

自分も魔族で紫色のドームの向こうに行けない事も忘れて飛び出してきてしまった彼女は、そう呟いてゆつくりと3人の後を遥か上空から追跡を始める。

ほんの少し前まで侵入できなくて小一時間引き返すかどうか悩んだり、ビルの陰で膝を抱えて拗ねていたら通りがかりの野良犬に吼えられて慌てて逃げたり、涙目でドームを眺めていたら避難中の小さな子供に飴を貰っちゃったりして更に泣けてきたりしていた事は記憶の奥底に嚴重に封印する。

(…子供の純粹さが痛い)

閉じた携帯の立てた固い音に少しだけ寄せた眉を和らさせ、西条は人数の半減したオペレーター達に目をやった。

深夜を越え、引つ切り無しに入つて来ていた出勤中の隊員達や警官達からの報告もほぼ大分減り、漸く半数に休息を取らせることが出来たのだ。

今頃は1時間の短い休憩を十分に活用する為、簡易なシャワーや仮眠室で泥のように眠っているであろう彼女達に感謝の念を抱くのは当然であろう。

大の男でさえ辛いのに、まだオカG日本支部に入つて1年と経っていない彼女達には相当の無理を強いた時間であつた事は違くない。

あちこちから引き抜いた年季の入つたベテラン数人と残り殆どを占める新人は居るものの、中堅層が全く居ないのがこう言う時には正直痛い。

休憩のローテーションで残るメンバーにはベテランが居て欲しいと言う願望があるが、こればかりは無いもの強請りだ。

ともあれ何故かぶつとりと鳴らなくなつた関係各方面からの連絡を受け取る備え付けの電話に一瞥をくれ、司令室の隅に置いてあるポットと幾つかのコップ、インスタン

トコーヒーの粉が入った瓶へと歩み寄る。

そこにいる女性達の分＋自分の分にはさついた粉を多めに入れ、ついでに砂糖を山盛りミルクを少し。

最後にポットからお湯を注いでいる途中で、気の抜けた音を立てて湯気の残りカスしか吐き出さなくなったそれに残念そうな視線を送って自分の分を諦めた。

この場の最高位階者がお茶を淹れるのもなんだが。

手が空いているのが自分しか居ないので偶には良いかと苦笑いしながら、西条はコップをトレイに載せた。

「市街地の様子はどうかかな？」

「あ、ありがとうございます。…市民の避難はほぼ完了しています。ドーナツ化現象の意外な恩恵ですね。夜間は余り人がいないのが幸いしました」

「わ、ちょうど咽が乾いてたんですよ。ええと、隊員の方達も巡回担当を残して帰還してます。それでも事後処理のこと考えると頭痛いんじゃないですか？」

目を擦りながら振り向いた彼女達の目の下には、はつきりとした隈が浮いている。

それでも、空元気であろうとも通信を司る彼女達が憔悴した様子を見せようとするのは、それが彼女達なりのプロ意識なのだろう。

濃いカフェインとたつぷりの砂糖、眠気を誘わず胃を痛めない程度のミルクが僅かな

りとも手助けになれば恩の字だ。

嬉しそうに受け取ったオペレーター表情にこちらも頬を緩ませつつ、ジョーク混じりの台詞に笑みを浮かべて軽く返した。

「全くだよ。有給が取れるのは何時になるやら」

「どうも。あの、後ろから物凄く何か言いたそうな目で睨んでますけど？」

「ははは男にコーヒーを淹れる趣味は無いよ僕は」

「…エセジェントルめ」

「はははボーナナス更に60%カットだ」

ボーナナスが完全に無くなったー！ という悲鳴と妻に上司の酷薄さを愚痴る文章の垂れ流しが聞こえたが無視。

「女性は優しく、男は叩いて叩いて叩いて勝手に伸びろ」が今月の西条のテーマである。どうせ続ける間も無くなるだろう、と振り向きもせずに考えた所で電話のベルが鳴る。

ベルに引かれてちらりと肩越しに振り向けば、頭を抱えて机に突っ伏した部下が、物凄く嫌そうな顔で受話器に手を伸ばす所だった。

一瞬目が合う。

——代わって下さい。

——だが断る。

どちらがどちらの思考だったのかは、死んだ魚そっくりの目で受話器を耳に当てた部下が証明している。

受話器からは金切り声が響き、耳から遠ざけた部下は今度こそぐたりと疲れた様子で机にしがみ付いた。

関係各所のお偉方からの苦情処理を一手に引き受けさせられた彼は、胃に穴が開きそうな表情で受話器に時折口元を近づけ相槌を送り、再び耳を塞いで遠ざけている。

「ま、っ」苦勞

ほんぽんと軽く肩を叩いて横を通り過ぎる。

労ったのに何で視線に殺意が籠っているのかな、と嘯きながら、西条はポットに沸かす為の水を入れるのだった。

「…え、西条さんに客ですか？」

その単語にポットを置いた西条の視線と、ちょうど彼を肩越しに振り向いたオペレーターとの視線が重なり合った。

どうします？ と小首を傾げて目で聞いて来る彼女にハンドジエスチャーで居ないと言ってくれ、と返す。

一般人ならば受付がそれなりのちゃんとした対応をしてくれている筈である。

それなのにここまで連絡が来ると言う事は、相手は直接此処まで来るほど暇な何処かのお偉いさんか。

その手の相手をするのは非常に疲れる上に面倒臭い。

相手の立場もあるので粗雑に扱う訳にもいかないし、そもそも分かっている事は全て関係各方面に伝えている。

それなりの通信設備がある所ならば此処とリアルタイムで情報の交換が行なわれているのだ。

故に、必要無いと判断し、意識から切り捨て手元のポットに視線を落とした。

瞬間湯沸し機能が付いたポットには、入れたばかりの中身が暖まった事を知らせるランプが点いている。

流星は魔鈴の店でも使われている彼女謹製のマジカル・ポット『くとうぐあ君』。

不気味なまでの性能の高さと魔女が直々に表面に書き込んだと思われる、落書きにしか見えない「ふおうまるはうと」と言う極太の筆文字にさえ目を瞑れば至って便利である。

白地に黒とも赤ともつかない塗料が映えてデザインも至って不評である。

「下手に分解したら危ないですから」と物凄く真剣に言われたが、まあ彼女なりの

ジョークであろう、筈、多分…おそらく。

魔法のポットから噴きあがる湯気の中に何となく嫌なオーラを感じつつも、スイッチ一つでお湯を出してコップに注ぎ、インスタントコーヒーの粉だけを入れる。

無論一人分。

恨めしげに睨んでくる部下の視線を勤めて無視し、インスタントの安っぽい香りを堪能しつつ口に含んで。

「西条さん、お客さん…六道家の御当主だそうですね」

「ぶー…ぶーツ?!」

部下に向かって盛大に噴いた。

「熱、熱いつ、うわ電話が火花をつ！ ラッキーっ!!」

喜ぶ部下には悪いが正直ぶん殴りたいと思った西条であった。

「お久し振り。何で直ぐに〜入れてくれないの〜? おばさんショックだわ〜」

「は、はあ」

ある意味当然の登場である。

大規模な超常現象、しかも発生場所がこの国のど真ん中、その上都庁地下施設の状態は完全に不明、更に自衛隊も米軍も基地機能皆無。

これだけの状況下で、例えGS協会に話を通したとしても——いや、通したからこそ、民間GSの中でもその名を馳せ、膨大なコネクションを誇る六道家が出張ってこない訳が無い。

ぶつちやけ「民間は何も出来ませんでしたー」では後々不味いのだ。

オカルトGメンのシエアがあんまり増えすぎると、あちら側としても死活問題。

色々と面子もあるであろうし、まさかのノーアポ突撃隣のオカルトGメンな行動力にかなり驚きはした物の十分に許容範囲内である。

そんなごたごたとした事を全く感じさせない六道家当主ではあったが、それよりも西条が気になっていたのは、彼女と一緒に来たもう一人であった。

もつさりとした白髪頭、胸まで伸びた真っ白な髭、ぎらつく目を持った70絡みに見える大柄な男性。

見た事は無いのに、何故か見覚えのある不思議な感情を持つて戸惑っている西条の姿を、懐かしそうに見るその老人は何度か髭を抜くと重々しい声で話し出す。

何処か胃の辺りが痛くなるような、だがとても楽しいイメージが頭を一瞬掠めて消えていった。

「西条……いや、西条殿」

「……何ででしょうか？」

見た目はどう見てもあちらが年上で、しかも纏う威厳とか威圧感とかもやたらと重厚な人物が、何故かとても丁寧な物腰で話し掛けてきた事に西条の戸惑いは加速する。

その隣の何があっても笑顔のままの六道家当主が、何故かとても驚いたように体を引いているのが視界の端に引つかかった。

「あー、まあ何ですか。ワシらがここに来たのは、少々お手伝いをさせて頂けないかと思いましたが訳ですな」

「あゝの、善十郎の翁々？ 何だか何時もと違つてく変ですよ？」

「変とは何じゃ小娘。いやその、こう見えてもワシも色んな所に貸しがあるもんですな。ワシ等に交渉ごとを任せて頂ければ、その、上手くやりますぞ？」

西条は硬直している。

何せ「あの」六道家の「あの」当主を、目の前で小娘呼ばわりする事の出来るような

人物がいたとは思つてもいなかった。

しかもその怪しすぎる人物が何故か腰も低く提案してきている。

——畏か？

何のだ、と突つ込む者も居らず、だがその提案は非常に魅力的。

そのコネクションが何処まで本当かは不明だが、この先時間が経てば経つほど煩い外野が足を引つ張り始めるのは間違い無い。

それを防げると言うのならば、迷わず飛びつきたいところである。

しかも正直な所一番手強い相手であろう六道家までこちら側で交渉に回つてくれると言うのだ。

「ええと、何故そこまでして頂けるのでしょうか？」

「……まあ、恩返しですわなあ。ほれ、先程ちよつと根回しもしておきましたし、役に立ちますぞ？ 何でしたら臨時に総指揮をもぎ取つて来て見せる事も可能ですわい」

照れくさそうに、懐かしそうに西条を見つめながら、善十郎は、忠夫の母方の大御所はそう告げた。

確かに煩い上層部からの電話も、関係各所からの連絡も先程から途絶え、お陰で少しは指揮に余裕が出来ている。

となれば、まだ色々聞きたい事はあるものの、利用できるのならば利用するべし。

「——お願いします」

「承った」

「おばさんも頑張るわ」

のほほんとした声を最後に、二人は連れ立って司令室を出て行く。

嵐のように過ぎ去った邂逅を、何だか訳のわからない事ばかりだと見送った西条であつたが、再び開いた扉の向こうから急ぎ足で戻つて来た老人を見て何とか意識を取り戻す。

老人が懐を漁り、西条の目の前に飾り気の無い長さ30Cmほどの棒を差し出した。

無言のまま、受け取れと態度で主張する老人の棒を握り締めた拳の下に手を差し出す

西条。

その手のひらに落とされた棒は、不思議な感触と見た目に寄らない重さで西条の手を僅かに沈ませる。

「これは？」

「美神令子嬢に渡してやってくれ。これは彼女の物じゃからな」

そう言い残して、肩の荷が降りたと軽く笑つて、老人は身体を出口に向ける。

呆然と見送つた西条は、ともあれそれをスーツの内ポケットにしまつて、結局何だつたのだろうかと首を捻るのだった。

「それじゃワシがこつちとこつちを当てるから、お前が——」

「こつちね。それにしても、何だか随分と態度がく妙でしたわよく？」

「…大昔に大分世話になったでなあ。『西郷』先生には」

「…よく分かりませんか？」

「何、平安から生きておれば色々あるでな。そりや貸しも山ほど出来るつちゅーもんよ」

「…ご先祖様から聞かしては、いたけど、何処まで本当なのかしら？」

「ふん。信じるのも信じないのもお前の勝手よ。…母からの預かり物も確かに渡したしのお。後は少々老骨に気合を入れるとするか」

常ならば耳障りなほどの喧騒と、息が詰まるほどの排気ガスが満ちた道路。

常ならば誰かが歩いている筈の歩道に人影は無く、軽いテンポの音楽と共に商品を声高に売りつけるCMの音も聞こえない。

だから、それを異常と言うのだろうか。

「店長ー。結局あの爺さん何者だったんですかー？ 途中でリムジンが合流してきたりとか、絶対只者じゃないでしょ？」

「昔っからの知り合いだ。色々世話になっちゃった事があるもんでな。頼み事は断れんのよ」

「だからと言ってこんな——」

大きなワンボックスカーの窓から外を眺めれば、天を覆う不気味なドームがビルの

隙間からちらちらと姿を覗かせていた。

太陽が昇っている筈なのに、辺りは夕暮れ時の薄暗さを見せている。

ポニーテイルをさらりと揺らし、運転席でハンドルを握るしかめつ面の雇い主と助手席で垂れている青年を固い座席越しに眺めて溜め息一つ。

窓が吐息で僅かに煙った。

「――避難勧告が出ている所にまで送る必要も無かろうに」

「あーあー聞こえないー」

「店長おおおっ！ ハンドル、ハンドル握ってええっ！」

ハンドルから両手を放して耳を押さえた男性の動きに慌てた青年は、横から手を突き出しハンドルを握る。

それを良い事に空いた手で窓を開け、煙草に火を点けた店長を豪胆と見るべきかそれとも適當すぎると言うべきか。

吹き込んだ風に混じって飛んできた紫煙に眉根を顰め、バックミラーの顔に視線で抗議する後部座席の女性がわざとらしく鼻をつまんだ。

渋々煙草を携帯灰皿に落としてハンドルを握りなおした所まで確認して、女性は二人の間から手を突き出し車のラジオをオンにした。

『――現在、東京の街を覆う謎の怪現象については全くの不明であるとの発表がオカル

トGメンより寄せられています。付近の皆様は慌てず警察官かGメンの指示に従って避難してください』

「…変わり映えしないな」

「だから今こうやって避難してるんでしようが。ちゃんとシートベルトして、ほら」

「むう。子ども扱いするな。大体これくらい…く、この」

「あーもう。ほら、ちよつと代わって」

自分の分のベルトを外し、助手席から身体を伸ばして後部座席のシートベルトを嵌め始めた青年の身体を少々邪魔に思いながらも、バックミラーに写るウェイトレスのそつぽを向いた照れの見える顔に小さく笑いが込み上げ。

——だが、突如として車の前に飛び出して来た人影に慌てて急ブレーキを踏む羽目になった。

両手を広げて立ちふさがった少女の長い黒髪が風圧に揺れるのを目にしながら、操り手さえも神がかったとしか思えないハンドル捌きで擦り抜ける。

何度かスピンを繰り返しながらも、オンボロだが頑丈さには信頼性のあるワンボックスは奇跡的に無事な姿で停車した。

振り回されて助手席から後方にすっぽ抜け、中々羨ましい体勢で二人分の手足を絡ませているウェイターとウェイトレスの無事を確認し、飛び出して来た馬鹿に文句をつけ

ようと窓から身体を乗り出します。

「この馬鹿つたれっ！ 自殺希望なら俺の見えない場所にしがれっ！」

「店長、それもどうかと思うぞ……うんっ?!」

「こんな時まで何で冷静なのさっ?! とにかく離れてっ！ 色々ヤバイっ！」

だが、罵声を投げつけられた少女は全く怯むことなく運転席に近寄ると、勢い良く窓を掴んで頭を突っ込んで来る。

逆に身体を引いた男性の目をしかと見つめると、少女は——おキヌは、歩道を指差し大仰に叫んだ。

「すいませんっ！ 妹が大変なんですっ！ この車をオカルトGメンまで貸してくださいっ！」

男性が少女の指差した先に目をやれば、確かに歩道に植えられた木の陰に、お腹を押しさえて蹲った少女の姿があった。

最近流行ののアクセサリーだろうか、何故か頭から角のような物を二本生やしたその少女は、ちらりとこちらを見ると聞こえよがしに唸り出す。

「…持病の流行性感冒が。うーん、うーん」

「…風邪が持病ってそりゃ大変だなおい」

「え、あ、て、天竜姫様のアドリブ下手っ?!」

最早何処から突つ込めばいいのやら。

後部座席から聞こえてくる青年の酷く切羽詰った声と、女性のどこか艶かしい吐息と、窓を掴んだまま慌てている少女と、未だにちらちらとこちらを見ながら唸っている角付きの少女を何となく聞き流し見渡して。

店長は大きく溜め息をついた。

「…何時になつたら落ち着いてまた開業出来るのかねえ」

——信じたくなかった。

あの人は、知る限りで最も強かった。

強くて、優しかった。

怒られても、叩かれても、怒鳴られても、それでも尊敬していた。

だから、ボロボロの里を駆け抜け、嘘だと叫ぶ妹分を置いて、疲れ果てた皆に声を掛

ける事すら思いつかずに匂いを追いかけた。

微かに残るそれを追いかけて、何時もの性質の悪い冗談に違いないと、今度のそれは幾らなんでも酷すぎると湧き上がる確信を只管に打ち消しながら走り続けた。

これは血の匂いじゃない。

これは死の匂いじゃない。

これはあの人の匂いじゃない。

そんな訳が、無い。

見送った父の、言葉に出来ないほどに悲しげな視線を感じて駆け出した忠夫には、そんな力ない否定しか出来ない。

咽返るような獣臭を掻き分け、途中で転がっていた巨大な前足を蹴り飛ばし、感覚が導く方へと足を進めていく。

だが、漂うそれは、無情に父の言葉を肯定するだけだ。

「——んな訳ねえだろ……！」

匂いは小高い丘へと続いていった。

視界を塞ぐ葉っぱを掻き分ければ、あの背中が見えるのではないか。

絡み付く下草はその背中にとどかせまいとしているように、スニーカーに纏わりついては引き千切られる。

——走り、駆け、急ぎ、辿り着いた匂いの終着点は、無骨な石の積み重なった場所だった。

綺麗に並んで置いてある猫又の女性の香りがついた花は、まるで供えてあるようにも見えた。

この場所は、里を見下ろすのにちょうど良い場所のように感じられた。

力の抜けて落ちた膝は、それが真実だと認めたように感じられた。

止まった自分の後ろに、誰かが空から降りてきた気配があった。

全部、認めたくない事に、した。

「」

背中から掛けられた、知らない誰かの声は一体何を言いたかったのか。

まるで自分の体が自分の物でないような虚脱感。

別れの言葉一つ言えぬまま。

全てを認められぬまま。

彼をこつそりと追いかけていた彼女は迷いながら、それでも解き放った鬮の付いた指輪は一瞬で広がり、抵抗の素振りさえ見せない忠夫をその中に捕え、閃光と雷にも似

た衝撃を与え、彼の意識を刈り取る。

——異変を感じ駆けつけた者達が見たのは、長老の仮の寝床と、その前に倒れ伏す一匹の赤いバンダナを巻いた狼。

そして、空を駆ける魔族の女と、その手に光る小さな球体だけだった。

第陸話 『だから貴方は走り出す』

「…暇ですね、土具羅様」

『…124回目』

冷たくも暖かくも無い床に腰を降ろし、胡乱げな目つきで二重の障壁と通路を隔てた向こう側の上司が淡々と答えた。

背を向けたままの土具羅は、何をするでもなく器用に短い足を組んで大人しく座り込んでいる。

この巨大兵鬼の腹の中、別々の対面した牢屋に入れられた二人は、何もする事が無い上に何もされないのが暇を持って余していた。

尋問するでなく、処罰が下される事も無く、放置プレイ続行中である。

閉じ込められて数時間も経っていない為、空腹はそれほど覚えなくて済んでいるのは不幸中の幸いか。

が、このままの状況が続く可能性を鑑みると、少なくともルシオラは非常に不安にかけられざるをえない。

そう、こればかりは譲れないのである。

何だってこの牢屋には毛布の一枚どころかそれすらないのであるのか。牢屋にせよ監視部屋にせよ最低限これだけは、と言うものがあるじゃないか。

ただの四角い部屋に薄緑色の向こう側が透けて見える障壁だなんて、幾らなんでも酷すぎる。

つまり設計ミスをしでかした魔神が悪いのであって、連帯責任だから問題無い。

「…土具羅様」

『何だ』

「もしもの時は自爆してください」

『その目は本気だなお前っ?!』

具体的には生理現象とか。

月に吼える 第三部

冷たい通路を歩いて行く。

どうして帰還の報告にも行かず、こんな所に居るのだろうか。

兵鬼の腹の中であるこの通路は、何時通つても趣味が悪い。

土具羅と埴輪兵が常に動き回り、時には魔神が騒ぎを起こし、またある時には末の妹が騒ぎを起こし、更にその内数回はベスパも巻き込まれて頭を抱える嵌めになる事もあつたあの城は、無機質ながらもどこか暖かい雰囲気にも包まれていた。

生物の中であるにもかかわらず、どこまでも硬質な空気しか満たされていないこの場所との違いが今の行動を誘うのか。

頭を振り、くだらないと吐き捨て、ベスパは手の中の球体を睨みつけた。

薄い幕で作り上げられたその内部に、青いジージャンとジーパンを身に付け、赤いバンダナを巻きつけた小さな青年が納まっている。

「…謝る気は無いからね」

呟いた言葉には、思ったよりも鋭さは見えず、ただ力無く流れていった。

胡座をかいて球体の中で背を向けた青年は、頬杖を付いたまま振り向こうともせず、僅かに震え、苛立ち混じりの答えを返す。

「…何を謝るってんだよ」

「何もかも、さ」

視線は、向かない。

沈黙が広がり、暫しの間通路を歩くベスパの足音だけが響いて、消えていく。

更に数歩も歩いた頃、重い空気をかき混ぜるように忠夫の声が耳を擦った。

「…つまり、何だ。里をフェンリルが襲ったのは、俺を里に呼び寄せる為だったってのか？」

唐突なその問いに、僅かに逡巡を見せたベスパは、だがはつきりと頷き肯定した。

しかし気配で意思を感じた筈の忠夫は背を向けたまま何も返さない。

「正確に言えば、お前と美神令子を、だよ。アシユ様が何を考えてらっしゃるのかは分からないけど、少なくともどちらかは里に様子を見に行く筈と踏んでらしたんだ。そしてお前達が居なくなつた所で一気に——始めの予定はそうだった」

「…何で俺と美神さんを？」

ベスパは溜め息一つ。

頭を振り、迷いを見せながら、分からないと小さく呟いた。

「だけど、里を襲ったフェンリルが大怪我して、大幅に遅延を余儀なくされたのさ。だからせめてお前だけでも…イレギュラーを減らす為だともおっしゃってた」

「良いのか、そんな事まで喋っちゃって」

「はっ」

嘲笑の中に、しかし僅かに見える感情。

嘆きと、戸惑いと——同情。

「あの方が何を目的としてらっしやるかまでは私も知らないし、お前も此処からは逃げられない。その上あつちの奴らは身動きも取れないし、誰が首謀者なのかもまだわかっていない筈さ」

僅かに間を置き、続けた。

「それにお前の頼みの綱、人狼達も頭を無くしてまともに動けな——」

「んな訳ねえだろうがっ!!」

怒声が放たれた。

目覚めてからベスパがこれまでの経過を説明する間も、問いに答える間も振り向かなかつた忠夫は、球体の中で立ち上がりベスパを睨みつけている。

「…あの長老はなあっ! ものスゲー強えんだ!! うちの親父と、犬塚のおっさんと、俺とシロが束になつてもかなわねえ程なあっ!!! そう簡単に死ぬ訳、ねえんだよっ!!!」

「…フェンリルの片足を落とせるくらいだからね。強『かった』のは間違い無いよ」

「ふっぎけんなっ!! そんな訳は、そんな事だけありえねえんだよっ!!!」

激昂に任せて右手を振るう。

だが、靈波刀も出なければ、怒りの満ちた声からの退魔の咆哮も響きはしない。握り締めた拳に、閉じ込められるよりも前の力は満ちてこない。

言葉しか、出せなかった。

それでも諦めてなるものかと、しかしもう止めてくれと頭の片隅で悲鳴を上げながら、捻り出すように力を呼ぶ。

集中し集中し集中し、そして集中して。

ようやく得た微かな手応えが霧消すると同時に、意識が半分ぶっ飛んだ。

「…人狼の部分と人間の部分を無理矢理分離させたんだ。靈力の急激な減少と、魂の分割。そんな状態で靈力出すのは無理だよ——今まで意識があっただけでもたいしたモンじゃ」

「う、あ。この、この——」

球体の中に崩れ落ち、拳を握り締める忠夫が小さく小さく言葉を零す。

最後に、忠夫が意識を失う直前に何とか舌の上に乗せた言葉は、果たして誰に言った言葉だったのだろうか。

「——ちっ、くしょう…」

第六話 『だから貴方は走り出す』

声が、聞こえた。

途切れ途切れに回る声。

つい最近まで一緒に居て、巨大客船やジャングルを駆け回り、色々酷い目にもあったけど楽しかったあの時に、隣に居た彼女の声。

離れてそんなに時間が経った訳ではない。

むしろ、今まで沢山の事が在り過ぎて、濃くて短い時間ばかりで、だから長く感じるのだろう。

あの子の声だ。

そう、あの胸の薄い――

「んがっ?!」

体の前面にごつつい衝撃が走った。

そう、子供の頃、夏の日に滝の上から滝壺に向かって飛び降りて、途中で横合いから飛び出してきた父親のドロップキックを喰らって体勢を崩し、思いつきり腹を水面に打ち付けたときののような痛みだ。

それにしても飛び込みが危険だからと言って余計に危ない目に遭わせる父親もどうかと思うのだが。

まあその後逆さ蓑虫状態で滝に吊るされて強制精神修行させられていたから良しとしよう。

どうやってあんな場所から吊るしたのかは、結局最後まで教えてもらえなかったけど。

…あの頃からうちの両親はスパルタンだったんやなあ。

「タダオ。いま何か失礼な事考えてなかった?」

「んあ? いや別にルシオラの胸についてとか平面に腹から当たるとペちーんって痛いとか考、え、て…ませんよ? ええ全く」

無言でシエイクされました。

「まあお仕置きはこれくらいにして。それで、何でタダオがこんな所に居るのよ」

「そ、そりゃこっちの台詞じゃい。ルシオラこそ、何でこんな所にいるんだ？」

辺りを見回せば、何も無い真四角の部屋と、その内通路に面した側の半透明の壁が目

に写る。
居住空間にしては殺風景過ぎるし、かといって何か重要な場所という雰囲気でもな

い。
強いて言うなれば監視部屋、だ。

「えーと、お前も捕まってるのか？」

「そゆ事。ま、色々複雑なんだけどね……」

溜め息混じりに呟いたルシオラは、ゆつくりと忠夫の閉じ込められた球体を細い指先で弄ぶようにくるくると回す。

数回転させた後、軽く指を細めて浮かし、僅かな滞空時間を持たせて開いた手のひらで受け止めた。

今の行動に文句を言おうか、それとも悲しげな表情に慰めの言葉をかけるべきか、数瞬悩んだ忠夫は、何度か口を開け閉めした後、結局何も言えずに黙り込んだ。

互いに不安と焦燥を抱えた二人の視線が絡み合う。

同時に相手の瞳に語り掛けたと言う色と、語りかけて欲しいと言う色が垣間見え、だが言葉は咽の奥に詰まって滑らない。

このままでは埒があかないと二人共に決意し、言葉を放とうとしたその瞬間に相手の口が動くのを目にして、再度言葉が止められた。

そのまま数秒の時間が過ぎ、探るような、窺うような目で互いの視線を絡めあう中で、ゆつくりと先に口を開いたのは忠夫だった。

「あの、さ」

手探りで進むような声音の中、視線を合わせた忠夫が続けるよりも早く、ルシオラがそれを遮る。

庇ったとも取れるその声音に、確かに含まれるのは焦りと心配の音色。

「ベスパに、何か言われた？」

「…う。あー、いや、別に」

そつぽを向いて頬を掻きながらの煮え切らない忠夫の態度に、少女は柔らかい声を放ち、球体をくるりと回して視線を合わせた。

『『悪かった』って』

「へ？」

微笑みの中に若干の苦さと寂しさを混ぜ、ルシオラは囁くようにそう告げた。

「ベスパが、ね。気絶した貴方を連れて来た時に、そう言っというって」

「……」

気不味そうに天を仰いだ忠夫の入ったそれを、ルシオラは笑みを崩さぬままに指で突付く。

硬質な手応えを返す球体は、指も暖かさも通しはしない。

だけれども、少なくとも忠夫は見えるし言葉も通る。

だから、物足りないけど何とかなるだろう、と彼女は思う。

「で、何があつたの？」

柔らかさはそのままであっても、その言葉には確かな芯が宿っていた。

「あーもうっ!! 何でこんな辺鄙な所に住んでんのよあの引き籠もり竜神様はあああつ!!」

妙神山に美神の怒声が木霊する。

そこに山があるからだ、とは有名な登山家の言葉だっただろうか。

だが、山登りではなく妙神山にある修行場を目指す美神にそんな名言は欠片も慰めになりはしなかった。

不毛と言うかただひたすらに気の滅入る岩肌と今にも崩れそうな足場が続いており、寒々しい風が吹き付ける中を歩く彼女の額では、それでも吹き出した玉の汗が浮かんで袖に拭かれて消えていつていた。

現在東京を襲っている大規模霊障と、その直前と言うタイミングで美神の事務所に現われた竜神族の王女、そして忠夫とシロ、タマモ達の感じた「嫌な予感」。

美神の靈感が弾き出した結論は、飛びきり付きの厄介事で——しかも金に成るかどうかも分からない、であった。

とつとと厄介事筆頭を妙神山に預けようと、里に戻ると言う狼・狐トリオに許可を与

え、おキヌを乗せて車を飛ばせば壁の間隙で天竜姫が昏睡状態に陥り慌ててストップ。

天蓋から離れば意識を取り戻した物の、接近は難しいとして二人を降ろし、オカルトGメンの西条に保護して貰うように言い残し、美神は単身妙神山へと移動していた。

「ぜつ、たい、に！ ぶん、取れるだけ！ ぶん、取つて、やるんだから！」

執念と気合と根性で一気に山を昇り、逆に勢いを付け過ぎて途中でバテる場面もあった物の漸く目的地の前に辿り着いた彼女の前には、遠目からも確認できていたそれがばつちり立ちはだかつていた。

それは、規模は小さい物の東京を覆っていたそれと同じもの。

人間達には全く影響を及ぼさないが——おそらく、神魔族に対してのみ強力な対抗要素を織り込んだ結界らしき物。

それが美神の出した推測だった。

「……たく。どーりで呐喊娘を迎えにも来ないと思つたわ」

妙神山修行場、門前の広場で息を整え終えて毒付いた彼女は、取り合えず中に入ってみるかど溜め息と共に一步踏み出して。

突如、後方から響いた音に意識を取られた。

何事かと振り向いた彼女の瞳に、空に浮かぶ小さな黒点が写りこむ。

段々と音を大きく響かせながら近付いてきたのは、一機の古い丸みを帯びたヘリコプ

ター。

やがてそれは美神の立つ広場に接近し、ローター音と砂煙を率いてゆつくりと地面に着地する。

その羽根の動きが止まらぬ内に、勢い良く着たい横の扉が開かれ一人の女性を吐き出した。女性は全く動きを止めず、飛び出した勢いのまま砂煙から目を庇った美神に一直線に駆け寄る。

視界の悪い中、それを察知した美神が身構え、神通棍を取り出して迎撃体勢を整えた瞬間、飛び出した女性が大声を上げた。

「令子ーっ!」

「マ、ママむぎゅ?!」

両手を広げて美神を抱き締めたのは、美神令子が中学生の時に死んだ筈の彼女の母親——美神美智恵であつた。

「良かった、無事だったのねえええ……!」

「ちよ、苦し、ママ! ってママっ?! え、何この状況って一体 what?!」

美智恵にしつかと抱き締められ絶賛混乱中のままもがく美神。

しかし母はそれを無視して輝く笑顔でひたすらに、かいぐりかいぐり抱き心地を堪能している。

その視界の端に、ヘリコプターのパイロットに紙幣の束を渡し、おや、と言う感じで母娘の一方的な感動の再会を喜ぶ二人に目が向けられた。

「ははは二人とも仲が良くて何よりだ」

「どこをどう見たらそう見えんのよこのくそ親父っ！ てか助けもぎゅ」

強力すぎる精神感応を抑える為、外せなかつた筈の鉄仮面を付けていない事に突っ込む間も無く、抱き締め再開。

「令子ったら公彦さんにそんな呼び方をして！ ああでも貴方の一番大事な時に居なくなつた私が悪いのねっ！ 御免なさい令子ああでもそんな令子も可愛いわあっ!!」

柔らかない塊に顔を突っ込んで呼吸困難に陥る娘と、久方振りの接触到暴走中の妻を見て、公彦は微笑ましい物を見る目で二人を嬉しそうに見つめているだけであつた。

「うんうん。やつぱり美智恵も色々と堪つてたみたいだねえ」

「あらやだ。ちよつとアナタ、令子つてばこんなに立派になつてるわよー」

「何処を触りながら言つとるかあああああああああつ!!」

「娘の乳を母親が触つちや駄目つて言うの?! 私のをあんなに揉んで触つて吸つといて
!」

「将来子沢山でも大丈夫つて事だよ」

「令子！ 私まだお婆ちゃんには成りたくないわよ?!」

「ああもう何処から突つ込めばいいのよ?!」

抵抗の為に振り回そうとする神通棍も、暴走しながら血走った目で色々危険な所を動き回る母の手が器用に動いて拘束する。

熾烈なサブミッションもどきを繰り返しながら、結局堪能しきった美智恵が美神を解放するまで彼女の悲鳴と混乱は続いたのだった。

ともあれ息も絶え絶えな美神を夫妻二人で両脇を抱えるように引き摺りつつ、3人揃って紫色の壁を擦り抜ける。

何で此処にいるのか、はたまたどうして生きているのか、まさか時間移動能力なのか、その上何故二人揃っているのか等々の美神の質問は、面倒臭いから纏めて話すと言う母の言葉で一刀両断され、不承不承溜め息混じりに身を起こした美神の目に、なにやら大騒ぎ真つ最中の一部見慣れた面々が見えた。

一際立派な角を生やした男性——竜神王が、小竜姫と近衛兵達にしがみ付かれて暴れていた。進行方向は妙神山の門、つまり美神達の後方だが、捕まっている方も捕まえられているほうもそれ所ではない様子。

少し目を横にずらせば、右手の腕時計を眺め、左手の銃でヒヤクメの後頭部を突付いているワルキューレの姿。

トランクから伸びたコードを額に付け、必死に辺りを見回していたヒヤクメと目が

合ったが巻き込まれたくないのでスルー。

更に少し離れた所で岩に腰掛け、バナナを食べては皮を後ろに放り投げているのは猿神だろうか。

既に小山と化しているバナナの皮から、何とも言えない甘ったるい匂いが漂ってきている。その名も高き猿神の目が、バナナも写らない虚ろっぷりであった。

「…ねえ、令子?」

「…何よ」

「此処って何時もこんなのかしら」

「少なくとも神族ってこういうの多いみたいね」

誤解と言っても信じてもらえないであろうし、美神も「真つ当な」神族を見た事が無いので仕様が無い。

最も、「真つ当な」神族が居るかはそれこそ神のみぞ知る、なのだろうけれど。

ともかく、先程までの狂乱っぷりを脱ぎ捨てて、余所行きの仮面を被った美智恵は大きく息を吸って、空咳一つ。

だが、それを打ち消すように全く同時に銃撃音が響いた。

硝煙を上げる銃口の主は、周囲の視線を一身に集めながらも腕時計から目を離さぬままにほつりと一言、足元に穿たれた銃撃痕を見ながらカタカタ震える下つ端神族に聞こ

えるように呟いた。

「…おや、私とした事が少々焦っているようだ。なあヒヤクメ、今日の私のトリガーは軽すぎると思わんか？」

「ひう?!」

「手が止まっているぞ。良いか、此処が一番妖しい場所に近いと言う通達が来ているんだ。一刻も早くあのクソ忌々しい壁の穴を見つけんと…ヒヤク「イチ」メになつてしまふかもしれないな？」

「あうあうあうあうあう」

涙目で紫色の天蓋を見渡し始めた神族から、見てはいけないものを見てしまったように一斉に目を逸らす竜神王達。

口元に手を当て空咳をしたままの体勢で固まっていた美智恵が、油の切れたロボットのような動きで振り向き、美神に向かって半眼で尋ねる。

小刻みに震える指先は、無表情で時計の進みをカウントし始めた魔族の女性に向いていた。

「令子…魔族ってあーいうのばかりなの？」

「…ワルキューレがセメント過ぎるだけよ。多分」

…こと魔族との戦闘経験に置いてならば、美智恵も美神以上の物を持っている筈なのだ

が、どうも目の前の光景はそれを覆すに十分な物だったようである。

銃声に驚いた小竜姫と竜神王、そして竜神王にしがみ付いていた近衛兵達の一部がこちらに気付いて何やら騒いでいるが、てんやわんやな彼らを放つて置いてこつそり逃げようか、とも思う美神である。

「駄目だよ。もう大人なんだからちやんと最後までやるべき事はやる事」

「…わーかつてるわよ」

こつん、と、どこか優しく頭頂部に振り下ろされた拳骨が、最後の選択肢を奪った事だけは間違い無いが。

「…ふーん」

「ふーん、つてお前なあ」

頭を垂れたまま、何処か申し訳なさそうにポツリポツリと事の顛末を語った忠夫に掛
けられたのは、そんな気の無い一言だった。

興味無し、と言う訳ではない様であるが、それでも呆れたような様子が確かに忠夫に
は見て取れた。

情け無さそうに球体の中から見上げてくる青年を、睨み付ける訳でもなく、だが目を
逸らす事無くひたと見つめるその視線から居心地の悪そうに身体を振る忠夫に向かっ
て、ルシオラは全く意に介さず言葉を綴る。

「で、話してみても少しは落ち着いた？」

「…まあな」

不貞腐れた態度が余りにも子供っぽいので、彼女は思わず笑みを零しそうになるが何
とか堪え切った。

——彼は、今の彼は不安定なのだろう。何とは無しにそう思う。

初対面の女性に対して怒鳴りつけたり、ましてやそれが自分を攫った魔族であるから

といつて敵意をいきなり剥き出しにするような男ではない、と、ルシオラは、そう思うのだ。

忠夫が語った話の中に、隠し切れない、いや本人はそもそも含まれているとは思つてもいないであろうが、確かに存在する「長老」と言う老いた人狼に対する親愛と信頼の感情。

だが、それ故に、それを信じたくないが為に、それを肯定する言葉に対し、まるで嘔み付くように抵抗した。

それ程忠夫にとって大きな存在であつたのだらう、在つた事の無い人狼に対し、ルシオラはほんの少しだけ、見当違いと分かつていながらも、嫉妬した。

そんな自分が何となく不思議に思えて、気付かない内にほんの少しだけ口元が緩んでいた。

「…笑うなよな」

「笑つてないわよ。真面目に聞いてあげたじゃない」

「そりやまあ有り難かつたけどさ」

拗ねた子供のようにつつぽを向いた青年は、胡座を掻いたまま、膝の上に肘を乗せ、顎を手のひらで受け止め小さく呟いた。

「…分かつてるんだ、何となく。多分、長老はもう居ないって」

視線はルシオラに向かないままで、零れたのはそんな言葉。

「親父は性質の悪い嘘は付くけど、あんな嘘は絶対に言わない。長老の匂いも、血の匂いに混じって在った。それに、あの折れた刀の柄は、長老の愛刀だった」

紡がれ続けるその言葉に、だが、ルシオラは眉根を潜める。

悼む風でもなく、ただ淡々と呟かれる言葉に、何の感情の色も見えはしない。

それは、何を思えば良いのか、と言う様子ではなく、ただどんな感情も乗せたくは無いと告げているようでも在った。

それでは、それだけでは駄目なのだろう、とルシオラは思う。

まだ、受け止めるまでには至っていないのだと。

それを受け入れようとはしていないのだ、と。

だから、ちよつとだけ背中を押そう。そうすれば、彼ならきつと自分で前を見て歩いていけるから。

「——それだけ?」

「…何がだよ」

「貴方は…悲しくないの?」

だから、きつと嫌われるだろうけれど、こんな酷い台詞も吐いて見せようではないか。経験の少ない大根役者、だけど気持ちが通じると、彼なら大丈夫だと思ふから。

これも身勝手な考えなのだけだ。

「…煩い」

「寂しくないの？ 怒らないの？ 悔しくないの？ 貴方は、認めたんじゃなくて、ただ諦めただけ。それで良いの？ …私は、貴方の大切なモノを傷付けた奴らの一人よ。何か言いたい事があるんじゃないの」

体を起こし、立ち上がり、ルシオラを見上げる視線には、困惑と衝撃が見て取れた。彼女としては、別に嘘は言っていない。

例え道が分かれようとも、意図の見えない行動を取っていようとも、アシユタロスはアシユタロスだし妹達は妹達だ。

ぶん殴つても矯正してやるとは誓っていても、裏切るつもりは毛頭無い。

結局、敵には見れないのだから。

だから、キツツイ事を言われても、後で落ち込む事にしよう。

そう思つて、僅かに身体を緊張させ、身構えていたルシオラに、だが忠夫は溜め息を付いて頭を振りながら再び座り込んだ。

虚を突かれて、緊張を緩めたルシオラに、頭を掻き掻き忠夫が言う。

「…あー、その、何だ。正直それは無理」

「…はあ？」

呆れたように疑問符を浮かべたルシオラを横目で見ながら、照れたような忠夫が僅かに頬を染めて呟いた。

「だつてさ、お前つて結構、優しいしな。絶対俺の為に悪者になろうとしただろ、今」
まあ、流石にこれは予想していなかった訳で。

何か色々、嬉しさとか恥ずかしさとか照れ臭さとかが浮かんで混じり合い、思わずルシオラは忠夫の入った球体を牢屋の壁に投げつけた。

思つたよりも力が入つたのか、壁にぶち当たつたそれはピンポン球のように部屋中を跳ね回り、忠夫の絶叫と共に周囲を激しく動き回る。

熱を持ち、ともすれば緩みそうになる頬を押さえて冷ましながら、彼女は暫く硬直していたのだつた。

「…馬鹿」

「俺が言いたいのはわあああつ?! 止めてくれえええつ!!」

やがて球体も勢いを失い動きを止め、漸く赤みを残しつつも冷静さを取り戻したルシオラがそれを拾い上げる。

まだ中で目を回している忠夫に謝りつつ、彼女は一つ気合を入れた。

「——良し!」

「何が良しじゃああん?! お前俺を何だと思つとるかコラっ!」

「煩いわねー。男が小さい事に何時までも拘らないの!」

「命の危険は小さい事じゃないっ?!」

暫く喧々囂々と言ひ争つていた二人だが、ふとその勢いが途切れ、二人同時に目を見合わせ、何となく沈黙が辺りを染めた。

数秒二人は視線を絡ませ、同時に堪えきれないように吹き出した。

何時も通りの空気が流れ、笑い声と共に踊つていく。

その笑い声が収まった時には、二人の目にはしつかりとした意思が宿っていた。

「それじゃ、先ずは——」

「——認めるためにも、逃げないとな。此処から」

『あー。ちよつと良いか?』

頷きあい、さて如何するか、と頭を悩ませ始めた二人に、横合いからいきなり声が掛けられた。

二人が慌てて視線を飛ばせば、呆れた様に頬杖付きながら隣の部屋からこちらを見ている土偶が一体。

「ど、土具羅様、居たんですか?!」

『…お前なあ』

心底疲れたように放射能臭い息を吐き出し、土具羅はそれ以上何も言わずに通路の片隅を指差した。

『丁度良い…つーには大分待たせたみたいだが、チャンスが来てるぞ』
ルシオラの視線がその指の差す先を辿る。

通路の隅、土具羅から部屋の中を覗くように、明るい色の羽が僅かに見えていた。

それは、蝶の羽。

彼女の妹、その眷属。

「…パピリオ？ 居るの？」

言葉に僅かに震えたような気配が零れ、やがておずおずと少女が顔を障壁越しに覗かせた。

怒られる事を怖がるような素振りを見せながら、周囲をきよきよと不安げに見渡しながら、末の妹は障壁越しにルシオラと忠夫を見上げている。

駆け寄ったルシオラに向かって、パピリオと呼ばれた少女は頭に被った帽子を揺らし、顔を隠すように俯いている。

「ルシオラちゃん…私は、どうしたら良いか分からないでちゅ」

俯いたまま、少女は肩を震わせ片手を伸ばす。

その小さな手のひらから、零れるような光が解き放たれた。

光は障壁に溶け込むようにゆっくりと混ざり合い、波紋を広げて消えていく。

「でも、でも！ アシユ様は、今のアシユ様は違うんでちゅ！ あんなのアシユ様じゃない！ だから、だから——！」

そつと、ルシオラはパピリオを抱き締めた。

ルシオラの腕の中でパピリオの体が一瞬大きく震え、そして小さく何度も動く。

嗚咽を繰り返す妹の頭を優しく撫でながら、ルシオラは初めてアシユタロスに逆らった少女に、ありがとう、と囁いた。

そのまま、数分ほど経つただろうか。

やがて少女がルシオラの腕の中で顔を拭い、真っ赤な目のままで身体を離す。

瞳には不安が、身体には強張りが残っていたが、それでも視線はルシオラから離さない。
い。

大きく妹に頷いて見せたルシオラは、忠夫の閉じ込められた球体を大事そうに両手で包むと、パピリオに土具羅の牢も開けるように促した。

だが、その手が伸び、障壁が解除されたと同時に、通路の先から何か落ちる音が響く。

慌てて振り向いたルシオラとパピリオの瞳に、お盆に載った2つのコップを落として

走り去っていく埴輪兵の姿が写り込む。

寸暇の間も置かずにルシオラが魔力砲を放ち、埴輪兵を打ち砕くが、僅かにそれは遅かった。

巨大兵鬼内に、けたたましい警報の音が鳴り響く。

「やばっ！ 土具羅様、パピリオ、逃げるわよ！」

『いや、お前らだけで行け』

一歩踏み出したルシオラが、土具羅の言葉につんのめる。

振り向いたルシオラの目に、至って落ち着いた風情の土具羅が頷きを見せた。

「土具羅様っ?! 正気ですか?!」

『本気と言え本気と。ワシは残る。まだ確かめねばならん事もあるしな』

「私も残るでちゆ。私まで居なくなったら、ベスパちゃんが可哀相でちゆから」

そう言って微笑む末の妹の目には、決して揺らがない決意の色がある。

梃子でも動かない、と判断したルシオラは、だがそれでも一瞬迷いの色を見せた。

「パピリオまでっ! …ああもう、どーすんのよ!」

『行け、行つて伝えて来い。アシユ様を止めるには、お前らだけじゃ無理なのだから』

「頼んだでちゆよ、ルシオラちゃん。土具羅様は私がしつかりお守りするでちゆから!」

戸惑いを振り切らせる為の、力の在る笑み。

逡巡を続けていたルシオラは、だが懐の忠夫が何かを囁くと、振り切るようにして駆け出した。

「無理するんじゃないわよー！」

そんな一言を残して。

その背中を見送っていた二人は、ルシオラが角を曲がって見えなくなった事を確認して直ぐに動き出す。

パピリオが兵鬼内のあちらこちらに忍ばせた眷属達から状況を伝えてもらい、それを元に二人揃ってルシオラ達とは反対方向に駆け出した。

「ルシオラちゃん達、大丈夫でちゆかねー？」

『さあな。むしろワシの方が危険度は高いかも知れんぞ。ま、あやつなら派手に暴れ

ていい圏になるかもしれんがな』

言い終わらぬ内に、腹に響くような重低音が通路の向こうから響いた。

どうも力技で壁をブチ破ったようである。

「…大雑把でちゅねえ」

『あれも持ち味だろうさ』

パピリオの先導に続きながら、土具羅は考える。

隣の部屋で始まった大騒ぎを耳にしながら、土具羅の演算装置は一つの疑いを弾き出していた。

何故、テン・コマンドメンツをパピリオとベスパに組み込んだのか、だ。

あのプログラムは、10のコードに触れた行動を取った場合、それを組み込まれた存在を消滅させる物だ。

だが、同時にある程度大雑把な規制を設ける事で、取れる行動に幅を持たせたものでも在る。

その良い証明が、土具羅の目の前を駆ける少女である。

明らかに反逆とも取れる行動を取りながらも、消滅していない。

もつと強い規制をかけることも可能であったにもかかわらず、だ。

それは、土具羅の考えた突拍子も無い可能性を、裏打ちするかのような現実であった。

——つまり、アシユタロスがこれを組み込んだのは、もし計画が失敗した時に娘達が「テン・コマンドメンツを組み込まれた為、逆らう事が出来なかった」と言う理由付けをする為ではないか、と。

一方で駒のように扱いながら、もう一方でかつてのアシユタロスのように大切に思っている節がある。

『矛盾、か』

「…土具羅様」

短い足をばたばたと動かしてそれなりに必死で駆ける土具羅に、振り向かぬままにパピロオが呟いた。

真剣な声音に、土具羅の足が動きを僅かに鈍らせた。

「ルシオラちゃん、やっぱり胸元が寂しすぎると思うんでちゆが」

そのままつんのめって通路に頭から突っ込んだ。

何だか真剣に考えてたのがアホらしくなりながらも、慰められてた時にそんな事考え取ったのか、と溜め息混じりに起き上がった土具羅は心の中だけで突っ込んだ。

何処か罫でもはいつとらんだろーな、と頭を撫でながら、口から零れたのは別の言葉。

『本人には言うなよ』

「……ちえ」

『言・う・な!』

「はーい」

先導がこれで大丈夫なんだろうか、と一抹の不安の不安を抱きながら、二人は巨大兵鬼の中に隠れ場所を求めて駆け出していったのだった。

第漆話 『それでも貴方を信じたい』

「ふ、このルシオラを甘く見るからそう言う目に合うのよ！」

顔の前に立てた指をリズム良く振りながら、絶好調ですとでも言いたげに不敵な笑みを浮かべるルシオラの眼前の通路には元埴輪兵だった残骸が数体分転がっている。

黒焦げになった通路の壁と、未だ巻き起こる塵煙、そして鳴り響く警報が相俟って、辺りは何とも凄惨な様相を呈していた。

「ああああホかお前はああああっ!!」

「何よー。ちゃんと全滅させたじゃない」

忠夫の魂を閉じ込めた球体の中で、呆然とその暴力の嵐を見ていた忠夫が大絶叫。

それを片手で遠ざけながら、もう片方の手は耳に当てられていて、ルシオラは視線と態度で煩いと主張していた。

さつさとこの不気味な巨大兵鬼の中から脱出して、美神達の所に駆け付け、この事件の詳細な情報を伝えて対策を講じる必要があったのは確かだ。

だが、どうして静かに速やかに目的を果たすのではなく、大暴れしながら出口を探しているのだろうか。

そう言っている間にもルシオラの足は再び動き出し、適当にとしか思えない動きで曲がり角をあつちに曲がりこつちに曲がりどと駆けている。

だが、案内板が在る訳でもなく、ましてや内部構造に熟知している訳でもない二人にとっては当に迷路の真つ只中。

全速力で駆けては障害物——と言うか、たまたま出会つた不幸な埴輪兵を蹴散らし驀進する。

そんなこんなで走り続けて10分ほど。

時折爆破と破壊工作でストレス解消しながらも、ルシオラの眉は段々と釣りあがり、忠夫は精神的負担による頭痛が増していくのをひしひしと感じるのだった。

月に吼える 第三部

「ん〜。多分右ね！」

「待て待て待て！ お前さつきそう言つて危うく埴輪に挟み撃ちされかけただろうが！」

「もう、文句ばかり煩いわねー」

「だから、道の選択は俺に任せろつてば！ こちとら半分人狼、方向感覚には自信ありだつっのー！」

それならば、と突き当たりのT字路を忠夫の指示に従つて左に曲がるルシオラ。

その背中が角が曲がつて消えていき、寸暇の間も置かず再び爆発が彼女達が消えた通路の先で巻き起こる。

その爆発に背を押されるようにして、更に加速したルシオラが角を真つ直ぐに駆け抜けていった。

その後を追うようにわらわらわらわらと数え切れない程大量の埴輪兵が追いかけていく。

『ぼっぼー』

『ぼっぼー』

『ぼっぼー』

「何が方向感覚に自信あり、よ！ 思いつきりさつきの監視部屋に逆戻りしたじゃない！ しかも埴輪兵達溜まつてるし！」

「ああつ！ そーいや狼の部分抜かれて置いて来たんだっけ！」

「ああもう急いでるのにこのお馬鹿あああつ！」

怒涛の如く後方の通路を埋め尽くす無表情の埴輪兵達に向かって魔力砲をぶち込みつつ、どっちもどっちの騒がしい二人は通路をひたすら適当に進んでいく。

第漆話 『それでも貴方を信じたい』

「ちえいさつー！」

轟音を立てて巨大な三本角の兵鬼の半ば辺りの装甲が内部から破裂した。

盛大な爆発であつたにもかかわらず、その巨体は巨体ゆえに僅かな痛痒しか感じていないらしく、甲殻虫にも似たそれはほんの少しだけ身を振り、再び何事も無かつたかのように姿勢を戻す。

未だ煙の晴れないその爆発痕から、その煙を突き破つてルシオラは亜空間に踊り出た。

だが、追撃の手は緩む所か更に悪化の一途を辿っている。

「何よあれ！ 幾らなんでも堅すぎるわよ！」

「見た感じマリアにどっか似てるよな気がするなあ。もしかしてカオスのおっさん技術提携でもしてるんじゃないのか？ …やりかねんなあのマッド」

「ああもう他人事みたいに！」

実際手荷物以外の何者でもない忠夫にとっては、事態の推移に対しては全くの無力であるからある意味他人事に近いものがあるかもしれない。

問題は、幾ら手が出せないからといって向こうがそれに頓着してくれるとは全く思えない所である。

その問題は、集団で煙の中から飛び出して来た。

「逃げ足の速い… ターゲット・ロック！ 全弾発射あつ！！」

ブースターを噴かせながらルシオラの後を追いかけるのは、二桁に及ぼうかという数のテレサ達。

その内数体はあちこちから火花を散らしていたり、或いは装甲に罅が入っていたりする物の動き自体には遅滞が見られない。

高速機動で連携しながら、半球状に広がったアンドロイド達はそれぞれの火器を目標に向けた。

連続で降り注ぐ魔力の籠った弾丸の群れ。

「くうっ！」

進行方向を変えぬまま、一瞬だけ振り向いたルシオラは迫るミサイルとロケットの群に手を向ける。

薙ぎ払うように魔力砲を振り下ろした。

連続する爆発と衝撃波。

高温と爆炎にルシオラ達をロストしたテレサ達は、警戒しながらもセンサーを稼働させる。

だがそれが目標を捉え直すよりも早く、煙を纏いながらルシオラが下方に飛び出した。

「逃がすかあつ！」

背部と足底部のブースターに火が灯り、莫大な推力が瞬く間にテレサ達を前へと蹴り飛ばす。

加速しながらランダムで回避軌道を取るルシオラに対し、テレサ達の両腕から突き出した鋼の銃口が火を噴いた。

後方から迫る火線を大きくロールを打って回避するルシオラ。

その逃げ場を塞ぐように、数発のミサイルが上下左右から接近する。

だが、ルシオラが選んだのは迎撃ではなく更なる加速。

更に速度を増した彼女に対し、それでも振り切れない追加のミサイル攻撃の群が僅かにタイミングをずらしつつ更に迫る。

楕円を描きながら包囲するような軌道で迫るミサイル群は、しかし直前で速度をゼロに落としたルシオラに置いていかれた。

彼女の目の前で目標を見失ったそれらは動きを止めずにそのまま直進。

やがて何も無い空中で爆散した。

だが、速度を落とした代償に、その場に停止したルシオラは加速を続けたテレサ達に完全に包囲されてしまう。

「落ちなっ!」

包囲網の中心で動きを止めた彼女に、全方位から銃弾が迫る。

「両方の掌を広げて」 防御体制に入ったルシオラに、それは紛う事無く突き刺さり。擦り抜けた。

「なっ?!」

巧妙に組まれた球形陣だからこそ、互いの火線がテレサ達を傷付ける事こそ無かったが、その光景に一瞬ならずとも動きを止めた彼女達の前で、にやりと笑みを浮かべたルシオラが揺らいで消える。

幻影、と言う可能性に気付いたテレサ達がセンサーを稼動させるよりも早く、先程ミサイルがぶつかり合って巻き起こった煙を、内部から膨れ上がった巨大な魔力が蹴散らした。

「紛う事無く全力全開よ！ シューティングらしく雑魚はボンバー喰らって落ちなさい！」

咆哮と共に放たれたそれは、空間を振動させながらテレサ達を巻き込んだ。

レアメタルと超魔導技術によつて構築された装甲は、しかしその暴虐に耐え切れな

い。
解放された魔力の奔流は、テレサ達の群に当たつて光の粒を飛沫のように散らしながら全てを飲み込んでいく。

衝撃と爆裂に吹き飛ばされたテレサ達は、驚異的な事にそれでも原型を保ちながら小爆発を繰り返して墜落していった。

「…はあ、はあ。もー駄目。今ので大分疲れちゃったわ」
「む、無茶苦茶な火力やなあ」

「そりやそうよ。それでも魔神の娘だもの」

肩を落として息を荒らげるルシオラの顔には、口調とは裏腹に疲労の色が濃い。

「…ふう。もう、馬鹿みたいに堅つたい装甲に、何あれ、そんなに強くないけど対神魔用

コーティングでもしてあったみたい」

「の、割には武器がしょぼかったな」

確かに体のあちらこちらを煤けさせたルシオラには大した傷らしい物は無い。

ただ真近で炸裂した爆音と衝撃、閃光に少しふらつき気味では在るが。

ルシオラ曰く「ボンバー」を喰らっても、行動不能にまで追い込まれた物の消滅にまで至っていないほどの重装甲。

しかし、その装備した火器の効果の程は、中級以上の神魔に通じると言われれば、はつきりと否である。

「…まるで、対人戦を想定して作られたみたいな…？ でもそれにしては装甲が…」

「おーい、ルシオラー？ さっさと逃げようぜ」

体中についた煤を払い落とした後、暫し顎に手を当て考え込んでいたルシオラであったが、忠夫の言葉に慌てて逃走を再開した。

今は、此処から逃げ出してアシユタロスに対抗する為の情報を入界に持ち帰ることが優先である。

無論、忠夫の為にも急いで逃げなければならぬのであるが。

反転し、大逆天号とそれを囲むように陣を組んでいる逆天号群から距離を取るルシオラ達。

後方をちらちらと窺い警戒しながら離れていく二人に対し、だがその兵鬼群は動きを見せない。

追撃の手が全く見えない事に安堵と不安がない交ぜになった表情で、ルシオラは亜空間から脱出するためにゲートを開く。

「…おかしいわね」

「…追っ手がこねーな。もつとわんさか来ると思ったのに」

最後に後方を振り向き、ゲートに向かって飛び込もうと身を乗り出したルシオラは、背筋に走った悪寒に従って全力で後方に飛び退る。

その眼前を、開いたゲートの上半分を打ち砕きながら、真上からの巨大な光条が切り裂いた。

「——それはな」

「…げ」

「…うそ」

振り仰いだ視線の先に——片手を此方に向けて突き出した、長大な二本の角を持った紫色の魔神が居た。

「私だけで十分だからさ」

「あ、アシユタロス様っ?!」

それは、紛う事無き悲鳴であつた。

「何でラスボスがいきなり出てくるんじやーっ?!」

「しっ、知らないわよ私に言わないでどーすんのよっ?!」

狂乱の態を晒す二人に手を向けたまま、口元を歪めた魔神がそこに佇んでいる。

表情こそ余裕が見て取れる物の、それは絶対的に強い者がもつそれであり、気の緩みは全く無い。

ただそこに居るだけ。

であるにもかかわらず、まるで周囲の空間自体が脅えるような、強烈なまでの圧迫感を感じさせている。

魔神は、二人の様子などに気に介さず、何でも無い事のように宣言する。

「さて、我が娘よ。選択肢を与えよう」

言葉と共に掌に膨れ上がる、先程のルシオラの全力が霞んで見えるほどの強大な魔力。

逆立ちしても敵わない、と言う現実を突きつけられたような物だった。

「素直に戻るか——それとも、ここで滅びるか、だ」

言葉の終わりと共に、魔力は更に増大する。

台詞どおり、それは彼女を消滅させてもまだ余りあるだけの威力を秘めていた。

吹き付ける圧迫感が更に増し、最早息をするのでさえ辛いほどの高密度の魔力の余波が吹き付ける。

放たれた酷薄な選択肢は、ルシオラの身体を一度だけ大きく震わせた。

「ほ、本気なんですか、アシユ様」

「…嘘をついているように見えるかね？」

蒼褪めながら僅かに身を引いた彼女に、全く動揺した様子を見せないまままで答える魔

神。

向けられた手は小揺るぎもせず、二人を狙ったままその手の魔力も消えはしない。それでも、どこかまさかという気持ちがあつたのだろう。

しかし、それさえも許されないほど、どこまでも本気の色が魔神の目には宿っている。

「…そんな」

「おい、ルシオラ」

小さく震え出した身体を止めたのは、抱えた球体から囁かれた忠夫の言葉だった。

「さっきの門開いて逃げるのに、どれ位かかる？」

「…3秒もあれば。でも無理見たいね。逃げるよりも早く…消し飛ぶわ」

その会話が聞こえる筈も無い音量、距離であるにもかかわらず、ルシオラの様子から察知したのだろうか、アシユタロスはどこか面白そうな表情を浮かべて沈黙を保つたままである。

その威圧感と掌に蓄えられた魔力だけは変わってはいないが。

「いいか、今は何とかアイツの事をあっちに伝えなきゃならん」

「だから、ドーやってよ？ はつきりいつて妙な動き見せたら…その、ヤバイわよ」

「わーっとる。チャンスは一回きりだ」

「そこそと、蒼褪めたままのルシオラと、球体の中に囚われたまま、霊力も発揮でき

ないが故に脱出することさえままならない半人狼を眺めながら、アシユタロスは思う。

この絶望的な状況下で、魔神の一柱たるアシユタロスに命を掴まれた状態で、まだ諦めた様子を見せていない。

——それが、酷く面白い、と。

この外連味こそが悪癖だと理解していても、『彼』にはそれを止めるつもりなど毛頭無い。

それが、必要だからこそ。否、それこそが。

「く」

苦笑いを浮かべつつ、眼下で何やら揉めている二人を見下ろす。

例えこの状況が誰の手によって生じた結果だといえど、それを責めるつもりなど無い。

むしろ、感謝したいくらいの気持ちがあった。

それは、期待もあつたのだろう。今度は何を見せてくれるのか、と。

「…相談事は終わりかな？」

何やら睨み合っていた二人が、その言葉に弾かれたように首を向けた。

まだ迷いの見えるルシオラを余所に、忠夫の目にははつきりとした決意の色が見える。

忠夫が何事か囁いて、そして、ルシオラは迷いを振り捨てアシユタロスをしつかりと睨みつけた。

「…アシユ様。本気なのですね？」

「愚問だ」

「それなら…」

心配そうな、心細そうな表情を一瞬浮かべたルシオラは、だが次の瞬間には不敵な笑みを浮かべて。

「てい」

「——なっ?!」

忠夫の入った球体を、アシユタロス目掛けて投擲した。

余りにも予想外の動きに魔神の思考が僅かに停滞する。

掌の魔力を解放するかどうか一瞬迷い、幻影かと疑うまで0，5秒。

ルシオラは忠夫を投擲すると同時にゲートを構築。

幻影だ、と確信めいた思いを抱きつつ、もしやとの思いでその球体を確認する。

感じる波動は、間違い無くそれが本物である事を示していた。

ルシオラとアシユタロスを結ぶ直線状の、丁度中間地点に忠夫が到達。

1秒。

——今、この時点で横島忠夫を消滅させる訳には！

意図が読めぬまま、しかしその思いだけが反射的に魔力砲を放とうとした動きを止めた。

己む無く顔に向かって飛来する球体を受け止める為、間違つても忠夫が巻き込まれないように魔力塊を掻き消し、手をコース上に移動させる。

1， 5秒。

ルシオラが完全に開ききつたゲートに向かってステップを踏んだ。
2秒。

忠夫を受け止めたアシュタロスの空いた手に魔力が逆る。

まだ、ルシオラの背中には十分に狙える状況にあった。

ゲートに飛び込み、それが閉じる前に一撃を打ち込めば向こう側に抜けきる前に彼女を貫ける。

ルシオラの姿が完全に飛び込み、すぐさまゲートが閉じにかかる。
2， 5秒。

「逃がさ——」

「よそ見してんじゃねえっ！ 一発喰らつとけこの腐れ外道っ！」

忠夫の怒号と共に、掴み取った筈のそれが内部から弾け飛んだ。

完全に不意を突かれたアシユタロスが、それを認識するよりも早く、それは——如意金箍棒は、彼の顎を斜め下から突き上げる。

衝撃で僅かに腕が揺れ、放たれた魔力砲はルシオラの飛び込んだゲートを掠めて何も無い空間を貫いた。

3秒。

そして、ゲートが閉じた。

遠く離れた亜空間の壁に魔力砲が直撃し、鳴動するかのように周囲が激しく揺れ動く。

アシユタロスの手から脱出した忠夫は、霊体であるが為に握る事の出来ない——握れたとしても人狼の身体能力が無い為振るえはしないのだが——落ちていく如意棒を慌てて追いかけて、それに手を触れ己の魂の中に再び取り込んだ。

体勢を立て直し、振り仰いだ忠夫の目に、上から全く感情を見せないアシユタロスの視線が突き刺さる。

「…何故だね。お前ごとルシオラが消し飛ぶとは思わなかったのかな？」

「ベスパから聞いてたからな。俺が目標の一つって言うてたらしい割に、殺さずに捕えてたじゃねーか。もしかして、まだ殺せねえ理由でもあるのかなって思ったんだよ」

正直5分以下の賭けだったけど、と、彼は小刻みに震えながらそう答えた。

何時頃からか彼が使っていた如意棒。

術で収納空間でも創り、そこから仮の主として取り出して使っていたものとはばかり思っていた。

そう言った外界からの、若しくは外界への影響をシャットダウンする為の捕縛式を組み込んであったのだ。

霊力も使えぬ身では、脱出はほぼ不可能の筈であった。

だが、現実として、彼は眼下に霊体として存在している。

あの武神が、魂に宿すほどに完全に所有権を渡していたとは思わなかった。

高名な武の神の、代名詞とも言えるほどの神器。それでは己が使えなくなると言うのに、一体何を考えているのやら。

「……くっ」

込み上げてきた笑いを嘯み殺し、見事に逃げ切った、或いはまだ此方が「以前のアシュタロス」だと何処かで思っている娘に対し、賞賛とほんの僅かな嘲りと、その奥に隠れた何かのない交ぜになった感情を覆い隠す。

最も危険な存在の前に、あの場で最も脆く大切な存在を置いていく。

それほどまでに信頼されていたのかと思うと、誰かに対して僅かに嫉妬めいた感情を抱いた。

全てを抱いたまま、押し殺すようにゆっくりと目を閉じる。

「……ふむ。外連が過ぎるな」

「……へ？」

呟いた瞬間、忠夫の咽に、アシユタロスの掌が食い込んだ。

一瞬で忠夫の目の前に移動したアシユタロスは、苦々しげにその瞳を睨みつける。

霊体で在る以上呼吸の必要は無いが、ただ握られているだけなのにそこから漏れ出す魔力だけでも忠夫の意識は消し飛びそうになる。

霊体という肉体の無い状態であるからこそ、その凶悪な存在は悪寒と共に忠夫の根幹を拘束した。

「確かに。確かに『今は』お前を消滅させる訳にはいかん。横島忠夫を、な」

「ぐ、ごほっ！ お、俺は犬飼忠夫だっつ、の」

掴まれた首を振りほどこうと、アシユタロスの腕を掴んで暴れるも、魔神は全く意に介さない。

冷徹な目を向けたまま、口元に嘲りの笑みを浮かべた。

「そうだ。お前は『横島忠夫』で在りながら、『横島忠夫』では無い。だからこそ、我らは此処を選んだのだ」

「……はっ？」

「前段階である靈力の盾も、『横島忠夫』のジョーカーである『文珠』も使えず、人狼としての能力にのみ特化した異端」

「わ、けの分からん、事を」

「あまつさえその半人狼の肉体からも切り離され、だがその肉体のスペックを失い、人としての靈力の成長を無くした脆弱さ故に、無力」

ぎり、と音を立てて、アシユタロスの手が更に食い込んだ。

言葉を放つ余力さえも奪われ、僅かに残った力で如意棒を出そうとした手も、もう片方の手で拘束された。

「そして、我らを受け入れる事のできる魔神アシユタロスの在り様。無限世界の中に在りながら、これほど条件を満たした世界を見つかるまでどれほどの試行と時間を費やした事か」

アシユタロスの手には輝きが灯り、それが徐々に複雑な文字の連なりへと変化する。

掴んだ手から蠢くように忠夫へと移って行ったそれらは、幾重にも忠夫を包み込み、その存在を拘束していく。

「分かるか『犬飼忠夫』。貴様では、“我ら”にとって“これ以上無く幸運な事に”、役者不足なのだ……！」

一際鮮烈な閃光が辺りを埋め尽くす。

それが収まった後には、アシユタロスの掌の上に、再び忠夫が球体に閉じ込められ存在していた。

だが、それまでとは違い、その色はより濃く、重厚な気配を放っている。

閉じ込められた忠夫は、完全に意識を失い倒れこんでいた。

「——ベスパ、聞こえるか」

『はい、アシユ様』

球体を弄びながら、アシユタロスは大逆天号のブリッジに居るベスパに声を飛ばす。

硬質な返答に特に何の感慨も持たず、踵を返したアシユタロスは、冷たい声で言葉を続けた。

「眷族を飛ばせ。人界に情報を流すな」

『…はい、アシユ様』

ゆっくりと巨大兵鬼に向かって飛んでいくアシユタロスの目に、大逆天号の腹部から雲霞の如く出撃していくベスパの眷属が見えた。

それは開かれた巨大なゲートを次々に潜り、アシユタロスとすれ違いながら高速で後方に流れていく。

鳴り響く蜂の羽音と周囲を埋め尽くす黄色い小さな影の中に生まれた間隙を飛びながら、アシユタロスは無言で兵鬼の中へと消えていった。

「ご協力、ありがとうございましたっ！」

整然と揃った敬礼を見せる自衛隊隊員達に、白衣を来た初老の男性と、全身を黒い服でコーディネートした上に三角帽子を被った女性が二人揃って苦笑いを浮かべた。

「いや、此方こそ助かりました。流石にスタッフ総出でも患者達を運びきる事は出来なかったでしょうしな」

白井総合病院の院長は、そう言つてぎこちなくも敬礼を返す。

隊員達の真ん中の男性が小さく笑いながら歩み出て、握手を求めて右手を差し出した。

それを笑って握り返す男性の横で、魔鈴は微笑ましそうにそれを眺めている。

「それに、どちらかと言うと今回の功労者は魔鈴さんですわ」

「いえ。白の魔女としての役割を果たしたままでですから」

「いやいや、貴方の魔法薬と不思議な道具が無ければ動かせない患者も何十名と居りました。患者を預かる身としても、どれだけ感謝してもし足りません」

深々と頭を下げた医師に慌てて頭を下げ返しながら、魔鈴は困ったように小さく笑った。

殆ど同時に頭を上げ、互いに笑いあつた後、魔鈴は意志と握手した男性に小さなメモ用紙を手渡す。

視線で問う男性に対し、魔鈴は悪戯っぽい笑みを浮かべて内容を告げた。

「先程の仮死薬の解除薬の作り方と運搬用導具の使用方法です。迎えに来られた向こうの病院の方にもお渡しして置きましたけど、一応念の為によろしく願います」

「…確かに預からせて頂きました。必ず、届けます」

大切そうにメモ用紙を懐にしまい、滑らかな動きで敬礼を取った自衛官に軽く頭を下げてお願いますと告げると、彼女は優しく何も無い空を撫でた。

その指先がなぞる先から、溶け出すように一本の箒が出現する。

柄を掴んで軽く回し、その上に腰掛けると、魔鈴はゆつくりと舞い上がった。

「それじゃあ、私はこれからオカルトGメンの所に行きますので」

僅かに風を巻きながら、魔女は遠くに見える紫色の天蓋に向かってすつ飛んでいった。

「…やれやれ。美人で気立ても良いと言うのに、近頃の若い者は不甲斐ないなあ」

「ま、うちの隊員達が暇な時に客として行きたそうにしていますから、頑張つて貰いましょうや」

にやにやと逞しい腕を組んで笑いながら、自衛官は後方の隊員達に聞こえよがしな声を上げる。

ぼそぼそと互いに肘で突付き合いながら小さな声で会話していた隊員達が、真面目な表情で何度も何度も頷いていた。

呆れた表情で自分よりも高い位置にある意地の悪い笑顔を見上げた医師は、視線で自衛官に問い掛ける。

その視線の意味を正しく受け取った男性は、肩を竦めて懐から取り出した一枚の写真を突きつけた。

「ま、3人目が産まれたばつかで浮気なんざした日にやあ、間違い無くぶつ殺されますからね」

「曹長その顔で愛妻家ですからねー」

うるせえ、と男性が振り返って一声吼ええると、隊員達は蜘蛛の子を散らすように道路に止めてあつたジープとトラックに駆けて行つた。

頭を掻き掻き医師に向かって決まりの悪そうな顔を向けた男性は、腹を抱えて笑いを堪える医師を見つけて唇をひん曲げる。

誤魔化すようにジープのエンジンを動かした隊員を呼びつけ、医師を病院に送るよう大声で言いつけた。

「でも、良いんですかい？　こう言っちゃなんですが、今あそこは何が起こるか分かりませんぜ？」

「何程の事も無い」

横付けにされたジープに乗り込みながら、医師は気楽に笑つて見せた。

「病院がある、苦しんでいる患者が来るかも知れない。医者が居る理由なんて、それで十分じゃないかな？」

けたたましい音を立てて走り出したジープを、敬礼と共に見送つた男性は気合を入れるように両手を頬に打ち付けると、行き先を指示しながら自分もジープに体を乗り入れた。

「…嫌な風」

三角帽子を押しさえつつ、全く人気の無い眼下を見下ろしながら、魔鈴はドームの近くに差し掛かっていた。

特に害は無いと分かってはいるものの、その壁は見る者に不安と圧迫感を与えて静かに佇み続けている。

数回ほどその場で回っていた彼女が意を決して突入しようとする最後の旋回に入った最中、それが視界の隅に引つかかった。

減速し、壁から距離を取りながらその小さな黒点に目を凝らす。

良く見れば、小さな黒点の後ろに、霞みがかつたような黒が見えた。

途端、閃光が先頭を行く黒点から後方の霞みに向かって放たれた。

だが、黒い靄はすぐさま形を変え、その閃光の軌道上に穴を開ける。虚しくその空隙を貫いた閃光は、空の彼方へと消え去っていった。

「何……？」

眩く間にも黒点は徐々に魔鈴の視界の中で拡大していく。

どうも此方に向かっていているようだと気付いた魔鈴は、それを理解すると共に聞こえてきた声に頭を抱えた。

「あーっ！ もーっ！ 鬱陶しいのよあんた等あつ！！」

「……何をやってるのやら」

一瞬の脱力を乗り越え、声の主に向かって箒を駆る。

意思に応えて勢い良く加速した箒は、数十秒の時間の後、乗り手の思い通りに高速で飛行する彼女の隣に平行していた。

「ルシオラさんっ！ いきなり無断欠勤するわ許可も取らずに休むわ、貴方何を考えているんですか!!」

「あ、魔鈴店長御免なさい。ちよつと実家の都合で……つてか何で此処にいるんですか!」
「何処も此処も無いでしょう! あの後本当に大変だったんですからね! メドーサさんは来ないしお客さんはどんどん来るしあの貴方が作ったロボットはまた勝手に人の

店を中華風に変えようとするし！」

向かい風に負けないように大声を出す二人の前に、巨大なビルが立ちほだかる。

何のタイミングも打ち合わせも無く、寸前で左右に分かれた二人は通り過ぎた先で再び合流する。

そのまま魔鈴の説教と言うか愚痴と言うかも継続した。

「大体貴方はもうちよつと看板娘の双壁としてちゃんと立場を理解してください！お客さんも貴方とメドーサさんを見に来る人が段々増えてるんですよ！お陰で変な客層が微妙に増えちやつてるんですから責任取ってください！」

「いやそれはメドーサの責任が大きいですけど……。ほら、あの接客態度が良い！つて人がほぼ全てです。あと魔鈴店長のコスプレじみた服装も」

「まっ！」

確かにメドーサのファンを自称する客は微妙な階層が多いと一瞬納得しかけた魔鈴だが、続いた言葉は流石に看過できる物ではなかった。

彼女が身に纏う服は魔女としての正装である。

それを言うに事欠いてコスプレとは酷すぎる。これだから魔女が偏見の目で見られるのだ！と至つてズレた結論に辿り着いた魔鈴が口を開こうとしたその瞬間。

轟音と共に、後方でビルが倒壊した。

真ん中から真つ二つに折れて碎けるビルを包み込むように、ルシオラの後を追いかけていた靄がある。

それは崩れ落ちていくビルの上部を巻き込んで、あつという間に粉々に碎け散らせた。

舞い踊る粉塵を掻き分けるように、千を数えるほどの小さな影が飛んでいる。

慌てて加速したルシオラに追隨しながら、魔鈴はパニック寸前の声を投げかけた。

「な、何ですかアレは！」

「どつても危ない蜂の群です」

「見れば分かります！　つて何処にビルを碎いて平気そうな顔をしている蜂がいますか！　」

「真後ろに。と言うか蜂の表情なんて分からないでしょ？」

会話の合間にも、重なり合つて轟音と化した羽音を引き連れたベスパの眷属が少しずつ距離を詰めている。

蜂というにはまるで弾丸に乗り込んだ特攻兵器といった風体の奇妙な姿ではあるが、その凶悪さはたつた今実証されたばかりである。

ともあれ、目的はルシオラのようなだと判断した魔鈴は、素早くルシオラから見て斜め方向に進路を変更。

「ああつ！ 魔鈴店長つてば酷い！ 可愛い店員を見捨てるつもりですかあつ!!」
「こ、こつちに來ないで下さいっ！」

だがいい加減追い回され続けて疲労の蓄積したルシオラも必死にその後には食い下がる。

何とかしてくれ、と言うよりも死なば諸共と言った雰囲気なのは、魔鈴の気のせいだっただろうか。

ともあれ、このままでは振り切れないと——両方を——判断した魔鈴は、両手で掴んでいた箒の柄から片手を離し、ローブの隠しポケットに手を突っ込んだ。

「しようがないですね……!! ルシオラさん、そのまま直進！」

「何とかできるんですか?!」

「しますー！」

取り出されたのは、車に乗せられている発煙筒にも似た黒い筒。

側面に描かれたデフォルメされた笑顔の魔鈴がルシオラに何とも言えない嫌な予感を駆り立てさせるが、涙を飲んで諦めた。

色々と。

その筒の先端を握り、箒の柄に足だけで掴まった不安定な体勢のまま、魔鈴は無理矢理加速する。

前方から吹き付ける風に振り落とされそうになりながらも、筒の先端を覆っていた蓋を外して露出した中身に擦りつけた。

「害虫は食事所の天敵にしてライバル！ 対策は十分出来てます！」

「流石魔鈴店長っ！ って待って下さい！ 何か嫌な予感がっ！」
待たなかった。

筒の先端から、その体積からは考えられない程大量の煙が膨れ上がって後方に流れて行つた。

「喰らいなさい！ この間出来たばかりの試作型対害虫薬『虫コロリじゃ切なくて、私も我慢できないのっ！』君をっ！」

「何ですかその無駄にセクシーなネーミングはっ！ 後対策十分つて言ったのに何で出来たばっかりうぶっ?!」

突っ込みは視界の全てを埋め尽くした煙に塞がれ途切れた。

急ブレーキをかけた魔鈴の目に、濃度のやたらと高い煙がその場に動く事無く漂っているのが写り込む。

高速でそれに突っ込んでいった蜂達は、だがその真っ只中で勢いを失い次々と落下していった。

だが、その数ゆえに免れた蜂達も少なくは無い。

それは、怒りに満ちた雰囲気撒き散らしながら、その煙の塊の横を擦り抜け魔鈴に敵討ちとばかりに迫ろうとし。

「…甘く」

にこりと優しく微笑む魔女の表情を視認した瞬間、まるで生き物のように煙から伸びた触手に絡み取られて次々と内部に取り込まれた。

「ふふふ…ギズモ気体型魔法生物を生み出す術式を組み込んだ魔法の殺虫剤。きっちり一分で消滅しますが、存在し続ける限りどんな虫をも逃がしませんよ！」

阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。

必死で逃げようと羽を動かす生き残りの蜂達に、数千本もの煙でできた触手が絡みつき、捕食行動の如くどんどんとその内部に取り込んでいく。

それを眺める慈母のような笑顔の魔女。

何処が白の魔女なのだろうかと彼女を知る者は突っ込み、もつと良く知る者は諦めたような乾いた笑い声をあげる事だろう。

やがて一分が経ち、ぐもぐもと咀嚼のように蠢いていた煙が溶け込むように消えていく。

しゆるしゆると縮んでいく端からぼろぼろと動きを止めた蜂を零して行く様が、何とも恐怖をそそる光景である。

最後にぼん、とコミカルな音を立てて消滅したその中心部から、えらく消耗した様子のルシオラがふらふらと魔鈴に向かって飛んで来た。

「あら、どうしたのルシオラちゃん」

「あの、私、蛭が元になって出来た魔族なんですけど」

「まあ」

虚ろな目で告げたルシオラの目の前で、口元に手を当てた魔鈴が呆気にとられた表情を浮かべた。

「…まだ弱かったかしら？」

「殺す気ですかあああああつ?!」

「や、やあねえ。冗談よ、冗談」

箒の尻尾に掴まりながら、絶対本気の日だったとルシオラは確信していた。

ルシオラをぶら下げたまま、ゆっくりと箒は誰も居ない道路へと降りて行く。

その尻尾に掴まりながら、そんなに忙しかったのかと思うと共に、就職先間違えたかなー、とルシオラは今更な思考を浮かべるのだった。

後、魔鈴だけは怒らせないようにしよう、とも。

第捌話 『そして始まりの鐘は鳴る』

「…何だつてんだい」

高層ビルの屋上、貯水槽の上に座り込んだ少女の口から漏れたのは、そんな不機嫌を万遍なく塗した言葉だった。

吹き付ける風に紫色の長髪が靡き、するりと撫でて後方へと流れていく。

しかし、その髪の間隙から覗いた真つ白な狼の耳は、それさえも不愉快だと言わんばかりに風に向かって突き立てられていた。

歪んだ唇から覗く鋭い犬歯も、短いスカートの端からゆつたりと空気を掻き混ぜている尻尾も、彼女の苛立ちを露にするだけではあるが、その幼さの残る顔立ちからはまだ僅かに可愛げが見て取れた。

ふん、と鼻息を吹いて傍らに放り出してあつた風呂敷包みを叩く。

ばんばんに膨れ上がった唐草模様の隙間から、魚と山菜が零れて落ちる。文句を言うような軽い音が立った。

「人が折角真夜中から出かけて色々集めてやったつてーのに、妙な壁の所為で戻れやし

ないし」

戻る、と言う無意識に零れた言葉に箆められた意味こそ、彼女にとつては大切な物であつたのかもしれないが。

唇をひん曲げたメドーサは、そのままつい、と視線を斜めに逸らした。頬を搔いて誰に聞かせる訳でもなく、言い訳めいた溜め息が漏れる。

「…いや、まあ確かに猪の腹に潜つて寝てた私も悪いんだけどさ」

深夜に出かけた上に、昨日の夜は結構冷え込んだのだ。

蛇は冬眠する動物、その上あの猪達は野性の癖に泥浴びではなく水浴びする変わり者の綺麗好きで、しかも見た目によらずふかふか——そう、ふかふかしていたのだ。

最近気が緩んでいる事は自覚してはいたが、しかし妙な虫の知らせに抵抗出来ないほどの気持ち良さとはどう言う訳だ。

ねぐらの押入れの中にある布団に包まれて眠るのも中々乙な物であるが、柔らかい枯草とふわふわふかふかの暖かい毛並みの中というのもこれはこれで捨てがたい。

しかも牙を折つた猪だけでなく、親子総出で歓迎するようにふかふかしてくれたのだ。

ふかふかのもふもふだったのだ！ 実に手強い！

これだけの条件が揃つたならば、少々の虫の知らせがあつたくらいでは早々に脱出で

きるものでもないのだ！

それにしても他人の——人ではないけど——体温があれほど安心できる物だと思つたのは、一体何時以来だっただろうか。

「…今度、引きずり込んでみるか」

「誰を？」

「そりゃあんた…誰をだろかねえ？」

ふと誰かさんの顔が頭に浮かんだが、はてさてどんな反応を返してくれるだろうかと思ひ至つて、何となく笑いが込み上げてきた。

慌てて拒否するけど、少々演技すればあっさりと落ちるだろう。

どうせ娘と公言しているような相手に手を出す根性は無いだろうけど、それならば少し色仕掛けでも、と意地の悪い笑みを浮かべた。

「…悪い顔ねえ」

「いえ、あれはあれで。固定客も居ますし」

と、背中側から掛けられている声が、その元凶と共に脳裏に滑り込んだ。

頭だけを背中側に倒す。

逆さまになった勤め先の店長と同僚が写り込む。

「どーしたんだいその面」

「…魔鈴店長が」

「ああ、なるほど」

「ちよつと貴女達、どー言う意味かしら？」

自分の胸に聞いてみる、と訴える瞳が半眼で向けられた。

にこやかな笑みでスルー。

柔らかい微笑みとジト目が暫し交錯したが、やがて3人とも何事も無かったかのように視線を逸らしたのだった。

月に吼える 第三部

「んぐ、あ、これ美味しい」

「あんまり取らないでくれよ。最近は冷えてきたから果物も全部落ちるか他の奴らに取られるかしてんだから」

「まあまあ。ルシオラさんも元気になったみたいだし少しくらい良いじゃありませんか」

魔鈴が箒を屋上に寄せると共に、ふらふらと枯葉が落ちるように冷たいコンクリートにへちやりと倒れこんだルシオラの切ない目が、メドーサに同じ環境下にある同僚と言う名の連帯感を生んだ結果、ルシオラの手には甘い果実が数個手渡されていた。

魔鈴が提供する極上の砂糖水には及ばない物の、それでも甘い果汁が疲れきった身体に活力を与えたように見る見るうちにルシオラの瞳に元気が戻り、触覚も喜びを表してピコピコと動いている。

果物の種と芯を数個分転がして、人心地ついたと満足げな溜め息をついたルシオラに向かつて、メドーサは鋭い視線を向けた。

「で、だ」

指差した先には、やや傾き始めた太陽を背負って不気味に存在し続ける紫色のドームがある。

「どつちでも良い。説明、してくれるんだろうね?」

「私もまだ聞いてませんし。何で追われていたのか、を」

微笑にも、キツイ視線にも、真剣な色が多分に含まれていた。

魔鈴の言葉で向けられた圧力は二対になり、口元を拭うルシオラ表情にも緊張が満

ちる。

そろそろ我慢の限界が近いと直ぐ分かる少女はともかくとして、常に笑顔で感情を完璧に隠す魔女の視線が笑っていないのがそこはかとなく危機感を叩る。

だから、ルシオラは一つ息を吸い込んで、二人の圧力に負けないように、視線に力を籠めてそれを見た。

瞳の先には、一番甘かった果物の肌を覗かせた風呂敷。

「その前に、もう一つだけ頂戴」

拳骨と罵声が飛んで来た。

緊張感、台無しであった。

第捌話 『そして始まりの鐘は鳴る』

空気の抜ける音を立てて、自動ドアが開く。

小気味の良い足音を立てながら、目元に小じわの浮かんだ女性が入ってきた。

「西条ちゃん」

い

とある魔女からの情報提供に礼を言つて携帯電話を切つた西条が振り向き、六道家当主の達成感に溢れた表情を目にして一つ頷いた。

感謝の言葉を述べて通話を切り、硬い音を立ててそれを懐に仕舞う。

「どうでしたか？」

返答は、笑顔と真つ直ぐに立てられた親指だった。

誇らしげに胸を張るその姿にはいささか稚気が多すぎて、思わず溜め息を零す西条ではあつたが、何とか気を取り直すと深々と頭を下げる。

「GS協会のく方には話つけてくおいたわ。これでく西条ちゃんにくGS達も協力してく良いって」

GS協会の方でも独自に現状の把握と打開に走つたらしく、協力を仰ぎたい動ける民間GS達はその権限の下、待機を命じられていた。

美神のように妙神山という電波も届かないような辺鄙な場所に居たりするGSや、遠

隔地に居るGS達は別としても、関東に存在するGS免許保持者達は「緊急時のGS協会对する協力」の名目の下、オカルトGメンの指揮下に表立って参加できない状況にあった。

GS協会にも面子があり、彼らは彼らなりに現状を如何にかしようとしているのに間違いは無い。

だが、間違いこそ無いものの商売敵であるオカGにそうホイホイと参加する訳にも行かないのだ。

それでGS協会がオカルトGメンよりも下に見られれば、これまで長い年月をかけて築いてきた信頼や確保しているシェアに多大な影響が出る。

一組織を預かる者として、それは理解できたが、だからと言って歯痒い思いをしなかつた訳ではない。

——それこそ、強力なカリスマを持った人物が、全権を委任するに足るような人物が長い時間をかけて根回しをしていればともかく、現状では突発的な事態に対して戦力が足りないという事実だけが厳然としてあったのだ。

「後で〴〵こっちの方にも〴〵配慮は〴〵して貰うけど〴〵」

「勿論です」

だが、古来よりの名家の協力と謎のコネクションを持った一人の老人の影の活躍に

よって、その枷は今、取り払われた。

にこにこ微笑む女性に大きく頷き、西条はオペレーター達の方を振り向いた。

僅かな休息を得た彼女達は、それでも瞳に気力を溢れさせて指示を待っている。

負けてられないな、と小さな笑みを浮かべた西条は、それを引き締め、声を張り上げる。

たった今魔鈴から入った情報によれば、事態はかなり切迫しているようだ。

だからと言って、諦めるつもりなど毛頭無いが。

「聞いている通りだ。直ぐに、近くの動けるGS達に連絡を取ってくれ。報酬は——」
後ろを振り向く。

六道家当主とがひらひらと手を振り胸を叩き、何時の間にか自動ドアの向こうから顔を覗かせていた老人が、にやりと笑って分厚い書類を示した。

ちらりと見ただけなので分からないが、十桁近い数字が並んでいるものが十数枚。

そして空いた手で空中に巨額の数字を書き込んだ。

呆れ、だが頼もしげに笑って西条は再びオペレーター達に向かう。

「——報酬は、各方面から驚くほど多額が寄せられている。当然、危険はそれに見合った物だ」

一つ間を置いて、続けた。

「依頼主はICPO超常犯罪課。報酬と命の危険を天秤にかけて、それでも受けられる者だけ受けて欲しい。敵は——」

ごくり、と咽を鳴らす音が聞こえた。

それは西条の物でも在ったし、オペレーター達の物でも在った。

魔族の少女が命懸けで手に入れた情報と、そして妹分の事務所で働く友人とも弟分とも言えそうな半人狼の従業員が、未だ囚われたままであるという事実。

その重さに背中を伸ばして耐えながら、西条は、その言葉を告げた。

「——敵は、魔神、アシュタロスッ!!」

西条相手の電話の通信を切った魔鈴は、真剣な表情で箒に飛び乗る。

「私はこのままオカルトGメンに直行するけど、貴女達は？」

「…少々厄介そうだからね。ちよつと手を借りてくる」

メドーサの手は、胸に下げた猪の牙を弄っている。

逡巡した表情を見せながらも、しかし彼女は決心した様子で魔鈴とは反対方向へ飛び上がる。

「遅れるかもしれないけど、持たせといて。…相手があのお方なら、無理かもしれないけどね」

メドーサは、そう言つて、僅かな気遣いの色を見せつつ飛び出していった。

それを見送つたルシオラの目には、何とも言えない色がある。

視線こそメドーサの背に向けられてはいたが、その瞳は、何も捕えては居ない。

だが、魔鈴の窺うような視線を受け、ようやく、といった様子で言葉を絞りだす。

「私は…ここに、残ります」

ぐ、と胸の前で拳を握り、そう告げた。

「…分かつたわ」

一点を見つめるその視線を掠めるように、魔鈴はドームに向かって飛んでいった。

後に残つたのは、ただ一人、何も無いビルの屋上に佇む一人の少女。

誰も聞こえない言葉が、風に紛れ込んだ。

「此処で、その時を待ちます…」

とあるGSの事務所で。

「ふん、久々の大口依頼なワケ。りよーかい、受けるわ」
褐色の肌の女性は、そう簡素に告げて受話器を戻した。

ソファアーに座ってそわそわとしていた大柄な男が、待ちかねたように近付いてくる。

「エミさん、そ、それでどうするんジャー？」

「あのねえ、タイガー？ …分かり切ってる事一々聞くんじゃないワケ！」
体格の割に何時までも小さな態度に苛立ち混じりの蹴りを一つ。

顎に喰らって仰け反ったタイガーを横目に、早足で除霊道具が整理されている部屋に行く。

顎を擦りながら慌てて追いかけてきたタイガーにポケットから取り出した鍵を投げ渡し、小笠原エミは不敵な笑いを浮かべてドアを開いた。

「先に下に行つてワゴンのエンジン掛けといて。それからNo. 13と裏3から裏10までのロッカーの中身、全部積み込んで」

「い、一番物騒な装備ですノー」

「返事はハイかイエス！ 分かつたらとつと動くワケ！」

怒声を背中に受けながら駆け出したタイガー寅吉を溜め息で見送り、呪術服に着替えながら、彼女は唇の端を吊り上げた。

「さあて、気合入れて行くワケっ！」

教会で。

「先生、オカルトGメンからの迎えが来ましたっ！」

教会の大きな扉の向こうから聞こえてきた声に、祭壇の前に跪いて祈りを捧げていた

男性が立ち上がる。

最後に十字を切り、聖書を脇に抱えて振り向いた。

「今行くよ、ピート君」

そう告げて、唐巢神父は一步を踏み出し——背後を振り仰いだ。

この教会で、時には老いたお婆さんの、時には若い男性の、そして訪れた全ての人々を見守っていた十字架に磔にされた偶像を見上げる。

偶像は何も確かな言葉など授けない。

だが、ここには確かに信仰が在る。

それに感謝を捧げ、今度こそ入り口に向かって歩みを進めた。

大きく運んだ一步の先に、ドアを開いて待ちかねている半吸血鬼の青年と、車を横付けにして待つてくれているオカルトGメンの隊員の姿がある。

唐巢 和宏は眼鏡の位置を中指で押し上げ、隊員に感謝の言葉を述べてその横を通り過ぎる。

その後に続いたピエトロ・ド・ブラドーの不安そうな面持ちに、意識して笑みを浮かべつつ車の後部座席に腰を落ち着けた。

「…横島さん、大丈夫でしょうか」

「大丈夫だよ。美神くんも居るからね」

走り出した車の窓からは、不安を煽るような色合いの天蓋が見え隠れする。

それでも、神父ははつきりとした言葉を放った。

「…天は自らを助くる者を助く。だから、私達はその一助となる為に此処教会に居るんだ」

六道邸で。

「お嬢様」

「あゝ、フミさん」

「奥様が、直ぐにICPO超常犯罪課日本支部に来るように、との事です」

広大な庭の真ん中で、十二神将達に囲まれて空を見上げていた冥子に、侍女の一人が

恐れた様子も無く声を掛けた。

承諾の意を返して歩き出した女性を玄関先に向かつて先導しつつ、侍女は振り向かずに言葉を放つ。

「…正直な所、私は戸惑っています」

「え〜?」

「六道家次期当主たるお嬢様が、奥様の指示とは言え、大き過ぎる危険に飛び込むというのは、その、心配です」

後ろの足音が止まった。

釣られるように前を行く足音も止まり、沈黙が僅かに辺りを満たす。

それを破つたのは、柔らかく、どこか間延びした声だった。

「う〜ん。でもね〜」

遮るように、堅い声が響いた。

「もう一度、僭越ながら申させて頂きます。お願いです、止めて下さい。奥様には、私から何とか——」

再び、遮るように、今度は柔らかい声が響いた。

「でもね〜。きつと〜、令子ちゃん達〜行っちゃうから〜」

振り向いた先には、微笑を絶やさぬまま、何時の間にか十二神将達を影に戻し、たつ

た一人でしつかりと立っている六道冥子の姿がある。

侍女の驚いた視線を受けつつ、軽く頭を傾げて、彼女は続けた。

「だから私も、置いて行かれないように、頑張らなくっちゃ駄目なの」

六道女学院、避難場所。

「何でだよっ！」

「そうですっ！ 何で私達が行ってはいけないのですかっ?!」

数十人の六道女学院の生徒達は、数人の教師達に勢い良く噛み付いている。

その先頭に立っているのは、一文字魔理と弓かおり。

かたや成績優秀品行方正な優等生、かたや成績不良で素行も悪い問題児。

だが、一人の少女によって繋がれた二人は、肩を並べて抗議している。

それに対し、困ったような表情で顔を見合わせた教員達は、だがけして道を開けようとはしなかった。

「それでも、駄目やな」

「だから、どうしてですか?!」

「危ない端を渡るんは、先ず未熟な子供より何かあつても乗り越えられる大人から。常識やろ?」

口調こそ言い聞かせる物であつたが、視線に籠められた意思は真剣そのもの。

訛りの強い言葉で話していた男性に、避難場所として借りていた郊外の高校の正門にオカルトGメンの車が止められた事が告げられた。

頷いて駆け出していった数名の職員を見送りながら、残った職員はそれを追いかけてうとした少女達の前を塞ぐ。

「どうしても、ですか」

「どうしても、よ」

駆けて行く背中と、目の前に立ち塞がる教師を見て、少女達は歯を食いしばる。

その視線の先で、オカルトGメンの車が発進した。

「その思いを忘れないで。悔しいのは、貴女達だけじゃ無いのだから」

そう告げた女教師の瞳にも悔しさが見えて、少女達は僅かに息を呑んだ。

とある錬金術師の秘密基地で。

「ドクター・カオス。盗聴した・内容は・以上です」

「……ふん。トンデモも此処に極まれり、じやな」

耳に当てていたイヤホンを投げ捨てたカオスは、そう呟いて手元のアタツシユケースを勢い良く閉じた。

その背後に立つ5人の愛娘達を見渡し、カオスは重々しく言葉を紡ぐ。

「準備は良いか」

全く同じタイミングの動きは、全て上下で示された。

アタツシユケースを両手にぶら下げ、開けた森の広場の真ん中に止められていたカオスフライヤー号に歩み寄る。

そのコックピットにアタッシユケースを放り込み、続いて己の身体を投げ出し、カオスは耳元に通信機を付けた。

『聞こえておるか?』

「感度・良好。問題・ありません」

言葉が終わると同時、カオスフライヤー号は音も立てずに浮き上がる。

ゆつくりと上昇していく機体に追従しながら、5本のブースターが光を引いて上がっていく。

『…行くぞ』

「イエス・ドクター・カオス」

ぐ、とスロットルを叩き込んだ。

『取り返しに!』

何を、とは言わない。

おそらく娘達の応えは、カオスの思うそれに一つ追加しているであろうが、その意思を縛る気など最初から無い。

諦めているとも言うが。

そんな思考を僅かに浮かべ、それでも愉快げに唇を吊り上げながら、ドクター・カオスは耳に響いたマリア達の声が織り成す五重奏を耳にする。

「イエス・ドクター・カオス！」

東京に向けて、錬金術師とその娘達が加速した。

車の走っていない道路の真ん中で。

「——その依頼、受けるわ」

紫色の壁の前に、長身の影は携帯電話を閉じ、それをコートのポケットに突っ込んだ。
「つたく、危うく面白そうな状況に置いていかれるところだったぜ」

「あんたは気楽で良いわねー」

はあ、と溜め息が落ちた。

どうしてこうも弟弟子は危険を喜ぶのだろうか。

電話を掛けている途中も今にも壁の向こうに駆け込んでいきそうだったのを、空いた

手で襟首を捕まえて何とか引き止めていたのだ。

テンションと比例して上がった馬力に痛みを覚える手首を振りながら、頭を振った勘九郎は雪之丞を捕まえていた手を離す。

「おっしやあつ！ 行くぜっ！」

瞬間、閃光が走る。

魔装術を纏った伊達雪之丞は、アスファルトを踏み砕きながら一步目から全速力に乗った。

「…私も毒されてきたのかしらねえ」

諦めたように天を仰ぎながら、しかしその口元には太い笑みが浮かんでいる。

「でも、まあ」

強く風が吹き付け、砕けたアスファルトから零れた砂塵が舞い、一瞬隠れたその長身が再び現れた時には、その姿もまた魔装術に彩られている。

「悪い気分じゃあ、無いのよね…！」

先行した弟子よりも早く、だが足音さえも立てず、鎌田勘九郎は駆け出した。

オカルトGメンで。

「氷室さん、危険だから……！」

「いいえ」

更衣室の中でオカルトGメンのネクロマンサー部隊の訓練をしていた時の服に着替えたおキヌは、きつぱりと言いつつロッカーを閉じた。

引き止めていた女性隊員は、諦めたように溜め息一つ。

「ごめんなさい、と言い残して更衣室を出ようとしたおキヌの背に、その女性隊員の声
が引つかかった。」

「……何時も話してた男の子？」

ドアノブに掛かっていた手が止まる。

「彼も、氷室さんが怪我したりしたら悲しむと思うけど」

「はい、間違い無く」

返って来た意外な答えに、今度は女性隊員の動きが止まった。

向けられた視線の先には、華奢な背中がある。

細いその指先は、僅かに震えていた。

「怖いです。痛いのは嫌です」

「だったら——」

「だけど！」

叩きつけるような、あるいは自分に確かめるような、そんな声色だった。

振り向いた少女の瞳には、力強さがある。

「誰かが痛いのも、誰かが居なくなるのも、嫌ですから」

深々と頭を下げ、氷室キヌは勢い良くドアを開けた。

一瞬伸びた女性隊員の手は、ふらふらと宙を彷徨い、苦笑いと共に引つ込められる。

「…しようがない、か。あんた達！ あんな良い子に怪我の一つでもさせたら許さない

からねっ！」

声に応えて、開いたドアの向こうから親指を立てた何本もの腕だけが、任せろ、と無

言で突き出された。

とある高校の避難場所で。

「小鳩ちゃん」

「あ、愛子さん」

『おー、机の嬢ちゃん』

小高い丘の上から遠く霞む天蓋を見ていた小鳩と貧乏神に、机を担いだ愛子が並んだ。

揃って視線の向く先には、学校をも包んで閉じ込める不安の象徴が存在している。

「…大丈夫よ、絶対。横島くんだもの」

「…はい。だから、小鳩は応援してるんです」

『ま、気持ちだけでも、ちゅー奴やな』

西日が三人の顔を照らす。

肌寒い空気を暖めるようなまぶしい光は、ただ静かに照らしている。

「大丈夫。うん、私も応援するから」

愛子の言葉に。

「頑張つて応援しましょう」

花戸小鳩がはつきりと応える。

後方から響くクラスメート達のざわめきを背に、二人は静かに見つめている。

『あんじょうキバレや、坊主。エエ女候補が二人も見てるんやからな…』

ひょう、と風が吹いた。

G S 美神除霊事務所前で

『どうしたのですか、天竜姫様』

「…開けて」

人工幽霊は、息を切らせて駆けて来た少女に戸惑った声を掛ける。

だが、天竜姫はそれを意に介さず、ガレージのシャツターを指差すのみ。

顔中を汗に塗れさせ、走り慣れない道を記憶だけを頼りに必死で駆けて来た少女は、ただその言葉だけをもう一度繰り返した。

『此処は、避難するには向いていません。オカルトGメンに身を寄せた方が——』

「…そこから来た。お願い、開けて」

声音には、絶対に引かないという意思が籠められていた。

だが、人工幽霊も引く訳には行かない。

例え、ガレージの前に立つ少女が事務所内の装備を全部持っていったとしても、美神を探して掛けられてきた電話から聞いた、これから起こるであろう事態には微力である。

それが分かるからこそ、この事務所に仕える存在として、許可できない。

「…私は、私の出来る事を、やりたい」

だが。

「…犬飼君が、危ないの」

だが。

「…お願い…っ！」

——羨ましいと、ほんの少しでも思うことは、間違いなのだろうか。

シャツターを叩く小さな拳には、殆ど力は籠められていない。

だけど、その小さな拳は、確かに渋沢人工幽霊一号として生を受けた存在の心を、一打ごとに揺さぶっていた。

『…条件が、一つだけあります』

「…？」

『貴女が傷付く事を、あの馬鹿狼は間違い無く物凄く悲しみます』

ですが。

それすらも厭わないのなら。

貴女の出来る事を、見せてください。

そう言つて、人工幽霊はガレージのシャツターを開け、沈黙した。

「…ありがとう！」

転がり込んでいった少女は、息を切らして其処に立つ。

美神が乗つていった車を吐き出したガレージは、何も無い空間に白い蛍光灯の光だけを写し出していた。

何もしないままではいられない。

何もしないままではいたくない。

だから、彼女は厭わない。

「…絶対に、助ける！ だから！」

願うように、祈るように、竜神王が娘、天竜姫は指を走らせる。

空間に描かれた文字は、溶け込むように消えていく。

「私と一緒に歩いていこう…！」

閃光が、狭いガレージを満たした。

とある公園で。

「…何故、来たでござるか？」

「何故もクソも無いでござるっ!!」

「そうよっ、何で私達を置いていくのよっ!」

森を抜け、疎らな家々の間を駆け抜け、ビルの先端が見え始める公園の真ん中に、男達と少女達、そして2匹の狼が居る。

「陰念まで連れて来たくせに、私たちに留守番してろっつて言つたつて聞く訳無いじゃないー!」

「美衣さんに見張っておくように頼んでおいたんだけどなあ」

「ケイに協力してもらつたでござるからな!」

心優しい猫又の女性は、ケイと元フェンリル狼の子狼が一緒になつてやつている頭痛が痛いと言う謎の仮病に騙されている筈だ。

いや、騙されてくれたのかもしれないが。

呆れた様に天を仰いだ犬塚父と、困惑した表情の4人の人狼達。

そして、冷たい瞳で睨んでくる犬飼ポチは、全員が真っ白な装束を身に纏っている。

その向こうには、どうしても良さそうに座り込んでいる狼姿の陰念と、忠夫が消えた後に居た、バンダナを巻いて忠夫が着ていた服を詰め込んだ風呂敷を身体に巻きつけている狼が居る。

「大体、そつちの狼は何でござるかっ！ 兄上の匂いがする割に、兄上ではないんでござるよっ！ そんな怪しい狼を連れて、何故拙者たちが——」

「代理とは言え長の言葉、従わない理由にはならんでござるな」

そう冷たく告げたポチの瞳にも、僅かな困惑が見て取れた。

だが、彼としてもこの狼が敵とは思えないのも確か。

何故かと聞かれても、長年共に暮らしてきた息子と同じ匂い、だが全く違う気配のそれから、どこか懐かしい雰囲気を感じていたから、としか言いようが無い。

それでも、確信としてあったのは。

この存在は、決して敵にはならない、と言う事。

「お主らは里の未来。狼であっても、狐であっても、でござる」

「そうそう。戦場に行くには若すぎる」

「…違うでござる」

唸り声を上げながら、父ともう一人の父とも慕う男達に、二人は燃えるような目を向けた。

「拙者たちの未来は——」「あの、兄貴ぶった、優しい馬鹿が半分もってんのよっ!!」

引かない、絶対。

そう告げる瞳達に、7人の大人達は一瞬気圧された。

言葉に詰まるポチの袖を、赤いバンダナを巻いた狼がそつと引つ張る。視線が絡み、やがてポチが溜め息を付いた。

「…帰れと言っても」

「無駄でござるっ！」

「当たり前でしょ！」

「だろうと思つたよ」

7つの吐息が響く。

大人達は互いに視線を合わせ、何事かを目で語り合う。

最後に、犬飼ポチが一步進み出た。

「犬塚シロ」

「はいっ！」

「タマモ」

「うんっ！」

「…死ぬ事だけは、許さんでござる」

「やれやれ。お前んとこの忠夫も幸せ者だなあ。後で一発殴るからな？」

「拙者が先でござろうよ」

——そして、日が沈む。

「土具羅とパピリオは発見できたか」

「いいえ。霊波迷彩を使用しているようです。発見できていません」

「……まあ良い。時間だ」

アシユタロスは、ゆっくりと椅子から腰を上げた。

その背後に立つベスパの瞳からは、どんな感情も押し込められて読み取れない。

だが、それを全く意に介さず、魔神はモニター越しに巨大兵鬼の角の先に立つフェンリルを眺める。

「——さあ、始めよう」

声に従い、艦橋にいるテレサ達の指が激しく動き出した。

後方から響く駆動音が大きくなり、それと共に巨大兵鬼の羽の後ろから、蒼白い光が爆発した様に吐きだされた。

ゆっくりと進みだした兵鬼群の眼前に、巨大なゲートが燐光を放ちながら出現する。

「亜空間ゲート、開放」

「大逆天号、及び逆天号、配置完了」

「テレサ No.350 から No.2900 まで、順次戦闘態勢に移行」

「火器管制及び駆動制御系、主機関、オールグリーン」

「待機出力から戦闘出力に移行完了」

「格納庫内、『魔体』、全機最終チェック終了しています」

「宇宙処理装置、圧縮完了」

淡々とした言葉の羅列が舞い踊り、全ての準備が完了した事が告げられた。

そして、魔神は、宣言する。

「たった今から、始めよう。——見捨てられた者達の、知られる事無き者達の、切なる声の代弁を！」

第玖話 『だから私は前に行く』

満月の光が照らし出す東京の真上に、巨大な波紋が浮かび上がる。

波紋は光の渦となり、光の渦は硬質な壁を描き出す。

その壁を轟音を響かせて打ち砕きながら、巨大な三本角が出現した。

月光を受け止める巨大なガラス窓が砕け散り、その輝きが生み出したようにも見える
燐光の大瀑布を吹き飛ばし、大逆天号は暗く染まる宵闇の空を蹂躪する。

轟々と唸る風を意にも介さず、震える巨体は人界へとその身をゆつくりと乗り出した。
た。

月に吼える 第三部

袂に開けた傷口が癒えるかの如く、じくじくと閉じていくゲートから次々と小さな飛行物が飛び出していく。

いや、それは傍らを飛ぶ物が巨大すぎるが故に、遠くから見れば小さく見えるだけの事に過ぎない。

全長2 km以上にも及ぶ巨体の周囲を滑るように過ぎ去った兵鬼達は、そのまま眼下に見下ろすドームを囲う位置へと高速で飛んで行った。

暗い空の下、紫とも赤黒いとも見分けのつかない天蓋だけが、何も無かったかのように静かな胎動だけを繰り返している。

閉じたゲートの余韻も治まらぬうちに、大逆天号にぶち当たっては己を砕いていく風の中、その三角形に配置された三本角の中でも一際巨大な角の上で、白銀の獣が身を起こした。

その視線が見つめる先には、太陽と入れ替わるようにして空を飾る真円の光。無言のまま、フェンリルは顎をゆっくりと開く。

瞬間、辺りを照らし出していた月光が消え——否、収束する。

ブレーカーが落ちたように闇に包まれた世界では、ドームを囲う無数の小さな灯り達の放つ輝きが微かな抵抗を示すのみ。

煩わしげにそれを見下ろしたフェンリルの顎の中には、黄金色の光が渦巻いていた。よく見れば気が付いたかもしれない。月の光が、視界の限り全ての範囲を照らしていた月光が、流砂のようにその一転に囚われていく事に。

そして、収束は臨界に達し、凝縮された光が解放を求めて暴れ出すその瞬間。

狼は、その黄金を眼下の紫に叩き付けた。

巨大な光条が天蓋の上を滑る。

その痕をなぞるように、純粹なエネルギーの奔流が、何の遠慮も無く暴れ出す。

轟音と閃光が空を焦がし、生まれた衝撃が一直線に天蓋を砕いた。

揺れる世界の中心で、僅かに体勢を崩していた大逆天号の頭部から、小さな物体が真下から突き上げる風に踊らされながら落ちていく。

やがて天蓋の裂け目に到達したそれは、己の意義を思い出したようにその尾部から炎を吐き出し加速した。

それを追いかけるように、ゆっくりとした動きで狼をその角の上に乗せたままの巨大兵鬼が降りていく。

迎え火のように、一瞬その腹部を閃光が照らし出し、だがそれが生み出す衝撃が噴出すよりも僅かに早く、その巨体が天蓋の裂け目を己の体を持って蓋をした。

後には静かに降り注ぐ月光と、巨大な裂け目を巨大な身体で塞ぎ、完全に動きを止め

た兵鬼と、最早揺れる事も無くなった世界があるのみ。

侵攻の始まりは、語る者さえ無いまま、静かに終わりを告げた。

第玖話 『それでも私は前に行く』

「——クソツ?! 何が起こったっ?!

集められるだけの戦力をかき集め、それでもまだ足りないと思死で通信を続けていたオカルトGメン達は、突如として突き上げた衝撃に混乱を余儀なくされていた。

揺れるビルの照明が全て落ち、数秒後に非常用発電機が動き出すと共にちらちらと瞬きを繰り返しながら点灯する。

だが、床に投げ出されたオペレーター達の目に写るのは、その殆どが砂嵐と化したモ

ニターの画面。

慌てて駆け寄り、それぞれの持ち場でパネルを操作する。

椅子にしがみ付き身を起こした西条は、その光景を横目に窓へと走り、それを叩きつけるように開いた。

窓の外を、轟風と共に砂塵が舞い踊っている。

その風の来る方角に目を移し、そして彼は硬直した。

「…無茶苦茶だ」

ほんの数日前まで、その視線の先には天を穿つように高層ビルが乱立していた。

だが、今、その高層ビル群の一部が、完全に消滅し、その向こうの光景を見せている。

「——映像、戻りますっ！」

オペレーターの声に、弾かれたように西条は不条理で不確かな現象から目を引き剥がし、復活したモニターに駆け寄った。

「…何処だ？」

「…都庁、の、筈、なんですけど…」

ノイズを走らせるモニターの向こうには、夜空を背景に渦巻く砂塵と黒く焦げだ大地が広がっている。

薄く張られた幕の向こうに、時折ありえない光景が写り込む。

その部屋の誰もが息を呑み、その画面に視線を集めていた。

瞬間、一際巨大な風が上より吹き付け、砂塵は叩きつけられたように吹き飛ばされていった。

後に残ったのは、ありえないはずの映像。

「か、解析結果、でました……嘘——」

「報告したまえっ！ 間違っているかどうかは僕が判断するっ！」

蒼褪め、今にも倒れそうになっていたオペレーターの一人が、震える手でキーを一つ押し込んだ。

映し出された画像には、信じられない光景が映し出されている。

何処かの高層ビルの屋上から写したのだろうか、かつて都庁と呼ばれた巨大建造物が在った場所には——何も無かった。

先ず目に入ったのは黒く焼け焦げた大地だった。

そして、それ以外は何も無かった。

縦横無尽に敷き詰められたアスファルトと視界を埋め尽くさんばかりに立ちほだかっていた建物達の代わりに在ったのは、薄くすり鉢上に窪んだ、黒く変色した地面。

巨大なクレーターが、その円周の外部は殆ど破壊の後を見せず、都心の一区画を突如として塗り代えていた。

周辺のビル群の建物の窓は、或いは罅割れ或いは破れ、その衝撃がどれほどの物だったのかを照明している。

だが、煤の欠片も見当たらないその様子は衝撃以外の何かを受けてはいないと示している。

ただ、静かに荒廃した光景が広がっていた。

「…都庁が在ったと思われる場所を中心に、半径1Kmのクレーターが、出現…」

未だ砂嵐を無為に映し出すモニターのノイズと、半ば無意識に紡がれた報告が、静かに司令室の空気を崩していく。

映像から波及的に広がる非現実的な現実が、訓練された筈の隊員たちの心を塗り潰していく。

崩壊は留まる所を知らず、やがて限界まで満ちたダムが決壊するように弾ける、その直前に。

「——ふう。さて、お茶を一杯貰えるかな？」

緊張感の全く見られない、これ以上なくリラックスした声に腰砕けになった。

「さ、西条先輩っ?!」

「何だね？ ああ、すまないがダージリンをストレートで。ティーパックは論外だよ」

「こ、こ、この期に及んでトチ狂いましたかあんたはっ?!」

やれやれ、と大げさに両肩を挙げ、首を竦めた西条は腕で体を支えながらゆっくりと椅子に腰掛ける。

殊更間を置いて、溜め息一つ。

「オペレーター、人的被害は？」

「えっ、あ、はいっ！ えと、その……あの周辺は一番最初に直接的な被害が在った場所ですから住民の避難は全て終了していますし、隊員達も他の場所に移動してましたから——ゼロ、です」

「ほら、何を慌てる事がある？」

「だって、都庁が消えて、あんな馬鹿げた現象が——」

くっ付きそうな程至近距離で喚く部下の顔を鬱陶しげに押し、飛んで来た唾を懐から取り出したハンカチで拭き取った西条は、足を組みなおして部下の顔を見上げた。

呆れた視線に告げようとしていた言葉を見失った部下が、更に言い募るよりも僅かに早く、西条の言葉が口を塞がせる。

「それが如何した。此方の戦力はノーダメージだろうに」

あくまでも冷静に紡がれた言葉に、部下は絶句した。

これだけの非常識な現実を見せ付けられたと言うのに、まだ、この男は戦意を失っていないと言う事が、その言葉の裏にはある。

口を酸欠の魚のようにパクパクと開けたり閉じたりする部下に、言い聞かせるような声で西条は更に言葉を続ける。

「いいか？ …我々は引かない。引けない。引くことが許されない。『この程度で』おたつくんじゃない」

「…は、はあ」

「これから靈的犯罪が起ころうとしているのに、指を啜えて見ているだけのオカルトGメンが何処にいる。少なくとも、僕の部下には一人も居ない——そうだろうか？」

呆気に取られた表情の隊員達を、笑みさえ浮かべながら西条が見渡す。

誰かが反応を返すよりも早く、その余韻に被せるようにモニターの一つに映像が浮かび上がった。

『…こちら、第45臨時偵察分隊。司令室、応答願います』

「繋いでくれ」

未だ呆けたまま、それでもオペレーターの一人が指示の通りに回線を繋ぐ。

視線が、大きく映し出された隊員のアップに切り替わった。

敬礼を返す制服姿の隊員は、砂埃に塗れ、擦り傷をあちこちに作りながらも張りのあ

る声で報告する。

『現在、出現したクレーターの外縁部に到着しています。負傷した隊員達は後送し、情報収集を実行中』

「結構。こちらのモニターがかなりいかれてしまつてね。何か見えるかな？」

『ドームの天頂部分に、何か妙な物が見えますが砂塵が酷く詳細は不明です。それと、報告が遅れましたが、こちらに民間の協力者が一名——』

『えつと、これでいいんですか？』

「魔鈴君？ どうしてそんな所に——」

隊員が身体をずらすと、その隙間にひよこりと魔女の顔が写り込んだ。

笑みを絶やさないとその表情が、今ばかりは緊張に彩られている。

『すいません、先程こちらの方々々に連絡をお願いしようと思つたんですけど、さっきの風の所為で遅くなりました』

「いや、構わないよ。それより何か情報でも？」

砂埃の一つも見当たらない様子の魔鈴の口から語られたのは、空を飛べる彼女が偵察し得てきた情報達。

東京の直上に開いたゲート。

そして其処から飛び出してきた、甲虫に似た巨大な物体達。

月光の喪失と、光の炸裂。

おそらく、天蓋の裂け目に居るのが、その内の一際巨大な一匹ではないか、と言う事。ルシオラからもたらされた情報と、たった今魔鈴が見て来た物達。

それらが示すのは——本格的に攻勢を仕掛けてきたという一つの事実、始まりを示す言葉だ。

「…ありがとう。ドーも其処があちらさんの目的地みたいだね」

『ええ。私達はどうしましょうか?』

「もう少し監視しておいてくれないかな。今からそつちに送れるだけ戦力を送る」

『こつちにですか?』

「一番最初に都庁が直接的な被害を受けてるんだ。何せこの国の大霊穴、そんな場所に二度もちよつかい出してくれば流石に必然の一つくらいはある」

筈、と言う言葉は西条の口の中で噛み砕かれた。

只でさえあちらの戦力は不確定、その上魔神までもが出現する可能性あり、と来た物である。

妙にバラバラに配置するよりも、かき集めるだけかき集めた力を一点集中で叩きつける以外に勝ち目が無い、と言うのが正直な所だ。

だから、その一点と場所を間違える訳にはいかない。

遅くても駄目、間違っても駄目、それでも今、その場所に決めたのは。

「それに僕の靈感が告げているからね。間違いない」

『私もですわ。分かりました、それじゃ、何かあったら連絡します』

通信はその言葉を最後に一端切れた。

おそらく、隊員達はもてるだけの能力と機器を使って監視に入っているだろう。

未だオカルトGメンに集まっていない民間GSのメンバー達も、その地点に集結しつつある筈だ。

「連絡の取れた隊員達から魔鈴君たちの居る場所に移動させてくれ」

そう言い残して、西条は席を立った。

椅子に掛けていたスーツの上着を取り、羽織る。

ネクタイを締めなおし、懐に拳銃を納め、部下が文句を顔に書きながらも差し出してきた霊剣を受け取り、しっかりと固定する。

流れるような動作で全ての確認を終わらせ、すっかり動揺の抜けた部下の敬礼に軽く返礼しながら、慌しく動き出したオペレーター達を尻目にドアを潜った。

一瞬だけ足を止め、何時の間にかドアの向こうに立っていた悪戯っぽく微笑む女性の横を通り抜ける。

最後に背後から掛けられた、間延びした女性の声に苦笑いを零しながら。

「膝の振えはく収まったくみたいねく？ 頑張りなさいなく、男の子く！」

「…一応、武者震い、と言う事にしといてください」

励ますような視線を背に受け、西条は、行く。

「あら、神父じゃない」

「やあエミ君。奇遇、でもないかな」

褐色の肌をシャーマン装束に固めたエミは、薄暗い路地から飛び出して来た唐巢神父に一瞬目を止めると、足を止める事無く走っていく。

その横に追従しながら、やや息を荒らげた神父はふと思い出したように辺りを見回し

た。

人気の無い大通りを駆け抜ける二人、その他に人影も無く、足音と時折吹き抜ける風以外は静かなもの。

疲れた様子も見せず走るエミに若さを感じながら、唐巢は額に浮いた汗を拭った。

「タイガー君は一緒じゃないのかい？」

「ふん。さっきの衝撃でワゴンが事故つちやったワケ。後から荷物担いで追っかけてくるわ。そつちこそピートは如何したワケ？」

「こつちも車が事故つてね。負傷したオカルトGメンの隊員を頼んできたんだよ」

それでも二人とも、いや助手と弟子を含んだ4人とも怪我をしたようではない所からすれば、やはり実力者という事だろう。

本来ならばエミにしても荷物の有る無しで戦闘の幅に違いがはつきりと出るし、唐巢にしても運んでくれていた隊員達を手当ての出来る所まで運ぶ手伝いをしたかった所である。

それをやらなかったのは、二人の霊感が告げているから。

急げ、と。

囁きにも似た直感の告げるまま、二人はひたすらに駆けて行く。

その前方、大きく裂けた天蓋の周辺から、小さな光の点がまるで雪のように降り始め

ている。

「——圧縮コスモプロセス、及び護衛担当部隊投下中」

「タイムスケジュールに遅延無し」

「大逆天号、干渉により魔力炉完全停止。サブバッテリーの残量97, 543%」
天蓋の天頂部にて動きを止めた巨大兵鬼、その艦橋では忙しく指を動かしながら報告を続けるテレサ達の姿がある。

照明は殆どが落ちており、モニターの発する僅かな光だけが光源である。

夜ということもあり、薄暗い艦橋はさながら儀式の間のような雰囲気であった。

中央部に設置された椅子に座ったまま、アシユタロスはその光景を眺めている。

そんなテレサ達の声とキーボードを叩く指の音だけが木霊する空間に、小さな赤い光が瞬いた。

同時に甲高いシグナル音が数度鳴り、近くにいたテレサの一体がそれに触れる事で停止する。

それまで光を失っていた正面の巨大なモニターに光が走り、周辺の地図らしき映像が映し出された。

大逆天号を中心に、関東のほぼ全域を映し出したその映像はグリッドで仕切られ、ドームを示しているのであろう巨大な円の周りにはナンバリングされた光点が幾つも瞬いている。

と、その地図の片隅で赤く輝いていた点が、テレサ達の操作に従って拡大された。

「北西より敵性存在の反応を確認。分析します」

「アーカイブ照合…一致。神族、土着神の一群と見られます」

「逆天号が望遠で確認。映像、リンクしました」

それまでの地図が大画面の一角に押し込められ、開いた空間にその映像が映し出された。画面の中ほど、夜空の闇を背景に星とは明らかに違う数え切れない程の光点が輝いて

いる。

それらは一端動きを止め、すぐさまこちらを半包围するように扇形に展開する。光点が一際輝きを強め、何かが遠く離れた距離から一気に放たれた。

画面が一気に下へと滑って行く。

その下端を掠めるように、怒涛のような光の筋と飛来物が通り抜けていった。

轟音。

真下から突き上げるように風が叩き付けられた。

だが、それだけだ。

前方の神族達の真ん中で、貧相な風貌の山神と筋骨隆々の土地神が何やら大声で騒いでいる。

その声が、風に乗って届いた。

『第一射回避されたっすーっ！』

『ええい飛び道具で駄目なら接近戦じゃあああっ！』

『もうっすかっ?!』といますか何で新参者が真正面にいなきやなんのすかああっ?!』

『下っ端が先鋒勤めるのは当然じゃろうがっ！むしろ一番槍を光栄に思わんかっ!!』
最前列でなにやらごちゃごちゃとやっていたようだが、貧相なほうが胸倉掴まれ、い

きなり此方に向かつて全力で投げつけられた。

悲鳴を上げながら涙目で飛んでくるそれに対し、逆天号は角の一振りで迎撃。

ぺちん、と弾かれ落ちていくそれに目もくれず、後続が次々と矢を放ちながら突撃開始。

雄叫びを上げ、妙な歌を歌いながら接近してくるムキムキマツチヨの漢達。

モニター越しであるにもかかわらず、テレサ達は一樣に引いていた。

「…薙ぎ払え」

どこか疲れたように片手で額を押さええながら、溜め息混じりに出された魔神の指令に従い、画面が光に満たされていく。

「断末魔砲、発射っ！ あーキモイのを叩き落せええっ!!」

ホワイトアウトする直前、テレサの悲鳴じみた声に釣られるかのように光条が鼓膜を振るわせる絶叫と共に放たれた。

光条は右から左へと舐めるように夜の空を灼いていく。

『どわあああっ?!』

『回避回避回避っ?!』

しかし、異様に慣れた動きで、バラバラに機動しながら光点達は回避する。

何個かは余波に巻き込まれ黒焦げになりながら落ちて行ったが、それでもまだその殆

どが生き残っていた。

『ふわはははははっ！ 八甲田山の雪崩れに比べれば温い、温すぎるわっ！』

『その通りっ！ 元山男を舐めるんじゃないぜっ！』

「連射」

冷たいテレサの声と共に、絶叫が間断無く鳴り響く。

悲鳴を上げながら逃げ惑う漢達。

だがするりぬるりとかわしっつ、直撃だけは喰らわない。

それどころか、射角から外れた何人かは引き締まったお尻を振り出して挑発する始末である。

「キーツ！ なんで当たらないのよっ?!」

「近くの逆天号を何体か回すわ。殲滅してやる……!」

眼前の駄目な方向に盛り上がりつつある喧騒を目にし、魔神は一言呟いた。

「……………部下の選択を間違えたか？」

今更なその問いに、答える者は居なかった。

「西条君！」

「間に合った見たいなワケ」

途中で合流したオカルトGメンの誘導に従い駆けつけた唐巢神父とエミを、西条は握手で出迎えた。

前線司令部として立てられたテントの中では忙しく動き回る隊員たちが様々な機械を接続し、稼働させ始めている真つ最中。

戦場のような、というよりも、ここは正しく戦場であった。

二人を先導し、大きな目のテントの中に設置されたホワイトボードと周辺の地図を見せる。

小さなライトの光に照らされた地図の中心は、殆ど全てが円形に白く抉り取られ、それ以前の姿との差異をはつきりと示している。

「これが、現在の都庁周辺状況です。と、言っても此処まで何も無くても余り意味も無

いかもしれませんが。現在、敵はこの——」

指し示された指の先には、そのクレーターの中心部。

簡単に×印が描かれているだけの其処が、今最も敵の狙いである可能性が高い地点。

この国の霊穴であり。

「この地点で、敵はなんらかの作業を行なっているようです」

「ふむ、で、どうなんだね？」

「さっさと潰せない理由があるワケ？」

そう、ここまであからさまに行動されているにもかかわらず、オカルトGメンが攻勢に出られないのには単純すぎるほど単純な理由があった。

「相手は少なくとも千数百体。情報にあつた「テレサ」タイプがそれだけ居るとなると……」

「…無茶苦茶なワケ」

途方に暮れた、としか言いようが無い声を出すエミ。

唐巢も似たような物である。

『ヨーロッパの魔王』ドクター・カオスの娘、マリアとスペックだけを見れば均衡するようなのが千以上。

それが警戒しながら待ち構えているとあつては、例え総員が出撃してもあつさり全滅

しそうである。

「精霊石弾頭ミサイルによる広域打撃…は、無理か」

「そりやねえ。霊穴にそんな物ぶち込んだら、この国がどーなるか分かったもんじやないワケ」

虚空を見上げいきなり物騒な事を呟いた唐巢に、エミが舌打ちしながら否定の同意。

もしもそこが霊穴でなかつたら、問答無用でぶち込んでいた事は間違い無い。

ある意味一国そのものを人で人質に取られたような物である。

只でさえ慎重な扱いを要する霊脈の溜まり、そんな場所に精霊石弾頭ミサイルなんて物がが大規模で炸裂した日には、どれほどの災難が襲う事か。

「ですが、一日とはいえ時間的な猶予があつたのは助かりました。お陰でアレだけの規模の破壊があつたのに、死傷者が殆ど居ませんから」

それは、とある老いた狼が残した、ほんの一握りの時間。

此処に居る誰もが知らないけれど、確かにある大きな助けなのだ。

「ともあれ、何とも攻め様が——」

言葉を遮るように、入り口を覆っていた布が大きく開かれた。

駆け込んできたのは、隊員の一人。

一枚の書類を手に、酷く慌てた様子で西条に向かって走り寄る。

受け取った西条は、その報告に一瞬目を見開き、ついで呆気に取られ、最後に二人に向かつて頷いた。

「…チャンスが来たのかもしれませんが」

「レーダーに感あり。護衛部隊、警戒モードから迎撃モードにシフト！」
がちやり、と重々しい音が連続する。

セーフティーが解除された武装を、何時でも解放できるようにしながらテレサ達は待ち受ける。

後方から弧を描いて何かが宙に打ち出され、次の瞬間、眩い閃光で辺りの闇を打ち消した。

照明弾の光の下、何も無くなったが故に非常に見通しの良くなった広場に通じる大きな道路の向こう。

反応があつたのはそちらからである。

光の届く範囲に無いほど先の方から、小さく音が鳴り響き始めた。

「…相手は？」

「GS達では無いみたいね。神族・魔族の反応も無し。まあ問題無いでしょ」

さざめく声があちらこちらで小さく木霊し、そして武装を解放する。

ある者はミサイルを構え、ある者は腕から銃を出現させ、その時を待ち構える。

指示は不要、全員が同じ魂を持っている以上、タイミングを取る必要がないからだ。

そして、それらが光の下に出現した。

「…はあ？」

それは、巨大な白い猪の一家だった。

それは、非常識な程巨大な鹿の一群だった。

それは、航空力学を無視しているのではないかと思えるほど大きな鳥の群だった。

それは、四肢に膨大な膂力を秘めた熊の一族だった。

それは、巨木と見紛うばかりに太い胴を持った蛇達だった。

それは、怒りと力に満ちた、偉容を誇る獣達の群だった。

足音は既に鳴り響き続ける轟音と化し、夜闇を踏み碎きながら加速する。

先頭を行く一回り小さな猪の上で、不敵に笑う少女は一体何者か。

腕を組みながら見事に乗っている少女がニヤリと唇を歪めた。

両腕を解き、片方の手で猪の毛を掴んで体勢を固定しつつ、開いた片手を軽く一振り。それだけで、彼女の手には武器がある。

刺叉と呼ばれるそれを上に向け、勢い良く前に向かって振り下ろした。

「唸っ喊!!」

「——っ！ 撃てえっ!!」

号令に一瞬見失っていた意識を取り戻したテレサ達は、次々に火線を叩き付ける。

ロケットが着弾し、銃弾が千の単位で巻き起こった砂埃の中に吸い込まれ、ミサイルが上空から降り注ぐ。

閃光弾の光が降り注ぐ中、瞬時に出現した砂煙が先頭に立っていた猪と少女の姿を掻き消した。

「…やったかつ?!」

「舐めんじやないよっ!!」

声を衝角に突き破る。

砂煙を弾き飛ばし、獣達は怯む事無く驍進した。

現われた獣達の姿には僅かに負傷が見られる物の、どれも小さな傷ばかり。

前方から絶え間無く打ち込まれる弾丸を獣毛で、鱗で弾き、或いは非常識な速度で回避し、彼らはただ前へ行く。

「どいつもこいつも鬱陶しい！ 犬飼メドーサの邪魔をする奴は火傷なんかじゃ済まないって、骨の髄まで覚えときな!!」

正史に於いては在り得ない筈の存在が、居なかつた存在を引き連れて、存在しなかつた筈の敵に向かつて接触する。

老いた狼が最期に託し、作り上げた時間の中、切り札である事を封印された筈の半人狼が作り上げた一つの絆が、今、先駆けとなつて突っ込んだ。

「…皆、準備は良いな？」

「つたく。ピートが居ないとやる気で無いわねー」

「まあまあエミ君。その内ピート君も駆けつけるから」

そして人は足に力を籠め。

「あそこでござるな」

「派手ねえ。あんまり趣味じゃないわ」

「遅れれば置いて行くからな」

狼達は狙いを定め。

『——お帰りなさいませ、オーナー』

「ただいま。直ぐ出るわよ」

『準備は全て整っています』

「オーケー。良い仕事してるわね」

『恐悦至極』

「全く、天竜姫様も無茶をするのね」

少女に導かれた者達が動き。

『下の様子はどうかの？』

「…衝突が・始まった・ようです」

『頃合かのお』

錬金術師が笑い。

「コスモプロセス設置予定地周辺に想定外の敵性存在出現しました！」

「…フェンリルを呼べ。私が降りる」

魔神が椅子から身を起こし。

「…行くわよ、ルシオラ」

蛍の少女が決意する。

——そして、最初で最後の一夜が幕を上げた。

第拾話 『そして私達は受け継いだ』

「ふひひいひい、ふへえええ、さ、酸素おおお……」

「あー、司令室、司令室？」

オカルトGメンの女性用制服を着た少女を、街灯とジープの灯りが照らし出す。

アスファルトの堅さと冷たさを存分に感じていたおキヌは、誰かが自分の頭を何か柔らかな物に乗せてくれた事に気がき目を開けた。

心配そうに覗き込んできたのは、ネクロマンサーの笛の訓練に参加していた女性隊員の一人。

その膝の上に抱えられて膝枕されている、と何とか認識した所で視界の端に差し出されたペットボトルに飛びついた。

「ああ、そんなに一気に飲んじゃ駄目だつてば。そう、ゆっくり、ゆっくり」

こくりこくりと音を立てて、良く冷えたスポーツドリンクが咽を降りていく。

五臓六腑に染み渡るその感触を存分に味わっていた最中、今度は肺が酸素を求めて反乱を起こした。

月に吼える 第三部

咽る少女の背中を優しく擦りながら、女性隊員の視線が辺りを彷徨い、呆れの感情を露にする。

周囲に転がる、銃器に鈍器に霊具にお札。

パンパンに膨らんだリュックサツクの口から零れたそれらは、合わせれば一体どれほどの重さになるのか。

少なくとも彼女の同僚である半人狼が背負っていた物と同じくらいはあるだろう。

見た目と普段の大人しさからは予想もつかない行動力で、彼女の護衛を買って出た隊員達がかじ引きやアミダで選別されているその間に、倉庫から持てるだけの装備を抱えて才力Gを飛び出した彼女。

こんな緊急事態であるにもかかわらず、まさか自分の足で、しかも即座に行動に移す

とは思ひもよらなかつた隊員達は見事に置いてけぼりをくらい、慌てて街中を駆けずり回つたのだつた。

そして、突如として吹き荒れた風の中、漸く見つけてみれば彼女は歩道の端っこに倒れており、慌てて駆け寄つてみれば酸欠と脱水症状と疲労で目を回して昏倒中。

「へはー、へはー」

膝の上で酸素を求め、未だ半分意識が飛んでいる少女の何処にそれだけの強さがあったのか。

苦笑いを浮かべて自分の認識を訂正しつつ、女性隊員はおキヌの保護を司令室に伝えて駆け寄つてきた男性隊員に空っぽになつたペットボトルを投げた。

片手でそれを受け取つた男性は、心配そうな表情でおキヌの横にかがみこみ、もう片方の手で酸素ボンベの付いたマスクをそつと押し当てる。

「よーし、俺に合わせてゆつくりと吸い込んでくれー。ほーらヒツヒツフー、ヒツヒツフー」

「セクハラ禁止っ!!」

振り抜かれた小振りな拳は、セクハラをするつもりもなかつた大真面目な馬鹿のテンプルを斜め下からぶち抜いた。

第拾話 『そして私は受け継いだ』

「くっそ、数だけはごちゃごちゃと鬱陶しいっ!!」

戦況は、膠着していた。

減速する事無く敵集団に突っ込んだメドーサ率いる森の主達。

だが、それでも敵の数が多過ぎた。

そして、敵は純粹に堅かった。

最初の突撃で五十を吹き飛ばし、研ぎ澄まされた本能のままに百を蹴散らし、だがその内の九割は何事も無かったように戦線に復帰してくる。

始まりの混乱は既に収まり、半包囲陣を引きながら銃口を揃えてゆつくりと前進してくる機械人形達。

翼在る者が空から爪と嘴で襲い掛かり、地を這う者が足元から忍び寄り、地を駆ける者達が己の武器を振り翳す。

だが、突破には至らない。

銃弾ならば弾きもしよう。

爆発ならば耐えもしよう。

砲撃ならば避けもしよう。

しかし、いかに森の主と人狼として生まれ変わった元魔族とはいえ、生き物である以上その身の内に蓄積されていく疲労だけは避け得ない。

結果、弾幕として波濤の如く襲い掛かる鋼の槍は、押し戻す力となつて前進を望む獣達の足を完全に停止させていた。

今はまだ拮抗している。

これだけの数の差でありながら、押し潰されていないのは奇跡と言うべきかそれとも必然と言うべきか。

それでも、メドーサの脳裏には悲観的な予測しか浮かんで来ない。

「クソがあつ!!」

飛来するミサイルの群に刺叉を投げつけ、周囲を巻き込み誘爆させる。

生まれた閃光と衝撃から目を庇い、片手で遮られた視界の向こう、跳躍した一群が居た事に気付かなかつたのは焦り故に。

3体のテレサ達はそのまま獣の群のど真ん中に舞い降り、周囲が反応するよりも一瞬

早く。

「Bomb♪」

皮肉気な笑みを浮かべて、炸裂した。

完全に不意を撃たれた主達は、負傷こそ僅かな物であったもののその音と光に感覚を奪われる。

それは、メドーサもまた同じ。

舌打ちをしながら体勢を立て直し、目を開けた瞬間に、己の体に触れる冷たい感触が怖気を誘った。

「貴女がリーダーだね？」

「…やってくれるねえ」

するりと身体に回された二本の腕は、その見かけとは裏腹に万力のような力で締め上げてくる。

耳元で囁かれた言葉に失態を悟りつつも、それでもメドーサは背後から抱きついてくるテレサに向かって刺叉を突き出そうとした。

「一緒にあの世でも観光しましょうか、お嬢ちゃん？」

フラッシュバックする、ついさつき起こった爆発の映像。

仕込まれているであろう爆発装置と、その身の内に山と抱えた爆発物の相乗効果が生

み出す威力は、至近で受ければメドーサとて只では済まない。
突き出した刺叉がテレサの頭部を抉るよりも、それは僅かに早かった。

「……?!」

爆発音が再び群れの中で響き渡り、残響は彼女の脳髓を強く揺らす。

それでも、メドーサは無傷だった。

目を開いた彼女の前に、雄々しく立つ白い猪。

片方の牙を失っていた主の口元からは、先程まで天を貫かんばかりに鋭く存在を誇示していた残りの牙も失われていた。

自爆の直前にテレサを突き上げた為に爆発の直撃を受け、焼け焦げたその牙の付け根からは止め処無く赤い液体が溢れ、爆発の直撃を至近で受けた顔には大きな傷が走り白い毛を汚していた。

メドーサが駆け寄り、その獣の首に手を当てる。

ゆらりと揺れて膝を突いた猪は、だがその瞳に気遣う色を見せていた。

「……つか野郎」

俯き、言葉を零した少女の前で、獣は鼻息を大きく噴出し、まるで笑っているように歯を見せると、僅かに身を震わせつつも力強く立ち上がる。

例え言葉は放てなくとも、感情だけは確かに伝わった。

——まだやれるだろ、と。

言葉は不要。行動で示す。

刺叉を扱き、振り切るように頭を上げ、僅かに充血した瞳に戦意を滾らせる。

肩を並べた友を見る事無く、ただひたすらに前を見る。

唇の端を上げ、雄叫びを上げた少女の頭上を、後方から大量の砲撃が飛び越えていった。

「第一射、敵後方集団に迎撃されましたっ！」

「休むな！ 弾が切れるまで打ち込み続けろっ！」

分厚くクレーターの中心にある何かを囲むように布陣するテレサ達の真上に、放物線を描いて間断無く打ち込まれる砲弾の下、人間達は攻勢を開始する。

予想通りこちらが掛けた不意打ちに対し、相手は慌てて砲弾を打ち落とす反応を見せた。

此方の狙いは展開するテレサ達ではなく、その後方で行なわれている作業中のテレサ達。

一度に打ち込むことの出来る攻撃は精々十数発が良い所だが、相手にとっては無視できる物ではない。

その火力の何割かを、砲弾が飛来する度に対空砲火として割かざるを得なくなった火

線は明らかに勢いを弱めていた。

「あの非常識な獣達の後ろに隠れて攻撃するんだっ！ 良いか、配布した菓子を先ず笑顔で渡して頭を下げろっ！ 誠意を見せて盾にしろっ!!」

「…良いんだろうかなあ」

「あら、利用できる物を利用するのは当然なワケ。ピートもそう思うでしょう?」

「ええと、た、タイガーは?」

「…ワツシに振らないで欲しいんジャー」

獣達の間隙を縫って、銃と霊具で武装した人間達が攻撃を開始する。

銃弾は弾かれ、霊符はあっさりと耐え切られた。

だが、それまで無かった遠距離攻撃の手段の発生は、テレサ達には不意打ちとなって襲い掛かる。

獣達とメドーサを自爆を使った不意打ちで混乱させ、一気に押し包もうとしていた所だっただけにその効果は予想以上のものとして現われる。

散発的になった火線を潜り、足止めさせられていた獣の塊がじわりと進む。

「…チッ。手伝いならもつと早く来いってんだ」

少女の呟きはともかくとして、笑顔と揉み手で捧げられた甘いお菓子を受け取った主達は気前良く彼らに空間を作った。

ジャパニーズ・スマイル此処に在り、である。

何せ古来から荒神・祟り神の類を傍らに宥めすかして生活を送り、現代では世間という荒波を処世術という技術を縦横無尽に駆使してあの手この手で乗り越えてきた民族の末裔だ。

相手の警戒心を解く事に掛けては誰もが生活に根ざした努力の経歴を持っている。

すなわち、訝しげに睨んできた精霊一步手前や森そのものといった存在など、気に入らない上司やクレームの多い近隣住民に比べれば、おだてて胡麻を磨るのにも宥め空かして落ち着かせるのも容易い事。

怪我を霊的治療で優しく癒す女性隊員達の存在も加われば、主達も上機嫌でその身を態々壁代わりへと動かしてくれる。

更に此方の進軍速度に合わせてくれるおまけ付き。

「よーし、各自そのままあくまで低姿勢で盾にしろ。エセ紳士でヘタレのくせにタラシなけち臭い上司に接するように柔らかく、だ！」

『こちら西条。今4つほど余計な事を言った部下は減給だ』

「…ジェントルで尊敬できるモテモテの上司を敬うようにだこん畜生っ！」

一部でヤケクソ気味の猛攻が開始されたりもしているが。

劣化精霊石の銃弾と、それに混じって放たれる高出力の霊力砲。

本来ならば報復に打ち返される筈の銃弾も、上空より飛来する危険物を排除する為に優先的に回さねばならない。

彼女達の目的は敵の殲滅ではなく、後方の荷物が展開を終えるまでの護衛なのだから。

「はい、お菓子を受け取った方々はこれを上からばら撒いてくださいねー。基本一撃離脱でお願いしますわー。あ、無茶はしないで下さいね？」

上空では激しくなった対空砲火に近付く事もままならぬまま、悠々と弾幕を回避していた空の主達に魔女がお菓子の貢物と爆薬を配布していた。

箒に跨った魔女の宅急便はするりするりと銃弾の届かない高さを行き来しながら、箒の尻尾に括り付けた袋の中からクツキーを取り出し周囲にばら撒く。

それを器用に空中で受け取った鳥達は、魔女が手渡した危険物を嘴で啜え、そのまま一気に急降下。

迎撃に打ち上げられる火線を超反応で回避しつつ、最後に切り離し捻りを加えながら羽ばたき一つで空の闇へと消えていく。

残された荷物は慣性と重力で加速し、テレサ達の集団に吸い込まれていった。

直撃こそ流石に無いものの、急降下爆撃はその速度自体がこれ以上なく厄介な存在であつた。

密集した銃口の戦列も、整えられた陣形も、問答無用で抉り取っていく爆裂は中々どうして迎撃も難しい。

センサーで捕えてしまえば軌道の予測が比較的簡単な砲撃に比べ、有機的と言うか動物的感で此方の攻撃を回避する物を、どうやって迎撃しろというのだろうか。戦況は再び変化する。

その天秤の行く末も、踊り手の行方もわからぬそのまま。

至近で炸裂した弾頭と地面の破片が頬を掠めて高速で飛んで行く。

己を背後に控えた「荷物」の盾と化しながら、テレサの一体は毒づいた。

「…っ！ ああもう、護衛部隊は何やってんのよっ?! ちよつと、根の栽培はまだ終わらないのっ?!」

「文句があるなら自分でやれば良いじゃないっ！ 大体この根っこ気分屋過ぎて扱いにくいのよっ！」

直径3M程の真球を形作る緑色の膜は、あちこちに貼り付けられた吸盤と其処から伸びたコードに飾られ、不気味な生物のようにも見える。

いや、それはある意味で間違っではないのだろう。

球体の下部から伸びた、無数の『根』はゆっくりと、しかし植物にあるまじき速度で成長しながら地面を穿っている。

蠕動を繰り返しながら、何かを捜し求めて更に深い場所へとその先端を伸ばしていった。

コードの先には数機のテレサが繋がっており、まるで暴れ馬を無理矢理押さえ付けているかのようにその身体は時折大きく震え、その度に瞳に苛立ちの色が濃くなっている。

「地脈をそのままっ、魔力に変換できるっ、からって、我が俣すぎるわよこのクソ根っ
んっー！」

「3番と5番が勝手に上に向かって動いてるわよッ！ 無駄なエネルギーは無いんだから早く地脈の探索に戻らせなさいってばっ！」

怒号の合間にも、再び数発の砲弾が飛来する。

接続したテレサ達の周囲に他のテレサ達が集い、腕から出現させた銃弾で対空迎撃を開始した。

その内の幾つかは放物線の頂点で破壊され、さらに残った半分は重力加速を得る前に銃弾に挟られ砕けていく。

だが、僅かに一発が「荷物」のほんの数M手前まで接近し。

「——貧乏くじ引いたわねっ！」

対応して跳ね上がったテレサの一体が繰り出した蹴り足に直撃し、炎の華へと姿を変えらる。

衝撃で吹き飛んだテレサは、そのままの勢いで大地を抉り、もんどり打って地に伏せる。

片足から火花を散らすその一体は、そのまま緊急用ブレイカーを動かし目の光を消し去った。

修理できれば復活するであろうが、その時には片足が大きな損壊を負っている以上、普段通りの機動は望めまい。

その光景を目にした他の者達は、複雑そうな表情をしたまま、だが何も言わずに作業に戻る。

いかに軌道が予測でき、打ち落とせる確率が高かろうと、指先ほどの銃弾を空中を高

速で移動するビール瓶ほどの物体に命中させようというのだ。

計算上のデータで予測できても、風や気象状況、突発的な衝撃などによる弾道の変化は蓄積された経験の少ない彼女達では完璧な防御は難しい。

「こちらコスモプロセッサ設置部隊っ！ 護衛部隊は真面目にやってんのっ?!」

『うっさいわねっ！ こっちだつて手数は足りないわ弾がそろそろ不安だわ、色々不味いのよっ！ 文句があんならこっちに半分回しなさいっての!』

「こっちも手一杯よっ!」

「まったく後方に居るくせにこっちやこっちやとっ!」

罵詈雑言を噛み砕き、残弾を全て叩き付ける。

足元には葉莢が小さな山となっており、それは横に並ぶ全てのテレサ達に共通する状

況だった。

銃弾が吸い込まれていく先には爛々と輝く獣達の目の光。

じりじりと距離を詰めるその集団の中から、撃った数よりは少ないが確実に打ち返してくる者達が居る。

腕の装甲に火花が散った。

舌打ちと一緒に膝を曲げ、最後のロケットを銃弾が来たであろう場所に向かって発射する。

煙の尾を引きながら突進していくそれに目もくれず、一端後方へと補給に走った。

長期戦の備えとして一緒に落ちてきたコンテナを探り、銃弾とロケット、ミサイルを一式詰め込んでいく。

「ああもう面倒臭いわねっ！ 大体なんでもうちよつと霊的な内臓武器が無いのよっ！」

隣で同じように給弾中だったテレサが、呆れた風情で肩を竦めた。

「メタソウルで動いてるつてのに、妙な力場を中に入れるわけにも行かないじゃない」「そんな事は分かかってるつてのっ！」

まあ、彼女達よりも先に作られたマリアはそんな問題とつくの昔のThe・マッドパワーによるバージョンアップで克服し、更にメタソウルから汲み上げた靈力を展開する

までに至っているのだが置いて。

給弾を終えたテレサは、身を翻して一步を踏み出し。

「上、上えええつ?!」

「へ?」

真横に落ちた急降下爆撃の衝撃を喰らって空を舞った。

閉じた瞳の奥に流れる様々な映像。

完成と同時に奇妙な埴輪に囲まれ梱包され、あつという間に暗い箱の中にラツピン
グ。

再起動して目を開いたと思えばいきなり山の中に投入され、ダンジョンめいた某錬金
術師の秘密基地を破壊しつつ探索。

地雷を踏み鉄球に追いかけられ鳥もちの海に肩まで浸かりゼンマイ仕掛けの鼠に耳
を齧られそうになり、気付いた時には山の落盤に巻き込まれて脱出に死ぬほど苦労して

みたり。

ようやく帰還してみれば休む間も無く獣に弾き飛ばされ終いには爆撃で宙を舞う。

「——つてこんな走馬灯認められるかあああああああああああああつ!!」

地面に突き刺さっていた頭を引き抜き、泥と土を跳ね飛ばす。

叫びながら打ち上げた銃弾はすすいと空を飛ぶ怪鳥に掠る事さえ無く消えていく

が、肩を怒らせた彼女は収まらない。

矢鱈滅多らばら撒きながら、前線目掛けて全力疾走。

背中に向けられる、呆れた視線には結局最後まで気付かなかった。

「…同じパーソナリティで、どうしてこうまで違いが出るかな」

呟いて、同じ顔をした同型機は肩を竦めて歩き出した。

「……………」

眼下に見下ろす巨大兵鬼に、未だ動きは見られない。

耳元を過ぎていく風に煽られる髪を押さえながら、ルシオラは静かに機会を待っていた。

大逆天号の巨軀が小指の先程に見える遠距離、バイザー越しの視界の中には百を超える反応が示されている。

兵鬼の周囲を囲み警戒を続けるテレサ達の群は、天蓋を通して見えない状況に対して焦りを感じさせるばかり。

下で騒ぎが起これば、そしてそれが手に負えない程のものであれば、アシユタロスは必ず動く。

彼の目的は、テレサ達が抱えて降りていったコスモプロセスに在るのだから。

天蓋の周辺では、いまだ不気味な絶叫と閃光が放たれ続けているのが時折視界と聴覚に引つかかる。

それに対しても、特に動きを見せていない。

だが、天蓋の中を覗く術は、ルシオラには無い。

それでも、ルシオラは信じてひたすら待っていた。

GS達を、魔鈴を、一応メドーサも。

どれほどの時間が過ぎたのか。

まるで長い年月を経たように感じる夜空の中、バイザーの中に写るテレサ達が動いた。

「来た……！」

大逆天号の艦橋の直上、頭部にあたる場所に次々とテレサ達が現われる。

ブースターを噴かして飛び上がり、誰かを待ち受けるように中空に留まる彼女達の列が終わりを告げた頃、二つの影が出現した。

片方は、二本の角と強烈な威圧感を孕んだ存在。

魔神、アシュタロス。

もう一つは、暴虐さえ感じられる雰囲気をつつた獣。

魔獣、フェンリル。

魔獣は魔神を省みる事無く、一気に駆け出し眼下の天蓋へと身を踊らせる。

その姿が壁の向こうに吸い込まれ、続くように周囲を囲んでいたテレサ達も降りていく。

たいした時間も掛からず、数百体のテレサとフェンリルはドームの中へと姿を消した。

残るは魔神がただ一柱のみ。

ゆっくりと歩みを進め、緩やかに弧を描く巨大兵鬼の頭部の端から飛び降りた。

「アシユ様?!」

フェンリルならばまだ分かる。

あれは神魔族と言うよりも、月の魔力を喰らって生きる精霊や妖怪、獣に近い存在である。

故に、神魔族を拒絶する天蓋を擦り抜けたテレサ達の如く、天蓋を無視して通り抜けていく事が出来るだろう。

だが、そうでない物は、ただ魔力で動くだけ兵鬼でさえその魔力炉を止められ動きを止める。

しかし、アシユタロスは。

「……え?」

立った。

焼けて融け固まった地盤が広範囲に罅割れ、敵も味方も戦場に存在する全ての者達が足を取られて動きを止める。

睥睨する目は、酷く退屈そうな色に占められていた。

空気が、動から静へと転換する。

停滞した空間を、ただ一匹の獣の視線が蹂躪した。

それだけで、向かい合った者達はその身を畏れに震わせた。

『くだらん』

大気を揺らす眩きに、反応できる者は居ない。

溜め息の如く吐かれた吐息には、期待外れの感情がふんだんに盛り込まれている。

『虫けらどもを踏み潰すのに、何故我が出向かねばならんのか——』

主達の間から、畏れの感情が僅かに緩み、その隙間から怒気が溢れ出した。

唸り声を上げるもの、四肢に力を籠めるもの。

だが、襲い掛かるまでには至らない。

彼らは獣であるが故に、フェンリルがどう言う存在なのかを理解した。

感情でなく、本能で。

故に、どれほど感情が波打とうとも、本能がそれを押さえ付ける。

勝てないと、知ったから。

『つまりらぬ。勝手に——』

「それでは困るな。私は言った筈だぞ、蹴散らせ、と」

苦々しげに舌打ちしたフェンリルが頭上を振り仰ぐ。

魔神は、何時の間にか、誰にも気付かれる事無く、全くの無表情のままそこに静かに浮かんでいた。

言葉にも態度にも何ら意図を見せないまま、静かにアシユタロスは言葉を紡ぐ。

「逆らう気か？」

『…噛み砕かれたくなくば、即刻その口を閉じた方が身の為だ』

「そう言つて、前足を失い、計画に遅延を来たした愚か者は誰だったかな？」

唸り声が高くなる。

魔獣と魔神の視線がぶつかり合い、重圧と緊張感が辺りを満たす。

誰もが声も出せないまま、僅かな時間が経過し、先に視線を逸らしたのはフェンリルだった。

鼻息を一つ荒々しく噴出し、敵にその視線を向ける。

怯えたように一歩後退した獣と人を鬱陶しげに睨むと、ゆっくりとその身に力を籠め始めた。

『良いだろう。確かにそれは私の落ち度。故に帳尻は我自身が合わせるとしよう』
「ふむ。誇り高い事で結構。私はコスモプロセスに回る」

魔神は、そう言い残して姿を消した。

その空間を埋めるように、光の尾を引きながら降下してきた新たなテレサの一群が護衛部隊と設置部隊に加わっていく。

だが、その数百体よりも、目の前の一匹のほうが危険と言う事を、視線の先の者達全てが理解していた。

「…何て厄介な置き土産を」

余裕をかき集め、メドーサが掠れた声を紡ぐ。

その額には大量の汗が、隠す事無く流れ出している。

他の者は皆、それ以上に焦っていた。

敵戦力の純増。

計り知れない脅威の出現。

そして、このまま行けるといふ希望をあつさりひっくり返された絶望感。

士気などとつくに吹っ飛んでいた。

潰走しないのが不思議なほど、その偉容に飲み込まれかけていた。

『所詮は世界が終わるまでの暇潰し。精々足掻け、弱者』

轟然と言い放った魔獣が一步を踏み出し、その顎を開いたその時。

「——ちよおつと待ったーっ！」

「その喧嘩、拙者達が買うでござるっ!!」

意識の全てをフェンリルに囚われていた者達の間を擦り抜け、二人の男達が立ち上がる。

白装束に身を包んだ、時代に逆行したような服装の二人は、腰から刀を引き抜きその切っ先をフェンリルに突きつけた。

怯えた様子も無く、焼けになった風でもなく、ただ覚悟を決めたその二人は、雄々しく吼えて構えを取る。

「人狼族里長代理（仮）っ！ 犬飼ボチ、見参でござるっ!!」

「人狼族里長代理補佐（仮）っ！ 犬塚——」

「待つでござる犬塚あつ！ 貴様何時の間にそんな肩書き作つたでござるかっ！」

「そーゆーお前こそあれだけ嫌がつてたくせに、なんだ『かっこ仮かっこ閉じ』つて往生

際の悪いっ!!」

そしていきなり喧嘩した。

何となく呆気にと取られた空気が漂う中、突然二人が炎に包まれる。

七転八倒地面を転がり、燃え盛る火を消して悶える彼らに冷たい声が掛かった。

「…あんたらねえ。もうちよつと真面目にやんなさいよ」

「そうでござる。敵討ちの機会だというのに、何をふざけているでござるかっ!」

指先に灯した炎を吹き消し、冷たい視線でタマモが睨む。

横に並んだシロが、尻尾を逆立て思わず正座した二人を叱りつけた。

「いや、その、な?」

「こやつが補佐などと要らん事を言い出すから」

「おお? 全部俺のせいにするのか?」

「ああん? 何か間違った事言ったでござるか?」

ごりごりと正座したまま互いの額を擦り付けあう二人に、もう一度炎が投げつけられた。

再び七転八倒消火作業にあたる二人を余所に、少女達が後ろを振り向く。

「ま、そー言う訳で」

「人狼族+おまけ、助太刀仕る」

「誰がおまけよ味噌つかす」

「ほー、雌狐の分際で口だけは良くまわるでござるな〜」

沈黙。

痛いほど静かになった周囲の空気を全く無視して、今度は少女が二人、額をゴリゴリ擦り付けあい睨み合う。

「いきなり里の恥部が露になっておる…!」

「ま、まあ今更隠してもどーにかなるもんでもないですしねー」

「…諦めが肝心だ」

「いつその事斬るか?!」

ぞろぞろと、呆気にとられた集団の向こうから、同じく白装束の四人が歩み出た。

どこか気不味そうにしているのは、目の前の四人の醜態が原因である事に間違いは無い。
い。

一番最初に行動したのはフェンリル。

無言のまま、怒気を撒き散らし爪を振るう。

生まれた衝撃は、斬撃と化し大地を抉り、シロ達の居た場所を砂塵に変えた。

だが、後方の四人は刀を引き抜きその斬撃に己の武器を叩きつけ、無力な風へと捻じ伏せる。

「…ぺっぺ。うー、汚れちゃったじゃない」

「話は後でござるな」

「つたく。いきなり燃やされるとは思わなかったぞ」

「自業自得でござろうよ」

そして、砂塵を掻き分け、シロ達が砂を被った姿を見せた。

誰一人として傷付いた様子が無く、そしてそれを当然の事と受け止めている。

それが、フエンリルの怒りを掻き立てる。

『…尻尾を巻いて逃げた狼どもか。この期に及んで何の心算だ?』

「耳が悪いんでござるか? 喧嘩を買いに来たと言ったでござろうが」

言葉で燃え上がった怒りが、大気を震わせ重圧を掛ける。

今にも激発しそうな瞳に睨まれたまま、だが白装束の六人も、普段通りの二人の少女

もその瞳に臆す事は無い。

たった一人で立ち向かい、そして目の前のたった一人で魔獣に打ち勝った老人が、その意思と遺志が、人狼達の中にある。

故に彼らは恐れない。

だから彼女らは怯まない。

ここで尻尾を丸めては、ここから先へと進めない。

「貴様の相手は拙者達。里が消えても我らは消えぬ。長老が残した物は、我らが確かに受け継いだ」

「あんたに後悔をさせてあげる。それでも、結構気に入つたのよね、あそこもあの人も」

「長老殿の仇、此処で討たせてもらうでござる」

「そーゆーこつた。——尻尾丸めて逃げないでもいいのか？」

『……良い覚悟だ』

フェンリルが、大きく身を撓めた。

怒りでその身を満たした魔獣が、二千を超える銃口の列を背後に殺意を滾らせる。

靈波刀が、刀が構えられ、狐火が灯る。

漸く一時の恐慌から脱した獣と人が、引けない気持ちを抱く。

「一番槍、犬飼ポチ、参るっ!!」

その声を切つ先に、怒濤が周囲を満たした。

フェンリルが大きく顎を開き、咆哮する為の呼気に入り。

その直後、魔獣の真上に大気を引き裂き何かが落ちた。

「…あれ?」

気の抜けたポチの声が、状況を把握しきれず困惑した空間に響き、それを打ち消すようにソニックブームが周囲を薙ぎ払い、敵味方関係無く猛威を振るった。

凶悪な衝撃と轟音が全ての者達の聴覚を揺さぶり、今当に踏み出そうとしていた一歩がたたらを踏んで止まり、揃ってスツ転んだ。

頭を振りながら身を起こしたシロの目に、巨大な火柱が写り込む。

それは間違い無くフェンリルが居た場所から吹き上がっており、だが何故そうなったのかは全くの不明。

しかし、その答えは向こうから、靴底から炎を引きながらやって来た。

「——不意打ち・成功・しました」

固い声と、無表情のまま、マリアはシロの隣に着地する。

超々高度からの重力加速とブースターを併用しての落^{パワー・ダイヴ}下突撃。

たまたま真下に明らかに敵っぽいのが居たので突っ込んで見ただけのもの、どうやらちよつと大混乱を引き起こしてしまったようである。

「…ソーリー・皆さん」

「そそそソーリーじゃないでござるよおおおっ?!」

「台無しじゃないっ! 台無しじゃないっ!! 何よ何よ良いトコ取りつて反則よおっ!!」

涙目で掴みかかってくる少女二人の額を押さえ、マリアは困ったように眉尻を下げた。

アルファから借り受けたパイルバンカーは今の一撃で逝ってしまったし、急減速の際に切り離れた燃料の増装も纏めて吹っ飛んだ。

結構勿体無いと少し思っていたのだが、少女達の反応を見て、納得の行ったマリアは、柔らかく微笑み二人の頭を掴んで火柱の方向に向けた。

「安心・してください」

轟々と立ち上がる煙と炎の中、片方の耳を失い、壊れたパイルバンカーの一部と思しき細長いパーツを啜えたフェンリルが、これ以上ない程強い怒りに満ちた目で睨んでいた。

硬直する二人を余所に、マリアはほっとしたように言葉を続けたのだった。

「——まだまだ・元氣・一杯のようですから」

「いやもういつそ仕留めてくれた方が良かったかもーっ?！」

「心底思ってるだけにマリア殿性質が悪いでござるーっ?!」

少女二人の悲鳴を余所に、フエンリルは大きく咆哮した。

第拾壱話 『だけど貴方に届かない』

「ガルッ！」

「クソっ、ちよこまかと鬱陶しいっ!!」

深夜のビル街。

その間隙を駆け巡る、幾つかの影。

一方は女性型の機械人形であり、今はアシユタロスの尖兵であるテレサシリーズが数体。

もう一方は、たった一つの影。

人でなく、獣の姿を取る、誰にも知られず戦う者。

陰念とテレサ達は、僅かな街灯の灯りと己の感覚を頼りに夜を走っていた。

銃弾がアスファルトを削り、爆風がガラスの破片を舞い散らす。

生き残った街の灯りを照り返す欠片が落ちる間にも交錯は再び繰り返され、時折その間を埋めるような狼の唸り声と風を切る音、そして硬質な何かを叩く音が断続的に響いていた。

月に吼える 第三部

「何処に行ったっ?!」

「センサーに反応っ! ——上?!」

振り仰いだその視界に、ビルの外壁を削りながら駆け下りる狼の姿が写り込む。

逃げるか迎撃するか、僅かな逡巡の後に突き出された腕に光る銃口は、その内から弾丸を吐き出す事無く蹴り飛ばされた。

真上に向けた腕を落下速度に乗り切った前足の一振りで背中側に振られ、仰け反ったテレサの咽元に狼——“陰念”の顎が大きく開かれ噛みかかる。

だが、周囲のテレサ達がそれを許さない。

発砲された弾丸は、体勢を崩したテレサの装甲を僅かに削りつつ背後のビルを穿って

いく。

蹴り足一つでテレサの胴体を蹴り飛ばし、跳躍した陰念は慌てて弾丸を回避しながら再びビルの影へと駆け込んでいった。

だが、彼の疲労と引き換えの攻勢にも関らず、与えた被害は極小以下。

「ちよつとっ！ 表面に傷付いちやっただじやないっ！」

「うっさいわねっ！ その程度がどーしたつてのよっ！」

「アイツに噛まれるより被害が大きいでしょっ?！」

そう、いかに人狼と言えども今のままでは少々厄介な獣に過ぎない。

幾度噛み付こうとも、何度爪に掛けようとも、元がタンパク質とカルシウムに過ぎない脆弱な武器ではテレサ達の複合装甲を貫くには足りないのだ。

軽すぎる体躯と不足する臂力に臍を噛みつつ、マンションのベランダに身を潜めて苛立たしげに眼下を睨む。

掠り傷だらけのテレサ達は、円陣を組んで周囲を警戒しながら、互いに文句を言い合っている。

その動きに遅滞は全く見られず、陰念の労力が全くもって報われていないと言う事実だけがはつきりと示されていた。

高所からの視線を向こうに向ければ、そこに在るのは一棟のビル。

煌々と光が窓から溢れ、時折地下からトラックがけたたましく出入りするそれはオカルトGメンのオフィスである。

数体のテレサ達は、戦闘開始直後に其処から発信される大量の電波を検知し、隠密行動を取りながら此処まで浸透してきた遊撃隊であった。

護衛部隊から勝手に離れ、戦果をあげれば問題無いだろうと言う考えで統一された命令違反者の集団をそう言うのならば、だが。

しかし、弾丸や霊符、様々な武装が蓄えられたそこを潰されれば、人類陣営はその補給を断たれ一気に窮地に陥る事は確実。

それをたつた一人で押し留めたのは、ポチ達と共にここまで駆けつけ、そして敵討ちに逸る彼らの中で比較的激昂していなかった陰念が、僅かな匂いの残滓を見つける事が出来たが故である。

「ハッ、ハッ、ハ——」

しかし、分厚い装甲と遠距離攻撃能力を持った彼女達に対し、高速機動と爪牙の二つしか武器を持たない陰念は、八方塞りに陥っていた。

生粋の人狼族であるならば、霊波刀を使つてもう少しマシな戦いが出来たのかもしれない。

だが、その魂は人であった頃の残滓を多く残していて、霊波刀と言う霊能を持ってい

なかつた彼はその使い方を知らない。

だが、引かない。

此処で引くくらいなら、こんな所まで来ていない。

それなりに気に入っていったあの場所を、あの生き方に横槍を入れた者達に、そしてフェンリルとなつて暴れた陰念をあつけらかんと受け入れた能気な里の人狼達に、僅かなりとも恩を感じていた。

柄ではない、とは思つていても、誰にも言わない彼の本音。

苦笑いじみた溜め息を零し、漸く落ち着いた呼吸を潜めて眼下を窺う。

其処には、未だにあたりをきよろきよろと警戒したままのテレサ達が――

「――見いーつけた」

ごり、と首の後ろが音を立てた。

首の後ろが万力のような力で締め上げられる。

ゆっくりと持ち上げられた視界に、先程まで周囲を警戒していたはずのテレサ達が同じ顔で同じように嘲笑を浮かべているのが写り込んだ。

反射的に暴れ出した四足が壁を叩き、ガラスを蹴破り、空調の室外機を叩き落す。

それでも僅かに与えた反動は、鋼の腕に至極あっさりと思ひ伏せられた。

周囲のビルやマンションのペランダや屋上で、何体かのテレサ達が勝ち誇つた表情で

笑っている。

畏、と気付いたのは、細い指がゆっくりと咽に回った瞬間だった。

元々匂いの少ない彼女達、そして疲労の溜まった陰念。

始めから近くに潜んでいたのか、それとも息を整える間に回りこまれたのか。

「ガッ、グッ……」

「少々お痛が過ぎたわね」

視界の外、掴んだ腕のあたりで硬質な音が響く。

せり出した銃口は冷たく光り、外しようも無い距離で陰念の後頭部に狙いを定めている。

必死にもがいてもその拘束は小揺るぎもせず、爪牙も届く場所に無い。

カチャリ、と安全装置の外れる音が聞こえた。

「これで、邪魔者も無くなった……」

心に押し寄せる絶望に抗いながら、それでも陰念は力の限り身を振る。

たった一人で戦い、柄にも無い事を思い、その結末がこれだと認めるわけにはいかない。

そんな思いを意にも介さず、暗い笑みを浮かべたテレサは撃鉄を上げ――。

「そりゃ困るな。そんなナリでも同門だ」

その背後から突き出された腕に銃口を捻じ切られ、強烈な衝撃を胴体部に真横から受けてマンシヨンの一室の中へと吹き飛んでいった。

「——ガハツ、ゲハツツ！」

「おいおいなーにやってんだよ陰念。白龍道場の看板に泥を塗ってんじやねーぞ?」
忌々しくもほんの少し懐かしささえ覚える、聞き覚えのある声が耳を擽る。

解放された気管で酸素を貪り、霞んだ目を声の主に向け、抗議の意思を籠めた視線を向けた。

まあ、全く意に介されなかつた訳だが。

硬質な鎧とも、悪役のような格好とも言える魔装術に身を包み、陰念を同門と呼ぶ若い男。

小柄なその身にこと近接戦闘能力においてはトップクラスの力をもつGS——伊達雪之丞が、頭を掻きながら子供のような笑顔を浮かべて立っていた。

「いやしかしアレだな。本当に犬になってやがんだな——」

「ガウツ!」

興味津々と言ったように顎に手をあてながらしげしげと此方を見回す元同門に、思わず抗議の声を上げる。

助かったと言う気持ちと共に、だが腑に落ちない事もある。

「…はっはーん? 何で助けやがったとか考えてやがんな?」

にたにたと露出した目で笑いながらあつさり凶星を突いて来た雪之丞は、だがしかし確かに香港で魔族として敵対した筈の男。

頭の中は強い奴と戦う事だけに閉められていると言つても過言ではないが、それを忘れるほど鳥頭でも無い、筈。

そんな事を考えていたら、頭上からごつつい拳骨が振り下ろされた。

「つたく。ドーしてうちの弟弟子どもはこうも手が掛かるのかしら」

「お、もう終わったのか?」

「当然よ。油断してたから不意打ちで纏めて潰してきたわ」

何時の間にか、陰念の背後に立っていた勘九郎は手を軽くはたきながらそう告げた。

雪之丞よりも洗練された魔装術に身を包み、兄弟子である彼は蹲つて頭を抱えている陰念を見下ろし溜め息一つ。

「…あんたの事は横島君から聞いてるわよ。人狼の里で再教育中だし、一応それなりに少しは多分改心したと思えない事も無いから拳骨一発で許してやってくれって、ね」

あの色呆け半人狼は後で絶対に嘔んでやる、と決意を固めつつ身を起こす。

呑気に雪之丞と話していた間にも、テレサ達をあつさり不意打ちとは言え片付けた勘九郎に半ば呆れめいた感情を抱きつつ、とりあえず足を動かし雪之丞の隣に。

「…ああ、間違い無く陰念だな」

「ドー言う意味かしら?」

「お前が後ろに立ってちゃ安心できないだらうが」

「あらやだ。流石にそつちの趣味は——うふ」

二人揃つて盛大に引いた。

ベランダから落ちそうなほど距離を取つた二人に対し勘九郎は冗談よ、と告げてくるが、魂の底までこびり付いた恐怖は中々取れる物でもなく、その心の距離と共に広がるばかり。

「ま、目付きの悪さといいその態度といい、間違ひ無くあんたもあたしの弟子よ」

「……あいつにだきやあ言われたくねーよなあ」

「……がう」

お前にも言われたくは無いだろうけどな、と言う意味を籠めた言葉が何処まで通じたのか、結局誰にも分からなかつたけれど。

それでも、もう失つたと思つていた繋がりが、何時の間にか傍らにあつた事が、小さな笑みを浮かばせた。

瞬間、打ち合わせたわけでもなく全員がその場を飛び退いた。

瞬きの間もおかずに先程まで居たマンシヨンの外壁が砕け散る。

穴だらけになつた其処から、重々しい足音とガラスを踏み砕く音を従えて、脇腹に全力の拳を叩き込まれた筈のテレサが僅かによるめきながら出現した。

「……おいおい、一応手加減無しでぶち込んだ筈なんだけどな？」

第拾壹話 『だけど貴方に届かない』

「オラオラお前ら素人さんに負けんじゃねえぞっ！」

銃声と爆音の間を突き抜け、後方から響いたのは勇ましい怒声だった。

何事かと振り向いた人々の目に、迷彩服を着込んだ大所帯が駆け込んでくるのが写り込む。

「あー、そちらが西条さんで？」

「あ、ああ。ICPO超常犯罪課、西条ですが…」

戸惑った西条の目の前で少々崩れた敬礼をした大柄な男性は、周囲の状況に似つかわ

しくないほどのふてぶてしい笑みを浮かべた。

「本来ならば近隣の部隊総出で、と言いたい所ですが、手隙の部隊を連れてまいりましたっ！ 生憎こちらには対霊作戦のノウハウがありませんので、現時点を持ってそちらの指揮下に入るよう命令を受けてまいりました！」

「……りよ、了解しました」

やや呆けたままの西条にもう一度笑顔を見せ、男性は銃を構えて前線へと駆けて行く。

は、と意識を取り戻し、男性が駆けて行った方を見た西条の目には、もうその背中には写らない。

しかし、此方の陣営から放たれる火線の量が倍増し、前進の速度が増したのか周囲を包み込んでいた爆音が僅かに小さくなっている事だけは事実である。

土埃に汚れた頬を解れたスーツの袖で拭い、手に持った拳銃に新しい弾装を叩き込む。

そして一步を踏み出した西条の耳に、僅かにざわめく周囲の空気が届いた。

もどかしいほどにゆっくりと前進を続ける人類陣営の中に、何人か空を見上げて呆然としている者が居た。

訝しげにその視線を追った西条の目に、その原因が見えた。

天蓋の天頂部に開いた傷口のような裂け目、そこからはみ出したナニカが割れ、小さな物体を次々に吐き出ししている。

それは戦場となつてゐるクレーターに満遍なく降り注ぎ、しかし何時尽きるとも判らぬほどに大量に撒き散らされていた。

「……？」

その内の一個が、丁度西条の頭上に来たその瞬間、彼が上を見上げていたのは幸運以外の何物でもなかったのだろう。

それは、とてもシンブルな外観を持つていた。

一言で言うならば、埴輪。

「なんだーっ?!」

『ポー』

間拔けな声を上げながら、それは飛び退いた西条の眼前にめり込んだ。

見た目からはどう見ても耐久性皆無にしか見えないうそれは、飛び降り自殺としか思えないほど高速で着地しながらも、奇跡以外に言いようが無いほどに原形を保つたままむくりと起き上がる。

その適当に開けたとしか思えない、目じやないかなー、と感じる場所が西条を向いた。彼我の距離は3Mほど。

睨み合う埴輪と成人男性。

シニールな空気が数秒ほど続き、やがてその埴輪は、

『ポッポ』

と、やはり気の抜けるような声を出しながら、何処へとも無く去って行った。

「…な、何だったんだ？」

疑問には直ぐに答えが来た。

「——西条君っ！」

「唐巢神父?! どうしたんで——」

「いいからあそこを見たまえっ!!」

駆け寄ってきた常に温厚な神父の慌て振りに嫌な予感を覚えながらも、押し付けられるようにして手渡された双眼鏡を覗き込む。

指差されたのは正面、主と人間達によつて塞がれた方ではなく、側面——既に何も無くなつた筈の場所。

双眼鏡の狭い視界に写るのは先程西条の目の前から去って行った埴輪が大量に蠢く、出来の悪いカートウン。

しかし、その様相の中に、冷や汗の流れるような要素があつた。

此処まで、人類陣営は空からの爆撃で、地上からの銃撃で、或いは始めの主達の猛攻

で、かなりの数のテレサ達に大なり小なりの破損を与えていた。

そして、中には当たり所が悪かったのかそれとも何か他に原因があったのか、完全に機能を停止したと思いきテレサ達が、少なからず居たのだ。

埴輪達は、そんな彼女達の周囲を取り巻き、ごそごそと動き回っていた。

「まさか——」

「冗談じゃないワケっ！ 正面の負担が大きくなりすぎだわっ！」

大声で不満を述べながら、エミが防御用の霊符を大量に抱えて横を通り過ぎていく。時間を置くごとに種々様々なGS達が集まってきていた。

彼らは連携しながら、主達の前に霊具や霊能、霊符で結界を構築し、防御を固めていた。

その結界に発生する解れが、先程までより大きくなっている。

悪寒が膨れ上がり、切迫した気分が緊張となつて咽の奥に絡みつき、どうしようもない不快感を感じさせる。

エミの後を追いかけるように、両手に抱えきれないほど大量の霊符と霊具を持って走る大柄な青年を見つけて、西条は大声で呼びかけた。

「タイガー君、一体何が…?!」

「わ、ワツシも良く分からんですがノー。埴輪がテレサに弾を補給してるとか修理し

てるとか…!？」

「…その所為で火力が増しているのか」

補給の円滑化と修理・整備。

埴輪達の役割は、それだけであった。

無数にばら撒かれた埴輪達は銃弾に対する装甲は無く、ましてやまともな攻撃力も見られていない。

しかし、戦線を離脱したテレサ達が次々に復帰し、途切れる事無く放たれる弾幕の圧力が増している。

こちらにも次々とGS達や他の戦える者達が集結しつつあるとは言え、消耗戦では異様に固い上に修理可能なテレサ達では相手が悪すぎる。

その上、魔神は未だ一度姿を現しただけで、参加してすらいないのだ。

「…は、はは。振り出しに戻る、かな?」

「西条君!」

半ばヤケクソ気味に呟いた西条の耳朵を唐巢神父の叱咤が貫く。

常に無い強い口調に振り向けば、其処には唐巢神父と小笠原エミの、力強い目があった。

「…あんたがこの場のリーダーで、しかも負けたら世界が終わっちゃうかもしれない戦

いで、弱気になるのも分かるワケ」

「それでも、君がリーダーだ。誰もが、君を見ている」

周囲を見回せば、オカルトGメンの隊員達だけでなく、駆けつけてくれたGS達や自衛隊が、戦うと決めた者達が皆、彼を見ていた。

責める視線でなく、頼る視線でなく、ただ、任せろ、と。

この程度で負けるものか、と。

その向こうには未だ抗う人々が居る。

この後ろには護るべき人々が居る。

そして、この場所は、そんな人々が踏みしめて来た場所だ。

意思と武器とで切り開き、傷付きながらも進んで辿り付いた場所だ。

貴方一人ではやらせない。だから少しは信じて見せろと笑顔で告げる。

西条は唇を噛み締める。

悪い要素も不確定要素も、限界も何もかもがわからぬままで。だけど、それでも行けと。前に進めと命じろと言うのか。

だったら、此処は引けない場所だ。

「——総員っ!!」

『応っ!!』

「損害を覚悟っ!!!」

『応っ!!!』

「相手が回復する前に埴輪を叩き潰しながら、中心部を討つ！」

行こうと決めた。

「前進ーっ!!!」

だったら前へ。

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ
!!!!!!』
意思と力で貫くために。

薄緑色の閃光が数条、白銀の体毛を削って消えていく。

間を置かずに放たれた銀の弾丸がその額に迫り、だが僅かに身を屈ませた獣の頭上を虚しく焼いた。

撓んだ身体がバネが弾けるように解放され、緩やかと思えるほどに宙を舞う。

しかし、踏み降ろされた大地には巨大な爪跡が描かれ、抉り取られた砂塵が周囲に高く跳ね上げられた。

「はっ、はっ、は、あああああっ!!」

呼吸を整える暇も有らばこそ、左右から飛び掛る同胞に合わせて低く飛ぶ。

地を這うような跳躍は、巨狼の眼前で突き刺した足を軸に直角へと方向を変えた。

直後、その後方から巨大な火炎の波が獣を襲う。

『——オンッ!』

咆哮一声。

吹き払われた。

「でたらめっ?!」

少女の悲鳴が木霊する中、左右から刀を振り上げた人狼達が尻尾と頭の一振りで弾き飛ばされる。

何とか体勢を立て直し、地面に着地した瞬間、その身体を影が覆った。

見上げれば、巨大な顎がその内部を晒しながら落下してくるその最中。

真横に飛ぶも間に合わない。腕の一本を覚悟した所に。

『グガッ?!』

巨大な顎の付け根に着弾した弾丸が僅かな、紙一重の余裕を作り出した。

腕一本の変わりに、代償として刀が噛み砕かれはしたものの五体満足である事に安堵を覚えつつ、すかさず霊波刀を展開しながら距離を取る。

「…参ったでござるな」

「満月で能力全開だからとは言え、長老もよくあんなものの片足取れたもんだ」

肩を並べて霊波刀を構える二人の姿は、既に人とは言えない姿であった。

狼が人に近い姿を取ったとしか言いようが無いそれは、人狼としての戦闘形態。

満月の夜に発揮されるその本領が完全に解放されている事を示す姿である。

それが、6人。

そして、その周囲を囲むように未だ少女の域を出ていない外見の人狼と狐が二人。

更に後方には、巨大な長銃を構えた機械の女性が一人。

生半な化生ならば、数瞬も持たずに存在を断たれるだけの戦力であった。

「銀の・銃弾も・それほど・効果的では・無いようです。浄化銀式パイルバンカー本体の・損失を・覚悟の上での・一撃で仕留められなかったのが・痛いですが」

「……まあ、拙者も流石にあのタイミングで避けるとは思わなかったでござるよ、マリア殿」

「それで無事なあんたが一番謎だけどね」

軽口を叩きあいながらも視線は前へ。

逸らした瞬間、眼前の獣は襲い来る。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

「来るぞっ!」

届く筈の無い距離からの、爪の一振り。

まるで空間が切り裂かれたような閃光が走り、次の瞬間には散開した人狼達の足元を

その閃光が抉り穿つ。

その傷痕、八条。

「八房の能力まで持つてるとは……正直もう勘弁でござるよ」

「弱音を吐くならな、シロ。帰っても良いんだぞー?」

「父上……そろそろ足に来てるんじゃないでござるか?」

メドーサによって回収された陰念の——フェンリルの体毛。

人と蛇、その二つを取り除かれ、残されたのは『神喰い』と『八房』。

満月の光を存分に浴び、本能のままに暴れ狂う巨獣はまさに天災と言っても過言では

ないほどの破壊を周囲に撒き散らす。

故に、今此処に居られるのは、その一撃を避け、傷を負ったとしても僅かな間を置けば回復する事の出来る人狼達と、機動性と反応では劣る物の装甲と火力、戦闘経験では彼らに勝るマリアのみ。

「こうなりや根比べでござるっ!!」

「あーもーっ! これだから理不尽な敵って嫌っ!」

遠くに錯綜する火線を見ながら、獣の咆哮轟く戦場は静まる事無く続いていた。

そして――。

「…やっぱり邪魔するわよね」

「…当たり前だろ」

眼下に天蓋と巨大兵鬼。

空には星と満月。目の前には、

「一応聞いてみるけど、引く気はある？」

「分かかって聞いてるなら、答える必要も無いね」

ホタルと蜂の姉妹。

耳元を轟々と音を立てて夜風が過ぎる。

睨み合いは一瞬。

互いに引けぬと分かかっていても、その言葉が無ければこれから先が始まらない。

ぎり、と拳が絞られ、煌、と両手に光が走る。

加速は同時、背後に爆音を残しながら、最初の一撃を打ち込み、互いの頬を掠めて鼓膜を揺らす。

槍のような膝が跳ね上がり、振り下ろした肘とぶつかり大気を震わせる。

同時に頭を後ろに引き、弾かれたように前へと振り出した。

骨を伝って鼓膜を揺らす振動と強烈な衝撃が脳裏を焼き、視界が思わず溢れた涙で薄く滲む。

仰け反りながらも苦し紛れに突き出した拳が、相手の拳に正面から衝突して二人の身体を後ろへと追いやる。

距離が離れたその瞬間、その隙間を埋めるように光条が片方から放たれた。

身を屈ませ、高度を下げてやり過ぎたもう一方がお返しとばかりに打ち返す。

掌に魔力を生み出す。

それに真上から叩きつけた。

光条が真下の天蓋にあたって消滅するのにも気をやる暇も無く追撃の一手が飛んで来る。

一撃。一蹴。二閃。

左手で弾いた。

右足で出先を潰した。

左頬を掠めた。

右肩を少し焼かれた。

——相手の動きが僅かに鈍った。

反撃に繰り出した拳は、これ以上ないタイミングで腹部に着弾。身体をくの字に折り曲げて、相手は上に吹き飛んでいく。

ひたすらに不快感と苦々しさだけを与える拳の感触に歯を食いしばり、それでも追撃

の為に空を蹴る。

東京の空に、花火の如く光が踊る。

『ポッポ』

「ソーリー。こちら・ですね」

『ポッ』

その頃、巨大兵鬼の頭部に開いた入り口で。

数体の埴輪兵が、老人と少女3人の手に縄をかけて飛んで来た『テレサ』に答えて牢屋の場所へと案内していた。

その姿が完全に内部に潜り込み、暫くした所で。

『ポ、ポッポーツ?!』

カシャーーン、と何か陶器が割れたような音と、悲鳴のような奇妙な声が木霊した。

慌てて駆けつけた埴輪兵達が見た物は、割れ物注意と書かれたダンボールとその上に乗っかるトンカチ一つ。

暫し互いに顔を見合わせていた彼らであったが、やがて疑問符を浮かべつつも鳴り響くサイレンの音を聞いて慌てて出撃の為に走り去っていった。

その声が途絶え、静けさが通路を満たした頃、壁の一部がぺらりとめくれて隠れていた人影達を吐き出した。

壁から剥がれると同時に周囲と同化していた表面の模様を黒地に変えたマントを羽織りなおしつつ、ドクター・カオスは得意げに胸を張る。

隣に立っていたテレサが僅かに輝くと、溶けるようにその姿が空気に消え、中から小さな影を出現させた。

「——潜入・成功」

「ふっふっふ。常にデータは取つとるからのー。新装備で外見もIFFも偽装してしまえば、見た目も手抜き量の産型のローコストなんぞに見抜けはせんわ!」

「でも・可哀想・です…」

「…ソリー・埴輪・さん」

「…あー、暇が出来たら接着剤で修理しとくから、な？　な？」

「尊い・犠牲・でした——」

哀しげに俯く2人を急かし、その二人を優しく見守りながら綺麗に纏めた一人を促し、興味無さげに振舞いながらも視線をちらちらダンボールに向けていた一人の背中を押して、老人は通路を歩き出した。

そのマントの背中に、何処からかひらひらと迷い出た蝶を留まらせた事には気付かぬままで。

第拾弍話 『きつと貴方は知らないけれど』

月に吼える 第三部

巨狼の爪が繰り出す八連の斬撃が、避ける人狼の群抜けて焼けた土を抉り裂いた。

素早く左右にバラけて回避し、後方に控えたマリアが長銃を構えて牽制の一射。

斬撃が生み出した土埃に紛れて放たれた弾丸は、閃光弾の光が浮かばせる砂の粒子を突き破り、巨狼の眉間に着弾する。

僅かに体勢を崩したフェンリルに対し、時間差を付けながら、或いは全く同時に襲い掛かる獣人達。

だが、その牙は体毛を散らし、僅かに赤い液体を流させながらもそれ以上は続かない。

轟咆。

空間ごと振動させたそれは大地を割り、生み出された衝撃は体に纏わり付く獣人達を弾き飛ばす。

だが、距離が離れていた故にその光景を見ていたマリアは、僅かに空いた時間にいつも巨狼の傷が容易く閉じていく光景を眉を潜めて観察しつつ、己の身長を超える砲身を持った巨大な兵器のレバーを引いた。

重厚な音を立てて弾き出された弾層を巨狼に向かって蹴り飛ばし、新たな弾層を格納空間から引きずり出す。

叩き付けるように押し込み、コツキング、フェンリルの眼前に舞う弾層に筒先を向け、トリガーを引いた。

着弾。

弾層の中に残されていた数発の弾丸が炸裂し、その破片を撒き散らす。

鼓膜を揺さぶる大音を受け、更に数発を打ち込んだ。

「――効果・無し。緊急回避・実行」

斜め後ろへの跳躍とともにブースターを全開した直後、彼女が先程まで立っていた場所が、真上から降ってきた大質量の前足に踏み砕かれた。

空中で身を振り、着地のまま此方を見失った巨狼に銃身を向け、零距离からの接射。

『ガッ!!』

だが、それは当たる事は無く敵意に対して本能のままに繰り出された一撃に、長銃は抗する暇も与えられずに二つに斬り折られ吹き飛んだ。

「——っ！ エルボー・バズーカ！」

追撃に繰り出された爪に向かつて突き出された腕が自ら半ばから折れる。

現われたのは虚ろな丸い空隙と、その奥に身を潜める鋼の砲弾。

白煙を噴出しながら発射されたそれは、狙いそのままに爪に切り裂かれ、爆発を起こして衝撃を撒き散らす。

その一瞬の隙間に稼いだ距離は、凶暴な悪意が僅かにコート裾を掠めるのみに被害を留める。

瞬間、飛び上がったマリアの真後ろから足元を掠めて巨大な炎の塊が巨狼の顔面を飲み込んだ。

鼻先に熱量を浴びせられたフェンリルは、顔を左右に振りたてそれを散らし、だが爪にかからぬ距離まで引いたマリアを見つけ、苛立たしげに唸り声を上げる。

得意げな視線を向けてくる狐の少女の頭を微笑みながら撫で、照れ臭げにそつぽを向いたのを視界の隅に引つ掛けながら、再び格納空間に手をつ込むマリア。

其処から今度は8本の銃身を固めた見るからに物騒な兵器を引つ張り出したマリア

の耳カバーから、細いアンテナが一本伸びた。

「定時報告。こちら・マリア。只今・フェンリルと・戦闘継続中。一切の支障・無し」
振った反動で音を立てて元の位置に戻った腕で高速回転を始めた銃身の上に備わったグリップをホールドし、反動に備えて重心を落とす。

「――ノー・プロブレム」

閃光が豪速で敵を乱打した。

第拾弐話 『きつと貴方は知らないけれど』

「母から・定時連絡・入りました」

「なんと言っておる？」

「フェンリルと・交戦中。ですが・ノー・プロブレム・と」

「ほう」

通路の影から身を起こし、楽しげに呟いたカオスはニヤニヤとした笑みを浮かべつつ周囲を視線で探った。

視界には遙か先まで伸びる暗い通路と、静かに佇む4人の少女達。

その内の一人、シータの視線が跳ね上がり、何かを見つけたように背後を振り向く。言葉を出さずに指を3本立て、その手を通路の向こうからこちらに向けてすばやく振った。

カオス達はその行動の意味を聞き返す事も無く、すぐさま先ほどまで隠れていた通路の窪みに身を潜めると同時、カオスが纏っていたマントがはためきその姿を覆い隠す。

表面の模様が黒一色から渦巻くような動きを見せたかと思えば、次の瞬間には窪みの横に続いていく通路の表面と同化する。

息を潜め、静かに気配を殺す老人と少女たちの耳に、速いテンポの足音が聞え始めた頃、そのマントの表面と通路の区別は完全になくなっていった。

「——アシユ様の指示が出たのね？」

「ええ。0ナンバーの起動指令。魔体用のコンデンサーからエネルギー回しても構わないから準備が出来次第降ろせ、だって」

「…大丈夫なの？」

「こっつん、と軽い音を立てて足音が止まる。」

それがカオス達の潜む場所の目の前だったのは、カオスにとつての不幸であった。

センサーに引つかからないように、と呼吸を止め、限界まで反応を拾われるような要素を削り取っていた彼の顔は、そろそろ赤く染まり始めている。

心配そうに見上げる少女達の視線に構う間もなく、彼はひたすら我慢の二文字。

老体には堪える状況である。

「何がよ」

「そりゃあ神魔族の動きは土地神くらいいしかないけどさー。あれは切り札なんでしょ？」

「…ま、この時点で動きがないって事は、動けないって考えるのが普通じゃない」

真つ赤になった顔が、ふるふる震え始めている。

少女達もおろおろしたり外のテレサ達を力づくでどーにかする事を考え始めたりと、知らない間に足を止めた通路のテレサ達にもピンチが迫っていた。

そうしている間にもカオスの顔色はどんどん切羽詰り、我慢が限界の二文字に則られ始めている。

彼にも分かっている。

いかにも廉価品と言った感じの埴輪達ならともかく、薄いマント一枚越しに存在する彼女達を警報も出せない内に仕留めるのは、不可能だと。

警報を出されてしまえば不慣れな敵地、窮地に陥るのはカオス達。

だが、赤く染まり始めた視界とぎちぎちと痛む脳味噌が、酸素が欲しいと大声で。

そして、いよいよ我慢できなくなったカオスが、酸素を求めて大きく口を開き――。

だが、背後から伸びた二本の手で口と鼻を塞がれた。

驚愕に目を見開きながら振り向くカオス。

すまなさそうに微笑むデルタと目があった。

彼女の合図でアルファとシータが両手を押さえ、ベータが最低出力の結界で素早くマ

ントを固定する。

「私の知ったことじゃないわ。言われたままに動いてりやいーのよ」

カオスの脳裏にエマーゼンシーが鳴り響く。

視界が暗くなってきた。

そして何か上から光と共に階段が降りてきた！

「…それもそーね」

テレサ達の会話はそこで終わり、足音は再び軽いテンポを刻みながら、やがて通路の向こうへと消えていった。

暫し沈黙が通路に満ち、その壁に突然現れた裂け目から顔を出したシータがきよろきよろと辺りを見回し合図を出す。

途端、どきりと土気色の顔をしたカオスがマントに捕まるようにして倒れてくる。

それを慌てて両脇から受け止め、その首筋に手を当てたベータが酷く切羽詰まった表情で他の3人を見渡した。

答えたのはアルファ。

「ずい、と進み出て、その手にごつい機械を呼び出し、二股に分かれたその先端をカオスの胸の辺りに押し当てる。」

「目覚まし・装置。スイッチ・オン」

通路に青白い閃光と断末魔が木霊した。

数分後。

「……ほっ」

「良かった。目が・覚めた」

半分開いた口から煙を吐き出し、顔中真っ黒になったカオスが誇らしげに胸を張る少女の頭を呆けたように軽く撫で、周囲をきよるきよる見回した。

差し出されたハンカチで顔を拭い、よっこらしよ、と声を出しながらかくかく震える膝を押さえて立ち上がる。

「……はて？ 何があつたのかのお？」

「何もありませんでした。少々・お疲れなのでは？」

さらりと全く陰りの見られない笑顔で嘘を付くデルタ。

ひたすら首を傾げ、いきなり飛んだ記憶をがりがりと頭を掻きながら探るも、酸欠のせいにはたまたま電撃の副作用か、先程何が起こったのかは思い出せなかった。

「急ぎましょう。早く・目的を」

「お、おお！ そーじやったの！ 行くぞお前達！」

「イエス・ドクター・カオス」

答えたのはデルタだけ。

後の三人は気まずそうに視線を逸らしていたり。

意気揚揚と数歩歩き、カオスはそこで立ち止まって顎に手をあてる。

ふと、脳裏に浮かんだ疑問が口をついて出た。

「そー言えばの、マリアは大丈夫だと思うか？」

「ノー・プロブレム。母は・張り切っていました。オトウサンに・良い所を・見せる・と」

背中側から聞こえた言葉の意味を理解すると同時に、カオスの動きが一瞬止まり、直後僅かに早足で歩き出す。

ぼりぼりと頭を掻く様は、どこか気恥ずかしそうにも見えた。

「…照れてる？」

「照れてる」

ポニーテールとツインテールが小さく呟いた言葉に、前を行くカオスの歩みが更に加速。

まるで顔を見られることを拒否するようなその態度が、全てを物語っているとさえなくも無い。

「で、俺は何時になったら出られるんだよ？」

『さあな。ま、後少し待つとれ』

「さつきからそればっかじゃねーか！」

「——？」

色々不幸な勘違いで幸福な思いを味わったカオスは、それ程離れた所までは進んでいなかった。

が、その歩みは止まり、判断に困ると言った風に顎に手を当て考え込んでいる。

後から駆け寄り寄ってきた二人に、カオスの直ぐ後ろに付いていた二人は振り返り、困ったような視線を向けてきた。

訝しげにカオスの傍らに歩み寄り、その視線の先を辿ってみる。

十数メートルほど先に、左右に分かれた通路が静かに暗闇に沈んでいるが、特に変わった様子は無い。

「……ドクター・カオス？」

「ふむ」

掛けられた声に答えたと言う訳でもないだろうが、零れた声には何かを決めた色がある。

にやりと不敵に笑って、老人は迷う事無く左の道へ。

「お前達、姫の魂の場所は把握しているな？」

「イエス・ドクター・カオス。詳細な位置は・不明ですが・前方に居る事は・間違い無いかと」

「直進できない以上左右も左も一緒にゃな。ならば興味をそそられる方向に行くとする

か

そう告げて、角を曲がった。

今度は、先程カオスが足を止めた理由が少女達にもはつきりと見えた。

真つ直ぐに伸びる通路の中ほど。

右に折れた通路の角を、小さな影がするりとその先に駆け去っていったのだ。

その視線は、確かにカオスと少女達を捕えていた。

しかし、周囲に警報が鳴り響く事も無く、埴輪兵やテレサ達が大量して集まってくる様子も無い。

最もセンサー系統が充実しているシータは、探査可能範囲内に居るのはその影だけと補足する。

また、その影も特に攻撃する様子も見せず、その行動は、まるで。

「…道案内かのお」

眩き、カオスは再び歩みを進める。

通路の角からひよこりと頭を出せば、それを確認したように通路の先で待っていた影が、再び曲がり角を曲がって姿を消した。

後に残されたのは、軽い小さな足音と、その後を付いて行く光る蝶の燐粉ぐらい。

二股に分かれた大きめの帽子を被ったその少女は、曲がり角の先からこちらを覗いて

手を動かす。

こちらへ来いと、手招きで。

導かれるままに進んでいけば、先程まで偶に出会っていた埴輪兵やテレサに会う事も無くスムーズに先へと足が行く。

時折、カオス達の前で蝶が舞い、彼らの歩みを何度か押し留める幕が在った物の、氣付けば小さな扉の前に立っていた。

周囲に人影も無く、その扉を開くスイッチと思しき所に、蝶が静かに羽根を開いたり閉じたりしながら止まっている。

暫しそれを観察した後、カオスは逡巡する事無くそのスイッチを押し込んだ。

音も無く扉が左右にスライドする。

——中の空間は思ったよりも広く、乱雑であつた。

薄ぼんやりと天井からの僅かな光で照らされた空間には——この兵鬼自体が作られたばかりなのだから当然ではあるのだが——埃が舞っている様子も無い。

ごちゃごちゃと中身も分からない箱が積み上げられ、その傍らには脈絡も無く銃弾がケースに詰まって放置されている。

かと思えば何かの部品らしいネジやケーブル、開封された後の箱、そして使い道の分からない電池のような物が散乱していた。

「倉庫、かの？」

独白に答えるように、その空間をサーチしていたシータが何かの反応を拾い上げた。

「ドクター・カオス。この奥に・魔力反応・検出！」

「…まあ今更どーこーせんじやろ。行くぞ」

一瞬少女達の間に入った緊張も何処吹く風。

カオスは飄々と箱の間に身体を滑り込ませる。

素早く周囲を固めるアルファ達を気にした様子も無く、老人はその身をあっさりとその空間の最奥まで潜り込ませ、そして微妙に眉を顰めた。

其処に居たのは、知らない顔が二つと知っているけど色々複雑な顔が一つ。

土偶と此処まで案内した少女と、薄紅い球の中に閉じ込められた、小さな人影。

「よ、爺さん久し振り」

「…なんでお前が此処に——あー、捕まっておったの、そー言えば」

心の奥はともかく心底どーでも良さげに答えたカオスを前に、座布団の上に置かれた小さな球体の中で忠夫は血管を浮かばせたのだった。

「どーぞでちゅ」

「お、こりやすまんの——ぶはっ?! 砂糖水っ?!」

「本場の和三盆と五億年物の氷結地獄の氷を溶かした砂糖水でちゅ。蜂蜜でも良かったんでちゅけど、あれは私のでちゅからルシオラちゃんの取って置きで我慢してください」

「後でルシオラに折檻されても知らんからな。うあ待て待て揺らすなお前らっ!」
「…えい」

ルシオラがこっそり隠していた物を使い切り、その結果何が起こるのかを把握して蒼褪めたパピリオの頬を掠め、紅い球が凄まじい勢いで飛んでいった。

ばいん、と何とも言えない音を立てて跳ね返り、そのまま転がってアルファの足元へ。

突然の凶行に目を回した忠夫の耳に、ジャキリと鋼が触れ合う音が響き渡った。

振り上げば、縮尺からすると己の頭と同じくらいの大きさの穴が、忠夫の眼前に薄い幕を一枚隔てて突き付けられている。

止める暇も有らばこそ。

狭い空間に、轟音と硝煙の匂いが広がった。

「——対結界弾・効果・ありません」

吐き出された葉莖の転がる音を余所に、銃弾がぶつかる前と何ら変わらない——中身はともかく——紅い球を拾い上げ、アルファはカオスに差し出した。

口の中の甘さが漸く引いたカオスはそれを受け取り、色んな方向から見てみたり取り出したルーペで覗き込んだりと興味深々のようにではある。

「…ヨコチマっ!? 生きてまちゆかつ!」

「パ、パピ…俺はもうダメだ…。ルシオラに、ルシオラに伝えてくれっ…!」

銃声に一時意識を飛ばされていたパピリオが、慌ててカオスの手から忠夫を奪い取る。

中身はぶびーと耳血を噴きつつ、胡乱な視線でパピリオに向かってふらふらと手を伸ばす。

少女は背後の老人が向けてくる未練たらたらの視線を無視し、その手に紅い幕越しに

触れた。

「何て、何て伝えれば良いんでちゆかつ?!」

「——嫁に來ないか、と」

最後の氣力を振り絞つて傳えた言葉は、微かであつても確かに少女の鼓膜を揺らし。

「…えー?」

しかし少女は不満そう。

「ヨコチマをお義兄ちゃんつて呼ぶくらいならポチつて呼びまぢゆ」

しつかり追撃した後、ぽい、と座布団の上に投げ捨てた。

「なんでじゃああああああつ! 何で俺じゃ駄目なんじゃああああ!」

「だつてヨコチマ微妙にへたれでちゆ」

何度も頷く老人一名。

視線を逸らす少女が三名。

どこか冷たい視線で見下ろす少女が一名。

その反応を見回して、パピリオはそれ見た事かと言わんばかりに、小憎らしく肩を竦めて鼻を鳴らす。

「ドチクシヨーっ! 小姑が、小姑が俺達の仲を羨んでやがるっ!」

「だつ、誰が小姑でちゆかつ!」

繰り出された爪先が、再び忠夫を宙にかち上げた。

そんな一幕を半眼で見ていた土具羅は、自分の頭から伸びたコードの具合を調整しつつ、溜め息混じりに呟いた。

『…で、納得したか？』

「する訳無いでちゅっ！」

「ドリブルは、ドリブルは止めてーっ！」

だだだだっつと地面の掌の間で忠夫を高速で往復させつつ叫んだパピリオに、土具羅はもう一度大きな溜め息をつくのだった。

「まあ戯言はこれくらいにして、じゃ」

「俺の生死を一言で片付けんな」

「馬鹿はだまつとれ。今はお前に構つとる暇がない」

「けつ、といじけて背を向けた忠夫を素気無く切り捨て土具羅に向かう。

壁に開けられた穴に覗く何本かの太いケーブルと、其処に取り付けられた細いコード。

そしてその先端を吸盤で己の額にくっつけている土具羅の姿は、多少付属物がついてはいるものの何処からどう見ても土偶である。

『久しいな、ドクター・カオス』

「ワシにお前のような知り合いは居らんよ」

訝しげに眉を潜めながらも、カオスは土具羅の言葉を一蹴した。

それもその筈、土具羅とカオスに直接の面識は、無い。

ああ、と膝を叩いた土具羅は、照れ臭げに突き出た口元を掻き、僅かに頭を下げた。

『すまん。お前さんはそうでもこっちは知っておるもんでな』

「…芦、か？」

『相変わらず話が早くて助かる。その直属の部下、土具羅魔具羅だ。こっちは当時あの方が何やらかすか心配でちよくちよく覗いていたもんでなあ』

そう言つて、土偶のような顔で器用に苦い表情を浮かべる土具羅に負けなくらいの
 泣面を作つたカオスは、呆れた様に肩を竦める。

「今回の首謀者の名前を聞けば分かるとも。あやつは隠すつもりがあつたのかのお？」

『…当時から結構思いつきで行動してた節がある。適当に考えただけだと思ふぞ』

そう言つて、ずず、と音を立てて湯飲みの中身を啜つた。

会話に置いてけぼりを食らつた少女達が忠夫の閉じ込められた球で遊んでいるのを
 横目に見つづ、カオスは腕を組みなおす。

静かに目を閉じ、暫し何かを考えるように沈思した後、ゆつくりとその瞳が開かれた。

「アレは、芦、か？」

『…知りたいのはこつちだが、創造主を疑う訳にもいかんでな』

「成る程」

ちらり、と視線が未だに土具羅と壁に埋め込まれたケーブルを繋ぐコードに走る。

「で、分かつたのかの？」

『推測は。だが証拠が無い。それを頼みたい。対価はお前の知りたがつてる情報だ』

「引き受けた」

迷う事無く承諾し、マントを翻し立ち上がる。

安堵の吐息を付く土具羅に、にやりと笑いかけながら、カオスは視線で対価を欲した。

すまん、と頭を下げた土具羅がコードを外しながら立ち上がり、先導するように先を行く。

『付いて来い。マリア姫の魂は、今はテレサタイプの内、ゼロナンバーと呼ばれる個体のうちに在る』

ん？ と疑問符を浮かべたカオスの足が止まる。

いきなり動きを止めたカオスを訝しげに振り返った土具羅は、しきりに首を捻るヨーロッパの魔王の姿を目にして同じように立ち止まった。

何度も何度も何かが咽の奥に引っかかって出て来ない、といった風情で気持ち悪そうにしているカオスではあったが、やがて諦めると頭を左右に振り、ふと浮かんだ疑問を問い掛けた。

「なんでまたそんな所に」

『…まあ、わしもあまり信用されてなかったつちゅー事だ。有り体に言えば、代理だよ、ワシの』

やろうと思えば土木工事から老人介護までこなせるだけのスペックを持ったマリアとテレサ。

しかしと言うかそれ故にと言うか、こと演算能力に於いては土具羅の方が格段に上である。

戦闘から家事までこなせる汎用型と、一点集中の特化型との差異とでも言えばいいのだろうか。

こと戦闘に主眼を置いた構築をされているテレサ達では、かの巨大な演算装置を処理するには必要とされるスペックに対して不足が大きすぎた。

それを補う事のできる土具羅は、結果から見てのとおり裏切り、その可能性さえも予測していたのだろう『アシユタロス』は、とどのつまり代役をしつかりと準備していたと言う事だった。

メタソウルと言う不安定な物でなく、しつかと完成された『人の魂』による安定制御と、人の魂では抗えぬ拘束術式。

それが、この兵鬼のデータバンクに残っていた。

「下衆いな」

『……』

「まあそーやってここでいろいろ探つてる内に、たまたまパピリオが俺を見つけて連れてきてくれたのさっ！」

「あれは拾ったつて言うんでちゅ」

何時の間にこちらに来ていたのか、忠夫とパピリオが会話に割り込んだ。

重く苦くなっていた空気が、意表を突かれた事と気楽な口調で僅かに軽くなる。

別に狙った訳でもあるまいが、ともあれ自分の頭が大分熱くなっていた事を自覚したカオスは、大きく息を吸って、ゆっくりと落ち着けるように吐き出した。

「ベスパちゃんのお部屋に蜂蜜探しに行ったのに、なんでこんなのが居るのかと思って近づいたのが不幸の始まりでちた」

「うむ。いきなり握り潰されそうになるとは思わなかった!」

「…いつそ樂觀だけでも吐き出しとけば良かったのお」

何故か胸を張って高笑いを上げる少女とその頭の上に置かれている青年を見下ろしつつ、カオスは思いつき溜め息を付いて見せた。

「ま、それは置いといて、だ」

と、馬鹿笑いをしていた忠夫の表情が一変する。

真剣になったと言うよりも、なんとと言うか——悪巧みをする小悪党の顔になった。

また碌でもない事を思いついたかと疑わしげに見てくるカオスと、きよとんと見上げてくるパピリオ、既にその話を聞いていたのかやれやれと肩を竦める土具羅、なんだと近付いてきたアルファ達に手招きし、誰が他に居る訳でもないのに座り込んで顔がかくつ付くほど至近距離で中腰になる。

「土具羅のおっさんが色々データを探してる所見てただけどさ…」

『おっさん言うな』

スルーされて。

「ごによごによごによごによ。」

語り終えて暫しの沈黙。

「——はあ？」

呆れたような声は、いや、心底呆れた声は、カオスの口から零れ出た。

「どうしよう？」

何故か自信満々に胸を張る忠夫に、呆れと戸惑いの入り混じった視線が収束する。

始めは、カオスも「お前は何を言っているんだ」といった視線で胡乱下に見つめていたが、やおらその瞳に何かに気付いたような色が宿った。

視線がアルファ達をなぞり、肩を竦める土具羅を通り、はてなマークを沢山出現させて首を捻っている。パピリオの頭の上に戻ってくる。

「…正気か？」

「や、真正面から当たろうって方が正気か？　っつー感じじゃん」

「そりやまあそうだが」

この巨大兵鬼の真下で行なわれている戦闘の様子は、マリアとその娘達を通じて彼の元へも届いている。

だが、正直な所勝ち目は薄い——と言うより、殆ど無いと言うのがカオスの出した結

論だった。

魔神に魔獣にヨーロッパの魔王が数百年の最盛期に作り上げた最高傑作の大量放出。そして、顔を出すどころかその以前の地点で完全に押さえ込まれた神魔族の陣営。

これに、いくら計算外の要素が組み合わさったとは言え、所詮人間を主力とする陣営ではジリ貧が良い所。

むしろこれだけの時間支えられていると言う事こそが、カオスをして感嘆させしむるものがあるくらいである。

それほど、絶望的なのだ。

「美神さんならなんか別の裏技思いつくだろうけど、だからって何もしなかったってばれたら殺されるだろうし」

そう言つて、何を思い出したのか身体を震わせた既に半殺しフラグは完璧に立っている事に気付いていない半人狼はともかくとして。

彼が出した案は、確かに上手く行けば全部をひっくり返せるだけの可能性を秘めていた。

だが。

「…無茶じゃろう。あやつがそれを放って置くとは思えん」
「ま、何とかなるって。美神さん達も下にいるんだろ？」

千里眼も持たない、正確な情報を知る訳ではない。

だが、その言葉は、何故か確信に満ちていて。

「…マリアに手伝ってもらえ。メタソウルの安定度も、無茶に対応できるだけの経験もあやつなら何とかなるじゃろう」

『良いのか?!』

溜め息が大きく響いた。

「良いもクソもなからう。確かにこのままでは先が見えとる。博打でしかないが、やらんよりはマシじゃ」

例えマリア姫の魂を取り戻したとて、帰るべき世界が無ければなんの意味もありはない。

彼女の魂を助け、そして、彼の望みをかなえるには、それが最低条件なのだから。

「しくじってもフォローはせんぞ？」

「上等っ！」

マントを翻し、眩きを残して歩き出したカオスの背を、無茶に挑む馬鹿の、何故だか楽しそうな声が叩いた。

久し振りに己が老人である事を思い出し、何とはなしに苦笑いを浮かべたカオスが一步を踏み出したその瞬間。

「——ドクター・カオスっ!!」

シータの悲鳴地味た声が、その耳朵を打った。

「どうしたっ?!」

「マリア姫の・魂が・移動していますっ!」

「っ!・何処へじゃっ!」

「下・です!」

その瞬間。カオスの脳裏に一つの会話が浮かび上がった。

『——アシユ様の指示が出たのね?』

『ええ。0ナンバーの起動指令。魔体用のコンデンサーからエネルギー回しても構わな
いから準備が出来次第降ろせ、だって』

表情を緊の一字に埋められながら、その額に大きな汗が一つ浮かぶ。

先程聞いた固有名詞が、何故この会話を思い出さなかったのかと奥歯を食いしばり、
僅かな間、慙愧の念に囚われた。

その背後で、他の3人に半眼で睨まれて冷や汗を垂らしながらあさつての方角を向い
ているアルファには気付かずに。

「——行くぞっ！ 最早一刻の余裕も無い！」

「よし、なんか分からんが急ぐんだパピリオっ！」

「人の頭の上に乗ってる分際で騒ぐなでちゅっ！」

そして、けたたましい足音に囲まれながら、本人さえも気付かぬワイルドカードは動き出す。

丁度その頃。

「わーっ！ こっち来るなーっ！」

大逆天号のブリッジは、テレサ達の悲鳴に包まれていた。

その目の前のスクリーンに映し出される巨大な火花の乱舞が、凄まじい速度で接近しているからだった。

祈るような言葉は聞こえる筈も無く、僅かな間を置いて巨大な振動がブリッジを揺らす。

体勢を崩してスツ転ぶテレサ達を余所に、姉妹喧嘩は丁度背中あたりに着弾したようである。

ふらふらと頭を押さえながら立ち上がったテレサの一体が、その場所を映し出すカメラを操作。

一瞬スクリーンがブラックアウト。

ノイズが走り、その場面が映し出された。

『大体姉さんはねっ！ いつも自分勝手なのよっ！ それになによアイツは！ 男見る目無いんじゃない?!』

『ベスパには言われたくないわね！ このファザコン！ ファザコン!! ファザコン!!!』

『なっ?! ——悪いっ!? それの何が悪いのよっ?!』

『…開き直ったわね』

『…そっちこそ』

「ごりごりと音を立てて互いの額が擦れあう。

やおら伸びた手が互いのほつぺたを摘んで引いた。

『くによー！ くによー！ くによひんひゅー！』

『にやにによー！ ひよつとひゅらいひよひよいひやらつてひひやるんひやないひやよー！』

すったもんだすったもんだ。

やがてゴロゴロと転がりながら、たまたま開いていたハッチの中に落ちて行つた。

ごつんとかかなり痛そうな音がしたが、画面の向こうからは未だに互いを罵り合う声が聞こえてくる。

何とも言えない空気がブリッジを満たし、やがて呆然とその映像を映し出す操作をしたテレサがかたかたと震えながら呟いた。

「…何て…低レベル…」

「…どうしようか」

「…あんた止めてきなさいよ」

「…さつきまでの見てたでしょ？ 無理に決まつてるじゃない」

「…見なかつた事にしよつか」

静かな空気が流れた。そのまま、何事も無かつたかのように、全員無言のまま元の場

所に戻ったのだった。

第拾参話 『それでも私は想うから』

人工幽霊一号の取り付いた鎧がガレージに続くドアを開け、無機質な蛍光灯の光が埋め尽くす空間に爪先を差し込んだ。

常ならばその車庫に置かれている美神の愛車の姿は無く、今その部屋の中には竜神王が一人で足を組んで座り込んでいるだけだ。

頭から二本の角を生やした男は、目の前の空間を睨みながら時折ゆつくりと呼吸を繰り返している。

ガシャガシャと金属の触れ合う煩い音を立てながら近付いてくる存在に気付かない訳でもないだろうが、視線を逸らす事無くひたすらにその一点に集中する彼の額からは時折大粒の汗が流れ落ちていた。

『——どうぞ？』

「すまんな、つつ」

傍らに置いた湯飲みに手を伸ばした男の目の前で、一瞬光が瞬いた。

慌てて逸れた意識を集中させ、両手を素早く複雑に動かし何事かを呟く。

その動きに吊られるように、彼の目の前に小さな裂け目が出現した。

男性の片手が入るか入らないか程度の小さな孔は、今となつては事務所と妙神山を繋ぐ唯一の手段である。

「ムンツ！」

気声を発した竜神王の両手が印を組み、その顎を伝つて一滴の汗が地面を叩く。ゆらゆらと不安定に揺れていた孔は、それで漸くその存在を再び安定させた。

暫しの間、ガレージに無言の緊張が漂い、更に数十秒が経つてから竜神王はゆつくりと安堵の多分に籠つた息を吐いた。

『…すいません。お邪魔をしたようですね』

「いや、正直助かった。いい加減咽も渴いておつたのでな」

そう言つて快活に笑い、人工幽霊一号の差し出した湯飲みをゆつくりと煽る。

まだ熱い筈のそれをそのまま飲み干し、だが視線は眼前の孔から逸らさぬまままで竜神王は気にするなどでも言うかのように大きく満足げな吐息を一つ。

「——美味しい」

全身鎧が醸し出す苦笑いの雰囲気でも伝わつたか、湯飲みを置いた竜神王はやりと笑つて湯飲みを返す。

と、その表情が僅かに曇つた。

「…天龍の様子はどうかかな？」

途端にそわそわと落ち着かなげに身体を揺さぶり始めた一応王様に、人工幽霊は殊更ゆつくりと返事を返す。

『今は客室のベッドでぐつすりとお眠っておられます。』

目に見えて安堵した男性の傍らから湯飲みを取り上げお盆に乗せつつ、全身鎧は車庫の壁、竜神王の視線の先に客室の映像を映し出した。

大きく映し出された薄暗い部屋のベッドに埋もれるようにして少女が一人、小さな寝息を立てている。

緩く閉ざされた口元から漏れる吐息は深く、何事も無かったように眠る少女を見ながら竜神王の口元は徐々にだらしなく解けていく。

『孔、孔つ、前ー!』

「:…んん? おおつ?! こりやいかん!!」

全神経を集中させた結果、当然の事ながら先程まで安定していた空間の裂け目は今にも消えそうな程に小さくなっていった。

あつという間に既にマッチ棒の先端ほどに小さくなったそれに向かって竜神王の裂帛の気合が炸裂する。

そのまま苦闘する事数分、漸く元の大きさを取り戻した孔の前では疲労困憊と言った感じに肩を上下させる竜神王と、緊張感から解放されて膝を崩れ折れさせた全身鎧と言

う滅多に見られないであろう光景があった。

「い、今のは危なかった……！」

『お願いですから集中してください……』

「いや、可愛い盛りの娘が寝ている所を見せているのに他に意識を割けと言うのは無理な話だ」

何故か胸を張って断言する竜神王の背中が、こんな時ばかり立派に見えた。相当に微妙な立派さであるが。

「しかし、神族も動きが鈍いな。妙神山からの連絡が途絶えたのだから調査員の一人や二人さっさと送ればいいものを」

『そもそも一人くらい向こうに残っていればこんな事にはならなかったのですけどね』
何となくジト目で見られているように感じて決まり悪げに尻を動かす竜神王を見ながら、人工幽霊はその瞬間の事を回想する。

あれは、今は客室のベッドで健やかな寝息を立てている少女が、初めてワルキューレが事務所を訪れた時に勝手に作っていた、そして少女が再び訪れた際に使ったゲートを開こうとした時だった。

月に吼える 第三部

竜神族の王女はゆっくりと息を吸い込み、その一点を睨みつける。

既に何度試しただろうか、彼女の言霊が紡がれ、しかしかつて其処に確かに在った筈のゲートはその姿をちらりとも見せはしなかった。

合言葉が間違っていたのか、それともゲートを隠す為の術式に何か間違いでもあったのか。

静かにそれを見守っていた人工幽霊の視界の中で、少女は息を荒らげながら膝を付く。

『…なんで』

悔しげに俯き、瞳に涙を湛え、しかし泣く事は堪えながら、少女は唇を噛み締める。

握りこまれた小さな掌は、既に何度も何度も同じ複雑な印を組み酷使した疲労からか、僅かな力しか残っていないかった。

『…なんでっ！』

問いに答えられる者など居なかつた。

たつた一人、自分にできる事を、と。

闘う力が無い故に、せめて闘える者を、と。孤独に、無力に、己の小ささに嘆きながら、大切な人の力になりたいと願いながら、しかしその望みは冷たい現実しか示さない。疲れ切り蹲つたまま動きを止めた少女に、人工幽霊は掛ける言葉を持たなかつた。

振り上げられた何度も手が硬いコンクリートの床を叩く。

冷たい床に、数滴の水分が染み込んだ。

『止めなさい』

『…離して』

皮膚が破け、血が流れても打ち付けることを止めなかつた少女の手を、何時の間にか現われた無骨な鎧の籠手がそつと握る。

少女の手首は籠手の一握りでも余るほどの細さしか持たなかつた。

『離しません。自分の体を傷付けて、何になりますか』

『……』

絶対に引かないと言う意思の籠められた言葉を感じたのか、少女はゆつくりと俯き、その手から力を抜いた。

軟膏を塗りつけ手早く包帯を巻いていく。

結構染みるであろう葉を使ったにもかかわらず、少女の視線はその手に向けられる事は無く——ただひたすらに目の前の空間に向いていた。

『諦めるつもりは、無いのでしよう』

『…当然』

『ならば、私が止めます』

少女の視線が跳ね上がり、同時に狭いガレージが嘖き上がった竜気に満たされた。

その奔流に全身を押されながら、しかし人工幽霊は一步も引かない。

睨み合いは数十秒も続いただろうか。

沈黙を破ったのは、人工幽霊だった。

『貴方は既に疲れきっています。いかに竜神族の王女とは言え、これ以上の消耗は命に
関る筈です』

『…駄目。犬飼君が大変な目に合ってる。私が頑張らなきゃ——』

『貴方は頑張った。ですが、これ以上は無駄です』

被せるように放たれた人工幽霊の言葉に、天竜姫は何度も首を横に振る。

戻された視線には、強い意志が宿っていた。

しかし、人工幽霊には見えている。

その膝が、腕が、身体が、消耗しすぎて小さく震えていることに。

その顔色が、健康的な白だった肌の色が蒼褪めている事に気付いている。

『…約束、したから。勝手な誓いでも、一方的な想いでも、私は私に約束した』

瞳を逸らさぬままで、少女は、全身鎧の腰より少し上程度の背丈まで成長した少女は振り絞るように言葉を紡ぐ。

紫色のカサカサになった唇の端から、先程噛み締めた時に裂けたのか、僅かに血を流しながら、掠れ始めた声ではつきりと告げた。

『絶対、諦めない』

竜気の奔流が終息し、睨み合う二人の間にも沈黙が蟠る。

少女の瞳を、その中に宿る意思をはつきりと認識し、人工幽霊は大きく溜め息を吐いた。

少女の手首を握っていた無骨な籠手から力を抜き、数歩後ろに下がる。

静かに動きを止めると、ゆっくりと腕を組んで、一言だけを告げた。

『あと、一度です。約束してください。それで駄目だったら暫く休む、と』

『…分かった』

渋々、と言った様子ではあったものの、天竜はそう答えて踵を返す。

目の前には、妙神山からこちらに脱出してきた際には確かに開いたゲートのある筈の場所。

足を肩幅に開く。背筋を伸ばし、ゆっくりと息を吸い込む。合言葉一つで開く筈のゲートは開かなかつた。

どれだけ竜気を送つても、隠蔽の為の術式を解いても、その残滓さえ見せなかつた。だつたら、止めた。

『——我は誓い告げる者！』

朗々とした言霊と共に、再び竜気が噴きあがる。

これまでとは違う強烈な奔流に、事務所に宿る人工幽霊はある筈もない内臓が掻きむしられたような痛みさえ覚えた。

『天なる龍の強き想いと！』

腹の中を強引に掻き混ぜられるような、意識を粉微塵に碎かれるような衝撃の中で、しかし彼は何も言わずに少女の背中を見守っている。

『その血に宿る力をもつて!!』

轟、と竜気が渦巻いた。

ふらりと少女の体が傾き、全身鎧が思わず一步を踏み出す。

『…っ、望みを叶える意思と成す!!』

しかし、少女は堪えて言葉を紡ぐ。

崩れかけた体は、力強く前に踏み込まれた足で支えきつた。

巻いた包帯に血が滲み、前に突き出された両手は疲労で持ち上げているだけでも容赦無く氣力を奪っていく。

だが、諦める事など頭の片隅にも浮かばない。

ただ、一人の青年の笑顔だけが在った。

『——門よ！』

ある筈の門が開かない。

ならば、新しく作ればいい。

だが、いつもならば其れなりの準備と多少の神通力で開かれる門は、まるで何かに邪魔をされるようにその構成を砕かれていく。

それを感じながら、しかし少女はただひたすらに力を籠めて前を見る。

ただ、想う。

青年の事を。

彼の笑い声を。

彼と過ごした一時を。

彼に助けられた時の、あの姿を。

力を呪いで奪われ、少年の姿となり、知識も経験も技術も何もかもを無くして、それでも己より遙かに強い魔族に立ち向かった、あの瞬間を。

護ると言い切つて、そしてそれを証明して、その後困つたように頭を掻いて、それでも笑つて見送つてくれた彼の事を。

ただ、強く想う。

『門よ、在れ!!』

注ぎ込まれた竜気が消えていく。

拡散していくのでもなく、砕けていくのでもなく、まるで砂漠に水が吸い込まれるように消えていく。

感じるのは、砂漠。

餓えた、乾いた、渴えた壁。

静かに、だが貪るように意思を、竜気を喰らおうとする存在。

それが、二枚。

近く——東京を包むそれと、遠く——妙神山を囲うそれ。

『……つく、う』

際限無くつき込む竜気が、際限無く飲み込まれていく。

元々相当に消耗していた身で、残る竜気が更に消えていく。

度の孔が開いていた。

歯を食いしばりながらそれを固定する。

だが、少女はもう一步も動けそうに無かった。

後少し、一瞬でも気を抜けば全て持つて行かれるような感覚が彼女を襲う。

門は成った。

だが、それだけでは駄目だ。

門はモノを通す物。

呼ぶために開いた物ならば、誰かが答えてくれなければ無為と化す。

その瞬間だった。

ひよい、と気軽な動きで、門の向こうから誰かの顔が覗いた。

薄れ始めた視界でそれを認めた天龍は、薄ぼんやりとしか見えないその影に必死で声

を掛ける。

『…は、やく！ こつちに、来て！』

『ああつ！ 天竜姫様——』

『何いつ?!』

耳鳴りが煩くて聞き取りずらかったが、その大声は確かに彼女の父と妙神山に住まう

猿神のものだった。

『なのねええっ?!』

『天龍っ! 今そっちに行くからなあっ!!』

『ええいどけっ! ワシが行くっ!』

『しよ、將軍! 竜神王がっ!』

『お待ちくださいっ! ええい遅れるなお前達!』

『老師っ! 待つて下さい!』

『おい小竜姫! 私も——』

跳ね飛ばされたらしい女性の声为天竜姫の横を通り過ぎ、後ろの全身鎧に直撃する。

その後を追いかけるように二人が通り抜け、更に十数人が駆け込んで来て——。

それを確認したかのように、少女は満足げな笑みを浮かべると、真つ青な顔でゆっくりと倒れた。

薄れる意識の中で大声で騒ぐ何人かの声を聞きながら、少女の意識はゆっくりと沈んでいった。

『まあ、その後いきなりゲートが閉じ始めるとは思いませんでしたけどね』

「お陰で娘に添い寝もしてやれん」

ぶつくさと呟く竜神王の顔は、それでもどこか誇らしげに緩んでいる。

娘が倒れた事にパニックに陥りかけた竜神王であったが、ともあれここと妙神山に出来た繋がりを断たれる訳にはいかないと閉じようとしていたゲートに竜気を送り込み何とか維持。

倒れた天竜姫の世話は事情を説明してくれた上に買って出てくれた人工幽霊に任せ、未練たらたら猿神と妙神山管理人、魔族の女性と跳ね飛ばした覗き神と部下達を娘の意思を無駄にしてなるものかと送り出し、彼は一人此処に残り、その全精力を持って妙神山とのラインを確保し続けていた。

「全く。事が片付いたら是非にも一発殴らせてもらわんとな」

『予約で一杯でしょうから、それなりに手加減して欲しい物ですね。私の方が先約です』

惚けた口調で呟いた全身鎧がガレージから出ていくのを視界の片隅で見送りながら、竜神王はくつくつと笑う。

猿神もそうだし、話を聞いた二人の女性たちも予約しているだろう。

まあ、あちらは少々事情が異なるのかもしれないが。

そう考え、竜神王は再び氣力を漲らせる。

彼をもつてしてもその門は再び大きく開く事は無かった。

ここに付いて来た者達の力を借りればもう一度通れる位に開く事くらいは出来たのかもしれないが、彼女が使ったのは王族専用ゲートを開く術式であったが故に、その門は少女と竜神王の氣にししか反応しない。

「…早く向こう側に誰か来て欲しい物だがなあ」

呟いた言葉が、コンクリートの壁に小さく反響した。

「なあ、右の」

「なんだ左の」

「ワシら、忘れられたような気がせんか？」

「しかしあのサイズでは通れんかったしな。だからこうして神界に連絡を取って、返事を待つとるんだろうが」

「最後の見せ場、かのお」

「…何にもやる事がないからのお」

第拾参話 『それでも私は想うから』

「しかし、美神も無茶を考える」

「まあ美神さんですし」

先程まで美神と繋がっていた通信鬼を消し、呆れたような声を出して小竜姫は背後の様子を見ていた。

それを横目に見つつ、ワルキューレは取り出した双眼鏡で状況を見る。

一直線に伸びる太い幹線道路のど真ん中。

今は誰も通る事の無いそのアスファルトの先、前方やや斜め上に、天蓋の裂け目から突き込まれた巨大兵鬼の腹が見えた。

完全に動きを止め、時折その中央に開いた何かを吐き出しつづける光景は産卵のようにも死骸から抜け出る魂のようにも見える。

双眼鏡越しの視界にそんな感想を抱きながら、ワルキューレはゆっくりと口の端を吊り上げた。

だが、その視界を平行まで降ろせば、其処には未だ飛び交う火線の瞬きがある。

まるで自分達の存在を悲壮に叫び続けているような砲火の音は、遠く離れた彼女の耳にも届いている。

僅かに心配げな色を浮かべながら、溜め息混じりに双眼鏡を下ろした。

踵を返し、騒がしい後方に視線を移す。

「ヒヤクメ殿、角度はこれでよろしいでしょうか？」

竜神王の近衛部隊、その中でも一際豪華な鎧を纏った巨漢の男が、その傍らで両手の

人差し指と親指でもって四角を作り、その窓越しに巨大兵鬼の腹を眺める女性に確認の声をかける。

「んんん。もうちよつとだけ上」

だが、問われたヒヤクメの返答は酷く素っ気無い物だった。

彼女の興味が奮う箇所にししか使用されない筈の、仕事中でさえ使わない集中力を全て振り絞っているが故ではあるのだが、少なくとも隣の男性の額から垂れる冷や汗ぐらいには気付いた方が良いだろう。

後、その後ろでがちがちに緊張している近衛兵達にも。

「…今度は何C mほど?」

既に諦めた表情の部隊長は、抑揚の無い口調で疲れ混じりに問い返す。

だが、その予想は斜め上。

「…右に0, 4 m m、上に5 m m」

「そんな無茶なっ?!」

悲鳴が上がるると同時に、後方で待機していた竜神族の術者達が蒼褪めた。

幾度目かの調整の後から徐々に難度を増してくる要求は、十c m単位からとうとうm m以下にまで到達しているのだからさもありません。

やけっぱちの隊長の声に従い、神経を集中させながら術者達がじりじりと「それ」を

動かしていく。

やや婉曲しながら先端で巨大兵鬼の腹を指し、反対側の先端でアスファルトに傷をつけながらもそれはゆっくりと動いていく。

二本の細長い結界で構成されたその物体は、一言で表すならば「レール」で十分に事足りた。

「——ストップ！ 完璧なのね——」

満足げに頷き、顔の前に構えた四角形を解いてヒヤクメが腰を伸ばす。

その周囲で安堵の吐息を付いた近衛兵達が互いに顔を見合わせ笑みを浮かべ、そして何となく非難がましい視線をヒヤクメの背中に向けた。

それに全く気付かぬままに、上機嫌のヒヤクメはテクテクと道路の端に歩いていくと懐からがま口財布を取り出しぱちりと開く。

3枚の硬貨を取り出し、設置してあった自動販売機のコイン投入口におもむろに滑り込ませると、じつとその機械を睨み、ズビシツとボタンを押した。

ガチャンと音を立てて吐き出された缶ジュースをいそいそと取り出し、断続的に聞こえる軽快な音に耳を澄ませる。

やがてそのテンポはゆっくりと速度を落としていき、最後の足掻きとばかりに数度早いリズムの音を刻む。

その音が止まった瞬間、薄っぺらなサンバのリズムが周囲に流れた。

『オオアタリー!』

「ふ、私の目にかかれば当たりのタイミングなど筒抜けも同然なのねー!」

「何をやつとるかお前はーっ!」

「神通力を悪用してはいけないとあれほど言ったでしょうがっ!」

ワルキューレと小竜姫のダブルドロップキックがヒヤクメの後頭部に襲い掛かった。

悲鳴も上げずに吹っ飛び、そのまま前方の自動販売機に顔から着弾。

ゆっくりと後ろに傾いた自動販売機のスイッチが顔で押されて反応し、もう一本分の商品が吐き出される。

『アリガトウゴザイマシタ。マタノゴリヨウヲオマチシテイマス』

無機質な女性の合成音声が届く響き、ガシャンと吐き出された缶はゆっくりと反動で戻った自動販売機の取り出し口から飛び出し、ころころと部隊長の目の前へと転がっていく。

『100%餅ジュース・冷たい』：飲むか?』

「飲めないでしょそれ」

拾い上げた部隊長と渡された部下の困惑の声に絶したにもかかわらず説教されているヒヤクメを侘しく撫でていく。

ゴミ箱に投げ捨てられたアルミ缶の、やたらと固く重い音が短く響いたのだった。

天井から吊るされたフックに引つ掛けられ、一抱えはあるコンテナがゆっくりと移動する。

それはある一点に到達し、がくんと揺れながら動きを止めた。

『ポ』

『ポ』

見上げる埴輪兵達の動きが止まり、その視線がコンテナの上に乗っかる数十体の埴輪兵達に集合する。

コンテナの上の埴輪が片手を上げ、振り下ろした。

フックがコンテナを固定していたロープから切り離される。

コンテナは、その上に乗った埴輪兵達ごと重力に引かれて落下を開始。

そのまま直下に開いた巨大な穴を通り、爆発と火線の入り混じる戦場へと落ちていく。

確認するように一瞬それを見送っていた埴輪兵達は、再び何事も無かったように動き回り始めた。

「…なるほどのう。ここから補給物資を投下しとるんか」

『ある意味最短距離だからな』

その空間の隅に積み上げられたコンテナの陰から顔を出したカオスと土具羅がそんな会話を交わす隣で、玉に閉じ込められたままの忠夫はパピリオの頭上で静かに腕を組み瞑目している。

何かを考えるような、それでいて凧いだ湖を感じさせるような無為を醸し出しながら、彼はゆっくりと頭を垂れる。

鼻提灯がぶくりと膨らんだ。

「起きるでちゅ」

「ぶろわっ?!」

おもむろに忠夫の閉じ込められた球を掴み、全力で上下に動かすパピリオ。

内容物（忠夫）が中で数度跳ね回り、最後に車に轢かれた蛙の如くその底面に張り付いた事を確認してから頭の上に戻す。

アルファ達の視線が4対一連の流れに集まり、そして彼女達は何事も無かったかのようにならぬ瞳をカオス達に戻した。

「強行突破を・提案します」

「却下じゃ。真下は敵だらけじゃぞ？　下に連絡が行った瞬間対空砲火で蜂の巣じゃわい」

『かと言ってここ以外じゃパピリオが降りれんなあ』

中空を見上げた土具羅の言葉に、慌てた様子でパピリオが噛み付く。

「嫌でちゅー！　絶対に付いてきまぢゅから——ムグー！」

何時の間にかパピリオの後ろに回りこんでいたデルタがその口を背後から塞いだのを横目に見つつ、土具羅は疲れたように手振りで承知の意思を伝えた。

膨れっ面でデルタの手を振り解き、苛立ち混じりに忠夫をぶんぶかシェイクする彼女を余所にカオスはゆっくりと腰を下ろす。

床の冷たさに少々顔を歪めつつ、老人は静かに目を閉じた。

「ま、焦つてもしょうがないわい。機会を待つぞ」

「悠長な事を言つてゐる場合でちゆか！　こうしてゐる間にもアシユ様は——」

完全に目を回している忠夫を投げ捨て、座り込んだカオスに食つて掛かつたパピリオを止めたのは、片目だけを開いた老人の瞳に宿る力だった。

「黙つておれ小娘！　今誰が一番下に降りたいと思つとるか！」

「パピリオに決まつてゐるでちゆ！」

即答で返された思わぬ答えに少々面食らつたカオスは、僅かに目を細めると、今にも胸倉に掴みかかつてきそうな少女の頭に手を置いた。

唸る少女を落ち着けるようにその手で軽く二三度叩き、彼は小さく悪かつたと呟いた。

その後、気持ちだけならワシも負けんと小さく呟き、だからこそ今は我慢してくれと今度は幾分か柔らかく言い聞かせる。

それでもまだ不満そうな表情が崩れる事は無く、だが少女は澁々ながらも老人と土具羅の間に腰を落ち着けた。

「…生命反応・微弱！　危険・です！」

「冷静に。父は・寝てます。タフネスだけなら・網翳目にも・負けません」

周囲に昏倒から睡眠に戻つた忠夫を拾つてきたアルファ達に囲まれつつ、彼らは静かに時を待つ。

結局、その時は意外にも早く訪れる事になるのだが。

第拾四話 『そして届けと誰かが叫び』

「準備が出来次第出します！ カウント10からですので！」

小竜姫にそう告げた近衛兵は、彼女が担いだ荷物に一瞬不安そうな視線を向けたものの素早く身を翻して近くのビルの陰に飛び込んでいく。

腰に巻きつけられたロープを確認し、それがしつかりと固定されているか何度か引つ張つて試してもう一度前を見、彼女は諦めたように溜め息を付いて肩を落とした。

月に吼える 第三部

「ほら、忘れ物だ」

俯いた小竜姫の頭にぼすんと軽い音を立てて何かに乗せられる。

慌てて溜め息とともに俯いた視線を上げれば、動きに付いて来れなかったのだろう、頭の上から奇妙な物体が転げ落ちた。

その落下軌道に手を伸ばし、しつかと掴んで改めて見れば何とも不思議な生き物の姿がそこにある。

全体的には不気味な小さい悪魔とも言えるその背には小さな羽根が生えていて、口はスピーカーのような形になっており、腹部にも同じ形の物がついている。

「あ、通信鬼！ 忘れる所でした。ありがとうございます、ワルキューレ」
「私のを貸すだけだ。ちゃんと返せ」

そう言つて小さく笑つた魔界軍の女性の顔には僅かな憂いの色がある。

初め出会つた時はすまし顔と言うより無表情で、冷たい印象しか受けなかつたと言うのにこの変わりをかつてのワルキューレを知る物が見たら己が目を疑う事は間違い無い。

変化なのか成長なのか、それとも地が出ただけなのか。

どれであってもこの彼女の方が付き合ひやすいことは確かだし、少なくとも小竜姫がワルキューレに対してかなりの好感と信頼を築き上げているのは気のせいではないだろう。

休暇なり暇が出来た時なりに妙神山を訪れ、時には小竜姫やヒヤクメと一緒にお茶を

飲んだり、時には猿神と並んでゲームをしたりと彼女も小竜姫達に対して悪い感情を持つていない事も窺える。

美神さんの良い影響でしょうか、と其処まで考えて、ワルキューレが何とも不貞腐れた顔でこちらを覗きこんできているのに気付いた。

つい、と視線を逸らし空咳一つ。横顔に感じる視線の不機嫌さが上がったようだが、まあ構うまい。

本人は気付いていないようだが、時折こうやって覗く彼女の表情が、小竜姫は結構好きだった。

魔族と親族の間でありながら良き縁を得られた事を、今ならば上層部に感謝する事もできるだろう。

当時は胃の痛みと共にかなり本気で恨んだりもした物だが。

「…すまん。本来ならば私が行きたかったのだが」

「それは仕方が無いでしょう。この作戦には超加速が使えない貴方じゃ危険が大きすぎますし、それに——」

周囲を眺めた視線の先には、ピルの陰に身を隠してなにやら準備をしている一団と会話する猿神が、小竜姫の前後に伸びたレールには挟みこむように並んで取り付き精神集中を行なっている近衛兵の術者達がいる。

全てが神族であり、魔族はワルキューレ一人しかいない。

「これだけの大事件です。神族だけで解決した事にするよりも、魔族の貴方が現場にいて協力していた事にする方が、角が立ちませんから」

「あれもデタントこれもデタント。殴って撃ってハイ終わり、の頃には考えもしなかった気苦労だ」

肩を竦めてそうのたまうワルキューレの口元は、しかし確かに小さく弧を描いていた。

思わずつられて笑みを浮かべた小竜姫を眼にしたワルキューレが口元を押さえ、小さく樂しげに笑い声を零す。

互いに顔を見合わせながら、僅かな間場違いとも思えるほど和やかな雰囲気か二人の間に流れた。

「ま、とは言え美神の無茶な作戦に参加しなくて済んで、少しはほっとしてる訳だが」

「あら酷い。それ美神さんに黙ってて上げますから、今度来る時にはお団子をお土産にお願いできますか？」

「神族が脅迫するのかわ？」

「いいえ。交渉ですよ」

天を仰いで額に手をあてたワルキューレが踵を返し、ゆつくりと小竜姫の傍から離れ

ていく。

彼女は背中越しに片手を振りつつ、何でも無いように言い放った。

「今度、な」

「ええ。今度、です」

その背中がビルの陰に隠れるまで見送って、小童姫は頬を叩く。

音を立てて赤く染まった頬を少しばかり力加減を間違えたかと少々涙目で撫でつつ、彼女はレールの上に膝をつく。

短距離走のスタートの如くしゃがみ込んだ彼女は、大きく息を吸って気合を入れた。答えるように、右手に握り締めた勾玉と左手の指に嵌めた指輪が輝き出す。

一瞬後、彼女の両手には身長ほども在りそうな巨槍と、しゃがんだ体の前面を覆い隠す髑髏の描かれた盾が出現していた。

「竜の牙、ニーベルングの指輪、準備完了！」

大声で叫んだ彼女に答え、レールの両脇に控えた術者達が唱え始める。レール上の空間に幾つも雷光が走り、その光が幾つもの法陣を描き出す。

空気がゆつくりと彼女の後方から前方に流れ出し、やがて鼓膜を揺るがすほどの轟音を伴って拭き付け始めた。

と、背中に背負っていた「荷物」がその音に目を覚ましたのか、気の抜けるような声

と共に動き出した。

「ふあああああ。つて、ここ何処っ?!」

「動かないで下さいヒヤクメ。危険です」

「え、小竜姫っ?! ええっ?! ここまさかっ?!」

途端にじたばたと暴れ出した彼女に後頭部で頭突きをかまし黙らせた。

頭を押さえて蹲るヒヤクメに、やや目をちかちかさせた小竜姫が声を掛ける。

「今更何を言ってるんですか」

「だってだって、まさか私まで行くとは思ってなかったのねーっ!」

「仕方ないでしょうに。あの壁が間にあると貴方役立たずじゃないですか」

なにやら衝撃を受けたのか、一瞬硬直したヒヤクメはゆっくりと身体を弛緩させる。

しかし、次の瞬間には再びじたばたと暴れ出した。

「私はワルキューレや貴方みたいに頑丈に出来てないのねーっ! いやーっ! 死にたくないーっ!」

往生際も悪く暴れるヒヤクメにこめかみを押さえつつ、小竜姫は彼女が動くたびに締まる腰のロープをたたつ斬ろうかと一瞬悩んだ。

しかし、小竜姫だけでは作戦遂行はほぼ不可能であるし、背中に背負ったヒヤクメが下に居ては何にもならないのもまた事実。

ロープを解けば簡単に逃げられるのにそれにも気付かないほど狼狽しているヒヤクメに向けて、少々酷いかなと迷いつつも、小竜姫はぼつりと、しかしはつきりと呟いた。「ヒヤクメ。そうやってる貴方って、なんだか横島さんみたいですね」

「えうっ?!」

今度の硬直はさつきよりも長かった。

固まったまま動かなくなつた彼女の様子を窺えば、なんだかトラウマでも受けたかのように真つ青な顔で、必死に否定材料を探して呟きつづける姿がある。

まあ静かになつたのだから良いか、とあつさり切り捨てた小竜姫は、その視線を前に向けた。

足元から伸びるのは緩く弧を描き天を指す結界のレール。

その上には何十枚もの法陣が姿を顕現させつつあり、耳元を過ぎ去っていく風はともすれば吹き飛ばされそうなほどの圧力を彼女の背に与えてくる。

レールの先端が指すのは、天蓋に空いた裂け目から姿を覗かせる何かの穴。

今も次々と光の粒を吐き出しつづけるその下では、再び放たれた閃光弾が戦場を照らし出し、まだ其処に諦める事無く闘いつづける者達が居る事を示していた。

神魔族の助けも無く、普通ならばどう足掻いても勝ち目の無い相手に挑み続ける者達。

武神としてそれを誇らしく思うと共に、小竜姫として心配にも思う。焦る気をゆつくりとした呼吸で無理矢理押さえつけ、彼女の視線は上へと向く。全てを貫くような強い視線は、天蓋の裂け目を塞ぐ何かを無視し、彼女が目指す場所を睨みつけていた。

「カウント、行きます！」

「お願いします！」

最早大声で無ければ会話が難しいほどに吹き付ける風の中、小竜姫は踵を僅かに浮かせる。

「10！」

爪先にジワリと力が籠る。

「9！」

全身に強大な竜気が漲り、構えた盾と槍が応えるように小さく震えた。

「8！」

視界の隅で猿神が親指を立て、やって来いと唇の動きで伝えてくる。

〔7!〕

その隣に立ったワルクューレが流れるような動きで敬礼を取り、そのまま額にあてた手を軽く下ろして拳を握る。

〔6!〕

あちこちのビルの陰から顔を出した近衛兵達が手を振りながら、咽も裂けよといわんばかりに声援を送っているのが感じられる。

〔5!〕

自然と口元が緩まり、そして決意を示すように引き絞られた。

〔4!〕

術者達の詠唱する声が一段と高まり、目の前に連なる法陣がその輝きを増していく。

〔3!〕

息を大きく吸い込んだ。

〔2!〕

爪が割れそうなほど足の先に力が溜まる。

〔1!!〕

背中のヒャクメが再起動した。

「GO!!」

「やっぱり降ろして——」

「妙神山管理人、武神、小竜姫——行きます!!」

無視して第一歩を踏み出した。

裂帛の気合と共に踏み出した体が、一気に最高速度まで加速しながらレールを辿る。

一枚目の法陣に突っ込んだ。

「な」

途端、視界に写る景色がその輪郭を崩す。

踏み込んだ足が次のレールに設置するよりも早く、次の法陣が視界一杯に広がる。

迷う事無く身体を前に傾ける。

「の」

前から吹き付ける圧力が更に増し、四肢を引き裂かんばかりにその牙を振るう。

だが、友から借り受けた盾が彼女の身をその暴風から完全に護りきる。

同時に突き出した巨槍の先から出現した水蒸気の雲が螺旋を描くようにその槍に纏わりついた。

瞬間、風を切る音も、槍が空気を貫く音も、盾が暴威を砕く音も、一切合切全ての音が消え失せた。

てたのよねー」

「だからって鉄砲向けて『ひっちはいく』は無いと思うんですけど…」

大きなトレーラーのハンドルを片手で操りつつ、誤魔化すように空笑いを放った美神に助手席からジト目のおキヌが聞こえよがしに呟いた。

途中までは良かった。

そう、途中までは良かったのだ。

いつの間にか人の事務所勝手に通用口を作った神族達と、人工幽霊からの携帯電話への連絡で上手いタイミングで連絡が取れ、一つ大仕掛けが出来た。

そして、何故かふらふらしていたが、オカルトGメンの隊員と一緒にいたおキヌと合流できたし、おキヌが大量に持ち出していた破魔札や精霊石を徴発出来たまでは良かったのだ。

…まあ、母の視線が痛かったが。

そしてそれは起こった。起こるべくして起こった、とも言える。

愛車に山ほどの装備を詰め込み勇んで出発した物の、妙神山と東京の事務所を往復したために、ガソリンが無くなったのだ。

道半ばでガス欠に陥ったそれを蹴り飛ばした美神は、つま先を押さえてしゃがみ込みながら途方に暮れた。

二人揃って肩を竦める両親に恨みがましい視線を向けたら、おキヌがなんとも生暖かい目でヒーリングをしてくれたりと一悶着。

それがまるでやんちゃな妹と優しい姉の一幕のようで。

お姉さん代わりは私なのにー！ と心の中で絶叫したのは彼女だけの秘密である。

ともあれ、後部座席に乗せていた父と母は娘に呆れたような視線を向けた後、さつさとオカルトGメンに向かっていったからなおさら腹が立つ訳で。

騒がしい後部座席に鬱陶しさを覚えていた物の、居なくなつて見れば何となく寂しさを覚え、それを全力で否定するように鼻息も荒く担げるだけの道具を担いで歩き出した美神。

意地もあつてかおキヌと美神で3:7。

その姿は助手席で肩を落としている従業員にも通じる所があつたりはしたが、それは美神も知らぬこと。

ちよつと頭に浮かんだ従業員の顔を掻き消しつつ、何とかかんとか目的地まで歩き出そうとした所に。れたように肩を落としている従業員の片割れにも通じる所があつたりはしたが。

「ま、いーじゃない。知らない仲でもないんだし」

だが、おキヌと違つた所といえば、美神は疲労で倒れる前に偶々通りかかった車に銃

口を向け、無理矢理停止させて乗っ取ろうとした所だろう。

『ちよつと！　あまり勝手な事言わないで貰えるかしら?!　大体なんで急いでるのに余計な荷物二つも抱えなきやいけないのっ?!』

「良いじゃない。目的地は同じでしょ?」

手元に吊るされたトレーラーの後部との無線機に軽く応え、美神は更にアクセルを踏み込んだ。

重い荷物に抗うようにゆっくりと角度を傾けていく速度計に目をやりつつ、美神は通信機のチャンネルを切り替える。

「こちらGS美神令子、オカG、応答願える?」

『……ジツーはい、こちらオカルトGメン。感度良好です』

小さな空電の後、女性オペレーターの声が小型の機械から流れ出した。

同時に声だけではなく背後の慌しい気配も伝わってきた。

ガタガタと椅子を動かす音や、引っ切り無しに鳴り響くコール音、時折混じる現状報告の声と、新人らしい若い女性の泣き言混じりの愚痴。

なかなか修羅場と化しているオカルトGメンの司令室である。

応答してくれたオペレーターの声が落ち着いている事に安堵を覚えながら、美神は視線を前に固定したままで通話ボタンを押し込んだ。

「そつちに私のママ——美神美智恵が行ったんだけど、着いてる？」

「あ、後私を——氷室キヌを途中まで送ってくれた人たちはもう出発されましたか？」

ひよい、と顔を美神の手元に伸ばして問い掛けたおキヌの声に、オペレーターは僅かに柔らかさを交えつつ答えた。

『まず、美神さんご夫妻ですが、既に到着されて、今は六道家当主の方と話されています。』

美神令子様伝言が一つ、よろしいですか？』

「お願い」

かさりと小さく紙の擦れ合う音が混じった。

手元を探ってメモ用紙を取り出したらしいオペレーターは、こほん、と一つ間を置いて、少々棒読みでそれを告げる。

『準備はOK、もうすぐ開始。PS——』

そこで暫し戸惑ったような気配が伝わってきた。

『失礼しました。PS、お嫁に行く前に傷物になるような無茶はしないこと。ハンカチ持った？ ティッシュは？ 後——』

「もう良いです」

疲れたようにオペレーターの声を断ち切った美神はがくりと頭を落とし、ついにて卜レーラーの速度も僅かに落ちた。

『この後400字程続きがありますけど?』

「御免なさい勘弁してくださいってか何でいきなり恥さらしてるのよママーツ!」

怒号と共に限界まで踏み込まれたアクセルに答えるように、トレーラーは一瞬動きを鈍らせ一気に加速する。

後ろからなにやら転がるような音と、羽ばたきの音、そして少女と男女の悲鳴と苦情が聞こえたが、美神は全てスルーした。

無線機の向こうから何か微笑ましいものでも見た後のような雰囲気伝わってくるのが辛い美神である。

その怒りと言うか羞恥ゆえの八つ当たりというか、ともかくなんだか危険な雰囲気を発する美神の前をするりと細い手が擦り抜け、今にも噛み砕かれそうになっていた無線機をおキヌが受け取った。

「あの、隊員の方たちは?」

『ああ、すいません。彼らなら先程装備と補給を持って出発しました。氷室さんに伝言です。「すぐに行くから頑張れ」と』

一瞬虚を突かれて目を軽く見開いたおキヌは、小さく微笑んで感謝を伝える。

そのまま無線機を元のように引つ掛け、よし、と小さく拳を握る。

その隣でぶちぶちと呟きながら、それでもどこか満更でも無さそうに父母への愚痴を

口ずさんでいる美神をちよつとだけ羨ましげに見て、おキヌはシートに身を置き直した。

途端、置いた無線機から女性の怒号が二人に響く。

『ちよつと！ 折角頑張つて塗装したのにいきなり傷付いちやつたじゃない！』

瞬間、八つ当たり気味の美神の声が無線機に向かつて投げかけられる。

「煩いわねっ！ どうせこれから沢山付く予定でしょうが！」

『何でこの子達の活躍の場に着く前からそうなつてんのよっ！』

「これ以上騒ぐなら放り出すわよっ！」

『そもそもあんたがジャックしたんでしようがっ!!』

美神と後部の貨物と一緒に女性の会話を聞いたおキヌは一瞬硬直し、ちよつと拗ねたように頬を膨らませた。

喧々囂々と響く売り言葉に買い言葉聞き流しながら、彼女はそつとそれを握る。

躊躇う事無く全力で引いた。

サイドブレーキを引つ張られたトレーラーは一瞬制御を失い、慌ててハンドルを切つた美神の動きに合わせて広い道路の真ん中で大きくスピン。

その動きが丁度一蹴して戻つて来たタイミングにあわせてサイドブレーキをおキヌは繊細な力加減でスツと戻した。

ロックされていたタイヤが再びアスファルトをしつかりと噛み、エンジンのもたらすエネルギーを余す事無く全て伝える。

二、三度大きく車体を傾け、それでも何とかバランスを取り戻したトレーラーは再び真つ直ぐに走行し始めた。

「おき、おき、おき又ちゃんっ?!」

「…喧嘩しないで急ぎましようよ、美神さん」

バクバクと激しく鼓動を打つ心臓を押さえながら横を向いた美神の目に、優しく微笑むおキヌの顔が写りこむ。

よく見るとその額には井桁マークが浮かんでいた。

記憶を取り戻した時に見せたドライブングテクニツクの片鱗を見せ、静かに怒る少女の笑顔を見た美神は、何度かかくかくと首を上下に振った後、今見た物を忘れる為にかぶるぶると今度は左右に振った。

ゆつくりとアクセルを踏み込み、車体を前へと蹴り出して行く。

ヘッドライトが街灯の灯りと交錯し、アスファルトの路面を照らし出す。

そして、やがて道の先に切り取られたような黒い地面が見え始めた頃。

ガリガリとノイズを走らせ、無線機が凜とした声を放った。

『こちら、たった今臨時特別作戦参謀に就任した美神美智恵よ。皆、聞こえているかしら

「つだーっ！ 切りがねえっ！」

あちこち煤だらけの雪之丞が叫び、足元に転がるテレサの一体を路地裏に運んでいく。

テレサの身体にはどこから拾ってきた物か、太いワイヤーが複雑に絡み合いながら巻き付いていて、その関節を完全に拘束していた。

二体のテレサを担ぎ上げた雪之丞の隣をその背にテレサを乗せられた陰念が通り過ぎる。

アスファルトと爪の接触音をテンポ良く響かせながら、狼は身体を揺さぶり路地裏の

一角に彼女を落とした。

その瞬間、まるで抗議するように落とされたテレサの足が跳ね上がろうとし、だがワイヤーが引つかかって果たせない。

それどころか、引つ張られたワイヤーがあちらこちらに食い込み締め上げ、あつという間に更に拘束の度合いが増す始末。

程度の違いはあれども目を覚ますと一頻り抵抗したらしく、転がるテレサたちは漏れなく一人サブミッション状態である。

他の共通項はといえば、残らずその通信用アンテナを折られ、猿轡を噛まされ、武器が出てくる部分にはしっかりとワイヤーの一部が乗っている事ぐらいであろうか。

「…勘九郎の奴、何処で覚えてくるんだろうな、ここう言うの」
「わ、ふ」

それよりも用途の方が気になる、と言った風情の陰念である。

「と、早く戻んねえとどやされッぞ」

そう言いながらも其処に倒れて動けなくなっているテレサ達のアンテナを確認し、雪之丞と陰念は踵を返す。

二人同時にビルの側面を蹴り、こそこそとベランダに隠れながら、打ち合わせどおりの場所に移動した。

目に入るのは更に資材置き場からでも調達してきたらしい大量のワイヤーと、更に追加で転がっている２体のテレサ。

溜め息混じりに目を回している彼女達を担ぎ上げ、雪之丞は陰念だけでも勘九郎の方に回す事に決めた。

意味は無いかもしれないが、少しくらいはこつちにも相手を回してくれ、と言う伝言と——かなり本気で、出来たら対抗策を考えてくれと言い残し。

狼にどうやって伝言を伝えれば良いのかという疑問を口に浮かばせる前に、ビルの壁面を蹴りながら去って行った。

呆れを満面に浮かべつつ、匂いを探して暗闇にダイヴ。

落ちていく途中で風の中に嗅ぎ取った勘九郎の匂いの方角に身体を向け、窓ガラスを大きく揺らして大跳躍。

隣のビルの屋上に着地し、そのまま勢い良く駆けて行く。

と、目指す方角から悲鳴が響いた。

悲鳴が切れる前に其処に到着し、再び壁を蹴りながら降りていく。

着地と同時に目に入ったのはビルのエントランスで憤然としながらテレサにワイヤーを巻きつけていく勘九郎。

傍から見ればどちらが悪いのかわかりやあしないその光景にちよつと引きつつ、陰念

はゆつくりと近付いていった。

「つたくもう！ 可愛い男の子ならともかく、何で見た目だけとは言え女の子相手にこんなことやらなきやいけない訳？ テンション上がらないわねー」

ぶつくさと言っている内容は努めて無視。

精神衛生上非常によろしくないからだ。

「ガウツ」

「アラ丁度良い所に。この子もお願いね」

詰まらなさ下にそう言い残し、魔装術に身を包んだ巨漢の体軀は酷くあつさりと闇の中に溶け込んでいった。

ふと、陰念の視線がビルのエントランスに張り出した部分に移動する。

殆ど明かりのない暗闇の中でも、彼の目は「それ」をしっかりと見つけ出していた。

その天井部分に残されている、何故か疎らな着弾の痕と、その中心に存在する——手足の指がめり込んだ跡。

おそらく、この天井部分に逆さまに四肢で張り付き、下を通ったテレサがそれを見つけて発砲。

しかし余りにもインパクトのあるその光景に動揺したところを一気に捕獲、と言う事だろう。

が、その光景を思い浮かべた陰念は、敵ながら増々妖怪じみて来た同門のオカマに身震いを覚え、テレサに少々同情めいた物を感じてしまう。

突然の訳の分からない就任と、しかし知った人の声と無茶苦茶な内容に一人戦場で頭を抱えた西条の耳にその言葉が飛び込んだ。

反射的に腰を落とし、命令に従った西条の姿を見て周囲の隊員達がそれに吊られた。

紡錘型の人類陣営の中心から広がったその光景は、瞬く間に外縁部へと到達する。

身構えた西条が何も起こらない事に疑念を抱き、隊員達が胡乱げな視線を彼に向けたその瞬間だった。

爆発とも思えるような風が、戦場を駆け抜けた。

一生物の思い出（トラウマ）となったであろうその想像を打ち消しつつ、陰念はとつとと退散する事にしたのだった。

ワイヤーの端をくわえ、反動をつけてテレサを宙に投げ上げる。

その体が丁度一番上まで上がった瞬間に自分の背を滑り込ませ、そのまま一気に道路に抜けた。

どこかの道路から悲鳴が響く。

同時に発砲音と閃光の瞬き。

しかし、断ち切られたように途絶えたそれに黙祷を捧げ、陰念は周囲を警戒しながら

反対側の路地に飛び込んだ。

直後、狼の姿の消えた道路を、猛烈な強風が駆け抜ける。

枯葉の多い街路樹を揺らし、街灯さえも大きく弛ませ風は瞬時に広がっていく。

まるで、何かを告げるように。

「てーんちよー。この車、鍵付いてますよー」

コンコン、と軽くフロントガラスを叩いて青年が男を呼んだ。

4人乗りのスポーツカー、しかもかなり高級そうなそのドアを開け、男性は中を探っていく。

と、青年の服の裾を掴む手があった。

「犯罪は駄目だつ！ そんな子に育てた覚えは無いぞつ！」

「…そりやまあ姉さんに育てられた覚えは無いけど」

「——つ?! …そうか、もう私は要らないんだな」

なんでそうなるのか、と俯いた女性に向かつてぶんぶか手を振り振り必死にフオローを凶る青年の背に、シートに座っているお陰で見えた女性のほんのり嬉しそうに弧を描いた口元を確認してから、ハンドルに大きな溜め息をぶつけた。

徐々にドツボに嵌まっていく哀れな青年に、かつての己の姿を見てしまう。

——昔の俺を今の奴らに当て嵌めるようになった、か。

俺も年だな、と何となく首を竦めてキーを捻ろうとした男性の左手に、何か固いものがぶつかった。

暗い所為でよく分からないので、幾つか在るうちの一つを持ち上げ、窓ガラス越しの光に照らし出す。

視認した瞬間、迷わずそれを放り投げ、路上で真っ赤になっている女性と、未だに何を言っているのか自分で把握していない青年の腕を掴んで駆け出した。

「ちよ、ちよつと店長！ …どーしたんですか?! 緊急事態なんだから使っちゃいましょーよつ！」

「そうだぞ。もう少しで言質が取れたのに」

噛み合っていない二人の言葉を右から左へ聞き流し、とりあえず全力で駆けて行く。

「まったくお前は馬鹿かっ?! 鍵は付いてるけどガス欠な上に、なんで銃だのボウガンだのが山盛りになってる車を一々見つけるんだっ?!」

「…893か?」

「や、首突っ込まない方が良いでしょう。だからセルフかガソリンスタンドまでバン押しでいった方が良いつて言ったのになあ」

離れて行くその背を押すように、遙か遠くから砂塵混じりの風が吹きつけた。

『突然ですが命令です。——全員、対シヨック姿勢っ!』

身を起こした物や指示に従っていかなかった者達がすつころび、森の主達が荒れ狂う狂風に耐える中、西条はそれを発見する。

「…何がなんだかだけど、相変わらず無茶苦茶だ…」

呆然と上を見上げる西条。

その先にあつたのは、紅。

天蓋から突き出していた何かと、それに空いていた穴から吹き出る、真っ赤な爆炎だった。

第拾伍話 『だから彼女は空を行く』

——時間は僅かに巻き戻る。

神族達が射出レールの方向を調整し、ヒヤクメが小竜姫とワルクユーレに説教かまされていた丁度その頃、天蓋の裂け目に設置され、腹部の先端を裂け目の内部へと産卵するかのように差し込んでいた大逆天号から、奇妙な物体が投下され、ゆつくりと地上に降り立とうとしていた。

表面に一際大きく『0』の刻印が打たれた、全てがガラスのような透明で硬質な素材で出来た箱。

その内部に一体の人形を閉じ込めた、棺桶にも見えるそれが、パラシユートの白い花を咲かせ、斑に染まった闇を掻き分け降りてくる。

静かに着地した棺桶に群がった埴輪兵達がパラシユートを取り外し、頭の上に担いで運んでいくのを、何の感慨も籠っていない瞳で見下ろしながら、アシユタロスは静かに目を閉じた。

足元を鈍い緑色で照らし出されながら、魔神は己の意識を伸ばしていく。

下へ、広く、より深くへと。

その意識の広がりによって導かれるように、アシユタロスの足元で内側から濃い緑色の光を放つ球体が鼓動し、その下部から伸びる根を大地に侵食させていく。

分かれ、振れ、捻れ、絡み合い、そしてそれは食い込んでいった。

「システム『死津喪比女』地脈エネルギー吸収根、予定された配置の完了まで、後3、2%」

「推定残り時間、3分34秒」

「地脈堰形成準備、開始します」

テレサたちの声に答えでもしているかのように、球体の輝きが強さを増した。

呼吸するかのような光の胎動は徐々に間隔を狭め、その表面を硬化させていく。

同時に地面へと潜り込み続けていた根の動きが止まり始め、緑から白に近い灰色へと変色を開始する。

『ポー』

棺桶を運び終えた埴輪兵達は周囲で展開される奇妙な光景にも、真剣な表情で作業を続けるテレサ達にも興味を見せず、動きを見せない人形に接続したコードを球体の傍へと運んでいった。

ずぶり。

ずぶり。

固い筈の表面を容易く突き破ったコードの先端は、内部に引きずり込まれるようにして消えていく。

十数本もあつただろうか、それを全て飲み込んだ球体は、まるで痛みに震えるように一度大きく表面を波立たせ、そして激しく明滅を始めた。

まるで何かを読み込んでいるかのようなその輝きは、やがて統一された一つの流れを生み出していく。

内部から滲み出していた輝きは表面を走るようになり、その経路はまるで集積回路の如き数千条ものラインを表面に描き出した。

其処に至り、球体の上で動きを止めていたアシユタロスがゆっくりと瞼を上げた。

「…漸く、漸く……ここまで辿り着いた」

言葉は何かを得たような、それでいて何かを失ったような、そんな複雑な色が籠められていた。

前を見渡せば、その先には未だ火線と爆発の錯綜する戦場が在る。

時折空を行き交おうとする巨大な影が地上から打ち上げられた対空砲火に捕まりかけ、慌てて身を翻して上がって行く事もあれば、じりじりと接近する塊の中から放たれた銃弾や霊力砲に身を晒し、不具合でも起こしたのか崩れ落ちるテレサの姿も見受け

られた。

瞬間、此方側の緩く弧を描くテレサの集団から一斉に砲弾が打ち出され、だが人と獣の紡錘形の塊が生み出した淡く光る壁に弾かれ、僅かに揺らす物の効果を見せずに消えていった。

拮抗した一瞬に生まれた燐光が戦場を舞い、しかし誰もがその幻想的な光景を見上げる余裕も無くひたすらに引き金を引く。

今、それを意識に乗せているのは、確かに魔神だけだった。

「偉い努力も、無慈悲な夜も、もうすぐ終わる。幸せを幸せと気付かぬままに安穩と過す者達の愚さ……僕達はそれにこそ憤りを覚える」

僅かに歪んだ口元は、その言葉とは裏腹に歓喜さえも見せている。

「——さあ、奪おう。失った物を、得る事すら許されなかつた幸福を。奪う事でしか得られぬと言うのなら、見る事しか許されなかつた束縛から逃れ得るのなら」

大きく振り上げられたアシユタロスの手が答え、埴輪兵達が再び棺桶を担ぎ、鈍く輝く球体へと近付いていく。

瞬間、まるで歓喜に打ち震えるかのごとく、球体が脈動した。

動きを止めていた筈の根が蠢き、一瞬の内に近くに無造作に設置してあつたガラスの棺桶を、中身の機械人形ごと絡み取る。

そしてついだとばかりに周囲に居た埴輪兵達、テレサ達の一部が囚われていく様も、予定通りとでも言わんばかりにアシユタロスの顔に動揺は現われない。

「——奪おう。ただ我らが求めた物を！」

そして、全てが引きずり込まれた。

月に吼える 第三部

「ちゅー訳で、なぜか！　だーれも嫁に来てくれんのよ。どー思う？」

「ふむむむむ。中々難しい問題でちゅねー。アピールがたりないんじゃないでちゅか？　男は積極的に行くほーが良いとパピリオは思うでちゅー」

「なんとっ?!　まだ足りなかつたかっ?!」

機会を待つ、とは言った物の、結局やる事も無く静かにその時を待っていた忠夫は、何か話と言うパピリオの求めに応じてちよつとした雑談を試みたりしたのだった。

何故か途中で忠夫の『こんなに頑張ってるのに何で俺には嫁が来ないんじゃー?!』
と言う叫びが何度も何度もそれこそカオスと土具羅がもう諦めたように静かにしろと
さえ言わなくなった頃合。

ませたパピリオが忠夫相手に人生相談——と言うか恋愛の先生ぶってみたり。

「そうかあ。足りないのかあ。：今度からちよつと変えてみるか?」

「例えばドーユードーにでちゆか?」

「よ、よ、よー：『ハイその美人のねーちゃん嫁に来いっ!』って感じで積極性と気軽
さをアピールしてみたりとか! ドーよ?!」

老人と土偶の呆れた視線にも気付かず提案した忠夫に対し、パピリオは細い腕を組ん
で沈黙考。

ふむふむと何度か反芻するように頷いてみたり、勿体ぶつて唸ってみたりと芸の細か
い事である。

そして、反応を待ちつつやきもきとしていた忠夫を真っ直ぐ見つめ、パピリオは真剣
な表情で言い放つ。

「OKでちゆ。もうパピリオの教える事は何も無いでちゆ!」

「せ、先生っ!」

「師匠と呼びなちやいっ! 頑張るのでちゆよ。諦めなければ其処に道は開けるので

ちゅっ！」

あさつての方角を見上げながら指差したパピリオに対し、忠夫は心底感服した様子であつた。

無論、これだけ騒いでも少し離れた所で作業中の埴輪兵やテレサ達が気付かないのは訳が在る。

最初の段階で諦めたカオスが遮音性の高い結界を張つたからであつて、そうでなければ状況も忘れて大騒ぎする筈が無い——と、思われる、多分。

何処と無く羨ましそうに見つめるアルファ達はともかく、緊張感の欠片も無いのは相変わらず。

頼もしいのかそれともただ馬鹿なだけなのか、カオスをして判断に困る二人組であつた。

「…と、ふむ。具合はどうかの？」

『問題無いな。以外にしつくりくる』

ともあれそんな呑気な奴らは放つて置いて、カオス達はそれなりに準備を整えようとしていた。

カオスに背中を向けて座り込んだ土具羅の後頭部のカバーが外され、露出した内部から明らかに後付けのコードが一本伸びている。

余り長さの無いその先端はソケットが接続されていた。

土具羅の隣で腕のカバーを嵌めなおしていたシータが忠夫達を羨ましそうに指を咥えて見ているのを横目に見つつ、カオスはモノクルを取り外す。

教育に悪いから止めると言うのか、それとも好い加減に現実を理解させるためにもはつきり事実を伝えるべきか。

どちらにしても業腹であるので、カオスは暫し思考した後、やはり沈黙を選ぶのだった。

「データの受け渡しはこれで出来る筈だが、部品も流用じゃし規格も違う。これ以上はお前らで何とかしてくれ」

『…ま、元が無茶な考えだからなあ。上手くいかなでも知らんぞ?』

「ワシこそ知らんわい」

アルファが空けた穴にソケットを通し、カバーを元通りに土具羅にはめ込む。

傍から見れば後頭部から一本だけコードが伸びているので格好悪い事この上ないが、所詮応急品だと諦めるしかないのだろう。

溜め息混じりに後頭部を撫で肩を落とす土具羅を突付き、アルファとベータが楽しそうに笑いあっているのを止めるか止めまいかと一瞬悩み、まあ良いかとあっさり見捨てたカオスの瞳に、虚空に視線を向けるシータの姿が写りこんだ。

「ドクター・カオス！ 母から・緊急連絡！ 此方に・攻撃が——」

言葉は最後まで紡がれない。

瞬間、衝撃が撒き散らされた。

轟音とソニックブームが倉庫の中に吹き荒れ、埴輪兵を吹き飛ばす。

収まる間も無く紅が満ちた。

コンテナに詰められていたのは弾薬や整備用部品。

音速超過で突き抜けた「何か」が連れて来た熱と破壊が誘爆させた。

飛び交う銃弾。

炸裂する砲弾。

辺り構わず跳ね回る鋼鉄の部品たち。

歪んだコンテナから弾け出した弾丸が隣のコンテナを抉り、内部から鳳仙花の如く更

なる破壊を撒き散らす。

砕け、歪み、更に壊し、そして衝撃。

確立した自意識の無い筈の大逆天号が、痛みに震え悲鳴を上げ、その巨体を大きく振

る。

のたうつ動きに、しかし力は無い。

その足が二、三度天蓋の上部を叩き、再び眠るようにゆつくりと落ちた。

巨体の腹部、天蓋内部に差し込まれていた部分を上下を貫通し、決して小さくは無い傷が開いている。

整然と整えられていた格納庫は、一瞬にして廃墟と化していた。

赤く光る警報灯が辺りを照らし、聞こえる筈の警報はしかし麻痺した鼓膜を揺らしただけで、その音までには伝わらない。

ちろちろと火の踊る格納庫に白い煙が吹き付けられた。

白煙に押されるように勢いを衰えさせていく炎達の中、瓦礫を押しつけ、細い腕がコンテナの破片を吹き飛ばす。

すっかり見通しの良くなった空間で、頭を押さえながらカオスがゆつくりと身を起こした。

「……った、あいたたた。老体には堪えるわい」

「全包围多重展開型・斥力場結界・緊急全力起動により・オーバーヒート。再使用まで・15分。……お怪我はありませんか・ドクター・カオス？」

心配そうなベータの言葉に、カオスは体をあちこち触り、ぐるぐると腕を回し、よつこらせと掛け声を出しながら立ち上がる。

防ぎきれなかった振動が僅かに視界を揺らしてはいるものの、外傷は全く無いようである。

そうこうしている内に他の3人と土具羅も体を起こし、周囲をきよきよと見回していた。

ベータの頭を撫で、良くやったと声をかけてカオスも周囲を見渡す。
惨憺たる有り様であった。

天井に吊るされていたクレーンは歪んでカオス達から少し離れた壁に突き刺さり、山のように積んであったコンテナの群は全て内側から弾け飛ぶか歪んで潰れているかのどちらかである。

擦ったそうにしているベータの頭をもう一度撫で、カオスはやれやれと溜め息を付いた。

と、少し離れた所で壁が崩れ、中から小柄な影を吐き出した。

「いつ、いきなりなんでちゆかつ?! ちよつと痛かつたでちゆよつ?!」

「あれで痛かつた済むのかお主は」

「距離がありましたので・パピリオ様達は・結界の範囲外だったようで——あつ?!」
ベータの言葉に、その場に居た者達の空気が一瞬凍った。

パピリオも何かを思い出したように辺りの残骸を手当たり次第に放り投げては何かを探し出した。

泣きそうな表情でおろおろと辺りを意味も無く駆け回るシータとベータ。

慎重に先程まで“彼”が居た所を注意深く探るデルタ。

舌打ちしそうな雰囲気、だが焦った風に見渡すアルファ。

「よ、ヨコチマが居ないでちゅーっ?!」

パピリオの悲鳴が、いまだ炎の消えやらぬ元格納庫に木霊する。

「落ち着け。小僧がこの程度でどうにかなるか」

更に勢い良く残骸を散らかし始めたパピリオに、カオスの疲れたような声が届いた。

きつ、と涙目で睨みつけるパピリオに対し、カオスは漸く揺れの収まりつつある頭を

押さえて理由を告げる。

「銃弾を喰らっても破れない結界に閉じ込められとる以上、多少の事では心配は要らん。

じゃが、あやつの事じゃしのう…」

「どーゆー事でちゅか?!」

詰め寄るパピリオに、カオスは親指で其処を示した。

視線で辿れば、其処には大きく口を開けた巨大な裂け目。

カオス達から僅かに離れた場所まで近付いているそれを見て、パピリオの顔が一瞬疑

問符を浮かべ、次の瞬間蒼褪める。

「もしかして…」

「こーゆー時に限って、要らん問題を起こしよる」

どーも、また落ちたようであつた。
忠夫が。

第拾五話『だから彼女は空を行く』

衝撃波が大地を削り、砂塵を巻き上げ後方へと走り抜けていった。

魔神は顔の前に構えていた手を下げ、苛立ちの混じった目で前を見る。

「…神族どもめが、今更何を足掻く——」

瞬間、二度目の衝撃。

轟音と共に、真上からの衝撃が魔神を襲う。

不意を打たれた驚きゆえに僅かに体勢を崩したアシユタロスが跳ね上げた視線の先に、その光景が広がっていた。

天蓋に突き刺された巨大兵鬼の腹から、まるで零れ落ちるかのごとく噴き出す炎の

塊。

僅かな間震えるように盛り上がったその赤い塊の中から、三度の衝撃と共に地面に向けて伸びる炎の槍。

赤みを失いながら地面に突き立ったその中には、砕けたコンテナと様々な部品、そして巨大兵鬼を構成していたモノが見えた。

呆氣に取られた、と言うのが一番近い表情だった。

僅かな間、意識を取られたその瞬間に、瞬きの如く瞼が落ちる。

次に開いた瞳には、まるで拭い去られたように——いや、始めから無かったかのごとく感情の波は見えなかった。

無機質な顔色のまま、小さく指を鳴らす。

虚空が歪み、奇妙な子悪魔——通信鬼がその眼前に出現した。

「——艦橋。状況を知らせよ」

語りかける声には動揺の欠片すらも残っていない。

最早、それが最初からあったのが間違いであったかのように、魔神は冷徹な声で命じる。

暫しのノイズの後、通信鬼から聞こえたのは騒がしく動き回る足音と、悲鳴地味たテレサ達の声。

『げ、現状は未だ不明です。ただ、何らかの攻撃を受けたと思われれます』

「見れば分かる。被害状況は？」

『ええっと、その、補給物資投下口のモニターは…嘘っ?!』

通信機の間こうから聞こえる戸惑いの声も、その背後で相変わらず鳴り響いている警報の音も無視して、魔神は静かに返答を待つ。

ただ、僅かながらに、その瞳に苛立ちの色を垣間見せながら。

呆然としているような一瞬の間があり、やがて返ってきた答えは、魔神の眉根を潜ませるのに十分な物であった。

『投下口、大破…。そこから、上から下に向かって大きな穴が、何か貫通したみたいに見える空いています…修復には、かなりの時間を要するかと思われ——』

全ての言葉を聞かず、アシユタロスは通信鬼を消した。

「…先ず、こちらの補給を潰したか…」

舌打ちをしつつ、見上げた。

瞳が細められる。

『それ』が落ちてくるのを感じたからだ。

彼の編んだ結界に閉じ込められ、この戦いが終わるまでは囚われる事になっていた筈のその青年を。

その魂を包む、赤い珠の存在を。

「本当に、煩わしい男だ……」

音が出るほど歯を食いしばり、アシユタロスはゆっくりと、それが落ちてくるであろう場所へとその身を進める。

事此処に至つては、既に大勢に影響を与える事など出来ない筈の青年を、今度こそは完全に、最早何も出来ないようにする為。

もう直ぐ地上に付こうと言う赤い珠の中で、青年が魔神を指差しじたばたと足掻いているのが見て取れる。

だが、その動きが赤い珠の軌道に影響を与える事は、無い。

余裕を持ってその手を伸ばして――。

気付いたら落ちていた。

「…は？」

思いつくのはついさっきの出来事。

カオス達になにやらごちゃごちゃと作業中だったその裏で。

パピリオに「女の子への接し方」とやらをふんふんと頷きながら真面目に聞き入り、小さな身体でまことしやかに語る彼女の言葉に何度も目から鱗が落ちると共に、今までの自分がいかに駄目だったかを一つ一つ教えてくれた事を感謝していた。

『とまあ、駄目駄目だったか分かりまちたか？』

『うーむ。…面倒臭いなあ』

が、いかに彼女達が細かな所を見ているか、とか。

どんな言葉を掛けられれば喜ぶのか、とか。

反応を見て手応えを感じてから退くか攻めるか見極める、とか。

いっぺんに詰め込まれたので少々頭がパンクしかけていた。

『馬鹿ーっ！』

『ほぶろわっ?!』

思わず本音を漏らした忠夫は、瞬間、すべーん、と地面に叩きつけられた。

激しく地面にぶつかり跳ね返った忠夫を上がり際にキヤツチしつつ、パピリオは怒り

心頭と言った風情で睨みつけてくる。

いきなりの衝撃に目を回している忠夫を、そんな彼女は叱り付けた。

『千里の道も一歩から！ マメな男は好感度もうなぎ昇り！ 努力を怠る愚か者が得る物など一欠けらも無いのでちゅ！』

『し、しかしやなあ』

『しゃらーつぶでちゅ！ 放つて置いても向こうから寄つて来るとかへそで茶をわかしまちゅよ！』

微妙に文法が間違っている物の、怒った女性がいかに恐ろしい物かを色んな場面で少しは学習した忠夫は、素直に正座しながら尻尾を巻いた。

『全く。…まあ、どーしても駄目だったらパピリオに相談しなちやい。と、友達からなら初めてやってもいいでちゅから』

『そうやなっ！ そして行く行くは友達から義兄ちゃんへと！』

『てい』

『ドリブルはっ！ ドリブルは止めてなんか出ちやうからっ！』

そう、だむだむと何度も床と少女の掌を往復していた筈だった。

しかし今、何故か空中落下中。

高速で攪拌された所為で記憶は定かではないが、状況からすると――

「…ドリブルミスって落としやがったなパピリオーっ！ 後でお前がルシオラの事何て言つてたかチクつちやるーっ!!」

と、叫んで上を向いた所で、その横を掠めて巨大な何かの残骸が炎を纏いながら落ちて行つた。

硬直する忠夫。

数秒の間を置いて、とりあえず何か知らんが大変に危険な状況下にあることを理解し、しかし何か出来る訳もなく、恐る恐る見下ろしてみた。

——目が合った。

いや、向こうは視線がかち合った事に気付いたかどうかは分からないが、その視線が忠夫をしつかりと捕らえている事に違いは無い。

なんと言うか、憤怒とか殺意とかゆるー感じの籠りまくったアシユタロスの視線が忠夫を貫きその背中に嫌な汗を大量に噴出させる。

「うわーっ！ すまんパピリオ俺が悪かった助けてくれーっ！ 神様仏様小竜姫様ワルキューレにメドーサにルシオラでも良いぞおおおつ!! 今なら漏れなく俺の嫁に来れる特典付きと言うかむしろそっちメインでもっ!!」

涙をどばどば撒き散らしながら周囲を見回しても、辺りは先程落ちて行つた瓦礫が生み出す煙と砂塵に巻かれて視界は悪い。

ただ、下から上がってくる——いや、忠夫が落ちているのだが——魔神の姿がどんどんと大きくなって、もう直ぐ接触する所まで来ている事実は無くならない。

「嫌じゃーっ！ かーいい嫁さんもちやいやラブラブな夫婦生活も経験しないで終わりたくねーっ!!」

結界の中で暴れまわり、必死で赤い珠を内側から叩いても蹴つても、それは小揺るぎもしなければ軌道も変えない。

重力に引かれるままにゆっくりと落ちていき、口元を愉悦にか歪めた魔神の手が、それを掴もうと伸ばされ——

——同時だっただろうか。

それとも、僅かに早かっただろうか。

口から靈波刀を展開させた狼が地面を突き破り、赤い珠の落下点に入ったのは。

突然襲った衝撃波と、天蓋から降り注いだ残骸と、大逆天号から吹き降ろした火柱に動揺したテレサ達の足元、当にその中心部。

戦闘で黒く灼けた大地を突き破り、その身を土と泥と汚水に汚しながら、一匹の獣が大きく跳ねた。

何の障害を見出す事無く、ただ落下する『厄介物』に意識を取られていたアシユタロスは、その狼に気付くのが、ほんの僅か、遅れた。

その一瞬で地を蹴った狼は、己の身長の何倍もの距離を跳び、その手に赤い珠を捕え様としていた魔神の真下から靈波刀を突き上げる。

「何っ?!」

反射的な動きで仰け反る魔神。

高速で、しかも完全に意識に無かった位置からの不意打ちであったとしても、それが例え直撃したとしても魔神には掠り傷さえ負わせることは無かっただろう。

だが、不意打ちであったが故に、反射的に実行に移された回避行動は魔神の身体を動かした。

風呂敷包みを背負い、赤いバンダナを首に巻いた狼は、魔神の前を通り過ぎ——だが、してやったりと口元を歪める。

その足でアシユタロスの胸元を蹴り付け、更に加速。

口元の霊波刀は既に無い。

東京の地下に張り巡らされた下水道を使い静かに移動し、其処から地上までの厚い壁を掘り潜み、騒動の音が一番大きくなったタイミングと勘と『経験』で飛び出し、そしてアシユタロスの動きを遅らせた、その時点でお役御免。

魔神が状況を理解し、行動に移すまでの一瞬の隙間。

その間に、全ての事は終わってしまった。

「——っ?!」

ごくり。

パピリオの掌に乗るほどの大きさはある赤い珠、忠夫を閉じ込めたそれは、大きく開かれた狼の口に消え、後には放物線を描くままに落下を始めた狼と、呆気に取られて硬直する魔神。

は、と意識を取り戻し、慌てて狼が落ちた辺りを見回す。

しかし、視線の先には轟々と炎を纏わり付かせる残骸の山と、消化に駆け回る埴輪兵の姿、そして湧き上がる黒煙。

視界を塞がれ、大地すら満足に見えず、だが、事実として、魔神の手に囚われていた青年はその手の中から逃げ出した。

そう、逃がしたのだ。

「……どこまでも……ふざけおつて……!!」

ぎり、と噛み合つた歯が軋む。

何処で間違えたのか。

十分な戦力を準備し、神魔族の介入を防ぎ、後は人間達のか細い抵抗を排除するだけで良かった筈だった。

だが、大逆天号はその腹から炎を吐き、侵入不可能な筈のこの地に確実に神魔族が存在し、か細い筈の人間達は妙な戦力と共に未だ抵抗を続けている。

掴んだ筈の手から逃れた「横島忠夫」の出来損ない。

見透かしていたように突然何の脈絡もなく現われた狼。

覚える筈の無い苛立ちに唇を噛み締め、魔神は大きく舌打ちをした。

だが、今更どんな不確定要素が現われようとも、此処まで決まった流れは止める事は出来ない、と自分に言い聞かせ、ゆっくりとアシユタロスは振り返る。

今の一連の騒ぎに動揺して動きを止めていたテレサ達に、僅かに苛立ちの燦る視線を向け、平坦な声で告げる。

「解凍処理はまだか？」

「は、はいっ！ す、直ぐにでも始められますが……」

「ならば直ぐに始めろ！ 急げ！」

雷に打たれたように一瞬硬直し、慌てて動き始めたテレサ達を見ながら、魔神は地面に降り立った。

足元に穿たれた、先程狼が飛び出してきた穴を見下ろし、その感情を押し殺すように大きく吐息をつく。

それをなんと言ったか、一瞬アシユタロス自身も分からなかった。

「…ふむ」

まさかな、と鼻で笑い、踵を返す。

視界を埋める炎の残滓と黒煙を疎ましげに眺めつつ、まるで花が開くようにゆつくりと内側から綻びつつある灰白色の球体を見上げながら、アシユタロスは吐き捨てた。

「不安など感じる物か…！」

「本気ですか?!」

「勿論。リンクは既に完了しています。何の問題もありません」

「ま、丁度良いデモンストレーションにはなると思いますが」

満月の下、天蓋を見下ろす位置に、彼女達は居た。

幾何学模様の描かれた細い船が三隻。

空を飛ぶそれを船というならば、であるが、その操縦席に収まった長い髪の女性の言葉に、短髪の動き易そうな、しかし奇妙とも言える服装の固い雰囲気的女性が慌てた様子で問いただす。

しかしそれはあつさりど、否定され、さらに良く似た、しかし少し軽い印象を与える巫女服にも似た服を着ている女性の軽い言葉に頭を抱える事になる。

「私はお止めしましたからね…」

「いーじゃない。途中ですれ違った神族も慌ててたみたいだし、そこまで悪い結果にはならないと思うわよ?」

「そー言う問題じゃないっ! な・ん・の・為に! 此処まで来たと思っっている! 不用意な刺激を与えるのはどうかと言っっているんだっ!」

鼻息も荒く吼えかかる女性の言葉を右から左に聞き流し、どーしますか、と視線で問う。

「予定の連絡チャンネルが開かれていない以上、何らかの異常事態が発生しているとしても良いでしょう。恩を売るチャンスですよ」

「…もーいいです。誘導と照準は此方でやりますから、トリガーはお願いします」

「私が引いても良いですかー？」

「駄・目・だ」

姦しく騒ぎ始めた二人を慈愛の籠った目で見ながら、女性はそつと目を閉じる。

瞼の裏に浮かぶ、月。

真円を描くその姿に愛しさと暖かさを覚えながら、その幻像と重なる月を、開いた瞳に写しこんだ。

「…離れた姿を懐かしいと思うのは、何時以来でしょうか？」

微笑みながら囁いた言葉に堪えるように、満月の光が輝きを増した。

第拾六話 『そして彼らは銃を掲げ』

轟々と耳元を過ぎていく風の音が途絶え、摩擦熱で赤く染められていた小竜姫の視界が不意に元通りの色彩を取り戻した。

大気を突き破る為に槍へと変化させて前方へ突き出していた竜の牙を元通りの勾玉に、顔の前に掲げていた表面が焼け焦げ煤けた盾をニールベルグの指輪に戻す。

ふう、と彼女は小さく吐息を付き、軽く身を捻って足元を見下ろした。

視界一杯に広がる青い地球と、その所々に混じる白、そして様々な色に彩られた大地は暗闇の中に沈み、その代わりとでも言うかのように小さな輝きが無数に地形を象っている。

その光一つ一つの下に人間の生活があり、そしてそれが見下ろす限りのあちこちに咲き乱れている。

神族、魔族、妖怪、そんな彼らを押しつけ時には利用し広がる人類の象徴。

感慨とも羨望ともつかない感情を抱き、しかし小竜姫はそれを振り切るように背後に背負ったヒヤクメに声をかけた。

月に吼える 第三部

ぐつたりと白目を剥いて小竜姫の背中に体重をかけてくるヒヤクメを揺さぶり、呆れたような声音を出す。

「ヒヤクメ、何時まで寝ているのですか」

「寝てないっ！ 寝てないのねーっ！ 逝きかけてたのっ!!」

いきなり体を起こしたヒヤクメは、あちこち焦げたまままでどぼどぼと涙を零しながら、何やら必死に叫び倒した。

その拍子に彼女の身体と小竜姫の身体を結び付けていたロープがボロリと灰になって崩れ落ちる。

反転させて向き直った小竜姫に掴みかかるヒヤクメは、なんだかとても切羽詰った迫力に満ち溢れていて、小竜姫は思わず僅かに後退さった。

「私は竜神じゃないから小竜姫みたいに熱には強くないの！ 本気で死ぬかと3回くら

「思ったのねーっ！」

その言葉に小竜姫はぼん、と両手を打ち合わせて納得した。

確かに異様に丈夫だったり炎を吐いたり火口に住んでいたりする彼女達の種族と違って、ヒヤクメははつきり言つて肉体的には弱い部類に入る。

龍の牙とニーベルングの指輪を使つて大気圏を突破したとは言え、その時に産まれる熱は加速度も相俟つて凄まじいの一言に尽きる。

はて、とすれば、

「何で生きてるんですかヒヤクメ？」

「結論がそれっ?！」

心底驚愕した風情で問い掛けてくる小竜姫に対し、ヒヤクメはとりあえず反論にもならない叫びを返して、疲れきつたように膝から崩れた。

そのまま涙を流しながら何処へとも無く漂流を始めた彼女の襟首を引つ掴み、小竜姫はよつぽど怖かつたのかえぐえぐと肩を震わせているヒヤクメと向き直る。

「ま、まあ無事だったんだから良いじゃありませんか」

「……の何処が無事に見えるのね？」

じつとりとした視線を向けてくる彼女に誤魔化し笑いを見せ、小竜姫は慰めるようにその体に付いた煤を払い落とした。

あらかたの煤が落ちる頃にはヒヤクメも少しは立ち直り、まだ少々鼻を噉りながらもぐしぐしと目を擦って背中を伸ばす。

何故かあれだけ焦げていたのに服の何処にも欠損が見られないのは不思議であるが、まあサービスにもならないような気がするので誰も困らないだろう。

「さ、始めますよ。どうしたのですか、ヒヤクメ？」

「いや、何か凄くムカつとくる事を言われたような気が……」

あらぬ方を見上げながら額に血管を浮かべてひくひくと口元を引き攣らせていたヒヤクメであったが、やがて諦めたように溜め息をつくときよろきよろと真剣な表情で周囲を見回し始めた。

数回ほど視線が辺りを往復し、それほどの間も置かずに一点に向けられたまま固定される。

額に手を翳してじつくりと其処を観察する彼女の視線を追った小竜姫の目は、しかしその先には何も見つけることは出来ない。

精々星の光と丸く切り取られたような黒い空間が広がるだけである。

しかしヒヤクメはそれをしつかりと確認したようので、翳していた手を戻すと腰に当ててその表情を苦く歪めた。

「あつきれた。本当にすぐ近くにあったのねー」

その言葉の意味を理解した小竜姫の表情が曇る。

「用意周到というかなんと言うか……。美神さんの言った通りですか」

「ま、無かつたら此処まで苦労してきた甲斐が無かつたから良いんじゃない？」

肩を竦めるヒヤクメの襟首を掴み、今にも舌打ちしそうな様子で小竜姫は加速する。

表情の陰は、しかしそれほどの間も置かずに不敵な笑みへと姿を変えていた。

「そうですね。折角ですし有り難く使わせて頂くとしましょうか……」

第拾六話 『そして彼らは銃を掲げ』

「ゲホッ……つた、いきなり何だつてんだいっ！」

白い毛皮を押し上げて立ち上がったメドーサの悪態に、彼女を庇うように覆い被さっていた猪が同意とばかりに大きく鼻息を吹き出した。

その鼻の上を軽く撫で、小さな声で礼を言ったメドーサに、猪は気にするなどと言

わんばかりに口の端を歪め、身体を震わせて砂埃を撒き散らす。

苦笑いしながら目の前に漂ってきた土煙を追い払う彼女の目は、薄く砂塵に覆われた前方に向いていた。

先程まで間断無く叩き付けられ続けていた弾幕はその姿を消し、戦場には奇妙な静けさが漂っている。

上空から夜の暗さを押しつけていた照明弾も先程の衝撃で全て叩き落され、今は押し殺したような獣達の呼吸と、さざめくような人間達の会話だけが残っていた。

ふん、と鼻息を一つ置き、メドーサは猪が覆い被さってきた時に間違つて刺してしまわないようにと放り出した刺叉を拾い上げ、不敵な笑みを口元に乗せる。

少々疲労は溜まっていますが、未だ四肢は動くし気合も十分、両陣営とも混乱しているようだが、見方を変えればこれ以上のチャンスも無い。

指令を出す頭脳が両方とも動きを見せた気配が無い以上、先程までの戦いの空気が残る今なら先頭が動けば後ろも引つ張られ、一気に乱戦の態まで引きずり込む事も十分に可能。

「——さて、行くか」

「待ちたまえ」

猪の背中によじ登ろうと振り向きかけ、しかしいきなり背後から差し出された手に手

首を掴まれ止められた。

思わず瞬時に振り払い、身を翻して刺叉を背後の相手の咽下に突き付ける。

幾ら疲れているからといって、あつさり背後を取られた事に少なからぬ驚きを覚えつつ殺気を向けた先には振り払われた手を軽く振りながら、呆れた様に半眼で見えてくる髪の毛の薄い眼鏡の男が一人。

集団の先頭も先頭、最先端であるにもかかわらず何度かその姿を見かけた神父服の男性は、努めて冷静な口調で語りかけてきた。

「何をするつもりだね？」

「知らないで邪魔した訳じゃないだろう？」

「邪魔されるような心当たりでも？」

突き込むようなメドーサの口調と冷たい視線に晒されながら、唐巢神父は微笑みさえ浮かべながら柔らかい口調で言葉を返す。

何時の間にやら彼の後ろに駆けつけて来た数十人のオカルトGメンやGS達の注目が集まっているのを感じ、メドーサは渋々と刺叉を下ろした。

「まあ、もう少し待って欲しいんだが。今ピート君が霧になって偵察に行ってくれてるから、彼が帰ってきてからでも遅くは無いだろう？」

「…チツ」

はつきり聞こえるほどの舌打ちをし、メドーサは刺叉を地面に突き刺した。

視線を外し、ようやく砂塵の収まりつつある前方を見る。

闇に包まれた視界の向こうに僅かに見える緑色の灯り、不気味に明滅を繰り返すそれを見つめながら、メドーサは不貞腐れたように腰を下ろして胡座をかいた。

その隣で黒く焼けた砂を踏みしめる音がする。

横目に見上げた視線の先に、唐巢神父が苦笑いを浮かべて立っている。

メドーサにだけ聞こえる小さな囁き声が、彼女の鼓膜を柔らかく揺らした。

「下手に乱戦が始まってしまうと、効果的かもしれないがこっちの被害も一気に拡大するからね」

見透かしたような言葉の効果か、メドーサの視線がそっぽを向いた。

勿論彼女は両方の被害——当然人類陣営の被害も——も折込済みであったわけだが、一々口に出す事も無いだろうと無言を通す。

例えどれほど甚大な被害が出ようとも目的を果たせば良しとするか、限りなく少ない被害で事を運ぶ事を第一とするか、性格からと言うかこれまでの二人の積み重ねた経験が出した結論の差異ではあるが、メドーサの方針は受け入れ難い物があるだろう。

特に、被害を折り込まれた方には。

だが、押し留めるにはこれ以上ない場所に陣取り、さらに人手も集めている唐巢神父

を排除するには少々人目があり過ぎた。

「あまり物騒な事は考えないでくれたまえ」

「…知らないね」

押し殺された殺気をさらりとかわした神父に苛立ち紛れの答えを返しつつ、メドーサの瞳は前だけを向いている。

どんな小さな動きをも見逃さない為に。

「こんな膠着状態なんて、どうせすぐ終わるさ」

どちらが先手を打つのか、いまだ分からなくても。

それが彼女の出した答えだった。

其処まで考えて思考を切り替え、その瞬間にふとした疑問が滑り込んだ。

「オッサン」

「……なんだね？」

オッサンと言われて一瞬否定したそうに無視しかけた物の、GS達に指示を出し終えた唐巢神父が口の端を引くつかせながら振り向いた。

其処彼処で弾層を詰め替える音や治療を求める声がさざめくように響く中、意外なほどに険の無いメドーサの疑問が問い掛けられる。

「私みたいな正体不明の怪しい女、放置しても良いのかい？」

メドーサ自身が言うのもあれだが、獣の集団を引き連れてくるわその先頭で声を張り上げるわ、しかも見た目は少女と言っても良いほどの姿である。

何処となく善人オーラを醸し出している神父の正体は分からなくても、戦闘中の動きや指示の的確さを見ればそれなり以上の能力を持った人物である事だけは、メドーサにもはつきりと分かつている。

そんな男が見た目は少女な彼女を後方に送るでもなく、その動きを止めただけで済ませていた。

とは言え抵抗する事も、結果的にであつても彼を排除することも無く止められたのは、それまでの単独行動、自分以外は全て駒でしかないと言う考えからメドーサが僅かにずれてきているからこそその素直さではあるのだが。

彼女本人さえ知らないうちの変化は、果たして誰の影響なのかは言うまでも無いだろうが。

「ふむ。答は非常に簡単だね」

問われた唐巢神父の答は、シンプルな行動で示された。

頭から突き出した耳と、スカート裾から零れ落ちる尻尾を指差し、信頼と諦めを足して気苦労を混ぜて頭痛で割って胃痛を振り掛け、最後に樂觀を塗した笑いを浮かべている。

「君、横島君の関係者だろうか？」

「…娘さ。今はね」

鼻を鳴らして呟くメドーサの言葉に、やれやれと肩を竦めて米神を擦り、神父は神父らしく十字を切つて踵を返した。

「だから、だよ」

「答になつてない気がするんだけどねえ？」

「なつてるさ。私にとっては十分に」

眼下の者達が目の前の敵に視線を向け合い誰も気付かないその間に、宇宙へと突破するついでに小竜姫＋１によって東京を覆う天蓋に差し込んでいた腹部を破壊された大

逆天号から、7つの影が飛び出した。

小さな影が2人づつ、それぞれ大柄な人影と奇妙な形の影を引っさげ慌てたように一氣に降下していく。

まるで、何かに追いついて立てられるように。

その何かは待つことも無く現われた。

先に飛び出したのは二人の女性。

己の力だけで空を飛ぶ彼女達はそれだけで人でない事を声高に叫んでいたが、互いから同時に放たれた閃光を契機に、その機動は一氣に加速。

絡み合うように近付き、離れ、時には揉み合いながら暗闇の中を縦横無尽に駆け巡る。張り詰めた緊張感が剃刀に指を乗せているような、僅かにでも動けば血と鋭い痛みが溢れ出すのではないかとも思える空氣の真つ只中に在った二つの陣にも、それに気付いた物がいたのか徐々に上を見上げて囁く者が現われ始める。

灯りさえあれば互いの顔さえ見て取れそうな程に近付いていた紡錘形の先端と弧を描いて包圍する二つの陣で、上と前とに視線を往復させる者達が増えた。

だが、時折上空で何かが激しく輝こうとも、新たに前の二人よりも蝶の様な小さな人影が飛び出してこようと、それが何かを叫んでも——あるいは、全く耳を貸さなかつた二人に対してブチ切れた様子でいきなり魔力砲を直撃させても。

動けない。

少し離れた場所では巨大な狼と人狼の群が戦い、咆哮と咆哮が重なり合い、刀と爪牙とがぶつかり合つて火花を散らしている。

激しく絡み合う巨狼と人狼の群の闘争も、しかし距離がある故に影響を与えるには至らない。

まるで、先に動いた方が負けるとでも錯覚したような雰囲気両方を包み込み――。

――それが所詮錯覚であつたと、思い知らされた。

「地脈堰、形成完了」

「最終チェック：完了。オールグリーン」

「圧縮解凍準備、完了」

静かに、深く眠つてでもいるかのように目を瞑っていた魔神の臉がゆつくりと開く。

疲れたように、諦めたように、或いは待ち焦がれたように、夜の闇に染み出す吐息が零れた。

「…宇宙処理装置、解凍」

言葉に応えるように、彼の背後の球体が光量を増した。

深緑色の光はその鼓動を加速させながら、表面に縦横無尽に走るラインを輝かせていく。

瞬間、球体が内部から弾けた。

辺りの空間を揺らしながら、華が開くように白い光が闇を散らして眩く散乱する。

至近に居たテレサ達は光学センサーの調整も追いつかないほどの光に目を庇い、次に襲い掛かった衝撃で吹き飛ばされた。

そして、西条達からも、その光景は見えていた。

「——しまった……」

体勢を整える僅かな間を惜しんで押し込むべきだったか、と舌打ち混じりの後悔が滲む。

西条の視線の先で、溢れる光を押しよけるように、巨大な「何か」が不気味な蠕動を繰り返していた。

白光の直後、その中心から天に向かって急速に伸びたそれらは、まるで植物の根のような外観を持っていた。

捻れ合い、振り合い、互いを食い尽くそうとでもしているかの如く、一抱えはありそ

うな根が条理を無視して天に昇る。

そして、見上げるほどの高さまで成長した根は、役目を終えたのか一部を残して急速に枯れていった。

『おばさま、何か生きて来たわ』
「…ええ。こつちからも見えているわ」

六道家が十二神将の一体、式神のシヨウトラにいきなり使ったテレパスの反動による頭痛を治療してもらっていた夫に寄り添いながら、美智恵は通信機越しに答えた。

二十年ぶりに全力で発信したせいかな、滝のように脂汗を流しながら頭を抱えて膝を突いた夫と、おっとり刀で参戦したは良いが危険すぎて——何が、とは言わないが——前線に出せないが為にサポートに回ってもらった冥子の、それなりに緊迫していないでもないような気がする声に少しだけ笑みを零し、「それ」を睨みつける。

シンダラに乗って上空を飛んでいる冥子の視線を彼女の肩に乗ったクビラから受け取りつつ、美智恵の口元は知らぬ間に嘸み締められていた。
枯れた根が轟音を立てながら崩れ落ちていく。

灰褐色に染まったそれが剥がれ落ち、内に秘めたそれは根の破片を振り落としながら、その姿を見せ始める。

「結局、間に合わなかったワケ？」

「ヤバイですかいノー」

「……まあ」

左腕と右足の太股に巻かれた血の滲む包帯を筆取り、ヒーリングと薬草の成果か傷一つ無く元通りになっていることを確認しながらエミは横目にそれを見る。

頭に巻いた包帯の上からヒーリングを掛けられているタイガーと、魔法で辺りに医療器具を走りまわさせながら彼の傷を治療していた魔鈴が見上げてそれぞれの言葉を漏らした。

彼女の横で、大逆天号が爆発した時に小竜姫が巻き起こした衝撃で落ちた巨大な鳥達がそれを時々突付きながらも大人しく治療を受けている。

鳥たちの視線も、変わった雰囲気を感じてか落ち着かない物になり始めていた。破片が大地を叩く。

驟雨のような音を生み出しながら、しかし地面を叩いたそれらは解けるように白い砂となり、次に落ちてきた破片が生み出した風に巻かれて消えていく。

やがて、その音も止んだ。

「ドクター・カオス。——あそこ・です」

「…見えとるわい」

『見えておつても何も出来ん。一端退いた方がいい』

足の裏から炎を噴出し夜空に浮かんでいた娘達の視線の先には、その巨大な物の根元近く、黒い髪のマリアと良く似た——いや、同じ顔をした機体が居た。

その下半身を埋め込まれ、項垂れたままの彼女に苦さの籠められた目を向け、だがカオスは澁々と離れた所に降りるよう指示を出す。

振り切るように背を向け、娘達に掴まれていない手で顔を隠して移動を始めたカオスの後を追いかけているが、土具羅は問い掛ける視線を光に浮かぶ魔神の影に向けた。

交わる事の無いその視線の先に、紫色の長髪を靡かせながら静かに佇む魔神へ、その真意を心の内で問いながら、やがて諦めたようにゆっくりと大地を目指して降りていく。

出現したそれは、茸の笠のような半球状に張り出した天蓋を持っていた。

良く見ればそれはパイプにも見える細い管の集合体であり、そのもう片方は根元に向かつて真っ直ぐに伸びている。

巨大な構造物を支える土台には、下半身を埋め込まれた黒髪のマリアと、一抱えはありそうな巨大な卵を供物のように備えたオルガンの鍵盤があった。

その周辺を囲むように、複雑かつ精緻な機械にも通じる構造が見て取れる。

しかし、その隙間に潜り込むように数え切れない程の植物の根が入り込んだその姿は、異様とさえ言える印象を与えていた。

どくん、と、奇妙な音が鳴る。

鼓動のような、嚙下のような音が何度も何度も繰り返す。

その度に、大小の根が蠢く。

吸い上げる動きを見せるその所々が淡く輝き、それはゆっくりと根を伝って機械の間へと飲み込まれていった。

徐々に鼓動が速度を増す。

『う、ぬあ?!』

『ち、力が抜けるっスー?!』

『地脈のエネルギーが、枯れる…?!』

東京を覆う天蓋の外側で、逆天号を相手に破れかぶれながら健闘していた筈の土着の

神々が落ちていく。

怪我の有る無しに関らず、気力の有無に因らず、土着の神々はその根源たる地脈のエネルギーを奪われた虚脱感と共に、空を飛ぶ神通力さえも失いふらふらと落ちていく。

その光景を目の当たりにしながら、身体の其処此処から黒煙を上げる逆天号の砲口に輝きが収束し始めた。

狙いは、最早動く事もままならぬ者達。

甲高い音を立てて、砲口に光が満ちていく。

「——あれを止めろおおおつ!!」

それが誰の声だったのか。

張り付いた咽の粘膜を無理矢理引き剥がすようにして放たれた、その怒声とも悲鳴とも付かない叫びに引き摺られ、人と獣は足を踏み出した。

ほんの少し前までの連携の取れた侵攻とは比べるべくも無い、それは、暴走であった。恐怖と絶望に落ちかける心が、最後の希望を求めて狂乱する。

僅かな望みを渴望し、迸る叫びが咽を荒らす。

狙いも付けずに引かれた引き金から吐き出された銃弾が、何も無い空と目前の大地を

削り砕き穿つ。

恐慌に陥りかけた集団の中から、必死に統制を取り戻そうとする誰かの声が僅かに頭を覗かせ、だが乱雑な足音と銃声と叫びの濁流に飲み込まれ、何の効果も無く消えていった。

そんな彼らを見つめる、幾千対もの機械の瞳。

それまでの物とは一変した、余裕と冷笑、嘲りに満ちた同じ顔が、行く先から届く光に照らし出され、悪夢のような光景を人と獣に叩き込む。

ある者は自分でさえも分からぬ怒りの声を上げながら、ある者は止めどない不安に涙さえ流しながら、ただひたすらに前進を続け。

「——コスモプロセッサ起動完了——敵性存在確認——自動防衛実行戦略的価値評価C——にて殲滅には及ばず——行動の停止を選択実行……完了」

顔を上げた黒髪のマリアの無感情な瞳に捕えられ、高速で紡がれた言葉が終わると同時、その場に縫い止められるように動きを止めた。

瞬間、誰もが声を失った。

声も出せず、四肢に幾ら力を籠めようとも、一切の動きが許されない。

僅かに意思の下に置かれたのは、両の瞳とその視界のみ。

騒乱の渦は、一瞬にして沈黙の折となり、そして絶望が心に牙を打ち込んだ。

毒が回るように狂乱が困惑へと、困惑が恐怖へと、そして恐怖が理解と絶望と混じり合い、虚脱感さえ伴う感情が押し寄せる。

それは憤怒であり、嘆きであり、悲哀であり、虚無であり——だが、全てが等しく無力だった。

視線の先には、ゆっくりと降り行く魔神の姿。

操作する為の装置なのだろうか、鍵盤の並ぶコスモプロセッサの前に立ち、最早人間も、機械も、全てを無視して黒髪のマリアに語りかける。

「最終シーケンスの準備は？」

「12秒前に使用したエネルギー及び規定値不足分吸収中——完了……ご命令をどうぞ」

奇妙に静まった空間に響く、魔神と機械の声。

寸暇の間も置く事無く伸ばされた指は、何ら躊躇も感慨も見せる事無く鍵盤の上に乗せられ。

——そしてそれを押し込んだ。

何も出来ずにそれを見つめていた西条の耳に、通信機越しの強烈なノイズが飛び込む。

——何も、起こらなかつた。

眉根を寄せたアシユタロスの目が上を向く。

その視線が、糸の切れた人形の如く上半身を音を立てて項垂れさせた黒髪のマリアを捉えた。

何事かを把握するよりも早く、彼の背後から硬質な音が連鎖する。

肩越しに振り向いた視線の先、まるで櫛の歯が折れるように地面に伏せたテレサたちの姿がある。

それは感染でもしているかのように、次々と広がっていった。

乱立する機械の人形が、受身を取る事すらせずに膝を崩れ折る。

一体が倒れ、それに足をとられた一体が前に傾き、さらにそれに背中を押された一体が回りの数体を巻き込んで横倒しになる。

「…何故だ」

魔神の言葉を掻き消すように、広がる連鎖は音を連ねて留まらない。

呆然と見渡す視界の限り、全てのテレサ達が地面にその身を投げ出すまでに掛かった時間は、僅か数呼吸でしかない。

しかし、その時間で、堅固な守りを見せていた壁はいともあっさりとは瓦解し尽くした。

「何故だあつ!!」

「g—k l e d w こ な d f j i k — 上空—k d q w あ—より—」

アシユタロスの怒声に答えたのは、項垂れたままの黒髪のマリア。

未だその瞳は虚ろなままで、しかしその中に光を僅かに取り戻しつつある彼女は意味不明の音の羅列の中から、主人として登録されている物の問いに答えるべく音声系統を優先的に修復させていく。

やがて、その瞳が小さな光を取り戻すと同時、未だ機体自体は動かない様子ではあるものの、先程までよりはノイズの少ない音声で魔神に答えをもたらした。

「r た w — 上空より d 超高出力の電磁波を観測 r 機体制御系及び情報処理系インターフェイスに致命的なエラーを検出機体保護の為実行中のプログラム緊急停止—設定された優先順位に従い機体駆動系統破棄後再起動と平行して情報処理系統の修復を開始—」
そのまま元のように頭を垂れ、小さな機械音を放ちながら再び動きを止めた黒髪のマリアを離れ、アシユタロスの視線は天を仰ぐ。

見えるのは、黒い天蓋と、未だ黒煙を上げ、燻りつつける大逆天号の腹に空いた巨大な穴。

彼は知りえる由も無いが、小竜姫が貫徹し、大気圏を突き破った際に出来た穴だった。

「電磁波—EMPか?! まさか、神族ども!!」

「…い、生きてる?」

『ぼさつとしないです! 今がチャンスよ、動きなさいっ!!』

呆然と、決定的な事態が起こったというのに何ら自分の体に影響が無かった事を信じられないように身体のあちこちを——自由が戻った事にさえ気付かぬままに——きよろきよろと見渡していた西条の脳裏に、旦那を通した美智恵のテレパスが大音量で響き渡った。

はた、と混乱中のままで辺りを見渡す。

彼と同じように困惑した表情で周囲を見渡している人間達と、不当に拘束されたことに怒りを覚えているのか鼻息も荒く地面を足で削っている獣達。

そして、その向こうで大地に身体を横たえ、完全に動きを止めたテレサ達と——此処からでもはつきりと見える、巨大な構造物。

戸惑いの消えきらないままに耳元の通信機へと手を伸ばし、そのスイッチを入れる。しかし、手応えと共に帰ってくるはずのノイズ所か、押さなくとも次々と飛び込み続けていた受信さえも行なわれていない事に、今更ながらに西条は気付いた。

原因として考えられるのは、魔神が鍵盤に手を伸ばしたとほぼ同時に通信機の放った、まるで断末魔のような大音量のノイズ。

なんとと言うか、靈感に嫌な感覚がピンピンと走り回っている。

一瞬で血の気が引く音が鼓膜に響き、それが答えを弾き出すよりも早く、『もたもたしないっ！ 尻蹴っ飛ばされたいのっ!!』

再度飛び込んだテレパスに、思わず足が前へと進み出していた。

ああ、公彦さんも苦勞してるなあとふと浮かんだ考えは現実逃避以外の何物でもなかったが、ともあれ司令官が前に駆け出し始めたのに釣られるように、周囲の者達も走り出す。

未だ困惑が思考の一割ほどを圧迫してはいるものの、しかし状況を鑑みれば確かにこれ以上の機会は無くて。

「ぜっ、全速前進ーっ!!」

嫌な予感と冷や汗を振り切り駆け出した西条の声を切欠に、人類陣営は本格的に加速した。

「——え？ え？ 美神さん一体何があつたんですか？」

困惑の多分に混じつた疑問の声を上げながら双眼鏡を覗き込む妹分に、ヘッドライトに曝け出される爆発で抉れた大地をハンドルを切つて避けながら、にんまりとした笑みを浮かべた美神はアクセルをさらに踏み込ませた。

「ま、よーするに電子レンジなわけよ」

トレーラーの進む先、コスモプロセスの纏う光の残滓に照らしだされ、右手前に見えるのは西条たちであろう集団は、今はいつそ暴走と言つても良い勢いで移動している。

その先に居た筈のテレサ達の壁は、今はその姿を完全に大地と同化させていた。

「…良く分かりません」

「どっかのお偉いさんが、保険のつもりでこの上、宇宙空間に置いてた「物騒な物」を使つたの。ちよつとややこしいけど説明欲しい？」

一瞬迷つたのか動きを止めたおキヌは、しかしややあつて首を横に振つた。

まあ数百年昔の人間だし、機械に弱いのはしょうがない。

電子レンジとか洗濯機の動かし方は知っていても、その原理まで理解しているとは美神も思っていないので。

美神が小竜姫達に頼んだのは、かなりの高確率で上空——衛星軌道にあると思われる軍事衛星から、ちよつと核ミサイルをちよろまかして、ついでに爆発させてきて、と言つた無茶苦茶な物だった。

核爆発のような巨大エネルギーが空気粒子を叩いた際、空気はプラズマ化し、強力な電磁波を発する。

その電磁波の広がる地域内はちよつと電子レンジの中にあるような状態となり、ラジオ、テレビはもちろん、レーダーや情報ネットワーク機器などの軍用の電子機器ですらいつも簡単に破壊してしまう。

——そして、当然ながらマリアの原型を元にして作られたテレサ達は何百年も昔の設計思想に基づいて居る訳で、常にドクターカオスによって改良を施され続け、更には多種多様な電磁波の飛び交う宇宙まで行く為に嚴重な防御をほどこされたマリアやその

フィードバックを受けたマリアの娘達ならともかく、地上戦での短期決戦に主眼を置かれた量産型のテレサ達にその対策が取られている可能性は高くなく、取られていたとしても問答無用で行動不能にできるだけの出力は在った筈。

結果として、二転三転した状況は、一気に人類陣営のほうに傾いていた。

「さあ、只でさえ遅刻した上に、ダンスパーティーの幕にまで遅れちゃ良い女の名が廃るわ。一気に行くわよおキヌちゃん！」

「ま、待つて下さい美神さんっ！ 魔神の人が、何かでつかい狼さんに——！」

双眼鏡を覗いていたおキヌが美神の頭を掴んで直角に折り曲げた。

ぐき、と嫌な音を立てた頸椎に声も出せない痛みを覚えながら、しかし美神の視界にそれが飛び込んでくる。

それまで更に離れたところで闘争を続けていたフェンリルが、人狼達の囲みを傷を負う事も気にせず無理矢理に突破していた。

「美神さん、前、前見てくださいっ！」

クキ。

「んきよっ?!」

再び無理矢理九十度捻られ美神の顔が前を向く。

ヘッドライトの先に、青い人影が着地した。

その影は草臥れた青色のジーパンと同色のジーンズジャケットを着込み、赤いバンドナを頭に巻いて、はた、と今当に危険な地帯に踏み込んだことに気付いたようであった。彼の視線と美神の視線が交錯する。

瞳が驚きに見開かれ、その口が、彼女の名前を呼ぼうと大きく開き、そして。

「美神さぐっぺけっ?!」

跳ね飛ばされた。

「……………」

「……………」

アクセル全開のエンジンが生み出す振動と騒音。

運転席はそれ以外の聞こえない奇妙な沈黙が満ちていた。

僅かに罅の入ったフロントガラスと、こびり付いた血の痕。

「みみみ美神さはーんっ!!」

「なナな何かしらおキヌちゃんっ?! て言うか痛い痛い首が痛いっ!!」

助手席から手を伸ばしてきたおキヌが、美神の肩を掴んでがつくんがつくと揺さぶる。

先程まで無理な挙動を強制させられた頸椎がヤバ目の音を繰り返し、揺れる視界を向こうに回しても何がなんだかオーバーフロー。

とにかく、直前の光景を忘れる事に努めつつ、何かもつと危険な事を忘れていないかと必死でハンドルを握る美神の視界に再び人影が飛び込んできた。今度は、白いのが二人。

とんでもない勢いで駆けて来た彼らは急ブレーキを掛け振り向き、霊波刀を構えて美神達から見て左側に戦意の旺盛な目を向ける。

ボロボロの白装束に身を纏った彼らは、あちこちに赤の混じるそれを意にも介さず牙を剥き出した。

「ここぞ止めるぞ犬飼っ!!」

「あれは拙者達の領分でごさるからなごばあつ?!」

「どうした犬飼ぎゃーっ?!」

フロントガラスに更に罅が入り、赤い液体の範囲が広がった。

未だ美神の肩を掴んだままながらも、おキヌが驚きで硬直した為に漸く収まった視界の中で、美神は殊更冷静に動いた。

まずは洗淨液を出し、次にワイパーを動かす。

所々で引つ掛かりを見せつつも、赤色を落とす切ったフロントガラスに向かって、美神は小さく呟いた。

「人狼の里では『車は急に止まれない』って事くらい教えてないの?」

「美神さん、それは流石に……酷いです」

「ええええっ?! 何っ?! 悪いの私だけっ?! おキヌちゃんにも責……任……が……」

助手席にちよこん、と座りなおし、「私第三者だから関係無いですよー」とでもいいたげに冷たい視線を向けてくる妹分。

思わず横を向いて突っ込んだ美神の声が、咽の奥で固まった。

「どうしたんですか美神さ……ん……」

続いてその視線を追いかけ、窓の向こうを覗いたおキヌの言葉が凍りつく。

その先に浮かぶのは、狂乱に赤く輝く獣の目。

しかもどう見ても二、三階建てビル位の高さで光るそれが、見る見るうちに接近してくる光景だった。

何か忘れてると思ったらこれかー。

「つてそんな場合じゃないわああああっ!!」

慌てて通信機を引つ掴み、それが動かない事を思い出して。

「おキヌちゃんハンドルお願いっ!」

「ええっ?!」

シートベルトを外し、おキヌが慌てて身を乗り出してハンドルに飛びついたのを横目に後ろのコンテナに続く小窓に取り付いた。

「左からフェンリルっ！ 直ぐに接敵するけど時間が無いから何とかしてっ!!」
それだけ叫んで運転席に滑り込む。

おキヌにぶつかからない様注意しながら再び体をシートに納め、踏み抜けるとばかりにブレーキに足の底を叩きつける。

更に美神がハンドブレーキを引いて減速を掛け、暴れるトレーラーをおキヌのハンドル捌きが完璧に押さえつけた。

甲高い音を立てながら慣性を打ち消したトレーラーの横、数十mの僅かな距離の向こうにフェンリルの赤い目が光る。

その口が大きく開き、突如滑り込んできた目障りな存在を噛み砕かんと牙が光る。

瞬間、トレーラーのコンテナが爆発した。

いや、内側から破壊された。

その爆発に紛れるように、数発の砲弾がフェンリルの顔に直撃する。

大した炸裂を起こすでなく、しかし爆炎の変わりに猛烈な勢いで白い煙を吐き出したそれに巻かれたフェンリルは、その巨大な身体を仰け反らせ、苦しみと怒りの入り混じった咆哮を上げる。

「こんな事もー!」 「あろうかと!」

内部から爆ぜ割れたコンテナの中央、そこに二人の男女が立っている。

目付きの悪い黒髪の男と、その横に並び立つ金髪の女は、車酔いで少々顔色が悪いままながらも元氣一杯に声を張り上げた。

「開発していた特殊催涙弾の威力を見たかつ！」

そこまで言つて満足げに数度頷いた男女は、シートから降りた美神とおキヌの半眼を氣にした様子も無く更に絶好調で続ける。

「そしてっ！ 満を侍しての初披露！」

「お代は見てのお帰りよっ!!」

何か壮大に間違つた口上を述べつつ二人が数歩横に退く。

二人の動きに釣られるようにコンテナの内部を覆つていた白煙が一気に晴れ、その内に秘めていた物を露にした。

長大な銃身を持った、先鋭的なフォルムの大砲と言つてもいいようなライフルをそれぞれに構え、一步踏み出した彼らの身体は一体一体違う色で染め上げられている。

静かに佇む5匹の鳥人。

見る物に確かな力の存在を感じさせる彼らを囲むように、十数匹の小さな黄色いヒヨコが飛び交い、その背後には重厚な姿のゴーレムが3体、命令を待つ騎士の如く静かに膝まづいている。

男女——茂流田と須狩は、くるりと同時に一回転。

フエンリルを指差し、最後の締めとばかりに大きく言い放った。

「機密戦隊ガルレンジヤイツ!!」

ぼーんと、背後に控えているゴーレムの身体の一部が開き、五色の煙を吐き出した。感情の無い筈のゴーレム達が何となく理不尽に耐えているよーな雰囲気を出しているよーな気がするの、きつと美神達の気のせいじゃない。

「…機密なのに隠してませんよね？」

「おキヌちゃん、突っ込む所は其処じゃないわよ」

疲れて肩を落とした美神は首に手を当て、コキポキと具合を確かめた。

第拾七話 『そして魔神は札を切る』

放物線を描いて飛ぶ半人狼の青年は、まるで夢でも見ているかのような安らかな顔だった。

——それを裏切るように鼻から迸る赤い血潮。

重力に囚われ落下に入り始めてからも、安堵とも喜びともつかないだらしない表情は変わらぬままだった。

——ちよちよぎれる涙はまるで滝のようで。

くるくると回転し、母なる大地に抱かれるまで、彼はやり遂げた笑みを浮かべたまま。

——回転の軌道は螺旋を描き、ドリルのように大地を抉る。

そして安寧の暗闇に包まれ、彼は漸く意識を閉じる事を許したのだった。

——頭から突っ込んで一度痙攣、そのまま動きを止めたのだった。

少々離れた所に同じような着弾音が二度ほど響いたが、聞こえる範囲に誰も聞く者がいやしいので、結局響いただけなのである。

月に吼える 第三部

地面に倒立し、いや無理矢理させられ出来の悪いトーテムポールのようにそそり立っていた物体が、ゆっくりと慣性の法則に導かれて前方に倒れていく。

丁度地面に埋まっている辺りから微妙に危険な音が響き、その度に痙攣が何度も何度も忠夫の体を襲ったり。

もしも観客が居たのなら、医者を呼ぶより先に坊主か葬儀屋を呼ぶであろう、そんな致死量の雰囲気は漂い始める。

やがて大木が倒れる時の軋む音を立てながら、しかし軽い音を立って動きを止めた彼の身体の上を丸まった新聞紙が風に吹かれて転がって行った。

暫しの間を置いて、やはり同じような音が、やはり少し離れた場所で二度。嫌な沈黙が辺りに満ちて。

その静けさを割ったのは、二人分と思しき駆け足の音だった。

「横島君っ！」

「横島さはーんっ！」

忠夫の名前を呼びながら、二人の女性が走り寄る。

だが、その足は薄暗闇の中で彼の姿を視認できる所まで近付くと、まるで何かに慄くようにブレーキの動きで急制動。

再び嫌な沈黙が舞い戻る。

重い、それはそれは重い空気の中で、二人——美神とおキヌは互いに囁いて或いは相手を前へ前へと押しやりながら、じわりじわりと距離を詰めていったのだった。

「…流石に死んだかしら？」

「縁起でも無い事言わないでくださいいいいいっ！」

とは言うものの、明らかに首関節の許容範囲を超えた姿に変形している忠夫に対し、揺さぶる訳にも行かずはたまた声を掛けても地面に埋まった彼の耳に届くのか、と迷うおキヌ。

やれやれ、と溜め息を一つ。

美神は腰に手を当て、大きく息を吸い込んだ。

「あっ！ あんな所にマンガ肉っ！」

マンガ肉とは、一本の太い骨にお肉がもつさりど付いた、それ何処の部分の肉だ、とかそれだけ太い肉があるのか、とかそもそもそれは本当に肉なのか、とか今時ねえよそ

途端に吹き上がる巨大な霊圧。
と、殺気。

当てられて正気を僅かに取り戻した忠夫の脳裏に走るレッドアラート。
匂いを嗅いで正体に気付き、警告を通り越して走馬灯、顔が一瞬で冷や汗に塗れた。
カタカタと震えながら顔を上げる。
二つの山の向こうに、修羅が居た。

第拾七話 『そして魔神は札を切る』

よこしま は にげだした
しかし まわりこまれた！

「…横島さんの、えっち」

つうこん の いちげき！

よこしま は こんらん した!

「違うんやーっ! ワイは、ワイはちよつと錯乱してただけなんやーっ! そんな目で見んといてーっ!」

身体を反転させた先で冷たい冷たい、汚物を見るような(忠夫視点)目でおキヌに見られ、思わず悶えて地面を転がる忠夫。

その耳元に、地面に罅を入れながら勢い良く神通棍が突き刺さる。

放電しながら明らかに「コロス」意思の籠められたそれを、忠夫の視線がゆつくりと辿っていく。

「ひいっ?!」

無表情であった。しかしそれは、屠殺場で今から仕事を行なう者の顔であった。

思わず何かがちよつと漏れた忠夫。

諦めたように、もーどーにでもなれー、となんか悟った表情を浮かべた彼を、しかし神はまだ見捨てはしない。

とてとてと駆け寄ってきた女神は、コキユートスもかくやと思わせる絶対零度のオーラを纏った美神を宥めにかかる。

悟りは何処へやら、地面にあお向けになったまま殺気に当てられて動けない忠夫は、視線だけでもとおキヌへ応援のメッセージを送信する。

「ま、まあまあ美神さん、横島さんも悪気は無かつたんでしょーし。せめて——」
「分かつたわ」

おキヌの言葉の途中で、す、と引かれる神通棍。

意外すぎるほどにあつさり引かれたそれに、しかし全く収まる事のない美神の殺気がまだ終わっていない事を声高らかに告げている。

「おキヌちゃんが選んでいいわよー。去勢か処分か」

「せめて去勢で許してあげましょうよ」

「お、ぎぬさああああああああああああああんっ?!」

さくつと即答であった。

よくよく見れば、彼女の額にも井桁マークが浮かんでいる。

きつと彼女にも何か思う所があったのだろう、主にポリウム辺りで。

救いの女神と見せかけて、怒れる伏兵であった。

宥める事を既に止め、つん、と拗ねた表情でそっぽを向くおキヌを横目に美神の神通棍が振り上げられる。

しかし、忠夫はまるで硬直したように動かない。

いや、その瞳だけが رفتり来たりしている。

逃げ道を探しているのかと訝しむ美神であったが、答えは忠夫自ら語られた。

「おキヌちゃんの白は当然として：黒が清楚に見えるとは、意外やった……」
「何処を見とるがこのエロガキがつ！」

「ちよま美神さつそこは待つて待つてまつ、マックスハーツ?!」

結果だけ言うのならば、ギリギリセーフ、なのだろうか。

その悲鳴の聞こえる訳もない男達が何かシンパシーでも感じたのか同時に微妙に腰を引き、その為に進む速度が僅かに落ちたのは完全に余談である。

若干一名白龍道場に例外が居たりしたのは言わぬが華。

とまれかくあれ成敗済んで。

アレな場所を押さえて泡を吹き、ぴくんぴくんと痙攣を繰り返す忠夫の横でおキヌが

手を当ててヒーリングをするかどうか迷ってみたり。

なにやら頬を染めつつ決心した彼女がおずおずと手を伸ばした瞬間、美神に耳を引く張られたり。

ほっとしつつも残念そうなおキヌはさて置き、何とか復活した前傾姿勢の忠夫の腰を、ちよつと責任を感じたのか美神が何となく嫌そうに後ろから叩いてみたり。

「い、いかん世界を垣間見た……って！　こんなことしてる場合じゃないんすよ美神さん！」

「誰のせいよ誰の」

互いの無事を喜ぶどころか、

『まああんたの事だから大丈夫だと思つたわ』

の一言で切つて捨てた美神の言葉に忠夫が少々落ち込んだ場面も在つたものの。

その言葉を聞いて後ろで引く張られて痛い耳を押さえてくすくす笑つているおキヌに睨みを利かせつつ、小さく安堵の溜め息を付いた美神は呆れた風を装つた。

慌てた様子で美神に迫る忠夫の額に肘を入れ、蹲つた彼を横目におキヌと目で会話。

良かった、と、しよーがないなあ、が等分に混じつた苦笑いが二人の顔に自然に浮か

んだ。

「ま、まあ、その、一応ね。そう！一応おキヌちゃんも心配してたみたいだし！」

一本指を立てて空つとぼけながら美神が言う。

微妙に眉が寄っているのは昼間ならばしっかりと見て取れたであろうが、今の暗さでは見ることができない。

後ろで口元を押さえながら肩を震わせている少女は別として。

見えている訳ではないだろうけれど、まるで全部はつきりと上司兼もう一人の姉の顔がはつきり見えた気がしたから。

「えー。美神さんはほんつとに心配してくれなかつたんすかー？」

地面に「の」の字を書きながら忠夫が美神に向けて呟いた。

「あ、当たり前じゃない。こらそこ！おキヌちゃん笑うなっ！」

「もう。美神さん凄かつたんですよ？こーんな——」

両手を大きく広げ、精一杯の円を描いて。

「沢山荷物背負って助けに行こうとしてたんですから。何時もだつたらガソリンの残りとかもちゃんと把握してるのに——」

「わーっ！わーっ!!」

一瞬硬直した美神だが、再起動と同時にオキヌの口元を押さええて封じにかかる。

大人しくされるがままの少女は、しかし確かに目だけで笑っていた。

「好い加減少しくらい素直になつたらどうですか、とその瞳は笑い混じりに告げている。」

あまりにもじれつたく感じたから故の行動ではあるが、まあそれとこれとは別問題であつて、只でさえ戦力差が大きいので塩を送るのはこれつきりにしたい、とは少女の弁ではある。

後ろからおキヌの口元を押さえて恐る恐る振り返つた美神の目に、なんだか感激した様子の忠夫が写りこむ。

「そーっすかあ…すんません、心配掛けました」

「…その、別に気にしちやいないわよ」

しまったやり過ぎたか！ とはその瞬間に走つた少女の心の声である。

てつきり『嬉しいっすー！ こーなつたらもういきつくところまで行くしかー！』とか言つて飛び掛つて来て、それをハイキックで撃墜する所までプランを描いていた美神は肩透かしを食らわせられた。

素直に頭を下げる忠夫を見て、何となく肩の力が抜けた美神は頬を緩めて吐息を一つ。

押さえこんだおキヌが何故か抗議の視線を向けながらじたばたと動き始めたが、それ

は見事にスルーされ、何時の間にやらちよつと良い雰囲気醸成され始めていた。

「…あのね」

「う、ういっすー！」

「二度しか言わないから良く聴きなさい。私は——」

時も場所も状況もそんなことしてる場合じゃないだろうな筈なのに、甘いけれどもちよつとすっぱい、俗に言うストロベリーっている空気が流れ出した気がする。

おキヌは最早半泣きでむーむーと抗議しているが、そのずるいとか私もとか言う叫びは結局口からは出れなくて。

どちらともなくごくりと唾を飲み込む音が響き、一瞬の溜めを乗り越えた美神の言葉が口元を擦り抜け——

「……」

「……」

手を伸ばす。

半歩横に。

手を伸ばす。

半回転。

回りこむ。

跳躍してロケットに点火、ホバリング。

「ずるいですよー！」

足元でびよんびよん跳ねている小娘を無視し、暫し抱き心地を堪能するマリアであった。

と、体当たりのショックで白目を剥いていた忠夫が意識を取り戻し、目の前の顔を認識する。

未だはつきりしない頭のままで、忠夫はマリアに半分飛んでいる視線をあわせて声を絞り出した。

「マ、マリア…カオスのオッサン呼んでくれ…ガク」

律儀な事に、意識を失う効果音まで出して再び白目を剥いた。

暫し特別な反応が無かった事に少々もやもやとした物を感じていたマリアであったが、残念そうな表情のまま、とりあえず言われた事を実施する。

メタソウルから靈力を汲み上げ、埋め込まれたテレパス用金属にリンク。

打てば響く鐘の音のように広がった靈波が、程なく幾つかの反応を返してきた。

一際大きな反応が一つと、良く似た、だが確かに違う小さ目の反応が四つ。

カオスが未だ目的を果たしていない事と、そしてその大きな反応の位置が巨大な建造物に在る事から、詳細な事は不明だが計画遂行の難度を上方修正。

メモリに保存し、今度は四つの反応に向かって言霊を乗せたシグナルを送った。

ふと下を見下ろせば、先程まで騒いでいたおキヌが美神に掴まり梅干の真つ最中。

会話を聞いてみればどうもマリアが体当たりした直後の部分に納得の行かない発言があつたらしく、美神は八つ当たり混じりに靈力まで使っておキヌにお仕置きしているようである。

じたばたと手を振って半泣きで脱出を試みるおキヌを巧妙な手さばきで押さえつけながら、ちらちらと視線が未だにマリアが抱きとめている忠夫に向いている。

きゅ、と腕の出力を増すと美神の靈力が高まりおキヌの悲鳴もついでに高まり、少し力を抜くと両方弱まる。

カオスが来るまでの暇潰しに、と何度か繰り返す内に美神の目が危険な角度まで吊り上がり、ついでにおキヌの悲鳴が段々と弱くなっていつていつていっている。

最早言い訳と否定混じりの八つ当たりから完全な八つ当たりに変わり、おキヌが消耗しきって動きが少なくなってきた頃を見計らって、マリアは最後にもう一度だけ力を籠めて抱き締めた。

「ぐきゅっ?! ってあれ、マリア?」

蛙が潰れたような声を出して、狙ったようなタイミングで忠夫が目覚める。

直後に真下から襲い掛かる強烈な殺気に気付いて見下ろし、額にブツとい血管を浮かべて人差し指で招く美神と、その足元でコメカミから煙を出して昏倒するおキヌを発見してもう一度気絶しそうになったようだが。

怯えてしつかりと抱きついてくる忠夫を放すのは勿体無いのでどーしよーかなー、とマリアは悩む。

しかし時間の経過と共に殺気は高まり、そして忠夫とマリアの密着度は更に上がっていく。

完璧に悪循環——一人にとっては幸せな循環——となっているが、まあ良いかとマリアが放置を決めたその瞬間に。

「——うちの娘に手を出す奴はどこじやあああああああああああああつ
!!」

怒号と共に真上から老人が降って来た。

訝しげに顔を上げた忠夫の顔面に突き刺さるカオスの爪先。

ギリギリの判断でマリアに被害が及ばぬようにと手を離す忠夫。

高速で目の前を通り過ぎた老人の行動にフリーズするマリア。

巻き込まれまいとおキヌを引つ張って退避する美神。

轟音と土煙が辺りを包み、暫しの沈黙が——

「やはりお主かあああ…さあて感電死か銃殺か毒殺か実験材料か解剖かホルマリン漬
けまでフルコースで行くかそれともこの時空から完全消滅してマリアのお主に悪戯され

た記憶を奪ってしまおうのが一番ええかのおお……？」

「誤解だこのクソ爺いいいっ！ 俺のモットーはイチヤイチャラブラブうっふんあっはんお腹一杯夢一杯幸せでんこ盛りうはうは生活だっつーんだよっ！ てか引っ込めろその時空消滅内服液いいいいいっ！！」

何故どう見ても時速100kmを超えようような速度で衝突した上に、クツションも無く地面に激突して無事なのだろうか。

特に忠夫はまだアレとしても老人の方は。

ともあれ、その名の通り混沌を引き連れて落っこちてきた老人と、彼が大人げなく本気で口元に注ごうとしている怪しい液体から必死で逃れる海老反り状態の青年に向かつて抑止力が放たれる。

「落ち着いて下さい・ドクター・カオス」

「いい加減にしなさいこの馬鹿犬っ！」

ロケットパンチと神通棍が、同時に二人をかぼーんと空に打ち上げた。

「アルファ。嘘は・いけません」

「……恣意的に・情報を・制限しただけ」

飛び上がったってきた二人とすれ違い、土偶とマリアの娘達が着地する。

土具羅と姉妹達からジト目で見られて罰の悪そうな顔をした少女の呟きが、地面に落

ちた二人の呻き声に紛れて消えたのだった。

「へ、へへへ……。美神さんの突っ込みだけは避けられる気がしないのは何ででしょうか……？」

「……」

半分懐かしさ、四割の痛み、そして残り一割は自分の性質に対する諦めを抱きながら、忠夫は顔の右半分と膝で地面に接地した状態で涙を流す。

横のご老体は流石に寄る年波には勝てないのか白目を剥いて沈黙したままであるが、誰一人として気遣う様子が無いのは何故なのだろうか。

と、忠夫の顔に一瞬疑問符が浮かび上がった。

そのままがばつと身を起こし、きよろきよろと周囲に集まった者達を見回す。

「いかんっ！ こんな事しとる場合じゃなかったっ！」

「元凶はあんたでしょうがっ！」

「み、美神さん抑えて抑えて……！ ほら横島さん珍しく真面目みたいですっ！」

自分の行動を省みない忠夫の発言に、思わずもう一発かましたるかいと神通棍を振り上げる美神だが、後ろから羽交い絞めに押さえ込んだおキヌによって阻止された。

怯えて頭を抱える忠夫を目の前に、深呼吸を二、三度繰り返す。

最後に大きく息を付いて、美神は納めた神通棍の柄で頭を搔きつつ仕方なさげに矛を

取めた。

「…で、何がしたい訳？」

「いや何もくそもやばいっしょっ?! 相手は魔神だしフェンリル居るしあのキノコは生えちやうし!」

後方、おそらく今当に激戦が繰り広げられている筈の方角を背中越しに指差し忠夫が訴えた。

しかし美神は軽く肩を竦め。

「今更出来る事なんて無いわよ。もう殆ど終わりみたいなんですよ」

「…へ?」

呆けた表情の忠夫に、振り向けと言いたげに彼の背後を指差して見せた。

素直に首を回した忠夫の視線の先、丁度そのタイミングで其処から照明弾が打ち上げられる。

照らし出されたのは土気旺盛に突っ込んでいく獣と人、そしてその前方で動作を完全に停止して地面に伏せるテレサ達と、逃げ惑う埴輪兵の姿。

加速していく集団の切っ先が、既に役目を果たさなくなったかっつの防御の跡に食い込んだ。

「あっちのテレサ達はEMP対策とってなかったみたいねー。『核ミサイル奪つ』って

自爆するなんて馬鹿』って事になつてるけど」

「流石に・マリア達の通信機能は・ダウンしてしまいましたか」

「つつつ、なるほどのお。そー言う事にするのか」

「そ。まあどつかの誰かさんも下手に物騒な物を上に置いといたとは言いたくないでしょうし、『持ち主不明の核ミサイル搭載衛星が魔神アシユタロスの陣営にジャックされ、しかし何故か制御失敗して勝手に自爆』ってな流れになる予定よ」

いくら緊急事態でも神族がそんな事したつてばれたら後が面倒だし、と美神はニヤリと唇を歪めた。

彼女の言葉を裏打ちするように、その場に居た全員の頭に女性の声が響く。

内容は先程美神が語った事の、その裏を除いた部分そのままであった。

テレパスに含まれる感情もどこか呆れを含ませてあつて、忠夫達も美神から何も聞いていなかったとすれば、「危ない所やつた。あいつら馬鹿やなー」で済ませていただろう。

「うつくつくつくつ。これでソロモン72柱の一人にして魔界の六大魔王の一人アシユタロスの名前は地に落ちるわけよ！ もう明日にはアホタロスって呼ばれてるんじゃない？」

本当に、ほんとうに心底楽しそうに笑いながら前世の創造主をアホ呼ばわりする美

神。

まあ後々この事は大きく取りざたされるとすれば、一般的に影響の大きいEMPの被害と一国の首都が機能を失った事が相俟って——『核ジャック事件』と言われる可能性もあるだろう。

ともあれ、顎が落ちんばかりの表情でそれを眺めていた忠夫であったが、しかしそれでも諦め悪く。

「で、でもまだアシユタロスが——」

「あ、それ？ あそこあそこ」

ひよい、と動いた美神の指に吊られて視線が動く。

其処には、輝く照明弾の光の隙間を縫うように飛行する人影らしき物体が。

先頭に行く小さな影がいきなり巨大化し、勇壮な鎧と光を反射して輝く金環を頭に付けた猿になり、コスモプロセッサの前に浮かぶ魔神と思しき者に突っ込んでいく様子が見えた。

その後方を飛んでいた者達もそれぞれに武器を構えたり印を組んだりと戦闘態勢に入りつつある。

「神魔族の援軍到着。しかも武神としては超一級の猿神様も居る訳だし、大丈夫でしょ」あれ、俺の頑張りって何？ と忠夫が顔を戻せばフェンリルを包囲しながら突っ込ん

でいくガルーダ達。

「はーっはっはっは！ そーれおまけに追加武装射出っ！」

どっしりと地面に足を食い込ませ、体中からミサイルやら弾丸やらを吐き出している
ゴーレムの背中から次々と何かが打ち出され、同時に飛び掛るガルーダ達の手に渡る。

「兄上ーっ！ く、離すでござるよ女狐えええっ！」

「今はそれどころじゃないでしょ馬鹿犬っ！ ほらほら前衛が抜けてどーすんのっ?！」

「と言いつつお前は何処に行くでござるかっ！」

「後衛一人くらい良いでしょ、つて、は、離しなさいってっ！ ちよ、ちよつとどこ掴んでんのよっ！」

一部全然関係の無い所で喧々囂々としているようだが、何かもう雰囲気的に余裕が出てきていた。

「…お、俺の活躍シーンを返せえええっ！」

「最初っから無いわよ。犬質だったあんたが悪い」

「だつてしよーがないやんんんっ！ ベスパええ乳しとつたんやし俺だつてちよつと色香に迷つてもええやん若いんだからさーっ！ 俺のヒーローになつてもつてもてになつて嫁さんゲットしてイチヤイチャうっふんラブラブ極楽大作戦があああっ!!」

子供のように地面に転がってじたばたと手足を動かす忠夫に、今度は警戒してか近付

かないで破魔札を投げつける美神。

心の中で忠夫の給料から破魔札代を差つびく事を決め、爆発に揉まれて焦げた忠夫を呆れを多分に含んだ目で睨みつける。

半分人狼ゆえにダメージ半減、しかし何故か破魔札の金額から予想されるよりもダメージを受けた忠夫が煤塗れで体育座り。

おキヌとマリア達が笑いながらそんな彼に集まっていくのを横目に見つつ、美神は、そつと苦笑い混じりの安堵の溜め息を付いた。

さて、後はそれなりに働いて何処から筆り取れるだけ筆り取ろうかなー、と思考しながら鼻息も荒く装備を確認する美神の目に、難しげな表情を取るカオスの横顔が映りこむ。

「…どーしたの?」

「ふーむ」

いや、と前置きをして気不味そうな顔のカオスは、視線を前から逸らさないまま独り言のように呟いた。

「例えば、の話じゃが」

老人の視線が忠夫の傍に立って小さく微笑んでいるマリアに向けられた。

彼女の前ではマリアの面影を色濃く残しながらも、しかしそれぞれに違う雰囲気

持った機械の少女達が忠夫に絡んで騒いでいる。

おキヌと一緒にそれを止めるでもなく眺めながら、視線を感じたのか老人と目を合わせ、軽く手を振っている。

それに手を上げて返事をしながら、しかしカオスの表情は優れない。

「マリア、いやマリア達はの。例えば腕を切られても、接着して安静にしておればそれだけでも傷が『癒える』ようになって。無論、当然の如く元通りに動かせるようになって、な」

数秒ほど訝しげな表情を浮かべていた美神の顔から、ぎ、と音を立てて血の気が引いた。

腕が元通りになる——しかも表面部分の装甲だけならばともかく、『動かせる』とカオスは言った。

つまり、内部の回路も修復される、と言う事。

EMPで焼かれた回路、普通ならばそれだけでも致命傷な筈だが、あいにくとテレサ達にとっての中核とも言える部分はメタソウル——人工靈魂で出来ている。

つまり、EMPの影響を受ける訳も無く、必然的にテレサ達は完全に機能停止に陥った訳では無い、となる。

自己修復にどれだけの時間が掛かるかは分からないが、AIを担当するメタソウルが

被害を受けていない以上。

「…もしかしなくても、時間が経ったら?」

「機能を取り戻すじやろうなあ。テレサ達も、コスモプロセッサに組み込まれとるのも」

ま、とつとと決着付くなら関係無いがの、と老人は肩を竦めた。

『待て、あそこっ!』

韜晦するカオスと蒼褪めた美神の会話に割り込んできたのは、意味が無くなったと聞いて所在無さ下に後頭部からぶらぶらと揺れるコードを垂らしてちよつと後悔していた土具羅。

小さい体を激しく動かし、放射能臭い湯気を噴出させて立ち上がった彼は、慌てた様子で叫んだ。

『コスモプロセッサに埴輪兵達に取り付いてなにやらごちゃごちゃやつとる! もしも中枢演算ユニットとして取り込まれた機体が機能を取り戻したら、今度こそコスモプロセッサが起動してしまう!』

「さつき起動しとつたじやろーが」

『あれは余剰エネルギーを使った緊急防衛装置だ! 勘違いするな、あれは「書き換える」ものじゃなく「置き換える」装置だぞ! 本格的に動き始めたら何が起こるのか見当もつかん!』

宇宙処理装置、と銘打つてあるものの、その本当の機能からすれば、あれは「無限の可能性の中から選択した可能性と置き換える装置」である。

だからこそ、例え消滅したとしても「魂の牢獄に囚われている筈の魔族」が「二人居ると言う矛盾」を引き起こさない。

あくまでも「いない」と言う事象を「いる」と言う可能性で置き換えるものだからだ。よつて魂の牢獄に囚われた霊核とも言える物は、その可能性を手に入れて復活する事となる。

とは言えそれは副産物ではない。

その能力の真骨頂は、『世界を置換する事さえ可能である』と言う一点に尽きる。

例えば、「ある魔神が魂の牢獄に囚われる世界」と「ある魔神が魂の牢獄に囚われていない世界」を置き換えることすら可能にする装置。

それが、宇宙処理装置の本当の姿。

「落ち着け、言い方が悪かった。さつきも言ったが今すぐ如何こうと言う話では無いぞ。ある程度の時間が必要じゃから、その前に潰してしまえば——」

「みつ、美神さん、あれ、あれっ!」

酷く焦った忠夫の声に、3人の視線が前を向く。

青年の指差す先は、宇宙処理装置の傍らに散らばる残骸があった。

「…見えないわよっ！」

それも当然であろう。

超感覚を持つ半人狼の忠夫の視覚ならばともかく、そう言った肉体面では鍛えられているといっても一般人の規格内に収まる美神達。

遠目に見えたのは、高く聳える巨大な茸にも似た構造物と、ただ散乱しているようにしか見えない残骸の群だけだ。

が、忠夫は何かを見ているようで、しかも顔には冷や汗が大量に吹き出していた。

「アシユタロスが、なんかでつかいコンテナに手を掛けてて、んでもってさつきから嫌な予感がピンピン止まんないんっすーっ！」

いまいち要領を得ない彼の言葉に美神が眉を潜め、同時に彼女の靈感が強烈な警告を発した。

悪寒というのも生温い、まるで直接脊髄を液体窒素にでも突っ込まれたような凶悪な虫の知らせが靈感を持つ者達全てを襲う。

霊能力者達の視線が集まる先、そこに猿神も何かを感じ取ったのか、一気に加速して飛び掛る。

おそらく魔神アシユタロスも居るであろう其処に、遠く離れていても分かるほどの豪速で持つて、武神の拳が振り下ろされた。

大気を揺らす咆哮を上げながら、一気に全体像を溢れ出させたハヌマンよりも巨大な人型が、体中から光弾を吐き出した。

第拾捌話 『かくて手札は開かれて』

月に吼える 第三部

不揃いな爆音の列が戦場に木霊する。

超至近距離で巨影が生み出した弾幕の直撃を受け、猿神がぐらりと体を傾がせた。

後続の神魔族達も、近くに居た者は巻き込まれ、距離を取って印を組んでいた物はぎりぎりまで反応して防御に回る。

が、それでもその内の幾らかは耐え切れずに落ちていった。

被害はそれだけで終わらなかつた。

神魔族の後に続くように大地を掛けていた人類陣営にも光弾が幾らか降り注ぎ、張り巡らされていた強固な筈の結界に着弾する。

突撃の前にある程度張り直されていたそれは僅かに光弾の軌道を逸らし、集団の周囲に激音と衝撃を齎して、泡のように弾けて消えた。

その代わりと言わんばかりに閃光が瞬き、大地が揺れ、強烈な風が吹き荒れる。

「が、あああああああああああああつ!!」

吹き荒ぶ砂塵と白煙の只中を、鎧に罅が入ったままの猿神が咆哮と共に巨人を押し返した。

だが、不意打ちに零距离で加えられたダメージは小さくないのか、僅かな拮抗の後突如襲ってきた巨人の尾を腹に喰らって引き剥がされる。

絢爛豪華に輝いていた鎧の破片を撒き散らし、猿神は歯を剥き出しにしながら踏躡を踏んだ。

一方で優勢を覆された神魔族は、それでも遠目からも見える翼の生えた魔族の動きに導かれ、結界を失い衝撃と爆音で一時的に身動きの出来なくなっている人類陣営の側に降り立ち結界を新たに構築しはじめる。

「——っ！ 結界の再構築急げ！ ぼさっとしてるんじゃないっ！」

その光景を見た人類側最前線の司令官、西条の怒号が飛ぶ。

「ですが西条司令！ さつき、あんなにあつさり破られたじゃないですか！」

「0より1だ！ それだけ死ぬ確率が減る!!」

弾かれたように、先程まで結界の維持・調整を担当していた者達がそれぞれに靈符を掲げ印を結ぶ。焦りと畏怖が満ちる中で、それを反映したような不恰好で歪な壁がそそり立ち、神魔族達の結界に被さった。

しかし、いかに強固な壁に護られていようとも、一瞬にして打ち抜かれた結界の姿が臉に浮かび、否が応にも恐怖と不安を心の底から掻きあげる。

神魔族と人間、獣達の視線の先に二重になった薄い緑色の結界の向こう、打ち砕いた猿神の鎧の残滓を纏って漆黒が立ち塞がる。

大きさは猿神との三倍近くもあろうか、一言で言ってしまうえば、長大な尾を備えた漆黒の巨人。

巨軀を飾るように緑に輝くラインを走らせたヒトカタのナニカ。

人の顔を模して作られたような厳しい面には傷一つ無く、その視線はしかと猿神の瞳を見つめている。

ソレは、己の誕生を、歓喜の咆哮で声高に宣言した。

第拾捌話 『かくて手札は開かれて』

「どーゆー事よ何よあの巨大ロボは一体何処から湧いて出たのよっ!!」

がつくんがつくん忠夫の胸倉を片手で掴み上げて揺らしながら、美神の指が漆黒の巨人を強く指す。しかしその場にいる誰からも答えは無く、皆呆氣に取られたように、今人界に存在する武神としては間違い無く最強の一角を占める猿神を数歩とはいえ退けた存在をまるで他人事のように眺めていた。

と言うよりも、不条理に過ぎる光景を理解する事を拒否していたというべきか。

一人と一体を除いては。

『究極の魔体っ?! 細部は違うし大きさも半分以下、主砲も装備されていないが、間違い無いっ!』

「ふーむ。あの巨体でなかなか良い動きしよるわ。巨大ロボとはまたえらく趣味に走つたもんじやお。：チツ、先を越されたか」

その場でただ一体、あれが何かを知っている土具羅と、不穏な事を呟きながらどこか残念そうにしている老人は、それぞれに反応は違えど現状を把握はしているようだ。

老人の方は少々現実逃避気味に聞こえなくも無いが。

『馬鹿な、だがあれは遠の昔に設計図ごと素体を破棄した筈!』

「じゃあどー説明すんだよあれをおっ!　なんで漸くエンディング迎えてスタツフロールの背景で適当にやって終わりみたいな雰囲気の中で、いきなり最終兵器っぽいのがドーンと出てくんだよ!」

『お前ついさつきまで自分の活躍がどーたらこーたら言つとつただらろーがっ!!』

「あほかーっ!　一回消えた勢いは中々元には戻らんのじゃー!」

叫び倒した忠夫の背中に、周囲と目の前から呆れを多分に含んだ視線が突き刺さる。

暫し眺めるでもなくその背中に視線をぶつけていた美神は、軽く吐息を一つ零すと何事も無かったかのようにカオスへと顔を向けた。

カオスもまた、今しがた直ぐ近くで起こっている喧騒を完全に意識から追い出す。事に決めたようである。

未だ言い争いを続ける一人と一体の仲裁におキヌが走っていったのを横目に、美神とカオスはどーするよ、とでも言いたげに顔を見合わせた。

「…どつちが勝つかしら?」

背中越しに立てた親指の先には、人類陣営と神魔族が共同で張った結界の前に守りを固めながら盾となる猿神の姿。

それに散発的な光弾を浴びせつつ、魔体は徐々に移動し、その立ち位置をコスモプロ

セツサの前へと変えていた。

不意打ちで無いならば、元は金剛石から産まれ出でたと言われる武神の耐久力を打ち破る事は難しいようで、狙いの荒い光弾は三割程度が直撃しながらも大した打撃を与えている様子は無い。

だが、その狙いの甘さゆえに、残りの七割は容赦無くその周辺を抉っている。

時折猿神の守りの隙間を潜り抜け、その背後に着弾するたびに二重に張られた結界が揺れていた。

「今のままでは勝ち目は薄いな。妙な防壁を張つとる」

「やっぱり？ 目の錯覚じゃなかったのね…」

困惑を表すように美神は額に手を当てる。

先程、あの魔体と呼ばれるモノが出現したその時、確かに猿神は一撃を与えている。

魔神を相手にする以上、手加減抜きの一撃を、だ。

しかしそれは完全に止められ、あろう事か受け止めた魔体は小揺るぎもしていなかった。それが、千年以上を戦い続けた猿神が魔体に挑みかかる事無く防御に徹している理由なのだろう。

一撃で仕留められない以上は機会を待つのみ。

でなければ、圧倒的な物量の光弾をぶつけられた彼の背後の結界は泡と消え、その後

に残るのは究極の魔体相手には余りにも無力な人の群れと、何れは抗しきれず滅ぼされるであろう神魔族達。

人類、神魔連合軍が光弾に一瞬で蹂躪される光景が目には浮かび、美神は思わず蒼褪めた。

「…そ、そうだ！ それならさっきのガルード達に背後から遊撃してもらっちゃいましょう！ あれでも中級魔族なんだからこっそり行けばあの茸くらいは——」

やや焦りながら代案を言い出した美神とカオスの間を、彼女の髪を揺らしながら男女がいきなり駆け抜けていった。

「茂流田の馬鹿っ！ どこが最強の武器なのよっ！」

ピンヒールにタイトスカートと言う走りにくさも極まったような格好でありながら、隣を走るスーツ姿の茂流田にも負けない速度で駆けつつ須狩の口から悲鳴混じりの怒声が飛び出した。

額に大きな汗を浮かべた茂流田が、気不味そうに表情を歪めながらも言い訳じみた発言を繰り返す。

「いやしかし私が集めた情報によればトンファーこそが最強だと！ 皆言っていたんだぞー！」

「皆って誰よ?!」

「匿名掲示板だから名前は知らん！ そーいうものだから！」

胸を張って言い放った茂流田のコメカミに、やはり走りにくかったのだろう、ピンヒールを脱いで須狩が投げつけた。

流石に踏鞴を踏んだ茂流田であったが、しかし無理矢理体勢を立て直すと反撃とばかりに口を開く。

「そー言うがね！ 新しく頼んでおいた装甲服をみよーなフリフリのレースだらけにこつそり注文しなおした上に、出撃直前まで黙ってて、それを見たガルーダ達を危うく反抗期に突入させかけたのは誰だね?！」

「だって可愛かったんですものプリ〇ユア！」

「理由になつてないっ！」

因みにそれがまたあからさまに足りない防御力をカバーする為にふんだんにケブラーやらアラミドやら希少鉱石やらを使用しまくったものだったらしく、オカルトGメンに送られる予定の請求書には、それを見た責任者が卒倒する事うけあいの金額が書いてあったりする。

最も、コストパフォーマンスが悪すぎはしたものの、性能的には須狩が気合入れて考案しただけは有り問題無しどころか非常に高性能であった。

その為、余りにも勿体無いと思ったオカルトGメンが実戦部隊の女性隊員に配給しよ

うとしたものの、セクハラですか、と真顔で聞かれてあえなく倉庫の肥やしになるのが。

——閑話休題。

二人を呆然と見送った美神とカオスの視線が、ゆつくりとぎこちない動きで彼らが駆けてきた方に向いた。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオーンッ！』

高らかに勝ち鬨を上げる魔狼。

その足元に、装甲がジャージだけと言う——装甲ですらなく布——薄さで格闘武器^{射程}1と与えられたので突っ込み玉砕し、今はピクピクと涙を流しながら痙攣するガルード達が転がっている。

また、リーダーの不在とシロタマ&マリアが一時的に戦列を乱したことでコンビネーションを失い蹴散らされた人狼が4人、頭から地面に突き刺さって痙攣していた。

遠巻きにするように少し離れた所に件の獣系少女二人と、肉に釣られて復活した里長代理とその補佐が、美神達に向かって逃げろと必死のボディーランゲージ。

見事なまでの壊滅っぷりであった。

「ドクター・カオス。回避を・進言します」

流石に何時の間にか直ぐ側にまで迫っていたピンチに硬直した二人の周囲を、マリア

とその娘達が囲み込む。

それぞれに武器を構え、時間稼ぎをしようと言うのだろうか。

しかし、魔狼と比べればあまりにも小さな、まるで爪楊枝のようにも見える武器を構えた彼女達の表情にも焦りの色は隠せない。

——魔狼の眼球が獲物を捕らえた。

「ま、まず…、横島君おキヌちゃん、逃げるわよっ!」

勝てる勝てない以前に、人狼ほどの回避力も超回復も、ましてやガルーダ達ほどの耐久力も無い人間では魔狼にとってはただの肉と血の詰まった袋程度の物でしかない。

唸り声と吹き付ける威圧力が高まる中、後ずさりしながら忠夫達に声をかける美神。

だが、それに対する反応は無く。

「ちよつと二人とも、聞いてるのっ?！」

「す、スンマセン美神さん…！」

振り向いた先には、真っ青になって脂汗を大量に垂れ流す忠夫と、抱き合つて震えている土具羅とおキヌ。

視線を美神の方に向けぬまま、コスモプロセッサのある方角を貼り付けられたように見つめたままの忠夫は、電池の切れたロボットの如き動きで両手のひらを上に突き上げた。

「あ、アシユタロスと目が合っちゃいました…」

「さ、さつきから凄いいプレッシャーがこっちに向いてて、腰、抜けちゃいました…」
『わし、なんか漏れた気がする…』

土具羅の発言から一瞬後。

おキヌが彼を突き飛ばし、忠夫が仰向けに倒れた彼に踊りかかる。

「てめーっ！ 俺のおキヌちゃんに何さらしとんじやこらああっ！」

『ま、待て待て待て！ よく考えたらそんな機能無かった痛たたたっ！』

聞く耳持たずマウントポジションを取り、片手で首を掴んでもう片手に靈波刀を展開して今にも突き刺そうとする忠夫。

かなり全力で掴んでいるらしく、メキメキとヤバげな音も聞こえてきているが忠夫は目を血走らせたまま止める気配が全く見えない。

流星におキヌが止めに入ろうと腰が抜けたままながらも近付こうとして。

「おっさん放射能で動いとるんやろうがああああ…！ 俺とおキヌちゃんの生まれるかもしれない子供に悪い影響が出たらどー責任取るつもりだああコラ?!」

「よ、横島さんと私の…」

『放射能で動くとか言う割に、妙に知識が偏つとるなお前…』

暴走ゆえに妄想先行しっぱなしの忠夫発言に、おキヌは首元まで真っ赤に染めてフ

リーズし、土具羅の突っ込みもそっちのけで、指をつき合わせてもじもじし始めた。

先程までの蒼褪めた顔色が、すっかり桜色に染まつて最早状況も忘れてあつちの世界に行つたようである。

恥ずかしげなおキヌの表情が、彼女の想像が進むに連れ段々となんだか幸せそうな感じに変化していく。

両手が何かを大切そうに抱きかかえるようなポーズで、しかもゆらゆらと揺れているのは一体何を妄想しての事やら。

とまれ、それを見ていた美神の眉はおキヌが三人目まで到達した辺りで限界ラインに達し、とりあえず忠夫に向かって解放されて。

「誠意を見せろと言つぐふう」

音も無く接近、背後から肝臓目掛けて見事に腰の乗つたフックが入る。

衝撃に身を揺らし、悶絶しながら崩れ落ちた忠夫を足蹴にしながら軽く手を叩く美神。

忠夫の足元から出てきた土具羅は、ちよつと座りの悪くなつた首元を両手で調整しながら立ち上がる。

「えへへー。あ、こら駄目よ、お兄ちゃんなんだから優しく」

「お・キ・ヌ・ちゃん？」

「ひやいつ?!」

絶対零度の声色で、おキ又に目を向けないままで美神は靈氣を全開に叩きつけた。

流石に現世に引きもどされたおキ又は、思わず返事をして、何故か物凄く背中が怖い美神を発見してちよつと涙目。

だが先程までの妄想はしつかりと記憶に残つたらしく、痛みで気絶する事さえ許されないまま悶えている忠夫に向ける視線には、少々何かを期待するような色が籠つてはいた。

勿論気付きはしないけど。

「ぎゃ、逆流現象が防波堤決壊寸前でやばいです美神さん……」

「つたくー! ほら、さっさとしゃきつとしなさい!」

無体と言えば無体な美神の言葉にそれでも立ち上がった忠夫の足はまるで生まれたての子鹿のよう。

そんな脇腹を抑えて脂汗を流す忠夫の顔を真正面から両手でホールドし、美神は彼の瞳を真剣さ九割九分、照れ一分で覗き込んだ。

見つめられた忠夫も思わず言葉を失い、何時の間にか痛みも忘れて見詰め合う。

ごほん、と小さな空咳で気分を切り替え、横合いの恨めしげなおキ又は無視。

今の二人の状況を考えると、実際の話かなりこつぱずかしいのは横に置く事に成功し

たようである。

何とか照れ臭さを押し隠し、出来得る限り真剣な口調を意識して。

「——横島君、あんた、何か、当てがあるんでしよう？」

区切り区切り強調して言った言葉に、呆けた表情で美神を見つめ返していた忠夫の瞳に意識が戻る。

そのまま勢いと煩惱に理性が負けて、がーつと飛び掛ると思われた瞬間、美神の真剣さに理性が一時呵成に煩惱と若さと『3分もあれば！』と言う妄想武装を押し返し。

彼の脳内を理性の指示の元、電気信号となつて駆け巡つた小さな狼が持ち帰つてきたそれを思い出し。

数瞬彼の瞳が宙を彷徨い、最終的にすつと横に逸らされた。

そんな彼の顔を、ぐきりと音さえ立てて無理矢理引き摺り戻した美神は、両手に彼の頭を握り潰さんばかりの力を籠める。

めきめきと言う音が聞こえたのは気のせいではあるまいが。

魔狼の咆声響く中。

マリアとその娘達が銃弾を解き放ち、炸裂した閃光が真横から二人の顔を照らし出す。

「あるのね？」

「いや、その、何と言いますかですな」

「あ・る・の・ね？」

あたふたと言いつきを連ねる忠夫の瞳を睨みつけ、それを途中で閉じさせる。

既に忠夫の顔を流れる冷や汗は滝の如し。

だが、逃がす意思など欠片も無いと言わんばかりに、美神の締め付けはその力を三段飛ばしに跳ね上げていく。

最早美神の背中には修羅が浮かび、ついでに額にも血管が浮かび上がり、それを目の前にした忠夫には、尻尾を丸めてカクカクと少ない稼動範囲で精一杯首を上下に動かし、降伏の意を伝えるしか術が無かったのであった。

手を離し、解放されて地面に尻餅をついた忠夫に向け美神は一言。

「やりなさい」

「え」

「いいからやれつつつてんの！　こうなったらもー縫れる物なら藁でも縫ってやろうじゃないのっ！」

腕組み仁王立ちで迫る美神に後退りながら、忠夫の視線は周囲を彷徨う。

マントを爆風に棚引かせながら、しかし一步も引かずにマリア達を見守っている力オスの背中が目に写る。

フエンリルの咆哮を間近で受け、それでも飄々とした表情のままカオスは忠夫をチラリと横目に振り返った。

呆れの色が一瞬浮かび、軽く肩を竦めて再び視線を前に向ける彼の背中は、やるなら勝手にせいとばかりに無関心。

少しだけ、何かもやつとした物が忠夫の心に降り積もる。

ふと、おキヌと目が合った。

腰が抜けたまま、彼女はゆっくりと頷く。

任せました、とも、信じていますから、とも。

そんな言葉にもならない言葉を、彼女の薄く潤んだ瞳が語ってくれた。

それは何とも頼られて——いや、信じられていると言う事を未だ動きの鈍い脳髓に叩き込むには十分過ぎる表情。

だから、もやもやとした物を燃料に、小さな火種を心に生んだ。

さきこちなく戻した先に、変わらぬ姿勢のままで見つめる美神。

さつさとやりなさい！

何時もの怒鳴り声で、そう、聞こえた気がした。

火種が、巻き起こった風に煽られ広がり始める。

「…期待してあげるから、偶には良い所見せなさい。男の子！」

「う、ういっすー！」

反射的に弾かれるように立ち上がり、直立不動の返事が響く。

目を前に向ければ苦笑いと安堵が入り混じった、溜め息付きの女神の微笑み。

「う…」

「…？ 何よ」

顔がほんのりと熱を持ったように思えて、隠す為にか慌てて反対側を向く。

深呼吸を二度三度。

余り落ち着きはしなかったけれど、今度は胸の奥に熱を感じる。

柄にも無く高揚して来る気分とテンション。

そして、ぎくしゃくと動かした足は——だがしかし踏みしめた筈の大地の感触を伝えなかつた。

要するに、思いつきり浮き足立っていたのだ。

それを自覚したと同時に、心に燃えていた何かが一気に鎮火する。

何故と彼に聞いても、彼自身にも分からないだろう。

それは、今までまるで悪戯小僧のように要所要所で色々とやっていたが彼であるが故ではある。

詰まる所彼がやっていたのは「誰も見ていないような所でコソコソと動いて」場を引つ掻き回して相手のペースを乱したり、自分達を有利なポジションに運ぶ——極論すればそう言う事だ。

単純に、慣れていないのである。自分に期待がかかっている、信頼や責任がその両肩に重く押し掛かっているという状況に。

何せ彼のそう言った立ち位置こそが自然な場所であり、彼の父親も長老が居なくなつて、息子が消えて、漸く腹を決める事が出来たのだから。

今までは長老が居たり、美神が居たり、若しくは美衣の時のようにそもそも巻き込まれていたりと流れの中心には居ても矢面に立つ事は殆ど無かつた——本人の自覚の有無は別として、であるが。

ところが今回は矢面どころか扱いが本当に最後の切り札扱い。

しかも美神やおキヌからの全面的な肯定を受けて、である。

それまで袖で好き勝手やっていた悪戯小僧が、いきなり大舞台の真ん中に飛び出して

役割を果たせと言われ、緊張するなど言うのが無理だろう。

故に、彼は今、非常にテンパっているのである。

まあ、一言に纏めてしまえば、ハタレ以外の何物でもない、となるのだが。

何だこのプレッシャーは、と物理的にさえ感じる何かに押し潰されかける中、冷汗まみれの真つ青な顔色で、やれるのか、と自分自身に問い掛ける。

駄目かもしれん、と即答された。

「うあーっ?! やっぱそうかこんちくしよーっ! 期待の目が痛いっ、痛過ぎるうううっ?! そんな目で俺を見んといてえーっ!」

蔑まれるような視線の方がましー! と奇声を上げながら地面を転がりまわる忠夫。

どうやら普段慣れない期待の視線と言葉を向けられたせいで、上がったテンションが一気に逆転してネガティブ思考に突入したようである。

頭を抱えた忠夫の後ろで、また碌でもない事を考えて碌でも無い答えを出したんだな、と察しのついた美神とおキヌが吐息を一つ。

励ましの言葉をおキヌが送るよりも、美神が気合の入れなおしに一発しばくよりも僅かに早く。

「は、そうかコレは全部夢、まさか禁じ手の夢オチではっ?! 　つまり夢だったら何しても
OK!と言う訳で美神さ——」

カタカタ震える膝を振り切り、上半身を反転させた忠夫の視界を、なんだか見慣れた
拳が占めた。

「こんの馬鹿息子っ! 戻ったならさっさと報告に来んかっ!!」

危険なレベルに思考が到達し、現実逃避へと飛び立とうとした忠夫の顔面に高速で駆
け寄ってきたポチがカウンターで拳を埋め込む。

唐突な真正面からの衝撃に耐え切れる筈も無く、地面と水平にすっ飛び伸身の三回転
一回半捻り。

しかし着地失敗頭から、よって。

「0点」

追撃の靈波刀を振り上げるポチを背後から羽交い絞めにしつつ、犬塚はポツリと評点したのだった。

「離すでござる犬塚アアツー！ この愚息だけは修正せねば拙者の腹が収まらんでござるーっ!!」

「はいはい殿中殿中。…面倒臭いな、ふんぬっ！」

こきやり、とあんまり人体から聞こえちゃいけない音がして、悲鳴も上げずに犬飼ポチが崩れ落ちた。

やれやれと足を引き摺り、犬塚父は再び戦場へ歩き出す。

視線の先にはフェンリルに対しマリア達と共闘を始めたシロタマの姿。

若い者が頑張っていると言うのに、里長代理とその補佐が高みの見物など笑いの種所か笑えない冗談にもなりはしない。

「いやー、すまんすまん。こいつもかなり心配してましたもんでねえ。さき、続きをどうぞ」

そう言われてもこの状況下、一体どんな反応を返せばいいのやら。

流石にその場に居た者は沈黙を守りながら眺めているしか出来なかつた。

が、呆然と見送る美神達の視線の先で、うつ伏せに引き摺られていたポチが突然顔を

焦点の定まっていない瞳を虚空に向けて高笑いしていた忠夫はぴたりと動きを止め、血走った瞳を右手に向ける。

「ぬわーははははははあつ!! 如意棒、カーム、ヒアッ!」

別に叫ぶ必要など無いのだが。

ともあれ、妙な叫びにもヤバ気なテンションにも見捨てる事無く、忠夫の手に如意棒が現われた。

それを地面に垂直に突き刺し、忠夫は次の目標へと視線を投げる。

「カオスの爺っ! マリア抜けても大丈夫だなっ!! よーしよーし!」

「おー、人狼達も加わったから大丈夫じゃろ。さっさと行つてやれマリア、小僧が煩い!」

「イエス・ドクター・カオス!」

相も変わらず振り向かないままで肩越しに手を振るカオスの言葉に応え、戦線を離脱したマリアが忠夫の側に駆け寄った。

忠夫には見えない角度で老人の目元が僅かに皺を寄せ、唇が軽く弧を描く。

それまでの無関心さが嘘のようなその表情こそが、彼の本心の発露なのだろうか。

カオスの許可が出るよりも先にマリアが移動し始めていたのに気付いて、すぐさま消えはしたけれど。

カオスのちよつと恨めしげな視線がスルーしつつも、マリアは何処となく嬉しそうに

移動する。

「土具羅のおっさんっ！ ハリーハリーハリー！」

『待て今行く…お前頭大丈夫か？』

「訳の分からん事いっとる暇があつたら走れーっ！ いやむしろ飛べーっ!!」

流石に絶頂決めたままの忠夫の様子に不安を感じてか、美神が神通棍を構えてじりじりと背後から歩み寄る。

その後ろでは何とか落ち着かせようとネクロマンサーの笛を取り出したおキヌが、慌てすぎて笛でお手玉をしている真つ最中。

高笑いを続ける忠夫の元にマリアと土具羅が集合し、さて何処をどれくらいでブツ叩けば直るかしらと一瞬迷った美神であつたが、その神通棍が振り下ろされる事は結局無かつた。

その前に、忠夫がいきなり振り向いたからだ。

「美神さんっ！」

「ひゃっ?! な、何よっ！」

血走つた瞳と妙な気迫に吃驚して、ちよつと悲鳴を上げかけた美神。

しかし忠夫は全く気にする事無く。

込むような反則の一手。

「——俺達用のコスモプロセスを作るんすよっ!!」

彼が彼らしく出した答えは、そんな荒唐無稽な物であった。

「はあっ?!」

流石に返ってきた答えを聞いても平坦なままでいられる内容ではなかったが。

硬直した美神の耳に、背後でぼとりと何かが落ちる音が聞こえた。

油の切れたロボットののような動きで後ろを振り返った美神の目に、呆然とネクロマンサーの笛を取り落として笛を吹く直前の格好で固まっているおキヌが写る。

彼女に向かって頭の上で手のひらをひらひらと動かしてみれば、まるで同意するかのようにしっかりとした頷きが帰ってきた。

「…とうとう終わりかしら」

先程の一言を告げて再び高笑いを始めた忠夫は、続きを述べる事も無くひたすらに笑っている。

なんだか泣きたくなって頭を抱えて座り込んだ美神であったが、しかしこの混沌とした状況の中では意外なほど冷静な言葉が降りかかる。

『いや、否定するには早いぞ』

話し掛けられた方向を見上げてみれば、後頭部から不釣合いなコードを垂らした土具羅の姿。

周囲を取り囲む状況に巻き込まれまいとしてか、殊更事務的な口調で彼は説明を連ねていく。

曰く——不確定要素が数えるのも無駄なくらい山盛りであるが、忠夫とカオスと話した結果からは可能性はある、との事。

まず、最低条件として必要なコスモプロセッサの設計図。これは、在る。

『大逆天号のデータバンクを覗いた時に、とりあえず必要な情報を全部纏めて一端ダウンロードしたからな。混ざった』

次に、必要な物資。

コレも、在る。

「何処にあるのよあんな馬鹿でかい物を作れるだけの材料がっ！」
『ほれ、そこにあるじゃないか』

指し示された先には、未だ高笑いを続ける忠夫と、その隣で右手首から取り出したバチバチと放電する端子をそつと忠夫に押し当てるマリア。

そして、二人の間で地面に突き刺されたままの。

「…まさか、如意棒を?」

其処から導き出される答えは。

「横島君に作らせるつもり? どうやって?!」

『マリア嬢が居るのはその為だ』

彼女の中に在る特異な金属片。

余りにも強力な故に制御できず、それを封じ込める為にとある精神感応力持ちの男性が十年以上も被り続けた鉄仮面から生まれたそれ。

美神の脳裏に陰気な顔の誰かさんが素顔で気楽に笑って手を振っていた映像が浮かび上がり、何となく惘然とした表情になる。

が、土具羅はそれに構う事無く。

『ワシの中にある設計図をカオスが増設したコードを使ってマリア嬢に転送し、それを擬似テレパスで更に送信。上手く行けば——もう一つのコスモプロセッサが生まれるという訳だ』

ハードの条件は揃った。

ソフトについてもデータベースの中から土具羅が使用する事を前提に組み立てた物が発見されている。

そもそもコスモプロセッサの演算装置として予定されていたのは土具羅であり、今現

在はテレサの別タイプがその役割を果たしてはいるが、その原型となったものが残されていてもおかしくは無い。

殆どジャンクデータ扱いではあったものの、僥倖と言う他に無い事ではあるが。

『無論最新版が組み込まれている「アレ」に比べればまだまだ無駄も多い上にバグ取りもしておらんからな。実際に動かしながら詳細に解析して修正を当てていく』

常識ならば考えられない言葉であるが、戦闘能力皆無である代わりに演算処理能力にその真価を置き、アシユタロスの第一の部下として気の遠くなるほど長い年月を経た土具羅の言葉には不思議な自信が宿っていた。

しかし、彼のその説得力を持つてしても、こちらの最終攻略目標である敵のコスモプロセッサを如何にかするのではなく、先にこつちがコスモプロセッサを作ってしまった、と言うその言葉は。

「…無茶苦茶じゃない」

美神の漏らした言葉以外の何物でもない。

だがしかし、それでも。

『何を今更分かりきつた事を。そもそもここまで絶望的な状況をひっくり返そうなんて、本来ならそれこそ無茶苦茶な話なのだぞ?』

何時発動してもおかしくないアシユタロス陣営のコスモプロセスサ。

未だ荒れ狂い、体力の尽きる様子の欠片も見せないフェンリル。

究極の魔体に完全に押さえ込まれた猿神と僅かな神魔族達。

その争いの渦中で身動きの取れなくなった人類陣営。

神魔族の増援を問答無用で妨害した黒い天蓋。

どれほど先になるかは不明だが、復活の予想されるテレサ達。

そして、人類陣営相手に戦うでもなく、神魔族を相手取るでもなく、未だ不気味に沈

黙を守るアシユタロス。

どれだけの増援が人類陣営に参加しようとも、美神が衛星軌道上でEMPを仕掛けても、神魔族が参戦しても、確定した事実として、現状は確実にアシユタロスへと傾いていた。

「…やれるのね？」

『やる「しか」ない。あ奴を——』

二人の視線の先に、正氣に戻すつもりだったマリアの電撃を喰らって海老の如く跳ねている忠夫が居る。

流石に本家本元だけがあり、見事にレア程度の出力を回復と耐久のギリギリを見計らって与え続けていた。

しかし電撃が止まると同時に跳ね起き、再び黒煙を吐き出しながらも笑い出す忠夫にマリアも徐々に出力を上げざるを得なくなっているようであるが。

『信用する他ない。はなはだ不安ではあるが』

「しようがないわね。この上なく不安だけど」

溜め息は誰に向けられた物だったのか、あえて言うまでも無いのだけれど。